九十九

ヒィッツカラルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
九十九

【Ｎコード】
Ｎ８８０３Ｅ

【作者名】
ヒィッツカラルド

【あらすじ】
ヒーロー、格闘技、妖怪の三つのコラボ小説。時は現代。代々空手家の家に生まれ育ったタケシは、幼馴染の陽子と共に田舎に有る実家へと帰ってきた。だが、殺気立つ村の老人達、日本各地に散らばっていた村の若者達も集められ、毎年行われていた春祭りは中止成っていた。そして村長の口から語られる村の定め。力と技の空手家と、妖怪変化達との戦いを描いた、アクションバトルエンターテイメントです、よろしく願います！。２００８／８／１８～２００９／８／２３完結

第一話　春婆怒（はるばど）（前書き）

とりあえず、気長に遣りたいと思います。

誤字や読みにくい文章も多いと思いますが、お付き合い願います＾＾

自分で文章を何度見直しても、脳内で「こう書いた」と決め付けまったく見えてきません。ほとんど病気ですわ＾＾；

０８／９／０３時点、３０００アクセス突破。これもお読みいただいてる皆様のおかげです＾＾

第一話　春婆怒（はるばど）

一台の黒いバイクが舗装された峠道を駆け抜けて行く。

黒い車体に黒いライダースーツの人物の後方を、赤いライダースーツを着た人物が赤いバイクにまたがり、少し離れて追いかけるように走っていた。

急なカーブやクネクネしたS字などが多い峠道は、トンネルに入る以外に真っ直ぐな道は少なく、しかもガードレールの無いカーブも少なくはなかった。

だが、時折切れているガードレールの向こうには素晴らしい自然の山々がうっすらと雪を残した絶景となって広がっていた。

景色を楽しみながらバイクで走るには、もってこいのツーリングコースであった。

しかし、その景色の中には、殆ど建物らしい姿は見当たらず、ここがかなり人里から離れた峠道だということを現していた。

二台の黒と赤のバイクは、そんな峠道をのびのびと走り抜けて行く。

前を走る黒いバイクの乗り手は、黒いフルフェイスをかぶり黒いライダースーツの黒ずくめだった。

そのライダースーツがはち切れんばかりに盛り上がり、相当量の筋肉で引き締まった体格から、かなり体を鍛え上げられた男性の物

だと見て分かった。

バイクのハンドルを握る手も大きく腕も太い、急なカーブを曲がる際にアスファルトにすりそうになる膝に繋がる太股や脹脛も、一流のサッカー選手のように太く鍛え上げられていた。

その男性の後を追いかけるように走る赤いバイクの乗り手は、前を走る男性と比べて明らかに小柄でしなやかなボディーラインをしており、そのスレンダーで魅力的な体型から女性だと見てとれた。

二台のバイクは目的地が一緒であった。

『直進　国道〇号線、右折　春婆怒村』と書かれた看板を通り過ぎると、看板に従うように春婆怒村方面へと次々と右折して行った。

『春婆怒村』

人口百二十三人。

電車は、朝、昼、夜の一日三本。

バスに関しては一日に行きと帰りの一本ずつしか来ない。

春婆怒村人は、老人を多く過疎化が進む小さな農村である。

この村には、古くからの言い伝えがあった。

山姥伝説。

春になると山から長槍を持った鬼姥が降りてきて、人を食らうといった話であった。

昔話には良くあるような言い伝えである。村の名前が『春婆怒村』というのも、この言い伝えから来ているのだろう。

そして、この人里離れた山奥の小さな農村で、五十年前、世間から注目される大事件が起きた。

それは、神隠し……。

村人7人が行方不明。その内、女性一人の遺体のみが発見されたが、残り6人は行方不明のままだった。

この奇怪な事件に飛びついた者達が居た。それはマスコミ。

しかし、いつの時代もマスコミとは、勝手な物だった。

村人達の気持ちを考えず、事件を面白おかしく煽り立てるように記事にした。

マスコミは、伝説の残る小さな村での事件を、『現代に現れた鬼婆事件！』と名付けて、可憐なまでの背鰭尾鰭が付いた記事を書き上げて世間の話題を誘ったのであった。

しかしマスコミの期待は大きく外れることになる。事件は、それ以上の被害者を出さず、何も起きずに沈黙したのである。

そして、マスコミの煽りを受けて重い腰を上げ動き出した警察の調査も、真相究明にまでは到らなかった。

事を煽ったマスコミの者達も、劇場化する事無く沈黙を続けた事件にたいし、話題性を維持できなくなると、新たなる不幸を求めるように全国へと散って行った。

そして月日は流れ過ぎて行き、人々の好奇心を煽った連続失踪事件は警察の資料上で時効とされると、多くの謎を残したまま迷宮入りしていった。

今ではこのような事件があった事すら覚えている者は少ない。

ただし、村の者達を除いての話だが……。

黒と赤のバイクは、そんな過去を持つ小さな村の農道を駆け抜けていく。

辺りは氷の張った田んぼばかりで、時折遠くに古臭い民家がちらほらと見えるのみだ。

人口は少ない村だが、敷地面積だけなら大きな町にも負けない広さである。

二台のバイクは連れなって一軒の古びた農家の敷地内に入って行った。

雪囲いの為に藁縄で縛られた垣根の横を通り過ぎて、立派な和風の庭に挟まれた石畳の上をバイクで乗り入れた二人は、やたらと高額そうな彫刻が施された玄関先にバイクを止めた。

二人の乗り手達は、エンジンを停止させるとバイクから降りた。

そして黒い男のほうがフルフェイスのヘルメットを取ると、長旅の疲れから大きなため息を一度だけ吐いた。

それから被っていたヘルメットを、乗っていたバイクのハンドルに引っ掛けると、片手で前髪をかき上げる。

「ふぅ～～～」

黒いライダースーツの男を見て、赤いライダースーツの女性は、爽やかな笑みで男に話しかけた。

「やっと到着したね、タケちゃん」

「バイクで七時間、休憩しながらとはいえ流石に疲れるな。だから電車で行こうって言ったんだよ」

男が不機嫌そうに愚痴るが、女性のほうは気にもしていない様子だ。

「私ってばやっとバイクの免許取ったのよ、こんな機会でもなきゃ、お父さん達がツーリングの旅なんて許してくれないんだもん」

バイクから降りた二人は、そんな会話をしながら農家の玄関へと

向かって歩いていった。

するとバイクのエンジン音を聞きつけたのか、家の主が古風な作りの玄関をガラガラと開けて顔を出した。

「おう、タケシか、遅かったな」

玄関から顔を出したのは大柄の老人だった。

顔に刻まれた年輪の様な皺の数から、年の頃は七十歳ぐらいだろうか、声からしても其のぐらいの年齢が予想できた。

しかし老人とは思えない大きな体。身長は身を屈めなければ玄関に頭をぶつけそうなほど高い。

それだけではない、その体格は黒いバイクの男と比べても見劣りしないほどに鍛え上げられていた。

「あぁ、陽子お嬢様のわがままに付き合ってたら、時間を食っちまったんだよ」

「おお、陽子ちゃんか、よく来たな」

大柄の老人に、バイクでやってきた青年が挨拶の代わりに言い訳をしていた。

その後ろで、お嬢様と呼ばれたボーイッシュな少女が「はぁ～～い」と大柄の老人に小さく手を振って挨拶をする。

髪は短いがサラサラとした水々しい艶が有り、スマートな顔立ち

から宝塚の男役が良く似合いそうなイメージであった。

そんな少女に老人は、笑顔を作って答えた。

「タケシよぉ、正月もお盆も帰って来なくていいが、婆さんの命日だけは欠かすな」

老人の声は、萎れているが渋い声であった。青年にそう言うと大柄の老人は、玄関の奥へと姿を消して行く。

その後に続いて、二人の男女も家の中へと並んで上がって行った。古びた板作りの廊下を歩いて行く三人。時折だが床が三人の重みでギシギシと音を立てる。

青年と少女の前を歩む老人は、顔こそ七十代の老人なのだが、後ろを歩く青年よりも身長が高かった。

身長は百九十から百九十五センチは有るだろうか。

まだ、若干だが雪の残る季節だというのに老人の上半身は、白いTシャツ一枚であった。

そのTシャツから見える老人の腕の太さ、胸板の厚さ、幾つにも割れた腹筋、引き締まった一つ一つの筋肉が、七十代の老人の物とは思えないほど鍛え上げられており、普通の人間とは比べ物にならない代物であった。

とても農作業だけでは、この老人離れした肉体は保てないだろう。

下手なボディービルダーより明らかにマッチョであり、今でもオリンピックに出場したのならば、メダルが一個や二個は取れるのではないかと思わせる程であった。

<　武神　>

「陽子ちゃん、桜木の奴は、元気にしてるかね？」

「うん、お父さんなら何時も元気ですよ。未だに毎日の稽古を欠かさず積み重ねています」

「うむ、流石我が弟子だなぁ」

老人が、石で出来た様なゴツゴツした手で襖を開けると、その部屋の中には、壁の窪みに収納された仏壇が一つ有った。

押入れや箪笥こそはあるが、殺風景で寂しく薄暗い部屋だった。

部屋の中に入っていった老人が、窓の明かりを遮るカーテンを開けると、漆塗りの立派な仏壇が後光で照らすように色付き綺麗に輝く。

開かれた仏壇に灯された蝋燭。そして、筋の様な煙が、線香から静かに上がって部屋の中に香りだけを残していた。

「タケシ、仏壇に手を合わせたら道場に来い、軽くもんでやる。墓参りは、明日の午前中でかまわん。もし良かったら陽子ちゃんも、婆さんに線香を上げてやってくれ」

この老人は、男女差別が激しいのか、二人に対しての話し方がずいぶんと違う。

七時間のバイクの旅。本当はさほど疲れてはいない。老人の「道場に来い」と言う言葉に、激しく青年は反応していた。

腕の筋肉が意識もしていないのに盛り上がり、青筋を浮かべながらヒク付いていた。

それは熱気となり青年から放出されて、闘争心という雄の香りとなって隣に居るボーイッシュな少女の元へと届いた。

少女は其の香りに一早く気付くと、何が可笑しいのか、口元に可愛らしい笑みを作る。

仏壇へと歩む青年は、老人の前を通り過ぎるさいに、皮肉を口にした。

「じいちゃん、俺もよ、もう二十歳だぜぇ。七十の爺さんじゃあ…ねぇ」

「ふっ、確かに去年は初めてお前の突きを、顔面に食らったがのぉ。そのお返しに、お前を４回失神させてやったがなぁ～」

「俺は若いぜ、一年、また一年と強くなってるぜ。今年は、去年よりも遥かに実力を上げてると思うんだがな。今年は、顔面突きだけじゃあ済まないかもよ」

血の繋がった、二人の不敵な笑み。少女から見て、それはそっくりだった。

そんな二人を見て、少女は口元に手を当てながら、先程よりもは

っきりとした笑みで二人を見ていた。

「期待しているぞ。早く婆さんに線香上げて道場に来い」

老人が部屋を出て行くと、青年は仏壇の前に正座した。

カァーーーーン……

青年は、仏壇に線香を上げた後、鐘を一度鳴らして拝むように両手を合わせた。

そして、仏壇に立てかけられた白黒の古い写真を、懐かしそうな瞳で眺める。

それには、和服姿の一人の若い女性が写っていた。

青年が仏壇から離れると、今度は青年に続いて少女が仏壇に線香をあげる。少女もまた、仏壇に置かれた白黒の写真に目をやった。白黒ではっきりした写真ではないが、写っている女性は、若く美しかった。

「タケちゃんのお祖母ちゃんって、なんとなく目元とかがタケちゃんに似てるよね」

線香を上げる少女が、仏壇に飾られた古びた写真と、青年の顔を見比べる。それは、彼の祖母の写真らしい。

「俺は母さん似だからな、何年か前に爺ちゃんが言ってたよ。母さ

んの若い頃は、じいちゃんと婆ちゃんが一緒になった頃に瓜二つだってな」

確かに白黒写真の女性と、青年の顔立ちは良く似ていた。

青年の顔立ちは、今風に言えばイケメンの部類だろう。

目元は凛とした一本筋の通った感じで、顔のラインも顎にかけてスマートな物である。顔のパーツも、目、鼻、唇と一つ一つバランス良く配置されていた。

だが、腕や足だけではなく首も筋肉で太く、頭のサイズと首の太さが一緒であった。

マッチョ系の男性が好みの女性には受けるであろうが、一般人から見たら明らかにマッチョすぎる体型である。

連れのボーイッシュな少女が、本家の仏壇に手を合わせ終わると、青年は部屋を黙って出て行った。

そして、くねり曲がった松ノ木や、大きな置石が有る古風な庭の見える渡り廊下を越えて、二人は離れに有る道場へと入って行く。

田舎の広い敷地の農家とはいえ、普通は道場が有る家は少ないだろう。

道場の大きさは、余った敷地を存分に使われており、かなり大きい物だった。

青年と少女が靴と靴下を脱ぎ終わると、順番に道場へと入って行

く。すると既に大柄の老人が道着に着替えて待っていた。

白い空手着に黒帯を身に付けた大柄の祖父が、一人で正座をして道場の正面に有る神棚を見上げていた。

「タケシ、早よう道着に着替えて来い」

精神統一をしているのか、目をつぶったままの祖父。青年がほんの少し生意気な感じで祖父を見ながら鼻で笑うと、ゆっくり道場に踏み込んでいく。

黒いライダースーツの上半身だけを脱ぎ捨てると、青年は裸足で祖父の前へと立った。

「最近じいちゃんの言っている『空手道』ってのが分ってきたよ」

正座で座る老人の前に立つ青年。自然体で力強く立つ風貌からは、若さ、力強さ、自信、傲慢さ、そんなものがオーラとなって感じられた。

「ほぉ……言ってみろ」

祖父の口元が笑っていた。

それは孫をバカにした物にも見えるが、本心はどちらかというと喜びの方が大きいのかもしれない。

祖父は、孫の成長が可愛らしい物である。

刹那、青年が仕掛けた。

「わぁ！」

声を出したのは、少女だった。

青年は、目の前で正座をしている祖父の頭を目掛けて、下段廻し蹴り、いわゆるローキックを放ったのである。

肉と肉がぶつかり合う音がした。

「正解だ、『武』とはそういった物だ」

嬉しそうな顔をする老人。しかし老人は、その太い腕で孫の放った下段廻し蹴りを、正座したまま揺らぐ事無く受け止めて居た。

青年が放った蹴り足を下げると、正座して居た老人も立ち上がる。

離れて見ている少女には、老人の立ち上がる動作すら力強い物に見えた。

「でもさ、じいちゃん、ちまただとさ、じいちゃんの言う『武』ってやつは、卑怯者扱いされちまう……」

青年は、自分の黒髪をかきながら体験談を語ってみた。

「ふっ、試合ならそうだろう、試合にはルールがある。だが、わしらが行っている空手とは、試合をするための物ではない」

大きく育った孫を睨む祖父。そして老人の視線が、一瞬ではあるが、道場の隅に立っている少女に向けられた。

「我々の空手道とは、全てを護るための物だ」

「全て？、護る？、倒すじゃなくて、護る？」

「ふむ、そこまでお前は成長してないか……」

祖父の言葉に青年は、気に食わないといった顔をする。

「じゃあ、俺の倒す力……、今年も見てもらおうか」

青年が拳を握り、ファイティングポーズを取る。

そして老人も、両手の平が孫に見えるようにつきだし、空手らしい構えを取った。

前葉の構え。防御に優れた守りの構えである。

「守りに回るとは、じいちゃんも老いたもんだな……」

青年の言葉が明らかに挑発であることを悟れないほど老人は若くない。

二人の間に、しばしの沈黙が流れた。

道場の隅で、少女が冷静に二人を見守る。

少女もまた、このような荒っぽい状況には慣れている感じであった。まったく慌てた様子は見せない。

しばしの沈黙、二人は構えたまま動かない。

「先に動くのは～……、タケちゃん……かな」

少女が呟くと同時に、タケシが素早い左正拳突きを、祖父の顔面目掛けて放つ。

「ぐはっ！」

ヒット。

孫の放った突きよりも、祖父の抜き手が先に孫の喉仏を捕らえていた。

四本の太い指が喉に減り込むと青年は、涎を吐きながら掠れた声を出した。

「タケちゃんのジャブより速かった！」

先に攻撃したのは自分。しかし、先に攻撃を喰らったのは自分。

青年は、受けたダメージを隠すのを忘れ、顔を歪めながら喉を両手で押さえた。

七十歳を超える老人が、二十歳のタケシよりスピードで勝っている。

否、スピード、それだけが初弾を決められた理由ではないだろう。長年積み重ねてきた空手の技術。それが不思議なタイミングを生み出しているのかも知れない。

今度は、上段廻し蹴り。

タケシの力強いハイキック。

だが、タケシの地に付く軸足を、拳四郎が軽く足で払う。

すると自分が放ったキックの勢いもあってか、タケシが激しく空を回りながら舞った。

そして背中から落ちる。

「うっ！」

道場の床板に背中から落ちたタケシの口から、またもや無様な声が漏れた。

「にゃろぉ！」

立ち上がる動作と同時に、タケシがアマレスの両足タックルを仕掛ける。

「ふっ、今時流行のタックルってやつだな」

祖父は孫のタックルを、仁王立ちのまま受け止めて見せた。

その老人の表情は、何かガッカリとしたものであった。

空手超人の拳四郎からしてみれば、空手家がタックルを行うことじたい、空手家の流儀から外れた行いなのであろう。

「た……倒れね……」

拳四郎の腰元にしがみ付く形のままタケシは、全力で押し倒そうと両脚を踏ん張る。しかし、拳四郎は、倒れない。揺らぎもしなかった。

「倒れない、だから空手なのじゃ」

二人の間から、こもった音が鳴り響く。するとタケシの体が、拳四郎の体から仰け反りながら離れた。

「膝蹴り。あんな軽く蹴ったふうに見えるのに……、凄く重いんだ」

拳四郎の膝蹴りが、タケシの顎を蹴り上げていたのだ。

続いて前蹴り！。

「ぐほっ！！！！」

拳四郎の放った前蹴りを腹に喰らい、道場のほぼ真ん中に居たタ

ケシが、道場の壁際まで吹っ飛ばされていく。

そして、青年の両膝が、道場の冷たい床に音を立てて崩れ落ちた。

「うわぁ～～、痛そう～。……やっぱりお父さんより強いわ……」

腹部を押さえたタケシが、立ち上がろうと足を踏ん張る。

しかし、受けたダメージのせいか、足が震えてうまく立てずにいた。もたつくタケシを、拳四郎が哀れむ表情で黙って見守る。

しかし山が動いた。

拳四郎がタケシに向かって走る。それを見てタケシは、慌てて立ち上がった。

そして達人が飛んだ。

タケシの顔に祖父の影が重なると、老人とは思えない巨漢からの飛び蹴りが放たれた。

血の繋がった孫に対して放たれた蹴り。その蹴りには、殺意のような物が明らかにこもっていた。

「どぉぉぉぉぉぉわぁぁぁぉぉ！」

タケシは、その飛び蹴りを顔の前で腕をクロスさせて防ぐ。

しかし、トラックにでも跳ねられたかの様な衝撃に飛ばされ、道場の壁へと強く背中をぶつけた。

「ぐはっ！」

壁に背中を打ち付けたが、かろうじて立っているタケシ。否、壁が無ければ吹き飛ばされてダウンしていた事だろう。

拳四郎が、更なる追い討ちを放つ。

それはただ、力任せに振るわれたスイングパンチ。まるで岩石のような拳が、タケシの腹部に激音を立てて減り込む。

「！！」

そのパンチの衝撃が、タケシの腹部から背中へと突き抜けて行く。そして背にした道場の壁が、タケシの代わりにミシミシと悲鳴のような音を立てた。

拳四郎が体を捻り、更なる攻撃モーションをスタートさせる。

後ろ中段廻し蹴り。

太い丸太で殴られたような衝撃が、タケシの腹部に再び響き渡る。

「！！」

空手技の中でも、最も破壊力が高いと語られている後ろ廻し蹴り。

それを受けたタケシの背後で、今度は壁板が折れる鈍い音を、断末魔の如くバリバリと叫んでいた。

「ふぅ！」

今度はタケシの反撃。

右フック。

だが、拳四郎は、タケシが放つ起死回生の反撃を、バックステップで難無く回避した。

そして少しばかり後方へと間合いを取ると、一息入れる。

「あの状況で、まだ反撃できるなんて、タケちゃんやる～」

祖父の強攻を壁に寄りかかりながらも持ち応えたタケシは、ゆっくりと壁から離れて前に出た。

タケシが背にしていた壁板は、三枚ほど割れ、くの字に凹んでいた。

「ぜんぜん、効いてね～」

タケシの言葉は、誰が聴いても嘘だと分かる。それは、やせ我慢。無理やり作ったその表情。口元が引きつり、足は震え、立っているのがやっとだと陽子にも分っていた。

「このぐらいにしとくぞ、タケシ」

突如そう言った老人は、孫に背を向け道場を後にしようとした。

タケシは、いきなり何を言い出すのかとキョトンとした顔をして祖父の背中を見る。

「まてや！、じいちゃんまだだ、まだ俺はやれる！」

とっさに出たタケシの言葉。ダメージはあるが嘘ではない。まだ戦える筈である。

「そのぐらい分かる、だが今年は去年の様に、お前を可愛いがってやる暇はないのじゃ」

振り返った老人は、孫にそう言って道場を出て行った。タケシは尻餅をつくように座り込むと、悔しさに顔を顰めた。

そして、一発、拳で床を叩いた。

「タケちゃん大丈夫？」

「ああっ……」

座り込んでいるタケシに、陽子が慰めながら近づく。その声は、とても優しかった。

老人ｖｓ若者。

今年もまた、若さをキャリアが上回る。

<　村の若者達　>

翌日の昼前。

タケシと陽子は、裏山の中腹にある本家のお墓参りに出ていた。

暖かい日差しを眩しそうに見上げるタケシ。昨日の組み手で祖父から受けたダメージは、すっかり消えていた。若さ故の素晴らしい回復力である。

タケシの家の墓を目指して草木が生い茂る細い山道を歩む二人だが、出かける前に祖父の拳四郎が言うとおりに、タケシも陽子も墓参りに行くような格好をしていなかった。

墓に飾る花すら持っておらず、墓石を洗う水も持ってきてはいない。

「ただ手を合わせて来ればいい」

祖父の拳四郎が言った、その言葉の通りの格好であった。

二人は着の身着のままの格好で、人気の無い山道を進むと、『堂本家』と刻まれた本家の墓の前に到着した。

艶の無いごつごつとした墓石。

しかし、墓石の周りには雑草一つ生えておらず、菊の花束が飾られていた。

「案外と、まめだな……」

「ああ見えて優しいんだよ」

タケシの言葉が、祖父の拳四郎に向けられたものと気づく陽子は、タケシが口にすることが出来ない優しい言葉を代弁するように語った。

そして陽子が後ろを振り向く。

そこには、小さな農村が一望できる、綺麗な景色が広がっていた。

「タケちゃんところのお墓って良いね、こんな景色の良い所に立ってて さ～」

陽子が笑顔で景色を眺めながらタケシに話しかけた。

「そのかわり、墓参りに来るだけで、山道を歩いて三十分近くかかるけどな」

そう言うとタケシは、皮ジャンのポケットから線香の束を取り出し、ライターで火を付け始めた。

そして火が付いた線香の束を墓石の前に添えると、手を合わせゆっくりと目蓋を瞑った。

景色に見とれていた陽子も、タケシの付けた線香の香りに気づき振り返ると、タケシの横にしゃがんで手を合わせた。

タケシは、疑問を抱いていた。

昨日の祖父との組み手。

毎年実家に帰ると、決まって行なう祖父との組み手。

そして、毎年足腰が立たなくなるまで行われるガチの組み手。

時には、顔の形が分からなくなる程に殴られたり、肋骨や手足の骨がイカレる事も少なくなかった組み手。

それに不満はなかった。

より強い空手家と気兼ねなく、ルールも無く戦える機会はそうそうない。

例えかなわないことが分っている組み手だろうと、あの超人空手家として名高い祖父と戦う、これほどの経験は他では積めないからである。

『武』の道を究めんとしている者にとって、自分の祖父『堂本拳四郎』といえば、超一流のブランドである。

曰く、武神。

曰く、熊殺し。

曰く、最強の暴力者。

曰く、卑怯なぐらいの超人。

そんな祖父は、多くの格闘技家を打ち倒してきた。

これは、真実でありタケシもまた小さな頃に、道場破りを名乗る者達が救急車で帰って行くのを何度も見ていた。

自分の記憶が確かなら、自力で歩き、道場を出て行った道場破りは覚えがない。

例え敵だろうと、例え自分の弟子だろうと、例え孫だろうと、例え女子供であろうと、例外無く一度向き会った相手に対しては、敬意を表して心が折れるまで徹底的に立ち合い、徹底的にぶちのめす。

それが祖父の空手道であった。

だが、昨日の組み手は、中途半端な物だった。

納得がいかない。

あれでは、実家に帰って来た意味が無いような気がしてならなかった。

二人は、堂本家のお墓に両手を合わせてしばらくたつと、山を降りる事にした。

「ね〜ね〜、タケちゃん〜」

「ん、なんだ?」

陽子が不安定な山道を降りながら、前を歩くタケシに話しかける。

「今年は春祭り……やらないらしいね」

「ああ、そういえば昨日の夕飯の時、じいちゃんがそんなこと言ってたな」

春婆怒村では、春祭りがある。普通の祭りは、夏や秋に豊作や今年の病息災を祈っての祭りが多い。

しかし、この村の祭りは、五十年前の事件の被害者を敬う為の祭りであり、七人の供養祭に近い。

春祭りの季節になると、陽子もよく春婆怒村に遊びに来ていた。

若き日の堂本拳四郎の弟子の一人だった父に連れられて、陽子は春婆怒村に来ていたのだ。

村には同年代の女の子が少なく、何時も一緒に遊んでいたのが二つ歳上のタケシであった。

陽子には幼い頃、タケシと一緒に遊びに行く春祭りが、心の中で楽しい思い出として強く残っていた。

陽子がタケシを慕い、恋心に変化していった理由も、そんな祭りの夜の回数が関係していた。

そして、今年は初めてタケシと二人っきりでの里帰り。

陽子の中では、来る最大のチャンスと燃えていた。

こっそり浴衣も持ってきた。

寒い夜でも気合で着こなす積もりだった。

しかし、春祭りは中止。

陽子は激しくガッカリしているところだった。

もしも愛おしいタケシが直ぐ側に居なければ、とてもじゃないが立ち直れないところである。

そのタケシと二人で、墓参りの終わった後に、堂本家の実家の庵でヌクヌクしている陽子。

家主の拳四郎は、村長の家へと出かけていった。

本来ならば、タケシも村長の家へと来いと言われているのだが、何故かタケシは出かける支度を何時まで経っても始めなかった。

そしてまだグズグズしているタケシに陽子がおせっかいを焼く。

「タケちゃん、何ボーーーとしてるの〜、村長さん所行かなくていいの？」

「……行くけど、もうちょっと遅れていく」

「はぁ〜、なんで？」

「村長さんところに行けば、絶対に酒を飲んでるに決まってるから……」

陽子は、引き締まった自分のくびれに両手を当てポーズを取ると、困った旦那でも見るかの様に、ため息をついてタケシを見下ろす。

「あ〜〜、そうか、タケちゃんお酒飲めないんだっけ〜。お酒飲めない人の事を何て言ったっけ?。ん〜〜……っと、あっそうだ、たしか〜〜、ゲイ!」

「ゲコだろが!!」

「あ、そうそう、ゲコゲコ〜〜、たけちゃんゲコだもんね〜」

「どうでも良いがゲイとゲコって、普通まちがわんぞ……」

「へへ〜〜」

「じいちゃんが最低でも三時までに来いって言ってたから、もうちょっとボーーっとしてる」

再び陽子は大きくため息をついた後に、何かを思いついたように顔を上げた。

「じゃあさタケちゃん、歩いて村長さんの家まで行こうよ」

「歩いて?」

タケシは何を言い出すのかと、陽子の顔をキョトンとして見詰める。

「たまには一緒に歩くのもいいでしょ、ねっねっねぇ〜。田舎の新

鮮な空気を吸いながらさ」

陽子は甘える猫のように振舞い、庵の前でぐずるタケシの腕に絡みついた。

「バイクあるのに……そうだな、歩いて行くか～」

タケシは少し嫌な顔をしたが、諦めが付いたのか陽子の発案に同意すると、陽子に引きずられるように玄関へと引っ張られていく。

「うんうん、そうと決まれば出発よ～」

タケシは陽子に引っ張られ、渋々と玄関に連れてこられる。

そして、靴を履いた二人は、祖父の家を出て村長の家を目指してゆっくりと歩き出した。

外は結構寒かった。

「ちょっと寒いね」

「ああ、まだ少し雪も残ってるしな」

もう二月の後半になる。

山奥の小さな村にはチラチラと雪が残っており、二人の息もまだ白く寒空を感じさせていた。

祖父の家を出てから大分歩いたが、二人は舗装されているが凍てつく田んぼに挟まれた景色の良い道を、未だ歩いていた。

田んぼの向こうに何軒かの民家が見えるが、人の気配は感じられない。

家を出てから誰一人として出会ってはいない。

そして暫くの間、二人が静かな村の道を歩いていると、後ろから車が迫ってくるのに気づき道の隅による。

それは黒く輝く車体、いかにも高価そうな外国車、ベンツ。

「うわぁ、ベンツよベンツ！！」

「そうだな、ベンツだな」

このような田舎の高齢化が進む小さな村には似使わない高級車に陽子が驚きの顔を隠さなかった。

高級車の代表と呼べる黒いベンツは、田舎道を歩く若い二人の横まで来るとスピードを落として停車した。

そして、後部座席の窓がパワーウィンドーによってゆっくりと開かれた。

戸惑う陽子を余所に、ベンツの後部座席の窓からタケシに向けられて渋めの声が投げかけられた。

「やぁ、堂本の所のタケシ君じゃないか」

「杉原のおじさん、こんにちわです、いつぞやは大変お世話になり

ました」

タケシは車の中の老人に、礼儀正しく頭をさげた。

このような礼儀正しいタケシの姿は珍しい。

陽子も暫く事の成り行きを見守ることにした。

「いやいや、同じ村の出身として手助けしたまでだよ。……だが何度も面倒は見切れんから程々にな」

「はい、肝に銘じておきます」

タケシは、頭をかきながら苦笑いを浮かべる。

「ところで村長の所にいくのだろ、乗りたまえ、そちらのお嬢さんも一緒にどうぞ」

その話に陽子が一瞬明るく喜ぶが、期待は直ぐに裏切られた。

「杉原のおじさんすみません、俺たち神社によっていくので……」

タケシがすまなそうな顔で、予定に無い事を言って相乗りを断わった。

陽子が「エー…」と表情を曇らせるが、車の中の杉原は、そんな少女の表情には気が付いていない。

「そうかね、じゃあ私は先にいってるよ」

「すみません」

タケシがもう一度頭を下げると、ベンツの窓が機械音と共に閉り、その場を走り去っていく。

その直後、陽子がタケシに怖い声で話しかける。

「たーけーちゃーん、何で嘘つくの～」

神社に立ち寄る予定は、無い事である。頬を膨らまして抗議する陽子を余所に歩き始めるタケシ。

陽子は完全に無視される形となったが、少し歩くとタケシが口を開く。

「今、車に乗ったら……村長の所に早く着いてしまう」

タケシが拳に力を込めて嘘を言った理由を語る。

それを見て陽子は、あきれた顔で肩を落とした。

陽子にとってはこのようなことを気にしていたらタケシの側には居られないと諦め、直ぐに別の話題へと話を変えた。

「それにしてもベンツで里帰りって、あのおじさん誰なの？」

「本庁の警視総監さん」

「へぇ？」

さらりと答えたタケシに陽子が間の抜けた声で返事をした。

「だから警視庁のお偉いさん、それで以前ケンカで捕まった時に、杉原のおじさんの力ですんなり出してもらったりしてね」

陽子は「なるほど」と言った表情をすると、握り拳を掌でポンッと軽く叩いた。

「お世話になったって、そう言う事だったのね。でも、こんな小さな村から警視総監まで出世するなんて凄いわね」

感心した様子の陽子に、タケシは何の反応も見せなかった。

「……そうか？」

「うんうん、凄いわよ」

「じゃあ、村長さんの所に行ったらもっと驚くかもな～」

「え、なんで？」

タケシとは長い付き合いだが、こうして陽子にも理解しずらい会話をすることがタケシには多い。

「まぁ、到着したらわかるって」

タケシはそう言って話をあいまいなまま終わらせた。

二人がしばらく歩いていると、村長の家が見えてきた。

村長邸の前には、駐車場から溢れた数台の車が路上駐車されていた。

先ほどの警視総監のベンツも、路駐してある。

しかし、ちゃんと運転手が車内に待機しているようだ。運転手が乗っていれば、路上駐車で切符を切られる事は無い。

もちろんこの村には、警視総監の自家用車に切符を切るような警察官は居ない。

警察と言えば、交番に一家三人で住み込んでいる駐在さんが一人居るだけだからだ。

そして、村長邸の庭先からは、いかにも大勢の人間が集まっていると言った賑やかな音が聴こえてくる。

「ちっ、まだ酒盛りが続いてるのか……」

タケシが言う通りあそこでは、酒盛りが派手に行われている最中である。

タケシが残念そうな顔をすると同時に、歩幅が小さくなった。

そんなタケシを陽子が思わず追い越して立ち止まる。

「おっ、タケシ君じゃないか、ひさしぶりだな」

タケシ達が通り過ぎようとしていた路上駐車の車の影から、白いワイシャツの男が声をかけてきた。

七三の髪型に紳士的なイメージの青年。

タケシよりも五つぐらい年上に見えるだろうか。男は、笑顔でタケシに接する。

「雅にぃじゃないっすか、こちらこそお久しぶりです」

雅にぃと呼ばれる男は、車のトランクに大きな荷物をしまっている最中だった。

そして車のトランクをパタンと音を立てて閉じると、一度手を払うように叩いてタケシの元に歩み寄る。

「雅にぃは、こんなところで何してるんですか?」

「ははぁ、さっきまで爺さん達に言われて、ちょっと腕前の披露さ。ほとんど酒のツマミ扱いだけどな」

二人の隣で話を聴いていた陽子は、見知らぬはずの男の顔を見ながら考え込んでいた。

見た事のない男のはずなのに、何処かで会ったことがあるような感じがしていたからである……。

「ところでタケシ君、このお嬢さんを、是非紹介してもいたいのだが」

男は、人の良さそうな笑みで、タケシに陽子の自己紹介をせがむ。

その笑みには、下心らしい物が感じられなかった。どうやら陽子をタケシの正式な彼女だと思っているようだ。

もちろん陽子もタケシの彼女になりたいと思っているが、タケシはそん陽子の気持ちに答えることはなかった。

「こいつ、桜木の叔父さんところの娘で、陽子です」

「はじめまして、桜木陽子です」

あまりにもあっさりしたタケシの紹介に、紹介された陽子もまた、あっさりとした自己紹介を返してしまう。

「堂本先生のお弟子さんの～、おおきくなったな～。私は武田雅史です」

「私を知ってるの？」

「ああ、小さな頃に、タケシ君と遊んでいたのを、何となく覚えているよ」

「じゃあ、はじめましてじゃないですね」

陽子が可愛らしく微笑む。

「ははは、そうなるね」

小さな頃に出会っている記憶、陽子が感じたものは、様なものではなかった。

もっと新しい記憶。もっと最近になって出会っているような記憶であった。

「ところで雅にぃ、腕前の披露って、もしかしてこんな所まで来て、弓撃ちさせられたのか？」

タケシが弓を射るポーズを真似ると、雅史が照れくさそうに頭を掻きながら答えた。

「ああ、里帰りする前から実家の婆さんに電話で強く言われてね。アーチェリー一式をわざわざ持ってきて酒の席でお披露目、……はは、こんな事をする為にオリンピックに出たわけじゃあないんだけどな～」

雅史がぼやくように言った言葉に、陽子が反応をしめした。

オリンピックと言う言葉に。

「オリンピック……アーチェリーって……もしかして、五輪のアーチェリー銀メダリストの武田雅史！……さん」

陽子のはっとした表情に、雅史がまたしても自分の頭をポリポリと軽く掻く

「今気付いたのか」

「うん、ごめんなさい」

タケシの言葉に陽子は、目を丸くして目の前の五輪のヒーローを見つめた。

これでも雅史は、テレビにもたまに顔を出すメダリストである。

「ははっ、まあ普段は平凡なサラリーマンだから」

雅史は謙遜するタイプだ、自分のことをあまり派手には語らない。

三人が和やかにそんな会話をしていると、村長邸の庭先から大きな歓声にも似たどよめきが上がった。

「さっきまで雪次のヤツが、お前んとこの爺さんに可愛がられていたぞ……今の歓声、KOされた感じだな」

雅史が、歓声の上がった方を向いてそう言うと、タケシと陽子の二人も村長邸の方角を見る。

「雪にぃも来てるんだ」

「なんでも空手を見世物にしたとか言って、堂本先生が怒ってたぞ」

「ボクシングで日本ランキング五位までなったんだから許してやればいいのに」

タケシと雅史が、可哀想にと言った感じで話していると、横から陽子が口を挟む。

「日本ランカー五位って、もしかして、もしかして、フライ級五位の本城雪次!?」

「君、女の子なのに詳しいね」

雅史が少し驚いた感じで陽子の顔を見ると、タケシが横からちゃかす。

「こいつ格闘技オタクだから」

三人が、そんな会話をしていると、村長邸の立派な門から大柄の男がよろよろと出てきた。

身長も高く、横幅も広い男。五分刈りの大きな頭にびっしょりの汗を掻き、顔は子供のように泣きそうな表情をしていた。

「よう健太、どうした？」

大柄の男に雅史が声をかけた。男は話しかけた雅史を見つけるとヨロヨロと走りより愚痴にも似た言葉で話し始めた。

「どうしたもこうしたもないぜ。あっ、タケシ～～！、お前の所のじじぃをどうにかしてくれ！」

その巨漢とは裏腹に、今にも泣き出しそうな情けない表情でタケシに苦情を叫ぶ健太は、タケシの両肩を大きな掌で掴むと大きな顔を近付けた。

「どうにかって、どうかしたのかよ？」

「お前んとこのじじぃが、体育会系の若いのを捕まえて、組み手始めやがってよ！」

「健太、お前、機動隊だろ、自分で止めろよ」

そう言い自分の肩を掴む健太の両腕をタケシは、無下に振り払う。

「無茶言うな、俺だってやっと解放されたんだぞ。それにお前ん所のじじぃを止めるのに機動隊とか自衛隊じゃあ無理だよ！」

健太の叫びとほぼ同時に村長邸の庭から再び歓声があがった。

「拓也だ、拓也がのばされた歓声だ……。あのじじぃは、武器三倍段の法則も無視かよ……」

大柄の男は、息も絶え絶えにそう言った。

「竹刀、木刀、日本刀、どれでやってたんだ？」

「さすがに木刀だったけどよ～」

「拓也さんって人、剣道なの？」

「ああ、剣道三段だよ」

陽子の質問に雅史が答える。するとタケシは、仕方ないなといった顔で、村長邸に向けて足を運ばせた。

その後ろを陽子と雅史の二人が付いていく。しかし健太は、一人だけ車に寄りかかりながら其の場に残った。

「おい、じいちゃん、何してんだよ！」

大きな和風の庭。

老人たちが円を作るかの様に酒盛りをしていた。

ビール、焼酎、日本酒などの空き瓶が散乱する中庭の中央は、酔いどれの老人達に囲まれるように円が作られ、闘技場の如くなっていた。

その外周には、困った表情の若者達が何人も居るが、彼らも雅史同様に里帰りを強制された者達であった。

即席の野試合の場に、拓也と呼ばれる二十代半くらいの男が、剣道着姿で大の字のまま白目を向いて倒れていた。

気絶している拓也の横には、真ん中からポッキリと枯れ木のように折れた木刀が転がっていた。

「いやな、村の衆に自分達の息子や孫が、どれだけ成長したかを見せようかと思うてのぉ」

気絶した拓也の側に立つ祖父の拳四郎が、悪餓鬼の如くタケシの言葉に微笑む。

先程まで折れた木刀を持っていたと思われる拓也を伸したのは、この暴君のようだ。

「ひゃっはっはっはっ」

タケシの祖父拳四郎が、そう言うと酒盛りをしている老人達が一斉に笑う。

おそらく、先ほどからこんな感じで、酒盛りが行われていたんだろう。

何をふざけているのかとタケシが怖い顔をしてみせるが、老人達には脅しにもなっていない。

その横で雅史が、あきれた顔で溜息を付く。

「タケシ君ゃ、私が頼んだのじゃよ」

「村長さん……」

そんな状況の中、口を挟んだのは、頭のハゲ上がった村長であった。

自分の家の庭で酒盛りを始め、若者をいびるように指示し、毎年恒例の春祭りを中止した張本人。

この村長は、何を考えているのかとタケシは怪訝な顔をする。

しかしタケシの横では、何か楽しそうなことが始まるのではないかと陽子が笑顔で期待しながら立っていた。

「まあ、拳さんも、そのぐらいにして、皆の衆も本題に入るぞぃ」

村長がそう言うと先程までほろ酔い感じで賑やかだった老人達が、その言葉に静まりかえり表情を変えた。

まるで空気が一転した村長邸の庭。タケシと陽子だけではなく、

他の若者たちも不思議そうに辺りを見回した。

「な……なんだ」

雅史をはじめとする里帰りを強制された若者達は、その老人達の顔を見て、何が始まるのかと息を呑む。

陽子が背伸びをしながら庭の中をぐるりと見渡す。

先ほどのベンツの老人が、スーツ姿で田舎の村人といった感じの老人達に混ざって座っていた。

それだけではない。

未だにバブル絶好調な感じの成金風老人や、タケシの祖父のように老人場慣れした体格の元気な者も何人か混ざっている。

それに村の若者達。

アーチェリーオリンピック銀メダリスト、日本ランキング五位のプロボクサー、機動隊の人や剣道三段の人、その他にも何かスポーツや格闘技をやっていそうなガッチリした体形の若者達の数々。そんな様子の若者が、ごろごろ居る。

陽子がタケシに小声で質問する。

「ねえ、タケちゃん……」

「なんだ?」

「今年さ、春祭りやめて、天下一武道会でもやるの？」

「やらね～ょ……」

<　仙女と侍　>

村長からの話が始まるにあたって、村の女性達の手で宴会の後片付けが行われていた。

自分達の祖父の真面目な顔に、若者たちが心配になると、何が始まるのかと質問をする。

しかし、老人達は決まって皆「今から、村長が話す」の一点張りで、何事が始まるのか話そうとしない。

村長低の大きな庭に集まった村人達。

里帰りして来た者達。

今ここに集まっている者の数は、男達だけで１００人近くは居るのだろうか。

この場に居ないのは、幼い子供達と老婆達だけのようだ。

やがて酒盛りの後始末が終わると、いよいよ村長の話が始まった。

「村の衆よ……」

村長の険しい表情から、真面目な話だと感じ取れる。

「まずは、今まで強き若者を育ててくれた衆に、ワシから感謝を述べる」

タケシは、村長が何を言い出しているのか疑問に思う。

その横で祖父の拳四郎が照れた顔をしていた。

だが、この村に生まれた者は、男女問わず、何かしらの武術を村の老人達から習っていた。

余所から見たら、異常なまでの武術村である。

しかし、多くの若者は疑問にすら思わなかった。それが当たり前だと思って育ってきたのである。

タケシにしろ、上京するまで、その異常さに気付かないぐらいであった。

普通の子供たちが義務教育を9年間受けるように、全国の子供たちが武術を習うのが当たり前だと思っていたのだ。

「昔の約束、ワシらも若かった、童だったものも居れば、まだ産まれてなかった者も多かろう……」

何の話かと若者達が唖然とするが、老人達には動揺の色は無かった。

彼ら、老いた者達には、何の話かが理解されているようだ。

「このケジメは村の者で付ける、この恨みは村の者で晴らす！」

村長の話に力がこもると、拳四郎をはじめとして何人かの老人の表情にも怒りの色が浮かぶ。

その表情は、今にも噛み付こうとしている狂犬そのものにも見えた。

「おいおい、なんか物騒な話になってきたな」

タケシが隣に居る陽子にだけ聴こえるぐらいの小声で呟くと、陽子はタケシを横目でチラリと見た。

タケシが緊張していた。それが一瞬だけ顔を見た陽子にも分かった。

「約束を果たし、仇を取るための苦労、この五十年の苦労、皆には心から感謝する」

五十年、仇、そのキーワードに多くの若者達が反応を見せた。

小さな頃から聴かされている昔話。

山姥伝説。

それと、五十年前の神隠し事件。

五十年前の事件の際に、マスコミが報じた山姥伝説は、山から鬼

婆が下りてきて人を食らうものであった。

しかし、村に伝わる本当の話は違うものだった。

今でも村で語られている真の山姥伝説は、村に不幸をもたらす疫病神を追い払う不老の仙女の話であった。

偽りの伝説は当時のマスコミが、それでは面白くないと言って勝手にアレンジしてしまったものである。

そして、本当の山婆伝説の話から、五十年前の神隠しの話へと続き、今の若者たちに言い伝えられていた。

タケシをはじめとした若者達は、村長の話から、小さな頃に何度と無く聴かされた話を思い出していた。

家々の老人達が語り部になって話す昔話。

その内容とは……。

昔々の話である。

この山奥の小さな村に、一人の美しい仙女がやって来た。

髪は地面に付くぐらいに長く、黄金の様に輝き。肌は透けるほど白い。

そして、おなごですら恋に落ちそうになるぐらいの切れ長の美し

い瞳に、整った鼻と、妖艶な唇を持った、絶世の美女であった。

仙女と表現するより、女神と表現したほうが正しいかもしれない。

そして、美しい仙女と共に一人の侍がやって来た。

二人は共に現れ、共に村の山に住み着いた。

年の頃は二十歳くらいの凛々しい顔立ちのお侍。

髷を結い、腰には二本刺しをぶら下げ、豪傑と思える太い腕には刀傷が時折裾から見え隠れしていた。

神々しい仙女と、戦場（いくさば）の死臭漂う若き侍。

村人衆には近寄りたくとも近寄りづらい二人であった。

まさに美女と野獣。

最初は村人衆も、この二人を警戒していた。

しかし、月日が経つにつれ、恐れることはなくなっていった。

それどころか、自分たちの畑で取れた農作物を、二人へと奉げるようにまでなっていった。

理由は二人の不思議な力が、村に色々なご利益を齎したからである。

仙女が、「ここを掘ってみぃ」と言えば井戸と成り。

侍が、刀を振るえば病気がたちまち治る。

神業としか言いようのない軌跡の数々。

昔の田舎の農民達には、二人をおがみ、食物を捧げずにはいられない光景であった。

「お侍様の刀は、病気を治す神様の刀なのけ？」

「刀で切っているが、これは拙者の技だ。刀で災いを断ち、病魔を切る、これぞ活殺の極みじゃ」

村の童が鼻水を垂らしながら問うと、侍はそう答えた。当時の者には理解できることではなかった。

そして二人が村に来てから、月日は長く豊かに流れていった。

十年、二十年と……。

そして若き侍も年を取り、病魔を切る刀を振るうのも至難になっていった。

だが、仙女は、あの頃となんら変わらぬ美しく若い姿のままであった。

二人がこの村にやって来た時と変わらぬ不思議な姿のまま、何一つ変わっていなかった。

さらに月日は流れ、神技の侍も老衰で亡くなった。

人生五十年と歌われる時代でありながら、癒しの侍は六十歳まで生き、その生涯をまっとうした。大往生と呼べるであろう。

しかし、尚も仙女は若きままであった。

若く、美しく、神々しく生き続ける仙女。

彼女は、完全に歳を取るのを忘れたかのように、その姿を保ち生き続けていた。

だが、共に暮らしていた侍の亡き後は、何時も一人で寂しそうにしていた。

仙女はまるで抜け殻のような瞳で、何時も一人で空を見上げていた。

彼女は、決して涙を流す事無く。

ただ、悲しく、寂しそうな表情で、空を一人で見上げていた。

あの侍とは、夫婦ではなかったようだ。

だが、恋仲の関係なのは、村人衆、誰から見てもわかることだった。

侍の死が、彼女を寂しいものへと変えてしまっていた。

「なぁ、村の衆ゃ……」

ある日、仙女は村人衆を集めると、力なく消え去りそうな声で語りかけ始めた。

「わらわは疲れたのじゃ、しばらく眠ってもいいかぇ?、この村に大きな災いが起きた時には、必ずや目をさます」

寂しそうな声と、寂しそうな話の内容に、村人衆は困惑した。

お侍が亡くなり、こんどは仙女まで村から居なくなったら村はどうなるのかと。

この村の守神が居なくなってしまう事に村人達は、動揺を隠さなかった。

「恐れる事はない、わらわはこの村と共にある。形を変え、鋼の姿で村に残ろう、ただ眠るだけじゃ、長く長く悲しみを忘れるが為に……」

そして美しき仙女は、その姿を一本の鋼の長槍に変えた。

最後に一言呟く。

「わらわの名は、『春婆怒』、異国から来た……」

「美人の仙女かぁ……。パツキンの外人さん?」

陽子の言葉にタケシが答えた。

「さ〜な、でも鋼の長槍が神社のお堂に奉られてるのは本当だ。俺も見たことがあるからなぁ」

一度、村長邸での集まりが解散になった。

タケシと陽子は、神社に向かって歩いていた。

その二人の横を他の村人達が、車、バイク、自電車、中にはトラクターなどに乗って、神社に向かって移動して行く。

今度は、神社の境内で何かを始めるらしい。

「ねぇ、五十年前の恨みって何？」

「おそらく山姥事件の事だと思うけど、五十年前に七人が神隠しになった事があってな……」

実のところ陽子は、この事件には詳しくはない。

幼い頃に陽子も聴いた覚えはあるが、村の子供のように耳がタコになるまで聴かされている訳ではない。陽子は、この村の出身ではないから当然と言えば当然でもあった。

「神隠し？、それと恨みと何の関係があるの？」

「さぁ〜……」

タケシには心当たりがあった。それは、自分の祖母のことである。

神隠しに有って唯一遺体の発見されたのが、タケシの祖母である。

そう、堂本拳四郎の若き日の妻。

だが、ここでそれを陽子には言わなかった。

理由など特にないのだが……。

<< 元凶 >>

タケシと陽子の二人は間もなくすると、神社の境内に続く階段の前に到着した。

大きな鳥居の向こうには、急勾配の長い階段が見える。

そして、其のそばには、各自乗り物を使って移動してきた村人達の車などが何台も並んで停められていた。

車から降りた老人達が若者達と一緒に次々と急な階段を登っていくが、其の足取りは本当に六十から七十を超えた老人なのかと陽子を驚かせた。

ほぼ最後尾と思われるタケシと陽子も、神社の境内に続く階段を登り始めた。

「懐かしいね、タケちゃん」

二人は、一段一段と石の階段を踏みしめながら登っていく。

たまに後ろを振り返ると、階段の角度がかなりあることを再認識できた。

陽子にとってこの階段は、懐かしい思い出の場所である。

小さな頃、タケシと一緒に何度かこの神社の境内で遊んだ思い出

があった。

まだ、タケシをただの幼馴染の兄のように思っていた頃である。

異性と意識するようになってからは、祭りの夜にしか来ていない。

日が高い内に神社に来るのも久しぶりのことであった。

「そうかぁ」

陽子の何気ない一言にタケシがそっけなく答えた。

タケシにとってのこの神社の境内は、急な階段をランニングコースとして毎日のように汗を流した記憶しか残っていない。

タケシには、昼間の神社に対して陽子のように楽しい記憶と思える物は、僅かな欠片も残っていなかった。

今でもこの階段を登っていると、思わず走り出してしまいそうで仕方なかった。

二人が階段を登りきると、高台の為か、少し風の強さを感じた。

そして、二つ目の大きな鳥居をくぐると、神社の境内に集まる村人達の姿と、その向こうに有る立派な神社の本堂が見えてきた。

「あれ、本堂の改築したんだ～、去年より立派になったね～」

「この村出身のスポーツマンは金持ちおおいし、それ以外にも政財界にやたらと顔が利く人も多いからな。かなり寄付を貰ってるらし

いぞ」

「さっきのベンツの警視総監とか？」

「ああ、その他にもまだまだいるんだけどな」

タケシの言うとおりである。この不景気な余生にもかかわらず、いかにも私は成金ですといった感じの老人達がちらほら見に付いた。

ダブルのスーツに煌びやかな指輪やロレックスの時計を身につけた裕福そうな老人達。

金は有る所には有るってことなのであろう。

金欲に乏しいタケシにはどうでもいい話だった。

「村長のヤツ、今度は神社に集めて何する気だ？」

本来なら今頃ここは、祭りの屋台が並んで賑やかになっているはずの場所。

なのに今年は的屋の一つも出ていない。

それなのにディーゼルの大きな発電機が境内の隅に置かれ、発電の仕事をこなすエンジン音だけを響かせていた。

そして、そこから引かれた電気で幾つもの照明が、薄暗くなり始めた境内を隅から隅まで照らしていた。

「ねえ、タケちゃん……」

キョロキョロとする陽子。

「なんだ？」

「皆……なんで武装してるの？……」

陽子に言われて初めてタケシも気が付いた。

雅にぃはアーチェリー、拓也は日本刀を持たされている。

他の若者も、各自今まで習ってきた武術の得物を持たされていた。

そして老人達もまた、それぞれの武具を手にしている。

日本刀、槍、弓、警棒、鉈、中には鎖鎌を手にしている老人もいた。

物々しい空気が流れていたが、何故かタケシには心地よくも感じられた。

「どう言うこと……？」

陽子の問いかけに、タケシは答えられなかった。

だが、その景色から時期に始まる事は、明らかに戦闘じみた事だとは分かっていた。

祖父の拳四郎が後ろからタケシの肩を軽く叩く。　そして、タケシにボソリと耳打ちして来た。

「我々は素手だ。空手家だからのぉ」

意味が分からない。

だが、その拳四郎の表情は、何やら嬉しそうな顔にも見えた。

タケシは気づいていないが、タケシの表情も似たような顔をしていた。

それに気づいていた陽子が上目遣いで二人を見ながら軽く笑う。

理由が分からなくても好いた男が楽しそうにしているのが陽子にも嬉しいらしい。

「タケちゃん、ベンツのおじさん……拳銃持ってるよ……」

タケシは、陽子に言われるまま、杉原のおじさんに目をやった。

その手には、黒いリボルバーのピストルが、陽子の言うとおり確かに握られていた。

「ほら、警視総監だし……」

タケシがそう答える。しかし、そう言う問題ではない。

「ふぅ、あんなもの利かぬといってあるのにのぉ」

拳銃を握る杉原の様子を見た拳四郎が鼻で笑い飛ばす。

まるで自分の拳のほうが、ピストルよりも優れていると言いたげな感じである。

「じいちゃん、一体何が始まるんだ……？」

タケシが祖父に、質問した時である。

日の落ちかけた神社の境内に、薄気味悪い空気が風と共に吹き上る。

その風が周りの木々の枝をガサガサと強く揺らしだす。

それに気づいた陽子が、キョロキョロと辺りを見回した。

陽子だけではない。他の若者達も、其の異変に辺りを見渡し始めた。

怪しい風は、境内を包むように回り続ける。

何かが歪(ゆが)む感覚と、空気が歪(ひず)む音が聴こえてくる。

老人たちも空を見上げた。

敵でも睨むかの形相で、手にした光物を強く握り締めていた。

今までにないほどの緊迫した空気が境内に立ち込める。

「ちっ」

舌打ちしたのはタケシであった。彼は感じ取ったのであろう。

今、この場に流れる空気は『闘争』寸前の空気。

間違いない。この空気は戦いの空気だと。

幾度も味わってきた闘争の香り。

道場でも、村でも、町の路上でも、人気の無い空き地でも、高校の屋上でも、体育館の裏でも、リングの上でも、ヤクザの事務所でも、夜の公園でも、これと同じ香しい臭いがした。

殴り合える相手がいれば同じ香りがした。それは、タケシが好きな臭い。

「タケちゃん！」

陽子が空を指差すと、タケシもその先を見上げた。

そこには不自然な黒雲が噴出す様に広がり始めていた。

「あの雲近いよね……、二十メートルも離れてないよね？」

「あれは雲とか煙とかじゃあないぞ。ひでぇ……なんて言うか……」

「敵じゃ、仇じゃ！」

村の老人の一人が叫んだ。

「じいちゃん、何が起きるんだ！？」

「カンちゃん、春婆怒様をここへ！」

「けんちゃん、抜かりはない、もう、お連れ申しておるわ！」

拳四郎の呼び声に答えた神主さん。

その手には、神社の奥に奉られていた鋼の長槍が握られていた。

仙女が変化したと言い伝えられる長槍。

２メートル位の鋼の柄の先端に、鋭く尖った刃物と、手斧用サイズの小さい斧が付いている。

派手な装飾はされていない。

しかし、鋼の黒さと先端の刀身と斧の輝きが、貫禄のような威圧感を発していた。

空に現れた黒雲は、怪しく蠢きながら大きく膨らんでいく。

村人達はそれを睨むように見上げ続けた。

握り締めた武器に手の汗が染み込んでいく。

「何か潜んでる……」

明らかに黒雲の中に、何かが潜むように蠢いていた。

「ヤツじゃ」

皆が皆、黒雲を見上げて睨むように構えていた。

「春婆怒様の緑風の結界が、解けかかっている」

「あの中から敵がくるのか？」

何とは分からない。しかし、村の若者達も、戦いを意識する。

この村で学んだ武術武芸者の血が、それを意識させた。

「五十年前の宿敵！」

「よくわからねえが、やるしかね～みたいだな……」

「何とだよ！？」

「知るか！」

「仇じゃ！」

「ヤツが来るぞ！」

「だから、ヤツって何だよ！」

直径十メートル位まで大きくなった黒雲。それは、赤く大きな鳥居の右上に引っ掛かるように包んでいた。

「雲の中から何か出てくるぞ！」

黒雲の中で何かが蠢き、今にもそこから何かが出て来る素振りで

あった。

「何だよあれ……」

それは敵。

「化け物！」

黒雲の中から姿を現したのは、巨大な黒蜘蛛。

真っ黒な皮膚には産毛と呼ぶには棘々しい刈り込まれた芝生のような産毛を生やし、八つの赤い瞳をギラ付かせ、八つの長く太い脚を気持ち悪く動かしていた。

そして、巨大な黒蜘蛛は、のそのそと鳥居の上に、へばりつくように移動した。

そのサイズは、マンモスを捕食するのではないかと思える大きさであった。

「鬼々蜘蛛じゃ！」

誰もが見ただけで理解できる。そのサイズは、常識的な物ではなかった。

それは、完璧な化け物。

人間の常識では、存在しえない生物。

「うぁ……冗談でしょ……」

両手を口に当てた陽子が、唖然とした表情で冷たい汗を流した。

「キィキィキィキィキィキィキィキィキィキィキィキィキィキィキィキィ。」

黒き大蜘蛛が鳥居にしがみ付いたまま、奇怪な泣き声を響かせた。

その時、乾いた火薬音が響わたった。

三発の銃声。

警視総監の杉原が、手にした拳銃を大蜘蛛に向って放っていた。

更に銃声が続く。そして、全ての弾丸が撃ちつくされた。

しかし杉原は、弾の無くなった拳銃の引き金を、憎しみの顔で引き続けていた。

「よくも、よくも、よくもぉぉぉぉぉぉ！」

だが、大蜘蛛に向けられて放たれた弾丸は、全て狙いを外れていた。

弾丸は、大蜘蛛の横を、目には見えない速度で飛んでいっていた。

「やめい、杉原のぅ」

弾の入っていない拳銃の引き金を引き続ける杉原。それを悲しげに村長が止めた。

「当たってない？、拳銃が効かない……！？」

警視総監とはいえ警察官。射撃訓練を積んでいる筈の人物が、あれ程大きな的を外すはずもない。

「火薬だ、火薬が気を乱す」

「気？」

「あのバケモノは、気のこもってない攻めは受付ぬのじゃ」

拳四郎が、鳥居にへばり付いた大蜘蛛を睨みつけたままタケシの問いに答えた。

「よくも、よくも兄を……」

村長に止められて、打ちつくした拳銃を力なくおろした杉原は、悔しそうな顔で仇の大蜘蛛を見上げ続けていた。

この人の兄は、五十年前の行方不明になった六人の内の一人である。タケシもそれを知っていた。

「あの巨大昆虫が拳銃の弾を反らして見せたってのかよ！」

「そうじゃ、あの鬼々蜘蛛は気の通ってない攻めを妖力でかわす。そして火薬は、気の流れを乱すのじゃ。奴には、拳銃もマシンガンも爆弾も効かんのじゃ」

「妖力とか気とか何だよ！」

「要するに気を集中させたせめしか効かんのじゃ」

「気を集中させるって!?」

「思いっきりぶん殴ればええんじゃ!」

「わかった!」

「本当にわかったの……」

タケシと拳四郎の会話に、陽子が少し心配な顔をする。

しかし難しいことが考えられないのだからこれで良いかと直ぐに陽子は諦めた。

「要するに火薬を使わずに、集中力を高めた攻撃ならば、あの化け物を倒せるのだろ。まるで、オカルト理論だな」

そう言って雅史が、手に有るアーチェリーのボウを力強く引き、大蜘蛛に狙いを定める。

「まさか、本当に居るとわな、俺も婆さんの話しは、半信半疑だったが……」

鳥居の上の黒き大蜘蛛に、弓の狙いを定める雅史。狙いに集中するオリンピックメダリスト。それだけの腕前があれば、外す事は無いだろう。

そして、会心の一撃を放った。

「なに！」

雅史の放った一撃の矢を、大蜘蛛は避けるように鳥居から地上へと跳躍する。

大蜘蛛の巨体が宙を舞、地上の村人達を影に隠す。

「くはぁ！」

「うわぁぁぁ」

鳥居から飛び跳ねた大蜘蛛は、地面に居た村人達の真上へと着地した。

黒い巨体に足蹴にされる村人たち。そして、何人かを踏み倒しながら鬼々蜘蛛は威嚇する。

「キィキィキィキィィィ、人風情ガ小ザカシイヤ」

「こいつしゃべるのか！」

大蜘蛛がしゃべったことに若者が驚きの声を漏らした。

確かに大きくても昆虫、それがしゃべればショックであろう。

「この化け物の名は鬼々蜘蛛！、かつてこの村に現れ六人の村人を攫って食ろうた張本人！」

村長が怒りを込めて叫ぶ。

「こいつが神隠しの正体!?」

「攫って喰ったって!?」

「人食いだと!」

「うちの爺さんを……食ったのは、こいつ!?」

雅史は自分の婆さんに、聴かされた事があった。

神隠しではなく、自分の爺さんは、化け物に殺されたと。

雅史の婆さんは、何時も雅史にはやさしく接してくれていた。

嘘を付くような人ではないと雅史は思っていた。

それでも爺さんが、化け物に殺されたと言う話だけは、半信半疑だった。

だが、目の前に化け物が存在する。

しかもこの化け物は、爺さんを食い殺したと言う犯人。

会ったことがない祖父とは言え、この化け物に身内が食い殺されたとなれば、尋常ではいられない。

おそらく雅史と同じ感情を持った村人が、他にもいるであろう。

そして、この村の人々の絆は深い。

身内じゃないにしろ村の仲間を食われたとなれば、自然に怒りが湧き上がってくる。

「何となくわかってきたぜ。何でこの村がやたらと武道武術にたけ。何でやたらと闘志を若者に教え込んで来たのか」

タケシの言葉に他の若者が続く。

「俺達は、この日の為に今まで武を志し」

「村の仇を打ちのめす為に」

「全ての恨みを晴らす為に」

「今、ここに集い集まった」

全ての若者達が、この村に生まれし宿命に今気づく。

常識であり得ない化け物級の黒い大蜘蛛。それを前に、恐怖を感じる者はもう居なかった。

今、目の前にある現実。

ただ、宿命の敵を倒し、全ての仇討ちを果たす事。

「覚悟しやがれ、この化け物が！」

「生きて帰れると思うなよ！」

「俺達が仇を取ってやる！」

「今ここが、最終決戦！」

<　春婆怒　>

「キィキィキィキィキィィィィーーーーー」

神社の境内に鬼々蜘蛛の奇怪で甲高い鳴き声が響き渡ると、各自にさまざまな武器を握り締めた村人たちが、仇である妖怪鬼々蜘蛛を取りか組むように陣を取る。

まるで訓練された兵士のように村人達の行動は機敏だった。

その中央で、数人の村人達を踏み潰したまま鬼々蜘蛛が、威嚇するように鳴き続ける。

そして、八つの赤い目を光らせながら、ニッパーのような鋭い口を左右にカチカチと音を立てながら開いたり閉じたりすると、その鋭い口から粘りけの強い涎が、踏みつけられている村人の背中の上に垂れた。

「おぅらぁぁぁぁぁーーー！」

一人の老人が手にした日本刀を振り上げると、掛け声と共に先陣をきって鬼々蜘蛛に飛びかかった。

銀色の刀身がライトの光を反射させると、鉄と鉄が弾き合う耳障りな音が響く。

「なぬ！」

老人の振り下ろした日本刀は、鬼々蜘蛛のドス黒く太い足の一本で弾き飛ばされた。

日本刀の刃は、鬼々蜘蛛の棘のような産毛に納まっただけで傷すら付けていない様子だった。

「この化け物め、なんと固い足を！」

一方、弾かれた老人はよろめきながら皆の輪の中へと後退していく。

攻撃こそ通じなかったが、その勇気ある老人の行動が他の者達に感染していった。士気が上がる。

「ならば頭をカチ割ってやるわ！、とう！」

続いて拳四郎が、空手家らしく素手のまま正面きって鬼々蜘蛛に攻め行く。

老いた巨漢が、たったの一歩の踏み込みで五メートル近くを跳躍して行った。

「キィキィキィキィィィ、小ザカシヤ」

正面から突っ込んできた拳四郎を、鬼々蜘蛛は二本の前足で払いのけようと振るう。

しかし、老いても勇ましき空手の達人は、軽やかな体さばきで見事にそれをかわして巨体の鬼々蜘蛛の目の前へと入り込む。

「キッ、キィィィィィ！」

素手の射程距離。

「思い知れ、お鶴の仇、怒りの空手技をぉぉ！！」

拳四郎の連続攻撃。

下から鬼々蜘蛛の顎を蹴り上げた蹴り。

そして浮いた巨体を引戻すかのように打ち下ろす肘鉄。

ちょうどいい高さに戻って来た鬼々蜘蛛の顔面に向けて右左の連続中段正拳付きを叩き込む。

更に止めとばかりに、一呼吸分の力を貯めた強烈な正拳付きをぶちかました。

「フゥギィィィィィィィーーー！！」

拳四郎の強烈な連続攻撃に、悲鳴を上げる鬼々蜘蛛。

撃たれた顔面を庇うかのように八本の足をばたつかせた。

その無造作に振り回された丸太のような足に、巻き込まれんと拳四郎も慌てて後ろへと下がった。

「利いてるぞ！」

「やれるのか」

「皆、いっせいにかかるぞ！！」

「おぉぉぉぉぉぉ！」

「とりゃーーー！」

拳四郎の攻撃に勝機を見出した村人達。今度は掛け声と共に一斉に飛びかかった。

「キィキィキィキィキィィィィ、小ザカシヤアアア！」

鬼々蜘蛛は奇声と共にその巨体をまるでドリフトするスポーツカーのように回転して、飛びかかる村人達を力任せに次々と弾き飛ばす。

「どわわぁぁ！」

「ぐほぉ！」

プロレスラーに飛びかかった子供のように弾かれた村人達は、地面に叩き付けられ苦痛の表情を浮かべた。

「いてぇ～……！」

「折れた折れた！」

「ちっ、なんてパワーだ！」

「誰か怪我人を離れた場所へ！」

周りの状況を冷静に判断した村長が、的確な指示を村人達に飛ばす。

「皆の衆、この化け物を侮るな！」

村長に続き、先に有効打を見せた拳四郎もまた、村人に檄を飛ばした。

「キィキィキィキィィィィィ、人風情ガ小ザカシヤ！」

「もしかしてこいつ、それしか言葉をしゃべれないのか！？」

鬼々蜘蛛のドリフト攻撃を紙一重でかわしていたタケシが、鬼々蜘蛛のかわいそうな事情に見事に気づくとそう言った。

「キィキィキィキィィィィ……、コ、コザカシヤ……」

再び奇声を上げる鬼々蜘蛛の叫ぶトーンは、明らかに下がっていた。

「やっぱり昆虫は昆虫なのね、思ったより頭良くないんだ」

気づかれた真実に陽子が追い討ちをかけると、それはもう悲しき悲鳴にしか聴こえなくなっていた。

だが、鬼々蜘蛛の見せたドリフト攻撃で受けた村人達のダメージもまた、かなり深刻だった。

多くの村人が手傷を追い、何人かは自力で歩くことすら出来ない

様子である。

村人サイドの戦力低下は見て取れた。

「やはりワシの拳で蹴りを付けてやぁ、うお?!」

「じいちゃん!」

拳四郎が意気込みを口にした瞬間、鬼々蜘蛛の口から蜘蛛妖怪と言えば蜘蛛妖怪らしい粘着性の白い糸が大量に吹き付けられた。

「ぬおおぉぉ、なんじゃこりゃ、動きが!」

鬼々蜘蛛から吐かれた大量の粘着糸で、超人の動きを完全に封じてしまった。

ベトベトの大量の糸に自由を奪われた拳四郎は、取り餅に掛かった鳥のように地面でバタつく。

その様子から脱出は、不可能に見えた。

「キィキィキィキィーーー!」

村人サイドのエースを封じた鬼々蜘蛛は、さらに粘着糸で村長を襲う。

「いゃぁぁぁぁぁ!」

だが、今度は動きを封じるだけではなく、そのまま村長を粘着糸で自分のほうに引き寄せた。

すると村長は、地面に爪を立てながら女々しい悲鳴を上げ鬼々蜘蛛のほうに引きずられていく。

村長は抵抗虚しく、あっと言う間に鬼々蜘蛛の目の前まで引き寄せられた。

「村長！」

「キィキィキィキィーー、ハグハグハグ」

「あぁぁ！、喰った！」

「村長が食われた！」

頭から丸呑みであった。その後景を見ていた村人たちが唖然とする。

仕方あるまい。人が化け物に食われる瞬間など、普通の人生では決して目にすることが無いだろう。

ましてや、それがよく知った知人ならば唖然ともする。

しばらくして村長を喰らった鬼々蜘蛛に異変が見られた。

わずかにカタカタと震えたかと思うと、背中の辺りにニョキニョキと何かが生え始める。

それは見る見るうちに人の形をとり始めると、先ほど喰われた村長の上半身の姿へと変った。

「村長さんだ！」

「死んで無かったのか！」

「ちっ」

「今舌打ちしたの誰だ！？」

鬼々蜘蛛の背中から生えた村長が、不気味な怖声で語り始めた。

「キィキィキィキィィィ、小ざかしや人間どもが、調子にのりおって、全員食ろうてやるわぁぁぁぁ」

村長の目は虚ろで、口からは涎を垂らし、肌はハゲた頭のてっぺんまで紫色に変色していた。

そして額には緑色の血管を何本も浮き立たせ、何故か乳首には星型のキラキラとした二ップレスを付けていた。

村長は、僅か一点を除いて亡者そのものの風貌であった。

「キィキィキィキィィィィ、貴様らの中で一番賢そうな者を取り込んでやったぞ。本体の口では人語は、言いずらくてしかたないからな～」

背中に生えた村長が、どうやら鬼々蜘蛛のしゃべりを代弁しているようだ。

「そんなバカな！」

鬼々蜘蛛の言葉に、声を抗えたのは警視総監の杉原であった。

この中で一番賢そうなのが自分ではなく、村長だと言う鬼々蜘蛛への抗議なのだろうか。

「村長さん……」

「キィキィキィキィ、あのジジイの拳は多少効いたが、それでも人間風情に遅れを取るワシではないは！」

鬼々蜘蛛はそう言うと、今度は村長の口から粘着糸を戦車の砲台の如く、四方八方に吐き散らかす。

「うわぁ！」

「ちきしょう、動けん！」

次々と村長の吐く粘着糸に捕らえられていく村人達。

そんな中、鬼々蜘蛛のドリフト攻撃で肩を痛めた雅史が、境内の隅に生えた大きな木の陰に隠れていた陽子のそばに駆け寄って来た。

「陽子ちゃん、ここはもうヤバイ、君は逃げなさい」

「でも……」

鬼々蜘蛛の粘着糸を回避しつつ、尚も攻撃の機会を狙っているタケシの背中を、陽子は心配そうに見つめた。

タケシを置いて一人で逃げるなんて彼女にはとても出来る行動ではない。

「キィキィキィキィィィ、愉快なじゃ、愉快じゃ、取り放題じゃ、絡め放題じゃｗｗｗ」

「むむむ……、春婆怒様……なぜ、約束を……」

粘着糸に動きを封じられている拳四郎が、悔しそうな表情でそう呟く。

そして目線を、神社の本堂の影で隠れている神主の方へと向けた。

その神主もまた、手にした長槍を強く握り締め、鬼々蜘蛛の暴れ回る姿を歯がゆく睨んでいた。

「何故です、早ようお目覚めあれ、春婆怒様……くぅぅぅ」

神主は、手の中にある鋼の長槍に、そう語りかけた。

一方、鬼々蜘蛛と対決を繰り広げている村人の数も、時が過ぎるにつれ、また一人、また一人と鬼々蜘蛛の粘着糸に捕らえられていく。

「キィキィキィィィィ、直ぐには殺しはせぬぞ、直ぐには殺しはせぬぞ、捕らえてから体液だけをチューチュー食ろうてやるわ！」

「にゃろう、でかい虫けらのくせに！」

「ええぃ、かくなる上は、ワシがこの手で！」

仲間のピンチを見ていられなくなったのか、物影に隠れていた神主が姿を現し手にした長槍を構えた。

「鬼々蜘蛛ぉ、ワシが相手だぁぁ！」

神主は震える足で、鬼々蜘蛛にそう叫んだ。

「んん～、キィキィキィィィ。それは、その槍は、もしや、もしやして！」

「神主さん！」

「キィキィキィィィ、春婆怒か！、なるほど五十年間ワシを封印していたと思えば、まだ目覚めてもいなかったのか。キィキィキィキィィィ、この騒ぎでも尚、姿を見せぬわけだわい！」

「カンちゃん、今は引け、逃げるんだ！」

地に転がる拳四郎が神主に叫ぶ。

「キィキィキィキィィィィ、所詮は九十九神、使い手が居なければ、ただの鉄クズじゃわい。キィキィキィキィキィィィ人間ごと、踏み潰してやるわ！」

ドドドドドッと、土煙を上げながら、本堂の前で震えながら槍を構える神主目指して、鬼々蜘蛛が突進を始めた。

「神主さん、避けろ！」

「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

神主は、突進して来る鬼々蜘蛛に対して、手に有る長槍を突き立てた。

激音が、埃や砂煙と一緒に広がる。

タケシの叫びは届かなかった。

鬼々蜘蛛は、神主を押しつぶしながら本堂の壁や扉を突き破り、その姿を境内にある照明の光が届かない本堂の奥へと、激音と共に隠れる様に消した。

村人達が、本堂に開いた大きな穴の中に視線を合わせる。

だが、中は暗い上に埃が舞い上がり、まったく様子を窺えない。

……。

……。

一瞬、皆が静まる。

「くぅぅぅ、カンちゃん……」

「糞、化け物がぁ！」

村人達の心配をよそに、鬼々蜘蛛が突っ込んだ本堂の奥は静かに沈黙を続けていた。

「どうなったんだ？」

「やったのか？」

「やられただろ……」

本堂の奥から人影がヨロヨロと歩きながら姿を見せる。

「神主さん、無事でしたか！」

「くぅぅぅ……」

血だらけで服もボロボロの神主が、長槍を杖代わりに姿を現す。

だが、神主のすぐ後ろに、怪しい大蜘蛛と背中に生えた村長の影が現れ、まがまがしく八つの目と二つの瞳を光らせていた。

「早く逃げろ神主さん！」

「カンちゃん、後ろ後ろ！」

「ぁぁぁ……」

神主はヨロヨロしながら、ゆっくり後ろを振り返ると、真後ろにいる鬼々蜘蛛と目が合ってしまう。

「キィキィキィキィィィ、ズタズタにしてやるわぁ」

もう神主は、体を震わすだけで何もできなく立ち尽くしていた。

「愚か者、何をしておる」

それは、女性の声だった。

「えっ？」

「なんだ！？」

何所からともなく聴こえて来た女性の声。

その声に聴き覚えもなく。鼓膜を揺らさず心に届いたテレパシーのような透き通った美声に、若者達は動揺をみせた。

「キィキィキィキィキィィィィ、春婆怒かぁぁぁ！？」

「うわぁぁ～」

神主の体が、手にした長槍に勢いよく引っ張られ空を飛び、本堂から境内の真ん中へと着地する。

「は、春婆怒様……か？」

神主は、手にした長槍を離すと、その場にヘロヘロと腰を落とす。

だが、手を離された長槍は、尚も真っ直ぐに立っていた。

「あの槍、ちょっと浮いてない……？」

陽子が槍の足元を指差す。

「どう言う事だよ……」

陽子の指差す先を雅史が見ると、僅か十センチ程度だが確かに浮いていた。

「春婆怒様だ！」

「お目覚めだ、春婆怒様のお目覚めだ」

村の老人達が、宙に真っ直ぐと立つ長槍に、熱い視線を飛ばしながらも口々に『春婆怒』の名を語る。

だが、老人達とは別に、憎しみの表情で鬼々蜘蛛が宙に浮く長槍を睨みつけた。

「キィキィキィィィィィィィ」

突風。

「風？」

何所からともなく風が吹くと、境内の周りの木々の枝を揺らす。

鬼々蜘蛛が、黒雲と共に現れた時にも似たような風が吹いたことをタケシは思い出す。

「あの槍から出ているのか、この風は……」

間違いない、タケシの感じたとおり、この風は長槍から出ている。

そして長槍が、一瞬だが目をくらますような強い風を放つ。

皆が風の勢いで目を細め、一瞬だが視界を失う。

「村の衆、約束、今こそ果たすぞ」

その声に引かれ細めた目を開くと、そこには既に長槍は無く、代わりに一人の着物姿の女性が立っていた。

髪は長く金色、切れながの美しい瞳、透けるような白い肌、大奥にでも居そうな裾の長い和風の着物を着た女性。

一言で表すならば、絶世の美女。

「あれが春婆怒！」

<　妖力共有　>

五十年前。

場所は民家の直ぐ裏にある山中。

道沿いでは無いが、まだ草木が多い茂る季節ではない為、それは直ぐに発見された。

数人の村人がたいまつやランプを手に、それを厳しい表情で取り囲んでいた。

それとは、太い木と木の間に、グルグルに包帯を巻くように作られた大きな繭。

繭の形は細長くエジプトのミイラのような形をしており、中身は人間であることを、光を照らしていた村人達にも悟らせた。

一人の村人が、腰にぶら下げていた鉈を取り出すと、それで巨大な繭を切り裂く。

そして中身を確認するために切り口を両手で押し広げた。

村人達が切り口から中を覗き込むと、中から行方不明になっていた若者の姿を見つけた。

だが、その姿はガリガリの骸骨の様に変わり果てており、肌も乾

燥した本物のミイラのようになっていた。

「ちきしょう……、五平だ、まちがいねぇ」

「こんな姿になっちまって……」

「これで六人目だ……」

変わり果てた仲間を見つけた村人達が、愚痴るように呟きながら両手を合わせて拝む。

その中に、まだ若き日の拳四郎が混ざっていた。

「鬼々蜘蛛に体液だけ吸われたんじゃ……」

「ヤツは、どこに行きやがった……」

「分からねぇずら。今、皆で村中を探し回ってるずら」

拳四郎が山の中腹あたりから村を見下ろすと、村人達が手にしたタイマツやランプの光があちらこちらで動いていた。

山奥のド田舎である春婆怒村には、まだ殆ど電気は通っておらず、外灯も少ない為、その光は一層目だって見えた。

「ワシらも戻ってヤツを探すぞ」

「ああ」

「牛太、真二……五平の亡骸をたのむ……。ワシは鬼々蜘蛛を叩く」

「わかった。……拳四郎、一人で無理するなよ」

「……」

拳四郎達は、村人二名を残して暗く道も無い山の斜面をタイマツの光で照らしながら降りていく。

山を降りた拳四郎達は、とりあえずことの事態を報告しようと村長邸を目指して歩き始めた。

其処へ一人の村人が血相を変えながら大声で拳四郎達を呼び止めるように走ってきた。

「拳四郎、大変だ！、はぁはぁはぁ」

「何か有ったのか！？」

拳四郎の持つ光を頼りに夜の暗闇を走ってきた村人は、呼吸を整えると村の神社の有る山を指差しながら話し始めた。

「居やがった、鬼々蜘蛛だ、あんにゃろう神社の境内に巣くってやがった！」

拳四郎は、走ってきた村人の話が終わる前に走り出していた。

他の村人達も慌てて拳四郎の後に続いて走り出す。

しかし、人間とは思えない足の速さで拳四郎は、他の村人達を引き離して行った。

そして暗い夜の田舎道を拳四郎は走り抜けると、神社へと続く心臓破りの急斜面な神社の階段をノンストップで駆け登っていった。

拳四郎が階段を駆け上ると、神社の境内に集まる大勢の村人達の背中が見えて来た。

その村人達が持つ明かりが本堂の方を照らしており、何やらただ事ではないのか、明らかにざわめき立っていた。

「鬼々蜘蛛は何処だ！」

境内に入った拳四郎は、目の前の村人達を掻き分け先に進む。

「何じゃこりゃ」

村人達を掻き分け最前列に踊り出た拳四郎の目に入ってきたもの。

それに百戦錬磨の空手の達人が、口を空けて呆然とした。

それは、生まれて初めて目にする異常な光景。

境内では、あちらこちらで傷付いた村人達が何人も横たわり、そして中央で巨大な黒蜘蛛と、身長が二メートル以上ある巨人とが戦っていた。

この時代の活動映画では、まだこのようなＣＧも特撮も少ない時代。拳四郎は目の前の光景に一瞬、状況を把握できずにいた。

巨大な黒蜘蛛は、村人ら六人を喰らった犯人だが、もう一方の巨

人の存在に拳四郎も驚き口をパクパクさせていた。

「お……鬼……」

そして拳四郎の口からやっと出た言葉がそれであった。

その姿は、額に二本の角が生えている鬼。

身長は二メートル半有り、顔は鬼の形相その物だった。

ボサボサの長い髪、堀が深く飛び出しそうなぐらい見開いた丸い眼光、太く長い手足がビリビリに破けた着物から伸びていた。

そして手には、鋼の長槍を持っている。

「手に有るのは、春婆怒様か?!」

拳四郎は隣にいる村人に問いかける。

大蜘蛛と戦う鬼の手には拳四郎が言う通り槍が握られており、鬼のサイズに合わせて其の槍も巨大化していた。

「ああ、だが……」

拳四郎の質問に隣の村人が答えるが、何やらバツの悪い顔をして拳四郎から目をそらす。

拳四郎は、村人の仕草の意味が分からず首を傾げた。

そして鬼々蜘蛛と鬼の戦いに視線を再び戻した拳四郎が、何かに

気づいた。

「あっ、あの着物！」

拳四郎は、隣の村人が見せたバツの悪そうな顔の理由にやっと気付く。

あの巨大な鬼が着ている破けた着物、その着物の柄によく覚えがあった。

「あの鬼、……まさか、お鶴なのか……？」

顔を青くして拳四郎が口にした名前。

『お鶴』、その名は拳四郎の若妻の名前であった。

拳四郎の顔が歪む。

「そ……そんな……」

そして両拳を強く握りしめて、辛く悔しそうに表情を顰めながら俯いて顔を上げなかった。

「ワシらは……、止めたんじゃぞ」

「なんて事を、早まりおって……、くぅぅぅ」

「この村で、素質の一番高いのは、お鶴さんだと春婆怒様もおっしゃっておったが……、失敗じゃ、鬼化してもうた……」

拳四郎が、自分の愛した妻を最後に見たのは、この時である。

その姿は、妖力共有に失敗した、鬼の姿であったが。

「春婆怒ォォォォ、キィキィキィキィキィィィ」

鬼々蜘蛛が、自分を五十年前に封印した張本人を前にして奇声を上げる。

それを無視しながら金髪の美女は、ゆっくりと周りの状況を見回した。

切れ長の魅惑的な視線が、先程まで戦っていた男達を物色するように眺めていくと、その視線を追いかけるように怪しい風が吹いていく。

「愚か者どもめ、また先走りおったな」

村の老人達が金髪美女の言葉に、古き記憶の中からお鶴のことを思い出す。

迫り来る鬼々蜘蛛に決着を急ぎ、鬼と化してしまった女性の名前を。

「は、春婆怒様が、約束の時に遅れて目覚めたからです……」

「ふっ、女子（おなご）には、いろいろと支度時間がかかるものじゃ」

「うんうん」

春婆怒の言い訳に、陽子だけがうなずくが、全ての状況を理解して頷いている訳ではない。

「それにしても皆の衆、派手に負かされている様じゃのぅ」

「だから、貴方が遅いから……」

「しかしじゃ、わらわの五十年後の目覚めまでに、きっちりと約束は守っておったようじゃのぉ」

春婆怒は、そう言いながら村の若者達を再び切れ長の目で舐めるように見回していく。

「心技体、そして素質、かなりの高品質じゃのぅ」

「しかし、すべての条件が果たされてなければ……」

拳四郎が、五十年前の自分の妻を思い出す。

彼女は、体の弱い女性だったが、素質だけは高かった。

しかし、妖力共有に失敗した。

危険は承知で春婆怒を手にした事であろう。

だが、鬼に成り、鬼々蜘蛛と戦い、そして敗れた。

しかし傷つき逃げようとする鬼々蜘蛛を、最後の妖力で春婆怒が封印し、そして春婆怒もまた眠りに付いた。

鬼から人の姿に戻ったお鶴も、其の晩の内に息を引き取った。

それが五十年前の中途半端な決着であり、今の戦いへと続いている。

「五十年後のこの場所、この刻に、わらわも鬼々蜘蛛もまた目覚めるであろう。その時までに、強き技、逞しき体、素晴らしき心、そして素質ある極上の若者を育てよ。次こそこの妖怪を滅ぼすぞぇ」

春婆怒は、そう言い残し槍の姿で眠りに付いた。

村人達は春婆怒の言葉を信じ、七人の仇を討つ為、子から孫まで徹底とした武人としての教育を果たしてきた。

春婆怒が、長い着物の裾を引きずりながら歩み始める。

その歩みの先にはタケシが居た。

「む……」

「ほほぅ、高品質じゃ、高品質じゃのぉ。この者が一番の上物の肉体じゃ。わらわとの相性もよさそうじゃのぉ～」

鬼々蜘蛛にやられ負傷した者や、粘着糸に絡め取られ未だ倒れこんでいる者達の間を進み、タケシの前へと立つ春婆怒。

そして春婆怒の美しい顔がタケシの鼻先まで近づく。

「御主、わらわと交じり合わぬかぇ？」

タケシの顔に近づいた美しい顔の口元がうっすらと笑いながらそう言うと、タケシは間の抜けた返事を返す。

「えっ？」

その様子は、まるでタケシを誘惑しているように周りには見えた。

春婆怒の言葉にうろたえるタケシ。

「ちょ！、だぁめぇぇーーーーーーーーーーーーーーー！！」

しかし、その言葉に強く反応し、大声を上げたのは陽子だった。

「ちょっとーーー、何よ貴方！。いきなり現れてタケちゃん誘惑するなーー！」

陽子がそう言いながら二人の間に割って入ると、春婆怒を押しのけるようにタケシから引き離す。

「小娘ゃ、誘惑などしておらぬ、わらわと協力せぃと言ってるのじゃ」

「協力？」

「騙されちゃ、騙されちゃ～ダメだぞタケちゃん！」

「騙しなぞせぬわぁ」

「まあ落ち着け陽子……」

「そうじゃ、わらわと協力して、あの妖怪を退治しようと言っておるのじゃ。御主がこの中で一番の素質を秘めておる」

「一番の素質ってなんだよ？」

「わらわと妖力共有の素質じゃ」

そう言うと春婆怒は、強風と共にまた槍の姿へと変わる。

「さあ若者よ、わらわを手に取り、こう叫ぶのじゃ、『変身、妖力共有』と」

「タケちゃん……」

「……」

妖力共有の意味を、老人達は知っている。

失敗をしたら鬼になることも……。

そして、鬼になれば理性を失い、目的をはたすか、死ぬまで鬼のまま狂い続けることも。

そう、お鶴のように……。

返事を待つようにタケシの目の前で浮く鋼の長槍。

隣に居る陽子が、心配そうな目でタケシを見ていた。

タケシの表情が決意を決めたのか引き締まる。

そしてタケシは、長槍に手を伸ばした。

「タケちゃん、ちょっとぉ～……」

そして、がっしりと鋼の長槍を握り締めた。

タケシは、何が何だか分からなかった。

だが、今は春婆怒の言うとおりにすることが、運命なのかもと感じていた。

今までこの村で過ごしたこと。

祖父から学んだ空手も全てが、この日の為のものと感じられていた。

自分だけではない、他の皆もそうなのだろう。

これは、定め。

そして皆を代表して今、自分の手の中に長槍がある。

それは、本堂に奉られていた鋼の長槍。

春婆怒の長槍。

全てを決意しなくてはと思う。

まっすぐ立つ鋼の長槍を掴んだタケシは、大きく一度呼吸を整える。

そして、春婆怒に教えられた言葉を力強く口にした。

「妖力共有・変身っ！」

タケシの決意のこもった言葉と共に、長槍から突風が吹き出る。

その強風は緑色の妖力を含み、タケシの周りを竜巻のようにグルグルと回り始めた。

村人達が、眩しい光をみるように、其の風に目を細めていた。

そして、緑色の妖風はタケシの体に纏い付く様に張り付くと、黒緑の鎧のような筋肉に変わり全身を包んで行く。

あっと言う間にタケシの全身は、黒緑の筋肉の様なプロテクターに包まれていた。

残りの緑風は、タケシのヘソのあたりに渦を巻きながら吸い込まれていく。

「タ、タケちゃん……！」

「な、なんじゃこりゃ！？」

タケシは、自分の両腕を見ながら変貌した体に驚く。

「成功か！、妖力共有に成功したのか！」

「あれが、真の姿！！」

村の老人達がどっとわいた。

<　決着　>

「キィキィキィキィキィィィーーーーーー」

変身したタケシを見て鬼々蜘蛛が襲いかかる。

陽子もこちらに走ってくる鬼々蜘蛛を見るや否や、先程まで居た雅史の場所へと逃げ出していた。

「タケシとやら、戦いかたは御主の気とわらわの妖力を共有するさいに、記憶の一部を送ったから分かるよのぉ」

「あ、ああ、分かる、良くわかんないが良くわかるぞ……。催眠学習みたいだ……、知らないことが、はっきりと分る」

春婆怒とタケシの声が、変身した一つの体の中から聴こえてくる。

「キィキィキィキィキィィィィィ」

黒緑色の甲冑。まるで、未知の生き物のようにも見える姿になったタケシが、拳を天に向けて振り上げた。

「おりゃ！」

鉄板に、岩を落としたような音が響く。

「キィィィィーーー……！！」

タケシは、振り上げた拳を、鬼々蜘蛛の頭にハンマーでも叩き付

けるように振り下ろし、突進して来た巨体を、あっさりと止めてしまう。

「な、なんちゅうパワーだ……」

変貌を遂げた孫に対して、拳四郎が目を丸くして驚く。

その一撃は、確かに拳四郎のパワーを超えていた。

「キィキィキィキィィィィ!!、コザカシヤァァァァ!!」

だが、その一撃にも怯まない鬼々蜘蛛。

すぐさま二本の前足でタケシを襲う。

「はっ、ちょいや!」

肘打ち、チョップ。

タケシは、二つの攻撃で、素早く鬼々蜘蛛の襲い来る前足を払いのける。

そして、鬼々蜘蛛の顔面を目掛けて、全身を大きく捻っての中段廻し蹴りをぶちかました。

「キィェェェェェェ!!」

鬼々蜘蛛の忌まわしい顔面が変形しそうなほどの廻し蹴り。

それを喰らった鬼々蜘蛛は、その巨体を数回転スピンさせながら

後退していく。

「凄い、凄く強いな……」

逃げ帰ってきた陽子に対して、木の影で雅史がボソリと言葉を漏らす。

確かに誰の目にも、今のタケシの強さは人知を超えていた。

「ちっ、何て硬い皮膚してんだ、あの蜘蛛野郎。幾ら殴っても致命傷まで与えられないか……」

「ええぃ、わらわを実体化させい、使い方は分かるはずじゃろ」

「いや、一応俺、空手家なんだけど。空手家ってのは空の素手で戦うから空手なんだけどよ」

「今はそんなことを言ってる場合ではなかろうて！」

「ちっ、まあ、しゃあねえか……」

タケシが手のひらを前に突き出す。「ハルバード、ウェポンモードッ！」

伸ばした手のひらから、あの緑風が再び吹き出る。

それは、鋼の長槍に一瞬で変わると、タケシの目の前で浮いていた。

タケシは一瞬で現れた長槍を、伸ばした手で強く掴み寄せると、

軽やかに槍の達人の如く演武を見せる。

「おおぅ、俺、決まってる！」

素晴らしいき槍の演武。最後は槍を片手で脇の下に挟んでピシッと決めた。

「あやつ！、空手一筋のはずが、何時の間に槍術を得とくしたのじゃ！」

拳四郎の言うとおり、タケシは槍術など習った事など無い。これは全て、春婆怒の記憶を操る術のなせる技。

妖力共有している間のみ得られる記憶の操作妖術である。

「何か俺ってばスゴ！」

「これが妖力共有なのじゃ」

「そんな事はどうでもいい、まずはあの蜘蛛野郎を叩きのめすのが先か！」

タケシは、槍を構えたまま鬼々蜘蛛に走り寄る。

「派手に行くぜ！」

「キィィィィィィィーー！」

攻め入ったタケシが、幾度と鬼々蜘蛛に槍を振るう。

すると鬼々蜘蛛の硬い皮膚が、次々と切り裂かれ、それに合わせて鬼々蜘蛛は悲鳴を上げながら後ずさりを始める。

切り付けられた鬼々蜘蛛の傷口からは、気色の悪い紫の体液が飛び散り、背中から生えた村長の顔も苦痛に歪む。

確実に効いている。

鬼々蜘蛛のダメージの大きさは、見ている者達にも見て取れた。

「タケちゃん、やっちゃえ、やっちゃえ！」

陽子の声援が飛ぶ。

しかし、鬼々蜘蛛はノミのような跳躍で、鳥居の上へと跳び逃げた。

「キィキィキィキィーー、よくもよくも、シャャャーーーーーッ！」

鳥居の上へと退避した鬼々蜘蛛は、村長と本体の二つの口から、ダブルで粘着糸攻撃を発射する。

「おっと、疾風防壁！」

ダブル粘着糸攻撃を防ぐために、タケシは技の名を叫びながら槍を真横に振るう。

すると目の前に、緑風の壁が吹き上がり、鬼々蜘蛛の吐いた二つの粘着糸を切り裂きながら弾き飛ばして行く。

「キィキィキィキィィィィィーー！」

「この蜘蛛野郎、バカみてえに何時までも高い所に上がってんじゃあねえぞ！」

そう言いながらタケシは、可憐な長槍の演武を見せる。

すると槍の刃先に緑風の妖気が、どんどんと集められていった。

「くらえっ、烈風槍飛弾！」

緑の妖気が集まった槍の刃先を、鬼々蜘蛛に向けて突き立てると、そこからドリルのような緑風の弾丸が目標に向けて発射された。

そして、破壊的炸裂音が空気を揺らした。

「キョェェェェーー！」

緑風の弾丸が鬼々蜘蛛に命中すると、その衝撃が鬼々蜘蛛の体全身に激痛と変わって広がる。

鬼々蜘蛛は、悲鳴を上げながら鳥居から地面へ落下した。

「キィキィキィキィィィィ、ゆるさんぞォォォ！」

地面に落ちた鬼々蜘蛛は、完全に怒りが頂点に達したのか、何も考えずにタケシに向かって突進を始めた。

タケシに向かって怒りをあらわに突進してくる鬼々蜘蛛。

タケシは手にしている槍を、軽く空に投げて逆手に持ち替えると、槍投げの構えを取る。

「影槍呪縛！」

そう叫ぶタケシは、狙いを定め、槍を鬼々蜘蛛目掛けて投げつけた。

空気を切り裂きながら槍が飛んで行く。

「フゥキィィィィィィ！？」

タケシの投げた槍は、村長の胸元にザクリと刺さり、鬼々蜘蛛の突進を止めた。

「キィィィィィ、何じゃあこの槍は！？……動けぬ！？」

鬼々蜘蛛が突進を止めたのは、槍が刺さった痛みではなかった。

むしろ痛みはまったく無かったが、槍が刺さったことで、全身が痺れるように固まり、体の自由が利かなくなっていた。

そして胸に刺さった槍を、引き抜こうと村長が震える手を伸ばすが、槍はまるで幻の如く掴むことすら許さずすり抜けてしまう。

「そろそろ終わりにしようぜぇ」

「キィキィキィ……」

タケシは両拳を強く握りしめ、股を大きく開き、ゆっくりと力強く腰を落とし始めながら、気合を貯める声を上げた。

「我が力は勇気なり！」

力を込めるタケシの周りに、緑風が現れる。

「我が技は正義なり！」

その緑風は、タケシを中心にグルグルと回り始め、やがて竜巻に変わって空へと伸びて行く。

「ふぅぅ、なんと言う……まさに神風！」

未だ粘着糸で自由を奪われている拳四郎が、その光景を見てそう言った。

「キィィィィーーーー！！」

「タケちゃん！」

「おおっ、春婆怒様ぁ！！」

その竜巻を目にする全員が、今、クライマックスを迎えようとしていることを感じ取った。

ただ、鬼々蜘蛛だけが自由の利かない重い体を震わせながら、その竜巻に宿る妖力に、一人（一匹）だけ死の予感を感じて身を震わせていた。

「力と技で悪を滅する。跳うっ！！」

竜巻の中心に居たタケシが、掛け声と共に空をめさしてジャンプする。

まるで竜巻に吸い上げられるように飛び上がって行ったタケシが、竜巻のトンネルを進んで天に昇って行く。

そしてタケシの体が竜巻の頂点に達すると、竜巻の上部がタケシと共に向きを変えて、地上にいる鬼々蜘蛛に狙いを定める。

「キィィィーー……、うそぉん……」

「堂本流超人空手奥義、風神飛翔脚！！」

向きを変えた竜巻は、飛び蹴りの構えをしたタケシを中心に、巨大なドリルのように鋭く回転しながら鬼々蜘蛛目掛けて突っ込んで行く。

「そんな奥義、無いわぁ！」

本家の拳四郎が言うのだから無いのでしょう……。

「いけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

「キィキィキィキィィィィィィィッ！！」

それは、この村に起きた五十年間の因縁を、締めくくるにはちょうどいい爆音であった。

竜巻を纏ったタケシの飛び蹴りが鬼々蜘蛛に命中すると、空から飛んできたミサイルのように爆発して、大きな爆炎を派手に上げた。

「むおっ！」

「きゃ！！」

周りの全員が、爆炎の灼熱に顔を歪めた。

だが、その爆炎が、一時停止を掛けられた映像のようにピタリと固まる。

「なんだ！？」

「と……止まった？、炎が凍りついた様に止まってる……」

陽子が言った。

その次の瞬間、固まっていた爆炎が、今度は巻戻しをする映像のように萎んで行く。

「中心に吸い込まれているんだ……」

誰が言ったか、その言葉のどおりであった。

爆炎の中心に立つ、春婆怒と妖力共有したタケシの体に、爆炎は吸い込まれて行く。

タケシが、その黒緑の甲冑で全ての爆熱を吸い尽くすと、そこには巨大でまがまがしい鬼々蜘蛛の姿は無くなっていた。

そして、足元に白いブリーフ一丁姿の村長がぐったりと横たわって居るだけだった。

<　決着　>（後書き）

ラ○ダーキックじゃないよ！ｗ

<春子・ハルバード>（前書き）

誤字にも負けず、脱字にも負けず、ここまで読んでくれている方々に、感謝感謝感謝！ｗ

<　春子・ハルバード　>

春婆怒村での一件から三日が過ぎていた。

タケシを置いて一人で春婆怒村から実家に帰宅していた陽子は、何やら不機嫌な様子であった。

「陽子、タケシ君まだ帰ってこないのかしらね～」

「ん～、まだ帰ってこないね……」

喫茶店の開店準備を行う陽子の母親がそんな会話を娘にしていた。

陽子は、両親の経営する喫茶店の開店準備を手伝っている最中であった。

台拭きでテーブルを拭きながら陽子は、母親の何気ない会話につまらなそうに受け答える。

タケシは、鬼々蜘蛛との一戦後、全身が強烈な筋肉痛で立つこともままならなくなり、祖父の居る実家で寝たきりになっていた。

「妖力共有は、使い手の体に極度の負担が掛かるからのぅ～。まあ、最初は皆が痛いものじゃ、そのうちなれるじゃろうてぇ」

陽子は、人の姿をした春婆怒が妖力共有の後遺症を爽やかな笑顔で説明していたことを思いだす。

あの女の顔を思い出し、更に陽子の機嫌が悪くなる。

あの春婆怒と呼ばれる金髪の女を、陽子の女の勘が、自分の敵と知らせていた。

そんな陽子は、脳裏に浮かぶ春婆怒の顔を掻き消すようにテーブルを拭く手を早める。

「なんかムカツク、あの槍女……」

「陽子ちゃん何か言った?」

「なんにも〜、独り言〜」

カウンターの中を掃除している母親の雪絵が、いらつきを隠せない娘を笑顔で見守る。

本来なら陽子も春婆怒村に残って、動けないタケシを看病したかった。

だが、実家の喫茶店やちびっ子空手教室の手伝いをしなければならなく、予定以上の滞在も続けられずに一日だけタケシの看病をすると、仕方なく一人で帰宅したのである。

「それにしても、今年は何日も動けなくなるぐらい可愛がるとは……。先生も相変わらず厳しいな」

カウンターの奥は、喫茶店の厨房をかねた桜木家の台所となっている。

そこから中年男性の渋目の声が聴こえてくると、大柄の紳士風の顔が覗かせた。

だが陽子は、父親と思われる男の話には、受け答えをせずにテーブルを拭き続けた。

おそらく、タケシが動けないのが、祖父との組み手が原因だと思っている父に対して、槍と合体して巨大な化蜘蛛と戦ったからと説明した所で、信じてもらえないだろうと考えたからである。

陽子は、こんな話を続けても仕方ないと判断したのであろう。

「毎年毎年、あの空手の鬼とガチンコ組み手とは……。父さんも、堂本先生の家に住み込みで弟子入りして、殴り倒されていた頃を思い出してくるよ」

陽子の父親は、タケシを自分の若い頃に照らし合わせるかのように思い出を語る。

そして、自分の短い顎鬚をゴツゴツした手で撫でまわし、娘の機嫌を遠目に伺う。

「お父さん、いいからゴミ捨てて来てよ……」

「はい……」

陽子は、冷めたトーンで店内の隅にある大きなゴミ袋を指差しながら怖い顔をした。

陽子の父親である銀は、娘に脅えるように背を丸めカウンターから出てくると、ゴミ袋を軽々と持ち上げた。

「かあさん、最近陽子は、ご機嫌斜めだな……」

「タケシ君が帰ってこないからよ」

「向こうでケンカでもしたのかな?」

「さぁ～」

「お父さん、ゴミ捨ててきて!」

「はい!!」

陽子の父は、娘に怒鳴られるとブツブツ言いながら手にしたゴミ袋を持って店を出ようとする。

娘に顎で使われ頭の上がらない父親だが、身長は１８０を超える長身で、ぶ厚い筋肉バストを持った逆三角形の上半身をしている。

そして、両腕は丸太の様に太く引き締まり、拳はまるで蟹の甲羅の如くごっつい物だった。

四十歳を超えて、これだけの肉体を維持している上に、空手超人と名高い堂本拳四郎の愛弟子の一人なのだ。

本来ならば、五～六人のチンピラ程度を、瞬殺できるほどの実力をもった人物でもある。

その空手の達人が、情けなくも娘に言われて、ゴミ袋を片手に店の入り口から出ようとした時である。

店の前を見慣れた一台のバイクが通り過ぎ、隣に有る古いアパートの前にブレーキ音を立てて止まるのに気づく。

「おぉ、今のタケシ君のバイクだな」

父親の声に反応して陽子はテーブルを拭く手を止めた。

その顔は、本人も気が付かないうちに満点の笑顔に変わり、若々しく輝かせていた。

先程とはまったくの別人のような表情である。

「あらあら」

娘の笑顔に、母親の雪絵だけが気づき、笑顔を釣られたように作る。

娘の乙女心に母親は、きちんと気が付いているようだ。

「陽子、タケシ君がこっちに来るぞ」

「本当!?」

父親の言ったとおり、しばらくすると喫茶店の入り口が開き、カランカランと扉の鐘をならす。

「ただいま～ッス」

「おかえり〜〜タケちゃん〜〜」

「タケシ君お帰り」

我が家にでも帰って来たかのような一声に、家族を迎えるかの如く全員が答えた。

「タケちゃん〜、もう体は大丈夫なの〜?」

「おう、ばっちり完治したぜ」

タケシの体を心配していた陽子が、甘える声を出して問いかけると、小走りでタケシの元へと足を進めた。

それに答えるようにタケシは、腕を曲げて力瘤を作ると、完治をアピールして見せる。

それを見た陽子の顔がポッとした表情に変わり、和やかな笑みを見せた。

「小娘や、御主も元気だったかぇ」

「へっ?」

陽子は、タケシの後ろから自分に掛けられた女性の声に、目を丸くした。

陽子にとって其の声は、全てを台無しにする雑音に聴こえた。

「んっ？、どちらさまですか？」

声の主に疑問の問いを掛けたのは、カウンターの奥に居た雪絵だった。

「槍女！」

陽子が、母親の質問に不正解の答えを大声で叫ぶ。

槍女と呼ばれた女性は、喫茶店の入り口前に立つタケシの横をすり抜け、店内に入ってきた。

春婆怒村では、昔のお姫様か、大奥の住人のような古風な着物姿だった春婆怒だが、今は白地に赤いハイビスカスが鮮やかなチュニックワンピースを着ていた。

どこから見ても違和感の無い、普通の若い外人女性の容貌をしていた。

否、普通と呼ぶには、余りにも美しすぎるかもしれない。

パリコレにモデルとして参加できそうな風貌に、陽子の父親である銀も目を丸くさせていた。

ただ、もうちょっと胸が有ればパーフェクトであると思いつつ。

そう、春婆怒の胸は、お世辞にも大きいとは言え無い。むしろ、俎板と言っても良いだろう。

その事を本人が気にしているかどうかは、周りの物に分からない

話ではあった。

「槍女とは無礼ぞよ、小娘や」

春婆怒は、スリムな腰元を通り過ぎてキュートなピップの下まで有る蜂蜜色の長い髪を揺らしながら、パリコレの一流モデルのようなウォーキングで喫茶店の中を歩いて回る。

店内に置かれた何気ない物一つ一つが彼女には珍しく映り、見て回っている様子だ。

春婆怒本人は意識した歩き方ではないのだが、自然体のウォーキングとしては余りにもセクシーすぎた。

それを見ていた桜木夫妻が、何処にでもある普通の作りの喫茶店には、場違いの存在感と思ったのか、その春婆怒を見つめていた。

ふと銀が我に帰る。

「タ、タケシくん、こちらの美人さんはどちら様ですか?」

陽子の父親が、春婆怒のことを目じりと鼻の下をゆるゆるにして質問した。

すると陽子と雪絵が、瞬時でギロリと睨みを利かせて銀を見る。

「あ〜っと、これ『春子・ハルバード』って言って、フランス人と日本人のハーフって言う設定で行くらしい」

「春子・ハルバード?、春婆怒じゃないの?。それに何よ、ハーフ

って設定で行くってさ、何事よそれ！？」

春婆怒を指刺して紹介をするタケシに、陽子も春婆怒に指を刺して強めの声でツッコミを入れる。

「タケシがお世話になってる知人殿かぇ。わらわは春子・ハルバードじゃ。しばらくタケシの住いに厄介になる、タケシ共々宜しく頼み申すぞよぉ」

陽子のツッコミを無視して、春子と紹介された春婆怒が、自分の口から自身に満ちた高飛車な口調で改めて自己紹介をした。

「ちょっーーーーーーーーーーとまてーーーーーーー！！」

陽子がひときわ甲高い声で、全ての会話の停止命令を出す。

「あんた春婆怒でしょ、設定って何よ！。それよりタケちゃんの所に厄介って、えっ、えっ、ど～～～ゆうことよ、何なのよ！！！」

「流行の言葉に言い換えると、わらわとタケシが、同棲生活する意味かのぉ～」

「どっ、同棲！！！」

その言葉の意味に陽子が狼狽した。

「タケシ君、しばらく会わないうちに随分とやるようになったね。こんな美人を連れ込むなんて、おじさんビックリだよ」

「おとうさん、そうじゃないでしょうが！！」

「そうよタケシくん、陽子はどうするの?。おばさん、二股は良くないと思うの。ましてや片方は自分の娘ですからねぇ」

「おかーーーさんもそうじゃないでしょ!!!」

「小娘はタケシと夫婦(めおと)なのかぇ?」

「め!、夫婦って!!、いゃ、まだ、ほら、私たちまだキスすらしたこと無いし……結婚なんて、まだ早いと思うし……ねぇ〜」

陽子がモジモジとデレデレする。

「タケシ君は思ったより奥手なんだな、陽子とはもうキスの一つや二つ、私らに隠れてしてると思ったのだが。おじさんはおとうさんと呼ばれても良いと思ってるんだがな〜」

「おばさんもおかーさんって呼ばれたかったのに、二股かけるような男性には娘を任せられないわね〜」

「おかーさん、まだ二股ときまってないでしょ。タケちゃんと槍女の同棲生活がスタートした訳じゃあないんだし!」

陽子は一人、四人の中央でアタフタと忙しくしている。

「雪絵さん、モーニングコーヒー入れてもらっていいですか?」

「はいはい、ちょっとまってね」

タケシがテーブル席に座ると、雪絵が笑顔でコーヒーメーカーの

準備を始めた。

「いや、わからんぞ陽子、お前の知らない間に二人は燃え上がるような甘い甘い夜をすごしていたのかも知れんぞ。くぅ～～、おとうさん羨ましい！！」

陽子の父親の顔面と後頭部に、濡れ雑巾が勢い良く投げつけられた。

すると雑巾サンドイッチ状態の頭部から鈍い水分の音が二つ同時に響く。

母と娘のタイミングの合った、ダブル雑巾攻撃だ。

「ちょっとタケちゃん、どう言う事かちゃんと説明してよ！」

「え～と、確か……」

タケシはぶつぶつ言いながらGパンのポケットから、茶色い封筒を取り出し陽子の父親にさしだす。

「じいちゃんからの手紙です」

それは祖父拳四郎からの手紙。

「ん、なにかな」

陽子の父親は封筒を受け取ると、口を切り、中身の手紙を読み始める。

前略、桜木　銀へ

訳有って孫と一緒に、春子・ハルバード嬢を、御主の所で預かってもらいたい。
詳しい理由は聞くな。これは師匠としての命令だ。

断ったら、一家皆殺しにする。
あとは頼んだ。

堂本拳四郎より

「……」

「お父さん、手紙なんて書いてあるの？」

陽子が手紙の内容を覗き見ようとするが、銀は大きな両手で手紙を挟み隠すように閉じた。

「タケシくん、事情は良くわかった。春子さんって言ったかね、この小娘の父、銀と申します、こっちは妻の雪絵です」

「うむ、よろしゅう頼むぞよぉ」

「ちょっとお父さん！」

「タケシ君、はい、コーヒー入ったわよ」

くづつ

<春子・ハルバード　>（後書き）

「春子さ～ん」

「なんじゃ、タケシャ」

「もの凄く寝ずらいんだけど」

「なぜじゃ？」

「いゃ、寝ようと思ってる人の枕元に正座されてると、ちょっとな……」

「気にするな、思う存分寝るとよい」

「気になるわ！」

「仕方あるまい、わらわは眠らんのじゃから」

「だからって、人の枕元に座り込むなよ」

「じゃあ、どうしろと？」

「とうしろもこうしろも、枕元に座るの止めてくれない？」

「んー、しかたないのぉ」

「わかってくれるか」

「じゃあ、ウェポンモードで壁によっ掛かっておるぞ」

「ああ、それなら気にならないかも」

「どっこいしょ……。これでいいかえ？」

「おう」

「……」

「……」

「……」

「春婆怒……」

「なんじゃ？」

「倒れてこないでね……」

「心しておく」

「……」

「……」

九十九　第二話　外れ鬼（前書き）

二話スタートでーす。

前半、ダラダラいきまーす＾＾

九十九　第二話　外れ鬼

人工的に作られた大きな池や、広い芝生や人工林が広がる大きな公園。

この公園は、青い芝生の敷き詰められた広場も多く、休日の昼間にでもなれば子供連れの家族やカップルが、ピクニックなどに訪れ、明るく活気の溢れる公園に顔を変える。

だが、今は夜明け。

薄暗く、空気も冷たい。

昼間の賑やかさとは打って変わって人気が無い時間帯である。

もう少したならば、ジョギングやペットの散歩などをする近所の住民の姿が、ちらほら見られる頃だろう。

しかし、まだ人気はまったく無い。静かなものだ。

こんな静かな早朝の公園が、大好きな人物がいた。

毎日ジョギングで、この公園に一番乗りする中年男性。

まだ誰も居ない大きな公園の遊歩道を、独り占めするかの様に走る。

男曰く、それが何よりも気持ち良いジョギングだそうだ。

そして、その中年男性は、何時もと変わりなく、早朝の公園に一番乗りで入って来た。

赤と白の鮮やかなスポーツウェアーに、黒いキャップを被りスポーティーなサングラスを掛けていた。

男は誰も居ない公園の遊歩道を、のびのびと自由にジョギングする。

口からは白い息を吐き、まだ買ったばかりの新しいジョギングシューズでレンガ造りの歩道を軽やかに蹴り続けた。

実に気持ち良い。男は清々しい表情でそう思った。

だが、今日は何時もとほんのちょっとだけ違う事が起きた。

遊歩道を走る中年男性は、背もたれのある木製のベンチに、何かが置いてあるのに気付く。

男性とベンチとの距離が縮まると、それが何かとサングラス越しにもはっきりと分かった。

それは、丸い大皿。

料亭などで使われる赤や青の柄が鮮やかな和風の大皿であった。

中年男性は、若干だが目を丸くさせていた。

違和感の溢れる光景。

ベンチの上には丸い大皿が置いてあり、それには何やら刺身のような物が綺麗に盛り付けられてある。

更に虫が付かないように、丁寧にも透明なラップで包まれていた。

中年男性は、ベンチの前で足踏みをしたまま立ち止まると、その丸い盛り皿をじっと観察する。

刺身は魚ではなく肉のようだ。しゃぶしゃぶ用なのか、透けるように薄くスライスされており、大皿の柄がうっすらと透けて見えていた。

不思議な光景ではあるが、何時までも気にしているような事ではない。

中年男性は、一度首を傾げると、その場を離れてジョギングを再開する。

何時もとちょっと違うのは、ここまでであった。

中年男性が、ジョギングを再開した其の直後である。

先程のベンチからさほど離れてはいない。

そこで再び異変に中年男性が気づくと走る足を止めた。

それは今まで走ってきた遊歩道には無かった異変。

道の真ん中に、赤茶色の液体が乾いた跡が広がっていた。

中年男性は、首に掛けてあった黄色いタオルで汗を吹きながらその染みを見て直感した。

血痕?。

中年男性の汗を拭く手が止まった。それは、乾ききっていない血痕が、ちょっとした水溜りぐらいの大きさで広がっていた。

血痕らしき染みを発見した中年男性は、今度は完全にジョギングの足を止め、通り過ぎたベンチを振り返る。

まさかと思う。常識から考えて、そんな事はないと思った。

彼の人生の中でそのような事は一度も無かったし、此れからも無いと思っていた。

血痕と思われる染みの場所から、何かを引きずったかの様な跡が、遊歩道を外れて横の林の中へと続いていた。

それは青い芝生を赤茶色に染め変え新しい歩道のように出来た血痕の道となっていた。

中年男性は、今までのジョギングで走っていたペースとは打って変わって、そっと、まるで泥棒が忍び足をするかのような足取りで、其の血痕と思われる痕をたどって林の中へと入っていく。

彼は、人生の中で一番残酷で悲劇的な光景を目撃するのでは、と予感していた。

だが、一度芽生えた好奇心からか、それを確認せずにはいられなかった。

それが、後悔に繋がると分かっていながら……。

そして暫くして、まだ誰も居ない清々しいまでの早朝の公園内に、男性の悲鳴が響き渡った。

もちろん男性の悲鳴を聴きつけてやってくる者は居ない。

<鍋鍋コンビ>（前書き）

第二話からは第一話の倍の長さになります＾＾‥

<　鍋鍋コンビ>

「フゥン！」

一日の始まり。

「セイ！」

雀の囀りが、電信柱の上や二階立ての古い木造アパートの屋根から聴こえてくる。

「ハッ」

そのアパートの小さな庭先で、青年の掛け声が清々しい晴天の朝の空気を切り裂きながら響かせていた。

「トォ！」

正拳好き、手刀、廻し蹴り、前蹴り、様々な空手技が掛け声と共に風を鳴らす。

その古いアパートの庭はあまり広くはないが、一人、二人が体を動かすには十分な広さがあった。

「オリャ！」

こんな朝早くから空手の一人稽古をしている青年は、空手家『堂本　タケシ』である。

歳の頃は二十歳。

しかしその引き締まった体格からは歳相応には見えず。実年齢よりは、三、四歳は年上に見えた。

「リィヤァ！」

そのタケシの振るう力強い一撃の数々を、庭の隅の壁際で体育座りをしながら、じっと見ている人物がいた。

「フゥ！」

その人物は、蜂蜜色の綺麗で長い髪を地面につけることを気にせず、青い瞳でただじっとタケシを見つめていた。

細くシャープな顔立ちで、どの角度から見ても美人である事を認識させる彼女は、その美しさに自信があるような表情をして、ビー球のような綺麗な瞳を時折細めていた。

しかし、その美しさのあまりか、彼女からはクールと呼ぶよりも冷たいものに感じられて、周囲の空気の温度を下げる氷の女神像にも見えた。

「ヤァ！」

そんな二人の光景は、一時間以上は過ぎていた。

「ハィ！」

『春子・ハルバード』、春婆怒村を出て、タケシのアパートに来

るにあたって、新しく考えた彼女の偽名である。

その名を付けたのはタケシの祖父、堂本拳四郎である。

「ンッ！」

それまでは『春婆怒』と呼ばれていたが、今の時代に合わせて改名した新たな名前を、本人も、それなりに気に入っているようだ。

「タケちゃん、おっはぁよぉ～」

「おぅ、陽子、おはよぅ」

一人稽古に励むタケシの元に、いきなり現れたスレンダーでショートヘアーの娘。

彼女は春婆怒を無視してタケシだけに元気良く挨拶を投げかけた。

彼女の名前は『桜木　陽子』、年は十八歳でタケシより二つ年下。

そしてタケシが住むこの古いアパートの大家の娘であり、幼馴染であり、同じ流派の空手を学んだ兄弟子の一人娘でもある。

「小娘や、おはようぞぉ」

「ムゥ！」

体育座りの春婆怒が、陽子に挨拶をする。

しかし陽子は、春婆怒に対してギロリと音がしそうなぐらい睨み返すだけであった。

その陽子の態度は、明らかに春婆怒を敵視するものであったが、春婆怒の方はというと、気にも留めていない様子である。

「何をそんなに、気を荒立てておるのじゃ、小娘や？」

「小娘じゃないわよ！」

陽子の睨みに対して静かに対処する春婆怒を、陽子が更に怒鳴る。

僅かなやり取りだが、春婆怒がわざと陽子をちゃかしたものである事は、タケシにも分かった。

「そんなことよりさ、タケちゃん、体の方は本当にもう大丈夫なの？」

タケシが全身筋肉痛の為に春婆怒村で寝込み、帰って来たのは昨日のことである。

そのタケシを気遣うように陽子が心配そうな潤んだ瞳で見ていた。

「おぅよぉ、もう完治したって言ったろ」

そう答えタケシは、稽古の手を休めることなく続きを繰り返す。

しかし、本当はまだ、あちらこちらがズキズキと痛むのが事実であった。

「……」

そのタケシの未完治を、黙って庭隅で見つめる春婆怒は、どうやら気づいているようだ。

もちろん陽子も気づいていた。しかしそれは空手家の娘らしい目線で、タケシが稽古に励む一つ一つの技の切れからであった。

「フゥ！」

そんな体でもタケシには、稽古を休んでいる暇などなかった。

一日でも稽古を休めば、それを取り返すのに三日はかかる。

武道とは、そういうものだと祖父から叩き込まれているタケシは、多少の無理は承知で体を動かしていた。

事実、普段から猛練習を行っているスポーツマンが、三日も練習を怠ければ、次の練習後には、体のあちらこちらが筋肉痛になるほど体の筋肉が衰える。

どんな強靭な肉体を持つスポーツマンも武術家も、普段からの積み重ねが一瞬でも停止すると言う事は、その時点から普通人の様な肉体へと戻り始めるということである。

しかも戻るスピードは、積み重ねるスピードに比べて、崩れ落ちる積み木の様に早い。

「でぇ、陽子、朝からどうした？」

「ちょっとタケちゃんが心配で見に来たの、タケちゃんはすぐ無理するからさ」

陽子は、そう言って心配そうな表情で、タケシを見る。

「それに、この槍女と一緒なのも凄く凄く～～、心配だし！」

壁際でしゃがみ込んでいる春婆怒の元へ歩み寄った陽子が、両手を腰に当てながら顔を突き出し、春婆怒を睨みつける。

「んん？、小娘や何をそんなに心配をするのじゃ？」

「だ、だって、二人は一緒の部屋で暮らすんでしょ。タケちゃんが変な気をおこしたらどうするのよ！」

「陽子、俺が鉄の槍一本に欲情するほどマニアックな趣味を持ってる人間に見えるか？」

「えぇ、でも～」

タケシにとって春婆怒は、金髪の白人美女ではなく、ただの鉄槍にしか思えないらしい。

それは春婆怒村での一戦で、妖力共有をした事も影響しているのかもしれない。

タケシにとって春婆怒は、『人』と認知できないようだ。

これは妖怪であり、鋼の槍であり、そして道具なのだと認識してしまう。

しかし陽子にとって、目の前の春婆怒は、金髪で美しく、自分よりも大人っぽい美女なのだ。どうしても恋敵にしか見えないでいた。

「二人とも、おはよう」

そんな会話をしている中、アパートの二階から白いワイシャツに皺のよった灰色のジャケットを羽織った男性が、眠たそうな目を擦りながら降りてくる。

歳の頃は二十台半ば、寝癖の付いた髪をそのままに、ネクタイも締めず首に引っ掛けた男性は、タケシと陽子に気づくと挨拶してきた。

「あ、眞鍋さん、おはようございます」

「おはよっす」

タケシと陽子が男に挨拶を返す。

眞鍋と呼ばれた男性は、すぐさま見慣れない美人がいるのに気づくと足を止めた。

「おぉ、タケシ君、陽子ちゃん、そちらの方はどちら様で？」

眞鍋は、人の姿を取る春婆怒を見て、その美しさに一発で目が覚めたようだ。

少し緊張した感じで紹介を求める。本来これが、普通の男性の反応だろう。妖術で変化した姿とはいえ、今の春婆怒は、絶世の金髪

美女なのだから。

「これ槍女、以上！」

「いゃ、陽子ちゃん、意味分からないよ、その紹介の仕方……」

何やら怒った感じの陽子の説明に、眞鍋は困った表情で答える。

「ほほぅ、お主も長屋の住人じゃな。わらわは『春子・ハルバード』じゃ。タケシの元で厄介になる事になった。今後とも同じ長屋の住人同士よろしくたのむぞよ」

「あ、はい、こちらこそ……」

春婆怒の変な日本語に、眞鍋は多少困った表情をしたが、日本語がそれでも通じることが分かると安心した様子を見せた。

「私は眞鍋哲郎、２０６号室の住人です」

今度は真鍋が自分の自己紹介を軽くすると、寝癖の付いた頭を掻きながら軽く一礼をした。

「ところで眞鍋さん、朝から早いですね」

「ああ、ちょっと事件があってね」

「事件？」

「詳しい事はまだ分かんないけど、事件の現場が近くだから、今から直接向うところなんだよ」

「刑事ってのも大変ですね」

「まあ、そんな訳で急ぐから。春子さんもまた宜しく、じゃあ」

眞鍋は、そう言うと三人の元を駆け足で離れて、アパートの小さな駐輪場に有る自分の自転車にまたがった。

そして、自転車から錆び付いた音を立ててアパートを離れていった。

「タケシや、ケ・イ・ジ・とは何んじゃ？」

「んー、警察って知ってるか？」

「昔なら十手持ちとかかな？」

「ほほ～ぅ」

「そうそう、それのパワーアップした人だ」

「なるほどのぅ」

「本当に今ので、分かったのかしら……」

アパートを自転車で出てから二十分ぐらい走ると、事件の起きた公園が見えてくる。

眞鍋は乗ってきた自転車を、その公園の入り口の角に止めると、もたつきながらチェンロックを掛けた。

そしてネクタイをきっちり締め直しながら、公園入り口を閉鎖している制服警官に警察手帳を見せ、黄色いテープを何本かくぐりながら公園内へと入って行った。

公園の中は、既に大勢の警察関係者で溢れており、物々しい空気が眞鍋の想像していたよりも事件が大事であることを知らせていた。

「お～ぅ、眞鍋～ぇ、こっちぃだ、はようこい」

大勢の警官の中から自分のことを呼ぶ声に眞鍋は気が付くと、その声の主をキョロキョロしながら探した。

「おはよう御座います、鍋さん」

そして眞鍋は、自分を呼ぶ太り気味の中年刑事を見付けると、その元へと急いで走りよった。

「電話で殺しって聴きましたが、どんな感じなんですか？」

「バカ野郎、何にしてやがった。新米だったら誰よりも先に現場に来て、先輩刑事に現場の状況を説明するのが普通だろ」

茶色のスーツに茶色のトレンチコートを羽織り、頭にはグレーのハンチングキャップを被った背の低い小太りの中年刑事。いかにも張り込みでアンパンを食べ、取調べでカツ丼を使った泣き落としを得意としそうな刑事は、そう言ってヒヨッ子のケツを手の平でパ

チンと叩く。

「す、すみません鍋さん……」

尻を叩かれた眞鍋は、苦笑いをしながら頭を掻いた。

二人の刑事は、鑑識が指紋や写真を忙しなく取る背もたれの有る木製のベンチの横を過ぎ、水溜りの様な血痕の残る遊歩道の前に立った。

「おい、一体何があったんだ?」

トレンチコートの刑事は、既に現場へ到着していた仲間の刑事に尋ねた。

「あややゃゃ、鍋鍋コンビ〜、おそいよぉ〜」

「すみません、自転車で来たもので」

「タクシーがなかなか捕まらなくてな」

トレンチコートの刑事と眞鍋は、数ヶ月前からコンビを組まされている。新米刑事とベテラン刑事のコンビは当然の組み合わせ。

こうやってコンビを組むことによって先輩であるベテラン刑事から若手の刑事は、色々なノウハウを、警察でありながら盗んでいくのだ。

そしてトレンチコートの刑事の本名は『鍋中　改造』という。

多くの人からは『鍋さん』の愛称で呼ばれながら慕われる勤続三十四年目のベテランの中のベテラン刑事だった。

最近では眞鍋と鍋中で、鍋鍋コンビと呼ばれて更に存在感を強めていた。

「でぇ、被害者は？」

「あややゃゃ、あれだょ……」

鍋中に問われた刑事が、林の中からちょうどタンカーに乗せられて運び出される途中だった死体袋を指差す。

「どれどれ、被害者さんの顔でも拝ませてもらおうか」

そう言って、死体袋の方へ歩き出そうとした鍋中の肩を、同僚の刑事が掴んで止める。

「あややゃゃ、鍋さん、見るだけ無駄だぁ」

引き止められた鍋中は、被害者の顔が殴られてグシャグシャなのかと想像した。

元の顔が分からないぐらい変形した被害者というのも、鍋中ぐらいの捜査課のキャリアがあれば珍しいことではない。

それに水死体などの昔で言う『どざえもん』と呼ばれる遺体はかなり酷いものだ。

どざえもんの顔は水分をたっぷり吸収してふやけ白く爛れ、体は

腐敗が進むと体内にガスが発生してパンパンに膨れ始める。

テレビのサスペンス劇場で見るような役者が演技したものや、マネキンを浮かべた物に比べたら、そんなにスマートな物ではない。

このトレンチコートのベテラン刑事である鍋中は、そのようなざえもんにも見劣らない惨い遺体を数多く見てきている。

同僚の刑事が被害者の状況を説明する。

「あややゃゃ、見るだけ無駄だ。全身の皮も肉も、ぜぇ～～～んぶ、剥がされてやがる。男かぁ女かぁも分かりゃしねぇ～。惨いにも程があるわぁ」

「えええぇ！」

同僚の刑事の説明に声を出して驚いたのは、新米刑事の眞鍋の方であった。

「全身とは、どう言うこったい？」

同僚の刑事に、鍋中は怖い顔で訪ね返す。

「あややゃゃ、鑑識の話だと、おそらく被害者は木に逆さ釣りにされて、首や手首の頸動脈を切られた後、『血抜き』をされて、全身の皮も肉もそぎ落とされたらしい」

「ちょっ、血抜きって……」

「あややゃゃ、血抜きだよ、魚や動物の肉の生臭さを抜くために調

理人がやる、あれだよ。吊るされていた木の下の土には、大量の血液が染み込んでいたらしい」

「てぇ、そがれた肉ってのは？」

「あややゃゃ、そがれた部分は皮だけ放置されて、残りの肉の一分のみが綺麗な大皿に盛り付けられ、後ろのベンチに置いてあったらしい」

同僚の刑事が、鑑識達の群がるベンチを指差す。すると鍋鍋コンビは、其のベンチを振り返り様子を眺めた。

「一部って……、残りの遺体の肉は？」

「あややゃゃ、まだ発見されちゃいないよ」

「犯人が、持ち帰ったのか？」

「持ち帰ったって……」

眞鍋の顔から血の気が引いていく。

「でぇ、何所のどいつが見つけたんだ？」

「あややゃゃ、第一発見者は近所のサラリーマンでな。本人が通報して来たんだが……。被害者の遺体を見ちまって、まあショックが強かったんだろ、話はろくに訊ける状態じゃないわ」

眞鍋は、心の底から死体袋の中を見なくて良かったと思うと同時に、無理も無いと第一発見者に同情した。

刑事の眞鍋さえ見るのを拒む遺体の状況を、素人が見てしまえば冷静さを失っても仕方ないであろう。

「おい、そこの、被害者の顔を拝む、ちょっとまて」

「ええ！」

そう言って鍋中は、死体を運んでいた鑑識班を呼び止めると、のしのしとトレンチコートを揺らしながら死体袋に近づいていく。

今までの報告を聴いても尚も見る気になれると、眞鍋は本気で引いてしまう。

そう思っている眞鍋を余所に、鍋中は死体袋のファスナーを、音を立てて開けていった。

<　古アパートの一室で　>

古びた木造二階立てのアパートの一室。

六畳一間。一畳程度のスペースに流しとコンロが一つある。

トイレは有るが、風呂は無い。

窓際の部屋角に、オレンジ色のカラーボックスを横にして、その上にリモコンを無くした古いテレビが置いてある。

ビデオデッキやＤＶＤプレイヤーなどのＡＶ機器はまったく無い。

他に部屋の中に有る物は、鉄アレイなどの筋トレ道具やスポーツ雑誌が散らばっているだけで、これといって目立ったものは置いてなかった。

衣類は全て押し入れの中にある小型の箪笥と、ダンボールにしまわれている。

洗濯物は、玄関の横に有る洗濯籠に適当に投げ入れられてあり、溜まってくると陽子が勝手に洗濯をしてくれる。

家賃は月一万円。知り合いという理由で、大分負けてもらった金額であった。

それにも係わらず六ヶ月以上滞納しており、催促去れないことを

いいことにタケシは有耶無耶にしてしまおうかとも思っていた。

朝の稽古が終わったタケシは、朝食の準備を始めた。

部屋の中央に足が折りたたためる小さなテーブルを置く。その上にテンコ盛りのどんぶり飯と、さばの味噌煮の缶詰とコンビーフの缶詰、適当に切り刻まれたキュウリとキャベツの盛り合わせ、卵三つ分の目玉焼きといった、独身男性臭い雑な調理を並べる。

これがタケシの今日の朝食である。

タケシが朝食を取ろうとしている横で、春婆怒はカラーボックスの上のテレビを、正座をしながらかぶり付くように見ていた。

五十年前の春婆怒村には無かったテレビに興味があるらしく、昨日からテレビを見ている時間が長い。

「人という者の進化は凄いものよのぉ」

テレビのニュースを眺めながら春婆怒がボソリと口にする。

「おっ、これか、眞鍋さんが朝言っていた、事件か？」

テレビの発明に驚く春婆怒の言葉とは別に、タケシは朝起きたニュースの内容に注目した。

「ひで〜事件だ、この近所でバラバラ殺人事件とは、世も末だな」

タケシは、テレビのニュースを横目に、テーブルの上に並べられた雑な朝食をモリモリと食べ始める。

すると、二階に有るタケシの部屋を目指して、ドタドタと階段を駆け上がってくる足音が聴こえてきた。

このアパートの部屋の壁はかなり薄く、階段から三つも離れたタケシの部屋まで階段を駆け上る音がはっきりと聴こえて来る。

そして足音の主は、ノックも無く勢い良くタケシの部屋の扉を開けた。

桜木陽子、再び登場である。

「ターケーちゃ〜ん、朝ご飯の差し入れだよ〜〜」

白い皿に山盛りのお稲荷さんを持った陽子が、満面の笑みとハスキーボイスでタケシの部屋の中へと雪崩れこんでくる。

このような陽子の行動は、ここではほぼ毎日行われている光景である。

「お、ナイス陽子、ちょっとおかずが足りないと思ってたところだぜ！」

タケシは山盛りのお稲荷さんを、ご飯のおかずにするらしい。

結構、ラーメンライスをダメと言う人は多い。ラーメンライスとはラーメンをオカズにライスを食べる定食のことだ。

しかしタケシは、そのような組み合わせなどでも殆ど気にしない。

その気になれば、コシヒカリをオカズにササニシキが食べれる程である。

「陽子ちゃんお手製のお稲荷十個盛り合わせよん。たぁーんとお食べ～。……春婆怒、あんたの分は無いんだからね！」

「わらわは人の食する物は口にはせぬ」

春婆怒は、雪崩込んで来た陽子にクールな表情で答えた。

「なんかムカツク言いかたね。私の作ったお稲荷さんは、食べれないって言いたいの！」

陽子は食べさせる気が無いくせにそう言う。

「わらわは物を食べぬ」

確かに、この数日の間タケシは春婆怒と一緒にいるが、春婆怒が食事どころか水すら口にした所を見た事が無い。

「まぁ、槍だしな」

「あぁ、そっか」

「うむ、そうじぁ」

結論、槍はご飯を食べない！。

<　一階コンビニ、二階は探偵事務所・上　>（前書き）

ちょっと長いと思ったので、三つに分けます。

<　一階コンビニ、二階は探偵事務所・上　>

とある駅前広場の公園。

そこは噴水がある小さな公園で、子供が遊ぶ遊具の数よりも、会社をサボってやってきたサラリーマン達が座っているベンチのほうが多い。

公園の外は車の交通量が多い道路に囲まれ、とても子供のことを考えて作られた公園とは思えない場所であった。

公園内の平均年齢は明らかに高い。

その駅前公園内に有る噴水の迎えのベンチに、サラリーマン達に混ざってベンチに腰を下ろしている鍋中刑事の姿があった。

それを相棒の眞鍋は、少し離れた道路に車を止めて、車内から遠目に見ていた。

現在聞き込みの最中だが、鍋中が人に会う約束があると言って、相棒の眞鍋を車で待たせているのだ。

「おまたせしました、鍋中さん」

しばらくすると、ぴしっとしたグレイのビジネススーツ姿の男がベンチに座る鍋中の前に現れた。

年の頃は二十代半ばだろうか、髪型はセンス良くカットされた七三で、銀縁のあっさりしたフレームの眼鏡を掛け、うっすらとした笑みを保っている。

そのなりから何所にでも居そうな『そこそこ仕事のできる会社員』のイメージが感じられた。

「隣に座っても良いですか?」

「おぅ、まあ座れや」

「はい」

ビジネススーツの男は、ニコリと営業スマイルを作ると鍋中の座るベンチに腰をおろし、手に持っていたアタッシュケースを横に置いた。

「でぇ、上の耳にもとっくに入っているだろ、何て言ってたんだ」

どうやら鍋中の待ち人は、このビジネススーツの男らしい。

鍋中はその男を横目でチラリと見た。

「もちろん報告は上がってますよ、事件の内容が内容ですからね。今回の犯人は、我々の常識から考えれば人ではない可能性のほうが高いですから」

「ふぅっ」

ビジネススーツの男は、ニヤケた笑みのままそう話すと、それを鍋中が鼻で笑い飛ばす。

「油儀会長の指示は、何時もどおりでした。鍋中さんは刑事として犯人を捜してくださいとの事です。八尾君が今、掟破りが居ないか当たってるところです。私達の方は、新手の可能性を何時もとおり調べてみます」

「ふぅっ、まあ、何時もどおりだな」

「事件資料は、油儀会長から既にいただいています」

そう言ってビジネススーツの男は、自分の横にあるアタッシュケースを、軽く拳でノックする。

「流失早いなぁ……まあ、うちだわな。日本の警察のセキュリティーはどうなってやがるんだか」

自分の所属する組織の情けなさにあきれてた鍋中は、ベンチから立ち上がった。

「あぁ、そうそう、もう一つ面白い情報がありますよ」

「ん？」

その言葉に立ち上がった鍋中が、再び男の話に耳を傾ける。

「春婆怒村の結界、解けたって噂ですよ」

「なに！」

今までクールに話しを聴いていた鍋中の表情が驚きに変わった。

この反応からして、今の話が一番のビックニュースらしい。

「今、弟の虎二がバイクで確認に向かってますがね」

鍋中はビジネススーツの男の話を聴きながら、またベンチに腰を下ろす。

「その話が本当なら、また騒がしくなるな」

「でしょうね、特に一七五一家は最後まで揉めてましたからね。他の連中も春婆怒に恨みを持つものは多いですし」

鍋中は、胸ポケットからタバコを取り出すと火を付ける。

「だが、今回の事件とは無関係だろ」

「春婆怒が起こしそうな事件ではないですし。あれは慎重な九十九神ですからね」

風に煽られ、鍋中のくわえたタバコが早く燃え縮む。

「春婆怒か……、八尾が聴いたらむきになるな」

今度は胸ポケットから携帯灰皿を取り出した鍋中は、それで吸っていたタバコをキチンと始末する。いかつい顔には似合わずマナーは良い人物のようだ。

そしてベンチから立ち上がり、今度こそ其の場を立ち去るようだ。

「お前ら兄弟もあんまりはしゃぎすぎるなよ」

「ハハァ……」

若干の苦笑いを見せるビジネススーツの男に、鍋中は背中を向けると、若い相棒の待つ車の方へ歩いていく。

鍋中は、車の助手席に乗り込むと運転席の真鍋に指だけで車を出せと指示をだした。

眞鍋もそれを見て、何もいわずに車を出発させた。

「鍋さん、今のヤツは何者ですか？」

車を走らせながら眞鍋が質問する。

「ああ、探偵だ」

「探偵ですか……」

「あいつが探偵の事務所を開く前から、何かと面倒を見てやってな。今じゃ、ちょっとした情報屋として使ってるところだ」

鍋中は、自分の情け深さを後輩に自慢げに語る。

「さすが鍋さん」

それを感じた眞鍋が、わざとらしくヨイショする。こんなところだけは、出来た後輩であった。

「まあ、探偵と言っても、普段は迷子のペット探しが専門だがな」

<　一階コンビニ、二階は探偵事務所・中　>

ベンチに座っていたビジネススーツの男は、鍋中が車に乗るのを見送ると、横に置いてあった黒いアタッシュケースを片手でしっかりと持ち自分も公園を後にした。

男は駅前の繁華街を歩き、やがて人の往来が疎らとなっていく裏路地へと進んでいった。

そして数人の柄の悪いヤンキー達が屯しているコンビニの入り口前を過ぎると、同じ建物の二階へと上がる階段の有る出入り口へと入っていく。

三階立ての貸しビル。

一階はコンビニ。二階は猫田私立探偵事務所と、窓に大きく書かれて有る。

三階は空きテナントのようだ。

ビジネススーツの男は、猫田探偵事務所の看板が掛かったドアを開けると、室内へと入っていった。

「ただいま～」

「あ、龍兄ちゃん、おかえりー」

男が事務所内に入ると、姿は見えないが、若い女性の声が可愛ら

しく帰りを迎えてくれた。

どうやら可愛らしい声の主は、事務所の奥の給湯室に居るようだ。

ビジネススーツの男は、猫田探偵事務所のステッカーの文字が逆に写る窓を背にしたデスクの上に、持っていたアタッシュケースを無造作に置いた。

そしてデスクの前に有る、お客との交渉用に用意されたソファーに、ダイブするように腰を落とす。

その探偵事務所は窓に張られた大きなステッカーの文字が無ければ、何の事務所かは分からない感じの室内だった。

来客用のテーブルに合わせたソファーのセットに、何処かのリサイクルショップから買ってきた事務用のデスク、それにちょっと豪華な社長椅子が組み合わされていた。

事務所のあちら此方には、現在給湯室で何かをしている女性が世話をしている観葉植物の植木が数多く置いてあり、緑とマイナスイオンが溢れかえっていた。

だが、他に目だった装飾品はなく、豪華さの欠片もない事務所内から、財政はあまり良くないのが分かる。

「珠美〜、お茶いれてくれ〜」

「はーい、温めで良い？」

「もちろんだよ」

給湯室の方から元気な声で珠美と呼ばれる女性の声が返ってくる。

「珠美、虎二から連絡有ったか？」

「無いよ、直接龍兄ちゃんの携帯に連絡があるんじゃない？」

しばらくして給湯室からストレートの黒髪が美しい二十歳ぐらいの女性が、うっすらと湯気の立つ湯飲みを丸いお盆に乗せて出てきた。

身長は１６０ｍｃぐらいだろうか。上品な顔立ちの女性。

タートルネックの赤いカシミヤタッチセーターがスラリとした体系のシルエットを綺麗に見せ、膝上１０ｍｃの白いスカートが清楚さを感じさせる女性であった

そして、どことなくあどけない無邪気な口調がまた、無垢なイメージを作り出していた。

しかし、彼女の風貌で何よりも強く印象付けるのは、その豊満な胸だった。

童顔巨乳と言う言葉がしっくり来るだろう彼女の胸は、おそらく男のロマンを沢山詰め込んで大きくなったのであろうと思わせるサイズであった。明らかにＦからＧは有りそうだ

「ところで龍兄ちゃん、油儀会長の話しはどうだったの？。やっぱり今朝のニュースになってたバラバラ事件かな？」

ビジネススーツの男は、ソファーにふんずりかえり、スーツの内ポケットから黒い携帯電話を取り出す。

「あー、正解だ。我々と鍋中さんに八尾くんで、何時も道理の調査だよ。机の上の鞄に、今回の事件の警察資料が入ってるから、珠美も目を通しといてくれ」

そう言いながらデスクの上のアタッシュケースをビジネススーツの男は、指差し温いお茶を音を立てて熱そうに啜る。

「はーい」

珠美は、持っていたお盆を脇の下に挟むと、デスクの上のアタッシュケースを開け中から厚い紙袋を取り出す。

封筒の中には書類や写真が入っており、珠美はそれらを眺め始めた。

警視庁捜査課の新鮮な捜査資料が、平凡な探偵事務所に有る。

被害現場の写真、グロテスクにさばかれた被害者写真、被害者遺族の資料、遺留品のリスト、第一発見者のプライバシーの資料、朝一で所轄警官が行った、周辺住民への聞き込み情報。

今回の事件で、現在警察が掴んでいる情報の全てがここにあった。

ビジルススーツの男は、手にしていた携帯電話を目の前のテーブルに置くと、指で弾いてクルクルと回しはじめる。

彼は、既に全ての資料に目を通してあるようだった。妹が読み終

わるのをただ待っていた。

「龍兄ちゃん、この事件、やっぱり妖怪の仕業が濃厚だよね～」

書類を見ながら珠美が兄に話しかけた。

「そう思うか珠美も。まあ人間の仕業にしてはエグすぎだしな」

その時、クルクルと回されていた黒い携帯電話から、いきなり「ネコミミモードです」と言う台詞が連呼された。

それは随分前から男が使っている携帯の着信音である。

この台詞が相当気に入っているようで、携帯電話を変えても着信音は変えずにいるぐらいであった。

「うわ、びびった！」

指で携帯にじゃれついていたビジネススーツの男は、その着信音に声を出して驚く。

そして、あたふたしながら電話に出る。

「もしもし、龍信だけど？」

「あにきー、虎二だけどー」

ビジネススーツの男は、携帯から聴こえて来た弟の声に、誕生日プレゼントを待つ子供の如く目を輝かせた。

「虎二、で、そっちの状況はどうだ？」

ビシネススーツの男は、ウキウキとした口調で電話の相手に質問する。

「ああ、今さっき春婆怒村に付いたんだけど、村全体を包むように張られているはずの結界は、完全に解かれてるわ。おかげで村に、すんなり入れたしよ」

ビジネススーツの男の顔が、悪ガキぽく微笑む。　どうやら期待していた回答らしい、口元がニヤついていた。

「これから神社の方に行ってみるけど、おそらく噂は本当だわ」

「よし、わかった。お前はもうちょっと村を調べたら戻って来い。結界が解けてるなら春婆怒もそうだが、鬼々蜘蛛も居るはずだ」

「あいよ、わかったー」

「あと、こっちでも事件が起きて、油儀会長から仕事が入っている。そっちから戻ったら手伝ってもらうぞ」

「ん？、事件って、春婆怒関係？」

「いいや、内容からして春婆怒とは限らんが、妖怪か九十九神が関係していても可笑しくない事件だ」

ビジネススーツの男は、電話の相手に「ちがうちがう」と言った感じで、顔の前で手を振るジェスチャーをする。

「じゃあ、こっちの方が調べおわったら、即そっちに戻るわ～。じゃあ切るよ」

電話は、弟の虎二の方から切られた。

ビジルススーツの男は、携帯をたたむと目の前のテーブルに置き、いやらしくにやけながら軽く眼鏡を指で直した。

「龍兄ちゃん」

「ん？」

「なんだか楽しそうだね」

事件の書類を読み終わった珠美は、アタッシュケースに書類を戻すと、可愛らしい笑顔で兄に問いかける。

「そうだな、退屈しなくて済みそうだ」

「でも、今回の事件が九十九神の仕業なら、またいっぱい死んじゃうかもよ。人も妖怪も」

珠美は、お盆で口元を隠す様にして、少し不安げな顔をした。

「そうだな、我々は死なないように見て回らないとね」

色々な場所で、色々な者達が、色々な事件を起こし、色々な被害が出る。

このにやけた男が探偵になった理由は、そんな出来事を除き見し

たいと思う好奇心からである。

このビジネススーツの男にとって、他人の不幸は蜜の味なのだろう。

そして彼にとっての欲は、好奇心を満たすこと。

先程の電話の相手である弟の虎二も、ここに居る妹の珠美も、この男の好奇心を満たす為に付き合わされているのだ。

事務所の外からバイクのエンジン音が聴こえ、それに続いてブレーキ音が響く。

おもむろに珠美は、事務所の窓から下を覗き見た。

「あぁ～～……」

「ん？」

外を覗いた珠美が、何やらガッカリした声を上げた。

その声に龍信は、妹の方を見た。

妹の珠美の表情が、何やら気を落としていることにビジネススーツの男も気づき不機嫌そうに顔を曇らせた。

「どうした、珠美」

「……下のコンビニでバイトしてる人、彼女いたんだ……。今、彼女をバイクに乗せて来たの……」

「珠美、お前あんなのがタイプなのか……？」

「うん、結構いいな～と思っていたのに……。あぁ～、しかも彼女、金髪よ、外人さんだよ！」

日本人女性の多くが白人女性の持つ美しい容姿にコンプレックスを感じるものらしい。

珠美も、そのようだ。

好意を持っていた相手が、よりにもよって白人女性を彼女にしたことに珠美は、納得がいかないらしい。可愛らしい顔に影を落とす。

だが、窓の外の白人女性と比べて胸の大きさでは、珠美の方が圧勝していた。

「ほほぉ、彼もなかなかやるね～」

そう言っているがビジネススーツの男は、この話にはあまり興味が無いらしい。ソファーに仰け反りながら、詰まらなそうにしていた。

「あ～あぁ、私も恋がしたいな～……」

珠美は、豊満な胸を押し潰す様にお盆を持って、寂しそうな歩みで給湯室へ姿を消していった。

「珠美も恋する年頃か～」　ビジネススーツの男は、天井の角を遠い目で見つめる。

自分の妹の成長ぷりに、小さかった頃の可愛い妹の記憶を思い重ねていた。

「珠美も大きくなったな……。いろんなところが……」

<　一階コンビニ、二階は探偵事務所・下　>

「あんなヤツ、これもんでこうよー」

「えぇ、マジかよ～、アホだなー」

「あはは、おめーやりすぎだべ～」

猫田探偵事務所の下に有るコンビニエンスストワーの前。

その入り口のすぐ横で、４人の柄の悪い少年たちが屯していた。

四人とも服装は乱れているが、着ているのは学生服である。

現在の時間帯ならば、学校の有る筈なのだが、四人はさぞ当たり前の様に、こんなところで時間を潰すように授業をサボっていた。

そして彼らの横には、店が設置したゴミ箱が有るのにも関わらず、少年たちは自分達が食べたお菓子などのゴミを散らかし、頭の悪そうな会話に花を咲かせながら地面に座り込んでいた。

「ちょっくらベンジョいってくるわ～」

「おぅ、だしてら」

そう言って一人の少年がコンビニの中へ入って行った。

仲間の一人がトイレに行ってしばらくすると、彼らの横を男女二人乗りのバイクが通り過ぎた。

彼らは自分達の前を、けたたましいエンジン音を立てて通り過ぎたバイクにイラ付いたのか、三人一斉にバイクを睨みつける。

そのバイクは、コンビニの駐車場でも人目の付きにくい隅に止まると、エンジンを止めた。

バイクから降りた二人は、フルフェイスのヘルメットを取りながら、コンビニの入り口へと向かって歩き始めた。

運転していたのは背の高い青年で、もう一人は金髪の綺麗な白人女性だった。

「おい、あの女、すげー美人の外人だぜ」

カップルの彼女が、白人の美人だと気付いた一人が、仲間の肩を叩きながら二人を指さす。

「おお、ほんどだ。」

「金髪だよ、本物だ、本物」

柄の悪い少年達は、二人の男女に視線を向けたまま立ち上がる。

明らかに二人の男女に対して、因縁を付ける気マンマンであった。

そして彼ら三人は、男女の方へとチンピラのように、肩を左右に揺らしながら歩き出した。

こうなると、たちの悪い野良犬と一緒である。

「おい、にぃちゃんよ、おめーのバイクうっせんだよ」

三人は男女の元まで近寄ると、その内の一人が男性の顔に口付けしそうなぐらいに顔を近寄らせ因縁を付け始めた。

そして男性の方も、まるで受けて立つかのように引くことは無かった。

「おめーよー、人の迷惑考えろよ、おらぁ」

お前らが言える台詞ではない。だが、彼らは自分のことを高く深い棚の上に置くのが得意な人種である。

「なんだ、糞餓鬼ども?」

男性は、負けずに少年を凄み返す。

その気迫にガンを付けている少年が、少し押され冷や汗を密かに流した。

「んん、タケシや、知り合いかえ?」

金髪の女性が妙な日本語で男性に問いかける。

この状況から考えて、知り合いの筈は無いが、彼女はふざけて言った積もりは無かった。

「なんだこの女、頭可笑しいのか？」

女性の口調を笑いながら、柄の悪い少年の一人が、今度は女性にも因縁を付け始める。

「無礼な、身分をわきまえぃ」

女性は、綺麗な顔立ちをむっすりとした表情に変えると、冷めた声で言った。

「うぁ～……こりゃ本物だわ」

先程まで男性の方にガンをくれていた少年も、金髪女性の可笑しな発言に驚き、彼女に視線を奪われる。

「おーい、オメーら、何してるん？」

五人が揉める中、柄の悪い少年達の仲間が一人、コンビニのトイレから戻ってくる。

「おう、ちょっとこいつらがよー」

後ろから掛けられた仲間の声に受け答えをする為、そう言いながら不良少年の一人が一瞬後ろを振り返る。

そして、前を向きなおした不良少年の目の前に、男の手が有った。

「？」

その手は、中指を親指で押さえる形。

デコピンの形。

不良少年が、後ろを振り返ったのは、ほんの一瞬だった。

前を向き直した時には、そのデコピンは、昔からそこに有ったかのように存在していた。

その自然さに、少年はデコピンの形に驚くことも無かった。

そして放たれるデコピン。

「ふぅおぉぉぉ！」

「！！」

「いてー！、ちょーいてー！。ちぃぃぃぃぃ出てる！！」

デコピンは、不良少年の額を拳銃で打ち抜くように弾き飛ばす。

すると不良少年は、声を上げながら後ろに仰け反り転倒しそうになった。

「こ、この野郎！」

男のそばに居た二人の少年は、仲間が攻撃されたことを確認すると、大きな声を出しながら、男ににじり寄ろうと行動を起こす。

「んっ？」

にじり寄ろうとした不良少年二人の視界に、下からスライドする様に中指を親指で押さえた男の手が現れた。

デコピンの構えをした両手。

そのデコピンに、仲間が一人やられたのにも関わらず、目の前に現れたデコピンに対して、彼らは回避行動を取ることは無かった。

今度は両手で放たれたデコピン。

「うご！」

「どわわぁぁ！」

危険と分かっていながら殺気の無いデコピンの動きに、彼らの思考回路が危険回避をセレクトしなかったのである。

最初に食らった少年同様に、強烈なデコピンを額に喰らい、声を立てよろめく。

「にゃろぉぉぉぉ！」

最初にデコピンを喰らった少年が、ズボンのポケットから光物を取り出す。

たかがデコピン。

それを喰らっただけでナイフを取り出す少年に、男はあきれた表情をわざとらしく作った。

「ぶっ殺してやる」

もしも、ここで少年が、男を刺し殺して警察に捕まったのならば、犯行理由は「デコピンをされたから」ってことになるのだろうか。

もしも、そうなったら情けないニュースでワイドショーの数分が使われて終わりなのかと、男は詰まらない想像をしていた。

「ほー、ナイフか」

男はそれでも怯まない。

刃物による恐怖心、そんなものは感じていない様子だった。

それどころか、くだらない想像をする余裕すらあるのだから。

「おい、やめろょ、オメー死にたいのかよぉ!?」

トイレから戻ってきた少年が、ナイフを構える仲間の肩を掴んで止めた。

「止めんな、殺しはしねーよ、軽く刺してやるだけだ!」

「そうじゃないって、オメーが殺されるって言ってんだよ!」

トイレから戻ってきた少年は、強い口調で仲間を止めた。

その言葉にナイフを構えていた少年が、初めて自分を止める仲間の少年の顔を見て驚く。

「えぇ……？」

その顔は何時ものように、ふざけてヘラヘラした表情ではなく、引きつり、青ざめ、冷や汗を滝のように流していた。

「お前ら、なにやってんだよ、死にていのかよ！」

街中でケンカを売ったり、かつあげをしたり、時には今みたいに光物をちらつかせる事が珍しくなくなっていた仲間が、何故か今回は違っていた。

「死にたいって……？」

他の二人も、引き止める仲間の必死な形相に、怒りを忘れたのか冷静さを取り戻す。

トイレから戻ってきた少年は、怒鳴りながら止める理由を、必死な表情で仲間達に告げ始めた。

「お前ら、レジェンダリータケシに、ケンカ売るバカがいるかよぉっ！」

「「「！！」」」

その名を聴いた三人の不良少年は、おもわず声にならない悲鳴を上げた。

そして、ゆっくり、恐る恐る、そ～と、男性の顔を伺う。

<　レジェンダリータケシ　>

『レジェンダリータケシ』

この町では、暴力に自信がある者達ですら、やってはいけない事が幾つかある。

一つ、先輩への反抗。

一つ、仲間をサツに売る。

一つ、不良高校生がヤクザにケンカを売る。

一つ、仁義を破る。

他にもまだまだ細かいルールは幾つも有るだろう。

だが、この街では、他の町では無い、してはいけないことが存在していた。

それが『レジェンダリータケシ』にケンカを売ることであった。

何故やってはいけないか、その理由は簡単である。

その行為が自殺行為であるから……。

後々レジェンダリータケシと呼ばれるようになる少年が、この街にやって来たのは五年前のことである。

この町でも三本の指に入る不良高である、県立虎野町高校。

訳してトラ高。

全生徒数約千二百人、３／４が男子生徒で、女生徒は少ない学校である。

五年前の春、彼は別の街からやってきて、一年生としてこの高校に入学した。

彼は入学から僅か１ヶ月で、その春に一緒に入学した生きの良い一年坊主を、全員を力尽くであっと言う間に黙らせた。

その武勇伝を聴きつけた同じ学園の先輩方二年は、生意気な一年一人にこぞってちょっかいを出した。

だが、２ヵ月後には、誰一人として彼に先輩風を吹かせるものは居なくなっていた。

そして彼が夏休みを終える頃には、三年間この学園で健全な不良を貫いて来た者達ですら、彼には近寄らなくなっていた。

そんな三年生が卒業を迎えて、彼も二年生に進学した頃から、別の高校で名が知れている猛者達が、こぞってトラ高を荒々しく訪ねてくるようになる。

だが、それも彼が、三年に進学する頃にはパタリと無くなってい

た。

そのぐらいの頃から、彼のことをレジェンダリータケシと呼ぶ者が現れると同時に、彼にケンカを売る者は、自殺志願者と呼ばれるようになった。

また五十人で挑めば集団自殺と言われ、人海戦術すら無駄と語られていた。

実話の武勇伝の中で、彼は五十人の武装不良少年と果し合いを行い、ボロボロに成りながらも　勝利した事があると語られていた。

そして、彼の学園生活が卒業シーズンに入ると、連日のように色々な町からやって来た、組織構成員のスカウトマンが、ぶ厚いレンガ（札束の入った封筒）を持って校門前で待ち構えるようになる。

だが、彼は誰の誘いも受けず、誰からも何も受け取ることは無く、すさまじい武勇伝だけを残して高校を卒業していった。

彼が卒業する頃には、この町で不良少年もチンピラもヤクザも、レジェンダリータケシのあだ名を知らない者はいなくなっていた。

彼が社会に出てから、どこかのヤクザ事務所と派手に揉めたと言う話も数多く聴いたが、この町に彼がやって来て五年が過ぎた今、もうヤクザですら彼との揉め事は、御法度とする組事務所が普通であった。

その『レジェンダリータケシ』が目の前にいる。

知らなかったとはいえ、売ってはいけない人物にケンカを売って

しまったことに、四人の不良少年は、顔を青ざめ後悔していた。

今、彼らの取った行動は、自殺志願者が、高層ビルの屋上のフェンスを越えて、ビルの縁に立っているのと一緒である。

あとは飛び降りる決心が付か付かないかなのだが、その決心とは目の前のレジェンダリータケシの判断に委ねられていた。

レジェンダリータケシが殺したいと思った時が、彼ら不良少年四人が飛び降りる決心が付いたのと一緒なのである。

「ご……ごめん……なさ……い」

ナイフを持った手を下げながら、力の無く絶望の感じられる震えた声で、俯いた少年が謝罪を述べた。

この少年の反抗期が過激差を増すこの頃、他者への謝罪を口にするのも久々のことである。

男はナイフを下げた少年を睨むと少年は、目線を足元に落とし、目の前の男の反応を震えながら待った。

横にいる金髪の女性が、一転した空気を感じ、キリッとした目で自分より背の高い連れの男の顔を下から覗き見る。

「タケシや、この者どもは、どうしたのかえ?」

「どうしたもんかなぁ～」

受け答えをした男の声に、未だドスが効いているのに少年らは怯

えた。まだピンチは過ぎ去っていないと。

「す、、、すみませんでしたぁぁぁ！！」

恐怖に耐えかねた少年一人が、四十五度に深々と頭を下げると、他の三人もそれに続く。

頭を下げ、コンビニの駐車場のアスファルトに穴が開くぐらい見詰める少年達。

その内、三人の視界にポタポタと赤い雫が落ちるのが目に入った。

先程喰らったデコピンで額から流血したのである。

小中学生の頃、友達とふざけて遊んだジャンケンデコピン。

ジャンケンで勝った方が、負けた方の額にデコピンをする遊び。

何度も何度も繰返して、何度も何度もお互いの額に打ち合ったデコピン。

だが、額が腫れ上がることは有っても、流血することは珍しかった。

それを、この男は、たったの一発で、しかも三人全員を流血させている。

アスファルトに出来る自分の血痕を見ながら、少年達は今までの短い人生を走馬灯のように思い出していた。

しかし絶望的沈黙に耐えかねて、彼らの心は既に高層ビルから飛び降りていた。

まさに心のデットリーダイブ。

「もう、帰れ」

「え……？」

高層ビルから飛び降りた彼らの心は、地面に激突せずに、消防が設置した巨大な黄色い救助用マットに着地した。

「おまえら学校どうした？。こんなところで屯してないで、とっとと学校いけよ」

四人の少年は、あどけない表情をして顔を上げた。

そして、命拾いをした事に気付く。

「はっ、はい！」

「ほら、さっさと行け」

男が手の甲てシッシッと野良犬を追い払うかのような仕草をすると、少年らはオロオロしながら小走りでコンビニの駐車場から逃げて行く。

「タケシや、なぜに逃がす。あのような無礼な童なんぞ、もっと懲らしめるべきじゃぞぇ」

男はコンビニの方へと歩き出すと、金髪の女性もそう言いながら後を追う。

「バイトに遅れるんだよ。やべ、早くタイムカード押さないと遅刻だ！」

そう言って走り出す男を、金髪の女性は足を止めて見送った。

そして、少年らが逃げ去った先を見ると、ビルとビルの間から僅かだが表通りの車の往来が見えた。

「わらわを愚弄したのじゃ、タケシが罰を与えぬと言うのならば、わらわが自ら……」

金髪の女性は、そう言って男とは反対の方へと歩きだす。

だが、彼女の行動を男は気にも留めていないようだった。

そのままコンビニの中へと入っていった。

<　コンビニの仲間達　>（前書き）

話がローペースかな～＾＾；

<　コンビニの仲間達　>

タケシはコンビニに入ると、レジカウンターの中に居る丸顔の中年男性に挨拶をした。

「堂本君、こんにちわ」

タケシに挨拶を返す丸顔の男性、胸には『オーナー　すずき』と書かれている。

「早くタイムカード押さないと遅刻だよ。あと一分だよ～」

「ういーーーす」

年齢は５５歳、身長１６７ｃｍ、丸顔で油ぽいバーコードヘアー、体型はかなりメタボリックを感じさせるオーナー鈴木。

二年前まで大手銀行に勤めていたが、何を思ったか突然自己退職。

妻や娘にも相談無く退職した為、家族関係は総崩れしてしまい、妻は家を出て行き別居中である。

そして結婚して旦那と暮らしている娘は、そんな両親に呆れて、それいらい連絡をしてこないでいた。

何よりも、突然脱サラしてまで始めた事が、何故にコンビニなのかは不明であった。

家族はもちろんタケシや他のバイト連中が、その理由を聴いてみてもオーナーは、一度も理由をちゃんと答えたことはない。

タケシが、タイムカードを押そうと店の奥の詰め所に走りこむと、同期のバイト仲間がタケシのタイムカードを代わりに押しているところであった。

「お、井川、センキュー！」

「タケシさんが、走りこんでくるのが見えたから、タイムカード押しちゃいましたよ」

詰め所に居たのは『井川　辰夫』１９歳。

タケシが、ここでバイトを始めて3日後に彼もここでバイトを始めた。

ほんの少しだけ、タケシの後輩である。

彼はタケシが、ここでバイトをしていくに当たって欠かせない存在であった。

気が弱い面もあるが、細かいところに気が利き、タケシのちょっとしたミスを良くカバーしてくれる。

そして何より、タケシより仕事覚えも早く、タケシよりも仕事ができる。

タケシは、彼とコンビを組むと彼の支持で仕事をこなすことが多い。

それなのに井川は、年上で3日先輩のタケシを立て、嫌味ぽさもなく仲良くやっていた。

タケシとの関係を例えるのならば、おだて上手な猛獣使いといった感じであろうか。

その井川は、この街には大学に通う為にやってきたらしく、近所の安いアパートで彼女と二人で同棲しているらしい。

バイトをしている理由は、両親からの仕送りだけでは生活が厳しく、彼女とは別々のバイトをして食い繋いでいた。

井川の彼女とやらにはタケシも会ったことはないが、バイト中にもちょくちょくメールの遣り取りをしており、何度か井川本人からのろけ話を聴かされていた。

タケシは、コンビニの制服を私服の上に被ると、自分より１０ｃｍ以上背の低いバイト仲間の肩を軽く叩く。

そして井川と一緒に詰め所を出て、オーナーの待つレジカウンターを目指した。

「いゃ～～、堂本君は、さすがだね～」

オーナー鈴木は、レジカウンターの中に入ってきた、タケシのごっつい両肩を両手で掴み、タケシのことを満面の笑みで褒め称えた。

「オーナー、どうしたんですか？」

タケシではなく、井川が何事かとオーナーに尋ねると、オーナーは掴んだ肩から手を離し、店の入り口を指さした。

その指をたどって井川が外を見ると、先程まで店の前で屯していた、柄の悪い連中が居なくなっていた。

「あれ、外に居たヤンキー達、やっと帰ったんですね」

「ちがうよ井川君、堂本君が追っ払ってくれたんだよ」

「おー、さすが空手家ですね」

笑顔で会話する二人。

だが、彼らは知らない。

タケシが、レジェンダリータケシと呼ばれ、この街の柄の悪い人々から絶対的に嫌われていることを。

オーナーすずきは生まれてこの方、真面目な人生を送り、暴力どころか自分の娘にすら手を上げたことは無い。

井川にしろ、今年になって大学に入学する為にやって来たので、バイトの同僚が空手をやっている事は知っているが、そんな恐ろしい存在だとは思ってもいなかった。

タケシと違って、この二人は平和な国の住人なのだ。

「すまないが井川君、入り口のゴミを掃除してくれないかな」

「はい、分りましたオーナー」

井川は、にこやかな顔で箒と塵取りを手に取ると、言われるがまま真面目に店外の掃除を始める。

「堂本君、私は棚の整理をしてるから、レジお願いね」

オーナー鈴木は、そう言って店内の商品を整理し始めた。

その間タケシは、レジカウンターの中にじっと立ち尽くしていた。

さすがに今までの人生の中で、暴力というものに縁遠かったとはいえ、オーナー鈴木も気付いていた。

タケシをバイトとして雇って以来、この店に柄の悪いお客の来店が激減していることに。

だから、タケシがサービス業に明らかに向いていないし、この手の仕事が普通のバイトより出来ないことを大目に見ていた。

タケシは、今日みたいな日の為の保険として雇っているのだ。いわば用心棒なのである。

ただ、最近さすがのオーナーもタケシにバイト中に辞めてもらいたい行動があった。

それはレジカウンター内に有る鉄アレイなどの筋トレグッツ。

仕事中には筋トレを禁止すべきかと悩んでいた。

<　猫田龍信の妄想　>

井川は店長の指示どおり、不良少年らが散らかして行った店外のゴミを掃除していた。

箒でゴミをかき集めて、塵取りですくい集めていると、その視線に人影が割り込んできた。

井川が何者かと顔を上げると、そこには知った顔の人物が立っていた。

それは、コンビニの二階で、探偵事務所を経営している人物、『猫田　龍信』だった。

グレイのビジネススーツをすらっとした体型で着こなした男は、銀縁のスマートな眼鏡の奥で細めの目がうっすらと笑っているように見えた。

井川は、猫田の名前は何となく覚えていた。

それと、探偵事務所は弟と妹の兄弟三人で経営していることも知っている。

たまに店に買い物をしに来る際に、世間話程度で聴いたことがあったからだ。

「やぁ～～、こんにちわ」

「あ、探偵さん、こんにちわ。お出かけですか」

井川は挨拶で返した後、礼儀として軽く話しを繋げて見る。

「ああ、これからお仕事だよ。詰まんないけど楽しい探偵家業、ちょっとした調査で街中を歩き回ってくる予定でね～」

「大変ですね」

「そうでもないさ」

猫田は、にこやかな笑顔で答えると、その場に立ち尽くしたまま動こうとしない。

どうやら井川にもっとつっこんで話を訊いてもらいたい様子だ。

井川は、それを察する。

「でぇ、探偵さん、調査って何ですか？」

「それは言えないよ、守秘義務ってヤツでね」

「は、はぁ……」

おそらく、そのセリフが言いたかっただけなのではと井川は思ったが、それを顔に出すほど子供ではない。

ここは猫田に完全に合わせてあげようと思っていた。

「そういえば君、彼女できたんだって、おめでとう」

「はぁ」

彼女なら前から居る井川は、今更と気の無い返事を返す。

今、同棲している彼女とは高校時代からの付き合いで、井川が大学入学の為に、この街に来ると聴いて彼女は、両親の反対を押し切り、わざわざ付いてきた仲である。

その為か猫田との会話が噛み合っていないことに不思議な表情を見せたが、猫田の方がそれに気付いていないようだった。

「じゃあ、若者よ、バイトがんばって」

「探偵さんもお仕事がんばってください」

そう言って猫田はコンビニの前を後にした。

そして、ゴミ拾いが終わった井川も店内へと戻って行く。

猫田は、コンビニがある裏路地を出て、車の往来の激しい表通りを歩いていた。

歩道を歩く猫田は、何やらブツクサと呟いている。

「分からん……まったくもって分からん……」

猫田は、何やら悩んでいる様子だ。

その悩み事が、本人の意思とは別に、口からダラダラ漏れ出して

いた。

「優しそうに見えるが、顔も普通だし、ルックスも普通、何所をどう取っても普通の塊みたいな男じゃないか……」

どうやら先程までコンビニの前で話していたバイトの男のことを呟いているようだ。

「何であんなのが良いのか分からん。

我が妹ながら珠美は、相当可愛い部類のはず、あんな貧乏そうな普通の男なんかより、もっといろいろ良い男が言い寄って来てもいいはずなのに。

何故あんなのが好みなのか納得いかん。

珠美のヤツは、男の見る目が無いのか……。

そうか！、珠美は母性本能をくすぐられるタイプに弱いのか！、そうか、そう言う事か！。

と、なれば、あんな男を珠美の側には近寄らせられん。

彼女が出来たとはいえ、あの程度の男ならば、何時女に捨てられて、珠美に言い寄り始めるか分からん！。

それに一度女の味を占めた若造は、危険この上ない。

彼女がいても珠美ほど可愛ければ、浮気心の一つや二つ抱いても可笑しくないからな。

私なら抱く！。

……よし、毒を盛ろう、こっそり毒を盛ってやろう。くっくっくっくっくっ～～～。

毒だ毒だ。

あはははははぁぁぁぁぁ！！！。

毒で行こう！！」

猫田と歩道ですれ違う歩行者達が、怪訝な顔をするのに猫田は気付く事も無く、奇怪な笑いを発しながら歩いていた。

<　九十九神　>

美しい女性が一人歩いていた。

スレンダーで美しいボディーライン、それをなぞる様にキュートなヒップまで垂れ下がった長い金髪。

その長い髪は、額の前からきっちり半分に分けられ、髪の間からはシャープで美しい顔が覗いていた。

そして、其の美しい顔には青い宝石のような瞳と、スリムな鼻やセクシーな唇が、バランスよく配置されている。

それは、完璧に近い美貌と言っても良いだろう。

周りとは美貌の上限が違う彼女は、白いフワフワしたセーターにデニムスのカートを履き、そして茶色のスラウンジルーズブーツをカツカツ鳴らしながら歩いていた。

その女性は時折辺りをキョロキョロしながら何かを探しているようだった。

「見うしのぉてしもうたぁ……」

彼女は自分を侮辱した若者を追っかけて来たが、不慣れな土地にあっさりと目標を見失い、しかもタケシと分かれたコンビニの場所も、完全に何処に在るか分からなくなってしまっていた。

「ウムゥ～、どうしたものかぇ」

片膝を少し立てた内股で、片手をそっとシャープな顎先に添えると、悩ましいポーズで彼女は何かを考え込んでいた。

その一つ一つの仕草が、何処となく決まっている。五十年ぶりの久々の目覚め。しかも、長年暮らし自分の名前が付いた村を離れてやって来た見知らぬ街。知人も指で数える程度しか居ない。

山の中に引きこもり生活が長かった為、見知らぬ民衆に声を掛けるのも気が引ける彼女は、しばらく立ち尽くし考えていた。

「悩んでいても始まらぬ……かぁ……。まあ、歩いてみるかのぉ」

当ても無く、向う場所も分からず、彼女は歩き始めた。

本格的に困ったのなら、何らかの妖術を駆使して、この状況を打開するつもりであった。

それが強気な自信に繋がっているのだろう。

春婆怒が当ても無く歩き出してしばらくすると、ゴミ捨て場に幾つもの粗大ゴミが置かれているのが目に入ってくる。

薄汚れたテレビ。

子供向けのアニメキャラのステッカーがベタベタ張られたタンス。

茶色い焦げ目の付いた旧型のトースター。

口の掛けた大きな花瓶。

メモ用紙を止めておくマグネットが付いたままの大型冷蔵庫。

ＨＤＤやＤＶＤプレイヤーの外されたデスクトップパソコンとキーボード。

中に腐った食品が入ったままの電子レンジ。

他にもまだまだある。

それらの粗大ゴミには、名前の書かれた紙が貼り付けてあった。

最近ではこうして名前を書き、役所にお金を払わないと、粗大ゴミは回収してもらえない。

年々不当投棄が増える原因でもあるのだが……。

その粗大ゴミの捨て場の前で、春婆怒は足を止めた。

春婆怒は、置かれた粗大ゴミをゆっくりと眺めた。

「まだ二十年、否、十年すら使われておらぬ物ばかりではないか……」

数居る妖怪の中で、『九十九神』と呼ばれる妖怪が居る。

それは、人々に長い事使われた道具が妖怪化した魑魅魍魎の呼び

名である。

昔の人々は、物を大切に使っていた。

現代のように、壊れたからといって直ぐには捨てずに、何度も何度も壊れるたびに修理を繰り返す。

もう本当に限界、もうこれ以上は使うのは不可能と言われるまで修理して、物を大事に使い続けていた。

今で言うリサイクル精神そのものである。

その為、どんな家にも先祖代々受け継がれる様々な道具という物が、一つや二つは有ったものである。

だが、長く使い続けるということは、その道具に情や念が染み付くとされ、百年経った道具は、それが原因で妖怪になると多くの地域で言い伝えられていた。

その為、九十九年が経った年に、妖怪にならないように、お払いや供養を行うのである。

今までの感謝を込め、神様になれるように、火葬などで天に送る儀式や、祭りをおこなう地域が多かった。

こういった、言い伝えから、供養されずに百年経ってしまい、妖怪化してしまった道具を『九十九神』と呼び、百鬼夜行の絵巻などでも多く描かれることとなる。

様々な粗大ゴミの前で、それらをじっと見詰める西洋の美女。

春婆怒もまた、その九十九神である。

ただ、彼女の場合は、家庭で人々の暮らしの手助けに百年の時を費やした道具ではない。

生と死と、血と骨と、殺戮と虐殺、混沌と混乱、そのような殺伐としたものが渦巻く暗黒時代の殺し合いでの百年が、彼女を九十九神に仕立てた。

彼女は、人殺しの道具が変化した九十九神である。

「さて、タケシの居場所も分からぬ、長屋の場所も分からなぬ……、こまったのぉ～」

春婆怒が、そんな独り言を呟きながら歩いていると、後ろから聴き覚えのある声で呼び止められた。

「あら、春子さんじゃない」

「おお、これは奥方殿ではないか」

それは陽子の母、雪絵だった。

「春子さん、こんな所で何をしてるの？」

「ふむ、少々道に迷ってのぉ～」

「あら、迷子になったの？」

「否、そう言った訳ではあらぬ」

「あら、そうなの」

「うむ」

「じゃあ、私これからお買い物だから、またね」

「うむ、さらばじゃ」

そう言って、この場を離れた雪絵の後ろを、春婆怒はぴったりと付いていく。

すぐに雪絵もそれに気付いて、後ろを振り向く。

「あら、どうしたの、迷子になったの？」

「否、そうではあらぬ……」

「そう、じゃあ私これからお買い物に行くから……」

「うむ、たっしゃでのぉ」

そしてまた、雪絵が歩き出すと、其の後ろを春婆怒が付いて回る。

「あら、どうしたの？」

（あと3回ぐらいリピート）

<　九十九神　>（後書き）

もうちょっとで、アクションでーす＾＾

<　動き出す災い　>

商店街の中にある一軒の小料理屋。

親から子へ、子から孫へと三代受け継がれてきた小さな店。

ここしばらく店の暖簾は出されておらず、古びた和風の扉には「都合により、しばらく休業いたします。」と描かれた張り紙がされている。

長いこと店は開いてないのか、その張り紙を止めているテープの一箇所が剥がれて、風で時折揺れていた。

窓や入り口の隙間から入る僅かな明かりで、静かな店内をぼんやりと照らしている。

薄暗い店内。外からはまだ、明るい人々の声が聴こえてくる。

その店内に有る色々な物に、何やら紙切れが張ってあった。

カウンターの六つの椅子や、小さな畳座敷に有る二つの漆塗りのテーブル、それを分ける骨董な感じの屏風、天井の角に置かれた古いテレビ、入り口横のレジ、その横の招き猫の置物、カウンター裏の厨房には業務用の大型冷蔵庫、諸食器棚には様々な高価そうなお皿や器、他にも数々の調理道具があるが、それらの全ての物に『差し押さえ』と描かれた赤い紙が張られていた。

この店内で赤い紙が張られていない物といえば、天井の隅に奉られた神棚のみである。

この店は潰れたのであろう……。

店内のカウンター裏、厨房に有る銀色のステンレス扉の大型冷蔵庫。

その大型冷蔵庫の足元に、よりかりながら座り込む男の姿があった。

男は、白い和風の割烹着に、黒い前掛けおした、板前風の姿をしていた。

そして裸足に木のサンダルを履きながら、手にした刃渡り２２５ｍｍの本焼鎌型薄刃包丁を、ゆらゆらさせながら眺めていた。

「なんで、旨くいかないんだろ……」

男は包丁を眺めながら、気力の無い白い顔で呟いた。

「俺の腕じゃあ、おやじの味を超えるどころか、並ぶ事すら出来ないのかな……」

先代の父が急死して、修行半ば場で受け継いだ小料理屋の看板。

この未熟な息子では、一年と持たずに客足を減らしていった。

客足が途絶え、貯金が日に日に減っていき、やがては店や土地の権利を担保に金を借り入れたが、それでも伝統の有る店を建て直す

事は出来ずに、今ではこの有様である。

男は座ったまま、包丁を眺めていた。

「もっと修行を積めば良いのかな、それとも経営学をもっと勉強しないと行けないのかな……」

男は包丁を高く真っ直ぐに立てて見上げる。

「腕がダメなら、素材でカバーなのかな……」

男はゆっくりと立ち上がると、背にしていた大型冷蔵庫の扉を開けた。

冷蔵庫からは白いドライアイスのような冷機が流れ出ると、しばらくして中の様子が伺える。

冷蔵庫内の各棚に置かれた品物は、霜が凍り付いて真っ白な色になっていた。

「冷凍じゃあ、ダメだよな」

男は包丁を持ってない手で、冷蔵庫の中の凍り付いた品物を取り出す。

それは、人の腕。

冷蔵庫の中には、何やら細切れの肉が入ったタッパの他に、人間と思われる腕や足、肋骨や頭やらが冷凍されて入っていた。

その手足や頭の数から、一人や二人の人数ではないことが見て取れた。

「やっぱり素材で勝負するならば、冷凍品より新鮮な素材だよな。じゃないとお客さんも喜ばないよな……」

男は手にしている腕を冷蔵庫に戻すと、バタンと音を立てて扉を閉める。

「よし、新鮮で美味しそうな素材を仕入れに行こう。そうだ、良い物を仕入れないと」

男は包丁をブラブラさせながら、木のサンダルを引きずる様に、勝手口の方へと歩き出す。

外は、そろそろ日が落ち始める時間だった。

男は何処で、どんな素材を仕入れる積もりなのか、口元が僅かに微笑んでいた。

<　コンビニの仲間達・プラスワン　>（前書き）

ごめん、ちょっとメタメタ　＞＜、

<　コンビニの仲間達・プラスワン　>

タケシは、カウンターで買い物客のレジを打っていた。

パートナーの井川は、お客がいじくり回した商品の陳列棚を整理している。

タケシがレジを打ち終わると、お客の暖めたお弁当を袋に入れて手渡す。

お客は、買った商品をタケシから受け取ると、店外へと出て行った。

暇になったタケシが店の中を見渡すと、雑誌コーナーで立ち読みをしている高校生が一人居るだけだった。

タケシはガラス越しに薄暗くなり始めた店外を見る。

そして、遅刻しそうで急いでいたとはいえ、春婆怒をほったらかしにしてしまったことを気にしていた。

あれから五時間は過ぎているが、春婆怒は戻ってきていない。

まるで鎖をはずして一時だけ自由にしてやったペットの犬が、なかなか帰ってこないような気分だった。

「まあ、いざとなれば自分でどうにかするだろう、子供じゃあないんだし。それどころか人間ですらないんだし……」

タケシが外を眺めていると、詰め所で伝票整理をしていたオーナー鈴木が、メタボリックなお腹を揺らしながら出てくる。

手には一枚の紙を持っていた。

「ちょっと井川君、こっちに」

オーナー鈴木はタケシの居るカウンター内に入ってくると、棚整理をしていた井川をこちらに呼び寄せた。

オーナー鈴木が持ってきた紙は、今月のバイトメンバーのシフトであった。

「あのね、今さ、夜のシフトに入ってた安田君から電話が有ってね。今日1時間ぐらい送れてくるからって言うのよ。だから悪いんだけど、どちらか安田君がくるまで残って残業してもらえないかな」

口元を笑わせたタケシが拳を握り、指をポキポキ鳴らしながら答える。

「いいですよ、俺が残ります。平気で遅刻するあの野郎を、本気でドツキたかったと思ってた頃ですから」

自分が何時も遅刻ギリギリで来て、タイムカードを必死に押しているというのに、夜のバイトの安田と呼ばれる男は、何時も遅刻しそうになると電話で言い訳をして、今日のように遅刻してくる。

タケシはそれが無償に腹正しく思っていた。

タケシの「本気でドツキたい」と言うセリフは、冗談ではなく本

気の本気であった。

「あーーーーーー！。オーーーーナーーー！！。僕、今月生活費厳しいんですよ、だから僕残ります、ねっ、ねっ。ごめんなさいタケシさん、そう言う訳なんでいいかな！？」

「ああ、それじゃあ井川君にお願いしようかなーーー、ねーーー、堂本くーーん！！」

井川はタケシの殺気を察して、声を大きくさせながら割り込むと、慌ててオーナー鈴木も話しを合わせる。

安田と呼ばれるバイトの男は、以前にも詰まらない理由からタケシの癇癪に触れ、脳天に強烈な空手チョップを食らって白目を向いたまま失神騒ぎになった事が有る。

井川とオーナー鈴木は、其の時の事を思い出すと、必死にタケシの怒りを押さえようとしていた。

「ん～、そこまで言うなら井川にまかせるが……」

「アハハハハ、タケシさん、すみませんね～～～」

「じゃあ、井川君、残業おねがいねーー、ワハハハハハ！！」

「分かりましたオーナー、アッハッハッハッハッハッ！」

オーナー鈴木の引きつった笑いに、井川も合わせてぎこちなく笑う。

タケシは仕方なく承諾するが、まだ喉に何か詰まっているような表情をしていた。

バイトの安田は知らず知らずの内に命拾いをしていた。案外運の良い世渡り上手なのかもしれない。

そして、一人、雑誌コーナーで立ち読みしていた学生が、レジカウンターから聴こえてくる奇怪な複数の笑い声に、目を丸くして唖然としていた。

<夜道>

日が落ちると、街のあちらこちらにネオンの光が灯り始める。

彼女は、五時までのバイトを終えると、アパートへの帰り道に有る商店街のスーパーマーケットに寄り、夕飯の材料と明日の朝食用の食パンを買って、帰宅する途中であった。

彼女は片手にバック、もう片方の手にスーパーの買い物袋を持ち、慣れた帰り道を楽しそうな表情で歩いていた。

年の頃は十八歳ぐらいであろうか、スーパーの買い物袋が自立した女性のイメージをさせていたが、顔付きは若干だが幼さを残していた。

今日はスーパーで、豚のひき肉とお豆腐が安かった為、夕飯のおかずをマーボー豆腐に彼女は決めた。

仕事に疲れて夕飯は簡単な物を作ろうと決めていたので、ちょうどいい献立だと鼻歌まじりで自画自賛しながら歩いていた。

時折、軽やかなスキップを見せる彼女。その表情は新婚の若妻のように楽しそうな笑みであった。

そして彼女は、商店街を抜けて住宅街に入る。

「ふんふうふうーん」

携帯に彼氏から届いたメールを見る彼女は、鼻歌が止まらないほ

ど充実感が溢れていた。

何が嬉しいのか、何が幸せなのか、彼女は幸せな表情で帰宅の道のりを急ぐ。

その仕草は、彼女の歩いた後に、満開の花を咲き誇らせていた。

今が幸せの絶頂期を迎えている彼女は、周りの異変に気付くことはなかった。

ほんの少し注意していれば気付くだろう異常。

浮かれ心で携帯の返信メールを打ってなければ、気付いていただろう異変。

彼女が気付かなかったほんの少しの異常とは、既に日が落ちた住宅街に有った。

電信柱に設置されている街灯が、道を明るく照らしていた。

だが、周辺の民家からは、明かりが一軒も漏れていなかった。

それがただの偶然なのか……。

この通りの民家だけが、たまたま全部留守なだけなのか……。

それに気付けば、なんて寂しげな住宅街だと思ったのだろう。

しかし彼女は、鼻歌まじりでメールを打つのに没頭して、それに気付くことはなかった。

人気の無い住宅街を歩き続ける彼女が、完成したメールを彼氏に返信すると、携帯電話をパタリとしめてカバンの中にしまった。

カバンに携帯をしまった彼女が、寂しい住宅街の様子に気付くよりも先に、少しはなれた進行方向の電柱に有る街灯の下で、不気味に街灯の光に照らされて居る一人の男の存在に気付いた。

和風の白い割烹着に黒い前掛けを腰に巻いた板前風の男。

商店街や繁華街ならまだしも、明らかに住宅街に居るような格好ではなかった。

その板前は、彼女の気付かなかった、この場に流れる異様な空気を、具現化させたような存在だった。

今まで幸せ全開だった彼女の背筋に、嫌な物が走った。

板前風の男は、力なく俯き、後頭部から電灯の光を浴びて、その顔の様子は影に隠れて窺えなかった。

それが更に怪しさと不気味さを醸し出す。

この道を進まなくては、彼女の住むアパートまでは行けない。

別の道も有るのだが、今からでは遠回りになってしまう。

疲れている彼女は、板前風の男の前を、気持ち悪いが通り過ぎることにした。

彼女は、板前風の怪しい男を避けるかのように、道の反対側の壁際すれすれを、肩を強張らせながら通り過ぎる。

その間も板前風の男は、じっと動かずに、電灯の明かりで出来た自分の影を見るように下を向いたままであった。

遊園地のオバケ屋敷で、今にも動き出しそうな幽霊の蝋人形を通り過ぎた後に、やっぱり何の仕掛けも無く安心したお客の様に、彼女はほっとした溜息を吐く。

しかし安心したところに、不意を付いたドッキリが来るものだ。

少し歩くと彼女は男が気になり、後ろを振り向く。

だが電灯の下には男の姿はもう無かった。

彼女は少しキョトンとした表情をして首を傾げた後に、再び前を向きなおす。

そして何事も無かったように、帰宅の足を進めるつもりだった。

だが、前を振り返った彼女の目の前に、大きく目を見開いた男の白い顔が有った。

「ひっいぃ！」

いきなり現れた男の顔は、ほんの数センチの距離まで、いつの間にか迫っていた。

あまりもの驚きに、まるで豚の悲鳴のような声を彼女は上げた。

しかし、それ以上の声は、彼女の震える口から続いて出ることはなかった。

目の前の男は、手に有る長い包丁を、横一線に振るう。

「ぁぁあぁぅぅ……ぅぅぁあ……」

そして彼女は、今度は直ぐに気付く。

自分に起きた異変に。

体から力が抜けて、両膝をアスファルトに打ち付けた。

その理由が、自分の首から噴水の様に吹き出る出血が原因だと直ぐに理解できた。

彼女はもっと早く気付くべきだった。

この住宅街の人気の無さに。

その異常な空気に。

気付いていれば、幸なまま帰宅できたのかもしれない。

「いい素材を仕入れたぞ……うへ」

板前風の男は、首から血を吹き出しながら、足元に倒れこむ女性を見下ろすと、満面の笑みを作った。

<　夜道　>（後書き）

次は、やっとアクション出す！

<　空手の攻防・1　>（前書き）

うっしゃー、いっちょ、やりますかー！

<　空手の攻防・1　>

結局タケシのバイト時間が終わるまで、春婆怒は返ってこなかった。

タケシは、何故かイライラしたので、井川が止めるのを聴かずに、もう一時間残って遅れて来た安田をひと殴りしてからバイト先のコンビニを出た。

その手には、賞味期限の切れたお弁当と幾つかのおにぎりの入ったビニール袋が持たれていた。

それらは、今晩の夕飯になる。

タケシがコンビニでバイトを始めようと思ったのも、この賞味期限切れになると廃棄されてしまう、お弁当などが目当てであった。

タケシは学生時代に、コンビニでバイトをしていたクラスメイトから聴いたことがあった。

賞味期限の切れたお弁当などは捨てられてしまうだけなので、バイト連中がレジで廃棄登録後に、こっそりキープして家に持ち帰ることを。

それを思い出したタケシは、食費を浮かせる為にコンビニでのバイトを始めたのである。

タケシは、今晩の夕飯をリックカバンに詰めると、バイクでコンビニの駐車場を出て住んでいる古いアパートを目指した。

バイクで走る町並みは、既に暗くなっていた。

タケシの乗ったバイクは、サラリーマンが同僚と飲みに繰り出す姿が増えてきた、繁華街を抜けて住宅街へと入っていく。

けたたましいバイクのエンジン音、それだけが住宅街に鳴り響く。

「……」

車とすれ違わない。

人ともすれ違わない。

住宅街に入ると、今までと空気の色が変わった。

そしてタケシは、住宅街の静けさにバイクを止めた。

何かが可笑しいと。

タケシは、フルフェイスのヘルメットを取ると、バイクに又がったままエンジンを止める。

そして辺りをゆっくり見回す。

「静かだな。まるで丑三つ時のようだぜ……」

まだ午後七時ぐらいだというのに眠ってしまったかのように静ま

り返った住宅街。

タケシもまた民家のどの部屋からも、明かりが漏れていないことに気付かなかった。

ただ、静かな住宅街の風に、何か違和感を強く感じていた。

「ん？」

バイクを止めたやや右前方。

そこには、古い町工場の建物があった。

昔ながらのコンクリートのブロック塀、敷地内に入る門は鉄パイプを溶接して作られた牢獄の檻のようなお手製門。

その門から、枯れた雑草に挟まれた砂利道を、五～六メートル進んだ所に、トラックの搬入口の大きなシャッターが有り、時折突風に吹かれてさび付いた音をキィーキィー鳴らしていた。

工場事態は閉鎖されて長いのか、窓のガラスは薄汚れており、割れてガラスが完全に無くなっている窓も有った。

敷地ないに入る鉄の門を、施錠してあった鎖と鍵は外されてだらしなくぶら下がり、門は人一人がゆったりと入れるぐらいに開いていた。

タケシはバイクを降りると、工場の入り口までバイクを押していく。

「なんだ？」

タケシは何かを感じていた。

この灰工場が、この静けさを生む奇怪な空気の発生源であるのではないかと。

バイクを路上の角に止めると、タケシは檻の様な門から灰工場敷の地内を覗き込む。

上下に開け閉めできる大きなシャッターの横に、アルミのドアがある。

ガラスが割れても、破片が飛び散らないように針金が網目状に入った曇りガラスは、罅が蜘蛛の巣状に入っている。

しかし網の目の針金のおかげで、ガラスが抜け落ちずに済んでいた。

そのアルミのドアの曇りガラスから、うっすらと光がもれていた。

タケシは、鉄の門をすり抜けると、砂利を僅かに鳴らしながらシャッターの横に有るアルミドアに近づく。

そしてドアノブに手を描けた。

鍵は掛かっていなかった。

タケシは、ドアを開けると、明かりの漏れる工場内を覗き込む。

二十五メートル四方ぐらいの大きさだろうか。

工場内はこれといって物は無く、高い天井は柱の鉄骨がむき出しで全ての電灯は消えていた。

しかしコンクリートの床に、蛍光灯型の懐中電灯が置かれ、灰工場内の隅々までを、ぼんやりと照らしていた。

<　空手の攻防・2　>

そしてタケシが入ってきたアルミのドアとは対角線の隅に、その光に照らされ何かが蠢いているのに気付く。

タケシは、工場内に踏み込むと、蛍光灯型の懐中電灯が照らし出した、何かに向って歩きだした。

「ちっ」

舌打ちをするタケシ。

その向こう側の何かが何であるかを、はっきりと確認したタケシは、バイト先の安田よりもムカツク感情が沸き上がってきた。

「えへ、えへ、えへ」

それはしゃがみ込む男の背中。

その向こうには、両足を黄色と黒のトラロープで縛られ、壁に逆さ釣りに去れた女性の哀れな姿が有った。

首、手首、脇の下、両足のモモの内側、彼女の大きな頚動脈は全て斬られ、滝の様に流れ出した血液は、頭の下でベコベコに凹んだバケツで受けとめられていた。

「この野郎」

タケシの声に怒りの感情がこもっていた。

しゃがみ込んでいた男は、タケシの声に一度振り返ると、背を向けた状態でゆっくりと立ち上がった。

男は、白い和風の割烹着に黒い前掛け、素足に木のサンタルを履いていた。そして、その手には刃渡りの長い料理包丁をギラつかせている。

「テメーが噂のバラバラ殺人犯か……？」

男が振り返る。

「……えへ」

薄気味悪い返事を返す男の後ろで、衣類も顔も、自分から流れ出る血で真っ赤に染めた、吊らたれた哀れな女性。

目を見開いているが、その眼球すら真っ赤に染まっている。

もう手遅れなのはタケシの目にも明らかだった。

工場の中央に向って二人はゆっくりと歩き始める。

コンクリートの床に僅かに散らばる米粒大の小石が、二人に踏まれてジャリジャリと音を鳴らす。

住宅街同様、静かな工場内。

二人は、灰工場のほぼ中央で向かい合う。

「うへ」

タケシは、男と向かい会い始めて気付いた。

板前風の男は、半笑いで白目を向いていた。

それは完全に、正常な人間の表情ではなかった。

「お客さん、まだ仕込み中でっせ」

板前風の男が、料理包丁を大きく振りかぶる。

その瞬間、灰工場内に乾いた音が鳴り響いた。

板前風の男が包丁を振りかぶると同時にタケシの左ジャブが、板前風の男の顔面にフラッシュの如く打ち込まれたのである。

「ほへぇ！」

自然体のタケシから突然くり出された攻撃に、板前風の男は視界をチカチカさせてよろめく。

そして、その顔に有る鼻は曲がり、ダラダラと口元へと血が流れ落ちる。

だが、この男の被害にあった吊られた女性に比べれば、マダマダ少ない。

続いて右左のワンツー、右フック、左のショートアッパー、右ボディープロー。

タケシのコンビネーションが、次々と男に叩き込まれた。

板前風の男は、体をサンドバックの様に揺らす。その一撃一撃が、肉と骨とが奏でる音となってタケシの拳に伝わってくる。

「りいいいいいやっ！」

どてっ腹への後ろ中段後ろ廻し蹴り。

タケシが、フィニッシュと言わんばかりの気合の入った蹴りを放つと、板前風の男は後方へと飛ばされていく。

そしてゴロゴロと転がり、吊られた女性の居る横の壁に激突して止まる。

タケシは、「どうだ」と言った顔で男を見るが、板前風の男はムクリと何事も無かったように俊敏に立ち上がった。

「ちっ」

会心の攻撃の数々を浴びせたのにも関わらず起き上がる板前風の男を見て、タケシが舌打ちを漏らす。

「あはぁはぁはぁ」

板前風の男は笑いながらタケシの居る中央へと歩き出すと手にした包丁をまた振りかぶった。

「そら」

包丁を振りかぶりながら歩み寄った板前風の男の足が揃った瞬間、タケシは体をかがめると同時に体を捻りながら水面蹴りを放った。

板前風の男は、両足をそろえたまま大きく足を払われ宙を舞い、一人バックドロップの様に頭からコンクリートの床に落ちた。

「とう！」

水面蹴りを放ち、しゃがんだ状態だったタケシが、そのままジャンプをする。

そして全体重をかけたニードロップを、倒れている板前風の男の顔面に叩き落す。

鈍い音が二度した。

板前風の男の頭部が、膝とコンクリートの床に挟まれ、鈍い音を二度鳴らしたのである。

タケシは、板前風の男の顔面から膝を離すと、立ち上がって鼻の陥没した男の顔を見下ろした。

「今度こそ死んだだろう……」

最初から、殺す気だったらしい……。

<　空手の攻防・2　>（後書き）

０８／０８／２８時点、２０００アクセス突破！ｗ。

これも全て、お読み頂いてる皆様のおかげです。

これからも若輩ながら、皆様の起きたいに答えられる様な作品を書いていきたいと思います。

今後も是非よろしくお願いします＾＾

<　空手の攻防・3　>

倒れたままの板前風の男が、タケシの足を目掛けて包丁を振るう。

「わっ、あぶね！」

タケシは、両脚を抱えながらジャンプをして、その攻撃を危機一髪で回避した。

「ウガァガァガァガァ」

板前風の男が、尚も立ち上がる。

それを見てタケシは、ガッカリと肩を落とした。

「まあいいさ。起き上がるんなら、何度でも叩きのめしてやるさ」

気付けば起き上がった板前風の男の腕や脚などが、空気でも入れたのかの様にパンパンに膨れあがっていく。

「ウガァガァガァガァァァァ」

「ん〜？」

野獣の様な叫び声を上げる板前風の男。その身長が伸び始めると、タケシの目の前の男は、巨人のように大きくなっていった。

「ははっ、これからが本番ってことかぁ〜」

巨大化した板前風の男の身長は、二メートル半は有るだろうか。

腕は鍛え上げられたボディービルダーの様に引き締まり、両脚はサッカー選手の様に太く、胸板は中に鉄板でも詰め込んだかの様に盛り上がっていた。

その全てが並みの人間サイズを超え、まさにジャイアントサイズといえるだろう変貌を遂げていた。

しかし、腹だけは贅肉がタプタプと残っていた。

「でかいな……」

そして男の顔は、堀が深くなり、顎はエラが張り、額には二本の角が生えていた。

更に衣類は破けていたが、手に有る料理包丁だけが、体に合わせて巨大化していた。

「なるほどね、鬼ってわけかよ」

タケシは、故郷の春婆怒村での鬼々蜘蛛との一件を思い出していた。

「最近骨のある野郎と戦かえるのは良いが……、化け物ばかりだぜ。運が良いんだか悪いんだか……」

その化け物の中には、自分の祖父『堂本拳四郎』も入っている。

「ウガァガァガァガァァァァウガァァァ！！」

百人が見て百人が鬼だと言うぐらいの立派な鬼と化した板前風の男。

鬼はワイルドな獣の様に吠えて、タケシの目の前で威嚇する。

「きたね！、唾を飛ばすな！」

そう言いながらタケシは鬼の懐へ入り込む。

まるで流れる水の如く、まるで火を煽る微風の如く、鬼との間合いを詰めたタケシ。

あまりに自然と同化した動きに、鬼と成った板前風の男は、反応すら出来ずタケシが懐に入り込むのを許していた。

「ふぅぅ！」

その勢いのままタケシが放つ全力の正拳突き。

それは、鬼の出っ張ったお腹に叩き込まれると、贅肉をねじりながら手首までめり込んでいく。

しかし……。

「ん～～……、この感触、効いてないかな」

軟らかい贅肉の向こうは、まるで分厚く巨大なブルドーザーのタイヤの様な手応え。

「うがぁがぁがぁがぁがぁぁぁ！」

鉄を殴ったような音がした。

鬼の左アッパー。

「ふご！」

タケシは、鬼のいきなりの反撃を両腕でガードした。

しかし、クレーンに吊るされている鉄球をぶつけられたかのような衝撃に、体ごと吹き飛ばされ、数メートル後方に有る大型シャッターの二メートルぐらいの高さの位置に激突した。

「ぐは！」

そして、タケシは二メートルの高さを、尻から床に落ちていく。

<　空手の攻防・4　>

タケシは痺れる両腕を見た後、鬼に視線を向け、ゆっくり立ち上がった。

「やめやめやめ、格闘技ごっこは終わりだ」

タケシは首を左右に捻ると、ゴキゴキと派手な音を鳴らす。

「ここからは、本物の堂本流で行くぜ！」

今まで見せていたスポーツ空手では、この鬼にかなわないと判断したタケシ。

より危険度の高い、堂本流空手の技を解禁を心に決めた。

空気が僅かに揺らめいた。

そしてタケシは、自然体に歩みでゆっくりと鬼に近づき始めた。

まるで散歩にでも出るかの如く、ゆったりとした歩法。

まるで親しい友人に、歩み寄るかの如く、ゆっくりとした歩法。

そして鬼は、何故か再びタケシの接近を許していた。

「ウガァガァガァァァァァ！」

鬼の懐に、すんなり入り込んだタケシ。

そのタケシが、敵であることを思い出した鬼は大きく吠えた。

「うっさい」

「ウゴホッ！」

身長差の為、下から突き上げる様な形となった抜き手。

そのタケシの抜き手は、鬼の喉仏に四本の指をめり込ませていた。

抜き手をもろに食らった鬼は、涎をまき散らかしながら咽こむ。

続いて弓の弦を引き寄せる様に自分の胸元まで上げられたタケシの膝。そして、狙いを定めて放たれた弓矢の如く足刀。

「せぃ、せぃ」

二発の連続蹴りが狙った先は、鬼の脛と、足の小指。

「ウガァァ！」

声を上げた鬼は、膝を立て、空いている左手で脛と小指を交互に撫でまわす。

「よっと」

続いてタケシのサッカーボールを蹴り上げる如く放った前蹴り。

それは、鬼の股間を突き上げる様に炸裂した。

「ウガァァァ……ガァァァ……ウゥゥガァァァ……」

股間を蹴り上げられた鬼は、顎が外れそうなぐらい口を開いて、男のみが体験できる苦痛を掠れた声で表現した。

「鬼でもちゃんと急所は、人間と一緒なんだな」

タケシの言う堂本流とは、こう言う物だ。

脛を蹴り、足の指を踏み、喉を突き、股間を蹴り上げる。

時には目を突いたり、鼻の穴に指を突っ込んだりもする。

そんな技を空手ではないと言う人も多いだろう。

だが、堂本流の空手とは、そういうものである。

相手の弱点や急所を素手で突き合うのが死闘。

それが武士（もののふ）の空手道。

「おらぁぁ！」

大きく振りかぶってのタケシのパンチ。

放った先は、股間を蹴られて苦痛の余りに大きく開いた鬼の口の中。

「ごほっ、うぼっ！」

タケシは、放った拳を喉の奥へと力任せに突き入れていく。

それは、堂本流の対熊用の技。

猛獣とて喉の奥に腕などを突っ込まれると、どんなに鋭い牙を持っていても口を閉じられなくなる。それは、動物の本能であり仕組み。

決して突っ込まれた腕を噛み切ることが出来なくなるのだ。

そして呼吸すらまま成らなくなり、いずれ絶命を迎える。

「どうだ、コンチキショウが！」

熊と戦った事の無いタケシは、この技を始めて使う。

その相手が、まさか熊ではなく鬼を相手に使うとは思ってもみなかった。

捕まれた。

「あっ」

鬼は、タケシの肩を鷲掴みにすると、タケシを引き離す様に口の中からタケシの腕を引き抜いた。

そしてタケシの肩を掴んだまま吊り上げると、右や左に無造作に振り回した後に手をはなす。

タケシは、赤子が飽きた玩具をポイする様に投げ捨てられた。

そして、床も、天井も、壁も、敵も、被害者も、空中で回りながら一瞬だが全てを見回した後、コンクリートの床に着地した。

「うお、足が痺れる……、肩も外れるかと思った！」

そう言いながらも自分でもよく足から着地できたと、タケシは少し自画自賛していた。

「ウガァガァガァガァァァ！！」

「何やかんやいっても体格差がデケーな～、おい」

熊対策の空手技も余り効果を発揮していなかったことにタケシは歯がゆく感じていた。

「さて、どうしたもんかな」

流石のタケシも、そろそろ打つ手が無くなってきたらしい。

今まで自分の全てを注ぎこんだ、危険度全快の空手技すら全く効いていない。

ここに来てタケシは、自分の全てが不甲斐無く思えてくる。

「ウガァガァガァガァァァ！！」

腕力、体格、生命力、純粋な野生の力、鬼が持つ妖気。

タケシは、それら全てを人では超えられないのかと思い始めた。

そして、そんなことを思う自分の心の弱さにも腹がたった。

その時、何かが飛んできた。

「ウガァァァァァァ！！」

風を切る音が僅かにすると、次の瞬間、鬼の背中に何かが刺さった。

「！？」

その風切り音が、更にいくつも続く。

「ウガァァァァァァァァァァ！！」

次々と風切り音を鳴らして飛んできた物は、鬼の肩や胸、足へとザクザク刺さった。

「しゅ……手裏剣！」

タケシが言った。

飛んできた物は、忍者の専売特許品、十字手裏剣だった。

それが飛んできた方向は、薄暗い工場の天井、むき出しになった鉄骨の影からである。

「君、今のうちに逃げなさい」

天井の鉄骨の影。

穴の開いた屋根の隙間から入る月光に、うっすらと映る人影。

グレイのスーツに黒い布を巻いた覆面の男。

背中には日本刀を背負い、スーツ以外は、まさに忍者といった成りであった。

「逃げろだと！」

タケシの怒鳴り声は、薄暗い天井の鉄骨の影に潜むスーツの忍者にもはっきりと聴こえた。

「あー、なるはど、そう言った手も有ったか、忘れてた」

「え……」

タケシの顔が和らぐ。

タケシは、逃げることが恥ずかしいこととか、情けないこととは思っていない。

タケシは、一部の人間にしか敗北をしたことがない。

幾度もピンチを味わっても来たが、逃げるという選択しを取ったことが無かった。

勝とうが負けようが、勝負を途中で投げ出すことはなかった。

だから逃げることは、今まで思いつきもしなかった。

どっちが強いか、どっちが弱いか、どっちが勝者で、どっちが敗者か。タケシはそういったことを白黒はっきり付けたい性格である。

相手が逃げることはあっても、自分が敗北せずに逃げるといった行動を取ったことがない。

タケシは負けると分かっていても、逃げずに最後まで戦う理由があった。

敗北、それは明日へ繋がる経験になるからだ。

大切なのは経験値。

勝利も、敗北も、今日より、昨日より、明日よりも、強くなる為の経験値そのものなのだ。

その為、この場で逃げるという選択肢が考え付かなかった。

だが、ここでの敗北は、死に繋がるのは間違いない。

死んでしまっては、今日よりも強くなった明日の自分が存在しなくなってしまう。

それだけは避けなくてはいけない、重大な目標だと気付く。

「何所の何方かは存じませぬが、助かったでござんす。ここは貴方にお任せしやすので、あっしはこれで！」

相手が忍者だと思ったタケシの口調は、何故か時代掛かったものに変わる。

「あ……あぁ……」

スーツの忍者は、若干戸惑っていた。

タケシはそう言うと、自分が工場内に入ってきたアルミのドアを勢いよく開け、外に飛び出していく。逃げたのだ。しかも全力で。

「あ～～、本当に行っちゃった……」

スーツの忍者は、タケシの出て行ったアルミのドアが揺れるのを見ながらそう言うと、視線を鬼に戻す。

「ウガァガァガァガァァァ！！」

「さて、八尾君に連絡して、こいつの始末を付けてもらおうか……」

そう言い男はスーツのポケットをパタパタとした後、何やらショボンとした顔をさせた。

「あっ、携帯を事務所のテーブルの上に忘れてきたよ……」

「ウガァガァガァガァァァ！！」

鬼が天井に潜むスーツの忍者に叫ぶ。

「仕方ない。あんまり得意じゃあないんだけど、式神を使って連絡

を付けるかな～」

男は、スーツの内ポケットから一枚の御札を取り出すと、何やら呪文のようなものを唱え始める。

「よし、出来た」

御札はあっと言う間に、一匹のカラスに変わると、天井の隙間から外へ飛び出そうと羽ばたく。

だが……。

「ウガァァガァガァガァァァ！！」

ザクッ！。

「あああああぁぁぁぁ！！！」

鬼が、手にした包丁を無造作に振るうと、狙ったのか運が良いのかは分からないが、忍者の男が作ったばかりの式神のカラスを一刀両断にしてしまう。

「何て事するーーーー！、P―ちゃんがーーーー！！」

<　今日の出来事　>

けたたましいエンジン音のバイクが、古びたアパートの前に止まる。

既に日は落ち、時計の針は八時を刺そうとしていた。

タケシは、バイクをアパートの奥にある屋根つきの小さな駐輪場に止めると、鉄の階段をトントントンと軽快な音を立てながら駆け上る。

階段を駆け上るタケシは途中で足を止めると、少し高い位置から周りを見回した。

近所の家々の部屋には明かりが灯り、にぎやかな家族の笑い声やテレビの音が聴こえてくる。

タケシは、そんな景色を確認すると、また階段をのぼり自分の部屋を目指して動き出す。

２０３号室と表示されたドアの横に、プラッチックの標識には、油性マジックで、「堂本」と書かれてある。

更にその横には、角材で出来た柵があり、その奥に曇りガラスの窓があった。

その曇りガラスに暗い室内の窓際に置かれた、洗剤や歯ブラシの刺さったマグカップのシルエットが、うっすらと映っていた。

タケシは、ジーンズのポケットから部屋の鍵を取り出し、鍵穴に鍵を刺そうとしたところで手を止めた。

「鍵、開いてるな」

鍵を右左に回した時の鍵穴の向きの違いに、鍵が閉まってないことにタケシは気付いた。

部屋を出る時、確かに鍵を掛けたと思いつつもドアノブを回しそのまま部屋へと入っていく。

薄暗い部屋の中、カーテンの隙間から、街灯の光が入ってきていた。

その光でタケシは、天井からぶら下がっている、電気のスイッチの紐を見つける。

タケシは紐をカチャカチャと引き、電気を付けた。

「うわっ！」

輪っかの電気が、暗かった部屋を照らす。

するとタケシは、部屋の隅で正座をしている春婆怒に驚く。

「おどかすなよ春婆怒！」

「よくぞ、帰ったのぉタケシ」

「そりゃあ、帰ってくるさ、自分の部屋だし。それより、お前こそ

返ってたのかよ」

「うむ、町で道に迷ってのぉ。ほとほと困り果てているところに、桜木の奥方殿におうてのぉ。この長屋まで道案内をしてもろうたのじゃ」

「お前、迷子になってたのかよ」

「たわけ！、そんな訳がなかろう！」

「何故にむきになる……」

「ふん！」

ヘソを曲げてそっぽを向く春婆怒は、部屋の角で正座をしながら、何やらガラクタを弄くり回していた。

分解された目覚まし時計や皮のベルト、小さなファンのついた機械やら、良く分からない物が畳の上に散らばっている。

「春婆怒、お前真っ暗の部屋の中で何してるんだよ。電気ぐらい付けろよ」

「わらわは暗くても見えるのでのぉ。正確に申すと、視覚で物を見ている訳ではないのじゃ。明かりは不必要なのじゃ」

「ほー、そうなん。……じゃあ、その目は飾りか？」

「ふむ、飾りじゃ。人に擬態しているだけじゃ」

「そ……そうなん……」

タケシは、冗談の積もりで言った事が思わず正解して、少しどもってしまう。

「で、何してんだよ？」

そう言いながらタケシは、部屋の壁に立てかけてあった折りたたみの小さなテーブルを、部屋の中央に広げる。

「うむ、これかえ」

部屋の中央に広げられたテーブルの上に、バイト先からゲットしてきた賞味期限切れの弁当二個と、おにぎり七個をタケシは無造作に取り出すと適当に並べた。

「これはのぉ……出来てからのお楽しみじゃ」

春婆怒は、満面の笑みで答えた。

分解しているのではなく、何かを作っているらしい。

「ふぅ～……」

タケシは、テーブルの前に胡坐をかき、ベリベリと弁当やおにぎりの封を開けていく。

春婆怒が何を作っているかは、余り興味があるわけではないようだ。

そして、ガツガツと弁当を食べ始めるタケシ、その横で尚も春婆怒は、ガラクタを組み立てて居る。

「なぁ、春婆怒」

「なんじゃ？」

一個目の弁当を食べ上げたタケシが、二つ目の弁当にハシを付けながら春婆怒に話しかける。

「今日よ、バイトの帰りに『鬼』とやり合ったんだが……」

春婆怒は、手を止める事無くガラクタを組たてる。

「ふぉ、で、倒したのかぇ？」

タケシは、ほおばったおにぎりを飲み込むと春婆怒に答えた。

「いいや、倒せなかった」

「……なんとぉ、なさけなや」

「やっぱり鬼ぐらい素手で倒せないと恥ずかしいよな？」

一般常識では、そんなことはないと思います。

「御主、素手で外れ鬼と戦こうたのかぇ、それは無理じゃ」

春婆怒は手を止め、タケシを驚きとあきれた表情で見る。

「でも、鬼々蜘蛛とやり合った時に火薬を使わず、気の通った攻撃だったら素手でも妖怪変化を倒せるって聴いたぞ」

「まあ、理屈的には間違いではないがのぉ。気の無い攻撃は妖怪には効かぬ、素手ならば自然と気が宿るからのぉ」

「でも、鬼には効いてなかったぞ」

「それは御主の攻撃が弱かったからじゃ。武装せずに外れ鬼と戦うと言う事は、例えるのならば素手で熊と戦う事と同様じゃ」

「熊なら素手で倒せると思う。田舎のじいちゃんは何匹か熊を倒しているからな」

「まあ、外れ鬼を素手で倒すのは至難じゃぞぇ。昔の侍とて、武装して十数人で掛かりで、倒せるか否かだからのぉ」

そう言うと春婆怒は、タケシの「熊なら倒せる」宣言を、さらりと受け流し、またガラクタをいじくり始める。

そしてタケシも、食事を再開した。

「ところで、あの鬼は、外れ鬼って言うのか?」

「ああ、そうじゃ」

「何で知ってるんだ、見てもいないのに?」

タケシが不思議そうな顔で問いかける。世の中、鬼と言ってもいい色々な鬼が居るのではないかと。

「外れ鬼とはのぉ、我らが九十九神が人との妖力共有に失敗した姿じゃ」

「九十九神？」

「わらわの様な道具が百年経って妖怪に変化したものぞょ。それを九十九神と呼ぶのじゃ」

「ほー」

「そして我々九十九神は、人と妖力共有するのだが……、相性や素質などが合わないと、妖力共有に失敗となる……」

「失敗すると鬼に……、外れ鬼になって暴走するのか？」

タケシが見たあれは、暴走と言って良いだろう。

「そのとおりじゃ」

「暴走すると、どうなるんだ？」

「妖力共有した人間が、その時に強く望んでいた行動を無理やりにも叶えようとする。
九十九神も人間の方も理性を失い、道徳も忘れ、残酷に、残虐に、ただ望みを叶える為だけに行動するのじゃ」

「望みって……？」

「その時に殺したい人物がいれば、その者を殺すまで。

その時に欲しい物があれば、それを手にするまで。
……それまで妖力共有は解かれない」

「じゃあ、もしそいつが人類絶滅を望んでいたら？」

「そう望む人間が妖力共有に失敗して外れ鬼になったのなら、もちろん虐殺を始めるだろうてぇ、人がこの地に居なくなるまでのぉ」

二人が、そんな会話をしていると、鉄の階段を蹴る軽快な音が、薄いアパートの壁を揺らして聴こえ始めた。

二人の会話を妨げる様に響き始めたその足音は、アパートの階段を軽快に駆け上がり、まもなくしてタケシの部屋のドアを、問答無用で開けて侵入して来た。

「タケちゃーーーん、夕ご飯のおかず、差し入れだよーーん。今日は麻婆豆腐ですよーーん」

部屋に飛び込んできた陽子の手には、ラーメンのどんぶりに、溢れんばかりに盛られた麻婆豆腐が有った。

向かいの自分の部屋からタケシの部屋の電気が点いたのを確認した陽子が、何時もの様にご飯の差し入れを持ってきたのである。

「お、陽子、ちょうど良かった、おかずが足りないと思ってたとこだぜ」

「へへーーん、今日の差し入れは、お豆腐とひき肉が安かったので、麻婆豆腐だよー」

「二度も言わなくとも、聴こえているぞょ」

「槍女、あんたなんかに言ってないわよ！」

陽子は麻婆豆腐の入った器をテーブルにドスンと置き、春婆怒を睨みながら怒鳴る。

しかし、すぐさまタケシの方を向き直した陽子は、デレっとした表情に変わる。

「は～～い、タケちゃん～～、たんとお食べ～」

台所の流しの下の引き出しから、スプーンを取り出した陽子は、ニコニコとしながらタケシに手渡す。

かって知ったる人の部屋と言ったところだろうか。どこに何が有るかは心得ている様子だ。

「おう、センキュー」

スプーンを受け取ったタケシは、そのまま麻婆豆腐にがっつく。

「ハグハグバ、うえめー、陽子の手料理は何食っても最高だなー」

「えへへへへー」

ひき肉をフライパンで炒め、そこに水と豆腐を加えた後、メーカー出来合いの麻婆豆腐の元を使って作られた一品。

手料理と言って褒めるほどの物ではないし、褒められて照れるよ

うな物でもない。

<　交渉成立　>

タケシは、ラーメンの丼一杯の麻婆豆腐をおかずに、残りのコンビニ弁当をたいらげる。

タケシが食事を終えると、折りたたみのテーブルの上には、コンビニ弁当やおにぎりの袋などの残骸が散らばっていた。

とても一人の人間が食事を終えた跡には見えない。どう見ても今ここに居る三名の食卓後に見えた。

「ふぅ～、食った食った～」

「いつ見てもタケちゃんの食べっぷりは良いね～」

「ところで春婆怒、話をもどすが」

「む！」

タケシの話が、春婆怒に変わると陽子がムスリと頬を膨らませていた。

「んん？」

ムスリとした陽子をよそにタケシと春婆怒は、先程までの会話の続きを再開させた。

陽子もタケシの横で女の子座りをすると、二人のやり取りを警戒しながら聴いていた。

もしも春婆怒が、ちょっとでもタケシに色目を使ったら、すぐさまツッコミを入れるつもりらしい。

陽子は少々怖い目で様子を伺っていた。

「何でお前、見てもいないのに、あの鬼が外れ鬼だって分ったんだ？。鬼は鬼でも、色々な鬼がいるだろう？」

タケシは、陽子が差し入れを持ってきたところで中断した話しを再度質問する。

「わらわ達九十九神は、九十九神同士のみが感じ取る事の出来る特殊な妖気を妖力共有中に放つのじゃ。まあ、九十九神の感じ取る側の力量によって範囲にも差があるのじゃが、わらわは広いほうじゃと思うぞょ」

「ほほ～、それで外れ鬼の存在を感知してたのか」

「まあ、そんなところじゃ。鬼と化してしまったとはいえ、外れ鬼もまた妖力共有した九十九神の姿だからのぉ～」

「えっ？、じゃあ、あの外れ鬼はずっと気配を垂れ流しているのか？」

タケシはキョトンとした顔で春婆怒を見る。

「うむ、わらわがこの都（みやこ）にやって来た時からずっとじゃ」

タケシが春婆怒村から帰ってきた次の日に、朝からテレビでバラ

バラ殺人事件のニュースはやっていた。

春婆怒は、事件がニュースになる前の日から、犯人である外れ鬼の存在に気づいていたことになる。

「春婆怒、あの鬼の居場所が分かるのか？」

そう質問したタケシの口元が、ニャリと笑う。

「今は息を潜めているようじゃのぉ。だが、ある程度都中を探索すれば、見つけ出すのは至難ではないぞょ」

陽子は、黙って二人のやり取りを見ていた。

半分以上はチンプンカンプンの話をしているので、話に加わることが出来なく、詰まらなそうにしていた。

「ならば明日にも、バイトが終わったら探しに行くぞ」

「見つけ出して、どうするつもりじゃ？」

「ぶちのめす！」

タケシは、カニの甲羅のような四つのタコが有る拳を握り締めると、春婆怒の目の前に突き出す。

「それは空手家としてかぇ？」

「否」

「では、何ゆえじゃ？」

「あの野郎は何を思って外れ鬼になったか知らんが、残酷にも人を殺して楽しんでやがる」

タケシの脳裏に、廃工場で逆さ釣りに去れて、真っ赤に染まった女性の姿が思い浮かぶ。

「タケシや、だからと言って、御主に外れ鬼になった人間を裁く権利なんぞ無いぞょ」

「だね、裁くのは法律とか警察とかの役目じゃないの？」

話を理解して口を挟んだのかは分からないが、珍しく陽子が春婆怒の意見に同感する。

「あんな化け物を人間が裁けるか？、大体警察が鬼を捕まえたなんて聴いたこともねえよ」

タケシの言うとおりである。　政府機関が鬼を捕まえましたなんて話、世界各国どこにいっても聴いたことが無い。

ＵＦＯの様に、隠していれば別の話だが。

「ならば、止められることの出来る者が、止めなくてどうする」

「タケちゃん、珍しく正義感？」

陽子が首を可愛くかしげながら言う。

確かにタケシは悪人ではない、だが善人とも少し違う。

「だが、御主の空手ではかなわなかったんだろぅ」

「え、タケちゃん、負けたの！？」

陽子がタケシの横で女の子座りをしたまま背筋をピンっと伸ばして驚く。

身内の者意外にタケシが敗北するなど、そうそう有る出来事では無い。

「残念だが、力及ばなかったのは事実……」

タケシは陽子の顔をちらっとみた後、すぐさま顔をそらした。

「タケシや、わらわの力が借りたいのかぇ？」

春婆怒はガラクタをいじる手を休めて、目を細めながら色っぽく迫り寄る。

「むむ！」

春婆怒の行動を見た陽子もまた、春婆怒を睨み付けながらタケシに擦り寄り左手に組み付く。

「わらわと妖力共有したいのかぇ」

尚も春婆怒の美しく悩ましい顔がタケシの顔に迫ると、陽子が反対側から組んだ腕を引き寄せる。

「今の俺には、あのクソ野郎を止められる方法は、それしか思いつかねえ」

「ふふふ、わらわにとって外れ鬼なんぞ数にもはいらぬ存在。だが御主がわらわとの妖力共有を望むのなら、手伝ってもよいぞょ」

「本当か！」

「なんか～、やなかんじ～……」

春婆怒の言葉は、明らかに上から目線だった。

陽子が、それを感じ取る。

だが、形はどうあれリベンジのチャンス到来に、タケシは血気する。

「だがじゃ、わらわからも条件があるぞょ。」

春婆怒は、タケシの顔に近づけた美しく悩ましい顔を引くことなく、尚も誘惑を続ける様に話し続けた。

「わらわは、この先も妖怪や他の九十九神と戦わねばならぬ。タケシはその度にわらわを助けてくれぬかのぉ～？」

「……面白れー。戦うのなら付き合ってやる」

タケシは、その言葉の意味を、深く考えずに答えた。

春婆怒は怪しい笑みを浮かべながら、近づけた顔を引く。

「交渉成立じゃ、御主が望むならば、外れ鬼の一匹や二匹、共に食ろうてやるわ」

自分の術中にタケシが落ちた事に満足な顔をする春婆怒は、尚も怪しく微笑み続けていた。

するとタケシの鍛え上げられた腕にしがみ付いていた陽子が、何かに気付きくと質問を始める。

「あれ、槍女が春婆怒村で蜘蛛妖怪と戦った理由は、村に現れた蜘蛛妖怪を、村人に倒すように頼まれたからだよね？」

タケシは自分の腕にしがみ付く陽子に対して、何を言い出すのかと視線を向けた。

「半分は正解可能かのぉ」

「半分？」

「正しくは、あの鬼々蜘蛛はのぉ、わらわを狙ろうてやって来たのじゃ」

「お前が原因か！！」

タケシが景気良くつっこむ。

<　交渉成立　>（後書き）

０８／９／０３時点、３０００アクセス突破。これもお読みいただいてる皆様のおかげです＾＾

<；三種百食の本能　>；

「わらわ達九十九神と、妖怪とは因縁が多いからのぉ」

春婆怒が、鬼々蜘蛛と揉めていた理由を話始める。

「九十九神？」

「妖怪との因縁？」

タケシと陽子の二人は、春婆怒の口にした単語の意味を、別々に理解できていないようだ。

「ん～、どうやら、まずは妖怪変化全体の理から話したほうが良さそうじゃのぉ」

「お願いします」

「分りやすくお願い」

未だタケシと陽子は、くっ付いたまま春婆怒の話を聴く。

「まず、妖怪変化は、大きく分けて五つの種類に分けられるのじゃ」

「ふむふむ」

二人が同時にうなずく。

「その種類とは、生まれ方によるものじゃ」

「ふむふむ」

二人は、また同時にうなずく。

「常識を上回る寿命をへて、妖怪に変化していく生物の妖怪。
狐、狸、蛇や猫、あと植物かのぉ、それらが妖怪化した者達が、
まず一種」

「ふむふむ」

二人は、またまた同時にうなずく。

「二種目は、人間や動物の霊体や怨念怨霊の類が、そのまま実体を
持ってしまった妖怪。
この手の妖怪は、大概たちの悪い妖怪になるものじゃ」

「ふむふむ」

二人は三度同じタイミングでうなずく。

「三種目は、童話や神話、噂話や作り話から生まれた空想上の存在
が、その話し継がれる長さや広さに影響して、実体化してしまった
妖怪。
地方で神として崇められているような物は、これに入る者が多いか
のぉ。天狗や河童を神様扱いしてるじゃろ」

「ふむふむ」

「都市伝説とかに出てくるものだと、トイレの花子さんとか、口裂

け女とかが、これなのね」

二人が同時にうなずいた後に、陽子が付け足す。

「四種目は、これらの妖怪達が子供を産んだものじゃ。
生き物の様に子孫を残す妖怪は今となっては少ないのだが、動物から変化した妖怪の中に見られることが多いのぉ。
更にまれなのだが、妖怪と人間との間に赤子を儲ける例もあるそうじゃ。
その際に生まれた赤子は半妖と呼ばれたり鬼子とも呼ばれて、人間界でも妖怪界でも忌み嫌われるそうじゃ。
昔は子孫を残す妖怪が多かったのじゃがなぁ～」

「ふむふむ」

二人は、一卵性の双子の様に、タイミングぴったりにうなずく。

「そして最後に、わらわ達九十九神じゃ。
人間に長い年月使われる事によって少しづつ念を蓄えていった物が、変化したもののけじゃ。
だがのぉ、基本手には百年たった物が妖怪化すると伝えられているが、強い念や愛情を短期間で集中的に受ける人形などは、百年を待たずに妖怪化することも少なくはないのじゃ」

「ふむふむ」

これが最後かと二人は同時にうなずく。

「で、妖怪がどうして産まれてくるかわ良く分かった。
それでお前ら九十九神と妖怪の因縁ってなんだ?」

一通り説明を終えた春婆怒に、タケシが問う。

「わらわ達九十九神に有って、他の妖怪に無い本能が有るのじゃ」

「本能？」

「そう、『三種百食の本能』じゃ」

「何それ？」

陽子があっさりした感じで疑問を訊ねた。

「人間には、七つの大罪に例えられる七つの本能があるじゃろぉ」

「暴食、色欲、強欲、憤怒、怠惰、嫉妬、傲慢、七つの大罪ってこれのことでしょ？」

「陽子すげーな。良く知ってるな」

「へへーん」

タケシに褒められ喜ぶ陽子は、尚も強くタケシの腕にしがみ付く。

「この七つは、人間の本能そのもの。人は、これらを求めすぎる事を罪となしている。

だが、わらわ達九十九神の『三種百食の本能』は、本能そのもので罪としているのは九十九神以外の者共のみ」

「ん？」

二人には、春婆怒が言っている意味が通じていないようだ。

「そもそも、その三種なんたらの本能ってなんだよ」

タケシが確信を問う。

「人、妖怪、九十九神を、百匹ずつ食らう事じゃ」

「……へ」

二人は間の抜けた顔をした。

「何んだよそれ！」

タケシは少し間を置いて、春婆怒に怒鳴る様にツッコミをいれる。

そんなタケシのツッコミを無視して、春婆怒は涼しい顔で語り続ける。

「人間が七つの本能を、誰に習う事無く知り、そして求めるように。わらわ達九十九神は、この三種百食の本能を、産まれながらに言葉ごと理解して、それを適える為に行動をとるのじゃ。むしろこの本能の達する為に生きていると言っても良いのかもしれぬ」

「そうじゃねえよ、そう言ったことを言ってるんじゃあねえよ！」

片腕に組み付いていた陽子を振りほどき、タケシは立ち上がる。

そして、両手で座っていた春婆怒の襟首を掴むと、力任せに引きずり起こした。

「てめー、人間を食うって何だよ！」

「人だけではないぞょ、妖怪も、同族の九十九神も食らうぞぇ。この本能に、納得のいかないのは別族ならは仕方なきこと」

「あたりめえだ、同族食われて黙ってられるか！」

タケシは、鬼の形相と化した顔を春婆怒に突き立てる。

こいつは春婆怒村に現れた鬼々蜘蛛や、住宅街で遭遇した外れ鬼と一緒なのかと思うタケシ。

「わらわが生まれた時代はのぉ、人が人を殺す時代じゃ。金だの財宝だの領土だの地位や名誉だのと大気名文を立てては殺し合う時代じゃ。
わらわの真の姿を忘れたのかぇ？。
鉄槍じゃぞょ。
人を倒すために生まれ、
人を殺し続けてきた武器じゃ。わらわは戦場を兵士と共に戦い続けた百年が生み出した妖怪ぞょ」

何かに気付いたのか、春婆怒の襟首を掴むタケシの力が弱まる。

「わらわが喰らった百の魂は、人がわらわを使って殺した数のほんの一部に過ぎぬ。

わらわは望んで人殺しの道具として産まれてきた訳ではない。
御主ら人間がそう産み、そう使い、そうさせたのじゃ」

春婆怒の冷めた目から視線を逸らしたタケシは、掴んだ襟首を離した。

その顔は、暗く俯いていた。

「この国の人間にしても、妖怪達にしてもそうじゃ……。
わらわの使い手が変わるたびに、
流れ着く場所が変るたびに、
九十九神だと分かるたびに、
人食い妖怪食いと呼ばれ、
討伐だの仇討ちだの理由を付けられ襲われる。
そして返り討ちにしている間に百の数の妖怪を喰ろっうていった。
こちらから仕掛けた事なんぞ、無いと言うのにのぉ。
この国に流れ着いた時には、既に妖怪を百匹食らい終わっているのに……。
やはりこの国の妖怪もまた、わらわが九十九神だと言う理由だけで襲ってきた」

襟首を離された春婆怒は、ガラクタの散らばる畳の上に座り込む。

「じゃあ、三種百食の本能ってさ……、その種を百匹分食べると収まるの？。
なんだか数をカウントしてる感じの呼び名だし……」

タケシの影に居る陽子もまた、悲しげな顔をしながら春婆怒に訊いてみた。

「ああ、わらわはとうに人と妖怪を、百以上喰らっているからのぉ、その欲は生まれてこない」

タケシも座りこむ。

「タケちゃん。……槍女はもう誰も食べないってさ」

陽子はにっこりと微笑みながら、タケシをあやす様にそう言って肩に手を添える。

陽子にあやされたタケシは、食べ終わった弁当の器を黙って片付けはじめた。

春婆怒もまた、黙ったままガラクタで何かを作り始める。

「よかったね、タケちゃん」

四畳半の狭く古い部屋の中で、明るく振舞って見せるのは、陽子だけであった。

ガラクタを何やら組み立てている春婆怒が、横に置いてあったスプレータイプの油さしを手に取ると、赤いストローの細い棒をスプレーの口に刺す。

空気が沈んだ部屋の中、陽子はタケシの片付けと春婆怒の工作風景をじっと見ていた。

春婆怒は、赤いストローの付いたスプレーで、ガラクタの細かい所に油を刺。

そして油を刺し終わると、じっとスプレー缶を直視していた。

陽子も、その春婆怒の行動を何をしているのかと直視していると……。

パク、プシュュュューーーー……。

「ぎゃーーーーーーーーーーーーー！！」

スプレー缶のストローを口に銜えた春婆怒が、自分の口の中に油を噴射させる。

それを見ていた陽子が衝撃的な光景に悲鳴を上げた。

<　彼女の帰りを待つ彼氏　>

タケシのバイト先の同僚、井川秋雄、１９歳。

この町に有る大学に通うために上京してきて、家賃の安い古いアパートに彼女と同棲している。

井川の彼女は地元の高校の同級生で、井川を追っかけて、無理やりにも近い感じで同棲を始めた。

井川もそんな彼女の行動に不快感ひとつ感じず、同棲生活を許し、今では仲良く二人で暮らしている。

タケシもバイト先で井川の同棲生活の話を何度か聴いたことがある。

なんだか自分と幼馴染の陽子との関係に似た感じがし、そのせいか井川には良い高感度を感じていた。

井川も彼女も口には出さないが、二人は将来、結婚をしたいと思っているようだ。

「もう二十二時になるな……」

井川はテレビの上に置かれた目覚まし時計を見た。

安田がバイトの出勤時間に遅れると連絡が有り、タケシと二人で何時もより一時間長くバイト先に残った。

安田が出勤して来ると、タケシが安田に対して、殴る蹴るの暴行を始めたので、それを止めるのに更に三十分は何時もより帰宅が遅れてしまったのである。

その際、バイトが延長になることを彼女にメールで知らせると、彼女からも返事のメールが届いていた。

メールの内容は、今夕飯の買い物を終えて先にアパートに帰る途中たどいった内容だった。

夕御飯は麻婆豆腐だともメールにあった。

豆腐とひき肉がスーパーで安売りだったらしい。

メールは可愛らしいデコメで飾られており、賑やかなものであった。

井川は安アパートの自室で一人、その携帯電話のメールや着信履歴を何度も確認していた。

彼女から最後のメールがあったのは七時ぐらい。

既に三時間近くたっている。

先に帰って夕飯の準備をしてるはずなのに、彼女が帰宅した様子は無い。

もちろん夕飯の準備をした形跡もないし、買い物したはずの食材も置いて無い。

彼女は、アパートに一度も帰ってきていない様子だ。

こんなことは、今まで一度も無かった。

キンコーン

「！」

玄関のチャイムが突然鳴った。

井川は一瞬、彼女が帰ってきたのかと思うが、彼女なら部屋の鍵を持ってる。

チャイムを鳴らすとは思えないと気付く。

「こんな時間に誰だ……」

彼女のことで頭がいっぱいだった井川は、こんな時間にチャイムを鳴らす者に苛立ちを感じながらも玄関へと急いだ。

「……どなたですか？」

井川は、玄関のドア越しに尋ねる。

「こちら、井川秋雄さんのお住まいでしょうか？」

「そ、そうですが？」

男性の声だった。

礼儀正しい口調で自分を訪ねてきた声に、井川は思わず即答で返してしまう。

「すみませんが、少しで良いので、ここ開けてもらえますか？」

「どちら様でしょう？」

「こちらで一緒にお住まいになってる木村加奈子さんに付きまして、お訊きしたいことがありまして」

井川は、鍵をガチャりと開けた。

「どうも」

井川は同棲している彼女の名前を出されて、急いで玄関のドアを開けたのだ。

そして開けた玄関の向こうには、二人の男性が立っていた。

スーツ姿の青年と、その後ろには、まるで狸が人間に化けたかのような顔のトレンチコートの中年男性が立っていた。

「ど、どちら様ですか？」

「私は県警の刑事で、眞鍋哲郎と申します」

「同じく、刑事の鍋中改造です」

「け、刑事さん……ですか？」

井川は、深夜の突然の訪問者に目を丸くする。

「すみませんが、木村加奈子さんの話で、署まで任意同行を願いたいのですが」

「任意同行……ですか？」

若い刑事の言葉に、井川は何が起きたのかと呆然とする。

「詳しい話は、署の方で」

「あ……はい」

それ以上に話は進まないと悟り井川は、刑事の申し出に応じることにした。

そして、部屋の奥に一度戻ると、外へ出かける準備を始める。

彼女への心配な気持ちを晴らすために、不安な気持ちを晴らすために二人の刑事と部屋を出た。

<　朝から落ち着け　>

次の日、タケシは何時もと変わらずアパートの小さな庭先で朝稽古を行い、軽く汗を流していた。

「タケちゃん、お店の方に朝御飯を用意したよ～」

「おお、せんきゅー」

首に掛けた赤いタオルで汗を拭きながら、タケシは桜木家が経営している喫茶店へと足を運ぶ。

タケシの部屋の冷蔵庫に何も入ってないのを、いつの間にか確認した陽子が、朝食を無料で用意してくれたのである。

タケシの私生活では、ちょくちょく有る事だ。

タケシは貧乏な生活を送っている。

無料で飯を食えるのだから、これ以上嬉しいことはない。

が、陽子や桜木夫妻は、その代償を将来的に別の形で払ってもらおうと企んでいた。

このまま餌付けしてしまおうと企んでいる。その企みに、タケシはまだ気付いていない。

「おはよございまーす」

「あ、おはようタケシ君」

「タケシ君おはよう」

朝稽古で体の暖まったタケシは、元気な挨拶で喫茶店に入っていく。

すると何時ながら仲の良い陽子の両親が、開店準備をしながら迎えてくれた。

そしてタケシは、家族同然に向かい入れられると、窓際のテーブル席に座った。

「皆の衆、苦しゅうない、楽にしていいぞょ」

「あんた、何様！」

タケシに続いて店内に入ってきた春婆怒。そのふてぶてしい態度に陽子が怒鳴る。

だが、春婆怒は、それを無視してタケシの向かいに腰下ろした。

陽子の怒鳴り声なんぞ、耳に届いていないようだ。

「はい、タケシ君、ナポリタン大盛りよ」

山盛りのスパゲッティーを持ってきた陽子の母の雪絵は、何時もどおり明るい微笑みを保っていた。

この人は、怒っている時も笑みを崩さないから逆に怖く感じるときが多い。

「春子さんも何か食べます？」

「桜木の奥方殿、わらわは結構じゃ。平民の食事は口に合わないのでのぉ」

「はぁ……」

タケシと春婆怒が向かい合って座るテーブルに、山盛りのスパゲッティーを置いた雪絵。

春婆怒のセリフにキョトンとしたものの、日本語を間違えている外国人タレントと一緒と思ったのか、笑顔でカウンターへと帰っていく。

タケシは雪絵が、どうやら怒ってはいないと確認すると、ほっと肩を撫で下ろす。

そして、フォークを手に取り山盛りのスパゲッティーを、ラーメンの様にズルズルと音を立てながら食べ始めた。豪快にだ。

「また、バラバラ殺人が起きたみたいだな……」

カウンターの中で、スパゲッティーを炒めたフライパンを洗いながらテレビを見ていた筋肉質で長身の陽子の父の銀が、何気なく話しだす。

「え〜、また〜」

珍しく陽子が不安げな顔をしていた。

食事中なのに、タケシは昨晩の灰工場の吊られた女性を思い出してしまう。

そして、不機嫌そうな表情で、ニュースが映っているテレビを見ながらスパゲティーを食べ続けた。

「まったく物騒ね、この町でこんな事件が起こるなんて、本当いやだわ……」

「まったく、どこのどいつだ、こんなふざけた事件起こす戯けは」

フライパンを洗い終わった陽子の父は、妻の不安な会話に答えた。

「だが心配はいらんぞ、お前は私がちゃんと守ってやるからな」

「もん、あなたったら……」

妻に背を向けたままフライパンを壁に引っ掛ける夫。

その言葉に妻は、何時もの笑みを赤く染めながら照れて見せる。

「おー、あつあつだね、この夫婦……」

傍から見ていた娘の方が恥ずかしくなってくるといった感じで、陽子も顔を赤く染める。

そんな両親を見ていた陽子がタケシをチラ見し、ここはか弱い幼

馴染を演出しなくてはと目論む。

「タケちゃんも、もしもの時は私を守ってね！」

「なんで？」

「えーーー、なんでそんな回答来るかな！。なんでってなんで！！」

「そうよタケシ君、そんなこと言ってると、陽子が御飯作ってくれなくなるわよ」

雪絵の言葉に「それは困る」とタケシが言うが、陽子は頬を膨らましてソッポを向いてしまう。

「小娘や、案ずるな。タケシはこんな言い方しか出来ぬが、ちゃんと御主が持ってくる食事は期待してるぞよ」

「何よ、食事だけじゃない！」

「でも陽子、タケシ君みたいなタイプは、餌付けは大事よ」

雪絵の言葉に、タケシと陽子以外が「うんうん」と頷く。

「俺は、野良犬か……」

タケシがボヤク。

「野良犬でも、好きなの！」

「陽子……、好きな人を野良犬呼ばわりは、ちょっとね……」

「そうだぞ、せめて狂犬ぐらいにしときなさい」

もう訳が分からない。

「小娘は犬が好みか？」

「てか、俺は犬かよ」

「私は犬が好きなの！」

陽子の混乱した発言に、両親が「まあまあ、落ち着きなさい」と宥める……。

<　ベルちゃんピンチ　>

桜木家の喫茶店で、無料の朝食を取ったタケシ。

その後、喫茶店の裏に有る道場で、更に空手の稽古に励む。

約二十メートル四方の木造一階建ての道場。

桜木家が個人で私有している道場である。

この道場では、毎週火曜金曜になると、陽子の父の桜木銀によって、ちびっ子空手教室が行われる。

最近では手伝い程度に、陽子やタケシも先生として子供達に指導していた。

この道場では、小学校六年までのちびっ子空手教室しか開いていない。

中学生以上や社会人の部は無い。

小学生達に空手の基本や精神教育のみを指導し、中学生以上になっても空手を続けたい子供には、他の道場への招待状などを書いてやっていた。

何故に、小学生までにしか指導しないかといえば、理由は簡単であった。

道場主、桜木銀の使う空手は、タケシと同じ、危険な技を扱う堂

本流超人空手。

それは試合や大会で勝利を目指すための空手ではなく、露骨なまでのケンカ空手。

目を突いたり、金的を使ったり、そんな空手を今の余生、教育上子供どころか、普通の人にすら指導すべき技ではない代物。

万が一にも、とんでもない悪党が堂本流を習得して、悪行に利用してしまい、堂本の看板に泥を塗るような事でも仕出かせば……。

師、拳四郎に、指導した桜木氏が殺されてしまう……。

弟子は慎重に取らなくてはいけない。

だから桜木氏は、本格的に弟子は取った事が無い。

昼まで稽古を続けたタケシは、道場の更衣室横に有るシャワーを使い、かいた汗を流す。

そして、Gパンに安物のトレーナー姿に着替え、その上に黒い革ジャンを着込み道場の外へと出て行く。

「何してんだ春婆怒?」

タケシがアパートの前に戻ってくると、春婆怒が向かえの家の玄関先にしゃがみこんでいた。

「お、タケシや、稽古はおしまいかぇ?」

「おう、一旦終わりだ」

向かいの家の玄関先にしゃがみこんでいる春婆怒は、後ろを振り向かずに答える。春婆怒に、はそれでもタケシの存在は確認できている様だった。

「これじゃ」

春婆怒は、そう言って玄関横に有る犬小屋を指差す。

タケシが、その『ベル』と書かれた犬小屋を覗き込むと、この家で飼われている柴犬が、犬小屋の奥の方でガクガクと震えていた。

「春婆怒、こいつに何かしたのか、めちゃ震えてるぞ?」

「何もしていないぞぇ」

「まいいや、俺はバイト先に行ってくるから」

「おぉ、またお勤めかぇ?」

「いや、賞味期限が切れた弁当を貰いに行ってくる」

「この小動物も見飽きたので、わらわも同行するぞょ」

「見てて楽しかったのか?」

「ふむ、わりとのぉ」

「ふ〜……、どのへんが?」

「美味そうなところに決まってるじゃろ」

「やっぱりそれか……」

そんな会話をしながら二人は、アパートの駐輪場を目指して歩いていく。

しかし、タケシと春婆怒が居なくなっても、犬小屋の奥で柴犬のベルは、ガクガクと震えていた。

<ベルちゃんピンチ>（後書き）

この話と前の話は、要らない話だよね。

（≧≡∇≡≦）／

てへｗ。

<殴りたく成る男>

タケシは、バイクの後ろに春婆怒を乗せて、バイト先のコンビニにやって来た。

店の前にバイクを止めると、被っていたフルフェイスのヘルメットをミラーに引っ掛ける。

後ろに乗っていた春婆怒も、それを真似た。

「ちわーーす」

「お、堂本さん、また弁当でも貰いに来たんすか？」

タケシが店に入るとレジカウンターの奥で、だらしなく立っているアフロヘアーの男の姿が有った。

そのアフロを見てタケシは「殴りてー、すげー殴りてー」と、心で呟きながら店内を進む。

「あ～、なんか文句あるか、こんにゃろう」

「何故いきなり喧嘩腰！？」

タケシは何となく安田が嫌いなのを全身で表現すると、井川の姿を探した。

「ところで、なんでお前がいるんだよ。今の時間は井川のシフトだろ」

「井川が、何か用事で来れないから変わってくれってオーナーから電話が有って、それで俺が変わりに出てるんすよ」

「ちっ」

「何故舌打ち！」

「もっと面白い回答しろよ」

「面白いって、何故に！」

喧嘩腰のタケシに、納得がいかない感じの安田が反論する。

「あ、堂本君来てたのかい」

そうしていると奥の控え室から、オーナー鈴木が顔を出す。

「あ、オーナー、ちわっす」

「堂本君、ちょっとこっちに」

「？」

そう言いながらオーナー鈴木は、タケシに「こっちこっち」と手招きする。

「なんすか？」

タケシはオーナー鈴木の招くまま控え室に入って行った。

そのタケシの後ろを、さぞ当たり前の様に春婆怒も着いて行くと、控え室に入っていく。

「誰だろ、あの美人な白人は……？」

安田は、そう言いながら控え室に入って行く三人を見送った。

タケシを控え室に招き入れたオーナー鈴木は、湯飲みにお茶を入れてタケシに差し出す。

本来なら目上のオーナー鈴木ではなく、雇われの身でもあるタケシがやるべき事であるが、オーナー鈴木は誰に対しても何時もこうである。

「堂本君、実話言うとね、昨日大事件があってね」

「大事件？」

「昨日の夜に、また通り魔バラバラ殺人事件があったのは知ってるかね？」

「ああ、今朝ニュースでやってましたね」

本当は昨晩から知っている。

「それでね、襲われた被害者の女性ってのが、どうやら井川君の彼女らしんだよ……」

「！」

昨日から幾度も思い出す吊られた女性の姿。

それが知人の彼女だと知り、タケシが驚く。

「今、井川君が警察に行っててね。それで代わりに安田君に出てもらってるんだよ……」

「井川の彼女って……、それ本当ですかオーナー？」

「ああ、本当らしいよ。遺体を井川君が確認したらしい」

「それで、……井川のヤツは大丈夫なんですか？」

「かなりショックを受けてる様子だけど……。それで、当分の間、井川君はバイトを休むと思うから、その間のシフトのカバーを皆でしてもらいたくてね」

「それは構いません。非常時ですからね……。」

「あとで新しいシフトが出来たら配るから、今月はちょっと出番多くなるけど、堂本君もよろしくたのむね」

オーナー鈴木は何時も以上に腰を低くして、バイトのタケシに頭を下げてお願いしてくる。

それに対してタケシも心良く応じた。

非常時は助け合う。田舎の村で育ったタケシにとっては当然の事である。

「それじゃあ、俺、一旦帰りますから」

「ああ、よろしくたのむね」

当初の目的である賞味期限の切れた弁当を貰ったタケシは、コンビニを暗い顔で出て行く。

その後ろを、長く綺麗な髪を揺らしながら春婆怒も出ていった。

オーナー鈴木は、タケシを見送ると、安田の居るレジカウンターに入る。

「オーナー、堂本さん、すげー美人連れてましたね。あれ誰ですか?、なんか言ってませんでした?、やっぱり新しい彼女っすか?」

同僚に不幸があって暗い顔をしているタケシやオーナー鈴木とうって変わって、無神経にもテンションの高いアフロヘアーの安田。

そして、タケシの連れていた春婆怒に興味を持ったらしく、しつこくオーナー鈴木に問いかける。

「え?、安田君、何言ってるの?」

「何って……、堂本さんが連れてきた美人の彼女ですよ」

「はぁ?」

オーナー鈴木は、何を言ってるのかと不思議な表情で首を傾げる。

「だーかーらー、タケシさんと一緒に控え室に入っていった女の人いたじゃん！」

「へ？、居たの？、堂本君一人で出来たじゃないか？」

「えっ！」

「も～、安田君何言ってるのかな、疲れているのかな？」

「！！、だって居たじゃん！」

「安田君、私、棚整理してくるから……、疲れてるんならここでゆっくりしててていいからね」

バイトを気遣うオーナー鈴木は、優しい顔でそう言いながらホールの陳列棚を整理し始める。

「だって……いたじゃんかぁ……。俺、本当に疲れてるのかな……。いや、憑かれてるのはタケシさんの方だ。……お、俺うまい事言った！。……てか、俺、シックスセンス開眼か！」

タケシが安田を殴り倒したくなる理由の一つが、こんなふざけたいころである。

今、ここにタケシが居たら、間違いなく問答無用で正拳突きを放っていただろう。

<猫田三兄弟>

タケシと春婆怒の乗ったバイクが、コンビニの駐車場を出て行くと、それと擦れ違いに一台のバイクが入って来た。

「おぉ、あれは確か下のコンビニでバイトしているヤツのバイク…」

入れ替わりに入って来たバイクの男は、店の前にバイクを止めて、タケシ達を見てそう言った。

そしてタケシのバイクの後ろに乗る女性の後姿を、じっと見つめる彼には、ヘルメットの隙間から出ている長く綺麗な金髪が、風に波打つ様子が無性に気になったようだ。

「あいつ彼女居たんだ。ロンゲで金髪の女か～、それも悪くないな。そう言えば、珠美も最近髪の毛伸ばしてるぽいしな～」

そう言いながら男は、バイクから降りるとヘルメットを脱ぎ、茶髪で短めの頭を掻きながら二階への階段を駆け上る。

「ただいま～」

「あ、おかえり虎兄ちゃん」

「おう、虎ニ、お帰り」

二階の探偵事務所のドアを開けて男が中に入ると、やたらと観葉植物が多い事務所内で二人の兄弟が明るく出迎えてくれた。

一人はグレーのスーツにインテリ風の眼鏡を掛けたニヤケ顔の青年。

もう一人は、童顔だが豊満な胸をもった清楚な女性であった。

この虎二と呼ばれた男の兄の龍信と、妹の珠美である。

「うぉ～、さむさむ～、体が冷えたわ。珠美～、お茶ちょうだい～。」

「OK～、今入れるね、温めで良い？」

「もちろんだよ」

寒がる男は部屋の中央にあるお客用のソファーに、ダイブする様にして腰を下ろす。

兄の龍信が帰ってきたときと同じ行動を取る虎二を見て、妹の珠美はクスリと笑い給湯室へと消えていった。

「で、春婆怒村の方はどうだった？」

長男の龍信は、中古のデスクとセットで買った社長椅子にふんずり返って、帰ってきたばかりの弟に質問した。

その龍信の手には、十字手裏剣と油の付いた布が握られており、

丁寧に手裏剣を磨きながら弟の返答を待っていた。

「で、どうだった？」

「春婆怒村の結界は確かに解けてたよ。五十年間、信じられないほどの強力な結界で、どんな妖怪変化も近寄らせなかった村がよ、完全に何でもウエルカムになってたわ～」

「それは電話で聴いた。それより俺の言ったとおりに調査して来たんだろ」

「はい、虎兄ちゃん、お茶だよ」

「ありがと～、珠美～」

何時もの丸いお盆で、にこやかにお茶を持ってきた妹から、虎二は湯飲みを受け取る。

「で、虎にいちゃん、春婆怒村はどうだったの？。」

そして、温目のお茶を熱そうに啜る兄に質問した。

「え～と、まず、言われたとおり神社の方を調べてみたけど、あそこに奉られている槍は、レプリカぽかったぜ。魔力の欠片も感じられなかったし。
でも境内でハデに争った形跡が有ったわ。あっちこっち修復の宮大工とか来てたから、おそらく鬼々蜘蛛のヤツが暴れ回った跡じゃねえのかな」

「で、その鬼々蜘蛛のヤツはどうした」

「いなかったぜ、どこかに潜んでるって感じでもなかった。あの手の巨体の妖怪が潜む場合、大抵は歪を作って潜むと思うんだが、
どこにもそんな形跡は感じられなかった」

「ちゃんと村中調べたのか？」

「おいおい、兄貴～、俺の探知妖術はアメリカ国防省がスカウトに来るほどの腕前だぜ、抜かりはね～よ」

龍信は、めんどくさがりで時折手抜きをする弟を疑う。

まめで頑張りやの妹の珠美と違って、次男の虎二はちょくちょくズルや手抜きをすることがある。

才能は有るのだが、努力する才能に激しくかけているのだ。

「じゃあ、鬼々蜘蛛は春婆怒にやられたのか？」

「証拠は無いが、おそらくな～」

虎二は、やる気が無さそうに答えると、人差し指で自分の鼻の穴をほじり始める。

それを横で見ていた珠美が、駅前で貰ってきたポケットティッシュを、少し怒った顔で兄に差し出した。

「じゃあ、春婆怒はもう使い手を見つけているってことか……」

「だろうね～、いくら春婆怒でも妖力共有しないと鬼々蜘蛛を倒せないでしょ」

「村人に聞き込みしてみたか？」

「ああ、それも言われたとおり今回はちゃんとやったぜ。」

前回は怠けたらしい。

「でもダメだは。理由は分からんが、村の連中、貝の様に口を閉ざしてなんも聞き出せなかったわ」

「まあ、そうだろ。おそらく使い手を用意したのは、村の連中だな」

「なんで、村の人たちが？」

虎二の横に座っていた珠美が、可愛らしく口元に人差し指を当てて、首をかしげ兄の龍信に問いかける。

「春婆怒は、自分を犠牲に鬼々蜘蛛を封印したと聴く。おそらく鬼々蜘蛛と同時に、自分の封印も解ける予定だったんだろ。そして村人に、封印が解けるタイミングを教えておき、解けたときに使い手が居る状況を作っといたといったとこかな」

「復活した直後に、鬼々蜘蛛と戦えるようにってか」

「ああ、そうだろ」

「春婆怒って、用意いいのね」

そう言って珠美は、虎二が飲み終わった湯のみをもって給湯室へと向かう。

「まあ、春婆怒が何処にばっくれたかは知らんが、俺らには関係ないしよ～」

「もしもこの町にやって来てたら、そうも言ってられんぞ」

そう言う龍信の顔は、いやらしく笑っていた。

「まあ、確かにそうかも知れないけど、俺らは調べるのみで、戦うのは処理班や因縁のある一七五一家だろ。」

虎二の方は、何故か詰まらなそうな顔をしていた。

龍信は、デスクの引き出しを開けると、中から何やら取り出し始める。

次男の虎二は、そんな長男の行動を黙って見守っていた。

どうやら龍信が取り出し始めたのは、手裏剣、クナイ、鎖文どう、忍者刀、煙球、撒きビシ、吹き矢などの、今となっては珍しい忍者グッツの数々であった。

「兄貴、何してんだ?。珍しく念入りに手入れしてるみたいだけどさ」

「こっちでも事件が起きてるって言っただろ。その犯人が外れ鬼だったんだが……。

昨日逃がしちまったから、今回は逃がさないように、完璧に足止め

しないとマズイんだよ……。
虎二、お前も今のうち寝とけ、今晩はお前も出てもらうぞ」

「えー、俺、今帰ってきたばかりなのに～。兄貴、何でそんなに気合入ってるんだよ」

「龍兄ちゃん、昨日携帯忘れて、連絡できずに鬼を逃がしちゃったんだよね～。
それで、先生達に怒られたんだよね～」

給湯室から顔だけをだして、珠美が意地悪ぽく兄を茶化す。

「二度目も逃したら信用に関わる……」

龍信は、メガネ越しに鋭い目で弟を睨みつけた。

「確かにね。でも、自分のへまじゃん、そんなに俺を睨むなよ」

「いいから早く寝てこい」

「あ～あ、わかったよ」

虎二は、茶髪の頭を掻きながら、猫背で奥の部屋を目指して歩き出す。

「珠美は留守番頼むよ～」

龍信が、猫撫で声で珠美にそう言うと「うわ、差別！」と虎二が声を上げて振り返った。

「黙れ、この語句潰しが！」

「そこまで言うか、シスコン兄貴！」

「もう、二人ともケンカしないの～」

猫田龍信。

弟に厳しく、妹には優しい長男であった。

<　外れ鬼・一　>

日がまた落ちる。
夕日になってまた落ちる。
この町にも夜が来る。
何所の町にもやって来る。
あたりまえに夜が来る。
夜が来るとやって来る。
この町にはやって来る。
そいつは夜になったらやって来る。
包丁一本ぶら下げて。
片手に包丁ぶら下げて。
人を刻みにやって来る。
手早く綺麗に捌いてく。
そいつはただの殺人鬼。

そいつは惨めで哀れな外れ鬼。

時は夕飯時。

片手にギラギラした包丁を持った男が、暖簾の出ていない小料理屋から出てきた。

その小料理屋は、商店街の一角にあるのだが、店の前には誰もいない。

店の前だけではない。

商店街全体に誰も居ない。

まだ、このぐらいの時間なら、人が絶える時間帯ではない筈なのに、明らかに奇怪な景色だった。

何時もならば、なぎやかな学生達や買い物帰りの主婦達が、日の暮れ始めた空に釣られて家路に着く時間帯である。

不景気の煽りを食らって、この小料理屋の様にシャッターを閉めている店も見当たるが、開店中の店も、店内は光が付いておらず店員の姿も見あたらなかった。

今の商店街の様子は、まるで井川の彼女が男に襲われた住宅街と同じ奇怪な空気が流れていた。

「うへえへ、仕入れないと、新鮮な食材をぉ」

店から出て来た男の目は、虚ろで口からは涎をダラダラと垂らし、完全にいってしまった表情をしていた。

精神異常者、麻薬中毒者、それらに似た感じの異常な表情。

この殺人鬼は、また今夜も無残な被害者を作ろうというのか……。

どこに向かうのか虚ろに無人の商店街を歩き始めた板前風の男。

その時であった。「よう、探したぜ」

板前風の男は、横からいきなり声を掛けられ「へぇ？」っと言いながら声のした方へと振り向く。

拳。

振り向いた直後、男の視界に入って来たのは大きくゴツゴツとした拳だった。

右の拳か、左の拳か、そんなことを確認できる余裕は無かった。

そして拳が顔面に減り込み、風呂桶の底を叩いたようないい音を鳴らす。

「ふぅぎぃぃーーー！」

その拳は、そのまま力任せに男を吹き飛ばした。

「不意打ちとは、武術家のわりには礼儀に欠けるのぉ」

タケシの後ろで、呆れ顔の春婆怒が平べったい胸の前で腕を組みながらそう言った。

「おいおい、今のは挨拶代わりの一発だ、すなわちオレは今、きちんと挨拶をしたんだ。どうだ、礼儀正しいだろうが！」

タケシ、自分ルール全快だった。

一方、不意打ちのパンチで吹き飛ばされ、アスファルトに転がっていた男が、よろよろと立ち上がる。

「がぁるるルルル」

口から血の混ざった涎を垂らしながら唸る男は、メキメキと音を立てて巨大化していく。

「お、いきなり全力でくるか」

「ほほぅ、外れ鬼、登場かぇ」

並んで立っているタケシも春婆怒も、口元が笑っていた。

これから始まる人外レベルの戦いに、心躍るといったところなのか……。

「よし、春婆怒、こっちも妖力共有するぞ！」

「うむ、ならば、これを腰に巻くといいぞょ」

「ん？」

そう言うと春婆怒は、ボリュームの少ない胸元から、スルスルと一本の太いベルトを取り出す。それには弁当箱サイズの箱に、赤い風車が内蔵されたバックルが付いていた。

昨晩、春婆怒がガラクタから作り上げた物である。

「春婆怒、何だこれ？」

「覇王の腰巻、西洋ではフィルターベルトとも呼ばれているかぁのぉ」

「フィルターベルト？」

「妖力共有の際に、わらわの妖力と御主の霊力を、臍の下に有る壷を使って、行き来さながら共有させているのじゃが」

「臍の下の壷、……真丹田のことか？。」

其の通りと頷きながら、春婆怒は説明を続ける。

「お互いの不愛称な気の量が多いと外れ鬼になる。それは前にも説明したよのぉ」

タケシは「ああ、それは覚えている」と言い頷いた。

「しかし愛称が良くても、幾分か不愛称な気が残ってしまう。

そして妖力共有後に、人の体に障害を残すのじゃあ」

タケシは「なるぼとな～」と言いながら、春婆怒村での鬼々蜘蛛との一戦後になった、強烈な筋肉痛を思い出す。

「その不愛称な気をのぉ、この覇王の腰巻が出来る限り取り除いてくれるのじゃ」

タケシは春婆怒からベルトを受け取ると、自分の腰に巻きつけた。

「これで後のことを気にせずに、派手に行けるってことか！」

板前風の男は、既に完全な鬼の姿に変化していた。

「うがぁがぁがぁがぁがぁぁぁ！！」

そして、二人を睨み付けながら野蛮に吠えていた。

「うし、待ってる奴も居ることだし、俺らもそろそろ変身するぞ！」

「そうじゃのぉ～」

春婆怒がタケシの前に立つと鉄槍の姿に変わる。

そして、タケシが鉄槍に変化した春婆怒を握り締め、あの合言葉を力強く言い放つ。

「妖力共有・変身！」

<　外れ鬼・一　>（後書き）

ついに変身ベルトが登場！

玩具化して売り出します！

皆もお父さんお母さんにお願いして買ってもらおう！

そして仮面〇イダー九十九に変身だ！

「妖力共有・変身！。」

全部ウソです、ごめんなさい　＞ｘ＜／

<　外れ鬼・二　>

鉄槍から緑色の妖気が混ざった風が吹き出ると、その緑風はタケシの周りを竜巻の如く激しく回る。

そして緑風はタケシの体に巻きつき始めると、不思議な甲冑へと変わっていった。

黒緑色の皮のようで、それでいて鉄のように硬そうな外見、不思議な概観。

今回は更に、その上にメカメカしく、人工物風のプロテクターのような物が頭や胸、腕や足に追加された。

「おお?、なんか前回と違うぞ」

「うむ、覇王の腰巻で不愛称な気が大分除去されたからのぉ、甲冑が強化されたのじゃ」

「にしても、ちょっと現代ぽくないか。テレビで見るヒーロー物ぽくなってるぞ」

「覇王の腰巻に使われた素材の影響じゃ。タケシは不満かぇ?」

「いや、キライではない」

「がぁぁぁルるるる!!!!!!!!!」

変身後も話を続けている二人に、痺れを切らした外れ鬼が変身し

たタケシに襲い掛かる。

「ふぅがぁーーーー！！！」

振りかぶった巨大な包丁を、タケシの頭めがけて振り下ろす。

「よっと」

だが、タケシは体を僅かに横にずらし、ぎりぎりの間合いで回避してみせる。

そして目標を切り裂くことなく振り下ろされた包丁は、勢いあまり音も立てずに地面のアスファルトをバターの如く切り裂く。

「すげー切れ味だ、なっと」

「がるるるるルル？？」

アスファルトにめり込んでいる巨大な包丁の背を、タケシが片足で踏みつけて抜けなくさせた。

「ガァるるるルるるルルルルル！！」

外れ鬼は、むきになって包丁を引抜こうとするが、タケシの踏む力にびくともしない。

「そんな必死になるなよ、今放してやるからよ」

タケシの台詞の後にスパンキング音が響く。

「ふがぁぁ！！」

地面にめり込む包丁を踏みつけていたタケシが、その足を離すと同時に、外れ鬼の顔面に廻し蹴りを打ち込んだのである。

外れ鬼は、喰らった蹴りの衝撃と、地面に突き刺さっていた包丁が引っこ抜けた勢いで、思わず遥か後方へと吹っ飛んでいく。

「ほほ、ずいぶん飛んだのぉ～」

「だな」

タケシは、数メートル先で転倒している外れ鬼の元へとゆっくり歩み寄る。

「ふぅが！」

ヘッドスピン。

外れ鬼は、巨大な体をしながらも、ダンサーの様に可憐に飛び跳ね立ち上がった。

そして、すぐさま包丁を振りかぶりと、近寄ってくるタケシに向かって逆胴で包丁を振るう。

「ぐがァアア！！」

「おっと」

横一直線に振られた包丁。

タケシは、地を這うトカゲの様に屈んで回避すると、今度はそれをバネに変えて外れ鬼目掛けて跳躍する。

そのジャンプで、２メートル以上有る外れ鬼よりも、頭一個分高く飛んでいた。

「そぉーーれ」

「ふぅぐ……！」

空手チョップ。

外れ鬼の頭にタケシの手刀が打ち落とされた。

タケシは頭を抱える外れ鬼の懐の前に着地すると、片手の指を、自分の頭の上に見える外れ鬼の鎖骨に引っ掛けた。

「よっとっさ！」

タケシは引っ掛けた片腕で懸垂をするように体を引き上げると同時に、外れ鬼の顎にパンチを打ち上げた。

「ふぅがぁがぁがぁぁぁぁ……」

外れ鬼はよろめきながら後ろに下がると、しばらくして尻餅を搗く。

「何休んでるんだよ」

股を大きく開いて、動物園の熊の様に座り込んでいる外れ鬼。

タケシが、その前に立つ。

生身の時に戦った感触と明らかに違うパワー。

前回は、目の前の化け物相手に、散々打ち込んだのに、致命傷すら与えることが出来なかった。

だが、今はどうだろうか。

この圧倒的な攻撃力。

この圧倒的なパワーアップ。

悔しいが、これが普段の自分と、妖力共有した自分との戦力差。

納得は行かないが、この畜生を倒さなければ井川や井川の彼女の様な何の罪もない人間に災いが降りかかり、不幸が悲劇となって広がり続ける。

この畜生は、警察や政府なんかじゃあ止められない。

だが、止められる力が、止められる方法が、今の自分に有るのなら、それを今使わなくてはならない。

本当は自分の力だけで成し遂げたいところなのだが、ここは空手家の意地とか、自分の誇りとかは一先ず置いて、常識外れの化け物を、この殺人鬼を倒さねばならない。

正義の味方?。

そんな大それた者ではない。

ただ、誰かがやらねばならない事。

その誰かが、たまたま自分で有っただけである。

<　外れ鬼・三　>

「ウガァガァガァガァァァァ！」

タケシの目の前に座り込んでいた外れ鬼が、唸りながら立ち上がった。

そして立ち上がった大きな巨体で、上からタケシを見下ろす。

タケシも、下から見上げるように睨み付けた。

一歩も引かない雄同士の睨み合い。二人の距離は、キスシーンでも出来そうなぐらい近い距離。

「ウガァガァガァるるる」

「一丁行くか～！」

外れ鬼が包丁を持って無い左手の拳を握り締め、ゆっくり振りかぶり始めた。

タケシもまた同じく、拳を握りゆっくりと振りかぶる。

「こらぁ、御主ら、なにを始めるのじゃ？？」

「はは、この野郎も、こんな姿になってもよ、男って訳なんだ」

春婆怒には理解できない、雄同士の意地。

「うがぁがぅがぁぁぁぁ」

「男らしく、足を止めて殴りあうつもりかぇ！？」

「バカバカしいか！？」

タケシと外れ鬼は、振りかぶった拳に体全身で一杯一杯まで力を貯めこんだ。

「相変わらず雄とは、まっ……」

「ウがアアアアあぁぁぁがぁぁぁぁぁぁあアアア！！。」

「りぃあああぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

春婆怒のセリフが全て言い終わるのを待たず、二人の雄の拳は放たれた。

肉と肉が、弾け合う。

二人の拳は、お互いの体にヒットすると、交通事故のような激音を立ててお互いの体を同時に吹き飛ばした。

シャッターに激突する音と、アスファルトを磨る音が別々の場所で発生した。

吹き飛ばされたタケシは商店街の店先のシャッターにぶつかり崩れ落ちる。

一方の外れ鬼は、数メートル吹き飛び背中をアスファルトに擦り付けながら止まった。

「ふぅがぁガァガァがぁーーーー！！！」

「うりゃーーーーー！」

二人は直ぐ様起き上がると、お互い目掛けて走り出す。

「ふがぁぁぁぁぁ！」

「ちりゃーーーー！」

外れ鬼は、ジャンピングアタック。

タケシは、スライディングキック。

二人は、それぞれの攻撃を放った。

しかし、二人は思わず、上と下で相手を通り過ぎてしまう。

「あら？」

「ふがァ？」

「御主ら、なにをしておる！？」

お互いに間抜けな声を上げた雄達に、春婆怒が呆れた声を掛けた。

そして、外れ鬼が振り向きざまに逆水平で包丁を振るいタケシの

腹部を切り裂こうと狙う。

その攻撃をタケシは、体をくの字に曲げて紙一重でかわして見せた。

息つく間も無く外れ鬼が、今度はタケシの頭を狙って包丁を振り下ろそうと振りかぶった。

「うがぁがぁがぁぁぁぁぁあああぁ！」

そして、容赦なく巨大包丁を振り下ろす。

「堂本流秘技！、真剣白刃……」

空振り。

そして鉄の弾ける音。

「……十字受け！！」

自分の頭目掛けて振り下ろされた刃を、タケシは腕を頭上でクロスさせ受け止めた。

「タケシや、失敗かぇ？、真剣白刃取りの失敗かぇ？」

「いゃ、そんなことないわい、これはこう言った技なのだ！」

「覇王の腰巻で、硬度が強化されていなかったら、その二本の腕は切り落とされたぞぇ！」

「そ、そんな事は無いわい！、俺の鍛え上げられた豪腕が、ちゃんと受け止めてるもん！！」

ガッ。

外れ鬼が、タケシの頭上にあるクロスされた腕を掴む。

そして巨大な包丁を、突き刺すために自分の脇の下の奥へと引き寄せる。

「こら、はなしやがれ！」

タケシは、掴まれた腕を振り解こうとするが、力だけは巨体の外れ鬼の方が上回っている様だ。

どんなにタケシがもがいても、振りほどくことが出来ないでいた。

「フウガァガァァァァー！」

逃げられないタケシのドテッパラに、外れ鬼の包丁が突き立てられた。

「ぐはぁ！」

外れ鬼はタケシの腹部に包丁を突き立てると同時に、掴んでいた腕を離すし、更に包丁を力任せに押し込む。

「うがぁアガァガァガァァァ！」

「こんにゃろー！」

タケシの受けた感触は、『刺された』感触よりも、『突かれた』感触であった。

タケシは、その衝撃によって後方に突き飛ばされていく。

だが、タケシは倒れる事も無く、刺された腹を手で押さえながら中腰で立っていた。

「ほら」

タケシは、腹を押さえた腕を退け、春婆怒に向けて話しかける。

「どうだ、俺の鍛え上げた腹筋を持ってすれば、あんな包丁だって止められるだろ」

手を退けたタケシの腹部には、小さな傷が有った。しかし、出血まではしていない。

「自惚れるな、これは妖力共有で強化された甲冑のおかげだぞょ」

「いいや、俺の筋肉の硬さだ！」

「そんな訳があるまい！」

「ふうぅがぁガァガァがぁーーーーー！！」

言い争うタケシと春婆怒に、どちらでも良いといわんばかりに吠えながら外れ鬼が襲い掛かる。

<　外れ鬼・三　>（後書き）

０８／９／１１時点、５０００アクセス突破！。これも全て、お読み頂いてる皆様のおかげです

<；外れ鬼・四　>；

立て振り、横振り、めった突き。

包丁を、滅茶苦茶に振り回す外れ鬼の攻撃。

それをタケシは見事な体術で可憐にかわし続ける。

ただでさえ体格によるリーチ差が有る上に、巨大包丁で武装した外れ鬼の長い間合い。

タケシは、そのリーチ差の中、接近できる隙を窺う。

「調子に乗るなよ！」

外れ鬼の包丁による乱撃をかわし続けていたタケシが、攻撃の透きを縫って素手の間合へと潜り込むのに成功した。

そして、反撃開始。

「フゴフゴッ！、ゴフゥ！」

外れ鬼のボディーにタケシの左右の正拳突きが連続で叩き込まれる。

更にタケシの下から上へと突き上げる足刀が外れ鬼の顎を蹴り上げた。

「りいいいいっ、や！」

まだ続くタケシの攻撃。

タケシが、怯んだ外れ鬼の腹部目掛け全力の後ろ廻し蹴りで蹴り飛ばすと、外れ鬼は本日何度目かのダウンをした。

だが、このダウンのダメージでは、致命傷にまでは達していない。このダウンは石に躓いて転倒した程度のダメージだと攻撃したタケシには感じ取れていた。

この程度では勝負を決められないと……。

そう思ったタケシは、既に走り出していた。

タケシは、起き上がろうとしている外れ鬼の顔面目掛けて、ロケット弾のような飛び膝蹴りで突っ込んでいった。

外れ鬼の鼻の軟骨が潰れる音がした。その音を、タケシは膝を通して聴き取った。

飛び膝蹴りから着地したタケシは、続いてアッパーのモーションを深々と全身でとる。

そして力を蓄えると、そのまま外れ鬼の顎を狙って、強烈なアッパーカットを打ち込んだ。

天高く振り切られたタケシのアッパーカットを喰らった外れ鬼の下顎が、上顎に激突して「パコン」と音を立てながら体を退けそらせる。

まだまだ続く、タケシの追撃。

上段廻し蹴り。

タケシの右足の甲が、外れ鬼の左頬を捕らえ振り切られ、更にタケシは体を捻り、左後ろ廻し蹴りで外れ鬼の同じ左頬を踵で蹴り飛ばす。

「もーーいっちょ！」

タケシは、そう言いながら回転を止めることなく、三発目の上段廻し蹴りを放つ。

しかし、その蹴りは空を切った。

一連の外れ鬼との攻防で、初めてタケシの攻撃が敵を外す。

一方、初めてタケシの攻撃をかわした外れ鬼は、その巨体でありながら素早く跳躍して空に逃げると、近くに有った建物の壁を蹴り、三角飛びのような形でタケシの元へと舞い戻る。

そして、その勢いを利用し、タケシの首を狙って包丁を振るう。

パワーにスピード、更に高さに体重の加わった攻撃。

その一撃は流石に喰らえないとタケシは、包丁の下をくぐり抜けて着地する外れ鬼の真横へと回避する。

外れ鬼の真横に回避移動したタケシが、着地でしゃがみ込んでいる外れ鬼のコメカミに拳を叩き込んだ。

拳を打ち込まれた外れ鬼は、タケシの姿を確認するよりも早く、手にした巨大包丁をタケシが居ると思われる真横へ狙いも定めずに振るう。

だが、またしてもタケシは身を屈めて包丁をくぐると、外れ鬼の正面に移動して、力任せのフックを顔面に叩き込む。

「もーいっちょ！」

更にタケシの左正拳突きが、外れ鬼の顔面に。

「もーーいっちょ！」

続いてタケシの上段前蹴りが、外れ鬼の顔面に。

「もーーーいっちょ！！」

更にタケシの大きく振り被ってのブーメランフックが、外れ鬼の顔面に。

「もーーーーいっちょ！！」

更にタケシのジャンプしてからの両足を揃えたドロップキックが、外れ鬼の顔面に。

更に更にと攻撃を受けた外れ鬼は、最後のドロップキックを喰らい後方に吹っ飛んでいくと、その巨体が地面をゴロゴロと転がっていく。

「どうだぁぁぁぁぁ！」

タケシが勝ち名乗りの声を上げる。

だが……。

「ふうぅがぁガァガァがぁーーーー！」

鼻や口から真っ赤な血を撒き散らしながらも立ち上がる外れ鬼は、狂ったように吠えまくっていた。

<　外れ鬼・五　>

「素手じゃあ、きりがねえかな……？」

立ち上がった外れ鬼を見て、タケシが呆れたような声を漏らす。

「わらわを使うかぇ？」

「仕方ねえ……」

自分の力のみで外れ鬼を倒したいと思っていたタケシ。

だが、限界を知って妖力共有までは妥協した。

しかし妖力共有を行っても、出来ることならば素手で、空手のみで外れ鬼を倒したかったのだが……。

ここは更なる妥協を決意した。

「妥協に妥協が続くぜ……」

「素手に拘るでない、これは災いの目を摘む勤めだと思え。さあ、わらわの力を存分に使うのじゃ！」

「ああ、分かったよ」

タケシは掌を前に突き出す。

「ハルバード・ウェポンモードッ！」

タケシの周りに緑風が巻き起こったと思うと、その緑風は一本の鉄槍えと形作られていく。

「あれ、なんか前よりゴッツクなってるな、この槍」

槍を手に取ったタケシの言うとおり、その鉄槍は以前よりも外見がグレードアップしていた。

槍先の刀身は長く鋭く、そして煌びやかに細かな装飾がされている。

更に横の小斧の部分は、以前よりも大きく力強くＳＦタッチの機械ぽく変わっていた。

これなら最近の男の子にも人気が出そうなデザインだった。

「そりゃ！」

グレードアップした長槍を手にしたタケシは、それを可憐に振り回し演舞をみせると、演舞の締めは長槍を脇の下に挟んで決めポーズを取った。

「派手に行くぜぇ～！」

「うごぉがぁガァガァァァ！」

槍を振るうタケシ。

巨大包丁を振るう外れ鬼。

お互いの武器がぶつかりあう。

刃と刃がぶつかり、刃と刃が弾き合い、刃と刃が激しい音を鳴らす。

その鬩ぎ合いは五分と五分だった。

「ウガァガァガァがぁぁぁぁぁ！」

「やるじゃねえか！」

おそらくタケシの言葉は、鬼と化した男には届いていない。

だが、戦いの中で心躍るタケシは、それでも語りかけずにはいられなかった。

「なんで、鬼になんかなっちまったんだか！」

「ふガァガァガァがるるるぅぅ！」

長槍と巨大包丁が、空を切り裂きぶつかり合う。

「なんで、道を外してしまったんだ！」

「ウガァガァガァがぁぁあああぁぁぁ！！」

「お前、本当は調理人か何かだったんだろ！」

巨大包丁をかわしたタケシの振るう長槍の刃が、外れ鬼の太股を

切り裂く。

それでも外れ鬼の攻撃は止まらない。

「ウガァガァガァァァァァァァ！」

「本当はこんな所で化け物やってる場合じゃねえだろ？」

巨大包丁を長槍で受け流し、タケシの攻撃が外れ鬼の腕を切りつける。

「ウガウガウがかがガウがーーー！！」

「お前は、本当は何がしたかったんだ！」

タケシの振るった一撃が、外れ鬼の胸から腹部へと斜めに傷を付ける。

「ガァルルルゥルルルルゥるる！」

傷口から真っ赤な血が吹き出ると、外れ鬼は尚も吠え続けた。

「もう、いいだろ！？」

タケシに幾度か斬りつけられて動きが鈍くなるものの、外れ鬼は獣のような声を出しながら攻撃の手を休めない。

「もう、気は済んだだろ……？」

「ウガァウガァうがぁウガァァアアアぁぁぁぁ！」

「そろそろ終わりにしようぜ……」

タケシの長槍が、外れ鬼の腹部に突き刺さり、そのまま半分ぐらいまで潜って行く。

「うがぁ……ぁぁ……」

外れ鬼の動きが固まる。しかし、槍の刺さった腹からの流血は無い。

「影槍束縛じゃ。自由を奪う時間は短期だが、その分だけ動きを封じる力は強力じゃ」

タケシは、槍から手を離すと、外れ鬼に背を向け歩き始める。

「ウガァァ……ぁアァぁ……」

外れ鬼は、硬直してしまった体を無理やりにも動かし、腹に刺さっている長槍を引っこ抜こうと手を伸ばす。

しかし、その手は槍を掴むことなくスルスルと槍を擦りぬける。

腹部に刺さっている槍は、まるで影の様に掴むことが出来ない。

外れ鬼から歩いて間合いを広げていたタケシが振り返る。

「うがぁ、ウガぁ、ウガァ……」

振り返ったタケシの顔は、妖力共有で装着した仮面のせいで見え

ないが、その目線は真っ直ぐに外れ鬼の目を見ていた。

「我が力は、偉大なる山の如く！」

タケシは大きく股を開くと、そのまま腰をゆっくりおろし始める。

「我が技は、麗しき風の如く！」

タケシの声に合わせる様に、タケシの周りを緑風が巻き起こり、それは見る見るうちに竜巻となり天えと突き刺さっていく。

「ウガァ……ゥガァ……」

その光景を見る外れ鬼は、腹部に刺さった影槍の束縛の為、一歩も動けずにいた。

「力と技で、嵐を起こす、跳うっ！！」

タケシが竜巻の中心でジャンプをすると、竜巻の頂点目指して昇っていく。

そして竜巻の頂点に達したタケシは、そのまま竜巻の向きを変え、外れ鬼目掛けて急降下していく。

「堂本流超人空手奥義、風神飛翔脚！！」

タケシの緑色の竜巻を引きつれた飛び蹴り。

力強く。

激しく。

自信に満ちた一撃。

「いっけけけけけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

「ウガァァァァァァァァァ！」

その必殺の一撃を喰らおうとしている外れ鬼の絶叫の声は、竜巻の音に掻き消されて小さく聴こえた。

タケシの風神飛翔脚が外れ鬼の胸へと炸裂すると、その蹴り技は外れ鬼の胸を貫く。

そして外れ鬼は、終止符を討つ大きな爆炎を無人の商店街に舞い上げた。

だが、舞い上がった爆炎が地面へと収縮してく、まるで何かに吸い込まれていくように見えた。

その収縮先の中央に立つのは妖力共有したタケシの姿。

不思議な鎧甲冑の姿。

タケシの纏った甲冑が、外れ鬼が爆発して上げた爆炎を吸い込んでいく。

そして、爆炎を吸い込みきったタケシの足元には、ぐったりと横たわる板前風の男の姿があった。

その手には、刀身が折れた調理包丁が握られていた。

「ううう……ううう……」

まだ、板前風の男は息が有る様子だ。

「ほほぅ、こやつ、またしても人のみを吐き出しおったかぁ……」

「ん?、何か言ったか春婆怒?」

「いや、何でもないわ……。それよりもタケシや、この異空間が崩れるぞぇ」

「ああ、分かった」

タケシは、男を放置したまま歩き始めると、妖力共有を解除して春婆怒と分離する。

それに合わせて空間が歪み始めた。

そして何かがずれた感じがした後に、商店街の中に人の声が聴こえ始め、暫らくするとその声の主が見え始める。

いつもと変わらない、日の沈みかけた商店街。

いつもと変わらず、家路を急ぐサラリーマンや学生の姿。

いつもと変わらない買い物帰りの主婦や、お店の店員達。

それらが無人だった商店街に戻ってくる。

「あの者は、ほっといていいのかぇ？」

「あとは、あいつの問題だ。もう鬼じゃなく人間なんだからな……」

人の姿に戻り、春婆怒と並んで歩いているタケシは、後ろを振り向くことはなかった。

もう自分の役目は終わったのである。

振り向く理由は、もう何処にも無い。

「なあ、春婆怒」

「なんじゃ？」

「何時か俺、一人で鬼退治出きるようになるかな？」

「全てはお主しだいよのぉ～」

そう言いながら拳を握り締めているタケシを、春婆怒は優しい表情で見守る。

「きゃ！、人が倒れてるわよ、どうしましょお、思わず自転車で引いちゃったわ！」

「ええ！」

主婦の声に、思わず振り向いてしまうタケシであった。

<　それでも未来に進んでく　>

九十九神の呪縛から解かれた板前風の男は、意識を取り戻した後、すぐさま警察に自ら出頭した。

自首である。

あの男の記憶には、外れ鬼になっていた頃の記憶が残っていたらしく、その光景に耐えられなくなり、呆然とした錯乱状態での出頭であった。

警察は、自首して来た板前風の男の話を元に、すぐさま男の閉店している店へ家宅捜索に入った。そして、まだ事件として発見されていなかった死体を幾つも業務用冷蔵庫から発見する事となる。

これが一段と大騒ぎになる。

マスコミを通し犯人の自首は、その日の内に世間に知れ渡り、既に被害に会って業務用冷蔵庫に眠る遺体の数の多さに、更なる恐怖を掻き立てさせた。

数日後。

タケシのバイト先のコンビニ。そのコンビニの奥にある業務員用控え室。

業務用の長テーブルに、幾つかの折畳み式パイプ椅子が有り、引

き出しの付いた業務用の机の上には、店内を映し出すモニターとビデオデッキがおいてあった。

そんな事務室兼用の休憩室は、四人も入れば窮屈になりそうな大きさの部屋であった。

そこにオーナー鈴木と、バイトの井川が居た。

「井川君、もういいのかね?。もう落ち着いた?」

「はい、長い間休ませて貰いまして、すみませんでした」

「いやいや、私の方は構わないんだよ」

オーナー鈴木は井川を気遣い、ビン詰めの粉末インスタントコーヒーを二つのマグカップに作ると、一つを井川に差し出す。

狭い控え室、店のオーナー鈴木と井川が向かい合ってパイプ椅子に座っていた。

井川は事件後、検視の済んだ彼女の遺体と共に、故郷の実家に帰っていた。

そして彼女の葬式やら何やらを済ませると、またこの町に帰ってきたのである。

この町に帰ってくるのは、正直心が締め付けられ、押しつぶされるほどキツイ事であった。

死んだ彼女と暮らした町、あの部屋。

長い期間ではないが彼女との同棲の記憶が、思い出が、臭いが、生活が、色々な記憶が残っている。

そういった多くが彼を、この町から遠ざけようとした。

だが、彼は帰ってきた。

この町に。

「井川君、心の整理はできたのかい？」

メタボリックなオーナー鈴木は、頬肉と腫れぼったい目蓋で細くなった目で、優しそうな表情を作り上げていた。

「はい、今はまだ辛いことも多いと思いますが、それでも学校を卒業するまでは、この町でがんばって行こうと思ってます」

そう言いながら井川の顔は笑みを作っていたが、力弱さと影の多さがオーナー鈴木にもハッキリと感じ取れた。

井川は地元で彼女の両親に、こう言われていた。

「君はまだ若い、亡くなった娘に縛られて生きていく必要はないんだよ。

だがね、出来ることなら忘れないでほしい、うちの娘のことを……。

たまには娘の墓に手を合わせに来てほしい。

そして君は君の道を新たに進んでくれればいいんだよ、娘の分まで、力強く、希望のままに。

娘の分まで、笑顔で、幸せになってもらいたい」

死んだ彼女の両親の思いが、井川の心を後押しする。

自分は彼女の分まで幸せにならなければ行けないと。

「タケシさんや安田さんにもシフト面で大分迷惑を掛けているので、新しいシフトが完成したら携帯に連絡をください。
また、以前のようにバイトを頑張らせてもらいますから」

何事にも頑張る、それが辛い思い出を忘れさせる方法なのだろう。

「あまり無理しなくていいともうけど井川君がそう言うなら、今まで道理にシフトを作るけど……」

そう言いながらオーナー鈴木は、飲みかけのコーヒーの入ったマグカップをテーブルの上に置く。

「お気遣い感謝します、オーナー」

僅かな沈黙が控え室に流れると、井川もテーブルの上にマグカップを置いた。

「オーナー、ちょっといいスか～。」

突然、控え室の扉を開けてアフロヘアーの安田が顔を出す。

「ちょっとレジの調子がおかしくてさ～。」

「ああ、わかったよ、今いくら安田君。そうそう井川君、渡したい物があるんだよ、ちょっとまっててね」

「あ、はい？」

そう言うとオーナー鈴木は、タプタプと腹の贅肉を揺らしながらホールに出て行く。

一人残った井川は、ただボートして、壁に掛けられたカレンダーを眺めていた。

考えるのをやめようと思っていたが、カレンダーの日付を見ていると、彼女の命日になった数字をまじまじと見てしまう。

まだ一ヶ月も過ぎていないカレンダーに残る数字を。

ツッツーーーーー……。

それは一本の細い糸。

井川が居る控え室の天井から、その糸は下がって来た。

糸の先には、白く着色された小さな錘が付いている。

部屋に一人残る井川は、その糸の存在に気付いてはいないようだ。

小さな錘の付いた糸の先は、テーブルの上に置かれたマグカップの頭上で止まる。

そして糸を伝って透明の液体が、マグカップの中に数滴ポタポタと音も立てずに垂れていく。

そしてまた気付かれること無くその糸は、天井へと上っていった。

一方、コンビニ控え室天井裏。小さな隙間から光が漏れていた。

その僅かな光にぼんやりと映る人影、薄暗い天井裏に誰かが潜んでいる。

「くっくっくっ、私の可愛い妹を、色香で惑わさんとする不届き者。可愛い珠美に手出しする前に始末してやるわ……」

天井裏に潜む人影は、小さな声で呟く。

そして明かりの漏れる隙間から、垂らした糸を静かに巻き上げる。

「いや～、井川君おまたせ」

バイトの安田に呼ばれてホールに出ていたオーナー鈴木が、井川の待つ控え室に帰ってくる。

「井川君、これなんだけど。」

オーナー鈴木は、そう言いながら机の引き出しから封筒を取り出した。

「なんですかオーナー、それ？」

「これはね、私やバイトの皆からの気持ちなんだがね。本当は井川君が故郷に帰る際に渡したかったんだが、なかなか直接渡す機会がなかったもんでね。まあ、今頃でなんなんだけど、受け取ってよ」

オーナー鈴木が封筒差し出すと、それを見た井川の目が涙で潤む。

「すみません、皆にも迷惑かけまして……」

「いやいや、皆仲間なんだから、こんな時ほど助け合いだよ」

オーナー鈴木は、井川の手を取り、無理やりにも封筒を握らせる。

「すみません、本当にすみません……」

「ほら、今日は家に帰ってゆっくり休みなさい、シフトが完成したら連絡するから、ね」

封筒を握らせたオーナー鈴木は、今度は井川の背中を優しく押しながら控え室の出入り口へと誘う。

そして、井川を店の外まで見送った。

「あいつ、大丈夫ッスかね～」

レジカウンター内から、その光景を見ていた安田は、相変わらずのやる気の無い口調でそう言った。

「彼ならきっとすぐに元気になるさ」

「だと良いんスがね～」

この男はあまり他人に干渉しないタイプなのか、井川の沈みっぷりを見ても平然としていた。

オーナー鈴木は、控え室に戻って行く。井川が加わった新しいシフトを創るためだ。

オーナー鈴木は、モニターとビデオデッキが並ぶ机に座ると、シフトを創り出す。

そして、ふと咽が渇いたのか、飲かけのコーヒーカップを手に取ると口に運び、スズーートっと音を立てながらいっきに飲み干した。

コーヒーを飲んだ後、しばらくしてオーナー鈴木の視界がぶれる。

「あ、あれ～……」

そう口ずさんだ瞬間、オーナー鈴木は額を机に打ち付けて鈍い音を立てた。

そして、そのまま力無く椅子から崩れ落ちると、床に倒れこんでしまう。その目は白目を向き、体を痙攣させていた。明らかに危険そうな状態である。

「オーナー、またレジが可笑しくなったスよ～」

控え室を覗きこんだアフロヘアーの安田は、床に倒れこんでいるオーナー鈴木を発見した。

「オーナー、なに床で寝てるんスか～。うはっ、白目向いてる、目を開けたまま寝る人始めてみた。……オーナー寒いんですか、震えてますよ?」

ゴソゴソ、パカァ。

「あれ、何？」

猫田探偵事務所の台所の四角い床板が一枚開くと、その部屋で夕食の準備をしていた珠美が、開いた穴から出てくる黒装束姿の男を何事かと見守る。

「ちっ、運の良いヤツ」

穴から出てきたのが自分の兄であることを確認した珠美が、可愛らしく首をかしげた。

「龍にーちゃん、そんな所から出てきて何してたの？」

妹思いの兄は穴から這い出ると、黒装束に付いた埃を払い、自分が出てきた穴を丁寧に塞ぐ。

「いや、ちょっと床下に害虫が居たのでな、駆除してたのだよ」

「あらら、そうだったの龍にーちゃん、ご苦労様」

ロングスカートの前で手の平を合わせ、あどけなく微笑む珠美は、兄に一礼をした。

その無垢な笑みとは反する巨乳が、両腕で挟まれ中央に寄せられる。

その光景を見ていた龍信は、顔の筋肉が緩んでいた。

「龍にーちゃん、もう少しで夕食できるから、お風呂でも入ってきてよ。そんな埃だらけじゃあ御飯なんか食べさせて上げないんだからね」

「ああ、わかったよ」

微笑みながら食事の準備をする妹にうながされ龍信はバスタブへと目指した。

「畜生、やはりあの妹の笑みは私が守らなくては！。あんなコンビニのバイト如きに汚されてなるものか。今回は失敗したがいずれは……」

そして、遠くから救急車のサイレンが聴こえてくる。

つづく

<　それでも未来に進んでく　>（後書き）

ちわーす＞ｖ＜／

これで第二話「外れ鬼」は終わりに下ります。

第一話に比べて2倍近くの長さでしたが、どうでしたか?。

先行してお読みいただいてる方々には、誤字脱字などご迷惑おかけしていますが、ちょこちょこ直しておりますので、まことに申し訳なく思っております。

今後は、ＵＰする前に誤字脱字は無くせる様に気を付けて行きたいと思っているのですが・・・・なかなか・・・・

まあ、そんなこんなで今後もよろしく願います。

（≧≦∇≦≧）ノシ

九十九　第三話　タンス

デジタルの目覚まし時計がマンションの一室で、朝早くからけたたましく鳴り響く。

少年は、目を擦りながら枕元の目覚まし時計を止めると、ベットからゆっくり起き上がり窓のカーテンを開けた。

眩しい朝の光が目に突き刺さり少年が顔を顰めると、窓の外から鳥のさえずりが聴こえて来る。

そして少年は、よろよろと寝起きの力ない足取りで勉強机の上の眼鏡を取ると、それを掛けてパジャマのまま自分の部屋を出て行った。

一度トイレに立ち寄った後、誰もいないリビングに行くとテーブルの上にはビールの空き缶や日本酒の一升瓶などが散らかっているのを少年は冷めた目で眺める。

そして少年は、そんな光景を無視してキッチンの流し台の前に立つと、コップに水を汲み一杯飲み干す。

荒れたキッチンで一息付いた少年は、今度は洗面台へと目指す。

洗面台に付くと、自分用のタオルを取り出し顔を洗い歯を磨くと、再び自分の部屋へと戻っていく。

そして、ブレザーの学生服に着替えると、朝食も取らずにマンションの玄関から出て行った。

バスで駅まで行くと、電車に乗り換えて通っている高校の側の駅に到着した。

あとは駅から２０分ほど歩けば、学校に到着する。

バスや電車を乗り過ごさなければ一時間半ぐらいの通学時間であった。

電車で学校の側の駅に付いた少年は、同じ電車を降りた生徒たちに混ざって学校を目指して歩き始めた。

携帯電話をいじりながら歩く生徒、髪型を気にしながら歩く女子生徒、オタク風の三人組、きゃーきゃー五月蝿い女子生徒グループ、朝からベタベタしたカップル、そんな様々な生徒達に混ざりながら少年も一人で歩いていた。

学校の校門に着くと、生活指導の教員が、服装の乱れている生徒を捕まえて、朝からグチグチと説教をしている。

少年はその横を、教師に軽い挨拶して過ぎていく。

校舎に入った少年は、下駄箱で内履に履き替えると、自分の教室を目指した。

そして教室に入った少年は、自分の席に座るとしばらくぼんやりしていた。

教室の中では、朝からテンションの高いクラスメイトたちの話し声で賑わっていた。

どうやら昨日の夜に自首した、連続通り魔犯の話題が多い。

彼ら彼女の興味は、通り魔犯が誰かよりも、これで夜間の外出制限が緩む事が嬉しいようだ。

そんな話し声をよそに、少年は自分の席に座ったまま無言でボートしている。

この高校に入学して、もうすぐ一年が経とうとしていた。もうしばらくすれば、二年生に進級である。

だが、少年にはこの一年で友達と呼べる存在は出来なかった。それどころか、教室に入ってきても、挨拶する相手すら居ない。

少年は席を立ち、教室を出て行く。ホームルームの前にトイレを済ませようと席を立ったのであった。

そして、トイレを済まし、手を洗って、また教室に帰るため歩き始める。

「よう、河本くぅ～ん、おはよう～」

少年は、人生を舐めきった口調の挨拶をされて、後ろを振り向いた。

背後から少年に挨拶してきた四人組の同級生。

今はクラスが違うが、中学校時のクラスメイト達である。

ブレザーの下は派手なTシャツ、もちろんネクタイはしてなく、髪の毛は茶髪に染め上げている。

そして何故か四人のうち三人は、額に大きなバンソーコーを張っていた。

「やあ、おはよう……」

後ろを振り向いた少年は、小さな声で挨拶を返すと、そのまま俯きワックスの効いた廊下に目線を落とす。

「なぁ～、河本くぅ～んよぉ～、お願いがあるんだけどさぁ～」

一人の不良少年が、そう言いながら俯く少年の肩に腕を回してきた。

「……」

残りの不良少年達は、そのまま少年を囲みこむ。

それは少年の逃げ場を塞ぐと同時に、他の生徒達に何が起きているのか隠すための陣形であった。

「実話言うとよぉ、俺たち今日の放課後にさ～、この前知り合った女の子達とカラオケに行くんだけどよぉ～。
それでよ～、ちょっと手持ちが少なくてなぁ、わりんだけど、金、貸してくんない？」

それは、お金をクレと言う意味である。

「ぼ……ぼく、お金なんか持ってないよ……」

「ウソ付け、俺ら知ってんべ」

「な……何を？」

「オメー、学校が終わるとバイトしてるべよ」

事実である。

「そ、それは、お父さんが失業して、家にお金が無いから仕方なく……。学校にも理由を言って許可とってあるし……」

「はぁ～ん？。学校とかオメーの家庭の事情なんて聴いてね～んだよ」

他人の事など、何も関係ないといった冷めた口調。

「いいから、金貸せよ。ちゃんとけーすからよ～」

これは明らかに高校の校舎内での堂々としたカツアゲである。

「ちょっとくらい金有るだろ。いいから出せよぉ」

不良少年らに囲まれている少年は、しぶしぶブレザーの内ポケットから財布を取り出す。

しかし、それを見た不良少年の一人が、財布を強引に取り上げる。

「あっ……」

財布を取り上げられた少年が、小さな声を上げた。

財布を取り上げた不良少年は、そんな事を気にもせずに財布の中を勝手に探る。

「ちっ、千円札一枚しかへーてねーべ」

「うは、しけてる！」

「……」

「これしか持ってねーのかよ」

不良少年は、財布から千円札引き抜くと、それで自分の顔を煽りながら、俯く少年の顔を睨む様に覗き込む。

「それ、今日と明日の……、僕の食費なんだよ……」

「マジで～」

少年は本当に千円札一枚で、今日明日の食費をまかなおうとしていた。　失業した父親は、再就職先も探さず日々飲んだくれている。

生活費を家に納めず、家賃も三ヶ月分払っていない。

その為マンションの管理会社から催促の電話が最近耐えない。

「へぇ～、そうなん」

不良少年の一人は、そう言いながら千円札を無造作に自分のポケットにしまい込んだ。

「……」

少年は、自分の僅かな食費を奪い取られても、抵抗せずに俯いたままであった。

「おい、君たち、何にをしてるのかね、もうじきホームルームが始まるぞ、早く教室に入りなさい」

その声の方向を、少年も不良少年も一斉に向くと、定年退職が間じかに迫る年配教師とスーツ姿の若い教師が立っていた。

「へ～い」

教師の姿を確認した不良少年たちは、取り囲んでいた少年を解放すると、教師達に背を向けて逃げるように歩き始めた。

「おい、君たち」

少年を残して去ろうとしていた不良少年達を、スーツの若い教師が呼び止める。

「君たち、今ここで何をしてたんだ?」

「へ?　別に何もしてませんよ」

振り向いた不良少年達は、とぼけた返事を返す。

その四人を若い教師は、正義感の強そうな視線で見つめる。

「本当ですか？」

若い教師は、近くにいた少年に質問をするが、少年はまた視線を逸らす様に廊下の床に向けた。

「本当ですよ、俺ら、ただ楽しい朝の会話を楽しんでただけですから～」

不良少年は、若い教師に舐めた口調でウソを付く。

「……」

若い教師は、それが嘘だということぐらい分かっていたが、なんの証拠も無いので、これ以上追求する言葉を見失い黙り込む。

「まぁまぁ、森先生」

後ろで状況を見守っていた年配の教師が、若い教師を止めに入る。

「ほら、君達はもう行きなさい、ホームルームが始まりますよ」

「へぇ～い」

年配の教師にそう言われると、不良少年達はダラダラした足取りでその場を立ち去っていく。

その姿は年上や教師への態度とは思えない程の不道徳なものであった。

「塚田先生……」

若い教師は、自分より背が低く小柄の年配教師を見下ろしながら、不満げな表情をしていた。

「君、彼らにイジメられているんじゃないのか？」

「……」

不良少年達が立ち去ると、若い教師は少年に質問する。

しかし少年が返答を返すことは無かった。

少年の仕草に年配教師が眉をヒクリと動かす。

「森先生、うちの学校は平和の見本の様な高校ですよ、イジメなんて有るわけ無いじゃないですか、かっかっかっか」

年配の教師は現実を無視する発言の後、水戸黄門の様な笑いをしてみせる。

「ほら、君も早く教室に入りなさい」

年配の教師は、わざとらしい笑いを止めると、少年に命令の如くそう言った。

そして少年は早歩きでその場を離れていく。

「塚田先生、あの生徒は……」

「さぁ、森先生、我々も教室に入らなければホームルームに遅れてしまいますよ、かっかっかっ」

若い先生は、そんな年配の教師の背中を見つめていた。

<　陽子の　ちびっ子空手教室・前編　>

夜の六時が過ぎた頃。何時もより桜木家が私有している道場は賑やかであった。

「はぁ～～～い、皆、注目～～～」

今日の陽子は、白い道着に黒帯姿で、ちびっ子達に囲まれていた。

父、桜木銀が行っているちびっ子空手教室。

陽子は父と共に、週二回行われている、この教室で講師をやっていた。

「オッスッ！」

「オースッ」

陽子の呼び掛けに十五人の子供達が集まってくると、陽子の横に木箱を両手で抱えたタケシもやって来た。

タケシもバイトがてら、ちびっ子空手教室を手伝っている。

「え～、今日は試し割りを皆に披露します。見たこと有る子もいると思うけど、見たこと無い子もいるので黙って見てること」

「はーい」

「はいじゃねえ、オッスだ」

「オ……ス……」

普通に返事を返した子供に、タケシが「空手はオッスだ」と、ドスのきいた声で訂正させる。

タケシに訂正を指摘された男の子は、若干涙目で言い直した。

タケシが木箱を畳の上に下ろすと、小学生高学年ぐらいの男の子二人が、丈夫そうなテーブルを陽子の目の前に運んでくる。

「じゃあ、まずは空手の試し割りと言えば……」

陽子はブツブツ言いながら、タケシの持ってきた木箱から自分の頭ぐらいの大きさの平べったい岩を取り出しテーブルの上にドスンと置く。

つづいて手の平に乗るぐらいの茶色いレンガを幾つか取り出し、最初に出した大きな石の上においた。

「はい、レンガ砕きです」

「おーー」

子供達から、どよめきに似た声が上がる。

陽子はレンガの半分を手の平で包む様に持つと、その手の甲を平べったい岩の上に置く。

「じゃあ、いくね～」

陽子は開いてる手を振りかざすと、軽く呼吸を整える。

そして振り上げられた手の形はチョップ、空手で語るところの手刀である。

「リィヤッ！」

振り上げられていた手刀を気合の入った掛け声と共に、手の平の中のレンガに叩き込む。

すると乾いた音と共にレンガは真っ二つに綺麗に割れた。

「おおおぉーーーー」

テーブルの前で、その試し割りを見ていた数人の子供から、驚きの声が上がる。

そして、子供達から拍手が上がった。

陽子は続いて木箱から空のビール瓶を取り出しテーブルの上に一本置く。

「今度はビール瓶切です」

ビール瓶を置いた陽子は、今度は手刀を横に振りかぶる。

狙いはビール瓶の首。

「リィヤッ！」

陽子の水平に振り切られた手刀は、ビール瓶の首を綺麗に跳ね飛ばす。

切り取られたビール瓶の首は、空を飛び道場の壁にぶつかり木っ端微塵に砕けてしまう。

この試し割りを何度か見たことの有る子供たちからは、試し割りの後、お約束の様な拍手が起きるが、初めてこの試し割りを見た子供たちは目を丸くして驚き、他の子供達より拍手が少し遅れてしまう。

明からに「ビール瓶って、手で切れるんだ」といいたげ表情をしていた。

「えっと、テーブルはもう要らないかな～。タケちゃんちょっと片付けるのを手伝って～」

「おうょ」

「オッスじゃないの……」

「……オッス」

陽子はタケシとテーブルを横にずらすと、今度は木箱からプラッチックの青いバケツを取り出した。

バケツの中にはビール瓶が一本入っており、陽子はそれの首を掴

み取り出した。

「これはかなりテクニックいるのよ～」

陽子はビール瓶の首を掴み、もう片方の手の平をヒール瓶の口を塞ぐように添えた。

足を開き少し腰を落とした陽子。

手に有るビール瓶の中には若干の水が入っているようだ。

そして青いバケツがビール瓶の下にセッティングされる。

「いくよー、……リィヤッ！」

気合の声と共に陽子は、ビール瓶を上下に少し振ると同時に、空いた手でビール瓶の口に掌打を入れた。

ガラスが割れる音がした後、水が飛び散る音を立てる。

するとビール瓶の底が綺麗に割れて、バケツの中に水とビール瓶の破片が飛びちっていった。

子供達から三度目の拍手が上がる。

しかし、この試し割りを始めて目にした子供達は、驚きのあまり完全に拍手をするのを忘れてしまっていた。

<　陽子の　ちびっ子空手教室・後編　>

「まあ、試し割りとか言って披露したけど、こんなの実際はさほど凄くないんだよね～」

陽子は笑顔で底の抜けたビール瓶を、青いバケツに入れると木箱に片付けた。

今回の試し割りを始めて見た子供達は、まだ驚きから目が覚めていない者もいる。

そんな子供達には陽子の言っている意味が伝わってはいない様子だった。

逆に、何を言い出しているのかと言いたげな顔で陽子を見詰め返す。

「リカちゃん、レンガ割り見せてあげて」

「オッス」

まだ小学ニ年生ぐらいの女の子は、陽子に可愛らしく返事をすると、道場の隅にあるパイプ椅子を取りにいった。

そしてテーブルの前にパイプ椅子を置くと、木箱からレンガを取り出しパイプ椅子の上に乗った。

初めて試し割りを見た子供たちは、自分よりも年下で小さな女の子であるリカちゃんの動きを　、まさかと言いたげな表情で見守っ

ていた。

リカちゃんは、そんなことを気にすることなく、陽子が見せたのと同じようにレンガを持ち、テーブルの上にある平べったい岩に手の甲を添えた。

「えいっ！」

パコン。

可愛らしい掛け声だった。だが、レンガは綺麗真っ二つに割れてしまう。

今月になって入ったばかりの少年が、子供達の前列であっけに取られていた。

「不思議そうな顔してるね。レンガに仕掛けがあると思ってるのかな？」

陽子はそう言いながら木箱からレンガを取り出すと、戸惑う男の子に手渡す。

手渡された男の子はレンガの全面をじっくり観察したあと、拳で何度かレンガを強打してチェックを繰り返した。

「仕掛けは無いでしょ」

ニッコリと笑った陽子は男の子からレンガを返してもらうと、パイプ椅子に乗ったままのリカちゃんに手渡す。

そしてまたリカちゃんは、男の子がチェックしたレンガを再び難無く割って見せた。

少年は完全に唖然とした表情で固まっていた。

「はい、リカちゃんもう戻っていいよ」

「オッス！」

リカちゃんは可愛らしい返事をすると、子供たちの輪の中に帰っていった。

「今見せた試し割りは、空手家だから出来る出来ないじゃないのです。
その人が強いとか力があるとかじゃなくて、全ては知識とちょっとしたテクニックが仕掛けなの」

道着姿の陽子は、人差し指を立てながら女の子ぽいポーズで説明する。

その横でタケシが割れたビール瓶やレンガを片付けていた。

「レンガ割りはチョップの威力が凄いんじゃなくて、その下に有る岩が硬いかどうかが大事なのです」

テーブルの上に有る平べったい岩を、陽子が拳で軽くコンコンと叩く。

「レンガを持った手の甲で、レンガと岩との間にちょっとだけ隙間を作るのね。

そしてレンガを上から叩くとレンガが下の岩に打つかって割れる。
こうするとレンガを叩いて割ったのではなくて、下の岩にレンガを叩きつけたのと同じ事になるのよ。
だからリカちゃんのような小さな女の子や、私のようなか弱い女性でも難無く出来ちゃうのです」

後片付けをしていたタケシが、陽子の最後のほうの台詞に、「ウソだろ」っと言いたげな表情で俊敏に振り返った。

「最後に見せたビール瓶の底抜き、これもビール瓶の中に少し入っている水がポイントなのよ。
この水をヒール瓶を上下にシェイクした瞬間にビール瓶の口に掌打を入れると、瓶の中で空中に浮いている水に勢いがつき、ビール瓶の底を水が叩いて割っちゃうのよ。
まあ、最初に見せた二つの試し割りに比べると、これはかなり難しいんだけどね～」

機械のモーター音が響く。

陽子が子供たちに笑顔で説明しているのを邪魔するかのように、タケシは壁にぶつかって割れたビール瓶の首の破片を掃除機で吸い取り始めていた。

「オッス、陽子先生、じゃあ、ビール瓶切も、誰にでも出来るんですか？」

掃除機で破片を吸っているタケシを見ていた子供が陽子に質問した。

「あれは今見せた中で一番のいんちきです」

両手を後ろに組み、そう言った陽子は無邪気な笑みで舌をだす。

「インチキ？」

陽子は、木箱から二本のビール瓶を取り出すとテーブルの上に置いた。

「もう割るなよ、掃除終わったんだから」

「うん」

掃除が終わったタケシが、掃除機のコンセントを巻きながら陽子に忠告した。

「こっちの瓶は割れるけど、こっちの瓶は割れないの」

「えっ、なんでですか？」

「仕掛けが有るからです」

笑顔でさらりと言ってのけた陽子をよそに、仕掛けの分からない子供たち数人が、並べられたビール瓶を凝視する。

「右の瓶は普通の瓶ね、左の瓶は仕掛けがある瓶です。ラベルにマジックでちょっとマークは入ってるでしょ」

「オッス、マジックでマークが入ってるけど……？」

「よーく見てごらん、瓶の首のところ」

子供達は目を細めてビール瓶を睨みつける。

「ちょっと、ちょっとだけど色が違う何処がある……」

陽子に言われて少年達がやっと気付いた。

「そう、そっちの瓶はあらかじめ瓶の首のところをライターの火でね、じっくり炙ってあるのよ」

「火で炙る？」

仕掛けをしらない子供達が、陽子の次の説明を早く聴きたいのか、陽子の顔をマジマジと見つめた。

「ライターの火でガラスの同じ場所を何度も何度も炙っているとね、小さなヒビが、少しずつ少しずつ入っていくの。ビール瓶は色が暗い茶色だから、そのヒビがほとんど目立つ事無く仕込めるの。それで、ヒビの入った場所を手刀で叩けば、切った様に見えちゃう訳なの」

「じゃあ、これはインチキじゃんか？」

仕掛けを知った子供が、大人を疑う目で陽子を見る。

「だからインチキだって言ってるでしょ」

陽子は大人には色々な事情が有るのよと言いたげな笑顔で答えた。

「まあ、昔のインチキ空手家がよくやった試し割りのトリックの一つよ。
昔は多かったのよ、板割りの木の板を最初に割っといてから接着剤でくっ付けとくとかさ～」

「何よりもだ、今回何を教えたいかって言うと。
どんな凄い試し割りを見せようとも、それがその人物の本当の強さとは別物と言うことだ」

掃除機を片付けてきたタケシが、そう言いながら帰ってくる。

「まあ、試し割りの全部が全部、インチキって訳じゃねえがな。
世の中には他人がマネできない試し割りを披露する連中もたくさん居るしよ」

詰まらなそうに語るタケシ。

「だが、例え素手で大岩を砕こうと、重ねた瓦を何枚割ろうと、バットを何本へし折ろうとだ。
それは強さとはまた別物。
岩も瓦もバットも避ける事も無いし反撃もして来ない、動かない物をどんなに破壊しても、
それは柱に縛られた対戦相手を殴り殺すのとかわらねえってことだ」

「その例え、言い過ぎかな」

「そうか？」

「まあ、試し割りは自分の実力を計るのにはちょうどいい稽古のひとつだけど、トリックの有る試し割りは意味が無いってことです」

「まあ、そう言う事だ、そろそろ終わりの時間だな」

タケシが壁に掛かった丸い時計を見ながらそう言うと、陽子や子供達も時計の方を見る。

時間は空手教室が終わる七時になっていた。

「あ、そうだね、じゃあ今日の稽古をおわり、ま、ス！。」

手刀を振るう音がした。

次にビール瓶の首が、割れる音がした。

その首が飛んでいく音がして。

最後に首が、壁に当たって砕ける音がした。

全員が、その一連の流れをゆっくり見ていた。

陽子が台詞の締めに何故か、目の前にあった仕掛けのあるビール瓶の首を撥ねたのである。

「なんで割るん！？」

「あは、つい……てへっ」

思わず手が出た陽子は、可愛らしく舌を出して茶化して見せた。

<　カズマ・前編　>

午後七時、桜木ちびっ子空手教室が終わり、子供達がわいわいと騒ぎながら道場から出てくる。

ほとんどの子供が道着の上に何かを羽織る程度の格好で、迎えに来た親の元へと走って行く。

微笑ましい光景である。

「桜木先生おやすみなさーい」

「はい、おやすみ」

「先生おやすみー」

「はい、おやすみ、風引かないように」

帰宅する子供達を道場主の桜木銀が、顎鬚を短く切り揃えた顔に笑顔を作り道場の外で見送っていた。

桜木銀は、今日のちびっ子空手教室を、娘の陽子と居候のタケシに任せ、自分は道場の外で一人稽古をしていた。

その稽古とは『站椿（たんとう）』。

両足を肩幅ぐらいに開き腰を落とす。

上半身は、背筋は伸ばし、両腕は力をいれずに前に伸ばしながらじっと動かずにいる。

そのまま体制を崩さないよう、ひたすら耐える過酷な苦行。

体を鍛え、精神おも鍛え、そして呼吸法の鍛錬でもある。

学生などの部活動では、空気椅子や電気椅子と呼ばれるトレーニング方法。

これを中国拳法などでは站椿と呼ばれ、体作りの初歩的基本稽古とされている。

この站椿と呼ばれる稽古を取り入れている格闘技も少なくない。

銀はこの站椿を、ちびっ子空手教室が始まった二時間前から休まず行っていた。

着ている道着や顎鬚からは汗が滴り、地面には汗で大きな水溜りのような染みを作くっていた。そして全身からは湯気をユラユラと上げている。

それでも尚且つ、ちびっ子空手教室の生徒達が帰宅する様子を、站椿の形のまま笑顔で見送っていた。

「オッス、桜木先生」

站椿で子供達を見送っていた銀の前に、一人のちびっ子空手教室に通っている少年が、野外にもかかわらず正座をする。

「ん～、またカズマ君ですか……」

「オッス」

いきなり自分の目の前に正座した少年に、銀は呆れた言葉を返した。

その正座をする少年は、何を思うのか真剣な表情であった。

「先生、僕を弟子にしてください！」

声変わりをしていない声で、弟子入りを志願する少年。

そう言うと、正座のまま深々と頭を下げた。

「カズマ君、その話は前回もちゃんと断ったじゃないですか」

「オッス、ですが僕は諦めませんとも伝えました！」

「んん～～……」

情熱的な瞳で見る少年の表情に、銀は站椿を中断して道場の中に逃げ込む。

「先生、まってくださいよ」

少年は真剣な様子だった。そして、少年が逃げる銀を尚も追っかけて道場に飛び込んでいく。

「先生、何でダメなんですか、そもそも何で空手教室は小学生まで

で、中学生の部が無いんですか！？」

「いや、それはね、それがここの方針だからさ～」

道場内を早足でグルグルと逃げ回る銀を、少年も早足でちょこちょこと追い回す。

「お、カズマのヤツまた弟子入り志願か、断られても、断られても、懲りねぇ～ヤツだな～」

「そうね～」

まだ、道着姿のタケシと陽子が、道場内でおっかけっこを繰り広げる二人を見て呆れた会話をしていた。

二人がこのような光景を見るのは数度目のことである。

ドスン。

「フガッ」

逃げ回っていた銀が急に立ち止まると、追っかけていたカズマが銀の腰当たりに顔をぶつけて止まる。

「ふん～……、カズマ君、ここに座りなさい、二人もこっちへ」

銀はそう言って道場の冷たい床に座ると、カズマも向かい合うように座る。

そして呼ばれたタケシと陽子も銀の後ろに座った。

胡坐をかく銀とタケシに対し、カズマと陽子は礼儀正しく正座で座ると、四人の間に緊張が張り詰めた空気が立ち込めた。

「カズマ君、うちのちびっ子空手教室は、小学生までです。中学生になっても空手を続けたいのなら、学校の部活か他の道場に行きなさい。
他の道場に行くなら私から招待状も書くから」

この言葉は以前にも言った台詞だ。

銀は、この台詞ではカズマが納得しないことも分かっていたが、今日も繰り返した。

だが、今日のカズマの返す言葉は何時ものものとは違った。

「他の空手ではなく、桜木先生、僕は堂本流が習いたいのです！」

「あら、そうだったの」

陽子がそう言ってキョトンとする。銀の表情もガスマの言葉に少し驚いていた。

「僕は堂本流空手に憧れているんです。それ以外の空手や格闘技で強くなりたいんじゃあないんです」

タケシもまた「へぇ〜」と、ちょっとばかり驚いているようだった。

「カズマ君、キミがそう思うのならば、私は尚のことキミの弟子入

りを断らせてもらうよ」

「えっ！？」

生真面目な少年は、銀の言葉に動揺して驚きの声を漏らす。

「桜木先生、何故ですか！」

「君がまだ子供だからだよ」

「子供って！」

眉間に力を入れて怒鳴るカズマを、銀は静かな態度で威嚇する。

「堂本流とはだね、殺人空手と言っても良い流派だ。
対戦者の肉を突き、骨を砕き、金潰し、目を突いてでも勝利を掴むのが堂本流」

「わかっています！」

少年の視線に真剣な光が見えた。

それは、銀にもはっきりと届いていた。

しかし、銀も引く気は無いようだ、話を進める。

「それが、何を意味するかもかね？」

「オッス！」

少年は、何の躊躇もなく即答した。

「目を突き、金を蹴り上げ、喉仏に抜き手を放ち、倒れている者にすら容赦なく追い討ちをかける。
それが相手に与えるダメージは、その後の私生活にまで影響を与える深刻なダメージですよ」

「オッス、分っています」

「そんな技を使う堂本流とは、相手に同じことをされても仕方ない存在なんですよ。
カズマ君、キミが対戦者に殺人術を使う勇気が有っても、
キミがそんな殺人術を使用される立場に置く訳には行かない」

「僕が子供だからですか！」

カズマの声は怒鳴り声に近かった。

「そのとおりです」

しかし、銀の返す言葉は静かなものであった。

「僕は今はまだ子供です、ですがいずれ堂本流の名を汚さない立派な空手家になって見せます！」

「そう言う問題じゃあないんだよ、キミにも両親がいるだろ。」

銀が真面目な顔でそう言ったときである。

「桜木先生、私からもお願いします」

年配の男性の声。

発しられたのは、道場の入り口に何時の間にか立って居た男性からだった。

痩せ気味の体型で、眼鏡をかけていた。額が少し後退した中年男性の顔付きは、あまり自分に自信が無さそうな表情をしていた。

「貴方は、カズマ君のお父さん？」

「何時も息子がお世話になっております。」

カズマの父は、礼儀正しく深々と頭をさげた。

その頭部の天辺も若干だが、薄くなっているのが見えた。

「カズマ君のお父さん、貴方まで何を言っているんですか」

一礼をしたカズマの父に、銀は困った表情で言った。

「桜木先生。この子は、この空手教室に来るまで私には本当の事を言いませんでしたが、学校でイジメられていました。
それがここに通い始めてから、見違えるほど変わって行きました。
それどころか私よりも立派に強いく優しい心の持ち主になりましてね。
桜木先生に弟子入りしても、例え殺人術を習得しようとも、この子なら決して人の道を外さないと私も信じております。
ですからどうか、息子を弟子にしてやってください」

そう言って突然現れたカズマの父親は、銀に対して再び深々と頭をまた下げ、薄くなり始めた頭部を晒す。

「ですが、カズマ君は来年まだ中学生、勉学だってあるでしょう？」

銀が、弟子入りを断るために、更なる言い訳を語り始める。

「この子は、中学高校に進学しても空手を学べるようにと猛勉強しましてね。
私立の名門エリート中学校に合格しました。これで最低限の成績を保ってさえいれば高校まではエスカレーター式で進学できます。ですから勉学に関しては心配なさらずにお願いします」

頭を上げたカズマの父は、そう言って更に息子を弁護した。

「うほ、すげー長期からの計画かよ」

タケシが呆れた顔でそう言うと、横に居る陽子も指で頬を掻きながら同じような表情をしていた。

「桜木先生、この通りです、父の承諾も得ていますし学校の方の問題も有りません。お願いします、僕を弟子にしてください！」

カズマが深々と頭を下げると、カズマの父も道場の入り口で直角に腰を曲げ頭を下げた。

「ですが、二人とも堂本流の危険性を甘く見ています」

そう言いながら銀は、人差し指と親指を立てる。

そして、そのまま二本の指を、自分の右目の中へと滑り込ませた。

「!?」

カズマと父親の二人が、その銀の行動を見てドッキリしながら顔を引きつらせた。

そして二人をよそに銀は、つまみ上げた自分の眼球をスポリと引っこ抜いた。

「義眼!?」

「そのとおり、義眼です」

<　カズマ・後編　>

銀は、自分の右目を、自分の左目で眺めながら話し始める。

「私が二十歳の頃です。私はまだ堂本流ではなく別の流派で空手をやってました」

昔を語り始める銀に、娘である陽子と居候のタケシも興味深く耳を傾ける。

「当時私が門下だった流派は、全国的にも大きな流派でした。私は、その流派で二十歳の頃に大会二連覇を果たした、天才若手空手家として名が知れ渡り始めていましてね。そして周りからも三連覇を期待されての全国大会。それを難無く優勝をとげた年の話です」

銀は、外した義眼をまた元の場所へと戻すと親指で最後の一押しをする。

「天才天才と周りから言われていた私は、天狗になっていたんでしょうね。その存在を知って、居ても立ってもいられませんでした……」

「堂本拳四郎ですね」

その名前を上げたのはタケシだった。

その名は、タケシの祖父で有り、空手界のトップブランド。

その存在を知る者からは、格闘技界最強とも言われている。
この場に居るタケシ、銀、陽子の三人が知る限りのナンバーワンの霊長類だった。

「ええ、後の我が師であり、タケシ君の祖父の超人空手家・堂本拳四郎氏、その人です。
空手の道で最強を意識する者ならば、その名前は避けて通る事のできないビッグブランド。
……当時の私も、血が騒ぎました。
そして若さゆえに挑んでしまった……」

銀は、モミアゲから繋がる短く揃えられた顎鬚を撫で回し、話しを続けた。

「堂本先生の空手は、それまで私がやってきた空手とは、まったく異なる代物でした。
大会三連覇なんて、ただの飾りだと知りましたよ。
右腕を折られ、左膝を砕かれ、なおもまだ敗北を認めない私に対し、堂本先生が最後に放った技が瞳への一本指貫手。
それで右目を貫かれて私はやっと敗北を認めました」

銀は、そう言いながら自分の正面に座る少年に対して、杭のような人差し指で瞳を抉るアクションを見せる。

「堂本流は、相手にただ勝利するのではなく、圧倒的な勝利を目指し、相手の心を折るのを目的として戦う。
それがじじいの教えであり、あのじじいはそうやって生きてきやがった。
一度対戦した相手が二度と自分の前に立たないように心を砕く」

一つの眼と一つの義眼で銀が真っ直ぐカズマを見つめる。

「拳四郎先生との対戦後、片手、片足、片目に重症を負った私は、半年間も病院で寝たきりになりましてね……。そして辛いリハビリ後に病院を退院した私は、すぐさま行動に移しました……」

「堂本拳四郎に、弟子入りしたのですね」

真剣な表情の銀に代わって、タケシが答えた。

しかし、銀の回答は……。

「いやいや、妻、雪絵に結婚を申し込んだんだよ」

「「「「ズコーーーッ」」」」

タケシ、陽子、カズマ、カズマの父の四人が、お約束を守るお笑い芸人の様にずっこけた。

「ははっ、お母さん、結婚する前は病院で働いてたんだ。看護士か女医さん？」

ずっこけた陽子が、苦笑いしながら体を起こすと父に質問する。

「いやいや、雪絵も入院してて ね」

「「患者かよ！」」

タケシと陽子の息のあったツッコミが入る。

「あ……あの、話を戻しますが……」

「ああ、すまん」

カズマが脱線したトークの路線を、強制的に戻す。

「とにかく弟子にして下さい。弟子にしてくれるまでは僕は諦めません！」

「ところで、カズマ君は何でお父さんの弟子になることに拘ってるの？」

陽子の質問に、俯いたカズマが重い口調で話し始める。

「僕がちびっ子空手教室に来るまで、いじめられっ子なのは知ってますよね」

先程カズマの父が言っていた話を三人は思い出す。

「君が、ここに通うようになって三年でしたかね」

「はい、三年前、僕はまだ小学三年生でした。
その頃の僕はとっても心が弱く、体も貧祖で、いじめっ子に反抗することも出来ずに、いじめられるのが嫌で、いじめっ子の命令を聞くだけの毎日でした」

「情けね～な～」

カズマの話にタケシが小声でぼやくと、隣に居た陽子がタケシを肘で突く。

「はい……、タケシ先生の言うとおりでした。あの頃の僕は情けないだけの存在」

タケシの小声はカズマにも聞こえていたらしい。

「もう、タケシ先生は覚えてないと思いますが、その頃の僕とタケシ先生は擦れ違う程度ですが何度も会っているんですよ」

タケシは、自分の顔を指差しながら「えっ?、俺とか?」と言う顔をする。

「毎日僕は学校帰りにいじめっ子グループ四人のランドセルを抱えて彼らの後ろをついて回っていました。
自分の家とは反対方向の彼らの下校方向にです。
その下校中に何時も河川敷の土手をランドセルを抱えてる僕は、ロードワークに励むタケシ先生と何度も擦れ違ってました」

「タケちゃん、覚えてる?」

「ぜんぜん」

陽子の問いにタケシが髪を揺らしながら首を左右に振る。

「いじめっ子のランドセルを抱えて後ろを付いて行く僕を、タケシ先生は擦れ違いさまに何時も冷めた目で見てました。
意識して見てたのかは分りませんが、当時のタケシ先生は、

そんな僕を見ていじめられっ子だってのは気付いていたと思います……」

「まあ、毎日ランドセルを何個も抱えてガキどもの後ろを追っかけてれば、
普通はいじめられっ子ってぐらい気付くだろうよ」

また陽子が肘でタケシを突く。

「そんな日々が続いてる頃、いじめられっ子の荷物運びが終わってから、僕は家への帰宅中に、ここの道場の前を通りかかったんです。そして、ちびっ子空手教室の看板を見た時に、僕も空手を習えば今みたいな情け無い自分を変えられるのかと考えました。
そんな風に思って、ちびっ子空手教室の看板を眺めていると、僕の横を真っ黒なジャージ姿のゴリラ見たいな人が通り過ぎ、道場の中へと入っていきました」

「「ゴリラ？」」

タケシと銀が、互いを指差す。

「いえ、お二人ではありません。その黒ジャージのゴリラは、道場破りです」

「ほぉ～、道場破りね～」

タケシも銀も既にそんな道場破りのことは、記憶に残って無いようだ。

今時の時代、道場破りなんて時代遅れなのだが、堂本流の二人が

居るこの道場には、昔っから道場破りが来るのは珍しい話しではなかった。

「その時、道場には桜木先生とタケシ先生がおり、そのゴリラの道場破りを倒したのは、まだ若いタケシ先生でした。」

「まだ?、今も若いぞ!」

「いいから、タケちゃんはだまってて!」

立ち上がろうとしたタケシを陽子が素早く止めた。

「もう、タケシ先生は覚えてないと思いますが、その頃の僕とタケシ先生は擦れ違う程度ですが何度も会っているんですよ」

タケシは、自分の顔を指差しながら「えっ?、俺とか?」と言う顔をする。

「毎日僕は学校帰りにいじめっ子グループ四人のランドセルを抱えて彼らの後ろをついて回っていました。
自分の家とは反対方向の彼らの下校方向にです。
その下校中に何時も河川敷の土手をランドセルを抱えてる僕は、ロードワークに励むタケシ先生と何度も擦れ違ってました」

「タケちゃん、覚えてる?」

「ぜんぜん」

陽子の問いにタケシが髪を揺らしながら首を左右に振る。

「いじめっ子のランドセルを抱えて後ろを付いて行く僕を、タケシ先生は擦れ違いさまに何時も冷めた目で見てました。意識して見てたのかは分りませんが、当時のタケシ先生は、そんな僕を見ていじめられっ子だってのは気付いていたと思います……」

「まあ、毎日ランドセルを何個も抱えてガキどもの後ろを追っかけてれば、普通はいじめられっ子ってぐらい気付くだろうよ」

また陽子が肘でタケシを突く。

「そんな日々が続いてる頃、いじめられっ子の荷物運びが終わってから、僕は家への帰宅中に、ここの道場の前を通りかかったんです。そして、ちびっ子空手教室の看板を見た時に、僕も空手を習えば今みたいな情け無い自分を変えられるのかと考えました。そんな風に思って、ちびっ子空手教室の看板を眺めていると、僕の横を真っ黒なジャージ姿のゴリラ見たいな人が通り過ぎ、道場の中へと入っていきました」

「「ゴリラ？」」

タケシと銀が、互いを指差す。

「いえ、お二人ではありません。その黒ジャージのゴリラは、道場破りです」

「ほぉ～、道場破りね～」

タケシも銀も既にそんな道場破りのことは、記憶に残って無いようだ。

今時の時代、道場破りなんて時代遅れなのだが、堂本流の二人が居るこの道場には、昔っから道場破りが来るのは珍しい話しではなかった。

「その時、道場には桜木先生とタケシ先生がおり、そのゴリラの道場破りを倒したのは、まだ若いタケシ先生でした。」

「まだ?、今も若いぞ!」

「いいから、タケちゃんはだまってて!」

立ち上がろうとしたタケシを陽子が素早く止めた。

「空手の思想、人としての思いやり、強さを磨きつつも人としての生き方を学ぶ上で、堂本流が僕の目指す道なのではないかと……」

カズマの話に陽子が、何かに気付いた。

「じゃあさ、カズマ君はタケちゃんに憧れて、ここに通い始めたのね」

「はい、そうです!」

カズマが、今日一番の笑顔で答えた。

「じゃあさ、お父さんに弟子入りするんじゃなくて、タケちゃんの弟子になればいいんじゃない?」

「「「「「あ！」」」」」

陽子の提案に、銀にカズマ、そしてカズマの父の視線が、タケシ一人に集まる。

「な、何だよ、皆してこっち見てよ！」

「それ、いいんじゃないか。ほら、タケシ君は堂本流の正統な後継者なんだし、その方が堂本流を習いたいんなら正しいと思うよ」

「桜木先生が推薦してくれるなら、是非そうさせてもらいます！」

銀の言葉に、ここぞとばかりにカズマが乗っかる。

「ちょっと待ってくださいよ、桜木の叔父さん！。オレが弟子を取るなんてまだ早いですよ！」

「いやいや、もう弟子の一人や二人居てもいい頃だと叔父さんは思うよ。
それに空手家として向上したいのなら、弟子を取って弟子から学ぶのも大事だと堂本先生が昔言ってたしね」

「弟子を取ったことの無い人が言える台詞じゃあないですよ」

銀は、完全にタケシへとカズマを押し付ける気である。その思いは、ここに居る全員に伝わってきた。

「タケシ先生！、僕を弟子にして下さい！」

「タケちゃん良かったね、初弟子誕生だね」

「ちょっとまてや、お前らなー！！」

<；カズマ・後編　>；（後書き）

登場人物が多くて覚えられないかもしれませんが、新キャラ・カズマ君、よろしく願います（＊´ー`）

<　遭遇　>

日が落ち始めた頃、一台の軽トラックが住宅街を走っていた。

荷台には、タンスやテーブルなどの家具が幾つか積まれており、崩れないようにロープでしっかりと縛り付けられてある。

「悪いね～河本君、バイト時間過ぎてるのに付き合あわせて。ちゃんと残業代払うから、もう一軒付き合ってよ」

「はい、時間は気にしないでください」

軽トラックを運転する作業着の小柄な老人が、助手席に座る同じ作業着の少年に話しかける。

それに少年は弱々しく受け答えていた。

軽トラックの横には『虎野町リサイクル』と書かれてあり、軽トラックを運転しているのは、このリサイクルショップの社長であった。

この軽トラは電話で依頼を受けたお客の家に、出張買取の査定と引き取りに向かう途中であった。

「ん～と、最後のお客さんの家はここかな～」

小柄な社長は、車の窓を開けてメモしたお客の住所と名前を、玄関先の標識で確認した。

そして、確認が終わると、車をゆっくり壁際に寄せて止めた。

「じゃあ、河本君行こうかね」

「はい」

小柄な社長は、自分より背の高いバイトの学生を連れて、お客の家の玄関まで進んで行く。

二人が玄関まで進む途中で、その家のリビングの窓から部屋の光と共にテレビの音が賑やかに聴こえてくるのを少年はチラリと見ていた。

ピンポーン。

小柄な社長がインターホンを鳴らす。

二人は玄関先に立ち尽くしたまま家の住人が出てくるのをしばらく黙って待っていた。

しかし、家の住人が出て来る気配は感じられなかった。

そのため社長は、一度首を傾げた後、再びインターホンを鳴らす。

今度は二回鳴らしてみたが、それでも家の中から人が出てくる気配は無かった。

「あれ〜、留守かな?」

「部屋の電気は付いてますよ…」

河本少年が、明かりの漏れるリビングの窓を指差しながら社長にそう言う。

「ん～、訪問する約束の時間、間違えたかな？」

そう言いながら小柄の社長が何気なく玄関のノブに手を伸ばすと、カチャリと音を立てて玄関の扉が開いた。

「あれ～、鍵かかってないね。すみませ～ん、虎野町リサイクルですか、どなたかいらっしゃいませんか？」

玄関の外から覗き込むようにして社長が声を掛けるが、それでも室内から返事は戻ってこない。リビングから聞こえてくるのは、テレビの音だけであった。

「留守なのかね？」

「どうでしょうか……」

黒い革靴、赤い子供者の靴、白いヒール。

河本少年は、玄関に並ぶ家族の靴を見て首を傾げる。

「すみません、誰かいませんか？」

「あぁぁ、ちょっと社長さん……」

声をかけながら、靴を脱いだ社長が家の中へ上がって行く。

河本少年は、社長を止めるつもりだったのだが、結果的に釣られて彼もまた家の中へと上がって行ってしまう。

「やっぱり居ないのかな……。」

リビングに入った二人が、部屋の中を見回す。

テレビの電源は入りっぱなしで、ちょうど夕方のニュース番組を映していた。

ソファーの上には開いた新聞が置いてあり、その前のテーブルには飲みかけのコーヒーカップが置いてあった。

「あれ、水出しっぱなしだね」

キッチンの水道が開きっぱなしで、水が流しにある洗い物の上にダラダラとかけられているのに社長が気づく。

二人はリビングの状態に、気味の悪い違和感を感じていた。

「け、警察呼んだほうが、良いでしょうかね？」

部屋の中の異様な空気に、河本少年が弱々しく社長に問いかけた時である。

突如、ボーリングの玉を落としたような音がした。重いこもった音だった。

二人は、その音に反応して、ビクリとさせながら子猫の様に身を丸める。

音がしたのは天井の方。二人はその天井をゆっくり見上げた。

二人は、恐怖感を誤魔化すように会話を始めた。

「社長さん、今……、音、しましたよね？」

「あぁ、上からだね……」

背を少し丸め天井を見つめる二人は、しばらくして目を合わせる。

そして社長はゆっくりとリビングを出ると、玄関前に有る二階への階段へと向かっていった。

「ちょっ……ちょっと社長……」

階段の先を見上げる社長の後ろで、河本少年は小さく身を縮めながら社長を制止する。

だが、河本少年の制止を聞かず、社長は二階への階段をゆっくりと登り始めた。

「や……やめましょう、社長……」

「あぁ……そうだな……」

社長は、河本少年の声にそう答えるが、階段を上るのをやめようとしない。

「ちょっと、社長さん……どうしちゃったんですか……」

まるで取り付かれたような社長の袖を、河本少年は引っ張り制止を繰り返して言う。

しかし二人は、そんなことを繰り返しているうちに、二階に到着していた。

階段を上がって左手には二つの扉と、正面突き当りにも一つ部屋の扉が有った。

「あれ……」

「え？」

河本少年の前にいる社長が、ゆっくりと指差す。

その方向を河本少年も見た。

二部屋目の扉だけが、ちょっとだけ開いていた。

その部屋からは光は漏れていない。

扉の僅かな隙間から見えるのは闇。

その闇から何やら薄気味悪い空気が流れ出ている様に感じた河本少年は、顔を更に怖がらせる。

社長は、脅える河本少年を残して、僅かに開いた部屋の扉を開け

ると部屋の中へと入っていった。

河本少年は、その社長の姿を少し離れた場所から見守るしか出来なかった。

「ひぃゃ……」

部屋に社長が入り、河本少年から姿が見えなくなった直後、社長の息が漏れるような声が聞こえた。その声が、悲鳴なのかと一瞬悩んだ。

続いて不可解な物音がガタガタ響き、そして直ぐに止む。

「社長さん……？」

物音が収まり僅かな沈黙の後、震える足で河本少年も部屋の方へと歩き始めた。

「社長さん……」

河本少年は、社長が入っていた部屋の前に立つ。

「……」

部屋の中は子供部屋だった。

女の子の部屋なのか、ベットやタンス、勉強机の上には、可愛らしい動物たちのヌイグルミが幾つも置かれていた。

「き、消えちゃったの……社長さん……」

河本少年が口にしたとおり、部屋の中には小柄な社長の姿は無かった。

「ミーは、運がイイデース」

「!?」

声は、社長の声ではなかった。もちろん自分の声でもない。

インチキ臭い外人のような口調。

河本少年は、涙目で声の主を探すように当たりを見回す。

「人生のモーニングに、運命の出会いを果たすとは、ミーはハッピーでデース」

インチキ外人のような声は、部屋の中にある可愛らしいヌイグルミが幾つも乗ったタンスの方から聞こえてきた。

1．7メートルぐらいの古びたアンティークな洋風タンス。両開きの扉が有り、その下には二段の引き出しが付いている。

「ぇ……」

タンスが突然ガタガタと揺れると、タンスの上に置かれていたヌイグルミが一つポトリと落ちた。

「ユーが探しているのは、このミスターかな?」

その声と共に、タンスの両開きの扉がゆっくり開いた。その内部はタンスの内装とは思えないぐらいの深い闇が広がっていた。

まるで奈落への入り口がそこに現れたような光景に、河本少年は目を点にさせながら口元に力が入る。

そして、その闇の中から水に溺れたように社長が飛び出した。

「ぷっはぁっ、あわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ひいいいいいいいいいいい！」

タンスの暗闇から上半身だけ飛び出した社長は、悲鳴を上げると、また闇の中へと引きずりこまれる様に沈んでいく。

その光景を河本少年は、悲鳴で見送るしかできなかった。

逃げなくては。河本少年が、そう思った時には、既に体は部屋を飛び出ていた。

タンスの中へと消えていった社長のことなんて頭から一瞬で消えていた。

ただ怖くて、ただ恐ろしくて、自分はああなりたくない、自分は助かりたい、そう思ったのか思わなかったのかも本人は分からなくなり、ただ逃げる、その選択しか思いつかず、その選択を自然と実行していた。

そして部屋を飛び出し、階段を踏み外しながらも駆け下りる。

後ろなんて一度も振り向かなかった。

河本少年は、階段を駆け下りると真っ直ぐ目の前の玄関から飛び出そうとした。

だが、目の前に何かが降ってきた。

「ユー、待ちなよ」

玄関から屋外へと飛び出そうとした河本少年の前に、あの洋風箪笥が天井をすり抜けて落ちてくる。

「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

そして、屋外への出入り口を、四角い体でガッチリと封鎖してしまう。

河本少年は、驚きのあまり後方へと倒れこみ駆け下りてきた階段に背中を激突させた。

背中を階段の角にぶつけた河本少年は、一度だけ痛みに顔を歪める。

しかし、痛みはすぐさま恐怖に掻き消され、また降りてきた階段を這い蹲りながら逃げる様に上り始めた。

「何だよ、あのタンス。しゃべったし、動いたし、天井をすりぬけたし、社長さんを食べちゃったし！」

四つんばいで階段を上る河本少年が二階に舞い戻る。

だが、そこには既にあの洋風箪笥が待ち受けていた。

「ひいいいいい！」

「ユー、怖がらなくてイイデース。ミーはユーの味方ね、フレンドねー」

河本少年は、四つんばいのまま目の前の洋風箪笥を見つめていた。

その表情は、恐怖と混乱と絶望を混ぜ合わせた『死』を予感した表情であった。

「ミーは味方、ユーの友達ねー！」

「な……何言ってるんだ……」

箪笥の呼びかけに、河本少年の表情から絶望的死の予感が不思議と消えていく。

「み……味方……」

「そうデース。ユーは特別デース。他の連中みたいに食べたりなんてノーノーノー」

箪笥のインチキ臭いしゃべり方。その内容に河本少年の脳裏から恐怖心が不思議と和らいでいく。

「ユーは私にとってベストフレンドになれる特別な存在ねー」

「特別って……」

「ユーとミーがパワーを一つに合わせれば、何だって出来マース。ユーにはミーのファンタスィックパワーが必要ねー。ミーにはユーの存在が必要ねー。二人でいれば何でも出来マース」

「何でも……」

「何でも思いのままデース」

そして河本少年の表情から混乱が消えた。

それに替わって静かにゆっくりと心の奥から浮かび上がってくる物があった。

「この世は……間違っている……」

突如として芽生えた感情が、河本少年の心の中に麻薬のように広がり始めた。

それは……。

「じゃあ、やっちゃいなよー」

河本少年の脳裏に、飲んだぐれの父親の顔が浮かぶ。その父と自分を捨てて出て行った母親の顔も浮かんでくる。

「この世は、間違っている！」

「ユー、やっちゃいなよー」

学校で、自分からお金を巻き上げる不良少年たちの顔。

自分がイジメられているのに無視する教師の顔。

「ぼ……僕がこの世を正すんだ！」

「やっちゃいなよー」

心の奥深くから上がってくる物、それは憎しみではなかった。

「僕がこの世を整理するんだ！」

「やっちゃいなよー」

それは、正義。

「僕が、この世の救世主になるんだ！」

「ミーの名前は箪笥御前。ユーが望むならミーのファンタスティックパワーを使えばいいねー。それがミーの為になる。それがミーを百計神に近づける。さあ、ユーもやっちゃいなよー！」

これは催眠術。

それに気付いていないのは少年自身であった。

<　油儀邸宅・前　>（前書き）

時間か無いです。

今日はこのぐらいで・・・・

<　油儀邸宅・前　>

市の郊外。

東京ドーム約三個分にあたる大きな個人私有地。

その私有地は、瓦屋根の有る白い土壁に全方を囲まれ、敷地内には僅かな建物と手入れの行き届いた和風庭園が広がっていた。

敷地内の建物も和風の屋敷で、以下にも財閥の住まいだと見て取れる。

この土地の持ち主は『油儀　裕次郎』。世界的リゾートホテル業の大物であり、日本政財界にも僅かながらだが顔が利く存在である。

ここは其の油儀氏の本宅。

その大物の住む巨大な敷地の入り口は、時代劇に出てきそうな武家屋敷のような立派な門であった。しかも、監視カメラや黒服の警備員で厳重な警備がされている。

時刻はもうすぐ七時ぐらいだろうか、あたりは日が落ち始めていた。

そこにタクシーで現れたビジネススーツの青年。

七三の髪型に銀縁のスマートな眼鏡。その眼鏡の下には細い目で微笑を作り、何時もの様に黒のアタッシュケースを手にしていた。

私立探偵の『猫田　龍信』である。

龍信は、まるで友達に挨拶でもするようにＳＰ風の男達に手を上げた。

そうすると男達の一人が、「どうぞ」と言って門を開き中へと招き入れる。

ビジネススーツの青年は、ＳＰ風の男性に先導されて屋敷の一室へと通された。

ここまで来るのに屋敷内を十分以上歩いただろうか、その間に綺麗に手入れの行き届いた日本庭園が見える廊下をひたすら歩いた。

あまりにも広い屋敷内に、龍信はやっと着いたのかと言いたげな表情で、ネクタイのズレを一度直すと障子を開けた。

「やぁ、猫田君、ごくろうだね」

障子を開けた青年を、二人の男が和室で寛ぎながら迎え入れた。

蟹の墨絵の掛け軸の前に、青や紫の花が可憐に活けられてある。

声を掛けた７０歳ぐらい小柄の老人が、それらを背景にして座っていた。

もう一人は、お客用の座布団に胡坐をかく中年男性。

刑事の鍋中である。

鍋中は、お茶をすすりながら眉間に何時ものように不機嫌そうな皺を寄せていた。

この刑事が笑った顔は、あまり見たことが無い。何故かは分からないが何時も難しい顔をしていることが多い。

「猫田君、そこを閉めて座りなさい」

老人は、小柄なわりには大きな頭を揺らしながら、猫田を部屋へと招き入れる。

猫田は、言われるがまま障子を閉めると、自分用に用意されていたと思われる座布団を目指した。

「あれれ、八尾君はまだですか?。普段は一番乗りの真面目な人が遅刻とは?」

「遅刻してきたヤツが言う台詞じゃねえな」

湯飲みを漆塗りの茶色いテーブルに音を立てて置く鍋中が、遅刻常習犯に嫌味を言う。

しかし、言われた本人は、反省どころか気にもしていない様子だった。

そのまま平然と座布団に座りこむと、銀縁の眼鏡の奥で細い瞳をいやらしく笑って見せた。

「八尾君は、今日は欠席です。なんでも職場の飲み会があるとかで

ね」

油儀が頭の揺れを止める事無くそう説明した。

「なるほど。我々のように変化したり取り付いたりして人間社会に溶けこんでる者としては、人間としての付き合いもお粗末にできませんからね～」

「そうですなぁ」

「どうでもいいが、早く終わらせようや。通り魔事件の後始末で俺はまだ忙しんだよ」

猫田と油儀の何気ない会話に、鍋中が世間話は要らないと言いたげな感じで口を挟む。

「鍋中君は、昔からせっかちですからね～。分りました、そうしましょうか」

「油儀、いいから話を進めやがれ」

「はいはい」

油儀と呼ばれた小柄の老人は、頭を左右に揺らしながら、テーブルの下にあった写真やレポートを二人に差し出す。

「相変わらず、出所はうちか……」

「いかにも」

「ん～、眞鍋のヤツの字は読みにくいなぁ」

書類の1ページを見ながら鍋中がボヤいた。

「こいつが外れ鬼に憑かれていた男ですか、油儀会長」

猫田は、油儀に渡された写真やレポートを手に取り、その内容を確認していく。

住所、年齢、職業、学歴、調書内容、警察が調べ上げた詳報が一つ残さず記入されている。

猫田が写真やレポートに目を通してる間に、油儀と鍋中で話しを進め始める。

「外れ鬼の正体は、刃渡り30センチの料理包丁。
通り魔犯が調書で述べたとおり、商店街で折れた状態で放置されているのを発見された。
証拠品として押収されていたが、俺が見たときには既に妖気は無くなっていたぜ。
この包丁が本当に外れ鬼の本体かは不明だ」

「いやいや、猫田君が見た外れ鬼は、巨大化した料理包丁を持っていたそうですから、
この折れた包丁が九十九神であったと言って良いでしょう。
それにこの男が自首して以来、外れ鬼の出現がとまりましたからね」

「その折れた包丁が外れ鬼だったとして、その外れ鬼を誰が倒したかが、問題……」

レポートを読みながら猫田も会話に参加してくる。

「八尾が、外れ鬼を倒したんじゃあ～ねえんだろ？」

「はい、それは間違いありません。今回八尾君は一度も外れ鬼には、遭遇すらしてませんからね」

「その他の処理班の方々は？」

「他の者も一緒です。今回外れ鬼に遭遇した関係者は、猫田君だけですよ」

そう言って油儀は、頭を揺らしながら龍信を見詰める。

「だとすると、誰だ～、外れ鬼を倒したのはよ」

鍋中が問う。

「連合に加盟していない何者とかでしょうか？」

猫田が適当に答えた。

「動機はなんだ」

更に鍋中が問う。

「名を上げたいとか？」

またもや猫田の適当な回答。

「じゃあ、何で名乗り出ない？」

「……そうですよね」

鍋中の問いに、言葉をつまらせる猫田。

「じゃあ、一七五一家の連中ですかね？」

今度は猫田が問いかけた。

「あいつらの仕業なら、すぐさま自慢げに言いふらすだろうよ」

問う側に回った猫田に代わり、鍋中が回答する側に代わる。

「あー、そうですね～。あの連中は、単純な思考してますからね～」

猫田の目が、何時ものように笑っていた。

<　油儀邸宅・後　>

猫田は、手にしていた写真やレポートに一通り目を通し終わった後、テーブルの上に無造作に放り投げた。

「じゃあ、鍋中さんは何か見当でも付いているんですか？」

「まったく……」

鍋中は、腕を組みながら考え込む様に黙り込む。

「もしかして、最近噂の春婆怒とか他の九十九神の仕業とかですかね？」

「それは無かろう」

猫田の思いつきを、否定した油儀。

「何故です？」

質問する猫田の顔は、素直な少年のような表情であった。

「外れ鬼とは、そもそも呼び名の通り、『ハズレの鬼』。人から外れ、妖怪からも外れ、九十九神からも外れてしまった存在。九十九神が喰らっても、人、妖怪、九十九神としても三種百食の本能に数えられずに、倒す価値もなく無視される鬼」

「なるほど、ノーカウントなのですね」

今まで黙り込んでいた鍋中が口を開く。しかしそれは、猫田への悪態だった。

「ふっ、若造はそんな事も知らんのか」

「お二人と違って、何百年も生きてませんからね」

猫田は鍋中に対して、イッーとした顔しながら言い返す。

それを見た鍋中は、自分の湯飲みに人差し指をつっこみ、お茶の雫をピッピッと猫田目掛けて弾き飛ばす。

「ちょっ、止めてくださいよ、スーツにシミが出来るじゃないですか。あとでクリーニング代請求しますよ！」

「相変わらす、せこいこと言いやがるな。そんなことばかり言ってると大物になれないぜ」

「大きなお世話です」

「まあまあ二人とも……」

油儀が呆れながら二人を止めに入る。

「誰が、何の為に、外れ鬼を倒したかも大事だが、もう一つの疑問があるのですよ」

「もう一つとはなんだ、油儀？」

油儀が、大きな頭を左右に揺らしながら、テーブルに有る折れた

包丁の写真を指差す。

「外れ鬼とは、九十九神と人間とが、妖力共有に失敗した慣れの果てだということは、二人とも存じていますよね」

「ああ、妖力共有に失敗すると外れ鬼に成り下がり、その際に使い手となる人間の望んでいた事を果たすまで元に戻らねえて、……ことだろ」

「はい、そのとおりです」

「油儀会長、それが何か？」

猫田と鍋中の二人は、油儀が言いたいことが理解できずに、左右に揺れる老人の顔を見つめる。

「外れ鬼の妖力共有が解ける条件は、使い手の望みが適うか、使いてが死ぬか……。」

油儀は、そう言いながらテーブルにある写真の中から犯人の写真を引っ張り出す。

「使い手になった男は生きていますよね」

次に油儀は、テーブルの上の写真の中から、犯人の店に有った業務用の冷蔵庫に入っていた死体の写真や、事件現場に有った被害者の肉から作られた、刺身の盛り付け料理の写真を引っ張り出す。

「公園で置かれた料理を見るからに、この外れ鬼の目的は、何らかの料理の完成」

「ああ、なるほどな」

「目的が達成されて人に戻ったのなら、その料理が有るはずってことですか……」

「そうなるがぁ……、そんな料理は発見されてねえ」

「ならば、何故に使い手は人に戻れた?」

三人は、テーブルに有る写真をひたすらじっと見詰める。

「目的も果たしてないのに、人に戻り……」

「使い手は死なずに、妖力共有が解けたァ……」

「そして、本体である包丁だけが破壊されて死んでいる。もしも何者かに退治されたと言うのなら、使い手も九十九神もが死して当然」

三人は、尚もテーブルに有る写真を見つめ続ける。

「明らかに今までの外れ鬼とは、違うパターンですね～」

油儀は、写真をみるのを止めて、お茶を啜りながら天井を眺める。湯飲みをテーブルに置くと、しばらく頭を左右に揺らしながら何かを考え続けた。

鍋中と猫田は、テーブルの上の書類を睨みつけている。

そして、油儀は考えがまとまったのか、二人に向かって話し始めた。

「まあ、分からないことを考えても仕方有りません、まずは情報を集めましょう。猫田君お願いしますよ」

「はい、了解しました」

猫田は、そう答えながらテーブルに置かれた書類を掻き集めると、自分が持ってきたアタッシュケースにしまいこむ。

「鍋中君」

「なんでい？」

「外れ鬼だった犯人の様子はどうですか？」

「あぁー、あれはダメだ……」

「ダメと言いますと？」

「頭の中が壊れちまっていやがる。外れ鬼だった頃の記憶が残ってるようでな……。
まあ人を捌いて料理しちまった記憶だからな、そんな経験しちまったんだ、心が壊れてもしかたねぇわなぁ～。
まあ、自分が外れ鬼になってた自覚は無いようだし、言ってることは支離滅裂だから、我々に都合の悪いことを口走ることはないだろ。
もしも口走っても廃人の言うことなんぞ皆信じないだろうぜ」

「ならば直ぐに始末する必要は無いでしょうかね？」

問う油儀の視線は冷たいものだった。

「ああ、急ぐこったねぇや。それにうちの留置所で始末されたらこっちの仕事がめんどくさくなるから止めてくれや」

「分りました、その時期は八尾君と検討します」

「ああ、頼むわ」

「では、鍋中君も捜査のほうで進展がありましたら報告お願いします」

「おう、じゃあ俺はまだ仕事が残ってるんで署にけぇるから、タクシー呼んでくれや」

「あ、私の分のタクシーもお願いします。あと～、来る時に乗ってきたタクシーの領収書なんですが～」

猫田が、領収書を懐から取り出す。

「分りました、帰りに静香君に渡してください」

「あと～、今回の捜査中で使った経費の領収書も有るんですが～」

更に猫田が、領収書の束を取り出し扇の様に開く。

「分りました、それも静香君に渡してください」

「おい、猫田、この領収書、風俗店じゃねえか?。値段的にそれ臭

いのが多いぞ」

「ちょっと、言いがかりはやめてくださいよ鍋中さん、ただでさえ最近は静香さんのチェックが厳しいんですから！」

<　強き力、弱きに宿る・前　>（前書き）

２００８／０９／２８

ついに１万アクセス突破！ｗ

これからもよろしく願います＾＾

<強き力、弱きに宿る・前>

駅前に近い商店街。

あたりは日が落ち薄暗くなり始めているが、商店街を行き来する人々の活気は未だいきづいていた。

わいわい騒ぎながら横に並んで歩く学生達の横を、自電車の乗った主婦が後ろから邪魔そうな表情で抜きさっていく。

そんな光景を細い脇道から顔を覗かせたポン引きの男が、辺りを眺めながら獲物を物色していた。

町は、そろそろ大人の時間帯に変わろうとしている。

そんな商店街の中を、一人の少年が青ざめた顔で歩いていた。

あの家での一件後、河本少年は何処をどう歩いたかも分からないまま、ふらふらとした足取りで、ただ只管に歩いていた。

「なんなんだよ……、あれは……」

時折ぶつぶつと呟く少年を、擦れ違いざまの通行人が、気味の悪そうな表情でチラチラと見ていた。

しかし河本少年は、そんな周りの視線に気付く気配はなかった。

少年の頭の中は、先程起きた不思議な出来事がグチャグチャになりながら、頭の中でグルグルと激しく回っていた。

それが、「混沌」だと河本少年には理解すら出来ていない様子だった。

「お、あれ、河本の野郎じゃねえか？」

「本当だ、オメー目が良いな」

ふらつきながら歩いている河本少年を、ゲームセンターの前でウンコ座りをしながら屯していた不良少年四人組の一人が見つける。

「ちと、暇潰し程度にかわいがってやるか」

不良少年のリーダー格が立ち上がると、残りの三人もつづいて立ち上がった。

彼らは今日、他校の女子生徒とカラオケに行く予定だった。

だが、いきなり女子生徒達のドタキャンを喰らってイライラしていた。

間違いなく彼らは、今見つけたイジメラレっ子に八つ当たりをするつもりである。

「よぉ～、これはこれは河本君じゃないか～」

「！？」

朦朧としていた河本少年は、突然かけられた声に反応して、意識を取り戻したように、ハッとする。

そして自分に向かって歩いてくる四人の同級生にやっと気付いて、何時もの暗い表情を作り俯いてしまう。

「なぁ、河本よ～、お前のバイトって、日払いとかじゃねえの？。もしそうなら金を貸してくんないか？」

不良少年の一人が、そう言いながら河本少年の肩に手を回した。

肩に手を回されて逃げられないように確保された河本少年は、不良少年に囲まれ脅えるように小さくなっていく。

「なあ、ちょっとこっちで話そうや」

そしてズルズルと商店街の裏路地へと囲まれながら河本少年は連れて行かれた。

その裏路地にはピンクな店は無く、店の裏口が多い人気の感じられない通りであった。

しかも、看板や自動販売機などが邪魔で、メインストリートからは人目も届き難く、不良少年達にはうってづけのスペースとなっていた。

そんな場所に連れ込まれた河本少年は、ただ怯えているだけで逃げようとする素振りすら見せなかった。

「ひ……日払い……じゃないよ……」

「ああ、そうです……か！」

拳が振るわれた。

「うっ！」

不良少年のボディーブローが河本少年の腹に叩き込まれる。

殴りつけた不良少年の拳に残る感覚、それは人間を殴った感触ではなく、ただの吊るされた食肉をロッキーの様に殴った感触だった。
不良少年はそう思っていた。
それだけ不良少年に取って、河本少年は人として認められていない証拠なのだ。

「そんなのどうでも良いんだっ……よ！」

また、拳が振るわれる。

「うぐっ！」

今度は別の不良少年が河本少年にボディーブロー打つ。

「オメー見てるとよ、なんつーか……いらいらするんだ、よ！」

更に蹴り。

「ぁぅ！」

後ろに居た不良少年が、河本少年の尻に蹴りを入れた。

「皆、なに……なにするんだよ……」

「何するんだよ?。そうじゃねえだろ、何するんですか、だろ!」

そしてまた不良少年は、無抵抗の河本少年を殴った。

「やめて……やめてよ……」

「あ〜、やっぱこいつむかつく、ボッコにしようぜ」

「そうだな、ボッコにしちまうか」

「!!」

リンチ開始。

それはただの集団暴行だった。

無抵抗の少年を、四人の少年が逃げられないように囲んで、一方的に殴る蹴るを続ける。

そして立っていられなくなった少年は、倒れこんでしまう。

それでも不良少年達は、尚も河本少年を蹴り続けた。

絶妙な力加減だった。河本少年が医者に駆け込まない程度の暴行。

大きな傷が出来ないように、ただ体力を奪い、苦痛を与えるだけのネチネチした暴行であった。

暫くの間、そんな陰険な暴行が続けられた。

「この辺にしとくか？」

「ああ、そうだな、死なれても困るしよ」

「……ぅぅ」

不良少年の一人が、倒れこんでいる河本少年の頭を屈辱的に踏みつけたまま仲間の問いにそう答えた。

「ぺっ」

更に唾を吐きつけると、その場を後にしようと背を向けた。

とりあえず不良少年達のストレスは、若干だが解消された模様だ。

しかし、不良少年達が人気の無い路地から出て行こうとした時である。

「やっちゃいなよ！」

声が聴こえた。

それはインチキ臭い外人のような声。

「おい、今、何か言った？」

「いや、俺じゃないよ」

声は、不良少年達全員に聴こえいた。

不良少年達は一度仲間と視線を合わせた後に、今度は辺りを見回す。

「やっちゃいなよ！」

「うぅぅ……」

その声に反応するかの如く河本少年は、ボロボロの体を庇う様にゆっくりと立ち上がり始めた。

「やっちゃいなよ！」

立ち上がった河本少年。

その傷ついた体や顔とは裏腹に、表情はさっきまでのイジメラレっ子のものとは一転していた。

まるで不良少年達を呪い殺さんとする狂気な表情から、恨み、妬み、怒り、不の要素が混ざり合ったようなエネルギーが生まれ始めていた。

「な……なんか、やばくない……」

「ああ……」

不良少年達も、河本少年の豹変に気付いた。

その表情から危険な気配も感じ取っていた。

「やっちゃいなよ！」

何処からとも無く聴こえくるインチキ外人の声が、ひときわ大きく聴こえた時、河本少年の背後に洋風アンティークタンスが突然現れる。

「なんだあれ……？」

「地面から生えてきたぞ！」

不良少年の言う通り、タンスは間違いなく河本少年が背に有る地面から生える様に現れた。

<強き力、弱きに宿る・後>

「整理しなきゃ……、こんな奴ら、この世に居てもなんの価値もないんだから、僕が整理しなきゃ……」

ブツブツと呟く河本少年の後ろで、木材の軋む音を立ててタンスの両開きの扉が開く。

「ユー、やっちゃいなよ！。ミーが教えたあのキーワード、言っちゃいなよ！」

そして河本少年の背後から、木のツルが現れて腰に巻きつく。

そのツルは、確りと河本少年の腰に巻きつき終わると、中央に四角い木製のバックルが現れた。

それには『妖』の字が刻まれていた。

河本少年は、大きく目を見開きニヤリと笑う。

その表情は邪悪なもので、先程までのイジメラレッ子とは別人に見えた。

そしてある言葉を思い出し、その言葉を今までの人生の中で一番はっきりとした大きな声で口にした。

「妖力共有・同化！」

その言葉と共に河本少年の体は、背後のタンスに引きずり込まれ、

タンスの扉がバタンと音を立ててしまる。

まるでタンスが河本少年を食らった様にも見えた。

「食われた！」

不良少年の一人がそう叫ぶと同時に、残されたタンスが変貌し始める。

それは、ぐにゃぐにゃと液体金属のようにうねった後に人の形へと変わっていった。

頭のてっぺんから肩まで三角の頭部で首はなく、体つきは筋肉質な逆三角形であった。そして手足も太く凛々しいプロレスラーの様に見えた。

全身が木目の入った茶色。顔から臍に有る妖の字の書かれたバックルまで、真っ直ぐ立てラインが有り、そして両胸の乳首の辺りに扉の取っ手が付いていた。

ぱっと見た目、タンスと人間が合体した容貌で、そのラインに沿ってパカリと開きそうな感じがした。

「ば、ばけもの……？」

不良少年の口調は、疑問系だった。

突如現れたタンス。

其の中に消えていった河本少年。

そして現れた怪人。

不良少年達は、状況を判断できずに立ち尽くすだけであった。

「こんな奴ら、整理してやる」

怪人から放たれた声は、おどおどした口調では無かったが、河本少年のものだった。

「超次元収納術、オープン」

怪人の頭から臍にかけてあるラインが、タンスの扉の様に観音開きに開いた。

そして開いた上半身の扉。その向こうには、真っ暗な闇がおどろおどろと蠢いていた。

「なんか、やばくない?、逃げるか?」

不良少年達が、後ろへあとずさりした瞬間であった。

開かれた上半身にある暗闇の中から二本のツルが現れ、一瞬で不良少年二人を大蛇の様に巻き取ってしまう。

「うあああああああ!!」

巻きつかれた二人は、声を上げながら凄い速さで暗闇の中へと引きずり込まれていった。

「逃げろ！」

リーダー格の不良少年は、そう叫ぶと走り出していた。

もう一人の不良少年も、その行動に続いて走り出す。

二人は、路地から商店街に飛び出すと、人々の間を縫う様にあても無く走り続けた。

その少年達の様子を、周りの大人は何をふざけているのか程度にしか見ていなかった。

そして暫くの間、必死で走り続けると、リーダー格の不良少年は走るのを止めて後ろを振り返った。

「あれ……」

だが、そこには商店街を歩く見知らぬ人々ばかりで、知った顔は一人も居なかった。

自分の後を付いて来たはずの仲間が居ない。

キョロキョロと狼狽した表情で辺りを見回したが、逸れてしまった仲間は見当たらなかった。

「な……なんだったんだ……」

一人になった不良少年は額にかいた汗を手で拭うと、人々の往来の有る通りを今度はゆっくりと歩き出した。

これだけ人目が有れば、先程の怪人に襲われることは無いだろうと思っていた。

そして仲間達のことを思い出す。

二人の仲間は、間違いなく化け物にとって喰われた。もう一人の仲間は、逃げる途中で逸れて何処にいるか分からない。

残された不良少年のリーダーは、仲間を助けに戻るべきか、誰かに助けを求めるべきか、それとも警察に通報するべきかと混乱する頭で悩みながら歩いていた。

考えが纏まらないまま不良少年は、近くのブロック壁に寄りかかりながら休憩をとる。

その目の前を、見知らぬ大人達が右へ左へと通り過ぎていた。

「畜生、今日は厄日かよ……」

そう不良少年が呟いた時である。寄りかかっているすぐ横、あの化け物が壁をすり抜けるように上半身だけを乗り出してきた。

「！」

幽霊のように壁をすり抜けて現れた怪人。

それを不良少年は、体を硬直させながら唖然とした表情で見詰めた。

「お前らなんか、整理してやる！」

河本少年の声と共に化け物の太い腕が、不良少年の首を鷲掴みにした。

「がはぁぁぁぁ！！」

首を鷲掴みにされた不良少年は、必死にその手を振り外そうとした。

しかし、万力に挟まれたかのようにがっしりと掴まれており、とてもじゃないが不良少年一人では外せるような力ではなかった。

「今、整理するから騒がないでよ」

そう言いながら化け物は、不良少年を掴んだまま壁の中に引き返していく。

そして首を鷲掴みにされていた少年は、顔を引きつらせながらバタバタと抵抗を繰り返していた。

しかし、彼の目の前を歩く人々は、まったく彼に気付く様子は無かった。

不良少年は、喉を絞められ声が出ない。息も出来なかった。

それでも両手を伸ばし、もがく様に目の前の通行人達に助けを求めた。

しかし抵抗も虚しく壁の中へと引きずり込まれていった。

誰にも気付かれないままに二人の姿はブロック塀の中へと完全に消えた。

<　続・ベルちゃんピンチ　>

桜木家が経営している喫茶店。

場所は車の往来がそこそこ頻繁な道路を、少し小道に入ったところにあった。

お客はもっぱら近所の人や近くの会社員達である。

主婦達の井戸端会議に使われたり、会社員の待ち合わせの場所などに使われることも多く、近所からは便利な喫茶店といった印象が強い場所であった。

その喫茶店の前に有る一軒の民家。玄関先には、一匹の柴犬が飼われていた。

犬の名前はベル。

この家に飼われるようになって三年目。子犬の頃に、川の橋げたに捨てられているのを、この家の長女に拾われて来た。それ以来この家でお世話になっている。

玄関前とはいえ自分専用の犬小屋を与えられ、この家の住人には、家族の一員のように可愛がられていた。

ベルは、そんな日々に何一つ不満をもたず、自分なりの幸せを見つけて平和に過ごしていた。

だが、ベルには、最近大きな悩みが出来てしまった。

自分を橋げたの下から連れてきてくれた長女が、結婚して家を出ていってしまった時よりも深刻な悩みである。

悩みと言うよりも、それは……恐怖。

「おねーちゃん、何してるの？」

「ん～、ただ暇つぶしに犬を眺めておるのじゃ」

ベルは、自分の名前が書かれた犬小屋の奥で、ガタガタと震えていた。

「あれ～、ベルちゃん、どうしたのかな～」

犬小屋の奥で震えるベルを眺めている金髪の女性に、ちびっ子空手教室を終えたリカという幼き少女が話しかけていた。

「何時も頭をなでなでさせてくれるのに？」

「ほほぉ～」

リカの声が聞こえたのか、犬小屋の奥で震えていたベルが、チラリと上目使いで犬小屋の外を覗き見る。

我が家の家族ではないが、何時も自分の頭を撫でてくれる優しい女の子の姿。

しかし、ベルの目に入ってきたのは、天使のような笑顔の他に、真っ黒な顔に耳まで裂けた三日月の様な口と、ギラギラと光る目を

持った悪魔の姿であった。

ベルは、その存在から逃げるかのように、また犬小屋の奥に引きこもる。

「ベルー、ベルー」

自分を呼ぶリカの声に答えて、犬小屋から出て行きたいベル。

しかし最近、自分のことを美味しそうに眺める悪魔がリカの隣に居て、ベルは外に出ていけずに震えていた。

ベルは、心の中で「出たい、出て行きたい、そして頭をなでなでしてもらいたい」と叫んでいたが、今は悪魔が邪魔で、その欲求を叶えることは不可能であった。

「リカ～。ほら、帰るわよ～」

「はーいお母さん。じゃあね～ベル～。おねーちゃんもバイバーイ」

「うむ、お主もたっしゃでのぉ」

リカは、手を振りながら、迎えに来た母親に連れていかれてしまう。

ベルにとって、救世主と思われたリカが去り、また悪魔だけが残る。

その場に残った悪魔は、犬小屋の前にしゃがみこむと、犬小屋の奥で震え上がるベルを恐ろしい表情で見つめ続けた。

ベルは、その表情を時折だかチラ見をした。

ただひたすら早く去ってくれることを祈り続け。

そして何故、この悪魔はここに居るのかと悩みながらチラミを繰り返す。

この悪魔は、自分をどうしたいのか?。

自分を食べてしまいたいのか?。

それなら何故にひと思いに食べてしまわないのか?。

そう考えるベルの脅える心は、今にも緊張感で張り裂けそうだった。

「ん〜?」

ベルを見つめていた悪魔が、ベルから目線を外し薄暗くなり始めた空を見上げた。

その行動を、ベルもまたチラ見した。「ほほぉ〜、面白い。何者かが妖力共有しおったわ」

そう言いながら悪魔は立ち上がった。

「今度は九十九神。タケシに相手してもらうように準備をせねばのぉ〜」

悪魔は、そう言うと長い金色の髪を揺らしながら、ベルの犬小屋の前から去って行く。

ベルの震える体から、力が見る見る抜け落ちていく。

今日も食われずにすんだと、今日も生き残れたと、明日も愛する家族と一緒にいれると心から微笑む。

しかし、突然のことである。

「またくるぞぃ」

「きゃぃんきゃぃぃぃぃんぃぃぃぃぃ！！……パタン」

去ったと思った悪魔が、犬小屋の上から中を再び覗き込んできた。

不意を付かれたベルは、犬小屋の奥で断末摩のような悲鳴を上げる。そして、もんどりうちながら気を失ってしまった。

柴犬ベル3歳。

試練の日々は、今始まったばかりであった。

<　外道　>

最近、掃除がされていない散らかったマンションの一室。

リビングの床にはビールの空き缶や日本酒のワンカップなどが、無造作に散らかっている。

テーブルの上には、食べかけのお摘みやジャンクフードが散らかり、酷い有様であった。

隣のキッチンも似たような物だ。

流しには、洗われていない皿や鍋が積み重ねられ、あちらこちらにゴミが散乱している。

「ユーもやるねー」

「なにが？」

二つの話し声。散らかったリビングには、人型の異様な物が立ち尽くしていた。

「まさか自分のファザーまで手にかけるとはねー」

しばらくして立ち尽くす異様な物は、グニャグニャと揺れると液体金属のようになって床に溶け落ちた。

すると中から一人の少年の姿が現れた。

そして解け落ちた液体は、少年の足元に排水溝が有るかの如く渦を巻いて床の中に消えていく。

「別に……ただ、無駄な物を整理しただけだよ」

自分の体にまとわり付いていた物が消えると、少年は窓際へと歩き出した。

そして日が落ちて薄暗くなってきた外の景色をじっと見つめ始める。

「ナイス割り切りデース。ミーはキライじゃないよ、そんなユーのこと」

少年と会話をするインチキ外人の口調の声。

だが、声はするが姿は見えない。

「ねぇ、御前様……」

「ファッツ？」

「僕が望むなら……、本当に力を貸してくれるんだね？」

「イエス、ユーがミーの使い手として妖力共有をおこない、ミーの三種百色の本能をサポートしてくれるのならば、ミーはユーの望みをサポートする事を約束しますねー」

「ギブ・アンド・テイク……か」

「イエース」

少年は、窓を開けてベランダへと出て行く。

暗くなってきた空から吹く風が、少年の黒髪を撫でる様に揺らす。

ベランダから見える景色は、向かえにある一軒家のリビング。

ソファーに座りながらビールを飲む父親に、時折じゃれ付く小さな男の子の姿が見えた。

「御前様、この世には要らないものが沢山有ると思わない？」

ベランダの手すりに両腕を組み乗せ、その上に詰まらなそうに顎を乗せた少年は、向かいの家のリビングをじっと見つめる。

「ミーは生まれたて、人間社会の事情は分らないねー」

否、ただどうでも良いだけである。

少年の背後に、一台のタンスが音も立てずに床から生える様に姿を現した。

「この世には要らない人間が沢山居るんだよ……。

世間の役にたたないどころか、他人に迷惑をかけながらも、それを気にも留めずに生き続ける。

中にはそうする事で利益を上げ、さぞ当然に生きている連中もいるんだよ……。

そんな奴らは、要らないとおもわない？」

「お前のファザーや、先ほど喰らった四人のボーイズのことかね？」

「ああ、あんな連中は要らないと思うんだよ。
人間のクズは整理されるべきだ。僕はそう思うんだ。
世の中からクズどもが消えてくれれば、この世はもっと素晴らしい世界になると思うんだ」

「シャングリラ」

「ねぇ、御前様、僕と一緒に創ろうよ。僕と一緒に悪の存在しない世界を……」

箪笥御前には、どうでも良いことであった。

「ミーのパワーは、ユーの為にあるのデース。
ユーがそう望むなら、そうしちゃいなよ。
ユー、やっちゃいなよ」

タンスは、床の上を滑るように前進をはじめると、窓枠をすりぬけ少年の背後に移動して来た。

「ユーが望むようにやっちゃいなよ」

少年の背後に立ったタンスが、少年に耳打ちを繰り返す。

「ユーが望むがまま、やっちゃいなよ」

その囁きは催眠術の様に、少年の心に染み込んでいく。

「そうだよね、この世を整理しよう。僕らで整理しよう！」

「やっちゃいなよ！。そのアクション全てがミーを百計神に近づけマース！」

箪笥の囁きは、悪魔の誘いの如く少年の心を悪へと染め上げていく。

そして人の道を踏み外すように、少年の心は前と進もうとしていた。それが外道とも知らずに。

<　七人のヤクザ　>（前書き）

アクション、アクション、ヤクザが出て来てアクション、わはーｗ

ｏ（≦≡∇≦≡ｏ）（ｏ≧≡∇≧≡）ｏ

<　七人のヤクザ　>

町に夜が訪れる。

子供達が寝床について、大人たちの時間が始まると、商店街から主婦達の姿が消える。そして、代わりにピンクのネオンが増え始めた。

サラリーマン達は、労働意欲に満ちた昼間の顔から解放されて、心のままの自分を酒の勢いと共に取り戻し町に零れかえる。

夜の時間は、何処の誰にでも禁断の果実がお手頃な価格で手に入り、それを求めて多くの者が群がってくる。

しかし、そんな物に興味を持たずに、夜の街に姿を現した一人の男がいた。

大人達が酒と肉欲に溺れる時刻に、その男はロードワークに励んでいた。

青を基本とした上下のスポーツウェア、首の隙間を黄色いタオルで塞ぎ熱を逃がさないようにしている。

酔っ払い達の間を縫いながら走り続ける男の息が白くなると共に、体から湧き出る湯気がうっすらと尾のように靡いていた。

その男は飲み屋街の近くにある公園へと入っていった。

昼間は様々な人達の憩いの場であるこの公園も、夜になると人気が絶えて静かな空間に変わる。

外灯がぼんやりと照らす公園内に入った男は、広い公園の中央でストレッチを丹念に繰り返す。

「やぁ、堂本～、待たせたな～」

ストレッチに励む男の背後から、ドスを効かせた男の声が投げかけられる。すると男は、ストレッチを止めて後ろを振り向いた。

「こんばんは鳴海先輩、俺も今来たところですよ」

男が振り返ると、細いラインが縦に幾つも入った白いスーツを着た男が立っていた。

痩せた細い顔立ちに茶色い色眼鏡、口元にはマジックで書いたような細い口髭を生やしており、髪形はポマードで固められたオールバックであった。

どの角度から見ても極道の風貌。

更に男の後ろには、様々な柄の悪い格好をした子分と思われる男たち六人がついて来ていた。

スポーツウェアの男と白いスーツの男は、デートの待ち合わせをしていたカップルのような挨拶を交わすと、真っ直ぐに向かい合った。

二人の間には、殺気立ったものは感じられない。

「で、鳴海先輩、用事ってなんですか？」

スポーツウェアの男は、暖まった体を冷やさないように、つま先で軽くステップを繰り返しながら話しかけた。

「いやねー、後ろのこいつらなんだけどよ」

白いスーツの男が、後ろに居る六人の男達を親指で指差す。

身長１９０センチは有る巨漢で坊主頭の男。

夜なもかかわらず黒のサングラスをかけた、リーゼントに黒い革ジャンのロカビリー男。

黒のジャージ姿にセッタを履いた四角いエラの張った顔の男。

龍の刺繍が入った派手なスカジャンにＧパン姿の小男。

グレイのスーツに青いワイシャツ、ノーネクタイでマユなし男。

ドカジャンに作業スボンでロンゲの前歯の無い男。

六人が六人とも、カタギとして紹介するには無理のある強面であった。

「そいつらが、どうかしましたか？」

ジャンプを繰り返しながら冷めた口調で話すスポーツウェアの男。

それに対して、話し方が気に食わなかったのか、後ろの六人の視線が恐ろしいものに変る。

「こいつら、この町で一旗上げようとよ、地方のあっちこっちから出てきた連中なんだけど。なんでも地元じゃあ名の通ったツワモノだったらしんだが……」

「へ～、それで」

「この町じゃあ、ヤクザでも手を出しちゃいけね～ヤツが居るって言っても、信じてくれないんだよ」

鳴海はわざとらしく困った顔をしてみせる。

「それで鳴海先輩、俺にどうしろと？」

「俺は信じね～ぞ、レジェンダリータケシなんて話はよ。バカバカしーんだ」

二人の会話にリーゼントの男が口を挟む。

「鳴海先輩、こいつら食べていいのか？」

リーゼントの男を見たスポーツウェアーの男が、小刻みにしていたジャンプを止めると、トーンの低い声で鳴海に問いかけた。

「ああ、親父の許可は取ってある。何も知らずに町中でおっぱじめて、恥かくわけには行かないからな」

スポーツウェアの男は、期待していた回答に満足げな顔をする。

白いスーツの男はそう言うと、スポーツウェアの男と六人の男達の間から離れていく。

「あんまり派手に壊さんでくれよ」

そして公園の隅にあるベンチに座った白いスーツの男は、タバコに火をつけながらベンチの背もたれにフンズリかえる。

「あんたの話は、若頭から色々と聴かせてもらったぜ」

リーゼントの男は、黒い皮ジャンのポッケに両手を突っ込みながら、猫背で顔を近づけてくる。

「どーも信じらんねー。後ろの連中も同意権だ」

「それで？」

二人が話していると、リーゼント男の肩を後ろから大きな手が、力強く掴んできた。

「？」

「二階堂、くっちゃべってねーで俺と代われ」

リーゼント男の肩を掴んで前ににじり出たのは、坊主頭の大男だった。

「話が本当なら、こいつで聞いて見るほうが早えーわな」

巨漢の男は大きな手を力強く握り締めてごっつい拳骨を作ると、男の鼻先に突き出す。

「ああ、でけーの、いいこと言うじゃあねーか」

スポーツウェアの男が、怪しく微笑む。

「ちっ」

舌打ちをしたリーゼント男は、残った四人の元に帰る。どうやら一番手を巨漢の男に譲ったようだ。

一人残った巨漢の男は、指の関節をコキコキ鳴らしながら目の前の男を見下ろす。

「覚悟は良いか」

「お前え相手に、そんなものが必要なのか？」

スポーツウェアーの男の返答に、大男の中で何かが音を立てて切れる。

それが開始の合図代わりの如く、大男が殴りかかった。

「うぅらーーーーーー！」

怒号と共に放たれた大男のフック。

だが、スポーツウェアの男は、背を後方に反らして回避すると同

時に、下段廻し蹴りを放つ。

バットでタイヤを叩いたような音が、静かな夜の公園に響いた。

「くはっ！」

スポーツウェアの男の脛が、巨漢の男の腿に音を立てて減り込んでいた。

すると次の瞬間には、巨漢の男が尻餅を付くように座りこんでしまう。その光景は、まるで動物園のクマかパンダが、暇そうに座っているかのように見えた。

大男本人も何が起きたのか分らないといった表情をしていた。

たった一発のローキック。

そのダメージに、巨漢の男の体は『立つ』という行動を本人の意思とは別に拒否したのである。

「畜生！、……あたたた！」

座り込んでいた巨漢の男は、立ち上がろうと足に力を入れた。

しかし思ったとおりに動かない上に、激痛が走り声を立ててしまう。

「はい、そこまで」

スポーツウェアの男はそう言うと、また下段廻し蹴りを放った。

だが、今度の蹴りは、膝関節でスナップを効かせた鞭のようなスピーディーな蹴りであった。

爪先で巨漢の男の顎先を横からチョンと軽く叩くようにヒットさせると、巨漢の男はそのまま眠る様に頭を股座に倒して動かなくなる。

巨漢の男に何が起きたか。

それは、脳震盪。

顎の先を爪先で蹴られて、頭部が左右に細かい振動を起こすように揺れる。

そうなる事で巨漢の男の脳は、左右にゆれて自分の頭蓋骨の内側に幾度となく叩きつけられたのである。

「マジか……」

リーゼント男は、呟きながら夜にもかかわらず掛けていた黒いサングラスを、やっと外した。

そして他の四人にも動揺が広がる。

「皆でやっちまおうぜ……」

スカジャンを着た小柄の男が、そう口火を切った。

「こいつを倒せば、この街じゃあ大物になれるんだろ?。

別に一人で倒さにゃいけねえ訳じゃあねえんだからよ。全員でやっちまおうぜ」

そう言いながら小柄の男は、ポケットから折りたたまれたバタフライナイフを取り出すと、巧みに刀身を輝かせて組み立てる。

「そ……そうだよな」

「おい……？」

後ろに居た三人も、小柄な男の提案に乗ったらしい。

それを見てリーゼントの男たげが、今ひとつ納得の言って無い様子であった。

「ちっ」

リーゼントの男が舌打ちを零すと同時に、我先へとスポーツウェアの男に飛び掛った。

一発でぶったおせば手柄も独り占め、男はタイマンという自分のポリシーも守れるとの考えだろう。

リーゼントの男の中では、ケンカはタイマンが上等なのである。

一対他、そんなゲスな事はプライドが許さない。

「そらぁ！」

しかし、リーゼントの男が繰り出したパンチは、寒い夜の中で空

振りをした。

スポーツウェアの男は、攻撃を避けると同時にリーゼント男の横に回りこみ、その足を払う。

「どわ！」

リーゼントの男が、気が付いた時には自慢のリーゼントが地面を掠め、足は天を向き逆さまになっていた。

そして逆さまになったリーゼントの男の目に入ってきた光景は、自分の足を払いのけた後、スポーツウェアの男が、青いワイシャツの男にボディブローを叩きこんでいる一瞬の光景であった。

その後、リーゼントの男は背中を地面に叩きつける。

リーゼントの男は、一瞬息が詰まるが、すぐさま起き上がりファイティングポースを取った。

「！」

だが、立ち上がったリーゼントの男が目にしたものは、惨劇の光景だった。

青いワイシャツの男は、腹を抱えながら地面に顔から倒れこんでおり、ロンゲの男は足を揃えながら横向きに倒れこみゴンと頭を打ち鈍い音をさせたところだった。

最後に残った一人、黒ジャージの男は、前蹴りを喰らって凄い勢いで飛んでいき、公園の植木の中へと消えていった。

「マジ……かよ……」

自分が足を掛けられ転倒している僅かな時間で、各地から集まったウデコキの悪(ワル)ども三人が瞬殺。

今までいろんな相手と殴り合ってきたリーゼントの男も、流石に今回ばかりは目を丸くして驚く。

スポーツウェアの男は、黒ジャージの男を倒した後、手に持っていたバタフライナイフを地面に投げ捨てた。

「……三人?、一人足りねえ。……ヒィ!」

リーゼントの男がそう思った瞬間であった。

自分の目の前に、スカジャンを着た小柄な男が空から振ってきたのである。

「何だぁ!」

空から降ってきた小柄の男は、完全に白目を剥いて地面に転がり、口からは白い泡を吹いていた。

それは、まるで屍のようだった。

おそらくリーゼントの男が足を引っ掛けられた直後に、何らかの技を喰らい空中に飛ばされていたのだろう。

それが今頃になって落ちてきたのである。

「まだやるか？」

死屍累々の如く倒れこんでいる五人の中央で、スポーツウェアの男がリーゼントの男に尋ねる。

「いゃ、もう十分だ……」

リーゼントの男は、乱れた髪を左右に振りながら戦意喪失を告げる。

「じゃあ、鳴海先輩、ゴチでした」

スポーツウェアの男は、ベンチに座ってタバコを吸っている男に手を軽く振ると、ロードワークを再会させるために公園を出て行った。

「分かったか二階堂、この町じゃあ堂本流はヤクザでも手を出しちゃならねえのよ。それがルールだ」

「へぃ……」

リーゼントの男は、魂の抜けた返事を若頭にかえした。

「二階堂、こいつら病院に運こんどけ、俺は帰るは」

「へぃ……」

背中を向けながら手を振る白いスーツの男は、子分達を残して公園を出て行く。

「やっぱ……地元に帰ろうかな……」

リーゼントの男は横たわる仲間を見ながら、しばらく途方にくれるだけであった。

<公園外の二人>

スポーツウェアを着た男と、白いスーツのヤクザが出て行った公園。

その出入り口とは別の入り口に、二つの人影があった。

「どう、感想は？」

赤い大型のバイクにもたれ掛かる赤いライダースーツの女性が、公園の中での一方的な戦いを見ていた少年に質問する。

「すごいですね……」

赤いライダースーツの女性より身長の低い少年は、緊張を隠せない声で答えた。

「カズマ君、アレが君の憧れる男性の強さよ。それとアレが、貴方が学ぼうとしている武術、堂本流。
堂本流を学ぶって事わね、あのぐらい強くならないとダメなの」

「はい、陽子先生」

バイクに寄り掛っていた陽子は、バイクから離れてカズマ少年に近づく。

「タケちゃんの弟子になるって事は、弱くてはダメなの。カズマ君はタケちゃんの様に強くなれる？」

カズマは優しい顔付きで振り返る。

「僕は、タケシ先生の様には強くなれません」

カズマの回答に陽子は「アレレ」と言いたげな顔をした後、自分の細い腰に手をあてる。

「ですが、僕は僕なりの強さを身に着けて、タケシ先生をも超えて見せます」

一瞬、きょとんとした表情をした陽子。

しかし、カズマの前に立った陽子は、自分の胸ぐらいに有る少年の頭をクシャクシャに撫で回した。

「タケちゃんを超える……、それは難しいわよ。
でも、男の子ならそれぐらい言ってのけなければかっこ良くないわね」

ショートヘアーの陽子は、カズマの回答に満足げに微笑むと、ライダースーツのポケットから一枚の紙を取り出しカズマに差し出す。

「何ですか、これ?」

折り畳まれた紙を受け取る事無く見詰めるカズマは、陽子の顔に視線を移して質問した。

「タケちゃんの一週間のスケジュール。朝稽古からバイトの時間まで書いてあるわ。

タケちゃんが弟子入りを嫌がっても自分から粘り強く食いついていきなさい」

紙を差し出したまま微笑む陽子。

「陽子先生……、ありがとうございます！」

カズマは、タケシのスケジュールが書かれた紙を受け取ると、内容を確認して陽子に頭を下げる。

「じゃあ帰りましょうか、あんまり遅くまで未成年を引っ張りまわす訳には行かないからね。家まで送るから後ろに乗って」

そう言う陽子もまだ、未成年である。

「ありがとうございます」

陽子は、しなやかな足を柔軟にかざしバイクに跨る。

「ところで、このタケシ先生の週間スケジュールは、自分で調べて作ったんですか？」

「うん、そうだけど？」

フルフェイスのヘルメットを被ろうとした陽子が、カズマの質問に不思議そうな顔をして振り返る。

陽子は後ろに乗ったカズマと目が合った。するとカズマが引きつった愛想笑いを作っていた。

陽子は一回首を傾げた後、ヘルメットを被りバイクのエンジンをスタートさせる。

「タケシ先生も大変かも……、これじゃあストーカーだよね……」

「カズマ君何か言った？」

「いいえ、何も！」

カズマのセリフは、バイクのエンジン音に邪魔されて陽子には聴こえなかったようだ。

「そう……？」

カズマがほっと胸を撫で下ろすと、二人を乗せたバイクは公園を離れるように走り出して行く

<腐り>

賑わいを増し始める飲み屋街を、青いスポーツウェアの男が走り向けていく。

明らかにこの場に合わない姿であった。

だが、酒が入り酔い始めた町の人々には、そんなことは既に気にもならなくなっていた。

各自が各々の連れ達と、楽しそうに戯れの一時を過ごしていた。

そして千鳥足のお父さん達の姿が数多くなってきた繁華街の一軒の居酒屋から、三人の男性が賑やかな声を上げて出てきた。

「よーし、もう一軒いきますよー」

「塚田先生、飲みすぎですよ」

顔を真っ赤にさせて千鳥足の年輩の男性。

首に巻いていた筈のネクタイを、鉢巻の様に頭に巻いて上機嫌で連れの若い男性の肩に手を回してもたれ掛かっていた。

「何言ってるんですか森先生、夜はこれからだぞぉ～」

千鳥足の年配の教師を心配する若い教師を、がっちりとした体育会系の教師が肩をバンバンと乱打する。

「そうですよ、貴方が一番若いんだが、何言ってるんですか～。あはははははひゃひゃひゃひゃ」

年輩の教師は、酒臭い息を若い教師にわざとらしく吹きかける。

そして道の真ん中だというのも気にせずに、上機嫌で高笑いを上げた。

若い教師は、呆れた様子でその息を避けて、顔を顰めて見せた。

「ささ、塚田先生、次はどんな店行きますか?、やっぱり若くて可愛い子が居る店に行きますか～」

赤らめた顔で年配の教師が小指を嫌らしく立てる。

「おお、いいですね～先生～～」

そう言いながらスケベな顔を並べて二人の教師は肩を組み合い、また騒ぎ出す。

「先生、僕は帰りのバスが無くなるので、これで失礼しますよ」

そう言った若い教師を、二人の教師は「はぁ～」と言いながら顔を見詰める。

「おいおい森先生、まだ二次会が終わったところですよ～、何言ってるんですか」

体育会系の教師がそう言いながら、森と呼ばれた若い教師の体を

軽く悪ふざけの様に突き飛ばす。

「僕は家に帰ってやる事が沢山あるんです。小テストの答え合わせとか明日の授業の準備とか！」

「そんなの明日やれ！。教師みたいなこといってるんじゃあね～よ～」

「教師です！」

「どうせガキどもの面倒を熱心に見たって、報われることなんて無いんだぞ～」

酔いの回った年輩の教師が、教師としての本音を溢す。

しかし其れは教師一筋、今年で定年退職の人物が言うには、あまりにも嫌なセリフである。

「それに僕は新人で給料も安いんです。これ以上はお付き合いできません」

「金のことは気にするな、塚田先生がおごってくれるさ！」

「何をおっしゃりますか、給料が安いのは、我々も一緒じゃないですか、おごりませ～ん。わはははひゃひゃひゃひゃひゃ」

「そりゃそうか、がはははははははーーーー」

この二人はといった顔で頭を振る若い教師は、大きくため息を付いた。

「じゃあ、先生がた僕はこれで帰りますからね。泥酔してその辺で寝込んだり、警察の厄介になるようなことはしないでくださいね、教師なんですから」

「大きなお世話だー、とっとと帰れー、うらぎりものー」

体育教師が口を尖らせて子供の様に悪態を飛ばす。

それを見て年配の教師は、頭のネジが緩んだ様に笑っていた。

「うらぎりものー、わはははははひゃひゃひゃひゃ」

「……ダメだこりゃ」

若い教師は一礼すると、二人の先輩教師と別れて駅前へと目指した。

「塚田先生〜、森先生のヤツ、本当に帰りましたよ〜。付き合い悪ー」

「あららー、最近の若者は付き合い悪いですな〜」

「じゃあ、二人で若い子がうじゃうじゃ居る店に行きましょー！」

「おおー、いきましょいきましょ〜」

肩を組む二人の教師は、周りの迷惑も気にせずに、大声で道の真ん中を千鳥足で闊歩する。

若い教師は、そんな先輩教師達が心配なのか、しばらく二人の騒がしい背中を見送っていた。

「ところで良い店でも知ってますか？」

「はいはい、もちろんですよ、ピチピチのエロエロが揃った良い店がありますから～」

「おおー、それはそれは楽しみですな～」

しばらくこのような感じでエロエロ教師の二人は繁華街を歩きまわっていた。

「たしかこの辺だったような……あれ～」

体育会系教師の案内で進んでいた二人は、気づけば人気のない路地に入り込んでいた。

さっきまでの賑わいが嘘のような寂しい路地。

ネオンの明かりも届かなくなり、酔っ払いやポン引きの声が何処か遠くから微かに聞こえてくるだけだ。

「先生、本当にこっちで良いのですか～」

「んんーー……」

確実に道を間違えていることに気付いた体育会系の教師は、軌道修正をする為に、あちらこちらを見回しながら、この寂しい裏路地からの脱出ルートを探していた。

「ん？」

あたりを見回していた体育会系の教師が何かに気付く。そして路地奥の暗闇を凝視した。

「どうかしましたか？」

年輩の教師もまた、体育会系の教師が見ている方向を見てみる。

電信柱の街灯が一つスポットライトの様に地面を照らす向こうに、暗闇の中をゆっくり歩いてくる人影が一つあった。

「はて、どこかで見た顔ですな……」

暗闇の中から現れた人物が、街灯の明かりに照らされて顔が見えた時、年輩の教師がその人物の顔を見てそう呟いた。

「あいつ～、確かうちの学校の生徒じゃあないですかね？」

「ああ、そうかもしれません。確に学校で見た顔ですね」

街灯に照らされた人物は、少年だった。

二人は、なんとなくだがその顔が記憶に残っていたらしく、自分の勤めている学校の生徒だと確認しあう。

「おい君、確かうちの生徒だったよな。こんな時間に、こんな場所で何している？」

体育会系の教師は、強気の態度で少年に近寄っていく。

「先生、整理ですよ」

「整理？」

赤い顔をキョトンとさせて少年を見る体育教師。

「そうです、整理しに来ました。いらない物を整理しに来ました」

「そ……そうか……」

少年の冷たい視線、冷たい声、それに体育教師は寒気を感じた。

「例えるなら、正義のボランティアですよ」

「……そうか、お前も大変だな……が、がんばれよ……」

体育会系の教師は、少年から感じる普通じゃない空気に、これ以上かかわるのは得策ではないと思った。

何か事件でも起こさなければ、大きな問題にはならないだろうと考え、この少年と出会ったことを忘れようとする。

そして少年に背を向けると、連れの年配教師の元へと帰ろうとした。

「妖力共有・同化」

体育会系の教師が背を向けると、少年はハッキリした口調で言っ

た。

体育会系の教師にもそれはハッキリと聞こえたが、あえて振り返る事無く無視して同僚の元へと急いだ。

しかし二人を正面から見ていた年輩の教師が、顔を引きつらせて指をさす。

年輩の教師に指された体育会系の教師は、何が起きたのかといった顔をしていた。

「う……うしろ……せんせい……うしろ」

指さしながら引きつった声を出す年輩の教師に促され、体育会系の教師は、素早く後ろを振り向いた。

「はっ……何に、こいつ！」

自分の後ろには、少年が居ると思っていた体育会系の教師。だが、目に入ってきた異様な物に息を呑んだ。

先程まで居た少年よりも身長は高く、腕も足も胸も筋肉で大きくなった異様な物。

何よりもその全ての容姿を総合して言える一言は、怪物、そう表現するのが一番正しいと思った。

「超無限収納術・オープン」

体育会系の教師の目の前で、その異様な物の上半身がパカリと観

音開きを始める。

そして魔界へのトンルネと化した異様な物。トンネルの中は、静かに広がる闇があった。

「な……なんじゃこりゃ……」

目を大きく開き驚く体育会系の教師は、完全に酔いが覚めてしまった感じであった。

そして開かれた上半身の闇の中から大蛇の様にうねる木のツルが飛び出してくると、体育会系の教師の腰へと素早く巻きつき軽々と持ち上げてしまう。

「わぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

悲鳴を上げたのは、絡み取られた体育会系の教師ではなく、それを見ていた年輩の教師の方であった。

驚きのあまり腰を抜かしたのか、その場に尻餅を突きガクガクと震えるばかりで、同僚の教師を助けることも自分だけ逃げることも出来ずにいた。

「貴方みたいな腐った教師がいるから、学校はどんどん悪くなって行くんだ！」

河本少年の叫びが、年輩の教師の悲鳴を掻き消す。

そしてツルに巻き取られていた体育会系の教師が、開かれた胸の暗黒へと引き擦り込まれて行く。

怪物は、体育会系の教師を完全に飲み込むと、観音開きをしていた上半身をパタンと音を立てて閉める。

「ち……ちがう……」

その光景を、尻餅を突いたまま見て居た年輩の教師の口から呟きが漏れた。

「ち……ちがう……それは違う……」

「何が違うのですか？」

異様な物になった河本少年が、尻餅を落としたまま脅える年輩の教師に問う。

「われわれ教師が腐ってるから、学校が悪くなるんじゃない……。生徒が……子供達が腐ってるから、われわれ教師も腐って行ったんだ……」

異様な物は、三角の頭部を年輩の教師に向けてプルプルと振るえ始める。

「ふ……ふーざーけーるーなーーーーーーー！」

「ひぃぃぃぃぃ！」

激怒した声を上げながら異様な物は年輩の教師に迫り寄る。

「大人が、貴方が悪いに決まってる！、子供は、僕は、何も、何も

悪くない！」

異様な物は尻餅を突いていた年輩の教師の襟首を片手で掴むと、凄まじい勢いで自分の頭よりも高く持ち上げた。

もう既に、悲鳴を上げることすら出来ないほど恐怖に引き攣った年輩の教師は、異様な物のなすがままに足をばたつかせた。

「やっぱり貴方は、整理されるべき存在だ！」

異様な物は片手に持った年輩の教師を、野球のピッチングホームで十メートルぐらい離れた所にある壁へと投げつけた。

「ごへっ！」

背中をブロック塀に叩きつけられた年輩の教師の口から、酷く聞こえの悪い声が漏れた。

その一撃が、年配教師の逃げる力も、立ち上がる力すらも奪い去った。

「ごほっごほっ……ぐほっ」

壁に寄りかかりながら地面にずり落ちた年輩の教師の口からは、今度は咳き込みながら血を吐き出していた。

「もういいや……」

異様な物の中から聞こえる河本少年の冷めた声。

それは、何もかも諦めた声。

「もう先生も整理してあげますよ」

異様な物の上半身の扉が再び開くと、中からニョロニョロと木のツルが現れる。

そのツルは、壁際に倒れこむ年輩教師の足に巻きつくと、一気に胸の闇の中へと引きずり込んでいく。

壁に叩きつけられた痛みの為か、この状況に全てを諦めてしまったのか、力なき呆然とした表情で年輩の教師は、異様な物の体内に消えてく。

そして、扉が閉まる。

「おいおいあんたよ～、何があったかしらね～けど、やりすぎじゃねえか……？」

「！？」

路地の向こうから突如現れた人物は、一部始終を見ていたかの口調で話しかけてきた。

「貴方は？」

異様な物が振り返る。

その人物は、黒の革ジャンに膝の破けたGパンとスニーカーを履いていた。

そして茶髪の短い髪を掻きながら、ふてぶてしく暗闇から歩み寄る。

「俺かい？」

男は全身が見える明るい場所まで出ると、クルリとスピンターンを行う。

そして男が正面を向いた瞬間。男の顔は黒い布を巻いた覆面にかわり、背中には四角い鍔の忍者刀を斜めに背負っていた。

よく見れば両腕には黒鋼の手甲を着けており、革ジャンの下は鎖帷子を胸元からチラつかせていた。

まさに一瞬の変わり身。

その姿は忍者。

だが、電灯の下に来た時には素顔は見えていたので、今更顔を隠しても遅いと少年は思った。

そして斜め四十五度のむきでポーズを取る忍者風の男は、自信零れる口調で自分の名を名乗りはじめる。

「俺は猫田虎二、私立探偵さ」

忍者風の男は、心の中で「決まった」と確信する。

「……忍者じゃん」

異様な者が、ボソリと呟く。

「確かに……」

<　バイク・前　>（前書き）

今度はバイクだ～！

<　バイク・前　>

深夜のロードワークを終えてタケシは、アパートに向かって帰ってきた。途中でちょっとした摘み食いがあったが、十キロに渡る走りこみである。アパートに到着した後、もう少し稽古をしたら今夜は寝るつもりであった。

「ん～？」

タケシが自分の住んでいるアパートの前まで来ると、アパートの影になっている庭の方から、赤い光がゆらゆらと朧気に見えてきた。

タケシは、不信に思うと庭の方へと進んだ。

「うわ！」

アパートの庭を覗き込んだタケシは、思わず声を上げる。

其処には井の字に、ニメートルぐらいの高さまで組み重ねられた牧が、キャンプファイアの様に燃え上がっていた。

そして、その前には白い着物に赤い袴の巫女姿をした春婆怒が、こちらに背を向けて何やら怪しく祈りを奉げていた。

「おい！、春婆怒、何してるんだよ！」

「おお、タケシや、今戻ったのかぇ？」

タケシの大声に、何時ものクールな表情で春婆怒が振り返る。

「春婆怒、アパートに火が燃え移ったらどうするんだ！。それに近所の人に見つかったら大騒ぎになるぞ！」

「慌てるなやタケシ、周辺に術を施してある。長屋に火が移ることもなければ、周辺のやからに気付かれることもないは」

「そ……そうなのか……」

タケシは、先日の商店街での外れ鬼との対決時を思い出した。

あの時も外れ鬼が張ったと思われる結界の類で、人の姿は居無くなっていた。

これだけ大きな炎を炊いていて、未だに近所やアパートの他の住人が騒ぎ出さないのだから、春婆怒の言う事は本当なのだろう。

それに気付いたタケシは、若干だが冷静を取り戻す。

そしてタケシは、何故か春婆怒と燃え盛る炎との間に有る自分のバイクに気付くと、また冷静を失い大声を上げる。

「おい！、それ俺のバイクじゃあねえか！」

「うむ、そうじゃが？」

タケシは、燃え盛る炎の熱を感じながらも、必死の形相で自分のバイクに駆け寄った。

そして愛車に近づいたタケシの目に入って来たバイクの異変。

それはバイク全体に書き込まれた謎の墨字。

ハンドルにも、ヘッドライトにも、座席からマフラーにも、良く見てみれば小さなパーツやネジやボルトの一つ一つまでに、お経なのか盆字なのか分からない墨字が書かれていた。

「なんだよこれ！」

「慌てるなやタケシ。こら、擦るな、呪文が消えてしまうではないか」

「消えるんだろうな春婆怒！」

「これ、まだ消すなぁ」

耳無し法一の様になった自分のバイクの前に、心配そうな表情でしゃがみ込むタケシ。

だが、タケシを後ろから春婆怒が掴んで引き離そうと引っ張る。

「おい、何しやがる！？」

「邪魔だ、のきたもれ」

「ちゃんと説明しろ、何してるんだよ！」

「分かったから落ち着けタケシや」

タケシは、春婆怒に引っ張られながらバイクを心配そうに見つめ

る。

「これからこの乗り物を使こうて、式神をこしらえようかと思うてな」

「式神？」

「うむ、現代だと使い魔とかファミリアとも呼ばれる類じゃ。結構便利じゃぞう」

春婆怒がそう説明してると、炎の前にあるバイクがひとりでにガクガクと揺れ始める。

「なんだ！？」

「おぉ、ついに術が完成するぞよ」

ガクガクと揺れるバイクを、春婆怒は笑顔で見ていた。しかし、バイクの持ち主であるタケシは、どうなるのかと心配そうな顔で見守っていた。

そしてバイクは、鉄が軋みながら擦れ合う大きな音を立てながら奇怪にも変形を始める。

「なんだなんだ！」

変形を始めたバイクは、あれよあれよという間に人型へと変わる。

ヘッドライトが人間でいう顔の辺りにあり、二つのハンドルがまるでおさげのように後頭部にぶら下がっていた。

エンジン部分や座席シートで胸や腹を作りだし、前輪後輪を支えていた部分が手足に替わって行く。

そして残ったタイヤ二つは両肩に並べて背負っていた。

そのバイクの部品で作られた人型は、身長二メートルはあるだろうか。

明らかに、無理やりにも人型に変形したといった風貌に見えた。

「……」

バイクのなれの果てを下から上へと見上げたタケシが唖然とする。

「おぉ、思うたより立派な体格になったのぉ～。次は起動確認じゃ、ちょっとその辺を歩いてみぃ」

人型に変形したバイクは、春婆怒に言われるがままキャンプファイアの周りをグルグルと回るように走り出す。

「動いた！」

「うむ、なかなか良い出来のようじゃのぉ」

春婆怒が自分のかけた術の成功に満足そうに微笑む。

「おい春婆怒、こいつバイクに戻せるのか……？」

「もちろんじゃ。これこっちに来て乗り物に戻ってみろ」

のしのしと走り続けていた人型は、春婆怒の命令に従うように二人の目の前に来る。

そしてまた、鉄の軋む様な機械音を立てながら元のバイク姿に戻った。

「よかった、元どうりだ、よかったー」

元に戻ったバイクの姿を見て、タケシが涙目になって喜ぶ。

それはその筈である。まだ買った際のローンが二年分残っているのだ。春婆怒の道化に付き合って、バイクをオシャカにしては、たまったもんじゃない。

「さて、こやつに名前をつけてやらくてはのぉ～」

「名前？」

春婆怒がそう言うと、バイクはかってに人型に変形する。

それに驚くタケシをよそに、バイクはウンウンと頷く。

「そうじゃの～、ここは現代風の名前の方がいいかのぉ～」

「おいおい、勝手に人のバイクに名前付けるなよ」

春婆怒は、タケシの話を無視し、顎に手をあて考え込む。

「こんな名前はどうじゃ？」

タケシと人型バイクが、何々といった表情で春婆怒の顔を覗き込む。

「バイクマンじゃ！」

「ダサッ！！」

<　バイク・後　>

あんまりのネーミングに、タケシは絶望的表情で声を上げた。

しかし、名前を付けてもらった側の人型バイクは、春婆怒の考えたネーミングが気に入ったようだ。親指を立ててＧＪと喜ぶ。

「えっ！、お前それで良いのか！？」

喜ぶ人型バイクを見て、タケシは更に幻滅した。

この二体の妖怪は、どうやらセンスは同じ所にあるようだ。

タケシは諦めたのか疲れたように肩を大きく落とした。

そんなタケシを余所に春婆怒が話を進める。

「タケシや、これでもこやつは役に立つと思うぞよ」

「役に立つ？」

タケシは疑うように、話す春婆怒を見た。

「そうじゃ、わらわ達九十九神は、昔から相棒である使い手の所有物をつこうて、このような式神を拵えるのじゃ。

こやつら式神は、わらわ達の妖力共有に影響受けて力を増す。

そして普段の移動力を遥かに上回る力を発揮出きるのじゃぞぉ～」

「ほほぅ」

「その式神にかけた術の制度にもよるのだがのぉ。
このバイクマンならば、妖力共有時は走る速度を増し、
壁を突き破りながら走るのも容易くなるじゃろう」

「壁を突き破りながら走るのは……ちょっとまずいだろ……」

「どうじゃ、少しばかり走りに行ってみるかぇ？。ちょうど、どこぞやの九十九神が暴れている様子だしのぉ」

「九十九神が暴れてる？」

突然話題に出た別の九十九神の話に、タケシは春婆怒に思わず訊き直した。

「うむ、今日になって三度妖力共有している九十九神が居てのぉ。
今もまた妖力共有しておるのじゃ。
一日に三度の妖力共有する理由、タケシには分かるかぇ？」

「一日に三度？」

三種百食の本能。

人間を百人、妖怪を百匹、九十九神を百体、それらを食べることは、九十九神の本能であり生きる理由。

「一日に妖力共有を三回……、そんなに妖怪や九十九神がごろごろ居るわけがない」

春婆怒を見つめるタケシの顔は、眉間に皺を寄せながら吊上がっ

ていた。

その表情に宿る明らかな怒り。瞳の奥に燃え滾るものは炎。

「そうじゃ、その九十九神は間違いなく人間を襲って回っておる。しかも、一日三食ペースでのぉ～」

「行くぞ、春婆怒。お前も速くバイクに戻れ！」

アパートの庭を出て行くタケシの後を、人型バイクも走って追う。

タケシの後ろ姿を見た春婆怒は、タケシの筋肉が盛り上がるように大きくなっているのに気付いた。

「ふふぅ、タケシ、御主が望むのなら力を貸してやろうぞ。そうやって九十九神を倒すのじゃ、わらわの為にのぉ……」

タケシには聞こえない小さな声で、そう言う春婆怒。

春婆怒が美しい顔で妖艶に微笑むと、背後で燃え盛っていた庭の炎が更に大きく燃え上がった。

そして、次の瞬間、一瞬で炎は消えて無くなると、最後に残った井の字の牧が、三人を見送る様に崩れ落ちた。

人型バイクは、アパートの前の道に出ると元のバイクの姿に戻る。

そしてタケシが無言でバイクに跨ると、後ろに春婆怒を乗せ走り出す。

「九十九神の居場所はどこだ？」

「こやつが知っておる」

タケシの腰に手を回して捕まる春婆怒が、細い指先で乗っているバイクを指差す。

「便利だな……」

「だからそう言ったであろう」

そして春婆怒が、ぺったんこな胸の谷間から覇王の腰巻を取り出すと、タケシの腰に勝手に巻きつけた。

「フィルターベルト？」

「いいから妖力共有してみぃ」

何かを少し考えた後タケシは、バイクを走らせたままあの台詞を口にする。

「妖力共有・変身！」

腰に巻かれた覇王のベルトから緑色の風が吹き出す。

それはタケシだけではなく、乗っているバイクをも包むと、巻き付く様に妖力で鎧を作り上げていった。

「おお、これは！」

タケシの変身した姿は、前回と変わらない。

しかし、走るバイクは妖力を吸収して、ボディーは一回り大きくなり、マフラーからは炎と爆音を上げ、ハンドルは反り返り、タケシの座っているシートもまた背もたれが大きなアメリカンな物に変わっていった。

何よりもエンジンパワーが、格段にアップしていた。

その姿も、そのパワーも、完全に別ものに変わっていることが、振動となってハンドルを伝わりタケシにワイルドな心地良さを感じさせていた。

「おお、なんだか派手に変わったな！」

「気に入ったのかぇ」

タケシと一体化した春婆怒が、テレパシーのようなもので話しかける。

「よし、派手にいくぜ！」

タケシはそう言って、一つ気合を入れると、バイクのアクセルを限界まで捻り上げた。

<タンス・壱>

約二十メートル四方。
三方を、三階から四階立てのビルに囲まれた空き地。
路地と空き地の間には、丸太の柱に針金を引っ張って作った簡単な柵がある。
その柵には、薄汚れた立ち入り禁止の看板が掛かってあり、柵を越えて侵入すね者を拒否していた。
この空き地は、飲み屋街から少し外れた場所にある。
夜になれば人っ子一人とおることのない、寂しげな場所。
ビルの屋上を超えた夜の空からは、ネオン街のざわめきが僅かながら風に乗って飛んできていた。
その深夜の空き地で激しく鬩ぎ合う二つの影があった。
方や革ジャンにGパン姿の黒覆面の男。
その男は、腕には手甲、背中には日本刀を背負った風変わりな忍者であった。

もう一方は、茶色い木目のような皮膚をした怪人。

肩から頭にかけて三角形の頭部。全身筋肉のマッチョなボディーをしており、腰には怪しい『妖』の字が大きく目立つバックルの付いたベルトを巻いていた。

この二つの影は、人間を遥かに超越した動きで、ビルに囲まれた空き地の中を、激しく飛び交い攻防を繰り広げていた。

「ちっ、この九十九神、けっこうやるじゃねえか！」

革ジャンを着た忍者が、ビルの壁を蹴り、三角飛びをすると、膝から九十九神目掛けてつっこんでいく。

しかし九十九神は、後方にジャンプをして膝蹴りを避けた。

蛙の様に両手足四本で着地した九十九神は、尖った頭の先を革ジャンの忍者に向けた。

すると今度は九十九神が、地面すれすれの低姿勢で、忍者の足元に走りこむと、両足で力強く地面を蹴り上げ忍者の顎を目掛けた強烈なアッパーカットを放つ。

「おっと危なねー！」

九十九神のアッパーは空を切り、空振りした勢いで体全身がしなやかに伸びきった。

忍者は、その瞬間に出来た隙を見逃す事無く、九十九神の胸元を狙ってフックを放つ。

「なんのデース！！」

だが、今度は九十九神が紙一重で避けると、忍者のフックが空を切った。

「御前様！」

九十九神の体から、少年の困惑した声が上がる。

回避したはずの攻撃、しかし九十九神の胸には、ガリガリと音を立てて三本の傷が刻まれた。

「心配無用！、この程度のダメージならミーのリジェネレーションで直ぐに治りマース！」

九十九神の言うとおり、胸に付いた三本の傷は、見る見るうちに消えていく。

「あらら、治癒術かよ……」

九十九神の傷が消えていくのを見た忍者は、不機嫌そうな顔をした。

その手の握り締められた、珍しい武器。

忍者の指の間からは、三本の鍵爪が出ていた。

忍者の暗武道具の一種で、握り締めて指の間から爪を出す熊手のような武器である。

その熊手は、逆に手を開くと爪が引っ込み、何も持っていないように見える工夫がされている。

「こっちは、とっとと蹴りを付けたいんだけどよ」

虎二は九十九神と戦う前に、兄の龍信に携帯電話で、九十九神発見の連絡は入れてあった。

そして今頃、兄から処理班にも連絡は入っている筈であろう。

虎二的には、兄や処理班が来る前に、一人で九十九神を倒して手柄を独り占めしたいところなのだ。

今は兄や鍋中と同じ調査班で動いているが、できることなら連合内の花形である、処理班に入りたいと思っていた。

その為にも、この九十九神を一人で倒して、戦闘でも腕が立つというところをアピールしたいのである。

兄や処理班が到着するのに、十分ぐらいの時間はあるだろう。虎二は、それまでに勝負を付けるつもりでいた。

「ならば、今度は必殺三連射手裏剣だ！」

虎二は、皮ジャンの懐から手裏剣を取り出すと、数を叫びながら九十九神めがけて投げ始める。

「一つ！、二つ！、三つ！」

手裏剣を、両手で左右交互に投げつける虎二。

しかし、その手裏剣を九十九神は、左右に飛びはね避け続けた。

「どうデース！」

三つの手裏剣を避けきった九十九神は、どんなもんだと拳を握り締めてガッツポーズをとった。

だがそこに……。

「四つ！」

更に四つ目の手裏剣が飛んでくる。

「ぎゃあああぁぁぁぁぁ、刺さったーーーデーース！」

忍者が投げた四つ目の手裏剣が、ガッツポーズをとる九十九神の額に突き刺さった。

「ひっ、卑怯者！。四つ目を投げるなんて！、三連手裏剣じゃないじゃん！」

「いやいや、引っかかるなよ……」

四つ目の手裏剣を投げて、命中させた本人もちょっぴり驚いていた。

<　タンス・弐　>

「午前様、今度はこっちからいくよ！」

「オッケー、ユーもやっちゃいなよ！」

「開け、超次元収納オープン！」

気を取り戻した少年の声が空き地に響くと、九十九神の上半身が両開きで開き始めた。

そして中から、大蛇のような太い木の蔓が現れる。

「これでも喰らえ！」

九十九神の体中から伸び出た木の蔓。

それを大きく上へ振りかぶると、忍者を目掛けて振り下ろされた。

「おっと！」

乾いた鞭の音が空き地に響く。

その鞭の如く一撃を、虎二は素早く回避した。

蔓の先で打たれた地面は、パックリと開いた亀裂が出来ていた。

「もっとやっちゃいなよー！」

九十九神の掛け声に答えて、蔓は鞭の攻撃を虎二に目掛けて連続でパチンパチンと繰り返し放つ。

しかし虎二は、幾度も繰り返される攻撃を見切り回避した。

だが、回避を続けるのが精一杯なのか、自分から反撃に移れないでいた。

「ちっ、時間が少ないのに、じれったい！」

虎二が、舌打ちをしながらジレンマを口にした其の時である。

突如空き地内に響き渡るバイクのエンジン音。

そのエンジン音は、まるでモンスターの叫び声のようだった。

「なんだ?!」

「ファッツ!?」

空き地で争う二人は、その音に動きを止めた。

あまりにも激しいエンジン音。

その振動に、針金作りの柵が、音を立てて揺れはじめた。

二人は、揺れる柵の向こうを見る。何がやって来るのかと思い。

「ちがう、路地からじゃねえ！」

路地の方を見ていた虎二が、そう叫んだ瞬間であった。

虎二と九十九神の間に、突然大きなバイクが降ってきた。空からだ。

二つのタイヤで地面を叩き、その勢いで発生した風圧が、大きな衝撃となって空き地に広がっていった。

そして振動は、三つのビルの壁に跳ね返り、更に大きく木霊を繰り返す。

「ファァッッツツツ！！」

アメリカの暴走族が乗っていそうな、反り返った長いハンドル。

大きな車体には、大きなシートが設置され、太いマフラーから劇音を鳴り響かせていた。

空から降ってきた、大型バイク。

それに跨る体格のいい男。

緑色の爬虫類のような肌。

それに胸や肩、腕や足には鋼色の黒いプロテクター。

その一つ一つが生き物のようで生き物ではなく、生物と物質の中間に産まれて来たかのような姿をしていた。

それは紛れも無く……

「つ……九十九神！」

空から降ってきたバイクに跨る男を見て、虎二が走りだす。

しかし、虎二が迷わず取った行動は、闘争ではなく逃亡。

目の前に現れた九十九神に、クルリと背を向けた虎二は、一目散に空き地の外を目指して走り出していた。

そして針金作りの柵を飛び越え、路地の影に消えていった。

「ほほう、あの忍、考えているのぉ～」

「何がだ？」

「目の前に九十九神が二体そろうたのを見るやいなや、その場を後にしおったわい」

「だから、それが如何した？」

「九十九神同士が顔を合わせればやることはひとつじゃ。
それは殺し合いの喰らい合い。
おそらくあの忍は、わらわ達の決着が付いたら、生き残った方とやり合うつもりじゃ」

「なるほど……」

タケシと春婆怒が、一つの体の中で会話を繰り広げる。

「ミーは、運がいいデース、ラッキーデース」

箪笥御前が甲高い声ではしゃぐ。

「九十九神として覚醒した日に、ベストなパートナーに出会い、そして覚醒した日に、最高のディナーに、九十九神を喰らえるとはナイスデース。とっても運がいいデース！」

タケシは、妖力共有の影響でグレードアップしたバイクから降りた。

そしてチラリと路地の方を見ると、先程逃げた忍者が、建物の影からチラチラとこちらの様子を伺っているのを確認した。

「ふっ」

タケシは、軽く鼻で笑うと、物影に隠れている忍者に背を向け、目の前の奇怪な九十九神を睨みつけた。

「……あなたは？」

九十九神から聞こえる少年の声。

少年は、突如現れたタケシに何者かと問うが、問われたタケシは回答では返さなかった。

「お前、人を、人間を殺しただろ……、しかも何人も」

タケシは、少年の質問を無視して、自分が質問を始めた。

「人?、殺した?……。違いますよ、何言ってるんですか」

河本少年は、タケシの問いかけを否定した。

「殺した訳じゃないですよ、あれは整理したんですよ。この世界に要らない人間、邪魔な人間達を整理しただけですよ。もう、いやだな~、僕がした行動は、正義の代行です」

タケシの拳が強く握り締められる。少年のセリフを聞き終わる頃には、強く握り締められた拳はプルプルと震えていた。

「何人食ったかしらねえが、もうそこまでだ。その腐った根性、叩き治してやるぜ!」

「ファッツ?、こいつ何言ってるのですか?。ユー、やっちゃいなよ!!」

「うん、そうだね、こいつも整理しちゃおうよ。僕ら正義の前には敵はいないからね」

箪笥御前が、その巨体で一歩を踏み出した瞬間である。

それに合わせて、タケシがダッシュした。

一瞬で箪笥御前の目の前に移動したタケシは、大きく拳を振りかぶっていた。

「なんと!」

箪笥御前が、タケシの行動に反応した時には振り上げられた拳は、箪笥御前の顔面に叩き込まれていた。

「ふぅぎゃゃゃゃゃゃ！」

悲鳴を上げながら、箪笥御前の巨体が後方に吹っ飛び、ビルの壁に激突して止まった。

「なめたことばかり、ぬかしてるんじゃあねうぞ！」

<　タンス・参　>

ビルの壁に寄りかかりながら立ち上がる箪笥御前に、指をポキポキ鳴らすタケシが睨みを利かせる。

そして今度はゆっくり間合いを詰め始めた。

「むむむ！、ならばこれだ、超次元収納オーーープン！」

「ん？」

奇怪にも開かれた箪笥御前の上半身。

そこにあるものは、底無しの暗黒。

その中で何かが蠢き、今にも入り口から這い出ようとしていた。

「なんだ？」

そして何かか出てくる。

暗黒の中から出てきたものは人影。

背を丸めて穴をくぐり抜けてきた人影は、次々と一列になって這い出てくる。

その数は四体。

「なんだ、こいつら？」

「こやつら、見たことがあるのぅ」

箪笥御前の胸の扉から出てきた四つの人影は、二人の間を遮る様に横一列に並ぶ。

その四つの影は、服装の乱れた不良少年達。四人の内三人が額にバンソーコーを張っていた。

「こいつら、確かコンビニの前で……」

四人の顔を見たタケシも、出合ったことがある連中だと気付く。だがその顔は、タケシの記憶に残っている表情とは大分異なっていた。

生気の失せた青白い顔つき。気力無く立つ姿。

まるで映画に出てくるゾンビのように見えた。

「ユー達、やっちゃいなよ！」

彼らが出てきた胸の扉を閉めると、箪笥御前がそう叫ぶ。すると四人の不良少年が、一斉に襲いかかった。

「おもしれぇ！」

無表情のまま襲いかかる不良少年たち。

それに対してタケシは、新しい玩具を貰った子供のような笑みで

迎え撃つ。

飛びかかる一番手の不良少年に対して、タケシが全力のフックを顔面に叩き込んだ。

不良少年は、風車の様に空中で回転し頭から地面に落ちた。

初めて出会った頃の彼らなら、派手に仲間が殴り倒されれば、一瞬で戦意喪失していたはずだろう。

だが、今回の彼らは、その光景を見ても怯む事無く倒れた仲間を飛び越えてくる。

「せや！」

横たわる仲間を飛び越えた不良少年の一人を、タケシが上段足刀を繰り出し、空中で捕らえた。

そして高く上げた足を引き戻すと、空中で止められた不良少年が、先に倒れていた仲間の上へと、おおいかぶさる様に倒れこむ。

「んん」

タケシは、首を左右にふって確認した。

いつの間にか残りの二人が、タケシを挟むように左右にわかれて陣形を取っていた。

「挟み撃ちか」

そして、二人の不良少年は、互いタイミングを合わせてタケシに向かって走り出す。

方や拳を振り上げ、方や飛び蹴りを放たんと跳躍を行なう不良少年二人。

一方、其れを待ち受けるタケシは構えを取らず、両手を下げた自然体で立っていた。

二人の攻撃が、タケシの頭部を狙う。しかしタケシは、どちらの不良少年の方も見ずに静かにそれらを待った。

そして不良少年のパンチと飛び蹴りが、タケシの頭部に当たると思われた瞬間、二人の前からタケシの姿が消えた。

「ソリャ、ソリャ」

タケシの声が聞こえた瞬間、二人の不良少年の首筋に蹴りが降ってくる。

それは上空から槍が降って来たかの如く、連続して放たれた足刀であった。

そしてよろめく二人の間に、彼らの頭よりも高く跳躍していたタケシが着地した。

更にタケシは、間髪いれずに一人の不良少年を、強烈な上段廻し蹴りでなぎ倒す。

蹴りを喰らった少年は、左頬から地面に激突すると、勢いあまっ

た両脚が高く跳ね上がり空中で逆さまになった後に倒れこむ。しゃちほこの様だった。

続いてタケシが後ろに残る不良少年に対して、振り向きざまの裏拳を疾風の如くコメカミに叩き込む。

裏拳を喰らった不良少年は、トルネードの様に錐揉みしながら飛んで行くと、地面に転がりながら倒れこんだ。

タケシの圧勝。

「御前様……」

タケシの瞬殺劇を始めて目の当たりにした河本少年が、あとずさりしながら気弱な声をもらす。

当然である。今までの人生でイジメられることはあっても、殴り合いのケンカすらした事が無く、それどころかリアルで行われる殴り合いのケンカすら見たことがない少年だ。

そんな彼には、あまりにも衝撃的な光景。あまりにも壮絶で、現実的暴力だった。

「心配ないデース」

箪笥御前の甲高い声に、タケシもそちらに視線を向けた。

その時である。

タケシの片足を倒れていた不良少年の一人が、ガッシリと掴んだ

のであった。

「ん？」

しかし、掴まれた自分の足を見たタケシは、片方の足を振り上げた。そして容赦なく掴んだ不良少年の腕に踵を叩き落した。

骨の折れる鈍い音が響く。

足を掴んでいた不良少年の腕が、大きな音を立ててへし曲がった。

しかし、間接じゃないところが曲がったにも拘らず、不良少年は掴んだ手を離しただけで、悲鳴を上げるどころか顔色ひとつ変えなかった。

タケシの眉間に皺が寄る。

そしてタケシは、後ろ向きに歩きながら倒れている不良少年達との間合いを取り始めた。

<　タンス・四　>

倒れていた四人の不良少年がユラユラと立ち上がってきた。

本来ならタケシの放った攻撃は、まともに喰らえば起き上がるどころか、数日は動けなくなるほどの技の数々。

当たりところが悪く下手をすれば、ぽっくりと行ってしまっても可笑しくない筈のダメージである。

とてもじゃないが普通の不良少年が耐えられる代物ではない。

「春婆怒、こいつらどうなってるんだ？」

「こ奴らは、ただの死人（しびと）じゃ」

「死人？」

「あの九十九神に魂だけを食われた、哀れな骸よぉ。死しても九十九神の駒として操られておるのじゃ。あれもまた使い魔の一種よのぉ」

「反吐が出そうな話だな」

ゾンビの様に立ち上がった不良少年達を見ながら、二人はそう会話をしていた。

そのタケシの声には怒りの感情がはっきりと混ざっている。

「じゃあ、手足の骨を全部へし折って、動けなくするか」

「否、わらわを使え。わらわが浄化してやるわい」

「浄化？」

「あのような哀れなやからを、御主はほっとけるのかぇ？。わらわなら容易く浄化できるぞょ」

「……」

タケシは少し悩んだ。

だが、哀れな四人の姿を見て決心した。

「おう、ハルバード・ウェポンモード！」

何時もなら素手で戦い、武器の使用を好まないタケシ。しかし今回ばかりは春婆怒の提案を素直に受け入れた。

そして目の前に現れた鉄の長槍を片手で掴むと可憐に演舞を行なう。

「今、楽にしてやる……」

タケシは悲しげな声でそう言うと、手にした槍の刀身が月光を浴びて輝く。

起き上がった四人の青白い顔に、刀身の輝きが眩しく映った。

タケシは、長槍を脇の下に挟み大きく足を開いた構えで、不良少年達を鋭い眼光で睨む。

ゾンビの様にゆっくりと歩いていた不良少年が、一斉に走り出す。

きたる、第二ラウンド開始。

走り込んで来る二人の不良少年達が、ジャンプをして飛び掛ってくる。

それに対してタケシは、長槍を横向きに構えた。

「疾風防壁！」

タケシが、振りかぶった長槍を横一線に振るうと、緑色の妖気で着色された風が吹き上がる。

その緑色の風が、二メートル四方の壁へと変わる。

ジャンプをした二人の不良少年は、その壁に激突すると強風に吹き飛ばされ地上にいる二人の頭の上を越えて飛んでいく。

残りの二人は、目の前に現れた風の壁を回避する様に左右に別れて回り込む。

だが、一人が風の壁を回り込んだ瞬間、その胸元にタケシの長槍がザクリと音を立てて突き刺さった。刺された不良少年の動きが、それで止まった。

もう一人の不良少年は、タケシが背にした方から回り込んでくる。

タケシが不良少年の胸元に刺さった槍先を引き抜き、クルリと振り向きざまの鋭い一撃で、背後から回りこんで来た不良少年の喉仏をサクッと切り裂いた。

胸を指された不良少年と、喉を切られた不良少年の傷口からは一滴たりとも血は出なかった。

だが、二人は力なく膝から崩れ落ちた。

そして倒れこむ途中で、蒸発する様に白い霧となって天へと消えて行く。

「これが浄化か……」

「ほれほれ、まだ二人残っておるぞぉよ」

消え行く二人の不良少年を見送りながら、春婆怒がそう言った。

風の壁に激突して吹き飛ばされていた二人の不良少年が、何時の間にか立ち上がりタケシ目掛けて再度走り出していた。

タケシは、その一人の腹部を槍で串刺しにすると、鰹の一本釣りの様に持ち上げ後方に勢い良く投げ捨てた。

投げ捨てられた不良少年は、タケシに見送られながら空中で霧となって消えて行った。

タケシは、最後の一人に背を向けたまま可憐に槍を振り回す。

そのタケシに背後から、最後の一人となった不良少年が飛び掛る。

そしてタケシは、槍を逆手に持ち替え、腰に有る鞘に刀を収めるかのようか動きで、脇の下から槍先を後方に突き立てた。

槍が、不良少年ま胸に刺さる。脇の下から伝わる感触が、それを報せていた。

「ああ、最後の一人も殺られちゃったよ、御前様……」

タケシに後ろから襲い掛かろうとした最後の一人が、タケシの脇の下から飛び出た槍に串刺しにされていた。

最後に残った不良少年は、やがて霧となって消えていく。

しかし消えるその瞬間まで、タケシに両手で掴み掛かろうとしていた。

まるでその伸ばした両手は、タケシに助けを求めている様にも見えた。

四人の不良少年全員が、槍の姿をした春婆怒に浄化されて消えた。

残ったタケシが、春婆怒を逆手のまま脇の下に挟み立ち尽くしていた。

タケシが、箪笥御前を横目で睨む。

「何時までもいいきになって！、高みの見物をしゃれこんでるんじゃあ～ねーーーーーーーーーーぞ！！」

タケシは、怒号と共に槍を振り回すと、その槍先に緑色の妖風が集まってくる。

「喰らえ、烈風槍飛弾！」

タケシと四人の不良少年達との戦いを、遠く離れたビルの壁際で見ていた箪笥御前。

タケシは、槍先に集めた妖気の塊を、その箪笥御前に投げ放つ。

槍先を離れた妖気の塊は、渦を巻きながらドリルの様に螺旋を描き勢い良く飛んでいく。

「御前様！」

「ノォー！。超次元収納オープン！」

自分に向かって飛んでくる風の弾丸ドリル。

箪笥御前は、慌てて胸の扉を開いた。

直撃の筈の弾丸は、開かれた胸の扉の中へと吸い込まれるように消えて行くと、慌てふためいていた二人は、ぽっと胸を撫で下ろした。

「こしゃくな術を使いよるのぉ」

春婆怒の悪態と共にタケシが箪笥御前に向かって走り出した。

飛び道具が効かないのなら、直接叩く作戦に変更したからだ。

だが、箪笥御前もその行動を黙って見ている訳ではなかった。

開いた胸から太い木の蔓を伸ばし出すと、鞭の様に振るいタケシに襲い掛かる。

カウンター。

縦に振り下ろされた木の蔓。タケシは、豪快に槍を横振りして蔓を切り落とす。

切り落とされた木の蔓は、地面に落ちた後もピチピチと魚の様に跳ね回る。まるで蜥蜴の尻尾であった。

木の蔓を切り落としたタケシは、尚も箪笥御前に詰め寄ろうと前へと進む。

しかし箪笥御前は、短くなった木の蔓を体内から更に伸ばして、タケシの進行を阻止しようと追撃を繰り返す。

その一撃一撃に対してタケシは、幾度も槍を振るいザクザクと更に切り落としながら少しずつ前に進んでいった。

「御前様！」

動揺した河本少年の声。その心配の矛先は、目の前まで詰め寄ってきたタケシの存在である。

もう既にタケシの振るう槍は、ビルの壁際に居る箪笥御前に届きそうな距離まで迫っていた。

「追い詰めたぞ、こんにゃろう！」

タケシの槍が、もう届く間合いに入る。

「突いてダメなら、切ってみな、てか！」

タケシは、追い詰めた箪笥御前に対して、槍を横に振るい攻撃を繰り出す。

そして、刀身が箪笥御前の体を捉えた。

槍の斧の部分が箪笥御前の肘の辺りから横に切り裂いていく。

すると槍の刃先の部分が、箪笥御前の体と一緒に後ろのビルの壁を、音を立てながら切り裂いていく。

箪笥御前の両腕が地面に落ちた。

それに続いて上半身が、地面にボトリと落ちた。真っ二つである。

「どうだぁ！」

無残な箪笥御前の姿を見てタケシが勝利の声を上げた。

「先走るなやタケシ、良く見てみぃ」

しかし何やら春婆怒が口を挟んできた。春婆怒に促され箪笥御前の死体を確認するタケシ。

「なんだこりゃ！」

その目に入ってきたのは、真っ二つになった見知らぬ作業着を着た小柄な老人の遺体だった。

「変わり身の術じゃ。またしても下らん術で他人の骸を粗末に扱い追って……」

「あの野郎！」

タケシは、箪笥御前に対して更なる怒りを抱く。

<　タンス・五　>

「でっ、あいつは何処逃げやがった!?」

「壁の向こうじゃ。すり抜けていったわい」

「逃がすか!」

タケシは、自分が付けた一文字の傷の残る壁に向かって怒鳴った。

その頃、壁の向こう側では、その場からそそくさと逃げ出そうと、箪笥御前と河本少年は目論んでいた。

「御前様、あいつ強いよ!」

「確かにデンジャラスなエネミーデース。ここは先ず一回引いて、クールに作戦を考えるネー」

箪笥御前達が壁をすり抜けて逃げ込んだビルの室内。

天上までは三メートルぐらいの高さがあり、所々にコンクリートの太く四角い柱があるだけのやや広めの室内だった。

ここは、元スーパーマーケットで、今は倒産して空きテナントになっていたる。

箪笥御前達は、その室内を反対側の壁を目指して逃げ進む。

その時、無理やりにコンクリートを切り裂く強烈な音が三度響い

た。

逃げる箪笥御前の後方で、彼らがすり抜けて来た壁が、縦長に二太刀、横に一太刀と切りつけられた。

「あいつら、追ってくるのか！？」

箪笥御前達が音に振り返ると、壁には扉の形に四角く刻まれた傷跡が出来ていた。

おそらく壁の向こう側からタケシが、この部屋に侵入するために槍で切り裂いたのだろう。

箪笥御前達はそれを見て足を止めた。

その瞬間である。

「うぁ！」

切り刻まれた壁がダイナマイトで爆破されたかの如く吹き飛ぶ。

室内にコンクリートの破片が飛び散ると、それに驚き思わず河本少年が情けない声を上げた。

壁に出来た大きな穴。

最初に切り付けた形とは、まったく異なる丸い大穴が開いていた。

その向こうにがに股で大きく腰を落としたタケシの姿があった。

鍛え、極められた正拳を突き伸ばし、外から入ってくる明かりに長い影を映していた。

今の爆発は、この正拳付き一発の衝撃なのだろう。

「ごぉらぁぁぁ、どこ行くんだ！」

タケシの声が、空きテナントの中に響く。その声に怒りがはっきり混ざっていた。

「何で、何時もそうなんだ……、何時も、何時も……。僕は何もしてないのに、何も悪いことしてないのに、皆は苛めるんだ……」

逃げるのをやめた九十九神の中から聞こえる震えた弱々しい声。河本少年の声。

その震える声には、怒りや憎しみの感情と、悲しみと屈辱の感情が、混沌として混ざり合っていた。

正拳付きで開けた穴をくぐって、タケシも室内に入って来る。

タケシが光を背に進む。

その姿、その歩み。

その一歩一歩が、堂々と、自信の満ちたものであった。

タケシの姿を見る河本少年には、それが自分を追い詰めている姿に見えた。

その姿が、恐怖の対象に見え。

その自信が、羨ましく見えた。

その存在が、自分と対極に見えた。

「僕は悪を許さない。だから僕は正すんだ。
正義の力で、悪を整理するんだ！。世界を整理するんだ！！。」

強く叫ぶ少年。だが、河本少年の心は追い詰められていた。

「お前は、確かに何もしなかった、悪いことなんてしなかった」

タケシが言い切る。

タケシには、箪笥御前の中にいる少年の姿が見えたような気がした。

彼の今まで歩んできた人生ごと見えたような気がした。

「だからイジメられたんだよ」

タケシには、そう見えた。

「何もしてない僕が悪いって言うのか！！」

タケシの言葉に河本少年が、今まで以上に声を張り上げる。

「苛められても反撃しない、苛められてもただ耐えるだけの僕が悪いって言うのか！、反論することすら出来なかった弱い僕が悪いの

か！。ふざけるな、ふざけるな、ふざけるなァァァ！！」

河本少年の語るように、弱いは罪なのか？。

怒鳴り散らす九十九神と融合した河本少年を、タケシは黙って見ていた。

「それが、それがぁ、そんなのが正しい世界だと呼ぶのなら、僕が正義の味方になって正して何が悪い！！」

「やっぱり、お前は気づいてねーんだな……」

「何にを！？」

タケシの台詞に、興奮していた河本少年も興味を持ったのか耳を傾ける。

「お前は確かに何もしていない、悪いことなんかしていなかったんだろうよ」

タケシは、彼の日常など知らない。

だが、彼の思いが何故か伝わってきていた。

「だがよ、お前は何が、ひとつでもいい事をしたのか？」

「えっ……？」

河本少年の中で、何かが静止したような気がした。

「お前は他人の為になることをした事があるのか?。他人を思いやり、やさしく接したことがあるのか?」

タケシの言葉に河本少年は、返す言葉を見失う。

「……」

「誰かの為に何かしたことがあるのか?」

河本少年は記憶を辿り、心の奥を辿る。

「ぁぁ……」

無い。

そんなこと、したことが無い。

「そんなお前の正義は、誰の心にも響かない。誰の思いにも届かない」

今気付く。

タケシの言葉に気付かされる。

他人に優しくしたことは無い、何時も一人だったから。

自分が他人の事を気遣う事がないのだ、他人が自分を気遣ってくれ訳がない。

自分が誰かの味方をしないのだ、誰も自分を味方なんてしてくれ

る筈が無い。。

自分が誰にも手を差し伸べないのだから、誰が自分に手を差し伸べるのであろう。

「そろそろ終わりにしようぜ」

タケシが手にある槍を逆手に持ち替えた。

そして槍投げの構えで振りかぶり、そのまま箪笥御前目掛けて投げつける。

「影槍束縛！」

「超次元収納オープン！」

タケシの放った影の槍。それを箪笥御前は、胸の異次元扉を開いて待ち構えた。

何時ものパターン。だが、真っ直ぐ飛んできた影の槍は、箪笥御前の胸の異次元に吸い込まれる寸前で軌道を変えると、箪笥御前の片脚へと突き刺さった。

「あぁ！、シィッツ！、うご……け……ないデース……！！」

「同じ手が、何時までも通じると思もわぬ方がいいぞょ」

影の槍が片脚に刺さった箪笥御前は、胸の扉を開いたままの姿で動けなくなっていた。

タケシの力強い言葉が響く。

「我が力は、日々鍛えし試練の証！」

タケシは、横向きに構えると大きく開いた構えで、ゆっくりと腰を落とし始めた。

「我が技は、心に刻みし苦行の結晶！」

そしてタケシの周りを、緑色の妖気が混ざった風が激しく渦を巻き始めた。

その風が、空きテナントの何も無い室内を、台風が直撃したかの如く激しく揺らす。

「力と技で、今日の自分を越えていく！」

緑色の嵐を纏ったまま、タケシは、箪笥御前目掛けて走り出す。真っ直ぐにだ。

「跳うっ！」

箪笥御前目掛けてジャンプをして。そして、飛び蹴りの構えのまま突っ込んでいった。

「堂本流超人空手奥義、風神飛翔脚！！」

渦巻く緑の嵐を纏ったタケシ。その会心の一撃が、箪笥御前目掛けて低空飛行で突き進む。

「今日のミーはラッキーデース！。体は動かないが胸の超次元収納はオープンしたまま！。正面からのアタックはオールカモーンねー！！」

甲高い声でしゃべる箪笥御前。体は麻痺して動かないが、達者な口だけは動くようだ。

そして箪笥御前が言うとおり、開いたままの胸の異次元扉。

だが、箪笥御前の期待どおりには、話は進まなかった。

「同じ事を何度も言わせるでないぞょ。同じ手は何度も通じぬは」

強烈な渦巻きと共に突っ込んでくるタケシの飛び蹴りは、箪笥御前の横を通り過ぎて行く。

そして、しばらくしてUターンすると、箪笥御前の背中を目指して戻って来た。

「ノーーー！、バックからとは卑怯デーーン！！」

「喰らえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

タケシの飛び蹴りが、箪笥御前の後頭部に直撃した。おもいっきり蹴り倒す。

だが、タケシの進行はそれでも止まらずに、箪笥御前をなぎ倒した後も突き進む。

背後から必殺の一撃を喰らった箪笥御前が、爆発する音が聴こえ

てきた。

タケシは、勢いあまって自分が開けた壁の穴から、外の空き地に飛び出てやっと止まった。

そしてビルを背にしていたタケシに向かって、壁の穴から箪笥御前の爆発した炎が噴出し、タケシの甲冑へと吸いこまれて行く。

それが意味するものは……。

決着。

誰かが、手を叩く音が空き地に響く。

「お見事、やっぱり残ったのはあんたか」

パチパチと手を叩いて姿を現す黒装束の男。

あの革ジャンを着た忍者である。

<　タンス・六　>

更にもう一人居る。

それは猫田龍信。革ジャン忍者の虎二の兄である。

同じく忍者風貌、グレイのスーツにミスマッチな黒覆面、背中には刀を背負っていた。

「むむ、これは誤算じゃ……」

二人目の忍者を見て、春婆怒がそう言った。

「何がだ？」

「この忍び達決行できるぞぃ。あの九十九神相手に少々妖力を使いすぎたわい。これ以上の戦いは妖力が持たなくなるぞぃ」

必殺の一撃に使った妖力と、四人の不良少年の浄化。

この二つの術が、大きく春婆怒の妖力を消費させた原因であった。

特に浄化は見た目には地味だが、あれで結構コストが高い。

「ここは一旦退くか、目的の九十九神も倒したしな」

「おっとそうはいかねーぞ」

そう言って詰め寄る革ジャン忍者。

虎二の目論見。

自分の兄は現場に到着したが、処理班の連中はまだ到着していない。

最初に現れた九十九神は既に倒された。しかし九十九神は、もう一体いる。

これはチャンス。

この九十九神を倒してしまえば、手柄が立てられる。

それに今度は兄の龍信もいる。負けることも、逃がすことも有り得ない。確実に討ち取れる。

「俺は勝負事から逃げたことが無かった……、つい最近までの話だがな……」

「？」

二人の忍者が、何を言い出すのかと目の前の九十九神を見つめる。

「そっちのスーツの忍者が教えてくれたんだよ。引くのもまた大事ってな」

虎二が、隣にいる兄の覆面で隠された顔を見た。

龍信は、何がといった顔で自分を指差す。

「妖力共有で春婆怒から貰った槍術や妖術の記憶の数々。その中からこんな術を使うとは思ってなかったが……」

タケシは手の平を開き、両腕を左右に大きく広げた。そして二つの手の平に緑色の妖風が集まり始める。

二人の忍者兄弟は、それを見て何かの攻撃を仕掛けられるのかと身構えた。

タケシが二人に向かって走り出す。

「行くぜ～、疾風ネコだまし！」

そう叫びながらタケシは、妖風の集まった両手を叩く。

「「にゃ！」」

手の隙間から空気が破裂すると、弾ける音と共に勢い良く風が飛び散った。

二人の忍者は、その風に驚き一瞬だが目を瞑る。

一方のセコイ技を使ったタケシは、その隙にダッシュで空き地の外へと走り出していた。

二人の忍者が目を開けた時には、タケシの背中は遠くに行ってしまっていた。

「あ！、まてこら！！」

タケシの逃走に気付いた虎二がすぐさま追いかける。

だが針金の柵を飛び越えたタケシの元に、無人のまま大型バイクが走りよってきた。

「ああ、なんでバイクが！」

タケシは、その大型バイクに跨り一目散に走り去っていった。

轟音を立てて走り出したバイクを、二人の忍者兄弟は走って追いかける。

しかし妖怪とて走って追いつけるスピードでは到底なかった。

そのままタケシの乗ったバイクは、深夜の闇を切り裂きながら走りつづけ、二人の忍者から軽々と距離を遠ざけていった。

そしてバイクの音が、二人の忍者に届かなくなるまで大差時間はかからなかった。

虎二がちらりと兄を見ると、そして目論んだ。

「兄貴……、駄目じゃん、また九十九神を逃がしちゃあ」

「またって！えっ、俺が原因！！」

虎二の目論見。それは責任転換……。

<　少年A　>

真っ暗な室内。

先程まで二体の九十九神が戦っていた、広い空テナントルーム。

壁に大きな穴が一つ開き、そこから僅かな光が入ってくる。

その広い室内のほぼ中央に、一人の少年が女の子座りでペタリと力なく座っていた。

周りには、先程まで少年と妖力共有をおこなっていた、九十九神の木片が散らばっていた。

そして少年は、側に落ちている木片を一つ拾い上げると、じっとそれを見つめる。

「僕は……、いったい何をしていたんだろう……」

後悔を口にした少年は、見つめていた木片を力なく投げ捨てた。

放り投げられた木片は、コンクリートの床を何度か跳ねて、乾いた音を響かせた。

そして少年は思い出す。

「おとうさん……ごめんなさい……ご……ん……なさぃぃ……」

自分が住んでいたマンションでの記憶。

箪笥御前に唆されたとはいえ、実の父親を手にかけている。

「おとうさん……」

少年は思い出す。まだ自分が幼い頃の優しかった父と母の笑顔を。

それが壊れて行ったのは、時代の責任と決め付けていた。まさに責任転嫁だ。

父がリストラされて、酒に溺れて、そんな父に母親は愛想をつかして、男を作り家を出て行った。

少年は、ただそれを見ているだけだった。

あの九十九神の使い手が言ったとおり、少年は何もしなかった。

良い事も、悪い事も、ただ見ているだけだった。

もしもあの時、父がリストラされて落ち込んでいる時に、自分が父の力に慣れていれば。

否、力に慣れなくても、優しく接する事ぐらい出来ていれば、励ます言葉ぐらいかけられていれば。

気付かされた少年は、ただ悔やむのみであった。

「観自在菩薩　行深般若波羅蜜多時　照見五蘊皆空」

「！！」

「度一切苦厄　舎利子　色不異空　空不異色　色即是空」

突如聴こえてきた御経に、少年は背筋を伸ばしながら驚く。そして脅えながら周りをキョロキョロと確認した。

「空即是色　受想行識亦復如是　舎利子　是諸法空相」

その御経が怪しくも室内に響き渡る中、少年は警戒しながらゆっくりと立ち上がった。

「不生不滅　不垢不浄　不増不減　是故空中」

御経は、一人の声ではなかった。室内の四方八方から聴こえて来る。

少年が周りを警戒していると、その御経を唱えている者達が、一人、また一人と姿を現し始めた。

「無色　無受想行識　無眼耳鼻舌身意　無色声香味触法」

室内の幾つか在る四角いコンクリートの柱、その影から現れた複数の僧侶達。

藁で編まれた傘を頭に被り、手には錫杖を持っている。

その錫杖で地面を突いて、ガシャンガシャンと音を立てながら、御経を高々に唱えていた。

「無眼界　乃至無意識界　無無明亦　無無明尽」

僧侶の数は七人。

巨漢、痩せ型、小柄など様々、男だけではなく髪の長い女性も混ざっていた。

「乃至無老死　亦無老死尽　無苦集滅道　無智亦無得」

「な……何なんだ……」

「以無所得故　菩提薩　依般若波羅蜜多故」

少年が気付いた時には、七人の僧侶達に囲まれていた。

少年は、恐る恐る傘の下をのぞき見る。

だが、僧侶達の顔は、全員が青白い顔で白目をむいており、明らかに普通ではない表情で御経を唱えていた。

僧侶というよりも死霊といった形相に、少年は身を強張らせる。

「心無礙　無礙故　無有恐怖　遠離一切顛倒夢想」

七人の御経が、空きテナント内に響き続ける。

その不気味さに、少年は危機感を強く感じた。

だが、既に囲まれている少年には逃げ場がない。

そんな硬直状態が続いている中、僧侶達の間から一人の男性が現

れた。

暗闇から僧侶達の円に入ってきたスーツ姿の男。

その顔に少年は見覚えがあった。

短めの黒髪、きりっとした眉毛に誠実そうな視線。

間違いない、この人物は……。

「あなたは……、森先生！」

影が薄く、学校では苛められるか、無視されるかのどちらかであった河本少年。

その存在を、唯一気使ってくれた先生。

教師の森。

「なんで、こんな所に先生が……」

「すまない……」

少年は、自分に唯一味方してくれた教師が現れたのにもかかわらず、不安という感情が消えなかった。

それよりも、今ここで、この教師が姿を現したことによって、更なる不安がこみ上げていった。

「すまない、今は君が通う高校の教師、森一郎としてここに来たわ

けじゃないんだ」

きりっとした誠実そうな顔が、悲しげに曇る。

何処からともなく「コーーンっ」と狐が鳴くような声が、尚も続く僧侶達の御経を割って響きわたった。

そして、森の背後から黄色く輝く長い狐の尻尾が一本現れる。

その尻尾の先には、黒い漆塗りの鞘に収まった、一本の日本刀が巻きつくように持たれていた。

「今日ここには、妖怪連合虎野町市支部・処理班筆頭役・八尾　弦徳として……参上つかまつった」

「えっ、えっ？」

河本少年は混乱していた。自分が知っている学校の教師ではなく、訳の分らない役職を口にした上に、何故か時代かかった異なる名前を名乗る教師に。

しかも、その人物には輝く狐の尻尾があり、その尻尾は日本刀を器用に持っていた。

「すまない、君を……始末する……」

森、否、八尾弦徳はそう言うと、尻尾から日本刀を受け取り腰に添えた。

「先生……何を言っているんですか……」

八尾弦徳は、ゆっくりと腰を落とし始めた。

その構えは居合い抜き、抜刀術の姿勢。

だが、河本少年までは五メートル以上の距離がある。

「廃字刀苦羅々……」

抜刀術とはいえ、刃が届く間合いではない。

それでも仕掛けた。

「閃光斬激！」

腰にある日本刀が、目にも留まらぬ速さで引き抜かれた。

すると剣先から、一本のレーザー光線が放たれる。

居合い抜き特有の太刀筋。

斜め下から、斜め上へ。

その光は、河本少年の右わき腹から左肩へと、一瞬でなぞった。

「！」

少年は、痛みを感じなかった。

だが、光がなぞって行った部分から、凄い勢いで血飛沫が吹き出

す。

少年は、その噴出す自分の大量の血を見て困惑した。死ぬと。

「せ……ん……せい……」

少年は、体から吹き出る自分の血液を見ながら、寒気がやって来るのを感じた。

そして自分を切った男に対して、泣きそうな表情で手を伸ばしながら助けを求める。

「廃字刀苦羅々・追加閃光斬激！」

八尾弦徳は、振り上げた切っ先を手首で返すと、次なる袈裟切りを放つ。

今度は、斜め上から斜め下への太刀筋。

そのモーションに合わせ再び放たれるレーザー光線が、血が吹き出る少年の傷口をもう一度なぞった。

二度目の光を浴びた少年は、ピタリと動きを止めた。

静止した少年の瞳には、既に生命の光は失せていた。

そして切られた斜めの傷口から、少年の体がズルズル斜めに滑り、無残にも床に落ちると、しばらくして残された下半身が、落ちた上半身の上へと倒れこむ。

「すまない……」

切り捨てた少年に詫びを述べる八尾弦徳は、抜いた刀を鞘に収めた。

そして未だ御経を唱える僧侶達の間を抜けて、暗闇を目指して進んでいく。

「後始末は任せた……」

暗闇の中に消えていく八尾弦徳がそう呟く。

すると御経を唱えるのを止めた僧侶達は、彼が姿を消すのを待たず、亡者の如く一斉に少年の遺体に群がって行った。

八尾弦徳は、その残酷な光景を避けるかの如く、闇の中へと消えていった。

<少年B>

次の日の早朝。

何時もならアパートの小さな庭で、タケシが朝稽古を始めている筈の時間であった。

しかし今日は、まだ起きて来ていない。

「タケシ先生、遅いな……」

アパートの前でカズマは、昨日の夜、公園の前で陽子から貰ったタケシのスケジュール表を片手に、タケシが出て来るのを待っていた。

だが、タケシは、昨晩の疲労の為、今日はまだ起きて来ていない。

七人のヤクザと戦い、その直後に箪笥の九十九神と戦った。

どちらも圧倒的勝利だったが、やはり妖力共有の疲労は残っているようだ。

もしも、春婆怒が作った覇王の腰巻(フィルターベルト)が無ければ、その疲労はもっと酷い事になっていたであろう。

タケシを待ち伏せしている少年は、待ちきれずに小走りでアパー

トの前を走り出した。

そしてアパートの横にある、桜木家私有の空手道場の前を横切る。すると知った人物が居た。

「あ、桜木先生、おはようございます」

「やは、カズマ君、おはよう」

カズマに挨拶を返したのは、道場主の桜木銀であった。

彼もまた早朝トレーニングの最中なのか、道場の玄関先で站椿の形を取っていた。

站椿に励む銀は、既にかなりの時間が経っているのか、着ている空手着からうっすらと湯気が立っていた。

「桜木先生、隣、いいですか？」

カズマは銀の返答を待たずに隣で站椿を始める。

「タケシ先生が、まだ起きて来ないんですよ」

銀の隣でカズマがそう言うと、銀は隣で站椿をするぐらいは良いかと思い拒否はしなかった。

そしてしばらくの間、二人は沈黙を守り站椿を続ける。

「なあ、カズマ君」

「はい、何ですか？」

先に口を開いたのは銀からだった。

二人は站椿を崩す事無く会話を始めた。

「ヤマメと呼ばれる魚を知っているかね？」

「ヤマメ……ですか？。あまり魚には興味が無くて知りませんが」

キョトンとした表情のカズマを余所に、銀は站椿のまま話を続けた。

「ヤマメって呼ばれる魚は、体調１３センチぐらいの川魚で、大きく成長しても２０センチぐらいにしか育たない魚なんだよ」

「はい……」

カズマは、いきなり川魚の話を始めたヒゲ面の銀を、幼さの残る顔でじっと見つめた。

武人の銀の話しだ、空手のためになるような話かと期待はしていた。

「でも彼らヤマメは、川の中での餌の取り合いが厳しくて、生まれた川を出て、危険が多いが餌の豊富な海へと出て行く者がいるのだよ」

「海へ、ですか……」

「そう、川では餌が少なくてね。餌の取り合いに負けた弱いヤマメ達は、飢えを避ける為に海を目指すのさ。」

ヤマメの話を続ける銀は、站椿を続けたまま、目の前にあるブロック塀を見ていた。

「そして海に出たヤマメは、二年ほどして生まれた川に出産の為に戻ってくるのですが、
川に残っていた強いヤマメは１３センチから２０センチぐらいにしか成長してないにもかかわらず、
海に出た弱いヤマメは４０センチ近くまでに成長して、
サクラマスという名前に替わって帰ってくるのですよ」

「４０センチですか！」

「ええ、もう見た目からして、同じ魚とは思えないほど成長してね」

「何で、そんなに大きく……？」

「それだけ海は餌が豊富という事なんだろうね」

「海……凄いですね」

「だがね、海に出た者全てが、生まれた川に戻って来る訳じゃないんだ」

銀の話すテンションが、深いものに変わる。

「海に出た弱いヤマメは、海に居る更に大きな魚などに食べられて、帰って来るのは、僅か一割」

「……九割は、食物連鎖の波に飲まれるのですね」

「ええ、そのとおり」

銀の顔を見ながら話を聴いていたカズマが、視線を銀と同じブロック塀に向けた。

何処にでもある普通の民家のブロック塀。二人はそのブロック塀を見ながら話を続けた。

「カズマ君、君はこの話を聞いてどう思う?」

この問いかけ。明らかにカズマを測るものであった。

自分をヤマメと例えて海に出たのなら、サクラマスという強い存在になって帰って来るかどうか?。

だが、この話の本筋はそこにはない。

生き残って帰ってきた1割のサクラマスと、生き残る事無く食物連鎖に飲まれていった9割のヤマメとの違い。

それに気付くか否かの問い。

運良く1割のヤマメが生き残った。残りの9割は運が無かった。

そう片付けてしまえば、それまでの話である。

だが生き残り、サクラマスへと替わる1割のヤマメは、本当に弱

くて、餌の競争率に負けたヤマメだったのだろうか?。

もしもそのヤマメが、餌の競争率に勝利していた強いヤマメで、もっと貪欲に多くの餌を求めて海に出て行っていたのならば。

弱い9割のヤマメ。

強い1割のヤマメ。

弱い者は死に、強い者が生き残ったのならば。

人間界でも、同じような事がある。

それは、戦争。

例えとして、アメリカが始めたベトナム戦争を上げよう。

その戦争には、多くのアメリカ人の若者が、志願兵として戦場に向かった。

これと似た状況は、さまざまな国で志願兵や民兵、更に徴兵やらで起きた事である。

戦争の訓練を受けていない市民が、戦場に立つ。

それは、運が良くなければ帰ってこないヤマメと一緒である。

だが、強いヤマメをこれに当てはめるならば、それは訓練されたプロの軍人。

プロの兵士として訓練を受けた者や、特殊部隊のエリート兵士は、作戦を成功させて帰ってくるのが当然。

ピンチになって、初めて戦場に立つ者と、最初から訓練を受けて戦場に立つプロ兵士。

素人兵士として戦場に立ち、運良く生き残って帰って来る者。

プロの兵士として作戦に参加し、運悪く死んで帰ってこれない者。

どちらが生き残って帰ってくる確立が高いかは、聞かずとも明白。

突然始まった運命的な戦いに生き残り、強く成長していく主人公の話は多くある。

だが、現実は、弱い者がいきなり過酷な状況に置かれれば、運が良くなくては生き残れない。

普段から、地道な努力を積んでいなければ、いざという時に間違いなく敗北するのが現実。

やれば出来る子は、普段からやるべき事を努力していないから、いざとなってから努力しても出来ないものである。

やれば出来る子の意味は、本気を出せば、いきなり本番が出来る子ではない。

その気になれば、練習がちゃんと出来る子のことである。

だが、普段から「この子はやれば出来る子なんだけどね」と言わ

れている子の多くが、そこを勘違いして受け止めていることが多い。

それにカズマが気付くかどうか、銀はそれが知りたかった。

この先、カズマがタケシの弟子として堂本流を学べば、間違いなく自分が歩んだ道と同じような道を歩むだろう。

それは闘争という、大きな海。

強くなければ生き残れない大海。

まさに修羅の道。

タケシに憧れ、強さに憧れ、憧れから夢を見る少年。

それがこの先、生き残っていけるか否かは、この回答しだいだと銀は思っていた。

「僕は……」

カズマが、銀の問いかけに答えようと口を開いた。

銀は、それに興味深く耳を傾ける。

「僕が、ヤマメなら海に出ても、サクラマスにはなりません」

「え～……？」

その答えを聞いた銀の顔が、がっかりとした表情に変わった。

「ヤマメのまま帰って来ると言うのかい？」

「いえ、違います。」

「？」

カズマの顔は、にこやかに笑っていた。

「だって、海で食物連鎖に勝ち残ってヤクラマスになれたとしても、生まれた川に戻って来たら、川の沖にはクマが待っているじゃないですか」

「くま……」

「だから僕は、サクラマスじゃなくて、僕はゴジラになって帰ってきます」

「はは……」

銀の口から小さな笑いが漏れた。

「はは、あはははは！」

その笑いは大きなものに変わり、やがて銀は站椿を崩して腹を抱えながら高笑いを続けた。

カズマは、そんな銀を見ながら尚も站椿を続けていた。

「ゴジラか、それはいいな」

笑い続けていた銀がそう言った。

自分の予想よりも面白い回答を述べた少年に、銀は思った。

この少年は、もしかしたら、自分が想像した以上に成長するのではないかと。

この少年は、もしかしたらダイヤの原石なのかもしれないと。

「お二人さん、おはよー」

いきなり現れた陽子が、二人に挨拶すると、早足で道場の前を通り過ぎてタケシのアパートを目指して走っていく。

「あ、陽子先生がタケシ先生を起こしにいったのかな。じゃあ、桜木先生、僕も行きますので」

「ああ、行ってらっしゃい」

銀は少年を見送った。そして、独り言を呟き始める。

「堂本流……、やはり強き者を引き寄せる何かがあるのかね、この流派には」

銀はそう言いながら早朝稽古を終えて、陽子が出てきた自宅へと目指して帰っていく。

<裸エプロン>

古びたアパートの一室。

カーテンの隙間から、木漏れ日の様に日差しが入ってくる。

煎餅の様に薄い布団に寝ているタケシは、一畳ていどの小さな台所から聞こえてくる音に目を覚ました。

「んん……？」

タケシは寝ぼけた頭を掻きながら、ぼやける目で音のする台所に目を細める。

「はる……ばど……か？」

台所に立つ人物は、お尻が隠れるほど長い蜂蜜色の髪を揺らしながら、フライパンで何かを炒めている。

春婆怒は食事を取らない。

理由は槍だから。

その春婆怒が、朝から料理をしている。

自分の朝食を作っているのかとタケシは思った。

「まさかね……」

今までの春婆怒なら、そんな事をする訳がない。

だが、現実に台所に立っているのは春婆怒だった。

スラリと伸びた美しい足を露出しながら料理をしている。

しかも裸で白いエプロンをしているだけだ。

タケシは、それでもあの春婆怒が、自分の為に料理を作るはずがないと思い、眠い目を擦る。

「まさか春婆怒が、裸で料理を作くって……えっ、裸エプロン！」

「おお、タケシや、目覚めたかへ」

「春婆怒、何してるんだ！！」

「見て分らぬか？」

「わかんねーよ！」

「見てのとおり、裸エプロンに挑戦しているのじゃ」

「ちょっとまて、せめてそこは、料理にチャレンジしてるとボケてくれ！」

「そういうものなのかぇ？」

「知るか、訊くな！。大体なんでそんな格好してるんだ！？」

「うむ、昨夜タケシが寝静まった頃にのぉ、暇だったから押入れの中を探索してみるとじゃ。そしたら隠すよう保存されていた不思議な書物を発見してのぉ」

そう言って春婆怒は、一枚しか身に着けてない白いエプロンの中から、タケシが隠して置いたエロ本を取り出す。

「表紙に『奥様の亭主元気で留守が良い。間男魔王編』と書いてあるが、わらわには意味が分からんのぉ。」

「分からなくていい！」

その時である、

ものすごい勢いでアパートの階段を駆け上ってくる足音。

タケシの脳裏に「まずい」という言葉が過ぎる。

しかし、ノックも無しにタケシの部屋の扉は開き、問答無用で室内に飛び込んでくる。

「タケちゃーーーん、おはよーーーーーー、朝御飯もってきたよーーーーん！」

「うほ、バットタイミング……」

タケシが両手で頭を抱える。

「おお、小娘や、おはよう」

ドアを開けてタケシの部屋に入った陽子の動きが止まった。

そして陽子はゆっくりと、錆び付いたブリキのオモチャの様に、ギコギコと音を立てながら春婆怒が居る右手に首だけを曲げていく。

「！！」

「まあ、落ち着け陽子……」

タケシが、前もって陽子を宥める。

「やーーりーーおーーんーーーなーーーー！！。何してるのよーーーーーーーー！！」

「裸エプロンに挑戦中じゃ」

「だから、そこは料理とボケろと……」

「なんで、そんな事を挑戦してんのよ！！」

「うむ、タケシがこの本を持っていてなぁ。それで裸エプロンとやらに挑戦する事にしたのじゃ」

例の本を見せる春婆怒。

「ターーーケーーーーちゃーーーんーーーーーー！！」

鬼の形相で陽子がタケシに詰め寄ると、タケシは怯えた子供の様に部屋の隅へと逃げて小さく縮まる。そして、ＤＶに怯えるかの様

に、膝を抱えながらガタガタと震え始めた。

「ご……誤解です……すべてが誤解です……」

「まあ、落ち着け小娘。わらわが拵えた料理でも食べて気を落ち着けなされぁ」

春婆怒は、そう言いながら二人の前に、先程までフライパンで炒めていた一品を皿に盛り付け差し出す。

「何これ……」

陽子の顔が、もろに気持ち悪いと表現していた。

「これかぇ、これは長屋の前に生えていた雑草と、拾ってきた鉄屑の炒め物じゃ」

「……食えねーよ。せめて鉱物は入れるなよ」

盛り付けられた料理を見て、タケシがそう言う。

「そうか……ならばもう一品あるぞよぉ」

「もう一品……」

そう言って焜炉に置いてある小さな鍋を持ってくる春婆怒。

臭いからして中身は、どうやら味噌汁か何からしい。

春婆怒は、それを二人の目の前まで持ってくると、鍋の蓋を開け

て中身を見せた。

「ぎぃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！」

二人が鍋の中身を覗き込み確認すると、陽子が断末魔のような悲鳴を上げて全力でタケシの部屋を飛び出していく。

「春婆怒……これは……」

「うむ、昨夜のぉ、長屋内で捕獲した昆虫の味噌汁だ」

鍋の中には、茶色い味噌汁に１５センチ程の大きがあるゴキブリがプカプカと浮いていた。

「いや……、ここはジャングルじゃないんだから、このサイズのゴキブリは生息してねーよ……」

「そうなのかぇ？。まあ、そんな事どうでも良いわぃ。タケちゃん、たーんとお食べ～」

台詞の後半は、陽子のマネをしているらしい。

「食えるか！」

「じゃあ、こっちは？」

春婆怒が、釘と雑草の炒め物を差し出す。

「だから鉱物なんぞ、人間は食べません！」

タケシが春婆怒を怒鳴り散らしていると、陽子が出ていた部屋の入り口から、カズマとバイクマンの二人が覗き込む。

「タケシ先生……そろそろロードワーク行きませんか……。あぁ～、すみません今取り込み中でしたね……また後で来ます」

大人の営み中と思ったカズマが、子供の癖に気をきかせる。

「やい少年、いきなり現れて、ガキのくせして要らぬ気を使うなよ……」

タケシは、これは誤解だと言いたいらしい。

「いゃ、でも……。子供の僕には刺激的過ぎる光景ですし……」

春婆怒の裸エプロンを見て、カズマが目線をそらしながら顔を赤らめている。

それとカズマの後に立つ人型モードのバイクマンもまた、何故か両手で顔を隠していた。

「おお、こやつがタケシに弟子入りしたと聞く小僧かぇ。わらわの名前は春子・ハルバードじゃ。今後ともよろしくたのむぞょ」

「は……はい、僕はカズマです。こちらこそよろしく願います」

カズマは、裸エプロンのままセクシーに歩み寄ってきた春婆怒に、赤面しながら挨拶を交わす。

まだまだこの少年には、刺激的な光景のようだ。

「どうじゃ、お近寄りの挨拶代わりに、わらわが拵えた手料理でも食べてみむかぇ？」

「じゃあ、少しだけ……」

春婆怒の差し出した雑草と鉄屑の炒め物に、カズマは照れながら手を伸ばす。

「えっ、マジ！。お前、それ食べれるの！」

「はい、男ですから。……もぐもぐもぐ」

「いや……、男とか関係ないと思うぞ……」

初めて見る女性の裸体を前に、緊張で何も見えなくなったカズマであった。

<裸エプロン　>（後書き）

次で第三話「タンス」終わりです＾＾

<　若　>

事件が発覚したのは、次の日である。

とある高校の教師三人と、生徒五人が登校してこなかった事から、周辺の者達が気付き始めた。

その日を境に消息を絶った八人に対して、学校や保護者達から捜索願が警察に届けられた。

唯一、捜索願を出していなかった保護者の元を警察が尋ねると、その保護者である父親の姿も無く、そこからその少年の近辺を調査したところ、バイト先のリサイクルショップの経営者も同日から消息を絶っていることが判明する。

それだけでは終わらず、彼と経営者が一緒に出かけた主張買取先の一家三人もまた行方不明となっており、その事が判明した段階で警察は、本腰をいれ集団失踪事件として捜査本部を立ち上げ、大捜索を開始した。

「八尾君、すまないね。今回の事件は大きさから、君の人間としての人生もまた、一旦中止させてもらったよ」

「僕も行方不明扱いですか……」

「ああ、その方が事を収めやすいとの判断からだよ」

「結構、森一郎としての教師生活は、気に入ってたんですがね。…

…残念です」

「まあ、そう言うな。ほとぼりが冷めたらまた、人としての生活を楽しめばいいさ。それまでは処理班の筆頭役に専念してもらうよ」

広い日本庭園が見える和室で、二人の男がお茶を飲みながら会話をしていた。

一人はスーツ姿の誠実そうな青年、森一郎こと、八尾弦徳。

もう一人は、この豪邸の家主、油儀裕次郎である。

「ところで逃げた方の九十九神は……」

八尾弦徳は、短めの七三ヘアーを片手でかき上げると、鋭い眼光を目の前の油義に向けた。

「猫田兄弟から受けた報告だと、九十九神が持っていたのは鉄の長槍。その先には槍刀と斧刃が付いていたらしいです。……おそらく春婆怒と見ていいでしょう」

油儀は、体に比べてやや大きめの頭を左右に小刻みに揺らしながら、そう八尾の質問に答えた。

そして手元にある湯飲みを見つめる八尾の顔を覗き込むと、八尾が何を考えているか表情から読み取る。

「……若、愚かな事を考えないで下され」

油儀は、目の前の男を八尾弦徳とは呼ばなかった。若、と呼んだ。

「はは、油儀会長……、何を言うんですか」

自分の顔を覗き込んでいる老人に、八尾は苦笑いで答える。

「お気持ちは察しますが春婆怒に関しては、この油儀に一任させてもらうと約束してくれましたよな」

「五百年も前の約束ですがね。私もまだ幼かった……」

「私にとってはたいした年月ではありません」

「……」

「このケジメ、我ら三本柱が、主（あるじ）であった奥方様に代わって付けさせてもいます」

何時も穏やかな表情の油儀が、冷たく残忍な表情に変わる。

その表情は、明らかに恨みと憎しみに満ちていた。

つづく

<；若　>；（後書き）

ちぃわーす。
とりあえずこれで第三話「タンス」おわりッス。
三話のテーマはイジメられっ子だったんすが、まーなんていいますか、こんなもんです＾＾；

ちなみに二話のテーマは食品偽造でしたｗ

引き続き第四話スタートしますが、あんまり難しい事は考えずに、勢いだけでいきたいと思います。

そこで第四話のテーマは！

「頭で考えるな！、心で感じるな！、筋肉で受け止めろ！」です・・・ｗ

では、第四話もよろしく願います（≧≦ゞ）／

次回もマッスルマッスル！ｗ

第四話「一七五一家」（前書き）

第四話、はじまりよ～ん。

第四話「一七五一家」

コンビニの二階に事務所を構える『猫田探偵事務所』。

猫田龍信、虎二、珠美の三人の兄弟で経営している小さな探偵事務所である。

今日は妹の珠美しか事務所には居ない。兄である龍信と虎二の二人は、調査の依頼で外に出ていた。

調査といっても浮気調査である。しかも離婚を望んでいる奥さんが、浮気しているかも分からない旦那を調べ上げてくれといった依頼内容であった。

浮気現場を捉えたらボーナスを出すとの契約なので、二人の兄は必死になって調べ上げている最中であった。

そんな訳で、観葉植物が多い事務所に残っているのは、一番下の妹の珠美ひとりだけであった。

事務所にひとり残っている珠美は、大きな胸を抱え込むように腕を組み、ボーと窓の外を見ていた。

「あっ」

何気なく窓の外を覗いていた珠美は、コンビニでバイトをしている青年が何時ものバイクで帰ろうとしているのを見つける。

がっちりとした体格、凛々しい顔つき、そしてふてぶてしいまで

の堂々とした態度。

珠美自身は気付いていない。彼女はこの手のタイプに弱い事を。

そして今日もまた、自分でも気が付かないうちに男の姿を、恋焦がれる乙女の眼差しで追いかけていた。

「彼だ……お家に帰るのかな……」

二階の窓から男の背中を見つめる珠美は、切なそうに呟いた。

だが、この男には恋人がいることを珠美は知っている。

しかも金髪の外人、かなり美人だった。

「あんな綺麗な恋人がいるのなら、私なんかに振り向いてなんかくれないよね……」

恋する乙女の顔は、切なく曇っていた。

「あっ、そうだ、まだあの外人さんが正式な彼女とは限らないわ。ただの知り合いで、たまたまバイクに乗せて、コンビニに来ただけかもしれないし！」

珠美はそう言いながら自分に都合のいい理由を想像しはじめる。

「そうよ、きっとそうよ。……あっ！、もしかしたら、ただの兄弟とかかも！。父親が外人さんと再婚して、たまたま兄弟になったとかかも！」

珠美の「たまたま」は、かなり自分に都合の良い物である。

「そうよ、きっとそうよ！、たまたまよ！」

珠美が一人で勝手な想像をしていると、バイクで帰ろうとしていた男の前に一台のベンツがやってきた。

「あら……？」

ベンツの助手席からリーゼントに黒の皮ジャンを着た男が降りると、そのままバイクの男に近寄っていく。

そして二人は何やら話すと、男はバイクを残してベンツに乗り込んでいった。

「あんまり柄の良い人じゃなかったけど……、知り合いかな、大丈夫かな……」

珠美がベンツに乗り込んだ男を心配していると、そのベンツはコンビニの駐車場から男を乗せたまま出て行った。

「はぁ～～ん……。私も夕ご飯の買い物行かないと……」

珠美はひとつため息を付くと、自前のエコカバンを持って探偵事務所を出て行った。

「やっぱり男なら、ヤクザと知り合いぐらいの危険な臭いがした方が、ハードボイルドぽくてかっこいいわよね」

階段を下りる珠美の顔がうっすらと桜色に染まりながら微笑む。

「今度、思い切って声掛けてみようかな」

そんな独り言を口にしながら珠美は、近所のスーパーへと買い物に出かける。

今日も、お馬鹿な兄達の晩御飯を作るために。

<　空手ｖｓ中国拳法・１　>

時を少し巻き戻して、話は始まる。

「うぃ～す」

「あ、おはようございます」

バイト先のコンビニエンスストワーの入り口をくぐったタケシが、レジカウンターに居るバイト仲間の井川と挨拶を交わした後、店の奥にある控え室を目指して歩いていく。

「タケシさん、ちわっす」

「おう」

タケシが控え室に入ると、アフロヘアーの安田がパイプ椅子に座りながら中古車の雑誌を眺めていた。

ドス！。

「イタ！、何するんですか！」

「いや、なんとなく」

タイムカードを押したタケシが、いきなり安田のアフロに意味も無くチョップを落とした。

安田が抗議するが、タケシはそれを無視してロッカーから制服を取り出すと、私服の上に制服を着込み店内に出て行った。

「相変わらずタケシさんは、なんなんだよ、も～……」

安田は、自慢のアフロを擦りながらタケシを見送ると、小さな声で愚痴をこぼす。

「うし、井川、俺が交代するからいっぷくしてこいよ」

「はい、じゃあ、ちょっと行ってきます」

タケシが、普通人に近い生活を送れるのは、このコンビニでのバイトの時間ぐらいである。

あとの全ての時間は、空手に繋がる生活だ。

日々、稽古やトレーニングに時間は使われ、他人から見れば過酷な生活を送っている。

自分で望んだとはいえ、食事、睡眠、風呂、バイト、それ以外は空手漬けの毎日なのだ。

ある意味、自分がしたい事だけをやっているのだ、他人から見るより幸せな人生なのかも知れない。

タケシが店内を見回すと、お客の姿はまったく居なかった。

店内スピーカーからチェーン店系列用のＣＭが流れているだけで、店内は静かなものである。

タケシは、その静けさに釣られるように、足元にある鉄アレイを二つ取り出し、さぞ当たり前の如く筋トレを始めた。

もう既に暇さえあれば、何らかのトレーニングをしていないと落ち着かない性分になっている。

タケシは、黙々と鉄アレイで筋肉を温める。ここまで来るとトレーニング病と言っていいだろう。

タケシのそんな行動も、オーナーやバイト仲間たちも黙認しており、レジカウンターの下に忍ばせている鉄アレイには、今では誰も疑問を持つものは居なくなっていた。

「じゃあ、タケシさん、俺、あがりますから～」

バイトの時間が終わった安田が控え室から出てくる。

「おう、お疲れ、帰り道は車に気を付けるなよ。できれば派手にダンプカーとかに引かれて死んでしまえ」

「はい～、期待にはそわないように、気を付けて帰りますよ！」

「ちっ……」

「何故、舌打ちかな……」

「いいから、さっさと帰れ」

タケシが、シッシッと手を振る。

「じゃあ、お先ですー……」

タケシと安田の捩じれた会話。他人から見たら相当中が悪そうに見えるが、これでも二人の関係はお互いの中で成立しているのだから不思議なものである。

そして何事も無くタケシのバイト時間が過ぎていく。

ここのところタケシの生活は大きく変わった。

その原因が、故郷での常識を超えた春婆怒との出会いである。

今までは空手三昧、修行三昧、喧嘩三昧、暴力三昧の日々だったタケシ。

それで居て人の道を外さないように心がける精神修行の日々から、人知を超えた魑魅魍魎達の世界に踏み込んだ。

タケシは、人間相手のケンカに対戦相手が居なくなり不便をしているところだった。

戦うというテーマを目指すのなら、ちょうどいいステップアップだったのかもしれない。

妖怪との初対決は、巨大な大蜘蛛。

きたる二戦目は、身長二メートルを超える人食い鬼。

そして三戦目は、姑息な妖術を使う箪笥の九十九神。

どれもこれもタケシひとりの力ではかなわない相手だった。

しかし、春婆怒との妖力共有で圧倒してきた。

自分より強くて弱い敵、少々微妙な気持ちのタケシだった。

自分より強いのに、春婆怒と妖力共有すると、圧勝してしまう。

それでも、戦いの餓えを癒すには丁度いい相手だったのかも知れない。

「タケシ君、もう時間だからあがっていいですよ」

「はい、オーナー」

タケシは、店長権オーナーの鈴木にそう言われると、奥の控え室に戻り帰り支度を始める。

そしてバイトの終了時間になるのを確認すると、タイムカードを押して控え室を出て行く。

「オーナー、お先でーす」

「はい、おつかれ。」

メタボリックな腹を揺らしながら、オーナー鈴木がタケシを見送る。

タケシが店の外に出ると、辺りは日が沈みかける時間帯で、夕日の赤い光が近くのビル達の壁を鮮やかに染め上げていた。

「ん？」

タケシが、コンビニの隅に停めておいた自分のバイクに跨った時である。コンビニの駐車場に一台のベンツが入って来た。

そのベンツは、タケシの目の前まで走って来ると停止する。

そして後部座席の窓が開くと、中からタケシの知った顔が覗かせた。

「よぅ」

「……鳴海先輩」

ベンツの後部座席から顔を出した人物は、タケシが高校時代に喧嘩相手として抗争を繰り広げた先輩であり、今ではヤクザの若頭を務める『鳴海　優』であった。

いろいろあったが、今では友好関係を築いている人物ではある。

「どうしたんですか、鳴海先輩？」

「まあ、立ち話もなんだから、時間が取れるなら、ちょっとドライブでもしながら話さないか?」

「ええ、構いませんが……」

タケシが同意すると、助手席から降りてきたリーゼントの男が、後部座席のドアを開けてくれた。

タケシは、警戒もせずにヤクザのベンツに乗り込む。

そしてタケシが乗り込むと、何処を目指すかも告げずに車はコンビニの駐車場を出て行った。

後部座席に乗るタケシは、運転席で体を縮めながら運転する大柄で坊主頭の男と、助手席に座るリーゼントの革ジャンを着た男を確認した。

この二人は、以前公園で遊んだ時に居た二人である事を思い出す。

「で、鳴海先輩、何の話ですか?」

「ああ、実わな~、お前さんに戦ってもらいたい男がいてな」

「おいおい先輩、俺にヤクザの用心棒でもさせるつもりかよ?」

タケシの拳が、膝の上で握り締められる。

「いやいや、お前さんがそういったのを好まね~のは分ってるよ。だから、今回はお前さんに頼みに来たんだ」

「言ってる意味が分んなね～よ」

後部座席の二人は、顔を会わせる事無く正面を向いたまま話し続ける。

「先日の話だが、うちが仕切る縄張りないで乱闘が起きてな……」

「はぁ～?、ヤクザ同士の抗争かだろ?」

「いや、その乱闘で、うちの若いもんが十人ばかり病院送りになってね」

「ふぅ～……」

タケシは、興味が無さそうな返事を返す。

だが、その態度は偽りで、本心はかなり興味を抱いている事に鳴海は気付いていた。

「その相手ってが、たった一人でね～」

「へぇ～……」

鳴海曰く、一対十の喧嘩。

タケシも、その程度の喧嘩なら幾度とくぐり抜けてきている。

「しかも、中国人でカンフーの達人と来ていやがる」

「へぇ～」

またも鳴海の話に興味のなさそうな返答を返すタケシ。

しかし、横で話す鳴海には、タケシが完全に食うついた事を察知していた。

伊達にヤクザの若頭を任せられるだけの存在ではない、この手の交渉ごとや人の感情を読み取る事に関しては一流を自負している。

そんな鳴海は、確信していた。

間違いない、タケシは鳴海の話にカッチリと食いつき、餌を針事胃の中まで飲み込んでいると。

「しかも、その十人を倒したカンフーの達人は、中国拳法なんたらかんたら連合に加盟してやがってな」

「中国拳法総合伝授連合、日本支部です」

助手席に座るリーゼントの男が、なんたらかんたらの部分の正しい名称に訂正する。

「まあ、相手は日本在住の中国人達で構成された武術集団でな。俺らヤクザでも簡単に手出しが出来ないってわけなんだ」

「鳴海先輩、俺にヒットマンでもやらせるつもりか？」

「まあ、話をあせるな。とりあえず全部俺の話を聴け」

鳴海は白いスーツの内ポケットからタバコを取り出すと一本口に

銜える。

　すると助手席に座っていた二階堂が、狭い隙間から体をよじらせながらジッポライターでタバコに火を付けに来った。

「それでだ、こっちは十人もやられているんだ、面子ってものもある、ほっとく訳にもいかないからな。

……それで、そのなんたらかんたら連合の偉いさんと話し合った結果、

問題を起こしたカンフーの達人とこちらの代表がタイマンをして手打ちって事になった」

「タイマンで手打ち？」

「そう、どっちが勝とうが負けようが、それで恨みっこ無しって事になった」

「その代表ってのを俺に……って事か？」

「ああ、それを頼みたくて今日はやってきた。是非引き受けてくれねえかな？」

「……事情は分った」

「引き受けてくれるか！？」

　タケシは、鳴海とは反対側の窓の外を眺めながら指でＯＫサインを出す。

　鳴海の顔が「やった！」といわんばかりに明るく微笑んだ。

「ただし、俺からの条件がある」

「なんだ?、何でも言ってくれ」

鳴海は知っている。

この男は、決して金品を要求してこないことを。

「俺はヤクザの手先としてその拳法家と戦うんじゃないって事を理解してもらうぜ。
ただ、俺の空手と、その拳法家のカンフー、どっちが上かの試し合いをしたいだけだ。
……わかるよな」

「ああ、そんなの理解しているさ。俺らヤクザ者とは関係なく、空手代表と中国拳法の試合だと思ってくれれば良い」

自分が企んだ思惑どおりに事が進んでいる。その事に鳴海の顔が怪しく微笑む。

どんな形であれ、あの中国人をぶちのめせれば鳴海の組の面子は保たれる。倒せれば、鳴海の株も上がる。

まずは作戦成功といったところだ。

<　空手ｖｓ中国拳法・２　>

人の通りが少ない小さな路地。

しばらくして四人を乗せたベンツは、一軒の中華飯店の前に到着した。

その中華飯店は商店街から少しばかり外れた路地にあり、周りにも色々な店が何軒かある。

中華飯店といっても店構えは下町の食堂レベル、店の入り口には光来飯店と書かれた暖簾が下げられ、その横に蝋細工の食品サンプルがガラス棚の中に並べられていた。

ベンツから降りた鳴海を先頭に、子分の二階堂、そしてタケシと続いて暖簾をくぐって中華飯店へと入っていった。

車を運転していた大柄の男は、一人で車に残るようだ。

「いらっしゃい」

三人が店の中に入ると、厨房でビールを飲みながらテレビを見ていた六十前後の厳つい顔の店主が、そう言って彼らを出迎える。

だが、三人の視線はその店主よりも、テーブルを雑巾で拭いている男へと釘付けにされた。

「で……でけぇ……」

そう声を漏らしたのは二階堂だった。

テーブルを拭いている男は、がっしりとした体型の大男で、デカイ頭が天井にすりそうになるのを猫背で調整していた。

車に残った仲間の男もかなりデカイが、目の前に居る男はそれよりも一回りも二回りも大きい。

鳴海と二階堂は、そのジャイアントを見て唖然とする。

だが、タケシだけは子供のように目を輝かせていた。

これだけ巨大な人間はそうそう居ないであろう。

顔はカバの様に四角く、目はつぶら、天井にすりそうな頭は五分刈で幾つかの傷がバケとなって残っていた。

体つきもデブっとしておらず引き締まった筋肉質。

ちょっとしたプロレスラーが、そのまま巨大化したといった風貌。まさに人間として企画外の体型だった。

そんな体型の男が喧嘩を行えば、ヤクザの十人程度を病院送りにしても不思議ではない。

更にこの巨人が中国拳法の達人だとするなら、この巨人に誰が勝てるというのだろうか。

「イラシャイマセ、ドウゾ、オスキナセキニ……」

テーブルを拭いていた巨人が片言の日本語で三人にそう言った。

「……いや、客じゃあねえ」

ふと我に返った鳴海がそう答える。

そして鳴海は、隣に居るタケシに視線を向けた。

鳴海が確認したタケシの表情は、巨人を見上げながら目を見開き凶悪な微笑みを作っていた。

もしも敵ならば引いてしまう表情だが、味方のこの表情に鳴海はぽっと胸を撫で下ろす。

「おい、亭主、俺は乱闘騒ぎの件で来た鳴海ってもんだが」

「ああ、あんたらが、例の……。改めて聞いておくが、本当にサシでやり合ったら、勝敗に関わらず手打ちって事なんだろうな？」

「ああ、こっちもガキの使いで来てる訳じゃあねえ。今回の件はそれで本当に手打ちだ」

「そう言ってもらえると、こっちとしては助かる。何時までも下らぬ理由でゴタゴタしていたくないのでな」

「あと、戦かってるところをハンディーカムで取らせてもらうぜ。上の者に証拠を見せねえといけねえからな」

鳴海がそう言うと二階堂が懐からパスポートサイズのハンディーカムカメラを取り出して見せる。

「ああ、それは構わんよ」

「堂本、お前もいいよな」

「あ～、問題ねえ。後で俺にもテープのコピーくれや。」

「で、兄さん方、裏に手ごろな広場が有る。普段は稽古に使っている場所だが、さっそくそこで済ましちまおうや?」

「いいね～」

邪悪な表情で亭主の言葉にタケシが答える。

「おい、閑(カン)、周(シュウ)を読んで来い」

「ハイ……」

店主に言われて巨人は、天井にすりそうな頭を屈めて厨房の奥に消えていく。

残された三人は、てっきりこの巨人が相手だと思っていた。

だが、タケシの対戦相手は別の人物らしい。

三人は揃って「何故?」と言った表情をしていた。

そしてしばらくして巨人が店の奥から戻ってくる。

「周ノ、アニキハ、ミセノウラデマッテマス」

戻ってきた巨人が片言の日本語でそう伝えると、二階堂が質問した。

「お前が……相手じゃないのか？」

二階堂達としては当然の質問なのかもしれない。

「ワタシハ、タタカイマセン。周ノ、アニキハ、ツヨイデスヨ」

「てめえよりもか？」

「ハイ、ワタシナンカ、アニキノカンフーニ、クラベタラ、黄河ト、ドブガワヲ、クラベルヨウナモノデス」

巨人はそう言ってにこやかに笑う。怖い笑みだった。

それを見て二階堂の額からゆっくりと汗が流れ落ちて行った。

「店を出て、右から裏に通じる小さな路地がある。そこから行ってくれ」

「ああ」

店主に言われ、そう答えたタケシが店の外へ出て行く。

それに続いて鳴海と二階堂も店の外に出た。

三人は店主の言ったとおりに店の右手にある小さな路地を進んで店の裏手を目指す。

二階堂は緊張で汗が止まらなかった。

この小さな路地の向こうに居るだろう敵。

あの巨人がアニキと呼び、黄河と呼ぶ人物。

一体どれほどのモンスターが居るのかと想像を廻らせていた。

三人が小さな路地を抜け出て、ちょっとした空き地に踏み込む。

その空き地の広さは一人でカンフーの練習どころか、数人の人間が練習できるほどの十分なスペースだった。

地面は赤土で、四方を住宅や他の店の壁に囲まれ、三人が通ってきた小道しかここに通じる道はないようだ。

この空き地は完全なデットスペースになっている。

中華飯店の裏口からさっきの巨人が頭をかがめながら顔を出す。

そして巨人は広場の隅にいる一人の男を指差した。

「アレガ、周ノアニキデス……」

赤土の広場に立つ一人の人物。

三人は巨人に言われて初めてその存在に気付いた。

白の人民服に黒のズボン、いかにも中国人といった風貌。

年の頃は三十歳前後、顔つきは頬骨が出た丸顔、目は細く、眉毛も細い。

そして鼻は低く、黒い髪は短く切りそろえられていた。

「あいつが……周……なのか」

唖然とした顔で二階堂がそう言った。

無理もない、あの巨人よりも強いと言われる男が……。

「ちいせぇ……」

二階堂が言う通り、男の体格は小さかった。

おそらく身長１６０センチ程度、もしかしたら其れよりも低いかもしれない。

「こいつが……周！」

本日、タケシが対戦する相手である。

<　空手ｖｓ中国拳法・３　>

四方をブロック塀や店の壁に囲まれた空き地。

小さな道からしか入ってこれないデットスペースに、赤く染め上げられた空から気持ちのいい風が吹き込んでくると、地面の赤土を撫でる様に吹き回して僅かな土埃を上げた。

その風は、今から始まる死闘を、嵐の前の静けさの様に演出した。

その空き地に立つ二人の猛者。

一人はタケシ。

もう一人は身長１６０程度の小さな男。

この小男が、あの巨人よりも強いモンスターだと言うのだから二階堂ならずとも驚くだろう。

「納得した……、あんたを見て納得したよ」

タケシのセリフに広場の中央で立っている小男が首を傾げる。

「今回の戦う相手は、かなり強いと聴いていた。
それだけならば、さっきの大男でもクリアーしている。

アレだけの巨体、それだけで戦闘では天才的才能と言える、間違いなく強いだろう。
だが今回の相手は拳法の使い手と聞き及んでいた……。
そうなるとだ、あの巨人では脆弱すぎる」

「何が言いたいのですか？」

広場の中央で棒立ちしている小男が、タケシの話に疑問を述べる。

それにタケシが笑顔で答えた。

「あんたの方が、強いと言いたいだけだ」

その笑みは、上から目線で邪悪な感じが混ざっていた。

「……煽てても、何も出ませんよ」

小男は、細い目でタケシを睨んだままそう答える。

「ふっ、照れるな」

タケシが小男の方へと歩み始めると、慌てて二階堂が手に持っていたカメラの録画を始める。

「俺の名前は堂本タケシ。今回はヤクザの使いではなく、堂本流超人空手の代表としてお前ら拳法家に果たし合いを申し込みたい」

小男は、細い目を精一杯見開き驚いた表情を作る。

「ほほ、これは驚いた……。日本のヤクザ相手にお遊びのつもりで

いたが、こんなところで日本の名高い空手の流派にお会いできるとは」

二人の男たちは三メートルぐらいの距離を残して語り合う。

「この勝負、もう喧嘩と呼ぶには失礼なレベルになりましたな」

そう言いながら小男は、胸の前で手の平に拳を当てお辞儀をする。

日本なら観客から金が取れるマッチメイク。

中国なら高額レートの賭けの対象になるカード。

会場は、武道館でも満員になるだろう。

一部の人間達の間でしか名前が売れていない二人だが、この二人には其れだけの価値がある。

「うれしいか」

タケシが、片腕をグルグルと大きく回して肩を解し始める。

「ええ、中国を代表する拳法家組織と日本を代表する一流の空手一家の対決……。もう中華連邦と日本国の武術の代表同士の対決といってもいいかもしれませんね。こんな機会はそうそう巡っては来ません、嬉しくないはずがありませんよ」

タケシの口元が笑っていた。

「同類だな、あいつら……」

「そうみたいですね……」

広場の中央で向かい合う二人の武道家。

それを離れた場所から見ている二人のヤクザの意見が統一する。

間違いない。

この二人は武を、戦いを、他人を傷つける技術を、それら積み上げてきた全てを、今ここでぶつけ合う事を楽しみにしている。

この二人は生まれた国は違うが、間違いなく同じ人種だ。同じタイプの熱い血が流れている。

「早速、楽しもうじゃあねえか！」

タケシの声に、熱い物が感じられた。

カメラを握る二階堂の手に力がこもる。

対決が始まる。

先に動いたのはタケシ。

構えすら取っていない二人の距離が縮まっていく。

それを二階堂がカメラ越しに追いかける。

周に歩み寄ったタケシが無造作に振りかぶった拳を、ただ力任せに周の頭を目掛けて振り下ろす。

だが、周は其の拳を片手で払いのけると、反対の手でタケシの腹部目掛けて中段突きを放つ。

周の中段突きが腹部に直撃すると、タケシの体がよろめきながら後方へと下がっていった。

「いいね～」

撃たれた腹部を押さえるタケシ。

それに対して周は放った四つの拳タコを縦に並べ、突きを放ったままのポーズで止まっていた。

まるで其の一撃の余韻を忘れないための様に……。

周の見事な縦拳の直突き。

タケシは普段から腹筋の上にバスケットボールを叩きつけるといった鍛えかたを、日々の訓練に組み込んでいる。

バットでフルスイングされても耐える腹筋を持っている。だから今の一撃を絶えられたのであった。

もしも一般人が、この縦拳を喰らえば、一発で内臓破裂して病院送りであろう。武道家の一撃とは、それほどの物である。

「はは、気を使わせてしまったね。では今度は私から……」

そう言って今度は周がタケシに歩み寄る。

そして小さな体から放たれる上段廻し蹴り。狙いはタケシの頭部。

タケシとの身長差の為、若干だが足が届かない分、周の軸足が赤土から離れる。

周の蹴り足がタケシの顔面に近づいた瞬間、周の腹部にタケシのトーキックが炸裂した。

タケシのトーキックを喰らった周は、両足が地面から離れており踏ん張りが利かなかった為、勢い良く後方へと吹っ飛んでいく。

そして赤い砂煙を上げて着地すると、周は楽しそうに微笑む。

「素晴らしい！」

着地した周は、腹部に付いた赤い砂埃を払いながら一歩二歩と間合いを戻す。

「じつに素晴らしい、日本の一流がこれほどだとは！」

「いやいや、中国四千年こそ流石だ」

二人の武術家は、僅かな一撃の技でお互いの力量をはかりあい、そして褒め称え合う。

「あんな小さな男が、あのレジェンダリータケシと同格というのか

よ……」

「サイズの問題じゃあないって事なんだろうぜ……」

子分の質問にそう答えた鳴海は、ちらりと店の裏口から覗いている巨人へと視線を向けた。

「見た目で判断できないのが武術……か、怖い話だぜ……」

<　空手ｖｓ中国拳法・４　>

周が、中国拳法の構えを取る。

その構えは、近代格闘技では有り得ない不思議な構え。

カンフーアクション映画では良く見られるような構えだが、素人から見たらその構えで本当に攻防が出来るのだろうかと疑問に思ってしまう特殊な構えであった。

一方、タケシもそれに合わせてファイティングポーズを取った。

此方は、オーソドックスなファイティングポーズで、空手の試合でもよく見られる構えであった。

お互い構えを取った二人が向かい合う。

ついに此処からが本番なのかと鳴海と二階堂、それに店の裏口から首を出す閑が唾を飲む。

そして、二人の新たな鬩ぎ合いが始まった。

二人が同時に赤い地面を蹴る。

タケシのローキック。

それを周が膝を立てて脛で受け止めると、二人の激突させた足から乾いた音が響く。

そしてタケシのローキックを受け止めた周の足が不思議な軌道で動くと、上段廻し蹴りと変化してタケシの顎先を狙う。

だが、紙一重の間合いでタケシは、顎を引いて蹴りを避ける。

蹴りを避けたタケシが、周の頭部を狙って反撃のストレートパンチを放った。

しかし、空振りした筈の周の足が舞い戻って来て、タケシのパンチを起用にも払いのけた。

そして、パンチを弾いた足はそのまま足刀と変わり、タケシの顔面に二回ほど襲い掛かる。

足刀は命中こそしなかったが、まるで威嚇するコブラのように見えた。

周の見事なまでの変幻自在の足技に、それを見ていた鳴海と二階堂が「お～」と声をあげていた。

周がタケシの目の前で真上へと垂直にジャンプした。

その高さはタケシの頭よりも高い。

周は其の高さまで軽々と飛んで見せると、そこから両足で連続の足刀を放つ。

その数、四発。

連続して放たれる周の足刀をタケシが左右の手を使って全て払い

のけた。

そのディフェンス技は、空手で言う回し受けと呼ばれる高等技術。

そして降下を始めた周を目掛けて、タケシのキックが下から上へと襲い掛かるように放たれた。

「うそ……うそだろ！」

信じられない光景に声を上げたのは二階堂だった。

隣で見ていた鳴海も声を出して驚きたかったが、その役目を格下の二階堂にぐっとこらえながら譲ったのである。

降下を始めた周に対して下から上へと放たれたキック。

その蹴りに対して周が取った防御法は、その足の上に着地するであった。

タケシの放った蹴り足の脛の辺りに、ちょこんと猿の様にしゃがみ込んでいる周。

さすがに二階堂じゃなくとも驚くだろう。

その証拠に店の裏口から見ている、企画外の巨人ですら驚いていた。

自分の足の上に停まる小男を見たタケシが、次のアクションに移る。

残った足で地面を蹴ると、周目掛けてジャンピングサイドキックを放った。

その蹴りを左手で受け止めた周の体が、蹴りの勢いで真横に飛んでいく。

キックを放ったタケシ、防御したが吹き飛ばされた周、二人が同時に赤土に着地すると、我先に立ち上がり、お互いを目指して走り出す。

週の縦拳による上段棒拳、タケシも右ストレートで迎え撃つ。

二人の拳がお互いの顔面目掛けてクロスカウンターの如く擦れ違う。

「グハッ！」

周の声が上がる。

タケシの右ストレートが周の顔面にヒットした。

しかし、周の棒拳はタケシの顔面には届かなかった。

ここで体格差がハンディーとなって現れる。

だが、一撃を喰らった周の方が素早く次の一撃を放つ。

「グフゥ」

今度はタケシが苦痛の声を漏らす。

周の体が一瞬でタケシの懐に潜り込み、タケシの腹部に周の肘が突き刺さっていた。

だが、其の一撃を堪えながらタケシが周の頭を両手で鷲掴みにする。

そして、周の顔面目掛けて下から突き上げるように放つニーキック。

周は其のニーキックを必死に両手でガードする。

しかし周は、其のニーキックの襲撃で視界が揺れ、二発目のニーキックを放つのを許してしまう。

だが、三発目を放つのを許さぬために、自分の頭を抱え込むタケシの両腕の間から拳を突き上げた。

その拳が真下からタケシの顎を捉えると、周の頭を掴むタケシの手から力が緩む。

周はそれを見逃さずにタケシの両腕を払いのけ、その場を逃れた。

だが、逃れた周に、タケシの追激がまだまだ続く。

間合いを取ろうとした周をタケシのフックが追いかけた。

しかし、周はタケシのフックが完全に放たれる前に、斜め下から斜め上へと放った蹴りで、タケシの手首の辺りを蹴り、豪腕のフックを受け止める。

続いてタケシが地面すれすれからのアッパーカットを放つが、またもや周はアッパーカットが完全に放たれる直前に、下段前蹴りで拳を止めてしまう。

それでもタケシの攻撃は止まらずに続く。

ストレートパンチ、ミドルキック、ハイキック。

タケシの激しいコンボ。

しかし、タケシのストレートパンチを周は下からの掌打で払い除け、次に放ったミドルキックを周の肘鉄で受け止め、三発目のハイキックを周は上段廻し蹴りで止めて見せる。

三つの攻撃を見事に潰されたタケシは、それでも攻撃を止めることは無かった。

全身を激しく一回転してのバックスピンナックル。

それを周は身を屈めながら避けると、タケシの腹部に中段突きを綺麗に入れる。

タケシは怯まずトーキックを放つが、周はその蹴りを両手で打ち落としタケシの胸に廻し蹴りを叩き込む。

タケシのヒールキック。

周は、タケシの踵蹴りを可憐に受け流すと、タケシの脇腹に棒拳を命中させる。

タケシのアッパー。

周は、顎を引き避けると、タケシの腹部に爪先を叩きこむ。

タケシのハイキック。

周は、その蹴り足をくぐり抜け、タケシの軸足の太ももに抜き手を突き刺す。

タケシの打ち下ろしのエルボー。

周は、其の肘を避けると、タケシの真横に回りこみ、こめかみに拳を叩き込んだ。

「タケシさんが……押されているのか……？」

二階堂の台詞が疑問系なのは、目の前で起きている現実を信じたくないからである。

自分を含め６人の極道を一瞬で葬り去った男が、こんな中国人の小男に押されている。

だが、これが現実。

信じたくないが、二階堂の言う通りである。

鳴海にもそう見えた。

今となっては友好関係ではあるが、かつて幾度となく煮え湯を飲

まされ続け、一度たりとも勝利と言えるものを感じさせてくれなかったライバル。

その昔のライバルが、目の前で自分よりも小さな中国人に押されている。

鳴海もまた、その光景を信じたくは無かった。

しかし、真実は見たままの筈。

だが、鳴海には何か違和感があった。

何かが可笑しいと。

<空手vs中国拳法・4>（後書き）

この勝負、長いかも！w

<空手ｖｓ中国拳法・５>（前書き）

０８／１１／４時点、２００００アクセス突破！。これも全て、お読み頂いてる皆様のおかげです＾＾

<　空手ｖｓ中国拳法・５　>

周の強烈な飛び蹴りがタケシの顎にヒットすると、タケシの体が後方へと飛んでいく。そして、倒れそうになるタケシは、赤い土埃を上げながら必死で堪えた。

タケシにも意地がある。

互いに技がヒットしているが、まだどちらにもダウンは無い。タケシは、意地でも先にダウンはしたくはないのだろう。

「素晴らしい、流石としか言えないです」

周が細い目を大きく開きながら怪しく笑う。

「我々中国拳法に立て付くだけの事はある流派……。一筋縄では倒せないようですね」

「流派？、はぁ～～～ん？」

周の台詞に対してタケシが何を言ってるのかといった表情をする。

その表情は明らかに周を侮辱するものであった。

それを見た周のこめかみに、ピキピキと音を立てて血管が浮き上がっていく。

「おいおい、あんた、今まで堂本流と戦っていると思っていたのか？」

先程まで怪しく笑っていた周の顔が、一転してタケシを睨みつける表情に変わった。

その表情は憤怒その物。

「やはり、違うのか……」

鳴海が、そう言う。

タケシの台詞に、今までの違和感を理解できたようだ。

鳴海は、空手や格闘技は使えない。

だが、学生時代にタケシと喧嘩をするにあたって、空手をはめとする格闘技を幾つか研究したのである。

その過去の研究成果とタケシとの対戦暦が、今のタケシの異変を素人ながら感じ取っていた。

「あれは堂本流どころか空手すらしていない……」

鳴海の言葉に、ハンディーカムを構えたままの二階堂が顔だけ兄貴分の方向へ向ける。

「あれじゃあキックボクシングやマーシャルアーツですらないな。ただの子供だましの喧嘩技だ……、とても格闘技とは呼べない」

「そうなんですか?」

そう言いキョトンとした顔の二階堂に対し、鳴海の話を聞いた周が更に怖い顔でタケシを睨み続ける。

「あんたも拳法家だろ。空手と他の格闘技の違いぐらい気付けよな」

してやったりの笑みのタケシが、悪餓鬼の様に振舞う。

「そう……、構え、突き技の捻りの違い、蹴り技の踏み込み、相手との距離感……。
それらの一つ一つが空手とは違った。
唯一見せた空手は、防御の廻し受けのみ……」

鳴海は赤く染まる空を見上げる。

「正拳突きではなくストレート、上段廻し蹴りではなくハイキック、前蹴りではなくトーキック、裏拳ではなくバックスピンナックル……、その一つ一つが出来損ないのプロレスラーが格闘技家の真似事をして使っているようだった」

赤い空を見上げながらそう語る鳴海の目線が、二人の格闘技家の元に戻る。

「特に堂本流と他の空手との違いは、突き技に大きな差が有る」

鳴海はそう言いながら、腰の入っていないが捻りの加わった正拳突きを一つ見せる。

「流石鳴海先輩、良くご存知で」

鳴海の解説にタケシが嬉しそうに微笑む。

「堂本流の突き技は、拳よりも更に危険な……」

そこへ周の声が割り込む。

「今まで私が使っていた技は、中国拳法で言う所の長拳の数々……。日本の空手は中国拳法の南拳の影響を強く受けていると聞く……」

今まで怖い顔をしていた周が、緊張を緩めて溜息を一つ吐いた

「……確かに私は貴方を舐めていたのかもしれない。今までの貴方の攻撃は全て身体能力のみの戦法……。そこの兄さんが言うとおり、技と呼ぶにはお粗末な代物だった……。だが、超人的身体能力が私にこの男を『天才の未熟者』と誤解的判断をさせていた。」

俯いていた周が頭を上げる。

その表情は、何かを期待する子供の様に輝いていた。

「ならば、お互い今までの攻防は準備運動として、本気を出し合おうじゃないか！」

そう言った周は、今までとは違う新たな構えを取る。

先程までの構えよりも大きく又を開き、深く腰を落とした横向きの体制。

両手の人差し指、中指、親指の三本が指先で合わさり、手首からダラリと下がった幽霊のような独特の構え。

「あの構え、俺知ってますよ、昔のカンフー映画で見たことあるっス」

「ああ、蟷螂拳だな……」

鳴海と二階堂の二人が言う通り、周の取った新たな構えは蟷螂拳だった。

「それがあんたの本気の構えか」

「いかにも、幼き頃から鍛え抜いた私の蟷螂拳。そこらの拳法家の物と一緒にしたら泣きを見ますよ」

二人の格闘技家のテンションが上がっていく。

「ならば、こっちも空手なんて言わず、本気の堂本流を披露しなきゃあ失礼だな！」

構えを取る周に対して、タケシは何も構えを取る事無く無防備に歩み寄る。

だが、それを見ても周は表情を変えず油断することすら無かった。

「構え無き構え……。昔、タケシがそんな事言ってたっけな」

無防備に歩み寄るタケシを見て、鳴海が昔の事を思い出す。

「俺も……、夜の公園で体験しましたよ……」

二階堂の言葉を余所に、鳴海は昔を思い出していた。

鳴海の古い記憶が正しければ、この後に起きる光景は……。

周に歩み寄るタケシとの距離は、まだ二メートルはある。

「ホォォォー！」

しかし、雄たけびと共に蟷螂拳の周が先に仕掛けた。ここからが本番といわんばかりに。

<　空手ｖｓ中国拳法・６　>

タケシに向かってジャンプした周は、まるで空中を暴れ飛ぶコマの様に回転して攻め込んできた。

そしてスピンジャンプから繰り出された技は、飛び廻し蹴り、飛び後ろ廻し蹴り、飛び廻し蹴りの空中三連回転廻し蹴り。

だが、タケシは周の派手な連続蹴りを後方に下がりながら難無く回避してみせる。

しかし、周の攻撃は止まらない。

蟷螂の鎌の様に組んだ三本の指で、タケシの腹部を突き刺すように狙う。

「おっと！」

タケシが声に出して周の鎌手の突きを払いのける。

一度、タケシの懐に飛び込んだ周の鎌手の突きは止まらない。

今度は反対の手の鎌突きが顔面を狙ってくる。

タケシは、周の繰り出す蟷螂拳の顔面突きを、左右に頭をそらし避けるが、次々と連続して周は蟷螂突きが襲い掛かってくる。

その連激は、タケシを串刺しにして、穴だらけの蜂の巣にしたいかの如く続いた。

しかし、激しく攻め立てる周の突きは、タケシを傷付けることは出来なかった。

「あまい」

蟷螂突きを連打していた周の攻撃が変化した。

「あ……」

周は、鎌のような指先と手首を使ってタケシの腕を引っ掛ける様に器用に掴む。

「外れない！」

そのグラップは不自然だったが、まるで手錠の様にがっちりと掴んで外れなかった。

そして引き剥がすようにタケシのガードを無理矢理崩すと、もう片方の手で空いたガードの隙間を縫って蟷螂突きを水月の辺りへと打ち込む。

その一撃にタケシの動きが一瞬止まった。

激痛。

まるでナイフにでも刺されたような痛み。

苦痛に顔を歪めたタケシに、周の追い討ちが続く。

狙いは無理矢理こじ開けられたノーガードの胴体。

「アチョーーーゥ！」

周の蟷螂拳による抜き手の連打が、タケシの胸や腹を幾度となく突きまくる。

その連打にタケシの体が、マフィア映画でマシンガンに打たれる登場人物の様に踊る。

「フォォォォォーーー！」

周の掛け声と共に蟷螂拳の両手同時突きが、フィニッシュといわんばかりに力強くタケシの胸と腹に打ち込まれた。

「ぐっはぁ！」

蟷螂双拳を喰らったタケシの体が後方に突き飛ばされ壁に激突した。

「ほほぉ～、まだ倒れないか」

周の抜き手を喰らったタケシの胸や腹部の洋服がボロボロに破れ血が滲み出ていた。

「素手で服が破れ、肉を裂いたってのか……。なんつう鍛え方しているんだ、あいつの指は……」

カメラを構えながらそう言った二階堂に、周はカメラ目線で台詞を返す。

「驚いたかね、これぞ中国拳法」

壁に寄りかかり傷ついた体をかばうタケシを無視して周は、蟷螂拳の構えを解く。

「閑、その一兎缶をこっちに投げろ」

「へイ……」

巨人は店の裏手に積み重ねてあった、食用油が入っていた教務用の空一斗缶を手に取ると、言われた通りに周に向かって放り投げた。

周は、空中に投げられた一斗缶を見て素早く蟷螂拳の構えを取る。

そして自分に向かって放り投げられた一兎缶に対して、自慢の蟷螂拳による突きを空中で幾度か叩き込むと、最後の一撃で鳴海達の足元に一斗閑を突き飛ばした。

派手な音を立てて飛んできた一兎缶に、二人のヤクザは一瞬身を強張らせた。

「！！っ」

ガランガランと音を立てて鳴海達の足元に飛んできた一斗缶には、卓球の玉が入りそうな大きさの穴がクレーターの様に幾つか空いていた。

一斗缶にこのような穴を空ける周の蟷螂拳。

その杭のような突きをタケシは体に喰らっているのだ、鳴海達はぞっと血の気が引いていくのを感じた。

「悪いね～、そんなデモンストレーションまでして俺に休憩時間をくれるなんて……」

壁に凭れ掛かっていたタケシが、血が滲む胸を押さえながら苦痛の表情で悪態を付く。

「いやいや、私もまだまだ楽しみたいのでね」

周がタケシの悪態に対してにこやかに答えた。

「おい、大男。俺にも一斗缶を放り投げろ」

「エッ……」

閑は一度、周の方を見ると、周が頷いたのを確認する。

「ヘイ……」

閑はそばにあった一斗缶を、今度はタケシに向かって放り投げた。

閑が放り投げた一斗缶がタケシの目の前まで飛んでくると、素早い手刀で一斗缶に袈裟切りを叩き込む。

そして大きな音を立てて赤土の上に叩きつけられた一兎缶には、まるで斧か何かで切りつけられたような大きな傷口がザックリと開いていた。

「すげえ……、まるで刃物……」

そう言う二階堂の足元に、タケシはサッカーボールを蹴る様に裂けた一斗缶を蹴り退ける。

「あれだよ、あれが他の空手と堂本流が違うところだ……」

「確かにすげー、チョップですね……」

「そうじゃねぇ、チョップとかの威力じゃねよ」

足元に転がってきた一斗缶を写していた二階堂のカメラが鳴海に向けられる。

「？」

「堂本流は現代空手との大きな違い、それは手技から繰り出される残忍な技の数々だ……」

「残忍……？」

「そう、今のチョップのようにタケシの堂本流は、一撃で肉を切ったり裂いたりといった技が多いんだよ。そして、それら残忍な技をあいつが使う時、まさにその戦いは本気の殺し合いに変わる……」

鳴海はタケシと対立していた学生時代に、一度だけ体験した本気の堂本流を思い出す。

それは実話として語られているレジェンダリータケシｖｓ五十人の不良達との対決。

そのイベントを企画して仕掛けたのが、当時の不良達のリーダー格だった鳴海である。

実際に鳴海がタケシ一人を倒すのに集めた不良達の数は七十二人であり、伝説として語られているよりも二十人以上多かった。

だが、当時のタケシは其の七十二人を素手で全員倒したのである。

その対決に使われた堂本流の手技とは、手刀、抜き手、一本拳、平拳、親指抜き手などといった、古流唐手の中でも危険とされる突き技の数々であった。

タケシにやられた七十二人の不良は、大小あったが全員が病院の世話になる負傷を負った。

その大半の傷が、刺し傷や切り傷。

そしてこの乱闘騒ぎは間違いなく明るみに出て大事になると鳴海は予感し覚悟ていた。

しかし、タケシの後ろに居る複数の春婆怒村出身の大物達によって事件は揉み消され、タケシはもちろんの事、七十二人の不良達にも何の処分はされる事が無かった。

ここで初めて鳴海はタケシの後ろに居る、春婆怒村出身の政財界や経済界の大物達の存在を知り、タケシとの対立を完全に諦めたのである。

「それならば、私の蟷螂拳も一緒です！。

蟷螂拳とはカマキリをモデルに考案された拳法！。
そのモデルであるカマキリとは昆虫世界でもトップクラスの残忍な昆虫！。
残忍というテーマならば蟷螂拳もまた堂本流には劣りません！！」

周が感情的に大声でそう言う。

「……こいつら、どこまで負けず嫌いなんだよ」

ハンディーカムを構える二階堂が二人の武人には聞こえないように呟く。

<空手vs中国拳法・6>（後書き）

予断ですが、私はゲイです！

（ウソですw）

<　空手ｖｓ中国拳法・７　>

「さて、そろそろ派手に行かせてもうぜ！」

「望むところだ！」

二人がお互いを目指してダッシュした。

そして、放たれる蟷螂拳の三本指の突きと、堂本流の中指第二関節を使った一本拳。二人の技が、拳先と拳先が、刃物と刃物がぶつかり合う様に激突して弾け飛ぶ。

すぐさま次の一撃を放ったのは周であった。

周の鞭の如く唸る中段廻し蹴りがタケシの脇腹に叩き込まれた。

「だからどうした！」

だが、タケシは怯まずに手刀を打ち下ろす。

周は、自分の脳天を襲うタケシの手刀をギリギリで回避した。

しかし、タケシの手刀がコメカミから顎にかけてヤクザ物のような刀傷を刻む。

周の激しい動きに合わせて、その顔の傷から赤い血が飛び散った。

傷は、思ったより深い。

しかし、周は気にも留めずに反撃に移る。

「チェエエエエエエエーーーーー！」

雄叫びと共に放たれた周の蟷螂抜き手。

狙いはタケシの顔面。

だが、タケシは正面から肘鉄で周の必殺技を打ち落とす。

すると、正面衝突したタケシの肘と周の拳先から鈍い音が鳴り響いた。

ゴギッと骨の砕ける鈍い音だ。

その音は二階堂のカメラのマイクでもはっきりと捕らえられていた。

周の自慢の三本指が滅茶苦茶に折れ曲がっている。

「ううううううっ！」

周は、砕かれた指を押さえながら後方に逃げるように下がった。

タケシも激突した自分の肘を手で押さえていた。

「日本には『肉を切らせて骨を断つ』って諺があってな！」

周の指を砕いたタケシの肘からもダラダラと鮮血が流れ落ちていた。だが、タケシの顔は、不敵にも笑っていた。

「お〜の〜れ〜〜！！」

周から先程までの余裕の表情が消えていた。そして、周の表情が阿修羅の怒り面の様に変わっていく。青い血管が、額に幾つも浮かび上がる。

それとは逆に、タケシの顔が慈悲深いお釈迦様の様な表情に変わっていた。

タケシが周との間合いを一気に詰めると攻撃に転じる。

廻し蹴り、正拳突き、前蹴りと次々と放つタケシの技。

周は必死にかわし続ける。

しかし、周は続けざまに放たれるタケシの猛攻を回避しきれず、ついにタケシの攻撃を、その身に受けてしまう。

タケシが命中させた攻撃は、両手で放たれた抜き手。

その双激の抜き手が周の両胸にザクザクと突き刺さり、周の表情を苦痛に染め変える。

「さらに！」

タケシの膝蹴りが周の顎を突き上げると、周の視界が一瞬で薄暗くなり始めた空に浮かぶ雲を見た。

そして薄暗い空を映す周の視界に、タケシの手刀が割って入って

くる。

「くはぁぁぁ！」

上を向かされた周の顔面に打ち下ろされたタケシの手刀。

打たれた顔面の肉がパックリと裂け、その衝撃が真っ直ぐ首へと突き進み、脊髄を揺らす。

周は、顔に出来た二つ目の傷よりも首に受けたダメージの方が大きいのか、無傷の片手で首を押さえながら顔を顰める。

そんな周を余所に、容赦なく襲うタケシの攻撃。続いて繰り出されたのは、裏拳。

だが、タケシは其の裏拳をクリンヒットさせずに、周の頬の辺りを舐める様に素早く振り切る。

すると周の頬骨の辺りに新たな切り傷がザックリと増え、そこから血が流れ出た。

「裏拳に見えたが、あれは親指を立てて切りつけたんだ……」

鳴海の解説を聞く二階堂。その二階堂が持っているハンディーカムに映る周の顔には、縦、縦、横の三本の切り傷が刻まれ、真っ赤な血だるま状態であった。

「キィエエエエエーー！！」

まだ諦めない周が、残った拳で蟷螂拳を組む。

そして再度打ちこまれる蟷螂拳。

しかし、タケシは手刀で其れを打ち落とし、周の手の甲に新たな切り傷を作り上げる。

「まだだー！！」

周の上段廻し蹴り。

だが、タケシは肘鉄を放ち其れを打ち落とす。

更に続く周の飛び膝蹴り。

だが、タケシは一本拳で其の膝を打ち止めた。

「そりゃ！」

タケシの足刀が周の喉仏を捕らえると、蹴りの勢いで周が後方へと飛んでいく。

周は、まだ倒れない。鬼の形相で仁王立ちする周は、肩で荒い息をしたままタケシを睨んでいた。その片手は指が三本折れ曲がり、反対の手の甲からは血が流れ落ちていた。

そして白い人民服の両胸には大きな血の染みが二つ有り、片足のスボンが破けて脛の辺りから血が流れ、反対足の膝も銃で打たれたような穴が空いていた。

哀れなほどボロボロになった周の足元には、顔や体のあちらこち

らから流れ落ちる血液が赤土に吸いこまれ黒い染みを作り出していた。

「もう勝負有りでいいんじゃないか、大将？」

その言葉に顔を赤く染めた周が、タケシを睨みつける。

「もしも……もしも、あんたが今の私と同じ軽症を負ったとして、その申し出を受けるのかね？」

「すまん、詰まらない質問をしたようだ！」

タケシが情熱的な笑みで謝罪を返した。

「分ってもえれば……、続行！」

自分の受けた怪我を軽症と述べる周が、血に染まる拳を握りしめタケシに飛び掛る。

しかし、赤い拳がタケシに届くよりも先に、タケシの平拳が周の眉間を突く。

だが、周は止まることなく砕けた指の拳をタケシの顔面に叩き込んだ。

「折れた手で殴ったぞ、あの中国人……」

砕けた拳で殴った周を見て、二階堂が驚く。

しかし、その攻撃はタケシの表情からしてノーダメージであるこ

とが、見ている者達にも悟れた。

「堂本流が他の空手との大きな違い……思い出したよ」

「えっ、まだ違いがあるのですか？」

傷だらけの周の攻撃を見て、鳴海が語り始める。

「ああ、身を持って知った大きな違いだ」

「それ、何ですか？」

「堂本流の勝利は、何時も最後は残酷ショーだ……」

二階堂が、ボロボロの周を見て納得する。

「そろそろ、終わりにしようぜ……」

タケシが深く腰を落とし勢いを貯めると、そこに周が飛び掛った。

もう周には、武器と呼べる肉体は無い。だが、それでも戦い続けるのが武士（もののふ）。

タケシに飛び掛った周の頭部に、タケシの上段廻し蹴りが横から直撃する。

タケシのヒットした蹴り足は、そのまま薙ぎ倒す様に振り切ると、周の小さな体が地面に頭から叩きつけられた。

そして、叩きつけられた周の小さな体が、ワンバウンドしながら

空中で一回転すると地面に倒れこむ。

「ア、ア、アノ、周ノアニキガ、ニホンジンニ、マケル！！」

地面に蹴り倒された周は、完全に動かなくなった。

「はは、この小さな巨人は凄いヤツだぜ……」

そう言いながらタケシも力尽きたのか、赤土の上に胡坐をかいて座り込む。

完全決着。

勝者、堂本流超人空手

堂本タケシ。

<空手vs中国拳法・7>（後書き）

やっと決着しました＾＾

この対決、自分でも書いてて楽しかったです

（≧∇≦）／

<　雪絵と春子とベル　>

薄暗くなる空の中、雪絵は近所のスーパーマーケットで夕御飯の買い物を済ませて帰ってきた。

亭主と一緒に経営している喫茶店兼住居の前まで来ると、向かえの家の前に居る金髪の長い髪の女性に気が付く。

雪絵は買い物袋を片手に、金髪の長い髪を地面に付けながらしゃがみ込んでいる彼女に近づいていった。

「……春子さん、こんな所で何をしているの？」

それは『春子・ハルバード』。一人娘の幼馴染で、旦那の恩師の孫である堂本タケシと同棲生活している女性。

本人達曰く、同棲生活では無く、ホームステイらしい。

二人に男女の関係は無いと言っているが、正直なところ雪絵は信じてはいない。

しかし、娘の陽子には「ライバルが出来て大変ね～」程度にしか思っていなかった。

娘の陽子は、かなり二人の関係に気をもめているようだが、雪絵は「タケシ君だって、まだ若いんだし、色々あるわよ」と、言って励ます程度であった。

恋愛には、多少の困難は付き物で、それを乗り越えてこそ硬く結ばれるのだと雪絵は信じている。故に絆は、やっと結び合った方が、強く長く持つと雪絵は思う。

後ろから話しかけてきた雪絵に、春婆怒が振り返る。

「これは奥方殿、なかなかタケシが帰ってこないでのぉ～、暇を持てあましておったのじゃ」

「で、何してるの？」

「この獣を眺めておったのじゃ」

後ろから話しかけてきた雪絵に対して、春子と呼ばれた外人女性は一度振り返った後に、犬小屋を細く綺麗な指で指差す。

「あら、ベルちゃんを？」

雪絵が指差された犬小屋の方を見ると、何時もなら元気良く尻尾を振って近寄って来る柴犬のベルが、犬小屋の奥の方で小さく丸くなって震えていた。

その様子を見て首を傾げる雪絵。

「あらら、何だか今日はベルちゃん元気ないわね～」

「うむ」

その時である。雪絵の喫茶店兼住居の隣にある古いアパートの方から、バイクのエンジン音が聞こえてくる。

どうやらタケシが帰宅したようだ。そのエンジン音を聴いて春子が立ち上がる。

「タケシ君、帰ってきたようね春子さん」

「うむ、そのようじゃのぉ～。では、奥方殿、わらわは失礼仕る」

「はい、またね」

そう言って春子は、その場を離れてアパートの方へと歩いて行った。

そして春子が居なくなると、犬小屋からそぉ～と様子を窺うよう様にベルが顔を覗かせる。

「あら……」

その場に残っていた雪絵がベルに気付くとニッコリと微笑む。

雪絵しか居ない事を確認したベルは、急に犬小屋から飛び出し雪絵に甘えるように飛び掛かった。

「きゃぃん、きゃぃん！」

「あらあら、ベルちゃんどうしたの～、そんなにおばさんのこと好きなのね～」

雪絵は尻尾をバタつかせて足に擦り寄るベルの頭を撫でてあげた。

「おばさんの事を好きなのは仕方ないよね～、おばさん凄く美人だものね～」

雪絵は自分の願望を込めながら満面の笑みでベルの頭を撫で続ける。

柴犬ベル。

まだまだ試練の時は続く。

<　タケシと陽子とカズマと春子と哲郎　>

周との一戦を終えたタケシが、ハイクでアパートに帰ってきた。

辺りは既に薄暗くなり始めている。

タケシはバイクをアパートの駐輪場に止めると、自分の部屋がある二階には向かわずに、階段の前を通り越してアパートの横にある小さな庭先へと向かっていった。

「おぅ、やってるか～？」

タケシが声を掛けた相手は、アパートの庭でトレーニングに励む陽子とカズマの二人であった。

「あ、タケちゃんお帰り～」

「お……、お帰りなさい、タ……タケシ……さん……」

元気な声でタケシを迎える陽子に対して、カズマは死にそうな声で答えた。

「で、どうだ、俺の言いつけたトレーニングはちゃんとこなしていたか？」

「うん、私がちゃんと監視してたからね」

タケシが言いつけたトレーニングとは。

まずは、又割りなどの柔軟運動を陽子に手伝ってもらいながら準備運動として一時間みっちり行い。

その後、腕立て伏せ五百回、腹筋五百回、背筋五百回、スクワット千回の筋トレ。

更に站椿（たんとう）を十分行い五分休憩を八セット二時間。

これが、タケシがバイトに出る前に弟子入り志願のカズマに言いつけたトレーニングメニューである。

正直、今年小学校を卒業して中学生になろうとしている少年には、かなり過酷なトレーニングメニューであった。

だが、タケシはカズマに、「このぐらいメニューをこなせないようなら堂本流の弟子どころか、他の道場でも通用しね～ぞ」と言って厳しく当たったのである。

しかも、カズマが怠けない様にトレーナーとして陽子まで付けたのである。

しかし、タケシの思惑とは裏腹に、生真面目なカズマは怠けるどころか陽子の「無理しなく良いんだよ」と言う優しい言葉にも惑わされずに、タケシの残したメニューを全力でこなしていた。

「タケちゃん！、どうしたのよ、その傷！」

タケシの皮ジャンの下に見える腹部が、洋服ごとズタズタになっている事に陽子が気付いて心配そうに大声を出す。

「ああ、これか、ちょっとはしゃぎ過ぎただけだ……」

タケシが頬を人差し指で掻きながらそう言うと、陽子は腰に手を当て少し怒った表情をする。

「もう、またどっかで暴れてきたのね。で、どうだったの？」

「ああ、めっちゃ楽しかった」

そんな陽子にタケシが満面の笑みで答えると、陽子も微笑み返した。

汗だくのカズマは、そんなタケシと陽子のずれた会話をポカンとした表情で眺めていた。

「タケシや、帰ってきたかえ～」

二人がそんな会話をしていると、そこに春婆怒が現れる。

「おやぁ？」

そしてタケシが負傷しているのに春婆怒もまた直ぐに気付いた。

「タケシや～、どうしたのかぇ其の傷は？。小娘にでもやられたかぇ？」

「なんで私が！」

春婆怒の言葉にスピーディーな陽子のツッコミが入る。

「どれどれ、少しばかり傷口を見せてみぃ」

「ああ」

そう言う春婆怒に、タケシはボロボロになった服をたくし上げて血だらけの腹部を見せる。

「うわぁ～～～……」

タケシの傷口を見て声を出したのはカズマだけだった。

あとの二人は血を見るのに慣れているのか、タケシの傷の様子を冷静に確認する。

「ふむ、この位ならば、舐めておけば直ぐに治るじゃろうて。どれ、わらわが舐めてしんぜようかえ？」

そう言いながら春婆怒が、いやらしく舌を出してタケシの顔を舐めるような仕草を取る。

「舐めるな！、勝手に私のタケちゃんを舐めるな！」

そんな悪戯を真に受けて陽子が春婆怒に飛び掛るが、春婆怒は陽子から難なく逃れて怪しく微笑む。

「じゃあ、陽子、お前が舐めるか？」

逃げる春婆怒を追いかけていた陽子が、タケシの言葉にピタリと止まる。

「えっ、いいの？」

先程までの荒々しい態度から、可愛らしい少女の様にモジモジした態度に変わった陽子が、再度タケシに確認を取る。

「な……なんだ、この人たちの会話は……」

三人の会話にカズマが呆れていると、更にもう一人の男性が現れて話しに加わってくる。

「やぁ。皆、トレーニングでもしていたのかい？」

少し皺の入ったスーツに中途半端に緩められたネクタイをした男性。話し掛けて来たのは、このアパートに住んでいる刑事の眞鍋哲郎であった。

「眞鍋さん、ちわっす」

身長はタケシよりも僅かに低い程度で、どちらかと言うと体育会系のガッチリとした体格をしていた。顔付きには凛々しさも有るが、若干の力弱さも感じられ、女性から見ると側にいて面倒を見てあげたくなるタイプらしい。陽子から見ても眞鍋は、そんなところがタケシと似ていると連想させる印象があった。

「真鍋さん、今帰宅ですか？」

陽子が何時もの明るさで問いかけると、眞鍋も高感度の良い笑顔で答える。

「いゃ～、これから出勤でね……。当直なんだよ」

そう答えた眞鍋だが、作った笑みを崩す事はなかった。

「そうですか夜勤ですか……、頑張ってください」

同じく受け応えする陽子も満面の笑みを崩さなかった。

「今、着替えを取りに来てね……」

「そうなんですか」

笑顔でやり取りする二人だが、その二人から感じられる空気は完全に暗い物であった。

眞鍋は、仕事にいくのが嫌らしい。

「あれ、タケシ君、怪我しているね、どうしたんだい？」

眞鍋もタケシの怪我に気付く。

「うむ、小娘にのぉ、やられたらしいのじゃ」

「嘘つくな！」

自分を指差しながら偽りを語る春婆怒を怒鳴りながら陽子は、春婆怒の指を平手で払いのける。

「はは、陽子ちゃん、タケシ君も死んじゃうよ。もうちょっと手加減しなよ」

「そこ、信じない！！」

そこには既に先程までの暗い笑みは無くなっていた。

<　タケシと陽子とカズマと春子と哲郎　>（後書き）

みんな聞いてくれ

俺、絶対に

・　・　・　・　・　・　・　・

ツチノコ捕まえる！

<　タケシと陽子とカズマと春子と哲郎と朧　>

タケシ、陽子、春婆怒、カズマ、真鍋の五人が、アパートの庭でそんな話をしていると、この住宅街に似合わない真っ赤な高級スポーツカーが五人の居るアパートの前を通り過ぎていく。

そのスポーツカーは、喫茶店の横にあるガレージにバックで駐車すると、やたらとセクシーな女性が運転席から降りてくる。そして車庫のシャッターをガラガラと音を立てて閉めた。

ちなみにガレージは桜木家の私有物である。今現在は、車から降りてきた女性に月額６５００円で貸出していた。

「あ、朧（おぼろ）さんが帰って来た」

陽子より少し長い真っ黒のショートヘアー。黒のスーツに揃いのパンツを履き、白いシャツには赤いネクタイがびしっと閉められ、手には白い手袋をしていた。

朧と呼ばれた女性は、頭に被っていた帽子を歩きながら外すと、指で回しながら五人の居る方へと歩いてくる。

その風貌は、まるでタクシーの運転手の様だった。

「うわ～～……」

カズマが朧を見て小さな声をもらす。その理由は、朧の妖艶さと大きな胸を見たからだ。

黒のスーツのボタンが弾けそうなほど大きな胸。そして引き締まったウエストに、安産型のヒップ。整った綺麗な顔にはサングラスを掛けているが、誰もが一目で美人だと分かる容姿だった。

真っ赤なルージュが怪しくも美くしい大人の色気をかもし出していた。カズマから見て、エロイ大人の女性像にスッポリ当てはまる印象そのものだった。

「あら～、皆して井戸端会議～？」

「朧さん、お帰りなさい。まあ、そんな感じです」

ゆっくりとした口調の朧にそう答えたタケシが傷だらけの体を撫でると、朧もタケシの怪我に気付く。

「あらら～、タケシくん、また怪我してるわね～」

ゆっくりとした誘惑的な口調の朧が、お尻を突き出すように腰を曲げると、タケシの傷口を近い距離でサングラス越しに眺める。

「ツンツ～ン」

「朧さん……、突っつかないでください」

傷口を指で触る朧に対して、されるがままのタケシがそう言う。

「でぇ～、誰にやられたのぉ～」

「小娘にやられたのじゃ」

朧の質問に春婆怒が、何の迷いも無く陽子を指差す。

「やってないわよ！」

「あらら～、陽子ちゃん、夫婦喧嘩も血を見るほどやるのは、どうかと思うょ～」

「はい、気を付けます……」

陽子は、『夫婦喧嘩』という部分を聞いて否定せずに、朧の忠告を間違っていながらも受け入れる。

「でぇ～、こちらの二人は、だあぁれ～？」

サングラスを外した朧が、見慣れない金髪女性と、大人に混ざってこの場にいる少年について尋ねる。

「ああ、こいつ春子・ハルバードで、こっちがカズマ」

タケシによる簡単な紹介を聞いた朧が、カズマの顔に若干タレ目だが妖艶な笑みをわざとらしく作って近付ける。

「あらら～、かわいい坊やじゃない、ちょっとたげ食べちゃおうかな～」

「……！」

「冗談は止めろ、少年が困ってるだろ」

一瞬で顔を赤くするガズマを見て、眞鍋が朧の手を引いて少年か

ら引き離す。

「ふふ～ん、冗談よ～、哲郎～」

カズマから顔を引き離された朧は、今度は眞鍋の腕に絡みつく。

「哲郎、やいたのぉ～」

「……」

「ふふ～ん」

眞鍋の腕に抱きついた朧は、自分の大きな胸を眞鍋の腕に押し付けながら真鍋の顔を下から覗き込む。

だが、眞鍋は顔を赤らめながらもそっぽを向いて、朧を相手にしなかった。

「朧、そろそろ離れてくれ、俺これから仕事に行かないといけないから……」

そう言いながらも眞鍋は、腕に抱きつく朧を自分からは引き離そうとはしなかった。

「あらら～ん、今日は当直なんだ～……。じぁ～あ～、哲郎は今度いつ休みなの～」

「たしか明後日かな……」

「ねーねーじゃあさ～、今度の休みにさ～、ドライブいこうよ～、

ドライブ～」

眞鍋の腕に抱き付いてる朧が、綺麗な人差し指で眞鍋の頬を何度が撫でる。

「……そうだな、最近忙しくてあんまり一緒にいられなかったし。……そうするか」

「じゃあ、きまりね～」

眞鍋の回答を聴いた朧は子供っぽく微笑むと、やっと眞鍋の腕を豊満な胸の感触から開放した。

「それじゃあ俺、仕事行ってくるから」

少し心残りがあるような表情の真鍋は、朧と他の皆に手を振ってアパートの庭から出て行く。

「いってらしゃ～い」

可愛く手を振る朧に習って、他の四人も可愛く手を振って眞鍋を見送る。

<　タケシと陽子と春子とカズマと朧　>

「じぁあ～、私も部屋に帰るから～。皆、稽古がんばってね～」

眞鍋を見送った朧は、もうここには用が無いと言わんばかりにアパートの庭を後にした。

「朧さんと眞鍋さんって、恋人同士ですか?。」

朧が階段を上りアパートの二階に姿を消すと、カズマがタケシと陽子に質問した。

「うん、高校時代から付き合っているらしいよ」

「へぇ～」

陽子の回答を聞いたカズマは、素っ気無い返事を返す。そして、朧の消えた階段の上をもう一度見上げた。

「ん?、カズマ君、朧さんが気になるの?。もしかしてカズマ君のタイプとか～!?」

「いや、えっ、ちょっ、えっと、えっと、違いますよ!」

自分の言葉に慌てる少年を見て、陽子が悪戯に微笑む。

「なるほど、カズマはボインボインが好みなのか～」

「ちょっとタケシさんまでちゃかさないでくださいよ!」

「うし、冗談はさて置き、カズマもう帰っていいぞ。帰りはロードワークがわりに走って帰れよ」

「えっ！、ちょっと待ってくださいよ、タケシ先生?！」

そう言ってアパートの外を指差すタケシにカズマが異論を挟む。

「ん?、何だ、走って帰るのが嫌か?」

「そうじゃ無いですよ。僕はまだ筋トレしかしてませんよ、空手の稽古を付けてくださいよ！」

カズマの顔に、タケシが怖い表情を近付ける。

「はぁ～ん、何寝ぼけてんだカズマ。そんなの家帰って、好きなだけ自分でやれ」

タケシは、カズマをそう冷たくあしらって、アパートの庭を出て行く。

「タケシ先生……」

残されたガズマが、呆然とした顔で立ち尽くす。

すると陽子が後ろからカズマの肩を叩いた。

「家に帰ったら、左右の正拳を千回、前蹴り千回、上段廻し蹴り千回をやりなさい。

基本はちびっこ空手教室で習っているでしょ」

「陽子先生……」

陽子の微笑みながらそう言うと、カズマはその笑みを見上げた。

「もしもタケちゃんに稽古を付けてもらいたいなら、日々の基本稽古は自分で考えてやっておきなさい。
そうしたらタケちゃんだって稽古の一つぐらい付けてくれるかもよ」

カズマはしばらく何かを考えこみながら黙っていた、そして何かに気付いたのか、その重い口を開いた。

「学校のクラブ活動じゃあ無いのだから、ここに来て筋トレなんてやってるようじゃあ、ダメって事なんですね。
日々の筋トレや基本稽古は自分でこなして、ここにはタケシ先生の技術を盗みに来るような気持ちじゃないとダメって事なんですね……」

そう言ってカズマは一つ正拳突きを放つ。

「稽古とトレーニングは別物なのですね……」

トレーニングは、体作りの事。

稽古は、技を極める事。

「ふふ」

事の違いに気付いたカズマを見て、陽子の笑みが一段と輝く。

「この小僧、将来良い武人に育つかもしれんのぉ～」

「そう思いますか、春子さん！」

今まで黙っていた春婆怒の台詞に、カズマもやっと微笑みを取り戻す。

「たわけ、御世辞じゃ」

何故かカズマは、この女性に自分の将来が有望だと言われて嬉しかった。

例えお世辞だと言われようとも、嬉しかった。それが何故なのかは少年にも見当が突かなかった。

アパートの二階。

一番奥の部屋の窓。

その窓に掛けられたカーテンの隙間から、アパートの庭に残る三人の姿を朧がこっそりと覗き見ていた。

その朧の顔は、先程まで眞鍋と一緒に居た妖艶でありながらも優しさの感じられる笑みでは無く、冷めきった無表情なものであった。

「あの女、春子って言ったかしら……。あれは妖怪ね……」

そう独り言を呟く朧は、ゆっくりとカーテンを閉めると暗い部屋の中へと姿を消していった。

<　タヌキロード　>

虎野町市の外れにある一本の国道。

小さな二つの集落を繋ぐ為、山中に作られた二車線の道路。

だが、集落の者同士が行き来する理由も無く、実際のところはほとんど車の通りもない。

何を考えて作ったのかは分からないが、繋ながれた集落同士の人々ですら、道路公団の無駄な税金浪費と言うぐらいであった。

そんな山中の人通りの少ない国道を、一番利用しているのが山に住む野生の狸達である。

この道路を走るドライバー達に、ちょくちょく狸が目撃されることから、この国道は「タヌキロード」と呼ばれるようになった。

普段は車の通りも殆んど無い為、狸達にとっては安全で使いやすい道路なのだろう。

そして、少し昔の話ではある。

このタヌキロードが、ネット上で心霊スポットとして一躍注目を浴びた時期があった。

何故に注目されたかというと、タヌキロードの中腹にある一本の脇道の存在が原因であった。

ネット上では『タヌキロードの脇道』と呼ばれるこの細い脇道は、舗装はされておらず茶色い生土が剥き出しになっている。道の幅は大人二人が並んで通れる程度だ。その左右は山の木や草が生い茂り、心霊スポットと言う事も手伝ってか昼間でも陰気な景色であった。

確かに陰気な場所ではあるが、それだけでは心霊スポットとは呼べない。

何故にタヌキロードの脇道が心霊スポットと呼ばれるようになったかというと、この道を百メートルほど進んだ先に理由があった。

その理由とは……

……行き止まり。

この細い道を山中に向かって百メートル程進んだ先は、ただの行き止まりなのである。

何も無い、ただの行き止まり。

それ以上進む道も無く、目的地と呼べる建物もない、ただの行き止まりなのである。

そんな行き止まりの道を、何故に世間は心霊スポットと呼ぶようになったか……。

よく考えてみれば其の疑問が分かってくるだろう。

車の通りがほ殆どない国道にある横道。

踏み固められた細い山道。

その先には何も無く、ただの行き止まりなのだ。しかも目的地もない道が百メートルも続いている。

どこの誰が、何の為に、百メートルもの距離の山道を、ガッチガチに踏み固められる程に、この道を使用したのか？。

この道が工事中だった頃には、無かった脇道。

そんなどうでも良い疑問が謎に変わり、ネット上で好奇心を引き寄せたらしい。

そして、人の噂話には尾鰭背鰭が付くものである。

この道を一人で奥まで行くと、その人物は帰ってこなくなるとか。

丑三つ時にこの道の奥まで進むと幽霊が現れるとか。

この山道の突き当たりは、霊界に通じているとか。

などなど、勝手な話が追加されてネット上で紹介されていた。

それが真実なのか、ただの噂話程度の事なのか、真相は定かでは無い。

「ひぃぃぃぃ～～～～！！」

フードの付いた灰色のローブを着た小柄な人物が、タヌキロードの脇道を走り向けていく。

その人物は、タヌキロードの奥の方から、逃げる様に必死で走って来た。

頭にはフードを被り顔は見えない小柄な人物。

身長は百五十センチぐらいで、山中にもかかわらず靴を履いておらずに素足のまま走っていた。

その小柄な人物が必死で走る後方から、草木をへし折りながら何かが追跡してくる音が、けたたましく聞こえてくる。

「ちきしょーーーー、何でいつもこんなんだーーーー！！」

必死に走る小柄な人物が、追跡してくる何かが立てる音に一度振り返る。その際、脇道にはみ出していた木の枝にフードを引っ掛けて、その顔を露出させた。

「ちゅーーーーっ！」

その小柄な男の頭部は、灰色の鼠だった。さながら、妖怪小鼠男と言ったところだろうか。

その必死で走る小鼠男は、脇道から国道に飛び足すと直角に曲がり、今度はアスファルトの上を走り続ける。

「ダメですーーーー！。まだ人語で交渉できるほど脳味噌が発達してませんでしたーーーー！。あれじゃあ、動物の延長線の生物止まりですよーーーー！」

そう叫ぶ小鼠男が、脇道から飛び出してまもなくすると、今度は枝木をへし折りながら国道に、凄い勢いで巨大な獣が飛び出してくる。

それは、鵺（ぬえ）。

猿の頭に狸の体、手足は虎で、尻尾は蛇。

そのキメラの様に幾つもの獣の姿が混ざった鵺は、必死で走る可愛らしい顔をした小鼠男を、猿の顔を怒りに引きつらせて追いかけていた。何に激怒したのかは分からないが、猿の面は狂気そのものだった。

「ちゅーちゅーっ、お助けよぉぉぉぉーーーー！！」

そう叫びながら走る小鼠男は、前方に見えてきた男の元へと必死で走りながら目指す。

男は自分に向かって走ってくる小鼠男を、誠実そうな視線でしっかり見ていた。

グレイのスーツに白いワイシャツ、質素なネクタイをきっちり締めた男の手には、一本の日本刀が握られていた。

「後は、お任せします～～～～！」

真っ直ぐ立ち尽くし熱い視線で狂気の鵺を見つめる男の横を、必死に走る小鼠男が通り過ぎていく。

「七人岬……」

男が呟く。

「観自在菩薩　行深般若波羅蜜多時　照見五蘊皆空……」

スーツの男がそう呟くと、彼の周りに御経を唱えながら七人の僧侶達が、アスファルトから生えるように姿を現す。

その七人は、頭に編み傘を振り手には鉄の錫杖を持った僧侶達。

巨漢、のっぽ、老人、髪の長い女性と色々居るが、どの顔も血の気の無い青ざめた死人のような表情であった。

「度一切苦厄　舎利子　色不異空　空不異色　色即是空……」

スーツの青年の周りで怪しく御経を唱える七人の怪僧。その全員の視線が、迫り来る鵺に向けられていた。

「行けぃ！」

男の渇を入れるような掛け声に、七人の僧侶は一斉に鵺を目掛けて走り出す。

そして助走が付いたところで、手にある鉄の錫杖を次々と鵺目掛けて投げ放った。

七本の錫杖が、槍の如く変わって次々と飛んで行く。そして数本が刺さる。

「ヒョーーーーーー！！！」

何本かの錫杖が体に刺さった鵺は、鳥の様な鳴き声を上げた。だが、怯む事無く鵺は、尚も突進を続ける。怯まない。逆に怒りを増す。

「ヒィーヒィー、ガッ、ガッ！」

鵺は、巨体からバチバチと電撃を放電しながら、七人の僧侶を跳ね飛ばさんと突っ込んで行く。

しかし七人の僧侶達は、鵺の巨体を軽々と飛び越えると、難なく突進を回避した。

「ガッ、ガッ！」

目標に逃げられた鵺は、前方に居る男に気付くと、更に放電を激しくさせ突進して行く。

その鵺の放つ電撃が、ガードレールやアスファルトをバチバチと音を立てて焦がしながら男を威嚇していた。

しかし、怒りのまま放電を繰り返し突っ込んでくる鵺に対して男は、怯む事無く冷静な表情のまま手に有る日本刀を腰に添える。

「廃字刀苦羅々……」

男は大股で一歩踏み込むと、前傾姿勢で鵺を待ち構える。

それは、抜刀の姿勢。

そして鞘に納まった刀の柄を親指で押し、輝く刀身を少し覗かさせる。

居合い向き、抜刀術の発射準備完了。

「ヒョーヒョー、ガッ、ガッ！」

凛々しい視線の男の前に、鵺の巨体が迫る。

「閃光斬激！」

男は、刀を目にも留まらぬ早業で抜き放つ。

鵺とはまだ距離が会った。

とても刀身の届く距離ではなかったが、男の剣先から黄色い閃光が放たれ、突っ込んでくる鵺の顎から後頭部にかけて音も無くなぞる。

「ガッ……ガッ……」

鵺の突進が止まると、巨体がグラリと揺らめく。

そして閃光によってなぞられた顎から後頭部にかけて傷口がパクリと開くと、噴水の様に血が浮き出た。

そして鵺の巨体がアスファルトの上を滑る。

「廃字刀苦羅々・追加閃光斬激！」

男は下から上へと切り上げた剣を手首で返すと、今度は真っ直ぐに兜割りを放つ。

そして再び放たれた閃光が鵺の傷口を上から下へとなぞる。するとスイカの様に巨体が真っ二つに割れ、左右に二つの体を倒して鵺は動きを止めた。

「さすが、弦徳様～～」

男の後方で、木に隠れながら様子を窺っていた小鼠男が姿を現す。

今まで隠れていた小鼠男は、ちょこちょこと走ると、真っ二つになった鵺の死体に駆け寄って、爪先でチョンチョンと蹴りながら鵺が死んでいるかどうかを確認した。

すると男に切られた鵺の死体が、蒸発するように白い煙を上げて消えていく。

そして、その二つに割れた巨体から大量に流れ出た血液もまた、煙となって蒸発していくと、鵺の痕跡は全て消えてしまう。

男は、その光景を確認すると、手に有る刀を慣れた手つきの技で鞘に納めた。

「終わりましたね扈鼠さん、では帰りましょうか」

男はそう言って、少し離れたところに停められた車を目指して歩き始める。

「はいです、弦徳様～」

無邪気な声で返事を返した小鼠男が、その男の後ろをひょこひょこと可愛らしくついて行く。そして、車の助手席へと乗り込んだ。

運転席に座った男が運転席でキーを回してエンジンをかけると、二人が乗った車はタヌキロードを後にした。

一仕事終わりである。

<　一七五一家・前編　>

早朝の虎野町市街。

まだ、ほとんど人は見られない。

静かな街中を新聞配達のバイクが、忙しそうに走り回っているぐらいである。

そして、車の通りも疎らな六斜線ある大通りを、一台のリムジンが走っていた。

そのリムジンの運転手は女性。少し長めのショートヘアーに運転手用の帽子を被り、サングラスと真っ赤な口紅が彼女の大きな胸と同じぐらい印象的であった。

彼女が運転するリムジンの後部座席には、若い女性と小柄な老人が座っている。

若い女性の方は、赤いレディーススーツに短いスカート、その赤いスーツに合わせて赤いハイヒールを履いている。

そして長い髪を邪魔にならないように後頭部でお団子状に纏め、茶色いストッキングを履いた綺麗な膝の上で、何やらノートパソコンのキーボードを叩きながら仕事をしている。

方や小柄の老人は、古風な紋付袴(もんつきはかま)姿で、何やら手にした書類を、頭を左右に小刻みに揺らしながら読んでいた。

「会長、ヒィリピンで開発中のホテルについてですが……」

「ああ、あの件は現地に飛んでる水島君に一任するよ」

「はい、畏まりました。では、そのように手配いたします」

「ああ、頼むよ、静香君」

リムジンの後部座席の二人は、そんな仕事の会話を度々しては、自分の手元のノートパソコンやペーパー書類を眺めていた。

そしてしばらくすると、運転手の女性がバックミラー越しに後ろを見ながら声を掛けて来る。

「油儀会長、まもなく虎野町レインボー商店街に到着いたします」

「ああ、分かったよ、朧君」

小柄の老人は運転手の女性にそう答えると、手にしていた書類を赤いスーツの女性に手渡す。

書類を渡された赤いスーツの女性は、膝の上のノートパソコンを閉じると、渡された書類と一緒に、脇にあった鞄にノートパソコンをしまい込んだ。

「油儀会長、到着しました」

運転手の女性は、そう言いながら車を端に寄せて止めると、素早く運転席を出て外から後部座席のドアを開けた。

小柄の老人は車から降りると、一度商店街のアーチ状の看板を見上げる。

そこには古びたネオンの看板に、虎野町レインボー商店街と象られていた。

まだ、人影の無い商店街の通り。

老人が頭を小刻みに揺らしながら歩いていくと、道の真ん中に仁王立ちで立ち尽くした、煙草を吸っている男性が一人居た。

その男は、茶色のトレンチコートにお揃いのカラーのハンチングキャップを被った中年男性。

四角い顔に若干隈の有る目元、少々運動不足なのか脂肪の蓄えられたお腹、それらがこの男の印象を狸に重ねる。

その男は、一人で歩いてきた油儀を睨みつける様に見ていた。

男の名前は、刑事の鍋中改造である。

「よう、油儀、おせいぞ」

鍋中は、イラついた口調であった。

「ああ、すまない、多忙な身な者でな」

その返答に、鍋中の太い眉毛がピクリと動く。

「ふっ、俺だって案外多忙だ……」

そう言って鍋中は、吸っていた煙草を胸ポケットから取り出した携帯吸殻入れで始末する。

「俺だってな、外れ鬼や失踪事件の後始末で忙しいんだよ」

「ああ、そうだったね」

どうやらこの二人は、こんな早朝から待ち合わせをしていた様だ。

そして皮肉交じりの挨拶を交わすと、今度は二人で歩き始める。

朝一の商店街には、ミスマッタな二人組みだった。

二人はしばらく商店街の中を歩くと、シャッターの閉まった店の前で立ち止まる。

「ここだったかの……？」

「ああ、ここだ、行くぞ」

クリーニング屋とレンタルビデオ屋の間にある細い隙間。

二人は、その薄暗い隙間を覗きこみながら確認し合う。

そして、大人一人が体を斜めにして通れる程度の道とは呼べない場所に、二人は無理やりにも入っていく。

その隙間を二人はしばらく進んでいくと、徐々に隙間は広くなり

始めて、やがて体を斜めにしなくても進めるようになっていく。

油儀と鍋中の二人は、これと言った会話をせずに黙って先へと進んでいった。

しかし、隙間の向こうから生暖かい風が吹き込んで来た時、鍋中が自分の後ろにいる油儀に何かを言おうと振り返った。

「……」

二人が視線を一度だけ合わせた。だが、振り返った鍋中は、話しかけるのを止めて、また黙ったまま歩くのを再開した。

その後も二人は真っ直ぐに歩き続け、会話をする事は一度も無かった。

どのぐらい進んだのだろうか、二人は建物の隙間から店の裏手に出る。

建物の裏手に広がる風景は、枯れた茶色いススキが生えた陰気くさい広場だった。

早朝なのに空は怪しくも薄暗く曇り、生暖かい気味の悪い風が吹いていた。

その風が、辺りのススキをガサガサ揺らして一段と怪しさを倍増させている。商店街の裏手とは思えない広い草原だった。

明らかに普通ではない場所。

おそらく二人は、別次元へのトンネルを通って他の空間に入ってきたのであろう。

「あの道の奥だね……」

「ああ、そうだ」

そして二人は、ススキの間にある細い道を奥に向かって更に歩いていく。

「ダレカキタ……」

「ホントダ、ダレカキタ……」

ススキに挟まれた細道を歩く二人に、ススキの奥の方からヒソヒソと声が聞こえてくる。

人の様で人ではなさそうな奇怪な声だった。薄気味悪い感じがする。

「アレ、アブラスマシジャネエカ?」

「ホントダ、アブラスマシダ……」

「ナンデココニキタ?」

「ソンナノオレニキクナヨ、ホンニンニキケヨ……」

「バッ、バカヤロウ、オレハシャイナンダ、ソンナコトイキナリキケネエヨ!」

「ソウナノカ、ジャア、オレキイテコヨウカ……？」

「エッ、マジ！？」

「ウソピョン」

「シネ！」

二人にも其のヒソヒソ話しは確かに聞こえていたが、その間抜けさの為に二人は、完全に無視して先を急ぐ。

鍋中が、チラリと目だけでススキの影で蠢く複数の影を確認する。

おそらく、影の数は二十か三十は居るだろう。

だが、その影達に敵意が無い事を、二人は知っていた。

少なくとも、自分達には……。

しばらくしてススキの草原から開けた場所に出る。その広場の中央には小さな御堂がポツリと建っていた。

その大きさだと、中は四畳半も無いだろう小さな御堂。

木で出来た二枚の障子扉は障子紙が破けて穴だらけになっている。そして屋根の瓦はガタガタに崩れ、隙間から雑草が所々と生えていた。

そのボロボロの御堂は、かなりの年月の間、修復される事無く放

置されている物に見えた。

儀油儀と鍋中の二人は、そのボロボロのお堂の前に横並びになって立ち止まる。

「よう、久しぶりだな、一七五（いなご）」

<　一七五一家・中編　>

御堂に向かって鍋中が声を掛けると、僅かに御堂の障子扉が開き、その隙間から大きな瞳が縦に二つ並び外を覗き見る。

その二つの瞳。一つは力強く輝いていたが、もう一つはくすんで輝いていない。

「なんだ……、化け狸にあぶらすましか……」

御堂の中から聞こえてくる声は、何処となく薄気味悪く萎れた渋い声だった。老人のような声だったが、貫禄が感じられる。

「そろそろ此処にも姿を現す頃だと思っていたぞ。……だが、二人揃って来るとわはなぁ～……、昔を思い出す……」

「春婆怒が……、姿を現した」

世間話にでも持ち込みそうな一七五のペースを油儀が妨げる。

「噂は聞いているぞ。……だからどうした？」

油儀の話に、御堂の中の一七五は即答で返すが、そんな事には興味がないといわんばかりの口調であった。

「春婆怒村で、鬼々蜘蛛も殺られたぞ？」

「あいつはぁ……、破門だ……」

「破門？」

若干歯切れの悪い回答を返した一七五に、鍋中が真意を聴きなおす。

「五十年前、親分であるワシの言葉も聴かずに自分の手柄だけを望んで勝手に出て行ったんだ、……破門になって当然だろ」

「まあ、そんなことはどうでもいいわなぁ」

鍋中はそう言いながらズボンのポケットから煙草を取り出すと、口に一本銜えて百円ライターで火をつけた。

「こらこら、化け狸、ここは禁煙だぞ」

「え……、なんだそれ……」

「いいから、早よ消せ」

「ああすまん……」

「お前もいい年なんだから、もうちょっと健康に気を配ったほうがいいぞ」

「……」

鍋中は一七五に言われるがまま、バツの悪そうな顔で煙草を形態灰皿で始末する。

「妖怪変化が健康を気にするようになったら、世も末だわな……」

そう呟きながら鍋中は形態灰皿をトレンチコートのポケットにしまいこむ。

普段は喫煙する油儀も、鍋中の隣で同じことを考えていた。

「はぁ～……、話を戻すぞ」

一度溜息を付いた油儀が、それた話の修正をはかる。

「率直に言うぞ、一七五。お主に春婆怒を倒してもらいたい」

「断ると言ったら」

一七五の速答。

しかも油儀には予想外の答え。

「貴様、それでもかつては我々と共に三本柱と呼ばれた存在か！」

その即答に油儀の表情が何時ものすましたものから別人の様に変わり、気を荒立てて怒鳴り声を上げる。

その顔は、すまし顔とは程遠い鬼面のようなつり目をしていた。

まさに鬼の形相というものだ。

すまし顔が個性で売りのあぶらすましが、これでは何の妖怪か分からない。

「徳の油儀とまでいわれたお前にしては、興奮しすぎだぞ……」

油儀の横に居る鍋中が、興奮する連れを落ち着かせようと声をかける。だが、その言葉は今の油儀には届かなかった。

尚も御堂に向かって怒鳴り散らす油儀。

「貴様、我らが主!、奥方様が春婆怒に殺されたのじゃぞ!!」

「先に仕掛けたのは、我らが虎野町の妖怪達……。春婆怒は、降りかかる火の粉を払ったに過ぎん」

御堂の中からの回答は、真実である。

「貴様には、忠義の心は無いのか!」

「ぬかせ、あぶらすまし。ワシは既に忠義を果たし、そして……春婆怒に挑み敗れた」

その話もまた、真実である。

かつて一七五は、春婆怒と戦かっている。そして敗れた。

「もう春婆怒と戦う力は残っておらぬは!」

「ぬぬぬぬぬぬ……」

油儀は、そのことを知っての上で話をしている。

「それに歳を取りすぎた、もう戦うのは無理じゃ」

「ふっ、力の一七五も、年には勝てぬか……」

「だまれ、技の鍋中」

鍋中を嗜めた一七五の声は、今までの中で一番明るい口調であった。

二人の旧友の会話を聴いていた油儀が、少しずつ冷静を取り戻し始める。

「ならば、子分に手柄を譲れ、一七五や」

そして油儀の口から出た提案。それに周りの者が反応を見せる。

「エ、オレタチヤッテイイノカ？」

「オオ、チャンストウライダー」

「オマエ、ヤリタイノ？、オレハイイヤ」

「ナンダヨオマエ、クウキヨメヨ、ミンナノテンションサガルダロ」

「ア、スマン、オレ、ガンバル！」

油儀の言葉に、ススキの影に蠢く連中が血気の声を漏れる。

「あぶらすまし、ワシの子分たちが、あの春婆怒に勝てると思っているのか？」

一七五が測った自分の子分達と、春婆怒との実力差。その現実は、

残念ながら遠く及ばない物であった。

「アッ、オヤブン、キビシイヒトコトキター！」

「一七五、……春婆怒も、あの頃とは違う」

冷めた瞳の油儀が、呟くように言う。

「？」

一七五が、不思議そうな視線を油儀に向ける。言っている意味が理解できていない様子だった。

「昔の春婆怒には、人並みはずれた強さの使い手が付いていた。しかしだ、もう、あの頃とは違う。今の時代、あれだけの鬼神の如く強い使い手が存在すると思うか？」

油儀の言いたいことを、隣の鍋中が分かりやすく解して話す。

「そう言う事じゃ」

完全に冷静さを取り戻した油儀は、何時ものクールな口調で鍋中の説明どおりだと答えた。

「九十九神は、使い手の実力によって大きく其の強さが左右される……か」

油儀と鍋中の説明どうりだと、一七五も御堂の中で頷いた。

三人の会話に、静かな間が生まれる。

そして、しばらくして一七五が口を開いた。

「ならば、子分達の好きにさせるは……」

<一七五一家・中編>（後書き）

ダメだ～。

文章がダメだ～。

もっと勉強しないと～。

（＊：．．；。：；益：；。：；）　ふぅぅ～～ん

<　一七五一家・後編　>

一七五の妥協。

その返答が、ススキに囲まれた広場に複数のざわめきを上げさせる。

「誰でもいい、春婆怒を討ち取る自信があるものは、ここに出て来い」

そのざわめきを一喝するような一七五の台詞に、一瞬だがヒソヒソ話が止まる。しかし、しばらくの沈黙の後に、ざわめきは更に大きな声で再開された。

「オマエイケヨ」

「エッ、オレカヨ、ムリムリムリ」

「オマエコソイケヨ」

「コラ、オスナヨ！」

広場の周りに生い茂るススキの中が、がやがやとざわめき合っていると、一人の背の高い男がススキの中から姿を現す。

「俺がやってやるよ……」

「ア、　アイツヤルキカ。」

「オー、スゲー」

ススキの中から出てきた男。身長百八十以上あるが、体つきはかなり細い感じであった。

その男は、大きな眼をギロギロさせながら、御堂の前に歩み寄る。

「ほほう、十郎太か……」

「親分、是非俺にやらせてくれねえか？」

「確か鬼々蜘蛛は……」

「そう、破門されたとはいえ、あいつは俺の舎弟、俺の手で仇を取りたいです」

そう言うのっぽの男の口調は、舎弟の死を悲しむような口調ではなかった。

「おい、十郎太。いい口実見つけたじゃねえか」

今度は、背の高い男が出てきた反対側のススキから、筋肉ダルマのような男が現れる。

「虫玄武か……」

御堂の中から男を確認した一七五が、男の名前を呼ぶ。

「一七五の親分、この仕事はこんなヒョロヒョロ野郎より、このあっし、虫玄武兜丸にまかせちゃくれねえか！」

嫌味のこもった台詞を述べススキの中から出てきた男は、のっぽの男を睨みつけながら御堂に歩み寄る。

「誰がヒョロヒョロだと、短足野郎！」

十郎太の言う通り、虫玄武と呼ばれた男の足は短い。

「黙りやがれ、このガリガリマンが！」

虫玄武の台詞もまた、真実にかなり近い。

のっぽと筋肉ダルマは、そう言い争いながら三人の前で睨み合う。

「短足よりましだわ！」

十郎太は勝ち誇ったような笑みで虫玄武を見下ろす。

しかし、その台詞を聴いていた油儀と鍋中の顔も若干だがヒク付いていた。二人の体型も足が短めであったからであろう。

「た・ん・そ・く・！」

「なにーー。だが、俺様の方がカッコイイわい！」

十郎太の罵倒に対して、虫玄武の気合の入った台詞。しかしそれには何の根拠も無いものだった。だが、力押しで無理やりに納得させようとする勢いだけは強く感じられた。

「ほ～、上等だ。ますは春婆怒の前に、てめーを八つ裂きにしてや

ろうか、虫玄武！」

「てめーに、そんな度胸があるのか、十郎太よ～！？」

お互いの中にライバル心があるのか、二人は身長差から生まれる段差を余所に、下と上から顔を突き合わせて睨み合う。

「ほほう、相変わらずいきのいいのが揃ってるようだな、一七五」

若くも血気盛んな二人を見て、鍋中がクスリと笑う。

「一七五や、ならばこの二人に任せてみてはどうだ？」

ここぞとばかりに油儀が押しを入れてきた

「……」

御堂の中からは直ぐに返事は返ってこなかった。

「どうだ、一七五……」

最後の一押しといわんばかりに鍋中が問いかける。その問いに、一七五がどう答えるか四人の視線が御堂に集中していた。

「……好きにせい」

観念したかのような一七五の回答に、四人がほっとした空気をかもし出す。

しかし、その回答に、一七五が更に付け足しを語り始める。

「ただしだ……この件に関しては、一七五一家としては関わらん。お前ら個人の手柄として戦いやがれ……」

「個人……ですかい？」

虫玄武は意味が分からないといった表情をしていた。

「一七五、感謝する……」

そう言って油儀が深ぶかと頭を下げた。

「だが……、この二人だけでは心配だな」

「あっしら、そんなに不甲斐無いですか、親分！」

一七五の台詞に虫玄武が食ってかかる。

「否、否、戦力ではない……。ただ……」

一七五の心配は別にあるようだ。

「黒童子、蛾蝶姫、ここにまいれ」

一七五の呼びかけに、ススキの中から一人の少年が姿を現す。

「はい？、なんですか親分さん？」

現れたのは歳の頃は十三歳から十五歳ぐらいで、上下黒の学生服を着た少年であった。

身長は低くい少年で、百五十センチ前後。黒の学生服以外に特徴の少ない顔立ちで、何処にでも居そうな少年だった。

そしてもう一体、淀んだ薄暗い空の彼方から飛んできた巨大な蝶の妖怪。

その巨大な蝶の妖怪は、翅を休めるかの様に御堂の屋根の上に止まると、ゆっくりと幾度か翅を揺らして見せた。

両翅を大きく広げれば、三メートルは有るだろうか蝶の妖怪。

巨大な翅には人間の瞳のような模様が有り、その模様が時折、右や左に黒目だけが動いていた。

その行動は、高い場所から下に居る者達を観察するかのようだった。

「この二人は？」

油儀が一七五に問いかける。

「十郎太と虫玄武だけで人間界に出したら、何をしでかすか分からんからの」

「僕達は監視役ですか？」

自分を指差す少年に対して、一七五は「そのとおり」と答えた。

それだけ十郎太と虫玄武の二人の荒くれっぷりが酷いのであろう。

「じゃあ、僕は戦わなくても良いのですね。正直言って僕は、暴力とか苦手ですから」

あどけなさの残る表情で少年はそう言いながら自分の頭を撫でる様に掻く。

「ああ、サポート程度でいい。蛾蝶姫も頼むぞ」

「……」

巨大な蝶の姿をした蛾蝶姫からは、一七五の言葉に対して返答は無かった。

そして、御堂の屋根に止まる巨大な怪蝶は何もいわずに、ただ只管に大きな瞳の付いた翅を揺らすだけであった。

<　恋愛　>

早朝、商店街の入り口前に停められた高級車の中に残る二人の女性。

一人は、運転手の『轟朧（とどろぎおぼろ）』。

もう一人は、油儀の第一秘書『蓋口静香（ふたくちしずか）』であった。

朧は運転席で携帯電話を弄繰り回し、静香はノートパソコンを開き何やら仕事をしている。

「ね～、静香～……」

「ん～？、なぁに朧」

携帯を弄繰り回している朧が、後部座席の静香に話しかけた。その口調は、運転手から社長秘書への呼びかけというよりも、もっとフレンドリーな語り方であった。

「あんたさ～、最近、龍信とはどうなってるのぉ～？」

朧の言葉に、ノートパソコンのキーボードを叩く静香の手がピタリと止まり、綺麗でクールな顔立ちがヒクヒクと引きつり始めた。

「……この前……別れたって、言ったでしょ……」

「え～～！、あんた、あれ本気で言ってたのぉ～！？」

「もう、一ヶ月ぐらい仕事でしか会ってない……」

サングラスを掛けた朧がルームミラーで後部座席の静香を窺うが、静香は俯いたまま暗い顔をしており、朧がこちらを見ていることには気付いていなかった。

「でも、龍信のヤツぅ～、よくもま～別れるのに納得したわねぇ～……」

静香が膝の上に有るノートパソコンをパタリと閉めると、それとほぼ同時に朧も携帯電話をパタリと閉じた。

「……納得も何も、別れましょうとは言ってないから」

「じゃあ～、自然消滅狙ってるのぉ～？」

運転席の朧は、「あちゃ～」といった顔で脱力する。

「その方がお互いにさ、いいかなって思って……」

「ふぅ～～……」

朧は、ため息を付きながら掛けていたサングラスを外す。

「あんた達はどうなのよ？」

今度は静香が朧に質問した。それは自分のことから話題を逸らそうとした言い方であることは、朧にも分かっていた。だが、ここは仕方ないと思い親友の言葉に話を合わせる。

「私達はラブラブよぉ～。最近さぁ～、哲郎の仕事が忙しかったから会う時間が少なかったけどねぇ～」

それもこれも、ここ最近の九十九神の出現が原因である。

「ふぅ～ん……」

静香が、朧が話すのろけ話を聴いて詰まらなそうに返事を返した。

「ねえ、静香～。明後日さ～、私さ～、有給で休んでいいかなぁ～」

朧の話に静香は分厚い手帳を取り出すと、それを開いて細い指先でページに書かれた油儀のスケジュールをなぞって行く。

「ええ、いいわよ。明後日なら大した移動はないから、私が運転するわ」

「サンキュー静香～～。明後日、哲郎が休みだからデートに行くのぉ～」

「はいはい、勝手に何処にでもいってらしゃいな……。」

静香は、そう言いながら若干だがイラっとした感情を堪えながら厚いスケジュール帳を鞄にしまう。

「うらやましい～？」

「べっ、別に……！」

図星らしい。

「……」

わざとらしく言った朧を静香は無視すると、寂しそうに車の外に視線を移す。

「貴方もさぁ～、何が気にくわないか知らないけどさ～。龍信と仲直りしたらいいんじゃないのぉ～」

静香は、黙ったまま外を眺めながら返事を返さなかった

「……」

朧が再びルームミラーで静香の様子を窺うと、静香は膝の上で拳を悔しそうに握っていた。

静香は、心の中で「大きなお世話よ！」と念ずる。

そんな表情の静香を、朧は心配しているのか楽しんでいるのか分かりにくい表情で見ていた。

それに気付いた静香は、ルームミラーに映る朧の顔を、一度だけチラリと見ると愚痴を言い始める。

「……アイツのさ、……アイツの何が許せないかって……」

ルームミラーに映る静香の瞳には、うっすらと涙が滲んでいた。

「もう連絡を取らなくなって一ヶ月以上経つのに、何も言ってこな

いのよ……、信じらんない！」

　朧は「あー、なるほど」といった顔をして、車のハンドルに肘を付く。

「しかもさ、この前なんか、調査費の領収書の中に風俗の領収書まで混ぜて出して来たのよ！」

　静香の怒りの混ざった愚痴に朧は「あららー」と困った顔で首を傾げながら龍信の行動に呆れ返っていた。

「もう、信じられないわよ……」

　おそらく恋人の眞鍋が朧に黙って風俗に行っていたら、間違いなく問答無用で殴り倒しているだろう。

「でもさー、ほらぁ～、龍信て昔からぁ～、そういったところは子供じみてるじゃない～」

　それでも朧は、無理やりにも近い形で、龍信のフォローをして庇う。

「……うん」

「静香も、そんなところが好きで龍信と付き合い始めたんじゃないのぉ～」

「……うん」

　朧の言葉に静香は、昔を思い出しながら俯き、顔をほのかに赤ら

める。

「静香が大人になってさぁ～、ちゃんとあのおバカを引っ張っていかないとダメだよぉ～。ほったらかすから、変な店とか行っちゃうんだよぉ～」

「……そうなのかしら」

「うんうん、そうよ～。静香から誘ってさぁ～、何処かデートにでも行きなよぉ～」

世話焼きのお姉さんタイプの静香と、好き勝手な事ばかりするが何処か母性本能をくすぐる猫田龍信。

朧が見るからに、結構お似合いのカップルだと思っているのだが……。

「じゃあ、今度連絡して、山登りにでも誘ってみる……」

明らかにずれている静香の台詞に朧は、シートからズルリと滑り落ちた。

「いや……、出来ればさぁ、食事とかの方が良くないかなぁ～。それとかさぁ～、あんたが龍信の所にでも御飯を作りに行ってあげるとかどう～?。静香、結構料理得意じゃんかぁ～」

そう言いながら朧は、シートから滑り落ちた体を立て直す。

「料理を作りに行くのはダメよ……、」

曇った顔で静香が答える。

「妹の珠美ちゃんの方が、料理は上手だし……」

「あ～、あの童顔巨乳かぁ～……、あれは強敵よねぇ～」

朧は、自分といい勝負の出来る珠美のアレを思い浮かべながら言った。アレは、確かに静香にとって強敵であろう。

「じゃあ～、龍信を静香の部屋に誘えばいいじゃんかぁ～。それで御飯を作ってあげて、そのあと色々してあげてぇ～！」

胸の大きさは朧や珠美にはかなわないが、静香の胸とて決して小さいわけではない。プロポーションもスレンダーで悪くはないし、もしも、色仕掛けに出れば、そこらの男共なら生唾を飲んで尻尾を振るであろうスタイルである。

「う、うん、そ、そうしようかな……」

静香は朧のアドバイスに、頬を赤らめながら初心な表情で答えた。その様子から、とっても色仕掛けは出来そうでないと朧は落胆していた。

「うんうん、そうしなよ～」

それでも親友である朧には、大人っぽい見た目よりも可愛らしい中身の静香を応援してあげずには居られなかった。

「ありがとう、朧……」

静香の顔から少しだが曇りが晴れるのを朧はルームミラーで確認すると、にっこりと微笑む。

「あ、会長が帰ってきたわ。」

「本当だぁ」

そう言って朧は車から降りると、帰ってきた油儀に一礼して後部座席のドアを開ける。

恋する二人は、こうして何時もと同じ一日をスタートさせるのであった。

<恋愛 >（後書き）

私には、女心は難しすぎます！

<妖怪のお仕事　>

のどかな田園風景が広がる郊外。

田んぼの真ん中に立つ大きな鉄塔が、電線で繋がり遠くへと続いていた。

その鉄塔の足元に、大きな墓地があった。

昔から、この辺一帯の集落が使用している集合霊園。

その霊園に続く一本の田んぼ道を一台の乗用車が走って行く

車内には二つの影があった。運転しているのは凛々しい顔つきの青年で、助手席にはパーカーのフードを被った小柄な男が座っていた。

八尾弦徳と小鼠男の扈鼠の二人である。

彼らは連合から貸し出された車で、正面の霊園を目指してやって来た。

「扈鼠さん、ここですか？」

車を墓地の手前で止めた八尾が、助手席の扈鼠に尋ねる。

「ええ、ここの筈です……」

扈鼠がそう言うと二人は、シートベルトを外した後に車から降りて、大きな墓地の敷地内に進んで行く。

「じゃあ、弦徳様は此処でお待ちを、腐食鬼を警戒させないように僕一人で交渉してきます」

「はい、扈鼠さん、頑張ってくださいね」

扈鼠は笑顔の八尾に見送られ一人で墓地の奥へとヒョコヒョコとした歩き方で進んで行く。

この扈鼠と呼ばれる鼠の妖怪。体は百六十センチ程度の小柄な体型に、頭と尻尾だけがネズミの姿で、その他は痩せた人間の姿をしている。

見た目は奇怪その物では有るが、つぶらな瞳が可愛らしくも見え、若干の愛らしさも感じさせていた。

扈鼠は、妖怪連合虎野町市支部・勧誘交渉班に組する妖怪で、このように新たに出現した妖怪達に接触しては、妖怪連合に勧誘するのが仕事であった。

更に、その妖怪変化が連合に入らなかった場合には、人間界に大きな危険を及ぼさないかを判断するのも役目で、もしも危険と判断した際は、処理班に報告して大事になる前に始末してもうのも彼の役目であった。

大抵が危険と判断去れた妖怪は、その場で始末されるのが流れである。

その流れになった場合の為に、ここ数日間、八尾弦徳と扈鼠の二人は、組織の命令でコンビを組んで行動していた。

「さぁ～て～、最近噂の腐食鬼さんは、どこでしょね～」

そんなことを呟きながらヒョコヒョコと歩く扈鼠の耳に、ガリガリと小さな音が聴こえてくる。

扈鼠は被っていたフードを取ると、可愛らしい小さな耳を立てて、音のする方へと向ける。

何かを食べる音が聞こえた。

スナック菓子よりも硬い何か、煎餅よりも硬い何か。そんな硬い物を食べるような音が聞こえてきた。

「んん～、こっちですかね～。おっ、発見」

扈鼠が、その音に誘われて向かった先には、古びた墓石が並んでいた。

その墓石の影で蠢く怪しい一つの物体。

ボロボロの薄汚れた衣類を着たホームレスが一人居た。それは、しゃがみ込んで何かをガリガリと食べており、近づいて来た扈鼠には気付いていない様子だった。

「こんにちわ～」

出来るだけフレンドリーに、出来るだけ警戒されないようにと心

がけて扈鼠は、そのホームレスに背後から声を掛けた。

するとホームレスは動きを止めて、ゆっくりと言葉の方へと振り返った。

「腐食鬼さん、……ですよね～？」

振り返ったホームレスの顔は、まるでハリウッドの特殊メイクの達人が、持てる限り技術を施したゾンビの様にグロテスクな表情をしていた。

両目は茶色く濁って右左が別々の方向を向き、鼻と唇の肉は削げ落ち白い骨や前歯が露出していた。

そして顔全体が紫色と茶色に変色しており、髪の毛はボサボサで所々皮膚が剥がれかけていた。

妖怪である扈鼠にすら気持ち悪く見え、吐きそうになった。

「だぁ～れぇ～じゃ～……」

振り返った腐食鬼は、先程まで中身を食べていた骨壷を地面に置くと、ゆっくりと立ち上がって扈鼠を茶色く濁った目で見る。

「こんにちわ、僕、妖怪連合虎野町市支部の扈鼠といいます～」

「だぁ～れぇ～じゃ～……」

どうやら鼓膜は腐っている様だ。扈鼠の言葉は届いていない

「あぁ……」

扈鼠はピンッと来た。

ここ数日、八尾弦徳と組んでの仕事の記憶を振り返る……。

先日の鵺の際も、ここへ来る前の仕事だった頽馬（たいば）にしてもそうだ。

このパターンは、前の仕事と同じ滑り出し。

「だぁ～れぇ～じゃ～……」

「この反応は……」

そう扈鼠が呟いた直後、凄い表情で腐食鬼が扈鼠に向かって走り出す。

間違いない、この反応は前の仕事と一緒であると瞬時に確信した扈鼠は、こちらに向かって走り出した腐食鬼にクルリと背を向けて走り出す。

「ひぃぃぃぃぃぃ！。また人語が通じるほど脳みそが発達してないーーーー！」

「にぃぃぃくぅぅぅぅ！！」

腐食鬼は、もう骨には飽きたらしい。そして肉が食べたくなったようで、扈鼠を、生肉を追いかけた。

「僕を食べる気ですかーーーー！？、ひぃぃぃーーーー！！」

甲高い声で泣き言を上げる扈鼠は、襲い掛かる腐食鬼から全力で逃げ始める。

「今回は言葉が理解出来るほど脳が発達してないじゃなくて、理解できなくなるほど脳味噌が腐っちゃってるのかなーーーー！」

追うから逃げる、逃げるから追う二匹の妖怪。

短距離ランナーのような綺麗なホームで折ってくる腐食鬼を引き連れて、扈鼠は全力で八尾弦徳の元へと逃げ帰る。

「弦徳様～～、ダメです、三連荘でダメですーーー！。また、交渉できる状態じゃありませんでしたーーー！」

こちらを目指して走ってくる扈鼠と、その後ろを走る腐食鬼を確認した弦徳は、「またですか……」と呟くと、手にした日本刀を腰に当てる。

「まずは七人岬……、行きなさい！」

八尾弦徳の周りにあった墓石の影から現れた七人の僧侶たちが、八尾の命令どおりに腐食鬼に向かって走り出す。

また、何時もの流れで後始末の開始であった。

<　仕事帰りに一杯　>

町に日が落ちると会社帰りのサラリーマン達が、同僚達と外で一杯始める時間帯へと変わっていく。

この二人も、ひと仕事を終えて、馴染みのおでんの屋台で和んでいた。

その二人とは、八尾弦徳と、鼠妖怪の扈鼠である。

「はぁ～、弦徳様～、本当に最近、ついてないですわ～～」

「まあまあ、扈鼠さん、気を落とさないで」

おでんの暖簾が下がる屋台の長椅子に座る八尾弦徳と扈鼠の二人は、熱々のおでんをつっつきながら熱燗を飲んでいた。

そんな二人のお客が居る屋台の頭上を、時折激しい音を立てながら電車が走っていく。

「おやっさん、僕に卵と大根ちょうだいな～」

「へい、たまご……と、大根……と」

黒のジャージに少し汚れた白いエプロン姿を身に着けた屋台の親父が、扈鼠の注文したおでんの具を皿に盛る。そして、明るい声と共にお客へと差し出した。

「へい、お待ち」

「ありがとー」

皿に盛られたおでんを受け取った扈鼠は、割り箸を両手で二つに割ると、あつあつの大根を割り箸で食べやすい大きさに切り、口をほくほくさせながら美味しそうにほおばる。

「んーー、親父さんのおでんは、味が染みてて美味しーねー、も～最高！」

「へい、どうもです」

扈鼠のお世辞に屋台のおやじは、頭を掻きながら照れくさそうなリアクションをとるが、その顔には、目も鼻も口も無かった。そう、屋台の親父は、のっぺらぼうである。

「でも、弦徳様～」

「なんです？」

何やら質問しようとした扈鼠を横目に、八尾弦徳はグラスからうっすらと湯気が立つ日本酒を口に運んだ。

「いいんですか、僕なんかと組んで、こんな仕事してて……？」

こんな仕事とは、勧誘失敗後の審査で、危険と判断された妖怪の始末である。

「……油儀会長の指示ですからね」

八尾の意思で、この仕事を行っている訳ではないようだ。　妖怪連合の任務としてこなしているのだ。

「ですが、噂が本当なら、春婆怒が現れたとか……」

「……」

八尾弦徳は、コップの中の日本酒が作る波紋の輪をじっと見たまま何も答えない。

「春婆怒と言えば、弦徳様の……」

扈鼠の言葉に、のっぺらぼうの親父も興味があるのか、目は無いが視線を八尾弦徳に向けていた。

「……油儀会長は、心配してるのですよ」

「心配……？」

扈鼠が小さな頭を傾げる。

「そう、私が春婆怒と戦って、万が一にも負けるのではないかと……、ね」

「ですが、弦徳さまは処理班の中でも一番の実力者。事実、筆頭の肩書きを頂いてるじゃないですか？」

処理班筆頭役の肩書き。それは、その支部で一番の武芸の達人を意味している。

「ふふ、その肩書きも、ただのコネの力と思ってる人も多いですしね」

扈鼠は、グラスの日本酒を一気に飲み干して、テーブルに大きな音を立てて置く。そして、つぶらな瞳で怒った表情を作り大声を出した。

「そんなことありません！、弦徳様は強いです！、一番です！、僕の中だけですが一番です！」

「君の中だけですか……、わりと狭いよね」

二人が飲み始めて、まだ一時間も立っていないが、扈鼠は早くも酔い始めている様子だ。

「おやじさん、もう一杯ください！」

「へい」

屋台のおやじは、目も口も無いが、にこやかな表情で愛想良く扈鼠のグラスに一升瓶で日本酒を注ぐ。

「扈鼠さん、もう酔ってますね」

その通り。

「しょんなことは、ありまへん！、夜はこれきゃらでちゅーー！」

言葉とは裏腹に、ろれつの回らなくなった扈鼠を八尾は、優しく

見守りながら、屋台の親父にグラスを差し出し、自分も熱燗を注いでくれと無言で注文する。

「ハハ」

八尾が扈鼠を見ながら笑っていると、のっぺらぼうの親父もまた、八尾のコップに熱燗を注ぎながら優しく笑った。

「油儀会長の考えでは、春婆怒に一七五一家を当てると言ってました。そうなれば、どちらにしても私の出番は回ってきませんよ」

「うへ～、あの一七五の親分が動くのですか……」

今まで血気していた扈鼠が、一七五の名前を聴いて大人しく日本酒を飲み始める。

そして三人の間に、しばしの沈黙が流れると、屋台の頭上を電車が通り過ぎて行くけたたましい音が響き渡る。

「こんちわ～」

「へい、いらっしゃい」

電車の音が小さくなると、屋台の暖簾をくぐって一人の女性が顔を出した。

「やあ、朧さん」

暖簾から顔を覗かせた女性を見た扈鼠が彼女の名前を呼んだ。それは、油儀会長の運転手、轟朧であった。

「あら〜、珍しい組み合わせぇ、弦徳に扈鼠じゃない〜。おやっさん、私、トリビね〜」

「へい、お待ちを」

朧は先客の二人に挨拶をすると、二人が座る長椅子の端に腰掛ける。

カウンターを前に右から朧、扈鼠、八尾弦徳の順番で並ぶと、小さな屋台はいっぱいになった。

「へい、ビールです」

屋台の親父は、しゅぽんっといい音を立ててビールの栓を向くと、注文した朧の前にグラスとビール瓶をそっと置く。

「あと〜、ちくわと大根とはんぺんね〜」

「へい、お待ちを」

のっぺらぼうの親父が、ビールとグラスを置いた手を下げるよりも早く、朧は更におでんの注文をした。

「朧さん、今仕事上がりですか〜」

のっぺらぼうの親父が、朧の注文したおでんの具を器に盛りつけようとしていると、隣に座る扈鼠が朧に話しかけてきた。

「そうなの〜」

扈鼠の質問に笑顔で答える朧は、何故か隣に居る扈鼠の頭を指先で優しくグリグリとする。

頭を綺麗な指先でグリグリとされている扈鼠も気持ち良いのか、朧にされるがままで目を細めていた。

「へい、お待ち」

しばらくして朧が注文したおでんの具が差し出される。

「朧さんは、油儀会長の運転手ですよね？」

「ええ、そうだけどぉ～？」

そう言いながら朧は、ちくわを赤いルージュの唇を尖らせてフーフーする。

「じゃあ、会長から春婆怒について何か聴いてませんか？」

扈鼠の質問に、朧はきょとんとした顔をしていた。そしてパクリと一口だけちくわを食べると扈鼠の質問に答えた。

「ん～、なぁに～、そのハルバドって？」

もぐもぐとちくわを食べながら朧は、扈鼠に聴きなれない名前の主が何者かと訊き返す。

「えっ、知らないんですか！？」

「あららぁ～、知らないとまずい～？、時代遅れ～、流行遅れぇ～？、如何しましょ～……」

三人の男妖怪は、「いやいや、そうじゃない」と顔の前で手を振る。

どうやら本当に朧は、春婆怒の事を知らない様子であった。

「ああ～、朧さんは元々京都の出身だから、知らないのか～……」

「ねぇ～ねぇ～、なぁに、そのハルバドって～。朧にも教えなさいよぉ～」

困った表情で眉毛を八の字にさせる朧は、そう言いながら扈鼠の頭を抱き寄せ、その豊満な胸で包む様に確保する。

「ちょっと、朧さん、止めてくださいよ。いや、止めないで、モットしてもらいたいかも……はふぅ～ん」

アルコールの影響で赤くなった扈鼠の顔が、朧の攻撃で更に赤くなり、おでんの様に湯気を上げる。

「……まあ、他人にぺらぺら話すことでもない……か。おやっさん、おあいそ」

「へい」

はしゃぐ朧と扈鼠を余所に、そう言い席を立つ八尾弦徳。

「あらら～、弦徳～、もうあがり～」

「ええ、私はこれで失礼しますよ。二人とも飲みすぎには注意してくださいね」

朧は注意しても飲みすぎることを八尾は昔から知っている。今の言葉は、礼儀として言ったまでにしか過ぎない。

「はひぃ～……」

「はぁあ～～い、分かったよぉ～、弦徳～」

朧の胸の中で、息苦しそうでありながら幸せそうな返事を返す扈鼠を余所に、朧は詰まらなそうに返事を返す。

自分が来たばかりなのに、もう帰ろうとしている八尾への当て付けのつもりなのであろう。

「特に朧は、車で来てるんでしょ？」

「もちろんよ、私から車とお酒をとったら何の妖怪か分かんなくなるじゃないの～」

飲酒運転が厳しくなる時代でありながら、朧は車で飲みに来ている。妖怪じゃなければ、非常識にも程がある行為。

八尾弦徳は朧に「はいはい」と言いながらお会計を済まして屋台を出て行った。

電車が走るガード下。コンクリートの橋桁を背に営業するおでんの屋台を出た八尾弦徳は、その大きなコンクリートの橋桁を見上げ

た。

「車と酒か……、今の時代、一緒に窘めない趣味だな」

弦徳が見上げたコンクリートの壁には、斜めに張り付く一台の赤いスポーツカーがあった。

それを見上げた弦徳は、溜息を一つ付くと、ガード下の路地を一人で寂しそうに出て行った。

振り向けば、八尾が先程まで飲んでいたおでん屋台からは、未だに朧と扈鼠の楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

その声に背を向けた八尾は、とてもそんな気分にはなれなかった。

「春婆怒か……」

春婆怒の名を口にした八尾の顔は、凛々しくも真面目な表情に変わっていく。

<　来訪者　>

夜が明けて、時刻は１１時過ぎ。

まもなく昼食の時間が迫っていた。

空を見上げれば、太陽が雲ひとつ無い晴天を覗かせ、虎野町をサンサンと眩しく太陽の光で照らしていた。

そんな満点の天気の中、二人の人物は三階立ての貸しビルの前にやって来た。

「ここか、ここの二階か？」

「……」

がっちりとした体型で若干だが背の低い男がそう言うと、隣にいる更に背の低い幼い少女は、何も返答をせずに真っ直ぐビルの二階を眺めていた。

分厚い胸板で筋肉質だが、ほっそりした手足の男。その男は、年増美女、天才痩せっぽち、筋肉男と言った感じで、昔のアニメでドロボーの三人組が居たが、その筋肉男にキャラが良く似ていた。

筋肉男は、何も返事を返さない少女を一度つぶらな瞳で見た後に、目の前のビルに向かって歩き出す。

ツインテールに小さな顔の可愛らしい少女は、自分を置いて歩き出した筋肉男の背中を眠たそうな目でしばらく見ていると、距離が

離れた事に今さら気付いたのか、未だ寒空の続く季節なので履いているミニスカートを揺らしながら男の背中を追っていく。

二人はコンビニ横にある階段を上って、二階にある猫田探偵事務所へと向かっていった。

「たのもーーー！」

筋肉男は、ノックも無しに問答無用で事務所のドアを開けて中に入っていく。

「い、いらしゃいませ！」

いきなり入ってきた筋肉男に、そう返事をした珠美は、驚いた顔を隠す様に口元に丸いお盆を当てた。

「だ、誰だ！」

ソファーに座って温いお茶を飲んでいた虎二も驚いて立ち上がると声を上げる。

「俺だ！」

しかし、虎二の声を弾き返すように、筋肉男も我を主張する。

いきなり事務所に怒鳴り込んできた男に、事務所内に居た虎二と珠美が、唖然としながらも各自対応を見せる。

「だから誰だよ、アンタは誰だ！」

「お前こそ誰だ！」

「俺は、俺様だ！」

「俺だって俺様だ！」

「いったい貴様、何者だ！」

筋肉男と虎二が、お互い引く事無く怒鳴りあう。話が先に進まない。

「ここの、者ですが……」

二人の会話では、らちが明かないと判断した珠美が的確な回答を返す。

「お前は誰だ、名を名乗れ！」

「始めまして、俺様は一七五一家の暴れん坊、虫玄武兜丸ショニー様だ！。……以後ともよろしく！」

「ジョニー……？」

虫玄武が、偉そうに自己紹介を終えると、後ろにいた少女がボソリと呟く。

ジョニーは無しだろうと言いたい様子だった。

「で、お前は誰だ？」

少し勢いの治まった虫玄武が、今度は虎二に問いかけた。

「俺様は猫田探偵事務所のナンバーツーの猫田虎二様だ！。で、こっちがナンバースリーの珠美だ！。」

「妹の珠美です、よろしくお願いします」

虫玄武に対抗するように胸を張って自己紹介をした虎二に代わって、妹の珠美は常識人らしい挨拶を丁寧に返す。

「でぇ？、ジョニーとやら、一七五一家の者が、この虎二様ことビッグバンタイガー様に何のようだ！」

「何！、貴様、ビックバンタイガーとは、いい名前じゃね～か！」

「お前こそ、ジョニー！」

この二人、どうやら同レベルのようだ。かなり下等な脳みそである。

「うむ、用事というのは、あれだ……」

「とりあえず、こちらにお座りになってください。今、お茶いれますので。」

「あ、ども……」

虫玄武と少女は、珠美に促がされて来客用のソファーに腰をおろす。

そして虎二も、その迎えに座った。

「で、ジョニー、何の用事だって？」

「ああ、用事というのわな」

「は～い、お待たせしました、お茶です」

「あ……、どうも……」

三人分のお茶を持ってきた珠美は、各自にお茶を差し出すと、自分はソファーに座ることなく近くに立ったままお盆を抱えていた。

「で、ジョニー、用事とは何だ？」

「うむ、用事とは……」

「ただいまーー」

その時、事務所の扉が開き、一人のスーツ姿の男性が入ってくる。

「おかえりー、龍にーちゃん」

探偵事務所の主、猫田兄弟の長男、猫田龍信の帰還である。

「ん、お客さんだったか、これは失礼しました」

虫玄武とツインテールの少女を見て、龍信が失礼を謝罪する。

しかし、幾度となく口火を妨げられた虫玄武は、しょぼんとして

沈み込んでいた。

「あ、なんだ、一七五親分のところのサムソンじゃないか」

虫玄武の顔を確認した龍信は、虫玄武を何故かサムソンと呼んだ。

「サムソンだと！。ジョニー、貴様、俺を騙したな！」

虫玄武は、虎二の剣幕を見てソファーから立ち上がって誤解を解こうとする。

「違うんだビッグバンタイガー！。誤解だ、今はジョニーなんだ！」

「虎二、サムソン、どうした、二人して？」

「昔、サムソンって名乗ってた頃もあったんだ！、今はジョニーなんだよ！、ウソじゃない！」

「珠美、ビッグバンって誰だよ？」

「あは……、虎にーちゃんのことらしいよ」

珠美が苦笑いで龍信の質問に答えた。

「オッパイ、でか……」

「「「「！！！！」」」」

立ち上がって言い争っていた虫玄武と虎二を始めとして、四人の視線が一瞬でソファーに一人腰掛けているツインテール少女に集ま

った。

視線が集中した少女の見る先は、珠美の大きな胸である。

確かに少女が言うとおり、珠美の胸は一般的に語られるところの巨乳ではある。

そして、全員の視線を独り占めしていた少女はバツが悪くなったのか、無言のまま首をゆっくり横に向けて視線から逃れた。

そして、龍信が話しを戻す。

「……で、サムソン、久々に会うけど、何か用事でもあってきたのか？」

そう言いながら龍信は、弟の虎二の横に腰を下ろす。

「ああ……、春婆怒だ、春婆怒！」

「やはり、それですか」

龍信の顔が、スマートな眼鏡越しに嫌らしく微笑む。

「何処にいる、教えろ。お前なら知ってるんだろ？」

「ふん～、油儀会長が、お前ら一五七一家に春婆怒討伐を命じたって聞いたが、本当だったんだな……」

兄の台詞に、隣に座る虎二が、眉毛をピクリと動かし反応を見せる。

「おうよ、処理班なんかよりも俺たち一七五一家の方が、会長も上だと判断したんだろうよ！」

龍信の横で虎二が、そんなことはないだろうと言いたげな顔をしていた。

「そこでだ、お前の所に来れば、春婆怒の居場所が訊けると思って訪ねて来た訳だ！」

虫玄武は、一言一言にやたらと力を込める。

それを一人立ったまま見ていた珠美は、最初はわざとかと思って見ていたが、どうやら虫玄武の力のこめる口調は癖だと悟り聴いていた。

「訪ねて来てくれたのは嬉しいが、我々は一度だけ春婆怒らしき妖力共有者と遭遇しただけでね……。居場所までは……」

そう言ってアメリカ人の様なオーバーアクションでお手上げポーズを龍信は取る。

だが、龍信の言っていることは真実であった。

龍信と虎二は、箪笥の九十九神と春婆怒が、戦っているところを目撃しただけであった。

「え、そうなのか……。聞いた話とちがうな……、ドラゴニック龍信、お前さん俺様を騙そうとしているな！？」

虎二が「ドラゴニック」の呼び名に、目を見開いて横に座る兄を凝視する。

「誤解だ、サムソン。そもそも、お前を騙して俺に何の得がある？」

虫玄武は、四角い顎に大きな手を当てて少し考えこむ。

「うむ、確かにそうだな。お前は手柄とか名を売るとかには昔から興味は無かったしな」

古い付き合いなのか、虫玄武は龍信の言葉をすんなりと受け入れた。

「そう、俺が興味あるのは……」

「好奇心だろ。俺様には意味が分からん」

そう言って溜息を付く虫玄武。

一方、龍信は「好奇心」と言う言葉に満足げな微笑を作る。

龍信は、自分が戦うよりも観戦する方が好きである。

隣に座る弟の虎二は別である。手柄が欲しくて仕方ない若者であった。

「なー、ジョニーよー」

「何だ、ビッグバンタイガー？」

「何だったら、春婆怒探すのを、俺が手伝ってやろうか？」

「本当か、ビッグバンタイガー！」

「ああ、本当さジョニー」

「ちょっと虎にーちゃん、また勝手な事すると、鍋中先生に怒られるよ」

妹の珠美がちょっと怒った感じで、虎二に注意を述べる。

しかし、兄の龍信は何も意見せずに、黙ったまま二人の会話を見守っていた。

「そもそも、処理班が動かないのに、一五七一家に依頼が行くってのが可笑しい。
これは連合とは関係ない油儀会長個人の行動だ。
……ならば俺も連合の調査班の人間ではなく、猫田虎二個人としての行動ならば文句はない筈だ」

無理やりにも感じられる言い訳で、自分を正当化する虎二。

「まあ、お前の個人的趣味でサムソンに協力するなら、問題はないだろうし。
そして、最低限連合に迷惑の掛からないように動けば、文句も言われ無いだろうがな」

「龍にーちゃんまで、何言ってるのよ」

珠美をよそに、まるで弟を煽る様に龍信が後押しをする。どうや

ら自分は楽しく観覧できれば良い様子だ。

「どうだジョニー、俺は妖気の探知能力はかなり優秀ぞ、連れて行くか？」

「本当か、ビックバンタイガー！」

「ああ、だから調査班に居るんだよ」

虎二が自分の探知能力の高さを自慢するように笑う。

確かに虎二の妖力を探知する能力は、連合の中でもトップクラスではある。嘘ではない。

「オッパイ、でか……」

「「「「！！！！」」」」

四人の視線が、一瞬で少女に集まる。

そしてツインテールの少女は、スローモーションの様にゆっくりと顔を横にそむけた。

この少女の発言は、いきなりすぎて危険であると、この場の全員が悟った。

<　来訪者　>（後書き）

やべ……

こんなのダメだよね……

まあ、いいか……

（　；；　。；∋　。；）

<　豪傑達の友情　>

下町風の商店街の中をタケシは、バイクの後ろに陽子を乗せて走っていた。

陽子は、嬉しそうにタケシの腰に後ろから抱きつくと、タケシの背中に幾度となく頬と胸を擦り付ける。

「ああ～、なんか幸せ……」

陽子は、頬をタケシの背中に押し付けながら、頬肉が潰れて変形した唇で、僅かな幸福をのろける様に呟いていた。

「ん?、何か言ったか陽子?」

「なーんでーもなーい」

「……」

二人を乗せたバイクは、商店街の脇道を曲がっていくと人気の少ない路地を走り抜けて一軒の中華飯店の前に止まった。

「よし、到着だ」

タケシがバイクから降りようとするが、陽子は目を瞑ったままタケシに抱き付き離れない。

「おい、陽子。降りるぞ!」

じれったそうにタケシが、僅かに大きい声をだす。

「はぁ～い……」

タケシに抱きついていた陽子は、その声に渋々タケシから離れてバイクから降りた。

ここ最近の陽子は、やたらとタケシに甘えるような仕草が多くなった。

タケシは、そんな陽子の行動の変化にも気付いてはいない様子であり、甘えている側の陽子自身も気付いていない様子だった。

その原因が、突如二人の間に割って入った春婆怒の存在が大きい事も気付いてはいない。

「タケちゃん、ここでお昼ご飯食べるの？」

「ああ、そうだ」

「あんまり美味しそうな店じゃないね……」

不満げな陽子の台詞に二人は、店構えを今一度確認する。

確かに陽子の言うとおり、店構えからはボロボロの古い中華飯店にしか見えない。昼飯時なのに、来客が来そうな気配すらなかった。

店構えだけで料理の味まで想像して不味いと決め付けるのは失礼かも知れないが、陽子が言うとおり美味しそうな店にはタケシにも見えなかった。

「家に帰って、私が作ろうか？」

「……いいから、入るぞ」

バイクから降りたタケシは、そのまま暖簾をくぐり入り口の扉を開くと、店の中へと入っていく。

陽子もタケシが入るのならばと、文句を言うのを止めて店の中へと入って行った。

この店は、ほんの数日前、タケシがヤクザ達と尋ねた店である。

あの蟷螂拳の周が勤めている中華飯店なのだ。

「……いらしゃい」

タケシと陽子の二人が店内に入ると、カウンターの奥で店主らしき人物が無愛想にありきたりな台詞を口にして出迎えた。

そして、読んでいた新聞紙をカウンターに放り投げる。

「あんた、この前の……、何か用か……」

店主はタケシの顔を見て思い出したのか、更に愛想の悪い声を出しながら、警戒する様に眉間に皺を寄せる。

「おいおい、今日は客だ、飯食いに来たんだよ」

そう言ってテーブル席にタケシが座ると、陽子も続いて向かいの

席に座った。

「ラーメン大盛り」

壁に書かれたメニューを見たタケシは、注文を訊かれるよりも早く、迷う事無く注文をした。

「私、メンマラーメン」

タケシに少し遅れて陽子も注文する。

店主が、水の入ったコップを持ってくると、二人がメニューの中から選んだ注文を、今更ながら帳面にメモを取った。そして、注文を受けた店主は、返事もせずに厨房へと帰っていく。

しばらくして二人の頼んだラーメンが、こんな大きな人間が存在のかと思いたくなるほどの巨大の手によって運ばれてくる。そのても人間の手とは思えないほど大きい。ラーメンの器が可愛く見える。

その巨人を見た陽子が、「でぇか〜……」と大きく口を開いて驚いていた。

そして、巨人がテーブルにラーメンを置くと、二人は注文したラーメンを食べ始める。

二人がラーメンを食べ始めるのを確認した店主は、放り投げてあった新聞紙を手に取ると、また、厨房の奥に有る椅子に座りながら読み始める。

一方、巨人の方は、大きな手で雑巾を絞るとカウンター席やテーブル席を丁寧に拭き始める。

店の中は、とても静かだった。

その半分は、気まずい物と言っていいだろう。

店内の隅にあるテレビからは、昼時のテレビ番組の音が垂れ流しになっていた。

ギネスブックに載った、色黒のおっさんが司会を勤める、あの番組である。

そんな店内には、テレビの音と一緒にタケシ達が食べるラーメンの啜る音だけが静かに聞こえていた。

他の客が、入ってくる気配はき今だに無い。この店は、本当に、こんな感じで経営していて潰れないのだろうかと陽子は思ってラーメンを啜っていた。

タケシ達が来店していらい、他のお客が店に入ってはこなかった。

やがて二人がラーメンを食べ終わる頃に、タケシと戦った拳法家の周が姿を現す。

顔に包帯をミイラ男の様に巻き、片手の甲にも包帯、もう片方の手は指先にギブスを付けている。

ズボンに隠れて見えないが、引きずるような歩き方からして、両

脚にも大きなダメージが残っているようすだった。

だが、見るも無残な姿の周であったが、タケシの顔を見ると満面の笑みを浮かべて話しかけてくる。戦っている時には一度も見せることの無かった表情だった。

「やあ、堂本君、よく来てくれたね」

そう言う周は、何故か照れくさそうに笑っていた。

「周さんがもう退院したと聞いてね、ちょっと様子を見に来たんだよ。本当に怪我は大丈夫なのか？」

「ああ、何時までも入院してられるほど裕福な家の生まれではないのでね。それにこの程度の怪我、かすり傷のようなものだよ」

「見事な強がり、惚れ惚れします」

「はは、よしてくれよ」

あれほど激しくぶつかり合った二人が、どっちに勝敗が上がったか別として、今はこうして楽しそうに話している。

格闘技家とは不思議な生き物である。

拳と拳のコミュニケーションで芽生えた友情は、日本と中国の国境を越えたのである。

インファイター、アウトボクシング。時には攻撃的に、時にはディフェンシブに。者によっては卑怯な手を使ったり、戦術的撤退と

言って逃げながらも戦う者も居る。色々な策を弄して戦い、熱いものをぶつけ合う。

そんな十人十色の闘争スタイルは、その人物の個性を浮き彫りにさせる。

それは、個性であったり、人生であったり、苦悩や喜びでもある。

一対一の戦いの中で、お互いの個性に触れ合う。

男と女ならセックスで愛情も測れるが、男同士ではそうは行かない。

故に相手の思いを測るのに、一対一の闘争とは、それに等しい。

対決、それは自分を相手に伝える事。

対決、それは相手を自分が理解する事。

対決、素晴らしきコミュニケーション。

しかし、タケシと周のやり取りを見ていた陽子が、ぼそりと彼女の思いを感想に変えて口に出す。

「いやいや、二人とも本当によしてよ、キモイよ……」

「「キモイって言うな！」」

陽子がまるで同性愛者を見るような目で二人を見ながら言った言

葉に、タケシと周の二人がシンクロして言い返す。

<蝠蠑　>（前書き）

１１／２９で、アクセス数３００００突破しました。

ここまで、誤字脱字に負けずにお付き合いしていただき、ありがとうございます。

これからも頑張って、誤字脱字を減らし、楽しい小説を書けるように勉強していきます。

今後とも、よろしくお願いします。

（≦≡∇≡≦）ノシ

<　端郷　>

「じゃあ、周さんの元気な姿も見れたし、微妙な美味しさのラーメンも食ったし、俺ら帰るわ」

タケシは、そう言って席を立つ。

「ああ、また来てくれ」

お金を払わず店を出て行くタケシに代わり、陽子が支払いを済ませる。

後片付けを始めた閑が、両手にラーメンの器を持って厨房に戻ってくるのを、店主が新聞を読む振りをしながらチラリと見る。

その大きな両手に持たれた二つの器には、かなりのラーメンが食べ残されていた。

先に店の外へと出て行ったタケシの後に、お金を払った陽子が店を出て行くと、しばらくしてバイクが店先を離れていくエンジン音が店内に残った者達に聞こえて来た。

バイクの音が小さくなると、店の店主が、眉間に皺ほ寄せながら口を開く。

「そんなに俺のラーメン不味いか……」

「……はい、不味いです」

遠慮無く意見を述べる周に、巨人も大きな頭を天井に擦り付けながら頷いた。

「なんだと、この野郎！。怪我人は邪魔だ、とっとと帰りやがれ！」

予想できていた感想とはいえ機嫌を損ねた店主は、怒鳴りながら新聞を広げて読む様に怒った顔を隠した。

周と閑の二人は、そんな店主を見て無邪気な笑みでクスクスと肩を揺らしていた。

しばらくして周は、店主に店を追い出される様に裏口から帰宅しようと出て行った。

周は、怪我が原因で重たくなった両脚を引きずるように店を出て行く。

「アニキ……」

それを直ぐに巨人の閑が、ビニール袋を片手に呼び止めた。

「なんだ、閑？」

「オヤジサンガ、モッテケッテ」

閑からビニール袋を受け取った周が中を覗き込むと、中にはチャーハンとチャーシューの耳が入ったタッパが入っていた。

「ふっ……あの親父め……」

頑固だが、面倒見の良い親父である。

周の家は、とても貧しい。

本来なら、金銭的なことを考えれば、日本に来ている余裕なんてとても無い。

だが、周の天才的カンフーの実力を見込んで、日本の道場に講師として呼び寄せたのが、この中華飯店の店主である。

日本の講師は、中国の何倍も収入が高い。それが、理由である。

しかし周は、稼いだ賃金の殆どを、国の両親の元へ送金している。

周の下には、あと六人の幼い弟や妹が居る。周は、武術を持って家族を養う為に、一人日本に出稼ぎに来ているのだ。

「ジャア、アニキ、キオツケテ」

閑は、そう言って周を見送ると、店の裏口の扉を閉めて店内へと巨体を消していく。

一人残った周は、手にビニール袋をぶら下げたまま、店裏の空き地をボート眺めていた。

ほんの数日前、タケシと対戦した赤土の空き地。その激しい闘争が、心地よく記憶に蘇って来る。そして周は、空き地の中央で空を見上げた。

「日本の格闘技家も、捨てたもんじゃあないな……」

そう呟いた周は、この気持ち良い空気を汚すほどのおぞましい気配を感じ、その方向へ「なんだ！」と大きな声を上げながら身構える様に振り返る。

「中国拳法の周……だな？」

振り向いた周の目に入ってきたのは、この空き地に唯一出入できる小さな脇道に立つ一人の男の姿だった。

「貴様、何者？」

周は、出入り口である路地を塞ぐ様に立っている長身の男を、鋭い眼光で突き刺すように睨み付ける。

周は、思った。

この男は、自分の名前を知っていると。故に周は、話しかけてきた男に、更に警戒を強める。

男の身長は、百九十前後程有るだろうか。閑に比べれば確実に低いが、タケシと比べれば、明らかに高い。だが、身体つきはタケシの方がマッチョである。

細い針金のような手足に引き締まった筋（すじ）のような筋肉。

格闘技家なら、ボクシングやムエタイの選手の体型に近いだろう。それは持久力を備えた、アスリートタイプの筋肉だった。何よりも引き締まった細い手足は、やたらと長く見えた。

「蟷螂拳を使うと聴いて来たが……、怪我をしているのか、……詰まらん」

男は、ギョロリとした瞳で周を眺めながらそう言うと、そのまま後ろへ振り返り、其の場から立ち去ろうとした。

その行動に、一瞬で周の額に血管が幾つも浮かび上がり、怒りをあらわにする。

「またれよ、これはかすり傷！！」

周の怒鳴り声が、空き地に大きく響いた。

その言葉に男が振り返ると周が、ビニール袋を空き地の隅に置き、両手の包帯を外し始めた。

「用があるのだろ、こっちに来いよ」

周は、指にはめていたギブスを外すと、男の足元に投げ捨てて挑発する。男がそれをチラリと見た。

「……」

空き地の赤土の上に立った男は、ゆらゆらと体を揺らしながら構えを取る。

闘争、決闘、喧嘩、対決、試合、死闘。どれに当てはまるかは分からない。だが、確かなのは、これからこの二人は間違いなく戦う。それだけはハッキリしていた。

「き・さ・ま……！！」

男の取った構えを見て、更に周の額に青筋が増える。

その構えは蟷螂拳？。

だが、周の使う本格的な蟷螂拳とは違い、姿勢も高く、ただのボクシングの構えに、指の作りだけを蟷螂拳に真似ただけの物であった。

蟷螂拳というより、掛け塾に書かれた柳の下の幽霊画に似ていた。

周の目には、それが自分に対しての侮辱に見えた。ならば本物の蟷螂拳を見よといった感じで、周も蟷螂拳の構えを取った。

相手に対して真横に体を向けて、大きく横に股を開いた体制から深々と腰を落とす。両手は、人差し指、中指、親指の三本で鎌の様に組。そして、ゆっくりと前後に体を揺らしながら対戦相手を睨みつける姿は、まさに本物の蟷螂拳であった。

「本物の蟷螂拳を見せてやる！」

傷だらけの周。

片手の甲に切り傷。もう片方の手の指は、紫色に変わり腫れ上がっていた。

しかし、顔面に巻かれた包帯の隙間から見える周の闘志溢れん瞳が、負傷していることを忘れさせる程に勇ましく鋭い刃物の様に見えた。

「螳螂拳。お前ら中国人がカマキリの戦う姿をモデルに編み出した戦闘スタイル……」

周は、今更そんな事を説明されなくても、螳螂拳を極めた自分には分かりきった事と、更に強く男を睨み付ける。

そして、螳螂拳の構えのまま、じりじりと少しずつ摺り足で間合いを詰めていく。

「だが、貴様ら拳法家は、間違っている」

「はぁ、何をだ?」

周は、男の話に首を傾げながらも、徐々に間合いを縮める。

「カマキリをだよ……」

「?」

「間違っていると言うよりも、大きな誤解をしていると言うべきか……」

何を言い出しているのかと周は思ったが、あと一歩で自分の間合いに男を捕らと悟り、男の話を無視するように聞き流す。

この男は、かなり手足が長い。

手足による攻撃の間合いだけならば、周よりも遥かに広いのは明らかである。

しかし、スピード。瞬発力ならば、自分の方が圧倒だと周は自負していた。

今まで、この小さな体で勝ち残ってこれたのは、超人的にまで鍛え上げた瞬発力があったからこそ。

その瞬発力を、効率よく発揮できるのが蟷螂拳。

この組み合わせが、周をマスタークラスまで引き上げた。

「お前達は、カマキリをファイターだと勘違いしている」

既に周は、男の台詞を完全に無視していた。

男のリーチのある初弾をくぐり向けて懐に飛び込めれば、此方のものと策する周。

懐に潜り込み、強烈な一撃を放つイメージを描いた周は、そのイ

メージを更にシュミレートをして作戦を完成させようとしていた。

おそらく負傷した拳では、まともに攻撃を放てるのは一度っきり。

その一撃で、男の肉を突き破り、内蔵を摘み取り、そして腸を引きずり出すつもりであった。

「そう、それは勘違いだ……」

未だ一人で語り続けているノッポ男。

周と男の間合いが縮まる。

「……」

後、半歩……

後、半歩で間合いに入る。

「カマキリは、ファイターではない。そもそも、この二つの蟷螂は刃物ではない」

後、つま先分で……

「カマキリは、ハン……」

間合いに入った！

烈風の如く周が動いた。

その自慢の蟷螂拳と瞬発力で男に襲い掛かる。

狙いは腹部。

「！！！！！！！！！！」

気付いた時には、男の顔が自分の目の前にあった。

自分から男の懐目掛けて飛び込んだはず。

狙いは腹部のはずだった。

なのに二人の顔は、まじかで合わせていた。何時の間にか超接近していた。

まるで男がテレポートしたかの様に一瞬の出来事。

そして、思わず混乱を表情に露出してしまう周。何が起きたか理解できない。

「ううう！」

激痛。

周は、自分の両肩に走る激痛に顔を歪めながら、痛みの原因を確認する。

それは、緑色の細長い物に両肩を挟まれていた。

自分の両足は地面を離れ浮いている。体が、その緑色の物に挟ま

れ釣り上げられている様子だった。

そして気付いた。

男が自分の目の前に動いたのではなく。

自分が、これに両肩を捕まれて、男の前に引き寄せられたのだと。

「なぁぁ……！」

目の前で顔を合わせる男が、再び語り始める。

「そもそもカマキリの鎌は刃物ではなく、幾つもの棘が並んでいる捕獲機」

周の肩に幾つものスパイクが突き刺さり、外す事も、逃げる事も、反撃する事も妨げる。

そして吊り上げられ周は、地面から離れた足をばたつかせた。

「カマキリは、ファイターではなくハンターなのだよ」

この状況に周は、包帯の巻かれた顔を青ざめるだけだった。

見れば、男の両腕は緑色のカマキリの鎌に変わって、周の両肩をガッシリと掴んでいる。

そして、突き刺さった鎌のスパイクから痛みが伝わり、僅かな血を流し始めていた。

「周囲のブッシュに擬態して、獲物が近づくのをじっと待ち、そして素早く二つの鎌で獲物を捕らえる」

男は人間に擬態して、周の近づくのをじっと待ち、そして人間離れした素早さで、周を鎌で捕獲したのである。

「そして、捕獲した獲物に、致命傷となる攻撃と共に……」

周の顔から、一気に血の気が引いていく。

そして男は、大きく口を開いた。

それは……。

「！！！！！！！！！！」

大きく口を開いた理由。

「捕食する！」

ガリッ！

ガリッ、ガリガリ、ガリッ！

周の頭蓋骨が噛み砕かれる音が空き地に響くと、周が手足を痙攣させながらダラリと力なく揺らした。

そして、痙攣する手足をつたって大量の血液が、赤土の上に流れ落ちていく。

蟷螂拳ＶＳ蟷螂。

周が、擬態に気付いていなかった段階で、勝負は決まっていたのかもしれない。

赤土の空き地に、残酷な食事をする音だけが響く。

「十郎太さん、何してるんですか……」

食事をする男に、後ろから黒い学生服を着た少年が呆れたと言いたげな表情で話しかけてくる。

口の周りを赤く汚しながら食事をしていた男は、チラリと一度だけ振り返ると少年を確認して、また食事を再開する。

「許可無く人間を食べたら、連合に処理されちゃいますよ。八尾さんとか真面目だから、言い訳なんて聞いてくれませんよ」

「ふっ、たまに下界に出てきたんだ、ちょっとぐらいいいだろ。それに、テメーがチクラなければ、ばれやしね～よ」

どうやら男の行動は、妖怪サイドでも無法の行動らしい。少年が、それを警告する。

しかし男は、少年の警告を聞くどころか、口止めを強制するような言い方をして食事を続行した。

「まったく、こまった人ですね。親分がお目付け役を付ける理由が分かりましたよ」

男を見て学生服の少年は、男の弟分だった鬼々蜘蛛が、無茶苦茶な事をしでかして破門されるのも、この兄貴分を見て納得したような表情をしていた。

「ところで春婆怒の居場所は分かったのか?」

食事をしながら男が問う。

「いいえ。ですが、ちょっと気になる当てがありましてね」

「なんだ?」

「先日、僕の分身が一匹姿を消しましてね。そこを一緒に当たってみませんか?」

「まあ、他に当ても無いし行ってみるか……。あと、この食い残しと血痕の始末を頼むわ」

男はそう言って、鎌で挟んでいた周の遺体を地面に投げ捨てる。

周の体は、上半身の肉はほとんど無くなり、既に誰の死体かも見た目では分からなくなっていた。

「はいはい、喜んで……」

仕方ないといった表情をする少年の黒い学生服の裾から、小さな黒い物体が次々と雪崩でると、黒い絨毯となって転がる死体へ押し寄せる。

死体をワラワラと包み込んだ黒い絨毯は、カリカリと小さな音を

複数立てた。

そして黒い無数の物体に包まれた周の遺体は、見る見る内に縮んで行き、跡形も無く消えていく。

骨一つ、血痕一つ残さずに。

「隠蔽終了。さあ、行きましょうか十郎太さん」

「ああ、黒童子……」

そして二人は、赤土の空き地を後にした。

<　ザ・ハンター　>（後書き）

カーマーキーリー！

カマキリカマキリこれっきり！

<　ジャイアン道　>

やる気の無さそうな声が響く。

「いらしゃぃませ～」

その声に出迎えられて、タケシのバイト先であるコンビニに、黒い革ジャンを着たロカビリー風のリーゼント男が、肩を靡かせながら入ってくる。

ポマードでガチガチに固められ輝くリーゼントに、細いサングラスを掛けた男は、自動ドアをくぐると真っ直ぐレジカウンターへ進んでいった。

店のカウンターには、アフロヘアーの店員が一人居るだけで、他の店員の姿は見えない。

「おう、タケシさんは居るかい？」

リーゼントの男は、カウンターに居るアフロヘアーの店員を捕まえて、威圧するかの様に尋ねる。

「あ、タケシさんの知り合いすか～？」

だが、アフロヘアーの店員は、リーゼントの男から感じられる強面の態度を気にもせず、ダラダラした態度で質問に質問で答えた。

「あぁ～、そんなのオメーに関係ないだろがぁ！」

アフロヘアーの店員の態度が癇に障ったのか、リーゼント男の声が若干大きくなった。

リーゼント男の様子から、明らかに苛立ちが感じ取れる。

「何故に凄む！」

アフロヘアーの店員の言うとおりである。凄む理由は本来無い。だが、アフロヘアーの店員の態度を見ていると、この柄の悪いリーゼント男でなくとも、何故かむかついて来るのであろう。

そして、リーゼントの男がアフロ男に凄むと、アフロ男は「今、控え室に居るので呼んでくるっす」と言って、またしてもダラダラとした動きで、奥の控え室にいるタケシを呼びにいく。

そして暫くすると、控え室から出てきたアフロ男に続いて、コンビニの制服を着たタケシが姿を現した。

「ちわっす、お勤め中すみません、タケシさん」

リーゼント男は、先程までとは百八十度態度を変えて、極道風だが礼儀正しくもタケシに頭を下げた。

「お前は確か……」

リーゼント男の顔を見たタケシは、その男が誰だか思い出す。

「鳴海のアニキの舎弟やってます、二階堂です。先日はどうもっす」

そう、タケシが高校時代に対立していた先輩であり、現在の知人

でもある鳴海先輩の舎弟の一人。

いつぞやの夜、公園で一緒に楽しく遊んだ六人の中に居た一人で、蟷螂拳の周との対決に立ち会ってもいた。その事をタケシは思い出した。

「そうそう、仁藤、仁藤だっけ」

「間違えるの早や！」

困った顔の二階堂に代わって、レジカウンターから見ていたアフロの安田がツッコミを入れる。

「で、何のようだ、武藤」

「二階堂です……」

「まあ、なんだって良いだろう、工藤」

「どんどん、正解から遠くなって行きますよ、タケシさん……」

レジカウンターの中から、再び安田がタケシにつっこむ。

二階堂は、「もういいや」といった顔で懐から一枚のＤＶＤディスクを取り出すと、タケシに差し出した。

「ん、なんだ？」

タケシは、きょとんとした表情で、差し出されたＤＶＤディスクに視線を落とす。

「この前の中国野郎との決闘を撮影した画像のコピーです。タケシさん、コピーくれって言っていたので、持ってきたんすよ」

「あー、わざわざすまねーなー」

タケシは、確かに自分にもコピーをよこせと頼んだことを思い出す。

「いえいえ、タケシさんに面倒かけたのは、こっちですから」

二階堂はＤＶＤディスクを差し出したまま言うが、タケシは其れを受け取ろうとしない。

「でも、俺の家にはＤＶＤプレイヤーがないんだよね……」

タケシが、わざとらしく寂しそうな顔をする。

「あ、そうなんですか。じゃあ、出直してビデオに落としてきますよ？」

「あー、でも、家にはビデオデッキもないんだよね～……」

「……じゃあ、なんでコピーくれって言ったんすか？」

レジカウンターで二人のやり取りを聞いていた安田も、「確かに」と言ってアフロを揺らしながら頷いていた。

「芸能人がテレビで何か欲しいって言うと、ファンから送られてくるって言うじゃんか……」

あんたは芸能人かと、二階堂と安田は思う。

「おれっちにＤＶＤプレイヤーをたかる積もりだったんすか……」

「たかりみたいに人を呼ぶな！」

二階堂の言葉に対してちょっぴり怒った表情でタケシは言うが、これっぽちも説得力が無い。これは、間違いなくたかりである。

「たかりじゃん……」

レジカウンターから二人の会話を聞いていた安田がそう言う。

「「黙れアフロ野郎！」」

しかし何故か、タケシと二階堂の二人が同時に、安田に対して凄む。

「えぇ……なんで……」

流石の安田もこれにはあとずさりした。

「俺は、たかりなんかしない！。それに俺は、ヤクザから金品は受け取らない主義だ！」

「じゃあ、今の要求はなんすっか？」

タケシの手が二階堂の肩をポンッと叩く様に添えられると、タケシの熱い視線が二階堂のサングラスに奥に見える瞳をじっと見る。

「お前と俺は、一度は拳で語り合った仲じゃねえか。もう友達だ！」

タケシが無駄に力強く言うが、その言葉に説得力は殆ど生まれてこない。

「はいはい、分かりましたよ……。この前、知り合いから貰ったプレステ2を差し上げますよ……」

めんどくさくなったのか、二階堂が諦めたような口調で答える。

「ゲーム機なんぞ要らねーよ！」

「ＤＶＤプレーヤーにもなります！」

「せんきゅ～」

ちょっとした誤解があったようだが、二階堂の返答に満足したタケシが、悪ガキの様に微笑みながら感謝の言葉を述べる。

ヤクザからは一切の金品は受け取らないが、友達からは物を遠慮なくせびる。

それがタケシのジャイアン道。

友達としては、いい迷惑である。

<　黒童子の分身達・1　>

「ここか？」

ひょろっとした長身の男が、小柄の黒い学生服を着た少年にたずれると、「ええ、おそらく此処です」と少年は軽い口調で答えた。

二人は古びた二階建てのアパートの前に立っていた。

アパートの隣には、こじんまりとした喫茶店があり、道を挟んで向かえの民家の玄関先からは、気弱そうな柴犬が二人の事を遠目に眺めていた。

「このアパートで僕の分身は消息を絶ちました」

黒い学生服の少年は、そう言って古いアパートを見上げる。

「消息を絶ったって言っても、お前の分身ってただのアレだろ？。誰かにたまたま踏み潰されたとか、丸めた新聞紙とかで叩き潰されたとかじゃないのか？」

その長身から少年を見下ろす男は、冷めた表情で言うと、またアパートに視線を戻した。

「そんな間抜けな訳がないでしょうが！」

今度は少年が男を見上げながら声を荒立てる。

「そもそも此処に来た僕の分身は、サイズもデカイですし妖力もあります。普通の人間には姿すら見られる事無く行動がとれるんですよ。そんな僕の分身が、そうそう消息を絶つわけがないでしょう十郎太さん！」

「まあ、なんだっていいさ。このアパートを調べるんだろ、とっととご自慢の分身どもを放てよ、黒童子」

十郎太は詰まらなそうに言う。

「わかりましたよ」

そう答えた黒童子は、若干だが怒っているようだった。プイッと顔を背ける。

そして、ふてくされた顔をする黒童子の制服の裾下から、ワラワラと小判サイズの真っ黒なゴキブリが何匹も出てくる。

「さあ、僕の分身達、壁の隙間をくぐり抜けて、アパートの部屋という部屋を全部探索しておくれ！。きっとここにヤツが居るはずさ！」

黒童子の制服の下から出て来た無数の分身は、アパートの壁や柱をつたわって、アパートのあちらこちらに散らばって行く。

先程の説明からして、この巨大なゴキブリ達は、普通の人間には見えないらしいが、もしも見えていたとするならば、大きなゴキブリだらけとなったアパートを見て、悲鳴を上げながら害虫駆除会社に電話をすることであろう。

古アパートは、もはや魔の巣の如く光景に変貌をとげていた。

其の時である。

「ちょっとあんた！、何すんのよ気持ち悪いぃ～！」

十郎太と黒童子の二人は、キンキン声で怒鳴りつける女性の声に、二階の踊場へと視線を向ける。

「あれ、朧さん……」

黒童子が二階の踊場に居るのが知った顔だと気付くと、アパートのあちらこちらをはいずり回っていた分身たちがピタリと動きを止める。

「黒童子、あの女はだれだ？」

「轟朧、油儀会長の運転手をやっている妖怪朧車ですよ……」

十郎太の問いに、黒童子は二階の踊り場から怒鳴る朧の正体をばらす。

「ちょっとあんたぁ～！、人の住んでるアパートに気持ち悪い虫ケラをばらまかないでよぉ～！」

朧は、自分の側を徘徊するゴキブリを避けるように振舞いながら怒鳴っていた。

「き、きもちわるいって……」

十郎太は、黒童子の肩にポンっと手を置き「まあ、気持ち悪いわな」と言って慰めの言葉を掛ける。

「冗談じゃあないわよぉ～、こんな気持ち悪い物が部屋に入ってきたらぁ～、もうこのアパートに住めないじゃない～！。すぐさま引き上げさせないとぁ～、ガソリンまいて、アパートと一緒に焼き払うわよぉ～！！」

「あー、あの女妖怪、マジだな……」

十郎太が、二階の踊場で凄い剣幕の朧を見て呟く。

「何でここに朧さんが入るんですか……？」

黒童子が、朧に尋ねた。

「何でって、住んでるからに決まってるでしょうがぁ～！。いいから速くこの気持ち悪いゴキブリ共を引き上げなさいよ！。全部踏み潰すわよ！、気持ち悪い！！」

黒童子は、気持ち悪い気持ち悪いを連呼されて傷ついたのか、泣きそうな顔で分身達を学生服の中へと引き上げさせる。

「おい黒童子、もしかしてお前の分身を叩き潰して殺したのは、あの女妖怪じぁねえのか？」

「……」

半べその黒童子もまた、十郎太の言う通りではないかと思い始めていた。でも、涙が止まらない。

「このゴキブリ小僧ぉ～！、とっとと消えないと、私の車でひき殺すぞ！」

大量のゴキブリを見て、その気持ち悪さから完全に興奮状態になっている朧は、二階から尚も二人に向かって怒鳴り散らす。

「おいおい、あの血走った目は、本当にやりかねない感じだぞ、俺はさっさと逃げるぜ……」

そう言って十郎太は、おずおずと其の場をあとにすると、「待ってくださいよ～」と黒童子も泣き声で十郎太の後を追っていく。

「あの二人、何しに来たのよ～！。も～気持ち悪い～！」

二人が居なくなるのを確認した朧は、未だに鳥肌の立つ両腕を摩りながら自分の部屋へと帰っていく。

「ん？」

二階の一番奥にある自分の部屋を目指す朧が、三番目にあるタケシの部屋の前で足を止めた。

「何かしら？」

タケシの部屋の前に置かれた一つの鉄鍋。

その鉄鍋には蓋がしてあり、何身は見えなかった。

朧は何故か其の鉄鍋が、無性に気になってしまう。

「……？」

朧はやめればいいのに、身を屈めると、其の鍋の蓋にゆっくりと手を伸す。

そして、そぉ～と鍋の蓋を明けると、パカッと小さな音がした。

鍋の蓋を開けた朧は、ゆっくりと蓋と鍋の僅かな隙間から中を除き見る。

一瞬、朧の動きが止まった。

そして、見る見る内に顔が青くなって行く。

朧が蓋を開けて数秒後である。

「ぎぃぃぃぃぃぃぃぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

中を見た朧の悲鳴が、辺りに響き渡った。鍋の中身は、春婆怒が作った朝食の残りである。巨大なゴキブリがプカプカと浮いていた。

悲鳴を上げ続ける朧は、疾風の如きスピードで、自分の部屋へと逃げていった。

春婆怒の手料理……、恐るべし。

<　重ならない思い出　>

虎野町市のとある車の往来が激しい大通り。

昼飯時は遥かに過ぎて、あと一時間も経てばサラリーマン達の帰宅する姿が見え始める頃。その大通りの歩道を歩く人々に混ざって、春婆怒の姿があった。

春婆怒は、胸元にカラフルなピーズで草花の刺繍がキラリと施されたブラックのチュニックを着ていた。

袖は手の甲まで隠れるほどの長さで、そこから見える細くしなやかな指先に生えている爪には、今風の鮮やかなネイルアートが施されている。

タケシのバイト先で立ち読みした雑誌で覚えたものらしく。自分でやってみたら、案外すんなり出来たらしい。ぱっとした見た目は見事な仕上がりで、プロ並みの完成度だった。

そして、黒のチュニックの下にはショートパンツを履いているが、その短いチェニックがミニスカートの様に見え、階段の下から覗き込めば、下着が見えてしまうのではないかと思えるほど短く魅惑的な物であった。

その黒の短いチェニックの下から伸び出る二本のスラリとした春婆怒の美脚が、彼女とすれ違う男性諸君を否応無しにも魅了していた。

春婆怒は、そんな男性達の視線を気にも留める事無くロングブーツのヒールで歩道をカツカツと鳴らしながら、長く可憐な蜂蜜色の長髪を、自分のスリムでキュートなヒップを撫でる様に揺らしながら真っ直ぐに歩いていた。

そして、彼女とすれ違い遠く離れて行った男達は、その魅惑から我を取り戻した後に、同じような事を思い浮かべていた。

それは、「あれでもうちょっと胸が大きければ完璧なんだが……」と言う台詞であった。

本当に、残念なぐらいの貧乳であった。

男達の視線を独り占めして歩いていた春婆怒は、アーチ型の看板のある商店街の入り口の前で立ち止まった。

買い物をする主婦や学校帰りの学生達が行き来する商店街の入り口。のアーチ型の看板には『虎野町レインボー商店街』と書かれていた。

この町に在る幾つかの商店街の一つである。

春婆怒は、商店街の入り口の中央で、両腕を小さな胸を隠すように組むと、何故か仁王立ちで商店街の中を見ていた。

その春婆怒の様子を直ぐ横で、見知らぬ子供が驚いた顔で見上げていた。

「何じゃ、童よ?」

子供に気付いた春婆怒が、クールな声で言うが、少年は驚いた顔のまま何も答えなかった。

暫くの間、春婆怒と子供の視線が見つめ合う。

「ぁぁ……」

子供がやっとのことで声を漏らす。

だが、結局何も言わずに春婆怒を見詰めていた子供は、何度か振り返りながらも春婆怒の元を去っていった。

「……あの童、結構な霊感があるようじゃのぉ……、まぁ、関係ないがのぉ」

子供の姿が見えなくなるまで見送った春婆怒は、ゆっくりと商店街の中へと足を運び始めた。

春婆怒は、色々な人々が行き来する商店街を眺めるように暫く歩いていた。

五十年前。彼女が春婆怒村で鬼々蜘蛛と共に自分を封印した頃とは、大きく変わり果てた人々の営み。

最初は戸惑いを感じていた。

ラジオしかなかった時代から、カラーテレビが当たり前の時代へ。

全ての道はアスファルトで舗装され。何本もの電信柱が立ち並び、町の頭上を蜘蛛の巣の様に電線が張り巡らされている。

そして、電線よりも高く天を刺すようなビルが幾つも立ち並び、そのビルの遥か上空を飛行機と呼ばれる乗り物が飛びかっていた。

五十年前の田舎町で眠りに付いた春婆怒に取ってこの世の進歩は、彼女を浦島太郎に変えてしまっていた。

「この通りも、昔の名残なんぞまったく残ってもおらぬのぉ……」

古い景色である商店街内を歩く春婆怒は、そう呟きながら寂しそうな表情をしていた。

「ここかのぉ……」

春婆怒が商店街の一角で足を止めて横を見る。

クリーニング屋とレンタルビデオ屋との間で足を止めた春婆怒は、二つの建物の間をじっと見ていた。

それは通りと呼ぶには細すぎて、隙間と呼ぶほうが正しい幅であった。

その隙間からは、生温い風が吹き出ており、春婆怒には風の中に妖気が混ざっているのがはっきりと感じ取れていた。

「相変わらず芸がないのぉ……」

生温くも怪しい風を浴びる春婆怒の口元が笑っていた。

「何百年たっても同じ技法で巣を作りおって。まあ所詮は昆虫って

ことかのぉ～」

そう言って春婆怒は、綺麗な髪をなびかせながら横を向くと、来た道を引き返し始めた。

「まぁ、良いわ。今出会えば互い都合も悪かろう。昔なじみの再開は、またの機会かのぁ～」

春婆怒の表情は何時ものクールな表情よりも、人間味のある表情だった。

普段一緒に居る時間の長いタケシにすら見せる事のない程の珍しい表情で春婆怒は笑いながら言う。

「そろそろタケシの勤めの終わる時間かのぉ……」

空を見上げた春婆怒は、時計も見ずに時刻を見極める。

「さて、散歩も終わりじゃ。タケシの元へ帰るぞょ……」

誰に話しかける訳では無く呟やいだ春婆怒は、またセクシーなウォークで髪を揺らしながらロングブーツのヒールを鳴らして歩き、すれ違う男性諸君の視線を引きずる様に釣り上げていく。

そして春婆怒の魅力的な釣り針から開放された男達は、皆が皆こう思うのであった。

「あれで胸がもう少しでも大きければ完璧なのだが……」と。

<　黒童子の分身達・2　>（前書き）

予断ですが、今日１２／９は私の誕生日。
もう、歳は取りたくないです……。
（＊：．；。：；益；。：；）ノシ

<　黒童子の分身達・2　>

とあるマンションの屋上。

二十階建てで、周りの建物の中でも一番高い建物である。

屋上は広く見渡しがいいが、普段は立ち入り禁止になっているが為、安全面を考えたフェンスは設置されていない。

その広い屋上の床に、直径二十メートルぐらいの巨大な魔法陣が描かれていた。

コンクリートの上に描かれた魔法陣は、うっすらと赤い光を放ち、周囲に怪しい気配を漂わせていた。

その陽炎の様に赤く輝く魔法陣の中央に、小さな黒い影が一つあった。

「本当は、こんな派手な探索魔法陣を使いたくなかったんだけど……」

魔法陣の真ん中で座禅を組んでいる黒童子が、一つ愚痴を言った後に、引き続き何やら呪文を唱え始める。

黒童子の呪文に合わせて怪しく光る魔法は、徐々に赤い光を強めていく。

その魔法陣を目を凝らして良く見れば、魔法陣の文字やラインをなぞる様に小判サイズのゴキブリ達が、凄い勢いで走り回っていた。

魔法陣が赤く光っているのではなく、そのゴキブリ達が怪しい赤い光を放ち、魔法陣全体を築き上げて居るようだった。

「黒童子よ、それでこの魔法陣で、春婆怒の居場所が本当に分かるのか？」

屋上の隅に立つ十郎太が、魔法陣の中央に居る黒童子に問いかける。

「どうでしょうね、分かりませんが、ただ歩き回るよりは確実です。これでも僕は将来的に、妖怪連合の本部の調査班に入りたいんですよ。この町の調査班程度では嫌なもんでね」

「ガキは夢があっていいもんだな～……」

そう言って腕を組みながら黒童子を見守る十郎太が、はっきりと聴こえる声で皮肉った台詞を飛ばしていた。

しかし、実のところ黒童子は十郎太よりも年上なのだ。

黒童子の外見は、名前の通り子供の姿ではあるが、実際の年齢は三百歳を超えている。

一方の十郎太は、まだ百五十歳程度なのだ。

妖怪とは、外見で年齢を見極められない存在である。

「この術の制限時間は十分程度、索敵範囲は町の１／５ってとこかな……、じゃあそろそろ重点完了。」

座禅を組んでいる黒童子が、両手を拝むように叩く。

「やっとかよ」

待ちくたびれた十郎太の台詞の後に、黒童子の二つの瞳が、魔法陣と同じ様に赤くも怪しく輝き始める。

「行きます！」

黒童子がそう言って念を放つと、一斉に赤く光るコキブリ姿の分身たちが、渦を巻きながら上空にと飛び上がっていく。

そして、上空を赤黒く染め上げた黒童子の大量の分身は、しばらくグルグルと渦を巻きながら飛んでいると、炸裂した花火の如く突然に散らばり、町の四方八方へとバラバラに飛んでいった。

「おおー、派手だなー。こんだけ派手だと、人間どもが大騒ぎするんじゃないのか？」

十郎太の言う通り、その光景は無音に近いが、巨大な花火が打ち上げられた様に空へと広がり派手な物であった。

これだけド派手なアトラクションを行えば、幾らなんでも人間達に気付かれて騒ぎになるのではと、十郎太は赤い光が飛び交う空を見上げて思っていた。

「大丈夫です、僕の分身は普通の人間には見えませんから」

十郎太は、朧が住んでいるアパートの前で、黒童子が同じ事を言

っていたと思い出す。

そして、座禅を組んだまま黒童子は赤い目を瞑ると、怪しい呪文を唱えながら気を集中させ始める。

黒童子は、町の上空を飛び交う分身達を通して、妖気を持つ者を探り出しているようだ。

「この気は……、勧誘班の扈鼠に……、こっちは処理班筆頭かな……。へぇ～、この二人は今コンビ組んでるんだ……」

大掛かりな探索術を行う黒童子の語る通り、扈鼠と八尾の二人は一緒に街の中を歩いていた。

今日も最近発生した新手の妖怪のもとを尋ねて来た帰りである。二人の任務の結果は、今此処で語りはしないが、良い報告が出来る内容ではない。

そして、日が落ちる前の市内を飛び交う複数の赤い発光体に、ふと扈鼠が気付く。

「弦徳様、あれは一七五一家の黒童子の分身ですよ……」

空を見上げたままの扈鼠が、一緒に居る八尾に話しかけた。

「ああ、その様だね……」

扈鼠に言われて上を向いた八尾は、目を凝らして赤い発光体を確認すると、それが飛び交うゴキブリだと気付き、少し眉を顰めて嫌

な顔をしながら答えた。

「むむ、この妖気は油儀会長と蓋口静香……ハズレか……。この気は猫田兄弟……ハズレ。この気は轟朧……。この気も違う、この気はただの呪縛霊……、居ない～、居ない～、ハズレばかり～……、春婆怒の気が感じられない～、九十九神ぽいのは居ないよ～……」

「ちっ、役立たずが……」

十郎太は、気を集中させている黒童子には聞こえないように悪態を呟く。

黒童子が術を開始して既に七分近くが過ぎたが、未だ目的の春婆怒らしき気を捕らえられずにいた。

「むむむ、この気は虫玄武さんに蛾蝶姫……。あれ、なんで二人と猫田虎二が一緒にいるんだ？」

「今はそんなのどうだっていいだろ、春婆怒を探せ！」

首を傾げる黒童子に、魔法陣の外から大きな声が投げつけられる。その声には苛立ちが感じられた。

「ああ、そうでした……」

若干だが、ショボンとした態度を取った後、黒童子は再び探索に専念する。その時であった。

「ん！これは！？」

何かを見つけた黒童子が、明るい表情で声を上げた。

「見つけたか黒童子！？」

黒童子の表情に釣られて、十郎太も表情を輝かせる。

しかし。

「虎野町北高校、ラクロス部の女子達が、部室でワイワイキャピキャピ着替え中！」

「こ・ろ・す・ぞ……」

こめかみに血管を浮き立たせた十郎太の両手が、見る見る間に巨大な鎌に変わっていく。

「ごめんなさい、真面目にやります……」

その二つの鎌から怒りを感じ取った黒童子は、真剣な表情に戻り探索を再開させる。

そして、探索を再開させた直後、黒童子が声を上げた。

「ビンゴです、この気配は九十九神！、おそらくは春婆怒！」

最初に語っていた術の制限時間が迫る中、ついに黒童子は目標を見つけ出すのに成功した。

「良くやった黒童子！。で、何処にいやがる春婆怒は！？」

身を乗り出すような体制で問う十郎太。その姿から、血気しているのが明らかに感じ取れた。

「九時の方向、虎野町市四号線をバイクに乗って北に進んでます！」

赤い目を輝かせながら満面の笑みで答える黒童子。

「よし、黒童子、そのまま負い続けろ。俺は現地へ飛んでいく！」

黒童子に対して指示を飛ばす十郎太の腰の辺りから、カマキリの羽が生えて羽を音立て始める。

「はい、ナビしますから、ちゃんと仕留めてくださいよ、十郎太さん！」

「がってんだ！」

そう言うと十郎太は、人間とカマキリの合体したような姿で、二十階建てのマンションの屋上から羽を広げて飛び立っていく。

「まってろよ、九十九神春婆怒。貴様は俺様、蟷螂妖怪十郎太様が討ち取ってやるぜぇ！」

<　黒童子の分身達・3　>

バイトが終わったタケシは、バイクの後ろに春婆怒を乗せて県道を走っていた。二人はこれからアパートに帰るところである。

ややスピードを出しているタケシは、信号で停止している車列の脇を走り向けて先頭に出ると、赤信号に乗ったバイクを止める。

最近では春婆怒がバイト先に付いてくるのは珍しくなくなっていた、それどころか陽子と一緒じゃない時は、必ずといっていいほど春婆怒がタケシの横に居る。

タケシ本人はあまり気にしていないようだが、タケシの側には陽子か春婆怒のどちらかが何時も入るのである。

だが、陽子と春婆怒が二人居て、同時に三人が一緒という状況は少ない。自称の分からない人から見れば、今のタケシは女癖の悪い二股男に見えるであろう。

目の前の信号が青に変わると、タケシはバイクのアクセルを吹かして勢い良く交差点へと飛び出していく。

「ん?」

タケシが心地よい風を全身に受けながら走っていると、バイクの後ろに乗る春婆怒が何かに気付いて声を掛けてきた。

「タケシや、上を見てみぃ」

タケシはバイクを走らせながら「何でだ？」と言い春婆怒の声に答えると、アクセルを弱める事無く上空を見上げた。

そして、上空を見上げたタケシの目に入ってきた光景は、幾つもの赤い発光体が大空を飛びかっている様子であった。

「なんだあれは、ＵＦＯか？」

タケシは、被ったフルフェイスのヘルメットごと首を横に傾げる。

「そんな非現実的なものではないぞょ」

「じゃあ、何だよ？」

「何者かが妖術で使い魔を複数放っておるようじゃ。何かを探しているようじゃのう」

それも科学的じゃないと思うが、自分には関係ないといった感じで「へ～……」と、他人事のような返事をタケシは春婆怒に返した。

「おそらく、あれはわらわ達を探していると思うぞょ……」

「え、マジ、どうしてそう思うんだ？」

「それはのぉ……、だんだん数が増えてきてるからじゃ。」

「！」

春婆怒の言葉に今一度上空を見るタケシの目に、赤黒く染め上げられた空があった。

確かに謎の赤い発光体は、数を増やしながら二人の乗るバイクの後を追いかけて来ていた。

「うわ、なんじゃこりゃ！」

その状況にはじめてタケシは、自分達が追跡されていると自覚する。

「おい、黒童子、聞こえるか！？」

カマキリの姿で空を飛びながらタケシと春婆怒の乗ったバイクを追いかける十郎太が、自分の近くを飛ぶ黒童子の分身に怒鳴る様に呼びかけた。

すると赤く光りながら飛び交うゴキブリの中の一体から、「なんですか？」と返事が返ってくる。

「あの二人乗りのバイクか？」

十郎太は上空から男女二人乗りのバイクを見ていた。

バイクの後ろに乗る女性のヘルメットから、長い金色の髪が靡いている。

「ええ、そうです、あのバイクの後ろに乗っているのが、恐らくは春婆怒です」

「うし、じゃあ、あのバイクの進路を、お前の分身を使って邪魔しやがれ。ちょっと速くて俺じゃあ追いつけねーんだよ！」

空を飛ぶ十郎太と、タケシ達のバイクのスピードは、ほぼ変わらない速度。しかし、十郎太は、これが精一杯のスピードである。

引き離される可能性はあるが、追いつく可能性が少ないようだった。

「分かりました。でずが、手助けはこれで終わりです。僕の妖力も、もう時期尽きちゃいますから！」

「おおう、あとは任せろや！」

十郎太が、力強く自信に満ちた返事を黒童子の分身へ返す。

すると上空を飛び交っていた黒童子の分身達が、猛スピードで走るタケシのバイクを目指して、一斉に急降下を始める。

赤黒く光る不気味な群れがタケシ達に迫る。

そして黒童子の分身達はタケシ達を包むように取り囲み、バイクの走行を妨げ、視界の邪魔をする。

「なんだ、この昆虫の群れは！」

黒童子の撹乱に、タケシが動揺を見せた。

「いや、昆虫じゃあねえ、ゴキブリじゃねえか！」

ゴキブリも昆虫です……。

「春婆怒！、覇王のベルトだ！」

「わかったぞょ」

身の危険を感じたタケシの呼びかけに春婆怒は、平べったい胸元からスルスルとフィルターベルトを取り出す。そして、タケシの腰に手際良く巻きつけた。

「よし、いいぞよ！」

タケシにベルトを装着させ終わった春婆怒が、タケシの背中を軽く叩いて景気を付ける。

「ＯＫ！」

赤く輝きながら飛んできた複数のゴキブリが、バイクで走る二人を包み込む中、タケシの口から気合の入った合言葉が放たれた。

「妖力共有・変身！！」

バイクを走らせるタケシの腰に巻かれた覇王の腰巻。その大きめバックルに内蔵された赤い風車が、タケシの言葉に反応して激しく回り始めると、そこから緑色の風が吹き出し、タケシ達の進行を邪魔していたゴキブリ軍団を弾き飛ばしていく。

そして見る見るうちに緑の風は、タケシの体に巻きつき、其の姿を変えていった。

緑黒い恐竜の被布のような全身に、機械鎧の様な物が所々にプロテクターの如く装着される。

気付けば先程までバイクの後ろに乗っていた春婆怒の姿は、緑風が全て消える頃には、一緒に消えていた。

そして変身したタケシが乗るバイクもまた一回り大きくなり、ハンドルとマフラーが反り返ったアメリカンでワイルドなモンスターバイクに変わっていた。

「うし、春婆怒。あのゴキブリどもを蹴散らすぞ」

タケシはそう言って豪快にバイクのアクセルを捻り上げると、目の前に見えてきた大きな橋を渡らずに、そのまま橋下の河川敷に降りていく。

尚もタケシ達を追いかける黒い軍団を迎え撃つために、タケシは橋の下の広いスペースに入ってバイクの後輪をスピンさせながら止めると、素早くバイクから降りて追ってを待ち構えるように身構えた。

橋の下は、天井となる橋の裏側はまでは二十メートル以上の高さがあり、近くに大きな橋げたがそびえ立っているだけの広いスペースだった。そこは、戦闘を行うには十分な広さがあった。

「ん……？」

だが、先程までタケシ達を追いかけていたゴキブリ軍団は姿を消し、その代わりに現れたのは、痩せた長身の男が一人であった。

「ん、オメーが、あのゴキブリの親玉か……？」

タケシの問いに長身の男は鼻で一度だけ笑うと、バカにした表情で答えた。

「冗談を言ってもらっては困る。俺の名前は十郎太。一七五一家で一番優れた狩人よ。」

一七五一家の刺客一番手、十郎太。

今、対決が始まる。

<　ファイターｖｓハンター　>

「おい、あの赤く光るゴキブリども、西の方に飛んでいくぞ」

虎二は、空を見上げながら近くにいる背の低い筋肉ダルマの男と、ツインテールの少女にそう話しかけた。

虎二、虫玄武、蛾蝶姫の三人は、ゴキブリ軍団が大量発生した二十階建てのマンションから、三百メートルぐらい離れた住宅街を歩いていた。

「黒童子のヤツめ、さては春婆怒を見つけたな……」

虫玄武が、虎二に言い返す。

しかしツインテールの蛾蝶姫は、黙ったまま眠たそうな目で、その空を見上げるだけだった。

虎二は、自分の妖力探知に、妖気も何も引っかかって居ない事に疑問を感じていた。他人の妖力探知に春婆怒が引っかかっているのが信じがたい様子だ。

「よし、蛾蝶姫、俺らも黒童子の分身を追っていくぞ！」

虫玄武の言葉にツインテールの少女は一度頷くと、二人は其の姿を妖怪の物へと変身させる。

ツインテールの少女は巨大な翼を持つ怪しげな蝶の姿に変わり、

虫玄武は額にカブトムシの角と背中に羽をしまっておく硬い甲羅が付いた鎧武者の姿に変わった。

一段とゴッツイ風貌に変わった虫玄武が、力を貯めるように膝を曲げ腰を落とす。

「いくぞ、蛾蝶姫！」

その掛け声にあわせて、虫玄武と蛾蝶姫は翼を広げて飛び立っていった。

「おい、こらー、俺を置いていくな～！」

翼を持たない虎二は地上に残され、ゴキブリの群れを目指して飛んでいく二人を見上げながらそう叫んだが、飛びたった二匹の昆虫妖怪の耳には、その声は届いてい様子だった。一人取り残される

「置き去りかよ！」

一方、とある二十階建てのマンションの屋上。

赤く輝いていた怪しい魔法陣の姿が消えて、誰も居ない屋上の床に、黒い学生服の少年が大の字になって倒れていた。

「うあ～、もうダメだ～、妖力空っぽです～、指一本動きません。虫玄武さんも気付いて移動を始めたようですし、僕はこれでリタイヤします。あとは皆さんにお任せします～」

黒童子は、誰に聞こえる訳でもないのだが、そう言うと目を閉じた。そして、死体の様に動かなくなる。

しかし、動かなくなった少年の半開きの口から、一匹のゴキブリが触覚を二本揺らしながら頭を出す。

その一匹のゴキブリは、動かない少年の顔の上をグルリと這い回った後に、黒い翼を広げて空へと飛んでいった。

河川敷。

大きな橋の下で、睨み合う二人の男達。

その場所は、人目にもつき難く、スペースも広い。男達が繰り広げる殴り合いの決闘には、都合が良いスポットであった。

春婆怒と両力共有したタケシの前に立つ男。

身長は若干だがタケシより高く見える。しかし、体つきはタケシよりもかなり細身で、肉付きからしてマラソンランナーのようなアスリートタイプの細くしなやかな筋肉に見えた。

おそらく進発力と持久力に関しては、この男の方が上だろうとタ

ケシは予想した。

そして、身長と比べて更に長く見える手足のリーチ。

否、長く見えるではなく、明らかに長い。

だとするならば、この男の骨格は人間の物とは異なる。

特異体質？　タケシは一瞬そう思った。

最近とある中華飯店で、人間とは思えないサイズの巨人を見ている。その事実もあってタケシは、男のリーチの長さを見た目の通りと人間なのかと納得した。

しかし、春婆怒と妖力共有した姿のタケシの前に立つ男は、タケシの今の姿を見ても顔色一つ変えていない。

黒緑の爬虫類のような肌に、ゴテゴテした甲冑。このような姿をした人間は、そうそう歩いては居ないだろうに……。

それを見て男は、眉一つ動かさないで平然としている。そうなると、この男は……。

「テメー、妖怪だろ？」

タケシが問う。

「そうだが、文句でもあるか？」

タケシの質問に答える男は、素直に自分が人間では無い事を堂々

と認めながらタケシに対して凄んだ声を出す。そして、蟷螂拳の構えを取って見せた

「ん？　なんだそれ？」

タケシは思い出す。最近戦った蟷螂拳の達人の構えを。その構えと比べて、男の構えは姿勢が高くスキの多い構えに見えた。

蟷螂拳とよりも、まるで「うらめしや～」の幽霊のように見える雑な構えであった。

しかし、タケシはバカにしながらも両拳を握り締めファイティングポーズを取った。

それは、スピードだけならば目の前の男の方が上だと感じとったからである。

「……」

男は動かない。

じっと幽霊のような構えを取ったまま、タケシを睨み続けている。

「……ちっ」

舌打ちを漏らすタケシ。

タケシは、敵を目の前にして闘争心を抑えることが出来ずに居た。

「待ちかょ……」

タケシは、男が後手に転じたとのを悟る。

そして、じっと待つ男の元へと、タケシが構えを保ちながら少しずつ近づいていった。

目の前の男の様に、後手に回れるほどタケシは歳を取っていない。そう、血が騒ぎ勝手に体が前に出て行く。

タケシの行動を見て、男は心の中で笑っていた。

周りの背景に擬態し、じっと動かず、獲物が近寄ってくるのをひたすら待ち続ける。

カマキリは、そんなハンディング方法で、何時間も、何時間でも、じっと耐え続けながら獲物を待つ。

草木に擬態するカマキリの如く人間に擬態している男は、タケシが近寄ってくるのをじっと待った。

あと一歩でタケシが男の間合いに入る。

男はじっと待つ。

あと半歩でタケシが男の間合いに入る。

男はじっと待つ。

あと指一本分でタケシが男の間合いに入る。

男はじっと待つ。

そして、タケシが男の間合いに入った。

男の方がリーチで勝る。タケシの攻撃はまだ届かない距離。

男の両腕がカマキリの鎌へと一瞬で変わる。そして、男の両腕が、一瞬でタケシの両肩をがっしりと掴み、その鎌に生えた無数のスパイクで二度と外れないように突き刺さり固定する。

そして自分の目の前へと一瞬で引き寄せた。

その全ての行動が、一瞬に、同時に、素早く行われる。

あとは致命傷を与える噛み付き攻撃をするのみだった。

ぱぁかーーーーーーーーーーーん!!!

男が噛み付き攻撃を実行しようと思った刹那、自分の視界に入ってきたのは、遠く離れた場所にある自分の背中であった。

「ん?」

男は何が起きたのかと疑問に思う。

何故、自分の背中があんな遠くに見えるのか?。そう思い、思ったままの台詞を口に出そうとした。

「何で、俺、自分の背中を見てるんだ?」

男はそう言ったつもりだったが、その台詞を口から発することが出来ていなかった。

そして、自分の背中から、上半身を乗り出して、拳を握った片腕を伸ばしているタケシの姿に気が付く。

その姿を見た時に、男はやっと気が付く。

自分の体には、頭が無い……。

当然である。その頭は今、地面に転がりながら遠く離れた自分の後姿を眺めているのだから。

そして「自分の首はもげたのか……」と心の中で呟くと、十郎太の意識がスゥーっと白い世界へと消えていく。

タケシの両肩を掴んでいた二つの鎌から力が抜けて、ズルリと崩れ落ちると、白い霧となってタケシの鎧へと吸い込まれていく。

それに続いて、数メートル離れた場所に転がっていた十郎太の頭部も、霧となって鎧に吸い込まれていった。

「なるほどのぉ～、敵の力を利用したのかぇ」

タケシは十郎太に肩を捕まれ、もの凄い勢いで引き寄せられるさいに、その力を利用して十郎太の顔面にパンチを打ち込んだのである。

タケシのパンチ力に、十郎太の引き込む力が重なって、信じられない程の一撃必殺を生み出したのであった。

そのように敵の力を利用したタケシだったが、首がもげる程の一撃になるとは予想もして無く、本人も若干驚いていた。

「おいおいおい、十郎太の野郎、デケー口を叩いてたわりには、たった一撃でアウトかよ。情けね～な～」

十郎太との勝負を一瞬で即けたタケシは、その声に初めて新手の存在に気付いた。

そこにはカブト虫のようなデザインの鎧武者と、ツインテールの少女が立っていた。

「新手か……」

いつの間にか現れた二人を見てタケシは呟くと、仮面の下からキリッとした眼光で、二人を刺し殺すように睨みつけた。

<　ファイターｖｓハンター　>（後書き）

一番手、十郎太、死す。

<　虫玄武兜丸ジョニー・1　>

カブト虫を思い浮かばせる大きな角が額に生えた兜の鎧武者は、ガシャガシャと音をたてながら重そうな鎧を揺らして、ツインテールの少女の元を離れた。そして前に進みタケシへと威勢良く近寄って来く。

腰には二本ざしをぶら下げた鎧武者。顔は仮面で隠れているが、其の仮面の奥でつぶらな瞳が輝いて居るのがはっきりと見えた。

「蛾蝶姫、俺がやる、文句はあるめーよなー？」

「……」

鎧武者の台詞に、後方に残ったツインテールの少女は、眠たそうな目をしながら何も答えなかった。

鎧武者は、無言の少女に振り返る事無く歩き続ける。

「どうでも良いけど、こいつら誰だよ？。さっきから問答無用で襲い掛かってくるけどよ」

「こやつらは一七五一家だ」

タケシの問いに答える春婆怒。

「一七五一家？」

「そう、昔からわらわに絡んでくる連中よ。あの鬼々蜘蛛もこやつ

らのなかまじゃ」

「なるほど……、ならばやり合うしかないのか」

春婆怒の回答に、タケシは問答無用の対決と納得した。

納得などしてなくても、敵として向かい合った以上は、やり合うつもりである。ただ、タケシは、念の為の確認を取ったにしか過ぎない。

「御主が、わらわの使い手として九十九神から人々を守りたいと言うのならば、こやつら妖怪からわらわの身を守るのも当然。それがお互いの約束事……」

「ふっ、わかってるよ」

タケシは項垂れながら答える。

しかしどんな形だとしても、戦える事に期待感はあるようだ。

カブトムシの鎧武者は、タケシに近寄りながら腰にぶら下げた日本刀を鞘から引き抜くと、両手で刀を確りと握り締め、体を斜めに向けた。そして、まるでバッターボックスに立つ野球選手の様に刀を構えた。

今の時代だと、竹刀でポイントを競い合うような剣道の試合では、姿を消してしまった構えだ。

しかし、真剣が当然の時代ならば、珍しくもない構え。そんな構えを鎧武者は見せる。

それは、一刀両断の構え。

「タケシや、わらわを使え」

刀を構える敵を見て春婆怒が、試しに言ってみる。

しかし、ウェポンモードを促す春婆怒にタケシは「素手で十分」と言いながら聴き入れなかった。その回答を予想していた春婆怒は、容易く諦めると強制する言葉を続けることはなかった。

春婆怒は、何時もの事だと納得するが、その二人のやり取りに鎧武者が口を挟む。

「ほほー、刀を相手に素手で挑むか。槍の九十九神と聞及んでいたのだが……」

鎧武者の構えから、僅かに力が抜ける。

「不満か？」

それに気付いたタケシが問う。

素手対日本刀。しかも相手は鎧まで来ている。

この大きなハンディーは、武人にとっては侮辱と捕らえられても不思議ではない。

鎧武者の両手に、再び力が入る。

「後悔するなよ！」

そう言って鎧武者は構えた日本刀を大きく振り被るとタケシに切りかかった。

先程、タケシに向かって歩み寄った再に鳴っていた鎧の金属音。だが、今タケシに切りかかった鎧武者からは、その音が不思議と鳴ることはなかった。

大きなアクションにもかかわらず、静かに攻め入る鎧武者。豪快なモーションに隠れる技術。その技から振り下ろされた刃が、空気を切り裂きながら光の如くタケシの頭に振り下ろされる。

「りぃあぁ！」

激しく、心地よくも鋼がぶつかり合う音が鳴り響く。

それは、振り下ろされた鎧武者の日本刀に、タケシの拳が打ち込まれ火花が散る音だった。

「なんと硬い拳、刃を弾くとは！」

拳で一刀を弾かれた虫玄武の体が後方へとよろめく様に弾き飛ぶと、タケシも放った拳の衝撃で体制を大きく崩した。

拳で刀を弾かれた虫玄武だが、それでも怯まずにすぐさま体制を取り戻し、二太刀目を放つ。

「ならば、これでどうだぁ！」

その刃はタケシの顔面を狙い振られた横一線の一撃。

切っ先がタケシの鼻先の空気を鋭く切り裂く。

タケシは背を後ろに反らして虫玄武の横一文字斬りを避けると、回避行動と共に貯めを築く。

そして引いた体を戻す勢いと共に築いた貯めの勢いを利用して、刀を空振りさせた虫玄武に飛び込んでいった。

タケシが放つ鉄拳。

虫玄武は、刀を振りぬいた体制から防御を作る。攻めた後にも防御する。それが真の剣士の姿。真の剣技。

荒々しい動きの虫玄武は、それを当然の如くこなして見せた。柄の悪さと、技の熟練度が、イメージとして合わない男だった。

この男は、見た目以上に剣技を会得しているとタケシは思った。

そして、タケシの拳が、ガードを固める虫玄武の肘に当たって止まった。

タケシの鉄拳を見事にガードした虫玄武だが、思った以上の衝撃に驚いている様子だった。

「ぬおぉ！、しかしまだまだ！」

今度は下から上に、まるで円を描くように刀を振るわせる虫玄武の攻撃。

その剣激は、綺麗に円を描きながらタケシの胸元を刃先で切り裂き、煌びやかな火花を散らし振り切られた。

「ぐお！」

思わず声を漏らしたタケシは、その一撃を喰らって飛ばされるように距離を広げる。

タケシの胸に刻まれた縦の切り傷。

傷口からは、摩擦でうっすらと煙が揺らいでいた。

しかし、甲冑を貫いてはいない。だが、重い刀の衝撃が肋骨に響きダメージを残していた。

「ちっとはやるじゃあねえか、九十九神！」

「そっちこそ、鎧武者野郎が！」

距離を取った二人は、お互いを睨みながら褒め合う様に悪態を付け合う。

「俺様の名前は虫玄武兜丸ジョニー。一七五一家一番の暴れん坊。全国の子供たちが憧れるカブト虫の中のカブト虫！。クワカダなんかにゃ負けらんねー、テメーなんかにゃ、負けらんねー！」

短歌をきる虫玄武。その声は、明らかに楽しげに聞こえた。

タケシは、胸に刻まれた傷跡を、埃でも掃うように片手で掃いな

がら言った。

「なるほど、カブト虫の妖怪って訳か」

「そのとーーりーー！」

待ってましたと言わんばかりに答える虫玄武兜丸ジョニー。

「ヘラクレスとか～、コウカサスとかにはぁ～、負けらんねぇ～！」

そう言いながら虫玄武は、歌舞伎役者のようなポーズを取って舞って見せた。

虫玄武は完全にノリノリの様だが、それを見てタケシは「ふっ」と鼻で笑って睨んでいた。

<　虫玄武兜丸ジョニー・2　>

変身した姿のタケシと、鎧武者の虫玄武が睨み合う。

お互いの鋭い視線と視線がぶつかり合い火花を散らすと、その間を西部劇のような乾いた風が吹き抜けていく。

「面白れー、受けてたってやる、かかってきやがれ！」

そう言いながらもタケシが、掌に拳を叩きつけて気合を入れ直していた。

「何を偉そうに、てめーこそかかってきあがれ！」

「お前からかかってこいよ！」

二人は、構えを緩めて罵倒に力を込める。

「てめーからだ！」

「さっきは、お前から攻めてきたろうが！」

「むむ！、じゃあ、今度はお前からだ！」

「なんだと虫けら！」

「虫とか人とか、今は関係ないだろが！」

子供の様な言い争いに専念する二人。

完全に肉弾戦で勝負を決める事より、今は口喧嘩で引けを取りたくないようだ。

「どっちでもいいわぁ、早く始めい！！」

二人の言い争いに痺れを切らして春婆怒が怒鳴り声を上げる。

「うおりぃあーーー！」

「ふぅぬぬぬぬぬ！」

それを合図に、二人が同時に走り出した。

二つの拳を握り締めるタケシに、二つの拳で刀を握り締める虫玄武。

先手を放つのは虫玄武。

日本刀と言う武器を使用している分だけ虫玄武の方が、当然ながら間合いが広い。

「真っ二つにしてやるわ！」

虫玄武がそう言うと大きく刀を振り被り、タケシの脳天を目指して容赦無く振り下ろす。

振り下ろされる虫玄武の刀を見て、タケシの瞳がキラリと輝いた。

そのタケシの輝く瞳に、春婆怒は嫌な予感が脳裏に走る。

「何の！、堂本流奥義、真剣白刃……」

ガキィーーーン！。

「……十字受け！」

またしてもタケシは腕を頭の上でクロスさせて刀を受け止める。

まあ、いちょう、空手で表すところの交差受けの型ではある。

「お前……、真剣白刃取りを失敗しただろ！」

「そ、そんなことない！　これはこう言う受け技なの！」

「嘘だー、ぜってー嘘だー！　失敗だ失敗だ～！」

強がるタケシを虫玄武がちゃかす様に小バカにする。

「ほ、本当だもん！　失敗じゃないもん！」

「やぁ～い、やぁ～い、失敗ぃ～失敗ぃ～！」

踊りながらバカにする虫玄武に、いじめられっ子の様に食って掛かるタケシ。

はたから見れば、この二人が命を掛けて真剣勝負をしている最中には見えないだろう。

「……」

春婆怒は呆れて何も言えずに、二人の会話を黙って聞いていた。

「二人とも、早く戦え。お前らバカだろ。ウダウダやってると、チンコ引きちぎるぞ……」

「「！」」

二人から離れた所に立つ蛾蝶姫。彼女の言葉は呟きのように小さな声であった。しかし、その台詞は確実に二人へ届くように、テレパシーで心へ直接囁かれた。冷酷に。

「あのちびっ子……、可愛い顔して、酷い言い方するな……」

顔を青ざめて蛾蝶姫を見る二人。

「ああ、中身は残忍な妖怪変化だから……」

そう言った虫玄武に隙が生まれた。

タケシは其れに気付くと、虫玄武の胸に後ろ廻し蹴りを打ち込む。

それが戦闘再開の合図となる。

後ろ回し蹴りを喰らった虫玄武が「ぐはっ」と声を漏らしながら後方に下がると、尚もタケシが追撃してくる。

高々とジャンプしたタケシの姿が、虫玄武には鎧兜の仮面の隙間から見えた。

しかし、次の瞬間には、タケシの足の裏が仮面の視界を塞ぐ。

「ぐぅ！」

「派手に行かせてもらうぜ！」

気合の込められたタケシの声と共に始まる猛攻。

胸元に左正拳突き、脇腹に右水平チョップ、右足に左下段廻し蹴り、そして更に肘打ちを上から肩へと打ち落とす。

その全てがクリーンヒット。

硬い鎧は、打楽器の様に音を奏でさせた。

しかし……。

「きかんーーー！」

両手で確りと持った日本刀。虫玄武は、其の刀を握る両拳を、接近していたタケシの胸元へ突き飛ばす様に打ち放った。

「のあ！」

タケシは虫玄武の気合い溢れる一撃に突き飛ばされると、空を舞五メートルほど離れた場所に着地する。

「ちっ、決行硬いじゃないか」

タケシは握り締めていた拳を開くと、痺れる手をぶらぶらさせた。

突き飛ばされたダメージよりも、自分が放った攻撃で痛めた拳を気にしていた。

「当然だ！。俺様は子供たちのアイドル、カブト虫の甲羅を持った虫玄武兜丸ジョニー様だぞ！。そんなヘナチョコなパンチが効くか！」

「頭悪そうな事を言ってやがるが、硬いのは確かだな」

タケシはそう言うと、痺れた両手を再度握り締めて、虫玄武目指して走り出す。

そのタケシに対して虫玄武は、日本刀を野球のバッティングポームの様に刀を横に振って迎え撃つ。

「ぜぇあぁ！」

迫り来るタケシに、虫玄武の刀が袈裟斬りで振り下ろされた。

「おっと」

タケシは、虫玄武の斬りをスライディングで土煙を上げながら避けると、スライディングの勢い其のままに虫玄武の背後に滑り込みなが立ち上がる。

「やるな！」

バックを取られた虫玄武は、刀を振り斬るように振り返る。

「せやっ！」

振り返った虫玄武の顎に、タケシの拳が合わせられる様に打ち込まれた。

「はふぅん!?」

鉄の仮面がずれて、兜が激しく揺れた。

眩暈。

タケシのパンチ力に振り返った勢いが加わった破壊力を、顎先に喰らった結果の現象。

眩暈に膝がカクンと折れて倒れそうになるが、虫玄武はよろめきながらも必死にダウンを堪える。

「なるほどのぉ、素手の武術とは面白いのぉ～。自分の力だけではなく、相手の力おも利用して、その威力を何倍にも変化させるのかぇ」

先程のカマキリ男との決着でもそうだった事を、春婆怒は思い出しながらそう言ったのだ。

「素手の格闘技ならば、当然の技術。カウンターって呼ぶんだ」

タケシは、仮面の下でニヤケながら春婆怒に答えた。

相手の力を利用する戦術、カウンター。

日本刀のような剣技には、あまり無い技法である。

それは武器の強さ故。

武器さえ有れば、鋼鉄とて破壊できる。

その技を極めれば尚の事。

しかし、素手の格闘技の一撃は、か弱いもの。

幾ら極めても、自力での破壊力には限界がある。

故に、対戦相手の力おも利用しなくてはならない。

武器による戦術と、素手による戦術の違いは、弱さゆえの試行錯誤の差。

強さを磨くのではなく、弱い故に努力をする。

それが、空手道。

それが、武道。

しかし、一撃が決まったが、まだ虫玄武とは決着は付いていない。

タケシは、よろめく虫玄武の横に回ると、後頭部に手刀を打ち込み、続いて下から顎を膝で蹴り上げる。

「はぁぐぅぅ！」

更にツイスターの如く回転してからの後ろ廻し蹴り。

全身で生み出した回転力を踵に込めて、虫玄武の頭を蹴り飛ばす。

虫玄武は「うぉぉぉ！」と声を上げながら吹っ飛んでいくと、女の子のように可愛らしく内股で地面に倒れこむ。

「貴様、やるな！」

倒れたままそう言う虫玄武にタケシは、「気持ち悪い倒れ方してないで、早く立て」と促す。

虫玄武はタケシに見守られる中、よろよろと立ち上がった。

頭部を集中して攻撃された虫玄武は、視界が揺れて若干気持ち悪さを感じていた。

それを見たタケシは、虫玄武にダメージがあることを確信して「行ける、これなら素手でも行ける！」と心の中でガッツポーズを取っていた。

<虫玄武兜丸ジョニー・3　>（前書き）

ついに「九十九」も９９話か～。
（＊：．；。:；益；，。:；）なんか嬉しいよ。

<　虫玄武兜丸ジョニー・3　>

乗り物酔いでもしたかのように視界が揺れる虫玄武は、その目を覚まさせる為に手の平で鉄兜をポンポンと叩いた。

自分が立ち上がるのを待つ余裕の敵を前に、強く刀を握り締める虫玄武。

少し離れた後方では、同じ一家の蛾蝶姫が何時もように眠たそうな目で、こちらをぼんやり見ている。

情けない勝負は出来ない。

あんな小娘の妖怪に、馬鹿にされるような戦いは見せられないと思う。

虫玄武は鎧武者の格好をしているのは、これでもサムライの端くれだったからだ。

昔は人間だった。

侍と言っても、田舎の大名に仕える百姓侍。

普段は田畑を耕し、戦(いくさ)が始まると徴兵される。

そして、戦で手柄を上げて、この鎧を主君からいただいた。

しかし、どこでどう間違ったか、今はヤクザ物の妖怪の下で子分をやっている。

それは、一七五の親分が妖怪でありながら豊作の神をやっているからだ。

死した後に、魂を何故かカブトムシの妖怪に取り込まれた虫玄武。

だが、男の意地と、侍としての誇りが、カブトムシの妖怪を逆に取り込み、虫玄武兜丸という妖怪となった。

そして、訳も分からず落武者の如く無残な死体が転がる戦場（いくさば）を、徘徊しているところを一七五に拾われた。

一七五の親分には、恩がある。

人から妖怪に外れた自分に、妖怪としての生き方を指南してくれた。

男としての道を示してくれた親分に。

百姓侍だった自分には良くわかる。

豊作の神のありがたさが。

一七五の親分の片目と片手を奪った春婆怒。

何故、一七五の親分が、春婆怒との決着を躊躇するかは分からない。

だが、一度刀を交えた以上は、一七五一家の看板に泥は塗れない。

妖怪にだって誇りがある。

それを教えてくれた一七五の親分の為に……。

立ち上がった虫玄武が、目の前の宿敵を睨みつける。

タケシは、右腕をグルグル回しながら肩の関節を解すと、わざとらしく虫玄武に、自分の絶好調をアピールして見せていた。

刀を両手で翳す。

虫玄武が構えを変えた。

剣術で言う、上段の構え。

「な、ならば、これならどうだ！」

そう言う虫玄武の兜に生えているカブト虫の角から、バチバチと電気が放電し始めると、翳した刀へと電撃は移って行く。

「喰らえ！、サンダーボルトスラッシュ！」

兜の角から放電された電撃が日本刀に宿る。

虫玄武は、昔のアニメの技のようなネーミングと共に刀を振るうと、電撃攻撃が光の速さでタケシを襲う。

「ぐわぁぁぁぁ！」

虫玄武の刀から打たれた雷撃が、イカヅチとなってタケシの体を

捕らえると、幾つものスパークが、火花の如く弾け熱い衝撃となってダメージを与えた。

タケシの体が、火花と共に後方へ弾かれるように飛ぶ。

ドスンと音を立て背中から土の上に落ちると、電撃を喰らった黒緑色の体からは、焦げた臭いと白い煙を出していた。

予想以上のダメージに、のた打ち回るタケシ。

「ぐはははは、もう一発喰らいやがれ！」

倒れたタケシが起き上がるのも待たずに、虫玄武は更なる攻撃準備に入る。

額の角から電撃が生み出され刀を伝わり激しい音を立てた。

そして、生み出された電撃が、容赦なくタケシに向けられ放たれる。

「サンダーボルトスラッシュ！」

「くはぁぁ！」

二発目の電撃を喰らったタケシは、火花を散らしながら地面の上を転がった。

「タケシ！、大丈夫かぇ！」

地面に倒れこむタケシのプロテクターから、うっすらと白い煙が

上がり、筋肉が小刻みに震えているのが分かった。

「畜生……、飛び道具とは卑怯な……」

両手を地面につき、腕立て伏せをするように体を起こすタケシは、いきなりの電撃攻撃に非難の声を漏らす。

ダサイ名前の技だが、案外やっかいな技だ。

間合いも広い、スピードも速い、威力も高いの三拍子が揃っている。

「俺様は、男の子達のアイドル、カブト虫が変化した妖怪なんだぜぇ。電撃攻撃ぐらいしても当然だろう！」

「そ、そうだよな……」

膝立ちになったタケシが、虫玄武の台詞に納得しながら答えたが……。

そんな事は無い……。

カブト虫は関係無いと春婆怒は思っていた。

「タケシ、立てるかぇ？」

タケシは煙が上がる体で「ああ、まだまだ行ける……」と力無く言いながら、ゆっくりと立ち上がった。

「こうなったら、しかたがね～……。春婆怒、ウェポンモードだ」

事が早くなる上に自分の出番がやっと回ってきたと、心の中で微笑む春婆怒。

「やっと決心が固まったかぇ」

タケシが開いた手を突き出す。

「ハルバード・ウェポンモード！」

タケシの突き出す手の中に緑色の風が集まると、鋼の槍へと変わっていく。

「決心が固まったんじゃあねえよ。決心が揺らいだんだよ……」

そう、タケシは素手での戦闘を諦めたのである。

「しかたねぇ～から、派手に行かせてもらうぜ……」

ふざけた戦いを繰り広げているように見えるが、目の前の鎧武者の妖怪は、武器を使用しなければ危険なほど強敵である証拠なのだ。

「刀と槍の戦いか、面白い！」

電撃を額の角から放電している虫玄武が、剣先をタケシに向けて叫ぶ。

敵の本気が嬉しいのか、虫玄武の声には戦いを楽しんでいるような物が感じ取れた。

それに答えるように、タケシも槍を片手で持つと、槍の刀身を虫玄武に向けた。

「やっぱ、お前は最高だぜ！」

「お前こそ、良い男だょ！」

互いの言葉は、仕切りなおしを意味していた。

再び男同士のぶつかり合いが始まる。

二人はそれを、身をもって楽しむつもりだ。

<虫玄武兜丸ジョニー・4　>（前書き）

バンザーイ
１００話ですーん
（＊･･･；。:；益；，。:；）ノシシ

<　虫玄武兜丸ジョニー・4　>

タケシが仮面の下で不適に笑う。そして、新たなる技を仕掛ける。

「今度はこっちから行くぞ、烈風槍飛弾！」

タケシの振るう長槍の先から放たれた緑風の渦巻き弾丸が、刀を両手で構える虫玄武を襲う。

虫玄武は、構えを最初の斜めの構えに戻すと、縦に伸びた剣先をクルクルと回す。

まさに飛んでくる風の弾丸を、野球の魔球に例えてバッターボックスに立つ四番バッターの姿だった。

「何の此れしき、サンダーブレイド妖術返し！」

虫玄武は、飛んでくる緑の弾丸を、電撃が佩びた刀で打ち払うと大きく振りかぶる。

「どぅりぃやややややぁぁぁぁ！」

力溢れる虫玄武の雄たけびと共にスイングされた刀が、タケシの放った烈風槍飛弾を打ち返す。

そして、タケシのジャストミートされた飛弾は、ホームランの如くコンクリートの橋の下を飛び出し、赤くなり始めた空へと消えていく。

「どうでい！」

スイングした常態のポーズを保つ虫玄武が、嬉しそうな声をあげながら、飛弾の消えていった空を眺めていた。

「にゃ～ろ～……」

一方、自分の技を、楽しそうに打ち返した虫玄武を見ていたタケシが、イラつきと悔しさを露骨に態度に見せる。

そしてタケシは、直ぐに新たな弾丸を作り出すと「ならば、これならどうだ！」と言って虫玄武目掛けて再度、烈風槍飛弾を撃ち飛ばす。

又もや迫り来る風の弾丸を打ち落とそうと虫玄武が、電撃を纏った刀を振り被る。

「わはははは、いくらやっても効かんものは効かんのだ！」

虫玄武は、そう言ってまたもや飛弾を打ち返そうと刀を振るうが、風の弾丸はホークボールの様に軌道を変えて、電撃の刀をくぐり抜ける。

「えぇっ！？、ぐはぁっ！！」

軌道が変わり大きく空振りした虫玄武の横腹に、飛弾が激音を立てて見事に命中した。

虫玄武は、刀を杖がわりに片膝をつく。その脇腹の甲冑には大きな罅が入っていた。

「烈風槍飛誘導弾、どんなもんだ！」

一度ガッツポーズをしたタケシが、虫玄武に向かって走りだする。

「味なまねを……。これでも喰らう、サンダーボルトスラッシュ！」

自分に向かって突進してくるタケシに対して、虫玄武は又もや雷撃攻撃を仕掛けて、その突進を止めようとした。

走るタケシは、手にある鋼の槍を地面に突き刺すと、少し槍から距離を取った。

「なに！」

虫玄武の放った雷撃攻撃はタケシから逸れて、地面に突き立てられている槍へと当たり激しく火花を散らした。

「ほほ、わらわの分身を避雷針に使うとは」

春婆怒が歓心した声を漏らす。

こうして攻撃を回避したタケシは、虫玄武の目の前に走りこみ、接近を成功させた。

「そぉれ！」

虫玄武への接近に成功したタケシが、素手で攻撃を繰り出す。

タケシの繰り出した攻撃は、抜き手。

虫玄武の兜の隙間をついて、タケシの四本の指が虫玄武の喉仏を串刺しにする。

「ぐはぁ！」

虫玄武の空気が漏れるような声を聞きながら、タケシは更に攻撃を続行する。

ドガ！

「！！！」

虫玄武の体が大きくバランスを崩して、後ろへと倒れそうになる。

虫玄武がタケシから受けた攻撃は、膝間接への下段前蹴り。

その攻撃に、片足の膝が伸びきり、後ろへ倒れるようにバランスを崩したのである。

「なななななっ！」

どんなに硬い甲冑を着ていても、凌げないダメージの種類が幾つか存在する。

それの一つが、鎧のつなぎ目や間接を狙った攻撃。

この種の攻撃には、鎧の硬さは何の意味も持たない。

鎧を身に着けていても、ジョイント部分は必と言っても良いほど

脆いものである。

この様に鎧が苦手とするダメージが、他にもまだある。

「今度は、これだ！」

タケシのグラップル。

「むむむむむむっ！」

タケシは、虫玄武の片手の手首を掴むと、捻り上げながら自分の脇の下に挟み体重を掛ける。

技の名前は、沸き固め。

そう、鎧の硬さに関係ない攻撃の一つ、サブミッション。

「なめるなーー！」

だが、虫玄武は、タケシの間接攻撃が完璧に決まる前に、足を踏ん張り力任せに抵抗した。

しかし、タケシは、その行動も予想していたのであろう。

腕を捻りながらも虫玄武の耳元で「はいはい、わかってましたよぉ～」と呟くと、沸き固めを解いて、そのまま肘の裏を虫玄武の顔に押し当てながら、背中に膝を添えるように立てた。

「なっ！」

背中に突き立てられたタケシの膝に、顔面を肘で押し戻された虫玄武の体が仰け反りながら乗ると、虫玄武の下半身がシーソーの様に梃子の原理で、地面から両足が離れていった。

「！！！」

タケシの太股の上で天秤の様にバランスを保ちながら横になる虫玄武は、鉄兜の下にある顔を青ざめ冷や汗を流していた。

上からの虫玄武の仮面の中を覗き込んだタケシと虫玄武の目が合う。

そのタケシがニヤリと目を光らせながら意地悪く微笑んでいた。

虫玄武は、青ざめた自分の顔から、更に血の気が引いていくのが分かった。

これは、結構なピンチだと、脳が危険信号を流していた。

「りいいいいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！。」

空中に浮いた体制の虫玄武のドテッ腹に、タケシが全力の拳槌打ちを叩き落すと、鎧から打撃音を立て真っ直ぐ急降下した虫玄武の体が地面に叩きつけられる。

そして、辺りに複数の鍋でも同時に落としたような音が鳴り響いた。

「おぁ……ぁ……ぅ……」

空中から地面に叩き落とされた虫玄武は、想像以上のダメージに呼吸が出来なくなり、小さな声を漏らしながら顔を顰めた。

「地面に叩き付けられるような攻撃や、投げ技の類は、逆に鎧の重量が加わって辛いだろう～」

タケシが言うととおり、殆どの鎧が２０キロから３０キロの重さがある。その重さが追加されるのだ、たまらないダメージにまで膨れ上がるのだろう。

地面の上でヒクヒクと痙攣しながら倒れている虫玄武の顔を覗き込んでタケシは、勝者の如く笑ってみせた。

「これもまた、カウンターと呼ぶ技と同じなのじゃな。自分の力だけではなく別の力を利用する格闘技の妙技かぇ。素手で戦うと言っておきながら、大地という武器を使っておる。」

「そう、地面の硬さと重力を武器に替えた。これが格闘技の術だ」

タケシは、春婆怒の言葉に答えながら、虫玄武の仮面の奥を覗き続けていた。

<　虫玄武兜丸ジョニー・5　>

虫玄武は、仰向けに倒れたまま、鎧ごと胸を上下させながら荒い呼吸を繰り返す。

動かなくなった虫玄武を覗き込んでいたタケシは、暫くして其の場を離れていく。

「タケシや、止めを刺さぬのかぇ？」

不満げな声で、春婆怒が尋ねる。

「こいつは、明らかに男として挑んできた。さっきのカマキリ男とは違う。あのカマキリは俺を食うつもりだったからな……。別に勝敗さえ付けば、何も命まで取らなくてもいいだろう」

この勝負は、殺し合いでは無く決闘として見るタケシ。

虫玄武の方は、どういうつもりで仕掛けて来たのかは分からないが……。

しかし、勝利を掴んだのはタケシ。

タケシだけが、この勝負をどう終わらせるかの権利がある。

「むぅ～、甘いことぉ……」

春婆怒が、今一度不満げな台詞を漏らす。

その声には呆れた色よりも、別の感情が読み取れた。

それは、思いやりに近い不思議な色であった。

「き、貴様、何処へ行く……」

倒れていた虫玄武が起き上がる。息も絶え絶えにといった感じにだ。

「まだやるか？」

タケシに質問される虫玄武の姿から、まだダメージが激しく残っているのが目に見えた。

「やれる！」

手にした日本刀を杖代わりに立ち上がる虫玄武は、震える足で、尚も強がりを口にする。

その強がる姿を眺めていたタケシは、嬉しそうに鼻で笑うと、少し俯きながら照れを隠した。

「まったくもって、この二人はのぉ……」

春婆怒は、そんなタケシと虫玄武の態度を見ながら、昔の春婆怒村での光景を思い出していた。

何時も喧嘩ばかりしていた村の悪餓鬼の二人が居た。

殴り合い、罵倒しあい、それでも同じ村で生活していた。

そして年月が過ぎて二人の悪餓鬼は大人になり、歳を取り、老いていった。

それでも二人は、何時までもいがみ合い続けていた。

一生いがみ合いながら過ごした悪餓鬼二人の内一人が老衰で亡くなった時に、葬式の席で一番号泣していたのは、残されたもう一人の悪餓鬼だった老人であった。

今のタケシと虫玄武のやり取りは、その悪餓鬼の二人に良く似ていた。

男とは不思議な生き物だ。

いがみ合いながらも、相手の実力を認め、人格を認め、そして敵ながらに憧れあう。

妖力共有をしている為に、この場に姿が無い春婆怒だが、心の中で暖かい微笑みを浮かべていた。

それは、母の微笑みに近いものであった。

虫玄武は、強く拳を握り、より強く刀を握り締める

「まだ俺様には、奥の手がある！」

「ほ～」

嘘ではない、勝機無くして立ち上がるほど虫玄武も愚かではない。

最後の取っておきの大技を隠していた。

「ならば、俺も全力で、奥の手とやらに答えないとならねぇだろうな～」

タケシは、そう言いながら股を開いて腰を深く落とす。

「ふふふふふ、かたじけない！」

虫玄武もまた、そう言いながら額の角から激しく電撃を発し始める。

虫玄武は、タケシが自分に合わせてくれた事を感じ取り、胸にぐっと来る物を感じ取っていた。期待は裏切れない。

「そろそろ終わりにしようぜ！」

「望むところだ！」

二人の鋭い眼光がキラリと輝く。

風が、地面の砂を揺らして、砂煙を緩やかに舞い上げる。

そしてタケシの周りに、緑色の風が竜巻のように吹き始めた。

「我が力は、男の生きざま！」

そして緑色の風は、より一層強くなり、橋の裏の天井まで伸びていく。

「我が技は、勝利に導く！」

タケシの心を決めた、強い台詞。

「それが貴様の必殺技か！。ならば俺様の必殺技を見よ！」

兜の一角から生み出された電撃を纏う虫玄武は、背中の羽を広げて空中に羽ばたく。

「むおおぉぉぉぉ、電撃猛放出！」

虫玄武は、橋の下を回るように飛び交い、飛ぶ勢いを増していく。

「力と技で、俺の未来を作ってく、跳うっ！」

竜巻の中をジャンプして登って行くタケシが頂点に達すると、イカヅチを纏って飛んでくる虫玄武に竜巻ごと向きを変えた。

二人は互いを目指して飛んでいく。

「喰らえーーー！、ライトニング電撃甲冑超突進！！！」

「いっけーー！。堂本流超人空手奥義、風神飛翔脚！！」

二人の必殺技が空中で正面衝突する。

風を纏うタケシの飛び蹴りと、イカヅチを纏う虫玄武の角が、激しく激突してどちらが上回るかを競い合う。

どちらも一歩も引かない押し合い。

激しく火花を散らしながら、二人は空中で闘ぎ合う。

「りぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ！！！」

激音と共にぶつかり合う二人の間で、大きな爆発が起きた。

赤と黒の爆炎と、空気を激しく揺らす爆音が、二人の姿を包んでいく。

「…………っ」

蛾蝶姫のツインテールと短いスカートが靡くと、彼女は爆破に眠たい目を細めた。

空中を染め上げるように大きく広がった爆炎の中から、タケシと虫玄武の二人が弾け合い飛び出していく。

タケシは、横を流れる川の中へと墜落して大きな水柱を上げた。

一方、コンクリートの橋桁に激突した虫玄武は、砕けたコンクリート破片と共に降下して、山になったコンクリートの破片の下敷きになって埋まる。

「…………」

一人残されたツインテールの少女が、水中に落ちたタケシが浮いて来ないのをしばらく見ていると、砕けたコンクリートの破片に埋まっていた虫玄武が、豪快にコンクリート破片を吹き飛ばし這い出てきた。

「か、勝ったのかぁ……」

虫玄武は埃だらけになった鎧兜を気にも留めずに、タケシの落ちた辺りの水面を眺める。

その体からは、うっすらと焦げた臭いと煙を上げていた。

「ぷっはーー！」

水面から水しぶきを飛ばしながら、タケシの上半身が現れる。

「五分五分と言ったところか……」

虫玄武は、苦笑いしながらも、嬉しそうに言った。

「なかなかやるな、このカブト虫野郎が……」

そう言いながらタケシは、水を掻き分けながら陸へと目指して歩き出す。

熱いぶつかり合いを行った二人が、又もや地上で向かい合い、そして睨み合う。

二人の肉体はそろそろ限界を迎えていた。

「我が力は、力なり！！」

「電撃猛放出！！」

「我が技は、技なり！！」

タケシの周りに吹き上がった竜巻と一緒にタケシがジャンプすると、虫玄武もまた電撃を纏って羽ばたく。

「タケシャ、お主……」

やはりまだ続けるのかと言いたい春婆怒は、諦めた感じで台詞を途中で止めた。

「春婆怒、もう一発ぐらい行けるよな！！」

「勝手に楽しめゃ……」

「良い相棒を持ったじゃねえか！」

タケシに答えた春婆怒の台詞に、虫玄武は蛾蝶姫をチラリと見た後に、二人を茶化す様に言う。

「羨ましいか！」

「まあなぁ！」

二人は仮面の下で笑いあう。

「春婆怒、これでラストだ、行くぞ！」

「堪能せい、タケシャ！」

二人は緑色の竜巻の中で確認しあうと、最後の力を振り絞って、二度目のフィニッシュ技を慣行する。

「喰らえーーーーーー！、ライトニング電撃甲冑超突進！！！」

負けずに虫玄武も最後の力を振り絞る。

「いっけーーーーーー！、本日二発目、堂本流超人空手奥義、風神飛翔脚、！！！」

又もや二人が空中で激突し合う。

既に二人は、何で戦っているのかも忘れていた。

勝ちたいとか、負けたくないとかではない。

ぶつかり合う。

ただ、それだけが目的の様に……。

二度目の空中大爆発が起きた。

「ぐはぁぁーーー！！」

「むぅぉおおぉぉぉぉ！！」

男達が、また爆炎の中から弾け飛ぶ。

<虫玄武兜丸ジョニー・6　>

「ぐはぁぁ……」

我ながら情けない声が漏れたな。

目が霞んでよくみえねぇ。

弾き飛ばされて、背中から地面に激突したんだな。

さっきの情けない声が最後だ。

もう、声も出ない。

あいつはどうなった？

やったのか？

やっつけたのか？

俺は勝ったのか？

いや、こうして立ち上がれもしないんだ、あいつを倒していても相打ちなのかな……。

なんて人間だ。

素手で刀の俺に立ち向かってきたよ。

人間なのに、妖怪の俺を恐れずに向かってきやがったよ……

俺が、まだ人間だった頃は、あんなに勇ましく、勇敢な武士だったのだろうか？

カブトムシの妖怪に取り込まれる前の記憶が、断片的にしか残ってないんだよな～……

妖怪も悪くねえが……

現代にあんな奴が未だに居るのなら、もう一度人間にもどってみたいもんだ……

はは、俺、何を言っているんだ。

まあ、いいか……

あれ、体が浮きだした？

地面から背中が離れたぞ。

浮き上がっていく、体が空に舞い上がっていく。

まるで迎えに来た天使達に、天へ招かれるようだ……

俺、死んだのかな？。

この浮き上がる感覚は、魂が体から離れていく感覚なのかな……。

まあ、いいか……

随分生きたし、最後は悔いなく楽しく戦えた。

あいつ、良い奴だったな。

……理想以上に満足した戦いだった。

どんどん体が浮いていく。

天に昇っていく。

結構遠いんだな、どのぐらい登っていくんだろう。

あれ、何か見えてきた？

天国の門……

あれ、止まらね～……

おいおい、止まれよ、ぶつかる！

ぶつかる、ぶつかる！

「ふぅごぉ！！」

虫玄武は、壁に激突したショックで目を覚ます。

顔に押し付けられた冷たい壁。

「天国の門……、違う……」

それは土。

橋の下で戦っていた場所の地面だった。

虫玄武は、そこでうつ伏せになって倒れていた。

「くぅ……ぅぅ……」

唸りながら仰向けになると、コンクリートの橋の裏側が見える。

コンクリートの天井には大きな凹みが蜘蛛の巣の様にひび割れを広げていた。

それは虫玄武が、先程激突した痕である。

コンクリートの傷跡を見て、虫玄武も理解した。

先程見た物、あれは夢。

天に登って行ったのではなく、あそこから落ちてきたのだと。

「俺様ともあろう者が、何をセンチになっていやがるんだ……」

虫玄武の直ぐ側に、タケシが倒れていた。

「くぅはぁ……」

地面に落ちたタケシが、力なく声を漏らす。

流石にタケシも限界のようだ。

「なぁぁ、なぁぁんーーのーーー……」

虫玄武の鎧は、あちらこちらひびが入り、体から煙を上げながら、今にも砕け散り、バラバラになって朽ち果てそうであった。

しかし、虫玄武が立ち上がった。

とっくに体の限界は通り過ぎている。

立ち上がったのは、残された精神力を振り絞ったとか言う単純な者ではない。

それは、もっと複雑な思いが力になったから立ち上がれたのだ。

否、そんな複雑な思いではないかもしれない。

もっと単純な思い。

此処で立たない理由がないだけだ。

此処で倒れている理由がないだけだ。

常識とかで理解するようなことではない。

立たなければ、負ける。

だから虫玄武は立ち上がった。

実に単純な理由である。

「ぐぅぅぅ……」

タケシも負けずと体から煙を上げながらも立ち上がった。

だが、本当にそれが限界である。

虫玄武は心の中で「クソ、頼むからもう立つな、倒れちまえ」と願っていた。

その心の叫びは、珍しく虫玄武の弱気さを露見させていた。

「ふふ、ふふ、ふふふふぅ」

虫玄武は、心の不安を隠すように気持ち悪く笑う。

「す、素晴らしい、これほどまでに強敵だと笑いしか出てこないわ……」

タケシもまた虫玄武同様、心の中では起き上がって待っている虫玄武に「倒れてくれ」と祈っていた。

満身創痍の二人が向かい合う。

その時ピキピキと崩壊の音を立てて、虫玄武の甲冑のひびが、更に大きく広がっていった。

そして、そのひびは兜にある角へまでたっすると、傷口が広がりポロリと黒い凛々しい角が地面に落ちた。

二人の視線が、虫玄武の足元に落ちたシンボルホーンに釘付けになる。

それから三秒後。

「俺様の角が！！！」

「折れたな……」

虫玄武が膝から崩れて両手を地面に付く。そして折れた自分の角を見つめた。

「お、俺の負けだ……。カブト虫で子供たちのアイドルでもある俺様の角が折れたのだ、もう俺は子供たちの前に立つ事が出来ない……、お、俺の完敗だ……」

角が折れて、心が折れた瞬間であった。

「む、虫玄武……」

土下座をする様に崩れ落ちた虫玄武に、タケシは優しい声で死闘を繰り広げた相手の名前を一度呼んだ。

「たしかにのぉ～、角の無いカブト虫は、フンコロガシと一緒じゃからのぉ～」

グサッと刺さる音が、タケシにははっきりと聴こえた。

「春婆怒！」

「ガァーーーーーーーン！」

言ってはいけない春婆怒の一言に、虫玄武の心が修復不能なぐらい完全に折れた。

そして、すべての決着が付いたかのように、虫玄武は其のまま地面に倒れこみ、意識を失う。

これで、虫玄武とは完全決着が付いた。

「カマキリ男、カブト虫野郎……、残るは……」

あくまでも二人目との決着。

タケシは、一人離れた場所に立ち尽くす眠たそうな眼差しをした、ツインテールの少女に視線を向けた。

ツインテールと短いスカートを風に揺らす蛾蝶姫は、じっとケタシを眠たそうな目で見つめ返す。

その眠たそうな目には熱いものはまったくなかった。

クールな十郎太にすら感じられた闘志。

それが、この娘からはまったく感じられない。

「私は……やらないよ……」

「えっ？」

タケシは蛾蝶姫の言葉に、気の抜けた声を出す。

ツインテールの少女は小さな声でそう呟くと、可愛らしい容姿を巨大な蝶に変化させて空中に舞い上がった。

翼を広げると三メートルはありそうな巨大な蝶の妖怪。

巨大な二枚の翼は、人間の目のような柄があり、黒目がぎょろぎょろと動いていた。

そして、タケシの上空を数周クルクル飛び回った。

タケシは、その様子を警戒しながら見上げると、倒れている虫玄武からあとずさりするように離れていく。

虫玄武から離れていくタケシを待っていたかのように飛んでいた蛾蝶姫は、地面に倒れている虫玄武を六本の細い足で掴み拾い上げた。

そして、翼の瞳でタケシをギロリと見た後に、虫玄武を抱えたまま橋の下から外へと無言で羽ばたいて行った。

「行ってしまったのぉ～」

暫く蛾蝶姫を見送っていたタケシに、春婆怒が声を掛けた。

「ああ」

巨大な蝶の姿が空の果てに見えなくなるまでタケシは見送ると、春婆怒との妖力共有を解除した。

それを見計らって、今まで橋桁の影に隠れていた人型のバイクマンが、タケシたちの元に駆け寄ってくると、ギコギコと音を鳴らしてバイクの姿に戻った。

「うし、帰って飯にするか～」

タケシがそう言うと、二人はヘルメットを被ってバイクに跨り、其の場を後にした。

「チィチィチィチィチ……」

バイクの後ろのナンバープレートに飛びつく小さな黒い影。

それは、小さく気持ち悪い昆虫。

……一匹のゴキブリであった。

<　仇の名前　>

寂しく風に揺れるススキが多く生えた薄気味悪い空間。

空は黒くよどみ、空気は微妙に乾いていた。

二メートルぐらいの高さのススキが揺れる間に、一本の細い道があるだけで他には目立った物は見あたらない。

ここは一七五一家の巣である。

その空間に一人の青年が足を踏み入れた。

びしっとしたスーツ姿の青年。

その眼差しはきりっとした凛々しいものであった。

青年は、ススキの林に挟まれた道を進んで、小さな御堂を目指す。

その青年に向けられて、ススキの中から怪しげな幾つもの影達がひそひそ話しをしながら覗き見る。

「ワカサマダ、ワカサマガキタゾ」

「ホントウダ、ワカサマダ」

「ヒサビサニ、ワカサマミタヨ」

「ホントダ、ナニシニキタノカナ」

「サー、オマエ、キイテコイヨ」

「エッ、ナンデオレガ……」

「ジャア、オレキイテクル」

「イヤイヤ、オレガキイテクルヨ」

「マテマテ、オレガキイテクル」

「……ジャア、オレガ……」

「「「ドウゾ」」」

「エー……」

青年は、そんな声を気にもせず御堂のある広場へ急ぐ。

しばらくして広場に出た青年は、おんぼろの御堂の前に立った。

そして青年は、御堂の中に居ると思われる一七五に凛々しい眼差しで話しかけた。

「一七五の親分、ご無沙汰しています」

その声に反応してか、小さな御堂の障子扉が僅かに開く。

「おお、若様、若様ではないか！」

大きな瞳が、その隙間から外を覗き見るように光っていた。

青年は凛々しく誠実そうな顔で、御堂の中の一七五に微笑みかけた。

だが青年は、その笑顔も長くは続けなかった。

「一七五の親分、……春婆怒に仕掛けたらしいですね」

「……おうよ。虫玄武、十郎太、黒童子、蛾蝶姫の四人を使わせたわい」

一七五が、ドスのきいた声で返してきた。

「何故、何故に私にやらせないのですか！」

「弦徳様、これは油儀の指示だ」

「……やはり会長のですか」

八尾弦徳は拳を握り締めながら、歯茎を強く噛みしめる。

「会長は何故に、処理班筆頭である私に命じてくれないのでしょうか……」

「若様……、否、八尾弦徳殿。その答えはお前さんが一番分かっているはずだろう」

「……」

「アイツは心配性だからな、お前さんに万が一でもあれば、亡くなった奥方様に顔向けが出来なくなる」

「母の仇を討ちたいのは、私とて一緒です……」

二人の間で重い会話が続く中、黒い空を羽ばたく巨大な蝶が姿を現した。

黒い空を羽ばたく巨大な蝶は、タケシに敗北してボロボロになった鎧武者をぶら下げて飛んでいた。

そして御堂の前まで飛んで来ると、ボロボロの鎧武者を地面に下ろして、巨大な蝶はツインテールの少女の姿に変わる。

「蛾蝶姫に虫玄武か……」

ボロボロの虫玄武を見て、御堂の中から二人の名前を呼ぶ一七五。

「随分と派手にやられたもんだな……」

どうやら虫玄武の姿を見て、子分が心配になったようだ。八尾弦徳には、一七五の声色からそれが悟れた。

「十郎太は死んじゃった……。虫玄武は……見てのとおり……」

「……そうか」

ツインテールの少女は、途切れ途切れにそう言うと、眠たそうな目で八尾弦徳をじっと見つめる。

八尾弦徳も、何故に自分を見つめるのかと思い、ツインテールの少女を見つめ返すと一度だけ愛想笑いを作って見せた。

「若様……好き……ポッ」

「……いきなり好きって言われても」

弦徳は困った顔でそう答えた。

そしてツインテールの少女は、頬を赤らめながら顔を逸らす。

「ほほ～、二人は両思いか」

「……うん」

「ちがいます！」

つっこみを入れる八尾に、蛾蝶姫は残念そうな眼差しで八尾を見詰めていた。

「ところで蛾蝶姫、十郎太はどうした？」

堂の中から一七五がそう尋ねる。

「喰われた……」

「黒童子は？」

「あんなゴキブリ……しらない」

蛾蝶姫は素っ気無く答えた。

「どうします親分さん。鬼々蜘蛛に続いて、十郎太までもが春婆怒に喰われましたよ」

八尾の表情が凛々しいものに戻ると、一七五に厳しく問いかけた。

「……」

一七五は直ぐには答えなかった。

一体何を躊躇っているのかと、弦徳は歯がゆく感じていた。

「あなたには子分の仇を取る責任があるのでは……、それが組を構えるトップの責任」

八尾弦徳の厳しい指摘に、お堂の中の一七五は黙り込む。

そしてしばらくすると一七五が重い口調で話し始めた。

「なあ、若様。ワシが昔、春婆怒と戦って敗れた事は知っているよな……」

「はい、油儀会長から聞いたことがあります」

「何故、敗れたワシが、まだこうして生きていると思う」

「何が言いたいのですか……」

「いいから、質問に答えてみ」

八尾弦徳は、昔、油儀から聞いた話を思い出す。

「春婆怒に……、命を見逃してもらったと聞きました」

「そうだ、何故に春婆怒はワシの命を見逃したと思う」

「……理由は聞いていません」

「正確に言うと、命を助けられたのだ」

「……助けられた？」

八尾弦徳は、一七五の台詞に一度首を傾げた。

「本当は、春婆怒の野郎はワシを殺して喰らうつもりだった。それを当時の使い手が春婆怒をおさめて、ワシの命を助けたのじゃよ」

「使い手が……」

「その際に、我々戦った三人の間で約束が結ばれた」

「春婆怒と使い手、それに親分の間でですか……？」

「そうよ……」

「どんな約束ですか？」

「ワシに、人を守れと……」

八尾弦徳の顔から緊張感が和らぎ、気の抜けた表情へ変わった。

「鬼々蜘蛛のヤツは、春婆怒村で人を喰らったと聞くむ。……その時点で破門だ。十郎太のヤツも、今回の仕事中に人を喰らったと黒童子の分身から報告があった」

「……所詮、カマキリ。辛抱できなかったのね」

蛾蝶姫が冷たい口調で呟くと、隣に居る八尾が少女を見下ろすように見た。

「人食いは、一七五一家では御法度、禁を破った段階で破門。もうあいつ等の仇すら討つことは許されねぇ～」

「なるほど……、それが貴方の動かない言い訳ですか？」

「そんなところだ」

「ならば、理由として不十分！」

八尾弦徳の表情に力が入る。

明らかに憤怒の感情がこもっていた。

「母の仇、主の仇はどうなります！」

八尾弦徳の大きな声が、一七五の巣に響き渡る。

「すまん……、それはもう、ワシは力になれない」

「何故！」

「それは……、我々の方が悪だからだ」

「我々が悪いと！？」

「故に奥方様は死んだのじゃ……」

「……」

八尾弦徳が、歯がゆく思いながら俯く。

何故に自分達が悪いのか、その理由を本当は理解しているからだ。

「妖怪連合とは何だ？」

「……妖怪の存在を人から隠し、妖怪と人間の平和を守る者たち。

それ故に、人や妖怪の害になるものを、排除する」

一七五の質問に、八尾は素直に答えた。

「ならば春婆怒が何をした……」

「……母を殺した……」

「否、自分に降りかかる火の粉を払っただけだ」

「……母を……」

「春婆怒に襲い掛かったのは、我らが先……」

「……」

「あいつは、九十九神でありながら、春婆怒村では守り神だった」

八尾弦徳は、お堂に背を向けると歩き始める。

その姿を、お堂の中から一七五が見送る。

「若様……」

ツインテールの少女も、その背中を黙って見送った。

「それでも奴は、母の仇……」

八尾は強く拳を握り締めていた。

「その名は、春婆怒！。誰が許そうとも、私は許せない！」

<　陽子の探索　>（前書き）

これで第四話おわりまーす
（≧≦▽≧≦）／

<　陽子の探索　>

大きな皿に肉入り野菜炒めの大盛りを持った陽子が、何時もの様にアパートの階段をトントントンと軽やかな音を奏でながら駆け上って行く。

そして端から三番目にあるタケシの部屋へと雪崩込もうと、古びたドアノブに手を掛けた。

「ん……」

陽子は首を傾げながら片手でドアノブをガチャガチャと音を立てて回す。だが、どうやらドアには鍵が掛かっているようだ。

「あれ～、タケちゃんまだ帰ってきてないのか……可笑しいな～……」

そう言いながら陽子は、ジーンズのポケットから部屋の鍵を取り出した。

それはタケシの部屋の合鍵。

だが、陽子が合鍵を持っている事は、部屋の主は知らない。

陽子は、このアパートの大家の娘である。タケシの部屋だけではなく、全ての部屋の合鍵を持っていても不思議ではないのだが……。

「ふふふのふ～」

鍵を開けた陽子は合鍵をジーンズのポケットにしまうと、さぞ当たり前のようにタケシの部屋の中に入っていく。

そしてスニーカーを脱ぎ捨て部屋に上がりこむと、手に持っていた肉野菜炒めを流しの横に置いてタケシの部屋の中を見回した。

「さ～て、何処に隠してあるのかな……、エッチな本！」

そう言いながら悪巧みをする悪党の表情に変わった陽子が、押入れの中を好き勝手にあさり始めた。

「槍女が裸エプロンなら、私だってタケちゃんの趣味を研究して……、むふふな感じで誘惑しちゃうんだから！」

陽子はしばらくの間、押入れの中を探索する。

「さー、どんな趣味でもかかってらっしゃい。ナースでもスッチィーでも、ブルマでもスク水でも！、私の愛の深さで受け止めてみせるわ！　陽子はちょっぴりの変体行為でも負けないわ！　けなげな私の愛情バンザイ！！」

それがけなげかは分からないが、陽子の頭の中に何やら良くわからない物が分泌されて、危ない妄想を繰り広げているようだ。

陽子は、そんな妄想を暴走させながら押入れの中をあさっていたが、期待していたエッチな本は一切出てこなかった。

「何故……何故に何も出てこない、すべて槍女に回収されたのかな……」

そう言いながら陽子は、やっと押入れから出てくると、衣類に付いた白い誇りを両手でパンパンと払った。

「押入れの中に無いのなら……」

目を細め、眉の間に皺を寄せながら部屋の中を見回す陽子。

「ん～……」

陽子の険しい視線が、テレビを載せている横向きのカラーボックスに止まる。

カラーボックスの中には、スポーツ雑誌や格闘技系雑誌が何冊か無造作に入れられていた。

その中に、ブックカバーの付いた本が一冊あった。それが、今の陽子には、素晴らしいぐらい怪しく見えた。

「むむ、これは怪しい！」

陽子は、ついに発見したと言った顔でスピーディーに空気と空気の間を自然に流れるかの如く本に飛び掛る。

「さてさてタケちゃんは、どんな本を読んでいるのかな～、ぐふふふふふぅ～！」

そして陽子は期待と好奇心溢れる表情で、本のタイトルを確認しようとブックカバーをめくって見た。

「ひっ……、人妻ズポズポ間男連続殺人事件！」

陽子が本のタイトルを引きつった顔で読み上げた。

「人妻かよ！」

一瞬引いた陽子。

だが、それでも本の内容を読み始める。

「わ、私の愛情は～、この程度で～、揺らぐとおもうなよぉ～！！」

静かな部屋の中で立ち尽くしながら本の内容を確認する陽子は、片眉を時折ヒクヒクさせながらも本を読み続ける。

そしてしばらくして。

「こ、こんな事できるか！！」

今まで本を読んでいた陽子がいきなり怒鳴り声を上げると、持っていた本を赤面しながら畳に叩きつけた。

「ぜーぜー……、流石にあれは無理ね。何より私は人妻じゃないし……、殺人事件だし……」

息を切らしながら冷静さを取り戻そうとする陽子の目に、投げつけた本の隙間から何かが僅かにはみ出ているのが見えた。

「何かしら？」

陽子が、先程投げつけたいかがわしい本を、今一度拾い上げた。

それは、しおりの様に挟まれた紙の端。

陽子は拾い上げたエッチな本から、その挟まれた紙の端を摘み引き抜く。

「あ……」

本の間に挟まっていた物は、三枚の千円札だった。

「タケちゃんのへそくり？」

陽子がその札を摘み上げて団扇の様にして顔を仰いでいると、部屋の扉が勢いよくガチャリと音を立てて開く。家主の帰宅だった。

「あ、陽子来てたのか」

「あ、タケちゃん、おかえり」

別に何時もと変わらないタケシと陽子の会話。

しかし、自分の部屋に帰ってきたタケシの目線が、陽子が摘み上げているお札に向けられると、何時もとは違った空気が流れ始めた。

「ん？」

陽子も一瞬で変わった空気に気付くが、その理由までには気付いていないようだ。

「おまえ……」

タケシの唖然とした声と表情とが向けられた視線の先に、陽子は初めて自分の状況に気付く。

それは、タケシのへそくりを手にした自分の姿……。

「あああ！、これは、これは違うの！」

陽子は慌てて弁解を述べながら持っていた本とお札を床に落とした。

畳にゴトンと落ちた本の上に、ひらひらと舞う三枚の千円札が落ちていく。

「陽子……お前……」

「タ、タケちゃん、これは誤解よ！！」

陽子、最大のピンチ到来！。

第四話「一七五一家」　終

つづく

第五話「スケルトン」（前書き）

第五話スタートしましたー。
あと、アクセス４００００突破！
皆様、ありがとうございます＾＾

第五話「スケルトン」

桜木家が私有する空手道場。

木造建てで、道場内は二十メートル四方ぐらいの広さがあるだろうか。

床は板張りで、壁には窓が四つある。

道場の入り口には、図書館の本棚のような下駄箱があり、ちびっ子空手教室の際には、可愛らしい小さな靴で溢れかえるのだ。

道場の正面には、横に長い大きな額縁があり、どこぞやの先生が書いた心技体の三文字が力強く書かれていた。

そして、隅っこにひっそりと置かれた小さな神棚。

桜木家では、これと言った宗教はやっていないが、道場に神棚はセットだとして丁寧に奉られている。

そして、道場の壁に掛けられている丸い時計。その二本の針は、既に十二の数を超えていた。

道場の中は暗く、電気はついていないが、窓から月の光がぼんやりと差し込んで来ていた。

静かに冷たい空気が道場の木の床を更に冷やし、昼間は熱い男達の世界である道場全体を冷静な温度へと戻していく。

その静かな道場の中央に、一つの影があった。

石造の如く動く事無く静かに存在する影は、鍛え上げられた豪傑の肉体を窓から差し込む月光に半身だけが照らされていた。

正座のまま、岩にも見える握った拳を両股に乗せて、精神統一に両目を閉じた顔は、凛々しくも涼しく、勇ましくも穏やかな不思議な表情であった。

白い道着と月光を纏う男の両腕は、力を抜いているにもかかわらず力瘤が盛り上がり、肩の筋肉は巨大なミートボールの様に大きかった。

そして白い道着の胸元から見える胸板は、鉄板で出来た座布団の如く分厚く、首の太さは頭と同じぐらいの太さである。

その影の主は、堂本タケシ。

タケシは、自分の祖父でありながら空手家界のトップブランド、堂本拳四郎を倒すために、現在は武者修行中の若手空手家である。

若手と言っても、何処かの格闘技団体や他流の空手大会に出場をしている訳でも無いし、テレビなどで名前を売ろうとしている訳ではない。

それに、若手と言うにはキャリアが長い。

祖父拳四郎に、物心付く前から空手を仕込まれている。

現在のタケシの実力は、空手家界、格闘技界、どの団体から見てもトップクラスと言える。

月光しか無い暗い道場の中、精神統一に目を閉じていたタケシがゆっくりと目蓋を開けた。

正座をしているタケシの回りに置かれたビール瓶。

数は六本。

全て栓が抜かれ、中は空になっている。

そのビール瓶は、半径一メートルぐらいの距離でタケシを囲むように置かれていた。

正座を崩したタケシが、ゆっくりと立ち上がる。

そして、クールで熱い眼差しのタケシが正面のビール瓶を見詰めると、拳を軽く握り構えを取った。

「すぅ～～～～……」

顔の前でX字にクロスさせた豪腕を力強く腰元へ引きながら、おちょこ口で大きく息を吸い込むと、タケシの分厚い胸が、道着を押し広げながら膨らんでく。

「ごっ、ごっ、ごぉおおおおおお～～～……」

そして、喉を鳴らしながら吸い込んだ息を今度は吐き出し始めた。

息抜き。

空手や拳法などではポピラーな呼吸法。

タケシは、肺の中の空気を丁寧に吐き出すと、今一度構えを作り直し目の前のビール瓶を凝視した。

しばらくして、空気が揺れると共にタケシが動いた。

「りぃやぁぁあああ！」

掛け声と共に、目の前のビール瓶に下段廻し蹴りを放つタケシ。

ビール瓶の首だけが、タケシの素足から繰り出された蹴りの爪先で、刈り取られるように砕け散た。

綺麗に首だけ無くなったビール瓶は、頭部を無くした事すら気付いていないように、一ミリも其の場を動かなかった。

続いてタケシは、振り返るように後ろのビール瓶に対して、同じように下段廻し蹴りを放つ。

その下段廻し蹴りは、先程と同じくビール瓶の頭だけを足の甲で吹き飛ばす。

そしてタケシは、次々と残りの四本のビール瓶の首だけを下段廻し蹴りで粉砕していく。

静かな道場の中に鳴り響いたガラスの粉砕音が已むと、タケシの周りには首を無くした六本のビール瓶だけが静かに佇んでいた。

そして、タケシが真上へとジャンプした。

軽く跳ねたように見えたタケシのジャンプは、想像以上に高く飛んでいた。

天を目指して舞うように飛んだタケシの体は、窓から差し込む月光から外れて暗い道場の天井に黒い髪を数本触れさせた。

タケシの体が、空中で一瞬停止していた。

タケシは、空中で股を開いて両膝を両手で抱えると、天井の高さから急降下を始める。

そして、タケシは両足で、道場の床を破壊しそうなぐらいに踏み潰して着地すると、近所迷惑になる程の激音を立てた。

その激音が、道場の床を伝わり、壁を伝わり、そして天井まで揺らすと、四つのガラス窓もガタガタと脅えるように震えた。

すると床に置かれた六本の首なしビール瓶が、ふわっと空中に浮き上がった。

しかも高さは、約一メートル半。

タケシの目線で、浮き上がったビール瓶が空中で停止する。

「ちぇぃ！」

冷たい空気を抉りながらタケシの正拳突きが、首なしビール瓶を

襲い粉砕した。

首なしビール瓶は、まるで中に爆薬でも詰まっていたかのよう砕け散った。

そして其の破片が、まだ空中にある間に、更なるタケシの技が、空中にとどまる首なしビール瓶を次々と襲う。

後ろ廻し蹴り、裏拳、足刀、一本拳。

磨かれし四種の技が四つの首なしビール瓶を粉砕し、残り一つとなった時に首なしビール瓶は降下を始めた。

「ふぅ～～～ぬっ！」

野球のピッチングホームのように体をしならせたタケシが、降下を始めた首なしビール瓶に迫る。

頭突き。

最後の首なしビール瓶を、タケシは頭突きで粉砕すると、砕かれたビール瓶の破片が、タケシの回りにバラバラと音を立てて散らばった。

すべてのビール瓶を破壊したタケシは、真っ直ぐに立つと、呼吸を整える。

周りには砕け散ったガラスの破片が月光に照らされてキラキラと光、足の踏み場も無い事を報せていた。

タケシは其れをぐるりと見回すと、道場の隅に立てかけられた箒と塵取りに目をやった。

「うし、掃除して寝るか～……」

そう言うとタケシは、素足である事も気にもせずに、ガラス片を踏みしめながら掃除用具を取りに行く。

堂本タケシ、二十歳。

これでも祖父、堂本拳四郎七十歳に、まだまだ届かず。

<　炎の記憶　>

燃え上がる天守閣。

「母上～！、母上～～！」

また、またあの夢を見てるのか……。

周りは激しい炎に包まれている。

柱が燃え、畳や襖が音を立てて燃えていた。

その炎が、私の心に焦げ目のように記憶を焼き付けた。

その炎の記憶は、決して消える事の無い火傷のような物となって心の奥深くに残ってしまった。

「いけません若様、危険です、お下がりください！」

年に一度か二度は見る夢……。

そうすると、もう５００回以上は見ているのか……。

この思い出とは呼ぶには辛すぎる夢を……。

「母上～！、母上～～！」

叫んでいる少年は、私だ……。

まだ十歳にもなっていない幼い私の目の前で、戦っている二つの影が、燃え上がる炎で陽炎のように揺れて見えた。

燃え盛る城の天守閣は、何時崩れ落ちても可笑しくはなかった。

そんな中で戦っているのは、私の愛しい母である。

長い黒髪と美しい着物が、熱風に煽られて激しく靡いていた。

それでも母は、美しく見えた。

何よりも美しく見えたのは着物の裾を捲り上げるように生えた、綺麗な毛並みの九本のしっぽ。

炎の中で、母が戦っている相手は、長槍を持った九十九神、春婆怒。

緑色の甲冑と、見たこともない兜で顔を隠しているが、体格からして使い手は男性だとわかった。

「放せ！、じいや、放せ！！」

マゲを結い、腰には二本ざしの姿をした油儀が、幼い私を必死に止めていた。

「なりません、若様！！」

自分は、まだ小さかった。

小柄な油儀すら振りほどく事のできないぐらい幼かった。

あの時、どれほど私が母の助太刀に入りたかったか、夢の中の幼い自分を見て再確認できる。

だが、間違いなく、止める油儀が手を放してくれたとしても、母の助けになるどころか、邪魔になっていただろう。

それでも私は、母の助けに入りたかった。

その思いだけでも母に見せたかった。

「はは……う……えぇ～……」

そうだ、悔しかった。

弱かった自分が、悔しかった。

母が戦っているのに、ただ見ているだけの自分が。

何も出来ない幼い自分が。

煤けた顔に涙の跡を残しながら叫ぶしか出来なかった自分が、情けなくも悲しかった。

「油儀、弦徳を早く連れて行きなさい！」

母が、見たこともない表情で油儀に指示を叫ぶ。

その表情は鬼の形相だった。

何時も優しく暖かい母の穏やかな表情から、そんな形相が作られるとは思っても見なかった。

その表情を見たとき、母の必死な思いを感じ取った私は、油儀の手を払って母の方へと進むのを諦めた。

「母上……」

もう、見守るしかないと思ったからだ。

燃え盛る天守閣の中で、母と春婆怒を囲む様に黄色い風が回り始める。

そして、その黄色い風の中で二人が激しくぶつかり合う。

「は……母上……」

幼かった自分にも分かった。

この戦い、母が負けると……。

春婆怒達の攻撃の方が圧倒していた。

「ぐはっ！」

そして春婆怒の槍が母の腹部を捕らえた。

母の口から赤い血とともに声が漏れると、母は両手で春婆怒の槍

を掴む。

母が吐き出した血が、母の綺麗な顎を伝わり滴り落ちると、焦げ付いた可憐な着物と、春婆怒の槍を赤く染めていく。

「母上ーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

より大きく叫ぶ幼い自分を、今の私は背後霊の様に後ろから見ていた。

そうだよ、これは夢なんだ。

でも、涙が止まらない。

夢の中の幼い自分も泣いているが、夢を見ている私も泣いていた。

寝ている自分が本当に涙を流しているか分からないが、心は間違いなく涙を流していた。

「若様！、こちらえ、若様！」

油儀が、母の最期を見せまいと、自分を天守閣から連れ出そうとする。

だが、ここからは離れられない……。

どんな決着になろうと、私は最後まで見なくてはいけない筈。

夢を見ている私ではなく、夢の中に居る幼い私は見届けなくてはならない。

そして母を突き刺した春婆怒の槍が、母の体を吊り上げるように持ち上げると、真っ直ぐに槍を立てた。

串刺しにされた母の体が、まるで晒し者の如く槍に刺され持ち上げられていた。

母の口から更に血が流れ落ち、春婆怒の仮面を赤く染める。

串刺しにされて苦しむ母の顔が、こちらに向けられた。

「母上……」

本当は激痛に苦しんでいる筈の母が、幼い私を見て優しく微笑む。そう、何時もの様に優しく私に微笑んでくれていた。それが私には、嬉しくも苦しく心を押しつぶしながら和らぎを感じさせる。

そして母は、視線を春婆怒に戻す。

二人の周りを激しく回っていた黄色い風が、中央の二人に迫るように小さくなっていく。

そして竜巻の様になった風は、今度は母を包むような球体に変わった。

球体は、どんどんと小さくなって、母の美しく長い髪や着物を切りさいていく。

「は……は……う……え……」

それが、何を意味しているのかを悟れないほど私は幼くなかった。

そして球体は、収縮したブラックホールの様に母を飲み込みながら小さくなり、最後には静かに消えていく。

母が消えた槍の先端を見上げる春婆怒。

燃え盛る炎の音だけが、ばちばちと聴こえてきた。

「若様、こちらへ！」

母の姿が消え、風の音が已むと、炎の中で幼い自分は呆然として立っていた。

その自分を油儀が抱えて連れて行く。

もう私は抵抗すらせずに、油儀の思うがままに引きずられていく。

春婆怒が、連れ出される私を首だけ横に向けて見ていた。

その私が最後に見たのは、激しく燃え盛る天守閣に立ち尽くす春婆怒の姿だった。

否、最後まで自分が見ていたのは、春婆怒の持つ槍の先で、なびいていた母の着物の切れ端だった。

また、この夢を見た。

そして、またこの夢を見るのであろう。

この手で、母の仇を取るまでは……。

この手で、春婆怒を倒すまでは……。

そして、其の日が近い予感がしていた。

そう、時は近い。

春婆怒……。

さあ、朝だ、復讐に繋がる今日の始まりだ。

<　白い物　>

「お前、そう言えば、あの話はどうなった？」

「あー、あれっすか、ダメですわ～、もう大分頑張っているんですけどね～」

「やっぱりあれか、あれが原因か？」

「多分そうだと自分でも思ってはいるんですがね……」

「まあ、仕方ないよな、俺だってそうだったからな」

「やっぱり、そうですよね～」

「ああ、そうとも、世の中そんなもんさ」

二人の警備員が話しながら走らせている車は、警備会社の現金輸送車。

二人は、白いヘルメットに厚めの丈夫な生地で作られた特注のTシャツの上に黒い防弾チョッキを着込み、腰には二段式警棒を下げた物々しい格好をしていた。

現在二人の警備員は、契約したスーパーマーケットのチェーン店の売り上げを回収して回っているところである。

あと一軒の店を回って、預かった全ての現金を銀行に届けたら今日の午前中の仕事は終わって昼食が取れる予定であった。

痩せた眼鏡の警備員が車を運転しており、太った強面の警備員が助手席でファインダーに納められた確認の書類を眺めている。

眼鏡の警備員は二十歳ぐらいの年齢で、高校生の頃から剣道を嗜み、高校卒業後に現在の警備会社に就職した。

助手席の太った警備員は、歳は三十後半ぐらい。中学から大学まで柔道一筋で生きてきた体育会系の警備員で、一度はセールスマンとして動いていたが、今では警備員として落ち着いている。

警備員と言っても棒振りと呼ばれる駐車場や工事現場の交通誘導とはちがって、ビルや現金輸送の警備員は、何らかの武道武術の経験が無いと雇ってもらえない。

今も昔も用心棒やバウンサーの類は、やはり腕っぷしの立つ者しかなれないものなのだ。

例え現代の平和な日本ですら其れは変わらない。

学が乏しくても武術を極めるという事は、良く使う悪く使うにかかわらず少なかれ飯の種になるものだ。

治安が悪かった昔に比べれば、武芸武術を暴力としてしのぎに使う者は減ったにしろ、この時代でもまだ少なくはない。

この二人の警備員は、其の点では誠実であった。

その二人の警備員が乗った現金輸送車が、背の高いビルが並ぶオフィス街の大通りを走っていく。

最後の一軒に到着して売上金を回収したら、太った警備員が持つファインダーの書類に店の責任者からサインを貰う予定である。

太った警備員は、その見慣れたファインダーの書類を車に揺られながら暇そうに眺めていた。

「あらぁ～……、ねえ先輩……」

「ん?、なんだ?」

運転している痩せた眼鏡の警備員が、ファインダーの書類を眺めている太った強面の警備員に話しかけた。

黒く丈夫そうなフレームの眼鏡のズレを片手で直す警備員は、質問する間も辺りをキョロキョロと確認するように見回していた。

「この道で間違っていませんよね……」

「ん……、ああ……そうだな」

運転している眼鏡の警備員がそう言いながら車の速度を落とすと、ファインダーの書類を眺めるのに飽きていた太った警備員も車の進む道を確認した。

「ああ、間違ってないな……」

何時もと変わらない道に、太った警備員も返事をしたが、何故か自信の無さそうな返事であった。

警備会社の現金輸送車は、万が一を考えて人気の少ない道は避けて、決められた人通りの多いルートを通る事になっている。

人通りの多い道なら強盗に会うことも少ないと言う単純な理由ではあるが、安全面を考えるなら当然の理由からであった。

そして吟味された安全なルートを決められたように走るのだが、工事や事故などの理由で決められたルートが走れない場合もある。

そんな時の為に予備のルートが何本か用意されている。

他人の現金を扱う上での安全性は、徹底されているのだ。

それがプロ。

今、輸送車が走っている道は、四車線あるおオフィス街の大通り。

時間も昼前。

危険性の高い場所でも時間帯でもない。

「なんだこりゃぁ……」

助手席の太った警備員がそう言うと、車を運転している眼鏡の警備員は、スピードを落として走っていた車を停止させる。

「お、おかしいですよね……先輩……」

「ああ……」

二人はフロントガラスの向こうに広がる光景を真っ直ぐ凝視していた。

うっすらと霧の掛かったオフィス街。

昼間なのに霧。

其れだけなら二人は車を止めてまで驚かなかっただろう。

「なんで……、誰も居ないんだ？」

「さ、さぁ～……」

そう、うっすらと霧の掛かったオフィス街の四車線ある通りには、人どころか車が一台も見当たらなかった。

この明らかな異常に、眼鏡の警備員は眼鏡の奥の瞳を狼狽させて車を止めたのである。

「まあ、止まっていても仕方ないわな、次の店に急ごう……」

太った警備員が周りの異状に首を傾げながらも本来の自分達の仕事を思い出す。

「あ、ああ……」

助手席の太った警備員に言われて、眼鏡の警備員も気を取り戻して車を走らせ始めた。

そして、輸送車を発進させた直後の事である。

一瞬、霧が濃くなったと思うと、その霧はあっという間に車を包み込んだ。

運転している眼鏡の警備員が、その霧にハッとした瞬間、車の前に人影が現れた。

「！！！！」

その霧の中から現れた人影に運転している眼鏡の警備員は、急ブレーキを踏むが止まりきる事が出来ずに人影を輸送車で引いてしまう。

ゴン。

確かに人を跳ねた音が車中に響く。

しばらく呆然としていた二人の警備員は、首を曲げてお互いの顔を見つめあった。

「おい……、今何か引いたよな……」

助手席の太った警備員がそう言うと「ああ、人……、引いたかも」と、運転している眼鏡の警備員は青ざめた顔でそう言った。

両手でガッチリとハンドルを掴んで離さない眼鏡の警備員は、止まった車内から霧の掛かる前方を震えながら見ているだけで動こうとしなかった。

暫くして太った警備員が強面の眉を八の字にして溜息をつくと、

運転席の同僚の肩にふっくらとした手を添える。

「俺が降りて、外を見てくるわ……」

そう言って太った警備員は、運転していた眼鏡の警備員の返事を待たずに車外へと出て行く。

「ん……、タバコの臭い？」

霧に混ざって煙草の臭いが確かにした。

否、霧自体が煙草の煙り其の物にも感じられた。

車を降りた太った警備員は、そう思いながら車の前方を確認しに行く。だが、これといって何かがあるわけではなかった。

「なんも無いな……」

首を傾げた太った警備員は、次に屈みこむと車体の下を覗き込む。

ここで死体やら何やらがあると、結構ショックなのだが幸いこれといって何もなく、太った警備員はホッとして立ち上がった。

「なんも無かったぞ～」

太った警備員はフロントガラス越しに車内に残る眼鏡の警備員に向かってそう言うが、車内の眼鏡の警備員は太った警備員の方をじっと見詰めているだけであった。

「ん？」

太った警備員が首を傾げると、眼鏡の警備員は車内から太った警備員を指差す。

否、太った警備員の後ろを指差す。

その表情は、若干だが脅えているように見えた。

そのジェスチャーの意味を悟った太った警備員は、ゆっくりと後ろへ振り返る。

そこには拳を振り上げた男の姿があった。

今にも太った警備員に殴りかかろうとしていた男は、体全身真っ白でカニの甲羅のようなプロテクターを上半身に纏い、人間の頭蓋骨の真似たデザインのマスクを被っていた。

そして、腰には太いベルトを巻き、中央には『白』と書かれた大きなバックルが付いている。

背中には何本かの突起物が生えており、突起物の先には穴が開いていて、そこから白い煙がユラユラと狼煙の様に上がっていた。

それは、活火山が幾つも密集した紀元前の大地のようなイメージであった。

周囲を包む霧のような煙は、この白い怪人がこの様にして作り出しているのかもしれない。

そう、男はまさに怪人、白い怪人であった。

白い怪人は、振り上げた拳で容赦なく太った警備員を襲う。

白い怪人の体から出ている白い煙を切り裂きながら繰り出された横振りのパンチ。

その容赦無い一撃が、太った警備員の頬を捉えた。

「ぶごっ！」

蟹の甲羅のようなプロテクターが付いた拳の一撃に、贅肉がタプタプした太った警備員の顎は、無残にも粉々に砕け散った。

太った警備員はめちゃめちゃな形になった顎からダラダラと血を吐き出しながら輸送車に寄りかかるように倒れていく。

「ひぃ！」

太った警備員の血がフロントガラスに飛び散ると、眼鏡の警備員は女の子のような悲鳴を上げながら車のギアをバックに入れてアクセルを限界まで踏み込む。

冷静さを見失った眼鏡の警備員は、同僚を置き去りにして一人で逃げるつもりだ。

しかし、辺りにタイヤの擦れる音と、ゴムの焼ける臭いが広がるだけで輸送車が動き出すことはなかった。

それでも眼鏡の警備員は輸送車のアクセルを全開まで踏み続け、タイヤをスピンさせ続けた。

「何処行くつもりだよ？」

歩き始めた白い怪人は、そう言いながら運転席側のドアの前に立つ。

眼鏡の警備員は、慌てながらもドアのロックが掛かっているのを確認した。

ドアのロックは万全。

これで白い怪人が車内に入ってこれないと確認したが、眼鏡の警備員は未だに恐怖に顔を引きつらせていた。

小さな警備会社の輸送車だが、車のカラス全てが強化ガラス。

この輸送車内にいれば安心だと眼鏡の警備員は思った。

幾ら目の前の怪人が豪腕でも、強化ガラスまでは叩き割れまいと思った。

しかし、白い怪人の腕は煙の様になると、窓やドアの隙間から車内に侵入して来た。

「そ、そんな……！」

車内に侵入した白い煙は、また白い怪人の腕に戻ると、眼鏡の警備員の首を鷲掴みにして凄い力で締め上げた。

車外に居る白い怪人の口元は、緩やかに笑っていた、

「うご……ごは……ごほ……ごご……」

ずれた眼鏡越しに車外の白い怪人を大きく見開いた目で見る警備員は、必死で白い怪人の腕を振りほどこうとしたが、首を絞める腕は更に首を絞め上げる力を強めていった。

「ぅ……ぉ……」

やがて眼鏡の警備員はぐったりと動かなくなり、大きく開いた口からはだらしなくオレンジ色の舌がだらりと垂れ下がっていた。

「さて、頂く物を頂いて行くか～」

白い怪人の口元が、嫌らしくも欲望的に微笑んでいた。

<　堂本流の小さな光　>（前書き）

あけおめー
ことよろー
（≧≦▽≦≧）／

<　堂本流の小さな光　>

桜木家の道場。空手の道着を身に纏った四人の人物が居た。

一人は、道場の主、桜木銀。そして、その娘の陽子と、居候のタケシと、その弟子のカズマの姿である。

マッチョな青年、ヒゲ面で渋めの男性、ボーイッシュでスレンダーな少女、そして十二歳の少年。はたから見たら道場で稽古をしている家族にも見えるが、此処で血の繋がりが有るのは二人のみである。

時折、銀、陽子、タケシの三人で合同稽古をする事が有るのだが、今日は其の三人の中に初めて少年カズマが加わった。

それは三人が、カズマを堂本流の新弟子として認め始めた証であろう。

だが、トレーニング内容は子供のカズマに合わせた物ではまったくなく、大人三人に合わせたハードなメニューであった。

腕立て伏せ千回、スクワット三千回、腹筋背筋を五百回の準備運動を終えると、死にかけているカズマを余所に柔軟体操を始める。

タケシは立った状態から足を百八十度に開いて股割りを行っていく。

カズマは、その様子を座り込んで見ていた。

そしてタケシの股関節がペタリと床に付くと、今度は前方に上半身を倒し、胸と顎先を床に付けてみせる。

全身で床にTの字を描いていたタケシは、百八十度に開いた足を真っ直ぐに戻すと、胸を床に付けたまま下半身だけを持ち上げてシャチホコの様にエビ反る。

タケシは其れでは終わらず、更にエビ反った体を丸めて両足裏を耳の横の床に付けて両足で頭を後頭部から挟むような状態をとった。

「柔らか……」

それを見ていたカズマが汗だくの表情でボソリと呟くと、タケシに続いて陽子もタケシと同じ柔軟体操を始めた。

「うわ……」

エビ反りながら丸まった二人を見て唖然とした声を漏らしたカズマを余所に、顎鬚を生やした筋肉質で大柄の紳士もまた、二人と同じように床へと丸まっていく。

床に転がる三人の姿を見て、思わず「キモ……」と呟いたカズマに三人の視線が集まる。

「おいカズマ、何ボ～としてやがる。お前もやれよ」

丸まっているタケシが、座り込んでいるカズマに対して、さぞ当たり前の様に言うと「そんな……」っとカズマは困った顔をしていた。

「タケちゃん、いきなりこれは無理よ」

「ん?、そうなのか」

タケシは物心着く前から祖父の拳四郎に柔軟運動を強制させられていたので、このぐらい人体が柔らかいのが当然であった。

「うむ、そうだね、いきなりこれは無理だとおもうよ。まずは又割りから教えた方がいいと思うよ、タケシ君」

銀の言葉にタケシが反論を繰り返す。

「でも、こんなの俺は五歳ぐらいからできたぞ?」

「タケちゃんは、別格よ。拳四郎先生に小さな頃からそうやって育てられたんだもの」

丸まりながらそんな会話を繰り広げる三人を、まるで珍獣を見るような目でカズマは眺めていた……。

暫くすると道場には、カズマ少年の悲鳴にも似た声が響き渡っていた。

「いたたたーーーー!、無理です、無理です!!」

股を開き背中を陽子に押されているカズマが悲鳴のような声を上げるが、陽子は意地悪そうな笑みを浮かべながら背中を押すのを止める事はなかった。

「いたーーい、股がーー！！！」

「こらぁ～、ガズマ。この程度でテメーあんまり女々しく泣いてると～、蹴飛ばすぞ！」

無理やり陽子に背中を押されて半べそを掻いているカズマの目の前で、タケシがヤンキー座りでしゃがみ込みながらガンをくれる様に脅してくる。

「まーまー、タケちゃん」

容赦無く背中を押す陽子がタケシを宥める。陽子には今のタケシの発言が、脅しではない事が分かっていたからであった。このまま続けば、間違いなくタケシの蹴りが放たれるだろう。

「さあ、タケシ君。不甲斐無い弟子をほっといて、われわれは組み手をやろうじゃないか」

それは銀がカズマを気遣っての行動であった。

「オッス！」

タケシは気合いの入った声で返事を返すと、道場の中央で正座をしながら待つ銀の元へと進んで、自分も正座をして銀の前に向かいあう。

「く……、組み手をするんです……か？」

「うん、お父さんとタケちゃんで、たまにするのよ」

苦痛に顔を歪めながら正座で向かい合う二人をカズマは、道場の壁際で背中を押されながら見守る。

カズマには、タケシと銀の堂本流同士の組み手が気になって仕方ない様子だった。

正座をしている二人は、そのまま一礼をすると、ゆっくりと立ち上がった。

二人の体からオーラが蒸気の様に放たれ、二人の向こう側の背景を歪めて見せた。

「なんだか……物凄い殺気ですね……」

カズマの額から、柔軟や準備運動で流した汗とは別の汗が流れ落ちる。

「組み手でも気を抜けば大怪我しかねないからね」

そう言う陽子の顔は、気が抜ける程に清々しい笑顔であった。

タケシと銀の二人が構えを取る。

銀は、開いた左掌を前に突き出し、右拳は腰元に添え、腰を落とした構え。

タケシは、上半身をガードする様に両拳を固めた、ありきたりなファイティングポーズの構えであった。

二人の間合いはまだ遠い。

「お父さんの構えは一撃必殺を狙った構えよ。今回は瞬殺を狙ってるようね」

陽子がカズマの背中を押しながら耳元で解説をして聴かせる。

「タケちゃんは後手に回る気かしら……」

タケシの構えを見て陽子が何やら歯切れのわるい解説をした。少々納得のいかない表情だ。

「何か、引っかかるんですか？」

その歯切れの悪い解説に、柔軟からくる苦痛に耐えながらカズマが陽子に質問してみた。

「ん～……」

陽子はカズマに明確な回答を返す事はなかった。

だが、陽子には分かっていた。

銀の構えから蹴り技が来ない事を予想したかのようなタケシの構え。

脇を閉めてコンパクトにした構えは、ボクシングなどのインファイターの物に近かった。

問題は、タケシが人の構えを見て後手に回った事である。

それはタケシが人に合わせたと言う事。

自分の我を押し通すタイプのタケシが、随分と大人になったと陽子は思っていた。

一方、構えて向かい合う二人は、構えを取ってから一歩も動いていなかった。おそらくは、お互い隙を見せまいとの硬直状態なのであろう。

「先に動くのは……タケちゃんかな」

陽子の言葉の通りであった。タケシの構えた拳が一瞬だけピクリと動いた。

その僅かな動きにカズマは気付く事は無かったが、向かい合う銀は見逃す事は無かった。

銀の左足が道場の床板を滑るように前進して踏み込むと同時に、腰に添えてあった右拳に力が守る。

そして放たれる拳

「！！！」

右拳がガードの隙間をすり抜け顎先に叩き込まれた。

それは叩き込まれるというより、顎先に出来た小さな穴に風となった全身が、拳の先から吸い込まれて行くような感じであった。

顎先に拳がヒットする。

何の違和感も無い其の動きは、まるで大自然の一部のようでに見えた。

そして……。

その一撃を喰らった銀の体から力が抜けていく。

「カウンターの一撃！」

先に動いた銀に、タケシが拳を合わせたのである。

銀の体がお辞儀をするように「く」の字に曲がると、そのまま頭から道場の床に倒れこむ。

道場に「ゴン」とこもった音が響くと同時に、両目を瞑りながらカズマが顔を背けた。

「お父さんは、タケちゃんに誘い込まれたのよ」

自分の父親が倒れたのにもかかわらず、陽子は涼しい顔でそう言った。

倒れこんだ銀は、ピクリとも動かなかった。それが意味する物は、一瞬の勝敗。タケシの勝利であった。

タケシは倒れこんでいる銀を仰向けにしてやると、陽子に枕になるような物を持ってこいと指示を出した。しばらくして陽子が座布団を持ってくると、それを二つ折りにして銀の頭の下に置く。

カズマが心配して銀の顔を覗きこむと、ヒゲ面の紳士はうっすらと目蓋を開き、口元も僅かに開いていた。

そして、タケシや陽子の冷静な様子からして、命には問題ないダメージだとカズマも悟った。

「うし、今日の午前中の稽古はこの辺にしとくか」

タケシの言葉にカズマが「オッス！」と言って答えた。

「じゃあ、私はお昼御飯の準備してくるね。お父さんが起きたら連れてきてよねタケちゃん」

「おうよ」

「あとカズマ君も今日は家でお昼御飯食べていってね。私が腕をふるって御飯を作ってあげるから」

「あ、はい、ご馳走になります」

カズマは礼儀正しく陽子に頭をさげる。

「あ～、そうだカズマ」

タケシがカズマを呼び止めた。

「はい？」

「ちょっとイーってやって歯茎見せてみろ」

カズマは一度首を傾げたが、タケシの言う通りにして歯茎を見せた。そして、タケシがカズマの歯茎に顔を近づけてマジマジと観察するように見る。

「今度は大きく口を開けてみろ」

カズマは言われた通りに大きく口をあけて見せると、口の中をタケシが覗き込む。

「うし、もいいぞ。……カズマ、今度は歯医者に行って来い」

「え？、僕は虫歯なんか無いですよ？」

「虫歯じゃない、歯並びを直してこいって言ってんだ」

「歯並びですか、矯正？」

カズマが首を傾げる。

「そうだ、矯正してこい」

「……なんでですか？」

カズマは再び首を傾げた。

「歯並びってヤツはな、案外身体能力に影響が大きいんだ。きちんとした歯並びとガタガタの歯並びだと、瞬発力や持久力に２０％以上の差が出ると言われている……らしい。」

本当の話ではあるが、また聞きのタケシは詳しく知らないようだ。

「本当ですか！？」

まともな事を言うタケシに驚きながら質問に念を押す。

「ああ、その証拠に一流のアスリートやオリンピック選手の多くが歯並びの矯正をしているし、特殊なマウスピースやテンプレートと呼ばれる器具を競技中に噛んでるヤツも多いんだ」

「へぇ～、そうなんですか……。分かりました、父に相談して歯医者に通います」

「うむ……」

二人がそんな会話をしていると、気を失っていた銀が意識を取り戻す。

「うぅぅ、私が……負けたのか？」

身を起こした銀は、道場の床に打ち付けた頭と、タケシに正拳を打ち込まれた顎先を両手で摩る。

そして銀は、ぐら付く感覚の残る顎が気になるのか、口を上下に開いて起動に異常が無いか確認を繰り返した。

「ええ、今回は勝たせてもらいました」

まだ立ち上がらない銀を見下ろすようにタケシがそう言った。

「ちょっと前までは八割は勝ててたのに、最近じゃあ五分五分になってきたな……」

そう言いながら銀は、顎を摩りながらやっと起き上がった。しかし、その足取りは、まだ力無く覚束無い様子であった。

「ん、陽子は？」

自分の愛娘が居ないことに気付くと、未だ虚ろな瞳で辺りを見回す。

「飯の準備に行きましたよ」

「ああ、もうそんな時間か。そうだ、カズマ君も家で御飯を食べていきなさい」

銀がカズマの肩を優しく叩きながらそう言うと、カズマは陽子に言われた台詞を思い出しながら不器用に笑って返した。

「は、はい……」

礼儀として同じ返事を返したが、まだ世間の渡り方が未熟な少年には、これが精一杯の表現であった。

「よーし、飯だー飯だー」

そう言って腕を回しながら道場を出て行く。そのタケシに続いて、カズマと銀の二人も道場を出て行こうとした。

「あ、そうそうカズマ君」

道場の下駄箱から自分のサンダルを取り出した銀が、スニーカーを履こうとしていたカズマを呼び止めた。

「はい、なんでしょうか桜木先生？」

「ちょっと口を、イーってしてごらん」

「……はい」

カズマは素直に銀に従った。

<　河川敷の怪　>

時は昼過ぎ。

自転車で巡回中の交番勤務の巡査が、虎野町市を真っ二つに分けるように流れている大きな川の河川敷広場で、つい先程捜索願が出たばかりの警備会社の現金輸送車を発見した。

輸送車が見つかった川原の広場は、舗装されておらず生土が見える長さ１００メートルぐらいの開放されたスペースである。

大きな橋と堤防代わりの土手に囲まれており、その土手の上からは広場全体が見渡せた。

夏などの休日にはバーベキューで楽しむ家族連れや若者たちで賑わうポイントで、市民達の憩いの場でもある広場であった。

だが、まだ空気が冷たい今頃だと、子供達が学校の終わる時間帯までは、あまり人気は無い場所で静かな場所である。

二時間前の話である。

この現金輸送車は、本来ならば最後の店を回り集金を終えると銀行に向かっている筈だった。しかし、輸送車はその店にも現れず、銀行にも姿を現さなかった。

事件の可能性を確認する為に、まずは警備会社が輸送車を捜索したが発見する事無く二時間の時が過ぎ、犯罪の可能性を考えた警備

会社はマニアルに則り警察機関に捜索願を上げたのである。

そして警察による捜索が始まり、たまたま巡回中の交番勤務の警察官が発見した。

現金輸送車の状況から犯罪事件と警察に判断されると、発見された輸送車は刑事や鑑識班に囲まれる事となっていた。

巡回中の警察官が輸送車を発見してから３０分以上がたっている。

広場に面した道や土手の一部は通行止めになり、広場には警察関係者の車が何台も物々しくあつまっていた。その様子を土手や橋の上から野次馬達が眺めている。

そこに遅れてきた鍋中と眞鍋を載せた車が入ってきた。

鍋鍋コンビは少し離れた場所に車を停めると、遅くなったことも気にしていない表情で、のそのそ現場の中へと入っていく。

「あややゃゃ、鍋鍋コンビ、おそいよ」

同僚の刑事が遅れてきた二人にそう言うと鍋中は「すまんすまん」と言って軽くあやまるが、その表情から反省の色は見えなかった。

二人が他の刑事達よりも遅れてやって来た理由は、昼食にラーメン屋で注文したラーメンが来たと同時に事件発生の連絡が入り、二人は迷った結果ラーメンを全部食べてから来たせいである。

「ちょっと飯食っててな、眞鍋のヤツが食うの遅くてよ～」

「僕の方が5分以上早く食べ終わってたじゃないスか、鍋中さん小さな嘘はやめてくださいよ……」

「うるせー！、こんな時は後輩のオメーが先輩を庇いやがれ！」

「え～……」

暴君の如し鍋中の台詞に、眞鍋は露骨に嫌な顔をする。

「あややゃゃ、で、何食べてきたんだ？」

そんな事は今はどうでも良いのに、何故か同僚の刑事が尋ねる。

「「ラーメン」」

鍋鍋コンビは声を揃えて答えた。

「ワシの昼食、鰻重」

「「！」」

同僚の刑事は嫌らしい笑みで言うと、小さくVサインを腰の辺りに作っていた。

それを見た鍋鍋コンビは、同僚刑事に一瞬の殺意を覚える今日この頃であった。

「で、行方不明の現金輸送車が見つかったんだって、強盗か、持ち逃げか、どっちだ？」

気を取り戻そうと鍋中が、鰻重を昼飯に食べた刑事に事件の状況を尋ねた。

「あややゃゃ、それがな……」

同僚の刑事の歯切れの悪い対応に、鍋鍋コンビは揃って首を傾げる。

そして、同僚の刑事が現場の状況に付いて鍋鍋コンビに説明を始めた。

その話によると発見された現金輸送車は、エンジンが掛かったままでもちろんキーも刺さったままの常態で発見された。

しかし二人居るはずの警備員の姿は無く、車のドアは全てロックされていたらしい。

辺りは早朝に降った小雨の為、土が剥き出しの地面には泥濘が出来ており足跡がはっきりと残っていたようだ。

しかし、到着した鑑識班が調べた結果、輸送車の周りには、この広場に乗り込んできた輸送車のタイヤの跡と最初に発見した警察官の足跡以外に、助手席から降りた人の足跡が車の前方まで歩いた跡が残っているだけで、それ以外の足跡は無かったらしい。

「どう言うことですか？」

状況が把握できない眞鍋が訊きなおす。

「あややゃゃ、要するにだな。強盗にしろ持ち逃げにしろ、車がこ

の広場に入ってから、車を離れた人間の痕跡がないって事だは」

「はぁ？」

眞鍋は間抜けな声でそう言うと、鑑識たちが群がる輸送車の方を見る。

「助手席から降りたっていう人物は？」

「あややゃゃ、輸送車の前方まで行って、そこで足跡が終わってるらしい」

「終わってる？　助手席には戻ってないって事ですか？」

「あややゃゃ、そうなんだわ……、車の前方で消えているんだわ」

同僚の刑事の返答を聞いた眞鍋の脳裏に、一つの言葉が浮き上がる。

「また、……神隠し？」

眞鍋は先日起きた高校生連続失踪事件を思い出していた。

「あややゃゃ、まあ、バカバカしい話だが、犯人は神様か宇宙人かだな」

「キャトルミューティレイション……」

眞鍋の口から出た言葉は、決してふざけて言った訳ではない。此処最近頻繁に起きる不思議な事件の数々。それらの出来事から、思

わずオカルト用語が出てしまったのだ。

「そんな馬鹿げた話があるか。おい真鍋、俺達は近所に聞き込みに行くぞ。」

「は……はい、鍋さん」

そう言って、トレンチコートの裾を揺らしながら現場を離れる鍋中の後ろを、眞鍋が小走りで追っかけていく。

「ちっ、今度は何が出てきたのやら……」

そう呟く鍋中は、この事件にも何らかの妖怪が絡んで居るのではないかと予想していた。

それが野良妖怪なのか、それとも九十九神なのかは、これからの調査で判明してくるであろう。

どちらにしろ鍋中は、刑事として、妖怪連合調査班班長としての役目を果たすだけであった。

一方、現場の河川敷広場を一望出来る土手の上。

一般の野次馬に混ざって二体の妖怪変化の姿があった。

一体は春婆怒で、もう一体は使い魔で人型変形中のバイクマンの姿であった。

「ずいぶんと、騒ぎになっているようじゃのぉ」

遠くから輸送車を眺める春婆怒が自分よりも頭二つ分大きなバイクマンに話しかける。

しかし、言葉のしゃべれないバイクマンは、その春婆怒の言葉を黙って聞いているだけだった。

「妖力共有の気配がしたからやって来てみれば……。どうやら今回の九十九神も若輩者かのぉ～。わざわざ騒ぎを起こせば目立つ事を考えておらぬようじゃ」

春婆怒の言葉にバイクマンは首を縦に振って意思表示をする。

「ならばわらわが美味しく頂いてやろうぞょ、間抜けな九十九神をのぉ。……帰るぞバイクマンゃ」

春婆怒は怪しく笑みを溢すと、使い魔を連れて野次馬達の外へと出て行った。

<　地下室の二人　>

それは廃墟に近いビルだった。

全ての階のテナントは空きになっている古びた四階建ての貸しビル。

その古いビルは商店街やオフィス街からも離れ、大きな道からも逸れた住宅街に建っていた。

以前には全てのテナントに様々な会社が入っていたが、一階のテナントに入っていた会社の社長がビル内で首吊り自殺をして以来、別の階の会社でも様々な不幸が続き、どんどんと悪い噂が広まり廃墟のようなビルへと変わっていった。

今では近所の人々からも気味悪がられるようになって、現在はお化けビルと呼ばれている。

そのビルの地下室。

地上の入り口から少し階段で降りると、そのままコンクリート剥き出しの二十畳ぐらいの広さの部屋に繋がっている。

部屋の壁や天井には水道やガスやらの配管が剥き出しになって見えている。以前は倉庫だったのだが、今は幾つかの家具やらテーブルのほかにも、ベットなどが持ち込まれて住居として使われているようだ。

住居といってもかなり散らかった感じである。

テーブルの上には、ウイスキーのボトルやビールの空き缶が置いてあり、煙草の吸殻がてんこ盛りになった灰皿が三個も置いてある。

床は土足で歩き回ったのか砂や泥の跡が残り、ベットの横には雑誌や競馬新聞が山積みになっていた。

更に部屋の隅にはコンビニの袋に入れられたゴミが幾つも積まれており、それが一段と不衛生差を感じさせている。

その地下室の住居空間は、煙草の煙でうっすらと空気が白く染まり、そこに二人の男女がいた。

女性は髪が長く短いスカートを履き、濃い化粧をしていた。ぱっと見た目からして水商売か娼婦のような感じであった。

その女は部屋の中へと降る様に繋がる階段の中腹に腰を下ろし、赤い煙管（きせる）でタバコをふかしながら綺麗な足を組みながら、部屋の中央に居る男性を見下ろしていた。

部屋の中央に居る男性は、黒いジャケットにノーネクタイの青いワイシャツを着ており、ぱっと見た目からしてチンピラと見て取れた。

しかし顔付きは強面と呼べるほど勇ましくなく、どちらかと言うとダメ人間の色が強く感じられた。ヤクザまでは見えない。

男は、タバコの吸殻が山済みの灰皿が三つも置いてあるテーブルの上で、銀色のジュラルミンケースを必死で開けようと努力していた。

「なーーーんで、あかねーーんだ！」

男は顔を赤くさせながら必死でジェラルミンケースを開けようとしているが、ケースには電子ロックが掛かっており、パスワード無しには開ける事は出来ない状況である。

「こんちきしょー！　むーーー、むーーー、あかねーーーー！」

ケースの隙間に両手で爪を立てて左右に引っ張るが、もちろんそんな事では開くはずはなかった。

そして男はケースを一度叩くと、階段の中腹で詰まらなそうに煙管を吹かす女性に怒鳴り声を飛ばす。

「おい！　白雲、てめーも手伝えよ！」

「もう、諦めるでありんす」

そう言いながら女性は、少し垂れ目の瞳を男に向けると、吸った煙管の煙で輪っかを作って見せる。

「諦められるか！　現金輸送車襲ってまでやっと手に入れた金だぞ！　そう易々諦めてられるか！」

そう怒鳴りながらテーブルの上のケースを叩く男。

その叩く勢いでテーブルの上の灰皿が一つ落ちて、床に煙草の吸殻が汚く散らばる。

「……こまったお方でありんすね～」

自分で落とした灰皿に驚いた男を、そう言った女は哀れみの表情で見詰めていた。

「おい、白雲太夫！　煙になって、また輸送車の時みたいに中から鍵を開けてくれよ！」

「無理でありんす、その箱は内側からは開けられないでありんすよ。わっちでは開けられないでありんす」

流石の彼女も電子ロックは空けられないようだ。

「むきーーーー！！！」

女の話を聞いて、男は猿のように癇癪を起こしてテーブルの上の二つ目の灰皿を壁に投げつけた。

「何でわっちは、こんな男を使い手に選んでしまったのでありんしょう……」

女は長い髪を片手でかき上げると、情けなさそうに項垂れる。

一方、男はイライラした表情で煙草を取り出すと吸い始めた。

「こうなったら妖力共有して銀行でも襲うか！　なあ、太夫！」

二人の吸う煙草の煙が更に地下の天井に溜まっていく。

「はぁ～～～、主殿、あまり目立つのは得策じゃあないでありんす。

わっちらには二つの敵が居ると言ったでありんすよね、忘れたでありんすか？」

「……別の九十九神と、妖怪連合だろ」

早くも煙草一本を吸い終わった男は、吸殻をテーブルに残った最後の灰皿に積み上げると、また新たな煙草に火を付けた。

「わっちらだけでは、妖怪連合は強敵過ぎる。それに他の九十九神で長生きしている者に見つかってしまえば、わっちらの実力では一溜まりもないでありんすよ」

「分かってるよ……。でも、あと三日で五百万返さないと、俺の命がやばいんだよ！」

この男は博打に溺れて、闇金から五十万円借りたのだが、その利子だけであっと言う間に十倍まで膨れ上がったのである。

そして借用書がヤクザの手に渡り、金を返さないと「ＳＭゲイバーで、Ｓのゲイどもに体を売って返済してもらうぞ」と脅されているのだ。

決して命が危ない訳ではない。ただ男の貞操の危機なだけである。

「人間とは、何故にお金に縛られる生き物なのか、わっちには分かりかねないでありんす」

花魁の口調で話す女のわりには、人間の欲に関しては勉強不足のようだ。

「とにかく、金が要るんだよ！」

男がテーブルの上の開かないジェラルミンケースを叩くと、最後の灰皿が床に音を立てて落ちた。

「わっちとしては、早く三種百食の本能を果たしたいのでありんす。せめて人間百人ぐらい早く済ましたいでありんす」

女はそう言って煙管を吹かすと、煙を天井に向かって長く吹く。

「こうなったら、コツコツ人襲って、財布から金をかき集めるか……」

「おお、それは名案でありんす。お金も取れるし、わっちも人を食べれるでありんす」

他者からしては、最悪な名案である。

「うし、そうと決まればコツコツ地道に行くぞ、白雲太夫！」

男は気合を入れると椅子から立ち上がり女が居る階段を駆け足で登っていく。

もしも、この男が本当にコツコツ地道に頑張れる男だったら、ヤクザに追われる事もなかったのであろうし、九十九神と手を組んで強盗になんかならなかったのかもしれない。

地道な努力。

それは才能を上回る才能なのかもしれない。

日の高い時間帯が似合わなそうな二人の男女は、個々の目的を抱いて古いビルの地下室から、まだ日の高い外へと出て行った。

<　二人の思い　>

タケシのバイト先のコンビニ駐車場。

空は青く太陽が眩しく降り注いでいた。

陽子が運転してきたバイクの後ろからタケシが降りる。これからタケシはバイトの時間であった。

今日は珍しく陽子にバイト先までバイクで送ってもらったタケシ。

そのタケシに陽子が話しかけた。

「ねえ、タケちゃん？」

「なんだ？」

陽子のバイクから降りたタケシが、バイクに跨ったままの陽子に自然な返事を返した。

「御前中の稽古なんだけど……」

フルフェイスを取った陽子が、上目遣いでタケシを見る。

それは、陽子が真面目な話を始めるときの表情。

その陽子の仕草にタケシは、何か難い事でも訊かれるのかと一瞬で察する。

「お父さんとの組み手……、何で後手に回ったの、タケちゃんらしくない」

父である銀の構えを見た後、タケシがその構えに対抗すべきベストの構えを選択したことであろう。

「俺……らしくなかったか、やっぱり」

「うん……」

陽子が頷く。

真っ直ぐに自分の戦い方を貫くタケシのイメージは、陽子から見て攻撃が最大の防御といった感じの男だった。

そんな部分がタケシの魅力であると陽子は惹かれていたのかもしれない。

しかし、相手の動きを見て後手に回った今日のタケシは、それとは違って見えた。

陽子に取ってそれは、大きな違和感。惚れた男が、別の人格を見せた瞬間であった。

「俺も大人になったてことだ」

「大人に～……」

ありきたりの詰まらない回答に、陽子の表情が一段と不満げなも

のに変わる。

「例えるならば『どの様に戦い、どの様に生きる』かじゃなくて、『何の為に戦い、何の為に生きるか』……そう思う心境の変化だ」

陽子を見るタケシの顔は笑っていた。

言葉の意味は分からなかったが、不意なタケシの笑みに陽子は顔を赤らめた。

その時、一瞬、陽子の時間だけが制止していた。

タケシが輝かせた笑みが爽やかで魅力的に映り、天使の矢の様に胸を貫いていた事に気付いた陽子は、赤い顔を思わず逸らしてしまう。

「い、意味分かんないよ、タケちゃん……」

陽子がタケシを上目使いてチラリと見ると、また視線を外す。

「今まで強くなる為だけに努力していた。それが何の為に強くあるべきかが分かってきて、戦う姿勢も変わってきたってことだ」

眉を顰めながらタケシを見上げる陽子が、口を尖らせながら言う。

「まだ言ってる意味が分かんない……」

陽子から少し顔を逸らしたタケシが、視線だけを陽子に戻した。

「自分の為に戦うんじゃなくて、誰かの為に戦う。その為に強くな

りたいと思い始めたんだよ……」

そう言ってタケシが陽子から視線を外すと、陽子の顔が今まで以上に真っ赤に染まっていく。

「も、も、も、も、ももも、タケちゃん何言ってるよ！」

タケシが陽子の様子を見て首を傾げた。

もじもじしながら赤面する陽子だが、タケシの言った『誰か』とは陽子の事ではなく、妖怪や九十九神の犠牲になるやもしれない複数の人々のことを指していた。

しかし陽子のハートには、先程刺さった天使の矢よりも太くて大きいクインクレイクロスボウの矢が直撃している様子であった。

「じゃあ、じゃあ、じゃあ、タケちゃんバイトがんばってね～！」

赤面したままタケシと目線を合わせようとしない陽子が、バイクに跨ったまま手を振ると、コンビニの駐車場から逃げる様に走り出していく。

タケシは「すまね～な～、送ってもらって」と言って帰っていく陽子を見送った。

タケシは桜木家で昼食を取った後、バイトに出る予定だった。

しかし、春婆怒の奴がタケシのバイクでもあるバイクマンを連れ出して何処かに行ってしまった為、仕方なく陽子にバイクで送ってもらったのである。

陽子としては、タケシを後ろに乗せてバイクを走らせる機会なんて今後滅多に無いと喜び、帰りも電話をしてくれれば迎えに来るとはしゃいでいた。

そしてバイト先のコンビニに着いて陽子が先程の質問をしたのである。

しかし、二人の間で大きな誤解が発生している事には、互いに気付いていない様子だった。

此処最近の話である。春婆怒がタケシのバイクを使い魔にして以来、便利な事も増えたが、たまにだが今回の様にタケシの目の届かない所に行ってしまうのが問題だと思っていた。

特にバイクが運転手無しに、勝手に出歩くのは問題だと思いつつ……。

<　二人の思い　>（後書き）

恋愛話は難しいです。
ちょっと自分の技術向上の為にこんな感じでやって見ました。

<　二人の外出　>

タケシがバイトを始めてしばらく経つと、店の外に現れた二つの影がコンビニのあるビルを見上げていた。

一つは大柄の老人だった。

身長は高く白髪の混ざった髪を角刈りに切りそろえた頑固そうな老人で、背筋はピシッと真っ直ぐに伸び、老人とは思えないぐらい姿勢が良く見えた。

顔の右側には大きな切り傷があり、その傷の下にある右目は見えていないのか白く濁っていた。

そして老人の左手の手首から先が無く、足も不自由なのか杖を付きながら立っていた。

その大柄の老人の横には、年齢的には孫ぐらいの年頃の少年が黒い学生服を着て立っていた。背はあまり高くなく、見た目も華奢な感じであった。

「ここに居るのか？」

渋い声で老人が少年に話しかけた。

「はい、下のコンビニでバイトしている人物です」

コンビニの駐車場の真ん中から、コンビニのある三階建てのビルを見上げる老人。

太陽の光が窓ガラスに反射して眩しいのか、老人は目を細め、目じりの皺をさらに増やす。

「どうなってんだぁ、おい。上の探偵事務所は、確か鍋中の子分の猫田とかいう猫又の事務所じゃねえのか？」

「ええ、猫田三兄弟の探偵事務所ですね～。まさか探している相手が自分達の足元に居るとは思ってもいなかったんでしょうかね？」

そう言って学生服の少年はクスクスと笑いたいのを堪えていた。

「まったく、間抜けな話だな、おい」

「ですね、親分」

「よし、行くぞ黒童子。」

そう言って二人はコンビニの中へと入っていく。

二人がコンビニの中に入ると、カウンターに居るタケシが「いらっしゃいませ」と無愛想に挨拶を言う。するとそれに続いて棚整理をしていた井川が愛想良く「いらっしゃいませ」と続いた。

二人の店員が同じサービス指導を受けたかと思うほどに、その態度は違っていた。

大柄の老人は、真っ直ぐとカウンターに居るタケシの前まで歩いていくと、タケシに話しかけた。

「あんたが、堂本タケシさんか？」

自分の事をフルネームで尋ねる大柄の老人に対してタケシは『目付け』を行う。

『目付け』とは、格闘技家ならずとも何かしらの勝負事で対戦相手の容姿から戦力を測る術である。

この目付けから対戦相手の戦力、体型、身体能力、何が出来て何が出来ないか、何の格闘技を使うか、どんな流派に属しているか、どんな弱点があるかを察知する。

達人クラスの目付けになると、この目付けの段階で勝てる相手かどうかが分かり、それだけで勝敗が付く事も少なくはない。

また、相手に目付けによる戦力の査定を誤らせて勝利する戦術なども珍しくはない技術である。

ビリアードで言うハスラーのような戦術である。

そして今タケシは、自然と目の前の大柄の老人に対して目付けを行った。

それは老人の放つ奇怪な気がそうさせたのであろうか。

「ああ、そうですが、どちら様ですか？」

大柄の老人に問われたタケシは、そう返事をしながら大柄の老人の戦力を測り続けた。

片目、片手が不自由。足も若干弱っているらしい。しかし、残された片目の力強さ、其の体格、胸板、腕の太さ、びしっと伸びた背筋、その一つ一つから分かる老いたとは言え、昔はかなりの腕自慢だと悟る。

そして目付けの診断結果は……。

「すまないね、お仕事中なのに。ワシの名前は一七五と申す者だ」

「イナゴ……」

タケシは聞き覚えのある名前に、老人の顔を睨んだ。

「そう、先日、貴方が戦いになられたカブト虫とカマキリの親玉と言えば分かりやすいかな」

大柄の老人の口がニヤリと笑うと、タケシの視線が更に鋭く変わり、構えこそ取っていないが戦闘体制に入った事を告げた。

「そう、構えなさんな。今日は争いに来たのではない」

その程度の台詞では、タケシの内側の構えは解かれなかった。まだ、一七五を警戒した目で見ている。

「じゃあ、何をしに？」

部が悪い。今この場に春婆怒が居ない事に、タケシの脳裏に危機感が過ぎった。

「ここではなんですから、少しの間、場所を変えられないか？」

タケシが棚整理をしている井川を見る。今、此処で戦いが始まったら井川を巻き込みかねない。

「……ああ、わかったよ、ちょっと待ってください」

タケシはそう言ってカウンターを出ると、井川にお願いをして暫く休憩扱いにしてもらう。そして征服を脱ぐと店の外に出て行った。

三人は、人目につきにくいビルの隅まで移動すると、話を再開させた。

「でぇ、妖怪どもの親玉が出てきて、オレに何の様だ？」

会話を再開させたタケシの口調が、先程までとは変わって攻撃的なものになっていた。店内では、まだ店員の対応をしていたようだ。これが素の堂本タケシと知らしめるかのように。

「まあ、そう構えなさんなとさっきも言っただろ。それに妖怪の親玉と言う表現は正しくない」

大柄の老人は溜息を付きながら首を横に振る。

「？」

「こちらの方は一七五一家の親分さんで、妖怪全体のボスとは違います」

今まで黙っていた黒い学生服の少年が説明した。

「まあ、そんな事はどうでもいいわな」

大柄の老人は、そう言いながら手にある杖で黒い学生服の少年の脛を叩き、引っ込んでろと合図を送る。

「本来なら春婆怒も居る席で、きちんと挨拶をしたかったんだが……、まあ、急に訪ねてきて勝手な事はいえねえわな。すまんが、今日のことを春婆怒にもあんたから伝えてもらいたい」

「何を？」

「ワシら一七五一家は、前回の件を最後に、お前ら使い手にも春婆怒にも金輪際、何があっても手を出さない」

一七五は真っ直ぐとタケシの目を見ながら言う。

その言葉には偽りを感じさせない説得力が感じられた。

この老人……否、この男は、雄の誇りを掛けて語っているのが感じ取れた。

「どう言うことだ？」

「そう言うことだ」

この一七五も、不器用な男のようだ。話し合いは苦手なのか、旨く会話がかみ合わない。

「だが、我々一七五一家は手を出さんが妖怪連合は別だ、その辺は勘違いするでないぞ」

「妖怪連合?」

タケシはその言葉に首をかしげると、大柄の老人と黒い征服の少年は目と目を合わせた後に笑い始める。

「くははは、お主、そんなことも知らずに春婆怒とつるんでおったのか、くはははー」

何を笑われているのか分からないタケシは、不機嫌そうに二人を見る。

そのタケシからは、先程までの警戒心はなくなっており、心の中の構えも解かれていた。

「よかろう、よかろう、ワシが説明してやろう。しかし、春婆怒の奴め、そんな事も使い手に説明してないとはのぉ」

「初対面で悪いんだが、じいさん、説明してもらえねえか。その妖怪連合ってやつおよ。」

一七五は「ゴホン」と一息ついた後に説明を始めた。

「この日本には昔から妖怪が居る。それは分かるよな、若いの?」

「ああ……」

「その妖怪の中でも、秩序や平和を重んじる者たちが集まって出来たのが妖怪連合。時代によって名前も変わるが、今は妖怪連合と名乗っておる」

一七五の後に続いて黒童子が口を挟む。

「妖怪っていってもいろいろ居ますから、日本中の妖怪全部が連合に加わってる訳ではないんですよ。ふが！」

自分が説明しているのに横から割り込んできた黒い学生服の少年を、一七五が「引っ込んでろ」と杖で頭を二回ほど叩く。

「妖怪連合に加わるのは、対外が人に化けて人間として生活している妖怪か、人間達に神として崇められている人間寄りの妖怪ばかりなのだ」

「で、そんな妖怪達で固まって、何が目的なんだ？」

タケシが、当然の疑問を尋ねる。

「基本的には悪しき妖怪達から人間を守ったり、自分達の自衛のためだ」

タケシが「ほぉ～」と感心する。

「それと、人間達に自分達の存在を隠す工作もしている」

「何故に隠す、別に知られてもいいじゃねえか？」

タケシの能天気な言葉に、呆れた表情で一七五が答えた。

「人間とは知らない方が幸せな生活が出来る生き物。そして我々妖怪は、知られない方が幸せに生活が出来る存在なんじゃよ」

タケシは首を横に傾げながら「お互いめんどくさい生き物だな」と難しい顔をする。

だが、そうする事で、今まで人間界と妖怪とのバランスは保たれてきた。これは、事実と言うよりも、実績と言ったほうがいいだろう。

「そして、我々が連合を組むもう一つの大きな理由……」

話をする一七五の視線が鋭い物に変わると、タケシは直ぐに察した。

「九十九神か……」

先にタケシが口にした。

「いかにも……。奴らの三種百食の本能の内の二つ、人食いと妖怪食い。この二つは連合を組む理由に一致する」

九十九神の生きる理由、三種百色の本能。

人を百人喰らい。

妖怪を百匹喰らい。

九十九神を百体喰らい。

「自分達妖怪と、人を守るか……」

タケシの台詞に一七五が頷く。

人々を守ると言う点では、タケシと一致している。

「自然とあんたら妖怪連合と、俺のところの春婆怒が揉めるのも無理はないってことか……」

「ああ、そう言う事だ……」

だが、その理由は春婆怒がタケシに妖怪連合の存在を説明しなかった理由にならない。

春婆怒としては、そんな事説明をしようがしまいが妖怪と対立する事には変わりがないからだ。

しかし、タケシに取っては、春婆怒の口から直接聞きたかったことではある。

「そして、虎野町市にある妖怪連合の支部と、春婆怒との間には更なる因縁が存在する」

タケシが一七五の台詞に「やはり」と呟く。

それに関して薄々感じていた。

春婆怒から人食いと妖怪食いに関して、百の数を終えていると聞いていた。

百の数を超えると、その種への食欲は無くなる。

即ちその意味は、もう春婆怒は人間と妖怪に取って害が無い存在。

だが春婆怒は、未だ妖怪達に命を狙われる。

「五百年もの前の話だ、春婆怒は当時の使い手と共に、この町の妖怪連合と派手に戦ってな……」

そう言いながら一七五は、手首から先が無い左手で自分の右目を指差す。

「それは昔、春婆怒にやられたのか……」

「ああ」

睨むタケシを余所に、一七五は懐かしそうな目で自分の左手首を見詰めていた。

「その際に春婆怒は我らが主（あるじ）である『九尾双葉』様と戦い、そして双葉様を討ち破ったのだ……」

そう言う一七五の顔は、今度は酷く寂しそうに曇る。

「なるほどね。それで、あんたら妖怪達は、三種百食の本能内、妖怪食いを日本の外で果たしてきたはずの春婆怒を狙う理由か」

タケシが爪先で軽くアスファルトを蹴ると、ザクッと音を立てる。

その音に黒童子がビクつき一七五の影に隠れた。

「しかも、その戦いは我々虎野町の妖怪から仕掛けた戦い」

「春婆怒は、ただ降りかかる火の粉を払っただけ……か」

いつぞやの夜、春婆怒が言っていた台詞をタケシは思い出していた。台詞だけではない、あの夜の春婆怒の寂しそうな表情も。

「で、じいさん、あんたも主の仇を取りたいってわけか？」

タケシの問いに、一七五は横に首を振る。

「ワシはな、春婆怒と戦い破れ、片手と片腕を失った……」

タケシが一七五の無い手首をチラリと見る。

「そして戦いに敗れたワシに対して春婆怒は、命までは取らずに見逃したのじゃ」

「なぜ？」

「勝負に負けたワシは、春婆怒に言ったのさ、情けはかけずに容赦無く殺せとな……」

一七五はそう言いながら青い空を見上げながら話を続ける。

「当時のワシは、城下町で人間に化けてヤクザ者の親分と十手持ちの二足の草鞋をやっておったんだ。

だか、それは人の生活に擬態している時の話。妖怪としては地域の百姓達には豊作の神として崇められ、そしてワシも出来る限りの力を百姓達に貸してやっていた」

「十手持ちのヤクザが、豊作の神様かよ。……昔話にしては面白い話だな」

「春婆怒の奴は、ワシが豊作の神と知っていて命を助けたのだよ。それが、百姓の為になる、民の為になると言ってな……」

一七五の横に居る子分の黒童子も、始めて聴かされる話に一七五の顔を見上げていた。

「我が主の仇とはいえ民の為を思いやり我が命を見逃した者を、宿敵九十九神と言う理由だけで、ワシが命を取りにいけると思うか、使い手？」

「……」

タケシはいかにも年寄りの説教と言った感じで、一七五の話を黙って聴いていた。

「故に今日ワシが来たのは、我ら一七五一家はこの件から手を引くと春婆怒に伝えに来たのだ。しかし春婆怒が居ないなら、お主に伝えてもらいたい」

「ああ、それは構わねえが」

タケシが真っ直ぐ一七五の顔を見つめながら答えた。最初の警戒心は何処へ行ったのかと思える表情で。

「だが、使い手よ。我ら一七五一家が春婆怒討伐から手を引いても、まだ妖怪連合も居る。それに妖怪は妖怪連合だけではない。そして同族の九十九神の存在も忘れるでない。心してかかれよ」

一七五の皺だらけの大きな手が、タケシの鍛え上げられた肩に添えられる。

タケシは一七五の言葉を、エールとして受け止めた。

「あんたに言われなくても俺が積み無き人々を守って見せるよ」

タケシの肩に添えた手を添えながら、一七五はタケシの言葉に目を丸くした。

「お前が春婆怒とつるむ理由は……」

明らかに話が噛み合っていない。

「まあ、いいか……」

足元では黒童子が笑いを堪えている。一七五は、呆れながらも微笑んだ。

「怖い顔して案外良い奴じゃねえか、じいさん」

そう言って拳を作ったタケシが、一七五の胸を軽く突く。

一七五は顔を赤らめながら「バ、バカ言ってるでない、若造が……」と照れ隠しのような台詞で強がって見せた。

それを見た黒童子は、笑いを堪えるのに必死であった。この二人、やっぱり見ていて笑えると。

「伝えたい事はそれだけだ、若いの」

そう言って一七五はタケシに背を向けると、杖をカツカツ突きながら去って行く。その後ろを黒童子も追いかけるように歩いていった。

それをタケシは暫くの間見送ると、バイト中なのを思い出し店の中に帰っていく。

「なぁ～、黒童子……」

自分の斜め後ろを付いて回る子分に、一七五が萎れた声で話しかけた。

「はい、なんですか親分？」

「今日の事は、他言無用だぞ」

「……はい」

「あの使い手の居場所も、春婆怒の居場所もだ。もし誰かにしゃべったのなら、貴様の分子を全部踏み潰したあと、貴様も念入りに踏み潰してやるからな」

顔半分振り返った一七五。その視線は冷たく冷酷な目つきで黒童子を見下ろしていた。

「お、親分、そんなに念入りに脅さなくてもしゃべりませんよ……、あはは……」

黒童子は苦笑いを浮かべながら思う。この脅しは本物だと。

「後は若様と油儀が、どうするかだな……」

前を向き直した一七五は杖を突きながら歩くと、独り言の様に黒童子に指示を飛ばす。

「黒童子、お前は成り行きを見守り、常にワシへ報告を入れろ」

「はい、一七五の親分」

黒い学生服の少年は、笑顔で大柄の老人にそう答えた。監視だけならお手の物である。

「出来る事ならば、これ以上は揉めたくは無いのだが……、そうも言ってられそうにないか……」

そう言って二人は青空の下を歩き続けていた。

<　それぞれの正体　>

春婆怒とバイクマンがアパートに帰ってくると、アパートの庭でカズマが一人、正拳突きの練習をしていた。

そのカズマに春婆怒達が近づいていくと「春子さん、こんにちわ」とカズマが元気良く挨拶で迎える。

もうどのぐらいの時間一人稽古をしていたのであろうか、カズマは頭から汗に濡れて、道着からは薄っすらと湯気を上げていた。

「おお、カズマや、一人で鍛錬に励んでおるのかぇ。タケシは何処へいったのじゃ？」

「タケシさんはバイトに行きましたよ。そう言えば、バイクが無いとか言って騒いでましたよ」

カズマの台詞を聴いて春婆怒の後ろでバイクマンがもじもじしていた。それを見たカズマは、如何したのであろうかとバイクマンの長身にある顔を見上げた。

「そうか、勤めに出たかぇ……」

三人が話しをしていると、アパートの二階から朧が豊満なバストを揺らしながら下りて来る。

タバコが切れたので近所の自販機まで買いに出てきた朧の姿はラフなものであった。

しかし、化粧は外に出るのに恥ずかしくない程度の薄い感じに施してあり、完全には疎かにはしていない様子である。

ガサツで有りながら美しい朧は、少し前の表現で言うのならば、親父ギャルと言った感じであった。

そして地味なトレーナーにGパン姿の朧は、階段を下りるとアパートの庭に居る春婆怒とカズマの姿に気付いて其方に足を運んだ。

「あら、カズマ君に春子さんじゃないの～。今日はタケシ君や陽子ちゃんは居ないのかなぁ～」

垂れ目を微笑みで細めた朧は、そう言いながら二人の側へと近づいて来た。

「ええ、タケシさんは、さっきバイトに行きました」

「そなんだぁ～」

タケシが居ないイコール陽子も居ない、この方程式が朧の頭の中では出来ていた。それだけ陽子がタケシにべったりしている印象が強いのであろう。

「ところで～、この子はだあれ～？」

朧はそう言いながら春婆怒の後ろに隠れるバイクマンを指差す。指を刺されたバイクマンはピクリとした後、春婆怒の背後にその巨体を隠すように逃げ込む。

大きな体の割りに肝は小さいようだ。顔見知りでは無い初対面の朧に対して、かなり警戒した素振りを見せる。

「そう言えば最近アパートでちょくちょく見ますけど、この人はどちら様なんですか春子さん?」

挙動不審のバイクマンを見ながらカズマも春婆怒に尋ねる。

「あー、こやつは、わらわの知人のナンシー・バイクマンと申す者じゃ、少々照れ屋だがよろしくたのむぞょ」

自分の後ろでオドオドと隠れているバイクマンに代わって春婆怒が自己紹介をするとバイクマンは、春婆怒の肩を掴みながら怯える様子で小さく頭を下げた。

「こちらこそ、僕は十文字カズマです。よろしく願います」

「私は轟朧、よろしくね〜」

カズマと朧の二人も、春婆怒の自己紹介に続いて笑顔で自己紹介を行う。

その二人の笑顔に僅かながら警戒心を緩めたバイクマンは、春婆怒の細い背中に隠れていた面積を減らした。

「え〜と、じゃあ、僕もそろそろ帰ります」

自己紹介が終わるとカズマもソワソワし始めて其の場を離れようとする。

しかし、そのカズマの道着に巻かれた白帯を朧が、綺麗な指を引っ掛けて逃がすまいと引き止めた。

「あらら～ん、少年～。美女三人に囲まれて、照れちゃったのかな～」

怪しくも妖艶な笑顔がカズマの顔に近づくと、カズマは目を丸くさせながら顔を赤くほのかに染めた。

「あはは……、何言ってるんですか朧さん……」

カズマの笑みは口元が引きつっている。

「ふふのふ～ん、可愛いわね～」

そう言いながら笑顔の朧は帯から手を放してカズマを開放してあげた。

するとカズマはアパートの敷地外へと走り出す。

「もう、ふざけないでくださいよ朧さん、じゃあ僕はこれで失礼します」

朧はチェリーボーイをつまみ食いしたかったのか、照れながら去っていくカズマを見送り手を振った。

そしてカズマの姿が建物の死角に消えていくと、残った春婆怒とバイクマンの元へ視線を戻した。

「ところで、あなたさ～」

「ん、何かぇ？」

妖怪三人が残ると、朧が春婆怒に笑顔で話しかける。

「あなた、妖怪だよね～？」

朧の質問に、春婆怒の視線が鋭い物に変わるが、質問した朧は何時もの色っぽい笑みを保っていた。その朧の笑みには殺気のようなものは感じられなかった。

「隠しても仕方あるまい、確かにわらわは……」

「やっぱりー、私も妖怪なの～、奇遇ね～」

「ほぉ……」

無邪気に会話を続ける朧に春婆怒が一瞬戸惑うが、そのまま話を合わせるように朧の話を聞いた。

「わたしさ～、二十五年前ぐらいにね～、京都からこの町に引っ越して来たのよ～。
貴方は外人ぽいけど、何処の国の妖怪なのぉ～？、私さ～、海外の妖怪さんに会うの初めてなのよ～」

はしゃぎながら春婆怒の両手を握り締めた朧は、楽しそうに掴んだ両手を上下に振った。

「わ、わらわはフランス出身じゃ……」

「わ～、フランス～、いいな～、私も行ってみたいなフランス～」

「そ、そうかえ……」

春婆怒は、この朧という女妖怪が、自分を九十九神だと気付いていないと一連の会話から悟る。

そして、この女妖怪は、おそらく天然ではないのかと確信しつつあった。

「でさ～、この子さ～、ナンシー・バイクマンって言ったっけ？」

朧は、春婆怒の後ろでモジモジしているバイクマンを指差す。

「ああ、タケシのバイクを元に術を施したファミリアぞよ。日本で言う式神かのぉ」

「なるほどね～、良く出来た式神ね～。一般人には、お下げの女の子にしか見えないもの～。でもちょっと身長が高すぎない？、せっかく顔は可愛くできてるのにぃ～……」

「仕方あるまい、質量保存の法則じゃ、横に太るか上に伸ばすかの二択だったゆえのぉ」

「なるほどね～、おデブちゃんより、のっぽさんの方を選んだのねぇ～。私、式神の術とか苦手だから勉強になるわ～」

そう言いながら朧は、春婆怒の後ろに隠れているバイクマンの周りをクルクル回りながら観察を始める。

そして朧は口元が寂しくなってきたのか、Gパンのポケットとからタバコとライターを取り出して吸おうとした。

しかし煙草の箱は空っぽであった。

「あ、そうだ、私～、タバコを買いに出てきたんだぁ～」

ポケットから空のタバコの箱を取り出した朧は、当初の目的を思い出すと空の煙草の箱を両手でねじる様に丸めた。

「じゃあ、春子さんにバイクマンちゃん、またね～」

春婆怒達に手を振る朧は、タバコを買いにアパートを離れていく。

「あの朧車……、妖怪の探知能力はないに等しいのぉ……」

春婆怒の言葉にバイクマンは、ヘッドライトで出来た頭部を激しく縦に振って同感した。

<　集いし者達　>

油儀邸宅、客間。

二十畳ぐらいの大きな和室。部屋の障子は開かれ、板場の廊下の向こうにはガラス戸があり、まだ寒さの残る美しい庭園と暖かい室内との空気を、汗を掻くように結露しながら分け隔てていた。

その客間に家主である油儀会長をはめとした数人の男女が集まっていた。

一人は、この邸宅の主、油儀会長。部屋の正面に一人で座り、残りの者達が油儀に向かい合うように横ニ列に並んで座っていた。

その部屋の隅に、油儀会長の秘書である蓋口静香が一人控えるように座っている。

静香は赤いレディーススーツに短いスカートを履き、黒いストッキングの美しい足で紫色の座布団に正座をしている。そして、眼鏡を掛けたインテリ風の顔立ちに、黒く長い髪を後頭部に束ねて団子を作り、それがいっそう彼女のイメージをすましたものに見せていた。

一方、油儀の正面に座るのは、男女六人。

油儀の真正面で、六人の中央に座るのは、刑事の鍋中改造。

紫色の座布団に胡坐を掻き、外着のトレンチコートを羽織ったま

まの姿であった。

少し怒っているのか無愛想な表情で両手を胸の前で組み、静かに瞳を瞑っている。

その鍋中の左手に座るのは、私立探偵の猫田龍信。龍信の真後ろには弟の猫田虎二が座っていた。

猫田龍信は、自分の正面に見える蓋口静香に対して、銀縁の眼鏡越しに作った笑みを時折向けるが蓋口静香は、それに気付いても無表情なままに無視を貫く。

二人は、周りの関係者からも公認されて付き合っている恋人同士なのだが、現在は何やら喧嘩中らしく、ここしばらくギクシャクした日々を繰り返していた。

静香の方が、一方的に龍信の言動に怒っているようだが、龍信には自覚が無く、それが静香の怒りに油を注いでいた。

弟の虎二は、そんな二人の仕草を後ろから見て、呆れるように部屋の外の庭園へと視線を替えた。

鍋中の右手には、処理班筆頭の八尾弦徳が居た。

ビシッとしたグレイのスーツに地味なネクタイをキッチリと締め、正座した姿は、背筋をピンと伸ばし、太股に両手の平を添えた礼儀正しい姿であった。

鍋中の真後ろに座るのは処理班の一人、天野太陽。

歳の頃は、十八歳から二十歳の女性。

静香に比べて化粧は薄く、ナチュラルメイクと言うよりも、手抜きで簡単なメイクに見て取れた。

容姿は真っ赤な長い髪を後頭部で縛りポニーテールを作っている。真っ白なロングコートの下には黒いタンクトップに生足のままのホットパンツ姿で胡坐を掻いていた。

寒くてロングコートなのか、厚くてタンクトップにポットパンツなのかが分からない姿である。そして、その全ての総合から、ガサツさを感じさせる女性に見て取れた。

そんな彼女の横であり、八尾弦徳の真後ろにあたる場所に居る男は、処理班の一人、無常水越斉である。

濃い灰色の和服の着物姿で、黒く長い髪をきっちりと真ん中から分けた男性。

年の頃は二十代後半といった感じで、隣の女とは違い、正面の八尾弦徳を見習う様に礼儀正しく正座をしていた。

顔色は白く、顔付きも涼しく落ち着いた感じで、遠くから見たのなら女性と見間違えても可笑しくない男であった。

計八名。

今、この部屋に居るのは、八匹の妖怪である。

「油儀会長、昼の現金輸送車襲撃事件。やはり九十九神と、その使

い手の仕業と見るのが妥当かと思います」

口火を切ったのは、グレーのスーツに銀縁の眼鏡を掛けた男、私立探偵の猫田龍信であった。

鯉の画かれた掛け塾の前に座る油儀会長が、煙管を吹かしながら龍信に「理由は？」とサラリとした感じで質問を返す。

その問いに猫田龍信は、銀縁の眼鏡を人差し指で直すと答えた。

「車から足跡も残さず消えた二人の警備員、おそらく九十九神に食われたと見ていいでしょう。
そして強奪された現金は、輸送車から普通の手段では有得ない方法で持ち出されています。
何よりも、我々妖怪が金を盗んでまで金欲を満たそうとは思えませんからね」

「そうなれば、自然と犯人は九十九神と使い手って訳よ」

兄の言葉に、後ろから弟の虎二が口を挟む。

「なるほどのぉ」

油儀会長が龍信の解説に頷く。

「以上の条件からして、犯人は九十九神と使い手と判断しざる終えないかと……」

「使い手である人間が絡めば、人を喰らいながら金を盗む九十九神が出てきても可笑しくわないわな～」

龍信の隣で胡坐を掻いて座っている鍋中改造が、龍信の意見に賛成する。

「それが分かったとしても、犯人が何処にいるかは分かってないんだろ？」

虎二が口元だけを笑わせて言う。

それは、他の者達よりも優れた自分の探知能力を頼れと言った意味が込められていた。

「それを調べるのが、あなた方、調査班の仕事でしょ」

油儀会長の斜め後ろで正座していた、秘書の蓋口静香が呆れた口調でそう言った。

「ですが静香さん、今回の九十九神の出現で予想される事が一つ有るのです」

そう話す龍信に、部屋に居る七人の視線が集まる。

「前回の九十九神が現れたときもそうですが、今回の犯人が九十九神ならば、間違いなくそれを追って春婆怒も姿を現します」

春婆怒、その単語を聴いた八尾弦徳の肩がピクリと動く。

その僅かな反応に、後ろに座っていた黒い長髪の物静かな男だけが気付いた。

無常水越斉は、開けているのか閉じているのか分からない細い目で、八尾の後姿を見つめる。

「なるほどね～、じゃあ、今回の九十九神探索は、調査班だけには任せずに、僕達処理班も出て、その九十九神の痕跡を辿った方が良いってことかな。そうしたのなら春婆怒に鉢合わせできるってことかい。」

そう言うのは、処理班の一人、天野太陽。

彼女は肩に掛かったポニーテールを片手で払うと、悪餓鬼のような笑みを見せた。

そんな仕草を見せる彼女の横に居る虎二は、胡坐を掻く彼女の生足と、タンクトップの隙間から見える褐色の肌に、思わず目が行ってしまう。

「ああ、そう言った可能性も高いかと」

きわどい姿の天野太陽に、そう言って猫田龍信もチラリと視線を向けた。

そして視線を戻すと、正面の蓋口静香の目がギラリと恐ろしい光を放っている事に気付く。

龍信は「何故!?」と言った感じで顔に脂汗を流した。明らかに露出の高い天野太陽嬢を見てはいけないと言った静香の警告と脅迫の光であった。

「油儀会長、今回の事件の調査。我々処理班も調査段階からの導入

を許可してください」

処理班筆頭の八尾弦徳が丁寧な口調で問いかけると、八尾弦徳と一緒に居る処理班の二人も油儀をじっと見詰める。

他の二人も、筆頭の望みと同じ事を願っているようだ。

油儀は、何やら考え込みながら口を閉ざす。そして暫く経つと、正座している自分の膝を、ポンッと叩いた後に話し始めた。

「よろしいでしょう、今回の件に関しては調査段階から天野君と水越斉君には出てもらいます」

天野太陽の顔はニヤリと笑うが、八尾弦徳の顔は引きつる。

自分の名前が無い。

「会長！」

大きな声を出して八尾弦徳が講義した。しかし、油儀会長は手の平を突き出して「止まりなさい」と八尾弦徳を静止する。

「若には私と一緒に、本部の長老会議に出てもらいます」

大きな頭を小刻みに揺らしながら油儀が言う。

しかし、八尾弦徳の顔は、悔しさからか強く濁っていた

「私はあくまでも、若が一人前の九尾になるまでの代行役。若様には、そろそろ本部の長老会議にも顔を出してもらい、虎野町支部の

次期長老としての役割を学んでもらいたいと思っております」

「ふっ、油儀の策にはまったな……」

鼻で笑う鍋中が、隣の龍信のみに聞こえる声で言うと、龍信も「ですね」と小声で言いながら相槌を打つ。

八尾が、拳で畳を叩いた。

「油儀会長は、そんなに私と春婆怒を戦わせたくないのですか！そんなに私が母の仇を討てないと思っているのですか！？　そんなに私が春婆怒に遅れを取ると言うのですか！」

ついに大声を上げながら八尾弦徳が立ち上がる。

「奥方様の仇は、我々が必ず取って見せましょうぞ。若には、それよりも早く、代行を務める私に代わって、虎野町支部の妖怪達を率いてもらうのが先決。今、若に万が一のことがあってはこまり申し上げます」

油儀は、興奮する八尾弦徳とは打って変わって冷静な表情で答えると、深々と額が畳に付きそうにぐらいに頭を下げた。

「むむむむ……」

立ち尽くす八尾は、奥歯を強く噛締めながら震えていた。

その光景を見ていた天野太陽は、隠す事も無くクスクスと笑いを零し続けた。

<　正門からの来客　>

町並みの風景から少しはなれた場所にバイクでやってきた二人。

ごちゃごちゃしたビルや電信柱が見え無くなり、その代わりに増えた長閑な田園風景が、まだ冷たい寒空の中に広がっていた。

真っ直ぐに続く二車線の道。綺麗に舗装され、歩道まできちんと整備されている。

両脇を田んぼに挟まれたその道の遠くには、時折だが古びた民家が見えたが、人気らしいものを見る機会はなかった。

その舗装された二車線の道を、アスファルトを蹴りながら走る二人乗りのバイク。

運転しているのは男性で、後ろに乗るのは髪の長い女性だった。

二人が乗ったバイクは、和風の作りの巨大な門の前に止まった。

まるで時代劇で見る武家屋敷の様な立派な門。

門は大きく開かれ、その前には、門番の様に黒いスーツにサングラスを掛けた男性が二人たっていた。

二人の黒スーツの門番は、自分達が警備する門の前に現れた二人を見て、胸についたピンマイクで何やら報告をしていた。

二人の男女はバイクから降りた。

一人は、黒のジャケットに青いワイシャツを着たチンピラ風の男。

もう一人は、茶髪の長い髪に、濃い化粧をした水商売風の女性で、手には赤い漆塗りの煙管を、色っぽい仕草で持っていた。

二人はバイクを降りると、黒服が警備している正門へと近づいていく。

「主殿、本当にここを襲うでありんすか？」

「おう、これだけ大きな家ならよ～、札束とか宝石やらが幾らでも有るだろうぜ。それに使用人とかも多そうだからよ、目に付く奴らから片っ端に喰らっていけばお前も満足だろ？」

「わっちは、人さえ食らえれば問題無いでありんす……」

女は、垂れ目を細めてチンピラを見た後に、煙管をゆっくり吹かした。

その仕草からしてチンピラの作戦には、若干の不満が有る様に見えた。

だが、テンションが上がり始めたチンピラは、そんな彼女の様子には気付きもしていない。

「よし、行くぞ」

歩き出す黒ジャケットのチンピラと、水商売風の綺麗な女性。

女は、細く綺麗な指で時代遅れの赤い煙管を吹かし、辺りに煙草の臭いを振りまいていた。

その煙は風に煽られる事なく辺りに広がり、長閑な風景を少しずつ霧に包まれたかのように霞めていく。

二人はゆっくりと大きな門のある屋敷へと歩いていくと、和風の作り構えの門の入り口に立つ黒服の警備員が、サングラス越しに二人に警戒した。

そして二人の男女は、開いている門の中へと自分の家に帰ってきたかのような態度で、さぞ当然の如く入って行こうとした。

だが、黒服の男達が走りよってきて、それを当然の如く停止する。

「すみませんが、お約束でしょうか?」

黒服は、まずは丁寧に尋ねるが、明らかにサングラス越しにも男を怪しんでる表情であった。

チンピラは頭の悪い笑みで言った。

「約束?、いや、ちょっと色々と頂こうかなと思ってね。お金とか……、命とか!」

黒服は、男の肩を掴みながら「頭、可笑しいのか」と呟く。そして、もう一人の黒服が、チンピラの後ろでクスリと笑っていた。

「あはははははーーーー」

しかし、気が狂ったかのようにチンピラは大きく笑い出すと、連れの女に何やら合図を送る。

女は合図に合わせて、手に持っていた煙管を深く吸うと、口から大量の煙をチンピラの腰目掛けて吹きつけた。

「こぼ、こぼ！」

辺りに煙草の煙が飛び散る。

咳き込む黒服が気付くと、男の腰には太く真っ白なベルトが巻かれていた。バックルの部分には「白」と漢字で書かれており、その文字が怪しく虹色に光っていた。

「白雲太夫、妖力共有するぞ！」

「OKでありんす」

「妖力共有・開始！」

油義邸の客間。

「「「「「「！っ」」」」」」

客間に居る八匹の妖怪が、一斉に反応を見せた。

「おい、今のは……」

目を大きく見開いた鍋中が、窓の外に素早く視線を向けた。

「ああ、間違いない、九十九神が近くで……いや、この敷地内で妖力共有しやがった……」

鍋中の問いに、探知能力が一番優れている虎二が答えた。その表情は、「そんなバカな」と言いたげな驚きの表情であった。

「舐めたマネを！」

八尾弦徳が、庭の方を睨みながらそう言うと、油義との話し合いで溜まった怒りの表情のまま再び立ちあがった。

「わは～、おもしろ～おもしろ～！」

天野太陽が、はしゃぎながら赤いポニーテールを揺らして立ち上がると、続いて隣に居た無常水越斉も静かに立ち上がる。

「まさか我らが虎野町支部の本部に乗りこんでこようとはなぁ……」

そう言いながら、ゆっくりと鍋中改造も立ち上がる。

「こんなふてぶてしい事をするのは、やはり……」

猫田兄弟も次々と立ち上がった。

二人の兄弟は、別々の期待を胸に笑みを見せる。それは、好奇心と手柄。

「我々は、そこまで舐められたか……」

座ったままの油義は、冷静な表情で何時もの様に、大きな頭を左右に揺らしていた。

立ち上がった者達が、畳張りの部屋から板張りの廊下に出ると、ガラス戸の向こうの庭園を睨むように見た。

その視線が集まる先は、遥か遠くに見える油義邸の正門。

怒る者、笑う者、呆れる者、静かな者、そんな中で皆のタイミングが一致して、あの名前を同時に口にした。

「「「「「「「「「九十九神、春婆怒！！」」」」」」」」」

妖怪達の声が重なり合った。

<　ベルちゃん、まだまだピンチ　>

一方、タケシの住むアパートの前。

他人の家の前にしゃがみこむ春婆怒とバイクマンの姿があった。

二人が見ているのは犬小屋。その奥で震える一匹の柴犬。

「タケシ……、おそいの～」

犬小屋を眺める春婆怒が呟くと、隣にしゃがむ鋼鉄の少女がギシギシと音を立てながら頷く。

それを、薄暗い犬小屋の奥から震える眼差しで見ている柴犬のベルは思っていた。

何時も自分を美味しそうに見詰める悪魔の横に、鉄の塊で出来た大きな悪魔が増えていると。

今まで、犬として生きた犬生四年間の中で、見たこともない怪物。

何故、悪魔が一体増えているのかと……。

柴犬ベルが震える中、遠くからバイクのエンジン音が聞こえてくる。

それは、陽子が運転しているバイクの音。バイクの後ろには、バイト帰りのタケシの姿があった。

春婆怒が、タケシの姿を見つけると向かえの家の玄関先を離れる。
その後ろをバイクマンも付いていく。

長く続いたベルの恐怖の時間が今終わった。

おそらく二つの悪魔は、二時間近くベルの小屋の前で屯していたであろう。

「タケシや、よくかえったのぉ～」

春婆怒がクールに言葉を飛ばすが、陽子のバイクの後ろから降りたタケシは、何やら怒った表情をしていた。

「あ！、てめー、俺のバイク勝手に連れまわしただろ！」

普通のバイクなら、乗り回したが正しい。しかし、最近のタケシの愛車は連れまわされることが多い。

それは、バイクマンがタケシよりも春婆怒の言う事を聞くからだ。
命令優先順位が、春婆怒の方が上に設定されている。

「すまんすまん、ついのぉ～」

路上での二人の会話を、バイクに跨りながら陽子がニンマリとした表情をして見ていた。

タケシに怒鳴られる春婆怒の様子が楽しく見えている様だ。

「すまんじぁ、ねえよ！」

「ん、この感じは……」

怒鳴るタケシを無視して、突然遠くの空を見上げる春婆怒。

「どうした、春婆怒？」

様子が変わった春婆怒に、タケシと同じように少し離れた場所から二人を見ていた陽子も首を傾げた。

「妖力共有じゃ」

春婆怒は、どこか遠くで行われた妖力共有の気配を感じ取ったようだ。

「九十九神か！？」

タケシの両拳が強く握り締められた。その動きが両手の筋肉を膨らませる。

「おそらく昼間の九十九神じゃのぉ」

「昼間？」

「そうよ、お主が勤め中にも一度あってのぉ～」

春婆怒の顔は、怪しい笑みを見せていた。

それは、今の台詞がタケシを釣る為の台詞であるかのように。

「うし、春婆怒、その九十九神、潰すぞ」

春婆怒の撒いた餌に、一瞬でタケシが食いつく。

「そう来なくてはのぉ」

春婆怒が怪しい笑みを更に強めた。

すると後ろに居たバイクマンが、人型からバイクの姿にギシギシと金属音を立てながら戻っていく。

タケシが自分のバイクに跨ると、春婆怒もその後ろに跨る。

「タケちゃん、何処行くのよ！」

二人を見ていた陽子が声を飛ばす。

その言葉には、若干の嫉妬の色が見えたが、タケシも春婆怒も気付く事は無かった。

二人の心は、現れた新手の九十九神に向けられていたからだ。

そしてタケシが陽子に答えた。

「行き先は、バイクに聞いてくれ！」

「はぁ～？」

陽子が、訳が分からないといった表情をしていた。

そんな陽子を無視して、二人の乗ったバイクは走り出す。しかし、ハンドルを握るタケシにも行き先は分かっていない。

陽子も追いかけようと、ヘルメットを被った。だが、その時である。

「陽子、ちょっと何処行くの。帰ってきたら店の留守番をお願いしていたでしょ～」

喫茶店の中から様子を見ていた母親の雪絵が飛び出して来ると、ヘルメットを被り直しバイクのエンジンを掛け直そうとしていた陽子を引き止めた。

父の銀も外出中で、母の雪絵は此れから大事な用事が有るらしい。娘の陽子を逃がさないように肩を掴む。

「お母さん～……」

陽子はバイクのエンジンに火を入れるのを諦めて、渋々ながらバイクから降りた。

「槍女め……」

陽子は、被ったヘルメットの中に愚痴を残すと、諦めたかのようにヘルメットを脱いだ。

その光景を向かいの家の玄関先から、一匹の柴犬が眺めていた。

今日も食われずに済んだと思いながら……。

<　スケルトン・1　>

油儀邸宅の正門。

辺りには霧の様な白い煙が立ち込め、ニコチンの臭いで辺りの景色を濁して見せた。

先程まで、この場に立っていた者達の数は四人。

しかし、現在は立っている者は一人、倒れている者が二人。

単純に考えても、計算が合わなかった。

大きく立派な門の下、石畳で出来た上に二人の黒服が倒れている。

横たわる黒服の一人は、顎がグチャグチャに変形して石畳に赤い水溜りを作りながら倒れていた。

もう一人の黒服の男は、開かれた大きな門に寄りかかるように座っており、右肩から胸にかけて不自然な形に凹んでいた。

二人はピクリとも動く事は無く。その様子から絶命している事が見て取れた。

そして、白い霧の様な煙の中にふてぶてしく立つ白い怪人。

二人の黒服を、あのような姿に変えてしまったのは、この怪人だ。

蟹の甲羅を白くペイントしたかのようなゴツゴツした鎧を身に付け、頭には骸骨の模った仮面を被っている。

全身真っ白といった感じで、関節部分のみから黒い色が見えていた。

そして、背中に生えている突起物。

その先には小さな穴が開いており、火山の噴火口から煙が立つように、ゆらゆらとニコチンの臭いが混ざった白い煙が出ていた。

「くっくっくっ、歯応えも欠片も無い奴らだったぜ」

安っぽい男の声だった。

白い怪人が呟くと、地面に倒れる二人の黒服が、霧となって白い怪人の体に吸い込まれていく。

「ん～、主殿、何かこの屋敷、不吉な気配がするでありんす……」

白い怪人から女性の声が聞こえてきた。その口調は、悩ましげな吉原の花魁風であった。

「そうか、気のせいだろ？」

女性の声に答える男性の声は、適当にあしらうものだった。

その台詞に女性の声は、今一度不満な声を漏らした。

「ならば、良いのでありんすが……」

女性の声の正体は、煙草を吸う為の古いアイテム、煙管。

女性の声の名前は、白雲太夫。

九十九神として変化を遂げて、まだ日の浅いもののけ。

「白雲は、心配しすぎなんだよ」

白雲太夫の言葉を軽く流してしまった使い手の男。

それが、自分の命取りになるとは気付きもしないで門をくぐりぬけて油義邸の中へと入っていた。

「くっくっくっ、パーティーの始まりだぜ！」

そこが、化け物屋敷とも知らずにそう言った。

油義邸の客間。

そこに集まった八匹の妖怪達は、突然の来訪者の気配にざわめきあっていた。そして、畳の上に並べられた紫色の座布団から跳ね上がる様に立ち上がった。

各々がガラス戸越しに、綺麗に手入れされた庭園の向こうを睨む。視線の遥か先には、此処からは見えないが屋敷の正門がある。

「庭の向こうだな！」

猫田三兄弟の長兄、猫田龍信が、隣に居る弟に尋ねた。

隣に居る弟の虎二は、兄の問いに答える。

「ああ、門の方だ！」

虎二は確実に感じ取っていた。先程発生した気の乱れは、間違いなく九十九神が使い手と妖力共有した物だと。

弟の言葉に、兄の龍信がガラス戸を開けた。

外から冷たい空気が流れ込み、その冷気に混ざって妖気が室内に入ってきた。

「龍信……」

男たちの後ろで蓋口静香が、現在喧嘩中の恋人の名前を一人密かに呟いた。

静香は調査班の恋人が、戦闘に参加しようとしている事が心配に感じていた。

「兄貴、行くぜ！」

虎二が一番に飛び出すと、その後に兄の龍信が続く。

「僕もいっちゃお～～と」

天野太陽は、赤い髪のポニーテールを揺らしながら笑っていた。

猫田兄弟が庭に飛び出していくと、続いて処理班の三人も部屋を飛び出そうとする。

「静香君、止めなさい！」

油義の言葉に我を取り戻した静香は、油義の言葉の意味を直ぐに悟る。

「はい！」

処理班の三人が飛び出る瞬間、八尾弦徳に向けて静香が手を伸ばすが届かない。

しかし。

「静香さん！」

八尾弦徳が声を上げた。

蓋口静香は、後頭部で団子の様にまとめた髪を解くと、その長い髪を妖術で更に伸ばし、八尾の腕に掴む様に絡みつけた。

「！」

八尾弦徳が、その長い髪に移動を邪魔されたが、天野太陽と無常水越斎の二人は、八尾弦徳を残して庭園に飛び出していった。

「ごめんなさい、八尾君」

八尾にすまなそうな顔をする静香。その長い髪を伸ばした静香の後頭部に、巨大な口があった。

まるでジョーズのような大きな口にはギザギサの歯が並び、一口で人間の頭ぐらい噛み砕きそうな物であった。

そして今しゃべったのは、その大きな口。

静香は、ギザギサの鮫のような口で謝罪を述べながら、もう一つの口ではにっこりと笑っていた。

これが蓋口静香の正体。

妖怪・二口女。

コーーンッ。

狐の鳴き声。

「邪魔立てはしないでください！」

自分の腕を伸ばした髪で掴む静香に、八尾弦徳は丁寧な言葉使いだが怒りの色が混ざった声でそう言った。

そして、狐の鳴き声と共に現れた金色の尻尾から、八尾は刀を受け取ると、素早く静香の髪を切り裂き、四人に遅れまいと部屋を飛

び出していった。

「あん！」

伸ばした髪の毛を切られて静香が、思わず色っぽい声を上げながらよろめく。

八尾が庭園を走る。

切られた静香の黒い髪があたりに散らばると、静香は伸ばしていた髪を、スルスルと短く縮めていった。

「いっちまいやがったな」

鍋中が油義を横目に、枯れた声でそう言った。

「むむむむ……」

客間に残ったのは三人。油儀会長は鍋中の言葉に歯軋りをする。

<　スケルトン・1　>（後書き）

暫くアクションが続きます～

<　スケルトン・2　>

油儀低宅の大きな正門をくぐって直ぐの場所。石畳の上で十数人の黒服ＳＰ達に囲まれている白い怪人の姿があった。

既に何人かの黒服が白い怪人にやられたのか、石畳の上に力なく横たわっている。その多くが既に絶命している様に見えた。

「結構居るじゃねえか、お出迎えがよ～」

白い髑髏の仮面の下で、男が笑っていた。その手には、首が異常な方向に曲がった黒服のＳＰを無造作に掴んでいる。

白い怪人が、首のへし曲がりグッタリした黒服の死体を放り投げると、黒服は霧となって白い怪人の体の中に吸い込まれていく。

「その調子でありんす」

男と妖力共有した白雲太夫は、黒服の死体を喰らって喜んでいる様子だ。

白い怪人の周りで倒れていた黒服の死体が、次々と霧になって吸い込まれていく。

「こいつ、九十九神だぞ、銃は効かない！」

黒服達の手には、鉄（くろがね）に輝く拳銃が握られていたが、残念ながら攻撃アイテムとしては無力に等しい物だった。妖怪にも、九十九神にも、火薬を使った武器は効かないのだ。

「誰か処理班に報告しろ！」

「もう、しました！」

片手に拳銃、片手に二段式警棒を構えるＳＰ達は、突如現れた九十九神に右往左往している様子だった。

やはり普通の人間が、九十九神を相手にするのは至難のようだ。圧倒的戦力差に押される黒服達。

その時、聞こえ始めた男の声。

「お前らは引っ込んでろ！ここは人間の出る幕じゃねえ！」

正門前の現場に一番乗りしたのは猫田虎二だった。

虎の刺繍が入ったスカジャンに、膝の破けたＧパンを履いた虎二。その格好に、何時もとおり忍者の風貌を追加したアンバランスな格好。黒覆面で顔は隠されていた。

「何だ、こいつ……？」

突然現れた風変わりな忍者に、白い怪人も一瞬気を取られていた。

一方、虎二の到着を見て黒服達が、白い怪人を囲んでいた陣形の輪を一回り大きな物に広げた。

「スゲーチャンス！　ここで活躍して、俺も処理班に移動だ！」

虎二は、ＳＰ達の頭を高いジャンプで飛び越えて輪の中に入ると、スカジャンの内ポケットから十字手裏剣を取り出して、問答無用で白い怪人目掛けて投げつけた。

「喰らえ！」

虎二が両手で投げた二つの手裏剣が、ニコチンの香りが漂う空気を切り裂きながら白い怪人目掛けて飛んでいく。

「むむ！」

白い怪人は空中にジャンプして、虎二の投げた手裏剣を回避する。その高さは、三メートル以上はあった。既に人間の脚力では有り得ない高さである。

しかし。

「は～い、手裏剣は囮ね」

男の声。それは地上に居るスカジャンの忍者の声とは違った。

「なに！」

白い怪人がジャンプした空中には、忍者刀を振り上げたスーツの忍者が待ち構えていた。

「えっ！　俺、囮！！」

兄の龍信が先読みした攻撃に、弟の虎二は利用されたのである。

「こんちきしょう！」

自分より高い位置に居る龍信を見上げる白い怪人。

白い怪人は、振り上げられた忍者刀を回避出来ないと悟り愚痴を零す。

「真っ二つにしてあげますよ！」

「ふぎゃ！」

龍信の振り下ろした刀が、空中で白い怪人の頭の先から股座にかけて真っ二つに切り裂いていく。

「やったか！」

地上で二人を見上げていた虎二が叫んだ。

二つに分かれた怪人の間を、切り裂いた龍信が通り過ぎていく。

だが、白い怪人の真っ二つになった体が、一度煙の様にぼやけると、合体して元の体に戻っていった。

「何だよ、あれ！？」

再生した怪人を見上げていた虎二の表情は、納得いかない様子であった。

そして龍信が石畳に着地すると、少し遅れて白い怪人も着地する。

着地した龍信が振り返りながら「なぜ！」と叫ぶ。

「おおー、あぶね～、太夫、助かったぜ」

白い怪人が、首を左右に捻りながらコキコキ鳴らすと、相棒に感謝していた。

その様子を、後ろから虎二が睨みつける。

「どういたしましてでありんす」

白い怪人の中から聞こえた女性の声は、してやったりと言った感じに聞こえた。

「喰らえ！」

すぐさま気を取り戻した虎二が、更なる手裏剣攻撃を仕掛けた。

「あ！」

虎二が投げた手裏剣が、白い怪人の背中から胸へとすり抜けて飛んでいくと、正門の柱に突き刺さる。

「ちっ、手裏剣も効かないのか！」

虎二は、舌打ちをしながらも、この怪人が厄介な存在だと思い始めていた。

「わはははは！、俺様は無敵だからな！！」

白い怪人は、調子に乗ったのか、両手を広げて高笑いを上げる。まるでオーバーな白人の様だった。

「主殿、この術にも限界がありんす。わっちの妖力が尽きたら、もうすり抜けは出来ないでありんす」

「えっ、マジ」

白雲太夫の言葉に、調子に乗っていた使い手は高笑いを止めた。

「だから、できるだけ避けるでありんす」

「分ったぜ。とりあいず、こいつら全員ぶち殺して金目の物かっぱらってよ、とっととづらかろうじゃね～か！」

単純なプランを口にした白い怪人が、二人の忍者を前に身構える。

龍信と虎二は動きを止めて、白い怪人をじっと見ていた。

「こ、こいつ……」

「ああ、春婆怒じゃあねえな……」

微妙にがっかりした虎二の表情。それは、突然現れた九十九神が春婆怒ではないからだった。

「誰だよ、こいつ……？」

「さ～～……？」

猫田兄弟は、目の前の九十九神が春婆怒ではない事に気付くと、しらけたのか体から力が抜けていく。

「にょほほほほ～、今度は僕が相手だよ、春婆怒！」

「春婆怒？」

突然聞こえてきた女性の声、それに白い怪人が首を傾げた。

黒服のＳＰ達が退避する中、赤いポニーテールの長い髪と白いロングコートを揺らしながら表れた女性。

「おお！」

白い怪人は、体を乗り出して、その女性の全身を食い入る様に見た。

白いロングコートの下は、黒のタンクトップに際どいポットパンツ。

タンクトップとポットパンツの間からは、スマートな括れと可愛い臍が見えている。それを見た白い怪人は、髑髏の仮面の下で、下品にも鼻の下を伸ばして表情を緩めていた。

「男とは、困った者でありんす……」

白雲太夫が、呆れた声を零すが、使い手の耳には届いていなかった。

そんな中、ポニーテールの少女の体が、宙に舞い上がる。

「ほほ、君も白なのね、でも白は僕一人で十分さ！。その純白、僕の炎で黒コゲにしてあけるんだから！」

そう言いながら空中に浮き上がった天野太陽の背中に、燃え盛る炎で出来た大きな翼が勢い良く生え伸びる。

「なんだ……！」

炎の翼を広げた天野太陽を見ながら、白い怪人が僅かながら後退りした。

上空で両手をタンクトップの前で組む少女は、既に勝ち誇った表情を見せていた。まるで傲慢な炎の天使に見える。

「にょほほほほほほ～～」

その天野太陽が、可笑しな高笑いを上げていた。

「ぶわ、あちち、日照り神の奴、俺たちまで焼き殺す気か！」

距離を離しながら上空を見上げた虎二が、上空の少女に抗議を飛ばす。

空中から灼熱を放つ天野太陽の炎の翼。

それは仲間である筈の猫田兄弟の肌をも炙り上げ、着ている服から焦げ臭い煙を上げさせた。

彼女は今、その名の通り、本物の太陽であった。

辺りを焦がし灼熱の地獄を作り出している。

「巻き込まれたくなければさ、引っ込んでなさいよ！あははは～ん」

空中から逃げる虎二を見下ろしながら、天野太陽は楽しそうに笑っていた。

「そう言う事は、術を使う前に言えよ！」

そう言いながら猫田兄弟は、其の場から離れていく。

「ちきしょう、熱くて息苦しいぞ……」

炎は、空気までも焦がしていた。

白い怪人は腕で顔を隠しながら後退りすると、天野太陽が炎の翼を広げたまま、じわじわと白い怪人に近づいていく。

空中から追い詰められた白い怪人は、高熱から逃れる様に庭の方に走り出す。

「おバカさん、逃げられると思ったのかな～」

天野太陽は、笑いながら火の鳥となって白い怪人を追いかけていく。

「だ、ダメだ、逃げても灼熱の間合いから出れねえ！」

空中から追いかける天野太陽の後から、庭園の木々や草花が次々

と燃え上がって行く。

「まてまて～、逃げても無駄なんだからさ」

その光景を遠くの客間から見ている庭園の主が「わ、わしの庭が！！！」と絶叫していた。

どんどんと天野太陽の翼が、辺りを火の海に変えていく。

「あんまり逃げてるとさ、怒るよ！　これでも喰らえ、ファイヤーバードショット発射！」

天野太陽がそう叫ぶと、背中から生えている炎の翼から、炎の弾丸がマシンガンの様に乱射された。

炎の弾丸は、逃げ惑う白い怪人の足元に何発も突き刺さると、辺りを更に火の海へと変えていった。

「ひぃぃーー、飛び道具まで！！」

<　スケルトン・3　>

客間を飛び出し正門を目指した五人。

その内の二人が、向かい合って止まっていた。

炎の翼を広げて庭園を燃やし続ける天野太陽を背にした無常水越斎。

着物姿の手には、長めの合口を持っていた。

そして長い黒髪を熱風に揺らしながら目の前に立つ八尾弦徳を静かな眼差しで見ている。

「若様、ここは我らにお任せしていただきたい……」

「水越斎殿、貴方まで……」

八尾は自分の進行を阻む男を睨みつけていた。

「拙者の考えは、油議会長と同じ。若様には春婆怒と戦わせる訳には参りませぬ」

静かな口調であった。

「道を空けてください！」

手にした日本刀の鞘を強く握り締めながら八尾は大きな声を出した。

水越斉は、極道映画でヤクザが持っていそうな柄の無い『ポン刀』を手にしていた。

そのポン刀を鞘から抜いた水越斉は、横一線に足元の地面を切り裂く。

すると水越斎が付けた傷跡から水柱が浮き上がった。

その水柱は、高さ３０メートルは超え、更に横にも伸びていくと、油議邸宅の庭を二分する。

まるで刑務所の壁の様に沸きあがった壁が、八尾と水越斉の間を区切ると、水の壁の向こう側で水越斉が深く頭を下げた。

「水越斎殿！」

八尾は水の壁を拳で叩いた。

軟らかい感触の向こうに、硬い感触があった。水の壁は、拳程度ではびくともしない。

「ここは、我々にお任せあれ」

そして水越斉の体が、少しずつ削れる様に複数の小魚に変わると、その小魚達は空中を泳ぐように正門へと飛んでいく。

「あらぁ～、水越斉の結界だな」

客間から様子を見ていた鍋中が、水の壁を見て術の主の名を口に

した。

「おお、良くやった！」

水の壁で先に進めなくなった八尾を見て油儀も喜んでいる様子だった。水越斉を褒め称える。

「さすが水越斉殿ですね、ナイスです」

そう言うと静香はしゃがみこむ。水の壁を見上げる二人の老妖怪を余所に、静香は八尾に切られた自分の髪を拾っていた。

そして静香の乱れた髪は、ひとりでに後頭部に巻き上がり、大きな二つ目の口を隠す様に元の髪型に戻っていった。

白い怪人が乱入してきた油儀邸宅に、それよりもほんの僅か前に来訪していた人物達がいた。

「おお～、今日は処理班の練習日だったか。最近の練習は力が入ってるのぉ～」

窓の外を見て歩く大柄の老人がそう言うと、その後ろを歩く黒い学生服の少年が答えた。

「そうですね～、親分」

女中に案内されて、庭園の見渡せる廊下を歩いていた一七五と黒童子は、その激しいアクションに感心していた。

そしてまもなくして一七五と黒童子の二人も、外を眺める三人が居る客間前の廊下に到着した。

「おう、油義に鍋中、今日はおそろいか」

一七五が、旧友の二人に元気な挨拶をした。その後ろで黒同士も礼儀正しく頭を下げる。

「一七五じゃねえか、こんな所に出てくるとは珍しいな」

普段は薄気味悪い狭間に引き篭もりがちな一七五に、鍋中が何気ない挨拶を返した。

「ああ、今日は人間界に用事があってな、ちょっと出てきたついでに寄ってみたんだ。ほれ、土産の笹団子だ、皆で食べようぜ」

一七五は片目の濁る顔をにっこりさせながら、手に有るビニール袋から笹団子の束を見せる。

「お、笹団子かいいね～」

「鍋中、お前団子食え、ワシは笹だけ食べるから」

「今はそれどころじゃない！」

外の状況を考えずに、のん気に話す一七五と鍋中に、油儀が真剣な表情で怒鳴りつけた。

「ん、何かあったのか？」

一七五が油儀の怒鳴り声に、間の抜けた表情で質問した。

「春婆怒が、ここに攻めてきたのだ！」

そう言って庭園に出来た水の壁の向こうで戦っている者達を指差す油儀。

一七五と黒童子は、そう言われて水の向こうの白い怪人に目を凝らす。

「あれが、春婆怒？」

そう言ったのは、一七五の後ろに居た黒い学生服の少年だった。

一七五達二人は、つい先ほどコンビニでバイトをしている使い手に会ってきたばかりだ。

その後、一七五達は次元の狭間を通って、ここまでやって来た。

次元の狭間とは、直線的な空間のトンネル。場所から場所へとワープに近い移動が出来る術である。

一七五は、そのような空間湾曲や空間操作術が得意な妖怪であった。

もしもあそこで戦っているのが春婆怒だと言うのなら、少々無理があるのではと一七五一家の二人は思っていた。

「なるほど、春婆怒だと思って訓練してるんだな、感心感心」

一七五が、自分で納得できる回答を想像して述べる。

「ちがう、あれが本物の春婆怒だ！」

怒鳴る油儀の様子を見ていた黒童子が、キョトンとした表情で話し出す。

「油儀会長、僕、春婆怒を見た事有るけど、もっと黒と緑が多い姿だったよ……。あれは春婆怒じゃあ無いですよ」

水の壁の向うに居る白いシルエットを見て黒童子がそう言う。

「「「えっ、本当！」」」

油儀、鍋中、静香の三人が、黒童子を見ながら声を揃えて驚きの声を上げた。

「本当です、間違いありませんよ」

黒童子の台詞の後に、三人は顔を合わせて呆然としていた。

「じゃあ、あの九十九神は……、だれ？」

静香が首をかしげる。

そして客間前の廊下に集まった全員が、外で戦っている白い怪人に、視線を合わせた。

「何者だぁ～……、あのバカは……？」

鍋中の言葉に、回答できる者は居なかった。

<　スケルトン・4　>

白い怪人は、天野太陽に追いかけられ逃げ惑う。

「にょほほほ～～ん、まてまて～」

灼熱を放ちながら炎の翼で飛び回る天野太陽。その翼が、庭園の芝生や植木を無残に焼き尽くしていく。

「畜生！　何だよ、あの女は！　白雲よぉ、何とかしてくれ！」

「此処は、わっちに頼るでないでありんす！」

男女の声で叫ぶ白い怪人は、ただ只管に火の手が上がる庭園内を走り続けた。

「あそこに隠れるでありんす！」

白雲太夫の声と共に見えてきたのは、庭園のほぼ中央にある大きな岩。

それに隠れて盾にしようと大岩を背にした白い怪人は、灼熱から身を隠すように体を竦めた。

「隠れても無駄なのさ、炙り殺してあげるんだから～」

大岩の影に隠れた白い怪人に、日照り神が炎の翼を煽り、業火の如く焦がした風を吹き当てる。

「畜生……」

そう愚痴る白い怪人が隠れる大岩を、日照り神が空中から回りこむ様に追いかける。

「僕から隠れても無駄なのさ」

「あち、あちあち！」

白い怪人が岩を中心に逃げると、二人は巨大な岩を中心に右へ左へと動き回って、子供のように追いかけっこを繰り広げた。

庭園の見える屋敷の廊下で、その二人の様子を見ていた老いた妖怪達。

「おい……、油儀……、あの岩、もしかして……」

「ああ、そのもしかじゃ……」

青ざめた顔で質問する鍋中に、問われた油儀の顔も青ざめながら答えた。

庭に在る大岩。高さは約五メートル弱、直径約三メートルの卵型。

注連縄が巻かれ、何やら御経の様な文字が幾つも掘り込まれていた。

そして何枚もの御札が貼られており、日照り神の熱風で焦げ付きながら煽られている。

その大岩を見ながら、油儀、鍋中、一七五の三人は、生唾を飲む。

その様子を蓋口静香と黒童子の二人が何事かと見ていた。

油儀邸宅、妖怪連合虎野町支部本部、妖怪のお茶飲み場であるこの敷地に、そんな仰々しい物があれば大体が決まっている。

「あの大岩には、あいつが封印されているんだよな……」

「ああ、そうじゃ……、そのもしかしてじゃ」

そう、お約束のように、あの大岩にはヤバイ物が封印されている。

若い二人の妖怪は、年老いた三人の妖怪の表情から、それを感じ取った。

「もぉ～、ちょこまかと逃げるんじゃあないのさ！」

大岩を盾に日照り神の攻撃をやり過ごそうとしている白い怪人の左手に、無数の小魚が飛んでくる。

その小魚が集結すると、見る見るうちに着物姿の長髪男性の姿に、無常水越斉の姿へと変わっていった。

その手には、鞘の無い日本刀を持ち、俯き加減の顔は冷めた感じの色男。

水越斎は、無表情のまま白い怪人の左側を塞いだ。

「むむ！」

白い怪人は、すぐさま反対側を振り向き逃走を繰り返そうとした。

「おっと、こっちもダメですよ」

しかし、右手には猫田兄弟が姿を現し行く手に立ちふさがった。左右の逃げ道を塞がれる。

「うは、やべ～……」

日照り神の灼熱攻撃で流した汗に混ぜながら、白い怪人は左右を塞がれ髑髏の仮面の下で冷や汗を更に流した。これはピンチであると。

「わっちらは、囲まれたでありんす……」

白い怪人が背にした大岩に張られた御札が灼熱を浴びて、一枚、また一枚と燃え上がっていく。

その光景を見ながら、上空で太陽の様に燃え上がる日照り神が、無邪気な表情で笑っていた。

「丸焦げどころかさ、消し墨にしてあげるんだから！」

燃え盛る翼を持ったポニーテールの少女の笑顔が、一段と凶悪な微笑みに変わると、背中の羽が更に激しく大きく燃え上がった。

日照り神は、炎の翼だけではなく、両手を大きく広げると、自分の頭上に火球を作り始める。

「僕のスペシャルアタックなのさ、たっぷりその身で味わうと良いのさ！」

日照り神が作り出す火球は巨大な物に成長していく。その直径は二メートル近く。それはまさに太陽。

もしこの巨大な火球を白い怪人に叩き落せば、間違い無く被害は大岩にまで達するであろう。

「おいおいおい、あいつ何していやがるんだ……」

鍋中が、日照り神の作り出す巨大火球を見て拳を握った。

客間の者達は、水の壁越しに黙って見ているしかなかった。止めたくても目の前に出来た水越斎の水の壁を越えられない。

油儀は、此処で八尾弦徳を引き止める為に作られた壁の存在を悔やんでいた。

「会長……、天野さんのあの術なら、間違いなく封印岩ごと破壊しちゃいますよね……」

「言うな、蓋口君……」

秘書の言葉に油儀は、大きな頭を両手で抱えて俯いてしまう。

「にょほほほほ～～、燃えつきればいいのさ、春婆怒！！」

日照り神の完成した術。その巨大火球を白い怪人に投げつける。

未だ敵が春婆怒と思いつつ。

「ビッグサン・ストライク！」

巨大な火球が、彼女の頭上から地上へと落とされた。

「太夫！」

「承知でありんす！」

使い手の合図で白い怪人は、体を煙に変えて空中に逃げる。

白い怪人の行く手を阻んでいた猫田兄弟も、天野太陽の攻撃を見て素早く退避した。

「虎二、俺らも巻き込まれる、逃げるぞ！」

「日照り神のヤツ、まだあいつが春婆怒だと思ってるんだな……」

逃げる虎二が、天野太陽に対して呆れた表情を作っていた。

火球の爆破範囲から逃げ出す猫田兄弟と同時に、水越斉も複数の小魚の姿に変化して逃げていく。

そして誰も居なくなった地上に火球が激突すると、巨大な火柱を立てて爆発した。その爆炎に地が揺れる。

「あ～あぁ……、やっちまったな、あのバカ……」

鍋中が、頭痛がするのか眉間を指で摘んだ。

火柱の根元に見える大岩のシルエットから、注連縄が燃え落ちていくのが見て取れた。

「やっぱり、今ので封印が解けるんでしょうか……？」

「解けなかったら、逆にしらけますよね～。ふご！」

静香の言葉に、状況を茶化した黒童子。その頭を目掛けて一七五の拳骨が落ちる。

一七五から顔を逸らした黒童子は、尚も悪戯ぽく舌を出していた。

「何て事をしてくれるんだ、日照り神の奴め……」

火柱が治まり黒焦げになった大岩が姿を現す。

大岩を飾っていた注連縄も複数の御札も、全てが焼け落ちていた。

そして大岩からドス黒い妖気が噴出して、辺りの空気を灼熱から別の物に染め変えていく。

「何だ……あれ」

少し離れた場所から見ていた虎二が、その妖気に言葉を漏らす。

黒い妖気。その感じは、やたらと不快な物であった。

虎二だけではなく、隣にいた兄の龍信の顔も、その不快な妖気に真剣な眼差しを向けていた。

空中で日照り神が「……なにさ?」と言いながら大岩から出る黒い妖気をキョトンと見詰めていた。

だが、彼女の脳裏には、自分が悪い事をしたと言う認識は、これっぽっちも無い様子だった。

そして大岩にビキビキと音を立てて一本の亀裂が走る。

その亀裂は、どんどん大きく深く伸びていく。

「解けちゃいますね、封印……」

そう言う黒童子は、何が出てくるのか期待した顔をしていた。だが、客間に残る他のメンバーは、額に汗を浮かべている。

老いた三人の妖怪は、あの大岩に、何が封印されているのかを知っていた。

「この大岩、何か封印してあるぜ、兄貴」

後退りを始めた兄に虎二が問う。

「ああ、そうなんだよ……」

そう答えながら龍信は、更に安全な後方に下がっていく。その足取りが、少しずつ速くなっていくのに虎二は気付いた。

龍信もまた、この亀裂の入った大岩に何が封じられているか知っていた。

その正体を、随分昔に鍋中から聞いたことを思い出した龍信は、足取りを更に速くして後退していく。

「何が出てくるのさ?」

空中を飛び続ける彼女は、大岩の中身を知らずに期待しているようだ。

日照り神がそう言った瞬間、大岩が、亀裂から真っ二つに割れる。

音を立てて左右に倒れた大岩。その真ん中に渦巻く暗黒で出来た黄泉への入り口。

割れた大岩の口から奇怪な音が響き渡る。それはまるで死者の叫びや悲鳴にも聞こえた。とても気分の良いものではなかった。

渦巻く暗黒が、周りの空気を吸い込み始めた。

「な、何さ!」

天野太陽が火を付けた草木の炎が、渦巻く暗黒に向かって靡いていた。

ある程度の空気を吸い込み腹がいっぱいになったかの様に、黒い渦の動きが止まる。

「で、出てくるぞ……」

油儀が、割れた大岩の中から現れた暗黒を睨みながら言った。

次の瞬間、暗黒の渦から邪悪な怨霊達の魂が黒い煙となって吹き出た。

それは、まるで冥界の門が開いたかの様だった。

「がしゃがしゃがしゃ～～～～ん！」

そう叫びながら大岩の中から出てきた物は、巨大な骸骨の姿へと変わっていく。

肉も皮も無い、骨だけの巨人。

入ってきた大岩よりも大きく、その巨体は十メートル近くあるだろうか。

皆が、その巨大な骸骨を見上げた。

「出やがったな、ガシャドクロ……」

巨大な髑髏の妖怪を見て、鍋中がそう呼んだ。

<　スケルトン・5　>（前書き）

ガシャドクロの声
小林清志

<　スケルトン・5　>

大岩から出てきた骸骨の巨人。

その割れた大岩から、更に涎のような透明の液体が溢れ出る。

それは、まるでスライムの如くぶよぶよと揺れると、巨大な骸骨の足から上へと登り始めた。

真っ白な骨に巻き付く透明な液体。骸骨の体に見る見るうちに透明な肉が付き始める。

水やガラスやクリスタルと言うよりも、ジェルのような肉。

それが骸骨の体に肉付いていくと、ガシャドクロが完成体へと近づいて行くのが、周りで見ている者達にも理解できた。

「何だよ、あれは……」

変化を続ける巨大な骸骨を見上げた虎二が、思わず口からそう言葉を漏らした。

そして、ガシャドクロの頭蓋骨のみが、髑髏と表現するよりもマネキンの頭に似ていた。

「がしゃがしゃがしゃ～ん」

「わぁ～……、無駄に大きいの出てきた～……」

ガシャドクロの前を浮遊していた日照り神が、ホニーテールの赤い髪を揺らしながら可愛い顔で呆気に取られていた。

その日照り神を、マネキンのような顔が首だけを向けて見つめた。

そして、ゆっくりと巨大な腕を振りかぶる。

周りの熱い空気が、その動きで揺れるのを日照り神は炎の翼で感じ取った。

「あ……、何かやばそう……僕」

危機感。それに天野太陽が気付いた時には遅かった。ガシャドクロの振り上げられた平手が、日照り神の脳天に振り下ろされる。

「ひぃーー！」

それはまるで、蠅を叩き落す様だった。

ポニーテールの彼女は、炎の翼と小柄な体を丸めて身構えた。

だが、それは無駄なガード。その身で巨大な一撃をもろに喰らう。

巨大な張り手を喰らった日照り神は、斜めに飛んでいくと勢い良く地面に叩きつけられる。

そして、土埃を上げて庭園の芝生に穴を開けて減り込む少女。まるで爆弾が爆発したかの様に見えた。その土埃が彼女の安否を包み隠す。

「なんです、あれ？」

黒童子が、かつて三本柱と呼ばれた三匹の妖怪に質問をした。

「あれは、ガシャドクロ。その昔、我々三本柱と主の九尾双葉様とで封印した妖怪だ……」

鍋中がそう答えると、油儀が更に続いて話し始める。

「ワシがここに屋敷を構えたのも、あのガシャドクロが封印された大岩を、監視しながら管理するためじゃ」

「さて、あいつをどうするよ？」

そう言いながら一七五が、手にした杖でガシャドクロを指差す。

日照り神が墜落した辺りに舞い上がっていた土埃が収まると、小さなクレーターから薄汚れた二本の生足だけが、力なく横たわり見えていた。

それを見ていた油儀が、重いしゃべりで口を開く。

「この館から出す訳にはいくまい……」

「当然だ、あんなのを外に出したら一大事だ」

「そうだな、あいつは人間を見つけると、直ぐにひねり殺す悪い癖があるからのぉ～」

そう話している最中。カシャドクロは、一人のＳＰを捕まえて、

雑巾でも絞るようにひねり殺す。そして、その滴る生き血を啜り始めた。

「あ～、本当だ……」

黒童子がそう言うと、その横でこれは酷いと言った表情で静香が顔を逸らす。

ガシャドクロは手にある人間のミンチを抛り投げると、再び拳を振り被りながら歩き出す。

狙いは、水越斎が作り出した水の壁。

「こっちに来た……」

水の壁の側に居た八尾が、ガシャドクロの接近を見て、壁から距離を取る。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！」

ただ、力任せに振るわれたパンチ。巨漢故に、その迫力は想像以上に見えた。

そして、ガシャドクロの拳が水の壁に打ち込まれると、水の壁はたった一発で砕け散る。

「うわ！」

水の壁のそばに居た八尾が、飛び散る水飛沫に声を上げた。

飛び散った水が屋敷の敷地内にスコールの如く降ってくる。

その豪雨は燃えていた炎を全て消し去ってしまうと同時に、荒れた庭園内を激しく叩き地鳴りを響かせた。

そしてスコールが治まると、火の手が上がっていた庭園は景色を、今度は洪水の後の様に水浸しに替わっていた。

「ワシの庭園が……」

あちらこちらに大きな水溜りが出来ていた。それを見て油儀が肩を落とす。

その無残な庭園に立ち尽くす巨大な妖怪。皆が皆、そのガシャドクロを見上げていた。

「先ずは、あいつをこの敷地内から出さないようにしないといかんかのぉ……」

気を取り戻した油儀が、ガシャドクロを睨みつけながらそう言うと、彼の周りから七人の僧侶がどこからとも無く現れる。

「わぁ！、どっから沸いたの！？」

突如現れた七人の僧侶達に黒童子が驚き目を丸くしていた。

「七人岬共よ、敷地を囲む様に結界を張ってまいれ！」

七人の僧侶は油儀の指示を聴くと、それぞれ敷地の別方向へと、人とは思えないスピードで走って行く。

「がしゃがしゃがしゃ～ん？」

ガシャドクロがそれを見つけて、一人の僧侶を追いかけた。

「ん～、仕方ねえ。俺が出るか」

そう様子を客間から見ていた一七五が、持っていた杖を黒童子に手渡すと庭園へと出て行った。

「ええ、本当ですか、親分！？」

杖を手渡れた黒童子は、驚きながら自分の親分を見送る。

一七五一家の中でも新参者の黒童子は、一七五が戦う姿を見たことがなかった。黒童子の顔は、驚きながらも期待に胸躍る表情だった。

建物から離れた一七五は、あちらこちらに出来た水溜りを気にも止めずに歩いていく。

そして、その姿を後方から見送っていた者達に、一七五の老人とは思えない大きな背中から亀裂が入っていくのが見えた。

背中に出来た縦一本の亀裂。

その亀裂は、服が破けて出来た物ではなく、空間に出来た亀裂だった。

亀裂からは、黄色い光が眩しく漏れ出ていた。

そしてメキメキと音を立てながら亀裂が開き、そこから何かが出てくる。

その光景は、まるで昆虫が脱皮をする姿に似ていた。

「うわわわ～」

黒童子が親分の真の姿を見て唖然と驚く。

大柄の老人の背中から生え出たそれは、たちまちに巨大化していった。

その大きさ１０メートルは有るだろうか。

カシャドクロとほとんど大きさは変わらない巨大な人型であった。

全身緑色、体の形は人間の物であったが、頭部は殿様バッタで背中には昆虫のような羽が生えていた。

まさに巨大なバッタ男。

しかし、片目には派手な傷があり、左手は手首から先が無い。

これが一七五一家を率いる男の真の姿。一七五の正体。

「うっしゃ～、ガシャドクロ、相手はワシじゃ！」

一七五が、右手の指を、握ったり開いたりを繰り返しながら大声を出して威嚇した。

自分を呼び止める声に、ガシャドクロは僧侶を追うのを止めて振り返った。

其処に居たのは巨大化した一七五。

「がしゃがしゃがしゃ～ん」

そして振り返ったガシャドクロは、巨大な正体を現した一七五に襲いかかる。

「かかってこんかい！」

一七五が気合を入れる為の声を出しながら、自分の太股に平手打ちを一発入れた。パチンと乾いた音が鳴り響く。

一方、地鳴りを立てながら走り出したガシャドクロは、巨漢の割には素早い動きをしていた。

二人の巨大な妖怪達は、あっという間に互いの間合いへと入る。

ガシャドクロが、ジェル状の肉ごと握り締めた拳を振りかぶった。

そしてマネキンの如く無表情な顔でガシャドクロは、ダイナミックなストレートパンチを放つ。

ガシャドクロの豪拳が、一七五のバッタ顔を狙う。

しかし一七五は身を屈めながらそれを避けると、ガシャドクロのどてっ腹に肩からつっこむ。

アメフトの選手並の強烈なタックル。しかもカウンター。

ガシャドクロの透明なジェルのような肉が波打つ。そしてカシャドクロの巨体は、一七五の一撃に飛ばされて庭園をメチャクチャにしながら転倒してゴロゴロと転がっていった。

「よっしゃ、どうでい！」

勝ち誇った顔をする一七五は、右手を握り締めガッツポーズを取った。

「よし、今のうちだ！。七人岬よ、早く結界を張ってしまえ」

その光景を見ていた油儀が、七人岬達に念で指示を飛ばす。

各自、敷地内の隅々に移動した七人岬達。

屋根の上、壁の上、木の上、岩の上へと各自でポジションを決めると、真っ直ぐに背筋を伸ばして何やら御経の様な術を唱え始める。

そんな中、ガシャドクロがゆらゆらと立ち上がった。

「これだけの敷地に結界を張るのに時間が掛かる。ましてやガシャドクロのパワーに耐えられる物となれば尚の事……。一七五よ、もう暫く時間稼ぎを頼んだぞ……」

そう言いながら油儀も何やら両手で印を組んでいた。

<　スケルトン・6　>

油義邸の敷地内が、巨人達の動きで激しく揺れていた。

焼け焦げた植木は幾つも薙ぎ倒され、積み重ねられていた石灯篭は全て崩れていた。あちらこちらに大きな水溜りが出来て、芝生は巨人達に蹴られてめくれ上がっている。

そこは、爆撃された最前線の戦場のように見えた。

「がしゃがしゃがしゃ～ん……」

ヨロヨロと立ち上がったガシャドクロに、一七五が追い討ちと言わんばかりに襲い掛かる。

一七五の走る蹴り足が、庭園内を激しく揺らす。

「うぅらぁぁぁぁぁあああ！」

ガシャドクロに走り寄った一七五は、四股を踏むように大きく足を上げると、そのまま足の裏でマネキンの顔面を蹴り飛ばそう狙う。

一七五の八九三キック。

極道の一七五には、ぴったりな蹴り技であった。

巨人戦争が繰り広げられている庭園に、フライパンの裏側を叩いたような音が響く。

ガシャドクロは、腕を顔の前で交差させながら一七五の蹴りを受け止めていた。

しかし、その体重の乗った重い蹴りでガシャドクロのバランスを崩すと、今度は一七五のボディーブローがガシャドクロの脇腹にめりこんだ。

ガシャドクロの腹部で透明なジェルが再び波打つ。そして、一七五の攻撃に、ガシャドクロが片膝をついた。

攻撃は、効いている様だ。

「まだまだまだ！」

更に一七五の一つしかない拳が振り上げられた。そして、まるでテーブルを叩く様に振り下ろされる一七五の拳。

その拳がガシャドクロの頭部を何度も連続して叩いた。

滅多打ちだった。

尚も一七五は叩き続けた。

それでもガシャドクロは、片膝をついた状態から倒れなかった。

「しぶとい奴じゃ！」

一七五が右手で、ガシャドクロのマネキン頭を鷲掴みにすると、片足を後方に振りかぶった。

「これでも、喰らいやがれ！」

蓄えられた勢いと共に一七五の膝が、カジャドクロの顎を下から蹴り上げた。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！」

ジェル状の肉を揺らしながらガシャドクロの体が、一七五の膝蹴りの衝撃で起き上がる。

反り返ったガシャドクロの上半身。その喉仏を狙って一七五は、手首の無い左腕でラリアットを放った。

直撃だった。揺らぐガシャドクロ。しかし倒れなかった。

そこに一七五が右拳のフックを放つ。

「いい加減、くたばりやがれ！」

しかし、一七五の拳が空を切る。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！」

今度は一七五のパンチをガシャドクロが避けると、その手首を素早く両手で捕まえた。

「ぬっ！」

凄い力だった。

掴んだ手を、ガシャドクロが引き寄せる。

一七五の手首を掴んでいたガシャドクロの体が、一瞬で一七五の懐に入ってきた。

ガシャドクロの背中が、一七五の胸に押し付けられる。

次の瞬間には、一七五の体が、ガシャドクロの背中に乗っていた。

一七五の両足が、大地から離れた。

ガシャドクロの一本背負い投げだ。

「何！」

ガシャドクロの腰で跳ね上げられた一七五の体が空に舞う。

１０メートルの巨人同士で見せる投げ技は、とてもダイナミックだった。

仲間が投げられたにも関わらず、見ている者達が「おぉ～～」と声を上げていた。

ガシャドクロの背負い投げは、空中に飛ぶ一七五の手を放していた。

油義邸全体に地響きが轟く。

一七五が一本背負いで頭から地面に投げ落とされると、バッタ顔の表情を歪める。

水溜りの水が跳ね上がり、屋敷の屋根の瓦がずれる音がした。

柔道の本質は、相手を背中から落としてこそ一本である。

柔道とは、相手の体をコントロールする事で勝敗を決めるスポーツ。

その為、一本背負いなどの投げ技は、投げた後に引き手を引いて、相手に受身を取らせるように投げる。それが、コントロール。

しかし、今は実戦。

それでは受身を取らせてしまう為、実戦でのダメージのやり取りとしては不十分になってしまう。

ガシャドクロは、ダメージを狙い、投げの最中に引き手を放したのである。

まさにそれは、ダメージを生み出す為に、投げ捨てたのである。

「くはぁぁぁ……」

頭から投げ落とされた一七五。だが、よろめきながらも直ぐに立ち上がった。

しかし、目の前の景色がドロドロに歪んで見えた。敵も、景色も、全てがグチャグチャに見えた。

その景色に一七五は、自分の眼球が回っていることに気付くと、

自分の頭を横からコンコンと叩いた。

そこにガシャドクロが組み付く。

一七五は、また右手首を捕まえられた。そして、もう片方の手が一七五の首に絡みついてくる。

二つの巨漢が、胸と胸を少しずらして重なり合う。

まるでチークダンスを踊る男女のようにも見えた。

そして、ガシャドクロの右脚が、一七五の右脚を外から絡め取る。

今度は、大外刈り。

「うぉ！」

二人の体が一七五の後方に、バタンとドミノの様に倒れこむ。

一七五の背中が地面に叩きつけられると、再び振動が屋敷を揺らす。

一つ一つの技が、豪快に見えた。

「ぐぅはっ……！」

巨人二人分の体重が乗って後方に倒れた一七五は、後頭部を打った上に強く胸を圧迫されて苦しい声を漏らした。

「柔道……！」

一七五が投げられる様子を見ていた黒童子がそう言うと、近くに居た油義が解説を始めた。

「ガシャドクロは、食らった人間の技を使う。先ほど殺されたＳＰの技を使っているのじゃろ」

巨人対決が始まる前に、ガシャドクロに捻り殺され生き血を啜られた黒服。彼の技をガシャドクロは、血液の中に潜む記憶からコピーして、一七五相手に使用しているのだ。

「舐めやがって！！」

苦しそうにバッタ顔を歪める一七五。二発の投げで受けたダメージに肩で息を切らしていた。

そして一七五が立ち上がろうと片膝をついたところに、またしてもガシャドクロが掴み掛かる。

「ぐはぁ……！」

一七五の首に、ガシャドクロのジェル状の腕が巻き付くと、力任せに締め上げ始めた。

片膝立ちの一七五に、ガシャドクロがフロントネックロックを決めるのだ。喉にジェルの腕が食い込んでくる。

「はぁぁ……！」

一七五の切なそうな声が、ガシャドクロの脇の下から聞こえてき

た。

ガシャドクロのジェルのような肉が喉を圧迫して、一七五の首を締め上げていく。

そのフロントネッククロックは、完全にチョークぎみに決まっていた。

「親分、頑張ってーー！」

黒童子の声援が飛ぶが、一七五の耳に届いているかは不明であった。

「負けんな、親分！！」

それでも黒童子は、自分のボスの勝利を願い、そして信じて熱い声援を繰り返す。

「うぅぅりぃぃぃぁぁぁぁ！」

一七五が意地を見せる。

首を絞められたまま、ガシャドクロの体を力任せに持ち上げた。

「おお、さすが力の一七五！」

それを見た徳の油儀が褒め称える。

だが、ガシャドクロは、決まりかけていた技をあっさりと解いてしまう。

そして技を解いたガシャドクロの腕が、一七五の股座に滑り込むと、もう片方の手が一七五の首を掴み引き寄せた。

「この投げは！」

ガシャドクロの肩に腹這いで乗る形になった一七五が、本日三度目の投げ技を食らった。

「飛行機投げ！？」

頭部から放り投げられた一七五は、そう言いながらすぐさま立ち上がった。

しかし、一七五の視界には、ガシャドクロの姿は無かった。

慌てて一七五が左右に首を振って骸骨巨人の姿を探した。しかし見つからない。

ゆっくり……。

気付かれないように……。

一七五の背後から……。

腰に手が回された。

「後ろか！」

一七五が気付いた時には、ガシャドクロの両手が、臍の辺りで、

クラッチをしっかり組んでいた。

そのクラッチに、一七五が手を伸ばし外そうとしたが、びくともしなかった。

「あの技は……もしかして！」

離れた所で二人の戦いを見ていた黒童子が、これから行われると思われる技の名前を口走る。

「ジャーマンスープレックス！？」

一七五の体が浮いた。

一七五の体が背後からガシャドクロに持ち上げられる。

自慢の巨体が持ち上げられると、一七五は「まずい！」と心の中で叫んでいた。

「こやつ、柔道ではない！。レスリングか！！」

テレビのプロレス中継で、何度も見られる有名な技。それが、レアな巨人対決で実行される。

ガシャドクロの体がブリッチをして後方に頭を打ち付けられると、続いて一七五の後頭部が地面に叩き落された。

「ぐはぁ……」

激突で揺れた視界に入ってきたものは、自分の股の間から見えた

青い空。一七五の意識が薄らぐ。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！」

ガシャドクロの体が、ブリッチした状態からクルリと回り起き上がると、更に一七五の体を引き起こす。

「もしかして！？」

ガシャドクロが引き起こした一七五を、またジャーマンで投げる。

「そんな、ダブルジャーマンかよ！」

二度目の原爆固め。二人の巨人の体か再びアーチを描く。

一七五の後頭部が再びジャーマンで投げ落とされ地面に激突すると、それを見ていた黒童子が引きつった表情を見せた。

「ぁぁ……」

再び一七五の視界に入ってきた青い空が、薄暗い雨雲に包まれていく。一七五には、そう見えた。

この連続の投げが、完全に一七五の意識を消し去っていく。

一七五の視界が、真っ黒な雨雲のような暗闇に包まれ変わっていくと、その緑色の巨体は、ピクリとも動かなくなった。

「お……親分が負けた……」

期待していたストーリーとは違った結末に、黒童子が大きく肩を落とした。

その時である。

七人岬達が唱えていた術が発動を始めた。

油義邸の大きな敷地を虹色の光の壁が、ドーム型に包み始める。

<　スケルトン・7　>

油儀低に進むように繋がる一本道。

真っ直ぐな二車線の道は、両脇がのどかな田園風景に挟まれ、道の左側に並ぶ電柱が遠くの油義邸まで電線を伸ばしていた。

のどかな田園から吹く風が、スズメの止っている電線を僅かに揺らしていた。

その道を、妖力共有したタケシと春婆怒が、パワーアップしたバイクと共に姿を変えて走っていく。

モンスターマシーンのエンジン音が、魔獣の雄叫びのように響き、電線で羽を休めていたスズメ達を怯えさせた。

スズメ達がエンジン音に怯えて飛び立つと同時に、その下の道をタケシのバイクが駆け抜けていく。

「おい、春婆怒、あれは何だ?」

恐ろしいスピードで走り向けるバイクの前方に見えてきた虹色の壁。

それは、段々とドーム型に油義邸を包んでいく。

「むむ、あれは結界じゃな。我々の目的の九十九神は、あの中じゃ。タケシや急げ、結界が閉じるぞよ!」

春婆怒の言うとおり、虹色の結界は完成を目指すように下から上へと進み、あとは天井部分を閉じるのみだった。

「行くぞ！」

タケシは春婆怒の言葉にアクセルを限界まで捻る。

するとバイクのマフラーから爆音と共に炎が飛び出し、バイクは前輪を浮かせたまま結界の壁へと突っ込んでいった。

「上から入るぞ！」

タケシは、ドーム型に閉じていく結界の壁をバイクで駆け上ると、天井部分にある穴から、東京ドーム三個分もある敷地内に飛び込んでいく。

「広いな。春婆怒、九十九神は何処だ？」

「あっちじゃ」

春婆怒がそう答えると、タケシの乗ったモンスターバイクは、勝手にハンドルの向きを変えて走り出す。

「なんだ、あれ……」

ハンドルの向きを変えたタケシの視界に入ってきたのは、巨大なガシャドクロの姿と、同じサイズのバッタ男の姿であった。

まだ、ガシャドクロと一七五までの距離は離れていたが、その巨大な姿は遠くからもはっきりと確認できた。

緑色のバッタ男が、骸骨の巨人に地面から引き起こされて、二発目のジャーマンスープレックスをお見舞いされる瞬間を目撃したタケシが、その地震のような振動に乗っていたバイクのハンドルを揺らしながら走行を止めた。

「……豪快な事をやってるな」

あまりのインパクト溢れる光景にタケシも驚いていた。

「あれは、ガシャドクロじゃのう」

「ふざけた大きさの九十九神だな！」

「否……あれは、九十九神ではあらぬ～……」

一方、同じ敷地内。

一七五がガシャドクロに敗れ去り、その他の者達は巨大なガシャドクロを見上げていた。

「ならば私が……」

そう言ってガシャドクロの前へと進んでいく八尾弦徳。手にした日本刀の鞘を強く握り締めた。

「八尾君……」

八尾の後姿を心配そうに見送る蓋口静香と黒童子。今度ばかりは、油儀も止める事は無かった。

その横に居た鍋中が、小刻みに頭を揺らしている油義に声を掛けた。

「おい、油儀」

「ああ、承知した。こんな時の為の準備は出来ておる」

油儀は、旧友が何を言いたいのか悟ると、横も見ずにそう答えた。

「じゃあ、とっとと準備してきあがれ」

「黙れ鍋中、いま神通力で封印石を移動させている最中じゃ！」

「あ、そうなのか」

その言葉どおり油義は、先程からずっと両手で何やら印を組んでいた。

「貴様こそ若様に助太刀してきなさい」

「ああ、分かってるよ」

客間で自分は動く事無く何かを呼び寄せる術を唱える油義に言われ、トレンチコートの鍋中も庭園に出て行く。

「さて、久々に体を動かすか」

左手で肩の筋肉を揉みながら、鍋中は準備運動をするように右腕を大きく何度も回した。

「虎二、我々も行くぞ」

「ああ」

今まで植木の陰に隠れていた猫田兄弟の龍信と虎二。

自分の後ろに居る弟に声を掛けた龍信は、そのまま八尾の側を目指して走り出すと、弟の虎二も兄に続いた。

「ん？」

龍信の後ろを走っていた虎二の足が止まると、何かに気付いたのか後ろを振り返った。

何に気付いたのか、庭園の遥か遠くを見詰める虎二。

しかし、弟が静止したのに龍信は気付く事無く先へと走っていった。

「この気配……、間違いねえ……春婆怒か！」

油義邸に進入してきた春婆怒達の気配に一人気付く虎二は、兄の進む方向とは別の方へと走りだす。

「くっくっくっ、ここで会ったが百年目！。春婆怒の首は俺が頂く！」

抜け駆けとも言える虎二の行動。

そんな虎二は、春婆怒の気配を目指して突き進む。

「八尾。今、油儀が封印石の準備をしていやがる。それまで我らで足止めするぞ」

ガシャドクロを目指して歩く八尾に、トレンチコートを靡かせた鍋中が追いつくとそう言った。

「あの化け物、封印しないといけないぐらい強敵なのですか？」

自分の横に追いついた狸面の中年を見る八尾。封印石と言う言葉を聞いた八尾は、倒すことが出来ないのかと言う意味で鍋中に訊いたのだ。

妖怪の戦いでは、封印と言う戦術は、倒せない相手を封じて、引き分けに持っていく行為に近い。

「ああ、昔も奥方様と我ら三本柱で戦ったが、滅ぼす事が出来ずに封印と言う手段を取ったんだ……」

「何故に？」

二人は並びながら歩き、地面にできた水溜りで跳ねを飛ばしながら会話を続ける。

「あのカシャドクロは怨念の塊。戦場で死んだ兵士の怨み辛みで出来ていやがる。その数は千や二千じゃあねえんだ」

「ほぼ無限のエネルギーを元に動いているのですね……」

「ああ、そう言うことだ。滅ぼすより封印した方が早いってわけよ」

鍋中が眉間に皺を寄せながら更に言う

「その昔よ、バカな女の妖術士が作り上げた術でな、一種のボーンゴーレムってやつだ」

鍋中のトレンチコートが風に靡くと、まるで其の風に乗ってきたかのように龍信が姿を現す。

「善知烏安方忠義伝の滝夜叉姫ですね」

「ああ、そんな名前だったかな」

鍋中の横に現れた龍信が、小難しい単語を口にすると、鍋中は「どうでもいい」と言った感じで答えた。

「まあいいです、とりあえず斬ります」

八尾も鍋中と同意見の様子だ。そして手に有る刀をガチャリと鳴らす。

「元気だな、お前は……」

チラリと八尾の顔をある鍋中の表情は、何時もながら不機嫌そうだった。

そんな会話をしていた三人は、ガシャドクロの前に立つ。

その八尾の側にある水溜りから、無常水越斎がゆっくりと浮き上がり姿を見せた。まるで水溜りから生えて来たように見えたが、他の三人は驚いた様子すら見せなかった。

「うし、皆集まったか……」

集まって来た仲間を見て鍋中が呟く。

四人が横一列に並んで、ガシャドクロを見上げていた。

「ん……？、一人居ないような」

八尾がそう言った瞬間、ガシャドクロが足を振り上げる。そして、四人を踏み潰すように狙う。

そして四人は、ガシャドクロの踏み付け攻撃を回避するがごとく、各自バラバラの方向へと散るように飛んでいった。

<挑む、虎二・前編>

タケシは、ガシャドクロを目指してモンスターバイクを走らせる。

辺りの景色は、焼け落ちた木々が幾つもあり、芝生は生皮を剥がされたように捲れあがっていた。

バイクを走らせるタケシには、まるで此処が戦場では無いのだろうかと錯覚させた。それだけ荒れ果てた景色である

「ん？」

その進行方向に、仁王立で立ち塞がる忍者の姿が目に入ってきた。

虎の刺繍が入ったスカジャンにGパン姿で、顔には黒い布を巻いていた。

その顔を隠した黒い布の余りが、首の後ろから風に煽られ靡いていた。

タケシの進行方向に、邪魔するように立ちふさがる忍者。

しかし、タケシはバイクのスピードを落とすどころか、アクセルを更に吹かす。

タケシは、完全に眼前の忍者を引き殺そうとしていた。

「舐めるな！」

自分を引き殺そうとしたバイクを、忍者は高くジャンプして飛び越える。そして、同時に上空からタケシを狙って手裏剣を投げ放った。

「どわ！」

タケシは真上から降ってきた手裏剣を避けたが、バランスを崩してバイクをスピンさせながら止めた。

「にゃろう！、危ねえじゃねえか！」

他人を引き殺そうとした人間の台詞ではない。しかし、虎二は、そんなタケシの台詞を無視して問答模様で引き続き襲い掛かる。

「これでも食らいやがれ！、必殺三十手裏剣！！」

虎二が革ジャンの懐に両手を入れると、両手いっぱいの手裏剣を取り出し一気に投げた。

一度に投げられた手裏剣の数が技の名前のとおり三十個あった。その手裏剣の数々が、逃げ場を無くすように扇型に広がり飛んでくる。

「！」

まるでショットガンの弾丸の如く隙間無く飛んでくる手裏剣攻撃だった。

タケシは其れを見て緑色の妖風を纏った上段廻し蹴りを放つ。

「派手な技を持ってるじゃあねえか！」

そして上段廻し蹴りの勢いで巻き起こった強風が、飛んでくる三十個の手裏剣を全てなぎ払うように打ち落とした。

タケシのたった一発の蹴りで、打ち落とされた複数の手裏剣が、近くの地面に突き刺さりながら散らばり落ちた。

だが、それに動じる事無く虎二が続いて飛びこんでくる。

その手の中には、暗器の熊手が握られていた。

両腕を左右に大きく広げるタケシ。その手には、緑色の妖気が集まっていた。

そのモーションを虎二は以前にも見たことがある。

「疾風猫だまし！」

タケシが両手に集めた緑風を、飛び掛ってくる虎二の前で叩き合わせた。

「同じ手が、何度も通じるかボケ！」

タケシの叩き合わせた両手の中で、緑色の妖風が弾け合うが、虎二は怯む事無く突き進む。

しかし……

「……に、見せかけた、合掌抜き手！」

タケシの拝む様に合わせられた両手が、そのまま虎二の胸に突き刺さる。

「ぐはっ！」

タケシの両手の指が虎二の胸にメリメリと音を立てて突き刺さると、虎二の体が後方に吹き飛ばされるように飛んだ。

否、虎二自身が、自ら後方に飛んだ様子だった。もしも、自ら飛ばなければ、胸に大きな風穴が開いていただろう。

「ちっ、こいつ、服の下に何か着こんでいやがるな」

「ぐほっ、ごほっ！」

虎二は、後方に飛ぶと芝生の上に倒れ、体をバタつかせながらのた打ち回る。

緊急回避で、できるだけダメージを逃がしたが、それでも傷は深いようだった。

丁度、合掌抜き手を喰らった胸元の辺りの服が破けて、黒い色の鎖帷子が見えていた。

それもダメージを減らしてくれた理由の一つである。

しかし、倒れこんでいる虎二に、タケシが追い討ちを掛けようとジャンプした。

その影が虎二に重なり、虎二はタケシの追撃に気付いた。

「そりゃ！」

タケシのジャンピングニードロップ。

「危ね！」

のた打ち回っていた虎二は、その追い討ちの膝を横に転がり必死に避けた。

すると急降下してきたタケシの片膝が芝生に突き刺さり、芝生に大砲の玉でも落ちたかの様な穴を開けた。

虎二は転がりながら立ち上がると、背中の忍者刀を抜いて、横一線に刀を振るう。

「おっと」

虎二の刀が、鋭くタケシの首を狙う。

しかしタケシは、その一撃を難なく避けると虎二の顔面を狙い体を反らしながら上段前蹴りを放った。

タケシの放った上段前蹴りを上半身をのけ反らせて回避した虎二が、片足で立っている状態のタケシの顔面めがけて忍者刀を突き立てる。

二人とも体を後ろに反らした常態だった。

体を反らせた上体からの虎二の反撃だったが、刀という武器によるリーチの追加が、その攻撃を可能にしていた。

「くっ！」

タケシの視線に真っ直ぐに迫る剣先。

タケシは虎二の刀での突きを、のけ反った体制から首だけを横に曲げて避ける。刀の先がタケシの耳の横を通り過ぎていくとタケシは、体制を崩して芝生の上に背中から転倒してしまう。

虎二にとって、チャンス到来だった。

「ひっほー！」

今度は虎二がジャンプして、倒れているタケシに襲い掛かる。

虎二は、空中で可憐に刀を回転させると、その刀を逆手に持ち替えた。そして倒れているタケシに急降下していく。

その攻撃をタケシは、横にゴロゴロと転がりながら避けると、忍者刀の剣先が狙いを外して芝生にズブリと深くまで突き刺さった。

「にゃろ！」

虎二は、悔しい声を溢しながら地面に突き刺さった刀を直ぐに引き抜く。そして、転がりながら避けたタケシを追って、尚も虎二が刀を突き立てた。

しかし、またタケシは転がりながら避け、虎二の刀が再び地面に

突き刺さる。

ゴロゴロ、ザク、ゴロゴロ、ザク、ゴロゴロ、ザク……。

これを二人が暫く繰り返した。

「しつこいぞ！」

転がっていたタケシが、今度は腹ばいでスピンしながら、地面スレスレの蹴りを放つ。

「うわ！」

虎二は、その蹴りに足を払われ転倒した。

ダメージを受けるような蹴りでは無かった。しかし、虎二が立ち上がると、既にタケシも立ち上がっていた。

立ち上がった二人が睨み合う。

それが、仕切り直しの合図として、二人は距離を取り合い睨み合う。

<挑む、虎二・中編>

タケシは両拳を一度高く上げると、ゆっくりと顔の前に降ろして構え直す。

虎二も刀を構えたまま首を回して、筋肉を解すと呼吸を整えた。

お互い、気分を入れ替えたようだ。

そしてまた、鋭い眼光で睨み合いを再開した。

二人の間で空気が激しくスパークしていた。

互いに怨み辛みが有る訳ではない。

しかし、始まってしまった闘争に心が踊り、胸の高まりを二人は抑えられずにいた。

虎二もまた、タケシ同様、戦うのが嫌いなほうではない。どちらかと言えば、血気盛んなほうである。

「あんた、結構面白いぜ！」

仮面の下でタケシが笑うが、その笑みは虎二には届いていなかった。

「ぬかせ、その首をちょん切ってやるぜ！」

虎二の目の前に居る九十九神。それを討ち取れば、虎二の名前が

一気に高まるだろう。

目の前の敵は、それ程に美味しい存在だった。

「行くぜ……」

今度はタケシから先に動いた。

タケシが一歩だけ前に出ると虎二は、刀を握る両手に力を込める。

「まあ、そう固くなるなよ」

そう言ってタケシは、片足を後方に軽く振りかぶると、その足の爪先で地面を蹴り、落ちていた小石の一つを蹴り飛ばした。

手の中に握りこめそうな程の小さな石だった。その小石がタケシの足元から虎二の顔面を目掛けて飛んでいく。

サッカー選手もびっくりな程に狙いは精確だった。

虎二は、飛んできた小石を斜めにした刀で弾く。そして、弾かれた小石が真上に打ち上げられ空へと飛んだ。

小石を蹴ったタケシは、その直後、虎二に向かって走り出していた。

二人の距離が縮まると、虎二の目の前に、打ち上げた小石が振ってきた。

「そらよ！」

その小石を虎二は、刀でタケシに抜けて打ち返す。

小石がタケシの顔面を目掛けて飛んできた。

虎二の腕もまた精確だった。

「おっと！」

タケシが首だけを曲げて、最初に自分が飛ばした筈の小石を避けた。

そこに刀を振りかぶった虎二が攻撃を仕掛けてきた。

タケシの頭に振り下ろされる忍者刀。

「真っ二つにしてやるぜ！」

「こいや！」

その時、このシチュエーションに春婆怒が気付く。

「タケシや、まさか！」

以前にも、二回程見たことがある状況。

「堂本流秘儀……！」

春婆怒の嫌な予感が的中しようとしていた。

「やはりかぇ！」

春婆怒がそう言った時、タケシは両手を広げて虎二の刀を待ち構える。

「真剣白歯取りのつもりか！」

虎二が「取れる物なら取って見ろ！」と言わんばかりに刀を振り下ろす。

春婆怒は呆れたのか、もう何も言わなかった。

虎二の刀がタケシの頭に迫ると、タケシが両手で挟み取ろうと狙いを定める。

ガキィーーーーン！

鋼が砕ける様な音が響いた。

「そんなバカな……」

声を出して驚いたのは虎二であった。

虎二が振り下ろした刀は、タケシの頭上で真っ二つに折れてしまっていた。

「堂本流秘儀、真剣白歯折！」

折れた虎二の刃は、キラキラと日の光を反射させながら近くの芝生に突き刺さった。

「この野郎、俺の刀を折りやがった……」

虎二が折られた刀を見ながら驚きの声を漏らしていた。

タケシの片手は掌打、もう片手は手刀。

掌打と手刀を僅かにずらして刀を受け止め、技の破壊力と梃子の原理を利用して、虎二の刀を挟み折ったのである。

理屈では分かるが、実際に出来るような技では無い。まさに神技の一つ。

信じられないと言った表情の虎二とは別に、タケシは小さなガッツポーズを取って喜んでいた。

「そんなバカな……」

「よし、三度目の正直で成功！」

「よいから二人とも戦いたもれ！」

思わず戦いを停止していた二人に、一人だけ冷静な春姿怒が激を飛ばす。

「おっと、そうだったな」

いち早くタケシが動いた。

タケシの上段前蹴りが、空気を貫きながら虎二の顎を、下から勢い良く蹴り上げた。

「ふごぉ！」

タケシの足の裏が虎二の顎を捕らえると、虎二の体が後方に大きく飛んでいった。

その光景は、かなり派手に見えた。

「ちっ、この感触……、また、あのディフェンスか！」

しかし虎二は、蹴られて飛んだのではなく、自分から後方に跳んだようだ。

以外にも虎二は、このダメージ軽減術を得意としている。

「あ、顎が……」

地面に着地した虎二は、蹴られた顎を片手で摩った。それでもダメージは有るようだ。

「ぺっ」

タケシは追撃をしなかった。それを見て虎二は、血の混ざった唾を地面に吐いた。

「テメー、必ずぶちのめして、この刀を弁償して貰うからな！」

そう言いながら虎二が、折れた刀をタケシに向けて投げつけた。

だが、タケシは、投げられた刀を拳で叩き落とす。

弾かれた刀がタケシの足元に落ちる。するとタケシは、膝を上げると踵を落として刀を更に短くへし折る。

「こんにゃろ！」

懐から二本のクナイを取り出した虎二は、それを両手に逆手で持つと、リベンジと言った感じでタケシに攻め込む。

<挑む、虎二・後編>

右左、右左と繰り返される虎二の攻撃が、タケシの顔の前でクナイを躍らせた。

黒い鋼で出来たクナイが自分の目の前で幾度も往復すると、タケシは少しずつ後退していく。

「どうした大将！、逃げ腰だぜ！」

攻めたてる虎二は、黒い布で隠した侮辱的な表情を、調子に乗った台詞でタケシに知らせる。

「そうでもないさ」

タケシの声は、調子に乗る虎二に比べて冷静なものだった。

タケシは狙っていた。

虎二の攻撃の隙を付いて、タケシが下段前蹴りを放つ。

「ぬほっ！」

虎二の体が、前のめりに揺れる。

その蹴りは、虎二が前に踏み込んだ足の膝を直撃していた。

ダメージを狙った前蹴りでは無い。しかし、その蹴りで虎二の踏み込んだ足は、膝関節が伸びきりバランスを大きく崩す。

虎二の体が、後方に崩れて倒れそうになった。しかし、虎二は堪えた。

「せぃ！」

そこにタケシの攻撃。

よろめく虎二の胸元に、タケシの正拳突きが命中した。

拳が虎二の胸を抉り、着ていた服が渦を巻くように捩れる。

「ツッ！」

合掌抜き手で一度痛めた場所を突かれて、先程まで調子に乗っていた虎二の表情が、覆面の下で苦痛に曇った。

「にゃろー！」

いつの間にかクナイの向きを持ち替えていた虎二が、苦痛に顔を歪めながらも、そのクナイでタケシの脇腹を刺そうと突きたてた。

まるでチンピラがナイフで刺すようなモーションに、タケシはすぐさまディフェンスを取る。

タケシの右肘が上から落とされ、更に右膝が下から突き上げられた。

「はぐぅ！」

虎二の苦痛の声。

そのタケシの肘と膝が、クナイを突き刺そうとした虎二の手首を打ち挟んでいた。

「どうだ、蟹挟み受け！」

空手で高等技術とされる受け技。ムエタイなどでも、ティーカーコーンと呼ばれる技で、その難しさから滅多に見られない技である。

鈍器のような肘と膝に挟まれた虎二の片手からクナイが落ちた。

地面に突き刺さるクナイ。

そして、虎二の腕を挟んでいた手足は、直突きと足刀に変化して、虎二の顔面と片足の脛へと別々に打ち込まれる。

「がぁっ！」

虎二が、顔を抑えてよろめく。

「そろそろ、終わりにしようぜ……」

そう言ったタケシの下段廻し蹴りが、虎二の太股を捕らえると、濡れタオルで叩いたような水っぽい音が響く。

その蹴りで、虎二の打たれた片足の膝から力が緩み、崩れるようにカクリと曲がった。

「我が力は、鉄すら砕き！」

バランスを崩した虎二に、タケシが手刀を打ち落とす。

そして、タケシの手刀が、虎二の残ったクナイを持つ手首に落とされると、その手刀の衝撃に虎二は持っていたクナイを手放す。

しかし、放したクナイが地面に落ちるよりも早く、タケシの手刀が掌打と変わり、虎二のこめかみを横から叩いた。

その衝撃に表情を顰めて一瞬だが目を瞑る虎二。目を開けた彼の視界には、五人のタケシの姿が見えていた。

そして、二人を囲む様に緑色の風が吹き荒れ始める。

タケシの攻撃を喰らって後退りする虎二だが、その風に背中を押されて、それ以上後退することも出来なくなっていた。

その緑風は、まるで決着が付くまで互いを囲む金網デスマッチの檻のようだった。

「我が技は、鋼すら切りさく！」

逃げ場を失った虎二に、右ボディーブローを打ち込むタケシ。そのまま同じ右手で流れるように変化させた裏拳を、虎二の頬に素早く打ち込んだ。更にその腕を曲げて肘打ちを作るタケシは、虎二の胸に尖った肘を全身で突進しながら突きたてた。

右腕一本での見事な三連攻撃。

虎二の黒覆面の隙間から見える瞳は、完全に苦痛を耐える物だっ

た。

否、苦痛に耐えきれていない物だった。

「力と技で、鋼鉄すらも焼き尽くす！、跳うっ！」

タケシが虎二に向かって軽いスピンジャンプで近づく。何時もの必殺技とは違った動きと軌道。

二人を囲んでいた緑色の風が、空中で回転しているタケシの右足に一斉に集まると、まるで爆弾のように虎二を狙う。

「堂本流超人空手プチ奥義、クイック風神飛翔脚！」

タケシの飛び廻し蹴り。

緑色の妖風が纏われている蹴りが、虎二の顔面を狙っていた。

「畜生、避けられねえ！」

虎二が両手を顔の前に立てて、其のジャンピングボレーキックを防ごうと試みた。

しかし、タケシの必殺の蹴りが、ガードをした虎二の両腕を横殴りに捕らえる。そして、肉を叩き、骨を砕く生々しい音を響かせた。

「くぅはぁぁ！！！！」

ガードした虎二を、タケシの必殺の蹴りが吹き飛ばす。

虎二の体が宙に舞い、凄い勢いで遠くへと飛んでいく。

それは、弧を描くようにでは無く、地面に沿って真横に飛んで行った。

そして、飛んでいく虎二の両腕は、無残にも歪に折れ曲がり訳の分からない方向を向いていた。

飛んで行く虎二の体を、着地したタケシが見送った。

虎二の体は近くに在った植木の中に頭から突き刺さり、そしてピクリとも動かなくなる。

「ふっ……」

植木の中から足だけを出す虎二。

タケシは、その両足がピクリとも動かないのを確認すると、未だ遠くで暴れまわっているガシャドクロの方を向いた。

「タケシや、準備運動は終わりぞょ」

「ああ、分かっている」

春婆怒の語るとおり、今のは準備運動である。

妖力共有したタケシと、虎二の力の差は、これ程までに大きいものだった。

<　スケルトン・8　>

「がしゃがしゃがしゃ～ん！」

ガシャドクロが八尾を踏みつけようと巨大な足でストッピングを何度も放つ。

しかし、八尾は、人間を超越した動きで、素早くその踏み付けを避け続けると、大地がストッピングで激しく何度も揺れた。

足元を鼠のように走り回る八尾。それを一生懸命に追うガシャドクロ。その時、ガシャドクロの顔面に、野球のボールぐらいの大きさの水の塊が、幾つも飛んできた。

その水の玉は、ガシャドクロの頬に当たると、爆弾の様に音を立てて次々と爆裂した。

ガシャドクロの顔面で爆発する水の爆弾の数々が、マネキンのような頭部を激しく踊らせる。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！？」

辺りに水しぶきが飛び散る。

炸裂した水の玉を投げたのは、無常水越斎。

女性の様に長い黒髪を風に靡かせる水越斎は、続いて手にあるぽん刀を逆手に持ち替えると、片手で拝みながら地面に刀身を力強く突き立てた。

すると、突き刺したポン刀の先から泉の様に水が湧き上がり、その水はどんどんと量を増していく。そして、津波となってガシャドクロの足場を襲った。

「がしゃがしゃがしゃ～ん……！？」

ガシャドクロの足が、水の中に脛まで沈んでいく。まるで沼に足を取られたかの様子だった。

「水越斎、そのまま足止めをしておけ！」

そう叫んだのは、鍋中改造であった。

茶色いトレンチコートを風に靡かせる鍋中は、そのトレンチコートの中から大量の枯葉をバサバサと出し始める。

裾や袖から止め処なく出て来る枯葉は、突風に舞い上げられ空に飛ぶと、巨大な竜の形を作り出す。

その枯葉の竜は、本物の竜の如く空中でうねると、まるで本当に生きているように大きな口を開けてガシャドクロを威嚇した。

「噛み殺してやるわ！」

鍋中の作り出した枯葉の竜は、蛇のような体をうねらせガシャドクロの周りを飛ぶと、大きな口を開けてガシャドクロに襲い掛かった。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！」

ガシャドクロは水越斎の放った水術に足を取られて枯葉の竜の攻撃を避けることが出来なかった。

枯葉の竜が、容赦無く牙を剥く。

移動の出来ないガシャドクロの肩に、枯葉の竜は噛み付きながら長い胴体を、骸骨の体を締め付ける大蛇の様に巻きつけた。

水に足を取られ、肩に噛み付かれて、そして体を締め上げられるガシャドクロは、それでも枯葉の竜の頭を両手で鷲掴みにすると、力任せに引き剥がす。

そしてガシャドクロは、両手で上顎と下顎を掴むと、枯葉の竜の口を引き裂こうと力を込めた。

「なんというパワー！」

枯葉の竜を操る鍋中が、ガシャドクロの力に歯を食いしばりながら術に集中していた。

しかし、ガシャドクロのパワーが枯葉の竜の顎を、両手で無残にも引き裂いた。

「甘いな、デカイの」

その声と同時に、枯葉の竜の裂けた口の中から、猫田龍信が飛び出してきた。

だが、龍信が飛び出ると、口から引き裂かれた枯葉の竜の体は、

バラバラと崩れ落ちる様に散っていく。

ガシャドクロの顔の前に飛び出した龍信は、着ているグレーのスーツの内ポケットに両手をつっこむと、複数の手裏剣を取り出した。

「食らえ、必殺三十二手裏剣！」

懐から取り出した三十二個の手裏剣。

片手に十六個ずつ持っており、それを一斉にガシャドクロの顔面に投げた。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！！」

龍信が投げた三十二個の手裏剣は、全てガシャドクロの顔面に突き刺さる。

するとガシャドクロは顔面を両手で押さえながら悲鳴を上げた。

「まだまだ！」

そう言いながら空に舞う枯葉を踏み台に、八尾がガシャドクロの頭上へと駆け上がっていく。

枯葉の上で刀を抜く八尾弦徳。

「廃字刀苦羅々……」

八尾は、鞘から抜かれた刀を両手でしっかり握ると、天を刺すように真っ直ぐ上に振りかぶった。

すると剣先から黄色い光がレーザーの如く天を指した。

「閃光斬激！」

八尾が刀を振り下ろすと、剣先から伸びるレーザーがガシャドクロの頭を焦がす。

そして、そのまま八尾が体ごと急降下していくと、レーザーでガシャドクロの体を正中腺に沿って、切り裂きながら焦げ目を付けていく。

「まだまだ！」

八尾はガシャドクロの足元に着地するが、水越斎の作り出した水には沈む事無く水面に立っていた。

「追加閃光斬激！！」

刀の刃を逆さに返した八尾は、更にジャンプをしてガシャドクロの正中腺を、再びレーザーで焼き切りながら上昇していく。

二度も正中腺を焼き切られたガシャドクロは、傷口からドス黒い妖気を血液の様に噴出させた。

「まだまだ！！！」

ふたたび八尾は、刀の刃を返すと上段の構えを取り直す。

「三連続閃光斬激！！」

三度目の残激レーザーを放ちながら八尾は、二度目の急降下をしていく。

そして水面に着地した八尾は、片膝を付いたポーズで、振り下ろした刀を鋭い眼光で凝視すると、再びガシャドクロの巨漢を見上げることは無かった。

鍋中、龍信、水越斎の三人が、黙ったまま様子を見ていると、ガシャドクロの体が正中腺から真っ二つに割れて左右に倒れていく。

「やったか！」

大きな水しぶきを上げながら倒れた二つの体を見て龍信がそう言った。

「まさか、この程度で沈むたまじゃあねえよ……」

龍信の近くに居た鍋中がそう言うと、水の中に沈んでいたガシャドクロの体が、一瞬で起き上がり合体する。

「あらら……」

再生を始めたガシャドクロを見上げて、龍信がガッカリした声を漏らした。

<　スケルトン・9　>

「がしゃがしゃがしゃ～ん」

四人が合体したガシャドクロを見上げる。龍信は呆れた表情をしていたが、他の三人は鋭い眼光でガシャドクロを睨んでいた。

「単純な作りだと、復活が早くていいな……」

鍋中が復活したガシャドクロを見てぼやいた時、近くの芝生にあった穴から火柱が燃え上がる。

「にょほほほほほほぉぉ！！」

火柱の中から現れたのは、炎の翼を生やした天野太陽こと日照り神であった。

タンクトップに隠れた胸を持ち上げる様に両腕を組ながら、空中で仁王立ちをするポニーテールの彼女。

艶のあった髪は解れ、白いコートは右肩が破けて泥で酷い汚れようだった。

「日照り神！、不死鳥の如く復活さ！！」

四人の仲間の視線が天野太陽に向けられると、ガシャドクロも彼女の方向を見ていた。

「あ、こっちも単純な作りの人が、復活しましたね……」

復活した日照り神を見ながら龍信が呟くと、鍋中がそれに答える。

「あいつ、別に要らないのに……」

「あ～……、そうですね～」

復活した日照り神を粗末に扱う鍋中と龍信。

そんな話をしていると、屋敷の屋根を越えて大きな岩がゆっくりと浮きながら現れる。

「お、油儀のヤツ、やっと到着したか」

その大岩は、卵形で正面には人間の顔が掘り込まれ、鉢巻の様に注連縄をしていた。

そして、顔型の大岩の天辺には、胡坐を掻いた油儀が座っていた。

「あれ……、あそこに会長が……」

そう言って黒童子が隣に居る油儀を見る。

確かに黒童子の隣には、印を組む油義が居た。しかし、屋敷の屋根を越えて現れた大岩の上にも油義の姿があった。

「あれはワシの分身。妖術で作り出した封印石のコントローラーのようなものじゃ」

「なるほど」

自分をチラ見していた黒童子に油儀が丁寧にも説明をする。

「しかも、あの封印石は今までガシャドクロを封印していた物とは違って、最新式の封印石！。こんな日の為に時間を掛けて用意した代物じゃ。７００年前の昔と一緒にするでないぞ！」

ガシャドクロから離れた屋敷の中から、大岩を操作する油儀が自慢そうな顔で言った。

そして、ガシャドクロに接近した大岩の顔面が縦と横に割れ、四つに分かれる様に大きく口を開ける。

四つに分かれて口を開いた大岩の奥には、暗黒の闇が奈落の底から響くような音を立てて渦巻いていた。

「一気に封印してやるわい！」

油儀が強気の台詞を言うと、何やら呪文を唱え始める。

すると、四つに開いた大岩の口から勢い良く注連縄が四本飛び出し、ガシャドクロの体を絡めとる。そして、口の中の暗黒に引きずりこもうと力強く引き寄せた。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！！」

ガシャドクロが力任せに注連縄を引き千切ろうとするが、注連縄が怪しく紫色に光って其れを許さない。

「うし、油儀、そのまま封印石に引きずり込め！」

地上に居る鍋中が油儀に、気合を入れろとエールを送る。

そして、ガシャドクロの巨体が封印石に引き寄せられていく。ガシャドクロの足元は、踏ん張る脚が引きずられ、庭園の芝生が捲れ上がっていた。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！」

抵抗を見せるガシャドクロの片腕が、注連縄に引っ張られて封印石の口に肘まで吸い込まれる。

「会長～、そのまま吸い込んじゃえ～」

「任せろ！」

黒童子の無邪気な声援に、油儀が勇ましく答えた。

その時である。

「それは困るな。あのバケモノには、俺の仕事が終わるまで頑張ってもらわないとよ！」

「「「！」」」

油義邸の客間、その奥から聞こえてきた覚えの無い声に、油義達三人が振り返る。

「何者ですか！？」

振り返った蓋口静香が、髪を解きメデューサの蛇の様に髪を躍らせて威嚇する。

その威嚇する相手は白い仮面の怪人。

この屋敷に突然乱入して来て、現在の騒ぎの発端となった存在。

「あのデカイ化け物が暴れて、あの連中を引き付けて居る間に、俺は金目の物をゲットって作戦よ。くっくっくっ」

白い怪人の肩が、不敵な笑いに揺れていた。

「わっちはこの妖怪共を食べたいでありんす」

白い怪人と同化している白雲太夫の発言は、三種百食の本能に流されたものだった。今の彼女には、目の前の三匹の妖怪達が、一流コックの作った豪華ディナーに見えていた。

「今は、そんな事を言っている場合かよ」

「何を言うでありんすか。ここで妖怪を食べないのなら、わっちも主殿に協力しないでありんすよ！」

二人の間で金銭欲と食欲を、どちらを優先させるかぶつかりあっていた。

「ちっ、しかたねぇ～……」

使い手の方が容易く折れた。そして身構える三人の妖怪を睨みつける。

「そうと決まれば、チャッチャッと始末してやるか」

そう言って白い怪人は大きく息を吸い込み、胸を大きく膨らました。

そして吸った空気に混ぜて、白い煙を大量に吐き出し三人を包む。

「こ、この煙は！」

「あぅぅ、目が……霞む……」

「吸わないで黒童子君、毒素が混ざっているは！」

静香が警告したが既に遅く、油儀と黒童子の二人は煙を吸い込み膝から崩れる。

黒童子の黒い学生服の中で、何匹もの分身が毒煙に苦しみ「キィーキィー」と叫びながらのたうち回っていた。

「静……香……く……ん……」

「くっ……」

「此処は危険だわ！」

静香は髪を怪しく躍らせながら、口と鼻を手で押さえて煙を吸うのを堪えた。

「おら、あんた等は早く非難しろ」

「え！？」

そう言いながら静香の横を通り過ぎて、のしのしと客間に一人の男が上がりこんできた。

「貴方は！」

その暗い緑色の甲冑を身に纏った男を見て、静香が大きく目を見開いた。

それは妖力共有したタケシであった。静香はすぐさま油儀と黒童子の体を髪の毛で抱え上げる。

「は……春婆怒……」

静香の髪に抱えられた黒童子が呟くと、静香はこれが春婆怒と恐怖を感じた。

「何故ここに！」

二人を抱えたまま後ずさりする静香の表情は凍り付いていた。

この状況は絶望的だと。

一匹の九十九神相手なら二人を抱えたままでも逃げ切れたかもしれないが、二匹の九十九神相手に二人を抱えたままの逃走は不可能だと。

「この九十九神は俺らに任せて、あんたは二人を連れて逃げな。そ

のじっさんがデカイ化け物をどうにか出来るんだろ？」

静香は状況を理解出来なかった。だが、男の言う通りに二人を抱えて客間から庭に飛び出した。

「春婆怒が……、私達を逃がしてくれた？　あれは私達の味方なの？」

一度振り返った静香は、疑問を口にして客間から全力で退避していく。

静香の春婆怒に対して持つ印象は、敵。その敵が自分を逃がしてくれた。その事実が信じられなかった。

「こいつも九十九神と妖力共有してるのか、太夫……？」

客間に残ったのは二体の九十九神。白い怪人が妖力共有した自分の九十九神に問いかけた。

「そうでありんす。さっきの妖怪を逃がした穴埋め、この九十九神を喰らってしてもらうでありんすよ」

「ｏｋ、任せな」

白い怪人は、髑髏の仮面の下で不敵に笑う。

「ほお、俺らを喰らうって？　良い度胸してやがるぜ！」

黒緑の甲冑の九十九神が、白い怪人の台詞を聞いて凄む。

「まったくじゃ」

タケシの凄みの掛かった台詞の後に、春婆怒が体からわざとらしく風を吹き荒らす。

その風は、白い怪人が吐き散らかした毒の煙を一瞬でかき消してしまう。

「よっしゃ、派手にやり合おうじゃあねえか！」

タケシが左手に右拳を叩きつけた。

<　スケルトン・10　>

白い怪人の毒煙で弱った油儀と黒童子を抱えた静香は、油儀の分身が居る封印石を目指して走っていた。

空中に浮いていた封印石は、油義の集中が途絶えて僅に高度を下げていた。

「静香君、ワシらはガシャドクロを封じるぞ」

意識がはっきりと取り戻しつつある油儀が、自分の体を抱える秘書にそう言うと、一度だけ後ろを振り返った。

その油義の視線に入ってきたのは、客間に居る黒緑色の背中と、その向こうに居る白い怪人の姿だった。二人の九十九神が居る部屋からは白い煙が吹き出ていた。

「あの九十九神達は、ほっといて良いのですか？」

もう一人、静香の髪に抱えられていた黒童子が問う。

「かまわん、九十九神同士で殺しあえば良いさ」

「はい……」

冷めた口調で返答した油義。その油義を抱えた静香は、高くジャンプをすると空中に浮かぶ封印石の上に着地した。すると油義は、岩の上の自分にそっくりな分身と体を合わせて同化していく。

「おい、油儀。封印石の注連縄が緩んでるが、何かあったのか？」

毒煙で未だ顔を顰める油儀に、地上から鍋中が様子を窺うように声を飛ばす。

「何も問題は無い。さて、ガシャドクロを封印するぞ……！」

地上の鍋中に言葉を返した油儀は、冷めた鋭い眼差しで巨大なガシャドクロを睨みつける。

そして、油義が再び両手で印を組み呪文を唱え始めると、ガシャドクロを捕らえていた四本の注連縄が紫色の光りを取り戻して、更に力強く巨体を引き始める。

「こんな奴、さっさと封じて春婆怒を……」

油儀の怨み辛みが溢れる呟きは、後ろに控える静香と黒童子にも聴こえていた。

「この人……、相当、春婆怒を怨んでいるのかな……」

「さあ、良く分かりません……」

隣に居る静香を見ながら黒童子がそう言うが、静香は乱れた髪を元の形に戻しながら首を傾げた。

現在は油義の秘書を務めている静香だが、昔の事は静香にも良く分からない。静香が油義の秘書を始めたのも、ここ数年の事である。

「がしゃがしゃがしゃ～ん！」

ガシャドクロが、封印石に吸いこまれている自分の左腕を引き抜こうと腰を落として力を込めた。その踏ん張りに地面がまたしても揺れる。

「よし、テメー等!、油義を援護してガシャドクロを封印するぞ!」

鍋中は、若い連中に激を飛ばすのと同時に、その身を枯葉の竜巻と一緒に高く飛び上がった。

ジャンプをした鍋中の視線にあるガシャドクロの大きな背中が、攻撃の目標として定められた。そして、トレンチコートの懐に両手をつっこみ何かを探った。

「喰らいやがれ、秘儀三十四手裏剣!」

トレンチコートから引き剥かれた油義の両手には、十七個ずつの手裏剣が握られていた。

「とうりゃ!」

鍋中の気合の入った掛け声と共に、三十四個の手裏剣が同時に投げられガシャドクロのジェル状の背中に、ザクザクと音を立てて突き刺さった。

「がしゃがしゃがしゃ~ん!」

三十四個の手裏剣が背中に突き刺さったガシャドクロが、背を仰け反らせながら苦痛の声を上げた。

「不死身でも苦痛は感じるのですね」

地上で見守る龍信がそう言うと、背中に背負っていた忍者刀を鞘から引き抜く。

「おら、テメーらも続け！」

地上に着地した鍋中が指示を叫ぶと、その声に合わせて他の三人もガシャドクロに攻撃を加えようと行動を起こす。

しかし、その動きを、封印石の上で見守る静香の表情は、心配そうなものだった。

猫田龍信の様子を目で追う静香。誰にも聞こえないような小さな声で、彼女は心配そうに呟いた。

「あのバカ、怪我だけはしないでよね……」

<　煙との戦い・その壱　>

客間の中に残るのは、二体の九十九神。

庭園では巨大な骸骨の妖怪が、四つに分かれた大岩に吸い込まれるのを力任せに抵抗していた。

タケシは、その光景を一度だけ振り返り見ると、目線を再び白い怪人に戻した。

黒緑色の仮面から放たれた勇ましい視線が、白い怪人を睨みつける。

だが、白い怪人の髑髏の仮面の下は、余裕の表情でうっすらと笑っていた。

その笑みは、明らかに人生を舐めきった微笑みに見えた。バイト先のアプロの安田、アイツに良く似た笑みに、タケシはイラつきを感じる。否、安田の方がまだましに見えた。

「よし、俺らもボチボチ始めるか……」

そう言ってタケシが一歩踏み出すと、客間の畳が重みに僅かに沈んだ。

部屋の中には煙草の嫌な臭いが立ち込めていた。その原因は、タケシの前に立つ全身真っ白な九十九神の仕業。

白い骸骨のマスクに、ゴツゴツと荒い表面をした皮膚。腰には「白」と書かれたバックルが付いたベルトを締めており、両拳はスパイクの様な四つの棘が付いている。そして、背中から生えた突起物の先からは、白い煙をユラユラと狼煙のように上げて、部屋の中に嫌な臭いを振りまいていた。

タケシは煙草を吸わない。その為か、この煙がタケシに更なる不快感を呼ぶ。

「白雲太夫、こいつら倒してパクパク食って、金目の物をゲットして、とっとと帰るぞ！」

白い怪人が、顎を上に向けてタケシを見下したような視線でそう言った。

「主殿、その勢いでありんす！」

白い怪人の中から若い女性の声で、調子付いた怪人を応援する言葉が掛けられる。

「まかしておけ！」

その声に白い怪人が、更に調子付く。

「おいおい、テメーらだけで、盛り上がってんじゃあねーぞ」

白い怪人達が、そんな会話をしているところに、我慢が出来なくなったタケシが飛び掛った。

戦いへの欲求、それとイラつくような怪人の声と煙草の臭い。そ

れらがタケシに先手を仕掛けるように誘導させた。

「！」

タケシが畳を蹴る音に、白い怪人が身構える。

タケシは一瞬で怪人との間合いを詰めると、怪人の足元の畳に勢い良く震脚を打ちつけた。

打撃技を打つ際に行われる震脚。その踏み込みの一歩が、畳に足跡が残りそうなぐらい踏み落とされると、その振動が四方に広がり、襖や障子を激しく揺らした後に、天井すらも揺らして埃をパラパラと落した。

そして、その震脚の勢いを乗せた正拳突きが、怪人の髑髏のマスク目掛けて放たれた。

「なに！？」

螺旋の捻りの加わったタケシのマグナム弾のような正拳突きは、煙草の臭いと煙が混ざった空気を蹴散らしながら突き進むと、見事に怪人の顔面を捉えた。しかし、タケシの拳には、目標を殴った手応えがまったく伝わってこなかった。それは、まるで空振りのような感触だった。

「おっと、危ねえ～」

怪人の顔は、正拳突きの一撃で完全に崩れ、頭の形まで変わっていた。だが、崩れた頭は直ぐに元の形に戻っていく。

「何だ、こいつ……」

拳を引き、後方に飛ぶタケシ。一度、間合いを取り直したタケシが、納得のいかないと言った台詞を溢した。

「あれは、妖術で自分の肉体を一時的に変化させたのじゃ」

「めんどくせ～防御を取りやがるな……」

春婆怒の解説に、タケシは詰まらなそうな声を返した。

今度は白い怪人が、殴り掛かろうと身構えた。しかし、その構えは素人のものだと、タケシには一瞬で見て悟れた。

「あはははは～。そうよ、昔っからめんどくさい男って言われる事が多くてよ～」

嫌らしい笑い声の後に、自慢げな台詞を合わせて飛び掛る白い怪人は、棘付きの拳をタケシに向けて振るう。

素人丸出しの大振りのストレートパンチだった。

その拳をタケシは難なく避けると、怪人の拳がタケシの頭の横を通り過ぎていく。

互いに抱き合える程の間合いに近づいていた。否、パンチをかわしたタケシが、怪人の懐に入ったといった方が正しいであろうか。

そのタケシが、パンチをかわされて体制を崩していた白い怪人の腹部に、左右の正拳突きを連続して叩き込んだ。

「ちっ！」

左右の拳は、確かに命中していた。しかし、タケシは舌打ちを口にした。

その理由は、先程と同じ手応えの無さからだ。

怪人の腹筋には、正拳で抉れたクレーターが二つ出来ていたが、それも直ぐに治っていく。

「あはははは～、効かね～な～！、あはははははは～～」

タケシの攻撃は無駄だと言いたいのか、白い怪人はちょうしに乗って高笑いを続けた。

<煙との戦い・その弐　>

怪人の高笑いがタケシの神経を逆撫でしてイラつかせる。

怪人から離れたタケシが、自分の拳を見ながら何かを考え込む。

そこに再び殴り掛かる怪人。

タケシは、迫り来る怪人に視線を向けずに、自分の拳を見たまま呟く。

「殴ってダメなら……、蹴ってみるか」

そして放たれるタケシの中段廻し蹴り。部屋の中に充満していた薄い煙が、横一線に切り裂かれる。

その蹴りは、刃物の様に怪人の腰を、辺りの煙と同様に真っ二つに切り裂いた。怪人は、上半身と下半身が分利して動きを止める。

「これでどうだ!?」

しかし、タケシの期待とは裏腹に、怪人の体は直ぐにくっ付き再生してしまう。そして怪人は、逃げるように後方に下がっていく。

「おい、春婆怒。もしかして、これはきりが無いのか?」

後ろに下がった怪人を睨みつけながらタケシが春婆怒に訊く。

「否、そんな事は無かろう」

タケシに春婆怒が答える。

「これも妖術の類。いずれ妖力が切れれば術も使えなくなるだろうて。それにどのぐらい連続で継続出来るかもさだかじゃないしのぉ」

「じゃあ、殴り続ければ、何時かはこの野郎を殴り倒せるんだな！？」

「理屈的にはのぉ～」

まるで他人事のように答えた春婆怒。しかし、タケシはそれで十分だった。何時かは殴れるなら、その何時かが来るまで殴り続けるつもりらしい。

「ならば……！」

畳を蹴る音を立てて飛び出したタケシ。単純な作戦を実行に移すため、今度は飛び蹴りでまっすぐに突っ込んでいく。

その飛び蹴りは怪人の上半身を貫きタケシは、怪人の後方へと飛んでいく。

「何度だって！」

上半身が煙の様に無くなった怪人を背にして、畳の上に着地したタケシが、屈んだ常態でそう呟いた。

二人が背を向けた常態で、怪人は煙に変わって散った上半身を再生させ終わると振り返った。

そこに振り返る勢いを利用したタケシの裏拳が飛んでいく。

「無駄ふぁ……」

怪人が台詞を話そうとした瞬間、タケシの裏拳が怪人の口元を削り取り、また煙に変える。

「何度だって！！」

タケシのフックが怪人の顔面を掻き消す。

「何度でも！！」

タケシの左右の正拳突きで、怪人の両胸が抉られる。

「幾度でも！！」

タケシの下段廻し蹴りが、怪人の太股を切り裂く。

「何回だって！！」

タケシの手刀が、怪人の胸を袈裟切りに傷を付ける。

「幾らだって！！」

タケシの前蹴りが、怪人のどてっぱらに風穴を開ける。

「何度だって打ち込んでやる！」

タケシの上段廻し蹴りが、怪人の頭部を掻き消す。

「無駄だよ！」

煙から再生した怪人が、意地の悪そうな笑い顔で言う。

「何度やっても無駄なんだよ！」

「試して見ないと分かんないだろうがよ！」

その台詞と共に、タケシのラッシュのギアが、もう一段階上がった。

「りぃあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

顔面への右正拳突き、太股への左下段廻し蹴り、鎖骨への上段右手刀、喉仏への左平拳、掬い上げる様に放った掌打での金的、顎への上段膝蹴り、頭部へその膝から変化した上段廻し蹴り、腹部への右抜き手、脇腹への左中断廻し蹴り、右こめかみへの肘鉄、左足小指への踵落とし、右裏拳を水月と眉間に連続で放ち、右膝関節への下段前蹴り、左鼓膜への掌打、人中への一本拳、左胸への槌拳、左脇腹への手刀、顔面への右上段足刀、顎をかち上げる左掌打、喉への親指拳、腹部から顎へと飛びニ段蹴り、首筋に手刀、左頬への裏拳、右中段後ろ回し蹴りを胸板に、顎先を狙った左肘鉄、鎖骨を狙った打ち卸の左肘鉄、顔面への頭突き、そしてV字の人差し指中指での目突き、それら全てが命中して怪人の体を煙に変えて削っていった。

タケシのしつこいまでの無酸素運動による連続攻撃。どの一撃も人間が絶命するには十分な技だった。

中には禁じてとされているような技も幾つか混ざっていたが、それを怪人は、立ったまま煙に体を変えて受け止めた。

「これでどうだ！！」

最後と言わんばかりに、タケシの全力の拳が怪人の胸目掛けて放たれる。

「なっ！！！」

その全力の一撃は、タケシの拳に今までとは違った感触を伝えた。

否、この感触が拳に伝わるべき正しい物。今まで、この感触を求めて攻撃を続けてきたのだ。

「ぐはぁぁ、なんだってーーー！！！」

タケシの拳が、白い怪人のプロテクターを砕きながら体に減り込んでいく。

<　煙との戦い・その参　>（前書き）

２／１４段階で、アクセス数６００００突破しました＾＾
ここまでお付き合いいただきありがとうございます。

<　煙との戦い・その参　>

タケシの拳に突かれて怪人の体が、後方へと飛んでいく。

この感触を待ち望んで、只管に攻め続けていたタケシが、仮面の下で笑っていた。

「よし、やっと決まったぜ！」

白い怪人は、襖を突き破って隣の部屋へと倒れこむ。

「どうなってる白雲太夫！？」

ひび割れた胸を押さえながら倒れた怪人は、受けたダメージを自分の九十九神の責任にして叫んだ。

「あれだけの長時間、術を唱え続けられる訳が無いでありんす！」

白い怪人の中から言い訳を述べる白雲太夫。それを無視するようにジャンプしたタケシが、踵を高く振りかぶって怪人に迫る。

「太夫！？」

「今一度でありんす！」

「どぉりゃゃゃ！」

タケシの踵落としが怪人を踏みつける様に落とされた。しかし、またもや怪人の体は煙になってタケシの攻撃をやり過した。

「やっぱこの術、うぜーぞ！、禁止だ禁止ー！！」

「敵に禁止されても……」

煙になって攻撃をやり過ごした白い怪人に、タケシが無理を言う。

煙になっていた怪人は、体を実態かさせるとそのまま立ち上がる。

「とりあえず、もう一発決めてやっるぜ！」

その台詞と同時にタケシが拳を握り締めた。

「太夫……、今度はこっちから仕掛けるぞ」

「分かったでありんす」

怪人は、一段と背中の突起物から煙を噴出すと、両手を前に突き出して、両手の平を大きく開いた。

「ダブル・ウェポンモード！」

怪人の両手の平から煙が吹き出ると、その煙は一瞬で二本の煙管に変わる。

しかし、その煙管のサイズは、まるで太鼓のバッチの様に太く、見た目からして棍棒といった代物であった。白い怪人は、その太い煙管を両手でしっかりと握り締めると構えを取る。

「ほ～、棒術か？」

そう口にしたタケシに対して白い怪人は、二本の煙管を棍棒の様に構えて襲い掛かった。

「どりゃ！」

怪人が、気合の篭った声と共に太い煙管を振り下ろす。その攻撃に対してタケシは、片腕を振り上げて弾くように防いだ。

しかし、煙管を弾いたタケシの片腕に響く衝撃が、強烈な振動と変わってタケシの体へと伝わっていった。

「ほ～、これは……」

以外であった。先ほどまでの怪人の攻撃は、中学生のケンカレベルの代物であった。

しかし、今振るわれた煙管の一撃。それは、避けようと思えば避けられた攻撃であったが、腕で防御した後に反撃を繰り出そうと思っていたタケシは、想像していた以上の衝撃に驚いて反撃を躊躇してしまった。

攻撃力と命中させる技術は、一振りで向上しているのが分かった。

「良い～～感じに変わったじゃねえか～」

タケシが煙管を弾いた腕を振りながら怪人に言った。

「え?、そうかい?」

その攻防の変貌に、敵の九十九神の使い手は気付いていないらしい。惚けた声を出した後に、また煙管を棍棒のように構えて襲い掛かってくる。

「くらえ！」

白い怪人が、両手の煙管を巧みに振るう。

狙いは、右太股、左肩、右手首、左脇腹、右頬、右上腕筋。

怪人の両手にある煙管が嵐の如く一瞬でタケシの体中に打ち込まれる。

「ぐは！」

全身に打ち込まれた幾つもの乱打に対して、タケシの口から苦痛の声が一言もれた。

明らかに攻撃技術が向上している怪人に対して、体中に発生した激痛から逃れる様にタケシが後ろに下がった。

「逃げるなよ～！」

楽しそうな声を上げて怪人はタケシを追う。

「こいつ急に強くなったぞ！」

「とうぜんじゃ」

後ろに下がりながら言ったタケシの台詞に春婆怒が答える。

「妖力共有中のウェポンモードとは、こう言うものじゃ。お主とてそうじゃろ。急に槍術が使えるようになったじゃろ」

「あぁ～、なるぼな。こいつはそれが棍棒術ってことか」

「我々九十九神は、かつての使い手達の記憶から一定量を保存して、一時的に別の使い手に渡す事ができる。大抵は自分に合った戦闘技術の記憶を保存するものじゃ。わらわが槍術であるように、あやつは棒術だったんじゃろう」

「なるぼど」

そう言ったタケシが両手でガードを固める。両腕を顔の前に並べて、やや背を丸めた構え。

「そんなのどうだって良いじゃねぇ～かよ！」

タケシを追う怪人が、能天気な口調の言葉と一緒に、両手の煙管を逆水平に二本振るう。

「それで対等になったと思ったか！」

その野球の審判のようなセーフのモーション攻撃を、悪態を付きながらタケシは屈んで避けると同時に、握り締められた両手の槌拳をハンマーの様に怪人の両膝に落とす。

「おっと……！」

打たれた怪人の両膝が、煙になって飛び散った。

またしても煙化してタケシの攻撃をやり過ごす白い怪人。だが、タケシは攻撃の手を休めない。

屈んでいたタケシは両足で跳ね上がる様に、斜め４５度からのアッパー気味のフックを怪人の頭部目かげて放つ。そのフックは怪人の右頬から左こめかみに掛けて顔面を削りとった。

「きかねーよーん！」

タケシのフックに頭を吹き飛ばされた怪人は、残された口でタケシを侮辱してみせる。

「いやいや、それで十分なんだ……」

タケシの左右の正拳突きが、マシンガンの様に怪人の体に打ち込まれ、体を煙化させて散らして良く。

その連続の攻撃に対して怪人は、一切の回避行動を取らなかった。

否、回避行動を取らなかったのでは無く、取れなかったのだ。

理由は二つ。

両足が煙化していて動けないのと、頭部が煙化して目が見えていない為だった。

「まだ、続くぞ！」

「えぇ！？」

煙化していた両足と頭部が元に戻りだしたところで、再度タケシが同じ箇所を狙い打つ。

両足への下段廻し蹴り、顔面への正拳突き。

そしてまた、怪人の両足と頭部が煙となって怪人の自由を奪いさると、タケシは胴体へと正拳突きを再開する。

「こ……これは、まずいでありんす！」

白雲太夫の台詞にタケシは口元を緩めながら正拳突きを打ち続けていた。

「そろそろだったよな！」

「「！」」

タケシの言葉に怪人と太夫は狙われている事を悟る。

正拳ラッシュを止めたタケシが、右拳を大きく振りかぶると、右足で一歩踏み込んだ。

その踏み込んだ右足を内側へ捻ると、足首をスピンさせ、その力で膝関節をスピンさせる。更にその勢いで腰をスピンさせ、脊髄の一つ一つのジョイントをスピンさせると、更に加速を増していった勢いを振りかぶった腕の肩へと伝達させた。

幾度もの関節によるスピンを繰り返し生まれた加速は、肩から腕へと伝わるさいに遠心力へと変わり、拳の中に破壊力として生まれ

替わって宿る。

その右足から生まれ伝わってきたパワーを、タケシは右のロングフックの威力として怪人の顔面へと叩き込んだ。

「ふきぁーーー！」

タケシのフックを怪人は、何時もの様に煙化する事無く顔面で受け止めると、景気よく体を風車の様に回転させながら飛んで行った。

「タイミングばっちりだぜ！」

タケシが仕掛けた最初の乱撃。

それは、ただ意地になって攻撃が当たるまで続けていた分けではない。

この煙化して相手の攻撃をやり過ごす術の弱点を探り、尚且つ連続で持続できる時間を計っていたのである。

回転して飛んでいった白い怪人が畳の上に落ちると、その体を何度か音を立てて跳ねさせると止まった。

「やはりこやつ、戦闘に関しては天才と言えるのぉ～」

一連の攻防を見て春婆怒が、タケシの戦闘センスの良さを褒めていると、殴り飛ばされて畳の上で倒れていた怪人が、煙と変わって襖の隙間から隣の部屋へと逃げていく。

<煙との戦い・その四>

タケシが怪人を追って、襖を両手で左右に力強く音を立てて開いた。

「ん？」

襖を豪快に開けたタケシの目の前に、誰も居ない空っぽの部屋だけが広がっている。逃げ込んだはずの怪人の姿は、その部屋には無く、タケシが部屋の中を首を振って見回していた。

「どこに逃げやがった……」

睨みを利かしながらタケシもゆっくりと部屋の中へ進んでいく。

宴会場の様に広い畳部屋。ぱっと見た目で何畳有るかも分からない程の広さである。

その部屋の中央まで進んだタケシは、ゆっくりと体を動かしながら周りを見回す。念の為に上も確認するが、天井に怪人が張り付いている様子は無かった。

「……」

タケシは、消えた怪人が何処から出て来ても良い様に部屋の中央に陣取る。

「なるほどのぉ。先程の言葉、撤回せねばならぬかのぉ～」

「ん?、どうした春婆怒」

いきなりの春婆怒の言葉にタケシは首を傾げた。

「畳の縁に立つな……」

春婆怒の言葉にタケシは自分の足元を見て驚く。

「!?」

畳と畳の間から煙が立ち上がっていた。それを見たタケシは、その場から飛び跳ねる様に素早く離れた。

「ちっ、気付かれちまったか~」

畳の縁から立ち昇る煙は怪人の上半身に変わると、両手を畳に付いて穴から這出る様に姿を現し始めた。

「昔の忍び等が、暗殺を試みる際に床下に潜むのじゃ。そして一番目標を定めやすく、一番刃が通りやすい場所が畳の縁なのじゃ」

「なるほどね……」

畳の隙間から下半身を引っこ抜く白い怪人を余所に、タケシは足元の畳の縁をじっと見ていた。

「御主は一対一の経験は人より多く積んでいるが、事、殺し合いや生き残る術に関しては、まだまだ素人よのぉ」

「ああ、自分の実力は分かったよ……。そんなところは、お前から

勉強させてもらうぜ、春婆怒……」

タケシの謙虚な台詞に、春婆怒は以外だと思った。

「ふふ、勉強熱心じゃのぉ～」

タケシの態度は間違いなく明日へと繋がる行動。案外、末恐ろしさに上限が無い存在なのかも知れないと春婆怒は感心していた。

「いい棍棒術を使えるのに姑息だな、お前」

「楽しく生きてるだけだ！」

タケシの台詞に怪人は、髑髏の仮面の下で不適に笑う。実にむかつく態度だった

そして怪人が、大きく息を吸い込み始めると、胸を風船の様に膨らましていく。その吸い込んだ空気と一緒に、大量の毒煙をタケシに向けて噴出した。

タケシの目を噴出された煙が、真っ白に染め上げながら迫り来る。煙幕のつもりらしい。

「その攻撃は効かねえって言っただろ」

そう言ってタケシは、足元から自分の体全身を包む様に竜巻を起こして、怪人の吐き出した毒の煙を容易く散らして見せる。

だが、タケシのすぐ横。散らした煙の中から、二本の煙管を振りかぶった怪人が現れた。

「同じ戦法じゃあねえ～よ！」

タケシに二本の煙管が襲い掛かる。その一本は回し受けで受け流したタケシ。しかし、残る一本の煙管の一撃は、肩の辺りに直撃させて重い激痛を響かせた。

「うっ！」

痛みに声を漏らしたタケシに怪人が更に攻撃を加える。

今度は二本の煙管を横に構えて、太鼓を小刻みに叩く様にタケシの胸を連打した。

「ううううう！」

小刻みな打撃にタケシの肺が振動して、口から空気が無理矢理にも吐き出される。その吐き出された空気が、本人の意思とは違って、苦痛の声のように奏でられた。

「体を煙に変化させて、吐き出した毒煙に混ざって接近させたのかぇ！？」

「女、正解でありんす！」

「むむむ！」

珍しく春婆怒が、敵に対して悪態を突いていた。

「フィニッシュだ！」

そして怪人は、両手の煙管から繰り出す小刻みな打撃を止めて、大きく振りかぶった一撃の攻撃へと変えた。

「どぉりやゃ！」

バンザイをする様に両手を振りかぶる怪人は、天井に頭が付きそうなぐらいに高くジャンプをして、上空から急降下するように二本の煙管を振り下ろしてきた。

「なんのっ！」

しかし、その攻撃は流石に喰らえないとタケシは、両腕を頭の上に並べてガッチリとガードする。

タケシの頭上で、タケシの二本の腕と、怪人の二本の煙管がぶつかり合い井の字を形どると、鉄と鉄が響き合う音を立てた。

怪人の攻撃をガードしたタケシが怪人の股間を狙って、アッパーを放つ。

金的。

基本的にはルールの有る格闘技の試合では禁止の技。反則技である。

だが、空中で両手の煙管を振り下ろしガードされて体を丸めている怪人は、そんなタケシの攻撃すらも煙になって無効化させた。

しかしタケシは、股間の辺りにモザイクの様な煙を発生させながが

ら空中に留まる怪人に、更なる攻撃を仕掛ける。

怪人の顔面を狙った左のフック。それは怪人の右目を削り取る。

そして振り切った拳をUターンさせると、裏拳で左目を今度は削り取った。

「ああ～、！」

視界を奪われた怪人が、タケシの頭上で浮いたまま、嫌な予感を声にした。

「せぃやーっ！」

タケシの更なる攻撃。

内側へと螺旋の捻りが加わった強烈な正拳が、怪人の胸を突き破り大きな風穴を開ける。すると怪人の貫かれた背中から、爆風のような煙が飛び散った。

「なんのぉー！」

しかし、そんな事を無視して怪人は空中で煙管を振り被りながら体をエビ反せる。両手の煙管が背中に隠れるぐらいまで大きく振り被る怪人の胸に開いた穴から、その二本の煙管が見えていた。

「りぃやー！」

怪人の削り取られた両目が元に戻ると、怪人は振り被った煙管で攻撃を放つ。

上から煙管を振り下ろす怪人に、タケシは畳を蹴る音を軽く立てると、上段廻し蹴りを放った。

その蹴りを放つ為に引かれたタケシの顔の前を、怪人の二本の煙管が通り過ぎていく。そしてタケシの蹴りが怪人の胴体を見事に切り裂きながら受け止めると、怪人の体を空中に押し戻す。

「攻撃をしていて気付いた事が他にもあってな……」

廻し蹴りを振り切ったタケシは、空中で静止しながら切り裂かれた胴体を再生させていく怪人に、無防備にも背を向けていた。

「目を砕かれると前が見えなくなる、体を砕かれ続けると３０秒程で術の継続が出来なくなる……」

空中に浮いている怪人にタケシはそう言いながら、振り向きざまの後ろ廻し蹴りを放ち、再生しかかっていた胴体を踵で再び切り裂いていく。

「それと、もう一つだ……」

「もう一つでありんすか？」

「えっ、なに！？」

タケシの頭上で、使い手と白雲太夫が何かと声を出すと、それにタケシが答える。

「両足を砕いても、倒れないんだよ、お前さんわよ」

「はぁ？」

タケシの言いたい事が通じていない怪人は、間抜けな声をだして空中に浮いていた。その胸板にタケシの柔軟に開かれた股からの足刀が突き刺さり煙に変える。

「そろそろ、終わりにしようぜ……」

もう、何度目の攻撃だろうか、そう言ってタケシは再び廻し蹴りで怪人の胴体を切り裂き、怪人を空中で固定する。

「我が力は、天を貫き！」

最高の一撃を放つ前のお決まり台詞を語るタケシは、更に足刀で怪人の顔面を打ち砕き煙に変えた。

「我が技は、大地を揺らす！」

念の為にもう一発、後ろ廻し蹴りで空中に居る怪人の体を真っ二つにする。

「太夫……まずくねぇ……」

「これは、危険でありんす……」

「なるほどのぉ～。こやつらは体に攻撃を喰らい、煙に変えてやり過ごす時は、その場に体を固定してしまうのかぇ。故に足を煙に変えられても転倒しないわけかぇ」

「白雲太夫！。逃げれないのか！！」

「む、無理でありんす！！」

体を煙に変えて移動する術と、攻撃を喰らって煙になる術は、別物で効果が違うようだ。

タケシを中心に突風が吹き荒れる。その突風は広い部屋を、台風が訪れたかの様な状況に変えていく。二人の九十九神は、その台風の目の中に居た。

「ふふふ、そろそろ時も３０秒を過ぎるのぉ」

珍しく戦闘中にも関わらず、春婆怒が楽しそうな感情を口にする。

「力と技が、天地を震わせ心を響かす！」

「やべーーーーー！！」

タイムリミットである。

「堂本流超人空手奥義、風神飛翔脚！！」

タケシは、突風が渦巻く室内で、頭上の怪人目掛けて飛び蹴りを放った。

<　煙との戦い・その四　>（後書き）

白い怪人の話は、自分で書いてても詰まらないと反省。

<　スケルトン・11　>

虹色に輝く巨大なドーム型の結界に包まれた油義邸の広い敷地。

その敷地を囲むように配置された七人の怪僧姿の妖怪七人岬達によって作られたこの巨大なドーム型の結界は、普通の人間には見えない不思議で巨大な壁であった。

しかも、結界内で大暴れしている筈のガシャドクロの姿までも完全に外部からは隠してしまい、飛行機などで上空から見たとしても何の異常の無い穏やかな庭園に見えてしまう便利な結界であった。

「本当に、あんなバケモノを退治できるのか……」

「だが、彼らにどうにかしてもらうしか無かろう。我々非力な普通の人間では手足も出せないのだから……」

未だに巨漢で地鳴りを起こしているガシャドクロから少し離れた屋敷などの陰に隠れている黒服のＳＰ達が、庭園内で死闘を繰り広げている妖怪達を見ながら話していた。

十メートルはある巨体に力を込めて封印から抵抗するガシャドクロの片腕は、半透明のジェルごと肘の辺りまで四つに分かれた大岩の口の中に吸い込まれていた。

その注連縄や御札の貼られた大岩の上に乗って何やら複雑な呪文を唱えながら表情に気合を入れる油儀の横には、激しく揺れる大岩に長く変幻自在に操れる髪を伸ばして落ちないように体を固定する

蓋口静香と、両手両足でゴキブリの如く腹ばいで大岩にしがみ付く一七五一家の黒童子の姿があった。

三人が乗る大岩は、十字に割れる様に口を開いて中から吐き出された四本の注連縄で、ガシャドクロの巨体を飲み込もうと絡みつきながら引き寄せていた。

その注連縄は、両手で印を組み術を唱える油義の声が大きくさせるにつれて、ガシャドクロを引き寄せる勢いと力が一層増すと同時に紫色の怪しい光を強めていく。

左腕を肘の辺りまで封印石に飲み込まれているガシャドクロが、自由が残るもう片方の腕で拳を握り、封印石を殴りつけようと幾度も拳を振るうが、見えない透明な壁によって封印石まで攻撃が届かないように邪魔をされていた。

「無駄だよ。この封印石は、君専用に長いこと時間を掛けて私自らが準備をしていた特製でね。君のどんな攻撃も受け付けないようになっているのだよ」

両手で印を組む油義が、見えない壁に対して必死に拳を振るうガシャドクロの姿を見ながら鋭い眼光でそう言った。

それでもガシャドクロは見えない壁を殴り続けて、辺りに座布団でも叩くような音をボフボフと響かせていた。

一方、地上で愛刀の刀身を黄色く輝かせながら泥濘に足を取られる事なく力強く踏ん張った八尾弦徳が、大岩で封印されないようにと抵抗をしているガシャドクロを見上げて、鞘から抜かれている刀を構え攻撃を繰り出そうとガシャドクロの隙を狙う。

「喰らえ！、廃字刀苦羅々・五方星閃光斬激！！」

八尾弦徳は、刀の先から放たれた閃光で何も無い空中をキャンバス代わりに五方星を可憐にも一筆で描く。

そして、五方星の中央に剣先を突き入れた後に頭の上でクルクルと皿回しの様に回して、五方星に回転力を付けると巨大な手裏剣の如くガシャドクロ目掛けて投げつけた。

回転しながら飛び行く光の五方星は、ガシャドクロの右手と脇腹の間を無理やり通り過ぎて、右手首を切り落として脇腹にも深い傷を刻み込む。そして空の彼方へと消えていく。

「がしゃがしゃがしゃーーん！！」

その一撃で、悲鳴と思われる大声を上げたガシャドクロが、油儀の操る封印石との距離を縮めて、吸い込まれている腕を更に深くまで飲み込まれていく。

しかし、五方星によって開かれた傷口からは、ドス黒い妖気が血液の代わりに噴出していくが、その傷口も直ぐに再生を始める。

八尾弦徳の技にガシャドクロの切り裂かれた脇腹の傷は、既にふさがり始め、切断された右手首も生え替わり始めていた。

恐るべき無限の再生力である。

地上で八尾の攻撃を見ていた天野太陽が、長いポニーテールと泥で汚れた白いコートを靡かせながらガシャドクロの身長よりも高い

位置へと飛び上がっていく。

そして、臍がチラチラと見えるタンクトップの前で両手を組むと、ホットパンツから伸びたシャープな足を見せびらかすように空中で仁王立ちをしたままガシャドクロを見下しながら笑ってい始めた。

「にょほほほほほ～～、どんどん行こうじゃあないか！」

そう叫びながら炎の翼を大きく広げて空中に浮遊していた日照り神が、天に向けて細い両手を伸ばすように上げると何やら術を唱え始める。

すると日照り神の頭上で火球が生まれ、その火球はどんどんと巨大化してメラメラと音を立てながら太陽のような姿へと変わっていく。

「喰らえばいいさ、超お元気玉！」

日照り神は、適当に付けたのではないかと思う技の名を叫びながら、巨大化した太陽の如き火球をカシャドクロの背中を目掛けて投げつける。

大気圏に突入して燃え始めた隕石の様に焼け付く煙の尾を引きながら飛んでいった火球が、ガシャドクロの背中に激突すると爆弾の様に爆発を起こして爆炎を辺りに飛び散らした。

「がしゃがしゃがしゃーーん！！」

ガシャドクロの背中で爆裂した火球に合わせて、ガシャドクロが悲鳴を上げた。そして、背中から焼け焦げる臭いと煙を上げてよろ

めくガシャドクロが、また油儀の封印石へと引き寄せられる。

もう既に肘を超えて肩口の辺りまでガシャドクロの左腕は、喰らいついた封印石に引きずり込まれていた。

「水虎、渦潮功術……」

静かな声で呟いた無常水越斉の足元から湧き出すように噴出した大量の水は、そのまま激しい渦潮に変わると巨大なコマの様に回転しながらガシャドクロを目掛けて飛んでいく。

そして渦潮のコマはガシャドクロの正面からぶつかると、ガリガリと音を立てながらカシャドクロの胸の部分を激しく削りとるように回り続けて、その部分から透明なジェルがそぎ落とされた肉片の様に辺りに飛び散っていく。

その間にガシャドクロと封印石の間合いは目と鼻の先までに縮まる。ガシャドクロは見えない壁に右手を突いて抵抗していた。

その光景は、ガシャドクロの封印が間も無くである事を周りの者達に予感させていた。

<　スケルトン・12　>

封印に抵抗するガシャドクロの姿は、周辺で見ている者達にも完全封印まで、あと僅かではないかと見てとれた。

幾ら巨体で力が強く再生能力が異常に早くても、封印されてはたまらないといった様子でガシャドクロは抵抗を激しく続けていた。

「あいつ、何してるのよ！」

その封印に抵抗しているガシャドクロの様子を細い松ノ木の陰で隠れて見ていた猫田龍信に気が付いた蓋口静香が、イラついた表情でいきなり封印石の上から龍信を怒鳴りつける。

「ちょっと龍信！、貴方もちゃんと頑張りなさいよ！」

ただでさえ二人の関係は此処最近ギクシャクしていて静香は納得していないのに、此処にきて更に他の者達が真剣にガシャドクロの封印に手を貸しているところで、一人こそこそ木の陰に隠れている姿に気付き、それが情けなくも見えて黙っていられなくなったらしい。

「えー……」

静香の声に対して露骨にやる気の無い声を漏らす龍信。

それを見て封印石の上に居た静香は、眉をピクリと引きつらせた後に、浮遊しながらガシャドクロを衝え込んでいた封印石から飛び降りて、恋人の龍信の元へと長い黒髪を炎の様にメラメラと揺らし

ながら赤いハイヒールを泥で汚すのも気にせずに、のしのしと近づいていく。

その形相は明らかに怒りの表情で怖いものだった。

「ちょっと龍信、あなたヤル気あるの!?　皆だって頑張ってるんだから、貴方も手伝いなさいよ!」

「えっ、えっ!」

何故か苛立つ静香に戸惑う龍信は、近寄ってきた彼女に背を丸めて怯える様な態度を取ると、隠れていた細い松ノ木にその身を更に隠しながら怒りに燃える静香を覗き見る。

「どうしたのですか静香さん、そんなに気を荒立てて?」

「どうしたもこうしたも無いわよ!」

静香が龍信に詰め寄ると、抵抗を繰り広げるガシャドクロ以外の者達が、何事かと二人に視線を向けていた。

「大体何よ、あの風俗の領収書とかは!」

「えっ!　あれは誤解ですって言ったでしょうが!　それに今はそんな事を言ってる場合じゃあないでしょうが……」

松ノ木に隠れてこそこそしている龍信を見て何故か此処に来て一ヶ月分の怒りが爆発した静香が、辺りの視線を気にする事無く龍信に怒りをぶつける。

「じゃあ、何で仕事以外に会いに来てくれないの？　電話だってこっちからしないと掛けて来る事もないしさ！」

「それは、ほら、最近九十九神の事件が頻繁で！　静香さんだって事情は分かるでしょう？」

「分かんないわよ！」

何時もクールな静香が興奮していると、困った顔をした龍信が必死に宥める。

「あいつら何をやってるんだ……」

少し離れた場所から二人を見ていた鍋中が、ハンチキャップのつばを上げながら呆れ顔でそう呟いていた。

「じゃあ、この化け物を封印したら一緒に何処か美味しいお店に食事にでも行きましょう、ねっ、ねっ」

「それって、ちゃんとしたデートの誘い……？」

「ええ、そうですよ！、デートですデート、ちゃんとしたデートのお誘いですとも！！」

巨大な骸骨の妖怪が暴れまくり戦場の様に変わった庭園で、何故か龍信は恋人とのデートの約束を半強制的に結ばされると、デートの誘いを受けた静香は先程までの怒りの表情をうぶな少女の様に変えて顔を赤らめて、モジモジしながら松ノ木の影に居る龍信の袖を摘んで引っ張った。

「じゃあ……、食事のあと景色の良いホテルに連れてってくれるなら……」

「……くれるなら？」

龍信は自分の袖を可愛らしい仕草で引っ張る恋人の言葉の続きを、何を言うのかと生唾を飲み込みながら細い目を見開き期待した。

「龍信が着てって言ってた服……、二人っきりなら着てあげても良いわよ……」

「マジですか！！！！！！」

龍信が静香の台詞に拳を握りしめてショートアッパーのようなガッツポーズを取ると、その前で静香は顔を赤面させながら前髪で顔を隠すように俯いていた。

「じゃあ、この前、ネット通販で買ったやつがもう二着あるからそれも持っていっていい！？」

はしゃぎながら静香の顔に詰め寄る龍信がそう言うと、静香は龍信の視線から逃れるように横を向きながら小さく頭を縦に振って見せた。

その恋人の様子を見て龍信は、今度は両手で拳を握って完全勝利を勝ち取ったかの如く二度目のガッツポーズを取ってみせる。

「よーーーし、皆さん、とっととガシャドクロを封印しましょう！！！」

片手をグルグル回しながら松ノ木の陰から出てきた龍信が、視線を此方に向けていた仲間達にそう言って気合の入った声を飛ばす。

「静香さんは、危険ですから此処で待っててください！」

一度振り返って愛らしい恋人にそう言った龍信は、キラリと歯を輝かせて満面の笑みを作って見せる。

「……うん、……いってらっしゃい」

その龍信に静香は、未だに顔を赤らめながら恥ずかしそうにしながらも、恋人の出陣を見送った。

封印石の上。

「あのバカップル……、人前で何やってるんでしょうかね……」

「ワシに訊かないでくれ……」

呆れた顔をした黒童子の質問に油儀は、そう言って返答を困った表情で拒んでいた。

<　スケルトン・13　>

珍しく猫田龍信の気合のこった声。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前！」

それは、退魔の早九字。

龍信は、左手の人差し指と中指を立てながら口の前で拝むと、同じく右手の人差し指と中指の二本を使って、筆代わりに眼前の空中へと早九字の掛け声と共に五列四行の格子を描いていく。

そして、早九字が唱え終わると龍信の背後に、何処からともなく現れる複数の槍が現れる。

その槍は、空中に浮遊したまま刃先を発射台に準備されたミサイルの様に斜めに向けると、ガシャドクロに狙いを一斉に定めた。

「本日分の妖力は、これで打ち止めですので、往生してくださいよ！」

龍信の台詞の後に、一斉攻撃の如く発射され飛んでいく槍のミサイルの数々が、ガシャドクロの体のあちらこちらに突き刺さり、ガシャドクロに悲鳴を上げさせた。

「本気を出した龍信は、やっぱりカッコいいわ！　きゃは」

そんな龍信を見て静香が、こっそりと恋人をはしゃぎながら褒めていた。

猫田虎二が、これだけ真面目な姿を見せるのは、年に一度有れば良いほうだろう。それだけに今の龍信の姿は、静香からみて凄く輝いて見えた。

一方、悲鳴を上げるガシャドクロは、肩よりも深く封印石の十字の口に食べられる様に、更に吸い込まれていった。まるで四次元ホールに吸い込まれるガシャドクロの体は、ありえない形に変形して首の直ぐ横まで吸い込まれている。

「ふふふふっ、もう昔とは違うのだよ」

封印石の上で油儀が、印を組みながら怪しく笑う。

「うし、最後の一押しでもしてやろうか……」

ハンチキャップ越しにガシャドクロを睨む鍋中が、いきなりワイヤーにでも吊り上げられた映画のスタントマンの様に、凄い勢いで真っ直ぐ空中へと飛び上がっていく。

そして、ガシャドクロの頭ぐらいの高さで静止した鍋中。そのトレンチコートの袖や裾から、大量の枯葉が紙吹雪のように雪崩出ると、枯葉の雨となって降り注がれた。

その雪崩出た枯葉は、見る見る内に人型を作りあげていくと、間も無くして枯葉で出来た巨大な魔人が完成する。

その枯葉の魔人の肩に鍋中が腕を組みながら立っていた。

「技の鍋中、最大の大技。これが枯葉入道の術だ！」

そして枯葉の巨人は、どしんどしんと音を立てて前進していくと、ガシャドクロの背後に近づき封印石に体を吸い込まれ身動きが取れないガシャドクロの頭を、ただ力任せに殴り付けた。

「そりゃ、そりゃ、そりゃ！」

枯葉で作られた拳が、幾度も、幾度も、ガシャドクロの頭を殴りつける音が響いた。

しかし、なかなかガシャドクロは、封印石に吸い込まれない。まるで掃除機の口に詰まった大きなゴミの塊の様になっていた。

「なかなか往生際がわるいな！」

じれったくなった鍋中が愚痴る。

「そこを退け、鍋中……」

その声に、枯葉入道の肩に立っていた鍋中が振り返る。

「わしが、押し込んでやるわい！」

声の主は、短距離走で行うクラウチングスタートのホームを取っていた一七五だった。

「オメー、起きてたのか」

「ああ、今さっきな……。気絶している間に夢を見ていたよ」

「夢？」

クラッチングスタートのホームのままそう言った一七五に、鍋中がこの状況で何を言い出すのかと首を傾げていた。

「五百年前のあの日、片目と片手を失ったあの日の事よ」

「十六夜……剣兵との戦いか？」

二人の会話を聞いていた八尾弦徳が、聞き覚えの無い名前を聴いて誰の事なのかと思っていた。

「ああそうだ。やはり我々三本柱の過ちの代償は、高くつきすぎたな……」

クラッチングスタートのまま俯く一七五。

「その代償……、まだ払い終わってねえぞ……」

「そうだな、全ては若様しだいか……」

俯いていた一七五が頭を上げてガシャドクロを睨む様に狙いを定める。このまま勢いをつけてつっこむ気なのだろう。

「過去の代償を払うのが、後を告ぐ若者とは……、情けない話だな」

そう言って鍋中は、一七五の為に道を開けた。

「おぉおおおらららぁぁぁあああぁぁ！！」

鍋中の枯葉入道がガシャドクロから離れると、一七五が気合と共にスタートを切る。

巨大なバッタ妖怪が大地を蹴ると、辺りが激しく揺れた。そして助走の勢いが付いたところで、一七五は必殺の大技を繰り出す。

大きく股を開いてガシャドクロの後頭部を狙った八九三キック。

まるで格闘技なんぞやった事もないヤクザが、自動販売機を蟹股のキックで蹴り倒そうとするような一撃。ヤクザの専売特許の八九三キックである。

一七五も極道。この八九三キックは、一七五が昔から使う必殺技であった。

八九三キックをガシャドクロの後頭部に命中させると、一七五の巨体がキラーンと輝く。

「あれは、もしかして！」

輝いた一七五の姿を見て、枯葉入道の肩の上で鍋中か声を上げた。

それは『一七五乱舞』と呼ばれる力の一七五が持つ伝説の超必殺技。それを数百年ぶりに見る鍋中は、この勝負の勝利を確信した。

「どぉぉぉらぁぁぁぁぁぁ！」

八九三キックの命中を発動条件として開始した一七五乱舞。

パンチ、パンチ、キック、パンチ、キック、パンチ、キック、キ

ック、パンチ、パンチ、パンチ、パンチ、パンチ、キック、パンチ、チョップ、パンチ。

大袈裟に言ってはいるが、やっている事はただのタコ殴りである。しかし、一七五のタコ殴りを喰らったガシャドクロの頭が封印石に吸い込まれていく。

「終わったな」

鍋中が呟いた。

そして、ガシャドクロはそのまま上半身まで封印石に吸い込まれると、最後は両足をバタつかせながら封印石の中へと姿を消していった。

「これで、終わりじゃ……」

油儀の言葉の後に、ゆっくりと十字に開いていた封印石の口が閉じると、二つの注連縄がXの字に封印石の口を縛り上げる。

「会長、やっと終わりましたね」

「ああ、下らぬ手間を掛けさせおって……」

油義の斜め後ろで封印石にへばり付いていた黒童子の言葉に、封印を完了した油義が安堵の表情でそう答えた時である。

轟音と共に、油義邸の瓦屋根を突き破って一本の竜巻が吹き上げる。

そして竜巻は二十メートル程の高さまで伸びると、先端が激しく爆発して火花の様に炸裂した。

<　古びた真実・1　>

「なんだ!?」

爆発した火花が竜巻に吸い込まれて消えると、その緑色の竜巻は力を弱めて縮んでいった。

「あれは春婆怒!」

小さくなる竜巻の中から瓦屋根に着地した緑色の甲冑を身にまとった男を見て、鍋中と油儀の二人が春婆怒の名前を、ほぼ同時に口に出した。

屋根瓦に着地した男は、気を失った埃だらけのスーツを着た男を肩に背負っていた。白い怪人の中身だ。

そして、背負った男を屋根から転げ落ちないようにして下ろすと、ゆっくり辺りを確認するように見回していた。

「ん、こいつら?」

タケシの居る瓦屋根の上に、次々と見知らぬ者達が飛び乗ってくる。気が付けはタケシは左右から数人の者に挟まれる形となる。だが、タケシはあせる事無く冷静に状況を見極めるように観察した。

右方向には、ボロボロの白いロングコートの女と、和風の着物姿で長い黒髪の男が刀を片手に立っていた。

左方向には、日本刀を持ったスーツ姿の誠実そうな若者と、茶色いトレンチコートとハンチキャップが印象的な中年男性の姿があった。それと灰工場で助けられた黒覆面の上から銀縁眼鏡を掛けたスーツの忍者が、二人よりも遅れて瓦屋根に飛び乗ってきた。

更に庭園側からは、巨大なバッタ男が、地鳴りを鳴らしながら歩いてくる。

その巨大なバッタ男の横を、紋付袴の老人と、赤いレディーススーツの女性に、黒い学生服の少年が乗った大きな浮遊石が、タケシの居る方へと向かってゆっくりと飛んでくる。

「囲まれたって感じだな……」

「そうじゃのぉ」

タケシの言葉に、まだ余裕でもあるような口調で春婆怒が答える。

「ふぅん、この人、僕の獲物を横取りしちゃったな」

ボロボロのロングコートの女が、長いポニーテールを揺らしながらそう言うと、タケシの足元で気絶している男を詰まらなそうな冷めた視線で見ていた。

そうこうしていると、屋敷に接近した大岩の上から油儀が、タケシ達に向かって声を掛ける。

「久しぶりだな、春婆怒……」

浮遊している大岩の上で胡坐を掻いている油儀の台詞は、タケシ

ではなく春婆怒に向けられていた。

その油儀の台詞に、八尾の表情に力が入る。

「やはりこいつが……」

呟く八尾の中に、古い記憶が蘇って来る。

幼いころの記憶。

何度も見た悪夢。

その中に出てくる母の仇。

若干、装甲の形が記憶と違うが、それは使い手の影響であろう。

間違いなく、今、目の前に居るのは……。

「こいつが母の仇！」

八尾が鞘に収まっている刀を、ガチャリと音を立てて腰に添える。

攻めるつもりだ。

「おいおい、いきなり殺気立つなよ……」

八尾の行動を見てもタケシは身構える事無く、斜めになっている

瓦屋根の斜面で肩膝を曲げて立っていた。ちょっと気取った体制で。

「黙れ、下郎！」

「下郎扱いかよ！」

八尾が姿勢を落とす。

仕掛ける気である。

「居合いか……」

それを見て、やっとタケシも身構えた。

「廃字刀苦羅々・閃光斬激！」

八尾の必殺技が放たれる。

「あの距離から届くのか！」

まだ距離の有る間合いで仕掛けた事にタケシが驚く。

居合い抜きと予想していたのに、まさか飛び道具で来るとは予想外だったようだ。

烈風の如く抜かれた八尾の剣先から黄色い閃光が放たれると、屋根瓦を焦がしながら残激が迫っていく。

「待ちなされ若様！」

静止する声と同時に、タケシと八尾の間に、巨大な手の平が壁の様に割って入る。

そして、八尾が放った閃光が、邪魔をした巨大な手の平を焼付け

ながら傷つけた。

「くぅぅ……！」

「親分！！」

封印石の上に居る黒童子が叫んだ。

何故か二人の間に割って入った一七五が、焼き切られた手を押さえながら苦痛の表情を作っていた。傷口から緑色の液体が零れる。

「一七五、何をしている！」

油儀の声を余所に、切り付けられた一七五の手から、ダラダラと大量の血液が、苦痛の声と共に流れ落ちていく。

そして、技を放った八尾も、しばらく唖然としながら一七五の大きな顔を、驚きと戸惑いの混ざった心配そうな表情で見ていた。

「は、春婆怒に手を出すのは、わしが許さねえ……」

一七五が、痛みを堪えながら言うが、全員が何を言っているのかといった顔で、明らかに混乱していた。

「一七五、貴様、まだそんなことを！」

油儀が怒鳴り声を上げる。

「一七五の親分。昔の事は聞いています……しかし」

そう言って八尾が刀を鞘に納める。

その表情は、先程までの凛々しくも勇ましいものに戻っていた。

「昔、春婆怒に、命を助けられたとか……」

痛みを堪える一七五を、八尾を刺す様に視線で睨みつける。

「ああ、そうだ……」

八尾の話に、そう一七五は返答を返した。

「恥を知れ！！」

一七五の回答に、今までに無いほどの大声で八尾が怒鳴る。その声に関係ない龍信と黒童子の二人が肩をヒクリと強張らせて怯えるように反応していた。

「恥を知るべきは、我らだ、若様！！」

しかし、八尾の怒鳴りの声に負けない大声で、一七五も怒鳴り返す。その一七五の声に、またもや二人が驚いて身を丸めていた。

「こやつが！、春婆怒が何をしたと言うのだ！！」

怒鳴る様に一七五が問う。

「母を喰らったではないか！」

八尾の即答。

「何故、奥方様は春婆怒に食われた！」

更に一七五が問う。

しかし、先程までの勢いを無くして、一瞬だが八尾の回答が止まる。

その様子を、他の者達は黙って見ていた。

「……戦いに、戦いに敗れたからだ」

八尾の返す声は、今までの様に力強いものでは無かった。あきらかに歯切れの悪いうえに、自信を失ったかのような感じであった。

「ならば、何故に奥方様は春婆怒と戦った！？」

「……それは、それは春婆怒が、人間にも妖怪にも害をおよぼす九十九神だから」

先程の回答の再よりは、自信のある声ではあったが、それでも腰の引けているような声であった。

「春婆怒村に引きこもり、守り神として静かに暮らしていてもか！？」

「それでも九十九神は九十九神！」

まだ、仲間内での言い争いは続きそうだ。

それに呆れた様にタケシは、首を下げてうなだれていた。

「この日本にやってきて、自分から人間も妖怪も襲ったことのない九十九神でもか！」

「それは、噂。真相は定かではないでしょうが！」

もう、売り言葉に買い言葉。子供の言い争いレベルに周りからも見えていたが、誰一人として間に入ろうとはしなかった。

しかし、そこに、女の声が割ってはいる。

「本当じゃ。わらわは、自ら人間も妖怪も襲ったことなんぞないぞょ」

妖力共有するタケシの横に、ホログラフのような春婆怒の顔が映し出されてそう言った。

「わらわは戦争の武器が九十九神化した物。常に戦う際は、相手に闘争の意志が有って始めた際のみじゃ。奇襲は趣味では無いわ。そして使い手も、それなりの誇り有る者を選ぶぞよ」

己の誇りを語る春婆怒に、全員の視線が集まる。そして春婆怒の語った言葉は、偽りの無い真実である。

「そのような貴様の言葉、誰が信じるか！」

春婆怒の言葉を掻き消したいのか、再び八尾が怒りの表情で怒鳴り声を上げる。

「もう……、もうよ、いいんじゃねえか油儀」

今まで黙っていた鍋中が口を開いた。

その表情は、珍しく弱々しいものであった。

「もう、八尾に真実を話してやろうや。なぁ、油儀」

「……」

皆の視線が、鍋中から黙ったままの油儀へと流れるように移る。

「どういう事ですか……、油儀会長……」

鍋中の言葉に疑問を持った八尾が、油儀に問いただす。

その八尾の顔は、自分は真実を知らないと言う表情をしていた。

「真実ってなんですか！」

八尾弦徳の怒鳴り声。

タケシを囲む輪の外で、事の流れを見ていた龍信の顔が、覆面の下で楽しそうに微笑む。それに気が付いた静香が、油儀の横で睨むように恋人に視線を飛ばす。

「なんか、面白い話になってきたな」

肩を僅かに震えさせながら誰にも聞こえない声で龍信がそう呟くと、静香が更に髪の毛をワラワラと揺らしながら視線だけで龍信の

態度を注意しようとしていた。

「油儀、話してやれ……」

「しかし、鍋中……」

まるで罪を擦り付け合うような二人にじれったくなったのか、春婆怒が言い出した。

「ならば、わらわが語ろうかぇ？」

「貴様に語らせるくらいなら、ワシが話すは！」

春婆怒の言葉に癇癪を起こしたような大きな声を上げると、ついに油儀が観念したように語り始める。

そして、語られる五百年前の出来事。

<　古びた真実・2　>

「弦徳様の母上、九尾双葉様が束ねる我らの百鬼夜行が、妖怪連合に加盟して百年の時が過ぎた頃の話じゃった……」

話し出した油儀の顔は、何時も以上に岩の如く冷たく見えた。

「その頃はまだ、鍋中と一七五の二人も、若く勇ましかった……」

「余計なお世話だ」

一七五が油儀に、余計な事は話さなくて良いと声を上げる。

それに続いて鍋中も口を開いた。

「我々のような動物などが長生きして変化した妖怪には、普通の生き物のように寿命が存在する。もちろんその長さは尋常ではねえがな……」

「そこに居るあぶらすましのように、噂話から具現化した妖怪は別じゃがのぉ」

三本柱の話に春婆怒が口を挟む。

「へぇ～～」

春婆怒までが話しに混ざり、まるでタケシ一人への勉強講座の様に会話は進むが、タケシはそれに詰まらなそうな返事を返して聞いていた。

「話を戻してもらえませんか……」

イラついた様子の八尾が、周りを睨みながら油儀に話を急がせた。その睨みに押されて、油義が話の方向を戻す。

「その頃、我々三本柱と呼ばれた三匹の妖怪は、虎町の妖怪連合の主である九尾双葉様に使えると同時に、人間に変化して、虎野町を支える役職について動いていたのじゃ」

一七五が、一番手に語る。

「ワシはヤクザで十手持ち。二足のわらじだ」

鍋中が、二番手に語る。

「俺は、ちょんまげを結って、奉行をやっていた」

油義が、三番手に語った。

「ワシは城で老中をやっておっての」

一七五、鍋中、油儀の順番で、昔の自分の職を語った。

「やっている事は、今とあんまり変わりませんね」

猫田龍信が小さな声でちゃかしていたが、殆どの者には声が届いていなかった。わざとであろう。

「それは聞いたことがありますし、幼かったとはいえぞんじていま

す。それよりも……」

弦徳は話の先を急がせたい様子である。イラつきの表情を隠してはいなかった。

「うむ、手っ取り早く何故に我々妖怪連合と春婆怒が、こうも戦う事になったかを話そう……」

過去を知らない若い者達の視線が、宙に浮く封印石の上で胡坐を掻く油儀に集まる。

「……それは、双葉様の夫、弦徳様の実の父上にあたるお方が……、否、そやつが発端であった」

「父上が……？」

突然出てきた父の話。

八尾弦徳の記憶の中には、確かな父親の記憶が残っていた。

父は人間だった。

虎野町の当主で、一国一城の主。

侍としての誇りが高く、武芸に長けた厳しい人物であった。

武に関しては、とても厳しい人物だったことが、強く記憶に残っている。

だが、弦徳には、母の様には好きになれなかった。

それは、その厳しさからは優しさが伝わってこずに、幼少時代の弦徳に対して、強くなることだけを求めていたからだ。

その父も、母と春婆怒の戦いの後に亡くなった。城が焼け落ちた際に受けた火傷が原因で、まもなく死亡したと油議に聞かされていた。

母の死によって絶望的になり自分を見失った弦徳は、暫くの間、この地を離れて妖怪連合の本部で世話になることになった。

そこで、自分が妖怪であることを聞かされ、妖怪としての生き様を学び、妖怪としての戦い方を習った。

そんな日々の中で弦徳は、父の死を聞かされたのだ。

だが、母の死の際に受けたようなショック程は受けずに、冷静に現実を受け止められた。

そして弦徳は、その日を境に名前を変えた。

『一尾弦徳』

それが、初めて妖怪として自覚した彼の名前だった。

母の仇を取る理由は『愛』。

父の仇を取る理由は『義』。

そう思う気持ちと共に弦徳の尻尾は、長い月日と厳しい修行の末

に、その数を増やしていった。そして妖怪としての実力を、着実に上げていった。

そして、今の名乗る名前は『八尾弦徳』。

完成まで、あと僅か。

半妖から一人前の妖怪まで、あと僅か。

九尾まで、あと僅か。

「その親父ってのが、如何した？」

タケシがふてぶてしい声を出して質問を投げかける。誰にと言った感じではなく、誰でも良いから答えろと言った感じであった。

敵の妖怪達に囲まれているというのに、恐れを知らない堂々とした態度。その態度に八尾が睨む視線を飛ばす。

その横で春婆怒のホログラフが話を始めた。

「わらわも初耳だのぉ。そんな男が話しに上がるのは初めてじゃ」

昔話の当事者の一人である春婆怒ですら知らない人物。その人物の存在に関して、誰もが話の続きを訊きたいようすであった。

八尾も何故に今頃になって父の存在が、話に上がって来たのか疑問に思っていた。

「それはそうだろ、今まで我等三人が語らなかった真実は、その男

が原因だからだ……」

そう語るトレンチコートの鍋中には、悪意が籠っていた。

鍋中は、主の九尾双葉の夫であり、虎野町のお殿様であった人物を「男」と呼び捨てにしていた。

「あの男は……、八尾の父親は、九十九神の使い手だったのじゃ……」

「えっ！」

誰とも目を合わせようとしない油議がそう言うと、周りの若い者達から驚きの声が上がった。

<　古びた真実・3　>

「ちょっとまて、妖怪と九十九神の使い手の夫婦ってよぉ、ちょっとばかし可笑しな組み合わせじゃあねーか？」

タケシの言う通りだと、他の者達も同じ事を思っていた。何故に妖怪のボスと、九十九神の使い手が夫婦なのだと。

その驚きの声に、またもや黙り込む油義。

「お前が言うと言ったんじゃあ、油儀の～。はっきり言ってやれ」

しかし、一七五にそう言われた油儀は、大きく息を吸った後に溜息を大きく付いた。

そして、決意がついたのか、重い口調で話しだす。

「双葉様と我々三本柱は、殿の使う九十九神に、他の九十九神を食わすために動いておったのじゃ」

「何だよ、それ？」

油義の言葉の直ぐ後に、タケシがさらりと言った。

しかし、他の妖怪の若者達は、目を点にさせて驚きの表情をしたまま固まっていた。

自分達の先人である三本柱が、そんな事を過去に行っていたとは信じられない様子だった。

「我々三本柱は、他の地から九十九神を探し出すと戦いを挑み、弱らせたところを殿の九十九神に喰らわせていたのじゃ……」

「そんな外道な……」

油儀の話に対して八尾弦徳が言った一言は、彼ら妖怪変化から見て正しい台詞だった。妖怪達に取って九十九神に味方すると言う事は、仲間の妖怪達を喰らった敵に味方する事。それ、即ち外道。

「何で、九十九神に妖怪が手を貸すんだ？」

タケシが当然の疑問を問う。皆か思う疑問だった。

「それは簡単な理由。九十九神が百計神になる際の褒美が望みじゃ」

「褒美？」

タケシが首を傾げると、横の春婆怒のホログラフィが「あっ」と言って口に掌を当てた。その仕草にタケシが気付く。

「なんだお前、使い手なのに褒美も知らなんのか？」

巨大な姿をした一七五が、タケシを指差して言った。

「春婆怒、てめ～、まだ何か俺に隠していやがるな！」

「す、すまんのぉ。そう言えば褒美に付いてまだ話していなかったかのぉ～……」

春婆怒のフログラフィはわざとらしくそっぽを向くと、目を泳がせた。

どうやら『褒美』に付いては、本当に言うのを忘れていただけの様だ。そんな春婆怒のホログラフィをタケシが睨んでいた。

「百計神の褒美とは、人間、妖怪、九十九神を百の数だけ喰らい終わった九十九神が、最後に使い手の願い事を叶えてやる事」

八尾がタケシを睨みながら説明した。

「その願いを叶えることで、三種百食の本能は真の終止符を告げるのじゃ……」

バツの悪い顔で言う春婆怒のホログラフィ。

「願い事……？」

「そう、どんな願い事でも叶えてくれる」

まだ、八尾はタケシを睨んでいた。タケシは春婆怒のホログラフィを睨んでいた。

「まあ、何でもと言うと嘘になるかのぉ～」

やっとタケシの方を向いた春婆怒のホログラフィが、『褒美』について説明を始めた。

「世界制服とか、人類の半分を自分の物にするなどの壮大な願いは無理じゃが。不老や不死やら、若返らせるとか、強くなりたいとか

……。まあ、その程度の否現実的な願いならば叶えられると思うぞよ」

春婆怒の説明からタケシは、案外アバウトな感じでしか願いは叶わないと察する。

「お前、そう言う大事な事は、早く言えよ……」

既にタケシの怒りは冷めて、変わりに呆れた空気を放っていた。

タケシは、他人に叶えて貰うような願いにはあまり興味が無いようだ。

夢や希望は、自分の力で勝ち取ってこそ価値が大きいと考えるタイプだからだ。ただ、タケシが怒っていたのは、忘れていたと言い訳をしているが、その『褒美』に関して春婆怒が隠すように伝えていなかった事が腹正しかったようだ。

「そう、その願い事が問題だったのじゃ……」

油義が、昔話の続きを再開した。

「殿は九十九神に唆されて、奴の三種百食の本能を手伝い『褒美』を得ようとした」

「それに、生前の双葉様やお三方は、手を貸したと？」

銀縁の眼鏡を中指で直した猫田龍信が口を挟む。

「双葉様は、殿への愛故に手を貸し、ワシら三本柱は忠義故に双葉

様に手犯したのじゃ」

「そして、わらわを襲ったと言うのじゃな」

「そのとおりじゃ……」

「だが、返り討ちか」

タケシが余計な一言を口にすると、八尾が怖い形相でまた睨む。

しかし、八尾の刃物のような視線を無視して、頭よりも高く片足を振り上げたタケシは、強烈な踵落としを屋根瓦に叩き落した。

屋根に敷き詰められた瓦が波打つように揺れると、タケシの側に開いた大きな穴の中へと、数枚の瓦が崩れ落ちた。

「やっぱりよ、春婆怒は降りかかる火の粉を払っただけじゃねえかよ！」

タケシの怒りの声が、衝撃と変わって辺りに飛び散る。

「酬いは受けた！」

油義が、タケシに負けないぐらいの大きな声で反論した。

酬いとは主の死。

しかし、タケシは引かない。

「それは酬いじゃあねーよ。ただ、返り討ちにあったって言ってる

だろが！」

同じ文句を繰り返すだけだった。

「そうではない！」

「何が違う！」

「双葉様ではない、殿の方だ！」

タケシと油義の言い争いの声が、ここからテンションが下がる。

「殿様ってのも、焼けどで死んだんだろ……？」

「否、焼けどでは死んでは……、いぬのじゃあ……」

油義の声が、急に小さくなった。そして、真実を知る鍋中や一七五の顔は曇っていた。

「死んでない？。じゃあ、父上は、何故に死んだのですか……？」

父の死因を問う八尾だが、三匹の老いた妖怪達は、彼とは顔を合わせようとはしなかった。

「死んでは、おらんのじゃよ……」

「えっ……？」

「まだ、生きておられるのじゃよ、弦徳様の父上は……」

「な、何ですと！！」

すでに父は死んでいるものと思っていた八尾の顔は、驚きながらも唖然としていた。

「我々三本柱は、双葉様亡き後も、殿の九十九神に別の九十九神を与え続けた」

話す油義の顔は、悲しそうにも怒りの表情にも見えた。ここからが本当の古びた真実。

「それは、殿が『褒美』を、双葉様の死者復活を望むと約束したからだ……」

油義の表情から、悲しみよりも怒りの表情の割合が多くなっていく。

「そして我々三人は、双葉様亡き後も九十九神を捕まえては、殿の九十九神に食わせ続けた。しかし、あの男は……、約束を破ったのじゃ！」

油義の表情が、完全に怒りの色に染まりあがった。

「三種百食の本能を終えた後、奴が願ったのは、妻であり、協力を押しまず亡くなった双葉様の復活ではなかった……」

油義が、小さな拳で、自分が座る封印石の頭を悔しそうに叩いた。

「父が……、何を望んだのですか……」

八尾の頭に、死んだと思っていた父の顔がうっすらと浮かんできた。

母に比べて印象に残っている事は少ないが、それでも父。

母の仇を取る事に必死だった五百年。

何故に今まで父の記憶が薄かったか、今になって悩み始めた。

そして思い出す父の言葉。

その一つ一つが冷たい言葉として思い出された。

そして気が付く、「この人には愛されていない、この人は私を愛してはいない」と……。

父は、自分を愛していなかった。

子供ながらに感じていた父への疑惑。それが父の思い出を忘れさせていたようだ。

「父は、母を蘇らせる代わりに、何を望んだのですか！」

嫌な予感が脳裏に幾つも想像できた八尾だったが、覚悟は付いていた。

どんな父の裏切りの事実が待っていようとも話が聞きたかった。

「それは、自分の体を不死に変えること……」

油義か奥歯に力を込めながら答えた。

八尾も、腸が煮えくり返る思いで、手にした刀を強く握り締めた。

八尾は思う。やはり父は、自分を愛してはいなかったと……。それどころか母すら愛していなかったと……。

「随分とアレな殿様だな……」

タケシの言葉に老いた妖怪三匹は、反論することは無かった。それどころか、そんな人間を信じて仕えていた事すら恥ずかしく思う。

<　古びた真実・4　>

「それで父は、今何処に姿を眩ましたのですか?」

まるで他人事のように自分の父の行方を訊く八尾弦徳。母の事を話す時とは、まったく温度が違っていた。

「騙されはしたが、ワシ等とてバカではない。逃がしはしなかったわい」

油義が、人差し指で下を指差した。

「百計神になった九十九神は八つ裂きにして、殿はこの土地の地下深くにある牢獄に閉じ込めたわい」

「もう五百年近く食わず飲まずだ、不死でも流石に干物よ。今じゃあ、動く事も話すことも出来ない。脳味噌まで乾ききっちまってる。もう何かを考える事すら出来ていないんじゃないのか」

一七五が、ざまあ無いと言った表情で言った。

「会えますか?」

「望むなら」

八尾の問いに油義が答えた。

「ただし会うだけですぞ」

「はい、それ以上は望みません……」

鍋中が、ハンチキャップのズレを両手で直しながら話し始めた。

「さて、昔話は此処までにしようか」

その言葉にタケシが警戒を強めると、横に映し出されていた春婆怒のホログラフィが姿を消す。

のんびりとした会話は終わりのようだ。辺りの空気が緊張感を取り戻し始めた。

「やっと再開かな～」

ボロボロの姿で天野太陽が、ニヤリと笑う。

大きな穴が一つ開く屋根の上、そこに集まる者達に緊迫した空気が再び湧き上がる。

その空気にポニーテールの少女は楽しそうに微笑む。そして横の髪の長いクールな男は、手にある日本刀を僅かに鞘から抜いて刀身をキラリと光らせた。

「これで、春婆怒の濡れ衣は晴れて、誤解が解けたから終わりって訳には行かないようだな」

「別に構わん」

タケシの言葉に対して春婆怒は、何時もの様に冷めた口調で強が

って見せた。彼女は誤解されるのに慣れすぎている。

そんな中、タケシの足元で気を失っていたチンピラ風の男が目を覚ました。

「う、うぅぅ……、ん？……ハッ！？」

チンピラは体を起こすと辺りを見回して顔を青ざめた。

「ひぃぃぃ！」

横に立つタケシを見て悲鳴を上げたチンピラは、その場から逃げようとしたが、自分は屋根の上に何故か居て、しかも周りは囲まれていることに気付くとあたふたとしていた。

「うわわぁ、やべぇ、やべぇ、こりゃまずーー！」

立ち上がったチンピラは、辺りをキョロキョロして逃げる隙を窺う。しかし、もちろん逃げる先などない。

「ていっ！」

「うごっ！」

キョロキョロしていたチンピラの隙を突いて飛び掛ったタケシが、その後頭部に可憐なチョップを叩き入れた。

延髄に重い衝撃を受けたチンピラは、ぐらついた後に白目を向いて倒れそうになる。それをタケシが受け止める。

タケシの腕の中でチンピラは、口から涎を垂らして再び気絶していた。若干、タケシは力の手加減に失敗したようだ。衝撃で鼻血を出している。

「じゃあ、俺はこれで帰るぜ」

そう言うと気絶させたチンピラを、タケシは肩に担ぐ。

「ちょっとちょっとキミ～、何を言っているのさ」

天野太陽が、掌に炎の塊を滾らせる。それは、とんずらを許さないとアピールした行動だった。

「父は父、母は母。春婆怒が母の仇である事は変わらない！」

タケシに八尾が、片手に持った刀の先を真っ直ぐに伸ばして向けた。

刀は黄色い光のオーラを湯気の様に上げながら威嚇して、明らかに攻撃の意思を見せていた。

「まあ、それはそうか……」

タケシは呆れたように項垂れた。

「じゃあ、あんたよ……」

チンピラを被いたままタケシは、刀を自分に向ける八尾を指差した。

「日を改めて、決闘しようや」

「け、決闘……？」

タケシの台詞に、八尾の翳した刀が若干下がった。周りの者たちも、何を言い出すのかといった顔をしている。

「そう、男らしくガチで勝負しようぜ。一対一でよ！」

仮面の下でタケシは、楽しそうに笑っていた。その笑みは、タケシの全身から滲み出たかのように、周りの妖怪達に伝わった。

「面白い！」

強く答えた八尾の刀が完全に下がって、この場での戦意が無いことを伝える。

「若様、なりませぬ！」

「黙れ、油義！」

声を飛ばした油義を、睨みながら八尾が怒鳴りつけた。

「あんたが勝ったのならば、俺も春婆怒も殺せばいい。しかし俺が勝ったら、もう二度と春婆怒には手を出すな。この条件が飲めるのなら、俺達は逃げも隠れもしない、お前の好きなときに決闘を受けて立つ」

「良かろう！」

男前な台詞でそう言ったタケシに、八尾が見事にはまっていく。

「若様……」

心配なのか、油義がうろたえていた。そこに鍋中が口を挟む。

「いいじゃねえか油義。もう、この決着は当人たちに任せれば」

「そのとおり、鍋中の言う通りじゃ。もうワシら老兵は見守ろうぞ」

鍋中と一七五の二人が、油義を諭す。

それ以上の台詞を失い油義は、ただ黙ったまま何も言わずに眉間に力を入れていた。

「それで良いなら俺は帰るぜ。俺の居場所は、そこの一七五の親分が知っている」

「え、マジ！」

タケシの言葉に黒童子以外の視線が、一七五に集まった。

そしてチンピラを背負ったタケシは、屋根の端へと歩き出す。

「またれい」

気を取り直した油義がタケシを呼び止めると、その声にタケシの歩みが止まる。

「またれい、その若造は置いていけ」

「こいつか……、もう九十九神は倒した、こいつには用事も無いだろ」

宙に浮く封印石の上に座る油義を、タケシが見上げながら言う。

タケシは、この男を此処に置きざりにしたら殺されかねないと思い連れて行こうとしたが、やはりそうそう甘くはいかないようだ。

「妖怪連合は、妖怪や人間に害になる者を始末すると聞いている。こいつを始末するつもりか……？」

「そうなるかもしれない……」

「ならば連れ帰る」

「解った、ならば命は保障しよう」

「本当か……？」

思った以上にすんなりと進む交渉に、タケシは少々驚いていた。

「しかしだ……」

油義は、封印石の上から庭園を見渡す。その仕草に全員の視線が荒れ果てた庭園に向けられた。

「この庭を見てみい、それに警備の者が何人か奴に殺されている。容易くは許せる状況ではないわ」

タケシは肩に担いでいたチンピラを、瓦の上に乱暴な感じで降ろした。

「分かったよ、煮るなり焼くなり好きにしやがれ。ただし罪を償わせる為にだ、殺すなよ」

そう言ってタケシは、一人で屋根の上から飛び降りた。

瓦屋根に居た他の者達が、それを追うように屋根の端に駆け寄る。

すると下には、何時の間にかモンスターバイクが停車しており、タケシはそのバイクに股がる様に着地してエンジンに火を点けた。

「決闘の日時……。連絡を楽しみに待っているぜ！」

それを最後の台詞として、タケシは荒れた庭園の上を走り抜けると、爆音と共に去っていく。

既に敷地の周りに張り巡らされた七人岬達の結界は解けていた。

タケシのバイクは、三メートルはある瓦屋根の白い塀を軽々と飛び越え姿を消した。

その姿を十匹の妖怪が見送っていた。

「決闘か……、面白い事を言い出す男だな」

そう言い一七五が、巨体を揺らしながらクスクスと笑っていた。

「ところで一七五の親分、何故にあの男の居場所を知っているので

すか？」

猫田龍信が尋ねると、一七五は笑いを止めて龍信を見下ろす。

「猫田……、お前の目は節穴なのか……」

「え……、とっ、言いますと？」

龍信が苦笑いを浮かべながら質問の意味を訊き直す。

「春婆怒の使い手は、お前の事務所の下で、コンビニのアルバイトをしている男だぞ」

「「「「「「え！」」」」」」

今日は、各自驚きが多い一日であった。

<　誘惑のミニスカート　>

桜木家の厨房で、エプロン姿の陽子が一人、大きな寸胴鍋の前に立って何やら料理を作っていた。

寸胴鍋が火に掛けられた焜炉の前に有る窓から明るい光が差し込むと、鼻歌まじりで鍋の中のカレーをお玉で混ぜる陽子の笑顔を、寄り一層と明るく幸せそうに輝かせていた。

寸胴鍋の中はカレー。

明らかに一家三人で食べると三日はかかりそうな量である。だが、殆どは昼時になると喫茶店に来店してくるお客達によって直ぐに無くなる量であった。

桜木家の喫茶店では、ランチタイムのカレーライス大盛り無料がけっこうな評判で、昼時のカレーライスの注文は多い。ただし、体育会系でないと食べきるのが厳しい量である。

カレーのスパイシーな香りが充満している部屋の扉をくぐって陽子の母が顔を出した。

「陽子、ただいま～」

「おかえり、お母さん～」

「あら、陽子、その格好、どうしたの？」

ちょっとした用事で外に出ていた雪絵は、エプロン姿の娘を見て

驚きの声を上げた。

「へへ、どうかな?、似合うかな?」

陽子は母親の方を向くと、片手に持っていたお玉を鍋の中に突き刺すように置いて、エプロンで隠れていた短いスカートの裾を両手で摘みながら可愛らしく舌を出した。その陽子は、照れくさそうな笑みだった。

「あらら~、陽子がスカートを履くなんて何年ぶりかしら……」

実の母ですら見るのが珍しい陽子のスカート。

雪絵の記憶が正しければ、おそらく十年ぶりぐらいであろうか。

小学生の頃に、学校の男の子を蹴飛ばすのにスカートだと不便だと言い始めていらい陽子はずっとスボンばかりであった。

「ちょっと股の間がスースーして変な感じなんだけど、似合うかな?」

白く短いスカートの中から伸びるスマートで艶のある生足をモジモジさせながら母親に問う陽子は、上目使いで母の顔を覗きこむ様に見ると、恥ずかしそうに顔を赤く染めていた。

「そろそろタケシ君を本気で落としにかかるのね、陽子!」

少々鼻息を荒くして娘に問う雪絵は、両拳を握りしめると小刻みに振っていた。

「うん、あの槍女にタケちゃんを取られる訳には行かないからね。もうこうなったら、私のピチピチでツヤツヤのボディーを使って実力行使に出ないとヤバイと思うのよ！」

「良いわよ、良いわよ、女はそれで良いのよ！」

何故か娘のミニスカートに興奮している雪絵は、陽子の両手を握って娘の本気を応援した。

「応援ありがとうお母さん！」

母と娘は涙目でがっしりと抱き合うと、お互いの背中を手の平でパタパタと叩いた。

「なんだったらお母さんが、セクシーなランジェリーの下着を貸そうか？」

「いや、それは結構よ……」

「黒のレースよ、結構高かったのよ。お父さんもかなり気に入って興奮していたわよ」

「いや……、そんな両親の夜の営みの話は聞きたくないから……」

親子は抱き合ったまま続けていた如何わしい会話を静止すると、ゆっくり目を合わせず離れて、カレーの臭いとぎこちない空気が漂っている台所内で黙り込んだ。

そんな空気が流れていると、隣の喫茶店からお客が来た合図のド

アのベルが、カランカランと鳴って報せる。

その音に陽子は寸胴鍋の火を止めると、台所から繋がった店先に急いで足を運んだ。

「おう、陽子ただいま」

喫茶店の出入り口のドアの前に立っていたのは、バイト帰りのタケシの姿であった。

先程まで一緒だった春婆怒は、先にアパートに帰って、タケシの方は陽子にご飯をたかりに来たのである。

「タケちゃんお帰り～」

満面の笑みでタケシを出迎えた陽子は、ミニスカートが見えやすいようにエプロンを外すと、手にあるエプロンを喫茶店の厨房の中にある椅子に投げ、明るい笑みで飛び出しタケシの元に駆け寄った。

「タケちゃん、お腹すいてない？」

「あ、ああ……」

ミニスカートをヒラヒラさせながらタケシの前まで小走りで駆け寄った陽子がタケシに問うと、タケシは陽子のミニスカートに気付いたのか、何時もと感じの違う陽子にどもった返事を返した。

「カレー作ったのよ、今日は奥で食べましょう～」

そう言って笑顔で話しかける陽子は、タケシの大きな手を引いて、

喫茶店の厨房の奥にある桜木家の台所に連れて行く。

喫茶店の厨房の暖簾をくぐると陽子は、履いていたサンダルを脱ぎ捨て、三段ばかり有る短い階段を飛ぶように登っていった。その後ろをタケシが付いていくように桜木家の台所に上がり込む。

「タケちゃん、ちょっとまってね～。今、ご飯にカレー盛るから～」

「あ、ああ……」

二人が台所に入ると、先程まで居た雪絵の姿は既に無かった。

タケシは、何時もよりもそわそわした態度でテーブルに有る四つの椅子の一つに座った。

桜木家は三人しか居ない。四つ目の椅子はタケシ専用である。

電気ジャーからご飯を皿に盛りつける陽子は、そわそわしながら陽子をチラ見するタケシの様子を感じ取っていた。

ミニスカ作戦成功！

陽子は白いご飯にカレーをかけると、そう心の中で策略の成功を叫んでいた。

「はぁ～い、じっくり時間をかけて作ったカレーライスよ～。たーんとお食べ～」

「あ、ああ、センキュ……」

カレーライスの盛られた皿をテーブルに置くと、陽子はわざわざスプーンをタケシに手渡しで渡す。

スプーンを受け取ったタケシは、若干顔を赤らめながらカレーライスを食べ始めた。

陽子は、その顔を見ながら微笑むと、短いスカートをわざとらしく揺らしながら流しの前に立って洗い物を片付け始める。

その後ろ姿をタケシがカレーライスを食べながらチラチラと見ていた。

陽子はタケシの視線が自分に向けられている事を背中に感じとると、洗い物の皿を洗剤の付いたスポンジで洗いながらわざとらしく腰を振って見せた。

「な、なあ、陽子」

カレーライスを食べていたタケシが、陽子の後姿を見ながら話しかけると、陽子は待っていましたと言わんばかりにクルリとスカートを靡かせながら振り返った。

「何～、タケちゃん！」

「その……短いスカートなんだが……」

陽子は「よし、食いついた！」と心の中でガッツポーズを取りながら叫んでいた。

「何、何、何、タケちゃん！！」

「その……、短いスカートを履くのは良いけど……」

「良いけど、良いけど、何、何！？」

陽子に話しかけるタケシは、顔を完全に赤く染めて俯きながら目が泳いでいた。こんなタケシの仕草を見るのは陽子も初めてと言えた。

陽子はタケシが何を言うのか我慢できずに興奮していた。

この後、タケシがどんな台詞を言うのか。

ミニスカートを褒めてくれるのか。

それとも、愛の告白をされるのか。

はたまた、このまま興奮したタケシに押し倒されるのか。

一瞬の間に、いろいろな事を妄想する陽子。

「陽子……、ミニスカートを履くのは良いと思うぞ……」

「本当、本当、本当に～～」

タケシに褒められて、喚起の声を上げる陽子。

「でもよ……、さっきよ、台所に上がる階段で後ろから……ちらっと見えたんだよ……」

その台詞に顔を赤らめた陽子が俯くが、まんざらではない照れた笑みだった。

タケシにならば、最初から下着の一つや二つ見せても良い覚悟は出来ていた。

「ミニスカートを履くのは良いが……、下着ぐらいちゃんと履いたほうが良いと思うぞ……」

「ノーパン！」

陽子はそう叫びながらミニスカートをはぐって自分の股間を確認した。

「私、ノーパンじゃん！！」

「だから見せるなよ、痴女！」

「ぎぃやゃゃゃゃぁぁあーーーーーーーーー！！！」

ミニスカートでアピールする事に集中しすぎて、中身を履くのを忘れていた陽子が、悲鳴を上げながら台所を飛び出し二階への階段を駆け上っていく。そして間も無くして家全体を揺らす程の勢いで陽子の部屋の扉が閉められる音が響いた。

股間がスースーしていたのは、履きなれないミニスカートの違和感では無かったようだ。

陽子、最大の不覚。

ただいま自室で、ベットの上の枕を涙で濡らしています。

<　スケルトン・14　>（前書き）

もうちょっとで第五話終わります＾＾；

<　スケルトン・14　>

タケシが油儀邸を去った後、荒れ果てた庭園内で、両腕を骨折した猫田虎二が発見された。

兄の龍信は、妹の珠美に電話で連絡を入れると、連合関係者の居る病院に虎二を連れて行った。

珠美が電話越しに虎二の心配をしていたが、両腕以外は大きな怪我も少なく、意識もはっきりとしていると伝えると、珠美も若干だが安心したようだった。

珠美とは、虎二の入院の準備をしたら病院で落ち合う予定となっている。

突然、油義邸に乱入してきた九十九神の使い手の男は、タケシとの約束もあってか命まで取らないことになり、とりあえず油義邸にある座敷牢に幽閉することになった。

彼の今後は、改めて考えることにはなったが、庭園をメチャクチャにした発端の為、油儀は復旧にかかる資金を彼に請求する積もりらしい。

そうなれば、彼が一生働いても払いきれない借金が、彼の背中に積み重ねられるであろうことは確定していた。

蓋口静香の長い髪に巻き取られながら座敷牢へと引きずられていった使い手の男は、彼女の後頭部の大きな口を見て食い殺されるのではないかと思ったのか、女々しいまでの悲鳴を上げて怯えていた。

九十九神の白雲太夫の力を失った彼にとって此処は、ただの妖怪屋敷そのもの。生きた心地がしないであろう。

一方、一七五と黒童子の二人は、一七五の負傷を気遣い早々と一七五一家の巣へと帰っていった。

何故かお土産に買ってきたと言っていた笹団子を、一七五が持って帰ろうとしたのを鍋中が気付き、置いていけ置いてかないの詰まらない喧嘩をしていた。

結局、その場で笹団子は鍋中に奪われ、一七五は帰っていった。

そして、暫くの間、鍋中は一人しずかに天井に穴の空いた客間でお茶を啜りながら笹団子を食べていた。

見た目だけなら一番ボロボロに見えた天野太陽は、油義邸の大浴場が無事なのを確認すると、風呂に入って汚れを落としたいと言って、一人大浴場を目指した。

女中が、まだ風呂時ではないので水しか張っておらず、湯が沸いていないと彼女に告げたが、「お湯なら僕が沸かせて見せるさ」と言って、真水の風呂へと入っていった。

しかし、日照り神の能力で、一瞬で風呂の水を湯に変えようとし

た彼女だが、水蒸気爆発を起こし、また油義邸を激しく揺らして騒がせていた。

そして残った四人の男達。

八尾弦徳、油義裕次郎、鍋中改造、無常水越斎の四人は、油義邸の敷地内でも隅の方にある蔵の前に居た。

蔵があったのは、敷地内の端の方だった。

周りは木々が生い茂り、蔵より高い木の枝が、白い壁の蔵を包む様に隠していた。

付き添うように居た黒服のＳＰ二人が蔵の扉を開くと、蔵の中から乾いた誇りっぽい空気が流れ出てきた。

四人の妖怪は、作業を始めた人間の様子を黙って見ていた。

暫くのあいだＳＰ達は、蔵の中の荷物を隅に寄せる作業に励むと、広げられた蔵の板張りの床を扉の様に開いた。

開かれた床の扉。

その中には、下へと降る階段が見えていた。

人がひとりぐらい並んで入って行けそうな、四角い石畳の階段。

壁は、大きさがバラバラな岩で出来ていた。

ＳＰが、蛍光灯型の懐中電灯を四人に手渡す。

「此処に……」

懐中電灯を手渡された八尾が、地下への階段を覗き込んで呟いた。

「そうじ、此処に御主の父親が居る」

そう言って油義が先頭で、階段を降っていった。

地下への階段は、若干だが右にカーブしていた。おそらく螺旋状に降っているのであろう。

ＳＰは地上に残り、四人の妖怪達は黙ったまま階段を降りていった。

時折、岩の壁にナメクジやムカデが這いずり回っており、四人が岩の階段を踏みしめる音だけが響き渡っていた。

十分ぐらい地下へと降り続けると、大きな空間へと出る。

相変わらず薄暗く、ジメジメとした陰気な空間だった。

その空間の壁に、横穴のトンネルが一つ見える。

高さは三メートルぐらいで、横に四人が並んでも歩いて行けそうな幅がある。

「こっちです……」

油義の言葉のままに、その横穴を四人は進んでいく。

更に横穴を五分ぐらい歩いただろうか、鍋中が腕時計で時間を確認していた。

暫くして暗闇の中に大きな鋼の扉が見えてきた。

鉄の分厚そうな巨大な門。太い閂に、人の頭よりも大きな錠前がぶら下がっていた。その扉の両脇に立つ二つの大きな影。

「むむむむ、誰か来たぞ」

「ぬぬぬぬぬ、誰か来たな」

二つの影は、三メートルはある大男の姿だった。

少し薄汚れた白い山伏の着物を着た二人。しかし片方の男の頭は馬の頭で、もう片方の男の頭は牛のものだった。

「メズキ、ゴズキ、スマンが扉を開けてもらえんかね」

「むむむむ、何だ、あぶらすまし殿かよ」

「ぬぬぬぬぬ、何だ、あぶらすまし殿じゃん」

獣の頭をした二人は、そう言いながら鼻息を荒くしていた。久しぶりの来客に、興奮している様子だ。

彼らは此処で、四百年近く門番をやっている妖怪である。

八尾の父が妖怪達を裏切って、亡くなった九尾双葉を復活させずに、不老不死を願ってからずっとである。

「さぁ、扉を開けてくれ」

「むむむむ、あぶらすまし殿、そんな事より聞いてくれよ！」

「ぬぬぬぬぬ、あぶらすまし殿、そんな訳で聞いてくれじゃん！」

「はぁ？」

油義が、二人の言葉に大きな頭を傾げた。

「俺の名前は、キュアゴズキ！」

「俺の名前も、キュアメズキ！」

「ふたりはキュアキュア！！」

「これでもキュアキュア！！」

「「そぉ～れ、キュア、キュア。そぉ～れ、キュア、キュア！」」

ピシッと最後はポーズを取るゴズキとメズキ。

地下深くで、全員の時間が停止した瞬間であった。

<　スケルトン・15　>

メズキとゴヅキの二人が自分よりも大きな鉄の扉を開く。

鉄の軋む音と、鉄が石畳の上を擦れる音が、静かだった地下深くに魔物の唸り声の様に響いた。

力を込めた馬と牛の頭に複数の血管が浮き上がる。

「「うりゃーーーーー！」」

二人が鋼の扉を開き終わると、その向こうに更なる暗闇が続いていた。

その向うに何があり、あとどのぐらい進むのかを知っている鍋中が、暗闇を見て溜息を付く。

油義を先頭に、四人は闇の中へと進んでいった。

ゴズキとメズキを残して扉の中へと進み始めた際に、八尾が扉を今一度見上げた。

その鋼の扉の厚さ、五十センチはあるだろうか。この扉の厚さが父の犯した罪の量に匹敵しているのだと八尾は考えていた。

この扉の厚さが、裏切り者を逃がすまいとする者達の恨みの厚さ。

父と母のことを思い出した八尾は、扉を見上げたまま複雑を思いが心の中に渦巻いた。

「若様……」

先に進もうとしていた油義が振り返り、八尾に声を掛ける。

「ああ……」

その油儀の声に我を取り戻した八尾が、振り返って立ち止まっていた三人の後を追う。

更に四人が横穴のトンネルを進んで行くと、暫くして鉄の牢獄が見えてくる。

若干錆付いた鉄格子。

頭ぐらいならば隙間から出せそうだが、体までは無理な幅。

一本一本の鉄柱には不思議な魔法の文字が刻まれており、その文字が鉄格子の向うの存在を、外には逃がすまいと時折輝いていた。

八尾が、鉄格子の隙間から中を覗き見る。

牢獄の向こうに八尾が手にした懐中電灯の明かりを向けると、石の玉座に座った人影が見えた。

目を凝らすが見えた玉座までは、まだ距離がある。はっきりとは玉座に腰掛ける人影の顔は見えない。

油義が着物の懐から古びた鍵を取り出すと、牢獄の鍵を開けて中

に入っていった。

他の三人も油義に続いて牢獄の中へと入る。

鉄格子と石畳以外は、自然の岩をくり貫いたような部屋だった。

殺風景で、まさに牢獄。

先に進むと、四人の手にある光が、岩で出来た玉座を照らしあげる。

岩の玉座に腰掛けるのは、干からびてミイラ化した人間の死体だった。

「これが……、私の父……」

ボロボロになった着物に袴を身に付けたミイラは、かつてはチョンマゲを揺っていたのだろうか、結びが解けて落武者のように長い髪を下げていた。

ミイラの手足は、手錠や足枷で石の玉座に拘束されていたが、痩せ細り殆ど骨だけになっており、その手錠も足枷も難なく抜けるのではないかと見て思えた。

砂漠のように干からびた頬から歯茎の形が見え、うっすらと明けたままの目蓋が乾燥して眼球に張り付いていた。

「これでも父は、生きているのですか？」

ミイラ化した不老不死の侍を見て問う八尾。

「さあな、不老不死でも飯を食わないと干からびちまう。お湯でもぶっ掛ければ元に戻るかもよ」

鍋中のジョークに笑う者は居なかった。

「それで若様、父君を拝んでどうするつもりですか？」

油儀の質問に、三人の視線が八尾にあつまった。

八尾の顔を見る三人は、同じ回答を期待していた。

この裏切り者を、地下深くに幽閉すること四百年近く。

人間にしてみれば永遠に近い投獄。

油義を始めとする三本柱は、裏切り者に対してそれ以上の罰を与えなかった。

何時かは息子の八尾弦徳に、この真実を伝えなくてはと思っていたからだ。

そして、その時がやってきた。

「油義会長……」

八尾がそう呟くと、背後から黄色く輝く狐の尻尾が現れ日本刀を八尾に手渡す。

受け取った刀の鍔を親指で押して、鞘から僅かに刀を抜く。

静かな牢獄ないに、カチャリとその音が響いた。

それが、油義が八尾に対して行った質問への回答だと全員が悟った。

「油義会長、長いあいだ妖怪連合虎町支部長代行、まことにご苦労様でした。これより正式に、私、九尾双葉の息子、八尾弦徳が長への引継ぎを、お受けいたします」

凛々しくも誠実そうな顔付きで、父のミイラを見つめて言う八尾の台詞に、三人の妖怪からどよめきの声があがると、八尾は手に有る日本刀を引き抜く。

日本刀の刀身は、八尾の決心と同じぐらい眩しく輝いていた。

全ての忌まわしい記憶の闇を掻き消すように暗かった牢獄の隅から隅までを照らすと、八尾は両手で刀を握り締め大きく振りかぶった。

「父の罪、息子の私が、利子ごと清算します！」

更に大きくも激しく刀が光ると、その光の塊は玉座に座るミイラへと落とされた。

玉座ごとミイラが光に包まれると、そこから強い熱風が光とともに飛び散っていく。

無常水越斎が、眩しいまでの光に細い目を更に細めながら長い黒髪を靡かせていた。

油義の着物や袴も光に靡く中、鍋中はトレンチコートを靡かせながら、被っていたハンチキャップを飛ばさないように手で押さえていた。

光と熱風が収まり、三人がその細めた目を開けると、刀を振り下ろした八尾の前に居たミイラは、石の玉座ごと姿を消していた。残ったのは、ゆらゆらと煙を上げながら抉り取られた床と壁の窪みだけであった。

全てが八尾の放った光で蒸発していた。

裏切り者のミイラも、その罪も。

全てが光の中に消えていった。

しかし、八尾弦徳が背負う。

父の罪と、母の役目を。

そして引き継ぐ、人間と妖怪の未来を。

「油義会長、私がこの町の妖怪を束ねて行きます。今しばらく道を示して、一人前の長になるまで支えてください」

三人の妖怪が、八尾弦徳に片膝を地に着け頭を下げた。

「おおせのままに」

油義が答えた。この男が、この時をどれだけ待ち望んでいた事か。

先代の九尾双葉が亡くなり五百年。息子の一尾弦徳が一人前の妖怪に鳴るまで長の代行を務めてきた。その勤めが終わるのもまじか。

地下深くから始まる新たな時代。

八尾弦徳の長への道。

待ち受けるもの、まずは春婆怒との対決。

このけじめを付けなくてはならない。

第五話　「スケルトン」　完

第六話につづく。

<；スケルトン・15　>；（後書き）

こんにちわ～（≧≦）／

「九十九」がスタートして半年が過ぎました。

それでも第五話まで、何とか終わりました。

色々有りましたが、これも全てお付き合い頂いている読者皆様のおかげです。

物語も半分を超えて、これより後半戦。描きたい事は色々あるのですが、きりが無いので後半戦はエンディングに向けて頑張りたいと思います。

おそらくあとニ話～三話程度で終わらせたいと思っているのですが、どうなる事やら。

出来る事ならば、最後までお付き合い願えると嬉しく思っております。是非にご愛顧のほどをよろしくお願いします＾＾

では、後半戦、第六話「黄金の騎士と雲外鏡」
近日スタート予定！ｗ

<お・ま・け>

「俺の名前は、キュアゴズキ！」

「俺の名前も、キュアメズキ！」

「ふたりはキュアキュア！！」

「これでもキュアキュア！！」

「「それ、キューアキュアァ～～、それ、キューアキュア～～」」

……。

……。

「はい、どうも～、キュアゴズキです！」

「同じく、キュアメズキです！」

「今回、我々二人は地下牢の番人を解雇されました！」

「えっ！　マジマジ俺聞いてないよ！」

「だって幽閉されていたチョンマゲミイラが居なくなったんだもん……」

「あ、なるほどね、ゴズキ君。そう言う理由か、じゃあ仕方ないよな」

「仕方ないとか言ってる状況じゃないぞ、メズキ！」

「なんでさ、ゴスキ？」

「何でって、仕事が無くなったんだぞ！　来月からどうやって飯食っていくんだよ！？」

「えっ、また新しい番人か門番の求人探せば良いんじゃない？」

「バカ野郎！　五百年前とは違うんだぞ、もう門番とかの求人は無いんだぞ！」

「えっ、マジですか、ゴヅキ君！」

「マジですよ、メズキ君……」

「じゃあさ、新しい仕事探すか？」

「あ……、あ、新しい仕事って言っても……、俺さ、生まれてこのかた七百年近く、門番とか番人の仕事しかやったことないんだぜ……。今更よ～、別の仕事なんか出来るのかな……」

「あ、そう言われると俺もそうだわ……。なんか急に不安になって来たよ、ゴズキ君……」

「じゃあさ、メズキ君……」

「なんだい、ゴズキ君……」

「もう一人メンバー増やして、フレッシュに出直さないか！」

「出直す？」

「そうさ、三人ユニットで芸能界デビューだ！」

「ナイス名案！　乗ったぜキュアゴスギ！」

「乗ってくれるか、キュアメズキ！」

「よし、フレッシュに三人ユニットだ！」

「そして来年は、リフレッシュ！」

「で、三人目は誰誘う？」

「適当に、虫玄武で良くねえ？」

完

<　お・ま・け　>（後書き）

［壁］――・）　ごめんなさい。詰まらない事かいて。

次の話は、いきなりアクションからスタートなので許してチョンマゲ＾＾；

第六話　「黄金の騎士と雲外鏡」（前書き）

０９／３／１１でヒット数７００００突破しました～＾＾
感謝感謝です＾＾

そして第六話もスタート。
これからもよろしくお願いします＾＾

第六話　「黄金の騎士と雲外鏡」

町外れの工場。

まだ日が高い時間帯にも関わらず、その工場内は人気が無く、無人の如く静まり返っていた。

それもその筈である。この工場に活気が溢れていたのは、遥か昔の話だ。

かつては三千人以上の労働者が勤めていた製紙工場だったが、行き過ぎた一族経営とバブルの際に出来た大きなツケが原因で、十年も前に閉鎖されている。

廃墟となった敷地内には、百メートルぐらいの長さがなる二つの建屋が並んでいた。

その建屋の中には、幾つもの紙を作るための様々な機械が並んでいた痕跡が残っている。古い傷跡の様に。

今は全ての機械が中国のブローカーに中古品として買い取られ、日本の何倍もある大陸のあちらこちらで活躍している頃だろう。

敷地内には、他にも三階建てのオフィスビルと、独身社員用だった木造建ての長屋がある。

だが、どちらも工場跡の建屋と同じで廃墟と化しており、木造の独身寮も人が住める状況ではなくなっていた。

日がまだ高い時間帯。灰工場の敷地内にある、双子の様にそっくりな建屋の間を駆け抜けていく一団の姿があった。

建屋の間は、コンクリートで舗装された二車線の道で、そのまま真っ直ぐ工場の正門まで伸びている。

そのコンクリートの上を走る一団。

先頭を走るのは、羽毛の付いた赤いマントを靡かせる金色のルネッサンス風の甲冑を身に着けた男であった。

その後ろを、七人の僧侶が走っていた。七人岬たちである。

正確に言えば七人岬たちが、黄金の騎士を追いかけている様子であった。

鍍金とは明らかに違う輝きを放つ黄金の鎧。

その羽根付きの赤いマントを靡かせ走る騎士の手には、何故か黄金のハンマーが握られていた。

高貴なる騎士には似合わないハンマー。良く見ればハンマーは金の木槌。七福神の大黒様が持っているような小槌だった。

洋風の騎士に和風の小槌。あまりにもマッチしない組み合わせである。

黄金の騎士が急に立ち止まると、その黄金の小槌を振り被りながら後ろを振り返る。

そこに七人岬の一人が、錫杖を振りかざしながら飛び掛った。

錫杖の頭部にある鉄の輪が、ガチャガチャと音を激しく鳴らしながら。黄金騎士のヘルムを狙う。

だが、それよりも早く黄金騎士の黄金の小槌が、飛び掛る七人岬を横殴りにした。

ジャンプをした七人岬の一人が、小槌で脇腹を殴られると、真横へとスライドする襖のように空中を滑りながら飛んでいく。

そして、脇にあった製紙工場の壁を突き破り、薄暗い工場内に消えていく。

開いた壁の穴から、うっすらと誇りが流れ出た。

壁を突き破り建屋の中へと消えた仲間を無視して、残りの七人岬たち六人が、黄金騎士に追いつき取り囲む。

声ひとつ出さずに自分を取り囲む怨霊を見回す黄金騎士は、六対一の状況にもうろたえる様子は見せなかった。

黄金の騎士は、堂々と立ったまま、取り囲んだ者たちが次にどう動くかを待つ。

しばし動かない七人。建屋と建屋の間に、僅かな風が流れ込む様に吹いた。

その風に急かされ七人岬たちが一歩踏み込む。だが、その一歩よりも早く黄金騎士が先に仕掛けた。

黄金に輝く小槌が掬い上げるように、右方面に居た七人岬の一人を襲う。

狙われたロンゲの七人岬は、持った錫杖を両手で横に構えた。

そして、下から迫り来る小槌を受け止めるが、信じられない程のパワーに、ガードした錫杖を弾かれ顎先にハンマーの直撃を喰らう。

ロングアッパーの軌道で飛んできた小槌に、ロンゲの七人岬の顎が砕かれると、口の隙間から数本の前歯と赤い液体が飛び散る。そしてロンゲの七人岬は、体ごと回転させると、空へと飛んでいった。

二階建てぐらいの高さがある建屋の屋根の上に落ちたロンゲの七人岬が、暫くすると屋根から転がり落ちてくる。

一度、落ちてきたロンゲを視線で追いかけた残りの五人が、直ぐに黄金騎士に視線を戻す。

白目を大きく見開き、青白い顔で獣のように威嚇しながら残りの七人岬が、一斉に飛び掛かった。

それに対して黄金騎士は、小槌で力強く足元のコンクリートを叩くと、自分を中心に強烈な衝撃を周囲に放つ。

コンクリートに大きな円形のクレーターが出来ると、その一撃が生み出した衝撃の波は、同時に飛び掛った七人岬五名を吹き飛ばした。

地面を転がる五人は、直ぐに起き上がろうとする。

しかし、その内の一人が膝立ちになったところで、黄金の甲冑のブーツが、その七人岬の視界に入ってきた。

頭に被った網傘の隙間から下から上へとゆっくり見上げると、そこには小槌を振り被った黄金騎士が既に立っていた。

白く濁った瞳に、小槌の丸い面が映ると、顔面にそのままスタンプされる。

振り下ろされた小槌の威力に七人岬の頭部が、斜め後ろに吹っ飛びコンクリートに後頭部を減りこませると、膝立ちだった下半身が跳ね上がりワンバウンドさせて腹ばいに倒れこむ。そして、動かなくなる。

動かなくなった七人岬を確認していた黄金騎士が振り返ると、少しはなれた場所で七人岬の中でも一番の大柄の男が、相撲取りのように四股を踏んでいた。蟹股で右足を振り上げた大きな脚を地面に叩き落す。

そして、コンクリートに落とされる右足。その一撃が、灰工場の建屋二つを激しく揺らした。窓ガラスが怯えるように揺れる。

大柄の七人岬は黄金騎士を睨みながら腰を落とすと、相撲の仕切りの構えを取った。

この大柄な七人岬の生前は、相撲取り。綱取りを目指して小結まで上り詰めた者が怨霊に落ちた姿なのだ。

二つの拳がコンクリートの地面を軽く叩くと、肉の弾丸と化した

大柄の七人岬が、黄金騎士にすり足で迫っていく。

その相撲取りの七人岬に対して黄金の騎士が、小槌を振り下ろし迎え撃とうとした。

だが、小槌を持つ手首を狙って大きな手を突き出した大柄の七人岬が、小槌による攻撃を受け止める。

そして、空いた右手で黄金騎士の頭部に、横殴りの張り手をぶちかました。

平手が黄金のヘルムを強打し、大きな金属音を響かせる。

大柄の七人岬の張り手を喰らった黄金騎士は、一歩横に踏み出すと蟹股になって衝撃を堪えた。

よろめいた黄金騎士に大柄の七人岬が、左手を伸ばして腰のベルトを廻しでも取るかのようにガッチリと掴んだ。

左の下手廻しを取った大柄の七人岬の腕に、力が入ると筋肉が盛り上がる。

一気に懐へと引き込もうとする大柄の七人岬。それに対して黄金騎士は、肘をフックの様に顎先へと突き当てた。

だが、大柄の七人岬の力は緩まない。続いて右廻しを取るように、右手が黄金の騎士のベルトに伸びていった。

しかし、右手がベルトを掴もうとした瞬間、そこに、黄金騎士の右手の小槌が七人岬のこめかみに振られ直撃する。

七人岬の頭蓋骨と首から鈍い音が鳴ると、巨漢の脊髄が斜めに曲がり、ベルトを掴んでいた左手の力が抜ける。

黄金騎士は、小槌の柄でその左手を払い落とすと、更にもう一度横振りの小槌を顔面に叩き込んだ。

小槌で鼻が潰れ、大きな顔に丸い形の跡が出来た七人岬の巨体が、後方へと飛んで行く。

黄金の騎士に吹き飛ばされるように離れていった巨漢の七人岬の体は、ゴム鞠の如く跳ねると、ゴロゴロとコンクリートの上を転がりながら建屋の壁に激突して止まる。

大柄の七人岬を見送った黄金騎士の背中に、幾つもの衝撃が走った。

残った七人岬の二名が、黄金騎士の赤いマントの上から背中を錫杖で強打していた。

しかし、その攻撃は、効いていない様子だった。

ゆっくり首だけで後ろを見る黄金騎士。それには静かな威圧感があった。

そして、一気に振り返ると同時に振るわれる黄金の小槌。

それが、右に立っていた七人岬の肘の辺りを捉えると、そのまま隣に居る七人岬を巻き込み横へと跳ね飛ばした。

二人は並んで横に飛んで行くと、一人目の七人岬が開けた穴よりも大きな穴を開けて、暗い建屋の中へと消えていった。

小槌のフルスイングで、二人まとめて吹き飛ばした黄金の騎士は、静かに構えを解く。

残る一人。茶髪の長い髪の上に網傘を被る女性の七人岬。

それを見つけると黄金の騎士は、真っ直ぐに女を目指して走り出す。

「きいぃぃぁぁぁぁぁあああああああああ！！！」

女の七人岬が上げるキンキン声の悲鳴。

その悲鳴に黄金の騎士は、片手で顔を庇いながら立ち止まった。

靡く黄金の騎士の赤いマント。

女の七人岬の悲鳴が超音波の如く周囲に響くと、二つの建屋の壁を激しく揺らして次々と窓ガラスを割っていく。巻き込む仲間が居なくなった事で、この技を解禁したようだ。

だが、黄金の騎士は超音波に負ける事無く、ゆっくりだが前に進んでいく。

悲鳴を上げながら冷や汗を流す七人岬の女。もうじきに黄金の騎士のハンマーが届く間合い。

七人岬の悲鳴に、建屋の窓ガラスが割れていく中、女の目の前に

立つ黄金の騎士。その右手にある小槌が振り上げられた。

五月蝿い悲鳴を止めるように振り下ろされた小槌が、女の脳天に落ちる。

その一撃に、悲鳴を上げていた口が無理やりにも閉じられ、そのまま体を上から押しつぶしていく。

頭が割れ、両目が飛び出し、顎が砕け、首が引っ込み、背骨が折れ曲がっていく。

体全身がありえない形に押し潰された七人岬の女は、無残な姿となって動かなくなる。いや、少しだがピクピクと動いていた。

それを見ていた黄金の騎士に、上空から別の女の声で言葉が飛んでくる。

「まあ、七人岬じゃあ、この程度よね。しょうがないさ」

その女の声に空を見上げる黄金騎士。

上空には、ポニーテールと白いロングコートを靡かせ、黒いタンクトップに際どいポットパンツを履いた、一人の少女が両手を組みながら堂々とした態度で浮いていた。

「今度は、妖怪連合虎野町支部処理班、天野太陽が相手さ。覚悟するといいさ」

天野太陽の背中に炎の翼が勢いよく生える。

見上げる黄金の騎士には、その姿が、「太陽神アポロン」の様にも見えた。

<　ショックウェーブ　>

双子の建屋の屋根よりも高い位置に浮いている天野太陽が、赤いポニーテールを風に靡かせながら無邪気な笑みを作っていた。

その背中から生えでた炎の羽が、メラメラと音を立てて燃え上がっていた。

それを地上から静かにも気高く見上げる黄金の騎士。その背後で、白い羽毛の飾りが付いた赤いマントが、彼女の放つ熱風にユラユラと靡く。

「丸焦げにしてやるのさ！」

天野太陽の背中にある炎の翼が更に激しく燃え上がる。

すると二つの羽から放たれる灼熱が、辺りを一瞬で真夏の焼けた浜辺のような空気に変えた。

彼女は、その空気の温度が気持ちいいのか、嬉しそうに笑っていた。無邪気な表情で。

強い熱風を感じた黄金の騎士は、片手を額に当て灼熱から身を庇う。

しかし、それもあまり意味をなしてはいないのか、ジリジリと黄金の鎧が焼肉用のポットプレートの如く焼けて熱を増していく。

日照り神が放つ熱が辺りを照らし続けると、建屋のあちらこちら

から焦げた臭いが上がり始める。

そして、壁の隅やコンクリートの隙間から生えていた雑草たちが、チリチリと火を放ち燃え上がっていく。

天野太陽が組んでいた両手を解いて、地上で自分を見上げている黄金の騎士に、両手の人差し指を拳銃の銃口に真似て向けた。

「これでも喰らえばいいのさ。ファイヤーバードショット発射！」

大きく広げた彼女の翼から発射される炎の弾丸。まるで大型戦闘ヘリから乱射された小型ミサイルの如く、地上の黄金の騎士目掛けて次々と飛んで行った。

屈みながら身を斜めにして攻撃に備える黄金の騎士の周りに、日照り神から放たれた炎の弾丸が降ってくる。

黄金の騎士の立つコンクリートの道路に炎の弾丸が突き刺さると、コンクリートを抉りながら爆発を起こして、黄金の騎士の姿を爆炎の中に包んでいった。

「にょほほほほほ～～」

笑いながら術を連射する日照り神が、可笑しな笑い声を上げていた。

止まる事無く続く日照り神の攻撃の中、地上で空爆を受けて爆炎を上げ続けるポイントから黄金の騎士が逃げる様に走り出した。

そして、右の建屋に開いた壁の穴の中へと、身を屈めながら飛び

込んでいった。

「おっと、そう容易く逃がしはしないのさ」

先程、黄金の騎士に吹き飛ばされた七人岬の二人が開けた壁の穴。その壁の穴に逃げ込んだ黄金の騎士を追って、空中に居た日照り神も低空飛行で壁の穴をくぐろうとする。

大きく燃え上がる炎の羽を折りたたみながら壁の穴に突っ込む日照り神。

しかし、壁の穴をくぐった直ぐ横に、金の小槌を片手で振り被った黄金の騎士が待ち伏せしていた。

「え！」

穴をくぐり黄金の騎士の直ぐ横を飛び向けようとした日照り神の背中に、待ち伏せしていた黄金の騎士の小槌が振り落とされる。命中だ。

「ふぎゃ！」

可愛らしい声を出しながら顔を顰めた日照り神が、背中に受けた攻撃で地面に叩きつけられると、工場内のコンクリートの床の上を、溜まりに溜まった埃を舞い上げながら滑っていった。

「いてて……」

埃だらけになった日照り神が、打たれた腰と擦り付けた顔面を摩

りながら立ち上がる。

「やってくれるじゃないさ。あ～ん、鼻の先を擦り剥いている、どうしてくれるのさ！」

力なく折れ曲がっていた炎の翼が、日照り神の怒りの声とともに広げられると、再び灼熱の熱風を無差別に放った。

二階建てぐらいの高い天井の建屋内は、一瞬で鉄でも溶かして加工している工場のような暑さへと変わる。

壁に開いた穴や割れたガラス窓から冷たい空気が流れ込んでくると、その空気に押されて建屋の天井に設置されている幾つもの換気扇の羽が、電気も通っていないのに勢い良く回りだした。灼熱の空気に押されての現象だ。

二人が入ってきた壁の穴を背にする黄金の騎士の赤いマントが、穴から入ってくる冷たい風に靡いてゴールドの鎧にまとわり付く。

黄金の騎士は、怒りの炎を放つ日照り神を真っ直ぐ見ていた。

そして、ルネッサンス風の甲冑が、ポニーテールの少女に向かって走り出した。

「ファイヤーバートショット発射！」

炎の翼から真っ直ぐに発射された複数の弾丸が、迫る黄金の騎士を狙って飛んで行く。

炎の弾丸が迫る刹那、黄金の騎士は右手に持っていた金の小槌で

足元のコンクリートを叩いた。

小槌の一撃で、コンクリートの床に、蜘蛛の巣のような皹が広がる。

そして、そこから生まれたショックウェーブが、円形に広がりながら飛んできた炎の弾丸を爆発させて押し進んでいく。

「うぁ！」

発射したばかりの炎の弾丸が、目の前まで広がってきたショックウェーブによって爆発すると、日照り神は両手で顔を庇いながらショックウェーブに飛ばされていく。

目に見えないショックウェーブに弾かれ二メートルぐらい跳ね飛ばされる日照り神。

倒れはしなかったが、その直ぐ後に建屋全体が大きく揺れたのを見て驚く。

「今のは、何なのさ」

建屋の天井から、溜まっていた埃がパラパラと降ってくると、さらに建屋内の空気を濁していった。

「この九十九神の本体は、おそらく手にある打ち出の小槌……。能力は目に見えない衝撃波ってわけね」

そう解析している少女を目指して、黄金の騎士が走り出す。

日照り神は、右手の人差し指と中指を立てて、煙草でも吸うように自分の口元に当てた。

そして、黄金の騎士の進行を邪魔するように二本の指の間から火炎放射器の如く炎を吐いた。

その迫り来る火炎に対して再び黄金の騎士は、小槌で地面を叩いてショックウェーブを放つ。

衝撃の波に、押し戻されていく炎。

しかし、日照り神は翼を広げて空中に逃げた。そして、暫くすると強い振動の波に飲まれて天井すれすれまで押されていく。

距離が離れていたのか、今度のショックウェーブは、先程よりも強くは感じなかった。

「衝撃の届かない制空権に出てしまえば……、高い空があればこちらが有利なのさ！」

そう呟きながら壁にある窓枠を目指して飛んで行く日照り神。

ショックウェーブの届かない上空さえあればと考えて、野外に逃げようとしていた。

天井のある建屋内では、分が割ると考えたようだ。

だが、その企みを許さない黄金の騎士。

天井と同じ高さを飛んでいた日照り神の脚が、突然冷たい感触に

捕まれた。

「なにさ！」

日照り神の飛行が無理やり止められる。

彼女は、捕まれた自分の足首を何事かと見た。

そこには、地上に居るはずの黄金騎士の左腕が、肘から切り離され、日照り神の細い足首を掴んでいた。

「ちっ、届くの！」

黄金の騎士の肘とガントレットの間は、半透明の鎖で繋がれていた。

零体の鎖がピンと張り、二人の距離をこれ以上離れさせまいとしている。

そして、黄金の騎士の鎖が、ギリギリと音を立てて肘の中へと巻き取られていくと、囚われの少女を空中から引き摺り下ろそうと引き寄せていく。

「ちょっ！」

強い力に引き寄せられる日照り神は、空中で飛行バランスを崩す。

そして墜落する凧の様に地上へと落ちていった。

「きゃん！」

墜落して声を上げたポニーテールの少女。その少女を、尚も鎖で引き寄せる黄金の騎士。

少女は、コンクリートの床の上を引きずられ、右手の小槌を振り被る黄金の騎士の前まで引き寄せられた。

だが、細く綺麗な生足を捕まれ、ポットパンツのお尻を擦りながら引き寄せられていた少女が、両手を後方に突いて上半身を起こすとニヤリと笑う。

「今、気が付いたのさ」

何を思いついたのか微笑む少女は、自分の足を掴む黄金の篭手に手を伸ばして優しくそっと触れた。

「これも、貴方の体の一部なんだよね」

太陽のような眩しい少女の笑みだった。

その直後、彼女の足を掴んでいた黄金の篭手が、真っ赤に熱しられていく。

「！！！」

慌てふためく黄金の騎士は、掴んだ足を離して左腕を自分の肘に素早く戻した。

「やっぱり、そうなんだ」

楽しそうに笑う日照り神は、ゆっくりと立ち上がると衣類の埃を

払いながら余裕を見せた。

一方、黄金の騎士は、赤く焼けた左腕を庇うように背を丸めて、入ってきた壁の穴を目指して走り出す。

「あらら、また逃げるの？」

再び逃走を選んだ黄金の騎士の後を、ポニーテールの少女が追いかけようとした瞬間であった。

「「八鏡面方位結界！」」

いきなり聞こえて来たのは、二つの声だった。

<　鏡の中の男女　>

その聴こえて来た声に、思わず声を上げる天野太陽。

「なにさ!?」

男女二つの声だった。

その声とほぼ同時に、一畳サイズの鏡が八枚、床から日照り神を囲むように起き上がってくる。

八枚の鏡の中心に立つ日照り神。

囲まれた彼女が、手を伸ばせば届きそうで届かない微妙な距離にある不気味な八枚の鏡。その鏡たちが、ゆっくりとメリーゴーランドの様に回り始める。

彼女を囲む八枚の鏡と鏡が合わせ鏡となり、無限の如く世界を映し合う。

まるでカレードスコープ。

そして、鏡の裏側から真っ黒なインクでも零したように広がりだす暗黒が、背後の空間を黒々と染め上げていく。

「けっ、結界!、何処からさ!?」

鏡の裏側から生まれた暗黒は、高い天井もコンクリートの床も黒く染め上げていくと、その空間には彼女と八枚の鏡だけが残る。

周りの景色は、まるで分子レベルで破壊された無の世界のように変わった。

「行くよ、姉さん」

「ええ、行きましょう」

八枚の鏡が向かえの鏡同士で合わせ鏡を映す中、その鏡の中を二人の人物か映りこむ。

混乱する日照り神が八枚の鏡を、右へ左へと首を回転させながら見回すと、鏡の中に自分の姿が消えていた。

その代わりに青い全身スーツに青紫色の仮面にプロテクターを身に付けた男女の走る姿が映っていた。

バイクのフルフェイスヘルメットよりも顎先がシャープな作りの青い仮面。

ブルーに染まった皮の様なスーツに不思議な作りのプロテクターが、胸や肩、肘や拳、膝や脛に装着されていた。

そして、腰に巻かれたベルトのバックルには『鏡』の一文字。

男女で若干のサイズや胸元のデザインが違っていたが、二人が味方同士で、自分の敵である事は、彼女にも十分に理解できた。

上半身を屈めてながら忍者走りで鏡の中を、日照り神に向かって走ってくる青い姿の二人。

八枚の鏡に交互四枚ずつ映る男女二人の姿。計八人の男女が迫るように合わせ鏡に映り、更に日照り神を混乱へと誘う。

「空へ！」

このままでは危険と判断した日照り神が、翼を広げて真っ直ぐ上へと飛び上がる。

広げた翼に合わせて、彼女を囲んでいた鏡は、炎の翼に触れないように円を広げた。

しかし、黒く染まっている空中に飛んだはずの彼女の体は、何時ものように空中へと舞い上がった感覚が無かった。

確かに足は地から離れているが、大きく感じる違和感。そして、飛び上がる彼女の横には八枚の鏡が、ぴったりと付いて来ていた。

「ちっ！」

飛ぶのを止めた日照り神が、今度は一枚の鏡を目指して手を伸ばしながら走り出した。

だが、手は届かない。いくら走っても鏡に近づけない。

まるでトレーニング器具のジョキングマシーンの上を走っているような感覚に似ていた。否、それよりもこの空間が、宇宙そのものに思えてきた。

「「悪いけど、死んでください」」

鏡の中から迫り来る男女の声が重なり合う。

「「必殺、万華鏡多勢無勢脚！」」

鏡の中から青い四人の男性と、四人の女性が、同時に飛び蹴りのモーションで飛び出してきた。

日照り神も一人の攻撃ならば防げていただろう。しかし、全方向から飛んでくる八人同時の攻撃を、流石に防ぐ事は不可能だった。

防御にまわった天野太陽には、羽を丸めて背を守り、両手で頭を庇うのが精一杯のガードだ。

男女八人の飛び蹴りが、日照り神の体を八方向から抉る。

重く鋭い八つの飛び蹴りが命中すると、天野太陽の全身の骨が歪む音が、その骨を伝わって聴こえて来た。

その蹴りの数々に、彼女のスマートな体が絶えられるダメージの限界を超えた。

日照り神の全身に、割れた鏡のような輝が広がっていく。そして、その全身の輝から吹き出る眩い光。

やがて光は爆発へと変わる。

広い建屋内に爆炎と共に爆音が響き渡ると、建屋内の空気が衝撃と熱に渦を巻いた。

そして、大きく広がった爆炎が静止すると、爆発した中央へと吸い込まれていく。

そこに立っているのは、青い姿の男女二人。

炎は、その二人の青紫のプロテクターに、全て吸い込まれていった。

「この感じ……」

「この炎……」

二人の青い男女は、自分の体を見回していた。

「ピィーーーーー」

鳥の鳴き声に二人は建屋の天井に視線を向ける。

すると一匹の赤いオウムが、羽をバタつかせながら割れたガラス窓から外へと去って行くところだった。

「ああ、逃がしちゃったね」

「まさか、偽者の炎を作って逃げるなんて」

赤いオウムが出て行った割れた窓枠を見上げる青い二人。

「でも、あいつの妖気は大分吸えたよ」

「もう一体の九十九神は？」

「あっちも逃げたようだね」

今度は、黄金の騎士が逃げていった壁の穴を見る二人。

「カウントは稼げなかったけど、私達も帰りましょうか」

「そうだね。帰ってネットゲーにＩＮしないと、そろそろボスモンスターが沸く時間だし」

そんな会話を青い姿の男女がしていると、二人の目の前に畳サイズの鏡が床から起き上がるように現れる。

そして、二人の男女は、まるでドアでもくぐる様に、順番に鏡の中へと入っていった。

<　テコンドー教室・1　>

暮れなずむ夕日が高いビルの陰に隠れ始めた頃、四人の男女が、五階建てのビルの前にタクシーでやってきた。

タクシーの助手席に座っていた短めの顎鬚を生やした男性が料金を払うと、スポーツバックを片手にタクシーを降りる。それに続いて後部座席から青年と少年が降りてきた。二人の手にもスポーツバックが握られている。

そして、最後にタクシーから降りる金髪の女性。後部座席のシートに長い蜂蜜色の髪を滑らせながらゆっくりと車を降りた。

二人の武骨な男性と、一人の少年。それと美しい女性の四人は、そろって目の前のビルを見上げる。

オフィス外から僅かに裏路地に入った場所に建つ鉄筋コンクリート建てのビル。

一階のテナントには不動産屋の事務所が入っており、二階は若干古いデザインの喫茶店が入っていた。

もう時間は、夕方の六時は過ぎていたが、不動産屋の事務所の中では、残業に励む女性が何やらパソコンのモニターに、真剣な眼差しで向かい合っているのが見える。

タクシーから降りた四人が一度、五階建てのビルを見上げていると、まもなくして大柄の男性二人が、不動産屋の事務所の横にある扉の中へと入っていた。

未だにビルを見上げていた金髪の女性と背の低い少年は、先に進む二人の男性に気付き後を追う。

「カズマや、テコンドーとは、何ぞや？」

金髪の長い髪を揺らしながら二人の男性を追う彼女が、その横を歩く少年に視線も向けずに問いかけた。

少年は、もう一度ビルの四階の窓を見上げると、女性の質問に答えた。

「僕も詳しくは知りませんが、韓国の格闘技らしいです」

「なるほどのぉ。異国の武術かぇ」

五階建てのビルの四階の窓。そこにはテコンドー教室とステッカーで大きく書かれていた。

四人はコンクリートで冷えた空気が流れる階段を登っていくと、長細い一枚板に「大塚テコンドー道場」と書かれた看板が、脇の壁に立てかけられた扉の前で立ち止まる。

顎髭の男性が、鉛で出来た杭のように太い指でインターホンのボタンを押してチャイムを鳴らす。

暫く待つが返答は無かった。

しかし、扉の向うからは大勢の男性達の掛け声が重なり合いながら響いてきた。

馴染みの有る響き。おそらく奥には道場があり、多くの男達が技を磨くために汗を流している音であろう。

タケシは、その響きに心地良い物を感じていたが、後ろに居るカズマは、その響きに緊張していた。

もう一度、顎鬚の男性が、インターホンを鳴らそうと腕を上げた時である。目の前の扉が開き一人の男性が顔を出した。

「どちら様ですか？」

男が顔を出すと、扉の向うから響いていた音も止んでいた。

額から汗を流しながら顔を出した男性。彼は白い道着を見に付けていた。しかし、空手の道着とは異なり、肩から袖に掛けてと、スボンの両脇に青いラインが入っており、襟首のラインも青いものが入っていた。それは、テコンドー特有の道着のデザインであった。

「大塚先生のお招きでまいった、桜木銀です」

「桜木先生ですね、お待ちしていました」

顎鬚の男性が自分の名前を伝えると、道着の男性は無理やりな笑みを作って客人を室内へと迎え入れる。

四人は、道着の男性に案内されて中へと入っていく。

電気の消された薄暗い廊下を進む五人。

壁にはテコンドー教室の生徒募集のポスターや、今年の夏にあるテコンドー協会主催の全国大会のポスターなどが、何枚も並んで貼られていた。

しばらくして四人は招かれるままに畳張りの大部屋に通された。

窓には、先ほど見上げたテコンドーの文字が逆さに見え、壁の四方には屈強な男達が三十人近く立って居た。

三十人の視線が、大部屋に入ってきた四人を突き刺すように向けられた。

部屋の隅にある鉄アレイやベンチプレスは、握りの部分が擦れ減り黒ずんでいた。

キックミットの数々や壁からぶら下がるサンドバックは、叩かれすぎて破けたのかテープでミイラのように補強されている。

そして壁にぶら下げられたスーパーセーブなどの防具も、血の茶色い染みがこびりついて、一つ一つ全てが、かなり使い込まれているのが遠目にも分かった。

遠目にも分かるそれらのアイテムと、男達の鋭い視線の数々が、このテコンドー教室の生徒が打ちこむ武への本気度を伝えていた。

カズマが、その視線の威圧感に押されながら気付いた。男達に混ざって一人の女性がいることに。

黒い髪をポニーテールにまとめた道着の女性。

男達のように威嚇した表情は取っておらず、ただ静かに佇んでいた。カズマには、それが逆に目だって見えて、不思議な違和感を印象付けた。

「お久しぶりです、桜木君」

一人の男が四人に近寄ってくると、微笑みながら銀の前に右手を差し出した。

年のころは、五十を超えていそうに見えた。

第一印象は、その年齢から来る外見よりも、背の低さが気になった。身長百六十センチを少し超えたぐらいだろう。

残念ながら格闘技家としては、身長が小さい。

体重別の階級があるスポーツならば問題はないだろうが、無差別級で最強を目指す格闘技では、明らかに小さな体型だった。

「お久しぶりです、大塚さん」

その男に答えて、銀はがっしりと強い握手をした。

男は銀と挨拶を終えるとタケシの前に立った。そして同じように右手を差し出し二人は笑顔で握手を交わす。

「タケシ君、大きくなりましたね。噂は聞いていますよ」

「大塚先生、お久しぶりです」

タケシは大塚と呼ばれた男を見下ろしながら、にっこりと笑う。

「此方の二人は？」

タケシと銀の大きな陰に埋もれていた二人に大塚が気付くと、見慣れない二人に友好的な笑みで声を掛けた。

「二人とも挨拶しなさい」

銀が威厳のこもった声でそう言うと、カズマが二人の陰から横に出て礼儀正しく頭を下げた。

「堂本流の新弟子、十文字カズマと言います。よろしくお願いします」

「ほほ～、堂本流の新弟子さんですか、それは凄い」

大塚は、先程までの笑みを驚きに変えてカズマを見た。

「まだ、正式な弟子じゃない」

タケシがそう言うが、カズマは笑みのまま無視する。

「で、其方の女性は……、まさか陽子ちゃん？。すいぶん……べっぴんさんに育ったね」

「戯け、わらわは春子・ハルバードじゃ。あの小娘ではない」

幼い頃の陽子の記憶しかない大塚は、春婆怒を見て勘違いをしている様子だった。それを春婆怒が冷めた視線で否定する。

「そ、そうですか。それは失礼しました」

その冷たい視線に押される大塚は、白髪の混ざった頭を掻きながら春婆怒に謝罪をした。

「今日はただの見学じゃ。わらわに気を使わぬで結構じゃ」

銀が身を屈めて大塚に耳打ちする。

「ちょっと間違った日本語を覚えた、頭の可笑しな外人なんですよ。あまり気にしないでください」

「あ、ああ」

銀の言葉に気を取り直す大塚が、壁にある扉を指差しながら言った。

「そこに更衣室があります、良かったら使ってください」

「では、お言葉に甘えて使わせてもらいます」

銀は片手に持っていたスポーツバックを胸の高さまで上げると、大塚に笑いながらそう答えた。

そして、スポーツバックを片手に持った三人は、春婆怒を残して更衣室の中へと入っていった。　三人目にカズマが扉をくぐろうとした時である。入り口の直ぐ横に居た少女と目が合った。

ポニーテールの女性の他に、もう一人少女が居た。男達にまぎれ

て今まで気付かなかったが、彼女も威嚇にも似た視線で、目の前を通り過ぎようとしたカズマを睨んでいた。

年のころはカズマとあまり変わらないだろうか。しかし、身長はカズマよりも少しばかり高く、背中まで有る長い黒髪をゴムで縛り、凛々しくテコンドーの道着を着こなし立っていた。

今はキツイ表情でカズマを睨んでいるが、笑顔を見せれば、おそらく可愛い少女ではないだろうかと見えた。

しかしカズマは、少女の視線に気遅れを取ったのか、身を縮めながら更衣室に逃げ込んだ。

<　テコンドー教室・2　>

畳にしたのならば、十畳程度の部屋。

扉をくぐると左右の両壁にロッカーが並び、部屋の中央には長椅子が二つ連なって置かれていた。その向こうの壁にガラス窓が一つある。

更衣室に入った堂本流の三人が、荷物を長椅子に置くと着替えを始める。

カズマが、スポーツバックの中から白い道着を取り出すと、同じようにタケシと銀も道着を取り出していた。

帯で縛られた道着。タケシと銀の帯は黒いが、カズマの道着を縛る帯は、まだ白い物だった。

最近の空手塾では、黄色、緑、茶色などのカラー帯などを使って段位を現すことが多い。

しかし、真剣勝負のみを目指す堂本流には、そのような物は無かった。銀が経営しているちびっ子空手でも同様であった。故にカズマは白帯である。白と黒しかないからだ。

道着を縛る帯を解きながら隣で同じ動作をしているタケシの黒い帯を、カズマが目線だけで見た。

黒い帯には、堂本タケシの文字が、黄色い糸で刺繍されている。

真っ黒な帯ではなかった。使い込まれ黒い色はあせていた。

カズマが憧れている帯の色とは、そのようなカラーである。漆黒よりも、その使い込まれた黒い色に、強い憧れをいだく。

帯を解いたカズマが靴下を脱ぐと、床のコンクリートの冷たさが、よりいっそう伝わってくる。

三人が、上も下も服を脱ぎ捨てパンツ一丁の姿になると、それぞれの道着を着始めた。

上半身裸で道着のズボンを履くカズマの姿を、タケシがなんとなく眺めた。

小さく、まだ華奢な体つき。格闘家と呼ぶには貧弱な体格。だが、今年中学生になる少年にしては、十分な程に引き締まった体だといえた。

胸の筋肉が胸骨の窪みを隠し、腹筋は割れているのが分かる程に鍛えられていた。

そして、その体に幾つもの痣が、はっきりと残っているのが見えた。それは、三つや四つではない。

胸や腹、腕や足、背中にも幾つか見えた。

二週間ほど前から、タケシや銀に組み手をしてもらえるようになったのが、痣を作る原因であった。

組み手と言っても、タケシや銀にとっては、子猫がじゃれ付いて

来ているのをあやしている程度だ。

だが、カズマにとっては、それでも十分だった。それが、自分も堂本流の一員と思えたからだ。

しかし、その代償が、この痣の数々である。

組み手の前半は、何時もカズマの好きなように技を打ちこませる二人である。それでもカズマの技がヒットすることは無い。捌かれ、避けられ、止められる。

そして、疲れきるまで打ち込んだカズマに対して、最後は強い一撃を加える二人。その一撃で、何時もカズマは絶命させられる。気絶させられたり、暫く動けなくなるほどのダメージを貰う。

それでもタケシ達の一撃は、本気の一撃ではない。タケシ達が本気を出せば、指一本でカズマを病院送りに出来るのは間違いない。

二人とカズマの戦力の差は、それ程まで大きく離れている。

その証拠に、以前、組み手の最後にカズマは、タケシの手加減された一本指抜き手を腹筋の上から喰らい、もんどりをうって絶命した事がある。

あれが本気で撃たれていたのならば、カズマの腹部には、ピストルで撃たれたような穴が開き、内臓まで達した刺し傷のダメージを受けていたであろう。

暫くすると、更衣室の三人は、空手の道着に着替え終わっていた。そして、銀を先頭にテコンドーの道場へと出て行く。

空手着の三人が道場に戻ると、再びテコンドーの門下生達が鋭い睨みを効かせる。

だが、今度はタケシも鋭い視線で睨み返した。道着をまとったタケシの視線は、それだけで人を殺しそうな修羅の如く恐ろしく見えた。テコンドーの門下生の半分が、そのタケシの視線に目を反らす。

更衣室を出ると同時にカズマが、扉の直ぐ横を見る。

しかし、更衣室に三人が入る前に、カズマを集中的に威嚇していた少女の姿は、扉の横から消えていた。

そして、その少女を探すようにカズマは、男達の眼光をくぐるように辺りを見回す。

「三人方、こちらへ」

この道場の主、大塚が、三人を呼びながら道場の壁を背に正座をすると、門下生達も同じように壁を背に座り始めた。

三人は、言われるがまま大塚の右側に、銀、タケシ、カズマの順番で並ぶと座った。

春婆怒は、一人で道場の入り口に立っている。私服なのは、彼女一人になっていた。

カズマがチラリと大塚の方を見ると、大塚の左側に、あの少女がすまし顔で座っていた。

正座しながら前に腰を曲げてカズマが覗き込んでいると、不意に少女がカズマを見た。その表情は、怒っているようにも見えたカズマは、慌てて背筋を戻し、タケシの大きな体の陰に隠れた。

暑い熱気が残る道場の中に、静かな空気が流れていた。

全員が正座をして、タケシたちに威嚇的な視線を向け続ける。

それを冷まそうと、開けられた幾つかの窓から外の空気が流れ込んでくる。カズマには、その風が気持ちよく感じられた。

「大塚先生、今日はお招きいただきありがとうございます」

銀が、笑顔を隣に座る老人に向けながら挨拶を再び繰り返した。

「我々の流派は、空手道の中でも、あまり足技が多くない流派。本日は、色々とテコンドーから勉強させてもらいます」

銀が言うとおり堂本流は、他の空手の流派に比べて蹴り技のバリエーションが少ない。

上、中、下段の廻し蹴り、後ろ廻し蹴り、前蹴りと横蹴り、あとは多少の飛び蹴り程度しかバリエーションが無い。

元々は他流出身の銀や、研究熱心なタケシが、他流のマネをして幾つかの蹴り技を使うが、それらは本来の堂本流にある技ではなかった。

「はは、堂本流に、そのように言われると恐縮しますな」

「またまた、御冗談を」

二人は笑いながら話していた。

現在は、和やかな会話をしている二人だが、過去に血まみれになりながら戦ったことがある。

大塚望、五十五歳。

日本人の中で、テコンドーの第一人者とも呼ばれた男である。

過去には、本場韓国に一人で渡り、テコンドーの修行をつんで帰ってきた。

大塚が三十歳の時に、日本で道場を開く。そして、道場の看板を上げた翌年に、堂本拳四郎によって道場破りに会い、一度上げた看板を下ろすこととなった。

それから四年後に大塚は、春婆怒村に自分から乗り込み、堂本拳四郎を尋ね、その地で弟子の桜木銀と戦い、観客が居ない中で、名勝負と呼べるほどの好勝負を繰り広げ敗れ去っていた。

そして、大塚が再び道場を開き、二人の関係は、どこでどうなってこうなったかは分からないが、今では親友と呼び合える程の友好関係で結ばれている。

しかし、大塚の弟子の多くが、それとは関係なく堂本流を敵視している様子だった。

「だれか、トゥルを披露してあげなさい」

大塚の言葉に、ポニーテールの女性が立ち上がって、道場の中心へと出てきた。

トゥルとは、空手で言う型のことである。

彼女は、一人で道場の中央に立つと、大塚や銀達の方向に向かって挨拶をした。そして、テコンドーのトゥルを始める。

彼女の始めたトゥルは、テーグッ八章。日本では太極八章と呼ばれる型だが、他流の三人は、それすら知らないことだった。

時間としては、一分も無いトゥル。

綺麗なトゥルの最後は、右上段肘鉄からの裏拳後に、右正拳突きで締めくくると、彼女は「やぁー！」と気合の入った声を出した。そして、一礼して、元居た場所に帰っていく。

銀は、足技を勉強すると言っていたが、今見せた型の中に出てきた足技は、テコンドーを意識させるほどのテクニカルな足技は、少なかった。

上段前蹴りが二回、飛び二段蹴りが二回。あとは、数多くの正拳突きや抜き技、肘鉄や裏拳、チョップのような技を見せていた。

それだけ見れば、空手の型とはあまり変わらないようにも見えた。少なくも、まだ若く知識の少ないカズマの目には、そのように映った。

「まだ、二十歳そこそこに見える女性ですが、すばらしい型ですな。

技の切れ、止めの力強さ、全身のしなやかさ、実に美しい」

彼女のトゥルを見て銀が褒め称える。だが、蹴り技の勉強としては不十分とカズマが、不満の残る表情をしていた。期待ハズレ、その言葉が脳裏に浮かぶ。

「では、今度は誰か二人で組み手をお見せしてあげなさい」

大塚の言葉に、カズマの脳裏から不満の言葉が一瞬で消えた。

目の前で本物のテコンドーが見れる。本物のテコンドーの蹴りが見れると心が弾む。

「私が！」

立ち上がろうとしていた男達数人よりも、我先に立ち上がった人物は、そう言って道場の中央へと進む。

それは、大塚の左手に座っていた少女だった。

周りの男達がざわめく。

大塚は、それを黙って見ていた。その表情には、先程と変わらない笑みが残っていた。

年のころは、カズマと変わらないだろうか。肩ぐらいまである髪を首の後ろで縛っている。

その彼女が、引き締まった表情で、座ったままのカズマを指差す。

「さあ、キミも前に！」

「えぇ！？」

指を刺され、そう言われたカズマが、慌てた表情で声を上げた。

この話の転回、カズマｖｓテコンドー少女。

タケシや銀だけではなく、大塚の顔も笑っていた。

否、むしろ、三人は笑いを堪えているようにも見えた。

少女に指を刺され動揺を見せるカズマが、隣に居るタケシの顔を見た。

「ほら、行って来い。女の誘いを断るなんて紳士じゃあねえな～」

「で、ですが……」

「あれは、孫の友香です。カズマ君といったかね、年も同じぐらいだし、どうだねひとつ、孫のわがままに付き合ってはくれないか」

正座をしながら大塚の顔つきは、悪気のない表情で笑っていた。大塚は、カズマと孫娘を戦わせるつもりだ。

「で、ですが、彼女は女性ですよ……」

カズマの言葉を聴いて、タケシの表情が厳しいものに変わった。

「おい、カズマ、前にも言ったよな。堂本流は、例え女子供だろうと、例え死に掛けた病人だろうと、例え百歳を超える老人だろうと、戦士として、武士として、敵として目の前に立つ奴は、何一つ差別無く叩きのめすと……」

その言葉を聴いてカズマの表情も引き締まった。そして、立ち上がる。

カズマも忘れていたことを思い出したようだ。

「そうでした。堂本流の精神は、戦う意思を持つ者を差別せずに、戦士としてその魂を受け止める。そして、心を折り勝利する……、でしたね。差別は戦士にとって失礼」

堂本流は、向かってくる者とは、誰であろえと戦う。その代わりに、戦う意思の無い者には、此方から仕掛けることは無い。ただし、戦う意思がない者を挑発することは有る。

カズマが、道場の中央で睨む少女のもとを目指す。

「デビュー戦だ、派手にいってこい」

タケシの台詞が、小さな背中に向けて飛んで行くと、その言葉に押されるようにカズマが進んで行った。

そして、少年と少女が向かい合う。

道場の中に、いい空気が流れていた。

道場の畳、壁、天井、バーベル、キックミット、サンドバック、それらに染み付いた男達の闘士が、熱気と変わって染み出してきていた。

桜木道場と同じ熱気だった。

一般人には、男臭いだけで、とてもいい空気では無いだろう。しかし、カズマには、この空気こそが心地よかった。

一人の門下生が、壁に掛けてあった組み手用の防具に手を伸ばした。

「要りません」

「え……、しかし……」

防具に手を伸ばした男の動きが、少女の言葉に静止した。

「要りません。……ですよね？」

少女の言葉は、目の前に立つカズマに向けられていた。

カズマは、組み手などで防具を身に付けたことが一度も無かった。桜木銀の道場には、そもそも防具なんて物は無い。

堂本流は、実戦を目標に考えられた空手。試合や大会に勝つための空手ではない。

喧嘩に防具を身に付けている暇なんて無いし、防具を身に付けてから喧嘩に行く空手家も居ないだろう。

少女は、堂本流の舞台で戦いたい様子である。それだけ堂本流のことを、知っているのであろう。

素手で急所を付き合う堂本流。その危険性を知っていながら挑む少女の覚悟。カズマは、それを感じ取った。

怒ったような表情で少女は、カズマを真っ直ぐに見ていた。もしも笑顔で笑っていれば、とても可愛い少女ではないかとカズマが思う。

その思いが顔に現れているのか、カズマの表情は、友香の表情に比べて穏やかな感じがした。それがいっそう友香の機嫌を逆なでしていた。

友香の表情が、更に険しく変わる。

身長は、カズマより友香のほうが高かった。

カズマの身長は、１５５センチ。一方の友香は１６２センチ。体重は二人とも４０キロ前後。年齢も殆ど変わらない。

しかし、格闘技を始めたキャリアだけならば、友香の方が圧倒的に長かった。大塚望の孫なのだ、当然と言えるだろう。

友香は、物心付く前からテコンドーを学んでいた。それが、一度でも嫌だと思ったことは無い。むしろ今では、テコンドーに対しての誇りのようなものすら感じている。

「ルールは堂本流のものでかまいません」

「否、目突きと金的だけは、禁止にしましょう」

少女の言葉に割って入ったのは、祖父の大塚だった。

祖父の言葉にカズマから視線を外す事無く頷く友香。

「内村君、審判を頼む」

「はい」

審判を言いつけられた男が立ち上がり、二人の子供の横に立つ。男は心得ていた。自分は保険だと。

「互いに礼！」

内村の出した大きな声にカズマが肩をピクつかせると、少女がカズマに頭を下げた。それを見て、慌ててカズマも頭を下げて一礼した。

「審判に礼！」

右手に居る審判の内村に向かって頭を下げた少女は、続いて左手にいる祖父や桜木に向かって頭を下げた。カズマは、その仕草を少し遅れながら真似た。

「構え！」

内村の声に、二人が各々異なる構えを取った。

カズマは、こめかみの辺りに両拳を持ってきた前傾の構え。拳と拳の間から二つの視線が、真っ直ぐ少女を見ていた。左足を前に、右足を後方に。ボクシングのビーカブースタイルに近い構えであった。

友香の構えは、重心が後方の右足に大きく乗った横向きの構え。背筋は真っ直ぐに伸び、左肩がカズマの方に向けられ、その肩から伸びた腕は、斜め下を向いていた。そして、力強く握られた右拳は、彼女の綺麗な顔の横で、鋭い視線に合わせてカズマを狙っている。

二人の構えを見た周りの大人たちは、一瞬で分かった。

この試合は、インファイターとアウトボクサースタイルの戦いになると。

「はじめ！！」

内村の気合の溢れる掛け声。

その掛け声と同時に、カズマが弾丸の様にダッシュした。

更に身を丸めて、こめかみの高さにあった両拳が、もうひと拳分、上へと移動していた。

タケシと銀が、カズマの動きをみて心の中で「恐れを忘れた、いい動きだ」と褒めていた。

しかし、その言葉は、心意気を褒めたのであって、カズマの技術を褒めた訳ではない。

カズマのダッシュに対して、友香の右膝が反応して前へと素早く動く。

そして、少女に向かって進む少年の顔面を目掛けて、少女の右前蹴りが跳ね上がっていった。

その蹴りは、疾風の如く速かった。

カズマの二つの腕を割って、友香の蹴りが突き進む。

「ぶぁ！」

友香の足の指の裏側が、カズマの口元を捕らえた。カズマの口から友香の爪先が離れると、僅かな声と共に血が飛び散る。

カウンターだった。

カズマは、頭から後方に跳ねる様に飛んでいった。

カズマの視界が真っ白に染まり、その白い色の中には、僅かだが道場の天井にある蛍光灯が、朧気に光って見えた。

撃たれたカズマが、後方に倒れる。背中から道場の畳に音を立てて。

撃った友香もバランスを崩して肩膝を付きそうになるが、それを必死に堪えていた。

倒れたカズマの様子を見る内村。

背中から落ちたカズマは、両腕を顔の前に並べて、更なる追撃に備えてガードを固めていた。

しかし、倒れたカズマに対して友香が追い討ちを掛けてくる事は無かった。

直ぐにカズマもそれに気付く。

唇を切って血を流すカズマが立ち上がろうとした時、畳に付いた手を滑らせ体制を崩した。

ダメージが残っていた。それを見て内村が、右手を上げた。

「一本！」

「ぷっ」

内村が友香の勝利宣言を上げると、それを見ていたタケシと銀が、吹くように笑った。

立ち上がるカズマが、内村の前によろよろと迫る。

「すみません、一本って……、なんですか？」

カズマは、口から流れる血を手の甲で拭うと、困ったような笑みで内村に問う。

「君の一本負けだ」

「それは、空手とかの試合でのルールですよね？」

「え？」

審判を勤めていた内村が、カズマの言葉に若干戸惑った顔をした。それは、「お前、空手家だろう」と言いたそうな表情だった。

そんな様子の内村に、更にカズマが言い放った。

「今回のルールは、堂本流のルールじゃあなかったんですか？。実戦には、一本も糞もないですよ」

「き、きみ……」

カズマの話を聴いていた内村は、判断に困ったのか大塚の方を見た。

内村の視線が向けられた大塚は、にっこりとした表情で、一度だけ頷く。

「わ、わかった。双方前に……」

納得いかない表情のままだが、内村は試合の続行を二人に指示する。

カズマと向かい合う友香は、あれで勝負が付いたとは、はなから思っていなかった。

友香が祖父から聞き及んでいた堂本流とは、相手の心を折ってこそ勝利としている。

だから、この勝負で、この少年の心を折るつもりでいた。

二十年前に心を折られた祖父の仇。この少年を倒すことで、その借りを少しでも返してあげたい。友香の思いは、そこにあった。

「構え！」

内村の声に二人は、再び構え合う。

<　テコンドー教室・４　>

二人の構えは、先程と変わらない。

「はじめ！」

内村が、再開の合図と共に声を上げた。

今度は、二人とも睨み合ったまま動かない。

カズマは、拳の間から友香を睨んでいたが、今度は、先程の様に勢い良く飛び出さなかった。

「それにしても素晴らしい前蹴りでしたな。アプチャ・ブツギって言うんでしたけ、テコンドーでは」

「ええ、勉強熱心ですな、桜木さんは」

大塚と銀が、二人を見ながら友香の蹴り技を褒めていた。

「何よりも反射神経が素晴らしい。あのタイミングで素早く反応して、よくあの蹴りが出たものです」

銀が、そう言っていると、友香が爪先でステップしながらリズムを取り始めた。

「今度は、お孫さんから仕掛けるようですな」

銀が言う通り、間も無くして友香が仕掛けた。

右足で畳を蹴ると、左足から前に滑るように大きく踏み込んだ。

そして間合いを詰めた友香の左脚が畳に付くと、その左足を追って右脚が左足の横に並ぶ。二つの足が揃うと同時に、先に畳に付いた左脚が、カズマの顔面を狙って、鋭い槍の様に真っ直ぐ飛んでいった。

ヨブチャ・キルギ。

いわゆる横蹴り。横向きの体制からの足刀である。

伸びるように飛んでくる友香の横蹴り。

カズマは、こめかみの辺りにあった両拳と、顎の下にあった両肘を合わせて顔の前に両腕の盾を作って蹴り足を受け止めた。

篭った音を立てて、カズマの体が僅かに揺れる。

友香は、放った蹴り足を素早く戻す。そして今度は、右足で前蹴りを繰り出す。

狙いは腹部。そこは、水月と呼ばれる人間の弱点の一つであった。

両腕を合わせて作ったガードの隙間から、その動きを見ていたカズマは、そのガードを素早く下へと移動させて、腹部に新たなる十字の盾を作り直す。

しかし、Xの字にボディーを守るカズマの腕に、友香の前蹴りがぶつかるかと思った瞬間、その友香の蹴りが、不思議な動きで軌道

を変えた。

下から上へと跳ねた蹴りが、膝関節から横向きに動き、廻し蹴りに変貌したのである。

ガードが下がり、がら空きになったカズマの頭部に、右から回り込む友香の廻し蹴りが、不思議な軌道で飛んで行く。

カズマがその蹴りの変化に反応した時には、既に遅かった。友香の足の甲が、カズマの左頬を捉えていた。

パチンと乾いた音が道場内に響きながら、カズマの顔を蹴った足が振り切られる。

カズマは蟹股で一歩後方に踏み込むと、蹴りの衝撃に耐えた。

そのカズマに友香が追い討ちを狙う。

拳を振りかざし詰め寄った静香と、バランスを崩しているカズマの目が合う。カズマは、顔面を蹴られながらも友香の視線から目を逸らしていなかった。

振りかざしていた友香の拳が、カズマの頭部に打ち込まれる。拳が当たった場所は、こめかみの少し後ろ。急所では無い。カズマが堪えた。

カズマはパンチを喰らいながらも、目を閉じる事無く友香を見ていた。友香もそれに気付いていた。

ガズマがタケシと日頃やる稽古の中に、ある独特の稽古があった。

それは、真っ直ぐに立つカズマの顔面目掛けて、タケシがパンチやキックを打ち込む稽古。

打ち込むと言っても寸止めである。実際には当てない。

カズマが飛んでくる凶器の様なタケシの拳や蹴りを、目を閉じずに、じっと耐える稽古である。

それで、打撃技への恐怖を無くす。だが、寸止めで、当たらないと分かっている技は怖くない。だからたまに、タケシは本当に当てるのである。そうする事によって、何時当たるか分からない恐怖心が上乗せされて、稽古の本来の目的が、成果となって現れる。

その本当の成果が、今この場で発揮されていた。

「たっ！」

頭を殴った友香の拳が引かれると同時に、カズマが上段廻し蹴りを放った。

友香の蹴りの様に、テクニカルなものでも、しなやかでスピーディーなものでもなかった。だが、友香の素晴らしい蹴りよりも、力強さはあった。

友香は、カズマの蹴りをスウェーバックで回避して、大きく後方へと下がっていった。

二人の距離が開く。友香が、自分の間合いを作るためだ。

蹴り技によるヒットアンドアウエー。それが、友香のスタイル。

しかも、友香のほうが、カズマよりも背が高い。リーチは、彼女のほうが有る。有効的戦略といえた。

「餓鬼の蹴りにしては、二人とも上出来だな」

二人の攻防を見ていたタケシがそう言った。

また、友香が横向きの構えでステップを刻み始めた。それに合わせてカズマも変わらない構えで、静かに一歩だけ踏み出した。

初めての戦いの中、カズマは思っていた。

今まで組み手といえば、タケシ、銀、陽子の三人としか相手をしてもらったことが無い。カズマは、その三人に、散々殴られていた。

まだ陽子だけは、怪我をしないように手加減して殴る。しかし、カズマと銀は、死なない程度にしか手加減しない。

おかげでカズマは、痛みに対しての免疫が、多少だが以前よりも強くなったと自分でも思っていた。

そう思うカズマが、目の前の少女に蹴られて気付いた。

それは、彼女の攻撃が、とても軽いことである。

もろにカウンターで直撃した前蹴り。ガードした足刀。フェイントの混ざった変則の廻し蹴り。頭部に喰らった拳。痛く無い訳は無い。だが、重みがなかった。

特に左頬を叩いた変則の廻し蹴り。あれは蹴りと言うよりも、ピンタのようなダメージだった。

脳の揺れない攻撃じゃなければ気絶はしない。内蔵に響くような攻撃じゃあなければ絶命はしない。どちらも、重い攻撃でなければ、そうはならない。彼女の技には、その重さが足りていない様に感じた。

カズマは思う。

彼女もまた、自分と同じに、まだまだ未発達な存在なのだと。

だからと言って、何発も喰らってはいられない。

友香が、爪先でステップしながら少しずつ前に進んでいた。

そのステップを見て、カズマが飛び出した。しかし、友香もそれに合わせてジャンプした。

ティミョ・トルリョ・チャギ。

友香の繰り出す、ジャンプしての飛び廻し蹴り。

カズマが、自分の頭より高い位置から飛んでくる廻し蹴りに、片腕を曲げで頭部を守った。

斜め横から降ってくる蹴りを受け止めるカズマ。今までの友香の蹴りの中でも、一番重たく感じられた。飛び上がった友香の体重が、全て蹴り足に乗っているようだった。

カズマの両膝が、飛び廻し蹴りの威力に、ガクリと曲がる。

<　テコンドー教室・5　>

飛び蹴りから着地した友香が、続いて肘鉄を放つ。横振りの素早い肘が、まるで鋭い猛獣の爪の様に見えた。

カズマは、顎を引きながら額で友香の肘を受ける。

かわせない攻撃を顔面で喰らうよりは、ましだと判断して、自分から突っ込んだのであった。

ゴンっと、骨と骨が激突した音が響く。

ヒットするインパクトの瞬間を僅かにそらして、額で受けた攻撃だったが、流石に肘鉄は重たく感じられた。カズマの体が、その重さに仰け反る。

打撃技には、重さと鋭さの法則が存在する。

正拳突きよりも肘打ちの方が重い。重いということは、相手に与える衝撃が大きいということである。

重い衝撃のダメージは、体内に響くダメージになる。脳を揺らし、内臓に響く。

そして、肘打ちよりも、肩からぶつかる体当たりの方が更に重い。

打撃技は、手足の先よりも体に近づくにつれて重くなっていく。

逆も有る。

打撃技は、体から手足に向かって、離れれば離れるほどに鋭くなる。

拳による正拳突きよりも、平拳。

平拳よりも、抜き手（貫手）。

さらに、抜き手よりも、一本指貫手。

空手技は、先へ先へと打ち込む部分を勧めれば鋭くなり、刺さるような武器に替わる。

それが与えるダメージの種類は、刃物のダメージ。

脳震盪は起こさないが、皮膚を貫き、肉を裂き、内臓を抉る。

だが、尖るということは、もろくなる事でもある。硬い事は砕けやすい事を意味する。軟らかいということは、壊れにくいという意味でもある。

正拳よりも肘打ちは壊れにくいが、正拳よりも抜き手は壊れやすい。

これが、打撃技の法則のひとつである。

肘鉄でカズマの頭を跳ねた友香の攻撃が続く。

右のローキックが、カズマの太腿を蹴る。

続いて左のミドルキックが、カズマの脇腹を捕らえる。

更に右のハイキックが、カズマの頭を弾く。

コンビネーションで放たれた左右の蹴りが、次々とカズマの体に炸裂した。

ハイキックで頭を蹴られ、俯いたカズマの瞳が、黒い前髪に隠れた。

友香は、大きく全身をスピンさせて、後ろ廻し蹴りを放つ。

どてっ腹を狙った、バンデ・トルリョ・チャギ。

しかし、三連蹴りのダメージに俯いていたカズマが、顔を上げた。

前髪に隠れていた瞳は、まだ死んでいなかった。しっかりと、友香の動きを見極めていた。

カズマが、右足で退脚を踏ん張る。

パンチを打つ込む場合に、前に踏み込むのが震脚。その反対に、後方に踏み込むのが退脚と呼ばれている。

迫る中段廻し蹴りに、肘打ちを合わせるカズマ。

カズマの肘と、友香の足の裏が激突した。

友香の後ろ廻し蹴りの衝撃が、カズマの肘を貫き、そのまま体の中を貫いていく。

真っ直ぐ進む衝撃は、肘との対角線にあった退脚を進み、地に着く足の先端まで貫いていった。

そして、退脚の足の裏から畳にぶつかると、その衝撃は跳ね返った。

地に跳ね返った衝撃は、再び退脚を伝わり、カズマの体内を進むと、友香の蹴りとぶつかり合ってる肘の先端に戻ってきた。

それは、一瞬。

そして、後ろ廻し蹴りを放った友香の体が、その衝撃と、カズマの肘打ちの衝撃で吹っ飛んでいく。

周りで見ていた大人たちが、わっと沸いた。

肘打ちを放ったポーズのまま、余韻に浸るカズマとは別に、弾き返された友香は、畳の上にうつ伏せに倒れた。

「押忍！」

カズマは、力強く繰り出した肘を、気合の入った声とともに力強く腰元に引き戻した。

その声に少し送れて立ち上がる友香。若干だが打たれた右足を庇っている様子だった。

立ち上がった友香に、今度はカズマが迫る。

今の一撃が、友香のフットワークを殺したと確信していた。

カズマの震脚が、友香の目の前の畳を踏みつけると、右の上段正拳突きが放たれた。

しかし、友香の鮮やかな回し受けが、その正拳を外へ受け流す。その受け流されたカズマの正拳に変わって、友香の右の上段正拳突きが放たれた。

拳は、カズマの右目に炸裂した。

次に友香の左中段正拳突きが、カズマの右胸に突き刺さる。

しかし、後ろに下がる事無く反撃を繰り出そうと、カズマの右脚が跳ね上がった。

その蹴りが、友香の両足の間を抜けて、彼女の股間を下から蹴り上げた。

「ひぃっ！」

友香が背筋を伸ばして、ダメージを悲鳴に変えて声を上げた。

もしもこれが男性ならば、この一撃で勝負が着いていただろう。

尾てい骨にダメージを受けた友香が、内股になり背を丸め、股間に片手を添える。

ダメージに耐える友香の様子が、女の子が取るには、あまり上品な姿ではなかった。

「おいおい、金的は無しじゃなかったのか？」

「彼女には、付いてないから……」

タケシの言葉に、隣に正座している銀が答えた。

カズマのフックが空を切る。友香が、体を反らして、横から迫る拳をかわした。

その後に、二人のパンチやキックが飛び交う。

友香は、避けたり捌いたりをしながら反撃を繰り出すが、カズマは違った。殆どガードも行わず攻撃を喰らいながら反撃の技を繰り出す。

最初の攻防に比べて、二人の戦いは、明らかに雑なものへと変わっていた。

更に続く攻防。

それは、徐々に足を止め合っての殴り合いへと変わり、見ている者には、餓鬼の喧嘩レベルに見えた。

ヒステリーを起こした彼女を、必死に止める彼氏。そんな絵図にも見えた。

タケシたちと並んで、正座をしながら孫娘の試合を見ていた大塚の表情から、笑顔が消えていた。眉に皺を寄せ、口はへの字にしている。実に厳しい表情だった。

その大塚が、審判の内村に視線で合図を送った。内村はそれに気付くと、子供の様に殴りあう二人に割って入った。

「待て、それまで！」

「「！？」」

殴り合っていた二人が、止める内村の顔を見上げた。

カズマは「何故に止める？」と言いたそうに若干驚いた表情だったが、友香は睨むような表情で内村の顔を見た。

「時間切れだ。元の位置に戻って」

カズマは、時間切れと言う言葉の意味に、首を傾げながらも中央の白いラインの元に戻る。

友香は、両拳を握り締めながら元の位置に戻っていった。

もう友香は、カズマを睨んでいなかった。しかし、悔しそうな表情で俯いていた。いつの間にか髪を縛っていたゴムが解けて、肩まで有る髪が乱れながら汗で顔や首筋にへばり付いていた。

「引き分け！」

審判の内村の言葉にカズマは、事情が分からないといった表情で聞いていた。

「互いに礼！」

内村の言葉の意味は、試合終了を意味している。

カズマが、今まで戦っていた少女の方を見た。

少女の怒ったような表情には、滝の様な汗が流れていた。瞳は涙で潤んでいるようにも見えた。それは、雨の中で泣いている少女の姿に、カズマには見えた。

二人が一礼を終えると、カズマは元居たタケシの隣に戻るが、友香は祖父の隣に戻らず、ロッカールームに黙って入っていった。

それを見て心配になったのか、最初にトゥルを見せた女性が、少女を追うようにロッカールームへと入っていく。

「良くやったカズマ。お前の勝ちだ」

タケシの隣へと息を切らせながら正座をしたカズマに、タケシがそう言った。

「引き分け……、じゃないのですか？」

審判の内村は、確かにそう言った。タケシにも、その声は聴こえていた筈である。

「良く見てみろ」

カズマの質問に、タケシが顎でロッカールームを指す。

「お前が心を折ったんだよ。その年で女を泣かすなんて、隅に置け

ないな、お前もよ」

そう言ってタケシが、何時もの様に、不敵に笑っていた。

カズマは、友香が入っていたロッカールームの扉を、ただ、じっと見ていた。

堂本流見習い、十文字カズマ。

デビュー第一戦。

タケシ曰く、判定勝ち。

<　加賀義兄弟・前　>

「先生、く、悔しいです！」

「俺も悔しいです！」

道場の中央で輪を作るように正座した男達が、汗に顔を歪めて各々が愚痴を溢す様に、哀れな声を上げていた。男達の中には、カズマと友香の試合を捌いた内村の姿もあった。

二十人の男達が円を作り、残りの二十人近くの塾生は、既に帰り支度を始めていた。中には既に、私服に着替え終わった者も居る。その円に混ざって正座している道場主の大塚が、和やかな表情で弟子達の言葉を聞いていた。

窓の外は、既に暗くなっている。壁に掛けられた四角い枠の時計は、もうじき九時を指そうとしていた。大塚の孫娘である友香の姿は、既に道場の中には居なくなっていた。

そんな中、まだ道着をまとったままの女性が、窓から外を見ていた。

暗くなった空から吹く風が、髪先が切りそろえられた彼女のポニーテールを僅かに揺らす。

タケシたちが、このテコンドー道場を尋ねて来た際、最初にトゥルを披露した女性である。

彼女が、窓からビルの下を覗き見ると、丁度私服に着替えたタケシたち四人が、ビルの入り口から並んで出てきたところであった。

四人は、真っ直ぐに車の往来が激しい大通りを目指して歩いていった。

四人の一番後ろを歩くカズマが一度振り向き、今まで居た五階建てのビルを見上げた。

一階にある不動産屋の事務所と、二階にある喫茶店の電気は既に消えている。

四階にあるテコンドー道場の明かりだけが、そのビルから漏れていた。周りのビルも、殆ど光が消えている。街は静かになっていた。

ビルを見上げるカズマの右目には、パンダのような丸い青タンが出来ていた。他にも唇や頬にも紫色の痣が出来ている。

そんなボロボロの顔でビルの明かりを見上げるカズマの瞳に、窓際の人影がひとつだけ映っていた。その影の主が、カズマたちを見下ろしている。

「おい、カズマ。置いていくぞ、早く来い」

「は、はいっ！」

急かすタケシの声に、少し遅れて三人よりも距離が開いたカズマは、駆け足で三人を追った。

道場で輪を組み正座している男達の中には、悔しさから涙を滲ま

している者もいた。

彼らは、カズマと友香の組み手が終わった後、タケシや銀と組み手を行った二十名である。

タケシと十名、銀と十名が組み手を行い、そして見事に全敗。

計二十一人の門下生が、堂本流の三人に負けたことになる。

去年もタケシと銀を招いて大塚は、自分の道場に通う門下生と組み手をさせた。そして結果は、去年も酷いものだった。

タケシたち四人が、この道場に顔を出したさい、門下生の男たちが鋭い視線でタケシたちを睨んでいたのは、それが理由だった。

去年の敗北を教訓に、血の小便が出るほどに猛特訓を積んだ者もいたが、それでもタケシたちには及ばず、今年もまた涙を流していた。

「大塚先生……」

その男たちの円に混ざって慰めていた大塚に、背後から女が声を掛けた。

窓際に立つ彼女に、大塚が正座をしたまま少し体をずらしながら振り返った。

「何ですか、今日子さん?」

それが、彼女の名前だった。

「少し質問をしても良いでしょうか？」

「かまいませんよ、何ですか？」

彼女が大塚に質問をするのは、珍しいことだった。

彼女は何時もの稽古で、技も、型も、柔軟も、体作りも、全て見て覚える。こちらから指導しないかぎり、全ての技術を教えてもらう事無く、見て盗み取るのだ。

そして、盗んだ技術の意味を自分で考え、確実に自分のものとしていく。大塚にして見れば、手間の掛からない素晴らしい弟子の一人であった。

その彼女が、珍しく大塚に質問をしてきた。

「先程の四人のことですが」

「堂本流の方々ですか？」

「はい」

そう言って今日子は、窓の外を振り返った。其処には、既に四人の姿は見え無い。静かなオフィス街の裏路地に、遠くから車の走る音だけが聞こえて来ていた。

窓際の今日子が、大塚に視線を戻す。

「今日は見学していた、あの金髪の外人も、堂本流を使うのですか

？」

今日一日、道場の入り口で立ち尽くしたまま、見学をしていた春婆怒のことを言っている様子だ。

「さぁ、どうなんでしょうね……」

「彼女は、何者ですか？」

「私も詳しくは知らないのですが、聞いた話では、桜木さんのところにホームステイをしている女性らしいですよ」

「ホームステイ……、ですか」

「あの女性が、武術を使うのならば、立ち合って見たかったのですか、今日子さんも？」

「いえいえ、そう言う訳では」

大塚の言葉に苦笑いで否定する今日子は、顔の前で手を振った。

「じゃあ、先生、私も着替えてきます」

そう言って目の前の老人に一礼した今日子は、女子用のロッカールームへと入っていった。

男子用のロッカールームよりも小さな部屋だが、女子用のロッカールームには、シャワーが一つ付いていた。

今日子は、そこでシャワーを浴び、汗を流す。

道着を脱いだ彼女の裸体は、細くしなやかで綺麗なスタイルだった。贅肉は少なくスレンダーで、裸になった今日子の二つの足は、一段と長く可憐に見えた。

白いバスタオルを体に巻いた今日子が、ドライアーで腰まである長い髪を乾かしながら櫛でといていた。

しばらくして髪が乾くと今日子は、髪を縛らず腰まである長い髪を揺らしながら自分専用のロッカーの中にある私服を取り出し、それに着替えた。ポニーテールは、稽古中だけのようだ。今は髪を結んではいない。

可愛らしいレースの付いた白のシフォンブラウスに黒いショートパンツ。その下には、パンツと合わせたカラーの膝上まであるニーハイソックスを履いていた。

最後にヒールの高さが１０センチぐらいある黒のクロスストラップのウエッジパンプスを履いた今日子は、ロッカーの扉の裏に付いている小さな鏡で軽く化粧を始める。

簡単な化粧を終えた今日子の姿は、先程まで屈強な男たちに混ざって武術に汗を流していた人物とは、同一人物に思えないほどにオシャレな女性に変貌していた。

テコンドーの道着を身に纏っていた時の今日子は、引き締まった凛々しい表情をしており、年のころは二十歳過ぎの落ち着いた女性に見えた。

だが、今の今日子は、二十歳よりも若い、十代後半の可愛らしい

少女の姿に見える。

道着を詰めたスポーツバックと、ブランド物のハンドバックを肩に掛けた今日子は、パンプスのヒールを鳴らしながらロッカールームから出て行く。

そして、まだ道場に残る大塚や他の門下生に愛想の良い笑顔で挨拶をすると、一人で道場を出て行った。

<　加賀義兄弟・後　>

今日子は、道場の近所にある弁当屋のチェーン店で、から揚げ弁当を二人前買うと、店の前でタクシーを捕まえる。

今日子を乗せたタクシーは五キロほど走らせると、豪華な高層マンションの前で停車した。

タクシーから降りた今日子は、左肩にスポーツバックとハンドバックを引っ掛け、右手にはから揚げ弁当の入ったビニール袋を持ったままマンションの入り口に向かって歩いていく。

エントランスへの入り口の前、ガラスの扉の横にある機械に、ハンドバックから取り出したＩＣカードを通すと、ガラスの自動ドアが開いて彼女を招き入れる。

さほど広くはないエントランスホール。警備のカスタムセンターの前にある自分の部屋のポストを確認した今日子は、中に入っていた郵便物をハンドバックに詰める。

そして、二つあるエレベーターのセキュリティーに、またＩＣカードを通して、開いた扉のエレベーターに乗り込んだ。

扉以外の三方が、鏡張りになっているエレベーターに乗る今日子。そして彼女は、最上階のボタンを、から揚げ弁当の袋を持った手で押す。

今日子は、扉の上にある階数表示の数字を見上げていた。

静かに動くエレベーターの室内。鏡に映る今日子の姿が、左右の二つの鏡で無限の合わせ鏡の中に囚われるように映っていた。

暫くしてエレベーターが止まると、扉が静かに開く。今日子は自分の部屋の扉の前まで歩くと、鍵を開けて扉を開いた。

扉の横の標識には、二つの名前が書いてある。加賀蓑今日子、鏡慈の二つの名だった。

「ん？」

扉は僅かに開いたが、それ以上は開かなかった。中からチェーンロックがされている。

「も～、鏡慈ったら……」

チェーンロックが掛かっていて室内に入れない今日子は、愚痴を溢しながら溜息を付いた。

扉の隙間から光は見えない。しかし、室内からは、何やら僅かにテレビゲームをしている音が聞こえてきていた。

今日子は、それを確認すると、インターホンを鳴らす。

中からインターホンに繋がるテレビ電話のベルの音が聞こえてきた。

しかし、中に居る人物が、その受話器を取る様子は無い。うるさくデレビ電話のベルが鳴っていた。

「誰だ？」

そして暫くたつとチェーンロックの掛けられた扉の暗い隙間から、幽霊のように男性の顔が現れた。

ギョロリとした目だった。その視線で、外に居る今日子を見詰める。

年のころは、今日子と変わらない青年だった。もしも青年が、目を見開いた表情を止めたのならば、それなりにハンサムな顔をしているだろう。

「きょ～じ、お前のね～ちゃんだよ」

満面の笑みで男に答える今日子。

「本当に、僕の姉さんか？」

「お前の本当の姉さんだよ」

「本当か？」

「本当だよ」

「じゃあ、証拠を見せてくれよ」

「証拠？」

「僕の姉さんは、モノマネが得意なんだ、モノマネを見せてよ」

「分かったわ、鏡慈。ちょっと待ってね、ん、ん、あー、あー」

「……」

「まぁ～このぉ～」

「うわー、田中角栄のモノマネだ！　今時この窮地を田中角栄のモノマネで乗り越えようとするなんて、僕の姉さんしか居ないや！　姉さん、お帰りなさいー」

そう言ってネジのゆるんだ笑い顔で鏡慈は、一度ドアを閉めるとチェーンロックを解除した。

やっとの事で自分の家に入れた今日子。鏡慈は今日子を残して暗い室内へと戻っていく。

今日子は玄関に黒いパンプスを脱ぐと、可愛らしい熊の顔をしたスリッパに履き替えてから鏡慈を追った。

トイレやバスの扉が並ぶ廊下を過ぎると、フローリングの広いリビングに入った今日子は、荷物を部屋の隅に下ろした。

「鏡慈、ご飯まだでしょう。鏡慈が好きなから揚げ弁当を買ってきたよ」

「あとでいいよ、今忙しいの……」

「そう……」

薄暗いリビング。今日子は、弟の素っ気無い言葉に対して、寂し

そうな表情で返事を返した。

玄関から繋がるリビングに入ると、正面はガラス張りのハイサッシが並び、直ぐにベランダに出れるようになっていた。

リビングの中央には、三人ぐらい座れそうな白いソファーベットがある。その正面の壁には、横長のラックに載せられた６５型薄型ワイドテレビが置かれていた。

白いソファーベットに腰掛けた鏡慈が、大きな画面の薄型テレビに繋がれた旧型家庭用ゲーム機で、何やら古臭いグラフックのゲームをプレイしていた。その画面の光だけが、室内をぼんやり照らし、そのゲームの音だけが、室内に流れていた。

今日子は、鏡慈の横に買ってきたから揚げ弁当が入った袋を置くと、ハイサッシの一枚を開けてベランダに出て行った。

高層マンションの最上階のベランダから見える夜景は、町のネオンが蛍の光のように見えて綺麗だった。

ベランダに立つ今日子の切りそろえられた長く艶のある髪が、町の上空に飛び交う新鮮な風に揺れていた。

室内の方へ振り返った今日子は、ベランダの手摺りに背を預けると、ゲームに熱中している弟に話しかけ始めた。

「ねぇ、鏡慈」

「……」

室内の弟からは、返事が無かった。だが、姉の声が届いているのか、ギョロリとした瞳で一度だけ姉の今日子を見た。

「今日ね、テコンドー教室の道場で、妖怪を見つけたわ」

「本当？」

姉の言葉に弟は、ゲームを続けたまま反応を見せる。

「妖怪なのは、間違いないわ。もしかしたら九十九神かもしれないわ」

「そいつの居場所は、分かっているのかい、姉さん？」

「ええ、大体の居場所は分かっているわよ。変化した姿も分かっているし、探せば直ぐに見つけられるわ」

弟の鏡慈は、ゲームを続けたまま答えた。

「じゃあ、明日にでも二人で探しに行こうよ、姉さん」

鏡慈は、うっすらと笑っていた。その笑みは、テレビの光に照らされ青白く気味の悪い表情になっていた。

「そうね、直ぐに食べに行きましょう。誰かに取られる前にね」

その弟の気味の悪い顔を見ながら今日子は、優しく微笑んでいた。

<　妖怪病院のひととき　>

油義屋敷の庭園内で、巨大な骸骨の妖怪ガシャドクロと、白い怪人に春婆怒たちが暴れまわった事件から十日ほど過ぎていた。

「虎にーちゃん、はい、リンゴを切ったわよ。あ～んして」

リンゴの皮を剥いて食べやすい大きさに切りわけた珠美が、小さなフォークにリンゴを指し兄の虎二の口元に運ぶ。

ベットで寝ている虎二は、妹の珠美が差し出すリンゴを、恥ずかしげもなく食べさせてもらっていた。

十日前の戦いで、タケシ春婆怒組に両手の骨をへし折られた虎二は、それ以来ずっと、妹の珠美と病院の看護婦たちによって、食事や下の世話をしてもらっていた。

その虎二の両手は、白い石膏のギブスで固定され、天井から下がった布に吊るされていた。

古い病院の個室。虎二が寝ているベットの横には窓があり、そこから町の景色が良く見えた。

そろそろ建て替えたほうが良いのではないかと思うような古い住宅が、左右に並ぶ緩やかな坂道の頂上に建つ病院。木造モルタルの四階建で、戦後直ぐに立てられた歴史ある病院であった。

現在多くの病院が経営難に悩んでいる中、この病院では、その悩みを抱えることは無かった。

その理由は、油義グループからの金銭援助が多くされていたからだ。

何故、油義グループから支援をしてもらえているかは、簡単な理由である。

ここの病院を経営している院長もまた、人に化けた妖怪だからである。

この病院には、一般の患者も多く通っている。だが、この町に住む妖怪達が、怪我や病気に掛かると通う病院でもあるのだ。

妖怪は、人間に比べて生命力がたかく、怪我などの治りも早い。その為、人に化けながら人間界に溶け込んでいる者たちは、何かあっても普通の病院には通えない。体の作りが人間とは異なるのだ、人間の医者に見てもらえば、正体がばれる可能性が高い。

そこで、妖怪連合の息が掛かったこの病院にやってきて、書類などをごまかしてもらう。ここには、妖怪専用の妖怪の医者や看護婦達が、何人もいるのだ。

そんな理由で、この病院の存在は、妖怪連合として必要な施設であった。

「虎にーちゃん、リンゴ美味しい？」

珠美は、リンゴをほおばる虎二の様子を見て、ニコニコと笑っていた。両手が不自由な兄を世話するのが、どうやら彼女には楽しいようだ。

もともと人の世話を焼くのが好きなタイプの珠美は、もしも家事が何もできない兄たちふたりが居なければ、介護関係の仕事をしたいと思っていたらしい。

そんなわけで今回、虎二の入院を聴かされた時、最初は心配で不安そうな感じであったが、いざ、入院が始まると、嬉しそうに虎二の世話を熱心に焼いていた。

一方の虎二は、看護婦以上に自分の世話をしてくれている妹に、感謝こそはしていたが、何か不満そうな顔を時折見せていた。

何が不満かといえば、折れた両腕からくる不自由が苛立ちとなって溜まり、それにタケシ春婆怒組への敗北の記憶が、火に油を注いでいた。

それよりも、こんなに熱心に看病してくれている巨乳で可愛い女性が、実の血が繋がっている双子の妹であることがまた、不満のひとつでもあった。

できれば珠美が、本物の彼女だったら、さぞかし嬉しかったのであろう。

しかも、何時も珠美が側に居るために、看護婦さんを口説くチャンスも少なく、珠美の存在をしっている看護婦達が、更に気を使い、そのような状況にぜんぜんもって行かせてくれないのである。

今の虎二が置かれた状況は、ご馳走を目の前にして「待て」を言いつけられたペットの様に切ない思いであった。男として、大変ストレスがたまるのだ。

「虎にーちゃん、もっとリンゴ食べる？」

「もういいや……」

珠美の問いに、またつまらなそうに虎二は答えた。しかし、珠美は、虎二のそんな様子を、腕の不自由からくる不満だけだと思い込み、もっと頑張って世話をしてあげようと勘違いを深める。実に純粋な妹であった。

個室に居る二人の双子が、そんな感じで過ごしていると、病室の扉が勢い良く開かれた。

「ここに虎二も入院してたのか～」

病院内だというのに元気な声を上げて、個室に飛び込んできた小さな子供。年のころは、六歳か七歳ぐらいの少女だった。

子供用だが虎二と同じ病院の寝巻を着ていた。どうやら、この病院の患者のようだ。

小さな少女は、赤く長い髪をポニーテールに結んでいた。あと十年も経ては、良い感じの美人に育ちそうな顔立ちをしている。

その少女は、二人が居る病室に元気良く走りこんでくると、先程までリンゴを切りながら珠美が座っていた椅子を踏み台に、虎二が寝ているベットの上にダイブしてきた。

「げふっ！！」

長いポニーテールを靡かせながら虎二の上にボディープレスをかました少女。そして今度は、抵抗できない虎二の腹の上に馬乗りで座り込むと、笑いながら何度も何度も跳ね回った。

その少女の無邪気な微笑みは、まるで太陽の如く明るい表情で、輝いて見えた。

「にょほほほほ～～」

何が起きたのか理解しきれていない珠美が、突然乱入してきた少女に驚いて、部屋の壁際まで下がっていく。

「て、てめー、もしかして太陽か！？」

「そーだよー、とーらーじー。正解さ～」

無邪気にはしゃぐ少女。その正体は、虎野町妖怪連合後処理班のひとり、日照り神の天野太陽であった。

「なんで、そんなにちっこくなっているんだよ！？」

自分の体の上で跳ね回る天野太陽に問う虎二。その問いに太陽が、笑いながら答えた。

「昨日、九十九神にやられちゃってさ、妖力をいっぱい持っていかれちった。にょほほ、危なく死ぬかと思ったよ、てへ」

「死ぬかもって……、お前なぁ……」

天野太陽が話す能天気な言葉に虎二が、どっと疲れた表情を見せ

る。

「なんだ、天野さんなのか、おどろいたわ……」

ベットの横に立っていた珠美が、天野太陽の話を聞いて、苦笑いでそう呟いた。

「隣の病室で寝ていたんだけどさ、やっと人間の姿に戻れたから遊びに来てあげたのさ。虎二がさみしがっているって聞いたぞ。ほら～、太陽が遊んであげるのさ」

「さみしくないわ！」

自分の腹部の上で跳ねる太陽に、虎二がむきになって怒鳴った。

「嘘つけ～、ほらほらー、寂しかったんでしょう」

そう言って目を細める太陽が、虎二の股間の辺りに跨り、自分の股を前後に動かす。

「そんな格好で、そういうジョークはやめんか！」

「照れるなよ、ロリコンのくせにさ」

「誰がロリコンだ！」

「虎にーちゃん……、ロリコンだったの……」

「珠美、信じるな！」

「確かに小さな頃は、私にも優しかったけど……。それで最近、昔みたいに優しくなくなったのね……」

そう言って珠美は、自分の大きく育った胸を暗い顔で見下ろす。

珠美の頭の中で、ロリコン＝貧乳好きといった構図が思い描かれていた。

「た、珠美、ちがうって、俺、巨乳も大好きだから！」

「わ～、シスコン発見～……」

今度は、少女のなりをした太陽が、冷たい目線で虎二の顔を見ていた。

「ぶーぶー、シスコンなんか、こうしてやるのさ。てぃ、てぃ！」

ポニーテールの幼い少女が、ふてくされた表情で、天井から吊るされた虎二の腕をけっぽったり殴ったりする。

「ぎぃゃぁ！　やめんか太陽、マジ痛い！　ぐぉ！」

そのキックに大きな声を上げる虎二。はしゃぐ二人を見ていた妹の珠美は、不満げな表情で一人だまって病室を出て行った。

「やめんか、糞餓鬼！」

「餓鬼って、僕はお前よりも年上だぞ！」

幼い姿の天野太陽が、可愛く頬を膨らませる。

「そんな姿で、言っても説得力ないわ！」

それから暫くしてゴリラのような容姿をした看護婦が、この騒がしい病室に血相を変えて怒鳴りこんで来る。

「貴方達、ここは病院ですよ！　静かにしなさい！」

「うわ、ゴリラが怒っているのさ！」

「誰がゴリラです！」

「まぁまぁ、看護婦さん、そんなに怒らないで、リンゴでも食べて落ち着いてください」

「要りません！」

「要らないの？　ゴリラって、リンゴが好物じゃないの？」

「だから私は、ゴリラではありません！」

ちなみに、その看護婦は、人間に化けて病院に勤めている妖怪ではなく、ちゃんとした人間の看護婦さんである。

<　祖父の愛は、重すぎる　>

田園風景に囲まれた一本の道。

綺麗なアスファルトの二車線の道が、真っ直ぐに油義低への正門前まで続いている。

この道は、周りの田んぼを耕す農家の者たちか、油義邸に用事がある者しか、ほとんど使うことがない。

その道を走る一台のタクシー。

タクシーは、後部座席に乗せていた人物ふたりを油義低の正門前に降ろすと、Ｕターンして、今来た喉かで静かな道を引き返していく。

油義低の大きく立派な門は開いていた。

時代劇に出てきそうなお武家様の住まいにあるような立派な門。

その門の横から伸びた瓦屋根の白い壁が、遥か遠くまで続いていた。

その門の両脇には、二人の黒服を着たＳＰが一人ずつ立っている。

タクシーから降りた二人の人物。

一人は、胸元にギャザーの有る白のＶネックＴシャツの上に、シャドーストライプのテーラードジャケットを羽織、下は合わせた色

のマジックスカートを履いた四十歳ぐらいの落ち着いた感じの女性だった。

もう一人は、その女性よりも遥かに若い娘であった。黒のUネックTシャツの上に、もう一枚、白と薄い水色のストライプ柄のTシャツを着て、更にその上にフード付のグレーのパーカーを羽織っていた。ボーイズ系デニムにスニーカー、そして彼女の短い髪が、彼女の印象を少女というより少年の様にも見せていた。もう少し髪を伸ばせば、彼女も綺麗な女性に見えるであろう顔立ちをしている。

引き返していくタクシーから降りた女性たちを、油義低の大きな和風の門の両脇に立つ黒服の男たちと、門の隅に設置された監視カメラのレンズが、ふたりをじっと見ていた。

二人の女性は、真っ直ぐに開いた門の方へと歩いていく。そして、年配の女性の方が、ふたりの黒服に笑顔で軽く手を上げて挨拶をする。

その挨拶に答えるように黒服の一人が頭を深々と下げた。それを見て、もう一人の黒服も慌てて頭を下げる。

年配の女性は、笑みを浮かべて居るが、若い方の女性は、機嫌の悪い表情をしていた。無言で挨拶を交わす三人とは別に一人そっぽを向いている。

そして、二人の女性は、そのまま油義低の敷地内へと進んでいく。

「先輩、今の二人は、誰ですか？」

女性達の姿が奥へと離れていくと、先程、遅れて頭を下げた黒服

が、もう一人の男に質問をした。

「ああ、そうか、お前は今年ここに就職したばかりだから知らないのか。今のお二人は、油義会長の娘さんとお孫さんだ」

「へぇ～、会長って、娘さんとお孫さんがいたんですか。結構、可愛いお孫さんですね」

「ああ、お孫さんも可愛いが、お嬢様の若い頃は、もっと可愛かったんだぞ」

「へぇ～、そうなんですか」

若い黒服は、先輩の回答に少し驚いていた。

「名前は、雪絵お嬢様と、確かお孫さんは、陽子お嬢様だったかな。年に一度ぐらいしか、ここには顔を出さないが、お前も覚えて置いたほうが良いぞ」

「はい、先輩、わかりました」

雪絵と陽子の二人が、油義低の屋敷を目指して歩いていると、そこから見える庭園に、ブルドーザーやユンボなどが、忙しそうに作業に励んでいる姿が見えた。

「あら、庭園の模様替えかしら？」

その光景を見て、雪絵が不思議そうに呟いた。

しばらくすると二人は、屋敷の玄関前に到着した。大きな和風の

作りをした立派な玄関だった。

檜作りの玄関の扉を開けると、そこには数人の女中が正座をして待ち構えていた。

「お帰りなさいませ、雪絵お嬢様、陽子お嬢様」

数人の女中達は、そう言って玄関の上で正座をしながら三つ指を立てて頭を下げる。

二人は、その様子を見ながら靴を脱ぐと、玄関に上がり込む。

「お父様は、何処に居ますか？」

「東の客間でお待ちしています」

雪絵が笑顔で問うと、年のころが雪絵と同じぐらいの女中が答えた。彼女が、ここにいる女中の中で、一番の年配だった。

「雪絵お嬢様、今ご案内いたします」

そう言って立ち上がる年配の女中。それを雪絵が止めた。

「いいわよ、皐月さん。ここは私が育った家よ、案内なんか要らないわ」

何時もの笑顔で案内を断る雪絵は、スタスタと屋敷の奥へと進んでいった。

その後ろに続く陽子が、母の雪絵に話しかける。

「ねぇ、お母さん」

「あぁに、陽子？」

「やっぱり今日は、お爺ちゃん。また、あの話なのかな？」

「多分そうでしょうね～。陽子も、そろそろはっきり決めなさい。断るなら断るだけの理由と、断れるだけの努力を見せないとダメよ」

「……」

俯いた陽子は、母の言葉に答えなかった。

二人は、広い屋敷内を迷う事無く進んで行く。そして襖の並ぶ廊下をしばらく歩くと、ひとつの部屋の前に立ち止まった。部屋の中からは、二人も聞き覚えのある男たちの話し声が聞こえてきた。

「お父さん、入りますよ」

「おお、雪絵か、入りなさい」

室内から返事が聞こえてくると、雪絵と陽子の二人は、襖を開けて中へと入った。

和風の部屋に漆塗りのテーブルがあり、その側に二人の男性が座っていた。

それは、和服姿で大きな頭を左右に揺らす老人と、スーツ姿の凛々しい顔立ちをした青年だった。

座布団に座っている二人の男性は、この屋敷の主である油義裕次郎と、スーツ姿の八尾弦徳であった。

「お父さん、お久しぶりです。それに、森一郎君も」

森一郎、それは、半妖の八尾弦徳が人間界で名乗っている名前であり、父から受け継いだ名前でもある。

挨拶をした雪絵が、弦徳の迎えに座ると、終始不機嫌な表情の陽子は、挨拶もせずに雪絵の横に座った。

そんな不機嫌な陽子が、挨拶すらしなかったことを誰もせめなかった。油義と弦徳の二人は、ただ、苦笑いを作っていた。

二人が席に座ると、油義から直ぐに話を切り出してきた。

「二人を呼びつけて悪いのだが、私たち二人は、これから仕事の都合で京都に立たねば行けないのだ。すまんが話を急がしてもらうぞ」

「二人で仕事ですか？　一郎君、教師の仕事はどうしたの？」

雪絵が、疑問に思ったことを口に出す。

「はい、その教師の仕事に関する用事で、油義会長の知り合いのところへ会いに、京都へ行くのですよ。前の高校は、少子化の影響でクラス削減になりましてね。まあ、それで新しい勤め先を探しているのですよ」

「学校の教師も大変ね」

眉毛を八の字にして言う弦徳に、笑顔で雪絵が返した。

「では、話を進めるぞ」

油義の言葉に陽子がそっぽを向いていた。しかし、それに関わらず油義は、一人で話を進める。

「陽子と一郎君の許婚の件だが、陽子が大学卒業まであと三年。この際だから一気に婚約発表をしては、と思ってね」

祖父の言葉に陽子のふてくされていた表情が、一気に怒りの顔へと変わった。そして、鬼の形相で陽子が怒鳴る。

「ふざけないでよお爺ちゃん！　何が婚約発表よ！　私は、許婚の件すら認めてなんていないわよ！」

陽子の怒鳴り声が、部屋の外の廊下まで響き渡った。その声に顔を顰める三人。そして、お茶を運んでいた女中の皐月も、その怒鳴り声に廊下で驚いていた。

「もう陽子ったら、声が大きいわよ」

興奮している陽子を宥める雪絵。そこに女中の皐月が、お茶を運んで部屋に入ってくる。部屋に入った皐月は、雪絵と陽子の前に湯飲みを置くと、黙って部屋から出て行った。

母が娘を宥めるが、陽子の顔は、目が血走って興奮を隠していなかった。

「陽子、お爺ちゃんは言ったよな。お前がワシの会社を継ぐか、一郎君と結婚して、彼がワシの会社を継ぐか、どちらかにしてもらうと」

「それは、勝手にお爺ちゃんが決めたことでしょう。私は同意した覚えすら無いわよ！」

「そんなわがまま通るわけないだろうが、陽子や」

「お爺ちゃんこそ、わがままを言わないでよ！」

尚も祖父に怒鳴り散らす陽子であった。

「絶対に、婚約発表なんかしないでよね、お爺ちゃん！」

「しかしのぉ……」

「しかしも糞も無いわよ！」

「まあ、いいわい。しかしだ、陽子が大学を卒業したらワシの会社に就職して、ワシの後継者として修行してもらうぞ」

「それも嫌よ！」

祖父の会社に就職したら、タケシと一緒に居られる時間が減る。陽子が拒む理由は、それだけのことだった。しかし、陽子には、それが一番大事なのだ。

「あれも嫌、これも嫌。雪絵、何故に陽子は、こんなにわがままな子に育ったのじゃ？」

「昔は素直で良い子だったのですがね……」

父の言葉に、他人事を話すような笑みで答える雪絵。

「油義会長、陽子ちゃんも嫌がっているのですから、この話はなかったことにしてはどうでしょうかね？」

「何をおっしゃいます、一郎君。私にとって森家の復興は、亡き奥方様への忠義からくる悲願のひとつ。この油義の名を無くしてでも成し遂げたいのです！」

森家とは、その昔、虎野町に城を構えていた大名家の名前であり、八尾弦徳の父の家の名前。現在でも、この辺の大地主である。

油義グループは、その土地の管理運営を任せられていた。その土地の運営が無ければ、現在、大企業までに上り詰めた油義グループの存在は、無かったと言えるであろう。

今でも森家の名前は、この辺では名門である。

油義は、今亡き九尾双葉への忠義を果たすべき思いと共に、森家のネームブランドが、企業の経営者として欲しいのである。

双葉への忠義で弦徳の世話をするだけなら、彼を養子にすれば良い。しかしそれでは、森家の名前が無くなってしまう。そこで孫娘の陽子と弦徳を結婚させて、森家に油儀家の方が嫁ぐ形で繁栄させようと企んでいるのだ。

「私は、お爺ちゃんの会社も継がないし、弦徳さんとも結婚はしま

せんからね！」

「じゃあ、陽子はどうしたいのじゃ？」

左右に頭を揺らしながら油義が孫に問う。

「私は、タケちゃんのお嫁さんになるって決めてるの！」

「そんな、何処の馬の骨か分からん若造との結婚は、ワシが許さんと言ったじゃろ！」

「その台詞、私が結婚するときも言ってましたよね、お父さん」

そう言いながら雪絵が、微笑みの中に冷酷さを秘めて父の顔を見ていた。

「お父さんと、お母さんの結婚も、お爺ちゃんは反対してたんだ」

「ええ、そうよ、陽子。だから私たち二人は、駆け落ちしたのよ」

「そうか、駆け落ちか、それも有りよね……」

「そんなのなしじゃ！」

油義が、駆け落ちという言葉を聴いて声を荒立てる。

二十年前の話である。

旧姓、油義雪絵と、後の夫になる桜木銀の二人が、駆け落ちして逃げた先が、銀の師匠の元である春婆怒村であった。

妖怪である油義は、当時、春婆怒村に張られていた結界に阻まれ、自分から雪絵達の元へは行けずに、代わりに雇った者たちを迎えに行かせた。

だが、全員が銀や拳四郎にしばき倒されてしまったのである。並みの人間では、力尽くですら娘を連れ戻すことは不可能であった。

雪絵は、父が自分から迎えに来ないことをいいことに、そのまま二人で春婆怒村に住み込み、そこで結婚してしまったのである。そうしている間に、銀と雪絵の間に子供が授かったのであった。

流石に油義も、孫が出来たことで二人の結婚を許したが、油義低の敷居を銀が跨ぐことだけは、未だに許していない。

「まあ、この話は、陽子ちゃんが、大学を卒業するまで先延ばしってことで」

らちがあかないと思った弦徳が、話を一時中断させた。その言葉に油義と陽子の二人は、納得の行かない顔をしている。そこにタイミングをはかったかのように、秘書の蓋口静香が室内に入って来た。

「会長、そろそろ出発のお時間です」

「ああ、分かった」

そう言って席を立つ油義に続いて、弦徳も立ち上がった。

「雪絵、陽子、私はこれで失礼するが、ゆっくりしていきなさい。ここは、お前達の家なのだから」

「ふんっ」

「はい、お父さん」

そっぽを向く陽子とは別に、雪絵は義理の父に笑顔で答えた。

「二人とも、これだけは分かってくれ。ワシは、何時でもお前たちが心配なのじゃよ……」

油義は、そう言って部屋を出て行く。それに続いて弦徳と静香の二人が、軽いお辞儀をして出て行った。

油義の養子である雪絵は、部屋を出て行った義理の父の言葉に、偽りのないことを分かっていた。

あの人は、身の回りの者たちを、男女問わず直ぐに愛してしまう。そういう性格なのだと理解していた。

愛故に、お節介を焼きすぎる。だが、そのことが、時に行き過ぎてしまう。それが少々問題なのだと。

雪絵は、その愛情を受けて育てられた。養子でありながら実の娘の様に、多くの愛情を受けて育てられたのである。

油義が、何故に桜木銀を未だに自分の側に近づけないかは、そこに理由があった。

もしも、銀を側に寄せてしまえば、可愛い娘を奪った奴ですら愛してしまうからである。そうなるのが嫌で、父が夫に会おうとしないことも雪絵は悟っていた。

だが、娘の陽子は、そんな祖父の性格を理解しきれていない。

理解するまでには、もう少し時間が掛かるだろうと雪絵は思う。

そして、隣でむくれている娘の顔を、何時もの笑顔で優しく見守るように見ていた。

<　戦力分析　>

油義邸内の廊下を、玄関へと向かって進む三人。

家主の油義裕次郎こと、妖怪あぶらすまし。その後ろに続くのが、九尾の狐である八尾弦徳。そして、油義の秘書を務める蓋口静香こと、妖怪二口女。

三匹の妖怪は、人の姿に化けて、さぞあたり前のように人として過ごしている。

油義裕次郎に関しては、日本でも有数の企業までに成長したグループ企業の会長まで勤めていた。

そのグループ企業内には、人間に混ざって多くの妖怪変化が人として紛れ込み、妖怪連合の助けになるようなポジションに付いて働いている。

これと同じようなことは、油義や八尾が住んでいる虎野町市の妖怪連合だけがおこなっているわけではない。

妖怪連合とは、虎野町市の他にも支部別で幾つも存在しており、その支部その支部で色々な形で運営をしていた。

妖怪連合に加盟していない妖怪や土地なども多いが、現在の支部数は、全部で十二支部存在している。

その支部の一つ一つに、長老と呼ばれる支部長が一人ずつ居る。

妖怪あぶらすましの油義は、虎野町の元長老で八尾弦徳の母でもある九尾双葉が亡き後、八尾弦徳が虎野町支部の長老職を引き継ぐまでの長老代行を務めていた。

そして、油義の代行職の時期も終わりが近づいていた。

これから油義と八尾の二人は、京都の東山区にある妖怪連合の本部に、二人で長老会議へと参加しに行くところであった。京都の東山区と言えば、観光名所の清水寺がある場所である。

八尾が長老会議に出るのは、かなり久しぶりだ。おそらく三十年ぶりだろうか。

それと、妖怪連合の本部でもあり、京都支部でもあるその場所は、母の九尾双葉が春婆怒に殺された後、幼かった頃の八尾が身を寄せていた場所でもある。

そこで八尾は、自分が半妖と知り、妖術と剣術の基本を学んだのであった。

遥か遠くの玄関を目指して歩く三人。先頭を進む油義が、秘書の蓋口静香に質問を始めた。

「静香君、昨日やられた天野君の容態は、どうなっていますか？」

「はい、会長。病院の院長からの連絡によりますと、とりあえずオウムの姿から人の形まで変化できるようになったらしいですが、まだまだ妖力の回復に時間がかかるらしく、戦闘に参加できるまでに回復するのは、あと一週間ほど最低でも必要らしいです」

「一週間ですか……」

油義は、歩きながら厳しい顔で、頭を左右に揺らしながら先に進む。

「不死身に近い日照り神を、そこまで追い詰めるのです、今回現れた二体の九十九神、結構侮れませんな」

油義の後ろに居た八尾もまた、厳しい顔でそう言う。

「七人岬の方は？」

「一人を残して、ほぼ壊滅です」

油義に、素早い回答を返す静香。

「静香君、我々二人が京都の長老会議に参加している三日間、虎野町に残る戦力は、どのくらい有りますか？」

静香は、油義の問いに、自分のハンドバックから分厚い手帳を取り出し、何やらページを検索する。

「八尾さんを除いて今現在、無傷でいる処理班は、無常水越斎殿のみ。先ほど報告したとおり、天野太陽と七人岬は戦闘不能状態です」

「その他で戦闘に参加できそうな者は居ませんか？」

「調査班の鍋中改造氏と猫田龍信の二名が居ますが、二人とも十日前のガシャドクロとの戦いで大きく妖力を消費しております。本人達の話では、回復が２０％ほどとの報告を受けています。二人が戦

闘に参加するのは厳しいかと……。それと猫田兄弟の弟、虎二は、両手を春婆怒に折られ、天野太陽同様、しばらくは戦闘不能だとのことです」

「何やってるんじゃ、あのバカ猫……」

油義が、猫田虎二の話を聴いて呆れた表情をしていた。

「それと、油義会長の支持どおりに、今回も一七五一家に助っ人の依頼をしたところ、お二人が留守中のあいだに限り、虫玄武兜丸、黒童子、蛾蝶姫の三人を使わせると回答をいただきました」

「そうか。……ところで一七五の奴の体調はどうなんだ？」

「一七五の親分さんも、ガシャドクロとの対決で受けたダメージが激しく、未だに虫の巣で養生しているそうです」

「流石に、老体に無理をさせすぎたか……」

旧友の体を心配して、油義が僅かに表情を曇らせた。

そして、再び口を開く。

「では、こちらの戦える戦力は、前線に立てるのが水越斎と虫玄武の二人。そして、一七五一家の二人に、鍋中と猫田龍信の二人かサポートていどですか……」

「はい、そのようになります」

油義の言葉に、真面目な表情で静香が答える。その直後、静香が

何かを思い出して口を開く。

「会長、先日まで地下牢の番人をしていたゴツキとメズキの二人が居ますが、使ってみてはどうでしょうか？」

「いや、あの二人はダメだ……」

油義は、静香の発案を悩む事無く否定した。

「あの二人は、化け術がまったく使えないのじゃ。そんなやからを地上には出せないから、今まで地下牢の門番をさせていたのじゃよ……」

「なるほど……、そのような事情が……」

静香は、油義の回答に対して、なんて愚かな発案をしたのであろうと思い、自分が情けなくも感じて黙り込む。

「新手の九十九神二体。しかもその新手は、日照り神に七人岬を倒しているほどの実力。今のメンバーでは、少々危険かもしれませんね」

処理班筆頭役である八尾の戦力分析は、そのように出ていた。それを聴いた油義が、更に厳しい顔に変わる。

「よりによって、新手が二体同時に出現。全てに関して、タイミングが悪いですな……」

八尾の言うとおりであった。

できることなら長老会議に参加せずに残りたい八尾だったが、今回の長老会議は、百年ぶりに長老達全員の出席が決まっていた。しかも、その理由が、八尾の為に集まるとのことだ、八尾がドタキャンするわけにはいかない。

「静香君、我々二人が京都から帰るまでの三日間は、水越斎殿に総指揮を任せます。君は、我々との連絡役に回りながら、水越斎殿のサポートに徹してください」

「はい、かしこまりました。あとひとつ、黄金の騎士と戦った天野太陽からの追加報告で、黄金騎士の左手を彼女が焼いたと言っております」

「焼いた？」

「はい、それでもしかしたらの話なのですが、使い手が右手に火傷を負っている可能性があるのではないかと……」

「なるほど……。では、それに関して調査班の者達に各病院を当たらせてください。運が良ければ、使い手の正体が分かるかも知れませんね」

「はい」

「それと、七人岬の欠番補充の件ですが、勧誘班の扈鼠君が以前面白いことを言ってましたので、補充に関しては、彼に一任すると伝えといてください」

「扈鼠さんにですか？」

静香が首を傾げた。

扈鼠とは、妖怪連合虎野町支部の勧誘班に属している妖怪の一人である。

頭部が鼠の頭をした小柄な人型妖怪。見たまま鼠から進化した妖怪なために、少々不衛生で、正直なところ静香はあまり好きな妖怪ではなかった。

しかし、親友の朧やここに居る八尾とは、かなり仲が良いらしく、ちょくちょく三人で飲みにいくことが多いらしい。

「分かりました、扈鼠さんには、そう伝えておきます」

三人が、そんな会話をしながら歩いていると、先程まで雪絵たちと話し合いをしていた部屋から、かなり離れている屋敷の玄関へと、やっとのことで到着した。すると女中の一人が、三人の履物を黙って玄関に並べる。

「いいですか、静香君、無理は禁物です。我々が帰ってくるまでの三日間、九十九神の被害をおさえられれば良いのです。無理して討ち取らなくても良いですからね」

「はい、承知しました」

「最悪、春婆怒を新手の九十九神にぶつけてもかまいません」

その油義の言葉に、靴を履こうとしていた八尾の顔が、怖いものに変わって油義を睨む。

「春婆怒は私の獲物です。私との決闘が終わるまでは、何人たりとも手出し無用！」

「分かりました」

静香は、油義の言葉にではなく、八尾の言葉を優先するように答えた。

そして、油義と八尾の二人が靴を履き終わると、油義低の大きな玄関から出て行く。それを、静香と女中が、深々と頭を下げて見送った。

玄関を出た油義が、わざとらしく呟く。

「それでも九十九神同士は、勝手に引かれ会いますぞ。そして、勝手に喰らい会いますぞ」

油義の口元は、密かに笑っていた。

「それはそれで仕方ありません……」

正門を目指して歩く八尾は、そう言いながら油義の方を向くことはなかった。

「どちらにしても並みの九十九神に、あの春婆怒が遅れを取ることは無いでしょう」

そう言う八尾の言葉は、まるで春婆怒達をライバルとして認めているような響きが感じられた。

八尾は、春婆怒を倒すことが、もう母の仇を打つと言う理由だけではなく。春婆怒との決闘こそが、虎野町支部の妖怪たちを率いる長として、自分が認められるための最終試練だと考えていた。

そんな決意を秘めて、八尾は京都の長老会議に挑むつもりであった。

決意に満ちた表情の八尾を待つように門の外には、黒いリムジンが横付けされていた。その後部座席のトアを開けて待つ、女性運転手の朧。

油義と八尾の二人が、その車へと乗り込んでいった。

「あらら～ん、弦徳ったら、やっと決心がついたのかしら～」

朧は、後部座席のドアを閉めて運転席に戻る途中で、そんな独り言を呟いていた。八尾の決心を、表情から悟ったらしい。

そして、三人を乗せたリムジンが走り出す。

<　左手の包帯　>

朝稽古を終えたタケシが、桜木道場にあるシャワールームで汗を流していた。

シャワールームといっても、バーベルやキックミットなどを置いとく倉庫のような部屋の隅に、ビニールカーテンで一畳ほどのスペースを囲み、そこに水道から引いたゴムホースにシャワーの口をひとつ付けて壁から引っ掛けた簡単な物であった。

ただの水道から引っ張ったシャワーなので、冬になっても冷たい水しか出ない。その冷たい水に、稽古で熱しられたタケシの体が冷やされていく。

常人と比べて明らかに発達した筋肉の数々。

この筋肉は、ボディービルダー崩れや、アメフト選手からプロレスラーに転職した、いんちき外人プロレスラーのものとは違い、持久力、耐久力、瞬発力、柔軟性に秀でている。

空手家というよりも、全ての格闘技家から見てタケシの肉体は、筋肉の質だけではなく、身長体重も含めて理想的なバランスの良い体型に見えた。

その筋肉の上に刻まれた複数の傷跡。

真っ直ぐに伸びた切り傷、稲妻の様に刻まれた傷、刺し傷や弾痕のようなものもあった。

このような傷の数々を勲章の如く語る者も世には少なくないだろう。

喧嘩の舞台で披露して、相手への威嚇の材料にしたり、飲んでいる席で見せびらかしたりもする者も少なくはない。

しかしタケシは、自分の体に刻まれた複数の傷を、人に見せることが嫌いだった。

タケシに取ってこの傷の数々は、勲章と呼ぶよりも、ただの恥じに思えていたのだ。

自分の武術が極みに近ければ、このような情け無い負傷は負っていなかったと思っていた。

少なくとも、もっと正確に精密な受け技を成功させていれば、このような無様な傷は、もっと少なかっただろう。実に、なげかわしいと感じていた。

冷たいシャワーを浴び終わったタケシが、私服に着替えて道場に戻ると、先にシャワーを使ったカズマの姿は見えなくなっていた。

そのカズマが向かった先は、桜木家が経営している喫茶店だとタケシも知っていた。

今日、雪絵と陽子の二人が実家に帰っているとのことで、銀が一人で店をやりくりしているのを、カズマは手伝いに行ったのである。

タケシも道場を出ると、喫茶店桜木へと向かう。

黒いトレーナーにGパン姿のタケシが、赤いスニーカーの踵を擦りながら歩いていると、春婆怒の奴がまた、向かいの家の犬を眺めていた。それをタケシは無視して喫茶店の扉を開いた。

扉に付いた鐘が、カランカランと古風な音を鳴らすと、短い顎鬚を生やしたマッチョな紳士が、黒いエプロンを首から提げて出迎える。

「やあ、タケシ君」

「ちわっす、おじさん」

もうじき時間は、十一時になる。銀とタケシは、今日になってから初めて顔を会わせた。

カウンター内に居る銀の横にはカズマが居た。何やら皿洗いをしている。その顔は、昨日の晩に、テコンドー少女によって蹴られまくって腫れ上がっていた。ぼこぼこだ。

カズマがタケシに弟子入りしていらい桜木家の人々には、タケシ同様、色々と世話になっている。その為、暇があると最近では、こうして店を手伝うことがあった。もちろん無料である。

道場を無料で使わせてもらっているし、ちょくちょくタケシと一緒に食事を頂くこともあるのだ、カズマ本人は手伝いぐらい当然だと思っていた。ちなみにタケシが喫茶店を手伝ったことは、一度も無い。

タケシが喫茶店に入ると、カウンターの奥に居る銀とカズマの他

に、もう一人の人物が居た。

それは、タケシが住んでいる隣のアパートの住人、刑事の眞鍋哲郎だった。

彼は、油義の運転手を勤める妖怪朧車こと、轟朧の恋人で、隣のアパートで彼女と同棲をしている。

しかし彼は朧とは違い、列記とした人間であった。朧が妖怪であることも知らず、仕事でコンビを組んでいる先輩刑事の鍋中改造もまた妖怪だと眞鍋は知らなかった。

「おはよう、タケシ君」

眞鍋がタケシに手を上げて挨拶をするが、「おはよう」と声を掛けるには少々日が高くなっていた。

「こんにちは、眞鍋さん。おや、その手は……」

挨拶を返したタケシが、眞鍋の上げられた左手を見て尋ねた。眞鍋の左手には、白い包帯が巻かれていたからである。

「ああ、これね。昨日、仕事中に容疑者が暴れてちょっと痛めたんだよ。署の医務室にいったら大袈裟にしちゃってさ」

左手に巻かれた包帯を摩りながら真鍋の顔は笑っていた。

「そうなんですか、刑事も大変ですね」

「まあ、たまには怪我もするさ。おかげで容疑者を公務執行妨害の

別件逮捕で、拘留期間を延ばせるよ。相棒の先輩刑事が、僕の怪我を聞いて褒めていましたからね」

「はは」

眞鍋の話に笑いながらタケシはカウンター席に座った。

「はい、タケシ先生。コーヒーです」

「ああ、ありがとう」

タケシがカウンター席に座ると注文をしていないのにカズマがコーヒーを出す。

「ところで桜木のおじさん、陽子は何時に帰ってくるんですか？」

「明日の昼前だって言っていたかな。今日は雪絵の実家に泊まるそうだ」

「そっすか」

そう言って、出されたコーヒーを口に運ぶタケシ。

それを見た銀は思った。今の台詞を陽子本人に聴かせてやりたいと、タケシも少しは陽子のことを気に掛けているのだと、娘に伝えてやりたくなった。

しばらく四人が喫茶店内で何気ない会話をしていた。そしてコーヒーを飲み終わったタケシが席を立つ。

「じゃあ俺、バイトに行ってきます」

「いってらっしゃい」

喫茶店に残った三人が、バイトに出るタケシを見送る。

タケシが喫茶店を出ると、春婆怒とバイクマンが駆け寄ってきた。そしてバイクマンがバイクに戻るとタケシは、春婆怒を後ろに乗せてバイト先のコンビニへと向かって走り出した。

タケシがバイト先のコンビニに到着すると、何時ものように駐車場の隅にバイクを止めて、店内に二人で入っていく。

店内に入ったタケシは真っ直ぐにレジカウンターの方へ歩くが、春婆怒は直ぐに右へと曲がり雑誌コーナーへと進んだ。そして春婆怒は、雑誌コーナーでファッション雑誌の立ち読みを始める。

「おう、安田、まだ生きていたか」

「ええ、おかげさまで」

レジカウンター内に立つバイトの安田にタケシが声を掛けると、アフロヘアーの安田も皮肉がこもった言葉を返した。

そのアフロの安田の左手に、包帯が巻かれているのにタケシが気付いた。そのタケシの視線に気付いたアフロの安田が、左手の包帯を見やすい高さまで上げ勝手に話し始める。

「あっ、これっすか。これ昨日の帰り道で、自電車で電信柱にぶつかってねー、はは」

「腕じゃなく、頭をぶつけて死んでしまえばよかったのに」

聞いてもいないのに怪我をした理由を話し出した安田に、タケシが本音を包み隠さずに返す。

しかし、その言葉に凹むほど安田の神経はデリケートに作られておらず、笑いながらタケシの言葉を受け止める。

「次は、自転車で、トラックに跳ねられろよ」

「俺、そんなに間抜けじゃあ無いですよ、タケシさん」

「ちっ」

そして、舌打ちを残してタケシは、コンビニの控え室へと向かっていった。

タケシが控え室に入ると、仕入れの書類を書いているオーナー鈴木と、これから一緒に勤務するバイトの井川が待機していた。

「タケシさん、おはようございます」

「やあ、タケシくんおはよう」

「ちわーす」

メタボリックな腹のオーナー鈴木と、井川に挨拶を返しながらタイムカードを押すタケシ。その後タケシは、バイトの制服を私服の

上に着込みながら井川の様子を窺った。

彼は二ヶ月前、タケシが倒した外れ鬼に、一緒に暮らしていた恋人を殺されている。

その井川の様子を、タケシは気に掛けていた。

バイト中にも時折だが暗い顔をしていた井川。最近では随分と落ち着いてきた様子で、タケシが心配することも少なくなってきていた。

「おい、井川、その手どうしたんだ?」

着替え終わったタケシが、井川の左手を見て質問した。

「あ〜、これですか」

そう言いながら左手を上げる井川。その手には、眞鍋や安田と同じように包帯が巻かれていた。本日三度目の似た光景であった。

「昨日の晩に、カップラーメンを食べようと思ったらお湯を零しましてね。その時に火傷しちゃいました」

笑顔で答える井川に、横で書類を書いていたオーナー鈴木が割り込んできた。

「タケシ君、見てよ」

そう言ってオーナー鈴木も左手に巻かれた包帯を見せる。

「私も昨日の晩に、火傷しちゃってね。しかも、酔っ払っていてさ、何処で火傷したか分かんなくてね。あはは、笑っちゃうよね」

タケシは、そんなオーナーに笑顔で答えるが、一度に四人の知人が同じように左手に包帯を巻くほどの怪我をしている偶然に驚いていた。

「じゃあ、タケシさん、そろそろ交代の時間なので、ホールに出ましょうか」

「おう」

そう言って控え室を出る井川に続いてタケシもホールに出て行った。

タケシたちと交代して、バイトの時間が終わった安田が帰っていった。そして様々なお客が来店しては買い物をして帰って行く。

そしてしばらく経つと、知った顔の客が来店してきた。

テカテカのポマードで固められたリーゼントにサングラスを掛けたロカビリー風の強面の男。

黒い革ジャンに両手を突っ込んだ男は、肩を揺らしながらコンビニの自動ドアをくぐると、真っ直ぐにレジカウンターの中に居るタケシの元に歩み寄る。

「ちわっす、タケシさん」

「おう、仁藤か」

「二階堂です」

タケシに挨拶をして名前を間違われた男は、ヤクザの二階堂であった。

タケシの高校時代の先輩で喧嘩相手だった鳴海というヤクザの舎弟をしている男だ。タケシと公園内で戦って負けた後、鳴海の使いで何度かタケシと会う事が多く、いつの間にか親しくなっていた。だが、わざとの様に名前を何時も間違われている。

二階堂は５００ミリ缶のビールを三本と、サラミやスルメのつまみを買い物籠に入れると、タケシの居るレジカウンターへと戻ってくる。

そして、レジを打つタケシが、財布から札を取り出している二階堂の左手に巻かれた包帯に気付いた。

またである。また、包帯を巻いた人間が目の前に現れた。偶然にしては、流石にしつこい。これで本日五人目である。

タケシは、二階堂の包帯を見ても、もう怪我をした理由を聞く気にもなれなかった。

ただ、「偶然ってやつも続くことが有るのだな」と、思いつつバイトの時間を過ごしていた。

<　雲外鏡・一>

一人、自分が経営している喫茶店に残った桜木銀。

グレーのトレーナーを内側から筋肉でパンパンに膨らませ、短い顎鬚よりも前に迫り出した大胸筋に黒いエプロンがさげられている。

昼間、喫茶店を手伝っていたカズマの姿は、もう無かった。

外の景色は既に暗くなり始めており、少し前にカズマを家へと帰した。

喫茶店内には、他に誰も居ない。このぐらいの時間になると客足が途絶える。何時もこんな感じである。

まだ、タケシはバイトから帰ってきていない。妻の雪絵と娘の陽子は、今日は妻の実家に泊まりで帰ってこないことになっていた。久々に銀は、一人の晩を過ごすことになっていた。

本来ならタケシを誘って、男同士、差しつ差されつで酒でも飲み交わしたいところなのだが、あれだけ喧嘩に強いタケシが、酒にだけは弱いと来ている。実に残念な弱点だと銀は思っていた。

ふと、銀が壁に掛けられた時計を見る。もう少しで時間は八時になろうとしていた。銀は、エプロンを外して、店のシャッターを閉め始める。

そして、家の玄関から喫茶店内に戻ると、カウンターの下から一升瓶を取り出した。それと、先程まで磨いていたグラスを棚からひ

とつ取り出し、また外へと出て行った。

一升瓶とグラスを持った銀は、そのまま道場の中へと入って行く。

銀は、道場の明かりも付けずに中へと上がると、道場の中央に座り込む。

薄暗く静かな空気が流れる道場に胡坐を掻いて座る銀は、グラスに酒を注ぐと一升瓶を持ったまま、一気にグラスの酒を飲みほす。そして、またグラスに酒を注いだ。今度は一升瓶を床に置いて、チビチビとグラスの酒を飲み始める。

酒を飲む銀の目の前の壁には、横に長い額縁が掛けられていた。

心技体。

額縁の中には、そう豪快に力強い言葉が書かれていた。

銀が、タケシの祖父であり、銀の空手の師匠にあたる堂本拳四郎に、堂本流の免許皆伝を頂き、この町に道場を開いた際、堂本拳四郎自らが書いてくれた物であった。

心技体。それは、堂本流が空手道を進み、または導くにあたっての根本にあるテーマ。

その言葉の意味を全て習得した時に、初めて堂本流の名を名乗れるといっても良いだろう。

体。

タケシ、銀、拳四郎の肉体を見れば分かるように、ボディービルダーやプロレスラーもが驚く筋肉。それは、見た目以上にパワフルでタフネスな作りであり、想像以上にスピーディーでソフトな動きが可能である。

そんな筋肉を作り上げ維持するのに三人は、長い期間、常人が考える以上のトレーニングを続けている。その為、三人は、血の小便を出したことすらあった。

技。

堂本流の空手技は、他の空手に比べて足技やコンビネーションなどが少ない。しかし、他の空手の多くが、伝授を止めてしまったような技を、今でも教えている。

一本拳や抜き手、さらに目突きや金的などが、それに当たる。既に多くの空手が、禁じ手として使われなくなった技を、堂本流は、今でも教えている。その他の危険な技も多くあるが、この場では語らず、次回に……。

心。

それらの危険な技を得とくし、それらの危険な技を使う、それが意味することは、それらの危険な技を対戦相手が自分に使ってきても良いという意味でもある。

ナイフを使う者は、ナイフに刺されることもあるだろうし、拳銃で人を殺す者は、拳銃で射殺されても当然。堂本流が、他の流派が禁じ手としている技を使うと言うことは、それらと一緒なのだ。

そんな危険な技を使うのだ、そんな技を使っても誇れるだけの精神面の強さを持たなくてはいけない。

その精神理論は、複雑で有り、曖昧で有り、誤解されやすい。故に時間をかけて、揺るがない誇りある精神を築く為に、土台からしっかりと学ばなければならない。それがまた難しい。

心技体。

そうやって学んだ三つが、道を外さずに組み合わされた時に初めて堂本流を名乗れる。

銀は、その三つの文字が書かれた額縁を眺めながら酒を飲んでいた。

堂本流にどっぶりと漬かった銀には、初心を思い出すために丁度良い酒のつまみだった。

カチャ

銀が、再びグラスを口に運んだ時である。後方にある道場の入り口から、僅かに扉が開く音がした。

銀は、タケシでも帰ってきたのかと振り向いた。

扉を開けて入ってきた人物は、何も言わずに暗い闇の中でシルエットだけを見せていた。

「ん？」

タケシに比べて若干小柄なシルエットだった。身長も僅かに低く、筋肉の量が少なく細く見えた。

銀は、そこからタケシではなく別人だと悟る。しかし、このような時間に、この道場に足を運ぶ人物が思い浮かばなかった。

「どちらさまで？」

グラスを置いて立ち上がる銀が尋ねた。

その言葉に影は、ゆっくり前に歩き出す。

そして、窓から入る街灯の光が、その人物の歩みに連れて足元から照らし上げていく。

顔が見えた。若い男性だった。年のころは、十八歳から二十歳ぐらいだろうか。

窓から入る光に、その男の全身が確認出来るほどになると、銀と男の距離は、三メートルもなくなっていた。

「どちらさまで？」

銀は、穏やかな表情で再び男に尋ねる。

だが、男は答えない。

ブラウンカラーの袖の長いミリタリージャケットのファスナーを、立てた襟元まで上げた男。下は、少しだぶついたGパンを履いていた。そして黒いスニーカーを履いている。

男は、武道家にとって神聖である道場内に、土足で上がりこんでいた。しかし、それに気付いている銀の表情は、穏やかな物だった。

銀が、男の体を観察する。

拳には拳ダコがあった。それは、打撃系の武術を使うということ。

耳を見た。綺麗な耳だった。柔道やレスリングのようなグラウンド技は、おそらく使わないだろう。使ったとしても恐れるレベルでは無いと予想した。

じっくりとグラウンドに打ち込んだ者の耳は、床や相手の道着などに擦れて蒲鉾の様に厚くなることが多い。しかし、男の耳は、その様に見えなかった。

首を見た。鍛えてあるようだが、さほど太くない。やはりグウランド技は使わない。その為頭部へのダメージに対して耐久力が低く見えた。銀の様に、頭の大きさと首の太さが一緒でなかった

だが、見た目は細く見えるが、少し大き目の洋服の下には、しなやかな筋肉が隠されているのであろう。銀は、自分の前まで歩んだ足の運びから、彼の筋肉の動きを読み、その量を計算していた。

「尋ねたいことがある……」

「何かね？」

銀の質問を無視した男は、大きく見開いた瞳をギラ付かせながら質問を始める。銀は、そんな男の態度に、未だ紳士的な対応を見せ

ていた。

「春子・ハルバードは、何処に居る？」

少し猫背で見開いた目が印象的な男は、意外な人物の名前を口に出した。

道場破りなのかと思っていた銀は、少し間をあけて答えた。

「何か用事でも？」

「何処に居る？」

「名も名乗らぬ者に、答える義理は持ち合わせていない」

薄暗い道場内で、男の口元が僅かに笑う。

「じゃあ、しゃべりたくしてやろうか？」

「若いの、後悔するぞ」

穏やかだった銀の表情に、随分と真剣味を佩びた力が入り始める。

「蹴り殺してやる！」

一段と大きく目を見開いた男が、狂人のような笑みを作り上げながら言うと、銀の両拳が握り締められ力がこもる。

銀の警告を無視した男は、左肩を銀に向ける形で横向きに構えると、爪先で跳ねる様にステップを刻み始める。

「言っても聞かぬようだな……」

銀は、構えを作らずに自然体で立っていた。

堂本流の構え無き構えだった。

「もう一度聞く、春子・ハルバードは何処に居る？」

無言のまま銀が、僅かに踏み出した。

その一歩が意味するもの。それは、銀の方も聞く耳は持たないという意味であろう。

此れから二人は、言葉ではなく、暴力で語り合う。

そのことに、男の顔が笑っていた。

<　雲外鏡・二　>（前書き）

０９／４／１時点、８００００アクセス突破！。これも全て、お読み頂いてる皆様のおかげです＾＾

<　雲外鏡・二　>

日が落ち辺りの景色は随分と暗くなっている。

コンビニのバイトが終わったタケシがアパートにバイクで帰ってきた。

後ろに乗る春婆怒の手にはビニール袋があり、何時もどおりのように賞味期限の切れた弁当やおにぎりが入っていた。

「タケシや……」

「ん、どうした？」

アパートの駐輪場にバイクを停めて二人が降りると同時に、春婆怒が真剣な表情で、桜木道場のほうを睨んで話し始めた。

「妖力共有じゃ……」

「はぁ？　何を言っているんだ？」

タケシが春婆怒の言葉に首を傾げたった。

「道場じゃ、道場の中に、九十九神が居るぞぃ！」

「！？」

タケシは、春婆怒の言葉にヘルメットを投げ出して走りだしていた。賞味期限の弁当が入ったビニール袋を地面に置いた春婆怒が、

その後ろを追っていく。

「何で今まで気が付かなかった！　お前の妖力探知能力は、他の連中よりも優れているんじゃあなかったのか！」

「なにやら妖気を術で加工している。故に気付くのに遅れたのじゃ。タケシや、気を付けい、この九十九神は、普通じゃあないぞょ」

春婆怒が言い訳をする中、直ぐに二人は、道場の前に到着した。

目の前の道場からは、光がまったくもれてはいなかった。

道場の古い木製の扉が開いていた。そこから静かな空気に混ざって、僅かな妖気が流れ出ている。

立ち止まったタケシが、隣にある喫茶店桜木のほうを一度見た。しかし、そちらからも光が見えない。

心配する対象は、桜木銀一人。

陽子と雪絵は外出中だ。おそらくカズマは、帰宅しているだろう。

「タケシや……」

「ああ、分かっている」

タケシがゆっくり歩み出した。暗い道場の中へと入っていく。春婆怒も後ろに続いて進んでいった。

玄関内に入ると、下駄箱の横にある電気のスイッチに手を伸ばす。

静かな道場内に、プラッチックのスイッチから出る音が僅かに響くと、道場内を天井の蛍光灯達が、一斉に室内を照らしあげていく。

「やっとお帰りかい、春子・ハルバード」

明るくなった室内。ほぼ中央に、銀が横たわっているのが光に照らし出される。

その向こうの壁に、男が一人立っていた。

心技体の額縁のかけられた壁のしたに、ふてぶてしく両手を組みながら寄りかかった男。

ギラリとした大きな目を見開いて、口元にはうっすらとした笑みを作っていた。

タケシは、倒れている銀に視線を落とした。

両手と両足をそろえて横向きに倒れている銀。

若干、うっすらと目を開き、虚ろな表情をしていた。鼻からは、鼻血が流れ落ちて床に小さな血溜まりを作っている。意識はない様子だった。

その銀にタケシが駆け寄る。

「大丈夫じゃ、息はある。たいした大事ではないぞょ」

タケシの後ろからゆっくりと近寄った春婆怒が、銀の容体を見た

だけで診察した。タケシは、それを聴いて立ち上がる。

しかし、タケシが倒れている銀を見て診察したのは、銀がどのような技を喰らって倒されたかだ。打撃技、投げ技、関節技、武器の使用。倒された人物の被害状況から相手の使う技を察する。

銀のこめかみの辺りに大きく目立った痣があった。おそらくこれが致命傷。その大きさや銀の耐久力から考えて、おそらく蹴り技。

「誰だ、てめー」

凄みがこもった声で、目の前の侵入者に問うタケシ。

しかし、男は、余裕の表情で笑っていた。それが、タケシの癇にさわる。

「可笑しいぞよ、この男。確かに妖力共有している気配が僅かにするのじゃが……」

「姿は人のままだな……。勘違いってのはないよな」

そう言ったタケシは、再び倒れている銀を見る。

今や空手の強差において、タケシと銀の実力は、ほぼ五分五分。

その五分五分の実力の銀が負けているのだ、目の前の男は普通ではない。だが、それがなんらかの妖術を使ったうえでなら納得がいく。

「人の姿で戦うならば、ここでも問題はないが、しかし……」

壁に寄りかかっていた男が、壁から一歩前に出る。

そして、ピキピキと氷にひびでも広がるような音が聞こえ始めた。

そして、男の眉間から広がる細かな亀裂。

まるで蜘蛛の巣の如く顔面に広がると、そのまま首へと伝わり、今度は服のうえにまで広がっていく。

ひびが全身に広がると、そのひびが、ポロポロと卵の殻の様に剥がれ落ちていく。

男の殻のような皮が剥がれ落ちると、そのしたからは、青いラバースーツの上に紫色の仮面や防具をつけた怪人が姿を現した。

間違いない、妖力共有を終えている九十九神だ。

紫色の仮面にはYの字の黒いラインがあり、そこから赤く光る二つの目が輝いていた。

そして、腰のベルトの中央に『鏡』と書かれたミラーコートのバックルが目だって見える。

「なるほどのぉ。妖力共有した姿の上に、人の皮をかぶっておったのか。珍しい術を使うのぅ」

そう言って緑風を巻き起こし長槍の姿に変わる春婆怒。そして姿を変えた春婆怒を、タケシが力強く握り締めて引き寄せる。

「春婆怒、いくぞ！」

「分かっておる、タケシや」

「妖力共有、変身！」

春婆怒が槍に変化したときよりも激しい風が、道場内に吹き荒れる。その風は、タケシの周りを回りながら体に巻きつき、タケシの姿を変えていく。

黒緑に染まったタケシの体に巻きつく緑風が、次々とプロテクターに変わっていく。そして、タケシの全身を更なる戦闘隊形に変えた緑色の風は、臍の元にある風車のついたバックルの中へと吸い込まれていった。

変身完了。

長槍と替わった春婆怒の姿は消え、黒緑の不思議な姿に替わったタケシのみが立っていた。

舞い上がった埃が、ゆっくりと落ちていくのが、窓から入る街灯の光に映って見えていた。

二つの怪人が睨み合う道場内に、静かな空気が再び流れる。

「派手にいかせてもらうぜ！」

タケシは、その台詞と同時に体制を低くして、男に飛びかかろうとした。それを青紫の怪人が、右手のひらを前に出しながら静止を告げる。

「まあ、あせるなよ」

その動きと言葉にタケシの動きが止まる。

「何だ、今更やる気がないとか、ふざけた話はなしだぜ……」

「そうじゃない。ここじゃあ民家が近い、場所をかえようぜ」

うなだれる様に首を曲げて、やる気のないポーズで語る青紫の怪人の背後に、いきなり床から一畳サイズの鏡が生えてくる。

「ついて来い」

そう言うと男は、後ろ向きのまま背にある鏡の中へと入っていった。

水面に緩やかな波紋をあげ鏡の中に沈んでいく怪人を見ていたタケシが、静かな道場に一人残る。

「春婆怒、罠か？」

「さて、どうかのう」

「こっちは身内がひとりやられているんだ、逃がすわけにもいかんか……」

その言葉のあとに、横たわる銀の姿を仮面越しに見たタケシは、鏡の中へとダッシュで飛び込む。

壁にある鏡は、そのタケシを僅かに輝きながら受け入れた。

<　雲外鏡・三　>

一瞬、水の中にでも飛び込んだような感覚だった。

鏡に飛び込んだタケシの体は、すぐさま別の鏡から飛び出す。

足元に、ゴロゴロとした感触があった。砂利である。

鏡から飛び出したタケシは、立ち止まると辺りを確認するように見回した。

薄暗い場所だった。

見たことのない場所。何処か山沿いの石切り場のような場所だった。

迫り上がった岩肌が、人工的だが綺麗にまで切り落とされ、威圧感のある壁に変わりそびえ立っていた。その岩を避けるかのようにおおい茂る木々。そのバランスが神秘的な景色にも若干だが見せていた。

そのような岩肌に囲まれた砂利の散らばる広場。光は、夜の闇を照らす月の明かりしかなかった。しかし、妖力共有したタケシには、その程度の月光があれば、昼間の様にはっきりと辺りが見えていた。

青紫の怪人は、逃げも隠れもせずに、タケシが出て来た鏡の前方十メートル程の場所に立っていた。

「姑息な手は使わないのか?」

タケシが問う。

「なぜに？」

青紫の怪人が、その質問に首を傾げた。

此処最近タケシが戦った九十九神達のほとんどは、何かしらの姑息とも言える術を使って来たからだ。タケシの中には、九十九神の使い手は、姑息といったイメージができあがっていた。

この男は、そうでもないらしい。

「派手にいかせてもらうぜ！」

タケシが走った。

今度は、青紫の怪人も止めずに構えを取る。

左肩を走ってくるタケシに向けると、首もタケシの方へと捻り、体を斜めにして構える。左手は腰の辺りで肘をL字に曲げて、右手は拳が右頬の高さまで上げられていた。そして、爪先で跳ねるようにリズムを取り始めた。

「サイドワインダーか」

走るタケシが、相手の構えを見て呟く。

走り寄ってきたタケシが蹴りの間合いに入ると、先に青紫の怪人が蹴りを放つ。

左足が跳ね上がり放たれる横蹴りの足刀。

普通の蹴り技よりも、かなり長い間合いの蹴りだった。

軸足となった左足が地面を蹴る様に真っ直ぐになり、タケシを狙う左足が伸び迫る。

このまま命中したのならカウンターだ。

しかしタケシは、その蹴りを顔の前に両手を並べてガードした。

蹴りとガードがぶつかり合いタケシの突進が停止する。

青紫の怪人は、蹴った左足を素早く地に戻す。そして、左肩を引き全身に勢いをうむと、右の前蹴りをタケシの腹部に向けて下から跳ねあげた。

しかし、その前蹴りは、タケシが作ったガードには触れずに、寸前で軌道を変えた。

膝関節から外側に軌道を変えた脚が、前蹴りから上段廻し蹴りに変化してタケシの頭部を狙う。

タケシは、その鞭の如く風を切る廻し蹴りを、顎を引きながら後方に体を反らして回避した。

変化した廻し蹴りが、タケシの目の前を一瞬でとおり過ぎながら空気を切り裂いていく。

今度はタケシが、仰け反った体を起こす力を利用して、反撃の正拳突きを放とうとした。

しかし、とおり過ぎたはずの紫色の怪人の脚が、次の瞬間には、怪人の頭の上に振りあげられていた。

その足は、足の裏も、足の甲も見えなかった。その代わりタケシに向けられているのは踵。

「ネリ・チャギ！」

タケシの頭を目掛けて振りおろされる踵が、まるでハンマーの如く迫る。

タケシは、正拳を繰り出すのを止めて、両手で頭部に腕をクロスさせると、その踵落としを受け止めた。交差受けだ。

青紫の怪人が落とした踵が、タケシのクロスガードに減り込むと、激しい重みが衝撃となってのしかかる。

タケシは背を丸め、両足を大きく開き、その衝撃に耐えた。

タケシの両足が、砂利の混ざる地面に僅かに減り込むと、足の裏と地面の隙間から、砂埃を紛失させていた。

「ちぃやぁぁぁぁ！」

クロスした両手で足を挟み込みながら、タケシが反撃の中段廻し蹴りを繰り出す。

しかし青紫の怪人は、可憐なバク転をして後方に飛ぶと、タケシの中段蹴りを見事にかわした。

中段廻し蹴りの勢いで体をスピンさせて一回転したタケシが前を向きなおす。同じくバク転で後方に一回転した青紫の怪人も前を向きなおした。

ほぼ同時に二人の視線が合う。そして、二人が前に走り出した。

互いに迫り合う二人。

先に技を放ったのはタケシ。それは、螺旋を描く突き、正拳。

しかし、その鋭い突きを青紫の怪人は、廻し受けを使い、内から外へと肘関節の軌道４５度の動きを見せて受け流す。

タケシの放った正拳の手首に、青紫の怪人の手首が絡みつく様に当たり、技が狙ったまとを外す。

その廻し受けが成功すると同時に放たれる上段正拳突き。だが、その突きをタケシもかわした。

タケシが上半身を左に反らす。するとタケシの顔の直ぐ右を、青紫の怪人が放った拳が真っ直ぐにとおり過ぎていく。

まとを外した二つの拳。

しかし、どちらの拳も、まるで大砲の弾丸のようだった。

そしてタケシは、大砲の弾丸のような拳をかわすと同時に、前方

へと一歩踏み込み青紫の怪人のふところに入り込んでいた。

タケシの肘鉄。

一歩の踏み込みと同時に繰り出したタケシの肘鉄が、紫色のプロテクターがある胸に炸裂した。

だが、同時に青紫の怪人が出した膝が、タケシの腹部にも突き刺さるように減り込んでいた。

肘と膝の衝撃に、二人の体が弾かれた。よろめきながら間合いをあける二人。

「なるほど、これが堂本流か……。姉さんの言ってた通り、かなり手強い……」

そう呟きながら今度は、青紫の怪人が、仮面のY字に赤い瞳を二つ輝かせながら先に仕掛けてきた。

前へと踏みでる青紫の怪人に身構えるタケシ。そのタケシを目掛けて青紫の怪人の蹴りが低空で飛んでいった。

右のローキック。

タケシは、膝を立てて容易く受けると、蹴りの威力を殺す。

左のミドルキック。

タケシは、肘を曲げて脇腹を守り、その蹴りを防ぐ。

右のハイキック。

タケシは左腕を顔の横にあげて、素早く蹴りを受け止めた。

下中上に、下から上へと繰り出された三段連続のコンビネーションキック。しかし、その全てをタケシは防いで見せた。

三連キックのコンビネーションを防がれた青紫の怪人は、既に更なる攻撃態勢に入っていた。

体をスピンさせて一瞬背を見せる。そして、その直後に放たれる後ろ中段廻し蹴り。

スパイクの如く鋭い踵がタケシの胸元に迫る。

「りぃあぁ！」

タケシは、気合をこめた掛け声と共に後方へと退脚を踏ん張る。そして突きだす肘鉄が、青紫の怪人が放った後ろ廻し蹴りと激突した。

青紫の怪人の足の裏と、タケシの肘が激しく激突して、金属音の様な耳に響く音を立てた。

その音と同時に、青紫の怪人の体が後方へと跳ね飛ばされる様に飛んでいく。

タケシの後方に踏み込んだ退脚は、地面を捲り上げながら足首まで減り込んでいた。

弾き飛ばされた青紫の怪人は、空中で両膝を抱え一回転すると、片膝立ちで綺麗に着地した。

「姉さんの言うとおりだ。こいつ強いな」

「ねぇ、言ったでしょう、鏡慈」

ゆっくりと片膝立ちから立ちあがる青紫の怪人が言うと、同じ怪人の体の中から女性の声で返事が聞こえてくる。

「ねえ、鏡慈。そろそろ本気を出しましょうよ」

「そうだね、今日子姉さん」

その会話を聞いていたタケシは、様子を窺いながら青紫色の姿を眺めていた。

相手が何をする気なのかはわからないが、今ここで手をだすのは野暮というもの。それは、春婆怒も承知している様子だった。

「今日子姉さん、あの術でいくよ」

「ええ、鏡慈」

どんな術を繰り出すのか、タケシは期待していた。

「「合わせ鏡の術」」

男女の声が重なり合い術の名を唱えた。

青紫の怪人が、左右に分裂する様に一歩踏み出した。青紫の怪人が二人になったのである。

一体は、先ほどから戦っていた青紫の怪人。もう一体は、全身の色彩はかわらないが、所々のプロテクターのデザインが女性のものへとかわっていた。腰の括れが引き締まり、胸や尻のラインが女性のものだとはっきり分かる。

「へー、二人ねー」

男女二人に分かれた青紫の怪人を見て、タケシが詰まらなそうに言う。どうやら期待していた術ではなかったようだ。

男の怪人が、先程と同じサイドワインダーの構えでステップを取り始めると、隣の女性の方の怪人は、サウスポーで逆のサイドワインダーの構えを取った。

男女二人の怪人は、お互いの背中を合わせる様に構えてステップを刻む。

「右と左か。おもしれー、やってやるよ」

タケシは両手を開いたまま高く頭上へと伸ばした。そして、ゆっくり両拳を握りながら、顔の前まで降ろして構えを作る。

「ははは、二人で蹴り殺してやる！」

「そうね、鏡慈」

「上等だ！」

第二ラウンド開始。

二対一の戦いが始まった。

<　雲外鏡・四　>

右と左のサイドワインダースタイルの構え。男女二人の構えは、鏡に映したかの如く刻むステップすらすべてリンクしていた。

二対一の状況になったタケシ。しかし、気後れはしていない。真っ直ぐに二人の九十九神を睨んでいた。

「鏡慈、貴方はさっき一人で楽しんだでしょう。今度は私からいかせてよ」

「いいとも、今日子姉さん」

弟の返事を聞いた女が、一人でタケシに仕掛けた。

女が前方に飛んだ。

速い。

「女相手でも俺は、容赦はしないぜ！」

タケシは、否、堂本流は、そういうものだ。

タケシの台詞が終わる直前には、女がタケシの目の前まで迫っていた。

「ヒューーーー！」

独特の掛け声と共に女が蹴りを繰り出す。

膝関節でスナップを効かせたスピーディーなローキック。

膝を立ててガードを作ったタケシの足を叩くと、女の蹴りは膝関節で再びスナップを効かせたハイキックへと続く。

烈風の如きコンビネーションキックだった。

タケシは、間髪入れずに飛んできたハイキックを素早く腕でガードした。

女は、蹴りを放った脚が地に着くよりも早く、逆の足で蹴りを放つ。

ロー、ハイと連続で放った脚が地面に着地するのと同時に、逆の脚がタケシの脇腹をガードした腕に叩き込まれていた。

同じように放ったミドルキックを地に戻しながら逆足のハイキックを再び放つ。まさに連続で打たれる鞭のようだった。

その後も続く左右のステップキック。

女の蹴りが、風切り音を鳴らしながら次々と連続で飛んでいく。

タケシは、素早く連続で襲い掛かる蹴り技の数々に、思わず距離の長いバックステップを取った。

しかし、女が尚もタケシを追う。

間合いを詰めた女が地面を滑る様に体をスピンさせて水面蹴りを

繰り出した。

タケシは、草を刈る鎌のような蹴りをジャンプして飛び越える。

そして、着地したタケシを狙って、尚も回転していた女が、ツイスターの様に続いて旋風脚でタケシの顔面を狙う。

タケシは身を屈めて蹴りをくぐった。

そこに回転を続ける女の中段後ろ廻し蹴りが飛んでくる。

回り続けながらの下上中のコンビネーションスピンキック。

タケシは、顔の前で腕をクロスさせた。そこに女の蹴り脚が叩き込まれる。

蹴りの勢いを逃がす様に、後方へと飛んだタケシは、地面を二回転して止まった。

転がったタケシを追って女が動いたが、それを見てタケシが後方へと更に飛んだ。

二人の間合いが再び開く。

「どうしちゃったのかな～」

蹴りの間合いから逃げたタケシを見て女が、わざとらしい口調でそう言った。

「ちっ」

タケシの口から、舌打ちだけが出た。

男のほうに比べて重さがない蹴り技だったが、その分コンビネーションやスピードでは、女のほうが圧倒的だった。

「もういいでしょう、姉さん。今度は僕も一緒に行くよ」

「ええ、鏡慈」

そう言いながら男が、女の横に並ぶ。

「二人で蹴り殺そう」

「そうしましょうか、鏡慈」

二人の九十九神が、一斉に前に出る。

左の男のフリッカージャブが、斜め下から素早くタケシの顔面を狙う。

タケシは、そのジャブに対して体を反らしてかわしたが、左の女が右のローキックを放ってタケシの右腿を蹴り上げた。

タケシの足から乾いた音が響くと、その体が僅かにぐらついた。

すぐさま続く二人の攻撃。

男の中段前蹴りと、女の上段廻し蹴りが同時に飛んできた。

タケシは、必死に後ろにさがって二つの蹴りから逃げた。

しかし、二人の男女は、攻撃を放ちながらタケシを追う。

女が腹部を狙ってフックを放つ。タケシは片腕を盾にフックを防ぐが、男のハイキックがタケシの頭を掠めた。

続いて男のローキック。タケシは膝を立ててローをガードするが、女の後ろ廻し蹴りがタケシの肩に当たった。

更に女のミドルキック。タケシは両肘でキックを受け止めるが、男のチョップが首元に叩き込まれた。

男女の攻撃は、とちらかが上段を攻めれば、片方が中段か下段を攻める、どちらかが中段を狙えば、片方が下段か上段を狙うといったぐあいに、必ず別々の場所を同時に攻めてきていた。

「ちきしょうが！」

攻められっぱなしでは癪なのか、タケシが意地を見せて反撃を放った。

タケシの上段廻し蹴り。

しかし、それを男が両手でガードすると、女がタケシの背中に蹴りを入れた。

「ちぃぃ！」

今度はタケシの正拳突き。

しかし、その突きを女がスェーバックで回避すると、男の下段足刀が、横からタケシの片足を叩く。

「せいっ！」

続いてタケシの前蹴りが、男の腹部を狙う。

男がタケシの蹴りを、腕を曲げて受けると、女がタケシの脇腹に爪先で蹴りを打ち込む。

「舐めんな！」

やけになったタケシが、大技を繰り出した。

それは、大振りの上段廻し蹴りに続いて上段後ろ廻し蹴り。

左右の足で連続に繰り出された廻し蹴りを、二人の男女は後方に一歩だけ下がり容易く避ける。

そして、タケシの回転が止まったところで二人は、同時に前へと出て蹴りを放つ。

男の前蹴りがタケシの腹部を蹴り、女の上段廻し蹴りがタケシの頭部を蹴った。

その二撃にタケシがよろめきながら後方にさがっていった。タケシの足取りは、明らかに倒れるのを堪えるかの様に見えた。

「タケシや、落ち着け」

春婆怒がタケシをなだめる。

「わらわを使え、ウェポンモードじゃ」

「いいや、まだいける！」

だが、春婆怒の言葉にダダをこねるタケシ。

「ええぃ、お主というやつは！」

「たかだか二対一、そんなのに武器を使えば、空手家の名に泥を塗っちまう」

「ええい、この愚か者が……」

意地を張るタケシを目指して男女二人が、構えも取らずに歩き出した。

「本当にバカな奴だよな」

「そうね、鏡慈」

「一対一でタメを張っていたのに、二対一でかなう訳がないのによ」

「そうよね、鏡慈」

「今日子姉さん、一気に決めてしまおうか」

「そうしましょうか、鏡慈」

「「合わせ鏡の術」」

二人の男女が、二人に別れるように左右へと一歩踏み出した。

また、あの術だ。二人の男女が更に二人に別れて四人になった。

男女、男女に並ぶ青紫の四人。

「おいおい……」

それを見てタケシが呆れたかの如く声を溢した。

「タケシや、ウェポンモードだが……、どうするかぇ？」

春婆怒が、今一度言った。

「その提案に賛成したいな～、まだ間にあうか？」

「どうしようかのー」

タケシと春婆怒の会話の中には、まだまだ余裕が潜んでいる様子だった。

<　雲外鏡・五　>

「行くよ、姉さん！」

「ええ、鏡慈！」

男女四人になった青紫の怪人が、一斉に走り出した。

「ハルバード・ウェポンモード！」

その四人の動きを見たタケシが、声を張り上げてそう言った。

タケシの手の中に、鋼の鉄槍が突風と共に現れる。

「「「「武器」」」」

男女四人の声が、綺麗に重なっていた。

タケシは、槍をできるだけ長く持ち、横一文字に大きく振って四人を一撃で切り裂こうとした。その切っ先が四人を右から左へと横一列に狙う。

「「ジャンプ！」」

「「おっと！」」

二人の女が同時にジャンプをして槍をかわすと、男二人は右足を前に伸ばし左足を後方に伸ばすと股割りの状態で屈み、柔軟運動をするように槍の攻撃をくぐった。

女二人が、音も立てずに着地すると同時に、足を前後に開き股間を地にべったり着けていた男二人も器用に立ち上がった。

更にタケシが、槍で攻め立てる。

タケシが一人の男を狙って槍を突き立てるが、男は身を横に向けただけで回避する。

そのタケシの突きと同時に、他の三人が一斉に左右へと走った。そしてタケシを四方から取り囲む。

「こいつら、一対他の戦法に慣れていやがる……」

「おそらく、今までこのように戦い、敵を喰らってきたのじゃろうて」

タケシは、周りを警戒しながら槍を構えて会話をしていた。

「小賢しいをとおり越して、厄介なレベルだな」

「さてさて、今回は強敵じゃのう。おかげで食欲がわくわい」

「俺もだ、春婆怒。ワクワクしてくるぜ！」

ピンチを前にタケシの顔は、仮面のしたで笑っていた。春婆怒の顔は確認できないが、おそらく同じような笑みを作っているのかも知れない。

四人の男女が、タケシの周りを左回転でゆっくりと回り始める。

「そろそろ仕掛けてくるか……」

槍を握るタケシの手に力が入る。

四人の移動スピードが、徐々に速くなっていく。

石切り場の広場に、四人が砂利を鳴らしながら走る音が響く。

四人が回る円が少しずつ縮み、中央のタケシへと迫る。

その時である。

「たった一人に四人がかりとは、見ていられぬな」

萎れた男の声だった。

石切り場の絶壁に反射して、その声が良く響く。

その声に四人が足を止めた。

「「誰だ！」」

男二人が声をあげた。

タケシと春婆怒には、聞き覚えのある声だった。

その問う声に続いて、切り落とされて崖の様になった岩肌の頂上から、大量の枯れ草が滝の如く降ってきた。

そして枯葉は、どんどんと積み重なり巨大な人型に象られていく。

「「あ、あれは！」」

「「枯葉入道の術」」

四人の男女が、枯葉で象られた巨人を見て声を上げた。

切り落とされた岩肌を背に立つ巨大な枯葉入道。その胸元に、茶色いハンチキャップを被り、おそろいのカラーのロングコートを着た、狸面の中年男性の上半身が、ムクムクと生えてきた。

「良くご存知で」

枯葉の巨人の胸元に生え出たのは、虎野町妖怪連合調査班班長の鍋中改造刑事だった。

その狸に似た面の中年男性に、タケシも見覚えがあった。

「だが、ワシ一人ではないぞ、見よ！」

鍋中が、地上の一箇所を指差した。

「「「「なに！」」」」

そこには、砂利の散らばる地面に水溜りが出来ていた。

この場に居る全員の記憶が定かならば、ここに来たさいに水溜りはなかったはず。

その水溜りから、黒髪の長い男性が生えてくる。

長い髪に青白い細身の顔。灰色の着物を着て、片手には長い合口を持っていた。

綺麗な顔立ちの男は、目を閉じているようにも見えたが、しっかりと戦っていた五人の方向を見ている。

「確かこの前、屋根の上に居た奴か」

タケシは、この前の油義低での事件を思い出していた。

煙の術を扱う九十九神を倒したあと、その屋敷の屋根の上で八尾弦徳と決闘の約束を結んださい、その八尾弦徳と一緒に居た男である。

話はしなかったが、間違いない。時代遅れな特徴が、はっきりと記憶に残っていた。

「私の名前は、野町妖怪連合後処理班の一角、無常水越斎」

落ち着きのある透きとおった、流れるせせらぎの様な語り方だった。

「「ちっ、もう連合の奴等が嗅ぎ着けたか、しかも一度に二人も！」」

男二人が同時にそう言った。その後に水越斎が、続いて口を開く。

「いやいや、今日は特別でね。もう一人来ているのだよ」

水越斎の言葉のあとに、タケシと四人の男女を挟んで彼とは反対側に、モクモクと黒雲が広がり始めた。

その黒雲の中に、何かが蠢いていた。

「俺様わぁぁぁぁぁーーーー！」

黒雲の中から響く声。

「男の子の永遠のアイドルーーーー！！」

そして、蠢いていた者が怒鳴りながら黒雲から姿を現す。

「ヘラクレスとかーーー、コウカサスとかにゃーーー、負けられんねーーーー！！」

「あいつはもしかして……」

そう言ったのはタケシだった。しかし、声に厭きれた色が混ざっていた。

黒雲から出て来たのは、兜の額に長い角を持った真っ黒な鎧武者。その姿から、カブトムシを連想させていた。

そう、あれは……。

「昆虫キング、虫玄武兜丸ジョニーＤＸ、ただいま参上！！！」

「あぁ、やっぱりあいつか……。なんだか、名前も長くなっている

し……」

姿を現した虫玄武を見て、若干疲れた声をタケシが溢した。

「「一度に、妖怪連合の者が三人も……」」

「「鏡慈、此処は一旦引きましょう」」

「「そうだね、今日子姉さん」」

そう話していた四人の背後に一畳サイズの鏡が地面から起き上がってくる。

「逃げるかぇ！」

春婆怒の声に反応してタケシが槍を逆手に持ち替え狙いを定める。

「待てや、とりゃ！」

鏡の中に背中から後退りして行く四人。その内の一人にタケシが槍を投げた。

「「「「決着は、また後日……」」」」

そう言い残して鏡の中に消えていく四人の声は、綺麗にハモッていた。

そして、四人が消えた鏡の一枚を、タケシが投げた槍が砕いて割った。

割れた鏡が地面に散らばり落ちる。他の鏡は、霧のように消えていった。

「ちっ、逃がしたか……」

槍を投げたモーションから自然体に戻ったタケシは、納得がいかない感情を言葉に込めて吐き出した。

<決意・前編>

夜の繁華街だった。

あちらこちらで幾つもの煌びやかなネオンが輝き、夜にも関わらず賑やかな町を綺麗に着飾っていた。

ほろ酔い気分で行き来する人々。スーツ姿のサラリーマンやラフな格好をした若者達が、各々の連れと楽しそうな会話をしながら歩いている。

アルコールの入った声が雑音にかわり店の扉が開くたび漏れ出てくる。

そんな騒がしい雑音のような活気やカラオケの歌声が、夜の街の空気を快楽まみれの色に染めかえていく。

人々が、この瞬間だけは、日々のストレスから開放されようとしていた。

そのような景色がちらほら見られる繁華街の中を、一人で歩いている男が居た。

革ジャンを着て、その下に猛毒を持っていそうな蛇が巻きついた髑髏のイラストが描かれた黒いTシャツを着ていた。下はGパンで、靴は黒いスニーカーだった。

一人で歩く男は、若干背を丸めて、両手をGパンのポケットに突っ込んでいる。

身長は１８０ｃｍあるかないか。顔付きも細く、体型も細く見えた。

短めに切りそろえられた髪は、綺麗な金色をしている。しかし、顔を見れば、明らかに東洋系の顔をしていた。日本人である。

誰が見ても分かる日本人の顔立ち、その顔に眼鏡が掛けられていた。銀縁の眼鏡。相当、目が悪いのか、レンズは、かなり度が入っていそうだ。

男は一人で道の真ん中を歩く。その両脇を、見知らぬ人々が賑やかにすれ違って行く。

男の視線は、暗かった。

銀縁眼鏡の下にある瞳。その目の奥が死んでいた。

男は、歩きながらポケットに突っ込んであった右手を引き抜くと、その手で僅かにさがった眼鏡をあげた。

その手の拳に、何かがこびり付いていた。赤いペンキのようなもの。

おそらく血だろう。男のものではない。

ほんの五分程前の話である。

彼は、初めて喧嘩をした。路上でだ。

そんな彼は、七年近く人を殴るスポーツをやっていた。

ボクシングである。

だが、この一年で彼の視力は０．０１まで一瞬で低下した。もう眼鏡なしでは、一メートル先も良く見えない。

それが、彼のボクシング人生を終わらせる合図だった。

まだ二十二歳だった。

早すぎる引退に、本人も納得がいかなかった。

しかし、それが現実。

その彼が、繁華街を一人で歩いていると、見知らぬ男と肩が触れた。すれ違いに、ほんの僅かである。

それが原因で、男と口論になった。否、一方的に相手の男が因縁を付けてきたと言っていいだろう。

相手は、男よりも若い男だった。

相手の男は、ギラギラした刃物のような瞳をしていた。

その男には、二人の仲間がいた。三人とも、まるで野良犬に見えた。

そして四人は、人気のない裏路地に入っていったのである。

そこで男は、三対一の喧嘩をした。初めての喧嘩を。

相手の一人が、「眼鏡を取れ」と言ったが、男が眼鏡を取ることはなかった。

しかし勝負は、一瞬で付いた。

真ん中の男に、ジャブを打った。

相手の男は、鼻が一瞬で潰れ、二人の仲間の間を飛び、後方へと倒れた。

仲間の二人は、ジャブを喰らって飛んでいった男を、顔ごと視線を向けて追った。

それが、二人のミスだった。

二人が振り返るよりも早く、男のパンチが次々と二人に打ち込まれていた。

フック、ボディーブロー、ストレート、アッパー。

その四発で、勝負がついていた。

二人の男は、同時に倒れこむ。

アスファルトに転がる二人は、鼻や口から血が出ていた。

最初にジャブを喰らって倒れた男が、両方の鼻の穴から血を滝の様に流しながら体を起こす。

パンチを放った男が、未だに尻餅をついている男を見下ろしていた。冷たい目だ。輝きの欠片もない、死んだ目だった。

先程まで、あんなにギラギラした瞳をしていた男も、その瞳から輝きが消えていた。

怯えている。

負け犬の目だった。

それを見て男は、黙って裏路地を出ていった。

銀縁眼鏡のズレをなおした手についていた血痕は、その時についたものだ。

男は、その足で繁華街を歩いていた。そして、拳についた血痕に気付いた。そして呟く。

「喧嘩も悪くないな……」

今まで、グローブごしにしか人を殴ったことがなかった。

目を病み、ボクシングのライセンスを失った時には、人生が終わったと思った。

早くに両親を亡くし、経済的な理由で大学も中退した。

小さな建設会社に就職して、夜にジムに通い、プロのライセンスを獲得した。

彼女も出来た。将来は、その彼女と結婚をしたいと思っていた。

だが、彼女は、自分の他にも男が居た。二股だ。しかもその男は、東大出のエリートときたもんだ。

それが原因で彼女とは、一ヶ月前に別れた。

それから一週間して、勤めていた会社が倒産した。

男は、大きな絶望を感じていた。

仕事を失い、彼女に裏切られ、視力を失った。

何よりもボクシングができなくなったことが、一番のショックだったかもしれない。

だが、先程の三人との喧嘩で、あることに気付いた。

自分は、ホクシングがしたかったのではなかったと。

自分は、人を殴ることが好きだったんだと。

喧嘩に、プロのライセンスは要らない。

人を殴りたいのならば、喧嘩をやればいいのだと。

そのことに気付いた男は、再び人生に希望を感じはじめた。

「ん？」

男が、裏路地へと入る角に立つ電柱の影に、一つの人影を見つける。

その影は、じっと男の方を見ていた。

子供のように背が低い。フードの付いた薄汚れた灰色のパーカーを着ていた。

そのフードを深々と被り、電柱の陰から男を見ていた。

男も足を止める。

二人は見詰め合っていた。

不意にフードの影は、路地の奥へと小走りで移動していく。

男は、何も考えずに、その路地へと足を向けて、そのフードの人物を追った。

数メートル先を、暗い路地の奥へと小走りで進んで行くフードの人物。

それを追う男。

フードの人物が足を止めた。路地は、行き止まりである。

「人を殴るのは、楽しいでしょう」

振りかえったフードの人物が、少々甲高い声で男に言った。

「人と戦うのは、楽しいでしょう」

黙ったまま男は、フードの人物を見ていた。その表情から若干の驚きが見えた。

男は思った。心を読まれている。

「いつまでも、いつまでもいつまでも、戦いたいと思わないかい？」

思う。

男は、心の中で、素直に答えていた。

「後ろを見てごらん」

その言葉に後ろを振り返る男。

そこには、編み笠を頭に被り、修行僧の姿に錫杖を持った数人が、いつの間にか立っていた。

かなり鍛えているのか、上半身が、逆三角形な男。

身長が二メートル近くある大男。

それよりは低いが、巨漢で太った男。

褐色の肌をした男。

編み笠から見える、長いドレットヘアーの男。

そして、五人に比べて小柄な老人。

どの男も体を鍛えてあるように見えた。

そんな六人は、男が進んできた道を塞ぐように立っていた。

「どうですか、貴方も彼らの仲間になりませんか？」

再び男がフードの人物のほうを向いた。

するとフードの人物は、被っていたフードを取ると、隠していた顔を見せる。

その頭部は、鼠のものだった。

「さあ、どうですか？　一緒に戦い続けましょう」

鼠の口から零れる人の言葉。その誘いの言葉に、男の心が揺れていた。

「人を辞めるだけの魅力がありますよ。ちゅー」

男は、心の中で思う。

とても、とても、魅力的な誘いだと。

そして彼は、しばくして答えを出す。

そんな人生も、いいかもしれないと。

このままの人生よりも、魅力的ではないのかと。

そして、心の中で受け入れる。誘いの言葉を。

それに鼠の頭部が、ニッコリと笑った。

「これで七人目。新・七人岬、完成でちゅー！」

妖怪連合虎野町支部勧誘班の扈鼠、勧誘任務成功。

<決意・後編>

鼠の頭部をした小柄な妖怪、扈鼠。

先程、勧誘という仕事をひとつ終えた彼は、一人、ヒョコヒョコとした足取りで、酒の入った賑やかな人々が往来する駅前の繁華街を歩いていた。

扈鼠は、人々にぶつからないように、すばしっこい動きで酔っぱらいを避けて歩いていく。

どうやら人間たちには、彼の姿が見えてはいない様子だった。

しばらく歩いた扈鼠が、歩みを止めた。そして見上げる。

扈鼠のつぶらな瞳に、看板のネオンがキラキラと映る。彼は、自分よりも五メートル以上頭上にある、雑貨ビルの看板を見上げていた。其処には、幾つもの飲み屋の店名が書かれている。

どの階の看板を確認したのか分からないが、扈鼠は、そのビルの中へとヒョコヒョコと入っていった。

雑貨ビルに入って直ぐ、上に登る階段があり、その横の廊下にスナックの看板と店のドアが三つ程並んでいた。

扈鼠は、その廊下の奥にあるエレベーターに乗った。

若干汚れがある小さなエレベーターだった。酔っぱらいが蹴飛ばしたのか、壁に靴の跡があった。

扈鼠は、爪先立ちで背伸びをすると、五階を目指すために、エレベーターの丸いボタンを一つ押した。

直ぐにエレベーターは、雑貨ビルの五階に到着する。

一階と同じように、スナックやパブの看板が、廊下に三つ並んでいた。

その内の一軒のスナックの扉には、準備中のプレートが未だにかけてある店があった。

店の名前は、「夜蜜」。スナックである。

こんな稼ぎ時なのに準備中ということは、今日、この店は、休業なのだろう。しかし、その店の扉のノブに扈鼠が手を掛けた。

扉が開くと店内から有線の曲が、大人の臭いと一緒に流れ出る。アルコールと煙草の臭いだ。その中に扈鼠は、無言のまま進んでいった。

扈鼠が扉をくぐるとすぐに小さなカウンターが見えた。カウンター席は四つである。本当に小さい店である。

そのカウンターの向かいにテーブル席がソファーに囲まれ四つほどあり、更にその奥にカラオケセットが配置されていた。

店内は、軟らかい光で照らし出され、ピンクの壁が、その軟らかい光を受け止めていた。

心が和む程度の明かりに、色欲が掻き立てられそうな空間だった。

「や～、扈鼠君、おそいよ～」

テーブル席のひとつから、男性の声が飛んできた。

扈鼠が、その声のほうを見ると二人と数人のお客が、ばらばらの席に座り酒を飲んでいた。

だが、この店は、現在準備中のはず。彼らは、普通のお客ではなかった。

「こんばんは～」

扈鼠が、店内全てに届くような声で挨拶をした。

「あら、扈鼠ちゃんお久しぶり」

カウンターの奥から、店のママが扈鼠に答えた。

綺麗な和服を着た女性。年のころは三十ぐらいだろうか。ブラウンのショートボブで、少し気の強そうな顔つきをしていたが、優しい笑みで扈鼠を迎え入れた。

そのカウンター席の一番奥に、スーツ姿に茶色いハンチキャップを被った中年男性が、ゴロリとした氷が入ったグラスでウィスキーを飲んでいた。

その目の前に、黒く四角い灰皿が置いてあり、そこから吸いかけの煙草の煙が、ゆらゆらと上がっている。

刑事の鍋中改造。妖怪、化け狸である。

鍋中は、挨拶をした扈鼠に返事をしなかった。黙ってグラスの酒を見詰めていた。

それとテーブル席に男女が居た。

一人は、スーツ姿にスマートなフレームの眼鏡を掛けた七三の男。もう一人は、赤いレディースーツを着て、髪をアップで束ねた女性だった。

男性の方は、猫田探偵事務所を兄弟三人で経営している長男、猫田龍信だ。

隣の女性は、龍信の恋人で、油義会長の秘書、蓋口静香である。

猫又と二口女の妖怪カップルだ。

「ゴォラァ、扈鼠、待ちくたびれたぞ」

別のテーブル席からも太い声が飛ぶ。

店内の一番奥のテーブル席。その席に、更なる四つの影があった。

四角い顔立ちにオールバック、ゴツゴツした筋肉質の体型に白いTシャツ姿の男。声を飛ばしたのは、その男であった。人に化けた一七五一家の妖怪、虫玄武兜丸ジョニーDXだ。

その両脇に、二人の子供が座っている。

一人は、黒い学生服姿の少年。もう一人は、ツインテールにフリルの付いたピンクのワンピース姿の少女だった。

虫玄武と同じ、一七五一家に属する妖怪変化の黒童子と蛾蝶姫の二人だった。

少年に化けた黒童子は、ニコニコと無垢な笑みで微笑みを作っていた。

片や、ツインテールの少女に化けている蛾蝶姫は、可愛らしい外見とは別に、眠たそうな冷めた瞳をしていた。

その蛾蝶姫の隣に、和服姿の色男、長い黒髪の無常水越斎が静かに座っていた。

何故か、その水越斎に蛾蝶姫が体を摺り寄せていた。彼女は色男が好きらしい。

扈鼠は、店内を進むと、一七五一家と水越斎の座るテーブルを目指した。

どうやら龍信と静香のカップルに気を使った様子だ。その扈鼠に店のママがお絞りを持ってきた。

同席の水越斎は日本酒を飲んでいる。一七五一家の三人は、水をコップで飲んでいるだけだった。

「三方は飲まないのですか？」

扈鼠が一七五一家の三人に問う。

「おう、これ、砂糖水だ。俺らは、これで十分」

そう虫玄武が答えた。

「はぁ……、なるほど。じゃあ、ママー、僕にビールをジョッキでお願いしますー」

「はーい」

若干、虫玄武の返答に戸惑った扈鼠も、すぐに気を取り戻し自分の分の飲み物を注文した。

すぐに店のママが、扈鼠の元にジョッキで生ビールを笑顔と共に運んで来る。

扈鼠は、そのジョッキビールを半分程いっきに飲んだ。

「ぷっは～。でぇ、九十九神の方はどうでした?」

一息ついたのか、扈鼠が既に集まっていた者たちへと問う。

「逃げちまったよ」

答えたのは、虫玄武だった。

詰まらなそうにコップの砂糖水を舐める。その仕草から、不機嫌そうな気配が、扈鼠にもはっきりと分かった。

「しかもよ、春婆怒と戦っていやがった」

「黄金騎士のほうですか、それとも鏡のほうですか？」

「鏡のほうだ。あの春婆怒が、不利に見えた……」

虫玄武は、自分を負かした春婆怒が、押されぎみの戦いをしていたのが気に要らない様子だった。言葉の中に、機嫌の悪さが伝わってくる。

「ほほ～、あの春婆怒が押されていたのですか～。その鏡の九十九神もやりますね～」

「で、扈鼠さん、貴方のほうは？」

質問は、同じ席の水越斎からだった。

「ええ、完璧に進みました。得意分野の仕事ですからね～」

「七人岬、完成か」

一人、離れたカウンター席の鍋中が、小さく呟く。その声は、カウンター内のママにしか届いていない。

水越斎が、グラスの酒をいっきに飲んだ。

「では、此方の戦力は整いました。次に黄金騎士、鏡の九十九神、どちらが出現しても、我らで討ち取ります。皆さんいいですね」

冷静だが力強い口調だった。その台詞に虫玄武だけが不敵に笑う。

「ちょっと待ってください」

しかし、席を立った静香が、水越斎に向かって声を飛ばす。

「油義会長の支持は、会長と八尾さんの二人が帰るまで、九十九神からの被害を食い止めろとのことです。無理は禁物と言われているじゃあないですか。水越斎殿、貴方ほどの人物が、何を先走るのですか？　会長が指示した通り此処は、八尾さんの帰還を待って戦力を整えてから戦うべきではないでしょうか！？」

水越斎は、大きめの声で語る静香の説教を、目を瞑った静かな表情で、黙ったまま聞いていた。

「おい、ねーちゃん」

カウンター席でウィスキーを飲んでいた鍋中が、背中を向けたまま彼女のことを呼んだ。

貫禄のある渋い声だった。

スナックの中の全員が、背を丸めて酒をあおる鍋中に視線を向ける。

「ねーちゃんは、これから長老の席に就こうとしている八尾に、まだ戦えと言うのかい」

「え？」

「ここに居る男どもは、ボスが一緒に戦ってくれないと、役にも立

たない男どもだと思っているのかい？」

立ったままの静香が、困ったような表情で、鍋中の背中を見ていた。

「八尾が長老の座に就けば、自然と後処理班から抜ける。前線から抜けることが分かっている人物を、このまま頼るように待てと言うのかい？」

そう言って鍋中は、また一口、ウィスキーを飲む。

立ち尽くしていた静香の袖を、隣に座る龍信がひっぱり座らせた。

今度は、その龍信が話し始める。

「静香さん、我々はね。今回、最初から油義会長の指示にしたがおう思っている者は、一人も居ないのですよ。むしろ、二人が帰ってくるまでに、二体の九十九神を、両方とも退治するつもりでいます。それを、八尾君の長老就任と、油議会長の長老代行を終えるはなむけにしようと思っていましてね」

優しい口調だった。

「ごめん……」

龍信にのみ聞こえる小さな弱い声で、静香は詫びを口にした。

「がははははは。八尾の後釜、俺様が後処理班に入ってやるよ。戦いながら銭がもらえるんだろ。いい仕事じゃあねえか」

能天気な口調で虫玄武が、勝手なことを語っている。だが、その大声が、この場の空気を若干明るく変えた。

「皆さん、次は確実に、奴らを狩りましょう」

そう言って体に擦り寄っていた蛾蝶姫を振り払いながら席を立った水越斎は、ゆっくりとテーブル席の隙間を歩いて店の出入り口を目指した。どうやら一人で先に帰る様子だ。そのまま店の外へと出て行った。

「よし……」

続いて声を出した鍋中が、カウンター席から立つと口を開く。

「ママ、デュエットしよう」

「「カラオケ歌うのかよ！」」

鍋中の言葉に、つっこみを入れたのは、虫玄武と黒童子だった。

そして、ふと気付くと蛾蝶姫が、静香の座る席の隣に置いてあった紙袋の中を覗き込んでいた。

「……ねぇ、このチャイナドレスと、……かわいいメイド服、……どうしたの？」

そう言って、紙袋の中から二つの衣装を蛾蝶姫が引っ張り出していた。

「ああ！、ちょっとやめてよ！！」

静香が大きな声を出して、慌てながら顔を赤面させていた。

「し、静香さん、それは！」

その衣装を見て、隣の龍信が目を輝かせた。

「いや、これはね、ほら、この前の約束の、ね、ね、ね！」

「「あー、バカップルだー、バカップルだー」」

小学生の様に二人を冷やかす虫玄武と黒童子の二人。

「よし、静香さん、さっそく今日はお泊りで！」

そう言って蛾蝶姫から二つの衣装を奪い取った龍信が、鼻息を荒くして静香の腕を引っ張り店の入り口を目指して進んでいく。

そんな若い者たちを無視して、鍋中とママがデュエットを熱唱していた。

<決意・タケシと陽子編　>

早朝の喫茶店桜木。

店内で開店準備をしているのは、タケシとカズマの二人であった。

現在、陽子と雪絵の二人は、雪絵の実家に帰っており留守である。

一人、留守番を任せられていた銀は、昨日の夜に現れた道場破りに倒され、微妙な体調であった。

それで、陽子と雪絵が帰ってくるまでのあいだ、タケシとカズマが、喫茶店を手伝うことにした。

陽子と雪絵の二人は、昼前に帰ってくるらしい。

銀は、動けないわけではない。手伝いをしているタケシとカズマの二人ほどの動きではないが、ゆっくりとした動作で、開店の準備をしていた。

しかし、その左こめかみには、大きなガーゼが張られていた。ガーゼの下は、腫れあがり、赤紫色に変色している。その腫れが、目蓋を塞ぎ、左目の視界を小さくさせていた。

ガタンッ。

「桜木先生、無理しないでじっとしていてください」

掃除をしながらテーブルの角に足をぶつけた銀を見て、カズマが

心配な表情をしながら言った。

「いゃ、じっとしているほうが落ち着かなくてね……」

ガーゼを付けた顔で銀が苦笑いを作る。

銀は、昨晩受けたダメージで、時折よろめくことがあった。本人は、大丈夫と言うが、見ているほうがハラハラしてしまう。

銀のダメージは、首にも来ていた。それだけではなく、時折頭痛もするようだ。その頭痛が眩暈を呼ぶ。おそらく銀と同じダメージを一般人が受けたのならば、2~3日は動けなくなるはずだ。

開店準備が終わると、ちらちらとモーニングのお客が来店してくる。

コーヒーや料理を作るのは、いつもどおり銀だった。そのぐらいは怪我をしていてもこなせた。

タケシとカズマで接客をこなし、二人が交互で帰ったお客のテーブルを片付ける。

銀は、昨日の男の話をしなかった。

カズマも訊かなかった。

「あとは、俺が片を付けます」

朝稽古に訪れたカズマが銀の顔を見ると驚き、騒ぎ出した。

その時に、タケシが、そう言ったのである。

その台詞を聴いて、騒いでいたカズマも黙った。

否、台詞に黙ったのではない。

タケシの表情を見て黙ったのだ。

そのタケシの表情は、恐ろしい表情というよりも、凛々しく、決意のこもった表情に見えた。

カズマは、そのタケシの表情を見て確信した。

どこのどいつが、銀を襲ったのかは分からない。しかし、タケシが間違いなく、そいつを叩きのめすと。

銀も、タケシの言葉に納得している様子だった。

だから三人は、もう、銀の傷の話をしなかった。

モーニングに訪れたお客が、銀を見て事情を訊く者もいたが、銀が苦笑いを作ると、それ以上訊く者は居なかった。

タケシとの組み手などで受けた傷なら、銀も客に訊かれれば答える。しかし、そうじゃない時は、お客に原因を答えることはない。

この喫茶店に訪れるほとんどのお客は、銀やタケシが、空手をやっていることを知っている。その空手の内容も知っている。だから、深く訊かない。

モーニングサービスの時間が終わると、カズマだけが家に帰る。今日、タケシは、バイトが休みだった。このまま陽子と雪絵の帰宅を、ここで待つつもりでいた。

そして、昼前の忙しい時間が訪れる前に陽子と雪絵の二人が、タクシーに乗って帰ってきた。

明るい笑みで、両親が経営する喫茶店の扉を開く陽子。機嫌がいいのか、外の天気と同じぐらい明るい表情をしていた。

「タケちゃん、お父さん、ただいまーって、お父さんその顔どうしたの！？」

最初に喫茶店の入り口をくぐった陽子が、父の顔を見て驚きの声をあげる。

娘に続いて店内に入った雪絵も、夫の顔を見て一瞬驚いた顔をしたが、すぐにいつもの冷静な笑みに戻った。娘の陽子とは、人生経験の差が、そんなところからかいま見れた。

エプロンを外したタケシが、初めて喫茶店の手伝いを終えると、馴れない仕事のせいか、ぐったりした感じでカウンター席に腰を下ろして肘を付く。

しばらく父の怪我について騒いでいた陽子も大人しくなり、タケシが外した自分のエプロンを締めるとカウンターの中へと入っていった。

そして、いつもと変わらない、喫茶店桜木の風景へと戻っていった。

一息ついていたタケシも、何故か、その光景に心が和んだ。

「陽子、また、お爺ちゃんは、あの話をしてきたのか？」

銀が、自分の隣で食器を洗っている娘に尋ねた。

陽子は、父の質問に、カウンター席でコーヒーを飲んでいるタケシの顔を一度だけチラリと見た。タケシも、その仕草に気付いた。二人の視線が一瞬だけ合う。

「うん……」

小さく答えた陽子は、また俯き皿を洗い始める。その小さな返事に、何があったのかとタケシも陽子のほうを見ていた。

今此処で質問をした銀は、タケシと陽子の反応を見ている様子だった。

それに陽子も気付くが、タケシのほうは、事情が分からないため、微妙な表情をしている。

銀も、妻から聴かされていた。

油義グループを陽子が継ぐか、それとも森一郎という男と結婚して、その男が会社を継ぐか。

母方の祖父、油義裕次郎が、数年前から孫娘の陽子に、一方的に言っている話である。

どちらの選択も、陽子の望んでいるものではない。

母の雪絵は、祖父の言うことなど無視してしまえば良いと言っている。

彼女は、その父の言葉を無視して、銀と駆け落ちしたのだから。

二人は、タケシの祖父であり、銀の空手の師匠がいる春婆怒村に逃げ込み、そこで陽子を身ごもり、なし崩し的に席を入れたのである。

祖父の油義も、孫娘が将来、油義グループを継いでくれるのならばと言い、二人の結婚をしぶしぶ許したのである。

陽子が、油義グループを継ぐと言う約束は、その時から結ばれていた。やはり、一方的に。

そんな事情があるのを知らないのは、タケシ一人だけだった。

タケシに知らせるのは、陽子の役目だと、銀も雪絵も考えていた。

だから今まで、タケシが居る席では、この話をしたことが一度もなかった。

銀は、隣で洗い物をしている娘に、それ以上何も訊かなかった。

「ねえ、タケちゃん……」

食器を洗いながら俯く陽子が、手を休めることなくタケシの名を呼んだ。

「ん、なんだ?」

その呼び声に、コーヒーを飲もうとしていたタケシの手が止まる。

銀と雪絵は、グラスを磨いたり、テーブルを拭きながら、娘の話に耳をすましていた。

「私がね、もしもね、誰かと私が結婚するって言ったら……、タケちゃんどうする」

耳をすましていた二人が、「いっちゃったよ!」といった感じの表情で娘を見ていた。

そして、三人が、タケシの答えを待つように彼の顔を見る。

「だ、誰と、誰と結婚するんだよ……」

明らかに戸惑いを見せるタケシ。珍しく狼狽していた。

昔の話であるが、陽子がタケシに、「お嫁さんになる」と言っていたことがあった。

そんな言葉を、タケシに面と向かって陽子が言っていたのだ。

しかし、陽子が別の人物と結婚すると言ったのは、これがはじめてであった。

テレビに映るアイドルにすら好きだとか、好みだとか言ったことのない陽子がだ。

「タケちゃんの知らない人だよ」

戸惑いを見せたタケシに陽子が笑顔で答えた。若干の曇りが見える笑顔である。

でも、タケシの戸惑う顔を見て、陽子は嬉しかった。

テーブルを拭く手を休めた雪絵が、そのテーブル席に腰を下ろして片肘をテーブルにつくと、その上に顎を置く。そして、悪戯ぽい笑みで、タケシに問いかけた。

「どうするの、タケシ君は？」

この場で、決着を急ぐような質問だった。

タケシを追求するような妻に、夫の銀が、溜息を付いてタケシの顔を見た。

いつものタケシと違って、追い詰められた表情をしていた。雪絵が追求したことで、陽子の話にタケシの中で信憑性が生まれたようだ。

「俺が、どうこう言う話じゃあねえ……」

戸惑った表情から、いつもの傲慢なまでの凛々しい表情に戻ったタケシが、そう言いながらコーヒーを啜った。

よりによって最悪な回答だと、桜木夫妻があきれた表情で溜息をついた。

「そうなんだ……」

皿洗いを続ける陽子の表情が、また曇る。その表情に、黒雲のような悲しさが混ざっていた。今にも瞳から雨が降りそうだった。

「俺は、仕事をしたことがない。バイトしかしたことがない。たいした学もない」

一人で話始めたタケシの台詞に、俯いて皿を洗っていた陽子が頭をあげた。桜木夫妻も、何を言い始めるのかとタケシのほうを見た。

「強くなりたい。その為だけに、普通の人がやらねばならないことを拒否して、普通の人が望むものを捨ててきた。おそらくこれからもだ……」

タケシの言葉に、陽子が俯く。

タケシが言いたいことは、彼の人生に『女』は要らないと言う意味に聞こえた。

その言葉は、自分に『彼女』は要らないと聞こえた。

タケシに、女は、自分は、私は、彼女は、陽子は、要らないと聞こえた。

心が締め付けられる。

小さな頃から、タケシと一緒だった。

幼馴染の好きから、恋する好きに変わった。

タケシに恋心を抱いて十年近く経つ。

タケシが、隣のアパートに引っ越して来て、5年近く経つ。その間、異常なまでに、陽子は尽くしてきた。

タケシも、そんな陽子を拒否しなかった。

陽子は、昔からタケシを好きだと言い続けてきた。

自分の思いは、タケシに届いていると思っていた。

いつかは、自分の願いが叶うと思っていた。

だが、タケシの台詞が、それを無視しているように聞こえた。

心が締め付けられる。

もう、潰れそうだ。

泣きたい。

「強くなる、その為に全てを捨てて、武に人生を費やしてきた」

泣きそうな陽子の表情を見ることなく、タケシが話を続ける。

「陽子、お前も、そうなんだろ?」

俯いていた陽子が顔をあげてタケシの顔を見た。

タケシも陽子の顔を見ていた。

二人の視線が合う。

陽子の顔は、悲しそうだった。泣きそうだった。

タケシが、武の為に、全てを捨てて来たように、陽子もタケシの為に、全てを捨てて尽くしてきた。

「じいちゃんは、「『武』とは、全てを守る力」と言っていたが、俺は違う」

タケシは、いつものように力強い視線で陽子を見ていた。

「俺の『武』とは、全てを倒す力」

タケシの口元が笑う。

まるで、傲慢な破壊神のような笑み。

「どこのどいつか分からねえが、そいつは俺がぶちのめす。陽子、お前はいつも俺の後ろに立っていろ」

そのタケシの言葉に、空気が一転した。

陽子の顔が、赤く染まる。そして微笑んだ。

「俺は、誰かを真似るなんてことはできない。じいちゃんの様に、人を守れない。だから、邪魔なものは、全てぶちのめす。そうやっ

て進んでいく。そうやってじいちゃんも超えていく」

タケシの言葉の中にはなかったが、陽子には分かった。

タケシは、自分の後ろから付いてきてくれと言っている。そして、支えてくれと言っている。陽子には、そう言っているように聴こえた。

それは、今まで、陽子がやってきたことと変わらない。

タケシが、今まで、歩んできた方法と変わらない。

その強くなる方法に、ちゃんと自分の存在があったのだ。

「ありがとう、タケちゃん」

陽子の表情が、いつものような明るいものに戻っていた。雨雲は、雨を降らすことなく消えていた。

カウンターの中に居た銀が、いつの間にかテーブル席に居た妻の隣に立っていた。そして、雪絵に耳打ちをした。

「若いのに不器用だね」

「いいじゃない、若いんだから」

夫婦は、娘達をあきれたような笑みで眺めていた。

昔の自分たちと同じように、父の、祖父の希望に背こうとしている若い二人。

だが、タケシと陽子は、自分たちとは違った背きかたをしようとしていた。

駆け落ちをした二人とは異なり。逃げずに正面から戦うつもりであった。

少々暴力的ではあるが、タケシらしいやりかただと銀も雪絵も思った。

それに、娘がついていくのだ。若干の心配が残るが、やはりこの二人は、お似合いなのかもしれないと思っていた。

「孫の顔が見れるのも近いかもね、あなた」

雪絵が、満面の笑みで、隣に立つ銀に言った。

その声は、おそらくタケシと陽子にも聞こえていただろう。

陽子は、顔を赤く染め、俯くように皿洗いを再開していた。

タケシは、三人から顔を隠すかのように首を真横に曲げて、そっぽを向く。

「そうだね、母さん」

明るい未来を想像しつつ銀が、和やかな笑みで妻に答えた。

<　十二長老・前編　>

既に時間は昼の一時を過ぎていた。

いつものように運転手の帽子を被り、白い手袋をはめて、真っ赤な口紅にクールなサングラスを掛けた轟朧が、Ｙシャツのボタンが弾け飛びそうな大きな胸を両腕で挟みながら車のハンドルを握っていた。

運転しているのは、黒いリムジン。少々人里から離れた山沿いの国道を走っていた。もう、二十分ぐらい、対向車とはすれ違っていない。

高く被い茂った木々の隙間から太陽の光が、国道のアスファルトに優しく降り注いでいる。

そのアスファルトの道に、ワイヤーのガードレールが長く何処までも寄り添う様に続いていた。そして、ワイヤーのガードレールに蔓のような雑草が、容赦なく強引なまでに絡み付いている。

アスファルトの端には、雑草や落ちた枯葉がつもっていた。その枯葉が、走るリムジンに煽られ揺れて行く。

青々とした新鮮な空気が流れる山中の風景。

鳥の囀りや、風が草木を揺らす音が静かに聞こえていた。気の利かない人工的な音は、リムジンが出す音しか響いていない。

そんなのどかな山道を、朧が運転するリムジンが軽快に走っていた。

リムジンの後部座席には、紋付袴の油義裕次郎と、黒いスーツに野暮ったいネクタイを締めた八尾弦徳が座っている。

現在、三人は、京都の東山区に来ていた。観光名所の清水寺がある場所である。

京都には、夜のうちに到着して、前もって予約を入れといたホテルに一泊した。

そのホテルを昼食後に出発した三人。

朧が運転するリムジンは、山中にある約束の会場へと向かっている最中だった。

山沿いの道を走るリムジンの窓から、向かえの山沿いにある大きな屋敷が見えてきた。和風の屋敷だ。その屋敷の瓦屋根を後部座席の八尾が、懐かしそうに眺めていた。

それに、油義が気付く。

「八尾君、懐かしいですか?」

「ええ、ここに帰ってくるのも百年ぶりですからね。初の長老会議に参加すると言うよりも、里帰りした気分ですよ」

「ならば、緊張してはいないですね」

「そうでもないですよ。流石に長老の方々にお会いになるのは、緊張します」

八尾が、硬い笑みで油儀に言う。

「あらら～ん、もっと肝っ玉が座っていると思ったのにぃ～」

八尾と油義の会話に、運転席の朧が、ちゃかすように割り込む。

「僕は半妖ですからね。長老達の中にも、僕を嫌っている方々も居ますし」

「それだとさぁ～、ちょっとまずいかもよぉ～」

「何故です？」

八尾は、ルームミラーを見ながら朧に質問した。そのルームミラーに、朧の赤い唇の紅が映っていた。

「あのねぇ～、このペースで行くとねぇ～、多分遅刻すると思うのよ～」

後部座席の二人は、朧の言葉に自分の時計を見る。

八尾は、スーツの袖を少し捲ると腕時計を見た。油義は、懐から金の懐中時計を取り出して、頭を左右に揺らしながら時間を確認した。

「まあ、大丈夫でしょう。妖怪は、昔から時間にルーズなのが相場ですから」

懐中時計の蓋を閉めた油義が、溜息混じりでそう言った。

暫くすると、三人が乗ったリムジンは、反対側の山にあった屋敷のふもとに到着した。

アスファルトに白いラインが惹かれており、五十台ぐらい車が止められそうな広い駐車場に、リムジンが入っていく。

朧は、その空いている一角に、リムジンを止めた。他にも二十台ぐらいの高級車が止まっている。

八尾と油義が車から降りると駐車場から出て行き、朧一人が車に残った。

駐車場を出て直ぐに、上へと登る石畳の階段が、被い茂る山の木々の隙間から見えてくる。

「変わらないな……。変わったのは、駐車場ができたくらいですかね」

階段を登りながら八尾が言う。

「あいかわらずじゃ。ワシのような老体には、この階段はキツイ」

「はは」

油義の愚痴に、八尾が小さく笑った。その笑みには、まだ、緊張の色が残っていた。

階段を上がり終えた二人が、木々に囲まれた細い道を歩いて奥へと進んでいく。

米粒サイズの細かい砂利が敷き詰められた細い道。両脇の木々と道を隔てるのは、膝の高さ程度しかない竹の柵のみだった。しかし、それが古風な景色を生み出し、和みを感じさせていた。

しばらく歩いた二人の前に、木々に囲まれた屋敷の玄関が見えてきた。

和風の玄関。小さいが落ち着きのある伝統的な日本細工で飾られた、しっそな玄関だった。

八尾が玄関の扉をガラガラと音を立てて開くと、屋敷の中に踏み込んで行く。すると一人の女中が、玄関の隅で正座をしながら頭を下げて出迎えていた。

「お久しぶりです、珠代さん」

その女中を見て八尾が頭を下げると、今度は女中が頭を上げて笑顔を見せる。

「立派に成られましたね、弦徳様」

頭を上げた女中の笑みは、八尾よりも若い表情に見えた。年の頃は十代だが、落ち着きのある表情の娘だった。

そんな優しい感じがする女中が、二人を出迎える。

この女中は、八尾が幼少時代に、この屋敷へ始めて来た頃から使

えている人物だった。見た目は若いが、実際の年齢だけなら八尾よりも年を取っている。

そしてこの珠代と言う女中が、八尾の初恋の相手であった。だが、八尾が、それを口に出したことは一度もなかった。片思いである。

春婆怒に、母の九尾双葉が討ち取られたあと、八尾が身を寄せていたのが、この屋敷であった。

八尾は、ここで自分が半妖と知り、ここで幼少時代を過ごし、ここで妖術を習い、ここで剣術の基本を得とくし、ここで道理を学んだ。

そして、人間としての名前、森一郎の他に、妖怪としての名前、一尾弦徳を名乗ったのである。

あれから五百年。今は、八尾弦徳と名乗っていた。

珠代は、この屋敷内で半妖の弦徳少年を、差別無くせっしてくれた数少ない一人であった。

八尾も幼少時代は、この珠代に随分と助けられた記憶が多い。

優しく暖かい人だった。孤独な幼い少年が、密かに思いを寄せても無理がなかったのかもしれない。

しかし、珠代の正体は、『うぶめ』と呼ばれる妖怪である。

赤子などに母性本能を見せる妖怪なのだ。幼い弦徳だけが、特別ではない。

出迎えの珠代が立ち上がると、二人を招く仕草を見せる。

「弦徳様、油義様、大広間の方で、既に他の長老殿がお待ちです」

「早いね、皆さん」

草履を脱ぎながら油義が呟いた。

「お二人が、最後でございます」

「「えっ！」」

八尾と油義の声が重なった。そして、車内での朧の言葉を思い出した八尾の顔が、緊張を高めた。

二人は珠代を先頭に、屋敷の奥へと進んでいく。そして、山沿いの景色が一望できる廊下から続く大広間へと通された。

廊下の左手は、大自然の景色が広がり、絶景となって見えていた。右手は、広い大広間だった。六十畳はありそうな大広間だ。

そこに並ぶ十一枚の赤い座布団と、二枚の紫の座布団。その座布団に座る複数の人物達が部屋には居た。

部屋の正面に一つ、その両脇に並ぶ二列の赤い座布団が五枚ずつ。その十一枚の赤い座布団の果てに、八尾と油儀の二人の物と思われる末席の紫色の座布団が二つ並んでいた。

「おそいな、油義の」

そう言ったのは、ひとり正面の座布団に座っている老人だった。

<　十二長老・中編　>

後頭部が異様に長く、鋭い鷹のような瞳をした老人。胸に家紋が入った羽織袴を着て、手には古風な煙管を持ち煙草をふかしている。

体格は、あまり大きくない、むしろ小さい。しかし、強烈なまでの威圧感を持った老人だった。

妖怪連合本部長、一番長老の『ぬらりひょん』である。

そして、ぬらりひょんの左右に並ぶ座布団には、そうそうたる大妖怪の長老達が並んでいた。

ぬらりひょんから見て右列の先頭に、白いスーツに赤いネクタイの男が、礼儀正しく正座をしている。

年の頃は三十ぐらいの外見、やや長めの黒髪をポマードでオールバックに固め、インテリ風の細い眼鏡を掛けている。

一見、極道にも見えた。左頬に、派手に目立つ刀傷があり、それがなおのこと、かたぎのイメージから男を遠ざけている。

そして男は、ぬらりひょんにも負けないほどの鋭い眼差しをしていたが、それよりも大きく長い鼻が印象的だった。

二番長老の『大天狗』である。

その大天狗の正面、ぬらりひょんの左側。そこには、この場に居る中で一番の大柄な男が胡坐をかいて、他の者達よりも大きな特注

の座布団に座っていた。

身長は、二メートル以上ありそうな大男。その姿は、まるで樹齢何百年も生きた御神木の様に大きく、筆のような長い黒髭を伸ばし、坊主のようにつるつるな頭をしていた。

否、坊主のようではなく、本物の坊主だった。

紫色の僧着に、金色の袈裟を下げている。しかし、その顔には、瞳が一つしか無かった。片目が潰れて一つしかないわけではない、眉間の真ん中に、大きな瞳が一つギョロリとあった。

三番長老の『見上入道』である。

「いいから、とっとと据わりやがれ、このうすのろめが」

太く威圧的な声で、その見上入道が因縁でもつけるかのように、遅れてきた二人に言った。

「すみません、皆様がこんなに早く集まっているとは……」

すまなそうな台詞を語りながら油義が大広間の中に入っていく。

長老全員が集うことすら少ない長老会議で、全員が時間を守ることは、奇跡に近い。

油儀は、その奇跡に若干の驚きを感じていた。

「まあ、そう凄まなくてもいいんじゃなくて？　相変わらず弦徳には厳しいことね」

大天狗の隣に座る女性が、冷えた声で見上入道に言った。

座った常態でも銀色の長いストレートヘアーが畳に付く彼女は、白い着物に白い帯を巻いて、静かに正座をしていた。

顔の色は隙とおるほどに白く、氷の様に美しい。その彼女の肩には、高級そうなミンクのコートが、マントを羽織るかの様に掛けられていた。

四番長老の『雪女』だ。

「ふっ、あいつは女にもてるから気に要らねえな～」

純白のイメージが強い彼女に言われて、見上入道がそっぽを向いて愚痴る。

八尾と油義の二人が、ぬらりひょんの遠い向かえに並ぶ二つの紫色の座布団に座った。

この部屋に、十三の座布団が並ぶのは、初めてのことだった。

「長老でもない者が、我々長老よりも遅く現れるとはのぉ、笑ってしまうわい」

再び愚痴のような嫌味を言ったのは、見上入道ではなく、その横に座っている白髪の老人だった。

薄汚れた白い着物を羽織、伸ばし放題のぼさぼさな白髪を頭のてっぺんで僅かに結んだ顔中皺だらけの老人。

座る座布団の横には、木の根っこで作った長い杖と、漆塗りの黒茶色のひょうたんを一つ置いていた。

五番長老の『井戸仙人』だ。

井戸仙人の嫌味な言葉に、八尾と油義以外に顔を顰める人物が居た。

見上入道ほどではないが、大きな体格をした老人。

老眼鏡のような小さな丸眼鏡を鼻に引っ掛け、口にはたんまりとした髭を蓄え、腹にもたんまりとした脂肪を蓄えていた。

衣類は、旅館の浴衣のような簡単な物を羽織、井戸仙人の持っている杖にも見劣りしない、立派な木の根の杖を持っていた。

この太った大柄の老人は、八尾達が来る十分前に到着したのである。そう、この人物も遅刻をして来たのである。

その為、井戸仙人の言葉に顔を歪めたのであった。

この大柄の老人は、八百八狸の長、六番長老の『隠神刑部狸（いぬがみぎょうぶだぬき）』である。

そして、井戸仙人の横に並ぶ二人の子供が、遅れてきた二人を見ながらクスクスと笑っていた。

年の頃は、七歳か八歳にしか見えない二人の子供達。男の子と女の子だ。それでもこの席に居るのだ、彼らは、れっきとした名高い

妖怪変化であろう。

男の子の方は、黒縁の眼鏡を掛け、ブレサーに蝶ネクタイ、そして半ズボンを履いた、少し生意気そうな少年である。

女の子の方は、茶髪のボブヘヤーに赤いワンピースを着た、クールで大人びた感じの表情をした少女だった。

もしも、この子供たちが、人間の小学校に通っているのならば、クラスメイトにちびっ子探偵団の友達が三人ほどいそうであった。

二人の名前は『前鬼』と『後鬼』。七番長老と八番長老の二人である。

その童の姿をした二人の長老の向かえにある二つの座布団が空席になっていた。

だが、一つの座布団の上には、小型のスピーカーが置かれ、それを跨ぐように小型の三脚が建てられていた。

三脚の上には、ハンディーカムのカメラが置かれ、時折小さな機械音をたてながら自動で首を振るかの如く左右に動いていた。

そのハンディーカムとスピーカーから伸びる配線が、部屋の隅に置かれた幾つかの機械へと繋がれていた。

機械の前にはヘッドホーンを付けた半漁人の妖怪が、「海が好き！」と背中に書かれたTシャツを着て、何やら機械のセッティングをしていた。

彼は、九番長老『うみぼうず』の子分である。

海から地上に上陸できない親分に代わって、これらの機械で通信をしている様子だった。

そのカメラなどの器具の横にある一つの空席。

今日は、長老全員が出席しているはずなのに、その席は空席に見えた。

だが、座布団には、誰かがつい先ほどまで座っていたかのように、沈んだ跡が残っていた。

否、座っていた風に見えただけである。そこには何かが確かに座っている。時折、その窪みの形が変わる。座っている何かが見えないだけだ。

その空のように見える座布団に座っているのは、十番長老『透明人間』、名前は山田太郎（仮）だった。

嫌味っぽい声が、大広間に響く。

「わざわざ、我々十一の長老が、九尾双葉様のあとを五百年ぶりに継ぐ君のために集まったんだぞ。それが、主役の君が遅刻とは、二世長老の先輩として僕は、とても情けないよ。これだから半妖は困る」

アメリカ人のようにオーバーアクションを見せて語る男。年の頃は、二十歳半ばに見えた。

スーツ姿だが、まるでホストと変わらない派手な風貌をしていた。
首には、ちゃらちゃらした金のネックレスをぶら下げ、耳や口や鼻にピアスを光らせている。
両手首にはブレスレットや高額の時計をしており、十本の指には、びっしりと様々なデザインの指輪をはめていた。一言で収めるなら、チャライ男と言えばいいだろうか。
だが、彼の亡くなった父親は、有名な鬼であった。その名は、酒天童子。
彼は、その息子で長老の席を継いだ二世妖怪、『鬼童丸』である。
彼が言うとおり、親の後を継ぐと言うてんでは、八尾の先輩にあたる存在だ。
その鬼童丸が、十一番長老である。
だが彼は、半妖の八尾と違い、まじりけの無い純血の鬼だった。
そのことを嫌味のように言う。
しかし、チャライ外見とは裏腹に、これでもできる妖怪である。
剣術、幻術、戦術は、見た目のようには侮れない、
この十一名の長老達に、八尾と油義を加えて、これから長老会議が始まろうとしていた。
長老達十一名が全員揃うのは、かなり珍しい。

妖怪連合が始めて結成された時と、酒天童子が亡くなり息子の鬼童丸が、長老に就任した時以来だ。あとは、八尾の母、九尾双葉が亡くなった時ぐらいだろう。

十三名の大妖怪が、本日、妖怪連合本部に集った。

「では、これより長老会議を始める……」

一番長老のぬらりひょんが口火を切る。

八尾の顔から緊張の色が消えないまま、長老会議が始まった。

<　十二長老・後編　>

十二長老による会議が始まった。

人里から離れた山沿いにある古い屋敷。その屋敷の六十畳もある大広間。そこで十三匹の妖怪たちによって開かれる妖怪の為の妖怪達の会議。人は居ない。

ここに集まった妖怪たちは、大物の中の大物たちで、戦力、権力共に、名高い大妖怪たちであった。

「では、皆の衆、これより長老会議を始める」

一番長老ぬらりひょんの声に、他の者達が静まりかえる。

威厳の感じられる、渋く、鋭い声だった。

「今回の会議の課題は、最近の不景気からきたる連合運営の経済難と、資金の無駄使いに関しての話し合いだ。それと、虎野町支部長老代行あぶらすましの代行役終了に続き、八尾弦徳の虎野町支部の長老就任、及び十二番長老就任に関して、今日明日の二日間をかけて話し合いたいと思う」

ぬらしひょんの言葉のあと、六十畳もある広間には、山沿いから吹き込む静かな空気だけが流れこんできていた。

沈黙である。

その場に居る長老達は、瞑想するかの如く目を瞑っているか、詰

まらなそうにそっぽを向いて、まるで会議の課題に興味がないような仕草を見せている。

「まあ、あれだ、銭勘定の面倒な話わよ、明日に回して、今日は皆の衆が期待してきた弦徳の長老就任に関して話し合おうや」

急にぬらりひょんの口調が、硬い口調から軟らかい口調に変わった。

その変化に、長老たちの空気が少し和んだ感じが弦徳にも伝わってきた。

「弦徳の十二番長老就任に関して、何か意見のある者は居るか？」

その言葉に、すぐさま意見を述べたのは、四番長老の雪女だった。

純白の彼女は、両目を軟らかく瞑りながら、やや俯いた表情で話し始める。

「わたくしは賛成であります。そもそも双葉姉様のあとを継ぐのは弦徳の使命。その為、今まで十二長老の一席は、空席のまま五百年間も空いていたのですから」

雪女の言うとおり八尾弦徳の母である九尾双葉が、春婆怒に倒されて五百年、十二あるはずの長老の席が一つ空いたままだった。

それは、弦徳の為というよりも、九尾双葉の意思を、他の長老たちが長老メンバー内に残したいという、強い願いがあったからだろう。

弦徳の母、九尾双葉の存在は、死して五百年たっても影響力が大きい。それが、長老たちから弦徳には、プレッシャーの様に伝わり、緊張感を強めさせていた。

雪女の話のあとに、巨大な御神木のような巨体の三番長老見上入道が話しを続ける。

「しかしそれは、弦徳が、虎野町支部を率いるだけの大妖怪に成長したらの話だ。今まだ、八尾と名乗る弦徳に、その資格があるのか、おい？」

「見上殿の言うとおりじゃ。まだ九尾を名乗らぬ若造が、我らと同等の役職に就いて良いものかえ？」

見上入道の言葉のあとに続いたのは、その巨体の横に座っている枯れ木のような五番長老の井戸仙人だった。

見上入道と井戸仙人の向かえに座る二番長老の大天狗が、極道の如く威圧的な表情をして、二人の長老の疑問に答えた。

「長老として一支部を率いるだけの信頼と人脈、そして技量、八尾でも弦徳は、既にそれらを持っていると私は見ています」

こわもての声が、大広間に静かに響く。

鋭い眼光で大天狗は二人の長老を睨むが、別に敵意があってのことではない、これが彼の素の眼差しなのだ。

「本当ですかね～」

チャラチャラしたホストのような風貌の十一番長老鬼童丸が、大天狗のほうではなく、話題となっている八尾弦徳を見ながら言う。

その表情は、弦徳を軽視するものだった。

弦徳は、その鬼童丸のなめた表情を無視して、正面に居るぬらりひょんのほうを真っ直ぐに見ていた。

「鬼童丸君、キミは弦徳君を過小評価していないかね？」

タプタプした贅肉と口髭の隙間から太い声でそう言ったのは、六番長老の隠神刑部狸である。

鬼童丸の態度に、もの言う言葉使いの刑部狸。真ん丸い顔で笑みを作っていたが、その太った巨漢からは、威嚇にも似たオーラがうっすらと出ていた。

だが、それに気付いている鬼童丸は、尚もふざけた態度を取り続ける。

「刑部さんまで、そんなことを言いますか」

鬼童丸は、片手で両目を隠しながら上を向くと、呆れたような溜息をわざとらしく付いて見せた。

その鬼童丸を睨みながらぬらりひょんが言った。

「おそらく鬼童丸、御主と弦徳が、戦争をしたのならばだ、御主に弦徳が勝つことはありえんじゃろう」

ぬらりひょんの台詞に鬼童丸が、当然といった表情でニタつく。

「しかしだ、一騎打ちとなれば、御主と弦徳は、ほぼ五分だ」

ニタついていた鬼童丸の表情が、付け足されたぬらりひょんの台詞に、イラつきを見せる表情へと変わる。

「あはは、それは、弦徳お兄ちゃんが、九尾に成長したら、鬼童丸お兄ちゃんだと、絶対にかなわなくなるってことだね～」

「そうね、そうなるかしら」

七番長老の前鬼があどけない口調で未来を推理すると、それに八番長老の後鬼がクールに相槌を入れる。

そんなように無垢を演じる少年少女を鬼童丸が、まさに鬼の表情で睨んでいた。

「ダガ、弦徳ガ、長老ノ座ヲ継グノニ、条件ガマダアッタデハナイカ」

カメラがセッティングされた三脚の下にある座布団、そこに置かれたスピーカーから九番長老うみぼうずの耳障りで奇怪な声が意見となって飛び出る。

「双葉姉さんの仇、春婆怒ですね……」

三脚とスピーカーが置かれた席の隣、空席に見える座布団の上から、そう言う声だけが聞こえてくる。

十番長老の透明人間、山田太郎（仮）の声だ。

「それだそれ。春婆怒が虎野町支部の縄張りを出ずに、弦徳の奴が仇を取ると言うから、これまでの五百年、我々は手を出さなかったんだ。いい加減に決着を付けやがれ」

見上入道が、大きな一つ目を見開きながら弦徳を睨み、強目の声を出して言う。

「もしも春婆怒の奴が、虎野町から一歩でも出れば、ワシの手で呪い殺してやったものを……」

そう言いながら感情をあらわにする井戸仙人が、顔の皺を吊り上げ、何本か前歯の抜けた口から唾を飛ばしていた。

「それは、皆が同感。掟がなければ私もそうしていたわい」

隠神刑部狸も、大きく出っ張った腹の肉を摩りながら苦い表情をして言う。

妖怪連合の掟の一つに、このようなものがある。

九十九神は、その土地の者が倒し、余所の土地者は、その土地の者が助太刀を願わなければ、手を出してはならない。

遥か昔に、長老会議で決めた掟である。

掟は絶対。破るわけにはいかない。変えることも許されない。

だからこそ意味がある。

例え長老の一人が亡くなっていてもだ。

「てかさー、やっぱり母親の仇も取れていない奴が、長老の座に継いでいいのかよ」

弦徳にあてつけるような鬼童丸の言葉。

しかし、弦徳は、真っ直ぐにぬらりひょんを見ていた。一切口を開かない。

その弦徳に代わって、隣の油儀が口を開く。

「それにつきまして、進展がありましたのでご報告が」

油儀の言葉に、十一名の長老の視線が集まる。

「このたび春婆怒の使い手になった男と話がつきまして、弦徳様と春婆怒との一騎打ちによる決闘が確定しました」

「ほ～～！」

「一騎打ちとな！？」

長老達がざわめく。

「面白いことを言い出したな、油儀の～」

刺すような視線で油儀を見るぬらりひょんが言う。しかし、口元と瞳の奥が僅かに笑っていた。

「はい、正直言いまして、今回の展開に関しては、私も驚いています」

「その決闘の話し、春婆怒の使い手は信用できるのか」

大天狗も、鋭い視線で油儀に問う。

「何かの罠じゃあ、あるめ～な～」

見上入道も、一つ目で睨みながら問う。

「逃げるための口実だったりして」

笑顔で前鬼が言った。

「そう言うのもあるかもね」

後鬼が、それにクールな口調で続く。

人を喰らい、妖怪を喰らい、同族を喰らう九十九神。妖怪からから見て、信用できなくて当然である。

「あの男は、信用できます！」

力強い声だった。

初めて弦徳が口を開いた。

誠実な口調で、発言に自信が強く感じられた。

ここに来て初めて意見を口にした弦徳に、長老達の視線が集まる。

その長老たちの瞳に映る八尾弦徳の姿が、生前の九尾双葉の姿に重なって見えた。僅か一言で、八尾弦徳は、九尾の狐の血を引く妖怪だと、長老たちに思い出させたのである。

「根拠は？」

ぬらりひょんが問う。

「そう言う男の話し方でした」

弦徳は、真っ直ぐにぬらりひょんの鋭い刃物のような目を見て言葉を返す。

「なんだよそれ」

弦徳の近くに座る鬼童丸が、呆れた仕草混じりのジェスチャーと一緒に呟いた。

「だが、面白い話だね」

隠神刑部狸が、自分の顎の肉を摩りながら半笑いの表情で言った。

鬼童丸は、呆れたかのような台詞を言ったが、刑部や他の長老たちは、弦徳の返した理由に納得したかのような表情を見せている。

「わたくしは、弦徳がそう言うのならば、信じてもいいと思いますわ」

すましたまま雪女が言う。彼女はいつでも弦徳寄りのようだ。

「私もだ。弦徳が、そう見る人物ならば、間違いなく武人の血が流れているのだろう」

武闘派の大天狗も、弦徳の言葉を信用した様子だった。

この男にも、同じような熱い雄の血が流れているのだろう。

「だが、その手のタイプは、真っ直ぐ故に強い。過去の春婆怒の使い手、十六夜剣兵もそうだったように……」

隠神刑部狸が口に出した名前。

それは、過去に春婆怒と組、九尾双葉を倒した使い手の名前だった。

そして、春婆怒村の言い伝えに出てくる癒しの侍の名前であり、春婆怒が愛したと言われた男の名である。

春婆怒村では、神技を使う癒しの侍と云われ崇められていたが、その以前は、戦場で千の兵士を切り捨てた鬼神とも呼ばれていた。

妖怪界でも、春婆怒と共に多くの妖怪を切ったことでも名が知れている。

「十六夜剣兵か……」

大天狗が、頬の刀傷を撫でる。

二番長老の大天狗、彼も過去に春婆怒と戦ったことがあった。

決着は付かなかったが、頬の傷は、その時の思い出と一緒に刻まれたものである。

そして、その時の春婆怒の使い手が、十六夜剣兵と名乗る侍だった。

「あれは、人とは思えない強さを持った男だったな……。人のまま、鬼になった男よ」

思い出すように大天狗が言葉を溢した。その鋭い瞳とは裏腹に、口元が僅かに笑っていた。珍しい光景である。この大天狗は、真面目なあまりシャレの一つも通じない男だ。その男の笑み。きわめてレアな光景だった。

「今回の使い手は、あの十六夜剣兵の再来か？」

ぬらりひょんが問うが、八尾は首を左右に振ったあとに言葉を返す。

「いいえ、心意気は似ていますが別人です。外見も、戦い方も、考えすら似ていません」

「ならば八尾弦徳、御主は、その男に、春婆怒に勝てるのか？」

「もちろんです！」

「九尾を待たずにかね？」

弦徳とぬらりひょんの言葉と視線が、十名の長老達の前で、撃ち合う様にすれ違い交差する。

「勝算無くして、決闘を挑むほど、私は愚かではありません」

言葉を返す弦徳。

十一名の長老達が、自信に溢れて凛々しく引き締まった表情の弦徳を、じっと見ていた。

しかし、弦徳の言葉に嘘があることを、数人の長老達は知っている。

この八尾弦徳という男は、勝算がなくとも、時に、名誉や、誇りや、義理人情やら、男の意地やらを懸けて戦う人物であることを。

ぬらりひょんが、手にある煙管を一度ふかす。

僅かな沈黙が流れ、その沈黙の中に、ぬらりひょんが煙管から吸い込んだ煙を吐き捨てる。

「ならば皆の衆、こんなのはどうだろう?」

ぬらりひょんが提案を出す。

そして、皆がぬらりひょんを見た。

「弦徳の十二番長老就任の件。この決闘が済んでからということでは?」

「道理が、とおってますな」

「ですな」

「問題ないかと」

「いいんじゃあんくて」

「私ハ、ソレデイイト思ウ」

「けっ」

各長老の台詞に混ざって、鬼童丸の吐き捨てるような一言があった。

「異論はなさそうだな」

とばらく他の長老達の言葉を聞いていた一番長老が、そう言って締めくくった。

「では、今日の会議はこれまでだ、残りの話し合いは明日と言うことで」

ぬらりひょんが、そう言って頭を下げると、他の妖怪達も続いて頭を下げる。こうして長老が全員集合した会議の一日目が終わりを告げた。

<　病室の罠　>

さほど交通の激しい大通りではなかった。

やや古めの町並みが続く景色、その大通りをバスがのどかに走っていく。

時間は、昼時をやや少し過ぎた頃であった。

天気も良く、晴天の日差しが優しく住宅街の屋根に降り注いでいた。

バスの窓から住宅街の向こうにある木造モルタル三階の建物が高台に見えてくると、まばらなに居るお客の一人が、綺麗な指先でバスの停車ボタンを押した。

バスのスピーカーから「まもなくバスが停車します」と、女性の声でアナウンスが聴こえて来る。

そしてバスは、まもなくして見えてきたバス停の前でゆっくりと停車した。

バスの前方の扉が開くと、料金の支払いを小銭で済ませた女性が一人降りてくる。

薄いピンクのシフォンワンピースを着た胸のやたらと大きな女性。

バスから降りるさいも、そのバストが魅惑的に弾んでいた。

彼女は、肩から遊び心を感じさせるおしゃれなブランドもののバ

ックを提げ、空から清々しく光を降り注がせている太陽にも負けないぐらいの笑みで、目の前に伸びる坂道を綺麗な瞳で見上げていた。

Fカップはありそうな大きな胸のわりには、その表情は幼く童顔に見えた。

懐かしさが感じられる住宅が両脇に並ぶ坂道。その頂上に見える三階建ての建物。古くから、この辺の住民に愛され続けている総合病院である。

バスから降りた彼女は、坂道を軽やかな足取りで上って行く。

優しい風が吹くと、彼女の背中まで伸ばした長い黒髪が美しく揺れていた。

そして、坂を上る彼女の可憐な美脚が、アスファルトの坂を一歩一歩踏みしめながら蹴るたびに、男たちのロマンを知らず知らずに詰め込んだ彼女の豊満な巨乳を揺らしていた。

彼女の名前は、猫田珠美である。

妖怪連合の調査班に所属している猫田龍信と猫田虎二の妹で、普段は兄の経営している探偵事務所の事務職を手伝っていた。

彼女自体も妖怪連合に所属しているが、兄たちのように、妖怪連合の役職などには就いていない。

そして現在、双子の兄である虎二が、珠美が向かっている坂の上の病院に、両腕骨折で入院して居る。彼女は、その双子の兄の見舞いに向かっている最中であった。

探偵事務所の方は、長男の龍信が、妖怪連合調査班の仕事が忙しく、次男の虎二も動けないため休業になっていた。

そんな理由で珠美は、暇を持てあまし、毎日のように虎二の病室を見舞いに訪れていた。

「こんにちは、おばあちゃん」

胸を弾ませながら坂道を歩く珠美が、途中にある民家の玄関を箒で掃除している老婆に、明るく声をかけた。

「あらあら、こんにちは」

声を掛けられた老婆も優しい笑みを作ると、無垢な笑顔の珠美に挨拶を返してくる。和やかな光景だ。

珠美は人懐っこいタイプな面もあり、好かれ易いタイプでもある。

人を疑わない純朴な態度が相手に伝わりやすく、それが和みにも似た温もりを相手に与えてくれる。

人に好かれる能力という点では、カリスマ性の全てを、双子の虎二から奪い取って生まれてきたと思えるほどであった。

その珠美が、長い坂道をあがりきって病院の正門前に到着した。

芝生の間にレンガ造りの道が、真っ直ぐに病院の正面玄関へと伸びていく。

その途中に丸い大きな花壇があり、ぐるりと回ると、救急車などがUターンしなくても出て行ける形になっていた。

珠美が木造モルタル建ての病院内に入っていく。

そして直ぐにロビーの奥にある階段を上って行き、三階の妖怪専用の病室が並ぶフロアーへと進んでいった。

この病院は、一般的に知られていないが、妖怪専用の偽造病院でもある。

その為、妖怪達専用の病室エリアまでが設けられていた。

珠美の双子の兄である妖怪猫又の猫田虎二は、このエリアに個室を借りていた。珠美は、その病室を真っ直ぐ目指して軟らかい笑顔のまま歩いていく。

天野太陽と書かれたプレートがある個室の病室前を過ぎた珠美は、随分と通いなれてきた猫田虎二と書かれた病室の前に立つ。

双子の兄の病室だが、珠美は礼儀正しくノックをした。

しばらく待ったが中から返事が返ってくることはなかった。

珠美は、いつものように兄が昼寝でもしているのだろうと思い、ゆっくりとドアを開き室内に入っていった。

兄が寝ているベットの向こうで、開いた窓のカーテンが、ゆらゆらと風に揺れている。

静かな病室に、サラサラとした爽やかな風が、ファンタジーの妖精が尋ねて来たかのように吹きこんできていた。

珠美には、そんなロマンチックな光景に見えている。まだまだ夢見がちな年頃なのだ。

珠美が、その風をそっと受けながら兄の眠るベットの横に立つ。

少し強い風が、その時窓から吹き込んできた。

珠美の長い髪が、その風に僅かに揺れると同時に、笑顔の奥にある乙女心も僅かに揺れた。

珠美が優しい笑顔を保ちながらベットを見下ろすと、そこには何故か二つの寝顔があった。

すやすやと気持ちのよさそうな寝息をたてる二人。

僅かに首を傾げた珠美は、笑顔で二つの寝顔を見下ろす。

昨日まで、天井から虎二の両手のギブスを吊るしていた紐は取り外されており、石膏で固められた両腕は、ベットの敷布団の上に投げ出されていた。

そして掛け布団は、足元に蹴り飛ばされている。いつものことだが、非常に寝相が悪い。

そんなことよりも何故か虎二の体の上には、敷布団の代わりに、小学生の姿をした天野太陽が、病院の寝巻姿で、仰向けの大の字で重なっていた。

寝相の悪い虎二の上に、更に寝相の悪い天野太陽が、仲の良い親子か兄弟の様に重なって眠っている。

双子として一緒に育った珠美ですら、こんな寝方はしたことがなかった。

珠美は、笑顔のまま、その二人を見下ろしていた。

虎二の上で寝ている天野太陽は、病院が用意した水色のワンピースにも似た寝巻を着ている。

その寝巻の裾が、きわどいところまで捲れ上がって、綺麗で瑞々しい生脚が、虎二の股間の辺りを跨ぐように広げられていた。

履いているとは思うが、女の子が容易く見せてはいけない部分が、覗き込まなくても見えそうであった。

そんな天野太陽の小さな頭が、虎二の顎の下辺りにあり、ポニーテールの長い髪が、僅かに虎二の鼻に掛かっていた。その髪を手で払うことのできない虎二が、鼻と口を使ってムズムズと抵抗を時折見せていた。

虎二の寝顔は優しく見え、太陽の寝顔は可愛く見えた。

珠美は、その親和な光景を微笑みながら見下ろしていた。

すやすやと眠る二人。

その可愛い寝顔の口から、寝言が零れ出る。

「むにゅむにゅ……、虎二～、触っても良いけどさ、ちょっとだけだからな～……ぁぅん」

珠美は、その寝言を聞くと、微笑みながらベットの横にあるテレビが置かれた棚の引き出しを開ける。

引き出しの中には、虎二が入院した時に珠美が用意した小物が入っていた。

耳かき、爪切り、ポケットティッシュ、油性ペン、つまようじ、そして果物ナイフ。

引き出しの中を覗く珠美の顔は、笑顔のままだった。

しかし、その笑顔には、いつもの優しい輝きが失われていた。暗く、ドス暗く、どんよりとした殺気を秘めた笑みだった。影の中でなら、目だけが光って見えそうな笑みである。

珠美が、引き出しの中に手を伸ばす。

そして、中から取り出したアイテムは……。

油性ペン。

いつもと違う笑みの珠美が、黒い油性ペンのキャップを外すと、重なり合いながら寝ている二人の寝顔に迫る。

そして、笑顔のまま、珠美の作業が実行された。

「これで、よしと」

しばらくして、そう一言だけ言った珠美は、油性ペンのキャップを閉めて引き出しの中へと戻す。その表情は、いつもの明るい笑みに戻っていた。

珠美は、満面な笑みを残して、すやすやと気持ちよく寝ている二人を起こさないように、静かに病室を出て行った。

珠美が出て行って直ぐに、虎二の病室をゴリラのような看護婦が訪れる。

ゴリラのような看護婦は、個室の入り口からベットを見て、太陽の姿を発見すると怒った表情をあらわにした。

「あらら、また隣の太陽ちゃんが遊びに来ているのね。もう、女の子なんだから、ダメだって言ってるのに……」

そう言いながら個室に入って来たゴリラのような看護婦は、ベットに近づき寝ている二人の顔を見た。

「ぷっ！！」

吹いた。

その時、吹いた。

彼女は、思わず吹いた。

そして、耐えた。

震えながら耐えた。

大きな口を大きな手で塞ぎ、女性とは思えないほど広い肩幅を小刻みに揺らしながら笑いを耐えた。

震える彼女は、笑いから逃れるように、病室の出入り口を目指す。

脚に力が入らないのか、震える体を壁に寄り掛けながら歩く彼女は、やっとのことで個室の外へと出て行った。

彼女が見たものは、虎二の顔になまずのような長い二本の髭と、額に漢字で『中』と書かれた落書きである。

太陽のほうも、額に『肉』と掛かれ、鼻の穴が大きく見えるように油性ペンで広げられていた。

しばらくして、笑いに耐えきったゴリラのような看護婦が、二人の寝る病室に戻って来る。

「あ～、死ぬかと思ったわ……」

そう言う彼女の手には、何故か、黒い油性ペンが握られていた。

「じゃあ、わたしも……」

そう言いながらゴリラのような看護婦は、いつも自分をゴリラと言いながらからかう二人に、復讐の落書きをほどこそうとしていた。

そして、容赦ない復讐が実行された。

「よし、ふぅ～」

そう言って作業が終わった彼女は、手にある油性ペンのキャップを閉めると、額の汗を片手で拭い、病室を静かに後にした。

３０分ぐらい経っただろうか。

窓から優しく吹き込む風を受けながら熟睡する虎二と太陽。

その病室に、珠美が帰ってきた。

そして、未だに寝ている二人の顔を見た。

「ぶっ！！！」

珠美は、おもいっきり吹いた。

人生の中で、これほど吹くことは珍しいぐらいに吹いた。

そして、必死に笑いを耐える。

高笑いしたいほどの気持ちを、震えながら耐える。

「ふ、増えてる、な、何故に増えるの！？」

ベットの横に笑いを堪えながら崩れ落ちた珠美。

珠美が見たものは、自分が書いたはずの落書きの他に、何故か増えた落書きだった。

それは、二人の閉じられている目蓋に書かれた瞳の落書き。

寝息が聞こえる二人が、ぱっちりと両目を開けているように見えた。

不意にそれを見てしまった珠美は、心臓が口から飛び出そうなぐらいに吹いてしまったのである。

必死に震えながら笑いを耐える珠美は、四つんばいのまま病室を出て行った。

静かな春の病室。

風に窓のカーテンが揺れていた。

清々しい風が吹き込んでくる病室に、凶悪なトラップが仕掛けられた。

次に、このトラップの犠牲になるのは、いったい誰であろうか……。

それを知る者は居ない。

<　外伝への懸け橋　>（前書き）

この話は、本編が終わってから、やるかやらないか未定の外伝の前振りです。
今回出てきた柴村サクラも、本編には一切関係ありません。
前振りだけ見せて、外伝を書かなかったらゴメンなさい。

<　外伝への懸け橋　>

古い屋敷の瓦屋根に、暖かい日の光が降り注ぎ、平屋建ての屋根よりも高く被い茂った山中の木々の葉が、太陽の眼差しに暖まった瓦達の上へと風に煽られ時折ひらりと抜け落ちていく。

そして瓦屋根に落ちた葉が、再び風に吹かれながら瓦の上を滑り、屋敷の庭へと舞い落ちていく。

三人の男性が、古い板張りの廊下を歩いていると、その葉が直ぐ右手の庭にひらひらと揺れながら降って来る。

廊下を歩く一人が、舞い落ちてきた葉に気付くと首だけを曲げて、視線をその葉にあわせた。

三人の一番後ろを歩いていたグレーのスーツを着た青年は、先を歩く老人二人に遅れない足取りを続けながら、その落ちた葉をじっと見つめていた。

瓦屋根の上から滑り落ちた葉が、更に強い風に吹かれて庭の隅の落ち葉たちと合流する。

落ち葉たちが足元に固まった背の低い垣根の向こうに、景色の良い大自然の山々が絶景となって広がっていた。

三人は、その絶景が右手に広がる屋敷の廊下を歩いていた。

左手には、真っ白な障子が、板張りの廊下と和室の数々を仕切る様に並んでいる。

三人の先頭を行くのは、妖怪連合一番長老のぬらりひょんだった。

多少の白髪が産毛の様に生えているが、ほとんどど坊主頭で、不思議と後頭部が常人よりも長く、表情は老人だが鷹の様に鋭い目をしていた。

羽織袴のぬらりひょんは、両手を着物の袖の中に隠しながら歩くが、その一歩一歩の足取りからは、僅かながらの足音も聞こえてこない。

そのぬらりひょんの後ろを歩くのが、虎野町妖怪連合支部長代行のあぶらすましこと油儀裕次郎と、同じく虎野町支部の処理班筆頭八尾弦徳であった。

そうそうたる大妖怪が日本の各地から集まった十二長老会議の一日目終了後に、油儀と八尾の二人は、ぬらりひょんの呼び出しを受けて、別部屋で話をするために移動している最中であった。

油儀と八尾の二人は、ぬらりひょんがどのような話をするのかは、前もって聞かされていた。

詳しくは聞いてはいなかったが、八尾の十二長老入りの話とはまったくの別件で、何やら八尾の教師職の復帰についてだった。

八尾は、一ヶ月前まで、森一郎と言う人間の名前で高校の教師をやっていた。

だが、箪笥の九十九神の出現で発生した高校教師生徒連続失踪事件が原因で、教師としての職と人間としての人生を、偽造する形で

終了させていた。

八尾弦徳こと高校教師の森一郎は、その事件で警察が作った書類の上で、行方不明になっている生徒や教師の名の中に名前を連ねていた。

先頭を歩いていたぬらりひょんが、障子の締め切られた部屋の前で立ち止まる。

そして、障子を開けて部屋の中へと入って行った。

二十畳ぐらいの和室だった。

床の間には、幾つかの青い葉をベースにトサミズキの枝とアンスリウムの赤い花が生けられており、その生け花の後ろには、滝を描いた古い掛け塾が掛けられ、昔ながらの和を形どっていた。

部屋の中央には、一枚板から作られた漆塗りの高級そうなテーブルが置かれ、その両脇に二枚ずつの座布団が向かい合うように並んでいた。

ぬらりひょんに続き油儀と八尾が部屋に入ると、そのテーブルに並べられた四つの席の一つに、一人の少女が静かに座っているのに気付く。

「まあ、座ってくれ」

ぬらりひょんは、そう言いながら少女の横に座る。

座布団に腰を下ろしたぬらりひょんの横に居る少女。

年の頃は十歳から十五歳ぐらいだろうか。落ち着きの感じられる少女だった。

教師を務めていた八尾にも、最近の子供達の年齢は分かりにくい。高校生よりも背が高い子供がランドセルを背負っていたり、高校生よりも大きく育ったバストをした小学生も、最近では少なく無いことだ。

部屋に入った油儀がぬらりひょんの前に座ると、八尾が少女の正面に座った。

まるでお見合いのような感じがした。

少女は、艶のある長い髪を背中まで伸ばし、両脇の髪を後頭部で清楚に結んでいた。

前髪は、眉毛が僅かに隠れる程度に長く、その前髪の下に可憐な顔を覗かせている。

アイドルにスカウトされても可笑しくないお嬢様系の美少女と言えた。

白に近い薄い桃色の着物を着ており、静かに正座をしている。

少女は、自分の正面に座った八尾の顔を、落ち着いた優しい表情で見ていた。

少し垂れ目だった。

八尾と目が合うと、少女は笑顔を見せる。

八尾も油儀も、始めて見る少女だった。

「ワシから皆の自己紹介をしよう。此方が虎野町の油儀裕次郎会長で、此方の青年が、教師の森一郎こと、八尾弦徳だ」

八尾と油儀が、ぬらりひょんによって紹介されると頭を下げた。

八尾は、自分のことを人間の教師と紹介され、その後に妖怪の名前で紹介されたことが引っかかった。

続いてぬらりひょんが、隣の少女を二人に紹介する。

「この子は、ワシの娘で、柴村サクラだ」

「始めまして、柴村サクラです」

紹介された少女が、しとやかな声で自分の名前を繰り返すと、丁寧に頭を下げた。

「「む、娘！」」

八尾と油儀が、そろって驚きの声を上げた。

二人は、ぬらりひょんに娘が居ることを知らなかった。正確に言えば、一番長老のぬらりひょんに娘が居るとの公式発表はない。

「まあ、驚くな。このことを知っているのは、十二長老でも四番ま

での三人だけだ」

驚きに目を丸くしている二人に、ぬらりひょんが人差し指で鰓だらけの頬を掻きながら照れくさそうに言う。その瞳からは、鷹のような鋭さは失われ、普通の老人のものに変わっていた。

「は、初耳ですな、ぬらりひょん殿に、こんな小さなお子さんが居たとは……」

油儀が、懐から取り出したハンカチで額の汗を拭いながら言う。

「席は入っておらん。だが、正真正銘、ワシと血が繋がっている娘でな」

そう言うぬらりひょんを余所に、八尾は少女の顔を見た。少女は父の言葉を小さな笑みを作って聞いていた。

「これの母親は、それはとても美しい娘でのを……」

少女の容姿を見れば、ぬらりひょんの言いたいことは分かった。母親も相当の美人なのだろう。

「なによりも、これの母親は不思議な娘だった……」

過去形。ぬらりひょんの言葉は、過去形だった。だとするならば、この少女の母親は既に……。

八尾と油場は、それを言葉から悟る。

しかし、その言葉を聴いている少女は、顔色一つ変えずに穏やか

な態度を見せていた。

「時には福の神として崇められることすらあるワシが、これの母と出会った日から夢中になってしもうての。若い連中の言い方を使えば、一目惚れだな」

その話を聴きながら八尾は、少女の顔を、否、その瞳の奥を覗きこむ。

瞳の奥の奥、そのもっと奥、心の奥を覗き込む。

そこに不思議な物が光って見えた。

二つの光。

一つは摩訶不思議な輝きを放っている。おそらくぬらりひょんが彼女の母親に見たと言う輝きと同じものだろう。

それは、八尾の心を引き寄せようと、瞳の奥深くで輝いていた。

魅了（チャーム）。

この光は、長く見てはいけない。八尾は、そう心で叫ぶと、少女の瞳から必死に目を反らした。

だが、彼女の瞳から逃れようとした瞬間、二つ目の光が、何であるかに気付いた。

他人の心を引き寄せようとする光の横に、もう一つ輝く光。

それは、懐かしい光だった。

妖怪たちが放つことの出来ない光。

人間としての輝き。

それが、不思議な輝きを放つ光の横で、小さくひっそりと輝いていた。

その小さな輝きのほうが、大きな光よりも八尾の心を強く引き寄せようとしていた。

最初は大きな光の美しさに惑わされた。

だが、小さな光の正体を見た時に、はっきりと誤解に気付く。

ぬらりひょんも、この光を母親の瞳の奥に見たのだろう。

一目惚れの理由も分かってきた。

「これは、半妖でのぉ」

ぬらりひょんが言う。

八尾が見た小さな光は、やはり人間のみが放つ生命の輝きで間違えなかった。

まだ、汚れのない、無垢な輝きに見えた。

「これの母親に関しては、詳しい経緯は訊かんでくれ……」

「はい、わかりました」

何か言いたげな油儀だったが、それよりも早く八尾がそう答えた。

八尾は、自分以外の半妖に出会うのは久々のことである。それだけ半妖は、レアな存在であった。

「それで、本題なのだが……。油儀、弦徳、うぬら二人に頼みがあって娘と会ってもらったのだ」

「頼み、ですか？」

油儀がいつものように、やや大きい頭を左右に揺らしながら言った。

「ああ、油儀、おぬしのところで、これを何年か預かってもらえぬか？」

「預かるとは？」

「うむ、これが御主等の住む虎野町の私立中学校に通うことになったのだが、わしが用意した所よりも、御主の側の方が安全で、生活環境的にも健全ではないかと思ってのぉ」

いきなりのことに油儀が、少し驚いた顔をしていた。しかし、ぬらりひょんに娘が居たことを知った時よりは驚いていない。

「弦徳には、これが入学する私立中学で、これのクラスの担任教師をやってもらいたい」

「私が担任を勤めてもいいですか、私がまた教師をやっていいのですか！？」

あの事件以来、教員を諦めていた八尾は、思わず嬉しそうな表情を浮かべる。

「ああ、手配はワシがしておく。事件の件もワシの力でどうにでも誤魔化しといてやるわい。また、名前も森一郎を名乗ってかまわん」

ぬらりひょんは、妖力で人間の記憶を操作したり、書物に残された現実までもをネジ曲げることが出来る。情報操作に関しては、最強の能力者であった。

「なるほど、森の名前を消させないようにしてやるとは、そう言うことでしたか」

油儀がそう言った。

油儀は、数日前にぬらりひょんから電話で、八尾を加えて話し合いたいことがあると聞かされていた。その時に「森家の名前を消さないように手伝ってやる」と、言われていた。

その為、失踪事件で森一郎を行方不明にしていた件をなしにして、孫娘との婚姻の話を、再び進めようとしたのだ。

「分かりました、森一郎の名前が再び世に出ていいのなら、娘さんを預かる話は、喜んでお受けいたしましょう」

油儀が、岩のような顔を笑わせる。

「私も教師に復帰できるのなら喜んでお引き受けいたします」

八尾にとって教員の仕事は、楽しい趣味に近い。楽しいが苦労も多い、だからこそ趣味として成り立っている。八尾は、簡単で楽しい事よりも、苦労が多いほどやりがいを感じるタイプだ。

八尾と油儀は、ぬらりひょんが出した交換条件がなくても、この話を断ることはなかったであろう。

かつて八尾の母が亡くなったさいに、幼い八尾を一時的に引き取ったのがぬらりひょんで、幼少時代を過ごしたのがこの屋敷だ。

その時の大きな恩義がある。

「すまん、二人とも、ワシと娘のわがままを聴いてもらって」

ぬらりひよんが、一枚板のテーブルに、額が付きそうなぐらい頭を深々と下げた。それに続いて娘のサクラもゆっくりと頭を下げる。

いつも鋭い眼光をしているぬらりひょんも、どうやら我が子の為には一人の親の姿に戻るようだ。二人に親として、深々と頭を下げていた。

後に、この娘が中心の一つになって、新たなる物語が巻き起こそうとしていることを、今はまだ、気付く者は居なかった。

<　龍信と静香と・前編　>

鏡の九十九神が、石切り場で春婆怒と対戦した次の日である。

結局、春婆怒と鏡の九十九神との勝負は、妖怪連合虎野町支部後処理班の無常水越斎と、調査班筆頭役の鍋中改造、それに一七五一家の虫玄武ジョニーＤＸがかけつけたことにより、鏡の九十九神達が逃走するといった形でドローとなった。

一方、金色の打ち出の小槌が本体だと思われる黄金騎士の九十九神は、七人岬や天野太陽を返り討ちにした一戦以来姿を見せていない。

黄金騎士の使い手が、左腕を火傷している可能性があるとの話から、調査班の鍋中や猫田龍信が、虎野町の全ての病院を調べ上げた。だが、疑いのある人物は発見できずに終わっていた。

そして、本日の調査を中断した猫田龍信と、油儀会長の秘書を勤めている蓋口静香の二人が、夜の街を歩いていた。

酒が入った様子の静香が、龍信の腕にぴったり体を摺り寄せる形で歩いていた。

二人は、周りの知人が公認しているカップルであった。

静香は、油儀が京都に在る妖怪連合の本部へと会議に出かけた為、案外と暇をしていた。ちょっとした連絡を電話で報告するぐらいの仕事しかしていない。

その静香に、今夜は随分と酒が入っている様子だった。

龍信の腕を、自分の胸に押し付けるように抱きかかえながら身を任せ、覚束無い足取りで歩いている静香は、いつもの様に真面目で堅い表情ではなく、顔をアルコールで赤く染め上げ、トロンとした甘い眼差しで、自分より背の高い龍信の顔を見上げて歩いていた。

二人は、先程まで大人のムードが漂うクールなバーで、甘い酒を暫くの間飲みながら、甘い言葉を語り合って過ごしていた。

色々な話をしながら一時間ちょっとであろうか。まだ一軒目だった。

駅前の噴水のある公園で待ち合わせをして、そのまま近くの行き馴れたバーに入った。

この近所に龍信が経営している探偵事務所がある。この辺は、龍信の庭のようなものである。

あまりアルコールに強くない静香が、今日はやたらと飲むペースが速かった。

つい最近まで、二人は別れ話までに発展しそうなぐらいの喧嘩をしていた。

理由は詰まらないことだった。

最近、龍信の方から静香に連絡を入れないとか、仕事の領収書の中に、風俗ぽい領収書が混ざっているとかである。

一方的に静香が、龍信を疑いの目で見て、怒っているといった感じであった。

静香が親友の朧に相談して、その事を朧がこっそりと龍信に教え、龍信にも朧が色々とアドバイスをしたのである。

そして、なんやかんやあったが、結局よりを戻した二人である。

この二人の付き合いは、かなり長い。人間の寿命では計れない程である。

「ねぇ～、龍信、私のこと好き～」

龍信の腕を抱え込む静香が、赤くなった頬を龍信の左腕に擦りつけながら言った。

甘えるような声だった。普段は生真面目な静香が、人前では決して見せようとしない表情をしていた。

一緒に居ることが多く付き合いも長い龍信ですら、これ程に甘えるように可愛い声を出す静香の姿を見ることは、ベットの上以外では少なかった。今日の静香は、そのギャップが魅惑的であると龍信は感じていた。

「ええ、愛してますよ」

甘える静香の表情を一度見た龍信が、笑顔で答えた。

嘘では無い。

その龍信の笑顔は、いつもの不真面目な笑顔や営業スマイルとは違った。

酒が回っていても静香には、その笑顔の違いが分かっていた。そして、表情を更に緩める。

今日の静香の仕草に、龍信も悪い気はしていなかった。

自分にだけ見せてくれる無防備な仕草が嬉しかった。

二人で寄り添いながら歩く静香の腕には、バックの他に紙袋が一つぶら下がっている。

龍信は、その紙袋の中身を、今まで訊かなかった。

駅前の公園で会った時も、ムードのあるバーで飲んでいる時も訊かなかった。

だが、その紙袋の中身に、興味はあった。

そして二人は、最初に待ち合わせをした駅前の公園に戻ってきていた。

丸い噴水のある公園。

その噴水に向かい合うように幾つかのベンチが配置されていた。

公園の周りは駅前であるため夜にも関わらず車の往来が多く見られる。

その公園は電灯も多く、明るい公園だった。

シーソーとジャングルジムの他には、ほとんど子供が遊べるような遊具はない。

噴水の周りのベンチに、酔っ払いの親父が酔いつぶれていたり、若いカップルがいちゃつく光景が見られた。

龍信と静香は、空いているベンチに腰を下ろす。

ベンチに座っても静香は、人の視線を気にしていない先客のカップルを真似るように、ここまで来るあいだと同じ仕草で龍信に火照った体を摺り寄せ甘え続けていた。

「ねえ、龍信～」

「なに？」

ベンチに腰を下ろしてから星が幾つも見える綺麗な夜空を見上げていた龍信が、甘ったるい声で自分の名前を呼んだ恋人のほうを向く。

そこには静香の火照った顔の他に、潤んだ瞳と潤んだルーシュが魅惑的に龍信を誘っていた。

ドキッとした。

龍信の心臓が、その静香が見せる表情に、大きく弾み始めた。

静香は、じっと龍信の顔を見詰めている。

その龍信の顔が、アルコールの影響以上に赤く染まっていく。

見詰め合う二人。

龍信は知っている。

彼女は、自分が今此処で何をしても拒むことがないことを、それを知るが故に、龍信の緊張が高まる。

「ねぇ、この紙袋の中身、何だと思う」

静香は、潤んだ瞳を龍信から逸らすことなく、そして潤んだルージュの魅力的な唇を僅かに開いて質問した。

龍信の脳裏に、昨晩の極ミニメイド服と極ミニのチャイナ服が思い出された。

その記憶だけで、鼻血が出そうだった。

「えっと、な、なんだろな」

思わずどもってしまう。

「当てて～、ね～。龍信にプレゼントなんだから～」

「プレゼント！？」

「龍信に直接あげるプレゼントじゃないけどね～、わ・た・し・が、身に付けるやつだよ」

眩い笑顔だった。

龍信は、自分の血が沸きあがるのが感じられた。

男の本能が、ムクムクと蛇頭の様に鎌首を上げ始めていた。

龍信の脳内に、色々な物が飛び交っていた。

セーラー服、ナース、スッチー、レースクィーン、バニー、ＳＭボンテーシ。

様々な煩悩が乱れ飛んでいた。

まさかいきなり、ブルマとかスク水はあるまいと心が乱舞していた。

「あ・て・て」

誘うような口調だった。それだけで、辛抱たまらなくなる。

「えっと、えーと、なんだろーーーーー！！」

真剣に龍信は悩んでいた。だが、思考回路が正常に機能していない様子だ。

そして頭を両手で抱えて屈んだ龍信の耳元に、静香のセクシーな唇が近づき囁く。

プルンとした紅色の唇から出た単語は、二人にしか聞こえない秘

め事に変わる。

「マジですーーーーーーーーーーーーーー！！」

静香の言葉を聞いた龍信が、頭を噴火させるように大きな声をだした。

そこに、

「なーんだ兄ちゃんたち―、熱々のバカップルかなー」

二人が座るベンチの前に、メタボリックな腹を揺らした酔っ払いの親父が立っていた。

ハゲ散らかしたバーコードヘアーの頭にネクタイをしめて、白いYシャツの裾が片方だけベルトの外にはみ出しており、もう片方の裾が、社会の窓からチョロリと出ていた。そしてお約束の様に、手にはお土産の寿司をぶら下げている。

その酔っ払いの姿を見た瞬間、龍信のテンションが、グーーーーーーーンと下がっていった。

色々な物が、龍信の中でなえた。

しかし、冷静になったところで、二つのことに気付く。

この酔っ払いの中年は、自分が経営している探偵事務所の下で、コンビニを営業している鈴木と言う男性であることに。

そして、もう一つ気付いたこと。

鈴木の左手に巻かれた包帯。

黄金騎士かもしれないという印だ。

まさかと思いつつも龍信は、座ったまま身構える。しかし、隣の静香は気付いていない。

龍信に、緊張が走った。

「いいよね～。私の若い頃は、外でイチャイチャなんてありえなかったしね～。しかも今は、かみさんと別居中だしね～、ヒクッ」

そう言いながら鈴木は、千鳥足のままその場を去っていく。そして公園の外へと消えていった。

「ふぅ～」

それを見送った龍信が、あんどの溜息をついた。

「どうしたの龍信～」

そう言いながら静香が龍信の頬にキスをした。

優しい温もりが、僅かなルージュの跡と一緒に龍信の左頬に残った。

龍信の下がったテンションが、その接吻に復活の狼煙を上げ始める。

「静香さん、じゃあ、今日は静香さんの部屋に泊まっていいかな？」

静香の顔を見る龍信が優しく微笑みを作って言うと、不意に素面へと戻った静香が更に顔を赤らめて目線を反らす。

そして、小さくコクンと無垢な乙女の様に可愛らしく頷いて見せた。まるで、告白をされた中学生である。

一時たりとも寄りそった互いの体を離さない二人は、そのままベンチから立ち上がった。

二人が、これから静香の部屋で何をするかは、誰が言うことなくとも分かる行動だ。愛し合うカップルならば当然の行為であった。

先程までのように、龍信と静香は見つめ合わない。それどころか視線すら、顔すら合わせない。静香は照れた表情で俯いていた。

龍信には、そんな仕草をする静香が、可愛く、愛おしく、愛らしく見えて溜まらなかった。

静香の部屋まで、我慢できるかすら怪しくなっていた。

暴走モード寸前である。

そして、公園を立ち去ろうとした時、二人の前に人影が一つ立っていることに、龍信が気付き足を止めた。

深々とパーカーのフードを被った男。

顔が見えない。

身長はあまり高くない。体重も少なそうだ。

小柄だった。

しかし、その左手には、白い包帯が巻かれていた。

そして、右手には、金色の小槌が握られている。

龍信の背中に、戦慄のような寒気が走った。

「ちきしょん、今夜は勘弁してくれよ……」

龍信の口から、本当に残念そうな声が零れ落ちた。

そして、明らかな危機を知らせる冷や汗が、額から大量に流れ落ちていく。

<　龍信と静香と・中編　>

「何で、このタイミングで現れるかな」

銀縁の眼鏡越しに龍信の瞳が真剣な眼差しに変わる。それに静香も気付き、龍信の腕を今まで以上に強く抱きしめた。

辺りを見回す龍信。

先程まで他のベンチで寝ていた酔っ払いの姿も、イチャイチャしていたカップルの姿も公園内から消えていた。

公園の周りを走っていた車のヘッドライトも見えなくなっていた。

静かな空気が公園内に、妖気と一緒にこもっていた。

怪しい空気が漂う。

「人払いの術です」

厳しい表情で辺りを確認していた龍信に、パーカーの男が結界を張ったことを告げる。

「探偵さん、まさか貴方が妖怪とは、思いもしませんでしたよ」

パーカーのフードの下に隠れる男の顔から出た言葉は、まるで龍信のことを知っているような内容だった。

少年のように若々しい声。だが、その声の中には、暗く、寂しく、

弱々しい何かが感じられた。

身長は１７０センチ有るか無いか、体重は５０キロから６０キロだろう。身長だけなら龍信の方が高い。

黄金騎士と一戦交えた後処理班天野太陽の報告によれば、黄金騎士の身長は１９０センチから１９５センチぐらいの巨漢。

妖力共有したのならば、そのサイズまで大きく変貌するのであろう。龍信は、右手の袖の中からこっそりと鋼色のクナイを取り出し、手のひらに忍ばせる。

フードの男までの距離は、おおよそ3メートルか、もう少しあるぐらいだ。

龍信が狙っていた。

妖力共有させてはならない。

妖力共有させなければ、どうにでもなる。

逆を言えば、妖力共有されたら、どうにもならない。

龍信が、左腕にしがみ付いていた恋人を、自分の背後へと隠すように移動させながら囁く。

「静香さん、私が動いたら直ぐに公園の外へ走って、そして他の方々に電話をしてください」

そう言いながらも龍信は、フードで見えない男の顔を睨んでいた。

「わ、分かったわ……」

心配そうな表情で小さく頷いた静香は、龍信の腕を抱きかかえていた両手から力を抜き、なごりおしくも開放した。

フードの男から死角になった手のひらに忍ばせたクナイが、龍信の視線によって狙いを定める。狙うは、フードの影に隠れた男の眉間。

一発で勝負を決める積もりだ。

変身は許さない。

龍信の瞳に殺気が宿る。

その刹那、素早く龍信の右手が動いた。

下から上へと、素早く、しなやかな動きで鉄のクナイを投げ放った。

鋭い牙の如く男の顔面へと飛んで行く龍信のクナイ。

だが、フードの男の反射神経は、龍信の期待よりも俊敏だった。

右手の小槌を盾にして、飛んできたクナイを弾き飛ばす。

鋼のクナイを弾いた木製の小槌からは、不思議なことに鉄と鉄が弾き合う音が響いた。

「ゴールドラッシュ・妖力共有！」

金色の小槌で顔を庇ったポーズのまま、男の口から変身の合言葉が発せられた。

「畜生！」

龍信がはっきりした口調でそう言った。

男の体から眩いまでの黄金の輝きが発せられた。

龍信と静香の二人が、その輝きに目を細めながら手のひらで顔に影を作る。

直ぐに光は静まった。その光の中から現れた巨漢の存在。

黄金騎士・登場。

黄金の鎧を纏ったフードの男は、身長も、体重も、肩幅も、体の厚さも、威圧感すらもが、一回り以上大きくなっていた。

全身金色でルネッサンス風の甲冑。背中には羽毛が飾られた赤いマントを背負い、金色の甲冑の様々な部分に、威厳を現すような威圧的な装飾が施されていた。

王の鎧。

龍信は、既に勝機が無いことを悟っていた。

後は、後処理班が到着までの時間稼ぎに専念するのみ。いつもと

同じだ。

だが、今日は同じではない。

「静香さん！」

静香は龍信の言葉に、バックの中から携帯電話を取り出して、後処理班達に連絡を取りはじめた。

そうじゃあない。

龍信は、そう思ったが、すぐさま言葉にならなかった。声として出なかのだ。

公園の外に逃げてから、後処理班に連絡を入れろと言ったはずなのにと、脳裏に過ぎる。

龍信がそう言えなかったのは、目の前の黄金騎士が攻めてきたからだ。

大きく金色の甲冑が、赤いマントを靡かせ走り出す。

とても威圧的に見えた。

迫る黄金騎士を見て、龍信は懐からピンポン玉サイズの球体を三つ取り出す。それを黄金騎士に対して一つ投げつけた。

小さな球体が、走り迫る黄金騎士のヘルムで守られた顔面を狙う。

黄金騎士は、クナイを弾いたように、その小さな球体を、金色の

小楯を盾にガードした。

小さな球体が小楯に当たると炸裂した。

爆弾ではない。

白い煙が黄金騎士の目の前に飛び散った。

小麦粉。

目くらまし、煙幕だ。

それに黄金騎士の脚が止まる。

「静香さん、逃げて！」

龍信は、残りの二つの煙玉を投げながら叫んだ。

携帯電話で連絡をしていた静香が、戦う恋人の声に従い、公園の出入り口を目指して後退りして行く。

スピードが遅い。

静香が距離を離していくのを確認した龍信は、クルリと周り、いつもの忍姿へと早がわりを見せた。

背中には忍者刀、両手には鋼の篭手、両足には鋼の脛当て、そして今更顔を隠すような黒覆面。

背中に背負う忍者刀に手を伸ばしながら身構えた龍信は、黒覆面

の上から掛けた銀縁眼鏡越しに、凛とした眼差しで黄金騎士を睨む。

「相手をしてやる、かかって来い！」

大きな声で威嚇をする龍信は、そう言いながら背中の忍者刀を引き抜く。

目の前で刀を構える龍信を見る黄金騎士。ヘルムの覗き穴からは、中の表情は見えない。しかし、間違えなく龍信を、暗い甲冑の中から見ていた。

その黄金騎士の動きを窺うように龍信は、低い体勢で刀を構えたまま動かない。

龍信に威圧感が飛んでくる。

龍信の目的は、黄金騎士を倒すことではない。後処理班が到着するまでの時間稼ぎだ。

二人が睨み合う。

低い構えの龍信が、下から黄金騎士を見上げる形だった。

二人の硬直状態を見ながら後退りで公園の出口を目指していた静香が、睨み合う二人から大分距離が開いたところで、背を見せ走り出した。

その時、黄金騎士の視線が、龍信から外れて静香の方を向く。

そして、左手を開きながら、肘を分離させて静香目掛けて腕を発

射させた。

ロケットパンチの様に飛んで行く黄金騎士のガントレット。

「それは、ダメだ！」

叫ぶ龍信が動いた。

忍者刀を横に向けて、黄金騎士の右脇腹に逆胴の一撃を打ち込む。

しかし、鋼同士がぶつかり合う耳障りな音を上げただけで、龍信の刀は、黄金騎士の鎧を切り裂くことが出来なかった。

龍信の攻撃を無視して飛んでいく黄金騎士の左腕が、背を向けて走っていた静香のうなじを鷲掴みにした。

「きゃん！」

首根っこを捕まえられた静香の口から、可愛らしい悲鳴が漏れる。

その悲鳴が、恋人である龍信の耳まで届き、彼を焦らせた。

黄金騎士の左腕の肘と、飛んで行き静香を捕らえたガントレットの間には、妖術で出来た半透明の鎖が結ばれていた。

その鎖がギリギリという音を立てながら黄金騎士の肘の中へと巻き取られて行く。

静香が苦痛に顔を歪めながら抵抗していた。

「離せ！」

刀の先を突き立てる構えで龍信が、鎧と鎧の隙間から黄金騎士の喉仏を狙う。

静香を救わなくてはと龍信が、怖い表情で刀を突きたてた。

だが、その龍信の行動よりも早く、黄金騎士の小槌が下から掬い上げるように龍信の胸板を襲う。

「ぐほぁ！」

直撃だった。

小槌が重い衝撃と共に龍信の胸に減り込んだ。

胸が押しつぶされ、骨がいかれる音が幾つか聞こえた。

かわせたはずの攻撃を、静香を救わなくてはという気持ちが、防御よりも攻撃を優先させた。それが直撃を許した理由である。いつもの龍信ならありえないことだった。

下から跳ねたハンマーの一撃に、龍信の体が高く飛んだ。

高さが3メートル以上はあっただろう。

弧を描いて飛んで行った龍信の体は、先程まで静香と腕を組みながら座っていたベンチの上を越えて、後ろの植木の中へと落ちていった。

「りゅ、龍信……！」

後ろ首を鷲掴みにされながら引き寄せられる静香にも、バキバキと音を立てて植木の中に落ちていった龍信の姿が見えていた。

ベンチが邪魔で、龍信の安否が分からない。

届かないと分かっていながら静香は、右手を伸ばす様に龍信のほうに向けた。

この忌々しい九十九神に首根っこを掴まれていなかったら、間違いなく静香は恋人の元に走り寄って行ったことだろう。

しかし、それが今の彼女には出来ない。

「龍信……」

小さな声だった。

大きな声で、恋人の名前すら叫べない状況に、静香が歯軋りをした瞬間、静香の体が、物凄い力に引き寄せられ、宙を舞った。

黄金騎士がカツオでも釣り上げる様に、静香の体を大きく力任せに引き上げた。

静香の体も、3メートル以上の高さまで上がっただろうか。そのまま黄金騎士の頭上を越えて背後に頭から落ちていく。

ゴン、と、鈍い音が響いた。

その音と共に、静香の束ねていた後ろ髪が解けて乱れる。

レンガ造りの公園の地面に頭を打った静香は、まるで眠りにでも付いたかの表情で動かなくなる。

振り向きながら静香を見下ろした黄金騎士は、左腕の鎖を引き寄せガントレットを元の場所にドッキングさせると、今度はゆるやかな速度で右手の小槌を振り被った。

「うぅ……」

静かに眠る静香の表情が僅かに歪むと、レンガ造りの公園の上に乱れていた長い静香の髪の隙間を埋めるように赤い血液が広がっていく。

黄金の木槌が、星が輝く夜空に向かって高々と振り上げられた。

意識がない静香に、その小槌を振り下ろせば、一瞬で肉体も魂も跡形もなく砕くことが出来るだろう。

黄金騎士の一撃は、それだけのパワーが間違いなくある。

しかし、小槌を振り上げたまま黄金騎士が動かない。

妖怪を喰らうという九十九神の目的を果たす為に、この場に現れたはずの黄金騎士が、その目的を果たそうとしている瞬間にもかかわらず、動きを止めていた。

不可解だった。

何か、躊躇いでもあるかのような素振りにも見えた。

「人の彼女に手を出してんじゃあ、ねえぞ！」

その言葉と共に背後から黄金騎士の振り上げていた腕に、鎖分銅が飛んできて巻きつく。

「！」

黄金騎士が驚いた仕草を見せ仰け反る。その次の瞬間、黄金騎士のヘルムが、人間の関節ではありえない稼動域まで回転して、後方を確認した。まるでフクロウのようだった。

そして、黄金騎士の視線が、自分の腕に絡みつく鎖分銅をなぞり、その先を見る。

そこには、植木の中から這い出た龍信が、先程まで静香と座っていたベンチの上に乗り鎖鎌を構えていた。

どこかに落としたのか、いつも掛けている銀縁の眼鏡が、その顔にはなかった。

眼鏡をなくした龍信の表情は、意外と勇敢なヒーローの眼差しをしている。

「どこまで首が回るんだ、こいつは……。ぐほっ」

悪態を付いた後に、肺の中に溜まった血を咳き込みながら吐き出す龍信。どうやら折れた肋骨が肺に刺さっている様子だ。

口元からダラダラと血を垂らす龍信の表情は青ざめ冷や汗を流していた。かなり辛い表情である。その血が、Yシャツの胸元を染め上げていく。

<　龍信と静香と・後編　>

「りゅ……、龍信……？」

静香が目を覚ます。

静香は虚ろな表情で記憶が飛んでいる様子だった。

覚束無い動きで起き上がろうと手を付いた瞬間、頭部の痛みに顔を歪める。

熱いものが額から零れ落ちた。

「血？」

頭を摩った自分の手に、血痕が付いていることに気付いた静香がそう呟いた。

意識が朦朧として、記憶も飛んでいる静香は、何が起きているのか分からないと言った表情をしていた。

静香の様子を確認した龍信が、左手に持った鎌を振りかざしながら、ベンチの上から走り出す。

器用な走りかただった。

小槌のある黄金騎士の右腕を、静香に振り下ろさせないために巻き付かせた鎖鎌の鎖。

その鎖分銅の上を龍信は、地面に踏みつけながら真っ直ぐに走って行く。

走る龍信の足元と、黄金騎士の振り上げられた右手の間で、鎖がピント張っている。

龍信と黄金騎士の距離が縮まっても、鎖の張りは緩まない。

走りながら鎖分銅を踏むことで、距離が縮まっても鎖が緩まず黄金騎士の行動を束縛させる器用な走りかただった。

振り上げた右手を鎖に引き寄せられ体を仰け反らせる黄金騎士は、そのヘルムだけを後方へと向けながら、前方の静香に小槌を振り下ろそうと体に力をこめていた。

鎌を片手に持った龍信が、頭だけで後方を見る黄金騎士の背後に到着すると、その鎌での攻撃態勢へと移る。

そして、左手にある鎌で、赤いマントが見える背中を切り裂こうと振るった。

黄金騎士の振り上げた小槌。

それが正面で倒れている静香には、龍信の足元からピンと張った鎖分銅のせいで振り下ろせない。

しかし、後方から迫った龍信には別だった。後方へ振り向けば、龍信には攻撃が出来ただろう。

だが、もう襲い。黄金騎士には、既に振り向く時間はない。龍信

の鎌が風を切りながら放たれた。

「喰らえ！」

龍信の鎌が、赤いマントの上から黄金騎士の背中を切り裂こうと迫った。

その瞬間、黄金騎士の右肩が、後ろを向いている首と同じように、人体関節の稼働域を無視して龍信の頭へと振り下ろされた

人間と同じ関節の作りをしていたら不可能な動きで小槌が龍信の頭を押しつぶす様に落ちると、龍信の首が引っ込み、頭が血に染まったジャケットとYシャツの中へと減り込んでいった。

「こっちだよ」

「！？」

黄金騎士の背後に居た龍信の声が、黄金騎士の正面から聞こえてきた。

血に染まった龍信のジャケットとYシャツだけがバサリと地面に落ちる。

服の中身が、空になっていた。

「どうだい、変わり身の術だよ」

黄金騎士が、首だけを回転させて前を向きなおす。

そこに、龍信の鎌が飛んできた。

ガキンという音を立てて龍信の鎌が、黄金騎士のヘルムにある覗き穴の中へと滑り込んで行く。

その一撃に、黄金騎士の動きが止る。

上半身に鎖帷子しか身に付けていない龍信が、血に染まる口で笑っていた。

風圧。

刹那、龍信の体が、真横へと飛んで行った。そして、レンガの床を滑りながら地に落ちる。

黄金騎士の小槌が、龍信の肘の辺りを横殴りにしたのだ。その黄金騎士の顔に、龍信の鎖鎌がぶらさがる様に引っ掛かっている。

小槌の一発が直撃した龍信は、１５メートル程離れた場所で、黄金騎士と静香に両足を向ける形で力無く倒れていた。

地に横たわりながらそれを見ていた静香が、目を点にさせ飛んで行った恋人の姿を見詰めていた。

静香には、何が起きているのか分からないといった感じだった。

右肩を地面に付けて横向きに倒れる龍信の体の下から、不自然な動きを見せる黄金騎士と同じように、関節の稼働域を無視したありえない方向に右手が出ていた。

龍信は、ピクリとも動かない。

その光景を黄金騎士が、じっと見ながら顔面にぶらさがる鎖鎌を外して投げ捨てた。

「龍信！」

未だ黄金騎士の足元で倒れていた静香が、僅かにも動かなくなった龍信の姿を見て大きな声を上げた。

どうやら静香は意識がはっきりと回復して、記憶も戻ってきた様子だ。やっと状況を飲み込む。

だが、頭を地面に強打した後遺症で、下半身がうまく動かない。立ち上がれないどころか、両脚に力が入らず動かないのだ。

戸惑いを見せる静香。

「脚が」

しかし静香は両手で這うように、龍信の元を目指そうとレンガが敷き詰められた地面に指を立て、必死に動かない下半身を引きずりながら前に進む。

愛情が、執念の様に見えた。

しかし、その進むスピードは、非常に遅い。

直ぐ側の黄金騎士が、その静香の様子を上から見ながら歩み寄る。

そして、再び小槌を振り上げる。

振り上げられた小槌。

今度は、躊躇いもなく静香の背中を狙い、真っ直ぐに振り下ろされた。

背中に風圧が迫るのが、静香にも分かった。

絶体絶命。

静香は、その風圧に目を瞑る。

まだ死にたくないと、両目を瞑った静香の脳裏に過ぎるもの。

もっと、龍信と一緒に居たいと過ぎる。

もっと、龍信と共に生きて行きたいと過ぎる。

もっともっと、龍信と愛し合いたかったと過ぎる。

小槌の風圧を背に感じながら静香は、走馬灯の中に龍信の姿を幾つも見ていた。

だが、その小槌は、静香を潰すことなく途中で止まった。

静香と小槌の間に、つっかい棒の様に何かが割り込む。

両目を瞑っていた静香に鈍い音が、二種類聞こえた。

俎板の上で肉を軟らかくする為に叩く音と、ラーメン屋のスープの仕込みに使う豚骨を砕く音に似た二つの音。

その音が静香に聞こえ、瞑った両目を開けると、這う様に目指していた恋人の姿が目の前から消えていた。

死体のように倒れていた恋人の姿が。

ピクリとも動かなかった恋人の姿が。

這ってまで辿りつきたかった恋人の姿が。

その姿が消えていた。

その代わりに、自分を跨ぐように立つ足が、直ぐそばに見えた。

静香は、うつ伏せになっていた体を返して仰向けになる。

そこに見たのは、自分を跨ぐように立っている恋人が、黄金騎士に背を向け自分を見下ろす姿だった。

自分を見下ろす恋人の表情は、とても優しく見えた。優しく微笑んでいるように見えた。

「龍信！」

恋人の名を、戸惑いの混ざった声で呼ぶ静香。

龍信の口から沢山の血が出ている。額からも血が流れている。

でも、とても優しく微笑んで見えた。

龍信の左肩に、自分へと振り下ろされる筈だった小槌が減り込んでいた。

大きく陥没している。

胸の辺りまで潰れていた。

静香は、その光景を唖然とした表情で見上げていた。

龍信の笑みは、そんな静香を落ち着かせようとしている笑顔に見えた。

龍信の肩に減り込んでいた小槌が背後に消えていくと、陥没した肩から滝の様に血が流れ落ち、龍信の半身を赤く染め上げながら流れ落ちていく。

その血が、下に居る静香の上にも流れ落ちる。静香は避けることなくそれを体で受け止めていた。

尋常な量じゃなかった。

龍信の肩や胸から、折れた骨が皮膚を突き破り幾つも覗かせていた。

「ずっと……」

龍信が口を開いた。

その口から言葉と一緒に血が流れ出る。

「ずっと、一緒に居るつもりだったけど、ごめんね……」

小さい声だった。

ちゃんと聴いていてあげないと、聴き逃しそうな小さな声だった。

「キミと一緒に、ずっと歩みたいと思っていた……」

静香の顔が歪む。

「嘘じゃないぞ……」

恋人の言葉を聴きながら皺くちゃに歪む。

「すまない……」

涙。

「りゅう……しん……」

恋人に向けた言葉と一緒に、恋人の上へと血が零れ落ちる。

静香は、その血を胸元に受けながら涙を流し始めた。

「ごめん……なぁ……」

龍信は、優しい顔で、優しい笑顔で言った。

「龍信……」

辺りに霧のような白い煙が立ち込め始めた。

地面や静香の体の上からも霧が上がり始める。

龍信の体からもだ。

「龍信……。ダメ、いっちゃやだ……」

辺りに散らばった龍信の血液が、蒸発して霧に変わって行く。どくどくと大量に広がっていた血痕が、霧となって消えていく。

その霧が、龍信の後方に立つ黄金騎士の甲冑に吸い込まれていく。

「龍信、私を……、私を一人にしないで……」

横たわる静香が、自分を跨ぐように立つ恋人に、震えながら両手を力無く差し伸べた。

しかし龍信は、その手に自分の手を差し伸べられなかった。

右腕は、肘から折れ機能していない。

左腕は、陥没した肩にぶら下がるようにくっついているだけだ。

手を指し伸ばした愛おしい恋人の思いに答えられない。代わりにただ微笑むだけであった。

静香は、恋人に、自分の上に倒れて来てと、ベットで待つ私の上

に抱きついて来るように倒れて来て、と思っていた。

今は、そうしてもらいたかった。

抱きしめたかった。

だが、龍信は空気が読めない。女心をいつも理解してくれない。

でも、それが愛おしい。

そんな龍信が、愛らしい。

「ごめんな……」

自分一人になろうとしていることを恐れる恋人の言葉に、龍信は寂しそうに謝るだけだった。

龍信の体から放たれる霧の量が多くなっていくと、不自由な両腕が、霧へと変わって消え始めた。

「龍信……、私のこと……好き……？」

涙を流しながら優しい表情で静香が問う。

「死んでも、愛しています……」

優しい微笑みで龍信が答えた。

「いっちゃ、やだ……」

静香がねだる様に言った。

「ごめん……」

そう言った龍信の顔が、頭のてっぺんから霧となって消えていく。

「りゅう……」

血に染まった胸が消えていく。

「龍信……」

上半身が消えた。

「私も大好きだからね……」

膝まで消えていく。

「龍信のこと、大好きだからね……」

龍信の姿が全て消えた。

「……」

霧となって消えた。

身に付けていた服も一緒に。

九十九神に喰われると言う事は、存在を喰われると言う事。その場で全てを喰われると言う事である。

服も、肉体も、心も、恋も、愛も、全て。

全て喰われた。

静香を見下ろしていた恋人が消え、その後ろの黄金騎士が霧の中から姿を現す。

黄金騎士も倒れている静香を見下ろしていた。

「かえして……」

そう呟くと、静香の表情が変わった。

怒りの表情。

「かえしてよ！」

静香は、上半身を起こして大声を出す。

怨みに溢れた表情。

「私の恋人をかしてよ！！」

静香の長い髪が、毒蛇の様に踊る。

全てが怒りと怨みに変わっていく。静香は、そんな表情をしていた。

「あの人の言った言葉……」

黄金騎士が、変身してから始めて言葉をしゃべった。

妖力共有前のフードの男の声だった。

静香は涙を流しながら睨む視線で、黄金騎士を見上げていた。

「あの人と同じ言葉を僕は、かつて言ったことがある……」

そう言った黄金騎士の小槌を握る手に力がこもる。

公園の中に、寒空から風が吹き込む。

「警察が散々いじくり回した後、死体安置所で再開した時にね……」

黄金騎士の体全身に、悲しみを絶える様に力がこもっていく。

「凄く悲しかった。貴方の気持ちは痛いほど分かる」

黄金騎士の赤いマントが、その時強い風にバタバタと靡いた。

不幸を恨む静香のうごめく髪が伸びて、ゆっくりと黄金騎士へと近づいていく。

「でも僕は、彼女の為に進むんだ。何をしても……」

黄金騎士が、手にある小槌を振り上げた。

黄金のヘルムの中から、怒りに満ちた静香の顔を見る男の瞳があった。

その瞳からは、既に人のものと思えない暗い輝きが見えた。

つい先程まで、数人の恋人達が、様々な愛を語り合っていた夜の公園内に、怨みの念が広がっていく。不幸の気配が満ちていく。奈落の様に変わっていく。

「例え他人を犠牲にしても……」

そう言う黄金騎士を、静香が睨み続けていた。

「例え他人を不幸にしても……」

恋人の仇を、睨み続けていた。

「例え他人に怨まれようとも……」

黄金の小槌が静香を狙っている。

「それでも……」

彼女は、逃げない。

ただ、睨んでいた。

「それでも僕は！」

黄金騎士の金色の小槌が振り下ろされた。

「それでも未来に進んでく！」

静香は、逃げなかった。

真っ直ぐ、黄金騎士を睨んでいた。

最後まで。

<龍信と静香と・後編　>（後書き）

小説を勉強し始めて、初の長編小説。

今回の「龍信と静香と」の三話分を書いて、初めて泣きそうになった。

自分が生み出し、愛着を覚えたキャラが死ぬのが、切なく感じました。

この第六話「雲外鏡と黄金の騎士」が終われば最終話になります。

今回の二人の為にも頑張りたいと思います。

よろしければ引き続き、お付き合いお願いします。

グスン…

<　黄金の騎士と雲外鏡・1　>（前書き）

０９／４／２１時点、９００００アクセス突破！。これも全て、お読み頂いてる皆様のおかげです＾＾

<　黄金の騎士と雲外鏡・1　>

もう、時間は大分遅い。

深夜に近い時間帯。

支線が集まり栄えた町並みの中央ターミナル駅。

その駅前にある公園。

さほど大きな公園ではない。

周りは車の交通が激しい道に囲まれ、その周りを更に背の高いビル達が、その公園を見下ろすように囲んでいる。

今は車もほとんど走っておらず、人気が絶えていた。

一メートル程度の高さがある綺麗な石の四角い柱が、ニ本の緑色の太いパイプに繋がれ並んで公園を囲んでいる。公園の柵としてはポピラーなものだ。

その柵の内側に、同じぐらいの背丈の植木が並んでいる。

公園の外からは、公園内の全てが見渡せた。

オープンで見渡しの良い公園。

噴水、ベンチ、シーソー、ジャングルジム、外から全ての様子が見て取れた。

公園の外周にある歩道を歩いていたさほど背の高くないトレンチコートの中年男性にも、その公園内の様子が全て窺えた。

トレンチコートのポケットに両手をつっこみながら歩道を歩く中年男性は、皺の入ったYシャツに地味なネクタイを締めている。そして、古臭いハンチキャップを深々と被っていた。

刑事の鍋中改造だ。

彼は、刑事である人間の顔の他に、妖怪連合虎野町支部の調査班筆頭役という妖怪の顔を持っていた。

その顔は、狸に見える。

公園内。

外灯の直ぐ側に配置され背もたれの付いた木製のベンチ。

そのベンチに腰を下ろした人物が、街灯の光を大きな体で反射させて金色の光を放っていた。

鍋中が歩き、見る角度を変えるたびに、その反射角度が変わってキラキラと別の輝きを見せている。

黄金騎士だ。

さぞ当たり前の様にベンチに座る黄金騎士。

少し股を開き、その両膝の上に両肘を置き、背を曲げた顔の前に

両手を組んでいた。

まるで礼拝堂の幾つも並ぶ長椅子の一つに座り、鮮やかなステンドガラスの前に奉られた十字架にでも祈りを捧げている様に見えた。

鍋中は、公園の入り口の前に立つ。

「人払いの術か……」

鍋中が呟く。

人払いの術とは、人の営みに近い場所に巣くう妖怪の類が、よく使う結界術の一つである。

人間のみに効果を発揮する術で、結界内の人間を追い払うだけではなく、その場所に人を近寄らせなくする効果など持った術であった。

その他にも、その場所の中で起きていることに人々が興味を持たなくさせる効力がある。

例えその場所の中で殺人事件が起きようとも、その場所の中にＵＦＯが着陸しようとも、その場所で象を捕食する程の巨大オクトパスが八本の脚をくねらせ踊ろうとも、外の人間たちが興味をいだき視線を向けることはなくなる不思議な力のある術であった。

例え、たまたま視線が向いたとしても、その場所の中の異変に気付くことがないのだ。それが、異常だと認識しないのである。聴覚も同じ錯覚を起こす。

この術を使って、人知れず巣くう妖怪達も居るのだ。

散歩中の犬が、誰も居ない、何も無い空き地に向かって吠えたりするのも、この術で潜んで居る妖怪が原因であることも少なくはない。

鍋中が、そんな術の張り巡らされた公園に踏み込んだ。

一歩踏み込むと、ひんやりと空気が変化する。

気温が一度か二度下がった。

公園内を、ベンチに腰を下ろす黄金騎士の前へと進む鍋中。

その途中に、見覚えのある赤いハイヒールや血まみれのジャケットが落ちていた。それに、鎖鎌に忍刀。

それらを確認しながら鍋中は進んだ。

「いい度胸してやがるな……」

ベンチに腰を下ろしたまま俯く黄金騎士の前に立った鍋中がそう言った。

距離は5メートル程ひらいている。

「自分自身を劣りに、俺等を誘き出したつもりか」

黄金騎士は、置物の様に動かない。

だが、黄金の甲冑から、九十九神特有の妖気が大量に紛失している。

鍋中が、そんな黄金騎士を睨みながら間を置いた。

そして、少しして再び話し始める。

「ここに男と女の妖怪がいなかったか？」

その質問に、黄金騎士が丸めた背を起こす。

黄金騎士が鍋中の姿を、ベンチに座ったままじっと見ていた。

そして、今度は、黄金騎士から話し始めた。

「まさか、刑事さんもが、妖怪だったとは思いませんでしたよ」

質問に答えずそう言った黄金騎士が、ベンチからゆっくりと立ち上がる。

大きい。

鍋中よりも２０センチぐらい身長差があるだろうか、威圧感を感じる大きさだった。

「テメー、誰だい？」

黄金騎士に、何故に自分の職業が知れているのかと鍋中は疑問を抱き訊いてみた。

「そうか、こんな姿だと分からないですよね……」

鍋中が、トレンチコートのポケットから右手を抜くと、その手で鼻を軽く撫でる様に掻いた。その右手を、ポケットの中にわざと戻さなかった。

「木村加奈子」

「ん？」

黄金騎士の言った名前に、鍋中が首を傾げた。

「忘れましたか……。貴方にとっては、数多い事件の被害者の一人ですしね」

黄金騎士の台詞の中に、明らかな寂しさが感じられた。

「被害者……？」

「狂った板前が引き起こした連続通り魔殺人事件、その最後の被害者ですよ。それが、彼女の名前です」

鍋中が思い出す。

住宅街にあった灰工場で、トラロープに両足を縛られ逆さ釣りにされた上に、首と両手足の大きな頚動脈を切られ血抜きをされて殺された女性。

外れ鬼が暴れまわった事件の被害者の一人だ。

確か彼女の名前が木村加奈子。

「お前さんは……」

さらに鍋中は、思い出し始めた。

彼女には彼氏が居た。

確か名前は、井川秋雄。

「あの時の彼氏か！」

鍋中は、遺体の身元確認に来てもらったさいに、激しく取り乱していた井川のことを思い出していた。

「思い出していただけましたか」

少し驚いた声を出した鍋中だが、直ぐに冷静な表情に戻った。

「探偵さんは、食わせてもらいました」

今頃になって質問に答える。

冷たいしゃべり方だった。

鍋中は、黄金騎士の台詞に表情一つ変えない。

ここに自分が到着した時から既に覚悟が付いていた。

静香の連絡が途絶えて、ここに到着するまでの間に、龍信がわざ

と発していた妖気の信号も、途中で途絶えていた。

九十九神の妖気が途絶えず、龍信の信号のみが途絶える。何が起きたかは、鍋中にも理解できた。

「もう一人、女がいただろう」

「彼女も……、食べました」

黄金騎士の台詞に、若干の躊躇いの色が感じられた。

「龍信の奴、女ぐらい逃がせなかったのか……」

鍋中が、死んだ者に対して悪態を付く。

化け狸の彼が、鍋中改造と名乗って６００年。

かつては八百八狸の一匹で隠神刑部狸の子分をしていた鍋中が、独立を目指して一家を向けて２００年たった頃に、流れ着いたのが虎野町であった。

当時、年相応の若い侍に化けていた鍋中が、虎野町でお奉行を勤める武士の娘と恋に落ちた。

人間の娘だった。

誰が見ても美人と言える娘ではなかったが、武士の娘のわりには、家庭的で温もりに満ちた娘であった。

若い鍋中は、その真心に惚れたのである。

そして、虎野町を仕切る九尾双葉の口ぞえで、その娘と婿養子であるが夫婦までになれた。

それ以来、鍋中は、虎野町に根を下ろして奉行の職を妻の父から継ぎ、九尾双葉の配下に加わった。

そして三本柱の一本とまで言われるようになり、その後も油儀が偽造を繰り返し工作してくれたおかげで、人として暮らし続けてこれたのだ。

鍋中の名は、その時の妻の家名である。その家名を鍋中は、６０年近く守ってきた。

そんな鍋中に猫田龍信は、弟子入りを希望してきたのである。

<　黄金の騎士と雲外鏡・2　>

化け狸に弟子入りする猫又。

最初は鍋中も笑って相手にしなかった。

妖術と忍術を教えてくれと言ってきた龍信の理由が、また笑えた。

こっそり人の人生を覗き見たいから、と、ふざけた理由だった。

弟子入りの理由を聞いて、なおさら弟子に取る気がなくなった。

だが、龍信のしつこさに根負けした鍋中は、人生ではじめての弟子を取ったのだ。

晴れの日も、雨の日も、弟子入りを志願してきていらい毎日、鍋中の屋敷の前で正座をしている龍信。飲まず食わずでだ。流石に呆れた。

最初は気が向かなかったが、龍信が弟子になって以来、あれやこれやを教えているうちに、結構楽しくなってきた。

教えたことに対して飲み込みの早い龍信のせいもあったのであろう。

それから数百年後に、弟の虎二を仕込み、そのことに気付いた。

龍信は飲み込みが早かったのだと。

特に龍信は、忍術の中でも情報収集の術がずば抜けて優れていた。

情報収集ならば、既に自分の腕よりも遥かに実力を上げていただろう。

これで自分が引退しても、虎野町支部の調査班筆頭は任せられると思っていた。

油儀が支部長代行の任を終えて引退をする際に、自分も引退をしようと思っていたのだ。

後は若い者達に任せようと、次の世代に任せようと思っていた。

しかし、物事とは想像どおりには行かないことがよくある。

それが、こんな形で訪れるとは、悲しいことだった。

ポケットから出していた鍋中の右手。その袖の中から手のひらに、鉄色のクナイが滑り落ちてくる。そのクナイは、黄金騎士から見て死角になって見えない。

「女にも容赦無しか、お前さんはよ……」

「相手が妖怪ならば……、例外はありません」

黄金騎士の台詞に、やはり迷いが見えた。

鍋中の手の中に隠れているクナイの飛び行く先が、鋭い眼光によって狙いを定める。

二人は、睨み合っていた。

「そこに愛があってもか……」

「その愛も、僕の幸福に変わる」

「テメー……」

鍋中の眉毛が、怒りを表す形に釣り上がった。

「その全てが僕の未来に繋がる。たとえ誰かが不幸になっても僕は、この九十九神を百計神にしてみせる」

「邪道に走ってもか！」

鍋中の声に、怒りの色がはっきりと混ざっていた。

「それでも僕は、褒美が欲しい！」

黄金騎士の台詞に、迷いが欠片もなかった。

「外道に外れてもか！」

「それでも僕は、彼女を生き返らせたい！」

「非道に落ちてもか！」

「それが僕の愛しかただ！」

「そんなことをしてまで生き返って、お前の彼女が喜ぶと思っているのか！？」

ありきたりな台詞だったが、鍋中は、それを言わずにいられなかった。

二人の声は、いつの間にか大きくなっていた。

「もう、この道は、引き返せない。僕は、探偵さんやその彼女に誓った！」

「テメー……」

鍋中の声が低い声に戻る。

「あの二人の分まで僕と彼女で幸せになるんだ！」

もう、この男には、井川には、自分の説教は届かないと鍋中は悟る。

その刹那、鍋中が仕掛けた。

下から上へと、スナップを利かせ、素早く、柔軟に、しなやかに振るわれた右腕。

その手のひらに隠れていた鉄のクナイが、黄金騎士の顔面を狙って飛んで行く。

黄金騎士は、そのクナイを右手の木槌で素早くガードした。

金色だが木目が見える木槌と、鋼のクナイがぶつかり合ったのに硬い金属音のみが響いた。

巨漢のわりには反応が早い黄金騎士。

続いて鍋中は、トレンチコートの懐に両手をつっこみながら、肥満が見て取れる体型で身軽に真上へと高く飛んで見せた。

三メートルはジャンプしただろうか。

鍋中が上空で、トレンチコートの懐から両手を引き抜いた。その両手のひらに無数の手裏剣があった。

片手に十七個ずつ持たれた手裏剣。

それを器用にも一斉に投げる。

「喰らえや、三十四手裏剣！」

鍋中が空中から投げた無数の手裏剣は、人道的理由の為に、国連でも使用禁止兵器に指定されているクラスター爆弾の様に広がり、上空から黄金騎士へと複数の風切り音と共に降って行った。

まさに手裏剣の雨。

無数の手裏剣が迫る黄金騎士は、両腕で顔をまもっただけで、その手裏剣を全身で受け止める。

無数の金属音が響いた。

鎧に手裏剣が弾かれる。一つも刺さらない。

狙いを外した手裏剣と甲冑に跳ね返った手裏剣が、ベンチやレン

ガの地面に音を立てて突き刺さった。

「ちっ」

地面に着地した鍋中が舌打ちを一つもらす。

ガードしていた両手を黄金騎士が下ろすと、その奥のヘルムの覗き穴から怪しい二つの光が朧気に鍋中を見ていた。

二人が睨み合う。

その時、二人の方へと声が飛んで来た。

「堂々と面白いことをしていますわね」

「そうだね、姉さん。僕らも混ぜてもらおうよ」

「そうね、鏡慈」

鍋中の後方から女と男の会話が飛んできた。

その声に鍋中が振り返ると、見知らぬ男女が二人立っていた。

短い髪にギロッとした瞳の男と、髪の長い女。何処となく顔付きが似ている。

少々奇怪なイメージもあるが、美男美女であった。

二人は、同じ柄で肩の部分がオレンジ色の白いトレーナーを着ている。下はGパン。ペアルックだ。

二人とも締まった体つきをしていた。

黄金騎士が張った人払いの術で、公園内に普通の人間が入って来る訳がない。

「テメー等、もしかして……」

鍋中には、二人の声としゃべり方に覚えがあった。

石切り場で四人に分裂して春婆怒と戦っていた九十九神。あの時の男女の声だ。

「鏡の九十九神か……」

鍋中は、黄金騎士にも二人の男女にも背を向けないように横向きに立つ。

「他の連中は何してやがる……」

鍋中は、両サイドの敵に警戒しながら、小声で愚痴のような言葉を呟く。

黄金騎士に対して、したくもないトークをして時間稼ぎをしたのにもかかわらず、まだ援軍が到着しない。その事に鍋中が苛立ちを感じていた。

「妖怪が一匹に、九十九神が一体居るよ、姉さん」

「本当ね、鏡慈。今夜はラッキーだわ」

二人の男女の顔は、怪しく笑っていた。

その怪しい笑みに、自信が忌々しく溢れている。

「先に老いぼれ妖怪をサクッと食べましょう。九十九神はその後ね、鏡慈」

「そうだね、姉さん」

「妖力共有しましょう、鏡慈」

「ああ、わかったよ、姉さん」

二人が声を合わせる。

「「妖力共有・共鳴！」」

その合言葉と共に、二人の背後の地面から一畳サイズの鏡が一枚、ぐぐっと起き上がる様に出現する。

二人は不気味に微笑みながら、その鏡に背中から順番に入っていった。

二人が鏡の中に消えると直ぐに、青いラバースーツに紫色のプロテクターを身に付けた男が、一人だけ鏡の中から姿を現す。そして鏡は、地面の中に倒れるように消えていった。

全身青紫の怪人は、細身だが引き締まった手足をしていた。

黄金騎士に比べて一回り小さいが、決して体のサイズが小さい訳ではない。黄金騎士が大きいのだ。

青紫の怪人は、頭にパープルカラーのヘルムを被り、その顔の真ん中にY字の黒いラインがある。その黒いラインの中に、赤く光る二つの瞳が不気味に発光していた。

その二つの輝きが、鍋中には、この怪人の底意地の悪さを感じさせていた。

腰には『鏡』の字の刻まれたメタリックのバックルが付いている。

「二人まとめて蹴り殺してやる」

「そうだね、鏡慈」

青紫の怪人の中から、男女二つの声が聞こえて来る。

二体の九十九神に挟まれた鍋中が、いつの間にか少しずつ後退りをしていた。

気付けば三人の距離が、鍋中の移動で均等な距離へと変わっていた。

トライアングル。

その三角形を築く三者が睨み合う。

三つ巴の戦い。

そんな距離だった。

<　黄金の騎士と雲外鏡・3　>

トライアングルを築いた三人。

互いの距離は、十メートルぐらい。

三すくみの様だった。

鍋中改造、黄金騎士、青紫の怪人。

誰が蛇で、誰が蛙で、誰が蛞蝓という訳ではなかったが、三人の睨み合いは、見事に硬直状態を続けていた。

この睨み合い、鍋中にとっては都合が良かった。

時間稼ぎ。

皆が到着するまで時を稼がねば。鍋中は、そう考えていた。失敗してしまえば、龍信のニの舞になってしまう。

鍋中の右手には、公園の噴水がある。

直径十メートルぐらいの大きさの丸い噴水。深さはほとんどない。夜になっても噴水の水は止まっていなかった。その噴水の水音だけが、涼しく公園内に聞こえていた。

上を見れば、先程まで晴れた夜空に輝いていた星や月の光が消えている。どんよりとした雲が空を黒く染め、星空との間を遮っていた。

睨み合う三人の間で、誰から動くのかといった探り合いの空気が読み取れた。

三人の間には、夜空のように遮るものも、隔てるものも無い。

「鏡慈、時間がないわ……」

「そうだね、姉さん。この前のように邪魔が入ったら詰まらないからね」

昨日の夜の石切り場のことである。

青紫の怪人が、動いた。

鍋中に向かってだ。

「ちっ」

できるだけ時を稼ぎたかった鍋中が、悪役のように狸に似た顔を歪めて舌打ちを溢す。

青紫の怪人に続いて黄金騎士も動き出した。鍋中の方へだ。

ゆっくりと踏み出す黄金騎士。

それを鍋中が、チラリと視線だけで確認する。

「まずは俺からか……」

鍋中の言葉は、はっきりとした大きさだった。黄金騎士にも青紫の怪人にも届くようにはっきりとしゃべった。

わざとらしい声の大きさ。

黄金騎士と青紫の怪人二人が、その言葉を聞いた瞬間、我先に喰らわんと走り出す。

黄金騎士が鍋中の右側から、青紫の怪人が左側から迫る。

軽装備である青紫の怪人のほうが、若干早い。

明らかに二人は、鍋中の言葉に釣られていた。

その様子に鍋中が顔を引き締める。

「老いぼれ相手に若いのが二人がかりとは……」

そう言いながら鍋中は、両腕を水平に上げると、手のひらを二体の九十九神に向けた。

「舐めるなよ、餓鬼ども！」

鍋中の台詞と同時に、トレンチコートの両袖から茶色い枯葉が吹き出る。

袖から噴射された大量の枯葉が二体の九十九神の視界を奪い、その進行を静止させた。

「な、なんだ、目くらましか！」

脚を止めた青紫の怪人が男の声で叫んだ。

黄金騎士も脚を止めていた。

鍋中の袖から吹き出る枯葉は止まらない。

その枯葉が、ペタペタと濡れた紙の様に九十九神たちの体に張り付いていった。

「目くらましだと。そんなもんじゃあねえよ」

枯葉を噴出したまま鍋中は、突き出した両手の平をクルリと返す。

そして、親指と中指の指紋を合わせた。

「これでも喰らいやがれ！」

スナップ。

両手の合わせられた指が、パチンッと音を立てて弾かれると、その弾かれた指先から、火打石で火打鉄を叩いた時に出るような火花が飛び出る。

その小さな火花は、鍋中の袖から飛び出てくる枯葉に引火すると一瞬で大きな炎に変わった。

鍋中の両腕が、火炎放射器へと変わり、火の付いた枯葉を飛ばしていく。

「うわぁ！」

噴射された枯葉から、各怪人の体にへばり付いていた枯葉に、炎が引火していく。

二体の九十九神が火達磨になった。

「どうだい、餓鬼どもが！」

火達磨の黄金騎士が、側にあった噴水の中へとダイブして、大きな水しぶきを上げる。

まるでプロレスラーが、コーナーポストの最上段からダイビングボディープレスを敢行する様に見えて鍋中の笑いを誘う。

一方、青紫の怪人は、空中にジャンプしながら、両腕を左右に振るい、体を捻りながら勢いをつけると、ツイスターの様に回転して燃える炎を振り払う。

飛び散った火の粉が打ち上げ花火の燃えカスの様に散らばり降る中、青紫の怪人が公園の地面に着地した。

青紫の怪人は、片膝を付いて息を切らしている。

炎が呼吸の妨げになったせいだ。炎の熱を吸い肺を焼き、呼吸が出来なかったのであろう。

「く、糞じじぃが！」

男の声が、仮面の下から凄みかかって聞こえてきた。

「そんなに怖い声を出すなよ、若いの」

「！」

片膝立ちの紫ヘルムに、鍋中の拳が、大きなアッパーとなって飛び込んできた。

いつの間にか青紫の怪人に迫る鍋中の拳。

青紫の怪人は、慌てて後方へと飛んだ。

膝を付いていない片足だけでの跳躍。

脚力には自信がある。スピードにもだ。

アッパーが届く間合いから飛び出すには、片足の脚力のみで十分だった。

鍋中の不意を付いた拳が、紙一重で顔の前を通り過ぎていく。

しかし、鍋中の手には黒く塗られた木製のトンファーが逆手で握られていた。

その黒いトンファーが、手首のスナップから生まれる遠心力と共に、クルリと腕の外側から迫ってきた。

攻撃の間合いが、伸びた。

「きぃ！」

黒いトンファーの先が、鈍い音を立てて青紫の怪人の顎へと炸裂した。

そして振り切られる。

拳闘の必殺ブローの一つ。

アッパーカット。

踏み込みの脚力、全身の体重移動とバネ、その基本運動が肩の関節を回転させ、肘の関節から手首のスナップに伝わり放たれるアッパーカットと呼ばれる技。

本来、黒人ボクサーの様に全身のバネが優れた人種が打てば完璧に近い必殺技になるとボクシング界ではいわれているパンチ。

アッパーカットとは日本人が扱うには、体型に合わないパンチらしい。

しかし、鍋中は、そのアッパーに、トンファーと呼ばれる武器で、もう一つの関節を増やし、更なる遠心力を追加させて青紫の怪人にぶち込んだ。

トンファーの追加されたアッパーを顎に喰らった青紫の怪人が、体を仰け反らせながら後方へと飛んで行く。

綺麗な喰らい方だった。

そして背中から公園のレンガ作りの床に落ちていく。

青紫の怪人は、顎を両手で押さえながらのた打ち回る。

鍋中の右手にあるトンファーも、今の一撃で折れてしまっていた。

鍋中は、その折れたトンファーを無造作に投げ捨てる。

公園の噴水。

その水の中から黄金騎士が起き上がる。

甲冑の隙間から、穴の開いた鍋のように水が出ていた。

「オメーさんは、これでも喰らえ」

そう言って鍋中は、頭に被っていたハンチキャップの鍔をつまみ、噴水の水の中から出ようとしていた黄金騎士目掛けて投げつけた。

円盤の如く回転して飛んで行く茶色いハンチキャップ。空中で回転しながらギザギザの刃が飛び出でる。

そして、その刃物が飛び出たハンチキャップが黄金騎士の喉元に直撃すると、ガリガリと音を鳴らしながら回転して火花を散らした。

その一撃の勢いで再び黄金騎士は、背中から噴水の中へと倒れこみ水しぶきを上げた。

「その帽子は、お気に入りなんでな、後で返してもらうぞ」

水しぶきを上げて倒れた黄金騎士を見ながら鍋中が、そう呟く。

白髪まじりの七三の髪型。髪の毛の一本一本が太めなのか、鍋中

の帽子を取った髪型は、やたらとガサガサに見える。

その後頭部を狙って、先程までのた打ち回っていた青紫の怪人が、高々と跳躍して飛び込んで来る。

「きぃあーーー！」

奇声を上げながら青紫の怪人が、飛び蹴りで鍋中の後方から迫る。

「今度は、お前が喰らえ！」

青紫の怪人が、男の声で叫びながら、鍋中の後頭部に飛び蹴りを打ち込んだ。

蹴り足が、後頭部に減り込み顔面へと突き抜けていく。

「何！」

蹴った本人が、空中で驚いていた。

自分が放った蹴りは、そういう類の蹴りではない。

着地した青紫の怪人の目の前で、頭部に穴が開いている鍋中の体が、枯葉と変わって崩れ落ちていく。

「変わり身の術ってやつだ」

鍋中の声は、青紫色の怪人の後方から聞こえた。

「きぃぃ！」

青紫の怪人は、悔しそうな声を上げながら後ろを振り返ると同時に、大振りの裏拳を勢い良く放った。

ブウンと、風が鳴る。

「！？」

だが、声はしたが背後に誰も居ない。体ごと振るった裏拳が無人の空間を切り裂いた。

振り返りながらの裏拳を空振りした青紫の怪人の後方。

先程、変わり身の術で使われ崩れ落ちた枯葉の山。その中から刀を構えた鍋中が飛び出してきた。

鍋中は振り被った刀を袈裟切りで青紫の背中目掛けて振るうが、青紫の怪人は低い体制に変わり、前転で地を転がりながら逃げて行った。

「ちっ。こんどは避けられたか……」

刀を振り下ろした構えから自然体にもどり立ち尽くす鍋中の頭には、黒い布が巻かれ、狸に似た顔は隠されていた。トレンチコートの下が、いつもの皺のよったスーツではなく、黒装束に変わっている。

トレンチコートに黒覆面の忍者。そんな成りをしていた。

甲冑の隙間から水を垂れ流す黄金騎士が、再び噴水の中から起き

上がってくる。

転がり逃げた青紫の怪人も立ち上がった。

二体の九十九神が、自分たちを弄んだ小太りの忍者を睨んでいた。

「わっはっはっはっはっはっ！！」

その時、星空が雲に隠れはじめた町の上空から、頭のゆるそうな笑い声が高々と響いてきた。

三人が、その間の抜けた笑い声に、揃って空を見上げた。

そこには、眩く光る物が円を描きながら飛んでいた。

「ヘラクレスとかーーーー、コウカサスとかにゃあ負けられねーーーーー！！」

そう叫びながら飛び交う発光体が、外来種にコンプレックスを持った台詞と共に急降下して来る。

「ただいま参上！」

そして、鍋中の側に着地した。

「子供達の永遠のアイドル、カブトムシの中のカブトムシ！」

地上に着地したのは、真っ黒い鎧武者。

「一七五一家一番の暴れん坊、虫玄武兜丸ジョニーＤＸとはぁ～、

俺様のことだぁぁ～～！！」

兜の額には長く立派な角があり、背中にはカブトムシのような艶のある甲羅で羽を隠している。

その額の角からバチバチと音を立てながら電撃を体全身に放出しており、その電撃が彼の黒い甲冑を光らせていた。

もしも、額の角がなければ、蛍の鎧武者と勘違いされるかもしれない。

しかし、立派な角も電撃の光もないと、ゴキブリの鎧武者と勘違いされやすい。

本人は、それを一番恐れ、登場の時に自分の名を歌舞伎の台詞を真似て叫んでいるのだ。

「遅いぞ、テメー」

「あれ、九十九神が二体いるのか……」

「ああそうだ。年寄りばかりに戦わせてないで、とっとときやがれ」

自分の側に舞い降りた鎧武者に愚痴る鍋中。

だが、こんなバカでも今は心強く見えた。

頭は悪いが、腕は立つ。

「すまねー、おっさん。他の奴らは？」

「まだだ……」

「じゃあ、二対二。丁度いいじゃねえか」

そう言いながら虫玄武は、腰にぶら下げた二本差から大刀を引き抜く。

「虫玄武、お前は、あっちの青いのを相手しろ」

「あ～、なんでだ？」

別にどちらの相手をしても良かったのだが、自分に小さい方を宛がわれたのが気に入らなかったらしい。虫玄武が理由を問う。

虫玄武の小さな脳では、体の大きさが強さのパラメイターを大きく締めている様子だった。

「あっちのデカ物に、大きなつけがあってな、きっちり返してもらうつもりだ」

「理由は分からんが、男同士のケジメのようだな。ならば今宵は譲る！」

そう言うと虫玄武は、刀を構えて青紫の怪人の方を向いた。

まだ虫玄武は、龍信や静香が死んだことに気付いてない様子だった。鈍い男である。

「すまん、恩に着る……」

小さく囁く声だった。そう言って噴水の中に立つ黄金騎士の方を向く鍋中。

虫玄武が、らしくない言葉を言った鍋中の背中を一度だけ振り返り見た。

何故か、その背中が寂しくも見えた。

だが、その理由には気付かない。

実に鈍い。

鍋中と黄金騎士が睨み合い、虫玄武と青紫の怪人が睨み合う。そして、鍋中と虫玄武が背を合わせていた。

誰が誰とやり合うか、四人の中で暗黙の承諾が結ばれた様子だった。同意した物同士が睨み合う。

黄金騎士ｖｓ鍋中改造。

青紫の怪人ｖｓ虫玄武兜丸ジョニーＤＸ

人払いのされた公園内で四人が睨み合う。

<　黄金の騎士と雲外鏡・4　>

街の上空に、どんよりとした雨雲が何処からともなく現れ広がっていく。

まだ雨まで振り出してないが、いつ振り出しても可笑しくない空の景色へと変わっていた。

黒い雲の流れは早い。見る見るうちに街を包んでいく。

上空の色の変化は、噴水のある駅前公園からもはっきりと分かった。

その噴水の公園内に居る二体の九十九神と二匹の妖怪。

金色に塗られた小槌の九十九神と、鏡が変化した九十九神。

その二体の九十九神が妖力共有した姿と向かい合う二匹の妖怪。

背を合わせる鎧武者とトレンチコートを羽織った忍者。

二体、二匹の九十九神が、睨み合い、構え合っている。

その間を、上空の雨雲を連れてきたのと同じ風が流れていく。

湿り気が感じられる風だった。

青紫のプロテクターを身に付けた鏡の九十九神の体には、何やら煤けた焦げが付いている。

黄金騎士の大きな体は、未だに噴水の水の中にあった。脛の辺りまで水に漬かっている。

黒装束にトレンチコートを着た鍋中が、黒い覆面の隙間から、その黄金騎士を睨んでいた。

鉄が揺れて微かな音を立てた。鍋中の背後だ。

虫玄武兜丸ジョニーＤＸが、自分の前方に居る青紫の怪人へと一歩踏み出した。聞こえたのは、その一歩の踏み込みで、身に付けた甲冑が揺れて立てた音である。

虫玄武が刀を構える。

四人の中で始まった硬直状態、それを虫玄武が崩す。

「うりぃあぁぁぁぁぁ！！」

気合の篭った声と共に虫玄武が青紫の怪人に仕掛けた。

虫玄武には、一つの考えがあった。

自分が此処に到着する前、既に三人は戦っていた。

それは、地面に幾つもの忍者武具が散らばっている事から悟れる。

折れたトンファー、忍者刀、鎖鎌、クナイ。

ベンチの一つは、無数の手裏剣で蜂の巣になっている。

結構激しくやり合ったのだろうと読んでいた。

その一部が、死んだ龍信の物とまでは気付いていなかったが。

虫玄武は、その光景から、一番自分が体力を消費していないだろうと考えた。

そして、他の者達よりも体力的に有利な自分が初っ端から飛ばして一体の九十九神を全力で叩きのめし仕留める。その後に鍋中と一緒に残りの一体を潰す。虫玄武は、そう企んでいた。彼も、そのぐらいの作戦は立てられる。

虫玄武の雄たけびに、青紫の怪人が構えた。

素手の構え。

サイドワインダーの構えだ。

横向きに構えて左肩を虫玄武に向けながら、爪先でリズムを刻むように跳ねる。可憐なステップだった。

「抜き身の俺様に素手とは、見上げた根性だ！」

三メートルの距離を残したところで虫玄武が兜の上に刀を振り被りながら跳躍してきた。

意外と軽やかなジャンプだった。

甲冑で重量感の感じられる虫玄武の体が宙を飛び、威圧的に青紫

の怪人へと迫る。

大きな圧力の塊が、カタパルトで発射されたようだった。

三メートルの距離が、そのジャンプで縮まった。

「りぃあぁぁ！」

虫玄武の大刀が、青紫色の頭に振り落とされる。

「合わせ鏡の術！」

虫玄武が繰り出すジャンピング兜割りの一撃を青紫の怪人は、左右に分裂して回避した。

「何！」

大刀が振り下ろされたラインの左右に立つ二体の九十九神。

青紫の怪人が、男女の姿に分かれて立っていた。

右のサイドワインダーの構えに、左のサイドワインダーの構え。

女の九十九神の方がサウスポーである。

「二人にだと！」

驚いて声を上げた虫玄武の仮面に、男女二人のサイドキックがスピーディーに飛んできた。

鉄を叩く音が同時に二つ響く。

「ぐぼ！」

二つの蹴りが同時に炸裂して、虫玄武の両頬を蹴り飛ばした。

「なぬなぬなぬー！」

よろめき後方に下がった虫玄武は、蹴りでずれた仮面を片手で治す。

今度は、二人に分裂した青紫の怪人から動いて来た。

前に出た男女の九十九神が、虫玄武を挟む様に左右に移動した。

「ぬぬ！」

まずい陣形だと直ぐに悟った虫玄武が、右に走り出す。しかし、その動きにぴったりと合わせて男女の九十九神が走った。

二人は、虫玄武を挟むフォーメーションを崩さない。

「こいつら慣れていやがる！」

三人が横に走ったことで、黄金騎士と鍋中の側から三人の距離が離れた。

公園の中央にある噴水の右側と左側を舞台に、各自の戦うステージが分けられた。

その様子を鍋中が横目で確認すると、目の前の黄金騎士に話しか

けた。

「こっちもぼちぼち始めるか、なあ井川……」

「……」

鍋中は、わざとらしく人間の名前で黄金騎士を呼ぶ。

その僅かな陽動に、黄金騎士の中で井川の心が揺らぐ。

まだ、井川の中に、後ろめたさが残っていた。その迷いを露出しないように堪えている。

「これからが本気だ。きっちり仲間の仇は、討たせてもらうぜ」

そう言う鍋中のトレンチコートの裾や袖の中から大量の枯葉が噴出してくる。

その大量の枯葉が、あっと言う間に鍋中の体を包むと更に大きく膨れ上がっていく。

渦巻く枯葉の球体。

見る見る大きくなって行く枯葉の塊は、大きさが三メートル以上の高さになっていた。まるで新しく生まれようとしている銀河の渦にも見えた。

その枯葉の塊から伸び出る四本の突起物が手足に変わっていく。

気が付けば、枯葉の固まりは、巨大なゴリラの形を作っていた。

「どうでい、枯葉入道の術1／3バージョンだ」

枯葉で出来た三メートルのゴリラ。その頭部に鍋中の上半身がムクムクと生え出てきた。

「魔力が先日の戦いのせいで少なく本来の術より小さいが、テメー相手ならば、これで十分だろう！」

黒い覆面の下で、狸に似た鍋中の顔が笑っていた。

ガシャドクロが油義邸で暴れまわった事件のさいに、鍋中は妖力を全て使いきって未だに回復しきっていなかった。

昨日の夜、石切り場で見せた枯葉入道の術は、見せ掛けだけの威嚇で、中身は空っぽの張りぼてであった。動き回って戦える物ではない。

だが、この1／3バージョンは別である。

身長もパワーも1／3だが、十分戦える代物。今、鍋中が黄金騎士の倒せるとしたら、この術を持ってしかないだろう。本人も、それを承知で、この術を仕掛けてきたのだ。

これが、鍋中にとっての最終決戦だった。

「スクラップにしてやるぞ！」

枯葉のゴリラが、威嚇をするように両拳を振り上げた。

巨体を支える両足よりも、その両腕は太く長い、そして拳は鉄球の様に大きい。その成りから破壊力が物語られている。

自分より巨大な物が、頭上から威嚇して迫る。

だが黄金騎士は、その光景を見ても逃げなかった。

蓋口静香が逃げなかったように、黄金騎士も、否、井川秋雄も逃げなかった。

「引かない、下がらない、僕は、未来に進んでいく！」

歪んでしまっているが、真っ直ぐな誓い。その誓いを込めて、黄金騎士も小槌を振り被った。

横から後ろへ振り被られた小槌が、湿っぽい空気を揺らす。

枯葉入道の豪腕と、正面からぶつかり合う積もりだ。

「うおおおぉおぉおぉ！」

「でぇあぁぁぁぁぁ！」

縦振りの鉄拳と、横振りのハンマーが振り切られる。

豪腕と小槌が激しくぶつかり合い、激突した。

枯葉のゴリラの巨体と、黄金騎士との間で衝撃が爆裂して、二つの体の間から勢い良く飛び出して行く。

それが、強い突風となって公園内に広がって行った。

草木や噴水の水が揺れていた。

「やるじゃあねえか、糞餓鬼が！」

吠える鍋中。

無傷のまま立ち尽くす黄金騎士。

一方、鍋中の枯葉入道は、振り下ろしたゴリラの左拳が砕けて無くなっていた。

<　黄金の騎士と雲外鏡・5　>

噴水の向こう側から突風が吹き荒れた。

突風に噴水の水が舞い上がり、水しぶきと変わって反対側で戦っている三人の元まで飛んで来る。

その湿った突風を浴びながら、青紫のプロテクターを纏った男が、噴水の向こう側をチラリと見て言った。

「おおぅ、あっちは派手だね、姉さん」

「そうね、鏡慈」

それに、男と似たデザインのプロテクターを纏った女性が、いつもと同じように男へ返事を返す。

鍋中の作り出した茶色いゴリラのゴーレムと黄金騎士の激突で生じた突風を体で受けた青紫の兄弟が、刀を構えた虫玄武を自分達の間に置いて、明るい声で会話をしていた。

「こんにゃろう……」

男女の間で、鎧武者の虫玄武が歯がゆい台詞を小さく吐いた。

「よし、姉さん。このゴキブリ武者を、とっとと蹴り殺そうか」

「そうね、鏡慈」

「誰がゴキブリだ！　俺様は、子供達の永遠のアイドル、カブトムシだ！　テメーも男なら俺様の気持ちが分かるだろうが！」

虫玄武が、青紫の男の台詞に感情を露にして、手にある日本刀を振り上げた。

刀身の長さ72．4センチ、反り1．4センチの日本刀。更に妖力で強化されている。その繊細で美しい刀身が、虫玄武の頭上で外灯の光を美しく反射させていた。

「うりゃ！」

虫玄武の剣技が青紫の男を狙い、鋭く振り下ろされた。

しかし、その一撃を青紫の男は、軽々とバックステップで回避した。

すると、虫玄武の背後から、青紫の女の蹴りが飛んでくる。

「ふごぉ！？」

女の足刀。その蹴りが虫玄武の背中の甲羅を叩く。蹴られた虫玄武が、衝撃で前のめりに倒れそうになるが、前に一歩踏み出し堪えて見せる。

「にゃろ、この尼が！」

虫玄武が、自分の背中を蹴った女に凄みながら振り返る。そして、横一線に刃を振るう。狙いは女の首。キラリと光を反射させながら刃が飛んで行く。

しかし青紫の女は、身を屈めて残技を回避した。

刀を振り切った虫玄武に、今度は青紫の男の蹴りが、背後から飛んでくる。

「ぎょ！」

青紫の男の前蹴りが、虫玄武の脇腹を蹴り飛ばす。

虫玄武は、脇腹から斜めに体を反らした。

だが、その直後。

「であっ！」

虫玄武の刀が巧みな剣筋を描いて青紫の足を狙う。

剣筋が、閃光となって暗い空間に光の尾をのこし飛んで行く。

「その脚、もろうたー！、ふご！」

刀を振るいながら生きの良い台詞を放った虫玄武の腿に、青紫の女のローキックが乾いた音を立て打ち込まれる。虫玄武は、その一撃に声を立てながらバランスを崩す。日本刀の刃も、狙った獲物を逃がしていた。

「ざけんな！」

二激。

虫玄武が左右の二人に一振りずつ振るう。

縦の一振り、横の一振り。

感情を映すような荒い剣筋を、青紫の男女は容易く避ける。

青紫の男が、サイドステップで縦の一振りをかわす。青紫の女は、横の一振りをジャンプで刃が過ぎる寄りも早く上空へと飛び、見事にかわした。

そして、青紫の二人は、そこから攻撃を繰り出す。飛び蹴りと中段後ろ廻し蹴り。

女の飛び蹴りが虫玄武の兜を横から蹴り、男の後ろ蹴りが甲冑の胸を蹴っていた。どちらの蹴りも、足の裏で蹴っている。衝撃が、虫玄武の鎧の中へと響いていった。

「ぬぬぬぬぬ！」

虫玄武は、まるで吊るされた鐘になった気分だった。

飛び蹴りで兜を蹴りつけた青紫の女が空中から着地した。まだ、虫玄武はダメージによろめいている。そこに、青紫の男の方が蹴りを繰り出した。

男の廻し蹴り。

爪先が兜と鎧の隙間を突いて喉仏を狙う。その蹴りは、アイスクライミング用のピッケルの如く、虫玄武の仮面の下へと滑り込む様

に突き刺さった。

「ぐは！」

爪先の蹴りを喉に喰らった虫玄武の仮面の奥から、苦痛の声と共に涎が飛び散る。苦痛に視界も揺れていた。

「そぉ～れ」

苦痛に背を丸めた虫玄武の隙を突いて、日本刀を持った右腕の手首を青紫の女が力任せに蹴り上げた。

「あっ！」

すると、虫玄武の手にあった愛刀が宙を舞い、少し離れた公園の地面に落ちて突き刺さる。

虫玄武が、愛刀の飛んで行った先に気を取られている間に、青紫の二人が、更なる蹴り技を放つための攻撃体制の準備を始めていた。

下段前蹴り。

同じ蹴り技だった。

二発の蹴りが、虫玄武の両膝を外側から同時に蹴り飛ばす。

二つの蹴りを喰らった虫玄武の両足が、内股になって両膝の内側をぶつけ合う。

蹴られたままの内股で立つ虫玄武が、バランス感覚を無くした酔

っ払いの様に立っていた。両足へのダメージで、立っているのがやっとに見える。

兜の仮面に隠れて見えないが、虫玄武の表情は、苦痛と悔しさで歪んでいた。

思うように戦えないとは、とても悔しい。

この相手は、自分達のペースを守りながら戦い、相手のペースを崩しながら戦うタイプだ。以前に戦ったタケシと春婆怒組とは、まったくの正反対のタイプ。

タケシと虫玄武が戦った時は、お互いに全力で技と技を、力と力を、心と心をぶつけ合えた。実に気持ちいい戦いだった。

だが、こいつ等は違う。

自分達の戦い方を徹底的に守り、相手に何もさせない。そうやって勝利を掴もうとしているタイプだ。

虫玄武の様な闘いの中に情熱を求めるタイプとは、まったくの正反対のタイプだ。まともに噛み合うことはないだろう。

そして、虫玄武のようなタイプは、青紫の怪人にとって、手玉に取りやすいタイプ。特に得意としている相手であった。

「鏡慈、決めましょう」

「ああ、姉さん」

そう言った青紫の二人が、更なる同時攻撃のタイミングを合わせる。

女は、柔軟な股関節で右足を天高く振り上げ、男の方は、サッカーのエーストライカーの様に、後方へ右脚を振り被った。

青紫の二人は、全身のバネを伸ばして勢いを力として溜めると、同時に溜めた力を開放しながら蹴りを放った。

下から男の蹴りが跳ね上がり、上から女の踵が落ちてくる。

二つの蹴り技が狙うのは、虫玄武の頭部。

「ふがぁっ！」

内股になってよろめいていた虫玄武は、その攻撃をガードする事すらままならなかった。

鉄が割れる音が、激しく響く。

男の蹴りが虫玄武の顎を蹴り上げ、女の踵落しが虫玄武の脳天目掛けて落とされていた。

内股で立っていた虫玄武の頭部が、下と上からキックで挟まれ揺れている。

二つの脚に挟まれたままの虫玄武の体から、力が消えていくのが見えた。

勝負が決まったと思えた。

「なめんなよ！」

そう言いながら虫玄武の体が動き出した。まだ、事切れていない。そして、自分の兜を蹴り挟んだ二つの足を、両手でガッチリと掴んできた。

「やっと捕まえたぞ！」

下から顎を蹴り上げた男の脚を、胸の前で抱えるように片腕で挟み。頭部に落とされた脚を後頭部で抱え、伸びきったむ膝を決める様に右手で押さえていた。

「「！？」」

外れない。

「喰らえ、電撃大放出！！」

虫玄武の兜に生えた角から電撃が、ここぞとばかりに激しく放出された。そして、捕まえた両足から青紫の男女へと放電していく。

「「！！！！！！！！」」

青紫の男女は、筋肉が電撃で収縮して、上げたくとも上げられない悲鳴を心の中で叫んでいた。

しばらくして虫玄武の報復の放電が止る。

片足を虫玄武に取られて、片足だけで立っていた二人から、うっ

すらと焦げ臭い煙が上がっていた。

「ざまあ見やがれ！」

そう虫玄武が呟いたとき。煙を上げる二人の地にある脚が跳ね上がった。

その跳ねた脚が空中で胸元まで引き寄せられると、今度は、虫玄武の頭を両サイドから蹴り挟む。

「あぎょ！」

今度は、頭を横から蹴り挟まれた虫玄武が、可笑しな声を上げた。

二人の掴まれた足が、蹴りの勢いで引っこ抜け、その反動で後方へと飛んで行く。そして、背中から地面に落ちると両膝を丸めてゴロリと転がり、素早く立ち上がる。

左右に飛んで行った二人が立ち上がると、代わりに虫玄武ひとりが片膝を地に付けた。

虫玄武に、確実なダメージの蓄積が見て取れた。

「姉さん、もうめんどくさいよ、あれで決めちゃおうよ」

「ええ、そうしましょう、鏡慈」

二人の言葉から、何か、更なる大技を仕掛けて来るのが悟れた。その気配を感じ取った虫玄武は、震える足を堪えて立ち上がった。

「ちっ、脚に来てやがる……」

そう呟きながら、飛んで行った自分の刀を探す虫玄武。

その虫玄武を相変わらず左右から挟むフォーメーションを組む青紫の怪人は、五メートル程の距離を残したところで、サイドワインダーの構えから股を左右に開き腰を深く落とし始めた。

「「八鏡面方位結界」」

「ぬ！？」

二人が叫ぶと、虫玄武を囲むように一畳サイズの鏡が八枚、床から起き上がり現れる。

「これは、天野太陽を殺った術か！」

虫玄武が身構えるが、もう遅かった。

八枚の鏡に囲まれた虫玄武。その鏡の背後が黒く染まっていく。

暗黒。

八枚の鏡と虫玄武だけが、暗黒の空間に残された。

「ど、どうなってやがる！」

合わせ鏡となって無限に重なり合い映り合う鏡たちに、虫玄武の姿も無限に映っていた。

虫玄武は、体に残るダメージを忘れて辺りを警戒した。

「これがフィニッシュキックだ！」

「来るか！」

八枚の鏡の中から虫玄武の姿が消えた。代わりに四人の男と、四人の女が、姿勢の低い忍者走りで迫ってくる。虫玄武は、その八枚の鏡の中央で、キョロキョロしているだけであった。

「「八体同時、多勢無勢脚！」」

鏡の中の八人が、飛び蹴りを放とうと跳躍しようとした。

その刹那。

「なに！？」

そう叫んだのは、鏡の中の男たち四名。

「えっ！？」

四名の女達も、僅かに遅れて声を上げた。

その声と同時に、八枚の鏡が割れて崩れ落ち、暗黒と化していた辺りの景色が、元の公園の風景へと戻っていく。

割れ落ちた八枚の鏡の後ろには、無常水越斎と七人岬が一人ずつ立っていた。

この八名が、八枚の鏡を後ろから割ったのだ。

「水越斎……か、助かったぜ……」

安堵の声を漏らした虫玄武が、再び片膝を付きながら体を落とす。

「これは、貸しでござる」

「ちっ、遅れてきた癖に、恩着せがましい奴だな……」

余裕の笑みで言った水越斎に、虫玄武がもっともな言葉を返した。

片膝を付いている虫玄武を八名の妖怪仲間が囲んでいた。

その九人が居る場所から、七から八メートル程離れた場所に、青紫の男女が立っている。僅かに息が上がっている様子だった。二人の胸が上下している。

七人岬の一人が、その青紫の男女に気付き白目を向いた顔を向けると、他の者達も其方に体を向けた。そんな中、虫玄武も肩で息を切らせながら立ち上がる。

「まさかあのタイミングで助けが入るとは……。運のいい奴だ」

「まったくね、鏡慈……」

「姉さん、こうなったらこっちも、本気の本気で行こうよ」

「そうね、鏡慈。本気の本気で行きましょう！」

「「合わせ鏡の術」」

そう言って二人は、左右に一歩踏み出し、男女男女と、四人に分裂する。

「「「「合わせ鏡の術」」」」

更にそう言って四人は、左右に一歩踏み出し、男女男女男女男女と、八人に分裂して横一列に並ぶ。

「面白いな……」

青紫の怪人が八人に分裂していくのを見ていた無常水越斎がそう言うと、その横に七人岬が一列になって並ぶ。

八体に分裂した青紫の怪人と、無常水越斎と七人岬が、甲子園の試合前の球児の様に向かい合う。

今度は、八対八。

横一列に並ぶ七人岬の横へ、飛ばされ地面に突き刺さっていた自分の刀を引き剥いた虫玄武が戻って来て並んだ。妖怪連合の方が、これで一人多いことになる。

「虫玄武殿、貴方は鍋中殿の方を助けに回ってください」

列に加わった虫玄武に気付いた水越斎がそう言う。

しかし。

「ざけんなよ。こっちとらぁ、散々蹴られまくったんだ、ここで引けるか。お前が向こうの助太刀に回れ！」

虫玄武の言っている事は、もっともであった。水越斎が、その言葉に従い、列から外れようとした時である。

「「「「「「「「「合わせ鏡の術」」」」」」」」」

更に青紫の怪人が分裂した。その数、十六人へと。

「虫玄武殿、やっぱり私は残るでござる。虫玄武殿も此方に残ってくだされ……」

「ああ……、そうするぜ」

二人は十六体に増えた青紫の怪人を見て、呆れた声を漏らしていた。

「それにしてもこいつら、限度をわきまえやがれよ……」

複数の視線が、バチバチと音を立てて飛び交う。

八対八を改め、十六対九の団体戦による大乱闘が始まろうとしていた。

<　黄金の騎士と雲外鏡・６　>

向かい合い睨み合う十六体の九十九神達と九匹の妖怪変化達。

妖怪達は、右から無常水越斎、巨漢で元相撲取りの七人岬、同じく七人岬のドレットヘアーの男、続いて元ボクサーの七人岬、１６０センチぐらいの小柄で痩せた老人の七人岬、頭に被った編み笠から長い三つ編みの髪が垂れ出た七人岬、更に褐色の肌をもつ男と、上半身が逆三角形のマッチョで長身の七人岬が並んでいる。

そして最後、一番左側に居るのが虫玄武兜丸ジョニーＤＸだった。

その向かいに十六体の青紫色の姿をした男女の九十九神が複数構えていた。

「人海戦術で、一気に蹴り殺してやる」

「そうね、鏡慈。袋にしてあげよう」

十六体居るうちの二人がそう言うと、一斉に分裂した九十九神達が走り出す。

「新・七人岬、初仕事だ、思う存分に暴れなさい！」

水越斎の台詞に、亡者のような面構えをした七人岬達が、我先にと走り出す。

九十九神達と七人岬達が、ぶつかり合う津波の様に激突した。それに続いて水越斎と虫玄武の二人も遅れながら攻め入る。

大乱闘の始まりだ。

九十九神の蹴りや突きを、巧みなフットワークで掻いくぐりながら一人の七人岬が、敵の中央へと滑り込んでいく。

扈鼠に飲み屋街でスカウトされた元ボクサーの男だ。

七人岬になった元ボクサーの顔には、分厚いレンズの眼鏡が無くなっていた。

あの眼鏡が無ければ、何一つ形が分からないほどの視力しか無い男が、眼鏡を掛けずに戦っている。

七人岬に、怨霊に落ちるといった代償を払ったが、この男は、その代わりに視力と永遠の戦場を手に入れたのだ。

そして今、そこまでして手に入れた舞台で、磨き積み重ねた拳闘の技術を披露していた。

元ボクサーの七人岬が、九十九神のハイキックをダッキングでかわして近づくと、そこからボディーブローを叩き込み、続いてフックを顔面にぶち込んだ。

それだけでは止まらない、更にパンチをマシンガンの如く一ダース分叩き込んだ。

九十九神の一体が、その拳の連打に砕け散る。まるで割れた鏡の様に、砕けて地面に落ちていく。

別の九十九神が、元相撲取りの七人岬にハイキックを打ち込んだ。

斜め下から斜め上に跳ね上がる、切れ味の良さそうな蹴りだった。

蹴りは、相撲取りの顔面を捕らえるが、蹴られた相撲取りは揺らがない。びくともせずに立っていた。さすが生前、小結まで上り詰めた男である。

九十九神の蹴り脚が戻るのと同時に、大きな手を伸ばして九十九神のベルトをマワシの様に掴んで引き寄せる相撲取りの七人岬。

更に両手で左右のベルトを掴んだ七人岬が、力強く九十九神を釣り上げる。

そして、フォークリフターにでも釣り上げられたかのような九十九神のベルトの位置が、七人岬の胸元まで来ると、そこから横へと九十九神を地面に叩きつける如く投げ捨てた。

一メートル半以上の高さから硬いレンガの床に、肩から強烈な投げで叩きつけられた九十九神は、ガラスが砕ける音を鳴らして、木っ端微塵に粉砕してガラス片へと変わる。

「とぅるるるるるるぅぅーーー！」

七人岬の一人が巻き舌で叫びながら九十九神の一体に、左右の鋭い肘を打ち込んでいた。褐色の肌をした七人岬だ。

左右の肘フックで九十九神の頭部を削り取るように殴り続けたあと、今度は両腕で九十九神の頭を抱え込む。

そして下から左右の膝を交互に打ち込み始めた。

ムエタイの技、チャランボだ。

ホディーや顎に交互の膝を何発も喰らった九十九神が、首筋を七人岬に抱えられながら鏡の破片と変わって砕け散って落ちていく。

大乱闘の中、不思議な踊りのような構えを見せる七人岬の姿が一つあった。

腰を曲げた低い構えでリズムを取り、左右に体を振って踊るような構えを見せるドレットヘアーの七人岬。

その七人岬に九十九神の一体が、鋭いミドルキックを放つ。狙いはドレットヘアーの頭。熱い乱闘の空気を切り裂き飛んで行くキックの一撃。

だが、そのミドルキックをドレットヘアーの七人岬は、側転で軽やかに回転しながら回避した。

派手な回避術に、蹴りを放った九十九神も度肝を抜かれていた。しかもドレットヘアーの七人岬は、側転回避から直ぐに攻撃に転じる。

回るように体をスピンさせ低い位置から中段蹴りで九十九神の腹部を蹴り上げた。威力も十分にあった。

そして今度は、器械体操のあん馬をする様に両手で体を支えながら回転すると、両脚で変則下段二段蹴りを繰り出す。その蹴りが、九十九神の両脚の脛を連続で叩いた。

更に九十九神の顎を、起き上がり際に肘でカチ上げると、スピンキックで頬を蹴り飛ばす。

続いて勢いそのままに空中に飛び跳ね、両足を揃えた変形の大車輪キックを顔面に叩き落してきた。

両足の大車輪キックを顔面に直撃した九十九神は、地面に体を叩きつけながら吹っ飛んでいくと、少し離れた場所で、その体を鏡の様に砕け散らかす。

ドレットヘアーの七人岬が使った技は、昔、ブラジルの奴隷達が、手錠をつけたままでも戦えるように生み出した、足技が多彩な格闘術のカポエラだった。

踊っているように見えるのは、奴隷時代に、格闘術の練習をしている事が看守に悟られない為の名残である。気晴らしの踊りに見せかけて、カポエラの練習をしていたのだ。

更に乱闘は続いていた。

九十九神と交戦していた七人岬の一人が、頭に被った編み笠から

伸び出た長い三つ編みの髪を、片手で掴むとクルリと自分の首に巻きつける。

その動作がスイッチとなって、三つ編みの七人岬の動きが変貌する。

急に千鳥足になったかと思うと、まるで酔っ払いの様にふらふらとした動きを始めた。

「舐めてるのか、蹴り殺してやる！」

怒鳴り声を上げて蹴り掛かる九十九神のハイキック。

だが、背を反らせかわす三つ編みの七人岬。かわしたと言うよりも、たまたま攻撃が外れたようにも見えた。

今度は、九十九神が腹部を狙って横蹴りの足刀を放つ。

三つ編みの七人岬は、その蹴りも体をくの字にして回避した。

だが、その足取りは、ダメージも受けてないのにフラフラで、いつ倒れても可笑しくない様子だった。

続けざまに放たれる九十九神の攻撃。

ローキック。

「ほい」

膝蹴り。

「よっと」

踵落とし。

「ほっとな」

変幻自在に繰り出す九十九神の蹴り技を、三つ編みの七人岬は酔っ払いの動きのまま器用にかわしていく。

だが、その光景が九十九神に苛立ちを与えて怒りを誘っていた。

「この野郎！」

九十九神の攻撃が、怒りのせいか雑になってきた。そこに、三つ編みの七人岬の突きが繰り出される。

不思議な拳の形だった。

人差し指と中指、それと親指を若干曲げた形。まるで酒を注ぐお猪口を持っているかの形をしていた。

その不自然な拳の形で、九十九神の隙をつくと喉に一撃を叩き込む。変形の特殊な拳だが、その一撃は、強烈だった。

そして、喉を強打されて苦しむ九十九神を、その形の拳を作った両腕で挟み込み、大きな壷を抱えてグルグル回すように九十九神の頭部を回してシェイクした。

こんな光景をジャッキーの映画で見たことがある。

中国拳法の酒拳だ。間違いない。

頭を散々回された九十九神が開放された。しかし、今の攻撃で九十九神の足取りも酔っ払いのように千鳥足へと変わっていた。酔っ払いが一人増えたように見える。

ふらつきながら放つ後ろ下段廻し蹴り。

続いて大壷を持ち上げるような両腕からの肘撃ち。

さらに仰け反りながら後方に打ち込む両拳の乱撃。

そして脚を払い倒れたところに空中で体を捻りながら飛び落とすダウン攻撃の蹴り。

良く分からないまま酔っ払いに叩きのめされた九十九神が、とどめのダウン攻撃で鏡の様に砕け散る。

その直ぐ横で、逆三角形のいい体付きの七人岬が、背を丸めた構えを取って九十九神と睨みあっていた。

丸めた背を伸ばせば、相撲取りの七人岬より身長だけは高そうな男。拳は握っていない、オープンハンドだ。

その七人岬に向かって九十九神がストレートパンチを繰り出した。真っ直ぐに拳が、堀の深い顔面を狙い迫ってくる。

九十九神のストレートが、見事に七人岬の顔面へと減り込む。

しかし七人岬は、ただ顔面にパンチを喰らっていなかった。その拳の手首をガッシリと両手で掴んでいた。

そして、両足で地を蹴ると巨漢ごと跳ね上がり、両脚を九十九神の肩に絡み付けるように挟み込む。

そのまま重力に引かれ地面に背中から落ちた七人岬が、掴んだ腕を引き寄せながら背筋を使い思い切り仰け反りかえる。

飛び付き腕十時固めだ。

九十九神の腕が完全に伸びきり体が地面に引きずり込まれる様に倒れた。

ブチブチっと、靭帯が千切れる音がした。その直後、ゴキッと、肘が折れる音が響いた。

腕の肘関節が、曲がらない角度まで曲がり、折れた骨が肘の肉を盛り上げているのが見える。

そして、悲鳴の代わりに九十九神の体が痛みのダメージに砕けて消えていく。

長身の七人岬が、それを確認すると立ち上がった。男が見せたのは、ロシアの格闘技、サンボだ。

敵の九十九神達と味方の七人岬達が、それぞれ争う中、その中央で何もせずに立ち尽くす一人の七人岬が居た。

七人岬の中でも一番の小柄で華奢に見える老人。その老人の七人岬に気付いた九十九神が、後方から飛び蹴りで襲い掛かる。

老人の七人岬は、後ろから迫り来る九十九神に振りかえる事無く、頭を屈めて蹴りを回避した。そして、飛び蹴りで伸ばした九十九神の股座に右手を忍ばせ、左手で肩を優しく掴み軽く下へと引く。

すると、九十九神の体が風車の様にクルリと回転して、頭から地面に落ちていく。

「ふご！」

ダメージは浅い。直ぐに九十九神は立ち上がった。そこに老人の七人岬が、目の前に詰め寄って来た。

九十九神は、老人の七人岬に慌てて蹴りを跳ね上げる。真下から掬い上げるような蹴りが、老人の七人岬の股間を狙う。金的だ。

しかし、老人の七人岬は、小さな体を軽く横向きに変えるだけで金的をかわし、その蹴り脚の裏側に素早く片手を滑り込ませる。

老人の七人岬は、片脚で立っている九十九神の片膝に、添える様に自分の片足を伸ばすと、膝関節を伸びきらせる為にぐぐっと押し込む。そして、抱えた蹴り脚をおもいっきり上へと持ち上げた。

バランスを失った九十九神が、不自然な体制で、後頭部から後ろへと倒れていく。

体の形が横から見ると、脚を広げてＹの字になっていた。

ゴツンと鈍い音が響いた。九十九神が強烈な角度で後頭部をレンガの地面に叩きつけていた。

今度の投げは、ダメージが深く見えた。だが、まだ九十九神は立ち上がる。

立ち上がった九十九神の右手のひらを、老人の七人岬が優しく握り締めた。

まるで和解の握手のようだった。

握手をされた九十九神が、キョトンとした瞬間、老人の七人岬は、握手をしている手首だけを軽く捻る。

すると、握手を軸に、九十九神の体が物凄いスピードで回転した。まるで九十九神が、勝手に自分から回転したように見えた。

両脚を開きながら回転して、右のこめかみから地面に、自ら飛び込んで行く。再びレンガの地面に頭を激突させて鈍い音を鳴らしていた。

今度は起き上がらない。その倒れている九十九神の顔面に、老人の七人岬が踵を叩き落す。一発、ニ発と、容赦無く。ただの顔面踏み付けを。

その容赦無い攻撃に絶命した九十九神が、ガラス細工の様に砕け散る。

老人の七人岬が使った術は、合気道と呼ばれる護身術の技だった。

しかも達人レベルの。

実戦で使用できると言う事は、武人として究極のレベルだ。

静かにその男は立っていた。

女のような長い黒髪、そして透けるような白い肌。麻の木地で編まれた涼しそうな和服を着ている。そして手には長めの合口。凛々しい表情をしているが、目が開いているのか閉じているのか分からないほどに細い。

無常水越斎だ。

水越斎に、二体の九十九神が同時に飛び掛る。そして自慢の蹴り技を仕掛けて来た。

一体は、中段廻し蹴り。もう一体は、飛び蹴りで攻め立てる。

水越斎は、ピクリとも動かない。もろに二つの蹴りを身に受ける。

そして、水ぽい音が二つ響く。

「なに！」

だが、二つの蹴りは、水越斎の体を突き破る様にすり抜けて行く。

水越斎の蹴られた部分が液体に変わっていた。

頭が半分飛びちり、体の一部も九十九神の蹴り技で飛び散っていた。それでも水越斎は立っていた。

「いい蹴りでござる」

鼻から上が無くなった水越斎が、残された口で平然としゃべった。

「ならば！」

そう叫ぶと二体の九十九神は、連続で蹴りを撃ちまくる。その蹴りの数々に、水越斎の体が水ぽい音を立てて飛び散っていく。

「これでどうだ！」

液体に変わった水越斎の体を散々蹴りまくった二体の九十九神は、息を切らしながら蹴るのを中断して、敵の様子を窺う。

しかし、飛び散った水越斎の体は、直ぐに再生していく。

しかも、再生した水越斎の姿は、先程までと異なり、まがまがしく変貌していた。

水越斎は、着物の上半身を脱ぎ捨て、鍛え上げられた肌を露出させている。

しかし、その肌は透けるような白い色ではなく、気味の悪い虹色の鱗が全身を包んでいた。

その鱗は、硬そうだが爬虫類の物ではなく、魚類の鱗だった。

更に水越斎の指の間には水かきが付いており、指先の詰めは長く鋭く伸びていた。

ロンゲの半魚人。一口で言うと、そんな感じかもしれない。

「今度は、拙者の番だな」

そう言った水越斎が、その口から大型火器の様に水の槍を発射させた。一発、二発、三発と。

その水槍が、九十九神の一体の頭を砕き、心臓を貫き、腹に風穴を開けた。そして崩れ落ちながら砕ける九十九神。

隣でそれを見ていたもう一体の九十九神が、ギョットした表情を態度で表した。

圧倒的火力だった。否、水圧だろうか。

水越斎は、難なく九十九神の一体を倒して見せた。

「流石、水虎、次元が違うな」

それを見ていた虫玄武が、水越斎を褒めるように呟いた。

これが、本気を出した無常水越斎の実力である。

おそらく妖怪連合虎野町支部内で最強と言われている後処理班筆頭役の八尾弦徳と五分五分に戦えるのは、この男だけであろう。

虫玄武も水越斎のことを一目置いていた。

<　黄金の騎士と雲外鏡・7　>

十六体に分裂を見せた青紫の九十九神。

その青紫色の男女も、今では半分の人数までに減っていた。十六人が、八人に。

二十五体の大乱闘が始まって五分も経っていない。妖怪連合サイドの方が、青紫の九十九神達を圧倒していた。無常水越斎と七人岬のメンバー達が、更なる獲物と向き合いジリジリと詰め寄る。

「水越斎はもちろんだが、今回の七人岬は、結構やるな」

一人戦わず、様子をうかがいながらダメージの回復に努めていた虫玄武が、仲間の戦う様子を見ながら感心していた。

約五分。随分と休めた。敵の数も随分と減った。やはり此処は、最初に水越斎が言っていたとおり、鍋中の方を助けに回ろうかと思い直し、一度噴水の向こうを虫玄武が様子を窺う。

まだ二人は戦っている。枯葉で作られたゴリラのゴーレムが、太い腕をブンブンと振り回していた。だが、枯葉の巨漢が随分と崩れかけていた。黄金騎士の攻撃が原因なのだろう。

「結構、やられている様子だな。しかたねー、おっさんの手助けにでも回るか」

本当は、虫玄武も青紫の九十九神に、先程、散々蹴られまくった仕返しをしたかったが、何だか水越斎や七人岬に圧倒されている姿

を見ているうちに、だんだんと怒りが冷めてきていた。興味もだ。
もう、あんな奴、どうでもよく思えていた。なので不利な仲間を助けに回る事にした。

そして、噴水の反対側へと虫玄武が脚を運ばせようと思ったときである。

「姉さん、こいつら強いよ！」

青紫の男が一人叫んだ。

「そうね、鏡慈。こうなったら更に！」

「「「「「「「「「「「「「「「「合わせ鏡の術」」」」」」」」」」」」」」」」

毎度の様に、八人が一歩左右に踏み出し分裂する。八人に減った人数が、その一言で、また、十六人に数を戻す。

場を去ろうとしていた虫玄武が、その光景に足を止める。

「あ～……、またかよ……。うぜー」

鎧兜の仮面の下から、虫玄武が呆れた声を溢す。

「やっぱりあの九十九神、空気読めてね～よな……」

あの二人も、虫玄武に言われるようでは、相当のものだ。

「人海戦術、なめるなよ！」

自慢するような戦術ではない。

再度分裂した十六人が、水越斎や七人岬に襲い掛かる。大乱闘再開。

その時、黄金騎士の小槌の一撃で、鍋中のゴリラゴーレムの体が、完全に破壊されて崩れ落ちていく。

「おっさん！」

それを目にした虫玄武が、これは不味いと思い、行動を急ぐ。

虫玄武は、背中の甲羅を開き、半透明な昆虫の翼を広げる。そして飛んだ。

噴水を低空飛行で飛び越えた虫玄武が、枯葉の上に倒れこんだトレンチコートの忍者と、黄金の甲冑を纏った九十九神の間に割って入る。

「おっさん、大丈夫か！？」

虫玄武が、眼前の黄金騎士を睨みながら、後方の鍋中に問う。

「ぐぅぅぅ……」

鍋中は、自分と黄金騎士の間に立つ鎧武者に、つらそうな表情でくぐもった声を返すだけだった。ちゃんとした返答すら声にならない。先程まで巨大ゴリラの形をしていた枯葉の山の上でうつ伏せに倒れている。自力で立つ事も出来ない様子であった。

虫玄武が、眼前の黄金騎士を見てダメージを測る。だが、ほぼ無傷に見えた。否、完全に無傷に見えた。助けに入った虫玄武を前にしても、堂々とした態度で黄金騎士は立っている。その姿から圧力のようなものを強く感じた。

「こやつ……」

虫玄武は、そこまで言って言葉を止めた。

不味いと言う言葉だけが脳裏に浮かんだ。この九十九神は、やばいくらい強いと感じ取れた。

青紫の男女と戦い、受けたダメージが残る自分では、確実に敵わないと分かった。無謀な考えすら過ぎらない。

一度後ろを振り返る虫玄武。鍋中は、うつ伏せの状態で、頭だけを上げて二人を見ていた。

自力で立てない鍋中を抱えて逃げるか、それとも自分が戦い、噴水の向こうから応援が来るのを待つか。虫玄武が、この状況で一番良い行動を探る。だが、その考えの中に、自分一人で黄金騎士を倒すと言う選択肢は、これっぽっちも湧いてこなかった。

虫玄武が選択に悩む中、黄金騎士が一歩前へと踏み出す。むこうさんは、待ってくれない様子だった。

「おっさん、立てるか？」

「すまん、無理だ……」

鍋中の目は、虚ろな感じだった。既に体力も気力も妖力もゼロに近い。いつ気絶しても可笑しくない状況だ。

そんな状況の鍋中でも、虫玄武のダメージが分かった。鎧姿から感じられる妖力が、いつものように感じ取れない。かなり減っている。そんな状況の男が、自分のために、敵の前に立っている。

「虫玄武、ワシにかまうな……、逃げろ」

力無い声で、鍋中が言った。虫玄武に、その声は届いていない様子だった。例え聴こえていても、男意気を大事にしている虫玄武なら無視するだろう。

虫玄武が、片手で持っていた太刀を両手で確りと握り、新たな構えを取る。妖力が無いのなら、剣技だけで戦う。そう言いたげな構えだった。

その時である。黄金騎士の視線が、虫玄武の後方へと向けられた。視線がずれたのに虫玄武も気付く。

黄金騎士の視線が見ているのは、公園への出入り口の一つ。大乱闘が繰り広げられている光景も、虫玄武や黄金騎士の姿もちょうど見渡せる位置にある公園の出入り口。

その出入り口を通って二つの人影が、人払いの術の効果が未だ続く公園内に入ってくる。

黄金騎士の動きが、完全に止まっていた。

虫玄武は、黄金騎士の異常に気付くと、ゆっくりと後退しながら

鍋中の側へと下がった。

「あ、あいつは……」

虫玄武が、鍋中の側まで下がると、黄金騎士の視線を追った鍋中がそう言った。その台詞に、虫玄武も振り返った。そこに立つのは……。

「タ、タケシさん……」

その名を口に出したのは、黄金騎士だった。

妖怪変化達が戦いを繰り広げている公園に現れたのは、堂本タケシと、人間の姿に化けている春子・ハルバードだった。

二人はまるで、公園にたまたま立ち寄った若いカップルの様に、ぶらりと入ってきた。春婆怒の長い金髪が、緩やかな風に揺れていた。

タケシが辺りを見回す。

「今日は、派手な日だな。こんな大人数で祭りかよ」

タケシの顔が、妖しく笑っていた。春婆怒もだ。

「タ、タケシさんが、なんでここに……」

立ち尽くしたまま黄金騎士が、公園に現れたカップルを見て呟いた。いや、タケシ一人を見てと言ったほうがいいだろうか。

今現在この公園は、自分の九十九神が張った結界術で、普通の人間が入ってこれない筈なのにと思い、一瞬混乱してしまう。

そして井川は、直ぐに気付いた。ならば彼も普通ではないのだと。

目の前で倒れている刑事や、バイト先の二階に事務所を構えていた探偵のように、このバイト先の仲間も普通ではないのだと気付く。

「タケシさんまで、タケシさんまでもが、僕の未来の為に、不幸になるのか……」

俯いた黄金騎士の中で、井川が呟く。

黄金騎士の異変に気付いた虫玄武が、そのすきをついて倒れている鍋中の襟首を片手で掴み、公園の隅へと引きずって行く。

「お、あの紫野郎だけじゃなく、見たことの無い九十九神までいやがるな。それにしても、随分と数を増やしてやがるな、あの紫野郎」

「そうじゃのぅ」

タケシの言葉に春婆怒が、雨雲を見上げながら答えた。

「なあ、タケシや」

「なんだ？」

「雨が降りそうじゃ、早く終わらせようぞ。わらわは濡れるのが嫌じゃ」

タケシの横に立つ春婆怒が、本当に嫌そうな表情をして言った。
タケシが、その表情を確認すると、軽く鼻で笑う。

春婆怒は、体が鋼で出来ていることもあってか、普段から水に濡れることを極度に嫌っている。雨の日になると、アパートの部屋に引きこもり一歩も外へ出なくなる。相当、錆びるのが嫌らしい。

「じゃあ、とっとと決めて、降り出す前にアパートに帰るか、なあ」

「ああ、そうしてたもれ」

春婆怒の返事を聞くとタケシは、片手を真っ直ぐ前に突き出した。すると横に居た春婆怒が、緑色の風と共に長槍の姿へと変わる。それをタケシが、突き出した片手で受け止めた。腰には、いつの間にかフィルターベルトが巻かれてある。

「まさか……！」

遠くで見ていた井川が、囁きよりも少し大きな声で言った。

<　黄金の騎士と雲外鏡・8　>

「妖力共有・変身！」

タケシの力強い台詞と共に、手にあった長槍が、緑風と変わってタケシの周りを激しく回り始める。そして緑風が、次々とタケシの体を変えていく。黒緑の姿へと変えていく。

「あれが、タケシさんなのか！」

緑風がタケシの姿を染め変え終わると、バックルにある風車の中へと吸い込まれていく。

黒紫のボディー、プロテクター、ヘルム、そして仮面。その姿から、九十九神特有の妖気を放出していた。その妖気に井川が生唾を飲む。

「春婆怒、派手に行くぜ！」

「はよう済まして、帰ろうぞよ」

「おうよ。ハルバード・ウェポンモード！」

タケシが強化長槍を召還して武装した。

珍しいことだ。いつも素手で戦いたがり、武装の拒否を告げるタケシが、自ら武装をした。しかも、変身直後にだ。

そしてタケシは、両手を使い、長槍を頭の上でぐるぐると回し始

めた。

「ほほぅ、あの技をこころみるのかぇ」

姿の無い春婆怒が、そう言った。

「そらよっと！」

タケシが、掛け声と共に両手で回していた長槍を、真上へとほうり投げた。長槍は、まるでヘリコプターの羽のさまに上へと飛んで行く。そして、五メートルぐらいのところでグルグルと回り続けていた。

「うし、これで下準備はＯＫだな」

そう言ってタケシは、力を溜め込むように、股を開きゆっくりと腰を落とし始める。いつものように、フィニッシュキックを放つときのホームに似ていた。

その頭上で回転を続ける長槍から突風が生まれ、直ぐに突風は竜巻と変わってタケシを包む。

そこまできて、乱闘を繰り広げていた者達もタケシに気付いた。

「な、何だ！」

タケシの頭上で回転する長槍が生み出す竜巻の強風に、乱闘していた者達が全員動きを止める。

大勢の視線を浴びながら竜巻の直径が、どんどんと大きく太く育

っていく。

その太りだした竜巻に、鍋中のばら撒いた枯葉が吸い込まれていった。竜巻は、枯葉を吹き飛ばすのではなく、吸い寄せていた。その吸い込む力が、更に強くなっていく。

吸い寄せる竜巻の力に、皆が踏ん張り堪え始めた。それでも更に、竜巻の力が大きくなっていく。気を緩めれば、体ごと引きずりこまれそうだった。

「なんだ、これは！」

鍋中を小脇に抱えた虫玄武が、そう叫びながら片手の太刀を地面に突き立て強風に耐える。

その直後、七人岬の中でも一番小柄な老人が、竜巻の風に引き寄せられ宙を舞う。そして竜巻に吸いこまれた。

続いて三人、青紫の九十九神が竜巻に吸い込まれて行く。

「あいつ、竜巻に吸い込んでいるのか……」

そんなことを虫玄武が口走る中、次々と青紫の九十九神や七人岬達が、更に力を増していく竜巻の中へと吸い込まれていく。

タケシの周りを渦巻く竜巻の風の中に、何人もの人影がグルグルと回っていた。

水越斎は、竜巻に吸い込まれまいと、近くにあった噴水の端にしがみつく。そして気付く。

「水が、揺れてもいない！？」

噴水の端にしがみついた水越斎が、噴水から出ている水や水面に目をやると、これだけの強風にも関わらず、吸い込まれるどころか、激しく波打つこともなく、いつもどおりに静かな様子を見せていた。

噴水の水だけではない。辺りの植木、雑草、落ちている空き缶も、マナー悪く捨てられていたビニール袋のような軽いものまでも、何も揺れずにじっとしていた。

「こ、これは……、妖気のみを！」

水越斎が気付いたとおりであった。タケシが作り出した竜巻は、妖気を持ったもののみを吸い寄せ、巻き込んでいた。

金色のガントレットが、鎖の擦れる音を立てて飛んで行く。そして、近くにあった外灯を掴んだ。黄金騎士は、そうすることでタケシの竜巻から耐えていた。

「何なんだよ、これは！」

「きぃゃーー！」

「姉さん！　わぁ、わぁーーー！！」

そう叫びながら、十六体に分裂していた最後の一体が、竜巻の中へと吸い込まれていった。

残ったのは、噴水の端にしがみつく水越斎。それと、刀を地面に

突き刺しながら耐える虫玄武と鍋中。鎖を外灯に伸ばして堪える黄金騎士。あと一人、その体重ゆえに吸い込まれずに済んでいた、相撲取りの七人岬だけである。あとは全員タケシの竜巻に吸い込まれ、竜巻の中で回り続けていた。敵も味方も。いや、タケシから見たら関係がない。

「我が力は、嵐を呼んで！」

竜巻の中央で、腰を落としながら力と気合を蓄えたタケシが叫ぶ。すると、竜巻が街の上空へと伸びていく。

「我が技は、嵐に変わる！」

伸び行く竜巻の中で、二十二体の影が激しく回っていた。

「力と技が、俺の心に嵐を巻き起こす！　跳うっ」

その台詞と共にタケシが、竜巻の中へと自ら飛び込んだ。

「心技体の必殺技！」

竜巻の中に飛び込んだタケシは、飛び蹴りのモーションを取っていた。

「堂本流超人空手奥義第二弾、竜神昇竜脚！」

竜巻の中で回転していたタケシの体に勢いが生まれ、蹴り脚の先端から上へと登って行く。

「いっけーーーーーーーーーー！！！！」

そして、次々と竜巻の中を先に回っていた青紫の九十九神や七人岬達を、ひき殺す様にキックで粉砕しながら、下から上へと登っていく。

「なんだ、畜生！」

「鏡慈！」

「うりゃーーーーーーーーーーー！！！！！」

タケシの蹴りを喰らった者から爆発して行く。その爆炎がタケシを追いかけ続いてくる。まるで炎の尾だ。

「姉さん！」

「鏡慈！」

竜巻の中で、青紫の男女が手と手を取ろうと伸ばし合う。そんな中、彼らに向かって、竜巻を下から上へと爆炎で赤く染め上げていくタケシが、次々と竜巻に巻き込まれていた者達を砕きながら突き進んで来る。

「姉さん……」

「鏡慈……」

二人の指が、僅かに絡み合う。そして、必死に引き寄せあう。

「鏡慈、もう離さない」

そして二人の手が、握り締めあう。がっしりと組み合った。Y字の仮面越しに見詰めあう。

「うぅりゃーーーーーーーーーーーーーー！！！」

そこにタケシが迫り、手と手を取り合う二人を、容赦無く砕いて引き裂いた。

竜巻を赤く染めた爆炎が、竜巻の最上段で回るタケシに吸い込まれていく。

竜巻の中には、タケシの姿だけが残った。巻き込まれた全ての影が消えてなくなる。

そして竜巻の風力が落ちていくと、まもなくして妖怪達を飲み込んだ竜巻が消えていく。

竜巻が消えると、一人タケシが、空中から地面へ着地した。

「終わったのか……？」

タケシの姿を見て、自分の愛刀にしがみついていた虫玄武が言った。

そのタケシの肩に何かが背負われている。人間のようだ。その人物をタケシが肩から下ろす。

虫玄武は、その人間を少し前に見ていた。

この公園にペアルックで現れた可笑しな男女の兄弟。

その姉の方だった。

彼女は意識を失い、ぐったりとした表情をしていた。

タケシが女を下ろすと、竜巻に吸い込まれずに生き残った者達が数名、タケシの元へと歩み寄る。

黄金騎士、無常水越斎、相撲取りの七人岬。その三名だった。

虫玄武と鍋中は、公園の隅で休むように動かない。四名を離れた場所から見ていた。

タケシが、その三名をゆっくり順番に見た。

「春婆怒、まだ帰れそうにないわ」

「しかたなさそうじゃのぅ」

今にも降り出しそうな雨雲を心配して、そう言うタケシに言葉を返す春婆怒は、さほど残念そうでもなかった。

もう一体、九十九神が居る。一日に二体もの九十九神を食えるかもしれない。その方が嬉しいような口調だった。

<　黄金騎士・一　>（前書き）

０９／５／３時点、１０００００アクセス突破！。これも全て、お読み頂いてる皆様のおかげです＾＾

<　黄金騎士・一　>

噴水の横で四人が睨み合っている。

黄金騎士。春婆怒と妖力共有したタケシ。七人岬の生き残りで、元相撲取りの男。そして、着物から上半身をはだけた無常水越斎。

その水越斎の鱗と、黄金騎士の金色甲冑が、時折キラリと外灯の光を反射させていた。

タケシの足元には、鏡の九十九神の使い手だった女性が、気絶しながら転がっている。

「七人岬……」

そう言う水越斎が、顎をしゃくって七人岬に指示を出す。

巨漢の七人岬は、水越斎が何を言いたいのかを直ぐに悟り、タケシの足元に転がっている女を抱えて、睨み合う者達の輪から離れていく。

タケシと黄金騎士は、その七人岬の行動を無視した。

「タケシさん、なぜ……？」

「ん、誰だ、お前？」

黄金騎士の台詞に、タケシが首を傾げる。声だけでは、黄金騎士の使い手が、バイト先の同僚であることに気付いてない様子だった。

「僕です、井川です」

「なに！」

井川が、躊躇いもなく自分の名を言った。タケシが、それを聞いて驚く。

「井川なのか、井川秋雄なのか？」

「はい、そうです」

二人のやり取りを、水越斎が黙ったまま見ている。

「何で、お前九十九神と……」

「タケシさんと一緒です。褒美が欲しいのです」

褒美。それは、どんな願いでも叶える力。九十九神が、人間を百人、妖怪を百匹、九十九神を百体食い終わったさいに、その時の使い手へと与えられるもの。

井川は、その褒美を臨んでいた。死んだ彼女を生き返らせるためにだ。

しかしタケシは、春婆怒に対して、一度も褒美を望んだことがない。理由はシンプルなものだった。

「願い事は、他人に叶えてもらうものでなく、自分で努力して叶えるものだ」と、そう言った信念がタケシの中にあるからだ。

だから褒美の話しを知っても、そのことにタケシは触れていない。
春婆怒と話したこともない。

「お前、願いって……まさか」

「そうです。この九十九神を百計神にして、僕が彼女を生き返らせます」

「お前、そんなバカなことを考えているのか！？」

タケシの声が、僅かに大きくなっていた。

「ええ、考えています。その為に、僕は戦います。それが、間違いであってもです。例え相手がタケシさんでも、人を犠牲にしてでも、僕は彼女を蘇らせるつもりです」

「井川、お前、何を言っているんだ……、自分が何を言ってるのか分かってるのか！」

「分かっています！」

決意が決まった井川の声に比べて、タケシの声には戸惑いが感じ取れた。

「僕は、決めました。例え他人が不幸になろうと、自分が地獄に落ちようとも、死んだ彼女だけは、幸せにしようと！」

「……」

井川の台詞に、タケシが呆然としながら言葉を失う。

初めてのことだ。

自分の周りの人間が、九十九神の使い手となって現れるこの状況。

しかも、道を外した台詞を、堂々と語っている。

「お前……」

呆然としていたタケシが、口を開く。

「お前、そんなことをして、死んだ彼女が喜ぶとでも思っているのか！？」

そのタケシの言葉には、明らかな憤怒が見て取れた。

「その言葉、今日聞くのは二度目です」

堂々と語る井川。その言葉にタケシが両拳を強く握り締めた。そこに、水越斎が口を挟む。

「ここは、二人に勝負を譲ろう」

そう言って水越斎は、静かに二体の九十九神から離れて行った。

タケシと井川は、その水越斎を見ずに睨み合っている。

水越斎には、タケシが黄金騎士を倒そうとも、黄金騎士がタケシを倒そうとも、どちらに転んでも損がなかった。

タケシが黄金騎士を倒してしまっても良い。鍋中のように、仲間

の仇を取りたいと言った考えはない。

それとタケシは、八尾弦徳との決闘がある。しかし、水越斎にとって、その決闘はなくても良い戦い。タケシと八尾が戦わずに済めば、それが一番良い。だから此処は、タケシに戦いを譲った。

もしも、タケシが負けたのなら、その後に自分が黄金騎士を倒す。黄金騎士が逃げ出したら、万全な自分が逃がさないように追って倒す。タケシを利用してでも、黄金騎士の始末をつければ良いのだ。水越斎は、いつでも戦闘に割り込めるような距離を保ち待機していた。

「井川、覚悟は出来ているんだろうな？」

「はい、出来ました」

つい最近、覚悟が出来たような口調。

「俺が幾ら言っても、考えが変わらないんだろうな、きっと」

「はい」

「口で言っても分からない奴は、力で、暴力で、強引にその道を正す。俺は、そんな方法しか知らない」

「タケシさんらしいですね」

井川の返答は、いつものコンビニで聞くような明るい口調だった。

「タケシさん、身に纏った九十九神と共に、僕と彼女の未来へ変わ

ってください！」

井川の言葉は、今、敵に変わるものだった。

「邪っ！」

バケツを叩いたような音が響いた。

タケシの素早い正拳突きが、黄金騎士の顔面を叩いていた。大きな体が、後ろに数歩よろめき下がる。

「井川、その考え、俺が思い直してやる！」

放った拳を腰に添えて、怒りの混ざった声で言ったタケシが構えを作る。

その一撃が、戦闘開始の合図となった。

黄金騎士も構える。そして小槌を振り被り前に出た。

黄金騎士の小槌がタケシの脳天を狙う。それをタケシが、後方にある右足を軸に半身をずらし避けた。

その回避術と同時にタケシは、右のボディーブローを狙う。

しかし、空振りした小槌から、激しいまでの衝撃波が噴出し地面を叩き、反射するように当たりに広がった。その衝撃波に攻撃中のタケシの体が吹き飛んだ。

タケシの体が、衝撃波に一メートル程横に飛ばされた。そこにす

ぐさま二激目の小槌が襲い掛かる。今度は横振りだった。

タケシは、その横振りの小槌を身を低くして避けた。

タケシの頭上を過ぎた小槌から、また衝撃波が吹き荒れ、周辺で見ていた者達へ突風を浴びせる。

「まるで扇風機だな……」

突風に堪えながら虫玄武が皮肉る。

しゃがんでいたタケシが、立ち上がる際に、黄金騎士の腹に中段廻し蹴りを打ち込む。

僅かに揺らぐ黄金騎士。その膝関節に、タケシの前蹴りが綺麗に叩き込まれる。

片足の関節が伸びきり倒れそうになる黄金騎士は、両腕をバタつかせながらバランスを保とうとしていた。

そこにタケシのコンビネーションが仕掛けられる。

左足の下腿三頭筋を狙ったローキック、右脇腹にある外腹斜筋へ響くように掌底、続いて左首の胸鎖乳突筋を断ち切ろうと手刀が打ち込まれた。

三連続の技を喰らった黄金騎士の体が、更に揺れた。すきが大きくなる。

更にタケシの蹴りが跳ね上がった。狙いは、股の間。睾丸。

「どうだ！」

もろに決まった。タケシが叫ぶ。

黄金騎士の体がダメージに揺れた。視覚で分かるほどに。

しかし、蹴り脚を戻そうとしたタケシを、黄金騎士の小槌が襲う。股間に喰らったダメージは、いったいどうしたと思うよう動きだった。

横殴りの小槌を上腕に横から受けたタケシの体が、真横へ飛んで行く。そして噴水の上を飛び越え反対側に落ちた。

虫玄武と鍋中が、二人の攻防を見ながら言う。

「あいつは、金玉へのダメージがないのか」

「玉が、ねーんだよ、きっと」

「ああ、なるほどね」

鍋中の言葉に虫玄武が納得していた。

噴水の向こうに倒れたタケシが、起き上がるのと同時に跳躍した。一飛びで噴水を越えて、黄金騎士の前に舞い戻る。

そして二人が仁王立ちで向かい合う。

「ちょっとやそっとじゃあ、こりやしないってか……、ならば」

タケシから動いた。

ゆっくりとした前進。

それを狙って黄金騎士が、小槌を上から振り落とす。

その振り落とす動作に合わせて、タケシの前進する速度が、瞬時に速くなる。一瞬で二人の距離が三十センチまでに近づいた。

黄金騎士の振り下ろされた小槌が空振りして、タケシの後方へと過ぎて行く。間合いが詰まりすぎての空振りである。タケシの後方に、衝撃波が吹き荒れた。

三十センチの距離。その距離感は、素手のタケシに有利であった。

左右二発ずつの肘鉄が順番に上から、秘中、活殺、水月、閑元を叩いた。

更に続く横殴りの両膝が三発、電光、章門、稲妻へと打ち込まれた。

連続で打ち込まれた七発の膝と肘が、鎧の上からとはいえ、正確に人体の急所を攻めていた。

「金的が効かないんだ、こんなの関係ないか」

そう言いながらタケシは、黄金騎士の腰に抱きつくように腕を回す。そして、両手でがっしりとクラッチを組んだ。

「どぉりゃーーー！！」

腰を落としたタケシの全身に力が入る。

黄金騎士の両足が浮いた。

タケシが、気合を入れる声と同時に、黄金騎士の巨体を持ち上げ背負う。そして、黄金騎士を頭から後方に落とした。水車落としだ。

頭から落ちた黄金騎士が、金物の鍋などを散らばしたような派手な音を立てて転がる。

タケシの投げは、正直綺麗な技でなかった。ものまねのような力技にすぎない。

投げられた黄金騎士が直ぐに立ち上がった。しかし、前方にタケシの姿がない。きょろきょろとしている

「こっちだ、井川」

後方から聞こえたタケシの声に、黄金騎士が、ヘルムだけを１８０度回転させて振り返る。

そこにタケシの蹴りが飛んで来る。後ろ廻し蹴りの踵が、ヘルムを激しく蹴り飛ばし、ぐるぐると何週も回転させた。

更にタケシの正拳突きが、マントの上から背中にある急所を狙った。天宗、早打、命門。

黄金騎士の体がグラリと揺れる。ダメージが見て取れた。

三発の拳を放ったタケシが、いきなりスウェーバックで間合いを離す。

その直後、黄金騎士の上半身だけが回転して、タケシが居なくなった空間に小槌を振るったのである。

突風だけが、タケシを扇ぐ。

タケシに、黄金騎士の反撃が読まれていた。

黄金騎士が攻撃を喰らった後に見せるダメージを受けたような揺らぎ、それが不意を狙っている合図だった。最初に股間蹴りを入れた後に見せた動きと同じである。それが黄金騎士の不意打ちパターンとタケシが読んでいた。

「同じ手は、喰らわねえよ」

タケシが仮面の下で、ニヤリと笑う。

本人は、気付いていない。結局は、戦いを楽しんでいるタケシの姿が、そこにはあった。

<　黄金騎士・二　>

「金的を含めれば計十一箇所への急所攻撃。どれも普通に喰らえば死ぬレベルの一撃だぜ。それをまともに喰らって立ってるんだ。その体、相当普通じゃないってことか……」

タケシの話を聞きながら黄金騎士は、可笑しな方向を向いている首や上半身を直して、タケシの方へ振り返った。

そして、再び二人が向かい合う。間合いはひらいていた。どちらも攻撃が届かない距離である。

「タケシや、わらわを使え。あやつも武装しておるのじゃ、いいじゃろうて？」

「ああ、わかった」

春婆怒の言葉を素直に受け入れるタケシ。

ついつい戦いに熱くなって、自分が、今、何をすべきかを忘れていた。

少し冷静さを取り戻したタケシは、それを思い出す。

この戦いは、ただいつもの様に現れた九十九神を倒す為だけの戦いとは違う。

この戦いは、井川を、親友を助ける為の戦いだ。

「ハルバード・ウェポンモード！」

自分が九十九神を倒せば、今までように使い手だけは助けられる。

他の者達が九十九神を倒せば、使い手ごと九十九神は消滅すると春婆怒から聞かされていた。自分だけが特別なのだと。

だから、この九十九神は、何があっても自分が倒さなくてはならない。

タケシは、そう考えながら眼前に現れた春婆怒の分身を握り締めた。

「井川、お前は、俺が救う！」

そう言い槍を構えるタケシ。

そのタケシに、黄金騎士の中に居るだろう井川は、何一つ答えなかった。

「しゃっ！」

タケシが槍を突き立てる。真っ直ぐ顔面を狙った。

間合いは、槍を持つタケシの方が長い。

スピードも、タケシの方が速い

ハルバードの切っ先が、黄金騎士の顔面に突き刺さった。正確に言えば、ヘルムの覗き穴から内部に突き刺さった。

だが、槍を握るタケシの手に、敵を刺したという感触が、まるでなかった。

「中は、空か！？」

タケシが言葉を漏らした瞬間、黄金騎士が、自分の顔面に刺さっている槍に、横から小槌を打ち込んだ。

重い衝撃が、槍に走る。

その衝撃に、槍を握るタケシごと体が横に振られた。両足が、地面から離れる。

「なな！」

黄金騎士は、横に振られた槍の動きに合わせて、槍が刺さったヘルムを横に振るう。

すると槍の先が、黄金騎士の覗き穴から抜けて、タケシの体が槍と一緒に飛んで行く。

タケシは、飛んだ体を着地させる際に、槍を地面へ付きたて、鉄棒で体をクルクルとスイングさせるようにしてから地上に降りた。そして直ぐに、黄金騎士目掛けて走り出す。

走りながら槍を振り回し、タケシが槍先に気を集めた。

「喰らえ、烈風槍飛弾！」

槍を振るいタケシが、緑風で形作られた螺旋の弾丸を放つ。

黄金騎士は、小槌で地面を叩き、周囲にショックウェーブを吹きあらす。

そのショックウェーブに、飛んでくる螺旋弾丸の軌道が大きく曲がる。

タケシの放った攻撃は、雨雲目指して飛んで行き、やがて見えなくなった。

続いてタケシは、槍を逆手に持ち替え投げつけた。

黄金騎士は、再び小槌で地面を叩き、ショックウェーブを巻き起こす。

だが今度は、衝撃の波が、飛び迫る槍を弾くことはなかった。

「影は、風に靡かぬわい」

春婆怒が、そう言う。

そして、タケシの投げた影の槍が、黄金騎士の甲冑にズブリと突き刺さった。

黄金騎士が、胸に刺さる槍へ右手を伸ばす。しかし、体が痺れて旨く動かない。

影槍束縛。

短期間だが、相手の動きを縛る春婆怒の強力な術だ。

「タケシや、これが最後じゃあ。この術を使って妖力が空になる。確実に決めるぞょ！」

「ああ、分かった！」

走るタケシが足を止めた。

「我が力は、情を強め！」

そして、大きく腰を落とし始める。

「我が技は、友を救う！」

タケシの周りに生まれた緑風が、竜巻に変わって天へ伸びていく。

「力と技が、友情に変わって未来へ進む！　跳うっ」

タケシが竜巻の中を進んで頂上を目指す。そして、竜巻の頂上に達したタケシを先頭に、竜巻の向きが変わって地に居る黄金騎士を狙った。

「堂本流超人空手奥義、風神飛翔脚！」

竜巻がドリルに変わって、タケシの飛び蹴りと一緒に急降下して行く。

その時、地上の黄金騎士の動きを封じていた影槍が、ガラス細工の様に砕け散る。

黄金騎士の体が自由を取り戻す。だが、避ける余裕はない。

「ゴールドラッシュ・シールドモード！」

井川の声が、叫ぶ様に術を唱えた。

すると黄金騎士の左腕に、大きく分厚いカイトシールドが現れた。

黄金騎士は、そのカイトシールドで、タケシの必殺技を受け止めようと構えた。

「いけぇぇぇぇぇぇーーーーーーーー！！」

タケシが雄叫びと共に迫る。

巨大な螺旋のドリルが黄金の盾に激突した。辺りに凄い轟音が響く。

ドリルとシールドが競り合い火花を散らしていた。

周りで見ている者達には、どんな物でも貫く矛と、どんな攻撃にも耐える最強の盾が、激しくぶつかり合っている様に見えた。

ぶつかり合い、押し合う二人の間から、台風が直撃したような突風が吹き荒れている。

どちらも引かない。

「ぜぇあぁぁーーーーーーーーーーーー！！」

しかし、黄金の盾に、亀裂が一つ入った。

タケシの放つ攻撃の方が押している。更に亀裂の数が一つ増えた。

そして、どんどんと亀裂の数が増えていく。

それでも黄金騎士は、左腕に装着された盾でひたすら耐えるしかなかった。

だが、盾の強度が限界を迎えようとしている。もう、砕け散りそうだ。

「いーーーーがーーーーーーーーーーわーーーーーーーーーーー！！！！」

タケシの気合がまさった。

蹴り技が、黄金の盾を砕き、貫き、黄金騎士の体を捕らえる。

タケシの蹴り足が、黄金騎士の左胸に減り込んだ。そして、盾と同じように砕き貫き、勝利の爆炎を上げる。

「やったか！」

虫玄武の横に座り込んでいた鍋中が、弟子の仇が上げる爆炎と爆音に声を立てた。

黄金騎士の左胸を貫いたタケシが、爆炎の中から飛び出し後方へ中腰の体制で足を滑らせながら着地した。

そして、着地したタケシの背中へ、舞い上がった爆炎が吸い込まれていく。タケシは、中腰のまま、その炎を背中で受け止めていた。

「井川、これで良いんだ……」

タケシが小さく呟いた。

噴水のある公園に、ポツリポツリと冷たい雫が幾つも落ちてくる。

その雫の数は、どんどんと増えていった。

「降って来たな、春婆怒」

「そうじゃのぉ……」

春婆怒の声に、あきらめが感じ取れた。

降り出した雨が、辺りの色を変えていく。

雨に全身を濡らしながらタケシは、ゆっくりと中腰から立ち上がる。

「春婆怒！」

虫玄武が、怒鳴るような声でタケシたちのことを呼んだ。

「ん？」

その声に振り返るタケシの視界に、まん丸い物が飛び込んでくる。

何が飛んできたか、瞬時に理解できなかった。

タケシは、それを顔面へモロに喰らい、勢い良く飛んで行く。

そして、飛び、転がり、三十メートルぐらい先の植木に、水しぶきを上げてつっこみやっと止まった。

「な……、何だ……、いったい……」

植木の中からタケシが、よろめきながらも起き上がる。

頭の中が、除夜の鐘を連続で百八回鳴らしたように響いていた。

目の前の景色も歪んでドロドロである。気持ち悪い。それでも、もつれる脚を引きずって植木の中から出て行く。

「そんな……、バカな……」

少しずつ映像がはっきりしてきた眼前に立っていたのは、左胸から左腕まで失なった黄金騎士の姿であった。

黄金騎士は、死んでいない。終わっていない。

それは、井川がまだ救われていないことを意味する。

「畜生……」

ふらつく脚のタケシが、思わず愚痴を溢した。

<　黄金騎士・三　>

雨の勢いが強くなりはじめた。地面を叩く音が響く。

タケシの被る仮面に、大きな亀裂が入っていた。

「タケシや、もう妖力は空に近いぞょ。あとは、この甲冑を模っているのがやっとじゃ。砕けた箇所の修復も不能じゃ」

「ああ、わかった」

「この姿もあと十五分……、否、十分保てればいいじゃろうか……、それまでに決めなければ、わらわたちの負けぞよ」

「ああ、わかった」

タケシが、輝の入った仮面越しに敵を睨む。まだ耳鳴りがこだましていた。

雨の中立ち尽くす黄金騎士の姿は、左胸から肩にかけて丸々なくなっていた。人型のシルエットとしては、明らかに可笑しな形をしている。普通ならばとっくに絶命している筈だ。

ぽっかり開いた鎧の穴の中で、半透明な鎖が幾つもウナギの様にグネグネと蠢いていた。

「あやつの妖力を、相当量間違いなく喰らった。あやつも殆ど妖力が残っていない筈じゃ」

「どちらも満身創痍ってか……」

雨に打たれる二人が、ゆっくりと歩み、徐々に距離を縮めていく。

その二人を見て、外野に居た虫玄武が動こうとした。タケシの助太刀に出ようとする動きだった。

しかし、その動きに水越斎がいち早く気付き、手にある合口の刃を、前に迫り出そうとした虫玄武の喉元に突きたてた。

「ぬ！」

「手出し無用」

虫玄武を静止した水越斎が、いつも開いているか閉じているか分からない細い目を見開き、冷酷な視線で睨んでいた。かなりの凄みだった。それだけで気の弱い人間ならショック死しそうなぐらいの視線に、虫玄武の動きが止まる。

「男同士の決闘だ、分かるだろ」

虫玄武の横で、地べたに座る鍋中が言う。

無常水越斎の止めた理由は、鍋中の言う理由だけではなかった。ここでタケシ達が死んでくれれば、八尾弦徳との決闘そのものがなくなる。さすれば八尾弦徳は、無傷で虎野町支部の長になれる。あわよくば、それを狙っていた。

タケシと黄金騎士が向かい合った。

「井川、俺が、お前を救う！」

タケシの力強い声に、やはり井川は答えない。

僅かな間が生まれた。

互いに残された時間が短い。井川も悟っていた。そして黄金騎士から動いた。

残された右腕で、いつものように小槌を振り被り、タケシの頭を狙って振り下ろしてきた。

「ぜぇあぁ！」

タケシが蹴りを繰り出す。

上段前蹴りのように放たれたキックは、それよりも更に高く天を目指し伸びて行く。自分の膝に口付けが出来るほどだ。

その蹴りで、自分の頭部を狙って落ちてきた黄金騎士の小槌を蹴り上げた。

踵と小槌の正面衝突。

蹴られた黄金騎士の小槌が弾け飛ぶ。しかし、タケシの体にもショックウェーブが降り注ぐ。

「ぐぅぅ！」

歯を食いしばるタケシ。

一方、黄金騎士は、弾け飛んだ小槌の勢いで、大きく後方へ仰け反っていた。

春婆怒は、直ぐに気付いた。

振り下ろされた小槌を蹴ったタケシの足。その踵から響いた音に。タケシの右足の踵が砕ける音が、春婆怒には確かに聴こえていた。

二人がバランスを取り戻す。

黄金騎士が、今度は横向きに小槌を振り被った。

それに合わせてタケシは、自分の左上腕二頭筋で顔を隠すように左腕を振り被った。

そして二人が再び攻撃を放つ。

横振りの小槌とタケシの左肘が激突した。

激しい轟音が響き、ショックウェーブが吹き荒れる。

「タケシ、おぬし！」

左肘から聴こえて来た鈍い音に、春婆怒が叫んだ。

右踵に続いて左肘がイカレル音。

すぐさま振り下ろされた小槌にタケシが、右のアッパーを地対空

ミサイルの如く放ち上げ、小槌を打ち落とす。そしてタケシの右拳が砕け散る。

その時、黄金騎士の小槌に輝が入った。

右足の踵、左腕の肘、そして右拳。三つの武器を犠牲に得た成果がこれだ。

「タケシや、もしかして、このまま続ける気か！？」

春婆怒の言葉を無視して、更に二人が攻撃をぶつけ合う。

振り下ろされた小槌の攻撃に、タケシが飛び膝蹴りを合わせた。

その衝突で、タケシの右膝の皿が粉砕した。黄金騎士の小槌の輝も広がる。

このまま二人は、意地と意地をぶつけ合う様に、持てる武器をぶつけ合うつもりだ。

ぶつかり合いが更に続く。

小槌の攻撃とタケシの右肘が激突した。

右肘の砕ける音を聴きながらタケシが仮面の下で歯を食いしばる。

そんな中、黄金騎士の小槌に入った輝が、大きな亀裂へと変わった。

犠牲の中にも成果が見て取れる。

まだ続く二人のぶつかり合い。今度は小槌とタケシの左貫手が激突した。

タケシの指が砕けながらも小槌に突き刺さって行く。それに小槌の亀裂が更に大きくなった。

だが、タケシの左手は、壊滅的ダメージを受けている。四本の指が、不自然な方向を向いていた。

タケシのダメージが深刻になってきた。

左右の拳、左右の肘、右足の踵と膝が砕けている。残るは、左脚のみ。だが、その脚は、立ち続ける為に必要なもの。武器として使えない。

しかしタケシは、その脚すら使う積もりであった。自分ならば、両脚が壊れても立つことが出来ると信じていた。

そして、その左足を使った。迫る小槌に上段廻し蹴りを振り当てる。

鈍い音と共にタケシの左脚が、脛の辺りから若干曲がった。折れたのであろう。

折れた脚を地に戻したタケシは、それでも倒れない。激痛を感じながらも立っている。

黄金騎士の小槌の亀裂が数を増やし、ポロリと木の破片を一つ足元に落とした。黄金騎士は、それでもかまわず小槌を振り上げる。

タケシの弾丸は尽きたが、それでも黄金騎士の攻撃が続く。

タケシには、攻撃に使える武器がないように見えた。

振り下ろされた小槌にタケシが壊れた右拳を再びアッパーに変えて放った。

壊れた拳が小槌に減り込む。否、拳が潰れて減り込んだように見えた。痛々しい。

タケシの右拳が潰れて二センチほど縮む。プロテクターの中に血が噴出し暖かい感覚を広げているのが分かった。

しかし、無理を繰り返したかいがあった。黄金騎士の小槌もかなり損害が大きく見えた。その形が変形している。あと数激、否、あと一発打ち込めれば完全に砕け散りそうであった。

だが、タケシも限界。そのタケシに、壊れかけた小槌で黄金騎士が最後の一撃を放つ。

三戦（サンチン）の型

両拳を腰の辺りに添え、両脚を内股に近い形で踏ん張る。その形でタケシは、小槌を頭で受け止めた。首に凄まじい衝撃が響く。

小槌が複数の亀裂からずれて形を崩す。

タケシの仮面も、亀裂から形がずれる様にくずれた。

それでもまだ黄金騎士が、小槌を振り被りタケシの頭へ振り下ろす。

二発目の攻撃で、タケシの仮面が割れた。右目の部分が砕け落ちタケシの血に染まった表情が一部見えた。

覗かせたタケシの表情を見ていた黄金騎士の小槌が、ゴトリと音を立てて1／3ほど崩れ落ちていく。

ボロボロと木片を散らばしながら小槌が振り上げられる。もう、動かしただけで砕け散りそうなほどに損傷していた。

もしもこのままタケシの頭に三度目の攻撃を加えられたとしても、小槌が砕け散りそうに見えた。良くても相打ちだろう。

「井川、お前は俺が救うって言っただろ」

そう言うタケシの表情が優しく変わった。頭部を狙った三度目の攻撃を、そのまま受ける積もりだ。立っているのがやっとだ、それしか出来ないのだ。

振り上げた黄金騎士の右手が、タケシの言葉を聴いて止まった。そして、小槌はタケシを狙わずに、ゆっくりと下げられる。

「僕は、それでも未来に進んでく！」

井川が吠えた。

すると削り取られた左胸の中で蠢いていた半透明な鎖の束が、鎧の中から素早い動きを見せる大蛇の様に飛び出してきた。

その半透明な鎖の束が、瞬く間に失われた左腕の代わりへと形を変えていく。

「井川……」

鎖で出来た分厚い豪腕。黄金騎士は、その豪腕を振り上げると、更に鎖の豪腕が長く大きく巨大化していく。

黄金騎士が、それで攻撃を加えようとしていた。鎖の音が、ジャリジャリと威嚇のように音を立てている。

その光景をタケシは、割れた仮面から優しい表情を覗かせたまま見ていた。

「あの野郎、此処に来て男気を無視しやがった！　勝ちに行きやがったぞ！」

黄金騎士の変貌を見て、虫玄武が罵倒を飛ばす。

「タケシさん、ごめんなさい！」

鎖の豪腕を振り被りながら井川が謝罪を述べるが、攻撃の意思がなくなった訳ではない様子だった。今にも鎖の豪腕を振り下ろそうとしている。

「気にするな、井川……」

小さく呟くタケシ。その声が、寂しく雨の音に消えていく。

「すみません……」

井川の言葉と同時に大きく伸びた鎖の豪腕が、やっと立っているタケシへ振り落とされた。

まるで巨大な恐竜の尻尾のような鎖の束が、タケシの頭上から落ちてくる。

その鎖の束が、公園の濡れた地面を激しく叩いた。地面のレンガが砕けて飛び散ると、辺りに地震のような振動が広がって行く。

だが、タケシは体を右に回転させながら、その鎖の束をかわしていた。

全身負傷だらけの人間が出来る動きではない。流れるように自然でスムーズな動きだった。

その奇跡的な可憐な動きから、微風のような左後ろ廻し蹴りが、何の違和感もなく放たれた。

壊れた踵を軸に、壊れた両腕で遠心力を作り、壊れた膝を回転させて、折れた左脚で放つ後ろ廻し蹴り。

その蹴りの踵が、黄金騎士の右手にある壊れかけの小槌を軽く触れるように叩いた。

優しい蹴りだった。

「え……？」

井川は、鎖の豪腕をかわされたうえに、攻撃をされたことが理解できなかった。

その理解が出来ない状況の中、黄金騎士の右手にあった小槌が、ボロボロと崩れ落ちていった。

鎖の豪腕を振り下ろしていた黄金騎士の視線が、崩れ落ちた木片の固まりへ向けられる。そしてじっと見ていた。その手には、粉砕した小槌の柄だけが握られていた。

鎖の束を体内に戻しながら黄金騎士は、直立不動で視線をタケシに戻す。

二人が見詰め合う。もう、睨み合いではなかった。

雨に打たれる黄金騎士から、霧のような煙が上がり始めた。その霧は、タケシの甲冑へと吸い込まれていく。

徐々に黄金騎士の体から出る霧の量が多くなっていく。そして、その霧の中から黄金騎士のシルエットが消えていった。

霧が全てタケシの甲冑に吸い込まれて消えていくと、雨の中に井川が一人立っていた。

しかし、井川の表情は、死人のように青ざめ、瞳に生命力の欠片も見えなかった。

それもその筈である。

雨の中で立ち尽くす井川の左胸から左肩に掛けて、黄金騎士と同

じように失われていた。

「井川……」

タケシが小さく呟く。

井川のなくなった胸から滝の如くに流れ出た血液が、井川の左半身を真っ赤に染めていた。その血液が、井川の脚を伝わり、雨に濡れた地面に広がって行く。

「やはりな……」

「なにがだ……？」

鍋中が言った。その声に虫玄武が視線を向ける。

「右胸を春婆怒に持ってかれた段階で、使い手の体も持っていかれていたんだ。おそらく妖力共有を解けば、あの使い手は、今みたいになって死んでいただろう。妖力共有が、今まで使い手の命を繋いでいたんだ……」

「本人も気付かないままにかよ……」

虫玄武が鍋中の言葉に答えると、絶命しながらも立ち尽くしていた井川の体が、紐を切られた操り人形の様に崩れ落ちた。そして、ひっくり返った器のように、胸から大量の血を当たりに広げて雨に混ぜていく。

春婆怒の妖力がなくなり、タケシの変身も解けた。そしてタケシも雨の上へと倒れこむ。意識を失っている様子だった。

側には、人の姿をした春婆怒が立っている。

そして、タケシの頭を春婆怒が持ち上げると、座り込みながら自分の膝の上に乗せて膝枕を作った。

「良くやったのぉ、タケシや……」

穏やかな表情でタケシの頭を優しく撫でる春婆怒。そんな二人を冷たい雨が打ち続ける。

そして、完全に妖力がなくなった春婆怒が、人の姿すら保てられなくなり、槍の姿に戻って転がった。

「俺、救急車呼んでくるわ……」

人間の姿に化けた虫玄武が、そう言いながら公園を出て行く。

公園を包んでいた人払いの術は、既に解除されて消えていた。

。

冷たい雨だけが、降り注ぎ続けている。

この公園での戦いを冷ますように。

この公園での悲しみを洗い流すように。

<　雨の降る街　>

街には、雨が降り続いていた。

タケシたちが、駅前の公園で戦って以来、三日の月日が過ぎていた。あの晩から虎野町では、雨の降る日が続いている。

タケシが意識を取り戻したのは、戦いが終わった次の日の昼頃だった。雨の音に呼ばれる様にタケシが目を覚ますと、そこは病院のベットの上だった。

四人部屋の病室。ベットは四つあるが、寝ているのはタケシ一人である。

タケシの両手足は、石膏で四本とも固められ動かない。首にもギブスが巻かれていた。無理に動かそうとすると痛みが電気ショックの様に体中へ走り回る。

目を覚ましたとき、何故に自分が動けなくなる程の怪我をして病院のベットに寝ているのか、タケシにはまったくもって理解できなかった。

あの晩の記憶が、すっぽりと抜け落ちているのだ。

ボクサーたちが、頭部を激しく強打される事により、試合中の記憶をなくしてしまう現象が多々ある。時には、勝敗どころか試合をやったことすら忘れるケースも少なくない。

今のタケシが、その状況と一緒だった。公園に脚を運ぶ前からの

記憶がなくなっている。

意識を取り戻したタケシの横には、にこやかな表情の陽子が立っていた。笑っていたが、涙を流したあとがハッキリと分かった。しかし、その理由すらタケシには理解できなかった。

タケシが意識を取り戻すと、病室に色々な人物が見舞いに訪れた。

桜木夫妻、カズマ、コンビニのオーナー鈴木、それに虫玄武までもが脚を運んで来た。

どうやら此処は、妖怪連合が手配した病院らしい。

タケシの治療に関しては、妖術を使用した治療を施している。そうでもしないとタケシが受けた怪我は、完治不能の傷が多かった。

タケシが、あの晩の戦いに関してどうなったかを虫玄武に訊くと、虫玄武は全てを話してくれた。

戦いの事、鏡の九十九神二人の事、黄金騎士の事、井川の事。

タケシは、井川の死を聴かされると呆然とした。

そして、色々な話を聴きながら、少しずつ記憶を取り戻すように思い出していく。

しかし、三戦の型で黄金騎士の小槌を頭部に喰らったところから、どんなに頑張っても思い出せないでいた。そこからだけ記憶が戻らない。

虫玄武の話によると、タケシが最後にボロボロの体で可憐な後ろ廻し蹴りを繰り出して黄金騎士の小槌を砕き、激戦を勝利したと云っていた。

おそらくその後ろ廻し蹴りを放った段階で、タケシの意識は完全に消え去っていたのであろう。

日々の猛稽古、幾度と戦ってきたケンカの記憶、生死を分ける修羅場の数々、それら戦慄の経験が意識を失った常態でもタケシの体を動かし、完璧なまでの廻し蹴りを繰り出したのであろう。無意識だからこそできた攻撃だと。

だが、その記憶をタケシが思い出すことはなかった。

そしてタケシは、井川を自分が殺したのだと責めた。

全てを見ていた虫玄武が、そうではないと慰めるような言葉を告げていた。しかしタケシは、その言葉を聞き入れず自分を責め続けた。

虫玄武が全てを話し終えて帰って行った後に、タケシは顔を酷く歪めながら涙を流し始めた。

真っ直ぐ病室の天井を見ながら涙が枕へ零れ落ちていく。そのタケシの口から、悲しみにくれる音が溢れでた。

普段は、傲慢なまでに男らしいタケシが、幼稚園児のように恥じらいもなく声を上げて泣き始めた。その泣き声が、タケシと陽子だけが残る大部屋の病室に響く。

タケシの消えた記憶に、一つの映像が蘇っていた。

それは、井川の姿。

左胸を失った井川の姿が、霧の中から現れてきた。

黄金騎士の左胸を飛び蹴りで削り取った記憶は、もっと前に取り戻していた。

だから井川の胸を抉った犯人が分かっていた。

自分だ。

自分が許せなかった。

自分が井川を救う筈だった。

自分が言ったのだ。救うと。

なのに。

涙も、声も、悲しみも止まらなかった。

それらが涙となって、泣き声と変わって、タケシの中から溢れ出す。そして止まらない。

その涙を動かないタケシの両腕の代わりに、陽子が優しくハンカチで拭いてあげていた。

陽子もタケシの涙を見るのは初めてだった。

最初は、タケシの悲しみに歪む表情を見て陽子も驚いた。

だが、この涙は、自分にだけ見せたタケシの心だと気付き、陽子はタケシの涙を優しく拭いてあげていた。

今、自分に出来ることは、タケシの心を優しく慰めるように包んであげることぐらいだと陽子は思った。

タケシが初めて見せた涙が、そうしてくれと陽子に向けられたメッセージだと信じ、陽子は優しくタケシの頭に抱きついた。

タケシの傷だらけの顔に、陽子の暖かい胸が押し付けられ、温もりと優しさが伝わって行く。

女性だけが男に与えられる不思議な力が、タケシの心を少しずつ癒してくれた。

タケシは、その不思議な癒しを安らぎの様に感じながら、再び静かな眠りに落ちていく。

タケシが眠りに落ちると、陽子の背後で雨音だけが窓越しに聴こえていた。

空が、タケシの代わりに泣き続けるように。

<　雨の降る街の記憶　>

その日も雨が降っていた。

大降りではなく、ねちねちとした陰険な嫌がらせのような小雨が降り続いている。憂鬱な雨だ。雨が降り出して、もう三日以上経つ。

そこは、背の高い杉の木に囲まれた神社の境内だった。

崩れかけた鳥居に、半分焼け落ちて廃墟の様に荒れた本堂が、雨に打たれ雫を滴らせていた。

五年ぐらい前に小火を出し、その時以来神社の修復はされることがなく放置されていた。

神社の周辺の村々は、此処数年続く日照りで、神社の修復どころではなかったのだ。

しかし、この数日降り続く雨は、そんな村人たちにとって恵みの雨といえた。

この雨が、大地を潤してくれたことだろう。

そんな恵みの雨が降り続ける中、半分焼け落ちた神社の床下で二つの小さな命が、体を震わせながら雨の降る景色を眺めていた。

幼く小さな二人は、降る雨が冷やした空気に凍え、その小さな体を寄り添わせながら寒さにひたすら耐えていた。

「おにいちゃん、雨、やまないね……」

「ああ、そうだな……」

「おにいちゃん、寒いね……」

「ああ、そうだな……」

体の小さな妹の方が、体をぴったりと付けた隣の兄に話しかける。しかし、隣の兄は、ぶっきらぼうな答えを返すだけだった。

「おにいちゃん、お腹すいたね……」

「ああ、そうだな……」

幼い二人は、もう二日は何も食べていない。降る雨を舐めるだけだ。腹の皮と背中の皮が重なり合い一枚の板になりそうだった。腹の虫も飢え死にして、もう鳴くことすらなかった。

「おかあさん、帰ってこないね……」

「ああ、そうだな……」

二日前、食べ物を探してくると言って雨の降る外へ出て行った母は、それっきり帰ってこない。その母の帰りを幼い二人は、じっと此処で待っていた。崩れかけた鳥居をくぐり出て行った母を、その鳥居の向こうをじっと見つめながら二人は待っていた。

しかし、母は帰ってこない。でも二人は待ち続けた。

「おにいちゃん、起きないね……」

「ああ、そうだな……」

「朝から、起きてこないね……」

「ああ、そうだな……」

自分より少し体の大きな兄に寄り添う妹が、少し離れた場所で丸まりながら冷たくなった、もう一人の兄の姿を振り返り見ていた。

昨日の夜、三人で一緒に寄り添いながら寒さに耐えあっていた兄弟が、朝になると冷たくなっていた。そして、昨日までのように、明るく話しかけてくることがなくなっていた。

幼い二人には、それが死だと理解しきれなかった。それが理解出来るほど幼い二人は育っていない。

だが、それが、永遠の別れだということが、なんとなく理解が出来ている様子だった。

「おにいちゃん、もう、雨は止まないのかな……」

そう言った妹が、小さな体を兄に強く摺り寄せた。

「そんなことはないさ……」

初めて別の言葉で答えを返す兄。

「おにいちゃん、私も明日は、起きなくてもいいかな……。おにい

ちゃんのように眠りつづけてもいいかな……」

「……」

兄は、体を摺り寄せながら問う妹に何も答えなかった。

妹がそうしたいと言うのならば、自分もそうしようかと考えていた。

幼い二人が、そう思うほど降り続ける雨は、寒く冷たく厳しく感じられた。

「？」

そんな時、雨の向こうに人影が見えた。それに幼い二人が気付き目を凝らす。母ではないのかと。

だが、期待とは違った。

雨の中に見えてきた人影は、崩れかけた鳥居をくぐると真っ直ぐ幼い二人の方へ歩いてくる。しかし、母ではない。

それは、番傘を差した二人の影。見知らぬ男と女だった。

傘を差す二人は、神社の床下で震え寄り添う兄弟の前まで来ると、何やら話しかけてくる。

「随分と不思議な妖気を放っているから見に来て見れば、こんなガキどもとは」

男がそう言った。すると女が幼い二人の前にしゃがみこむ。幼い二人は、女の動きを見て、体をピクンと強張らせた。

「本当、かわいい子猫ちゃんたちね」

女がにこやかに笑う。

だが、幼い二人は、寄り添いながら体を震わせるだけだった。

いきなり現れた男女に警戒する兄。妹の方は、怯えて震えている様子だった。寒さだけで震えている様子ではなく、その振るえが寄り添う兄に伝わってくる。

幼い二人は、逃げなかった。妹は、怯えと寒さで体が動かない。空腹から逃げだす体力もなかった。兄は、その妹を守ろうと、ただ男と女を無言のまま睨んでいた。

「どうするの？」

女がしゃがんだまま振り向き男に問う。

「とりあえず、家に連れて帰ろうか？」

そう答えながら男もしゃがみこむ。

幼い二人が、目の前でしゃがんでいる二人を警戒するようにじっと見ていた。

その警戒心に気付いた女性の方が、和ませるような微笑を作った。

優しい母のような笑みだった。

その笑みに、幼い二人から警戒心が少しだけ消えていく。

「こんな所にいつまでも置いといたら弱って死んじまう。連れて帰ろう」

そう言い男の方が、妹を連れ去るように抱え上げ、神社の床下から拾い上げる。

妹は、既に抵抗する体力すらなかった。なすがまま男に抱えられている。

その光景を残された兄は、大きく両目を見開きながら見ていた。彼も動けない程に体力がない。

次に兄が、床下から女に救い出された。女に抱えられながら傘の下で震えている。

「家に帰って体を温めてあげましょう。それと何か食べさせてあげないと。この子達、だいぶ弱っているわ……」

「そうしようか」

男女に抱えられた二人は、抵抗を見せなかった。

兄は、妹が何故に抵抗を見せなかったのか、自分が抱えられて理解した。

暖かい。

とても暖かかった。

女に抱えられながら、その胸の中で安らぎのようなものを感じていた。

「この子たち、どうするの？」

女が男に問う。

「俺が育てるよ」

男は、なんの躊躇いもなく答えた。

「あなた、この子たちの父親になるつもり？　だったら、私が母親に……」

「冗談言わないでくださいよ、私は父親になんかなりませんよ」

女の言葉が終わる前に男が答えると、台詞を途中まで言った女が、むすっとした表情に変わる。

「代わりに私が、こいつらの兄になりますよ」

「兄？」

「そう、今日からこいつらは、私の兄弟です」

「あなたが兄とはね……」

「父親よりはましでしょう」

男が細い目で笑った。

「そうね」

女も笑い返す。

「猫又の私がこいつらを、立派な化け猫に育てて見せますよ」

「はいはい、がんばってね」

そう言いながら女が、抱きかかえる子猫の頭を優しくなでてあげる。すると子猫は、女の腕の中で気持ち良さそうに目を細めていた。

「それに、父親になるのは、もっと先の話です」

「ふぅ～ん……」

女は、何かを期待しているような表情で、自分の胸の中で眠り始めた子猫を眺めていた。

男女に抱きかかえられ荒れた神社の境内を、母を待っていた筈の子猫たちが、二人に連れられて出て行く。

そして月日が流れ、この男と、この子猫たちが、猫田三兄弟と呼ばれるようになる。

二尾の猫又と、一尾で双子の化け猫がだ。

「おにいちゃん、そろそろ帰ろうか……」

「ああ、そうだな……」

駅前の噴水がある公園。まだ雨は降り続いていた。

噴水の前には、菊の花束と缶コーヒーが供えられてある。

その前に、傘を差した虎二と珠美が立っていた。虎二の両腕の傷は、まだ完全に癒えていない。虎二の代わりに珠美が傘を差していた。

しばらく手を合わせていた二人は、自分たちが供えた花束や缶コーヒーの前から立ち去った。そして、公園の外へ歩いていく

「あの日も雨が降っていたね……」

「ああ、そうだな……」

珠美の言葉に、虎二がぶっきらぼうに答える。

あの日、二人が寒さに凍え体を摺り寄せていた神社の床下。

半分焼け落ちて荒れ果てた神社が取り壊され、あの場所は更地になった。

その更地は、祭りが開かれる場所へ変わり、普段でも周りに人が集まる広場に変わっていった。

そして近くに多くの民家が建ち始め、流通が増え、時代と共に近

くに線路が引かれ駅もできた。そして、今では立派な噴水のある公園へ変貌していた。

「ここで私達は、龍にいちゃんと静香さんに拾われたんだよね……」

「ああ、そうだな……」

そう言いながら公園を出て行こうとしていた珠美が振り返る。それに虎二も足を止めて振り返った。

懐かしい場所には、あの時と同じ様に雨が降り続いていた。見える景色は全て変わってしまったが、降る雨だけが一緒だった。

だが、自分たちの小さかった命を拾い上げてくれた二人の姿は、もう何処にもなくなっている。

その現実に、珠美が雨の様に涙を流していた。

虎二は、あの時と同じように、ただ、じっと耐えるように黙り続けていた。

そんな双子の兄弟は、一つの傘の中で体を寄り添うようにして歩いていく。

あの時、神社の床下で、そうしていたように。

第六話「黄金の騎士と雲外鏡」

完

<　雨の降る街の記憶　>（後書き）

どうも、第六話「黄金の騎士と雲外鏡」終了しました。
ここまで、ほぼ毎日お付き合いしてくださってる方々に、大変感謝しております。
まだまだ未熟な私でも読んでいただけ方々が要るから頑張れます。
本当にありがとうです＾＾

今回は、色々な人が死にました。
書いてて自分が泣きそうになった瞬間がありました＾＾；
おもいいれのせいですねｗ。
次は、悲しい涙ではなく、感動で自分が泣けるものを書ければと考えていますが、なかなか・・・。

それでは応援していただいている方々に感謝しつつ、次回もがんばって行きますので、末永きお付き合いお願いします＾＾

では、そんなこんなで次回第七話「八尾弦徳」もよろしくお願います＾＾

<　続・外伝への懸け橋　>

桜が吹く四月、虎野町にある歴史深い学院の式典会場で、今年から学院に通うこととなる中学部の子供たちが、綺麗に並び式典のセレモニーを引き締まった表情で参加していた。その少年少女たちが身に付けている制服には、まだ一つの皺もよっていない。とても新鮮で、初々しさが感じられた。

大理石で出来た床や壁、そこはスポーツをおこなうような体育館ではなかった。このような式典用に校内の敷地に作られた建物である。一つ一つの装飾品が高価差を否応なしに表現しており、一流のセレブ感をかもしだす豪華施設だった。

その会場で、新入生が寸分の狂いもなしに整列していた。新入生の後方には、彼らの保護者たちが椅子に座って我が子の晴れ舞台を祝うように眺めている。新入生の倍の数は居そうだ。

式典が続く会場内。これから始まる学院生活に胸を膨らませ瞳を輝かせる者たちに混ざって、彼らと同じ制服を纏ったカズマの姿があった。

カズマは、この学院に入学するために、狂いそうなぐらいまでの猛勉強に励んで合格した。

そして、お金が普通の学校よりも何十倍もかかっていることを理解していた。父が無理をしたことも分かっている。だから父には大変感謝していた。

空手に専念したいという理由で、この学園への入学を望んだ。大

変なわがままだと思っていたが、父はカズマの思いを受け入れてくれた。

いじめられっ子からの脱却。強くなりたいと思う心。その意思を父は汲んでくれたのだ。

この学院では、最低限の学力を保ってさえいれば、高等部までエスカレート式に上がって行ける。そもそも、この学園に入学できる者は、小学生ながら高校で習うレベルの科目を全て勉強しているのだ。おそらく三流大学ぐらい合格できるかも知れない。

そんな子供達の列に並ぶカズマの瞳も輝いていた。これで、思う存分に空手に励めると。

入学式が終わると子供たちは、各自の教室に向かって移動し始める。そして彼らの保護者たちは、別の部屋で説明会を受けることとなっていた。それが終われば、今日のイベントは全て終了になる。両親と一緒に生徒たちも帰宅できる。

これからの一年間を共に過ごすクラスメイトと一緒に教室へ入ったカズマは、まえもって貰ってあったプリントに書かれた自分の席を目指す。他の生徒たちも同じように自分の席を目指して続々と座っていく。

「ここか」

軽く呟き自分の席に座るカズマ。そして、一息つくと教室の中を見回す。

立派な教室だった。小学校の頃に通っていた教室とは大違いだ。

小学校の校舎や教室のコンクリートの壁には、老朽化のために皹があちらこちらに入っていたが、この校舎には、そんなものは一つも見あたらない。とても綺麗である。

カズマが教室内を感心しながら見回していると、早くも席を立ち、気の合いそうな面子と話し始めている生徒もいた。積極的な性格なのであろう。小学生時代にいじめられていたカズマには、その積極な性格がうらやましくも見えた。

そんな感じでカズマが辺りを見回していると、カズマの隣の席に一人の少女が腰を下ろす。

背中まで伸びたストレートの黒髪。少女は、その長い黒髪の両サイドだけを後ろに引っ張り小さく束ねている。前髪は眉毛の辺りで切りそろえてあり、清楚なお嬢様系のイメージが強く感じられた。しかも、かなり可愛い。

カズマは、机の上に置いたプリントに視線を落として彼女の名前を確認した。柴村サクラというらしい。

そして、カズマがプリントから彼女に視線を戻すと、偶然にも目と目が合った。

二人が視線を合わせると、彼女の方からニコリと微笑み、カズマに軽く会釈をした。それを見たカズマは、ほうけた顔でゆっくり頭を下げる。そして、顔を赤らめた。

だが、顔を赤らめながらもカズマは、彼女から視線が外せなかった。可愛い。初めて見る少女に、一瞬で魅了されていく。初恋の如

く。

「私、柴村サクラです」

思わずカズマが少女の顔に見とれていると、彼女の方から自己紹介をしてきた。京都弁だろうか、少女のしゃべり方に若干のなまりがあった。

「ぼ、ぼくは、十文字カズマです！」

カズマが跳ね上がる様に席を立ち、サクラに続いて自分の名前を告げる。だが、その声は引きつって甲高くなっていた。それを見てサクラがクスリと笑い片手で上品な口元を隠した。

カズマは、直立しながらサクラの表情を見下ろしていたが、その笑みに緊張が和んだのか、ゆるい笑顔をつくりながら頭を照れくさそうに掻いた。

とても不思議な少女だと思った。凄く引かれるものがサクラの中から感じられる。

「あぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーー！！」

席を立ったカズマと座っているサクラの二人が、そんな様子で初心な笑い顔を合わせていると、教室内の時間を止めるような大きな声で、一人の少女が声を高々と響かせた。しかも、その少女の片手の人差し指が真っ直ぐにカズマを指していた。

大声を出してカズマを指差した少女は、教室の入り口に立っていた。そして、両目を釣り上げながら他のクラスメイトや机の間を縫

って、どしどしとカズマの方を目指して歩いてくる。その足取りに、短めのポニーテールがふさふさと揺れていた。

その少女は、怒った表情であるが、整った顔をしていた。気を落ち着かせてニッコリ笑えば、きっと可愛い少女であろう。

「なんであんたが此処に居るのよ！」

カズマの前に立ったポニー少女は、カズマの顔に鼻先が付きそうなぐらいに顔を近寄らせると、怒鳴るようにそう言った。

思わずポニー少女の勢いに押されてカズマが身を強張らせながら仰け反るが、それでもポニー少女の怒った顔がカズマの顔を追いかける。

「えっと、どちら様でしたっけ……？」

クラスメイト全員の視線が、カズマとポニー少女に集まった。ポニー少女の大声を聴きつけた別のクラスの生徒までが教室内の二人を除き見ている。

「どちら様じゃないわよ！」

カズマの質問に、ポニー少女が再び怒鳴り声を上げた。

「私に散々酷い子としたのに、顔すら覚えてないの！？」

「ええ！？」

ポニー少女の言葉にカズマが目を丸くさせていた。その隣でサク

ラが席に座りながら二人を見上げている。サクラもきょとんとした表情をしていた。殆どのクラスメイトが、似たような表情で二人を見ている。

「私よ、大塚友香よ、忘れたの、ひどーーい！！」

両者の顔が超接近している。そのカズマには、ポニー少女の瞳からジワリと涙が溢れ出始めているのが分かった。何故に泣くとカズマが思った瞬間、ポニー少女の顔を記憶の中から掘り当てる。

「もしかして……！、大塚先生のところの！」

「そうよ、やっと思い出したわね！」

カズマがポニー少女のことを思い出し、更に驚いた顔をしていた。

少し前にタケシと銀に連れられて行った出稽古の先、テコンドー教室。その道場で初めて他流と組み手をした相手。あの時のテコンドー少女だ。確かに名前が大塚サクラだったと思い出す。道着ではなく、学院の制服を着ていたので気付くのに遅れた。それだけ印象が違ったのであろう。

「なんでキミが！？」

「それはこっちの台詞よ！」

カズマの言葉に友香が怒鳴る。興奮して我を忘れた友香には、周りの野次馬たちが見えていない様子だった。恥じらいもなく声を張り上げる。

「僕は、この学院の、このクラスの生徒だから……」

「それは私だ！」

「僕も生徒なんだけど……」

「勝手なこと言うな！」

「まあまあ落ち着いてください～……」

友香の剣幕に座っていたサクラも立ち上がり二人の間に割って入った。

「一体どうしたのですか？」

何が起きているのか事情が分からないサクラが、同じことを考えながら二人を見ている者たちの代表となって質問した。周りで見ていた者たちが、そんなサクラに「良く訊いた」と呟いていた。

「この男は、酷いんだから！」

「ええ！？」

おたおたするカズマを余所に話し始めた友香の言葉に、全員の視線が集まった。その友香の瞳が潤んでいることに周りも気付く。

「こいつね、初対面の癖に私の体を両手で突きまくったんだよ、容赦なくさ！」

そう言いながら友香が眉毛を八の字にして、両手で自分の両肩を

怯えるように抱きしめる。そんな友香の体が、周りの野次馬には震えて見えた。気のせいであるが。

「ええ！？」

カズマが疑問を投げかけるように声を上げた。カズマだけではない、サクラも、周りで見ている他の生徒もだ。

確かにカズマは、組み手の際に友香の体を正拳突きで何度も叩いた。しかし、あの時の組み手の内容を語る友香の言葉は、明らかに誤解を招くようなニュアンスへと変わっていた。

「最初に正面から迫ってくるから、思わず口元に脚をのばして口付けさせてあげたけど、そこからこいつの表情が変わってさ、信じられない勢いで攻めてくるのよ！」

組み手の開始直後、カズマがカウンターの前蹴りを顔面に喰らった時のことを云っている様子だった。間違いではない。

しかし、友香の台詞を聴いた生徒たちが、カズマを驚きの眼差しで見ながら軽蔑するような感情を視線にこめていた。その視線にカズマがキョロキョロとして戸惑う。

「私の全身を好き勝手に攻めまくって、私の抵抗すら無視して続けたのよ」

「なんか凄く誤解を招く言い方しないでくださいよ！」

そう言いながら必死な表情でカズマが涙目の友香に言い寄ると、外野から「最低～」「鬼畜よ」「酷い男」「ゲスだな」などとカズ

マを非難する声が幾つも囁かれる。

「しかもこいつ、私の股間を下から突き上げるように抉ったのよ。私も始めてだったわ。いきなり女の私に普通、あんな下品なことしないわよ！」

確かにカズマは、女の友香に金的を打ち込んでいる。

「何ぃ、そんなことまで！」

外野から、そのような声が幾つも上がった。

完全にカズマだけが、アウェイに投げ込まれたサッカー選手のようになっていた。視線が痛く刺さる。殺気すら混ざっていた

「二人して最後は畳の上でグチャグチャになってさ……、あんなの普通じゃないわ。私のプライドも……、身も心もグシャグシャよ……、思い出しただけで泣きたくなるわ」

そう言った友香の声が、消えるように最後は小さくなっていく。

確かに二人が戦った道場は畳張りだった。最後の方は、二人とも道着がグシャグシャに乱れていたし、泥試合だった。友香の言葉に嘘がない。

「何言ってるんですか、お互い同意の上でじゃないですか！？」

そう言うカズマに、更なる冷たい視線が集まる。

「そもそもことの始まりは、キミから誘ったんじゃないか！」

確かに組み手を誘ったのは友香の方だ。

しかし、カズマが言い訳の台詞を吐けば吐くほど周りの温度が、ぐんぐんと下がっていく。否、怒りの感情は、どんどんと上がって行っている様子だった。

「最低……」

カズマの横で冷めた表情のサクラが呟いた。その言葉がカズマの胸にグサリと突き刺さる。先程までの魅力的な明るい笑みは、これっぽっちも残っていなかった。完全にカズマを軽蔑する視線へ変わっていた。

「はーい、皆～、席についてー」

凍えるような空気が流れる教室に、担任の教師と思われる男性が入って来る。そして教師が黒板の前にある教卓の前に立つと、ゆっくりと生徒たちが自分の席に戻って行った。完全にカズマを軽蔑する眼差しを残してだ。

全員が席に着く。すると静まり返った教室内で、後ろの黒板にチョークの音をカツカツと鳴らしながら自分の名前を書き、男が自己紹介を始めた。

「これから一年間、このクラスの担任を務める森一郎だ、よろしく頼む。先ずは、みんなの名簿を読み上げるから、名前を呼ばれた者から大きく返事をしてくれ、いいな！」

今時の教師にしては、熱血感の溢れる元気のいい声で自己紹介を

した八尾弦徳が、教卓の上でクラスの名簿を開き、生徒一人一人の名前を読み上げ始めた。

その中に十文字カズマの名前と、これから彼と一緒に普通ではない学生生活を送ることになる、大塚友香と柴村サクラ、二人の少女の名前があった。

ちなみに、クラス名簿の中には、大黒童児と蛾蝶姫奈という名前が書き込まれていた。ぬらりひょんの隠し子、柴村サクラの護衛役を務める黒童子と蛾蝶姫の偽名である。

この三人、カズマ、友香、サクラを中心に、タケシの『九十九』とは別の物語が始まるのだが、それはまたの機会にと言うことで……。

<　続・外伝への懸け橋　>（後書き）

外伝やらなかったらゴメン～。
（超無責任ｗ）

第七話　「八尾弦徳」

タケシの入院生活は、両手足を骨折する重傷にもかかわらず、僅か一ヶ月ちょっとで終了した。

普通の医学的治療方法の他に、妖怪連合が用意した病院での妖術治療が、常識では考えられない程の回復スピードを実現させたのである。

しかも何箇所にもよる両手足の骨折、両拳に関しては複雑骨折の重症を負っていたのだが、それらが後遺症として残らなかった。

タケシの受けた治療術は、本来なら数多くの後遺症を残しそうな程の重症だった傷すらも、回復後に後遺症をまったく残さない奇跡なまでの治癒を実現させる不思議な治療術だった。

今回の負傷でタケシは、武道家としての人生に大きなハンデを背負いこむかと覚悟をしていたが、そのような障害が体に残ることはなかった。何度も言うようだが、本当に信じられない回復だった。

だが、手足のあちらこちらには、手術後の傷跡が数多く残っていた。妖怪医師の話だと、それらの傷跡も妖術治療で完全に消せるそうだが、あえてタケシは傷跡を残す選択をした。

そんなタケシの額の右側には、大きな打撲痕のような傷が残っていた。そしてタケシは、その傷を鏡で見るたびに、井川のことを思い出す。その傷は、戒めなのだと。

更にタケシは、一ヶ月以上の入院生活で、たいした運動が出来な

かった為に、随分と体の筋力やら敏捷やらの運動能力がなまってしまっていた。それでも退院後に今まで以上の猛トレーニングを再開させ、一ヶ月程度で以前と変わらない運動能力を取り戻すことに成功した。まだ以前に比べれば１００％でないが、病み上がりにしては上出来であろう。

そして世間の流れも進んでいた。

入院後から約二ヶ月。桜の花は随分と散り、そろそろ若者たちの間で五月病が発病し始める季節と変わっていた。

虎野町の面子にも、色々と環境の変化が起きていた。

タケシは、入院中に見舞いに訪れてくれたバイト先の雇い主、オーナー鈴木にバイトを辞めることを継げた。どちらにしても入院している間はバイトに出ることが出来ず迷惑を掛けてしまうとオーナー鈴木に告げると、オーナー鈴木は気にしなくてもいいと言っていたが、結局タケシはバイトを辞めることにした。

本当の原因は、やはり井川のことがあったからである。

井川の件については、妖怪連合が偽造工作を行い、交通事故での事故死ということになったらしい。タケシは、入院していて葬式に主席出来なかったことを悔やんでいたが、退院後直ぐに墓参りへと井川の地元に飛んで行った。

タケシの心の中では、井川への思いが完全な形で決着をつけていない様子だった。その納得の行かないもやもやをトレーニングにぶつける様に励んでいた。

他の者達の様子も語ろう。

自称タケシの一番弟子、十文字カズマは、この虎野町に古くからある名門学院に入学して、中学生としての新学期を満喫しているらしい。タケシが陽子から聴いた話では、早くもガールフレンドを作って旨いことやっているとの話だ。実に隅に置けない。

一方、妖怪連合の方といえば、猫田三兄弟の長男、猫田龍信の死により、彼が所長を務めていた探偵事務所は閉業してしまった。

もともと龍信の趣味で開いていた探偵事務所だった為、その後を残された双子の兄弟が継がなかったのである。

弟の猫田虎二は、少々不真面目だった忍の修行をやり直すと言いだし、調査班の仕事に専念しながら一人修行に励んでいる。

双子の妹、珠美は、死んだ兄の恋人だった蓋口静香に代わって、妖怪連合虎野町支部長代行の油儀裕次郎の秘書になった。ゆくゆく八尾弦徳が長老に就任した際には、彼の専属秘書になる予定である。

そして周りの男たちが、童顔巨乳秘書の誕生に歓喜していたが、珠美の方は、そんな男たちの思いに気付いていない様子だった。だが、珠美の隠れファンたちには、それがまたたまらなく可愛く映っているようだ。

他にも妖怪連合虎野町支部内では、幾つかの出来事が起きていた。

八尾弦徳がタケシ達と決闘に勝てば直ぐに、十二番長老及び虎野町支部長に就任するため、後処理班から弦徳が抜けることを察し、一七五一家の方から虫玄武兜丸ジョニーＤＸが後処理班に入ること

になった。他にも調査班には、同じく一七五一家の黒童子が選抜された。

タケシによって一人を残して壊滅状態に追い込まれた七人岬は、再び扈鼠により勧誘が始まった。しかし、以前の様なベストメンバーは集まらないと扈鼠が、のっぺらぼうの営んでいるおでんの屋台で酔いつぶれながら愚痴っていた。

こうして死んだ者や事情で穴が開くポジションに人員が追加されたのだ。

そして、あわただしかった虎野町支部内も落ち着きを取り戻し始め、残すは八尾弦徳とタケシの決闘に向けて準備を進め始めたのである。

そんな中、春婆怒が一人で遠くの春婆怒村を目指していた。

まだまだ寒さの残る春の微風が肌に冷たい春婆怒村の農道を、赤い自転車に跨った郵便局員が、口笛を吹きながらのどかな感じでゆるゆると自転車を走らせていた。

少々蟹股で自転車のペダルをこいでいる郵便局員は、堂本と書かれた表札の前に自転車を止めると、後ろに積んでいた大きな籠の中から片手で持てる程度の重さの箱を取り出した。どうやらタケシの祖父、堂本拳四郎宛への郵便物らしい。

郵便局員は、その郵便物をもって堂本家の玄関を目指した。

「ごめんくださ〜い、堂本先生いらしゃいますか〜」

古風な玄関を開けた局員が、大きな声で室内に向かって声を張り上げた。この村の人物の多くが、堂本拳四郎のことを先生と呼ぶ。

しかし中から拳四郎の返事は返ってこなかった。しばらくして局員は、玄関の扉を占めて庭の方へと足を運ばせると、離れにある空手道場を目指して歩いていった。

「堂本先生、いま……す……」

そして局員は、道場の開いた入り口から道場内の様子を覗き見た。だが、道場内を見た局員が声を詰まらせる。

そこには道着に身を包んだ長身の老人が一人立っていた。

身長１９０センチで異常なまでの筋肉量を搭載した老人。おそらく体重は、１００キロをゆうに超えていることだろう。顔は歳相応の皺が年輪の様に刻まれているが、その姿は古代の英雄戦士と見間違えるほどにマッチョだった。まさにグレートである。

しかもその体から鬼神の様な恐ろしいオーラを発し、覗き見た郵便局員の筋肉を硬直させ、拳四郎を呼ぶ声を途中で中断させた。

その威圧的オーラを放つ拳四郎の眼前に、二つのブロックを跨ぐ様に屋根瓦が積まれていた。空手家がパフォーマンスでよく見せる瓦割、あれだ。

しかし、拳四郎の前に詰まれた瓦の数は、異常なまでの枚数であった。何十枚重ねてあるのか瞬時に分からないぐらい詰まれ、その高さは１９０センチある拳四郎の胸元までの高さが有る。

拳四郎は、この瓦を鎚拳かチョップで叩き割ろうというのであろうか、真っ直ぐにそびえ立つ瓦のタワーを睨んでいた。

その光景を見つけた郵便局員は、荷物の配達に来たことを忘れて、じわっと冷や汗を流しながら見守っていた。

積み重ねられた瓦の柱を睨んでいた拳四郎が構えを取った。しかし、その構えは、上から拳や手刀を打ち下ろすような構えではなく、横に向けた体を大またで腰をおとし、左腕を前に、右拳を腰に添え。まるで一撃必殺の正拳突きを放とうとしている構えだった。

縦に積み重ねられた瓦に対して、横から正拳突きを打ちかますのかと郵便局員が疑問に思った瞬間、構えを取っていた拳四郎が気合を篭めた掛け声と共に瓦のタワーに技を仕掛ける。

「ぜぇあぁ！」

拳四郎が仕掛けた技は、頭上から落とすような槌拳でも手刀でもなく、下から蹴り上げるキックだった。

二つのブロックの上に重ねられた瓦のタワー。そのブロックとブロックの間から瓦を蹴りあげる拳四郎。

まるで金的を放つかのような蹴りに、下の方から次々と積み重ねられた瓦が、タワーを崩すことなく砕けていく。蹴りに砕かれずに形をそのままに飛んで行く瓦は一枚も存在しない。そして、てっぺんにある最上段の瓦まで拳四郎の脚が到達して、全ての瓦を見事に破壊した。

道場内に拳四郎が粉砕した瓦の破片が、火山の噴火で飛んできた

岩石の様に降り注いだ。その破壊的光景に郵便局員の男が、届けに来た荷物を強く抱きしめながら身を怯えるように縮めていた。

あやうく拳四郎の気迫と破壊光景に、おしっこをちびりそうになる郵便局員であった。

<　春婆怒の里帰り　>

道場の床に粉砕された瓦の破片が散らばるなか、郵便配達に来た局員から小包を受け取った拳四郎は、その散らかった道場に腰を下ろして小包の宛名を確認した。

「ん、タケシからか」

どうやら小包の送り主は、虎野町に居る弟子の一人、桜木銀のところで厄介になっている孫のタケシからだった。

自分の頭より少し大きな箱。重さは不思議なぐらいに軽い。

「あいつがワシに物を送ってくるとは、さてさて中身はなんぞや？」

そう言いながら拳四郎は、箱をゆすったあとに、耳を箱に近づけ中の音を聴いてみる。

「ゆするで、ないわぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！」

「！！！！！！！！！」

拳四郎が箱に耳を付けた瞬間、中から大音量の叫び声が、拳四郎の耳を攻め立てた。

その大声に、思わず箱を投げ捨ててしまう拳四郎。

そして、ころがった箱を拳四郎が呆然として見ていると、箱の内側から鋭い刃先が突き出て、箱の口をふさいだガムテープを起用に

も綺麗に切り開いていく。

「なんじゃ……！？」

箱の口がパカリと開く。

すると人間の手が飛び出してくる。それは細く綺麗な女性の手だった。

それを見て拳四郎の口もパカリと開いた。

箱のサイズからして人が中に入れる訳がないのに、箱の中から飛び出した手は、生きた人間と代わらない仕草で動いていた。

そして、その腕が床に手を付き、中から体をひっぱり出すように踏ん張る。そして、人の頭が出てくる。拳四郎から顔は見えなかったが長い金髪の頭だった。

「まさか……」

その金髪の後頭部を見ていた拳四郎の口から言葉が零れた。

箱の中から頭だけでなく上半身も生え出ると、それはスタイルの良さそうな女性のものだった。

明らかに箱の中に入りきらないサイズの女性は、ラスベガスのマジックショーの如く小さな箱から出ると、踵に引っかかった箱を、片足でブルブル振るいながら外していた。

「は、春婆怒さま……」

そう、拳四郎の眼前で小さな箱から出てきたのは、自称、春子・ハルバードこと春婆怒だった。かつては、この村の守り神を勤めていた九十九神である。今でもこの村では、春婆怒への信仰はとても深い。

「うむ、拳四郎や、ひさしぶりじゃのぉ」

そう言ってクールな表情で振り返った春婆怒は、唖然としている拳四郎に声を掛けた。

それから暫くして春婆怒と拳四郎は、春婆怒村の村長を加えて、山の上にある春婆怒神社を目指して歩いていた。

春婆怒を先頭に歩く拳四郎の手には、一升瓶が握られていた。呼び出された村長は、4～5人分の寿司が入った器を持っている。

三人は、これから飲み会でも開こうといった格好で歩いていた。

そして、神社へ続く急な階段を上がると神社の神殿が見えてくる。鬼々蜘蛛との対決で破壊された神殿だが、今では一流の宮大工たちの手で完全に修復されていた。むしろ以前より立派になっている部分も多く見られる。

三人が神社に到着すると、既に連絡を貰った神社の神主が待っていた。

袴姿の神主は、三人の姿を見つけると礼儀正しく頭を下げて向かえいれた。神主の顔も明るく笑っていた。

その神主が、賽銭箱の向こうにある扉の鍵を開けて、神殿の中へと三人を招く。そして広い部屋から奥の院に進んでいくと、それに三人も続いた。

木造で板張りの１０畳ぐらい部屋だろうか、入って正面の壁に長槍と日本刀が一本ずつ祭られてある。

長槍は、春婆怒のレプリカだ。春婆怒が虎野町へタケシと一緒に出て行くのに、とりあえずごまかし程度に作られた偽物である。

そしてもう一つの日本刀は、その昔に春婆怒と一緒に、この村へ現れた癒しの侍が持っていたと云われる刀だ。

春婆怒は、その刀の前に正座で座り込むと、両手を合わせて拝み始めた。

三人の老人たちは、その春婆怒の小さな背中を見詰めながら、同じように正座をして手を合わせ始める。

「まあ、お主らは、そうあらたまるな……」

拝むのを終えた春婆怒が、刀を眺めながら後方の三人に言う。

「今日はお主らに、頼みがあってこうして脚を運んだのじゃ」

「頼みごとですか？」

「ああ、たいした頼みではない。ただここで、酒盛りを始めてはもらえぬかのぉ」

拳四郎が、自分の横に置いた一升瓶を見る。

「酒盛りですか？」

「そうじゃ、この刀の前で、ただ楽しそうに飲んでくれれば良いのじゃ」

「はぁ……？」

三人は、気の抜けたように返事を返した。

「この刀の持ち主だった十六夜剣兵は、村人たちと一緒に酒を交わすのが好きな男でのぉ」

祭られた刀を眺める春婆怒の表情は、後ろに居る三人に見えなかったが、いつものクールなものではなく、とても優しい表情をしていた。

「わらわは酒が飲めぬゆえのぉ、代わりにお主らが酒を付き合ってもらえむかぇ」

「はぁ……、かまいませんが」

「お主らは、お主らの話しで盛り上がってもらえればいいんじゃ。ただ、その楽しげなところを剣兵に見せてやってくれれば良いのじゃ」

三人は、春婆怒の言いたいことを感じ取ると、言われたとおりに酒盛りを始めた。持ってきた一升瓶の酒は直ぐに空になり、神主が直ぐに別の酒を持ってくる。気付けば三人は、神社の奥の院の中であることすら忘れて騒いでいた。

その光景を背にして十六夜剣兵の忘れ形見を眺める春婆怒の表情も、いつの間にかにこやかなものに変わっていた。これで、きっと亡くなった十六夜剣兵もあの世で喜んでいるだろうと思いつつ。

三人が酒に酔いながら盛り上がっていると、奥の院の入り口の向こうから、激しい突風が吹き込んできた。その風に三人が目を細めると、春婆怒の表情がいつものクールで冷たい眼差しに戻った。

突風がやむと、奥の院の入り口に男が一人、寄り掛かるように立っていた。

白いスーツに赤いネクタイ。髪はポマードでオールバックに固め、やたらと高い鼻と頬に刻まれた刀傷が目立つ男が、鋭い眼差しを室内に向けて立っていた。その後ろに黒いスーツにサングラスを掛けたお供と思われる柄の悪い男たちが数人たっている。まるでヤクザの一団だ。

立ち上がり振り向いた春婆怒が、白いスーツの男を睨みながら、拳四郎たち三人に道を空けるように手で指示を出す。拳四郎たち三人は、その春婆怒の指示に素直に従い、部屋の隅に移動した。

白いスーツの男が口を開く。

「これはこれは春婆怒殿、決闘が済むまで虎野町での移動が自由に約束されているとはいえ、使い手から離れて一人で遠出をするのは

迂闊すぎないかい？」

その言葉に春婆怒が答える。

「お主こそ、妖怪連合の掟を破って、他の支部の縄張りに居る九十九神に手を出してもいいのかのぉ、二番長老の大天狗よ？」

「いやいや、今日は別の用事で虎野町を訪ねた帰りに、ちょっと寄ってみただけだ。戦う気も襲う気もないわ」

「ほほぅ～、それを聞いて安心したわい。もう一人の長老殿も同じかぇ？」

「ふむ、気が付いていましたか」

春婆怒が口元を笑わせながら言うと、何処からともなく白いスーツの男とは別の声で返事が聞こえて来る。

「十番長老殿は、相変わらず変体じゃのぉ。全裸をやめて服ぐらい着てはどうじゃ？」

「大きなお世話です」

返事をしたのは、姿が見えない妖怪、十番長老の透明人間だった。

「でぇ、十二長老が二人揃ってわらわに何ようじゃ？」

「先程も言ったが、虎野町に用事があってな、その帰りに少しばかり報告しておきたくてよったのだ」

「報告とな？」

大天狗の言葉に春婆怒が首を傾げると、今度は透明人間が語り始めた。

「お主らと八尾弦徳の決闘なのですが、その会場の手配にかんして、わたくし十番長老が後衛にも勤める事になりましてね。それをあなた方にも報告しておこうと思いまして」

「あの小僧との決闘に、お主ら十二番長老まで首をつっこむのかぇ」

春婆怒の声に、若干の不満の色が感じられた。

「いかにも。それだけビックイベントなのですよ」

「安心せい、それまでの身の安全と、決闘後しばらくの安全は、我々十二長老が責任を持って保障してやる」

「ただし、決闘中は、身の保障をしませんがね」

視界に見えないが、十番長老が笑っているのが感じとれた。

「良かろう。お主たち妖怪連合にしては、破格な条件なのだろうからな。タケシの奴も喜ぶじゃろう」

そう言う春婆怒の表情には、僅かな影が見て取れた。

「伝えたいことは、それだけだ」

そう大天狗が言うと、再び目を細めるほどの突風が巻き起こり、

次の瞬間にはヤクザのような一団の姿が消えて、透明人間の気配も感じられなくなっていた。

「春婆怒様……」

見知らぬ者たちが消えると、拳四郎が春婆怒の名を心配そうな表情で呼んだ。

「拳四郎や、わらわは虎野町に帰るぞょ！」

突然大きな声を出す春婆怒。

「はい！」

その声に拳四郎が元気良く声を返す。

「わらわを再び、宅急便で送り返してくれ！」

「はい……」

どうやら春婆怒は、配達されるすべに慣れたらしい。

<　その後の双子　>

「若は、あの二人の話をどう見ますか？」

油義邸の客間のひとつで、家主の油儀裕次郎が八尾弦徳に、そう問いかけていた。しかし、何かを考えている様子の弦徳は、だまったまま油儀の質問に答えなかった。

部屋の中には、妖怪連合虎野町支部の四人が、ひとつのテーブルを挟んで向かい合いながら座っていた。

油儀の横には、最近、油儀の秘書になったばかりの猫田珠美が、着慣れないレディーススーツ姿で座っている。その向かえには、八尾弦徳と無常水越斎が静かに並んで座っていた。

「二番長老殿と、十番長老殿の話……。我々としては、素直に聴きいれるしかないでしょうな」

弦徳が、重い感じで答えた。

「それにしても困った申し出でありますな。まさか、十二長老たちが春婆怒との決闘に首をつっこんでくるとは……。しかも今更」

弦徳のあとに、水越斎が静かな口調で言葉を継ぐ。

「どうして今頃になって長老たちが、そんなことを言い出したのでしょうね？」

秘書としてのイメージとはかけはなれたあどけない口調で珠美が、

三人の男達の顔を見渡しながら質問した。その問いに男たちは、目蓋を閉じ、瞑想しているかのように考え込んでいた。

そして、少しの間を空けて油儀が口を開く。

「若の母君、九尾双葉様が春婆怒によって討たれたのち五百年。十二長老の面子も幾分変わったが十一名でやってきたのだ。弦徳様が十二番長老の座に就くのが待ちどうしいのやも知れませんな」

そうだとするのなら、油儀の思いと同じだ。納得が行く。

「本当に、それだけでしょうか？」

弦徳が、疑問に満ちた表情で言う。

「拙者も何か裏がありそうで怖いでござります……」

「ですが敵ではないのですから、長老たちに会場のセッティングぐらいは任せても問題はないでしょう……」

「そうですな、心配してもはじまらぬか……」

三人の男たちは、それでこの話をまとめようとしていた。そして油儀が珠美に話を振る。

「珠美君、今回の件にかんして、長老たちとの話の繋ぎ役は、キミの初仕事の中でも責任の重い内容だ。心してかかりたまえよ」

「はい」

油儀がプレッシャーを掛ける言い方をわざとした。しかし珠美は、笑顔で元気良く答えてみせる。その笑みを見た三人は、どうやら二ヶ月前の不幸から、完全に珠美が立ち直れた様子だと思えた。

一時は、残された兄弟二人で、酷い沈みようだったのだ。ぽっとする三人であった。

一方、珠美の双子の兄、猫田虎二は、町外れの人気が少ない場所に有る古いビルを借りて、そこに一人で住み込みながら忍術の修行に励んでいるらしい。

だが、ロープを使ってビルの屋上からレンジャーの様に降りてきたり、ロッククライマーの様に壁を登る所を近所の人に見られ、最初は泥棒と間違われて通報されていたが、今では近所の人も「体を鍛えている登山家」と勘違いして通報まではしなくなっていた。

そんな虎二の様子のほかに、油儀の耳に、とある噂が入ってきていた。

それは、その虎二が住み込みながら修行をしているビルに、女性の出入りがあると言う噂だった。

妹の珠美は、龍信が経営していた探偵事務所をたたんだあと、油儀邸に住み込み、慣れない仕事のせいもあってか、虎二のビルには足を運んでいないらしい。

だとするならば、その女性が誰なのかと、男たちの間で噂になっていた。

そんなわけで、気になるそのビルにシーンを移してみよう。

虎二が借りたとされているビルは、少々古い鉄筋コンクリート建てのビルである。階数は四階まであるが、どの階の部屋も事務用の作りで大部屋しかなく、人が寝泊りするような作りではなかった。社長室や会議室の様な部屋の区切りがないのだ。唯一、すべての階にある個室といえば、トイレだけである。かなり可笑しな作りのビルであった。

虎二は、そのビルの一階をトレーニングルームとして使い、二階を住居に使っていた。三、四階は、今のところ何にも使っていない。水と電気は繋がっているが、ガスの供給は無い。一階のトイレをシャワールームに改造して汗を流すのに使っているが、流石にまだ水の冷たい季節だ、風呂は近所の銭湯に行っている。

そのトレーニングルームに使っている一階に、手裏剣投げの訓練に励む虎二の姿があった。コンクリートの壁により掛けた丸太が、虎二の投げた手裏剣の数々でサボテンの様になっていた。十や二十の数ではない。投げている虎二も汗でびしょびしょになっていた。

「虎二～、カレーできたよ～」

汗だくの虎二に、少し間の抜けた可愛らしい声が投げかけられる。虎二が、その呼び声に振り向くと、散らかった床の上に女性が一人胡坐をかいていた。

タンクトップにホットパンツ姿の女性は、炊飯器を横に置き、何故か胡坐をかいた生脚の上に鍋をのせていた。その鍋蓋の隙間から、カレーの美味しそうな臭いがもれ出ている。

「おう、やっとご飯できたか」

虎二がそう言いながら鍋を抱えるポニーテールの女性に近づいて行く。すると彼女は、胡坐をかいた脚の上から鍋を下ろすと、横にある炊飯器からご飯を二つの皿に盛り付けはじめた。

「それにしても太陽のおかげで、ガスを引かなくて済むから助かるぜ」

「へへぇ～」

自分の妖術でカレーを暖めながら作った天野太陽を虎二が褒めると、彼女は幼い少女の様に笑って見せた。顔が少し赤くなっている。

「今日はカレーか？」

臭いから分かりきっていたが、毎日の様にご飯を作りに来てくれる太陽と会話を弾ませる為に虎二がそう言った。

だが、しかし。

「うん、多分、まだカレーだよ……」

そう言いながら太陽は、虎二と目を合わせようとしない。そして、二人分のご飯を盛り付けていた。

「多分？」

虎二が首を傾げながら太陽の正面に座った。

「まだって、とう言うことだ、太陽？」

そう言いながらご飯の盛られた皿を受け取った虎二が、カレー鍋の蓋を開けた。中からカレーの美味しそうな臭いが広がっていく。虎二が鍋の中を見たが、まだ、カレーは普通に見えた。あくまで、まだ、である。

「どれどれ～、今日のカレーは、どんなかんじかな～」

鼻歌まじりで虎二がカレーのルーをご飯にかけた。普通のカレーに見えた。イモとニンジンと肉が入った普通のカレーだ。おかしな点は見当たらない。

「食べていいのか？」

「……うん」

太陽は、未だ虎二と目を合わせようとしない。顔を逸らしたままである。

そして、ボソリと言った。

「お金がね、なかったの……」

子供が言い訳を述べるような口ぶりだった。

虎二がスプーンでカレーを掬い上げると、太陽が上目遣いで虎二を見ながら言葉を続けた。

「しかたなかったの、カレーにお肉が入ってないと、僕は、納得いかないのさ……」

太陽が、そこまで言うと、虎二の手が止まった。掬い上げたスプーンには、ご飯にカレーが程よく混ざり、肉らしい具がのっていた。その肉を虎二が、じっと見つめる。

「太陽……」

「なに、虎二」

「この肉は、何の肉だ……？」

太陽が答えない。

「何の肉なんだ……？」

問い詰めるように質問を繰り返した虎二に、太陽は口をごにょごにょとさせた。ないか言った様子だが、声が小さすぎて良く聴こえない。

「太陽、答えてくれ。この肉は何の、に・く・な・ん・だ！？」

「美味しい肉だよ……」

「そうじゃない、俺が訊いているのは、な・ん・の・に・く・か・だ！？」

「ね……」

「な・ん・の・に・く・な・ん・だ！？」

「ねこ……だよ、てへ」

「でぇぇぇぇぇぇぇぇてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇいいいいいいいいいけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ、このバカ女ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

「ふうぇーーーーーーーーーーん！！！！！」

「てへ、じゃねーーーーーよーーーーーー！！！！

四階建ての古いビルの一階で、絶叫と共に、カレーの盛られた皿が飛び交うのであった。

<　ストリートファイト・１　>

虎野町レインボー商店街に在る一軒の居酒屋。全国に、１００件以上のチェーン店を持つフランチャイズ営業の店である。

その居酒屋の大部屋で宴会を開いているご一行様。男女４０人ぐらいだろうか、殆ど男性で女性の人数は１／４ぐらいしか居ない。

既に宴会が始まり一時間が過ぎようとしており、会場のテンションはかなり高くなっていた。

その宴会場で騒ぐ殆どの男たちの体つきは、筋肉でたくましく引き締まっていた。何かのスポーツを嗜んでいるのは間違いないだろう。

「いゃ～、今日はまさか先輩と二回戦で早々と当たるとは思いもしませんでしたよ」

「まったくだ、でも、お前も強くなったよな」

「まだまだ、僕なんて未熟者ですよ」

「あのコンビネーションの切れといい、最後のローといい、効いたぜ」

「先輩、ありがとうございます、オッス」

宴会場のあちらこちらで、これと似たような話が飛び交っていた。

この宴会の参加者は、全員が光臨館と名乗る空手道場の門下生やその関係者たちであった。

今日は全国大会への地方予選が行われ、彼らはその大会の帰りであった。

光臨館空手は、全国１５０以上の支部を持った日本でもかなり大きな流派で、海外などにも幾つかの道場を持っている。そして彼らは虎野町に在る支部のメンバーたちであった。

光臨館虎野町支部から地方予選に参加した人物は、全部で八名だった。いきのいい若手から熟練のベテラン選手まで、自慢のつわものたちを送り出したが、残念ながら力及ばず、全国大会の切符を、この支部から参加した者が獲得することは無かった。全員予選落ちである。

そして、現在、酒を飲み交わしながら、各選手の健闘をたたえ合っている最中であった。

そんな中、一部の男性たちが部屋の片隅で何やらひそひそと相談をしていた。

「どうしますか先輩？」

「俺は行きたいよ」

「本当に可愛い子がそろってんだろうな？」

「ああ、その辺は俺が保障するぜ」

「すまん、俺は明日が早いから、今回はパスだ」

「僕は彼女が帰りを待ってますので……」

「ちっ、いいよな、彼女のいる奴は……」

「三人か？」

「僕も行きますよ」

「じゃあ、四人だな」

そんな会話を密かにしていたグループは、暫くするとにぎわう会場をこっそり抜け出し、そのまま居酒屋の店外へ出て行った。そして、駅前方向のピンクのネオンが多く並ぶ街角へと目指して歩き始める。目的は、風俗店らしい。

だが、今日の彼らは余り運がいいようではない。彼ら四人が歩き出して暫くすると、ポツポツと雨が降り始めた。

その雨は、彼らが如何わしい店に到着する前に、更に強さを増していく。

「ちっ、なんてタイミングが悪いんだ、強く降ってきたな」

「ここんとこ、雨の日が多いですね……」

雨の勢いは、どんどん強くなっていく。

現在四人が居る辺りは、商店街とピンク街との中間ぐらいで、駆

け込むような飲み屋すらない。周りの建物は、殆どがオフィスビルばかりだ。

四人は雨から逃げるように、雨宿りが出来そうな場所を探した。

「先輩」

一人の男がそう言って、ビルの一階が駐車場になっている場所へと飛び込んだ。

入り口には、侵入者を拒む鎖が一本引かれていたが、三人は、先に飛び込んだ後輩に続いて、その鎖を跨いで中へ入っていく。

そこは、左右に六台ずつ車が止められる駐車場だった。しかし車は、一台も無い。おそらく上の階のオフィスの社員専用なのであろう。明日の朝まで無人だと思われる。

四人は、そこで濡れた服から雨を掃うと一息ついた。辺りからは雨が地面を叩く音しか聴こえてこず、寂しく人気も感じられなかった。周りのビルの様子は、明かりが漏れている窓すら見当たらない。

「どうします先輩、しばらく待ちますか？」

「直ぐ止むのか、この雨？」

「携帯でタクシーでも呼ぼうか？」

「ん？」

四人がこの後どうするかを相談しているときであった。一人が、

雨の降りしきる路上の向こうに人影を見つける。そして、その人影をじっと見つめていると他の三人が、何を見ているのかと気になり同じ方向を見た。

それは、雨の中、二人の人物が、こちらに向かって歩いてくる風景だった。

二人ともコンビニに売っている安物のビニール傘を差していた。

遠目にも分かったことだが、片方の人物は、かなり背が高い。差す傘の高さが、隣の人物よりも頭一つ分ぐらい高かった。

傘を差す二人は、まっすぐに四人が雨宿りをしている駐車場の中へと入ってきた。四人は、何か薄気味悪い感覚を二人から感じて、駐車場の奥へと、警戒するようにさがって行った。

二人が鎖を跨ぐと、差していた傘を閉じて横の壁に立てかけた。

四人は、傘を閉じた二人を見て、少しばかりだが驚いた表情を見せた。

背の低い方は、五十歳ぐらいの白人男性だった。背が低いといっても１８０センチはある。そして胸板も厚くフロレスラーのような体格をしていた。

方や背の高い方の男は、三十前ぐらいの日本人である。しかし、身長は１９０センチぐらい間違いなくありそうだ。白人男性同様、胸板も厚くプロレスラーか何かに見えた。

「おや、雨宿りの先客かな～」

渋い声で、白人男性がそう言う。実に悠著なしゃべりかただった。しかも、日本語の発音が、外人と思えないぐらいうまい。

しかし、その白人の言葉に、連れの男も四人の方も答えなかった。

プロレスラーのような体格の二人は、静かな冷めた視線で、先に此処で雨宿りをしていた四人を見る。四人の男達も同じように二人を見ていた。

「あいつ、帝都プロレスの城嶋ですよ……」

四人の中で一番の後輩が、連れの三人に小声で言った。

「プロレスラーか……」

白人が、四人の男達をじっくりと観察する様に見る。

それは、『めつけ』を行っている様子だった。

『めつけ』とは、相手の外見から戦力を量る術である。

身長体重はもちろん、筋肉の搭載量や柔軟性から運動能力を予想したり、肘やこぶしに拳タコが有るか無いかで打撃技が使えるのか、首が太く耳が蒲鉾の様になっているかでグラウンド技が使えるのか、そして鼻がつぶれていたり目蓋に切り傷が有るかなどで打たれ強さやディフェンスのテクニックなどを予想する。それを武道などでは『めつけ』などと呼び、初見で相手の実力を量るのだ。

達人級になると、この『めつけ』だけでどちらが強いかを悟り、

戦わずに勝負が決まることもある。また逆に、この『めつけ』を相手に誤らせることで予断させ勝利を勝ち取る戦略もよくあるのだ。中国拳法の中に存在する酔拳などが、これにあたるだろう。

そして、今この場で白人男性の方が、四人の空手家に、それを行い実力を予想していた。

「なあ、チャンプ、この四人、空手かだぞ」

白人男性は、彼らを見ただけで、四人が空手を使うのを悟り、隣の大男にそれを告げる。

「俺、まだチャンピオンじゃあないっスよ」

「いやいや直ぐになるさ、私の目に狂いはない」

「……」

背の高い男は、帝都プロレスの中堅レスラーである。

帝都プロレスとは、十年前に旗揚げされたプロレス団体で、日本でも一、二を争う大きな団体のナンバーツーだった男が独立して創った団体である。

旗揚げ直後は、人材不足や経済難で厳しい団体だったが、今では、営業も安定して、大きなプロレス団体にまで成長したのである。しかも日本だけでなく海外のプロレスファンにもインターネットなどで人気が出てきており、まだまだ成長が望めるプロレス団体である。

この長身の男は、その帝都プロレスの選手と呼ばれる社員であっ

た。プロレスラーといってもサラリーマンなのだ。人気と実力が上がれば、部長、課長といったぐあいに役職が昇進していき給料がアップしていく。プロレスのメインイベンターは、その団体の重役たちなのだ。

白人が、四人の空手家を見ながら隣の男に話し続ける。

「偶然とはいえ丁度いいと思わないかね。この四人から空手を教えてもらっては？」

「なんだと、こら！？」

白人の言葉は、駐車場の奥に居る四人にまではっきりと届いていた。言葉のニュアンスが、空手を舐めている感じであった。その台詞を聴いた四人が、一斉に怖い表情へと変貌する。

「城嶋君、キミは、空手というものを知らないだろう？。まあ、私もなんだがね」

「はい……、知らないっス」

「次にキミが戦うのは、生粋の空手家だ。これは、予備練習に絶好の機会だよ」

白人が明るく微笑みながら話していた。どうやら悪気は無いらしい。そんな笑みに見えた。しかし、その笑みは、四人の空手家に対して火に油を注いでいるようなものであった。

「こら、そこの外人、何かってなことを言ってるんだ。喧嘩売ってるんか、ごらぁ！？」

「やめんか、志村！」

「ですが、加藤さん……」

大きな声を出しながら一歩前に踏み出した男を後ろの仲間が肩を掴んで止めた。しかしそこに、四人の神経を逆撫でするような台詞が飛んでくる。

「空手なんて、所詮は素人集団のお遊びっスよ、ミスター」

長身の男が、隣の白人に言った。わざとらしい大きな声でだ。しかし、その台詞で、四人の男達の表情が、完全に怒りに満ちたものへと変わる。凄い形相で二人を睨みつけた。

「おもろいこと言うじゃねいかよ、のっぽ野郎！」

肩を掴まれていた男が、その手を振りほどき前へ出た。他の三人は、もう誰も止めない。やってしまえと言いたげな空気が流れていた。

「教えてやるよ、空手ってやつを、知りたいんだろー！」

そう言いながら空手家の志村が前に出ると、プロレスラーの城嶋も前に出た。

二人がビル一階の駐車場のほぼ中央で睨み合いを始めると、その様子を壁際で三人の仲間と、駐車場の入り口に立つ白人男性が観戦するように見ていた。

雨が降る街中で、光臨館空手・志村芳樹と、帝都プロレス・城嶋悟のストリートファイトが始まろうとしていた。

<ストリートファイト・1　>（後書き）

今回の話＞ストリートファイト＜を書くに当たって、極真の全国大会のＤＶＤを見させてもらいました。

<　ストリートファイト・２　>

光臨館空手初段、志村芳樹２２歳。身長１７８センチ、体重８５キロ。若くして額は少々広めだが後ろ髪がその分長い。脂肪は少なめで、全身は筋肉で引き締まった体型をしている。空手家としては、理想的体型に近い。

空手は、知人に誘われて高校生時代に始めた。今年で五年目になる。過去に三度、地方予選に参加している。だが、最高でも三回戦までしか勝ち上がったことがない。だからと言って決して彼が弱い訳ではなかった。

彼を毎年倒して勝ち上がった選手は、必ず三位までに入賞しているのだ。今年は優勝した選手と一回戦で当たり敗退している。

そんな志村が、先輩三名を差し置いてプロレスラー城嶋悟と戦おうとしていた。残された三人の仲間は、ビル一階の駐車場で、後輩をストリートファイトの舞台に送り出すと、奥の壁際まで下がり横並びになって観戦する事にした。

二人が、車が一台も無い駐車場の中央で向かい合う。外は、まだ雨が降っていた。結構強い雨だ。プロレスラー城島の連れで、体格の立派な白人男性は、駐車場の入り口に立って、雨を背景に仲間のレスラーを見守っていた。その表情には、うっすらと不敵な笑みがあった。

ニメートルぐらいを残して志村と城嶋が向かい合う。

そして、志村が城嶋のことを、足元から上へゆっくりと舐める様

にめつけを行う。

靴は、何処にでも売っていそうな普通の柄のシューズだが、サイズが非常に大きい。おそらく身長１９０センチは有るのだろう、その為足のサイズも大きいのだ。

脹脛も腿も太かった。履いているズボンの太股部分がはち切れそうになっている。

そして、先程まで着ていた上着を連れの外人に預けて露になった上半身は、逆三角形で恐ろしい程に引き締まっている。着ているＴシャツがぴったりとくっ付き筋肉の一つ一つの部位を隠すこともできず映し出していた。

続いて志村の視線が、城嶋の頭部を観察する。

額に幾つもの傷が有る。両目の目蓋にもだ。そして、潰れた鼻。何度も打たれて軟骨が無くなっているようだ。耳も蒲鉾のようになっている。

何よりも、あの太い首。頭のサイズと、首の太さが一緒である。否、首の方が太いかもしれない。ブリッチなどの練習を、相当量積んでいるのであろう。おそらく蹴り技をクリーンヒットさせなければ、頭部への攻撃ではＫＯできそうに思えなかった。拳や肘の攻撃では、あの太い首が脳の揺れを吸収してしまいそうに見えたのだ。

志村が敵の実力を計算しているあいだ、レスラーの城嶋は、太い腕の拳を握り、ブンブンと振り回すように準備運動をしていた。

フック、ストレート、アッパーカットなど次々と繰り出す城嶋の

パンチ。スピードは無いがパワーの凄さが伝わってくる。

しかし、そのモーションを見ていた四人の空手家が、密かに心の中で笑っていた。

ボクシングの用語で、テレフォンパンチと呼ばれるものがある。それは、素人のパンチモーションが大きく、まるで電話の受話器を取って耳に当てる様に見える事から、そのように呼ばれているのだ。即ち、パンチを振り上げる予備動作が大きく、これから攻撃しますよと相手に伝えているために、回避行動も容易くできてしまうのだ。

今、城嶋が見せているパンチの練習。それが四人にはテレフォンパンチその物に見えて笑えていたのだ。

仮にもプロを名乗る男が、この程度なのかと笑いが込み上げてくる。所詮はプロレスなのかと。これならば、パンチのモーションを見せたところで、回避どころか反撃を数発は打ち込めると思っていた。

「よし、そろそろ始めようか」

「ああ、何時でもいいぜ」

城嶋の言葉に、志村が薄ら笑いで答えた。

甲高く鳴り響くゴングも無い。試合開始を合図する太鼓の音も無い。しかし、二人の男が息を合わせて前に踏み出した。それが、開始の合図となる。

ストリートファイトの開始だ。

先ずは、城嶋が拳を振り上げた。まさにテレフォンパンチの様に。それを見て志村が心の中で笑う。

そして、城嶋の拳が、志村の顔面を狙って真っ直ぐに力強く飛んでくる。

志村は体を横に捌き、その拳を容易くかわした。当然である。飛んでくるのが分かっている攻撃だ、空手の黒帯がかわせない訳が無い。志村の心の中で、笑い声が一段と大きくなった。可笑しくてたまらない様子だ。

攻撃をかわして城島の懐に飛び込んだ志村が、コンパクトな構えから素早いショートアッパーを上目遣いで打ち込んだ。

城島の顎にヒットしたアッパーが、何かに引っかかったように止まった。振り切れない。あの太い首のせいだろう。やはり脚力ぐらいの破壊力が無いと、この太い首のせいで、打撃の威力が随分と吸収されてしまう。

そして、アッパーを喰らった城嶋が、慌てて顔面の前に両腕を並べガードを固めた。

それを見て志村は、攻撃の目標を頭部からボディーへと変更した。幾つもの両拳が、次々と引き締まった体に打ち込まれていく。

「おらおらおらおら！！」

物凄い勢いで続く志村の攻撃。城島のボディーを攻め立てる両腕の回転速度が、どんどんと増していく。しかし、打たれる城嶋の体

は、後ろに下がることはなかった。必死に頭部をガードしながら攻撃に耐えている。

「ぜぇーーーやっ！」

志村の連打が一瞬止まり体を回転させる。そして、後ろ廻し蹴りを城嶋の腹筋に叩き込んだ。その一撃に、城島の巨体が始めて後ろに下がる。よろめきながら五、六歩後退した。

それを志村が追う。志村は、攻撃力を高める為に、防御を捨てた姿勢でつっこんでいく。城島のテレフォンパンチ程度ならば、見てからでもかわせるからだ。

前方にダッシュした志村が右拳を脇の下辺りで振り被る。そのまま城嶋の顔面へと、下から振り上げる全力のフックをぶち込むつもりだ。そう目論み右手に加速を込める志村。そして、その左拳が放たれた。志村の会心の一撃が、城嶋の顔面へ飛んで行く。

しかし、城嶋が素早くコンパクトな構えを作り、そこからフラッシュのようなジャブを放った。それは、ポクサーの様に早いジャブだった。

城島のジャブは、志村のフックよりも早く、その顔面を捕らえていた。カウンターだ。志村の鼻が、そのジャブに音を立てて潰れた。目の前に星も飛んでいた。片膝がガクリと崩れる。

そして、城島のハイキックが繰り出された。太く鍛え上げられた片脚が、丸太の様に志村の頭部を横から殴りつけた。

志村の視界が激しく揺れて、勢い良く意識だけが何処かに飛んで

行くような感覚だった。

外野で見ていた者達も、レスラーが見せたハイキックに度肝を抜かれる。

城島のハイキックは、空手家の彼らから見ても、素晴らしいレベルのハイキックだった。それをまともに喰らった志村の体が風車の様に横向きに回転すると、一回転して足から地面に落ちた。そして、更に勢いそのままに頭から横に倒れこむと、志村の右頭部がコンクリートの床に激突して、ゴンッ、と響いた音を立てた。

「ふぅ～」

見事なハイキックをおみまいした城嶋が、振り切った片脚を地に戻してから溜息を一つ付いた。

「あんたのパンチ、テレフォンパンチだったぜ」

倒れて動かなくなった志村を見下ろす城嶋がそう言った。侮辱的に笑いながらだ。

「先ずは一人目……」

そう言うと城島は、壁際に残る三人の空手家に視線を送った。

<　ストリートファイト・3　>

白目を向いて気絶している志村を引きずりながら壁際に運ぶ仲間たち三人。志村は鼻が曲がり、ドロッとした鼻血を流していた。

その志村を見ながら三人の空手家は思った。

迂闊だったと。

レスラーの城嶋が、準備運動の様に見せたパンチの数々。それが、あまりにも遅く、雑で、素人臭いモーションだったが為に騙されてしまった。それに城嶋がプロレスラーだと言う事も手伝ってか、「所詮プロレスなんぞ道化で格闘技ではない」と思い込んでいたのが、罠にはまった理由でもあった。

彼らは、プロレスを舐めすぎていた。しかし、城島の見せたジャブやハイキックは、明らかに訓練されたシューターの物と変わらなかった。

おそらく、投げ技や関節技を決められなければ余裕で勝てると思っていた自分たちの考えが、甘かったとはっきりと気付く。

気絶した志村を壁際に運び終わると、この四人の中で一番の年上に当たる中本が、掛けていた黒縁の眼鏡を外しながら残りの二人に言う。

「俺があのプロレス野郎をぶちのめす。いいよな?」

そう言って眼鏡を志村の横に置くと、中本は立ち上がり駐車場の中央で待つ城嶋の方へと歩き出した。仲間の二人は、そう言う中本を止める事は無かった。彼にこの喧嘩の決着を任せるつもりらしい。

光臨館空手三段、中本光一、３６歳。身長１８０センチ、体重９５キロ。

中本は去年で大会への参加を引退した。体力の限界などを感じたせいもある。今年からは若手たちのセコンドなどにあたり、大会予選にも出場せずに裏方に回っていた。

しかし、過去の成績は、優秀な記録を持った選手であった。

大会参加回数十四回。うち七回は全国大会出場を決めている。最高成績は三位が二回。一時期は、虎野町に中本有りと言われた時期もあった。

だが、この三年ほど成績が優れず、去年は一回戦で敗退してしまった。それをきっかけに、大会参加をやめることにしたのである。

その中本が、自分より１０センチ背が高い城島の前に立つ。

「おい、レスラー。今度は俺が空手を教えてやる。きっちりとな！」

「あはは、指導、よろしくッス」

城嶋が、中本を見下すように笑う。

中本は思う。プロレス如きがと。

そう思う中本は、若い頃にプロレスラーと路上で喧嘩をした事があった。

その相手は、城嶋ほど身長が高くないレスラーだったが、１８０センチある中本よりも若干大きかったと覚えている。だが、そのレスラーを中本は難無くぶちのめしたのだ。圧倒的にだ。

あの時が空手家としてベストの時期だったのかもしれない。だが、大会ルールではきつくなった体でも、路上での戦いならまだ行けるのではないかと思っていた。

光臨館の大会ルールでは、幾つかの禁止事項がある。金的や目突きはもちろんだが、その他に顔面への突き技と、肘打ちの使用が禁じられていた。

ボクシングのようにグローブを着けていても顔面打ちは危険なのだ、グローブを着けずに戦う空手のルールでは、流石に顔面を叩けば死人が出てしまう。肘打ちも同様だ。

このルールが中本に取って大きな主力武器を奪っていた。そう、中本の得意技は肘鉄。その肘鉄が、かつてレスラーを路上でＫＯした技なのである。そして、ルールに阻まれ使用を封印していた必殺の肘を今解禁できるのだ。中本は、負ける訳が無いと思っていた。

「行くぞ……」

そう小さく呟いた中本が、巨漢の城嶋へ仕掛けた。一瞬で間合いを詰める。

だが、前に出た中本の顔面を狙って城嶋のジャブが飛ぶ。しかし

中本はそれをかわし下段廻し蹴りを放つ。

重い蹴りだった。中本の脛が、城嶋の腿に減り込んで行った。その衝撃で巨漢がグラリと揺れる。

そこに一気に中本がラッシュを開始した。

中本の左右の拳が二度ほど城嶋の顔面を叩くと、城嶋は遅れながら顔面を二つの腕でガードを築き確り防御を固めた。しかし、中本のラッシュは止まらない。ガードの上からかまう事無く叩き続けたのだ。

頭部をガードしながら身を丸める城嶋を拳で叩き続ける中本が、時折横に回ってはガードの無い脇腹をボディーブローで叩く。それを嫌がり城嶋が体の向きを変える。

滅多打ちだった。だが、城島がガードを固める両腕が赤く腫れていくが、それがダメージになっているかと言えば難しい。そこで中本が、コンビネーションとしてローキックを追加し始めた。

フック、フック、ボディー、ボディー、そしてロー。

フック、ボディー、フック、ボディー、そしてロー。

フック、ボディー、アッパー、フック、そしてロー。

コンビネーションのラストに繰り出すローキックが決まるたびに城島の巨体が崩れる様に揺らぐ。確実にローキックのダメージが蓄積されていくのが分かった。

そして、何発目のローキックだろうか。それが決まった瞬間、城島が体制を大きく崩し、ガードを固めていた二本の腕も下がった。その下がったガートの下から苦痛に歪む賞嶋の顔が覗かせる。

中本は、この瞬間を待っていた。勝機である。

ガードの下がった城島のこめかみに、全身全霊を込めた肘鉄を叩き込んだ。

真横から振られた肘鉄が、城島のテンプルに減り込むと、更に中本が体重を乗せて肘鉄を振り切った。

自慢の肘打ちを喰らった城嶋の体から力が消えて、中本の足元に頭から倒れこむ。

勝った。中本は確信した。

「よし！」

壁際で観戦していた加藤が、ガッツポーズを取りながら歓喜の声を上げた。

だが、その瞬間、うつ伏せに倒れた城嶋が、中本の片足をいきなり掴んだ。

「なに！」

中本の口から、まさかの声が漏れた。

そして、城嶋が中本の片足を両手で捉えると、足首の後ろでクラ

ッチを組、そして肩で脛の辺りを抱えこみながら押し込んだ。すると中本の膝関節が伸びきり後方へと倒れこみながら両手と一緒に尻餅を付く。

アマレスの片足タックルだ。

足首を引き寄せながら肩で脛を押すと、梃子の原理で膝関節が伸びきり関節が決まるのだ。そして人は後方へ倒れる。

古代パンクラチオンから伝わるレスリングの技術のひとつだ。未だにアマレスのフリースタイルでは基本となる技である。

中本を倒した城嶋が、掴んだ足を抱えたまま立ち上がる。そして素早く足首を脇の下に挟むと、今度は両脚で中本の片足を挟むように絡ませ背中から倒れこんでいく。

アキレス腱固めだ。

中本の心の中で「やばい」と言葉が過ぎった。

だが、既に手遅れ。

その次の瞬間、後ろに倒れながら城嶋が、抱えた中本の足首に力を入れると、それと同時に信じられない程の激痛が足首から発生する。

まるでローラー車で足を踏まれたような激痛。

その激痛は、全身の神経を蹂躙したあとに、中本の勝利を打ち砕きながら脳へと到着した。

「ぎぃぁぁぁぁぁあああああ！！！！！」

駐車場内に、中本の悲鳴が響き渡った。その声は、雨のカーテンを越えて、町中にまで響き渡りそうな大きな絶叫だった。

中本の足を開放した城嶋が、その巨体を起こして立ち上がる。しかし、中本は背を丸めながら決められた脚を抱えるように手を伸ばして震えていた。立ち上がるどころではない。

城嶋がアキレス腱固めを決めていた時間は、ほんの一瞬。技を決めた瞬間に、中本の足を破壊したのだ。中本のアキレス腱は、完全に断裂しているかも知れない。

関節技を使う格闘技の中に、「決めたら即折る」と言う非情な言葉があるが、城嶋はそれを素で行ったのだ。

「いやいや、見事なアキレス腱固めだったよ。あははは」

白人男性が、笑いながら拍手をしていた。

<　ストリートファイト・4　>

体を横にしながら背を丸めて倒れている中本。顔を苦痛に歪めながら片膝を抱える様にして身を震わせていた。

そして、その片足の足首は、履いた靴下の上からでもはっきり分かるぐらいに腫れあがっていた。左右の足首で太さが完全に違って見えている。おそらくズボンは脱げないだろう。切るしかない。

その横たわる中本を見下ろす城嶋は、流石に二連戦に疲れたのか、肩で息を切らせていた。向かいの壁際では、中本の空手仲間である加藤と高木が、その城嶋を睨みつけていた。

「ううううううう……」

城島の足元で中本が脚を抱えながら苦痛の声を上げている。すると城嶋が、自分の片脚を鍛え上げられた分厚くも引き締まった胸元まで持ち上げると、そこから唸る中本のこめかみ目掛けて非情なまでに踵を叩き落した。

「貴様！」

城嶋の行動を目の当たりにした加藤が叫んだ。既に勝負は着いている筈なのにと言わんばかりに。

頭部を踏み潰された中本は、踏まれた反対側のこめかみをコンクリートの床に激突させると、ピクリとも動かなくなった。痛みに震える声も止まって静かになる。

「麻酔スっよ」

加藤にそう言う城嶋。

「あのまま痛い思いをさせておくよりも、意識を失った方が幸せっスよ」

そう言いながら城嶋は、気絶した中本から離れて、連れの白人男性の方へと下がっていく。

「ナイスファイトだったな、城嶋君」

「どもっス」

連れの白人男性が、そう言いながら城島の両肩を揉み解すように揉んであげていた。まるで試合の休憩タイムに、セコンドが選手をリラックスさせている様だった。

二人のレスラーがそうしている間に、加藤と高木の二人が、気絶している中本の体を、先に気絶している志村の横まで運んでいった。

白人男性が、城嶋に耳打ちする。

「あと一人倒せば、社長が出した試験も合格だな」

「ええ、でも、あと二人居るっス」

残る二人の空手家を見ながら城嶋が、そう答えた。

「百点じゃなくて、百二十点満点を狙えるじゃないか」

白人男性が、そう言いながら笑って居た。それに釣られて城嶋の口元も笑う。そして再び、駐車場の中央へと進んでいった。

「ふざけやがって……」

そう呟く加藤が前に出ようとしたとき、後ろから高木の大きくふくよかな手が肩を掴む。

「俺にやらせろ」

加藤よりも大きな体が、ぬぅ～、と、加藤の横を過ぎて前に出て行く。加藤は、その高木を黙って見送った。

身長１８７センチ、四人の中では一番背が高かった。体重は１２３キロ。体重も四人の中で一番重い。

歳は３０、空手暦１５年、段位は二段。キャリアも試合経験も十分に積んでいた。路上でもだ。

大会でも中本と同じぐらい功績を残している。おそらくこの四人の中では、一番の実力者かもしれない。

城嶋と高木が睨み合う。

身長では僅かに城嶋の方が高い様子だ。しかし、横幅では高木の方が広く見える。高木の方が、脂肪だけは多く蓄えている様子だった。

高木が構えを取る。

大きな体格を僅かに横に向けると、太い腕をバンザイする様に上げた。そこからゆっくり拳を握りながら下ろしていく。

構えと共に曲げられた高木の両腕の力瘤が、異常な程に盛り上がるのが、服の上からでも分かった。腕の太さは城嶋と五分かそれ以上に見えた。

後ろから見ていた加藤が、高木の大きな背中を見て今度こそは間違いなくプロレス野郎を叩きのめせると確信していた。

そして加藤は、ふと、自分が入門したばかりの頃を思い出した。それは、高木との始めての出会い。

加藤が通っていた虎野町の光臨館支部に、とあるフロレス団体の若手レスラーが空手を学びに来た時の話しだ。

光臨館では、例え他の格闘技や道場に通っていようとも、月謝さえ払えば誰でも受けいれてくれる。レスラーだろうと、他団体の空手家だろうと例外なしにだ。

その若手レスラーもそんな感じの人物だった。

そして、その若手レスラーと高木が、ヘッドギアも無しに、拳サポもレッグガードも無しに、組み手を行うことになった。しかも、素手で顔面打ちもＯＫのルールでだ。

きっかけは、詰まらない意地の張り合いからだった。プロレスが最強であるとか、空手が最強だとか、よくあるような討論がきっかけだった。しかし、エスカレートした言い争いは、口で証明するよ

りも、拳で証明しようではないかとなったのだ。

そして、組み手の結果は高木の圧勝。

打撃ダケではなく、組も、投げも、関節も、グラウンドまで許された究極ルールにも関わらず高木が圧勝したのだ。

しかし、無傷ではなかった。

高木は、その若手選手に、アームロックで腕を折られながらも勝ったのだ。

組み手開始直後に、アームロックを決められた高木の肩から骨が折れる音が鳴り響いた。

その場で組み手を観覧していた者たち全員が、それで高木が負けたと思った。しかし、高木は直ぐに反撃に移った。片腕と蹴り技だけでた。そして、そのまま若手レスラーを圧倒したのだ。

恐ろしい精神力だと加藤は思った。片腕を折られたまま、普通と変わらない回転力で相手を攻め続けたのだから。物凄いラッシュだった。

肩の痛みを無視して、肩の痛みに負けず、相手に負けず、相手に圧勝する高木の姿を見て加藤は、この世に鬼神が存在するのだと思った。

その鬼神のような精神力を兼ね備えた高木が、これからプロレスラーと戦う。加藤は、間違いなく勝利を確信していた。

睨み合っていた城嶋と高木が、ほぼ同時に前に出た。二つの巨体がダッシュで激突し合う。ガードを固めた二人がそのままぶつかり合ったのだ。

二つの巨体は、どちらも引かない、下がらない。ガードを固めた隙間から、二人の視線が合う。距離は、３０センチも無い。

そんな中、互いが同じモーションでパンチを放った。右フックだ。そのフックが互いのガードの上から頭部へ衝撃を流し込む。視界が僅かに揺れた。

その一発のフックを皮切りに、二人の猛攻がスタートした。連続の打撃戦だ。

脚を止めての殴り合いに、互いのガードが無くなっていた。防御を捨てて、どちらが先に相手を倒すか、ただそれだけの打ち合いになっていた。

お互いの顔面に、お互いの拳が減り込み合い。そして、お互いの膝や蹴りが体に打ち込まれる。

防がない、避けない、ただ打つ、止まらない。そんな殴り合いのラッシュだった。

格闘技をしらない不良たちが脚を止めて殴りあうような、意地と意地だけをぶつけ合うような喧嘩ではなかった。

お互いに、相手をどう殴れば倒せるか、どう攻めれば絶命するかを知っている物同士の殴り合いだ。ラッシュに混ざる一撃必殺の数々が、確実に人体の急所を狙って飛んでいっていた。

「すげぇ……」

その光景を見ていた加藤が、思わず言葉を漏らした。こんな凄い殴り合い、光臨館の世界大会でも、そうそう見られるような光景ではなかった。思わず目を丸くさせる

城嶋と高木の顔が腫上がり始めた。鼻血も大量に流している。明らかに顔の形が変形を始めていた。

「せぇあっ！」

高木が、切れた唇で声を張り上げローキックを打った。そのローが城嶋の脚に減り込むと、初めて城島の攻撃が止まり、体をグラリと揺らした。

「中本先輩のローが効いていたんだ！」

加藤が言ったとおりだった。前の勝負で中本に散々打たれた脚。その脚にローキックのダメージが蓄積され残っていたようだ。

此処に来て連戦のダメージが城嶋を苦しめると、今まで引く事無く競り合っていた城嶋の攻撃回数が減り始める。高木が三発打つ間に城嶋が返す攻撃回数は二発となっていた。高木の方が、手数が多い。そして、城嶋の体が、少しずつ後退を始める。

「ここまでか……」

押され始めた城嶋を見ながら白人男性が呟いた。

城嶋の体が後ろに下がり、雨の降る景色が見える駐車場の出入り口へと押されていく。そして出入り口に掛けられた鎖に城嶋の脚が触れて、ジャラリと鉄の音を鳴らした。その鎖の音が、これ以上の後退を許さないと、下がる城嶋に告げていた。

城嶋と高木の攻撃回数の差も開きが大きくなっている。高木が三回攻撃するのに対して、城嶋が返す攻撃は一回。城嶋は、攻撃より防御をすることが多くなっていた。

そして高木のローキックが再び城嶋の痛めた脚を狙うと、重い蹴りが、城嶋の脚に食い込んだ

その一撃を喰らった城島の体制が大きく崩れた。攻撃も止まり、防御にも隙が多く増えた。

「ぜぇいぁっ！」

気合を籠めて放つ高木の前蹴りが、城嶋の胸を力一杯蹴り飛ばす。

その前蹴りに城嶋の巨体が、出入り口の鎖を越えて、雨が降り続ける野外へと飛んで行く。

そして駐車場が有るビルの前のアスファルトに背中から倒れこんだ城嶋が、雨に打たれながら動かなくなった。

高木が、鎖の手前で城嶋をだまって見ていた。その顔は、腫れあがり血まみれに変わっている。

倒れた城嶋が動かない。仰向けのまま冷たい雨に打たれていた。それを見て白人男性がボソリと呟く。

「勝負有りかな……」

その声に高木が、白人男性の方を見ると睨んだ。次はお前だと言いたげな表情で。

しかしその時、雨の中で倒れていた城嶋が、ゆっくりと立ち上がった。そして、ゆっくりと駐車場へと戻ってくる。

高木が、城嶋の目を観察するように覗き見る。その目は、まだ死んではいない。それに気付いた高木が、駐車場の後方へとさがっていった。

「まだ、行けるかい？」

「……」

出入り口の鎖を跨ぐ城嶋に白人男性が訊くが、城嶋は何も答えずに、真っ直ぐ高木を熱い視線で睨みながら進んでいく。冷たい雨に打たれても、心の中の闘志は冷めていない様子だった。

二メートルぐらいの距離を残して再び二人が向かい合う。どちらも無言だ。顔の腫れや、流す血が、二人のダメージを感じ取らせていた。

高木が口を僅かに開けて、荒い呼吸をしていた。両肩が呼吸に揺れている。

しかし城島の方は、高木よりも大きく肩を揺らしていた。だが、口を開けずに、鼻だけで呼吸を整えている。

ダメージもそうだが、スタミナ的にも城島の方が不利に見えた。

城嶋が大きく鼻で空気を吸った。仕掛ける気だ。

それを見て高木も同じように大きく空気を吸い込む。

しかし、先に仕掛けたのは高木の方だった。握り締めた拳を振り被りながら城嶋目掛けて飛び掛る。一瞬で二人の間合いが縮まった。

高木の右フックが城島の顔面を狙っていた。その拳に反応して城嶋が、体を僅かに反らせながら左腕を上げてディフェンスを取る。

だが、高木の右フックが途中で止まった。体を逸らした城嶋に対して、高木が代わりの攻撃を打ち放つ。左上段回し蹴りだ。ここに来てフェイント。

体を反らしてしまった城嶋には、逃げる選択肢が無くなっていた。しかし、その刹那、城嶋が予想外の行動を、否、予想外の攻撃を仕掛けてきた。

反らせた体を、頭から前に突き出してきたのだ。しかし頭突きが届く距離ではない。このままでは高木の上段廻し蹴りを喰らうのは変わらない距離だった。

その時、城嶋の突き出された顔面の口元から、ジェット噴射の如く赤い物が噴出された。その赤い何かが高木の顔面に吹きかけられると、高木は蹴りのバランスを崩して攻撃をミスする。

「毒霧！？」

加藤がそう叫んだ。

一時、プロレスでよく見られた反則技のひとつ。毒霧。

口の中に、特殊な液体を含み相手の顔に吹きかけ、視力を奪う技だ。最近では見なくなったが、それを城嶋は、自分の血と雨水を使って作り出していた。

即席の毒霧を喰らった高木が両手で目を擦る。そこに城嶋のアッパーが放たれ、高木の顎を激しくカチ上げた。

顎を打たれた高木の両膝が、ガクリと曲がる。軽い脳震盪を起こしたようだ。

更に城嶋が攻撃を仕掛ける。

地面に磨りそうなぐらいのスイングで振るわれた城島の腕が、そのままの勢いで高木の股座に滑り込むと、反対の腕が首筋に絡みつく。

そして高木の巨体を勢い良く、プロレス技のボディースラムの様に持ち上げた。

だが、城嶋は高木の体を前には投げなかった。そのまま体を反る様に捻りながら後方に投げようとした。

「パワースラムか」

白人男性がそう言った。

高木の巨体が、引っこ抜かれたままに、城島の体の上で弧を描く。
そして頭から落ちていく。

ゴンっ、と、鈍い音が駐車場ないに響いた。

城嶋が、高木の体を、コンクリートの床に頭から落としたのだ。

「なんだ、ノーザンライトボムか」

頭からコンクリートの床に突き刺さる高木の姿を見て、白人男性が技の名前を口に出した。そして、間も無くして高木の体がドサリと音を立てて倒れる。

高木の頭からは赤い血が流れ出しコンクリートの床を染めていく。見る見るうちに床の色が赤く替わっていくと、それを見て慌てて加藤が高木に駆け寄った。

城嶋がゆっくりと立ち上がる。そして高木の傷口を押さえている加藤に話しかけた。

「早く病院に連れて行ってやれ。今すぐなら大事にならないっスよ」

加藤が城嶋を、怖い表情で見上げる。

「貴様、逃がすか。今度は俺が相手だ！」

そう言って立ち上がる加藤。しかし、ボコボコだが静かな表情で城嶋が言う。

「あんたまで潰れたら、誰が仲間を病院まで届けるんスか？」

バカにするかの様に一度微笑んだ城嶋は、加藤に背を向け白人男性の方へと歩いていく。

「ミスター、帰ろっス」

「いいのかい、まだ一人居るぞ？」

「いいっスよ。もう試験には合格したっしょ」

「ああ、まあね」

そう話しながら二人は、傘を差すと駐車場のあるビルから出て行った。そして雨の街へと消えていく。

「くぅぅ……」

加藤は、歯がゆいのか唸るような声を口から漏らしながら携帯でタクシー会社の電話番号を打つ。救急車を呼ばなかったのは、僅かに残ったプライドからであった。

<　レスラー　>

その男は、何時の間にか会社内の人々に溶け込んでいた。

何時頃から見かけるようになったかは、はっきりとは覚えている者も居ないが、確か三、四年ぐらい前からだろうか。

その男は、別に社員でもなんでもないのに本社ビルを自由に出入りし、社長室にも出入りしているようすだった。

身長１８５センチぐらいだろうか。年の頃は５０歳前後に見えた。髪は白髪で、顔に多くの皺がよっていたが、体つきはかなりの筋肉質に見えた。ぱっと見た目、外人レスラーに見える。

最初は、その男を海外から連れてこられた外人選手だと、皆が思っていた。しかし、男は一度も試合に参加していない。

では、誰かのトレーナーなのかと考えたが、男が道場などで誰かに付き添い指導している姿も殆ど見られない。まれに若手レスラーに指導している姿が見られることもあったが、それも暇つぶし程度に見えた。

だが、その男は、社長の公認で、社内施設はもちろんのこと、各試合会場への出入りも許されていた。

そして、その男の存在に疑問を持つものも少なくはなかったが、抗議する者はいなかった。これといって害が何もないのだ。

血気盛んな荒々しい社員レスラーたちに囲まれる中で揉め事も起

こさず、人当たりも良いのだ。見ていてもイラつきも感じない、むしろ高感度が良い人物だった。

レスラーたちが、プロレス技の指導を望めば、親切に分かりやすく教え、試合運びの相談を持ちかければ丁寧にアドバイスをくれるのだ。

殆どの人間が、男のことを、引退したレスラーか何かだと思い込んでいた。

男の名前は、ブラット・ニクソン。

少なくとも男はそう名乗っていた。

そして今、その男、ブラット・ニクソンとプロレスラー城嶋悟が、帝都プロレス本社ビルのエレベーター内に居た。

二人を乗せたエレベーターが、グングンと最上階へと登っていく。そして六階最上階に到着すると、個室の扉がゆっくりと開いて、人気のない廊下が前に広がる。

二人はエレベーターをでると、真っ直ぐに社長室へと目指して歩いていく。社長室の扉は、無用心にも開けっぱなしになっていた。二人が入り口の前に立つと、室内が丸見えになっている。

マホガニーの机に黒革の社長椅子、その前には高級そうな応接セットが置かれている。右側の壁の前には豪華な家具があり、幾つもの優勝トロフィーやカップなどが、所狭く並べられていた。

ニクソンを先頭に二人が社長室へ入っていく。しかし、室内には

誰も居ない。無人だ

「おや～、昇平君、いないな」

ニクソンがそう呟きながら室内をうろちょろと歩き回る。昇平とは、帝都プロレス社長の本名であった。ニクソンは、その社長を、君付けで呼んでいた。

「まあ、城嶋くん、ソファーにでも掛けなさい」

まるで自分の部屋の様にニクソンが言う。城嶋は、僅かに悩んだ表情を作りながらソファーに腰を下ろした。本当にいいのかと言いたげな表情で。

一方、ニクソンは、トロフィーが飾られている棚からブランディーのボトルとグラスを見つけ出し、それを取り出した。そして勝手に酒を飲み始める。

「城嶋君、君も飲むかね？」

「い、いや、結構っス」

城嶋は、社長室で、好き勝手な振る舞いをしているニクソンを見ながら丁重に断わった。ただでさえ城嶋が憧れるビックレスラーであり、自分が勤める会社の社長室にいて落ち着かないのだ、思わずニクソンの勝手な行動に目を丸くさせていた。

城嶋が、このニクソンと一緒に夜の街へと出て行き、光臨館の門下生三人と戦ったのは、もう三日前の事である。散々蹴られた脚のダメージも、殴られまくった顔の傷も、すっかり回復していた。凄

い回復力だ。

あの晩、二人が四人の空手家と遭遇したのは、偶然ではない。光臨館虎野町道場の飲み会があることを知り、待ち伏せしていたのである。

理由は、帝都プロレス社長、ゴーグ大葉の出した試験を行うためであった。

試験とは、一週間以内に空手家三名を一対一で倒せば、チャンピオンベルトを巻かせてやってもいいという内容だった。そしてニクソンは、その試験の見届け人だったのだ。

城嶋は、その試験を僅か一日でクリアーした。

その報告は、次の日のうちに社長のゴーグ大葉のもとへと届いた。そして、これから社長と会う予定になっていたのだが、その社長、ゴーグ大葉が居ないのだ。

「社長、おそいっスね」

「そうだね。もう、約束の時間から三十分は過ぎているね」

外人であるはずのニクソンが、違和感のない日本語で受け応えをしていた。

「やあ、二人とも、待たせたな」

二人が会話をしていると、そこに社長が姿を現す。城嶋は、社長の声を聴くと、ソファーから跳ね上がるように起立した。

「社長、ご苦労さまっス！」

大きな声を出しながら城嶋が頭を下げる。その声が僅かに引きつり緊張を露出していた。するとゴーグ大葉が、大きな体を屈めながら社長室へと入ってくる。

ゴーグ大場は、かなり大きな体格をしていた。身長は二メートルをゆうに越えている。社長室の出入り口が、普通の建物の出入り口よりも小さいのではないのかと錯覚させるほどに大きかった。

「まあ、二人とも掛けなさい」

ゴーグ大葉は、そう言いながら社長室をのしのしと歩き、マホガニーの机にある椅子へと座った。ゴーグ大葉の巨体に、黒革の椅子が、ギシギシと悲鳴を上げていた。今にも壊れそうだ。

ゴーグ大葉、本名は大葉昇平。歳は今年で五十五歳。レスラー暦三十七年の現役レスラーである。しかし、そのキャリアよりも凄いのが、生まれ持った巨体という才能である。

身長２０８センチ、体重１３４キロ。レスラーというよりも、人間として規格外の巨体だった。それだけで見世物としてはエース級である。

しかも、これだけの巨体でありながら全盛期は、自分よりも小さなレスラーと同じスピードで動き、同じように跳ね、時にはトップロープからもタイブしたのだ。

その後、ラビットツトムというお笑い芸人が、ゴーグ大葉の物マ

ネを見せて笑いを誘っていたが、、その物マネは、まるでスローモーションで動くゴーグ大場の物マネであった。しかし、その物マネのイメージとは違い、リング上のゴーグ大葉の動きをはじめて見たもの達は、その早さに度肝を抜かれることが多かった。物マネのイメージとは、まったく別なのである。

ゴーグ大葉がまだ若い頃は、その巨体を武器に、日本だけではなく海外でもレスラーとして活躍していた。その人気と強さは、日本人でありながら全世界で認められることとなる。

国内でもそうだったが、海外でも、その巨体からくるイメージとは裏腹に早い動きを見せる巨人に、随分と恐れられながらも憧れられたのだ。城嶋も、そんな大葉に憧れた一人である。

そして、年を取り体力の衰えが見え始めた最近では、国内の巡業に専念して、時折依頼が来るテレビの仕事を請けていた。今日もそのテレビの仕事があった帰りである。クイズ番組だ。

黒革の社長椅子を揺らしながら、ゴーグ大葉が話を始める。

「聴いたぞ、城嶋。光臨館の選手を三人連続で倒したらしいじゃないか」

「はい」

ゴーグ大葉にニクソンが報告したのである。細かい試合の流れから、最後はどんな技で決めたかまで。

「これで、俺もタイトルマッチに挑戦できるんですね」

興奮を隠せないしゃべりで城嶋が訊く。しかし、大葉は、大きな草履のような顔を顰めて何か気にくわなそうな表情を見せた。その表情に、城嶋も気付き歓喜していた感情が少しずつ冷めていく。

「聴いた話だとお前さん、全部、だましうちに近い形から勝負を決めたらしいじゃないか」

「……」

大葉の言葉に城島の顔が不満げに曇る。それが問題でもあるのかと言いたげに。

「お前は、このさきヒールを目指すのか？」

ヒールとは、プロレス用語で悪役を意味している。

「客の流れが、それを望むというのならば、私はかまいません。なんだってやります」

「んー、まあいいか。その辺は、今後のお前しだいだ」

「はい」

大葉の言葉に城嶋は、プロレスラーらしく勇ましい表情で返事をした。

「まあ、試験も合格したことだし、お前にチャンピオンベルトを巻かせて戦わしてやる」

「本当ですか！」

城嶋が再び歓喜の声を上げた。

「ニクソン、例のベルトを」

「ああ、分かった、昇平君」

大葉がニクソンに話しをふると、ニクソンがソファーから立ち上がる。城嶋もまたニクソンを見ていた。何を始めるのかと。

そして二人の日本人レスラーの視線を浴びながらニクソンは、来ているトレーナーの下からスルスルと、一本のベルトを取り出した。それは、ズボンが落ちないように止めるためのようなベルトではなかった。プロレスやボクシングなどのチャンピオンが腰に巻く、太く立派で偉大な姿をしたベルトだった。最強の勝者のみが巻くことが認められるベルトだ。

「なんで、そんなところからチャンピオンベルトが出てくるんスか……」

ニクソンの服の下から出てきたチャンピオンベルトを見て城嶋が驚きと疑問の声を漏らす。

「お前は、そのベルトを巻いて戦うんだ」

大葉が大きな顔で微笑を見せながらいうと、ニクソンも微笑を見せる。そして、取り出したベルトを城嶋へと差し出した。

「……」

城嶋は、呆然とした表情で、そのベルトを両手で受け取った。

見たこともないベルトだった。帝都プロレスで私有しているベルトとは違うベルトだ。太い黒革のベルトに、黄金の獅子が彫刻されており、凄く立派で高価そうなベルトだった。

「巻いてみたまえ、純金だぞ」

ニクソンに促されベルトを腰に巻く城嶋。

腰にベルトを巻くと、ずっしりとした重みと一緒に、なんとなく威厳のようなものを感じる。何故か心の中に、勇気のようなものが湧き上がってきた。それが麻薬の如く気持ちいい。

「城嶋、そのベルトを巻いたら、こう言うのだ」

大葉が怪しく笑いながら、ベルトを腰に巻いた城嶋に告げる。

「『妖力共有・革命』とな」

<　空手家　>

そこは、虎野町にある光臨館の道場だった。

畳張りの床には、試合や組み手用に緑の畳が赤い畳で四角く仕切られていた。その畳張りの床の横には、幾つものトレーニングマシーンが、そこらのフットネスジムに負けないぐらい並んでいた。かなりお金のかかった道場のようすである。

時間は、昼時を少し過ぎたぐらいであろうか。その道場には、まだ稽古に励む門下生の姿は見られなかった。

道場の正面に祭られた立派な神棚が、窓から入る日差しでメッキ部分を光らせている。横幅８０センチ以上ありそうな大きさの神棚。この道場内で一番高価なのがトレーニングマシーンよりも神棚ではないかと思わせる程に立派であった。

その神棚の前で、畳に胡坐をかきながら座る大きな男がいた。

年の頃は四十半ばぐらいだろうか。髪はゴルフ場のグリーンのように短く綺麗に刈り込まれ、顔付きは、怖いぐらいの厳しい表情をしていた。

身に付けているのは道着。腰には空手の上段者と分からせる黒い帯が巻かれている。しかも、かなり使い込まれた帯だった。色あせてボロボロに近い。そこから、この男が武術に打ち込んできた年月の長さが感じられた。

その男の名前は、烏賊屋兆殻（いかや・ちょうかく）。光臨館虎野町支部道場の師範代を

勤める男だ。

空手のキャリアは年齢と殆ど替わらない。大会などの参加は、十年ほど前から退いているが、大会現役当時は、豪傑の烏賊屋と言われ恐れられた存在であった。

胡坐をかき座る烏賊屋の前に、何か反省でもさせられているかのように正座をした、加藤と志村の姿があった。道場内にもかかわらず、二人とも私服である。道着を纏っているのは烏賊屋だけであった。そして志村は、頭に包帯を巻いており、首にはコルセットを窮屈そうに巻いていた。三日前、帝都プロレスのレスラー城嶋悟にやられた傷である。

「でぇ、そいつは帝都プロレスの城嶋悟ってレスラーなのは、間違いないんだな」

烏賊屋が萎れた声で加藤と志村に聴く。志村は黙ったままだったが、代わりに加藤だけが「オッス」と小さな声で答えた。バツの悪そうな表情をしていた。

「こっちは三人もやられたんだ、きっちり借りは返さねえと、いかんわな」

「オッス」

烏賊屋の言葉に、再び加藤だけが答えた。その返事の中には、明らかな怯えの色が見て取れた。返事をせずに俯いたまま隣で正座をしている志村の表情にも、似たような怯えが感じ取れる。二人は、明らかに烏賊屋を恐れていた。

「志村、お前は、端にどいていろ」

そう言いながら立ち上がった烏賊屋の身長は、１９０センチはあるだろうか。

その立ち上がった烏賊屋の印象は、胡坐をかいている時よりも更に大きく感じられた。そして、圧力のような圧迫感が、立ち上がると更に大きく膨らみ、加藤と志村を精神的に追い詰める。

怪我をしている志村が、烏賊屋の言葉に、逃げる様に道場の隅へと移動した。残された加藤も立ち上がるが、若干体が震えているようすだった。顔も引きつっている。

「加藤～、お前は、いかんだろ」

烏賊屋がそう言いながら前に出ると、強面の巨体が近づいて来たことに恐れたのか、加藤が後ろにジリジリとさがった。それだけ烏賊屋が放つ圧力が大きいのだ。

「仲間三人が、必死に光臨館の威厳や誇りを守ろうと奮闘したのにも係わらず、お前は見ていただけとは……」

「いや、しかし……」

「情けないな」

詰め寄る烏賊屋、さがる加藤。そして二人が畳張りのほぼ中央まで動くと、烏賊屋の詰め寄る歩みが止まった。

「加藤」

「お……、オッス」

加藤の返事は、かなり小さく怯えたものになっていた。消え去りそうで、弱々しく感じた。畳の外から二人を見守る志村に、やっと届くか届かないかの小さな声だった。

力強く立つ烏賊屋の巨体を、怯える小動物のような目で加藤が見上げていた。その加藤を烏賊屋は、厳しい父親のような表情で見ている。身長差や年齢差もあってか、それが本当の親子の様に見えた。

そして、加藤を見ながら烏賊屋が、突然大きな声で一言怒鳴った。

「構え！」

その言葉に加藤が体をビクつかせながら、反射的に両手を上げて構えを取った。そこに烏賊屋の巨体が瞬時に迫る。

大きな体を、大きな一歩で、大きく迫ると、大きな拳を、大胆に撃ち放った。

螺旋を描きながら突き進んでくる烏賊屋の正拳突き。その拳が、加藤の顔面目掛けて迫ってくる。しかし加藤は、その迫り来る剛拳に対して僅かにも反応できずに、烏賊屋の正拳突きを正面から顔面で受け止めた。

烏賊屋の正拳が、ミシリと濡れた木の板でも割るような音を僅かに立てて、加藤の顔面に減り込んだ。

だが、顔面に大きな拳の突きを食らった加藤の体は、後方に吹っ

飛ぶどころか、体すら反らすことはなかった。揺れもしていない。

しかし、烏賊屋の拳は、間違いなく加藤の顔面に減り込んでいた。打ち込まれた拳速と重さのバランスが、その状況を実現させたのであろう。その拳を烏賊屋が、素早く、力強く、腰元に引き戻した。

烏賊屋が拳を戻してから暫くすると、打たれた加藤が膝から崩れていく。その顔面は、鼻が潰れて、目と口の間に四つの拳の跡と、四つの指の跡が、はっきりと残っていた。それは、痣になって残っているというよりも、陥没しているように見えた。

畳の外で見ていた志村が、唖然とした表情で、一連の出来事を見て驚いていた。

とても四十をゆうに越えた男の動きには見えなかった。否、長い年月の間、稽古を絶やす事無く続けてきたからこそ出来た一撃だったのかもしれない。とうてい自分には繰り出せない程の正拳突きだと志村は思った。まさに芸術的正拳好きだったのだ。思わず憧れてしまう。

「おい、志村、加藤を病院にでも連れて行ってやれ」

「オッス！」

烏賊屋がそう言うと、志村が痛めた自分の首を庇いながら加藤のもとへ駆け寄る。そして、烏賊屋が視線を替えた。

「おい、新井」

「オッス？」

烏賊屋が人の名前を呼ぶ。その声に、道場の出入り口に何時の間にか立っていた男が返事をした。

若い男だった。若いといっても二十台前半だろうか、志村と殆ど変わらない年齢に見える。そして顔付きは、スマートでハンサムな美青年だった。

しかし、その表情には高感度よりもニヒルな冷めた印象が強く、冷たそうな感情がありありと見て取れた。烏賊屋の呼び声にも眉ひとつ動かさずに答えていた。

その新井という男に、烏賊屋が問う。

「本部にまでこの話は届いているのか？」

「はい、だから私がこうして足を運んだのじゃないですか」

このクールな男、新井は、虎野町支部の人間ではなかった。本部道場の人間である。

「で、館長は何と言っておられるのだ？」

「この件は、本部が預かるそうです」

「なに！」

「正確な言い方をするのならば、館長個人が預かると言えばいいのでしょうか。指示があるまで手を出すなとの事です」

「何ゆえに！」

志村が気絶している加藤の様子を見ている中、烏賊屋が大きな声を出して新井に怒鳴りつける様に問う。その声に志村がビクついていた。

「さあ、私には分かりかねます。私の役目は、ただのメッセンジャーですから」

回答を返す荒井の視線は、冷めたものというよりも、まるで烏賊屋を小バカにしているようにも見えた。その冷めた目線を、烏賊屋が熱い視線で押し返そうと睨んでいた。

「まあ、伝言をお届けしましたので、私はこれで失礼いたします」

荒井はクルリと背を向けると、そう言い残して道場を出て行く。その背中を見ながら烏賊屋は、怖い表情に力を入れて奥歯を噛締めていた。明らかに本部の意向が納得いかない表情である。

「烏賊屋さん、そのお弟子さんを運ぶのを手伝ったほうがいいんじゃないですか？」

その声は、新井が出て行った出入り口とは別の方から聴こえてきた。幾つも並ぶトレーニングマシーンの向こうにある更衣室の入り口、そこから出てきた青年が、烏賊屋に言ったのである。

烏賊屋は、自分の側に倒れている加藤を見下ろす。確かに手負いの志村ひとりでは、気絶している加藤を運べそうになかった。青年の言うとおりだった。それを見て烏賊屋が、ふと、我に返り、冷静さを取り戻し始める。

「ああ、そうだな。志村、お前は脚の方を持て、私が上半身を抱えるから」

「オッス」

二人で気絶をしている加藤を持ち上げた烏賊屋が、更衣室から出てきた青年に言葉を返す。

「すまないね、わざわざ遊びに来てくれたのに、おもてなしのひとつも出来なくて」

「気にしないでください、烏賊屋さん。その代わりに芸術的な素晴らしい正拳突きを見せてもらいましたから」

「ハハ、自分で言うのもなんだが、あれ程までの正拳突きは、年に一度出来るか出来ないかの一撃だったよ。正直、自分でも驚いたよ」

「それを喰らったお弟子さんが、可愛そうですね」

「ハハハ、怒りにまかせたとはいえ、やりすぎたと反省している」

「またまた、冗談を」

二人は、楽しそうに笑いながら話している。それを志村が目を丸くさせて聴いていた。

この道場の門下生は、ほぼ全員が、厳しい烏賊屋を恐れながらも尊敬している。中には、大会などで見た烏賊屋に憧れて、別の道場から、虎野町の道場に通い詰めている者も居るぐらいだ。

そして、道場の門下生の殆どが、烏賊屋に対して大先輩として敬意を表して接している。この男の様に、フレンドリーな会話を繰り広げることはない。

そのため志村は、烏賊屋のこのような表情を見るのが初めてだった。故に、この青年が誰なのかと疑問に思っていた。道場の稽古でも大会の試合でも見たことのない人物である。

「じゃあ、また遊びに来てくれ、堂本君」

「はい」

そう返事をひとつ返した青年が、額の右に刻まれたまだ新しい傷跡を掻きながら加藤を運び出す烏賊屋に頭を下げる。

「嫌でも、近いうちにまたきますよ。なにせ空手の巨大組織と世界的に成長したプロレス団体のいざこざですからね」

「堂本君、ちゃかすな。こっちは真剣なんだぞ」

「失礼しました」

烏賊屋の表情が再び怖く厳しい表情に戻った。それを見て言いすぎたと青年も反省の色を見せる。しかし、表面上だけだが。

青年の名前は、堂本タケシ。

この青年もまた、このようなトラブルが大好きな人物だった。参加するのも見学するのもだ。おそらく、隙があれば自分も首をつっ

こむ気であろう。その考えが、はっきりと表情から烏賊屋にも分かった。

烏賊屋と志村が加藤を抱えて道場を出て行くと、生まれたばかりの小さな火種に、タケシの顔が笑っていた。悪気も無しに満面にだ。

光臨館空手ｖｓ帝都プロレス。

この格闘組織の激突を、見逃してはなるものかといわんばかりに。

<　プロレスｖｓ空手・１　>

二人の体格の良い男が、夜の飲み屋街を歩いていた。周りを見れば、ほろ酔い感じの人々が賑やかに歩いている。その二人も同じように酒が入っている様子だった。顔が僅かに赤くなっている。

時刻の二十三時ぐらいだ、あと一時間もしたのならば日付が替わる。ついでに月も替わる。季節は、五月から六月へと移ろうとしていた。

体格の立派な二人の男は、筋肉で引き締まった体の内側から、普通の人々と違う圧力のようなものを高圧的な不陰気として放っていた。不思議な感覚だった。

二人は楽しそうに笑顔で繁華街を歩いているが、その高圧的なものが対面から歩いてくる者達を自然と避けさせていく。これが、格闘技など荒々しい世界で飯を食っているプロ特有の存在感なのだろう。

二人は、帝都プロレスのレスラーだ。

ひとりは、５０歳になるが現役のベテランで、そこそこ名前が売れているレスラーだ。最近では、休憩前の三試合目か四試合目の試合が多くなっていた。メインイベントやセミファイナルに顔を並べることがなくなり、若手や中堅レスラーに混ざって試合を行うことが多くなっていた。もうじき引退が近いなと本人も感じはじめている。体も大分きついのだ。

もうひとりの男は、つい最近、デビュー戦を終えたばかりの若手

レスラーである。高校から大学にかけてアマレスで体と技術を鍛え上げ、二年前に帝都プロレスに入門したのだ。それから更に体を苛め抜き、現在は、隣の年配レスラーの付き人を行いながら、一流レスラーへの仲間入りを目指して鍛錬の日々を送っている。

二人のレスラーは、今日の虎野町での巡業を終えて軽く一杯飲みに出てきたのだ。

「さっきの店、信じられないほど可愛い子いなかったですね、国分さん」

「ああ、まったくだ。あれじゃあボッタクリとかわんねえやな、七瀬。お前が、あの店がいいとか言うからわりんだぞ」

「すいません」

自分より背の高い付き人に、年配レスラーが尻へと一発張り手を打ち込む。だが、二人のレスラーは、先程入ったキャパクラの悪口を言いながらも楽しそうに会話をしながら歩いていた。なんやかんやいっても夜の街を楽しんでいる様子だった。

その二人のレスラーの前方から五人の若者が、横一列に並んで歩いてくる。はっきりいって柄の良い若者グループではなかった。身なりはチャラチャラして、耳だけではなく、鼻や口にも刺々しいピアスを幾つも付けている。その若者たちも楽しそうに会話をしながら歩いていた。かなりテンションが高い。

その弾む会話に、互いが前方から歩いてくる者達に気付いていない様子だった。

他の人々は、二人のレスラーを無意識に避けていたが、この五人は避ける事無く正面からぶつかり合う。

そして、レスラー二人のたくましい体にぶつかった若者五人の内三人が、まるで壁にでもぶつかったかの様に吹っ飛び尻餅を付く。体の肉厚の差である。レスラーたち二人は揺らぎもしなかった。二人は、何事かと、キョトンとした表情で吹っ飛んだ若者たちを見ていた。

お互いに、ぶつかったことに対しての謝罪はない。

三人の若者が直ぐに立ち上がった。そして五人揃って怖い顔に変わりレスラー二人に居直りながら詰め寄る。

若者たちの表情を見て、キョトンとしていたレスラー二人の表情も凛々しいものへ変わった。受けて立つといったぐあいに。

「おい、おっさん!。なぁ〜に、ボケッとして歩いてんだよ。ぶっ殺すぞ!」

「ああ〜、なんだ坊主、やるのか?」

五人の若者が一斉に二人のレスラーを睨みつけると、レスラー二人も負けずに睨み返していた。明らかに喧嘩が始まるといった空気へと変わっていく。各自の怒りが、引き返せない方向へと走り出していた。

「ここじゃあなんだ、場所かえようや」

年配レスラーがそう言うと、七人はそのまま裏路地へと入ってい

った。そして暫く薄暗い裏路地を歩いていくと、いい場所を見つける。そこはビル建設の工事中の敷地内だった。

完成まじかに見えるビル。その造りかけのビルの前には、七人が戦える程度の広場があった。そして都合が良すぎる程に人気はまったくない。

地面を見れば分厚い鉄板が何枚も引いてあった。所々に生土が見えるが、これは使えるとレスラー二人は心の中で微笑みながら思っていた。レスラーには投げ技があるからだ。硬い床は武器になるのだ。

広場の隅には、建築作業で出た廃材と思われる廃棄物が固められていた。明かりは、路上にある街灯から十分すぎる程に入ってきている。

戦うには本当に都合が良い場所だった。そこで七人が睨み合いを再開させると、緊張感が工事中の敷地内に立ち込めた。

「兄さんがた、ここでやろうか」

そう言って年配レスラーが上着を脱いで若手レスラーに手渡した。上着を受け取った若手レスラーも自分の上着を脱ぐと、預かった上着と一緒に汚れそうにない場所を見つけて置く。若者五人も、すでに殴り合える準備をしていた。指をコキコキと鳴らしたり、肩や首を解すように回している。

「おら、掛かって来いよ」

年配レスラーが、まるでブルース・スリーを真似るかのように、

片手でコイコイと仕草を見せると、その仕草に、若者五人の額に青筋が何本も浮き上がる。そして、レスラーたちに向かって一斉に走り出した。

「おりゃーーー！」

息の良い若々しい声を響かせ五人がレスラー二人に襲い掛かる。年配レスラーに三人、若手レスラーに二人の配分だった。年配レスラーの方が、人数が多い。おそらく若者たちも、本能で身長の高い若手レスラーよりも、いぶし銀の年配レスラーの方が強いと感じ取ったからであろう。

しかし、その人数分けの差も一瞬で均等になる。

年配レスラーに飛び掛った若者の一人が、開幕から一発目のストレートを顔面に喰らいＫＯされた。鼻が曲がり、前歯を飛び散らせながら倒れこむ。

たった一発で若者ひとりをノックダウンしたが、残りの二人が年配レスラーを殴りつけていた。

若者二人が、年配レスラーに次々と拳を打ち込む。顔面を殴り、体を叩く、何発も何発も止まる事無く。しかし、年配レスラーは、ガードすらせずに涼しい表情を見せていた。まったく効いていないかのようにだ。

この程度のパンチならば、長年にわたってリング上で殴られ蹴られ続けた年配レスラーにとっては、マッサージと同じだった。

プロレスラーのパンチがホーガン投げの鉄球と例えるならば、こ

の若者たちのパンチは、ピンポン玉のようなものだった。素人とプロの差とは、このぐらい開いている。ピンポン玉では、卓球ルール以外で人を倒せない。即ち、若者たちのパンチでは、このレスラーは倒せないのだ。

年配レスラーは、自分を殴りつけていた一人の若者の頭を、両手でがっちりと捕まえた。まるで万力にでも挟まれたかのような圧力が若者の頭にかかる。

もう一人の若者が年配レスラーを殴り続けていたが、年配レスラーは、その若者を無視して掴んだ頭を離すことはなかった。まるで、殴られていることにすら気付いていないかのように見えた。

若者の両耳を塞ぐように両手で挟みこんで話さない年配レスラー。その年配レスラーと若者の視線が真っ直ぐに見詰めあう。若者の表情は怯えていた。否、恐怖に引きつっているようにも見えた。

そして、年配レスラーの首が、後ろに振り被るように仰け反った。若者の脳裏に危険信号のさまにサイレンの音が鳴り響く。自分の顔面に、頭突きが飛んでくるのは明白だった。

若者は、顔面の前に両手を庇うように二つ重ねてガードを築く。そこに年配レスラーの頭突きが、予想とおりに飛んできた。

人間の頭の重さは、体重の約１３％といわれている。年配レスラーの体重は、約９０キロだ。即ち年配レスラーが繰り出した頭突きの重さは約１２キロの威力があることになる。

しかも年配レスラーは、リング上でヘッドパットを得意としていた。長いレスラー人生の中で、どのぐらいの階数を繰り出したのか

分からないほどの頭突きの達人である。その鍛え上げられた約１２キロの頭突きが、ガードした若者の両掌ごと顔面を叩き潰す。

しかも、一発二発では止まらない、三発四発と容赦なく繰り返される。四発目の頭突きの際には、ガードしていた両掌もだらりと力なくさがっていた。既に若者の意識は無くなっているのだろう。その顔面がダラダラと血を流していた。

年配レスラーは、七発目の頭突きをぶち込んだ後に、両手で挟んでいた若者の頭をやっと開放した。すると鉄板の上に顔面の形が変わった惨たらしい若者が、ゴンと音を立てて倒れこむ。

そして、若者を開放した年配レスラーが若手レスラーの方を見れば、既に彼も若者二人をぶちのめし終わっていた。その二人が足元に無残な姿で転がっている。その内のひとりの腕は、明らかに肩から可笑しな方向に曲がっていた。関節技で折られたのであろう。

一人残った若者が、後退りしながら怯えていた。その若者を二人のレスラーがジリジリと追い詰める。

「す、すみませんでした！」

怯えながら後退りする若者がそう言うと、背中が建設中のビルの壁に当たって止まる。その前方を、冷めた表情のレスラー二人が逃げ道を塞いでいた。逃がす気も、許す気もないような表情だった。

そして若者は、両腕で頭を抱えるようにしてしゃがみ込むと、膝を抱えながら怯える幼稚園児の様に泣き始めた。それを情けない奴と言いたげな表情で二人のレスラーは、一人残され絶望のふちにいる若者を、呆れた表情で見下ろしていた。

レスラー二人の圧勝だった。

「国分さん、こいつどうします？」

若手レスラーがそう訊いた時であった。

「ハッハッハッハッハッハッハッハッ」

建設中のビルの敷地内に、渋い男の声が高笑いとなって響き渡った。

「なんだ！？」

そう言い二人のレスラーが振り返る。泣いていた若者も、丸めた体の隙間から覗き見ていた。

工事現場への入り口。外の路上にある街灯に照らされて長い影を作る一人の男の姿があった。

それを見る三人の目が丸くなる。

「ハッハッハッハッハッハッ。少年、もう心配は要らんぞ。その悪党どもは、わたしが成敗してやる！」

高笑いの後にそう言った男は、白い道着に黒帯を締めていた。そして足元は、素足に下駄を履いている。なりよりもおかしいのは、その姿の頭に、メキシコのルチャリベロのような覆面をしているのだ。金と銀の色がやたらと光っている。

「なんでしょうかな、あれ……？」

「おれに訊くな……」

「私の名前は空手家仮面！。正義の味方だ！」

渋い声と、マスクの隙間から見える目尻の皺が、結構いい年の男ではないかと知らせていた。それと下唇が若干前に出ていた。

これは秘密の話なのだが、この男は、光臨館空手虎野町道場師範代、烏賊屋兆殻六段である。

「私の名前は、空手家仮面だ！」

「二回も言わなくていいよ……」

「大事なことだから、二度言ったのだ！」

<プロレスvs空手・2>（前書き）

大事なことは、二度言おうw
（Φ ωΦ）／

<　プロレスｖｓ空手・２　>

二人の体格の良い男が、夜の飲み屋街を歩いていた。周りを見れば、ほろ酔い感じの人々が賑やかに歩いている。その二人も同じように酒が入っている様子だった。顔が僅かに赤くなっている。

時刻の二十三時ぐらいだ、あと一時間もしたのならば日付が替わる。ついでに月も替わる。季節は、五月から六月へと移ろうとしていた。

体格の立派な二人の男は、筋肉で引き締まった体の内側から、普通の人々と違う圧力のようなものを高圧的な不陰気として放っていた。不思議な感覚だった。

二人は楽しそうに笑顔で繁華街を歩いているが、その高圧的なものが対面から歩いてくる者達を自然と避けさせていく。これが、格闘技など荒々しい世界で飯を食っているプロ特有の存在感なのだろう。

二人は、帝都プロレスのレスラーだ。

ひとりは、５０歳になるが現役のベテランで、そこそこ名前が売れているレスラーだ。最近では、休憩前の三試合目か四試合目の試合が多くなっていた。メインイベントやセミファイナルに顔を並べることがなくなり、若手や中堅レスラーに混ざって試合を行うことが多くなっていた。もうじき引退が近いなと本人も感じはじめている。体も大分きついのだ。

もうひとりの男は、つい最近、デビュー戦を終えたばかりの若手

レスラーである。高校から大学にかけてアマレスで体と技術を鍛え上げ、二年前に帝都プロレスに入門したのだ。それから更に体を苛め抜き、現在は、隣の年配レスラーの付き人を行いながら、一流レスラーへの仲間入りを目指して鍛錬の日々を送っている。

二人のレスラーは、今日の虎野町での巡業を終えて軽く一杯飲みに出てきたのだ。

「さっきの店、信じられないほど可愛い子いなかったですね、国分さん」

「ああ、まったくだ。あれじゃあボッタクリとかわんねえやな、七瀬。お前が、あの店がいいとか言うからわりんだぞ」

「すいません」

自分より背の高い付き人に、年配レスラーが尻へと一発張り手を打ち込む。だが、二人のレスラーは、先程入ったキャパクラの悪口を言いながらも楽しそうに会話をしながら歩いていた。なんやかんやいっても夜の街を楽しんでいる様子だった。

その二人のレスラーの前方から五人の若者が、横一列に並んで歩いてくる。はっきりいって柄の良い若者グループではなかった。身なりはチャラチャラして、耳だけではなく、鼻や口にも刺々しいピアスを幾つも付けている。その若者たちも楽しそうに会話をしながら歩いていた。かなりテンションが高い。

その弾む会話に、互いが前方から歩いてくる者達に気付いていない様子だった。

他の人々は、二人のレスラーを無意識に避けていたが、この五人は避ける事無く正面からぶつかり合う。

そして、レスラー二人のたくましい体にぶつかった若者五人の内三人が、まるで壁にでもぶつかったかの様に吹っ飛び尻餅を付く。体の肉厚の差である。レスラーたち二人は揺らぎもしなかった。二人は、何事かと、キョトンとした表情で吹っ飛んだ若者たちを見ていた。

お互いに、ぶつかったことに対しての謝罪はない。

三人の若者が直ぐに立ち上がった。そして五人揃って怖い顔に変わりレスラー二人に居直りながら詰め寄る。

若者たちの表情を見て、キョトンとしていたレスラー二人の表情も凛々しいものへ変わった。受けて立つといったぐあいに。

「おい、おっさん!。なぁ〜に、ボケッとして歩いてんだよ。ぶっ殺すぞ!」

「ああ〜、なんだ坊主、やるのか?」

五人の若者が一斉に二人のレスラーを睨みつけると、レスラー二人も負けずに睨み返していた。明らかに喧嘩が始まるといった空気へと変わっていく。各自の怒りが、引き返せない方向へと走り出していた。

「ここじゃあなんだ、場所かえようや」

年配レスラーがそう言うと、七人はそのまま裏路地へと入ってい

った。そして暫く薄暗い裏路地を歩いていくと、いい場所を見つける。そこはビル建設の工事中の敷地内だった。

完成まじかに見えるビル。その造りかけのビルの前には、七人が戦える程度の広場があった。そして都合が良すぎる程に人気はまったくない。

地面を見れば分厚い鉄板が何枚も引いてあった。所々に生土が見えるが、これは使えるとレスラー二人は心の中で微笑みながら思っていた。レスラーには投げ技があるからだ。硬い床は武器になるのだ。

広場の隅には、建築作業で出た廃材と思われる廃棄物が固められていた。明かりは、路上にある街灯から十分すぎる程に入ってきている。

戦うには本当に都合が良い場所だった。そこで七人が睨み合いを再開させると、緊張感が工事中の敷地内に立ち込めた。

「兄さんがた、ここでやろうか」

そう言って年配レスラーが上着を脱いで若手レスラーに手渡した。上着を受け取った若手レスラーも自分の上着を脱ぐと、預かった上着と一緒に汚れそうにない場所を見つけて置く。若者五人も、すでに殴り合える準備をしていた。指をコキコキと鳴らしたり、肩や首を解すように回している。

「おら、掛かって来いよ」

年配レスラーが、まるでブルース・スリーを真似るかのように、

片手でコイコイと仕草を見せると、その仕草に、若者五人の額に青筋が何本も浮き上がる。そして、レスラーたちに向かって一斉に走り出した。

「おりゃーーー！」

息の良い若々しい声を響かせ五人がレスラー二人に襲い掛かる。年配レスラーに三人、若手レスラーに二人の配分だった。年配レスラーの方が、人数が多い。おそらく若者たちも、本能で身長の高い若手レスラーよりも、いぶし銀の年配レスラーの方が強いと感じ取ったからであろう。

しかし、その人数分けの差も一瞬で均等になる。

年配レスラーに飛び掛った若者の一人が、開幕から一発目のストレートを顔面に喰らいＫＯされた。鼻が曲がり、前歯を飛び散らせながら倒れこむ。

たった一発で若者ひとりをノックダウンしたが、残りの二人が年配レスラーを殴りつけていた。

若者二人が、年配レスラーに次々と拳を打ち込む。顔面を殴り、体を叩く、何発も何発も止まる事無く。しかし、年配レスラーは、ガードすらせずに涼しい表情を見せていた。まったく効いていないかのようにだ。

この程度のパンチならば、長年にわたってリング上で殴られ蹴られ続けた年配レスラーにとっては、マッサージと同じだった。

プロレスラーのパンチがホーガンの鉄球と例えるならば、この若

者たちのパンチは、ピンポン玉のようなものだった。素人とプロの差とは、このぐらい開いている。ピンポン玉では、卓球ルール以外で人を倒せない。即ち、若者たちのパンチでは、このレスラーは倒せないのだ。

年配レスラーは、自分を殴りつけていた一人の若者の頭を、両手でがっちりと捕まえた。まるで万力にでも挟まれたかのような圧力が若者の頭にかかる。

もう一人の若者が年配レスラーを殴り続けていたが、年配レスラーは、その若者を無視して掴んだ頭を離すことはなかった。まるで、殴られていることにすら気付いていないかのように見えた。

若者の両耳を塞ぐように両手で挟みこんで話さない年配レスラー。その年配レスラーと若者の視線が真っ直ぐに見詰めあう。若者の表情は怯えていた。否、恐怖に引きつっているようにも見えた。

そして、年配レスラーの首が、後ろに振り被るように仰け反った。若者の脳裏に危険信号のさまにサイレンの音が鳴り響く。自分の顔面に、頭突きが飛んでくるのは明白だった。

若者は、顔面の前に両手を庇うように二つ重ねてガードを築く。そこに年配レスラーの頭突きが、予想とおりに飛んできた。

人間の頭の重さは、体重の約１３％といわれている。年配レスラーの体重は、約９０キロだ。即ち年配レスラーが繰り出した頭突きの重さは約１２キロの威力があることになる。

しかも年配レスラーは、リング上でヘッドパットを得意としていた。長いレスラー人生の中で、どのぐらいの階数を繰り出したのか

分からないほどの頭突きの達人である。その鍛え上げられた約１２キロの頭突きが、ガードした若者の両掌ごと顔面を叩き潰す。

しかも、一発二発では止まらない、三発四発と容赦なく繰り返される。四発目の頭突きの際には、ガードしていた両掌もだらりと力なくさがっていた。既に若者の意識は無くなっているのだろう。その顔面がダラダラと血を流していた。

年配レスラーは、七発目の頭突きをぶち込んだ後に、両手で挟んでいた若者の頭をやっと開放した。すると鉄板の上に顔面の形が変わった惨たらしい若者が、ゴンと音を立てて倒れこむ。

そして、若者を開放した年配レスラーが若手レスラーの方を見れば、既に彼も若者二人をぶちのめし終わっていた。その二人が足元に無残な姿で転がっている。その内のひとりの腕は、明らかに肩から可笑しな方向に曲がっていた。関節技で折られたのであろう。

一人残った若者が、後退りしながら怯えていた。その若者を二人のレスラーがジリジリと追い詰める。

「す、すみませんでした！」

怯えながら後退りする若者がそう言うと、背中が建設中のビルの壁に当たって止まる。その前方を、冷めた表情のレスラー二人が逃げ道を塞いでいた。逃がす気も、許す気もないような表情だった。

そして若者は、両腕で頭を抱えるようにしてしゃがみ込むと、膝を抱えながら怯える幼稚園児の様に泣き始めた。それを情けない奴と言いたげな表情で二人のレスラーは、一人残され絶望のふちにいる若者を、呆れた表情で見下ろしていた。

レスラー二人の圧勝だった。

「国分さん、こいつどうします？」

若手レスラーがそう訊いた時であった。

「ハッハッハッハッハッハッハッハッ」

建設中のビルの敷地内に、渋い男の声が高笑いとなって響き渡った。

「なんだ！？」

そう言い二人のレスラーが振り返る。泣いていた若者も、丸めた体の隙間から覗き見ていた。

工事現場への入り口。外の路上にある街灯に照らされて長い影を作る一人の男の姿があった。

それを見る三人の目が丸くなる。

「ハッハッハッハッハッハッ。少年、もう心配は要らんぞ。その悪党どもは、わたしが成敗してやる！」

高笑いの後にそう言った男は、白い道着に黒帯を締めていた。そして足元は、素足に下駄を履いている。なりよりもおかしいのは、その姿の頭に、メキシコのルチャリベロのような覆面をしているのだ。金と銀の色がやたらと光っている。

「なんでしょうかな、あれ……？」

「おれに訊くな……」

「私の名前は空手家仮面！。正義の味方だ！」

渋い声と、マスクの隙間から見える目尻の皺が、結構いい年の男ではないかと知らせていた。それと下唇が若干前に出ていた。

これは秘密の話なのだが、この男は、光臨館空手虎野町道場師範代、烏賊屋兆殻六段である。

「私の名前は、空手家仮面だ！」

「二回も言わなくていいよ……」

「大事なことだから、二度言ったのだ！」

<；プロレスvs空手・3　>；（前書き）

わーい
祝２００話だー
皆、お付き合いありがとう～
（＊：．．；；。：；益；；。：；）ｂ

<　プロレスvs空手・3　>

なんともまー、でかい図体していやがるんだい。空手家の癖によ。プロレスラーの俺よりもよ、でかいじゃあねえか。烏賊屋よ。

図体だけじゃあねえぜ。なんだい、あの握りこぶしはよ。まるで岩石だな。

それに何だいあのマスク。あれで馬面が隠せているとでも思っているのかよ。あ、思っているんだっけ。

空手家仮面。なんだよそれ、舐めやがって。やっぱりぶちのめしてやる。

そのマスクごとぶん殴って、その巨体を投げ飛ばして、その自慢の腕も足もへし折ってやるぜ。

お前が磨き上げた空手ごと、俺の築き上げたレスリングで、全部ぶっ壊してやる。

帝都プロレスの旗揚げ前、まだ大日プロレスだったころの異種格闘技戦。本当はリングでお前と殴り合うのは、俺の筈だったんだぜ。

でも、お前んところの館長がよ……、あ、今は会長になったんだっけ。まあ、どっちでもいいか。その会長が、俺じゃあネームが小さすぎるとかぬかしやかってよ、それでカードの変更よ。ふざけやがって。

それから俺が、どんだけ頑張ってここまでやってきたか、てめー

になんぞ、分かるまい。

あの時、本当は組まれていたカードが、まさかこんな形で訪れるとは、俺も想像が付かなかったぜ。

神様ってやつは、なんて気まぐれな職業なんだ、うらやましい話だな。

本当は、観客の見ている明るい場所で、激しくやりたかったんだけどよ。

まあいいさ、なんでもいいさ。あの時の決着、今此処で付けさせてもらうぜ。

よし、開始だ、構えを取ろうや。

それにしても、開始のゴングが無いとさみしいな……。

どうした烏賊屋、構えを取ったが動きやしねえな?。

俺が怖いのか?。

俺はお前が怖いぞ?。

だから俺から攻め込んでやるよ。感謝しな。

真っ直ぐだ、真っ直ぐ進んでやる。

蹴るかい、殴るかい、どっちでもいいぜ。

どうした、もう届く間合いだぞ、これ以上進んだら、プロレスラーの俺の間合いになっちまうぞ。

じゃあ、遠慮無く、俺からぶん殴らせてもらうぜ。

喰らえ、俺の鉄拳を。

あれ、俺のストレートが綺麗に捌かれた。空手の捌き技か……。

やべえな、拳だ。おそらく右拳だな、まちがいねえ。

避けきれねーなー、こりゃあ。

うわ、頭が揺れた。なんて重いパンチだ。三十年以上毎日続けてきたブリッチの練習が無かったら、首ごと吹っ飛んでたな。これで、お陀仏だったは。

ははは、練習をサボらなくてよかったぜ。鼻血程度で済んだぜ。

それに、不思議だな。気が付いたら殴られながらも、その手首を掴んでやがる。無意識のうちに、体がかってに動きやがった。

普通の連中が、普通に会社へ出勤して働くように、日本各地の体育館で、何千試合も、何万試合もやってきたからな。殴られながらでも、かってに体が動いてくれる。ありがてえ話だぜ。

よし、脇固めだ。このまま烏賊屋の肘を脇の下に挟んで、そこから一気に体重を乗せて……。

ななななな!。

烏賊屋の奴め、結構動きが速いじゃあねえか！。左に回り込んで、関節が決まるのを避けやがった。

しまった、髪を掴まれた。そのまま下に引っ張られる。やべえ、膝だ、膝が跳ねてきた、ブロックがまにあわん。

ふごっ！。

また、脳が揺れた。さっきのパンチよりも衝撃がでかい！。眩暈がしやがる。

やばい、完全に烏賊屋のペースだ。一回距離を置くか、逃げるか？。

ダメだ、烏賊屋が追ってくる。このまま短期で決める期だ。もっと楽しみやがれよ。

右ハイ、かわした、下をくぐったぞ。

ぐはっ！。

空振りした右ハイが、踵落としに変化しやがった。頭のてっぺんが痛むぜ。でかいわりには起用だな、こいつ。

だが、足を掴んだぞ。肩に被いてたぞ。このまま後ろに倒してやる。そしてグラウンドに持ち込んでやるぜ。

倒れやがれ。あれ、倒れない。

飛んだ?。左脚が飛んできた。

あがっ!。

ジャンピングボレーキックだと。あ、右足を放してしまった。畜生。

そんな巨体で派手な技を使いやがって。てめえ、もう五十歳だろ。年を考えやがれ。まあ、おれも五十だけどよ。

起き上がるのも、ほぼ同時か。まあ、同じ五十だしよ。

よし、烏賊屋の正拳をかわしたぞ、しかも俺の拳が顔面に決まった。

もう一丁。よし、また決まった。更にもう一丁だ。

あ、飛び膝蹴り。もろに顎へ喰らっちまった。

視線が激しくずれる。このビル何階建てなのかな、高くて何階あるか分かんないや。

よし、俺を蹴り上げやがった膝の裏側に、手が入ったぞ。また、かってに体が動いたぜ。

なんだ、右膝で俺の顎を蹴り上げやがったのか。掴み取って、初めて右脚か左脚かが分かったぜ。

左足にも俺の脚が絡みついたぞ。よし、倒した。烏賊屋が背中から倒れやがった。

右足首を脇の下に挟んで、後ろに倒れる。それでアキレス腱固めが決まる。

なに！。

このやろう、俺が後ろに倒れたら、シーソーの様に勢いを利用して起き上がりやがった。

技が決まっていない。烏賊屋が俺の上にいる。まずいな、これはマウントポジションを取られるぞ。

烏賊屋が俺の右手を、大きな両手で掴んできた。なにをする気だ？。

おい、まて、まさか、俺に関節技を掛けるつもりか！。

腕十時固め！。

舐めやがって。空手家がレスラーにサブミッションを仕掛けるだと、許されるかそんなことが。あ、しまった、肘が伸びた、関節が決まりそう、やべえな。

だが、それは許せねえ。レスラーを舐めんなよ、こうなったらこうだ。

がぶっ。

ははは、危なかった。

そんなに悲鳴を上げるなよ。ただ、ちょっとだけ脚に噛み付いただけじゃあねえか。

そもそも、お前が悪いんだぜ、烏賊屋よ。

お前が空手家の癖にレスラーにサブミッションを掛けるからだ。

よのなかにゃあ、やっちゃいけねーことってのがあるんだぜ。

お詫びのしるしに立つのをまってやる。だから早く立てよ。

そうだ、立ったな、よし続きだ。

喰らえ、ドロップキックだ。

おー、だいぶ飛んだな。流石、脚力は腕力の三倍だぜ。両脚だから六倍か。

よし、先に起きた。ダッシュだ俺。烏賊屋も立った。タックルだ、肩からの体当たりでも喰らいやがれ。

どうだ、もう一回吹っ飛びやがれ。

あれー……、たおれねー。

倒れなかった烏賊屋から、パンチが飛んできた。チンへ綺麗に入ったな。今度は腹に膝蹴り。次に延髄にチョップかよ。更にこめかみに肘鉄。畜生、流石にこれは体が倒れるわな。そこに掬い上げるように頭へ蹴りかよ。えげつねー。

あーあ……。倒れちまったよ俺。

起きれるかなー、無理かなー。

うわ、顔面にストッピングかよ。烏賊屋はえげつねーなー。俺、そんなことされたら死ぬぞ。

二発、三発、まだ踏むのかよ。

ああ、意識が何だか、なんて言えばいいんだ、薄れていくでいいのか。

まあいいや、なんでもいいや。

悔しいが、負けだな。俺の負けだな。

俺、レスラーをさ、引退するぜ。

これが、最後の試合だ。

いい試合だったよ。

あ～……、目の前が、暗くなっていく。

意識が……。

なんて言えばいいんだっけ……。

真っ暗……

だ……

ぜ……

……

<光臨館　>（前書き）

今回のサブタイの八尾弦徳が、ぜんぜん出てこない、あは！ｗ

０９／６／４時点、１２０，０００アクセス突破！。これも全て、お読み頂いてる皆様のおかげです＾＾

<光臨館>

光臨館本部ビル最上階にある館長室。そこに四人の屈強な男性たちが集まって居た。

高級なマホガニーの机に、これまた高級な応接セットのテーブルにソファー、それらが部屋にはあった。

三人の男性が、そのソファーに座り、残り一人が扉の横に立っていた。

ソファーに座る内の二人は、随分と歳を食った感じであるが、もう一人の男性と扉の横に立つ男性は、かなり若い。若いといっても二十代半ばに見える。

ソファーに座る三人の一人は、光臨館虎野町支部師範代の烏賊屋兆殻だ。

その烏賊屋の前に座るのが、光臨館会長・王森葵、その隣に座るのが、二代目館長、王森達哉である。

二代目館長・王森達哉の年は、今年で二十七歳だ。館長を名乗るには、まだ若いかも知れないが、それでありながらこの男、かなり強い。

現在この館長室に集まった四人は、事実上、光臨館の実力ベストフォーといえる男たちだ。

光臨館初代館長、現在では会長の座に退いているが、王森葵とい

えば、空手界にこの人有りと言われる存在である。あの堂本流空手道の堂本拳四郎と、肩を並べる鬼神と歌われていた。現在でも、とても七十歳の老人とは思えないほどに強い。

二代目の達哉は、その葵の一人娘と結婚して王森家の婿養子となり、館長の座を継いだのである。

そして、妻との間には七歳の娘が一人居る。祖父となった葵は、その孫娘を異常なまでに可愛がっていた。そこには鬼神と歌われた男の面影が残らないほどにだ。

館長室の扉の横に立つ男は、新井忠治。年齢は、王森達哉とほとんど変わらない。実力もだ。

二人は、古くからのライバル関係であった。

しかし、その差も、達哉が王森家に婿養子に入ったことでひらいてしまった。だが、荒井曰く、立場と空手の実力は別物と言い切り、割り切っている様子だった。

荒井は、権力を欲しているのではない。荒井は、個人の武力を欲しているのだ。

自分ひとりの力で、自分ひとりの武術で、どこまで戦えるというテーマに人生を費やして生きている。組織構成や銭勘定は、二の次にしか考えていない。まるで狼のような男である。

光臨館に席を置き続けるのは、ここで空手を習ったからだ。ここで武人としての自分が誕生したからにすぎない。光臨館が空手家荒井の故郷なのだ。

そんな四人が集まる館長室で、ソファーに腰を下ろしている内の一人、二代目館長の達哉が話し始めた。烏賊屋を鋭い眼差しで見ながらだ。

「烏賊屋先輩、困りますよ、勝手に動かれたら」

向かい合う三人の間にあるテーブルの上には、派手な色合いの覆面が置いてあった。それは数日前に、空手家仮面と名乗る男が被っていたマスクだ。

「何のことやら……」

烏賊屋は腕を組みながらそっぽを向く。完全に知らぬ存ぜぬを貫くそぶりだ。

それに館長の達哉が困った表情を見せていた。しかし、怒ってはいない様子だ。

「二日前、帝都プロレスの選手二名を襲いましたよね」

「知らん、私じゃあないな」

「空手家仮面とか名乗ってたらしいですが、ばればれですよ」

「まあ、いいじゃあないか、館長」

「会長……」

婿養子の隣に座っていた大きな体の老人が言う。その老人の体は、

本当に七十の老人とは思えないほどに鍛え上げられていた。

慎重はさほど高くはない、しかし体が太い。太いといっても贅肉で太っているわけではなかった。むしろ贅肉はほとんど見られない。すべてが筋肉のようだ。胸の筋肉が厚すぎて、Ｙシャツのポタンが飛んで行きそうだった。

そんな筋肉だるまの七十歳が話し始めた。

「それに、烏賊屋がレスラーをぶちのめしても、向こうさんとの話しは変わらないんだしよ」

会長は、真ん丸い顔でそう言う。そのしゃべり方は、とても陽気のいいしゃべり方だった。

「話とは、なんだ?」

烏賊屋が館長と会長の二人に問うと、婿養子の館長のほうがそれに答えた。

「志村、中本、高木の三人を襲った帝都プロレスのレスラー城嶋の事件。この件に関しての決着方法について、帝都プロレスと話し合っていたのですがね」

「帝都プロレスと話し合いだと?」

「ああ、だから烏賊屋先輩の暴走が、また話を難しくしましてね……」

「ふむ……、すまぬ……」

烏賊屋が話を聴いて黙り込む。そのことが、自分が空手家仮面であると白状したことすら気付かず。

「本当はですね、一試合で話が示談するはずだったんですが……」

「示談だと？」

「一ヵ月後に、帝都プロレスが企画していたイベントがありましてね」

「イベントとは？」

「帝都プロレスのレスラー七名と、あちらこちらから集めた他流の者七名との異種格闘技戦。その大会で内から一人出て、レスラーと戦う予定だったんですよ」

「なんだそれ、それでは向こうの罠に光臨館が乗った形ではないか！」

烏賊屋の言うとおりだった。

向こうから光臨館の者を襲っておいて、プロレスのリングに上がれでは、向こうの都合に此方がすべて合わせてやっているようなもの。バカにするのにも程がある。烏賊屋の言葉は道理が通っていた。

「いやいや、ですがね、そこがプロレス」

「ん？」

「勝ちは、われわれに譲るとの話なんだよ」

「バカか！！」

烏賊屋が更に怒鳴り、そして立ち上がる。

「空手家にプロレスのような、道化の試合をしろと言うのか！」

立ち上がった烏賊屋は、上から館長を怒鳴り散らしながら唾を幾つも飛ばしていた。

その光景を横で見ていた会長が、太い指で両耳をふさいで、お茶目な仕草を見せていた。

「まあまあ、烏賊屋先輩、座って話しを最後まで聴いてください」

館長が立ち上がると、すっ～と手を伸ばし烏賊屋のジャケットの襟を片手で掴む。そして、引き寄せながらソファーに座った。

館長の体には、力が入っているようには見えなかった。しかし、その館長の引く腕に、烏賊屋の巨体がテーブルの上に両手を付いて崩れ落ちた。

その光景を見ていた会長と荒井が、クスリと笑う。烏賊屋もしてやられたといった表情で、テーブルの上からソファーに尻を戻した。烏賊屋は、技を掛けられたことには怒っている様子はなかった。むしろ技を掛けられたことで、冷静さを取り戻したようすだ。それだけ館長の達哉が使った技は、見事な切れだったのだ。

烏賊屋は館長の話をちゃんと聴く気になったのか、再びソファー

の上で両手を組んだ。しかし、顔は、いつもとおりイカツイ表情をしていた。

「レスラー七名と他流七名の試合。光臨館の枠は、第二試合、相手は若手レスラー。ほとんどボーナスステージです。光臨館の圧勝が約束されています。それが我々光臨館がリングに上がる条件」

「なんだそれ？」

「分かりやすく言えば、この試合、帝都プロレスが、公衆の面前で光臨館に土下座をするようなもの」

「なるほど、若手を生贄に詫びを入れてきたってことか……」

「まあ、そんなところです。しかも、うちの宣伝にもなりますしね」

「で、誰が出る」

そう訊く烏賊屋の言葉には、もちろん自分が出るのだろうという誘導が感じられた。しかし、館長の口から出た名前は……。

「万が一を考えて、荒井に出てもらいます」

館長室内に、テーブルを叩く音が響き渡る。いや、砕く音だ。烏賊屋がテーブルを叩き、真っ二つに破壊した音だ。

「おい、烏賊屋、かってに壊すなよ。このテーブル、俺が館長時代に買い揃えた思い出の品だぞ」

「あ～、すみません……」

会長にそう言われた烏賊屋が、素直に頭を下げた。

烏賊屋は、この王森葵に空手を仕込まれた、故に未だ頭が上がらないのだ。会長に言われて僅かに気落ちしている様子だった。

「だから落ち着いて聴いてください、烏賊屋さん」

「ええい、これが落ち着いて聴いてられるか、岡村！」

岡村とは、王森達哉の旧姓である。二人は達哉が王森家に婿へ入る前からの長い付き合いだ。まれに旧姓を無意識で口に出してしまうことがあった。

「烏賊屋さんにもちゃんと出番がありますから！」

「どんな出番だ！」

「帝都プロレスの大会は、東京ドームで行われます」

「それがどうした」

「そのドーム大会後に、そのドームでもうひとつのイベントが行われます」

「もうひとつ……？」

若い館長の言葉に、烏賊屋がキョトンとした表情を見せた。そして、しばらく経つと烏賊屋が何かに気付き、ハッとした表情を見せる。

「ええ、そうです、烏賊屋さんも知っていますよね、あの噂……」

館長室に居る烏賊屋以外の三人が、怪しい笑みを作っていた。そこで初めて荒井が口を開いて会話に参加してきた。

「本当なら、ザコのレスラーを喰うより、烏賊屋さんと変わりたいぐらいなんですよ、わたしは」

荒井の表情は、怪しく笑っていた。その笑みは、人間のようには見えなかった。そう、まるで妖怪のような邪悪なものだった。

「そのイベントとは……」

烏賊屋が念のために問う。それに答える館長。

「十二番長老候補、八尾弦徳ｖｓ九十九神、春婆怒です」

「……やはりか」

「十二長老のメンバー、大天狗とインビシブル、それに帝都プロレスの社長とが組んで会場をお膳立てしたらしいです。全国から八尾弦徳と春婆怒との対決を見たがっている妖怪変化どもを集め披露の予定だそうです」

「十二長老たちは、そうやって自分たちの組織力を周りの者たちに知らしめたいのだよ」

若い館長の台詞に、丸顔の会長が言葉を足す。

「で、私の出番とは。まさか私に、その会場でも襲わせますか、プロレスのように乱入させてよ」

「がははははは、まさか、冗談はよせやい、烏賊屋」

会長がそう言って豪快に笑った。

「いくら世界的に道場を構えたからっていってもよ、光臨館なんて妖怪連合から見たら弱小組織だ」

「確かに」

「お前さんが公認の九十九神を持っているからといっても、妖怪連合には勝てん」

「確かに……」

そう、この烏賊屋兆殻という男。もう、三十年前から九十九神の使い手を勤めている。

「烏賊屋先輩、貴方の出番はそのイベントで、八尾弦徳と春婆怒の対決前の前座を務めてもらいたいのです」

「はぁ、前座だと?」

「はい、前座です」

先程までの笑顔が消えた館長が、真っ直ぐ烏賊屋の両目を見ながら言った。それに烏賊屋も真剣な視線を返す。

「相手は？」

「帝都プロレス、城嶋悟です」

「なに！」

「あの男が、このたびゴーグ大葉から九十九神を受け継いだそうです」

「なんと……」

妖怪連合の中には、『公認』と呼ばれる九十九神が何体か存在していた。

それは、妖怪たちに恨みを買う事無く、人食い、妖怪食いが終わっている九十九神である。

九十九神でありながら旨いこと立ち回り、妖怪たちの恨みを買わずに成長した九十九神が、そのまま妖怪連合に入り、害になる九十九神を喰っているのだ。

普通の妖怪を喰わないと心に決め、後処理班が始末するはずの妖怪だけを喰らう九十九神たちで、そのように妖怪連合と旨く付き合ったものだけが、その公認を得られる。

妖怪食いが済んでいない九十九神に取っては、ご馳走に見える妖怪と付き合うのだ、かなり食欲を我慢できる九十九神しかまっとうできない。

烏賊屋が持つ九十九神や、城嶋が受け継いだ九十九神は、そういい

った類の九十九神なのである。

「なぜ、我々九十九神の使い手同士が、前座を……」

烏賊屋が問う。当然の疑問だった。その問いに会長のほうが答えた。

「お前のやんちゃが過ぎたからだ」

「おれの……」

「そう、お前さんが、帝都のレスラーを二人ものしたからだ」

会長の台詞に館長が続く。

「光臨館と帝都プロレスの揉め事は、異種格闘技戦で決着が付く予定だったんですよ。しかし、烏賊屋先輩が暴れたせいで、話しがこじれましてね」

「俺のせいかい……」

「それで、どうせなら烏賊屋先輩と、帝都プロレスの城嶋とで、直接決着を付ければいいのではと、なりましてね」

「問題を起こした者同士でってことだ」

「なるほど……」

ゴツゴツした手で、烏賊屋がしゃくれた顎を撫でながら天井を眺めた。

「まあ、どうせなら九十九神同士の戦いが見たいって声が、妖怪どもからあがってな」

「ルールは？」

「ないです……」

答えた館長の声に濁りが感じられた。

「殺し合いか？」

「結果、死んでも仕方ないとのことだ」

「まあ、九十九神同士の戦いだし、仕方あるめいか……」

そう言ってソファーから烏賊屋が立ち上がった。そして、館長室を出て行こうとする。

「烏賊屋先輩、了解いただけましたか？」

「ああ、望むところだ……、もともと城嶋との決着を望んでいたんだ、問題はない」

そう言い残すと烏賊屋は、荒井の横を歩いて館長室を出て行った。

廊下を進む烏賊屋が、ふと、小さな声で言葉を呟く。

「ちっ、俺が戦うのはいいが、九十九神を、あいつを使う羽目にな

ろうとは……。失敗したな、こりゃ……」

そう呟きながら烏賊屋は、光臨館の本部ビルをあとにした。

<　烏賊屋兆殻・前編　>

試合が決まった。

九十九神の使い手同士の戦いだ。試合とは呼べないかもしれない。観客も人間ではないのだ、笑ってしまうような話しである。

東京ドームで人知れず妖怪たちに囲まれて行われる試合だ。自分でもどのような結果に終わるのか見当が付かない。

死ぬのか、生きるのか、殺すのか……。

だが、やらねばならない戦いだ。公認を得ている者の勤めなのだ。定めと言ってもいいかもしれない。

今日は、試合の打ち合わせのために、再び本部ビルに来ていた。試合の日程や細かい入り時間の打ち合わせのためだった。

人間たちには秘密のイベントだ。それに参加するのだ、めんどくさいが普通よりも内密に動かないといけないらしい。帝都プロレスの幹部スタッフの説明を、光臨館のマネージャーとで聞かされていた。

広い会議室。そこには俺を含めて三人しかいなかった。俺は、詰まらない説明を、テーブルに肘を付きながら聞いていた。

最初は、普通に帝都プロレスの異種格闘技大会が行われるらしい。

詳しい面子は、自分に関係ないため覚えてもいない。光臨館と帝

都プロレスの試合は、荒井に任せておけば問題ないだろう。

あの男は強い。おそらく自分よりもだ。

もしも、今の自分のキャリアを持ったまま若さを取り戻さないかぎり、俺では勝てそうにない。とても五十のじいさまでは、あの荒井に敵うことはないだろう。

そんなどうでもいい事をぼんやり考えていると、細かい話しが終わり、会議室を三人が出て行く。そして各自バラバラの行き先を目指して散っていった。

階段を降っていると二階道場から子供たちの声が響いてくる。俺は、なんとなくそこを目指した。今日は小学生の部がある日らしい。少し覗いていくことにした。

四十人ぐらいの可愛らしい男女の幼子たちが整列しながら正拳突きの練習をしている。指導しているのは、二代目館長の王森達哉だった。どおりで会議室の話し合いで居なかったわけだ。こんなところで子供の面倒をみてやがる。まあ、指導者としては、感心すべきだが。

子供立ちの稽古をガラス越しに見ていると、背後から声を掛けられた。女性の声だった。

振り返ると馴染みのある女性が一人たっていた。会長の娘で、館長の嫁さんにあたる、王森可憐だった。

彼女のことは、小さな頃から知っている。もうじき三十歳ぐらいになるはずだ。婿養子より一、二歳ぐらい年上だったと覚えている。

ひかいめで大人しい性格だが、物事には確りとした女性だ。随分と立派な女性に育ったと思う。見た目ももうじき三十路とは思えないほどに若々しい。

二人には一人娘がいた。たしか七歳ぐらいになったはずだ。今、ガラス窓の向こうで正拳突きの稽古をしている子供たちに混ざっている。

母の可憐に似て顔付きはとても可愛い。しかし、性格は、残念ながら父の達哉に似てしまっている。良く言っても勝気。悪く言えばじゃじゃ馬である。

聞いた話では、先日も子供同士の組み手で、何人もの男の子を泣かしていたらしい。空手家としては、とても期待できそうだが、もう少し女の子らしくしたほうがいいのではと俺ですら思う。

唯一女の子らしいのは、可愛い顔と、長い髪だけだ。いつも長い髪をポニーテールにしている。本人曰く、自分のチャームポイントらしい。

しばらくの間、子供たちの稽古のようすを見ながら可憐と何気ない会話をした。最近の身の回りのことや妻の健康とかについてだ。荒っぽい空手の話とかは一切しなかった。可憐は、そう言う女性だ。本当は、あの王森葵と血が繋がっていないのではと疑うときもある。

十分くらい可憐と放すと、彼女と別れて本部ビルをあとにした。本部道場のビルを出ると、辺りは既に暗くなっていた。ふと、腕時計を見れば、短い針が七時を過ぎていた。

「よう、烏賊屋」

本部ビルをでるとすぐに男に声を掛けられた。自分に比べれば小さな男だったが、体は随分と苛め抜いている様子である。

知った顔だ。二週間ほど前に、建設中のビルの前で戦った男である。

名前は確か国分。現在、光臨館ともめている帝都プロレスのレスラーだ。あれから二週間ぐらい経ったが、顔にはまだ、俺にやられた痣が幾つも残っていた。

「あんた、確か国分……さん」

「呼び捨てでいいよ。そのかわり俺も呼び捨てであんたを呼ぶからよ」

国分は、そう言いながら歩いてくると笑った。

やり合う気が、まったくない様子だった。なんとなく、それが分かる。長いこと戦ってばかりいると不思議なことに、そういうことにはやたらと鼻が聞くようになるのだ。

「なあ、あんた今日は車かい？」

そう訊く国分に「違う」と首を左右に振って見せた。すると国分が、一緒に酒でも飲みに行かないかと誘ってきた。

今日はこのまま飲んで帰ろうと思い車で来なかったのだ。ちょうどいい誘いと思い、国分と飲みに行くことにした。

二人で近所にある赤提灯が下がる店に入った。

まだ本部ビルが立つ前、まだ平屋道場だった頃からある馴染みの店だ。若い頃に、王森葵とこの店に良く飲みに来ていた。七十を越えた女将さんが未だに一人でやりくりしている古い飲み屋だ。

暖簾をくぐると、国分と二人、並んでカウンター席に座った。他にも何人かの客が楽しく飲んでいる。男ばかりで色気がない店だが、母のぬくもりのような空気が代わりに感じられる。出てくる料理には、すべてそのような味が染み込み懐かしさを感じさせていた。ここに脚を運ぶ客のほとんどが、それを望んで来るのだろう。

隣に座る国分も、出された料理に、そのぬくもりをすぐに感じ取ってくれた。老いた女将さんに一言「うまい」と言って子供のような笑みを見せる。女将さんも、その笑みを見て喜んでいる様子だった。

俺は日本酒を飲み、国分はビールを飲んでいた。国分がビンビールを手酌している。まあいいか……。

しばらく黙ったまま女将さんの手料理をつまみに飲んでいると、国分のほうから話しかけてきた。

「あんたにあの晩負けてよ、俺も引退することにしたよ」

そう言うと国分は、グラスのビールを一気に飲み、また手酌で注ぐ。

「あれは空手家仮面だ、俺ではない……」

「はは、そうかい」

国分が小さく笑った。

「まあ、なんだっていいや。俺はあの勝負を最後に引退を決めたんだが、プロレスラーってやつは、これでいてサラリーマンでな。いきなり辞めるって言って、無責任に辞められなくてな」

グラスの日本酒をじっと見ながら俺は、ただ黙ったまま国分の話を聴いていた。

正直、国分の引退なんぞに興味はなかった。俺にはまだ、戦わなくてはいけない勝負が残っていたからだ。

相手は九十九神、その使い手、城嶋悟。国分の後輩、弟子の一人といってもいいはずだ。

「それでよ、今シリーズの最終戦のドーム大会で行われる、プロレスｖｓ異種格闘技七番勝負の前に、前座戦で引退試合をすることになってな。俺へのはなむけらしい」

「あんたも前座か……」

「ああ、あんたと同じだよ」

そう返してきた台詞に、初めて国分のほうを俺は見た。驚きの表情を見せる俺とは違って国分の横顔は、浅く笑っていた。

「知っているのか、俺の試合を、そのあとの試合も……」

「ああ、俺と社長のゴーグ大葉はな、大日プロレスの頃からの同期の桜でよ」

なるほど、九十九神を城嶋っていう若造に譲ったが、かつてゴーグ大葉がリングの外で九十九神どもと、どのような戦いをこなしていたかを、この男は知っているということか。

「じゃあ、俺のことも、人外の存在も知っているのか……」

「ああ、あんたまでが使い手だとは思わなかったが、アレの存在は随分昔からな」

「そうか……」

「そんなことは、どうでもいいさ」

国分は賑やかな口調で言うと、俺の肩をバンバンと叩いた。結構痛いぞ、こんにゃろう！。

「でよ、そのドーム大会での引退試合の相手が、社長の大葉なんだぜ」

「おお、いい話じゃないか」

思わず笑顔が零れた。同期との引退試合。それも組織の長が相手だ。去り行く者に、随分と敬意を表したはなむけだと思った。

「だが、半分はいいわけよ……」

国分の顔が寂しそうに曇る。何故にと俺は首を傾げた。

「七対七の戦い、そのメンバーから社長が抜ける口実なんだよ……」

曇る国分から視線を外して俺は「なるほどな……」と小さな声を返した。

「まあ、いいさ、暗く語ってもしかたねえやな」

「そうだな」

俺と国分は、そう言いあいお互いの顔を見合わせた。そして無理やり笑った。そのまま笑いながらしばらく話し続けた。

ほとんどが昔の武勇伝であった。お互いの若い頃のやんちゃ話に花を咲かせながら二時間ぐらい、その居酒屋で国分と飲み続けていた。

始めて飲む相手なのに、とても楽しかった。まるで昔からの旧友のように感じられた。

武人ってのはいいよな、怨み辛み無しに自分の腕前を信じて戦って、傷付け合う。それが終わったらまた修行の日々だ。

そして、死んでも可笑しくない勝負をした相手ともまた、こうして楽しく酒を飲み合える。

俺が歩んできた道は、そういう道であることを、今確信できた。

<　烏賊屋兆殻・中編　>（前書き）

今回、イカが主人公？

オラにも良く分からん…

でも、オラ、ゴクウ！

<　烏賊屋兆殻・中編　>

国分とは、赤提灯の店を出てすぐに別れた。

そのあと酔いを醒ますように一人で歩き、そしてタクシーを捕まえ家に帰った。

帝都プロレスのドーム大会まであと二週間。

体調は万全だ。アルコールさえ抜ければ、今からでも試合を始めてもいいくらいだ。酒のせいか、それともさっきまでの武勇伝の語り合いのせいか、闘志が湧いてきてウズウズしてしまう。暴れたいが、今は押さえなくては……。

しばらくタクシーに揺られて、熱くなった頭と酔いを醒ましていると、虎野町の外れにある自宅へと着いた。

住み慣れた木造平屋建ての古めかしい住居だ。ここに妻と住み始めて二十年ぐらい経つだろうか。この家には色々思い出がある。妻との間に子供をさずかることはなかったが、妻と二人、ここで寄り添いながら暮らしてきたのだ。

玄関の横にある植木鉢に、綺麗な花が咲いていた。妻が世話をしている植木だ。しかし花の名前は、俺には分からん。だが、世話をしているあいつの心のように綺麗だ、おもわず笑みが零れる。

玄関を開けるとすぐ前が茶の間である。まだ妻が起きているようだ、明かりが灯っていた。

「ただいま……」

「お帰りなさい、あなた」

俺がそう言うと、返事と共に目の前の障子が開く。その隙間から、正座をした妻の軟らかい顔が覗かせた。俺と目が合うと、いつものように、更に軟らかく笑いかけてくる。

「ああ……」

不器用な俺は、妻から目を逸らしてそう言った。式を挙げてから三十年以上、俺はこんな調子だ。しかし妻は、こんな俺に文句も言わずに付いてきてくれている。ありがたい話だ。

茶の間に上がると、丸いテーブルに夕飯のしたくがしてあった。二人分だ。

「なんだお前、まだ食事を取ってなかったのか……」

俺がそう言いながらテーブルの前に座ると、妻も障子を閉めてテーブルの前に戻ってくる。時間はもう十時に近い、いつもならとっくに夕食を済ましている時間だ。

「はい」

妻は、静かにそう言った。

こいつは何時もこうだ。俺を差し置いて、一人で食事を取ることがない。食事だけではない。

俺がどんなに遅く帰ってきても、先に寝ていることはなかった。いつも起きて待っている。そのくせ朝は、俺より早く起きて朝食の準備をしていやがる。

そんな出来た妻が笑いながら言った。

「飲んでこられたのですか？」

「ああ……」

「どうしますか、お食事はやめますか？」

「いいや、食う……」

無愛想に俺が言うと、妻は電気ジャーからごはんをよそぐ。そして、ごはんを少なめに盛った茶碗を俺に差し出した。

「ああ、すまぬ……」

また、気を使われた。先に夕飯を食わず待っていた妻を気遣い俺が一緒に夕飯を取ろうとしていることに気付いているのだ。そして、ごはんを少なめに盛ったのだ。

こうして俺と妻は、いつものように食事を取り始めた。

「なあ……」

「なあに、あなた？」

話し始めた俺に妻は箸を止めて、笑顔で耳を傾ける。こいつは、

聞き上手だ。いつも俺のつまらない話でもきちんと聴いてくれる。

「二週間後に、試合が決まった……」

「そうですか」

「妖怪連合の依頼だ。九十九神と、戦わなくてはならない……」

妻は、笑顔を崩さない。しかし、その笑顔が偽の笑みに変わった。ずっと一緒だったんだ、俺には分かる。

「お前には、また面倒をかけることになる……」

「……」

妻は答えなかった。珍しい反応だ。

「どうした、鈴……」

偽の笑みのまま箸を置く妻の鈴に、俺はうわずった声で質問をした。

「その試合は、拒否できませむか……」

「何を言っているんだ、鈴……？」

妻が、そのようなことを言うのは初めてだった。

空手家として戦うときも、九十九神の使い手として戦うときも、一度だって反対せずに支えてくれた妻が、初めて自分の戦いに反対

の意見を述べた。俺は、初めての経験に少し驚いてしまっていた。

「何故だ……？」

「……」

俺が問うが、妻は俯き答えなかった。そして俺は、しばらく妻の俯く顔を眺めていた。妻の顔には、偽の笑みすら消えていた。

「何故、そんな寂しい顔をする……？」

言ってから俺は気付いた。

「お前、俺に何か隠していることがあるな！」

やはり妻は何も答えない。俯いたままだ。

「お前、ここ最近現れた、九十九神のことを、気付いていながら俺に報告しなかっただろう！」

「はい……」

妻が一言答えた。

「虎野町に春婆怒が現れたことも、外れ鬼のことも、その他の九十九神たちのことも……。何故、俺に知らせなかった……？」

やっと妻が顔を上げて俺の顔を真っ直ぐに見る。

「連合からの依頼がなかったからです」

凛とした表情で妻は言った。一本筋の通った表情だった。妻は、何かひとつの意思を通そうとしている。しかし、それが何なのか分からない。

「鈴、お前は何を言っているのだ。お前は、百計神になりたくはないのか？」

「……」

妻がまた答えなくなった。そうだ、妻の鈴は、九十九神である。

俺は九十九神の使い手でありながら、その九十九神を愛した。そして九十九神である妻も俺を愛してくれた。

常識を超えた恋愛の末、俺たち二人は夫婦になったのだ。

普通の恋よりも、随分と苦難の道を歩んだが、妻は鋼のような精神で、三種百色の本能を堪えてくれた。

俺たちは妖怪連合に入り、公認を受け、悪党どもを殺し、悪魔のような妖怪を喰らい、三種の害になる九十九神と戦い続けた。俺が十四のときからだ。妻とはその頃に出会い使い手となった。そして二十三歳で夫婦になった。

俺と妻は、一生一緒に戦うだけではなく、一生一緒に暮らし、人生を歩むことを誓ったのだ。

「鈴、何で九十九神の出現を教えなかった」

「……」

「俺は、お前を百計神にすると誓った！」

「……」

「そして、褒美を得て、お前を人間にしてやろうと誓った！！」

「……」

自分でも声が大きくなっていくのが分かった。しかし、自分で感情が押さえられない。内から湧き出る色々なものが押さえられないのだ。

「お前と一緒に、人として暮らすために、お前との間に、子供を授かるために、俺は、俺はそのためだけに、お前のためだけに戦ってきたんだぞ！」

気が付けば立ち上がっていた。

そうだ、俺が空手を習い始めたのもそのためだ。

こいつに恋をして、こいつと戦うためには、十四の俺は弱すぎた。だから空手を始めた。こいつを百計神にするために、こいつを死なせないためだけに空手を始めたのだ。

「もう、諦めてくださいまし……」

妻が言った。頭の悪い俺には、妻の言う意味がぜんぜん分からなかった。

「もう、わたしを百計神にするのは、お諦めください……」

妻が俯いた。

「もう無理なのです……」

「なにがだ!?」

また大きな声を出してしまった。分かっているのだが、俺の悪い癖だ。これは、一度死なないと治らないだろうな。

そして妻が答える。

「貴方のお体がです……」

「!?」

俺の体?。

妻の言葉は、予想外だった。

意味が分からなかった。半分筋肉に変貌した俺の脳では、理解が出来なかったのだ。

その混乱が、俺の感情を冷ましてくれた。

俺は座ると妻に訊いた。

「理由を訊かせてくれ、きちんと、バカな俺にも分かるように……」

いつも気が利く妻のことだ、何か俺を庇っているのだ。良く考えればわかることじゃあねえか……。

いつもだ、いつもこいつは俺のことだけを気遣ってくれているじゃあねえか。こいつが俺に何か隠すってことは、俺のことを思ってに決まっているじゃあねえか。

さっきまで大声を上げていた自分が恥ずかしくなってきたぜ……。心の中で早くも「すまん」と妻に謝っていた。

「もう、貴方の体は、妖力共有には耐えられないのです……」

「年のせいか？」

「いいえ」

「じゃあなんでだ？」

「長年に渡って、妖力共有を繰り返した結果です」

「……そうなのか、理由を説明してくれ」

「臍の下のチャクラが、三十年以上妖力共有を繰り返すことで少しずつ痛み、もう限界に近づいています」

「限界に近いだけだろ……？」

「あと四、五回ほど妖力共有したのならば、完全にチャクラが崩壊するでしょう。下手をしたのならば、次の妖力共有で……」

「そうなのか、それで九十九神が現れても我慢していたのだな、お前は……」

九十九神に取って、他の九十九神の存在をしりながら戦わずに我慢するのは、断食に近い。そういえば、妻とは一年近く妖力共有をしていなかったはず。こいつはその間ずっと我慢していたのか……。

「もしもだ、俺のチャクラが壊れたのならどうなる？」

「おそらく、気の流れが崩れて、病の床に付くでしょう……。少しずつ体が弱り、眩暈に苦しみ、下を垂れ流すようになり、他人も自分も分からなくなり、やがて生きたまま皮膚が腐り始め、全身の苦痛にもがきながら死んでいきます」

「それは流石にごめんだな……」

妻の話を聴いて、ぞっとした。

「そうか、もう俺の手では、お前を百計神にはしてやれないのか……」

「……」

「よし、次の試合が終わったら、お前の新しい使い手を捜しにいこう」

「あなた！？」

珍しく妻が大きな声を上げた。いつも落ち着いた和やかな妻の表

情が怒っていた。

「何を言っているんですか、次の試合って。もしかして、妖力共有して、九十九神と戦う気なのですか！」

「ああ、当たりまえじゃあねえか」

「わたしの話をお聴きにならなかったのですか。もうあなたのチャクラは限界なのですよ！」

「だからどうした」

凄い剣幕を見せる妻に俺は、さぞ当然のようにサラリと答えた。

「あなたは、お死にになるつもりですか！？」

「ああ、俺は、例えこの体が腐り落ちても、お前を百計神にしてやる」

昔、そう誓ったんだよ。

「あなた！」

「すまん……」

「分かってくれ……」

「分かりません……」

「そうか……」

「わたしには、わたしにはあなただけなのです……」

「おれにもだ、おれにもおまえだけだ……」

妻が黙り込む。俺もだ。とても俺から沈黙を破るような言葉は思い浮かばなかった。静かに嫌な空気が流れる。

その暗い空気の中、呟くような小さな声で妻が言った。

「じゃあ、この戦いを最後にしましょう……」

「一緒に戦ってくれるか……？」

「はい……。そのあと、あなたがどうなっても一緒に、ずっと一緒に居ます。わたしには、別の使い手もいりません。わたしの使い手は、あなただけなのだから……」

「ありがとう、いつもすまない」

「いいえ、夫婦ですから」

「すまん……」

「さあ、ごはんが冷めますは」

「そうだな、飯を済まそうか」

妻の顔が、いつもの優しく軟らかい笑顔に戻った。

やはり、俺みたいなやつには、出来すぎた嫁だ。もったいないな……。

<烏賊屋兆殻・後編　>

日時は、瞬く間に過ぎていき、帝都プロレスの今シーズン最終日、東京ドーム異種格闘技大会の当日がやってきた。

日本各地だけであらず、世界各国から集められた七名の格闘技家と帝都プロレスのレスラー七名との七番勝負。このビッグイベント、プロレスや格闘技ファンだけならずとも話題を誘い、世間の注目を浴びていた。スポーツ雑誌だけではなく、昼間のワイドショーなどでも取り上げられている。

今、俺は、他流格闘技家サイドの控え室のひとつに居た。

広いコンクリートの部屋だ。他の選手や帝都プロレスのスタッフが世話しなく出入りを繰り返している。

記者や応援の知名人なども見られた。選手の家族なのか、ただのファンなのか、子供の姿もちらほら見られた。

俺は、光臨館の関係者スタッフとしてここに居た。置いてあった折りたたみ椅子に、誰よりもふてぶてしく両手を組んで座っている。まあ、態度がでかいのは、俺の癖みたいなものだ。

目の前には、後輩の荒井が準備運動を行っていた。

「まさか、緊張なんぞしていまいわな」

「ええ、もちろん」

左右に開脚をして丹念に柔軟を続ける荒井が、俺の声にそう答えた。なんとなく言ってみたが、余計なお世話のようだった。

荒井の表情は、いつものように冷酷なまでに冷めていた。

準備運動をしたせいもあってか多少の汗をかいているが、それでもクールな表情が蛇の様に見える。

こいつは顔が良いが、女には持てない。刃物のようなイメージが強すぎて、危険な男と呼ぶには狂気過ぎるらしい。最初は、それでもいいと言う女が寄ってきて付き合い始めるが、一ヶ月もせずに別れてしまう。

危険な男とかいうよりも、私生活に問題があるのでは、と、皆が言うが、本人は認めない。俺もそうじゃないのかと思っていた。

今日の試合、荒井は第二試合目だ。相手は帝都プロレスの若手レスラー。

荒井の実力を考えれば、ほとんど噛ませ犬に等しい相手だ。ジャンボジェット機が墜落する確立程度にしか間違いは起きないだろうと思う。

この大部屋には、荒井の他に、あと二名の選手が居た。

一人は第一試合で戦うムエタイの選手だった。

肌は黒に近い小麦色に焼けており、一目で日本人ではないのが分かるアジア系の男だった。

名前は良く知らん。難しくて舌を噛みそうになる名前だということだけは覚えている。

年の頃は二十歳後半だろうか、いかにもムエタイファイターといった風貌で胡坐をかき、その肩や腕を十歳にもならない二人の子供がマッサージをしていた。

男の子と女の子だった。ムエタイ選手の子供たちなのか肌の色が同じ小麦色をしている。しかも双子のように同じ顔をしていた。ムエタイ選手とも良く似ている。間違いない、親子だな、あれは。

ムエタイグループの他に、もうひとグループ居た。

浅黒い道着に袴姿で正座をする男だった。若干額が交代しているが、体付きはレスラーにも負けないぐらい筋肉質だ。

その男の前に、向かい合うように小さな子供が正座をしており、二人で両目を瞑っていた。

精神統一なのか、それを椅子に腰掛けながら若い娘がひとり見守っている。

俺は、この男を知っていた。確か名前は、不波流古武術の竜崎竜蔵。年は三十歳ぐらいだったか。武術の腕はかなりと聞き及ぶ。

うちの二代目と交流があるらしく、たまに本部道場に顔を出すことがあるらしい。そして、二、三度合同稽古をしたと聞いていた。

俺は組み手どころか、一緒に稽古すらしたことがないが、門下の者からその実力の程を聞いていた。その実力は、二代目にも引けを

取らないらしい。

この部屋に居る選手は、この三名だけだ。他の選手は別部屋に居るらしい。

控え室の外から、そろそろ観客の歓声が聞こえ始めた。どうやら第一試合に予定されていた国分の引退試合が始まったようだ。

俺は、椅子の上に投げてあった誰のかも分からないパンフレットを手に取る。そして、本日のカードが紹介されているページを眺めた。

国分の引退試合は、タッグマッチだった。国分と中堅レスラーが組み、対戦相手は、社長のゴーグ大葉と若手有望株のレスラーだった。

ぱっとマッチメイクを見て試合の流れが分かった。

最初は普通に試合を行い、十五分か二十分を知らせるマイク放送が入ると、両軍入り乱れての激しい試合へと変わり、その流れで国分のパートナーの中堅レスラーが、ゴーグ大葉をつれて場外乱闘に持ち込んだら、そのままゴーグ大葉を場外に釘付けにして引き離すと、リング内に残った国分が若手レスラーからピンホールを取る。まあ、こんな流れだろう。

引退する国分に、実の娘たちから花束が渡される。感動的セレモニーだ。

そして、四人の名前がリングアナウンサーから紹介され終わると、歓声が飛び交う中、国分の最後の試合が始まった。

ゴングの音に続いて、どっと歓声が沸いた。その歓声が、控え室にいる俺たちのところまで容易く届いてくる。こんな歓声を聞かされたら、プロレスファンじゃなくても興奮してしまうわな。

控え室の隅にあるモニターで、俺も他の連中に混ざって試合の流れを見守った。

あまりプロレスの試合には興味なんぞないのだが、一度は一緒に酒を飲んだ仲だ、最後の試合ぐらいは見てやろうと思った。まあ、情けだな。

五分、十分、十五分、そして二十分を知らせるマイク放送が入ると、俺が予想した流れが始まり、予想どおりの結末で終わった。国分が若手からスリーカウントを取ったのだ。

空手家の俺が予想できる程度の脚本だったが、観客たちは、試合を見て大きな喝采を上げていた。ファンのほとんどが、この流れを予想できていたはずだ。

プロレスという格闘技には、台本がある。分かりやすく言えば『やらせ』だ。

だからといってプロレスという格闘技が弱いわけではない。

良く聞く話で、こんな話がある。

プロレスなんかやらせじゃないか、あんなのサーカスと一緒だ。と、言う人が居る。

ならば、そう思う人にはレスラーと戦ってもらいたい。それか、サーカスに行って空中ブランコでもやってもらいたい。どちらも素人が言うほど簡単には出来ないはずだ。

どちらもプロとしての鍛錬があっての超人技なのだ。一般人には、簡単にマネができないだろう。

このように言うと、その人物は決まってこう返してくる。でも、プロレスラーは、他の格闘技家に勝てないじゃないか。プロレスなんて格闘技ごっこだろ？　と。それも大きな勘違いだ。

プロレスとは他の格闘技と違った戦い方をしなくてはいけない競技だ。

戦いながら各々の強靭差を披露しなくてはいけないという競技の為、いわば確かにサーカスに近い。

しかしそれは、暗黙のルールが故。他の格闘技にもルールがあるように、競技としてのルールを律儀に守っているだけなのだ。

ボクシングならば肘打ち、キック、金的、噛み付きが禁止ルールのように、プロレスにも守らなくてはいけない暗黙のルールが存在する。

殴られてもよけない、ロープに降られたら帰ってくる、コーナーポストから人が振ってきても逃げない、複雑な関節技を掛けられるのを待たなくてはいけない。

どれもこれも、回避しょうとすれば幾らでも回避できるのに受けなければならない。しかも、それを受けるほうも繰り出すほうも、

お客に受けなくてはいけない。

まさにピエロだ。そういわれても可笑しくない。

だが、それ故に、トップレスラー、スターレスラーなどのメインを張っているレスラーたちが、レスラーとして決して最強とは限らなくなってくる。

派手で、人気があり、稼げるレスラーがメインを張っているが、そのレスラーが格闘技で強いとは言えなく、そして見えなくなる。

だが、真実は、そこに見えないだけだ。

サッカーと野球が戦うことが出来ないのは、競技のルールが違うからだ。

プロレスが他の格闘技と戦うと弱いと言われるのは、レスラーがプロレスの競技ルールで戦うからなのだ。

片や殺す気の攻撃を仕掛けてくる格闘技家の技を、プロレスのルールで受けてしまえば、避けたらいけないのだ、それでは勝てるわけがない。正直、プロレスのルールで勝てなんて俺にも無理だ。

レスラーの中には、プロレスに漬かりすぎて、そのことを忘れているものすら居る。

そして、他の格闘技とプロレスとの大きな違いがある。

空手、柔道、アマレス、ボクシング、キック、相撲などからレスラーに転向する者は多いが、プロレスからそれらの格闘技に転向し

ていく事はない。即ち、そのジャンルで好成績を残した者たちがプロレスラーになり最強へと上り詰めていくのだ。

その者たちは、そのジャンルでいきず待ったからプロレスに転向したのでは？　と、思う人も多いだろうが、それはビックネームの場合だけだ。

それらのジャンルから人知れず転向して、それらのジャンルを生かしたままプロレスをやる。そして強くなっていったが、レスラーとしては人気がでずに、強さがあってもトップに立てないでいるレスラーがたくさんいる。

そういったレスラーが総合格闘技の試合に出てくると、驚くほど強かったりするのだ。事実、大きなプロレス団体から独立して、総合格闘技の団体を作ったレスラーたちが、きちんと実績をあげていたりもする。

くすぶっているレスラーの中には、そういった感じで怖い者たちが眠るように埋もれていたりする。国分も俺の目から見て、そのような時代に埋もれていたレスラーに近いと思う。

そして、プロレスが他の格闘技と違うのは、他の格闘技家がプロレスに転向することはあっても、プロレスから他の格闘技に転向するものは少ないのだ。

プロレスから空手家へ、プロレスから柔道家へといった感じは少ないだろう。たとえレスラーでありながら他の格闘技を習っても、ほとんどがリングに戻ってくるのが自然だ。

プロレスから総合格闘技に転向するじゃないか？　と、思う人も

居るが、それは間違いだ。プロレスが総合格闘技なのだ。プロレスとは、他流の格闘技の良い技をすべて吸収しようとして、貪欲に成長していく総合格闘技なのだ。

だからこそ俺ら空手家は、自分の流派に誇りを持ち、最強を維持しなくてはならない。

気付けば、異種格闘技第一試合のムエタイ選手の姿が控え室の中から消えていた。試合会場へと向かっているのだろう。

だが、彼も可愛そうだ、この異種格闘技に勝利しても賞金が出ない。この試合に勝つということは、自分が磨いてきた格闘術の強さを、自分の強さを証明するだけにしかならない。ファイトマネーしか貰えないのだ。

だとするならば、おそらくあのムエタイファイターが勝利することはないだろう。負けることを条件に、しこたま金を掴まされているはずだ。

ムエタイの選手が日本で試合をする場合には良くある話だ。ムエタイよりもジャパンマネーは有る意味強いだろう。

そして、十分もしないうちに俺の予想は当たった。ジャパンマネーのパワーがリング上でもムエタイを上回ったのだ。うまくやったつもりでも、俺の目は誤魔化せねえ。あの負けたムエタイ戦士のほうが、対戦相手のレスラーより三倍は強いはずだ。

この辺は、まあプロレスだわな。勘違いされることを自分からやっているのだ、サーカスと言われても仕方あるまい。

続いて荒井の試合が始まる。セコンドはうちの若い連中に任せて俺は、控え室でことの流れを見ることにした。

対戦相手の若いレスラーをモニターの画面上で見て、ゴーグ大葉にしてやられたと思った。

何が若手レスラーだ。出てきたレスラーは確かに若手だったが、空手をやっているのがすぐに分かった。しかもかなりだ。モニターごしにも分かるぐらいにだ。

荒井のほうも気付いている様子だった。蛇のような面が更に冷徹なものに変わっていく。

試合が始まると、それは確信へと変わる。しかもかなりできる。動きがレスラーじゃない。

開幕一分で終わると思っていた試合が、もう十分は続いていた。あの荒井がてこずっている。

まさにこの若手レスラーが、プロレスに埋もれた強いレスラーってやつだ。あと十年もプロレスに励めば、相当のレスラーになるのではと、思えた。売れるレスラーに育つかは、俺には分からんがな……。

そして、しばらくたつと苦労の末、若手レスラーを荒井がやっとのことでしとめた。念には念を入れて荒井を出したのが正解だった。他の光臨館の者では危うく遅れを取っていたかもしれない相手であった。

そして、残りの五試合も、激しい内容で繰り広げられていった。

古武道、ボクサー、柔道、忍術、コマンドサンボ。それら選手とプロレスラーとの激しい試合。

結局、三勝三敗一引き分け。プロレスｖｓ異種格闘技戦は、イーブンのドローという形で終わった。妥当な結末といえるだろうか。

試合の内容は、空手家の俺から見ても面白いものだった。観客たちも、これならば満足していることだろう。

試合がすべて終わり、観客たちがドーム会場から少しずつ消えていく。巨大な建物から人の波となってはけて行く。

試合会場となったドーム内でも、リングサイドの椅子などがイベント会社のスタッフたちによって次々と片付けられていった。しかし、リングだけは、だれも手を付けずにそのままの姿を残していた。

三時間もすると、ドーム内には人気がなくなっていた。

俺は、無人となった球場のセカンド側の壁に背を付けながら寄り掛かり、じっと四角いリングを眺めていた。

そのリングから、目に見えない何かが湧き上がっているように見えた。今日を行われた戦いの、闘志のなごりだろうか。

俺の横に、静かな足取りで妻の鈴が歩いてきた。一度妻の顔を見ると、鈴は優しく笑いかけてくる。そして横に並んで立つ。そこが自分の居場所であるかのように。

しばらく経つと空き席に、次々と人影が現れ始めた。いいや、人

ではない。

この世のものとは思えない、奇怪な姿をした者たち。それらは、どんどんと数を増やし空き席を埋めていく。

魑魅魍魎たちだ。

ドーム内は、あっというまに百鬼夜行の絵巻のような常態へと変わった。まるで地獄の光景だ。

「あいつ……」

辺りを見回していた俺が、球場の中央にあるリングに視線を戻すと、そこには二人の男が立っていた。

一人は、城嶋悟。もう一人は、チャンピオンベルトの九十九神、ブラット・ニクソン。俺の対戦相手たちだ。

「鈴、準備はいいか」

「はい、あなた」

敵ふたりを睨む俺が言うと、妻の鈴は優しい口調で言葉を返した。本当にこれから戦うかと思えるほどに和やかな声だった。

俺が歩き出すと、三歩後ろを妻が続く。

これが、俺たち夫婦の最後の戦いだ。

<　烏賊屋兆殻・後編　>（後書き）

さて、次から当分アクションだべさ。

<　九十九神ｖｓ九十九神・壱　>

深夜の東京ドーム球場。

天井のドームは閉じられ照明が内部を煌々と照らしていた。

そのドーム内、すべての観客席を、がやがやとざわめきながら奇怪な姿をした無数の妖怪変化たちが埋め尽くしていた。

目がひとつの者、頭が二つの者、顔がない者、体がでかい者、腕が多い者、蛇の体をくねらす者、動物の頭の者、背中に羽が有る者、尻尾が多い者、燃える者、光る者、飛び回る者、様々なりをした妖怪変化たち。ほとんどの者が、ひと目で怪物だと見て分かる。

しかし中には、人と変わらない姿をした妖怪も居る。否、人間よりも美しい容姿をした者も少なくはなかった。

ファースト側最前列に横一列に並ぶ妖怪連合の十二長老たちの中に混ざる四番長老の雪女も、それらの美しい妖怪の部類に入るだろう。

奇々怪々な者たちに混ざり球場の中央に残されたプロレスのリングを見詰める雪女は、いつものように純白の着物に純白の帯を締め、肩に黒いミンクのコートを羽織っている。その黒ミンクのコートの上に、悩ましいまでの長い純白の髪が乗っていた。

「ねえ、まだ始まらないのですか？」

氷のように透き通った声で雪女は、そう言いながら細い脚を組み

白い着物の裾を僅かに葉だけさせて左隣の席に座っていると思われる十番長老に尋ねた。

「二人ともリングに上がりましたね、もうじき始まりますよ」

空席の様に見える席から男の声で雪女に言葉が返る。

雪女は、脚をセクシーに組んだまま袖の中から細身の煙草ヴォーグを取り出し、細く綺麗な人差し指と中指で摘み火を付けた。

「雪女でも煙草を吸うんだね」

右隣に座っていた小学生の姿をした前鬼が、煙草を吹かす雪女を見て不思議そうな顔をして言った。

「まあね、いらいらした時には少し吸うのよ」

「へぇ～」

今日は珍しく十二長老すべてが揃っていた。さすがに九番長老うみぼうずだけは居ず、あいかわらず半漁人が大きなテレビカメラを背負いながら代わりに長老たちに混ざっていた。おそらく別の広い場所で、うみぼうずはモニターを眺めているのだろう。

妖怪変化に埋め尽くされたドーム球場内におぞましいまでの声ががやがやと増え始めた。ぞうやら戦いが始まるのが待ちどうしいらしい。色々な方言で試合開始が始まるのを急かしていた。

球場のほぼ中央にあるリング上で、睨み合う者たちの姿があった。赤コーナーに立つのは、城嶋悟と九十九神ブラット・ニクソン。対

するは、烏賊屋兆殻、その妻であり九十九神の鈴。

三人の男が睨み合う中、烏賊屋の妻は、夫に寄り添うように静かに立っていた。

開始の合図は存在しない。向かい合ったら、妖力共有をしたら、好きに戦っていいと互いに聞かされていた。

ルールも、勝利条件も自由。生かすも殺すも自由。すべて戦う者同士で決めればいいとのことだ。

だが、今日この時まで烏賊屋と城嶋が互いに会うことはなかった。相談やら話し合いなんて何ひとつしていない。

互いに格闘技家の端くれ、しかもセメントよりの戦士なのだ。始まってしまえば、殴り合ってみれば、組み合ってみれば、互いにどんな決着が、この戦いにふさわしいかが分かるはず。少なくとも烏賊屋はそう思っていた。

四角いリングないで、周りの妖怪たちに扇情される四人が緊張勘を高めていると、青コーナーに立つ烏賊屋のもとに、一人の男が歩み寄っていく。そしてリング下からフレンドリーな明るい口調で声を掛けてきた。

「よう、烏賊屋さん」

名前を呼ばれて烏賊屋がリング下に目をやると、声を掛けてきた人物を見て僅かに驚く。

「お前……」

その人物は、堂本流超人空手次期伝承者、堂本タケシの姿であった。

「まさか、烏賊屋さんがここに現れるとは、正直驚きですよ」

「それは、こっちの台詞だ。何でキミがここに？」

「俺が、春婆怒の使い手です」

さぞ当然のようにタケシは、真っ直ぐ烏賊屋の顔を見ながら言った。その言葉に烏賊屋が再び驚きの顔を見せた。だが、その表情もすぐに消える。

「そうだったのか」

「はい」

烏賊屋は、父親のような男らしい表情で浅く笑っていた。

「じゃあ、キミが八尾弦徳と……」

「はい」

淡々とした会話だった。

「今日は頑張ってください。俺の戦いの前に、空手家の貴方が勝利して、俺に景気を付けてください。お願いします」

そう言いタケシが子供のような満面の笑みを見せてVサインを片

手で作る。

タケシと烏賊屋の付き合いは、五年前からだ。

若いタケシが町でチンピラ数人相手に喧嘩をしていると、そこに通りかかった烏賊屋がタケシの助っ人に入ってきたのだ。その段階では、タケシと烏賊屋とは面識がまだなかった。

別にタケシひとりでも裁ける喧嘩だったが、烏賊屋は多勢に無勢と言って喧嘩に加わったのだ。

その時のタケシは、今以上に血気盛んな年頃だったがため、自分を助けに入った人物が空手の使い手で強者と知ると、思わずその場で牙をむいてしまったのである。

より強い相手と戦いたいという狂犬病のような心が猛り、押さえられず、タケシは烏賊屋に襲い掛かったのであった。

しかし、当時十六歳のタケシと四十半ばの空手師範代の実力は、常識どおりの実力差で現れたのである。

子供と大人の差であった。

それは、虎野町にタケシが越してきて、桜木銀以外には初めての敗北だった。

烏賊屋兆殻との初めての出会いは、タケシが虎野町で味わった貴重な敗北の味で始まったのだ。それ以来、烏賊屋を一目置くタケシは、空手家の先人として尊敬の念を持って付き合っていた。

「ああ、まかしとおけ！」

タケシの笑みに烏賊屋も笑顔で答えた。年齢は三十近く離れているが、まるで同い年の友達のように笑顔を交わす。

老いた笑みが対戦相手のほうに戻るとタケシは、リングに背を向け歩き出す。その背後で二つの合言葉がほぼ同時に放たれたのがはっきりと聴こえた。

「妖力共有・革命！」

「妖力共有・盛夏！」

リングの上で眩く光る四人が変身し始めると、四万五千の客席をびっしりと埋め尽くした魑魅魍魎たちが、待ちかねたかのように歓声を上げた。

その奇怪な歓声に混ざって、真夏の風に煽られて涼しい音を奏でるような風鈴の音色が、リングに背を向けて歩いていたタケシの耳に、僅かながら届いていた。

<　九十九神ｖｓ九十九神・弐　>

二体の九十九神がリング上で妖力共有を行うと、観客席の化け物たちが、どっと歓声を上げて盛り上がる。まるで祭りの席で、酒を飲みながら騒いでいる民衆のように賑やかだった。

チャンピオンベルトの九十九神と妖力共有した城嶋の姿は、頭が凛々しい雄ライオンで、その首の両脇にある異常なまでに膨れ上がった僧帽筋を長く立派なタテガミで隠していた。そして腰には黄金の獅子が模られた太い革のチャンピオンベルトを巻いており、黒いパンツに黒いリングシューズをベテランレスラーの如く履いている。

体全身は、身長と体格ともに使い手の城嶋と同じサイズだが、その筋肉の上には、厚い毛皮のようなライオンの毛並みで覆われていた。ぱっと見た目、ライオンの着グルミを頭から被ったコスチュームのプロレスラーといった感じである。

片や烏賊屋の変身した姿はこうだった。

身長も体型も変身前と変わっていない、相変わらず歳を感じさせないマッチョなものであった。しかし、体の色が青銅のような無骨な色に変わっており肌触りもかなり粗そうな感じである。まるで中国の遺跡に埋もれていた青銅の置物が蘇って来たような姿であった。

「あれが、烏賊屋さんの変身した姿か……、なんとも空手家らしいな」

球場の隅でリングを見ていたタケシが、烏賊屋の妖力共有した姿をみて呟いた。

タケシの言う「空手家らしい姿」とは、青銅のような体の上に古びた白い道着を着ているからだ。その道着には黒い帯を締めている。それ以外は何も身に付けていない。裸足だ。

「ゴングも何もないらしいスから、おっぱじめますか」

そう言い一歩踏み出すライオン姿の城嶋を、烏賊屋が片手を前に出して「ちょっと待て」と言って止めた。

ライオンの頭を僅かに傾げながら城嶋は、「何で？」と、言いたそうな表情で烏賊屋の制止を受け入れ動きを止めた。

すると烏賊屋は、自分が背にしていたコーナーポストの下に置いてあった何かを拾い上げると、その何かをおもむろに頭に被った。

それは、金と銀に煌くメキシカンな覆面だった。

「さあ、この空手家仮面が相手だ、掛かってきなさい！」

そう言って覆面を被った烏賊屋が、ブルース・リーの様に片手でコイコイと挑発を見せる。

「なんだあれ……？」

「さぁ……？」

ライオンの頭部から聞こえた城嶋とニクソンの声が、呆れたような会話を僅かにしていた。

ドームいっぱいを埋め尽くした妖怪たちも、先程までの盛り上がりを失い、同じような台詞をあちらこちらで呟いている。明らかに歓声がどよめきにかわっていた。

「おい、一気に会場のテンションが下がったな……」

「そ、そうだな……」

妖怪たちに混ざって客席から今宵の試合を見ていた帝都プロレスの社長のゴーグ大葉がそう言うと、隣に座っていた国分も烏賊屋の覆面を見て苦笑いを見せながら社長に相槌を打った。

仮面を被った烏賊屋に、弱腰の困った表情で城嶋が言う。

「まあ、ほら、あれだ、あんた、国分さんや七瀬を倒したときもその仮面を被っていたらしいから、そのキャラで押しきろってことっスよね……？」

「そのとおり！」

ぶっとい両腕をぶ厚い胸の前で偉そうに組み烏賊屋こと空手家仮面は、むやみに力強くそう答えた。

「てか、何で対戦相手の俺が、あんたのキャラを取り繕わなくちゃあならないんスか……」

「気にするな！」

「気になるは！」

ツッコミの台詞のあとに、九十九神を纏った使い手が睨み合い真剣な表情を互いの仮面の下で作っていた。やっと戦いが始まるようだ。周りの観客もそれに気づき徐々に緊張を期待に変えて興奮を高めていく。

二人は構えすら取っていない。大きな体をリングの対角線上で迎え合わせ凛と睨み合っている。

二つの巨体が僅かに前へと倒れ、重心を微妙に移動させた。それが、戦いをスタートさせる合図の代わりだった。

「行くぞ！」

「おう！」

その掛け声と同時に二人がマットを蹴り、猛ダッシュした。

双方弾丸の様に飛び出した二人を見て、観客の妖怪たちが一斉にどっと沸く。

その歓声を全身に浴びながら二人の初弾が、四角いジャングルの中央で同時に放たれた。

それは、何も考えていない真っ直ぐなパンチだった。ただ、熱いものを込めて、滾るものを乗せた、魂の塊のような雄どもの拳だった。

その互いの拳が、ノーガードの顔面を真っ直ぐに捉え、抉りながら勢い良く吹き飛ばす。

金と銀の覆面の下にある青銅の仮面が、拳をモロに喰らい鐘の音を響かせながら吹き飛び、同じように獅子の顔面を捉えた拳がタテガミを靡かせながら吹き飛ばす。

二人の百九十ある巨体が、互いの全力の一撃に、先程まで控えていた赤と青のコーナーホストまで飛んで行くと、激しく背中を激突させて止まった。

それを見ていた妖怪たちが一斉に大きな歓声を上げて、ドーム球場内を激しく揺らした。その歓声の大きさは、おそらく結界を張って人間界とは時空ごと遮断しているはずの外まで届きそうな勢いだった。

たった二つの拳が見せた一撃が、それほどまでに空気を盛り上げ熱し上げたのである。

「いいパンチだな」

タケシがニンマリと笑顔でうらやましそうに笑って呟いていた。

タケシもまた、ああいった正面から殴り合う西部劇の荒くれどものようなスタイルも嫌いではない。むしろ好きである。

赤と青のコーナーに背中をぶつけた二人が、その反動を利用して更に前に出る。今度は双方握った拳をかざして構えを作っていた。

しかし、格闘技を知る者には、二人の構えが攻撃を重視して、防御を捨てた構えであることが、一目ではっきりと分かった。また、正面から激突する積りなのだろう。見ているものが、それを知り期待を高める。

二人はリング中央で左足を使いブレーキを掛けると同時に、勢いを体の捻りに加えて左フックへと乗せ、思いっきり繰り出す。

その情熱的な拳で、互いの横腹に強烈な左フックを叩き込み合う。そして二人の体がブローの重みを受けて、くの字に曲がりよろめいた。

だが二人は止まらない。くの字になった体制からも無理やり筋肉を動かし右フックを力任せに振るう。

二つの拳が目の前の獅子と覆面の頭をぶん殴ると、リングの上から生っぽい音と、金物を叩いたような音が二つ響いた。その音が、ドームの二階席まではっきりと届く。

頭部に受けた一撃によろめく中、獅子の手が空手着の襟を掴もうと素早く伸びる。

だが、その手を烏賊屋が掌打で払う。しかし更に獅子の逆手が伸びてきた。その手も烏賊屋は腕刀を上から落としてなぎ払う。

決して掴ませない烏賊屋に、今度は全身で掴みかかろうと城嶋が、雄ライオンのタテガミを靡かせながら両手で津波のように襲い掛かった。まさに飛び掛る猛獣だ。

だが、烏賊屋は飛び掛る獅子に対して冷静な対応を見せた。

まずは、抱きつかせることを許さない為の掌打で顎を勝ち上げ、続いて股間への突き上げるような急所蹴りを容赦なく打ち込む。そして顎に喰らった掌打によって上を向いている首の隙を突いて、親

指と人差し指の間を使った喉輪打ちを叩き込む。

城嶋は、ライオンの大きな口を開きながら涎を吐き散らし、敵の眼前で喉と股間を押さえて声にならない悲鳴を口の奥から漏らしていた。その内股のライオンの姿は、真夏の浜辺でビキニを着た女性が、同時に上と下の水着の紐が解けてしまい、ピンチに慌てるようなセクシーなポーズだった。

内股で苦痛に震えるライオンの瞳を見ながらルチャリブレの仮面を被った九十九神が、上半身を捻り、右の剛腕を大きく振りかぶる。

目の前で攻撃モーションを大きく取る敵を見て、内股で股間を押さえるライオン男が、横へ逃げようと体を動かした。しかし、振り上げた右とは逆の左手が、ライオンの右頬をそっと押さえて行く手を阻む。

逃げられない。

城嶋がそう思った直後、斜め上から振り下ろされたごっつい拳が、ライオンの視線の前をスビーディーに一瞬で過ぎていく。

外した？　まさか？

自分の頭を固定しながら放たれた拳が、目の前を通り過ぎた刹那、城嶋がそう思うと同時に視界が激しく揺れた。

肘だ。

肘鉄のフックを顔面に喰らったのだ。ライオンの長い上顎に衝撃が痛みとなって頭蓋骨全体を歪めながら響き渡ると、長いタテガミ

が、ざわっと痛みに逆立つ。

獅子の体が眩暈と共に酔っ払いの様に千鳥足でよろめき回転すると、その背中に強烈な衝撃が打ち込まれた。烏賊屋の砲撃を思わせる前蹴りだ。

再び城嶋の巨体が赤コーナーのポストに打ち付けられる。今度は背中からではなく胸からだ。

城嶋がすぐに振り返ると、そこに烏賊屋の拳が飛んできた。顔面を目掛けてだ。

しかし城嶋は、身を屈めて、その拳をすれすれのところで回避に成功した。

空手家仮面の剛拳は、獅子のタテガミを揺らしながら頭上を越え、白いコーナーポストの上も過ぎて飛んでいく。そして、城嶋は頭から腹部へと抱きつくようにブラックベルトのラインに沿って両腕を回し組み付いた。

敵の背中でガッチリとクラッチを組むと、自分の背中に重い肘鉄が何度か落ちてくる。しかし、そんな打撃は関係なかった。城嶋は、烏賊屋の巨体を持ち上げ肩に乗せると、数歩前に進み後方へ倒れこむように背負った男を放り投げた。

水車落としだ。

背中から落ちた烏賊屋が、僅かに口の奥から苦痛の声を漏らしたが直ぐに立ち上がる。だが、城島のほうが烏賊屋よりも早く立ち上がっていた。

起き上がった烏賊屋の覆面を目掛けて飛んで行く城島のジャイアントキック。烏賊屋の眼前に二十八センチのリングシューズの裏が飛んでくる。

そのジャイアントキックに対して烏賊屋が咄嗟に出来た行動は、両手を交差させて顔の前にガードを築くことだけだった。

しかし、城島のジャイアントキックは、そのガードごと烏賊屋を吹き飛ばし、先程まで自分が背にしていた赤コーナーへと追い詰めるが如く突き飛ばす。

コーナーポストに背をぶつけた烏賊屋を見て、ライオンの顔が起用に笑いながら左拳を振り被る。その予備動作に烏賊屋が左に逃げた。

だが、そのライオンの攻撃モーションに、実話いうと烏賊屋が釣られたのである。振り上げた拳はフェイクだ。逃げた左側から鋭いハイキックが、してやったりといわんばかりに飛んできたのだ。

空手家の烏賊屋すら驚くほどの見事な蹴りだった。リング外から見ていたタケシも「おおー！」と声を上げていた。

烏賊屋の頭の先をキックが掠めたが、身を屈めて蹴りを危ういところで凌いだ。そして前転しながら距離を離すと、リングの中央へと退避する。

今のタイミングであの蹴りを頭部へまともに喰らっていたら、下手をすれば一発でノックダウンされたかもしれない。烏賊屋は背中に冷たい汗を僅かに流した。

転がった烏賊屋が素早く立ち上がると二人が向かい合う。一瞬早く、城嶋が前に出ようとしたが、その行動を城嶋は何故か中断した。今、飛び込めばカウンターの餌食になると感じたからだ。否、感じたではなく、立ち上がった直後の烏賊屋の構えがカウンターを明らかに狙っていたのだ。

立ち上がる動作で隙が出来ているように見せかけ、攻めてきたところにカウンターの突きか蹴りを狙っている様子だった。これもまたフェイクの一種だ。

<　九十九神ｖｓ九十九神・参　>

「へぇ～」

遠目に観戦していたタケシが、感心しているような声をひとりで呟く。

「アイツ、分かったんだ、今のカウンター狙い。それにいい蹴りを放ちやがった。相当蹴りなれているな」

タケシが獅子男の分析をしていた。

「だが、あの蹴りは空手じゃあないな……、ムエタイでもない、となるとキックか」

正解である。

若手時代に城嶋は、帝都プロレスからアメリカのとある団体のリングに、プロレス留学という形で二年程上がっていた。海外のプロレス団体と交流の深い日本のプロレス団体の中では良くあることだ。

そこで城嶋は、キックボクサーから転向してきたアメリカ人のレスラーと仲良くなり、その男からキックボクシングの打撃技を熱心に習ったのだ。

そのアメリカ人レスラーは、城嶋のことをブラザーと呼ぶようになるほど随分と気に入ったらしく、一緒にアメリカ全土を巡業で回っている間、進んでみっちりとキックボクシングの技を城嶋の体と本能の中に叩き込んでくれたのだ。そんなことがあり城嶋は、レス

ラーでありながら随分と本格的な蹴が打てるようになった。

「間違いないな、あれはキックボクシングの蹴りだ」

タケシが呟いた。

空手とムエタイの蹴りは随分と異なる。キックボクシングの蹴りも微妙に二つとは異なる。

空手の蹴りは重みのあるバットのような蹴りになると格闘技ファンの中でも良く知られており、それと違ってムエタイの蹴りは鞭のような痛みが生まれる蹴りと言われている。

最近では、格闘技マニアの間でなくとも良く知られていることだが、その差が何故に生まれるかの原理まで理解している者は案外少ない。

実際に、空手やムエタイをやっている選手たちですら理解していない場合もある。

そのバットのような重い打撃と、しなやかな鞭のような打撃の違いは、蹴りを放つ選手の体型や体重からくるものも関係しているが、それよりも、撃ち方の違いに大きな差があるのだ。

空手の上段廻し蹴りは、股関節を振り、あまり膝を曲げずに放ち、真っ直ぐに相手を蹴り飛ばす。それによって遠心力が重みとなって相手に伝わる。

しかし、ムエタイの蹴りは、股関節の可動に加え、空手の蹴りよりも膝の可動を多く使うのだ。

股関節を使って脚を振り上げる際に、膝を深く曲げ、脚が上がりきったところで、引き続き膝関節を可動させ相手を蹴る。このふたつの動作で蹴りの中にしなりを生み出し、蹴り脚を鞭に変えるのだ。

股関節を、バットを持った手に置き換えて考えれば、関節は股関節（バットを持つ手）一つのみになる。そのままバットを振ってスイングする際に曲がるポイントは、バットを握っている手の部分だけだ。他に曲がる場所、しなる場所はない。その為、そのままバットの重さが叩いたものへ、ストレートに届く。

しかし、股関節を、鞭を持った手と置き換えれば、鞭にはしなるポイントが、直棒のバットとは違い、クネクネと幾つでも存在する。それが膝関節なのだ。

空手の蹴りはほぼひとつの関節を大きく使って放つが、ムエタイの蹴りは二つの関節を使用する。

この差が、重さを生み出すバットのような蹴りの威力と、鞭のようなしなりが生まれた打撃の差を生むのだ。

しかし、城嶋が見せた蹴りは、その二つの蹴りの中間にあった。それが、キックボクシングに良く使われるタイプの蹴り技だ。

こういった微妙な技の性質の差で、その選手がどの打撃格闘技の出身かが分かる。これもまた目付けの技術の一つだ。

この他にも柔術や古武道、それに中国拳法の打撃も個性的なものが多く、研究しだいでは、その流派がどのような流れを汲んでいるかも悟れてくるようになる。

ここからはタケシの推論に過ぎないが、空手、ムエタイ、キックボクシングの蹴りに、何故にこのような蹴りの差が生まれたかは、その人種の体型と、その格闘技を取り巻く環境にあるのではないかと思っていた。

日本人の空手家は、案外歳を取っても続けられる。そして日本人の空手家は、歳を取るにつれて、どんどんと体のラインが太く重くなっていく。その為に自然としなやかさが失われていくことが少なくはない。しかも脚の短めの人種だ。もともと柔軟な蹴りを放つのには向いていない人種と言えるかもしれない。

しかし、ムエタイの選手は違う。ボクサーの軽量級の様に体は細くしなやかだ。しかも、賭けの対象となる競技の為、選手としての寿命が短い。体型が中年の形に変わりはじめても選手としてリング上に立ち続けることが許されないのだ。

ムエタイ選手のほとんどが、勝つためにというよりも、稼ぐために、生活をする為に、家族を養う為にリングに上がる。趣味でムエタイを始める者よりも、貧しさゆえにムエタイを始める子供たちが圧倒的に多い。

その為、リングに上がれなくなった選手は、直ぐにムエタイを捨て、生活の為に別の仕事を探に専念しなくてはならない。

太い中年の体付きに変わってまで、ムエタイの戦士を続けている者は少なく、その体型で戦い勝利するための創意工夫はほとんどされずに、したとしても若者に伝授されることはもっと少ない。代えの強く若い選手は腐るほどいるからだ。

しなりが衰え、重い蹴りを習得しなくてはならない時にはもう、上がるリングが、戦う場所が、稼ぐ場所が既にないのだ。

その為、しなる蹴りを励むスマートな体格時代しか戦わないことから、太くなった体型で効果的な蹴りを繰り出す工夫は要らなかったのではないのかと、タケシはムエタイ戦士の環境から推測していた。まあ、あくまで推論だが。

そして、白人選手の体格は、太く重く、それでいてしなやかさも柔軟さもかけそなえ、長い脚を持っている者も圧倒的に多い。白人の体型は、やはり戦士として理想的な体型に近いのだ。

故に、空手の重さと、ムエタイのしなやかさの中間に近い蹴りが、キックボクシングの選手には、自然と生まれるのであろう。

（ここでいう空手の蹴りとは、クラシックなものを指しています。現在の近代空手は、他流の技術を多く吸収しており、ムエタイ流の蹴りを使う選手も多くなっております。キックボクシングも同様です）

「ほう、キックか」

「ああ、アメリカの知人から習ったんスよ。随分練習したんスよ」

「いい蹴り持ってるな」

「この蹴りで、あんたの仲間の一人をぶった押したんスから」

雨の日に、ビルの一階にある駐車場で戦った三人の一人目、志村のことである。

烏賊屋は一瞬忘れていた。この戦いは、そのケジメを付けるための戦いであることを。

「下手な空手家並みに蹴れるっスよ」

「油断なんねー、若造だな」

仮面の下で烏賊屋が、うっすらと笑いを浮かべていた。心が猛っているようだ。戦いになった理由は理解できているが、自分の奥で、闘志が闘争を求めて止まらないのだ。まさに武人の性。

リングの外で、タケシも同じような笑みを見せていた。

現在、このドーム内には、同じような性分の者が、数多く居ることだろう。それらの者が、二人の戦いを見て歓声を高々に上げていた。

<　九十九神ｖｓ九十九神・四　>

四角いリングの上で睨み合う二人の闘志が、体ごと右へ右へと円を描いて動き出し回り始めた。

互いに相手の隙を探り合う動きだった。

道着にメキシカンな覆面の男は、両拳を握り肩の高さで構えている。片や獅子の頭を持つ男は、両掌を開き胸の辺りで構えていた。

打撃を狙う者と、グラップリングを狙う者の構えだった。

じりじりと回る二人の円がリングの中で縮まっていく。徐々に二人の距離が迫るにつれ緊張勘が高まり集中力を研ぎ澄ます。それを観客たちがじっと見守る。

回る二人の間合いが、蹴りの間合いに入った瞬間、ふたりの右足が跳ねあがり天を飛んで行く弓矢の如く放たれた。空手の上段廻し蹴りと、キックボクシングのハイキックが相手の頭部を狙って発射されたのだ。

蹴りを放ちながらも二人の左腕が素早く上がり、各々の右面にガードを硬く築きあげた。そこに互いの脚の甲がぶつかり合い、乾いた刺激的な音を響かせる。二人のアクションは、まるで鏡映しのようだった。

二人は大股で踏ん張り蹴りの破壊力からくる衝撃に堪えて見せた。どちらも倒れない。よろめかない。

その光景を見ていた観客席の妖怪たちが、どっと歓声を上げる。見ている者たちの血が沸きあがりテンションが見る見るうちに上がりはじめていた。ドーム内に熱い空気が立ち込める。

この歓声、この空気、プロレスラーの城嶋には、何にも替えられないほどに心地良かった。

その心地良さにまかせて今度は、城嶋から先手を繰り出した。

空手家仮面の顔面を狙った左ジャブ。プロボクサーとは比べられないが、とても速いジャブだった。

しかし、打撃技の中でも最速ともいわれているジャブを、烏賊屋は、空手の受け技、正拳上段受けで払い退ける。そして、一連の動作で城島の毛皮で覆われた体に下突きを打ち込む。

水月を突かれた城嶋が、「うっ」と声を漏らして前傾姿勢になる。軽く打たれたパンチに見えたが、喰らってみてから見た目より重い一撃に城嶋も驚いていた。

そして下を向いた顔面を目掛けて膝蹴りが突き上がり襲い掛かってくる。

膝はモロに獅子の顔面を強烈に蹴り上げ、勢いで体ごと仰け反らせる。タテガミが靡いていた。

顔を歪め仰け反った城嶋の全身には、無限に等しい程の隙が出来ていた。それが見逃される事はありえなかった。烏賊屋が遠慮無く幾つもの空手技をぶちかます。

水月への左中段正拳突き、胸尖に右中段正拳突き、壇中への左中段突き、そして秘中への振り下ろされた槌拳。

正中腺に沿った上半身の急所を、流れるような四連の拳で攻めた烏賊屋が、更に前蹴りを丹田に蹴りこむ。中足（足の指の裏側）が、獅子の毛皮を押し、肉へと減り込む。

よろめきながら後退する城嶋を、素早く追う烏賊屋。そして追い討ちの上段後ろ廻し蹴りで、ライオンの頭部を右から激しく蹴り飛ばす。

蹴り技で回転していた烏賊屋のスピンが止まると、今度は城嶋が全身をトルネードの様に回転させながらロープ際まで飛んでいく。そして、三本のロープにもつれながら場外へと落ちていった。

リング上の烏賊屋が、妖怪たちの歓声を浴びながら、リング下に落ちた城嶋を追ってロープサイドへと進む。

しかし、烏賊屋がロープに手を置き場外を見下ろすが、そこには城島の姿はなかった。

リング下を覗きながら「何故に？」と烏賊屋が思った瞬間、烏賊屋の後頭部に打撃の衝撃が走った。それと同時に大きな歓声が湧き上がったのが耳に届く。

何が起きたのか分からないといった表情の烏賊屋の腰に、後ろから太く茶色い剛毛が生えた両腕が巻き付き臍の前でクラッチをガッシリと組む。

「後ろから！？」

振り向こうとした烏賊屋の両脚がリングのマットから離れた。ロープを掴んでいた両手も力任せに引き離される。

投げっぱなしジャーマンだった。烏賊屋の体が空を飛び、マットに後頭部から落ちて激しい眩暈を呼ぶ。

大きな歓声が沸く中、後頭部を押さえて立ち上がろうとする烏賊屋。何が起きたか分からないままのようだが、真相はこのような事だ。

場外に落ちた城嶋は、素早くリングの下にもぐりこみ、自衛隊員もびっくりな速さの匍匐前進で反対側に出てリングに上がり、音を立てず忍び足で烏賊屋の背後から近づくと、両手で組まれたクラッチハンマーを後頭部に叩き落したあとに、投げっぱなしジャーマンを敢行したのである。

「あはは、あいつ、あんな面白いことが出来るんだな。やっぱりヒールに転向させるか」

「ええ、社長。有りかもしれませんね」

リング上のやり取りを観戦していたゴーグ大葉が、笑いながらレスラーとして今後の城島の方針を語っていた。隣の国分も賛成している言葉を返す。

立ち上がろうとしていた烏賊屋の顔面を下から城島が、黒いリングシューズで蹴り上げた。

烏賊屋は両手で蹴りを受け止めるが、後方へと尻餅を付く。

そこに城島の左右のローキックが次々と襲い掛かる。

右、左、右、左と問答無用で頭を狙うローキックの連激。

飛び交うローキックに対して頭を両手でガードしていた烏賊屋が、たまらなくなったのか、転がりながらロープをくぐり場外へと逃げた。

「逃がすか！」

そう言いトッププロープを両手で掴んだ城嶋が場外の烏賊屋を確認する。烏賊屋は起き上がろうとしているところだった。

その烏賊屋に、リング上の城嶋が、一度トッププロープを両手で掴みながら腰を落とすように引くと、その勢いを利用して場外へと飛んで行く。

場外へのプランチャーだ。

「うほ、ナイスダイブ！」

ゴーグ大葉が嬉しそうに笑いながら声を上げた。

リング上から飛んだ城嶋が、体を斜めにして場外にいる烏賊屋の上へと落ちていく。

「舐めるな！」

しかし、場外で降ってくる城嶋に気付いた烏賊屋が、そう一言放

つと、右拳を構え、落ちてくる城嶋の腹部に拳を対空砲のように打ち上げた。

どーん、と、大太鼓を叩いたかのような音がドーム内に響き渡り、リングから飛び降りたはずの城嶋の体が、くの字になってリングの中央へと飛んでいった。そして、マットに投げ捨てられたかのように、ごろりと転がりながら落ちた。

リング上では、城嶋がのた打ち回っていた。それを余所に烏賊屋がロープを掴みながらリングサイドに登ってきた。苦しい表情の城嶋も、ゆっくりとだが立ち上がった。

トップロープとセカンドロープの間をくぐってリング内に烏賊屋が戻ると直ぐに城嶋がライオンの口を大きく開けて襲い掛かる。烏賊屋もロープ際で迎えうけた。

城嶋が鋭いローキックを放つ。烏賊屋は、豪腕で中段正拳突きを繰り出す。二人の技が、互いの体を捕らえ、乾いた蹴りの音と、重い鈍器のような鈍い音を上げた。

城嶋の体がよろめきながら後方へ数歩さがった。城嶋のローよりも、烏賊屋の突きの方が上回ったようだ。城嶋が、打たれた胸を押さえていた。

下がる城嶋に烏賊屋が、飛び膝蹴りで間合いを詰めながら攻撃を繰り出す。

飛び膝蹴りをかろうじて回避した城嶋に、尚も続く烏賊屋の攻撃。

今度は左右のフックだ。

二つのフックがガードを固めたライオンの頭部を襲う。まるでハンマーを左右に振り回すような豪快なフックだった。城嶋は、その拳を一発かわしたが、もう一発はガードの上から喰らった。ガードの上からでも視界が激しく揺れてしまう。

明らかに烏賊屋が優勢に戦っていた。攻められているのはライオン男に見えた。

烏賊屋の鉄球のような二つの拳が、ガードの上から何発も獅子の頭部に叩き込まれる。容赦無かった。城嶋は、その攻撃をただ耐え、少しずつ後退していく。

烏賊屋の拳が城嶋を少しずつ押すと、追い詰められた城嶋の背中に黒い革に包まれたロープが触れた。それが、もう下がる場所がないことを城嶋に知らせる。

そして一方的に攻め立てられるライオンの顎に、両手のディフェンスをくぐり抜けた硬い拳のアッパーが叩き込まれた。

ライオンの顎が跳ね上がり、口から鍔の混ざった血が吹き出て空を舞う。

誰の目にも強烈にジャストミートした一撃に見えた。

ライオンの双眼から黒目が消え白く濁ると同時に、その全身から力が向けて膝から崩れ落ちた。

城嶋の両膝がマットに音を立てて落ちると、そのまま前のめりに倒れていく。それを烏賊屋が僅かに動いて避けた。

そして、マットにうつ伏せに倒れた獅子のレスラーは、ピクリとも動かなくなる。完璧なＫＯだ。

その光景を確認した観客の怪物どもが、一斉に大歓声を上げた。

ドームが勝利を祝う歓声で揺れる中、ビクリとも動かなくなったはずの城嶋が、烏賊屋の片足目掛けて素早い匍匐前進で襲い掛った。

「やはりか」

しかし、烏賊屋は予想していたかのように狙われた脚を上げ、掴みかかった城嶋からのがれる。

「ちっ、かんずかれていたか！」

そう言った城嶋の後頭部に烏賊屋の踵が落とされると、グシャっとライオンの頭が足とリングに挟まれ惨い音を立てた。

踏み潰した烏賊屋にも心地の良い音ではなかった。

しかし烏賊屋が、もう一撃、下段踵落としを繰り出そうと脚を上げた。また、獅子の頭を踏み潰す気だ。

その瞬間、城嶋の体が恐ろしく速いスピードで横に転がり逃げていく。

烏賊屋は、その必死な回避に呆れたのか、鼻で溜息を一つついただけで追いもしなかった。

城嶋が、烏賊屋の行為に甘えながら立ち上がる。ライオンの口の中から、ドロリとした赤い物が流れ落ちていき、白いマットに戦慄の染みをまたひとつ増やした。

リングには、他にも茶色く変わった染みが幾つもあった。二人が戦う前に行われた、異種格闘技戦の跡だろう。

「だまし討ちなんて、きかんスよね、やっぱり……」

雨の日に戦った二人目の空手家、中本の勝負で使った作戦だったが、百戦錬磨の烏賊屋には通じなかったようだ。

あのまま片足を掴めれば、アマレスの技、片足タックルで転倒させ、アキレス腱がためでも脚四の字固めでも何でもいいから掛けて靭帯を断ち切るか骨でもへし折るつもりだったのだが、完全に失敗してしまった。

城嶋は、無駄に殴られ押されているふりをした事すら無駄になってしまい、悔しがる。

「やっぱり、あいつ、ヒールに転向だな……」

「そうですな……」

一連の出来事を見ていたゴーグ大場と国分の二人が、完全に城嶋の今後のキャラ設定を決定していた。ヒールであると。

<　九十九神ｖｓ九十九神・伍　>

小さい頃だ。自分でもどのぐらいの歳かは覚えていない。

いつもテレビの前で食い入るように俺は見ていた。

プロレス中継だ。

四角いブラウン管の中で、四角いリングを激しく鳴らして彼らは戦っていた。

普通の子供たちが特撮ヒーローに憧れるように、俺はテレビの中のプロレスラーたちに憧れた。

レスラーこそが、俺にとってのヒーローだった。

俺が中学二年のある日のことだった。父が、そんな俺の憧れを察して、町にやってきた帝都プロレスのチケットを買ってきてくれた。

父に連れられ俺は、初めて、憧れのプロレスを生で見に行った。前の晩は、興奮してなかなか眠れなかったことを覚えている。

会場は田舎町の古い市民体育館だった。

胸が躍った。心が弾んだ。すべてが輝いて見えた。いつも見ている古い市民体育館が、まるで聖地に建てられた宮殿に見えるほどに俺は興奮していた。

四角いマットも、それを照らす照明も、鍛えぬかれたレスラーも、すべてが眩しかった。

第一試合、若手のシングルが終わり、第二試合、第三試合と終わって、ベテラン選手と若手選手が混ざったシックスメンタッグマッチの四試合目が終わると、休憩時間になった。残るは三試合だ。

その休憩中に、父に買ってもらったパンフレットを見る俺は、スター選手のゴーグ大葉のコメントを読んでいた。

そこには俺の人生を大きく変える言葉が書いてあった。

『プロレスラーは特別な存在だ。最強なのだ。だが、我々プロレスラーは特別な人間ではない。諦めず努力を積めば、君にもなれる。レスラーとは、選ばれた人間だけがなれるヒーローではない。キミにもなれるヒーローなのだ』

そのコメントを読んで俺は思った。俺にもなれるのかと？　俺もヒーローになれるのかと？

その日から俺の日常は変わった。

中学校から帰ると団地の芝生の上で、暗くなるまでスクワットを続けた。千回、二千回と。時には日が落ちても続けたこともある。他の筋トレもだ。

団地の人々が、俺を奇人でも見るかのような表情で見ていたが、俺は気にもしなかった。

高校は、アマレスの強い高校を選んで入学した。レスラーになる為のベースを作るためだ。

中学時代、周りの人々に頭が可笑しくなったと思われるほどにトレーニングをしていたおかげで、高二になったころにはインターハイのベスト４の常連になっていた。

その成績のおかげで勉強をほとんどしなくても大学に合格できた。

俺は大学で、更にアマレスを磨き、卒業と同時に、帝都プロレスの社員として入門した。

そして二年間、国分さんの付き人をしながらプロレスを学び、アメリカのマンハッタンでデビュー戦を行った。

憧れのプロレスラーとしてのテビュー戦は、マットの上で仰向けになりながらスリーカウントを聞いた。俺の上には百三十キロのデブが乗っていたが……。

デビュー戦で敗北したが、ファイトマネーは貰えた。その金は、その日のうちに酒場で消えた。どう使ったかは酔ってて覚えていない。

それから二年間は、会社の指示で日本に帰ってこれなかった。

アメリカの中堅団体に混ざって二年間、アメリカ全土をマッチョマンたちと一緒にツアーした。

そこで出会ったアメリカ人レスラーにキックボクシングの技を習い、ついでにドラックも習った。

俺に取ってアメリカでの二年は、レスラーとして磨きをかけた二年と言うよりも、人間としての器を磨いた二年だったと思える。

各町での試合が終わると、決まって酒場に繰り出し酒を煽り、女を口説き、ゴロツキと喧嘩をした。

いろいろな酒の味を覚えたし強くもなった。

いろんなセックスを味わい、ベットの上での技も習得した。

いろんな人種のマッチョマンと殴り合い、時にはナイフで刺されることもあったし、ショットガンの銃口を向けられることもあった。

日々がバイオレンスだった。

そんな日々が、俺に度胸を付けてくれた。平和な日本では出来ない心のトレーニングだった。

そして日本に帰ってきた俺は、中堅レスラーとして迎え入れられる。日本のマットに慣れるのにさほど時間はかからなかった。顔も直ぐにファンたちに覚えてもらえた。

そんなある日、いきなり社長室に呼ばれた。

社長室に入ると、社長のゴーグ大葉のほかに、中年の外人が居た。ブラット・ニクソンだ。

社長曰く、俺に七日間以内に三人の空手家を路上で倒してこいとの事だった。

会社が近いうちに異種格闘技大会を開くことは俺も知っていた。俺は、その試験だと、てっきり勘違いした。

だが、本当は、チャンピオンベルトの九十九神の後継者試験だった。

しかし俺は、その試験にすんなりと合格した。そして今ここで、空手家仮面とか名乗る敵と戦っている。憧れの東京ドームでだ。

俺は、本当は、チャンピオンになりたかった。プロレスラーとしてのヒーローになりたかったのだ。

それが、どうしてこうなったか、妖怪変化四千五百匹の歓声を浴びながら戦っている。

何かが違う。そう思った。でも、殴り合いが始まると楽しいのだ。殴るのも、投げるのも気持ちいい。殴られ、吹っ飛ぶのも楽しいのだ。

俺が相手を殴るたびに、妖怪達が歓声を大きく上げる。

俺が相手に殴られると、妖怪達が歓声を激しく上げる。

そのたびに、俺の心が歓喜するのだ。それが気持ちいい。

俺が何を言いたいのか、俺が何を伝えたいのか、俺にも良く分からない。でも、今、この瞬間が楽しい。殴り合いが楽しいのだ。見ている人が興奮するのがたまらないのだ。

だから、だから、この戦いを最後まで見てもらいたい。

俺と、こいつの戦いを。

「城嶋君、まだ行けるかね？」

「ああ、ニクソンさん、問題ないっス」

心の中に、妖力共有しているブラット・ニクソンの声が聞こえ、それに答えた。

「やばくなったら妖術をつかいたまえよ。格闘技にこだわりすぎるなよ。これは九十九神同士の戦いなのだから」

「何を言っているんスかニクソンさん。これは九十九神同士の戦いの以前に、俺たち格闘技家の戦いっスよ」

「なるほど、そうきたか」

「あの空手家仮面のおっさんと、俺が納得するまで、このままやらせてくださいよ」

「ああ、いいとも。気持ちは分からんでもないからね」

「感謝するっス」

「ならば、さあ、存分に戦いたまえ、チャンピオン。キミがプロレスの星だ！」

<　九十九神ｖｓ九十九神・六　>

獅子の口から流れる赤い血と白い涎が混ざり合い、ピンク色の粘ついた液体となって流れ落ちていった。その液体が糸を引きマットに垂れる。

「城嶋くん、これが最後のチャンスだ。もしも、これ以上、あの空手マスターに押されるのならば、妖術を使いたまえよ」

「ああ、分かったよ、ミスター……」

妖力共有していて表情は見えないが、心の中で「本当に分かっているのか」と、ニクソンは首を傾げていた。

相棒に若干の不安をいだかれている城嶋が、そんな事を無視して、またプロレスで仕掛ける。

城嶋の黒いリングシューズが血や汗で汚れたマットを「キュ」と音を鳴らして蹴ると、目の前で空手の構えを取る烏賊屋に攻め込んだ。

烏賊屋との間合いを詰めた城嶋が、左足で踏み込むと、大きな振りから右脚でのハイキックを放つ。斧のような蹴り脚が、烏賊屋の金銀のマクスを狙い跳ね上がり迫る。

しかし烏賊屋は、冷静に技を見切った。

上半身を反らして顎を引くと、眼前の空間を削り取りながら城嶋の爪先が通りすぎる。

その刹那、烏賊屋が反撃を繰り出す。城嶋が空振りした直後だ。まだ城嶋は横を向き、放った脚が振り切られていなかった。

脇腹に打ち下ろしの正拳、背中に下突き、後頭部に廻し蹴り、軸足の膝に横蹴り。

城嶋の体、今の四連打で大きく揺れてバランスを崩し肩から倒れた。

仰向けになった城嶋が立ち上がろうと上半身を起こしたところに、烏賊屋の足刀が喉へと突き刺さる。

獅子の口が大きく開き、血の混ざった堰を吐く。

たまらず城嶋が転がりロープをくぐり場外へとエスケープしていく。しかし、それを烏賊屋が負う。両者揃っての場外戦だ。

追う烏賊屋が場外に降りたときには城嶋が起き上がっていた。肩と胸の筋肉が、呼吸で大きく揺れていた。

烏賊屋の前蹴りが、城嶋の茶色い毛の生えた腹に打ち込まれる。続いて猿臂による肘撃ちが、鉈の横振りのように人中を狙い放たれた。

だが、その肘撃ちをくぐり、頭を下げて城嶋がかわした。それと同時に城嶋は、烏賊屋の胸の中へと飛び込んでいく。獅子の左頬が、青銅の上に着込まれた道着の上に密着すると、城嶋の両椀が、外側から烏賊屋の太い二本の腕ごと押さえ込みながら背中で手と手を組む。

「むむ！」

両手ごと押さえ込まれた烏賊屋の口から僅かに声が漏れた。城嶋のベアハッグだ。背骨を折らんと両椀に力が入り締め上げる。

「そのマスクごと、場外の床に突き刺してやるぜ！」

烏賊屋の胸元に顔を埋めながら城嶋が言うと、ベアハッグのまま体を持ち上げる。城嶋に抱えられ烏賊屋の両脚が地面を離れた。

城嶋は、場外ノーマット上で、フロントスープレックスを敢行する積りだ。巨漢を抱えたまま後方へ体を勢いよく反らす。

「よし、そのままスープレックスだ。投げちまえ！」

興奮したゴーグ大葉が声を上げた。しかし、隣の国分が、ハッとした表情を作る。

「まずい、返される！」

建設中のピル前での戦い。国分の付き人である七瀬が仕掛けたフロントスープレックスを、空手家の烏賊屋が難なく潰したことを思い出した。だが、国分の声は、妖怪たちの歓声に掻き消されて城嶋の耳に届くことはなかった。

道着を履いた烏賊屋の両脚が、地を踏ん張る城嶋の両脚に外側から二本同時に絡み付き、反り投げを完成させようと曲がる脚を真っ直ぐに無理やり戻した。これではブリッチが組めない。

烏賊屋を抱えた城嶋の体が、ブリッチを組めずに背中から場外の地面に落ちる。二人の体重が城嶋の胸を押しつぶした。息が詰まる。

素早く先を取ったのは烏賊屋のほうだった。

絡めた両足を解き、体を仰向けにして倒れている城嶋の腹の上に移動してくる。そして、跨ぐ。

烏賊屋が、ベストポジションを獲得した。それはマウントポジション。

かつて格闘技ブームに乗って、その姿を現したアルテミットルール。それは名前のとおり、究極の試合を見せるための恐ろしいルールだった。

金網の壁に囲まれた八角形のリング。試合時間は無制限。目つき、噛み付き、引っかき、金的以外は何でもあり。ギブアップか、相手が気絶したのをレフリーが確認しての判定勝ち。それ以外には勝敗が決まることのないルール。そんな試合が、この現代社会で生まれたのだ。

格闘技マニアだけならず、多くの人々が、その試合に夢中になり、やがてその存在は日本にも当然の如く伝わってきた。そして何人かの武道家、格闘技家の者たちが挑み、そして血を流した。

その究極のルールの中で、一躍世界的に名前を知らしめた流派があった。

それが、ブラジリアン柔術こと、グレイシー柔術だ。

グレイシー柔術とは、世界を渡り歩き柔道が最強の格闘技と信じ、挑み続けた伝説の柔道家、コンデ・マコこと前田光世によって教えをこうたブラジリアンのカーロス・グレイシーなどが作り出した格闘技流派である。

その内容は柔道と呼ぶよりも、日本では消え去りかけている古流柔術に近い内容となっていた。

試合に勝つためと言うより、死合に勝つと言えばいい内容であろうか。

そのグレイシー柔術が、何でも有りのアルティメットルールで、世界各国の猛者たちを打ち破ってきた技の中で度肝を向いたのが、マウントポジションである。

今現在のグラウンドでの殴りが有りのルールでは、マウントポジションの取り合いは普通となっているが、当時は馬乗りからの打撃なんぞ、子供の喧嘩の延長と考えられ、そんな事をする者もいなければ、そんなことが通じる相手もいなかった。

馬乗りからのパンチ。そんな状況になる前に勝負を付けるのが格闘技であり、そんな無様な状況に持っていかなくても勝負をつけるのが格闘技と信じられていたからだ。

だが、グレイシー柔術は違った。

相手に馬乗りになることを勝利に近づくポジション取りのひとつと考え、そのポジションを取る技術を編み出し、そのポジションを取ったら勝利するように技として磨き上げたのだ。

そして、その考え方が、究極のルールのなかで勝利と言う形で正しいということを証明したのである。

しかし、烏賊屋は柔道家でも柔術家でもない。立ち技最強を名乗る格闘技、空手の使い手である。その烏賊屋からマウントポジションを取ってきたのである。

「お、烏賊屋さん必殺のマウントポジションか」

球場の端から場外で絡み合う二人を見てタケシが独り言を呟いた。

初めて烏賊屋とタケシが戦ったときに、タケシが敗北した技が、あのマウントポジションだった。

空手家同士の戦いで、最後が馬乗りからの乱打で勝負がつくとはタケシも想像していなかった。しかし、烏賊屋はマウントポジションで勝負を決めた。

そして勝負がついたあとタケシに烏賊屋はこう言ったのだ。

「空手は、立ち技最強の格闘技ではない。空手は、打撃技最強の格闘技なのだ。打撃技ひとつで最強を掴み取れる格闘技なのだ。例え相手が寝ていようとも関係ない、殴るんだ」と。

とある有名な日本人レスラーと、アメリカのヘビー級ボクサーによる異種格闘技のドリームマッチが日本で行われた。

その試合中、レスラーはほとんど寝そべり、そこからボクサーの足を蹴り続けた。

ボクサーは、寝そべるレスラーを殴ることも出来ずに、ただ吠えていた。

烏賊屋は、その光景をテレビで見ながら歯がゆく感じたらしい。

後に、グラウンドが得意なレスラー用に、グラウンドからでも勝てるようにと、自分なりに工夫して、後々マウントポジションと呼ばれるこの体制を考え付いたのだ。

そして、このポジションを個人的に練習して磨きあげ、技と呼べるまでのものに完成させた。

既に烏賊屋は、光臨館の空手から、自分流の空手へと進化していた。戦ったタケシには、それがはっきりと感じ取れた。

「勝負有ったな」

ライオンマンに跨り拳を振るい始めた烏賊屋を見てタケシが、烏賊屋の勝利を口走る。それだけマウントポジションの必殺力と、烏賊屋のマウントポジションの使い方が凄いことを知っているのであろう。

それを証拠に、獅子の頭に空爆のように降り注ぐ左右の拳がゴンゴンと音を立て、城嶋が汗や涙、それに血を飛び散らせながら必死に抵抗を見せていた。

しかし、その抵抗も虚しく、両手のガードの隙間を突いて拳が振るわれる。隙間が無ければガードの上からでもかまわず烏賊屋は叩く。

下になっている城嶋が、苦しまぎれに拳を打ち上げるが、その攻撃を烏賊屋は後ろに体を反らすだけで容易くかわしてしまう。

だが、烏賊屋の攻撃は、城嶋が幾ら体を後ろへ反らしても、背には地面が存在しており、後頭部を擦り付けるだけで回避することを許さない。上に乗る烏賊屋のように体を反らして回避ができないのだ。

ならばと城嶋がブリッチを作って腹に跨る烏賊屋ごと持ち上げるが、烏賊屋は脚を体に巻きつけロデオマシーンに跨るカウボーイのようにうまいことバランスをたもち離れない。そして胸に拳を叩き込む。

城嶋がブリッチを崩して抜け出ようとするが、今度は巻きついていた脚を解除して確りと地に足を付けると、城嶋の体を跨ぎながら体重を乗せて逃がさない。

明らかに烏賊屋のマウントポジションは、思いつきでこの体制を取ったのではなく、間違いなくこの状況で敵を倒す練習を積んでいるものだった。しかも技として、かなり完成度が高い。

上に跨がれながら拳の攻撃に耐える城嶋の心に、チャンピオンベルトの九十九神、ブラット・ニクソンが囁く。

「もういいだろ、これ以上は危険だ、妖術をつかいなさい」

渋い声が冷静な意見を囁いていた。城嶋は拳の雨に耐えながら、悔しいが格闘技家としての敗北を悟る。そして、言われるように妖術の解禁を心に決めた。

殴られるライオンの口から、血が混ざりながら術の名が吐き出される。

「キャンピオン・カーニバルモード！」

「なに！？」

術を使った獅子男の異変にすぐに気付いたのは、上に跨る烏賊屋だった。殴る両手の動きが止まる。跨いでいる男の体が、少しずつ大きくなるのを感じた。

「お、ここからは妖術合戦か？」

タケシも城嶋の体に見える異変に気付いた。観客の妖怪達もだ。

寝転ぶ城嶋の体がドンドンと大きくなっていく。烏賊屋が逃げるように、城嶋の体の上から跳ねのいた。

巨大化を始めた城嶋が起き上がると、やっとライオンの成長が止まる。

「こりゃまた、でかくなったな……」

見上げる烏賊屋が言う通り、城嶋の身長は２８０ぐらいまで大きくなっていた。その差は、子供と大人なんて呼ぶレベルではない。

「ぐふふふ、これが、カーニバルモードっス。おっさん、踏み潰してやるっスよ！」

勝ち誇ったように台詞を放ち、巨大化した城嶋が片足を振り上げ

た。

<　九十九神ｖｓ九十九神・六　>（後書き）

城嶋くん、おっきしちゃった＾＾

<　九十九神ｖｓ九十九神・七　>

約一メートルの身長差から繰り出されたトーキックが、烏賊屋の胸元に炸裂した。両手で防御に成功したが、胸骨の軋む音を聞きながら地面に叩きつけられワンバウンドして転がっていく。

身長差、パワー差、それらが生み出した大迫力の一撃に、観客の魑魅魍魎たちが一段と湧き上がる。大歓声だった。

「随分と大きくなりやがったな、城嶋の奴……」

熱い歓声の上がる中、変貌した後輩を見て国分が言うと、ゴーグ大葉がチラリと隣を見下ろしながら言った。

「そうか、俺があの術を使った時は、四メートルぐらいにはなったぞ」

「え～……」

ゴーグ大葉の台詞を聞いて国分が、隣の巨人の草鞋にも似た大きな顔を見上げながら「この人は何でもかんでもジャイアントサイズなのかよ……」と心の中で呟いていた。

後転で、十メートルほど転がった烏賊屋が、転がる勢いそのままに立ち上がった。しかし、体がグラグラとふらつく。まるで、酔っ払いのように千鳥足だった。

そこに巨大化した城嶋が走りこんでくる。大きくなったがスピードは変わらない。助走の付いた巨体から、ド迫力のアッパーが放た

れる。

地面すれすれのアッパーが、下から烏賊屋の体を叩き打ち上げた。

全身の骨が粉砕しそうな衝撃をうけながら空中に飛ばされた烏賊屋が、後方にあったリングの上空を、綺麗な弧を描きながら飛び越え反対側へと落ちていく。

背中から落ちた烏賊屋が「ぐえっ！」と、鈍い呻き声をマスクの下から漏らした。そして、地面に叩きつけられた衝撃で体が跳ね上がり、偶然にも足から見事に着地する。しかし、後頭部を打ったのか、脚が痙攣して震えていた。

その烏賊屋の状況に気付いた妻の鈴が、心配そうな声で訊く。

「あなた、大丈夫ですか！？」

「ああ、なんともね～……」

妖力共有した女房の声に答える烏賊屋。しかし、金銀のマスクの下には、苦痛に歪む表情があった。明らかにダメージがある。強がりだ。

リングの反対側に立っている空手家仮面に気付いた巨大獅子男が、鋭い眼差しを作りながら走り出した。そして、激しい地鳴りの響く踏み込みのジャンプひとつでリングを飛び越え、反対側に居た空手家仮面を目指して降って来る。

その両手の指は、空中に居る間に交互に組まれクラッチしながら振り上げられていた。そして、高さと体重が乗ったクラッチハンマー

をマスクのてっぺんに叩き落し、全力をこめて振り切られた。

両手で組まれた槌拳を頭部に喰らった烏賊屋の顔面が地面に激突して、代わりに両脚が上へと跳ね上がる。そして更に回転しながら空中へと跳ね上がった。

回転しながら上へと跳ねた烏賊屋の体に、城嶋が横殴りのミドルキックを打ち込む。

蹴りが当たったのは背中だった。頭が下を向き、脚が上を向いていた。そのままの常態で、真横に飛んで行く烏賊屋。蹴られた勢いが緩むと地面に、ぼろ雑巾の様に無残にも落ちて転がる。

やはり体格差からくる戦力の違いは、誰の目にも圧倒的に見えた。しかし、それでも観戦している妖怪達は、楽しそうに沸き上がり、興奮を熱気に変えて盛り上がっていった。

怪しげな妖怪たちの歓声が上がる中、ふらふらと立ち上がる烏賊屋。それにゆっくりとした歩みで迫る城嶋。

「烏賊屋君、一気に決めてしまいなさい。カーニバルモードには制限時間が有るのだからね。ゆっくりもしてられませんよ」

「ええ、分かってるっスよ！」

烏賊屋が完全に立ち上がると、ニクソンに急かされるように城嶋が走り出した。

ふらつきながらも烏賊屋の双眸は死んではいない。マスクの下で怪しく光っていた。

「鈴、こっちも妖術を使うぞ……」

「はい」

後方に退脚を力強く踏み込むと、右拳を腰に添え、全身に力をこめる。いかにも正拳突きを放とうとしている烏賊屋に、妻の鈴が、軟らかい口調で返事を返した。

走る城嶋と烏賊屋までの距離は、まだ十メートルはある。だが、烏賊屋は腰にある拳を放つ。使った術は、飛び道具のようだった。

りり～ん、と、城嶋の耳に涼しげな風鈴の音色が、妖怪たちの歓声に掻き消されることもなくはっきりと聞こえた。すると、走っている城嶋の脛に重い衝撃が激突した。

見えない攻撃に、脚を払われる形となった城嶋の巨体が、前方に滑り込むように倒れこんだ。巨体が倒れた音と、妖怪たちの歓声で、辺りの空気が激しく振動していた。

城嶋が、目を丸くして言う。

「なんスか、今の！？」

前のめりに倒れ鼻先を磨った城嶋が、上半身を両手で起こして前方を見た。そこにはまだ正拳突きの構えを取る烏賊屋の姿が見えた。距離は五メートルほど離れていた。

また烏賊屋が、正拳付きをひとつ放った。

起き上がろうとした城嶋の耳に、再び風鈴の音色が聞こえてくる。それとほぼ同時に、顔面に強い衝撃が炸裂して尻餅を付く。

「ヤバイな、遠距離攻撃タイプの妖術だ。しかも、威力が高い……」

「畜生！」

ニクソンの解説を聴きながら城嶋が、愚痴りながらも立ち上がる。しかし、また風鈴の音色が耳に届くと、顔面に見えない衝撃が炸裂した。口や鼻から流れていた赤い血が、攻撃の衝撃に飛び散り、辺りの地面に痕を残す。

だが今度は倒れない。片足を後ろに踏み込み、体を反らしながらも城嶋が意地を見せた。

「ほ～、耐えたか。ならば、これでどうだ」

余裕を取り戻した表情で烏賊屋が言う。そしてまた見えない正拳の弾丸を、眼前のジャイアントに風鈴の音色と共に打ち込む。

離れた場所から正拳突きのモーションを見た城嶋が、素早く顔の前に両手で壁を気付くと、耳にあの涼しげな音色が響いてくる。

しかし、今度の攻撃は、顔面を狙って来なかった。攻撃を耐えるために、後ろへと踏ん張っていた足を払うように打ち込まれたのだ。

足を払われた城嶋が体制を崩し、片膝と片手を付いて、横へと転倒するのを免れるように堪えた。

そこに、風鈴の音が聞こえる。今度は地に付いていた腕を殴られ

払われる。ジャイアントが横へと倒れた。

そこにまた、風鈴の音色と同時に見えない正拳が、無防備となっていた顔面にヒットした。ガードは出来ていない、モロに喰らった。鼻と口から、ぶはっと血が飛んだ。

「防御を崩してから打ち込む。まあ、基本だわな」

明らかに烏賊屋は巨人と戦うのに鳴れている様子だった。

格闘技のセオリーの中では、大型の体型を有する相手に対して、まずは下半身に攻撃を集中させ、機動力とバランス感覚を奪う戦法は、基本中の基本とされている。

大柄の選手は、体重の多さゆえに下半身に負担が掛かりやすく、弱点となることが多い。その巨人対策の戦術を烏賊屋は、当然の如く実行したに過ぎない。

それに、烏賊屋の九十九神との妖力共有暦は、三十年以上のキャリアがある。鍛え磨きあげられた空手道よりも長い。今まで五メートルを越える大きな妖怪と戦った経験が、幾度もあった。十メートルある妖怪とも戦ったこともある。それらに比べれば目の前の獅子巨人は、まだまだ小さいのだ。

血を流しながら立ち上がる城嶋の体が、見る見るうちに小さくしぼんでいく。カーニバルモードの終了である。

「おやおや、巨大化の術も終わりか」

正拳突きの構えのまま烏賊屋が言う。汚れたマスクの下の表情が

うっすらと笑っていた。

その嫌らしげな烏賊屋の笑みを、口からダラダラと血を流して城嶋が睨みつけていた。

妖術を交え始めた二人の攻防。

出始めは城嶋の方が有利に見えたが、今では烏賊屋の方が押しているように見えた。更に面白い展開へと試合の内容が流れていくのに、観戦している妖怪たちが、満足そうに歓声を上げている。

「糞おやじ、調子に乗るのは早いっスよ！」

「まだ、そんな減らず口がたたけるのか？」

そう言い鈴の音を鳴らして正拳を繰り出す烏賊屋。だが、それよりも早く城嶋が、次なる妖術を使った。

「チャンピオン・フェスティバルモード！」

城嶋が、声を張り上げ術を唱えた直後「ごわ～～ん！」と、鉄と鉄がぶつかるような音が鳴り響いた。

「ん！」

烏賊屋の術がヒットしたが城嶋の体は、衝撃に吹き飛ばされることはなかった。それどころか揺らぎもしていない。烏賊屋の術は、弾かれたようだ。

「なんだ、あれは？」

城嶋の体が、再び変化していた。

体のサイズは変わっていないが、全身の色が鉛のような色へと変貌している。まるで全身が鉄の塊に変わった様子だった。

「ほほ～、今度は強度のアップか……」

「正解ッス」

烏賊屋に答えた城嶋が、前に歩き出す。その一歩一歩が地面に若干減り込んでいた。後ろに足跡を残す。強度だけではなく、体重も増えている様子だ。

ゆっくりと迫る城嶋の鉄色の顔面目掛けて烏賊屋が正拳を発射させる。だが、見えない正拳の弾丸は、城嶋の顔面に炸裂しても、釣鐘を叩いたような音を響かせるだけで、効いている様子は僅かにもなかった。城嶋にはダメージがない。揺らぎもしていない。

「なんつー硬さだ……」

烏賊屋が愚痴を溢した瞬間、鉄の塊へと変わった城嶋が走り出す。僅かにスピードが落ちているように見えた。しかし、一歩一歩の重さに地面が潰れて地鳴りを感じさせる。

一気に間合いに入った城嶋が、重い拳をフックに変えて繰り出す。烏賊屋は、その攻撃をくぐり水月に肘を突きたてた。

肘打ちの攻撃は、人間の急所のひとつを完璧に捕らえていた。

「むっ！」

だが、声を立てたのは、攻撃をお見舞いした烏賊屋の方だった。肘に痛みが走り顔を歪めたところに、下から黒い色の膝が跳ね上がってくる。

両手を交差させて防御を作ったが、烏賊屋の体が一メートルほど浮き上がった。攻防のスピードは落ちているが、一発の重さが格段に増していた。

空中に浮いた烏賊屋の体が着地すると同時に、城嶋が鉄の体を捻りローリングソバットをどてっ腹に打ち込んできた。

回避は出来なかったが、その蹴りも両腕で防御した。だが、烏賊屋の体が真横に飛んで行く。体重が増え、すべての攻撃の威力が増している様子だ。

飛ばされた烏賊屋は、両足の裏側で地面に踏ん張りブレーキを掛けた。しかし止まったのは、踏ん張った両足で数メートルのラインを作ってからだった。ふたりの距離が、また離れた。

蹴られ痺れる両手を見ながら烏賊屋が「なんて重い蹴りなんだ……」と呟く。

「もう、さっきの飛び道具も効かないっスよ。接近戦もこっちの方が有利っス。さあ、どうするっスか！？」

そう言いながら城嶋が、烏賊屋にふてぶてしい態度で迫り寄る。

「じゃあ、こっちも趣向を変えてやるか、なあ、鈴」

「はい」

夫の呼びかけに妻が答える。すると大きく股を開き騎馬立ちの構えを取る烏賊屋。そして、腰を落としながら胸の前で、拝むように両手の平を合わせた。

「はあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「なんだ？」

烏賊屋が気合を篭めた唸り声を上げる。その殺気立った様子に気付き走り出す城嶋。何かまずい予感がしたからだ。

二人の距離が縮まる。そんな中、烏賊屋が、合わせていた両手のひらを、全身を震わせながら僅かに開く。その手と手の間には、小さな釣鐘のような風鈴が浮いていた。

「にいちゃん、重いと沈むのが早いぞ！」

闘争中とは思えない、心和む涼しげな音色だった。烏賊屋の台詞と共に風鈴の音が城嶋の耳に届いていた。すると突然、走っていた城嶋の足が地面に減り込み、前のめりに転んで両手を付いた。

「なんだ！？」

転んで声を上げた城嶋の両手が地面に沈む。手だけではない、付いた両膝も地面に沈んでいく。まるで泥の沼に沈むようだった。

「やばい、沈んでいくっス！？」

城嶋は、慌てて沈んだ両手を引っこ抜き膝立ちになるが、その行動を取ったことで、腰まで一気に沈んでいく。

「なんスか、これは!?」

慌てうろたえる城嶋の体が、どんどんと地面の中へと沈んでいった。もう胸を過ぎて首まで埋まっている。

城嶋は、顔と両手を上げて抵抗を見せるが、直ぐに顔も埋まり、最後には上げていた両手もばたつかせながら地面の中へと沈んで行った。

「さてさて、どのぐらいまで息が続くかな、アイアンマンさんよ」

両手の平の間で風鈴を鳴らす烏賊屋は、構えを解く事無く地面の中に消えた城嶋の姿を見ながら楽しそうに微笑んでいた。

<　九十九神ｖｓ九十九神・八　>

地面の中に全身が沈んだ城嶋。

体が沈みいくその下は、真っ暗だった。暗黒そのもので底どころか何も見えない。

上を見上げれば、水面が僅かに揺れて、ドームの照明がキラキラと歪んで見えた。

自分の鼻や口から、ぷくぷくと小さな泡が漏れ出て登っていく。空気だ。

それを見た城嶋が、両手で口を押さえた。呼吸が出来ない。

体が重みで見る見るうちに、奈落の底へと沈んでいく。水面が遠のいていく。城嶋は、慌ててフェスティバルモードを解除して体重を減らした。フェスティバルモードは、あまりにも重過ぎる。

水中へと降下する速度が落ちたが、浮上する気配はない。

城嶋は、レスラーのわりには脂肪が少ないほうだ。どちらかといえば、筋肉のほうが多い、逆三角形タイプの体型を有している。脂肪は軽く浮きやすいが、筋肉は硬く重いものとされている。筋肉が多く脂肪が少なければ水に浮き難いのだ。

城嶋が、水面に映る光を目指して泳ぎだす。しかし、なかなか思ったように体は進まない。やがて呼吸が苦しくなり始めると四肢の動きは、泳いでいるという動きから、もがいているといった動きへ

と変わっていく。それでも体内の貴重な酸素は消費されていく。

呼吸が苦しくなった城嶋は、必死にもがいた。だが、いくらもがいても、体が水面に到達することはなかった。まるで水面が蜃気楼に映る遠くのオアシスのように思えた。

「おかしい！？　なぜだ！？」と、もがき苦しみながら理由を探す城嶋。しかし、その思考の活動が、更に酸素を大漁に消費させる原因となって呼吸を苦しめる。

このままでは溺れ死んでしまうと城嶋が必死の抵抗を見せる。

そのともがき続ける城嶋の様子を、術を仕掛けた烏賊屋は、双掌の間にある風鈴を鳴らしながら見ていた。

観戦している妖怪変化たちから歓声が消え、代わりにどよめきの声が沸きあがっていた。彼らにも何が起きているのかが理解できていない様子だった。がやがやとざわめく。

「おい、いったい城嶋の奴に、何が起きているんだ！？」

観客席で、ゴーグ大葉と並んで戦いを見ている国分が、後輩のことが心配になり叫んだ。

観客の妖怪の中にも、国分と同じ疑問を抱いている者が多かった。

観客席から見た二人の様子は、こうだった。

烏賊屋が蟹股で腰を落としながら、双掌の間で風鈴を鳴らし動かずじっとしており、その少し前の地面の上で、寝転んでいる城嶋が、

ベビーベットの中で元気に暴れまわる赤子のように手足をばたつかせながらもがいているのだ。

ただ、のたうち回る男と、それを見守る男。

何故に直ぐ起きないのか？　何故に倒れている相手に追い討ちを掛けないのか？

観客には、そのように見えていた。

「あれは、幻術の類だな……」

ゴーグ大葉が言った。

「幻術？」

その言葉に国分が隣を見る。

「ああ、烏賊屋が無敵の強度を備えた城嶋を見て、精神攻撃に変更しやがったんだ。おそらく城嶋の奴は、今、水の中か何かに沈んで呼吸もままならず苦しんでもがいているんだろうよ。幻術をかけられたのなら、フェスティバルモードの意味がない」

「水の中？」

「溺れているように幻覚を見せられているんだよ。実際は水もないが、術をかけられている本人は、水中で呼吸も出来ないでくるしむ。本当は、まわりに空気が幾らでもあるのに呼吸すら忘れちまう。水中に居るという幻覚を見せられちまえば、空気があっても窒息してしまう。思い込みが、そうさせるんだよ」

「じゃあ、国分の奴……、やばいじゃん」

「ああ、やばいな、これは……」

大葉の説明で国分は、やっと城嶋のピンチを理解した。しかし、観客席に居る自分には何も出来ないし、してもやれないと悟ると、食い入るように二人の様子を見守った。

東京ドーム内の歓声が、どよめきに変わりだす中、幻術を継続し続ける烏賊屋が、妻の鈴に問う。

「鈴、あとどのぐらい、幻術が続けられる？」

「あと二十秒です」

「こりゃあ、制限時間内に、この野郎を酸欠で意識を奪うのは難しいかな」

既に城嶋を幻術に捉えて一分が過ぎ去っていたが、信じられないほどに城嶋は元気良くもがいていた。激しい運動を繰り返しながらの潜水、普通の人間ならば一分もあれば息が切れる。しかし城嶋は、既に一分を越えている。

「あと十秒ほどで術が切れます！」

「やるな、この若造！」

幻術を続ける夫婦が、地べたでもがき続ける城嶋を睨みながら感心していた。そして、術の効果時間が過ぎていく。

「あと七秒！」

烏賊屋が術に集中を続けるなか、妻の鈴がカウントダウンに入る。

「五、四、三、二、一、術が切れます！」

「ちっ……」

術の効果時間が終了しても城嶋は、地べたの上でもがいていた。
術が解けたのにも気付いていない様子だ。

一方、酸欠で失神していない城嶋を見て烏賊屋が舌打ちをひとつ溢した。

「はっ、あれ！　どうなってるんだ！？」

「幻術だ。キミは今まで幻覚を見せられていたのだよ！」

状況が把握出来ずにいた城嶋にニクソンが言う。

「俺、溺れ死んでないんだな……、ここは天国じゃないんだよな！」

倒れている城嶋が、我を取り戻した。水中に居たはずなのにといった顔で辺りを見回していたが、相棒の言葉で少しずつ状況を飲み込んでいく。

そこに烏賊屋が飛び掛ると、観客たちの賑わいが蘇り始める。

「おらぁ、ぼ～としてるんじゃあないぞ、若いの！」

「なな！？」

ジャンプした烏賊屋が城嶋の腹部に跨るように着地した。

再びマウントポジションを獲得した烏賊屋が、口元を悪役のように釣り上げていた。そして、強く握り締められた拳が振り上げられると、妖怪達の歓声が再びドーム内を激しく揺らした。

二人を見ていたタケシも「やはり、男同士の戦いは、拳で決めなきゃな～」と独り言を呟くと、興奮がありありと分かる微笑みを作って見せる。

「まだだ、喰らえ、胃散放射攻撃！」

下になっている獅子面の口から、消火器の様に白い霧状の煙が勢い良く吐き出された。

その白い煙が空手家の顔面を捉えて視界を奪う。そして二人の全身が白い霧に包まれた。

霧が立ち込める中から大きな声が飛び出してくる。

「うあああぁぁぁ！！！」

烏賊屋がマスクを両手で押さえて悲鳴にも似た掠れ声を上げたのだ。その烏賊屋のポジション取りのバランスが崩れた。それを城嶋は見逃すことはなく、烏賊屋の下から素早く滑るように這い出た。

顔面を摩る手の下から白い煙と一緒に、肉の焼けるような臭いが

僅かにしていた。そして舞い上がるように広がっていた白い霧も直ぐに消えていく。

「おのれーーー！」

仮面から手を退けた烏賊屋が立ち上がると、マスクの正面が所々爛れ焼け落ちていた。胃散の霧で溶けたようだ。

「危ねえ。またマウントを取られるところだったぜ」

城嶋が、間合いを取り呼吸を整えながらそう言った。その城嶋を、ボロボロのマスク越しに烏賊屋が怖い表情で睨みつける。

<　九十九神ｖｓ九十九神・九　>

ボロボロになったマスクを被る烏賊屋の口から、ユラユラと闘気のような空気が吐き出される。その闘気は熱さのあまり空気を焦がしていた。烏賊屋の視線は、まるで刃物だった。鋭く城嶋を睨む。

城嶋の負けてはいない。口や鼻から血を垂れ流しながらも烏賊屋を睨みつけ、背中から湧き上がらせる闘志が湯気のように蒸気となって見えていた。

これまでの攻防を見るからに、どちらが優勢かと問われれば難しいところだろう。どちらかが優勢を取ればすぐさま切り返され立場が逆転してしまう、それの繰り返しだった。だが、見ているほうとしては、実に面白い試合だ。

それを証明するかのように、どちらを応援しているに関係なく、タケシやゴーグ大葉の表情は興奮のあまり歓喜していた。それだけこの試合は素晴らしい内容なのだろう。

闘志と闘気をぶつけ合う二人が睨み合う中、城嶋が口を開く。

「この試合は、使い手としてのデビュー戦。俺はあんたに勝って、華々しいドラマをスタートさせるつもりっス！」

「調子に乗るなよ、若いの。デビュー戦から勝ちを手にしようなんて十年早いんだよ！」

「それでも俺は勝ちたいっス！」

叫ぶ城嶋が、腰を落としてアマレスのフリースタイルのような深い姿勢の構えを取る。それに対抗して烏賊屋は、空手の猫足立ちと呼ばれる構えを取った。

各自構えを取り直した二人の熱い視線が空中で激突して花火の如く弾けていた。そのぶつかり合いながら弾けるパチパチという音が、二人に向けて飛んでくる声援にも掻き消されることなく、観客席の隅々まで届いていた。

腰の高さで握られていた烏賊屋の両拳に、更なる力が入る。その二つの拳が、深い姿勢で構えている城嶋の邪魔をしていた。アマレスなどの腰から下を狙ったタックルに出るには、実に邪魔な位置にある。

城嶋は、明らかに攻めあぐんでいた。

互いの隙を窺う二人。先に動きを見せたのは烏賊屋の方からだった。僅かに左足が地を滑り前に出る。その直後、城嶋が妖術を唱えた。

「チャンピオン・ヴィクトリーモード！」

妖術を唱えた台詞の後に、城嶋の足元で水が弾けるような音が響くと、一瞬で城嶋の体が瞬間移動のように烏賊屋の懐へと飛び込んできた。そのスピードは、日々磨き上げてきた烏賊屋の反射神経をはるかに凌駕していた。まさにテレポートの様に見えた。

烏賊屋の眼前に飛んできた城嶋の体は、燃え上がるように赤く変わり炎のようにライオンのタテガミが勇ましく靡いていた。そして、炎の獅子から一瞬で繰り出される複数の打撃。

パンチ、キック、エルボー、ニー。様々な打撃が烏賊屋の全身を叩くが、どの攻撃にも烏賊屋は反応できずに直撃を許した。それほどに早い連続攻撃だった。そして、最後に何を喰らったか分からないままに烏賊屋の体が後方へと飛んで行く。

「なんだ!?」

飛ばされる烏賊屋が空中で叫んだ。そして、飛び行く烏賊屋の先に、疾風の如く素早い走りで回りこむ城嶋が、拳を振り被って待ち構える。

「ぐはっ!」

城嶋が、飛んできた烏賊屋の頭部に拳を叩き込むと、地面に音を立てて墜落する。その叩きつける攻撃は、一発や二発ではなかった。目にも止まらない連打だった。そして、両手で受身を取りながら地面に烏賊屋が叩きつけられた。

早い。

城嶋の動き全体が、尋常じゃないほどにスピードアップしている。

よろめきながらも立ち上がる烏賊屋の周りを、目にも止まらない速度で動き回り翻弄する城嶋。そして、烏賊屋の隙を突いてはパンチやキックを苛めのように打ち込んでくる。その城嶋の動きは、離れて見ている観客の妖怪たちにもはっきりと捕らえることは出来なかった。

「今度は、スピードアップかよ。巨大化したり硬くなったり、そん

なんばっかだな。あのライオンやろうは……」

タケシが呆れたような言葉を漏らしていた。その間も烏賊屋は、素早い移動から繰り出される城嶋の攻撃を四方八方から喰らい、嬲られ続けている。

何処からともなく飛んでくる素早い攻撃に烏賊屋は、背を丸めて両手で頭部をガードすると、両脚を内股にして股間を守る体制のまま、ただひたすらに嬲るような攻撃に耐えていた。

「調子に乗るな！」

赤く染まる城嶋が、猛スピードで動き回りながら烏賊屋を攻め立てていると、烏賊屋が怒りの色が混ざった声と共に、正拳突きをひとつ放った。

ぶんっ、と音を立てながら空気を抉る正拳突き。スピーディーに動き回る城嶋をきちんと狙っている様子はなかった。

しかし、猛スピードで動き回る城嶋の耳に風鈴の涼しげな音色が届くと同時に、顔面に見えない何かが激突した。また、あの飛び道具の術だ。

「なな！？」

顔面に打撃を喰らった城嶋が、滑るように転倒して止まる。

「また、あの術なのか！？」

偶然だと思った。

いくら飛び道具の術を使っても、あのスピードで動いている自分に攻撃を命中させるなんて、偶然しか有り得ないと城嶋は思っていた。そして、跳ねるように起き上がると、再び猛スピードで走りだし烏賊屋の周りを回りだす。

「ふぅん！」

また、烏賊屋が正拳を放つ。そして猛スピードで烏賊屋の周りを走る城嶋の耳に、あの風鈴の音色が届いた。そしてまた顔面にヒットする正拳突きの衝撃。

「そんなバカな！」

そう叫びながらダメージに脚がもつれた城嶋が転倒して転がる。

明らかに可笑しい。

城嶋は、転がった体を起こしながら烏賊屋の姿を見た。

今の攻撃を受けたとき、自分は烏賊屋の背後に居たのだ。あの正拳が飛び道具だとしても当たる位置には居なかった筈。明らかに可笑しい状況に、城嶋が困惑した表情を見せる。

「なんだ、その術は。前の術と違うっスね！？」

赤く燃え上がるような体を震えさせながらも起き上がった城嶋が、獣のような視線で烏賊屋を睨みながら問う。

烏賊屋は、背後で起き上がった城嶋の方を見ながら再び正拳突き

の構えを取った。

「ああ、ちょっとばかり術のバランスを変更してな」

そう言った烏賊屋の体が僅かに沈んだ。また、正拳が飛んでくると悟った城嶋が、避けるように猛ダッシュで移動した。

しかし、烏賊屋が正拳を風鈴の音色と共に放つと、逃げるようにダッシュした城嶋の顔面を外す事無く殴りつける。

「なんでだ!?」

ダッシュ中に正拳を喰らった城嶋が、そう叫びながら転がった。

今現在、烏賊屋の使っている術の仕組みは、直接的に打撃の衝撃を飛ばして当てているわけではなかった。正拳の衝撃を風鈴の音色に変えて、その音色を聞きつけたものに正拳を喰らったように錯覚させる催眠術のような技なのである。

その為、城嶋がどんなに素早く動こうとも、風鈴の音色が耳に届くたびに攻撃を喰らったような錯覚に陥ってしまうのだ。風鈴の音色が聞こえる限り、回避不能な術である。

そんな術の性質に気づくことがない城嶋は、必死にヴィクトリーモードで素早く動き回り、最速常態で回避しようと試みる。だが、百発百中の正拳を避けることは出来ずに、その術を喰らい続けていた。

そして、ヴィクトリーモードの制限時間が終了した。燃え上がるように赤く染まっていたからだの色も元の色に戻っていく。

「ちっ、ヴィクトリーモードが終わったか……」

毛の色が赤から茶色に戻ると、悔しそうに城嶋が呟いた。

その悔しがる城嶋を余所に、妻の鈴が烏賊屋に告げる。

「あなた、こちらも術を全弾打ちつくしましたわ」

「そうか、まあいい、向こうさんも加速の術が終わった様子だしよ」

そう妻に答えた烏賊屋が、術の終わった城嶋に向かって走り出す。

再び肉弾戦を試みる様子だ。

「城嶋君、ラッキーだね」

「何がっスか？」

走りこんでくる烏賊屋の姿を見てニクソンが言うが、言葉の意味が分からない城嶋が訊きなおす。

「向こうさんも、術が切れたようだよ」

「本当っスか！？」

「ああ、それを証拠に、向こうさんも術をやめて格闘戦に来るじゃないか」

「ああ、なるほどっスね！」

ニクソンにそう答えた城嶋も嬉しそうな表情で烏賊屋に向かって走り出した。

<　九十九神ｖｓ九十九神・十　>

満身創痍の二人が互いに向かって走り出すと、それを見ている観客たちが歓声を上げながらクライマックスが近づいていることを予感する。

３６０度、全方向から飛んでくる歓声が、走る二人の体を水圧の様に叩き、走る速度を上げよと急かしているように感じられた。

歓声に押された二人が接近する。既に拳も蹴りも届く間合いだ。しかし、二人は手も足も出さない。胸からぶつかり合う。

正面衝突した二人の体が弾け合うと、激突音の代わりに観客たちが大歓声を上げドーム内を揺らす。

弾け合った二人が二メートルほど後方に飛ぶと、着地と同時に再び前へと跳ね返るように飛んだ。そして二人の間合いが再び接近しあう。

二人が同時に攻撃を放つ。片やローキック、片やストレートパンチだった。

烏賊屋の蹴りが城嶋の太股に減り込み、城嶋の拳が烏賊屋の胸に突き刺さる。だが、どちらも怯まない。

その相打ちの一撃を合図に二人が足を止めての殴り合いを始めた。

格闘技を知らない餓鬼のような殴り合いではない。真剣を手にした武士やマシンガンを構えたスワットの様に、磨き上げられた危険

な技と超人的体を使った殴り合いだ。足を止めて、防御を捨ててやるようなものではない。下がらない引かない、ただ前に出る。

ノーガードで鬩ぎ合う二人の格闘技家。

互いの拳が、顔面、胸、腹部を容姿やなく叩き。互いの蹴りが、筋肉、骨、内臓を痛めつけあっていく。

その生々しい音が、東京ドームを埋め尽くす観客４５００匹の妖怪達の耳に届きそうなほど激しく鳴り響く。

二人の体から赤く染まった汗が飛び散る。

その光景を見ているタケシの瞳が、まるで恋愛映画のラストシーンを見詰めるように潤んでいた。

「素晴らしいな……」

タケシが呟く。それと同じような台詞をゴーグ大葉と国分も口にしていた。しかしその言葉も妖怪達の歓声に掻き消されていく。それだけ会場は盛り上がりを増しているのだ。

二人に向けられた歓声を無視して拳と蹴りが飛び交う。ガードもブロックも何もない。ディフェンスなんぞひとつもしていなかった。二人は身を削りながらもアタックしか考えていない。ただ、攻撃を繰り返すのみだ。下がらない、引かない、ただ前に出る。

「ぜぇやーーー！」

力の篭った肘鉄が城嶋の首筋に叩き込まれた。そのまま烏賊屋が

肘に体重を掛ける。

しかし、その体重を掛けた烏賊屋の肘を、城嶋がうまいこと両手で掴みこんだ。そして掴んだ肘関節を力任せに伸ばして脇に挟み込む。今までの攻撃と気合の量が違った。

「これならどうっスか！」

「脇固めか！」

自分の腕に仕掛けられた関節技の名前を叫んだ烏賊屋が、そうはさせまいと走り回り込む。その動きが脇固めの体勢に入るのを許さなかった。

肩の関節を決められるのを逃れた烏賊屋が、城嶋の正面に立つ。まだ片腕は城嶋に掴まれたままだった。その常態から烏賊屋が反撃を連続で撃ち込んだ。

下段廻し蹴り、下突き、上段廻し蹴り。三連続の攻撃がすべて命中していた。そして三発目の蹴り技を頭部に喰らった城嶋が、掴んでいた腕をやっと放した。そこに城嶋の正拳突きが顔面を狙う。しかし、城嶋は後ろには逃げずに、逆に前に出た。

その城嶋の耳の側を拳が空気を抉りながら進む。鼓膜に竜巻のような音が轟いた。だが、城嶋の突進は止まらない。額から烏賊屋のボロボロになったマスクの中心へとつっこむ。

ぶち当てた額から鼻が潰れる水っぽいしい感触が伝わってくる。見事なヘッドバットだった。そして、更に続く城嶋の攻撃。みぞうちにニーを突き上げ、エルボーを鎖骨の上へと叩き落す。

三連の攻撃に揺らめく烏賊屋の隙を突いて、城嶋が真上へと高くジャンプした。そして両足を空中で揃えながら膝を曲げて自分の胸に近づけると、溜め込んだ勢いを爆発させるように両脚を伸ばして烏賊屋の胸板を蹴り飛ばす。

「ナイス、ドロップキックだ！」

ゴーグ大葉が城嶋の繰り出した豪快な蹴り技を見て、褒め称えるように声援を上げた。

城嶋の力強いドロップキックをその身に受けた烏賊屋が二十メートルほどうしろへと飛ばされて、後方にあったリングの赤いポストに激突して止まった。

プロレスのリングを背に、崩れた体を起こす烏賊屋。その烏賊屋にゆっくりと歩み寄る城嶋。二人が場外戦を始めてから既に二十秒以上が過ぎている。プロレスのルールだったら両者リングアウトでドロー試合になっていることだろう。

リングサイドに肘を乗せて寄り掛かる烏賊屋が、弱々しい声を出した。

「やっぱり歳かな、少々疲れてきたぜ」

「珍しく弱気なことを言いますね。あなたには、そのような弱気な言葉は似合いませんよ」

「はは、そうだな、情けねえ。戦っている最中に言うような言葉じゃあねえわな」

「はい、もっと心おきなく戦いください。勝敗なんて、気にしなくていいのですよ。あなたは修羅、戦いをお楽しみなにればいいのです」

「お前には感謝している。今まで修羅の如き人生を歩むワシについて来てくれて……」

「何をおっしゃいますか。あなたが私の為に修羅になったことを感謝しています」

「……そうか」

珍しく弱音を吐いた烏賊屋に妻が励ましの言葉を掛けると、烏賊屋がリングサイドから付いた肘を離す。

そして、退脚を強く後ろに踏み込み、右拳を腰に添えた構えをどっしりと築く。左手は防御を見せずにダラリと力なく垂れ下がっていた。

「ん、又あの飛び道具の術か？」

「いいや、違うようだね。妖気がまったく感じられない」

リングを背にしていた対戦相手に近づくように歩いていた城嶋が言うと、それにニクソンが答えた。そして城嶋は、三メートルほどを残して歩みを止める。

構える烏賊屋が、自然体のまま立つ城嶋に話しかける。

「体力も妖力も限界が近くてね。そろそろ勝負を決めさせてもらうぞ」

少し俯いた角度から鋭くも暖かい眼差しで見る烏賊屋が言うと、彼の体から熱気のようなものが沸き上がり、背後の景色を蜃気楼の様に歪ませて見せる。とても強く凛々しい気を感じさせていた。

「城嶋君、こちらも覚悟を決める時だよ」

「ああ、分かってるっスよ、ニクソンさん」

一度、深呼吸してから城嶋も構えを取る。少し背を丸め両手に力を入れずにゆったりと前に出す。両膝を少し曲げて腰を落とした。アマレスのタックルを狙うような低い構えではなかった。それは、プロレスのストロングスタイルのような構えだ。

「最後は、プロレスで決める積もりだな、城嶋の奴は……」

「そのようだな……」

観客席のレスラー二人が、城嶋の構えを見て言った。

その台詞の意味するところは、城嶋が最後に狙っている技が、アマレスの技でも、キックボクシングの技でもなく、プロレス特有の技であることを意味していた。

城嶋は、この九十九神対決のフィニッシュを、レスラーとして決めようとしているのだ。その気持ちが、ゴーグ大葉と国分には、とてもよく理解できた。

烏賊屋も同じである。最後は空手技で決める積りだ。構えから明らかに正拳好きを狙っている。

「なるほど、烏賊屋のおっさん、最後は、あの『芸術的正拳突き』を狙っているのか」

タケシがそう呟く。

タケシが述べた『芸術的正拳突き』とは、以前タケシが光臨館虎野町支部道場に顔を出した際に、烏賊屋が門下の加藤相手に見せた、あの正拳突きである。

踏み込み、関節の曲げぐあい、硬直と固定、重心移動、腕の捻り、相手との距離、打ち込むタイミング、それら一つ一つの体の動きが理想的条件をクリアーした時にだけ実現する究極の一撃。本人もその理想的一撃を、動く対象に決められることは、年に一度あるかないかのことである。

この技を空手界では『一撃の極み』や『剛体術』とも呼ばれている。

達人の中では正拳だけではなく、槌拳やチョップなどでも技を成功させる者もいるが、これを動く対象に成功させるとなると、その難度は更に数倍へと膨れ上がり難しくなる。ほぼ実戦では成功が有り得ないとも言われている技術だ。

だが、タケシですら対人では成功したことのないその技を烏賊屋は、対人相手に何度か成功させている。まさに、一撃必殺を空手に信じる者たちにとっては、夢の技をだ。

「城嶋君、気を付けたまえ。強烈な一撃を狙っていますよ」

「はい、分かってるっス……」

ニクソンのアドバイスに答える城嶋も、烏賊屋から放たれるオーラを感じ取り、その危険性を察していた。

烏賊屋は正拳を狙ったままの構えで僅かに俯き視線を城嶋の黒いリングシューズに向けていた。自分からは動かない様子だ。

城嶋も、大きなアームストロング砲の前に立っているような状況に攻め倦んでいた。額から血の混ざり合った汗を流す。

しばらく向かい合う二人の様子に、観客の妖怪も緊張して静まり返る。ドーム内には、僅かなざわめきだけが流れるように聞こえていた。

二人が居るのはリングの場外。烏賊屋がリングを背にしている。後ろには回りこめない。良いポジションに居る。

互いに向かい合い動かない二人。このままでは拉致があかないと思った城嶋が、僅かに前へと出た。

「すまんな、若いの、気を使わせて。俺たち光臨館には「空手に先手なし」って言葉があってな」

「そうっスか……」

「まあ、状況しだいだけどよ」

動く事無く語る烏賊屋の俯いた表情が、そう言いながらも口元だけ笑っていた。

＆ｌｔ；　九十九神ｖｓ九十九神・ラスト　＆ｇｔ；

城嶋が、両手を握り締めながら息を大きく吸うと、その拳を大きく上げて天井のライトに向ける。日食の如く照明が、ふたつの拳に隠れながらも光って見えていた。

「どおりゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああ！！！！」

そして大きな雄叫びを上げながら振り上げた両拳を腰元に引き寄せ気合を貯める。

全身に闘志が宿ると、筋肉の一つ一つがパンプアップされたかのように膨れ上がっていく。そして周囲の空間を溶かして見せる。

空気の揺れを全身に感じる。体から気合が溢れ出ていた。血管の中を、ドロドロに滾る何かが流れ、全身の隅々まで運んでいく。

城嶋は、腹の底から吐き出した雄叫びが枯れると、それでも歯を強く食いしばり、天井のライトを双眸に映していた。

烏賊屋がそんな城嶋を、ゆったりとした眼差しで見ている。すると城嶋の視線が烏賊屋に戻る。熱い良い目をしていた。

ラストアタックを覚悟したようすだった。

そして、勢いを充電した獅子の体が大地を蹴りつけ空手家仮面へと飛び掛る。その様子は、指の爪を獣の様に立て、両手を頭より高く上げ、大きく口を開けて噛み付きを狙っているかのように見えた。

まさに獣そのもの。そこには獣王の姿があった。

二人の距離が迫ると、烏賊屋の放っていた闘気が幻のようにスーっと消えた。

それはまるで烏賊屋の体の中に吸い込まれるように消えて、そのまま飛びかかる城嶋おも吸い込もうとしていた。少なくとも辺りを飛び交うように流れていた勇ましい空気を吸い込んでいくのが分かった。

一瞬で消えた闘気に、飛び掛った城嶋が戸惑を見せる。

まるで眼前の敵が消えたように感じた。目を丸くしている。気配も消えて、存在も消えたように感じたからだ。

それだけではなく、別のものまで吸い込むのだ。まるでその存在は、ブラックホールの様に見えた。

「すごいな……」

様子を見ていたタケシの顔が、あっけに取られながら呟いていた。それだけ今の烏賊屋が見せる光景は、武神の域に踏み込んでいるのだ。

まさに宇宙だ。

そこには銀河が存在していた。

闘志、殺気、気配、そして存在までもが無に近づいた烏賊屋が、腰にある拳を正拳に変えて前へと突き伸ばす。

さほど力の入った一撃には見えなかった。速度すら素人で捕らえられるほどのものに見えた。その正拳が飛び掛ってきた城嶋の水月の上へと滑り込む。

しかし城嶋は、その正拳突きに対して、一切の防御も回避も見せなかった。もしかしたら、避けることも防ぐことも出来なかったのかもしれない。

命中。

直撃だった。

しかし、音も何もしなかった。観客も静まり音を立てない。

東京ドームの中に居る四万五千以上の存在が音も立てずに静まり返っていた。まさに無音。

烏賊屋は正拳を伸ばした姿勢で止まり、城嶋も正拳を水月に受けた体制で動かない。

物音ひとつなくした真空のような空間で、一番最初に動いたのは、正拳を打ち込まれた城嶋だった。

ぐらりと膝が僅かに曲がり、体が右へと揺らぎ倒れていく。そして右手が烏賊屋の股座に滑り込んでいった。左手は烏賊屋の奥襟を取る。

観客席からざわめきが一斉に上がった。

決まっていない。勝負が着いていない。

あの正拳突きは決まっていないと動き出した城嶋を見て、全員が同じことを思った。

「失敗か！」

烏賊屋の体が城嶋に持ち上げられるのを見てタケシが叫んだ。

「ボディースラムか！」

持ち上げられた烏賊屋が言った。

「違う！　パワースラムだ」

烏賊屋の体が城嶋の胸の上で弧を描き後方へと進むのを見て国分が言った。

「違うな、ありゃ～……」

ゴーグ大葉が呟いた瞬間、烏賊屋の体が頭から地面に落とされる。

戦慄の光景と共に、重い低音が響いた。

見ていた者たちの背中に、ゾクゾクっと冷たいものが下から上へと駆け上っていく。

「ノーザンライトボムっスよ」

烏賊屋を頭から落とした城嶋が、ゆっくりと起き上がりながら繰

り出した投げ技の名前を口にした。

ノーザンライトボムを喰らった烏賊屋の体は、地面に頭を半分ぐらい減り込ませ、突き建てられた逆さまの姿のまま真っ直ぐに立っていた。まるで逆十字架の墓標だ。

逆さまのまま立つ烏賊屋の顔を見下ろしていた城嶋が、動かない烏賊屋を確認すると今度は、観客席を見回すように見て回る。

まだ観客たちは、ざわめいていた。

「おれの勝ちっスね……」

城嶋が呟いた瞬間、ざわめきが歓声に変わりどっと沸いた。城嶋が、その歓声に勝利を味わおうとした瞬間だった。

「こっちを向きな、若いの……」

烏賊屋の声だった。

城嶋は驚きの表情のまま、その声に対して素直に従い後ろを振り向いてしまう。そこには、あの正拳突きの構えを取った城嶋の姿があった。

今湧き上がった観客の歓声は、立ち上がった烏賊屋を見たからだ。城嶋の勝利に向けられた訳ではない。それに城嶋も気づく。

距離は殆ど目の前。打撃だけではなく掴みにいける間合いであった。

慌てた城嶋が手を伸ばし烏賊屋の肩を咄嗟に掴んだ。その瞬間、烏賊屋の正拳突きが放たれる。それは、神が迫ってくるように感じた。

歓声が二人の鼓膜を揺らす中、別の音が体を伝わり聞こえて来る。最初に聞こえてきたのは、肉を叩き潰す音だった。その直後に、骨を砕く音がゴキゴキと聞こえてきた。複数の骨が砕ける酷い音だった。

城嶋にだけ、その二つの音の後に別のものを音の如く感じる。

それは、体中の血液が逆流して、穴という穴から、全身のすべての毛穴から、どっと吹き出るような感覚だった。

烏賊屋が放った拳を引き戻すと、城嶋の胸に陥没した跡が残っていた。四つの拳と四つの指の跡が、はっきりと分かる。

すべての時間が静止した感覚だけが残った。歓声も聞こえない、何も聞こえない、無音の静けさ。そんな中、口や鼻から血が零れ出る感覚だけは、城嶋にも分かった。ヤバイ一撃を食らったことも分かっていた。

ゆっくりと打たれた自分の胸を見下ろすと、鍛え上げられた胸の真ん中に、拳が減り込んだ跡が見えた。そこに口から溢れた血が零れていく。

しかし、痛みは感じない。ただ、なんだか寒さを感じた。「負ける？」そんな言葉が脳裏を過ぎる。

それでも顔を上げて前を見ると烏賊屋の顔があった。頭から滝の様に血を流し真っ赤に染まった顔だった。でも笑っていた。城嶋には、その笑みが不思議な笑みに見えた。

「お前の勝ちだ」

そう言ったのは、赤い微笑みを浮かべていた烏賊屋だった。言われた城嶋は、おもわずキョトンとしてしまう。

「大切なことだから二度言うぞ。お前の勝ちだ」

「え……？」

言葉の意味を良く理解できないまま城嶋は、そのような台詞を口にした烏賊屋の顔を、じっと間抜けの様に見ていた。警戒もせずに、構えも取らずに、だだ棒立ちで見ていた。

そんな城嶋を余所に、烏賊屋の体が後ろへとバタリと音を響かせ倒れ込む。そして、ピクリとも動かなくなった。

立ち尽くす城嶋、倒れる烏賊屋。

最後に勝敗を決するほどの一撃を放ったのは烏賊屋。それを食らったのは城嶋。

だが、立っているのは城嶋。倒れているのは烏賊屋。

その光景を見守っていた観客から、パチパチと拍手が聞こえ始める。その拍手は、やがて歓声を交えながら大きく成長していくと、城嶋の体を圧倒的重低音で振るわせる。

拍手と歓声を全身に浴びながら城嶋が、傷ついた体をよろめかせながらもリング内へと帰ろうとしていた。

リングサイドからサードロープの下を転がりリング内に戻った城嶋が、僅かに残った力を振り絞るように立ち上がると、リング中央で四方をぐるりと見回した。その城嶋に歓声が絶える事無く飛んでくる。

歓声を浴びながら強く拳を握る城嶋。

「まだだ、まだ足りない」

そう言いながら拳を更に強く握り、全身を振るわせる。そして、溜め込んだものを拳に宿し、天に向かって一気に放出した。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

握った拳を振り上げながら勝利の雄叫びを城嶋が上げると、観客たちがそれに答えるように、今日一番の大歓声をリング中央へと向けて放った。

歓声に、ロープが揺れた。マットが揺れた。勝者の魂が揺れた。

勝者を称える歓声が、傷だらけのチャンピオンを祝福するように押し寄せる。

城嶋は、その歓声を浴びながら拳を上げ続けていた。

プロレスラー・城嶋悟　＆amp;　チャンピオンベルトの九十九神・ブラットニクソン

ｓｖ

空手家・烏賊屋兆殻　＆amp;　風鈴の九十九神・烏賊屋鈴

勝者、城嶋・ニクソン組

ここからが、新たなるチャンピオンロードのスタートである。

<　九十九神ｖｓ九十九神・ラスト　>（後書き）

やっと決着～

主人公たちとは、まったく関係ない話をこんなに長々やってよかったのだろうか……

ちなみに、もうひとつ書いている小説「ポニーテールデストロイヤー」は、今回の話の外伝みたいな話です。
よかったらよろしく＾＾

<　八尾弦徳・1　>

烏賊屋と城嶋の戦いが終わった。死にこそしなかったが、二人とも重症である。

どちらが勝ってもたいして得のないはずの戦い。その戦いに二人は全力を尽くして戦った。

肉を叩き合い。骨をきしませ。筋肉をぶつけ合い。根性を見せ合った。

最初は、自分たちの属する格闘技団体と流派をかけての戦いのはずだった。しかし途中から二人は、そんな理由があったことすら忘れて殴りあった。戦いを楽しんでしまったのである。

このような雄たちの中ではよくあることだ。気にすることではない。理屈ではないのだ。

場外で倒れていた烏賊屋は、妖力共有が解けたあとにタンカーで運ばれていく。その横を妻の鈴が心配そうな表情で寄り添っていた。

リングから降りた勝者の城嶋もまた妖力共有を解除して、プロレスラーらしく観客たちの拍手に答えながら控え室に繋がる廊下の中へと進み消えていく。その後ろを渋い笑みを浮かべながらブラット・ニクソンがついていく。

観客たちから見えなくなるまで自分の足で歩いていた城嶋が、通路と会場を隔てる熱い鉄の扉が音を鳴らしながら閉まると、ぐったりと壁に体を寄り掛け、力なく崩れそうになる。

本当は、自分の足でここまで歩くのもしんどかった。しかしプロレスラーの意地がタンカーの使用を拒否して、ひとの肩を借りるといった好意を拒んでいたのだ。

勝者は、チャンピオンは、観客に英雄として見送られるべきものなのだ。英雄が情けない姿で帰るようでは、勝った相手に申し訳が付かない。

ニクソンが、城嶋の肩に軽く手をそえながら言った。

「大丈夫かね、城嶋くん？」

「はい、なんともないっス」

血と汗が混じりあったものが全身から流れ落ち、寄り掛かった壁にもべっとりと跡を残す。

「肩を貸そう」

そう言ってニクソンが城嶋の腕を片にかつぐように手を貸す。

「良く勝ってくれましたね」

肩を貸したニクソンが優しく言う。似合わない言葉だと城嶋は思い、力少ない笑みを見せた。

「ニクソンさんこそ良かったんスか？　相手の九十九神を食べなくても？」

「ああ、かまわんよ」

そう言いながらニクソンが、歯茎をにんまりと見せながらウインクをひとつした。アメリカンなジェスチャーなのだろうが、正直、気持ちが悪かった。

そして前を向くニクソン。

「三種三食の本能を堪えるのは、かなり辛いと聞いていたんスが……」

城嶋が、疲労のために虚ろになった眼差しで相棒を見ながら訊く。その言葉に、前を向いたままのニクソンがさらりと答える。

「悪党ならば容赦なく食べましたが、あれほど素晴らしい戦士と、それを支える献身的な妻を食べれませんよ。私は、そこまで外道にはなれなくてね」

「そっスね……。あんた、善人なんスね」

「ああ、まあな」

肩を組み合う二人のマッチョマンが、ニヤニヤと笑う。まるで子供のような笑みだった。だが、一歩間違えれば、ホモセクシャルな光景である。誤解されないように気をつけてもらいたいものだ。

肩を組みあい進むふたり。

コンクリートから放出された冷たい空気が流れる通路には、あの熱い空気がたちこめている会場からの歓声は、僅かにも聞こえてこ

なくなっていた。

さすがに披露とダメージの限界が近い城嶋は、笑う力すら使い尽くしつつあった。早く控え室に戻って寝転びたかった。少し休んだら、とっととホテルに帰って冷えたビールを一気に飲みほし、ふかふかのベットで眠りにつきたかった。とにかくゆっくり休みたい。

戦いが終わって闘争心が満腹になるほど満たされた城嶋は、そんなことを考えながら痣だらけの体を無理やり動かし歩いていた。

もう、しゃべる体力も残っていないと悟ったニクソンもまた、黙ったまま肩を貸して歩いていた。

そしてしばらく二人が控え室を目指して歩いていると、前方に何かが見えてくる。それは、廊下の中央に正座をしたひとりの男の姿だった。

二人は何事かと歩みを止めた。そして男を見る。

きりっとした眉に誠実そうな顔つきで、白い道着に黒い袴を履いた二十代の青年。目蓋を瞑り精神統一をしているのか、周囲に重々しい空気が漂っていた。

否、重々しいというよりも、殺伐とした空気といえた。

「は、八尾弦徳！」

声に出したのはニクソンだった。その声に、ありありと緊張がこもっている。

そう、道を塞ぐように正座をしているのは、本日のメインイベン

ター、八尾弦徳である。

「なんスか、こいつ。なんで、こんなところに……」

城嶋の声が震えていた。披露のためではない。

目の前に正座する男が、道を塞ぐ大きな岩のように見えた。それ以上に恐怖の対象のように見えて背中に冷たい汗をかかせる。ここから先には進ませないと言っているように思わせていた。

二人は八尾弦徳の前で立ち止り、そのまま立ち尽くすしか出来なかった。

ただ正座しているだけの男が、二人の猛者を、そのような状況へと追いやる。その状況に、本人たちも信じられないと感じていた。

そんな二人の後ろから女性の声が飛んでくる。明るい声だった。

「弦徳様、そろそろ試合が始まるお時間です」

可愛らしい女性の声だったが、今の二人には、そんなことは関係なかった。

その声の主が、二人の横を小走りで過ぎていく。二人をちらりと見て大きな瞳をパチパチさせると、女性は不思議そうな顔をしていた。

「ああ、分かったよ、珠美さん」

駆け寄ってきた胸の大きな女性に答えた八尾弦徳は、そう言って

ゆっくりと双眸を開く。その瞳が、城嶋とニクソンを睨んでいるように見えた。少なくとも二人にはそう見えた。

一気に四人が居る廊下の空気が収縮するように感じられた。それは錯覚である。

城嶋とニクソンは緊張を高めたが、珠美はあどけない表情のまま硬直している二人を見て首を傾げていた。珠美には、弦徳の放つ重々しい気が伝わっていないようすである。

「では、行きましょうか、珠美さん」

「はい」

明るい元気な返事だった。

珠美の返事を聞きながら立ち上がった元徳が歩き出すと、城嶋とニクソンが体を離して左右の壁に退く。その二人の間を静かに弦徳が進んでいった。退いた二人は眼中に入っていない様子だった。最後に珠美が二人に一礼して弦徳の後を追いかける。

「な、なんスか、あの殺気……こわいっスよ……」

「すごいな……、あれが妖怪の長老クラスの気か……」

二人が弦徳から感じ取っていたものは、鋭いまでの殺気だった。それも普通ではない。まさに妖怪連合の頂点に君臨する十二長老に加わろうとしている男の気だった。化け物の気だ。長年、九十九神をやってきたニクソンには、その格が良く分かった。

廊下を進む弦徳の歩みが、少しずつ大きくなる観客の声援を聞くにつれて速度が落ちる。そして廊下の先に大きな扉が二つ見えてきた。両開きの扉だ。

あの扉の向こうに敵が居る。

あの扉の向こうに仇が居る。

あの扉の向こうに春婆怒が居る。

あの男を連れた春婆怒が居る。

五百年待ちこがれた戦いがある。

知らず知らずのうちに弦徳の顔が怪しく変わり、狂気に変貌していく。

脳裏に色々な残酷めいた言葉が飛び交う。春婆怒をどう殺そうか、春婆怒の体をどう引き裂こうか、春婆怒の頭をどう潰してやろうか。

そんな想像を扉の前でめぐらしている弦徳の表情が、どんどんと極悪妖怪の様に変わっていく。まるで悪魔に魂を売り渡したかのように。

「春婆怒……！」

弦徳が、牙を剥き、そう呟いた。空気が殺気で濁っていく。魔道に落ちていく。

「弦徳様、いけません！」

少し強めの声だった。珠美が後ろから弦徳の背中に声を飛ばした。その一言に弦徳が振り返る。一瞬だが狂気を忘れた表情であった。

弦徳と珠美の視線が合う。

珠美はいつものように微笑んでいた。ぽかぽかのお日様のような笑みであった。弦徳が、その笑みに動きを完全に止めてしまっていた。

「弦徳様、そのような思いで、その扉を開けてはいけません！」

「なぜに……？」

素直に聞きなおす弦徳。

不思議な表情を作る弦徳が、体の向きを変えて完全に珠美と向かい合う。

弦徳が、自分と比べて頭ひとつ分低い彼女を見下ろすように真っ直ぐに見詰める。無垢な表情が微笑んでいた。

「弦徳様、あなたはこの戦いに勝てば、我々虎野町支部の長になられるお方です。そのあなたが私利私欲の為に、連合の方々の前で傲慢なままに戦ってはいけません。そんな戦い方をして勝っても、皆がこの先ついてはきません」

「……」

珠美の言葉を聴きながら弦徳は、目を大きく見開いていた。その

表情は、珠美の言っている意味を強く感じ取っている様子だった。

「それにです！」

珠美の説教のような言葉が尚も続く。少し怒ったように話す珠美は、それでも可愛い。

「あの春婆怒は、怨み辛み、憎しみや怒りを武器に戦って勝てるような相手ではありません」

弦徳が、珠美の顔を見ながら何かに気付く。

「あの春婆怒の使い手は、兄の仇である黄金騎士を倒した男です。倒した後に泣いた男です。そんな人を相手に、仇だのなんだの言っていてはかないません。きっと負けてしまいます」

それだけではない。珠美は、タケシに片思いをいだき、ビルの二階にある探偵事務所の窓から、日々タケシの姿を眺めていたのだ。恋心を胸に秘めた乙女の観察力は、時にかたよりがちになるが、今の珠美が言う台詞は間違いではなかった。

珠美の言葉には強い意志が感じられた。弦徳は、そんな彼女の瞳をじっと見ていた。大きな黒水晶のような瞳に自分が映っている。ほんの少し前まで、この瞳に映る自分は、どれだけ卑しく映っていたのだろうか。想像もしたくない。

「戦う目的が……、背負うものを間違えては、勝てる相手ではありません」

珠美が真剣な表情をする中、弦徳の顔がゆるゆると笑顔に変わる。

「ありがとう、珠美ちゃん」

弦徳に続いて珠美も微笑む。

「あやうく、自分に負けるところでした」

「頑張ってください、皆のために！」

「ああ！」

珠美が可愛らしい笑みで応援の言葉を掛けると、弦徳もそれに明るく答えた。

再び珠美に背を向けた弦徳は、歓声が漏れ出る扉に向かい合う。先程とは、別人の表情であった。過去を見ていない、未来を見た表情である。珠美が、その背中を見て安堵する。

そして弦徳が、凛々しくも誠実そうな眼差しで、扉を両手で開く。

ゆっくりと開く両開きの鉄の扉。その開かれた扉の向こうから歓声と照明の光が弦徳の全身に飛んでくる。とても重い重圧。とても暑い空気。それらの他にも色々な思いが飛んできて弦徳を叩いて止まない。まるで嵐だ。

前へと、リングへと、未来へと向かって歩き出した弦徳を、珠美が明るい笑顔で見送っていた。そんな珠美を背に進む弦徳が、歓声に掻き消されるような小さな声で呟いた。

「龍信さん、あなたは妹さんを素晴らしい女性に育てたのですね。

静香さんが焼く理由が良く分かりましたよ……」

弦徳は思う。

五百年待ち望んだ戦いが、五百年経つ間に形を変えたのだと。もう、自分だけの戦いではない。そして、自分の力だけでは敵わない相手であると。

そして先程、新しい目的が出来た。小さな願いのようなものだ。

この戦いが終わったら、もう一度、彼女の笑顔が見てみたい。

そのためにも、負けられない。そんな僅かな思いが勇気に替わる。

大歓声を浴びながらリングに近づくと、リング上から鬼神のような気配がのろしを上げていた。見えない気の塊だ。

「遅かったじゃあねぇ～か、キツネ野郎！」

リングの上から傲慢な笑みと、冷めた美しい顔が見下ろしていた。

「春婆怒、それに堂本タケシ！」

人間が、神にも近い化け物のような気を放っている。それは殺気ではないが、重い威圧感をたっぷりとふくんでいる。

弦徳は、リング上の男女を見て、改めて思った。

確かに、怨み辛みや復讐心なんぞでは、この二人に、容易く押しつぶされていただろうと。

「早くも……、勝利の女神がついていたことに感謝しなくてはならないようだ……」

珠美の言葉がなければ、敗北の理由すらき気づかずに負けていたかもしれないと思う。

「おら、あがってこいよ」

そう言いながら二人がリングの奥へと下がっていた。

それを見て弦徳がリングに登る。

いよいよ、宿命の戦いが始まる。この戦いが、未来を決めるのだ。

<　八尾弦徳・1　>（後書き）

おいおいおい、珠美は俺の嫁だぞ！
弦徳ふぜいにフラグを立てさせてなるものか！！
全力で邪魔してやる！！！

<　八尾弦徳・2　>

どちらに向けられて飛んできているかがはっきり分かる声援。その声援を浴びながら八尾弦徳がロープの間をくぐり、リング内に入ろうとする。そう、声援は彼へと向けて飛んできていた。タケシたちにとってここは、完全アウェイである。二人に対してヤジが飛んでくることはあっても応援の言葉が飛んでくることは間違い手もない。

リング内からタケシの熱い声が聞こえてくる。

「妖力共有・変身！」

セカンドロープを跨いでいた弦徳に、緑色の妖気を含んだ突風が押し寄せてくる。その風に弦徳は掴んだロープを強く握り締めた。

風が止み、ロープをくぐった弦徳が顔を上げると、そこには九十九神を身にまとったタケシの姿があった。しかもコーナーの前で、礼儀正しくも正座をしている。先程までの傲慢な態度が嘘のように見えた。

変身したタケシは、黒緑色をした爬虫類のような皮膚の上に、黒い甲冑を身にまとっていた。その姿で正座をしている。

弦徳が軽く袴を払うと、反対側のコーナーで正座をした。弦徳のほうが赤コーナーで、タケシが青コーナーだ。

二人か見つめ合う。しかしタケシの視線は仮面に隠れて見えない。それでもまっすぐに弦徳の目を見ているのが分かった。仮面の向こ

うから情熱をおびた気が飛んできている。弦徳は、それを感じだ。

観客の歓声が小さくなり、代わりにザワザワとざわめきを大きくしていく。二人は動かない。まっすぐに向かい合ったまま静かに正座をしている。武人らしい姿に見えた。

「すまんが少し戦うのは待ってもらいたい。今、会場の準備をしているから」

その声は、二人が居るコーナーとは別の角から聞こえてきた。声の聞こえたほうを弦徳が見るが、タケシは見ない。

弦徳には聞き覚えがある声だった。

「十番長老殿ですか？」

姿は見えぬが声の聞こえたほうに弦徳が言った。タケシが動かずに、じっと正座をしていた理由は、十番長老に止められていたからだ。そこに見えない存在が居ることは、前もって知っていた。

弦徳がインビシブルのほうを見ていると、グランドを囲む壁という壁に七人岬たちが御札を貼りまくっていた。まるで映画のポスターを無断で貼っていくようにだ。

インビシブルが言う。

「これから大掛かりな結界を作ります。この程度の会場では、あなた方が戦うには狭すぎるでしょう。ねえ、弦徳君」

「たしかに……」

弦徳は、声だけ聞こえるほうを見ながら言った。

おそらく自分が本気を出したのならば、観客席で見ている妖怪たちを百匹単位で巻き込みかねないと思っていた。

弦徳は、あのガシャドクロの封印でも本気を出しては居ない。だが、目の前で正座をしている春婆怒を相手ならば、おそらく本気を出さざるお終えないと考えていた。今までのように、抜刀術や居合い抜きに妖術を絡めていた程度の技では足りないと感じていた。

「二人に云っとくよ。これから張り巡らせる結界は、我々十二長老の中でも結界術に長けた、五番長老の井戸仙人殿に、妖力量が異常な二人、七番八番長老の前鬼殿と後鬼殿がサポートして作り上げる極上品の結界です。おそらく、日本一強力な結界と呼べる代物になるでしょう」

「能書きはいいから、それでどうなる。結果だけ聞かせてくれ」

正座のまま弦徳のほうを見るタケシが、話の先を急かす。

「ようするにですね。グラウンドの周りに強力で頑丈な結界を張ります。その結界が、観客たちを流れ弾から守ってくれますから、思う存分戦えることでしょう。と、言いたいだけです」

「分かりました」

しっかりとした口調で返事を返した弦徳に対して、話を急かしたタケシは何も言葉を返さなかった。静かに正座をしている。

インビシブルがそんな話をしていると、七人岬たちが大漁の御札を貼り終わってはけていく。すると、一塁ベンチ側で観戦していた十二長老の席から井戸仙人と一緒にふたりの童が前に出てくる。

その下、一塁側ベンチの中には、油儀を中心とした虎野町支部の面々と、一七五が引き連れてきた一家の者が数人いた。彼らは特等席での観戦である。

「いよいよ術を張りますよ」

そう十番長老がタケシと弦徳のそばで言うと、ベンチの屋根の上で五番長老が胡坐をかく。その枯れ枝のような体の肩に、男の子と女の子が左右から手を添える。

「しゃっしゃっしゃっ。どれどれ、久々に腕によりをかけた結界でも作ってみるかのぉ～」

井戸仙人の両肩を掴んだ前鬼と後鬼が、赤と青のオーラを湯気のように立てて妖力を井戸仙人に送り込み始めた。みるみるうちに井戸仙人の体に気が流れ込んでいくのが見ている者たちにも分かった。

「ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ！！！」

井戸仙人の半分以上の歯が抜け落ちた口から術に集中する声が漏れ出るなか、二人の妖力を注がれた体が、まるで枯れ井戸の水が満ちていくように皺が消え、見る見るうちに大きく膨れ上がってく。井戸仙人の棒のような体があっというまにボディービルダーのようにマッチョに変わっていった。しかし、顔だけはしわくちゃのままだった。

ボリュームを増した井戸仙人の体は、ぼろきれのような着物の胸元から見える大胸筋が、座布団を詰め込んだように分厚くなり、袖から生えた両腕はゾウの足のように太くなっていた。

その極太の腕にある両掌を顔の前で合わせた井戸仙人の皺だらけの顔に、青筋が幾つも浮かび上がっていく。

井戸仙人の額に浮かび上がった血管が、首をたどり全身へと降っていく。それにつれてグランドの壁に貼られた数百枚の御札が、稲妻のような光を散らし輝き始めた。そこから淡い透明な壁が上へと登り、東京ドームないにもうひとつのドームを作り上げていく。

井戸仙人が作る結界が完成に近づく中、ベンチ内にいた油儀が、戦う者と観戦する者とを隔てるようにある結界の壁を見上げながら言った。

「凄いな。規模こそ違うが、七人岬がガシャドクロの時に貼った結界とは桁違いの代物じゃ……」

「そんなに凄いんですか、この結界？」

油儀の言葉を横で聞いていた珠美が問うと、目の前にある透明な結界の壁を見上げながら油儀が答える。

「ああ、ここまで強力な結界はそうそうないぞ。おそらくこの結界を破壊しようと試みるなら、長老レベルの術者を交えても、三日は掛かる」

「そんなに凄いんですか……」

緊張しながらも話す油儀の顔を見ていた珠美が、視線を前に向けて結界の壁を珍しそうな眼差しで見る。

「おそらく、これ程の結界を作れるのは、日本各地を探しても何人も居ないじゃろう」

油儀が言う「何人」の中には、春婆怒も含まれている。春婆怒は、実のところ結界術のスペシャリストだ。

九十九神は、使い手と妖力共有しなければ、そこらに居る小者妖怪と代わらない。とても弱い。九十九神とは、使い手と妖力共有して始めて強い妖怪へとなる。

その九十九神の最大の弱点のひとつが、妖力共有していない時に使い手が直接狙われることであった。使い手が寝首をかかれると、それで終わりとなる。

春婆怒が、他の九十九神と違い長生き出来ている理由は、そこの違いにあった。

使い手が眠っているときは、探知結界や防御結界で、日々忍び寄る敵から守っているのだ。そして、適切な使い手が居ないときは、春婆怒村のように自分を守る強力な結界を築きあげて身を守る。こうすることで春婆怒は、他の九十九神よりも生存率を上げてきていたのだ。

やがて井戸仙人が作り上げていた極上結界が完成する。

「さあ、これで心置きなく戦えるよ。ただし、結界の壁には強力な電流も流れているそうだ。むやみやたらと触れないことをお勧めす

るよ」

インビシブルがそう言うと、タケシが見えないが居ると思われる方に首を曲げて言う。

「あんたも俺たちの戦いに巻き込まれるなよ。もう結界から出れないんだろ」

タケシの言うとおり、既に結界は口を閉ざし出口はひとつもない。インビシブルは、タケシたち同様に井戸仙人が築いた結界内に閉じ込められている。

「あはは、私は邪魔をする気はないよ。これでも十二長老のひとりなんでね。ちゃんと後のことは考えてありますよ」

そう言うと、インビシブルの声が聞こえていた場所から気配が消える。それにタケシが気づき、仮面の下で目を丸くさせた。

「消えた……？」

元々見えなかった存在が姿を消した。間違いなくその場から消えていた。

「ただいま」

再びインビシブルの声が聞こえたのは、十二長老たちが横一列になって観戦している空席のひとつからだった。無人の席の背もたれが、見えない重みが掛かり僅かに後ろへと沈んだ。

「結界についての説明、ご苦労じゃった」

無人に見える席のほうを見た一番長老のむらりひょんが言うと、自分の席に戻ってきた十番長老が、見えないが両手足を組みながら観戦モードに入る。

ちなみに見えていないが彼は全裸である。ちょっと冷房に寒さを感じていた。でも服を着ないのが彼のポリシーである。

その空席を井戸仙人がチラリと見て言う。

「毎度毎度思うんだが、ワシの自信作とも言える結界を御主は容易く通り向けるが、一体全体どうやっているのじゃ。いい加減に仕掛けを訊かせてくれぬか？」

「ダメですよ、五番殿。これは企業秘密です」

「ちぇっ……」

いつもと変わらない十番長老の回答を聞いた五番長老が、子供のようにすねた様子を見せる。しかしその姿は、顔だけ皺だらけだが体はマッチョのままだった。七番八番長老から貰った妖力が多すぎて余ってしまったようだ。

<　八尾弦徳・3　>

結界内に残ったふたりが正座をしたままリングの端と端で向かい合う。そのふたりをベンチ内から虎野町支部の者たちが、色々な思いを抱きながら眺めていた。

油儀は、この戦い次第で長年勤めた支部長代行の任が解かれる。おそらく無常水越斎は、弦徳に替わって処理班筆頭になるであろう。珠美は、長老になった弦徳付の秘書になる予定だ。一七五一家の虫玄武兜丸は、後処理の戦力補給のために虎野町支部に入ることだろう。黒童子も調査班に入る予定だ。

そのような面々が一塁側ベンチ内から、リングの上の弦徳を見ている。全員が真剣な眼差しを弦徳の背中に向けるなか、ひとりだけ天野太陽が猫田虎二の横でヘラヘラとした笑顔で座っていた。

「ねえ、虎二～」

ベンチの長椅子に座りながら太陽が、脚をプラプラさせながら隣の虎二に話しかける。

「なんだよ」

「虎二はさ、どっちが勝つと思う？」

「はぁ～……？」

この場で訊くような質問ではなかった。

その太陽の質問に虎二だけではなく、他の者たちも太陽の顔を睨むような視線で見た。それに太陽も気づいたのか「しまった！」と、自分の無神経な発言に首を引っ込めながら気まずい表情をした。

この女は、こんなところがダメなんだよなと、虎二が思い、鼻から溜息を零す。口を開かず、いらないことをしなければ、結構かわいいのにと、虎二は最近良く感じるのだ。実に残念なことだと。

一塁側ベンチ内の面子が、気を取り直してリングに視線を戻すと同時に、ふたりに動きが見られた。

コーナーの前で正座をしていたタケシと弦徳が、ゆっくりと立ち上がった。その動きにベンチ内に居る虎野町支部の面々だけではなく、観客席の妖怪たちも息を呑んだ。ついに始まるのかと。

「そろそろ始めますか……」

立ち上がった弦徳が言う。すると「コーーーン！」と、狐の鳴き声と共に弦徳の背後金色に輝く尻尾が現れる。その尻尾には一本の日本刀が巻き取られるように掴まれていた。

弦徳が、その刀を尻尾から受け取ると、キュッと音が聞こえそうなぐらい強く握り締める。そして輝く尻尾は陽炎の如く消えていく。

「もう、始まってるぜ」

仁王立ちのままタケシが答えた。その姿には、再び傲慢なイメージが蘇ってくる。弦徳は、そのタケシの姿を見ながら疑問に思う。

先程までの正座をしていた凛々しい武人の姿がタケシの真の姿な

のか、それとも今見せる傲慢なまでのふてぶてしい態度が、この男の真の姿なのか悩んでしまう。まるで別人へと変わっていた。

そのような想像を抱きながら弦徳が、尻尾から受け取った日本刀を腰に添えて姿勢を落とし始める。弦徳の表情も変わった。凛々しさを増し、誠実そうな表情に、頑なまでの強い意志が浮き上がる。それは侍の顔だった。

そして見せる弦徳の動き。左足が滑るように前に進み、反対の左足がしっかりと後方でふんばっている。左肩が前を向き、その肩から伸びた左腕が胸の下を通り刀の柄巻きをしっかり握り締めていた。

抜刀術、居合い向きの姿勢だ。

その構を前にしてもタケシは構えを作らなかった。そのままゆっくりと前に歩み始める。

堂本流超人空手の構え無き構えである。

弦徳は、一見無防備にも見えるタケシの歩みを見ても、決してあなどることはなかった。その無防備なまでの歩みのなかに武そのものを見たからだ。この歩方は、明らかに武の構えと悟る。

タケシが、リング中央まで来たところで弦徳が先に仕掛けた。

カチャリと僅かな音を鳴らし、親指だけで鍔を押し上げる。その動作をトリガーに、弦徳が居合い抜きの初弾を放つ。逆袈裟切りの剣筋が輝く。

「廃字刀苦羅々・閃光斬激！」

弦徳が振るった剣先から、黄色い輝きのレーザーが飛んで行きタケシに迫る。

「来たか！」

素早い動きだった。弦徳の放った逆袈裟切りのレーザーを、斜め横に体を屈めてタケシが避けた。そのタケシの後方にあった青コーナーのホストと後ろの鉄柱が、一撃のレーザーで綺麗に焼き切られる。

タケシは、切断されたコーナーがロープの引っ張る力に踊るなか、一気に弦徳へとダッシュした。それに弦徳も反応を見せる。振り切った刃を手首で返すと、今度は両手でしっかり握りしめて右から左へと胴を狙う。

「廃字刀苦羅々・追加閃光斬激！」

横から迫る弦徳のニ激目のレーザーをタケシがジャンプで回避した。空に飛んだタケシの真下を弦徳のレーザーが過ぎていく。そして空中からタケシが足刀を放った。

タケシの足刀が、弦徳の鼻先まで迫ったところで、弦徳が流れるせせらぎの如く軽やかな動きで左へと移動していく。少し姿勢を落としているために袴が床に付、どのように足を運んでいるのか分からなかった。

そして狙いを外したタケシの足刀が、赤いコーナーに突き刺さる。ずしりと重い音が響いた。

「廃字刀苦羅々・三連続閃光斬激！」

横に回った弦徳が、コーナーに飛び蹴りを入れるタケシの背中を狙って刀を振るい三発目のレーザーを放つ。

しかしタケシは、リングに着地をせず飛び蹴りが減り込んでいるコーナーを踏み台に、再び空へと飛んだ。

またもや的を外した弦徳のレーザーが赤コーナーに繋がるロープを三本連続で焼き切った。その三本のロープが開放され暴れるように踊る。

空を舞いタケシが元居たコーナーのそばに着地すると、切断されたコーナーがロープに繋がったまま転がっていた。弦徳は、抜いた刀を、また鞘に納めた。

「また、居合い抜きか」

タケシは未だに構えを作ることなくそう言った。良く見れば、両拳だけが強く握られている。弦徳が、タケシの言葉に返事をせずに、再び居合い抜きの構えを作るように姿勢を落とし始める。あのレーザー光線を狙っている様子だ。

「今度は、こちらから参る！」

凛々しい表情で言葉を発した弦徳が、鞘に収めた刀を腰に添えたまま、天高く跳躍を行う。上空からレーザー光線で狙い撃ちにするつもりだ。

「喰らえ！　ジャンピング廃字刀苦羅々・閃光斬激！」

ジャンプした高さは、十メートルぐらいあるだろうか。

上空から下に見えるタケシを狙って居合い抜きレーザーを放つ弦徳。一瞬の早業と共に飛び行く光の斬激が降ってくる。

しかしタケシは、体を僅かに横へとずらしただけで光の攻撃を避けて見せた。弦徳の攻撃が、リングのマットを焼き切りロープを切り裂く。

更に。

「ジャンピング廃字刀苦羅々・追加閃光斬激！」

更に。

「ジャンピング廃字刀苦羅々・三連続閃光斬激！」

連続で放たれる熱きレーザー光線の攻撃を、タケシは難なくかわし続けた。完全に弦徳の技は、タケシに見切られていた。

空中で技を打ち尽くした弦徳が、切り刻まれたリングの上へと着地する。そして刀を鞘に戻した。すると、弦徳が着地した僅かな衝撃に、ヒザのように三度切られたリングが音を立てて崩れていく。

ふたりは、リングが崩れる寸前に飛んでいた。タケシのほうが若干早く飛び、それを弦徳が狙うように飛んでいた。

リングが崩壊音を鳴らすなか、ふたりが空中で激突する。

弦徳の飛び膝蹴りが、タケシの胸を狙って下から突き立てられた。その膝をタケシは交差受けでブロックする。

「重い！」

膝と腕がぶつかると、タケシが率直な感想を思わず口に出す。しかし、その表情は、やたらと嬉しそうに見えた。そして膝蹴りの勢いで更に上へと飛んで行く。

「まだまだ、フライング廃字刀苦羅々・閃光斬激！」

膝蹴りの一撃で更に舞ったタケシを追って放たれるレーザーの一撃。今度は空中に居て回避行動を取れないタケシは、飛び迫るレーザーにやけくそのような拳の一撃を重ねる。

カキーンと、いい音がした。

タケシのフックがレーザーを弾き飛ばした音である。殴られ狙いを逸らしたレーザーが観客席の方へと飛んで行き、結界の壁に激突してバチバチと派手な音を立てた。その花火に観客も驚きの声を上げる。

「そんなバカな！？」

降下を始めた弦徳が、弾かれた自分の術を見て目を点にしていた。そして崩れたリングの上に着地する。

「やれば、なんだって出来るものなんだな……」

リングの外に着地したタケシが、レーザーを弾き飛ばした拳を見

ながら呟いた。その拳の表面が熱くなり、うっすらと煙を上げていた。焦げ臭い。

<　八尾弦徳・４　>

焼けた拳を見ていたタケシが、崩壊したリングの上に残る弦徳に視線を替える。そして走った。それを見た弦徳が、握られた刀を両手で振り被ると、頭上でドームの照明を浴びた刀身がキラリと光っていた。

「でぇぁーー！」

意思の強そうな声だった。振り上げられた刀からレーザーが天を目指して登っていくと、見えない結界に突き刺さり火花を散らした。そのまま掛け声と共にレーザーとブレイドが振り下ろされる。

崩れたリングに走り寄ったタケシを狙って、結界の壁をなぞりながらスパークを燃やす閃光が落ちてくる。だがタケシは、走りながら閃光を容易くかわした。弦徳の攻撃は、音を立てながら地面だけを焦がした。

そしてタケシが、腰を捻りながら豪腕を後方へと振り被る。その拳に見る見るうちに気合と同時に緑の妖風が集まっていった。

「どぉりゃゃぁあああ！」

力強い声と共に振られるタケシの一撃。

左足で重く震脚を踏むと全体重をそれに乗せる。そして震脚から爆発するような脚力を開放して載せた体重を破壊力に変えると、緑風を纏った拳でアッパーカットを打ち上げた。

狙ったのは崩れたリングだった。

その一撃に打たれたリングの端が飛び上がると、緑風が津波となって他のリングの破片も舞い上げた。ビッグウェーブだ。

「なに！？」

刻まれたリングの破片と一緒に緑風の波へと飲まれる弦徳が、目を細めて声を上げる。弦徳の体も突風に巻き込まれて舞い上がっていた。そして緑風と舞い上がったリング片との隙間にタケシの姿を探した。だが、タケシの姿が見つからない。見失った。

リングの破片と一緒に舞う弦徳が、空中で首を振ってタケシの姿を探していた。その時である。右の足首を掴まれた。

「キャッーーチ！」

下を見る弦徳。その視線の先にタケシの姿があった。足袋を履いた自分の脚を掴んでいる。

「おぉぉぉぉらぁぁぁあああ！！」

片手で弦徳の足首を捕らえたタケシが大声を上げながら弦徳の体を引っ張った。そのまま地面に叩き付ける積りだ。弦徳の体が力任せに振り落とされる。

「ぐほっ！」

弦時の背中が地面に叩き付けられると、口から息と共に呻きが一言漏れた。体に衝撃が走る。骨が軋み、内臓が響いた。

その僅かあとに、ふたりの周辺に刻まれたリングがドスドスと振ってくる。

叩きつけられた弦徳は、それでも手に持つ刀を放していなかった。未だに右足を掴むタケシの脚を切りつけようと狙う。しかし、その反撃の刃が届くよりも早く、タケシが再び弦徳の体を振り回す。

「まだまだ、いくぞーー！」

両手で確りと握られた弦徳の右足。タケシは自分を中心に、グルグルと竜巻のように回転して弦徳を弄ぶ。

これは、空手の技ではない。そう、プロレスの技。ジャイアントスイングだ。

「どうだい！　派手にいかせてもらうぜ！！」

「ふざけるな！」

回転するふたりから声が飛ぶ。

タケシは仮面の下で笑っていたが、弦徳は屈辱に顔を怒らせていた。しかし、見ている観客たちは楽しそうに盛り上がって居る様子だった。それがまた弦徳には屈辱だった。

辺りに散らばっていたリングの破片が、振り回される弦徳の体にぶつかり飛んで行く。その度に弦徳が小さな声を漏らしていた。

もう何回振り回されたことだろうか、タケシの回るスピードは緩

まない。それどころか回転数を増やすごとに加速を増していくようだった。

「飛んでけ、にーちゃんよー！」

そう言いタケシが弦徳の足をやっと離した。

開放された弦徳が宙を飛んで行く。高さが五メートル程ある。手を放したタケシは、勢い余り、一度だけ回転すると、その勢いのまま投げ捨てた弦徳を追って走り出す。追い討ちを決める積りらしい。

しかし……

「あら、あらら？」

走り出したタケシの脚が縺れて顔面から転倒した。ジャイアントスイングで、自分もしっかりと目が回っていたらしい。それを見た観客たちが痛そうにと自分たちの鼻を押さえる。

一方、投げ捨てられた弦徳は、二十メートル程とんだところで後頭部から地面に墜落すると、ワンバウンドしたあとに三回転ほど転がりやっと止まる。

だが、受身は成功していたらしく、さほど大きなダメージを受けていない様子であった。直ぐに立ち上がり、袴に付いた埃を払う。

「どうでい！」

既に立ち上がったタケシが、腰に手を当てながら威張るように言った。

その台詞に春婆怒が「すっ転んどいて、何を言っておるのじゃ、戯けが」と、冷めた言葉でツッコミを入れていた。弦徳も同意権である。投げられながらもタケシが転倒する瞬間を見ていた。

今度は弦徳から走り出した。真っ直ぐにタケシを目掛けて突き進む。それに初めてタケシが構えを見せる。それは、空手の構えでも珍しくないポピラーな構えだった。

右爪先の向きを四十五度の角度で踏ん張り、体重の七割を乗せる。そして前に出した左足は爪先に体重を掛けて踵を僅かに上げられていた。

後屈立ち。

それが、今宵タケシが始めて見せた構えだった。

「む！」

タケシの構えを見た弦徳が、五メートル弱をのこして急ブレーキを足で掛けた。足袋が地面を擦る音が鳴る。

ふたりが睨み合う。

弦徳の視線がタケシの視線とぶつかり合い、気迫と気迫で押し合う。

「先程から貴方を見ていると、ちょくちょく戸惑いを抱く……」

言ったのは弦徳だった。その言葉にタケシは鋭い抜き身の刀のよ

うな視線を弦徳の双眸から外すことなく首を傾げる。何を言い出しているのやらと言いたげな表情だった。

「時に、羅刹の様に。時に、外道の如く。時に、武士。時に、道化。そして、時には仏のような眼差しすら見せる。貴方は戦いの中でコロコロと表情を替える。何故ですか……」

弦徳は、戦いが始まって僅かな時の中に、タケシの替わり続ける幾つもの表情を見た。まるで、同じ人間を前にしているような感覚がしなかった。その時その時、タケシの人格が入れ替わっているように感じた。これ程に、戦いの中に喜怒哀楽を見せる相手は、初めてだった。それが、戸惑いになり、思わず言葉にだした。

「はぁ？」

引き締まった表情を崩したタケシが、そう声を漏らした。タケシのほうは、弦徳の言っている言葉の意味が理解しきれていないようだった。

しばらく悩む。そして返答を見つけて口に出す。

「あんた、弦徳とかいったっけ？」

「ああ、キミならば呼び捨ても構わん」

「そうか、じゃあ、容赦なく呼び捨てにさせてもらうぜ」

そういいタケシが構えを解くと、弦徳も構えた刀を下ろした。その光景を観客が見て、詰まらなそうにざわめく。

「なあ、弦徳。あんたは戦いの中で、笑ったり、泣いたり、悔しがったり、むかっときたりしないのか？」

「負ければ悔しい、怒りを感じることもある。しかし、笑ったりしない。出来れば泣きたくはない……」

普通の会話だった。ふたりは戦いながら、お茶でも揉みながら話す友達のように会話をしていた。こんなことは、弦徳の戦いの中で一度もなかった。その可笑しな状況になっていることも本人は気づいていない様子だった。

「あな、楽しければ笑う。悲しければ泣く。腹が立ったら怒る。それが人生だろう。一度しかない人生なんだからよ。そんな風に生きようぜ！」

そう言いタケシが、ニコッと歯を見せて笑う。子供の笑みよりも無邪気な笑みだった。それを見て弦徳が驚き唖然とした表情を見せる。

弦徳は思う。

この男は、今、こうして戦っていることも人生だと言いきり笑っているのだと。友達と楽しく遊んでいるのと同じように、恋人と甘い夜をベットのなかで過ごしているのと同じように、風呂に入り汗を流しているのと同じように、トイレで用をたしているのと同じように、この人知を超えた環境での戦いを、私生活とかわらないと言い戦っているのだと。

この男は、戦いも生活の一部なのだ。だから、なんの疑問もなく、すべての感情を出せるのだ。この男は、自分と死闘を繰り広げてい

ながらも、普段とかわらない私生活を送っている最中なのだ。この戦いすらも、この男にとっては生活の一部。弦徳は、そう思った。

「うらやましいほどに、大きな器だ！」

そう言い弦徳の瞳に気迫が戻る。

今言った言葉は、正直な意見だった。これ程に、闘争を生活に溶け込ませられれば、戦いに苦悩することはないだろう。

この現代ではなく、もっと古い時代に生まれてくるべき人材だと思う。生れ落ちる時代を謝っている。戦国時代ならば、少なくとも天下取りの有力候補として歴史に名前が残ったことだろう。間違いない。弦徳は、そう思っていた。

弦徳の表情が変わったのを見て、タケシも構えを戻す。再び、後屈立ちを取る。瞳が鋭くなった。

弦徳は、刀を両手で持つと、ゆっくりと頭上へと持っていく。光り輝く真剣が、光の尾を引きながら上段の高さで静止した。上段の構えだ。

弦徳も戦いを思い出した鋭い眼差しに戻っていた。

ふたりの睨み合いが再開された。ふたり同時に、ジリジリと少しずつ前に出る。全神経を、目の前の敵に向け合うふたりには、観客たちがあげるざわめきも聞こえていなかった。ふたりが、ふたりだけの世界を作り出していた。

距離は、まだある。しかし、弦徳が先に仕掛けた。閃光斬激と呼

ばれる術を使う弦徳のほうが、間合いを無視できたからだ。例の光線が切っ先から真っ直ぐに放たれる。

上から下へと光線が走る。しかしタケシは右に体をずらし避ける。

続いて刀を一度引いた弦徳が、尚も切っ先をタケシに向けてレーザーを発射させる。

「突き！」

点のような閃光がタケシを狙う。しかしタケシは、何の苦もなく回避した。この術は既にタケシには効かない。完全に見切られている。

レーザーの輝きと熱を頭と肩の対角線に感じながらタケシが前に走る。ふたりの距離が一瞬で縮まった。そのままタケシが、レーザーの発射されている刀をくぐり、更に懐へと入る。弦徳は、それを許してしまう。

「リィヤァァ！」

タケシのブーメランフック。

背後から上へと跳ねた拳がアーチを描き、弦徳の顔面を狙い降っていく。

大振りだが、勢いと速さを掛け備えたパンチだった。重そうだ。

だが、その豪腕の下を、こんどは弦徳がくぐり抜けていく。自分の脇の下をすり抜けた男を、タケシが敏捷に振り向き視線で追った。

「ちっ！」

拳をかわした弦徳が走っていた。逃げるように背を向けてだ。その光景に、思わずタケシは声舌打ちをひとつ溢した。しかしタケシは、追わなかった。振り向いたあとに弦徳の走る背中を見送る。

三十メートルほど逃走した弦徳が振り返った。

「やはり、こんな子供だましのような技じゃあ、貴方には勝てません。技を替えさせてもらいます」

振り返った弦徳は、そう言いながら刀を鞘に収めた。すると背後から黄色に輝く狐の尻尾が現れ弦徳から刀を受け取る。タケシは、その光景を黙って見ていた。

「これが八尾弦徳、真の姿です！」

弦徳が、タケシを真似たのか、不敵に笑って見せた。若干違和感がある傲慢な笑みだった。やり慣れてないからだろう。

そして、その笑みと共に狐の鳴き声が「コーーーーン！」と響く。七回連続でだ。

すると黄色く輝き刀を握る尻尾のほかに、七本の尻尾が姿を現す。その尻尾の数々が、白、黒、赤、青、緑、紫、灰色と、様々な妖気の輝きを陽炎のように放っていた。そして尻尾の一本一本に、様々な刀が握られている。

「なるほど、八尾弦徳ねぇ。八本ってことか」

そう言いながらタケシが本家といわんばかりに傲慢な笑みを見せる。

八本の尻尾に、八色のオーラ。そして八刀の武器。闘争に乾いたタケシの心に、弦徳の見せる光景は、十分すぎるほどに美味しく見えた。

「これから見せる技の数々、たっぷりと味わってもらう！」

「ああ、言われなくても良く噛んで味わってやるぜ！　なぁ～、春婆怒よ！」

「わらわは結構じゃあ、出来ればすんなり終わりたいのじゃかのぉ」

「さあ、来い！　弦徳！」

「ああ、いくぞ！！」

春婆怒の言葉は、完全に無視されていた。熱くなった男たちだけが血気している。もう、ふたりの世界だ。

<　八尾弦徳・5　>

真の姿を見せた八尾弦徳を、ベンチの中の者たちや、横一列に並ぶ十一名の長老たちが、力強い眼差しで見守っていた。

かつて虎野町三本柱と呼ばれた、油儀、鍋中、一七五。兄、猫田龍信を九十九神に食われた龍信と珠美の兄弟。親友を失った轟　朧。後処理班の無常水越斎に天野太陽。勧誘班の扈鼠。一七五一家の虫玄武兜丸、黒童子、蛾蝶姫。それら面々が、ベンチの中で弦徳の変貌を見て唾を飲む。

八尾すべてを見せる弦徳の姿を、三本柱と呼ばれた者たちすら見たことがなかった。油儀ですら、すべての尾を操る弦徳の姿を見たのは五尾のとき以来だ。

「すごい妖気ですね……」

言ったのは珠美だった。かわいい声が僅かに震えていた。

黄色く輝く尻尾の後に生え出た追加の尻尾、七本。

その一本一本が別々の色を持つ妖気を見せて八色を混ぜ合わせることなく主張をしていた。ひとりの者が、八種の妖気を放つ光景は普通ではあり得ない。

無常水越斎が水を操り、天野太陽が炎を使う。そのように、妖怪にも妖術の属性と呼ばれるものが存在する。一度に二種類の属性を扱える妖怪も珍しくないが、三種、四種と数を増やしていけば数少ないほどの達人へとなっていく。

故に今、八尾弦徳が八本の尻尾から見せる八種の妖気は、妖怪たちの常識内でも非常識な存在に見て取れた。

異常なのだ。

その証拠に、十一番長老の軌道丸が、ライバル視している弦徳の姿を見て、密かに冷や汗を流していた。

三ヶ月前の長老会議。数百年ぶりに十一名全員が集った会議の席で言われた台詞。

もしも、弦徳が九尾に成長したのならば、もう自分では敵わないだろうという、長老たちの推測。軌道丸は、微々たるとも認める積りはなかった。その忌々しい推測を、今の弦徳を見て軌道丸は、納得しざる終えないと、悔しくも揺らぎ始めていた。

八種八本の妖気。あの姿を維持するだけでハイレベル。今の軌道丸では無可能な術。おそらく戦えば五分。勝てたとしても大きな深手を負うだろう。

それが九尾九色に今後成長を見せるとなると、もう軌道丸個人で敵う実力ではなくなる。八に一を足して九といった単純な足し算ではない。未完成品の売り物と、完成品の売り物が、倍以上値段が異なるのと一緒だ。

もしも九尾へと育った弦徳に勝てるとするのならば、三番以上の長老たちのみ。チャラチャラしたホストの成をした軌道丸にも、そのぐらい確信できた。

「軌道丸のおにいちゃん、汗かいてるよ」

幼い子供に化けている前鬼が、軌道丸の隣で無邪気に茶化す。軌道丸は、歯を食いしばりながら屈辱に堪えた。

ここで隣の餓鬼に言い返しても、クールで大人びた口調の小生意気な後鬼まで加わり、更に腹が立つだけだ。軌道丸は、先輩長老の童の言葉を、ぐっと堪え、歯軋りと共に飲み込んだ。

八本の尻尾を揺らし、男らしく立つ弦徳を見ながらタケシが微笑む。弦徳は、そのタケシを誠実な眼差しで見詰め返していた。

先程までの光景は、タケシが悪党で、弦徳が正義の味方の如く見えた。それだけタケシの笑みは邪悪なもので、弦徳の表情が真面目に見えたからだ。

だが現在は、凛々しい表情の弦徳の背後に扇型に広がる八色の尻尾が様々な妖気を放出して、弦徳のイメージを変えていた。八色の妖気が、弦徳を妖怪変化だと知らしめる。

その八色の妖気が、善も悪も、光も闇も、陰も陽も含んでいたからだ。悪にも正義にも見えない姿。世界の摂理が一箇所に存在していた。

「でぇ、どれを使うんだい？」

構え、いつ飛び足すか分からない物腰のタケシが訊く。

「そうだな。手始めに使った廃字刀苦羅々よりもワンランクアップした代物を使いましょうか」

弦徳がそう言うと、背後の尻尾の中から青く光を揺らしたそれが、絡め持った日本刀を弦徳の前へと差し出す。

先程の廃字刀にくらべて長い大太刀。斬馬刀と呼ばれる類の刀だ。長さは１８０ｃｍぐらいあるだろうか。尻尾によって差し出された刀は、弦徳の身長と代わらない。名前が意味しているように、馬ごと騎乗した敵を切りさけると思える長さだ。

「長げ～の出したな。それじゃあ居合いは無理だな」

「残念だが確かに」

弦徳が、青い尻尾によって差し出された斬馬刀の柄を両手で握ると、尻尾がずれて鞘から刀を引き抜いていく。そして尻尾は、そのまま鞘を持って仲間の八色尻尾のもとに戻っていった。

両手で握られた斬馬刀は、弦徳の目の前で真っ直ぐに立てられる。その刀身から青白い妖気がにじみ出る様に輝いていた。

まるで誘蛾灯だ。ベンチの中で一七五一家の三名が、魂ごと吸い寄せられながら青い刀身の光を見詰めていた。昆虫には、危険で誘惑的な輝きである。

「では、参る！」

「おうよ、きやがれ！」

弦徳が斬馬刀を横に振り被る。ブウンと空気が鳴った。

タケシは拳を握り大きな構えを見せる。表情から邪悪な笑みが消えて、弦徳と変わらない凛々しく勇ましい真剣み溢れる表情に変わった。いい顔だ。

その表情に、ベンチの中で観戦していた珠美がドキッとさせて頬を赤らめる。仮面の下の表情が、彼女には不思議と見えている様子だった。珠美の両手が大きな胸の前で祈るように組まれた。潤んだ乙女の瞳をしている。

そんな僅かな仕草に朧だけが気づく。そして珠美の心配に潤んだ優しい眼差しが、味方の弦徳にではなく、敵であるタケシに向けられていることにも。

「苦労するわよ……」

朧が、珠美に劣らない大きさの胸を抱えながら両手を組むと、小さな声で呟いた。その表情は、亡くなった親友、蓋口静香に良く似ていた。

「おりゃゃぁぁぁああ！」

タケシが両拳を顔の前に置きながら走り出した。弦徳も走り出す。声を上げたのはタケシ。ふたりの距離が縮まり、迫り、攻防を見せる。再開だ。

「斬馬刀聖羅・翔光如！」

弦徳が大太刀を振るう。灰字刀と同じだった。ふたりの距離は、まだ遠い。長身の斬馬刀でも届かないはずだ。しかし、青く輝く刀身から雷光が飛び散る。先程は閃光で、今度は雷光だ。

放たれる横の一振りから押し寄せる青白い雷光の波。眩しくも美しい。バチバチと地を焦がしながらタケシに押し寄せる。

「ぬ！」

横も広い、縦も高い、かわせない。タケシは、回避を諦め防御に徹する。雷光の波を、体を丸めながら受け止めた。

「ぬぬぬぬ！！！」

タケシの口から痛みに耐える呻きが漏れた。皺を寄せながら目を瞑り、歯を見せながら食いしばる。

雷撃にガードを固めた全身の筋肉が硬直して、身に纏いし九十九神の甲冑が焼けていく。

春婆怒は鋼の槍が変化した存在、電撃が良く通る。体全身に、稲妻が走った。

苦しい、痛い、だが致命傷を負う攻撃ではない。耐えられる。そしてタケシは耐えた。

しかし、耐えたタケシに弦徳が、斬馬刀を振り被りながら飛び掛る。

斬馬刀を頭の後ろまで振り被り、両手で握られた柄が隠れるが、ジャンプした弦徳の下半身の陰から長い刀身が青く見えていた。電撃の攻撃を耐えたタケシが、その攻撃に備える。

「ぜぇぃぁぁああ！」

跳躍を見せた弦徳の兜割り。腕力、重力、剣技、それに長物の遠心力を加えた一撃がタケシを襲う。

タケシは、雷光の攻撃を受けたために大きな回避は出来ない。小さく繊細な体術で対応を見せようと試みる。

前に踏み込んであった左足の爪先を軸に左に体を捌く。するとタケシが立っていた場所に弦徳の攻撃が振り落ちる。

その刹那タケシには、弦徳の隙が見えた。

顔面。打ち込める。そして撃ち込む。無意識のままタケシの体が、闘争心が、その行動をセレクトして実行を許可する。

空振りして地面を切り裂いた斬馬刀の上をタケシの鍵拳が放たれ過ぎていく。横振りの拳が弦徳の顔面を狙った。

「もらったぜ！」

タケシの一撃が、初めて弦徳の凛々しい顔面を捉えようとした瞬間だった。拳が鼻の先から減り込むように見舞われると思えた一瞬。それは起きた。

起きたことにタケシが目を疑う。

「ぜぇぃぁぁああ！！」

跳躍を見せた弦徳の兜割り。腕力、重力、剣技、それに長物の遠

心力を加えた一撃がタケシを襲う。リハーサルを終えた攻防だった。

「あれ？？」

タケシの握り締めた拳から力が若干抜けた。疑問が混乱を呼ぶ。そして態度に表す。

タケシは、雷光の攻撃を受けたために大きな回避は出来ない。小さく繊細な体術で対応を見せようと試みる。先程と同じように……。

前に踏み込んであった左足の爪先を軸に左に体を捌く。するとタケシが立っていた場所に弦徳の攻撃が振り落ちる。

その刹那タケシには、弦徳の隙が見えた。先程も見えた。顔面。そう、顔面に。打ち込める。だから撃ち込んだはずだ……。

空振りして地面を切り裂いた斬馬刀の上をタケシの鍵拳が走っていく。横振りの拳が弦徳の顔面を狙う。ド真ん中だ、鼻を潰す積りだ。当たっていたはずだ。

だが、タケシの反撃よりも早く弦徳の体が動いていた。前へと突き進んでくる。記憶と違う。

体当たり。

拳を繰り出したタケシの胸元に、隙が生まれていた。弦徳が、戸惑いに鋭さを失った拳をかわし肩から体重を乗せた当身を入れる。重みがタケシに響く。

「！？」

混乱を露にするタケシが、弦徳のアタックによろめき後退りした。

「これが、斬馬刀聖羅の力。青き過去の術です！」

「なんだよそれ……」

地面に刺さった長い刀身を引き抜くと弦徳は、歌舞いた素振りで斬馬刀を肩に背負う。

タケシはデジャブーを味わった記憶を整理していた。

普段から非常識な言動が多いタケシでも、この手の異なるタイプの非常識は苦手である。どんな結果になろうとも拳で解決しずらいことは、苦手なのだ。

このタイムリープ現象は、タケシには不向きと春婆怒も察していた。

だが、もっと深刻な現実がふたりに起き始めていた。ふたりにだけではない。見ている観客全員にもだ。

「こ、これは……」

言葉を漏らしたのは、一番長老ぬらりひょんだった。

「よく、俺の拳をかわしたな！」

タケシが強い台詞を口走る。しかし、何か違和感を感じる。まるで喉に魚の骨が刺さったかのような思い。

春婆怒も一緒だった。

タケシのフックをかわしながら飛び込んできた弦徳は、まるで反撃が飛んでくるのを悟っている様子だった。読んでいたとは違う動きだった。春婆怒は、それがなんなのか悩んだ。何かが可笑しいと。

三番長老の見上入道が、ぬらりひょんに問う。

「なあ、ぬらりひょんよ。ワシの気のせいかもしれぬが……」

「ああ、気のせいじゃない。あの八本狐め、過去と現在を曲げやがった。それだけじゃない……」

ぬらりひょんは鋭い瞳で弦徳を見ながら言った。その表情は、精神を集中させながら何かに堪える挙動である。何事かと大きな一つ目で見上入道が見ていた。

「あの刀の力、能力は、過去をやり直している。しかも、その光景を目の当たりにした者たちの記憶を徐々に掻き消し真実を歪めていやがる」

「すごいわね。私たち長老の記憶すら汚染しているのですか……」

ぬらりひょんの言葉に四番長老の雪女が、透き通った声で驚きながらも言った。

しかし、彼女の記憶もかなり改竄されていた。眠っているさいに見た夢を忘れるかのように、記憶が削れていくのを感じていた。だが、それすらも忘れていく。

大妖怪の長老たちにまで影響を及ばせる弦徳の術は、かなりのものといえた。おそらくこの場に居る妖怪で、同じことが出来るのは、一番長老のぬらりひょんのみだろう。否、ぬらりひょんなら、もっと鮮やかにこなすだろう。彼は、その手の達人級の専門家だ。右に出るものは居ない。

「いい雷刀だが、その程度で俺は倒せないぜ！」

完全にタケシの記憶は書き換えられていた。春婆怒のほうは、未だに首を傾げている。だが、違和感の正体までたどり着けないでいた。

タケシと春婆怒は、既に自分たちが、弦徳操る斬馬刀聖羅の術中に落ちていることを気づいていなかった。

いいや、忘れているのだ。

デジャブー、タイムリープ、タイムトラベル。それらとも異なる術に囚われつつあった。

知らず知らずに。知っても忘れながら。

<　八尾弦徳・6　>

タケシの長いスウェーイング。弦徳の振るう斬馬刀が、水平に走り空振りを起こす。直後、バックへと下がったタケシの体が前に出た。

優しく音も少ない踏み込みから発射された上段正拳突き。うねりながら進む一発が弦徳の顔を狙う。

だが弦徳は、振り回した斬馬刀の勢いそのままに体を回転させ、硬い拳を見ることもなく見事にかわした。まるで、タケシの拳が自分の顔面を狙って飛んでくることを知っていたかのように、コースから外れていた。

「はずしたか！」

正拳を回避されたタケシが口走る。そこに回転した弦徳が繰り出す斬馬刀の一振り。タケシは回避できない。正拳の一撃を当てて、この攻撃を打ち消す予定だった。その為に回避の準備がワンテンポ遅れて出来ていない。長すぎる刀身の一撃を腹部にもらう。

重い、体が飛ばされる。斬激でない、衝撃。

「ぐぐぅぅ！」

奥歯を食いしばり腹部を押さえたタケシが後方に打ち飛ばされ着地する。

腹部を押さえた手を退けると、視線を打たれた場所に向けて確認

した。ぽっと、胸を撫で下ろす。切られてはいない。小さな傷が甲冑に刻まれているだけだ。春婆怒の装甲の硬度が、斬馬刀の斬激よりも上回っていた。

尚も弦徳の追撃が続く。斬馬刀が乱舞した。

縦、横、袈裟切りと続くが、タケシの可憐なフットワークがすべてを綺麗に避けた。そして気づけば弦徳に三度目の接近を成功させ、攻撃へと転じさせる。

斬馬刀の振りは大きく隙が多い。タケシには、縫うように接近するのが容易くできた。

そこまでの動きを弦徳が確りと記憶する。

タケシの右脚が後方から跳ねる。下から上段の高さまで登った脚が、アーチを描き降っていく。斬馬刀を握った弦徳の腕を狙っていた。まるで鉈。

「斬馬刀聖羅・青き過去の術！」

時が巻き戻った。

縦、横、袈裟切りと続くが、タケシはウィービング、ダッキング、ステッピングを繰り返し接近してくる。そう、最後は、横に逸れるステッピング。過去を知る弦徳が、その動きを狙い打つ。

横に避けたタケシを追って、振るった袈裟切りの一撃とは別に横蹴りを放つ。その蹴りをタケシはモロに胸に喰らい動きを止めた。

「くっ！」

僅かな声を漏らすタケシ。心の中に疑問が過ぎる。

何故に今の動きがわかったのか？

本当ならば蹴りを放つところまで成功していたじゃないかと。

蹴りが成功？

何故、放ってもない蹴りが成功したと思う？

三つの太刀を避けたあと、間合いを詰めてから、自分は蹴りを放つ予定だったのか？

予定？　未定？

と、いうより、自分は何を悩んでいるのだ？

蹴りを喰らったのは自分ではないか……、何故に撃ったと考える？

蹴りを受けたタケシが次の攻防に備えて構えを作る。その表情には納得の行かない何かが浮かんでいた。春婆怒も同じだった。だが、その考えも次期に塗りつぶされ隠されていく。

弦徳の後ろ回し蹴りが、履いた袴を靡かせながら迫り来る。タケシが身を反らしかわすと、続いて横振りの斬馬刀が道着の陰から飛んでくる。

間合いが近い。スウェービングでは無理だと悟りタケシがダッキ

ングを試みる。しゃがみながら前に出る。後ろ廻し蹴りにつづく弦徳の膝蹴り。タケシは交差受けで凌いだ。

今の動きも読まれていた。否、知られていた。やってはいけない動きを自分が選択した。タケシは、何故かそう思う。そして忘れていく。真実と過去を。

膝蹴りの威力を逃がすためにブロックと同時にタケシが飛んだ。その動きも弦徳は知っていた。一度見たからだ。空に跳ねたタケシを叩き落すために斬馬刀を振り下ろす。

ガキーン、と、鉄と鉄のぶつかり合う音が耳に響く。斬馬刀の刀身と、タケシの片腕が激突した音だ。

大きな刃を腕で受けたタケシの体が地面に落ちる。腕が痺れて神経が敏感になった。しかし切られていない。また春婆怒の装甲の強度が上回っていた。

「あの斬馬刀、見た目よりも威力が低いぞ」

「そのようじゃが……」

その太刀を二度受けたタケシが言うが、春婆怒は怪訝な声で答える。

弦徳が長い切っ先をタケシに突き立てる。鋭い先が眉間をねらう。

タケシが右に避けるが弦徳の返した太刀筋が下から迫りタケシの肩を切った。摩擦熱に火の粉が散る。傷は浅い。春婆怒の鎧を傷つけただけだ。

「ぜいぁ！」

体勢を崩したタケシに弦徳の兜割りが落ちる。タケシは横に動き、振り落ちる斬馬刀の刀身に、横から殴りの一撃を入れて軌道を更に逸らしバランスを奪う。

そして打ち込み弾いた拳を跳ね返らせ、勢いを乗せて弦徳の顔面を攻め立てる。裏拳だ。

しかし、鮮やかな拳の流れを知っていた弦徳は、何の問題もなく裏拳を回避した。斬馬刀聖羅の能力でリハーサルを終えた攻防だ、このあと何を行えば最善なのかもわかっていた。

そして、知った正解の行動を行う。

柄を握り締めた両手を突き出し接近しているタケシを打ち、押し戻す。距離が開いた、下から逆袈裟切りで脇腹を切る。更に刀を返して横切りの斬を胸に刻む。実行した攻撃が、正確にヒットしていく。

切られた箇所から熱い火花を散らすタケシが、逃げる足取りで後退していく。

「なんで当たる!?　なんで当たらない!?」

自分の攻撃が当たらずに、相手の攻撃だけが一方的に当たる現状に、タケシが不満の言葉を悔しく吐いた。幾ら振るっても当たらない拳を強く握り締めながら。

そのあともふたりの攻防が繰り返される。

一度リハーサルを行い、時間を戻され、記憶を奪われ繰り返される戦い。一方的に弦徳がタケシを嬲る。小さな切り傷が、少しずつタケシの甲冑に刻まれていく。

大振りの剣技が、接近を許せば当身に技を替える。タケシのフットワークならば直撃が有り得ない大振りの斬馬刀。そして未熟な当身。

一流に含まれる空手家のタケシならば、喰らうはずのない中途半端な弦徳の拳脚の数々。それらを何故かタケシが受ける。

このひとつ前まで使っていた廃字刀苦羅々に比べて、この斬馬刀聖羅の剣技の方が、明らかに隙が多く見え、攻撃も大雑把だ。しかも、威力までもが少ない。

「あの大太刀、春婆怒を翻弄するのに丁度いいが、勝負を決するには脆弱すぎるのぉ」

顎に生えた武将髭を摩りながらぬらりひょんが言う。その言葉に見上入道が顔を向けた。

「どういうことだ?」

三番長老も顎に伸ばした黒い美髭を撫でながら訊く。

「斬馬刀聖羅、確かに素晴らしい時間操作と記憶操作の術を唱えている。しかし、その効果に妖術を割きすぎて、攻撃へと割り振られる妖気が不足しているのぉ」

「攻撃力が低いと?」

「ああ、そうじゃ」

「だが、弦徳の攻撃はヒットしておるし、弦徳の方が圧倒てきに攻めているぞ」

「見上よ、御主ほどの者が気づかぬか……。まあ、しかたないかのぉ、刀の能力に記憶を妨害されているのだからのう」

「何が言いたい、ぬらりひょん」

「はっきりと言えば、いかに攻撃が当たろうとも、石コロで戦車は壊せない。いくら弦徳の刀が春婆怒を切りつけようとも装甲を貫けなくては、敵を倒せぬ」

「なるほどのぉ。あの大太刀は、見た目よりも攻撃力が低すぎるのか」

「そう、なまくらに近い。廃字刀苦羅々の方が数倍以上の攻撃力を持っていたな。しかし、その閃光の術を拳で弾き飛ばしたんだ、斬馬刀聖羅の攻撃は、じゃれ付かれていると一緒じゃ」

ぬらりひょんの言うとおりだった。そのことに弦徳も気づいていた。攻撃力が、威力が、殺傷力が足りない。これでは致命傷を与えられない、と。

弦徳の一振りがタケシを切りつけ弾き飛ばす。その一撃は、首筋を横から捕らえていた。だが、首を撥ねるどころか切り傷すら付け

ていない。殴るように叩いたのみだった。

それは、タケシに取って、対した攻撃でなかった。打たれても自分から飛び、ダメージを受け流す。幾ら受けても致命傷にはとてもならない攻撃だった。中途半端な打撃ならば容易く出来るディフェンス。マッサージに近い。この程度の攻撃なら、一時間は付き合える。

タケシが飛んで、ふたりの間合いがとうのく。いい機会だと弦徳が構えを解いた。空気が変わったことにタケシも気づき動きを止めた。ふたりの間にあった緊張感が失われていく。

「どうした?」

タケシが動きを止めた弦徳に問う。質問と一緒にふたりの体から力みが落ちる。

弦徳が、質問に質問で返した。

「効いていませんよね?」

「何がだ?」

タケシも質問に質問で返す。

「私の攻撃ですよ。刃が貴方の鎧を捕らえてはいるが、傷が浅い。効いてませんですよね」

「あんたの攻撃に、的確な感想を述べるならばだ、そのでかい刀は怖くない」

「やはり……」

「色々とへんてこな疑問を抱くところが多いが、ただ命中率が凄いだけで、攻撃力がじゃれつく猫の如くだ。正直、その前に使っていたビームが出る刀のほうが、よっぽど怖いぐらいだ」

「……そうですか」

タケシの評価を聴いた弦徳が、片手で斬馬刀聖羅を立てると、背後で揺らめいていた尻尾の中から青く輝く尻尾が動き、刀に鞘を被せる。

「太刀を替えます……」

「ご自由に」

少し肩を落とした弦徳。タケシは、両手を胸の前に組みながら時を待つ。その姿に余裕が見えた。

「まあ、そうなるわな……」

そう言いながら、ひとりすべての現実を知るぬらりひょんが溜息を零す。

青い色の尻尾が戻る。八色の尻尾に握られた武器の数々を弦徳が振り向き選ぶように見回した。

黄色の尻尾に廃字刀苦羅々。

青い尻尾に斬馬刀聖羅。

残る六本の尻尾にも刀が握られている。日本刀だけならず、中には西洋の剣や細身のサーベルもあった。

弦徳は、その剣や刀の中から、新たな大業物を選び出す。

黒い刀。

黒い妖気を湧かせる尻尾。ゆっくりと弦徳の眼前に差し出される真っ黒な刀が、一本。

鞘も黒く、唾も黒く、柄巻き黒く、放つ気配も黒い。

その黒い柄を弦徳が握ると、黒い尻尾が鞘を引き刀身を見せる。刀身も黒かった。尻尾は鞘を抱え後方に下がった。

「今度は、面白いんだろうな?」

黒い刀を選んだ弦徳にタケシが問う。弦徳は、黒刀を一振り露を払うように振るうと答えた。ブウンと風がひとつ鳴った。いい音だ。

「ああ、期待に沿えるかと」

「嬉しいぜ!」

タケシに合わせる冗談を弦徳が言うと、タケシが心から受け止める。このやり取りが、どちらのペースかといえば、明らかにタケシのペースだった。

そのことに弦徳も気づいていた。

弦徳は、戦いの中で、敵とこんなに話したことがない。ましてや相手は母の仇、春婆怒を纏いし九十九神の使い手。

初体験だった。こんな戦いがあるとは知らなかった。心地いい。

怨み辛みをどんどん忘れていく。不思議だ。春婆怒を許したわけではないが、この男を憎めない。これが死闘とは思えない。

だが、全力を出さずには居られない。しかも、より丁寧に、順序を守り、高級レストランのフルコースのように力を見せたい。一流コックの如く手塩に掛けた料理を順序よく振舞いたい。不思議な思いだった。

ふたりが構えた。

握られる二つの拳と、片手で握り締められる黒い刀。ふたりの間で見えない火花が鮮やかに散る。その光景に観客たちが、今度は何が起きるのかと期待を膨らませて視線を浴びせていた。

弦徳は、自分の中に芽生え始めた優しい闘志を込めて、刀を強く握って見せた。

律儀な弦徳が、盛り上がる順序を考えて選んだ刀を振り上げ気合を吐き出す。

「行きます！　不思議ノ刀不老根！」

<　八尾弦徳・7　>

弦徳が切っ先をタケシに向けると、黒光りする内側から何かが蠢き現れる。

細く、長く、黒く、蠢く物。一本、二本と数を増やし、弦徳が握り締めた黒き刀の上で、餌食を探す亡者の塊のように蠢き球体を作っていく。

「ツル？」

見たままを言ったのはタケシだった。

黒い刀から生え出たそれは、言葉のとおり蔓であった。しかし、その黒い蔓には無数の棘がある。茨の蔓だ。

トゲトゲしい物たちは、鍔を越え、腕を伝い、波打ちながら巻きつき全身を包み込む。弦徳はそれに抵抗を見せずに受け入れた。

黒い蔓たちは、道着の上から弦徳の体を突き刺し、体内を突き進むと布を縫うように別の箇所から頭を出す。しかし、黒い茨は弦徳の肉体を傷つけていない。零体の如くすり抜け重なり合っている様子だった。

日本刀から侵食してきた黒き茨を全身に纏った弦徳。更に腰元へと巻きつく数本の蔓。その中央には黒きバックル。黒と書かれた文字ひとつ。

それを見て春婆怒が言葉を漏らす。

「もしやして、あの刀!?」

「なんだ?」

春婆怒の声は、めずらしくもうわずっていた。タケシが何事かと思い訊く。

しかし、その疑問に春婆怒が答えを返すよりも早く、茨の蔓にまとわり付かれた弦徳が、タケシが聞きたかったといえる答えを叫ぶ。

「妖力共有・魔開!」

「なに、妖力共有だと!」

弦徳の体が黒く輝く。

「バカな、ありえぬ!」

弦徳が口走った言葉に対して素直に驚くタケシと春婆怒。まさか妖怪の弦徳が九十九神を持ち、あまつさえ妖力共有を行うとは、想像にもしていなかったようだ。

タケシはともかく春婆怒には、驚きを見せる明確な理由もあった。

九十九神が使い手に選ぶのは人間のみ。妖怪を使い手には選ばない。

否、選べない。

理由はいたって簡単。妖力共有が出来ないからだ。これは、九十九神の存在を知り戦う者たちに取って常識といえる決まりごと。

九十九神は、人間によって長い年月の間使われることで念の中に生をうける。それは人間の思いが元。そして、九十九神に生まれ変わろうとも彼らの存在理由は、人間の道具であることが変わらない。

人を百人喰らい、妖怪を百匹喰らい、同族を百体喰らい、そして使い手の、人間の願いを叶える。三種百食の本能。それはすべて、神であるが故の行動。人間へのための行動。その行動は、妖怪を拒否する。

だが、今、目の前に非常識が姿を現す。弦徳の行動で。

体に巻きついた黒茨の蔓が、隙間もなく弦徳を締め上げると、それらがひとつへと融合していく。黒いものたちが、たったひとつの個体へとまとまる。

真っ黒い人型が、徐々に繊細な形を象り始める。その形は鎧の姿。黒く硬そうに弦徳の全身を変えていた。

白い道着に浅黒い袴姿の弦徳は消え。代わりに立つのは黒い甲冑を纏った凛々しい姿。その黒い鎧はタケシが纏うものに良く似ていたが、その表面を泳ぐように黒い茨の蔓が何本も見え隠れしていた。まるで海面に顔をだしてはまた潜る海蛇のようだった。

周囲に驚きの空気が満ちる。

春婆怒だけではない。十二長老の面々や、虎野町支部の面々も驚きを見せている。観客の無数の妖怪たちもだ。

控え室のひとつ。

そこで人間と九十九神の夫婦が、目を丸くしていた。

「九尾の妖怪、八尾弦徳が何故に九十九神を身に付けられる!?」

妻の鈴に膝枕をしてもらいながら、控え室に設置されたモニターを見る烏賊屋が声を出す。妖怪が九十九神を纏うなんて有り得ないと、真実を受け入れるのに苦難する。

ざわめきが会場を覆う。

「あれは、例外の中の例外が、奇跡の偶然が、運よく二つ重なった姿なのじゃよ」

ベンチ内の油儀が言った言葉に視線が集まる。

「どういうことですか?」

無常水越斎がサラリと長い髪を揺らしながら問う。水虎の細い目に力が入っていた。油儀は、結界の向こう立つ黒い姿を見ながら知っていることを渋い声で話し始める。

「知っていると思うが、若は、弦徳様は、半妖だ」

「えっ、そうなの!?」

天野太陽が、ポイントを間違え驚き大きな声を上げる。本当に知らなかったようだが、一七五や鍋中が怖い表情で睨みつけていた。

その太陽の頭を抱え込むようにして虎二が両手で口をふさぐと、太陽も肩を縮めて小さくなる。そしてバツの悪そうな表情を虎二の胸に埋めて隠す。

気を取り直し油儀が、話を再開した。

「弦徳様には人間の血が半分ながれている。だがやはり妖怪九尾の血は、とても強い。事実上は九尾の血のほうが濃いといえるであろう。しかし、僅かに存在を許す人の血を、九十九神が受け入れたのじゃ」

弦徳の父は、九十九神の使い手だったと聞く。ならば半妖の弦徳が妖力共有しても可笑しくはないと話を聴く者たちも思った。理屈的に確立はあるだろう。

しかし、九十九神の使い手には、誰しもなれると限らない。素質と愛称が必要だ。あの黒い刀の九十九神と弦徳の間に、そのふたつが一致したのだ。

レアな存在である半妖と、使い手というレアな存在が一致したのだ。超レアといえるだろう。

「あの黒い刀は、九十九神？」

妖力共有して、鎧を纏った弦徳の手から消えた黒い日本刀。

「若が纏った九十九神、あれは壊れているのじゃよ……」

「壊れ物？」

水越斎も、視線を黒い弦徳に戻す。

「ああ、あれは昔、若が戦った九十九神でな。人に酷使されて心のみを壊されたのじゃ」

「九十九神にも心があるのですね……」

少し悲しげに珠美が言う。

「ああ、あれが化けた姿がどのような成をしていたかはワシもしらん。だが、若はあれと二度戦ったそうな。しかし初めて戦った時、あれの色は白かったと聞いた……」

「え、色が変わったのですか？」

珠美の口調に悲しさが増えた。油儀の語りに、刀の過去を推測しているようだ。

白から黒に変わる。あまりいい過去を推測できない。悪い方へと考える珠美。そのイメージが不幸を察する。

「若が、再びあれと戦ったのは、五年後。その時には白から黒に色を変え、心が壊れていたと聞く」

五年間の時の中で、刀に何が起きたのかを珠美は深く考えた。

「そして若が妖力共有した使い手を打ち負かすと使い手は、妖力共有を解いて命乞いをしたらしい。そして黒く変わった刀を置いて逃げ去ったのじゃ」

「それを弦徳さまが受け継いだと？」

「ああ……」

油儀が最後に渋く答えた。

黒い体に茨を這わせた弦徳が、似た甲冑を纏うタケシを睨む。

「その九十九神……、心がないな……」

春婆怒が悟り、そう言う。

気配を感じられないのだ。九十九神特有の妖気を発していない。その理由を考えるのならば、回答はそれしか出てこなかった。

九十九神は、心で妖気を放つ。心が存在しなければ妖気を放たない。しかしそれは、死んでいるのと一緒だ。死んだ者が妖力共有はしない。死体は動かない。

「この子は……」

マスクの下から弦徳が話す。その言葉は、九十九神を子と呼んだ。

「この子はね、哀れな子なんだよ」

「……」

タケシと春婆怒は、弦徳の話を黙って聞いた。弦徳の声を聴こうと周りの妖怪たちも耳を澄まし静まり返る。

弦徳の言葉だけが流れた。

「元は神社に祭られていた宝刀の類だったらしいのだが、九十九神に変化と共に、賊に盗みだされたらしくてね……。随分と過保護に祭られていたらしく、一般常識が乏しかったらしくてね。何よりも運が悪かったのは、変化した人の姿だ……」

弦徳が、心を閉ざした九十九神から聞いた過去を話つづける。

「清らかな乙女の姿を象ったらしい。純粋無垢な心のままにね……」

「まさか……」

タケシが上ずった声で言った。嫌な予想を立てながら。

「そう、この子は、使い手たちに……、使い手が替わるたびに……、その身を弄ばれたのだよ」

弦徳の話を聞いて、ベンチの中の珠美が、眉を八の字にしながら口を両手で押さえた。目が潤んでいる。涙が見えた。

「三種百色を叶える日々よりも、長い間、嬲られ蹂躙される日々がつづいた彼女は、徐々に心を失い閉ざしていった。そして僅か十年の月日で色を黒く変えたのだよ……」

「哀れじゃの～。ならば、わらわに喰われて肥やしと替われ！」

春婆怒が、さぞ当然の如く言う。その台詞には、同情の念は微々たりとなかった。

「そうだな、名案だ、春婆怒！」

タケシが春婆怒の言葉を指示する。そして構える。

「貴様！」

漆黒の仮面の下で牙を剥く弦徳。そして構える。

タケシが弦徳に向かって走りだした。しゃべり合いは終了。戦いの開始。

走りながらタケシが叫ぶように語る。

「時に哀れみは人を傷つける。慰め癒しても傷は残る。挙句、自分の中に引き篭もり、こうして醜態をさらして同情を誘うぐらいなら、消えてなくなり魂を先に進めろ！　天国に進むもいいし、輪廻を繰り返すもいいだろう。しかし、無駄に留まるな！　先に歩め、進まなくては生きている意味も価値もねえんだ！」

「気が合うのぉ～。わらわも同感じゃ」

「なるほど、それが貴様の優しさか！」

納得していないが弦徳がそう吠えた。

「いいや、押し付けの信念だ！　その信念が強さになる。受け入れる必要は、ない！」

迫るタケシを見ながら弦徳が独り言のように囁く。

「茨巫女、貴方はどうしたい？」

一瞬の沈黙。タケシが迫る。そんな中、小さく消え去りそうな声が、弦徳の耳に届いた。

春婆怒にも感じ取れた。小さな黒い扉が僅かに開き、そこから微かに匂う甘美なまでの香り。九十九神特有の妖気だ。黒い刀の九十九神は、死んでいないと春婆怒が気づく。心が生きている。

「わたしは……」

小さな声だった。

その声は、既に笑いも幸せも忘れたはずの壊れた白い声。男たちの汚い欲に黒く練り潰されたはずの哀れな声。

「わたしは、貴方に救われた……」

「いいえ、救った覚えはありません」

黒く染まった心の声。その主に弦徳が、優しい声色に酷さを混ぜて答えた。タケシの言葉が意味するものに、彼女が答えられると信じて、厳しくも選択を委ねる。

「私は、貴方を利用するために、春婆怒に勝つための道具として手にしたのです。誤解せずに……」

「わたしの汚れは……、汚いですか……？」

「私には、関係ありません。春婆怒を倒せれば」

だが妖怪としては外道。父と同じである。そして、外道と知りながら父に加担した母とも同じである。目的の為に手段を選ばず、外道に身を落とす。

毒を持って毒を制するといえば、多少は綺麗に聞こえるだろうか。しかし、やっていることは妖怪として道を外しているのに間違いない。昔は、そこまでしてでも春婆怒を、仇を討ちたかった。

妖怪として恥ずかしいまでのこの醜態。鬼道丸が「妖怪として恥ずかしき、なんたるも情けなき姿」と、愚弄するかのように言っているのが目に浮かぶ。言われても仕方がない。

だが、今は違う。この姿を見せた理由。それは、自分のすべてを、長として皆の上に立つ自分の真実を見せる執拗が感じられたからだ。

「それが、わたしの正しい使い方です……」

茨巫女がそう言った。

開いた手を後ろに振り被る弦徳。

「ならば、戦いましょう！」

「はい、仰せのままに……」

黒く塗りつぶされた扉が大きく開く。

「ブレイド・ウェポンモード！」

振り被った弦徳の掌内に、あの黒い刀が表れる。そして強く強く握り締めた。手と手を取るように。

「行くぞ、弦徳ぅぅぅぅぅぅぅ！！！」

拳を握ったタケシがジャンプした。降下する先には、黒い甲冑に黒い日本刀を振り被った弦徳がいる。その背後で八本八色の尾が靡いていた。

九十九神を纏いし深緑の使い手と、九十九神を纏いし漆黒の半妖。ふたりの拳と刀が振るわれる。

上空から飛び込んで来る対戦者に横から黒刀で切りつける弦徳。タケシは振り上げた拳よりも先に、長いリーチの蹴りを繰り出す。その爪先が、黒刀の鍔を蹴った。蹴りの威力に刀が止まる。

「なに！」

止められるとは思いもしなかった弦徳が一言を発する。

狙い撃たれた刀を弾くと、予定どおりタケシが拳を落とす。体重、重力、腕力を込めた一撃が加速を宿す。

瓦、板、プロック、氷柱、それらを難なく破壊する空手道の拳が、弦徳の頬を捉えると、力任せに振り切られる。

仮面が揺れて兜の中に衝撃が轟きながら駆け巡る。眩暈が弦徳の意識を襲う。

「舐めるな！　堂本タケシ！！」

しかし敵の名を叫び弦徳が意地を見せた。

頬に拳をお見舞いされながらも、一度は弾かれた刀を再び振るう。空に居るタケシは、弦徳の胸板を踏み台に後方へ回避をかねて飛んだ。

そのタケシの胸元を黒い刀身が過ぎゆき火花を散らす。切られた。刃が鎧の中まで届いて胸に斬激の痛みが走る。

「くそッ！」

着地したタケシが、胸を押さえて痛みに堪える。刻まれた一の字から赤いものが流れ出ると、更にダメージを自覚する。

「タケシや、傷のほうは、わらわが塞いでやる。だが、もうお遊びは終わりじゃ。わらわを使え」

「ああ、これ以上の余裕は失礼だな……」

タケシが、自分の血糊が付いた掌を前に突き出し台詞を決める。

「ハルバード・ウェポンモード！」

手の中に吹き荒れた緑風が、長槍の形を作り出す。

戦いが武器対武器へと、槍対刀へと移っていく。

それに緊張勘が、ひとつ量を増すのが感じられた。

<　八尾弦徳・8　>

鍛えられし鋼の刃が空間を細切れにしながらぶつかり合い稲光を散らし合う。

その攻防は、派手でありながらも巧みだった。観客が見入り、弾き合い奏でる刃物の名曲に耳を傾けていた。

春婆怒の長槍が振るわれれば、キラリと鮮やかな白い光が瞬き、弦徳が黒い刀を振るえば、残像にも似た黒い尾のグラデーションを残して刀技を披露する。どちらの技も幽玄で一流の程度よりも高みにあった。

斬激であるはずの黒い一太刀をタケシが長槍の鋼柄で正面から受け止めると、一振りに強い衝撃が盾にした槍全体へと響き広がり体を後方へと大きく飛ばす。その距離が、また派手で見応えを演出しており観客たちが迫力に沸く。

飛ばされたタケシの飛行距離は、十メートルぐらいあっただろうか。着地に空気を足元から舞い上がらせて見せると、すぐさま前へと走りだす。

その英姿は、後方へとさがるギアが付いていない暴走車にも誤解できた。だが、その誤解は憧れるほどに力に満ちていた。

飛ばされ着地後に、前へと走ったのはタケシだけではない。弦徳も、飛んだタケシが着地する前から追撃の疾走を開始していた。

そして接近。更なるアクションへと繋がる。

「突きぃ！」

槍という長さを生かして先手を繰り出すタケシの牙が、弦徳の喉仏を狙い突き立てられた。その一手に潜む狼の殺気を皆が皆はっきりと感じる。

弦徳は鋭く押し寄せるタケシの心を映す真っ直ぐな突き激に対抗して、後頭部まで振り翳した黒刀から、縦の振るいに黒い軌道の痕跡をのこして打ち落とす。

「斬っ！」

気合が言語に代わる。

槍の切っ先と刀の刃が神技の如く激突して重なり合うと、何処までも届きそうな鉄の音が響き飛ぶ。耳鳴りにも近い音がすべての観戦者の鼓膜の置くまで届き震わすと、猛りとかわり心も揺らした。

僅かな面を激突させた刀と槍が如激に弾き合うが、ふたりはその衝撃を受け流しながらも利用するように体を操り、第ニ激目を振るい放つ。

弦徳は、刀に発生した衝撃を、上から背後へと廻し、背後から下へ、下から前へと掬い上げて繰り出す。

弦徳が見せた一連の動きの中で、槍を弾かれたタケシが体ごと右回転させると、背を見せた状態から槍尻を突き立て弦徳の顔面を一突き攻めたが、弦徳は何事もなかったといった表情で回避していた。

そしてタケシが、振り廻し横から槍の小斧で切りを放つと、弦徳の黒い刀が掬い上がって来る。

「にゃろうっ！」

「刀っ！」

ふたりの気合が雄叫びに乗せて口から吐かれると、刀身と刀身が狙った先に襲い掛かる。

ふたりの攻撃がヒットするならば、ほぼ同時に思えた。

そして互いの斬激が格身に傷を付ける瞬間。ふたりの間で黒と緑の光がスパークする。

「かはっ！」

「うがっ！」

ふたりが呻く。

バチンっと、電気がショートした音を大きく轟かせ、黒と緑の不自然な輝きをふたりの間から眩しく放った。

そして激音が二つの光から発しられた後に、光の中から音だけではなく、ふたりの体が煙を靡かせながら激しい勢いそのままに吹き飛ぶと、背から落ち転がった。

ふたりは動かない。体からゆらゆらと焦げ臭い煙を幾つも上げながら寝そべっていた。

相打ちに観客が歓声をあげていたが、起き上がらないふたりを見て徐々にどよめきへと声を変えていく。だが、誰一人として、これで終わったとは思わない。

観客たちが見守る中、先に動いたのは八尾弦徳だった。

動いたといっても脚がピクリと動いた程度。そこからしばらくして腕が動き、うつ伏せの体を起こそうと両手を地に着け力を入れる。

仰向けで倒れているタケシは、まだ動きを見せないが、ゴホゴホと席込んでいる声が弦徳にも聞こえた。

弦徳が刀を杖が代わり片膝立ちになる。ゆらゆらと白い煙が脇腹の辺りから多く上がっていた。

「効いたぜ～……」

倒れているタケシが言った。そして両脚が天に向けて高く上げると、そこに力を貯める。その両脚に勢いを込めてタケシが跳ね起きた。しかし着地は槍を杖にしている。そのタケシの腹部が焦げ付き黒い煙を今でも上げていた。

ふたりの斬技は、斬激や衝撃だけではなく火力もあるようだ。焼かれた箇所をタケシが手で撫でる。

付いた膝を伸ばす弦徳。その弦徳の焼けた脇腹を、うねる黒茨の蔓が集まり、いじらしく愛撫するように這いずり回りながら嫌らしいまでの粘液を焼け焦げ火照った箇所に、嘗め回し冷やす仕草で塗りつけていく。ヒーリングだ。

「ありがとう、茨巫女さん」

感謝を述べた弦徳が仮面の奥で優しい笑みを、当然の如く自然体で作る。妖力共有している茨巫女には、その笑みが届いているはずだ。焼けた箇所を撫でる黒い茨が更に世話しなく動いた。もじもじと。

ふたりの使い手が放ち喰らい合った一撃は、致命傷への一歩手前だった。受けたダメージを互いの九十九神たちが癒そうと忙しくメンテナンスをつづけていた。ふたりの使い手たちは、その間を暫し待つ。

「技量も技力もほぼ五分か……。ならばこちらは、その上を行かせてもらう！」

「いちいち報告はいらないぜ！　好きにしな！」

律儀なまでに言葉を見せた弦徳にタケシが返答を乱雑に返すと、ふたりのメンテナンスが終了していた。完全に傷が癒えたわけではないが、戦いを再開するのに、十分な回復量だった。

そして、タケシが槍を脇に挟んで先行する。

先程まで治療に精を出していた黒い茨が鞭のようにしなりを響かせ、先行を始めたタケシに伸びて襲い掛かる。その数二本。

タケシの脚が進行を緩める。茨鞭が当たったわけではない。パチンパチンと真空の壁を叩く音を鳴らして茨鞭がまとを外すと、タケシが侵略を再開した。伸びた黒い蔓は、防激を諦め素早く引き戻る。

それを待ち受ける弦徳が、背後で靡く自分の尾から更なる武器を引き抜き構えていた。蔓が鞭に変わり攻めを見せてくれたおかげで、その時間が十分に稼げた。

時間稼ぎの間に引き抜かれた新たな武器は、白いオーラを放つ尻尾が握りし白い刀。それは小太刀だった。黒刀に比べて短い。

「二刀流か！」

攻め入るタケシが弦徳を見て言う。

右手に黒い刀、左手に白い小太刀。確かに二刀流。

体を正面に向けて足の型は四股立ち。二刀の刃は、両脚の角度と同じ八の字に下を向いていた。その構えは重みを感じられるどっしりとした父を思い描く構えだった。

いざいざと二刀の構えにタケシが挑む。

「蒔牙刀華取・蒔き飛弾幕！」

早速といわんばかりに抜きたての白い小太刀を振るう弦徳。小太刀が白いラインを無色の空間に描くと、純白の中から白い牙が次々発射されていく。

「飛び道具、かわせぃ！」

「当然！」

春婆怒の言葉と同時に、前へと進んでいたタケシが直角に曲がり右へと走る。そしてタケシが居た場所に、槍の刀身のような刃物が複数飛び過ぎて行く。

横に走ったタケシが再び直角に向きを変えて進路を弦徳に合わせる。脇に挟んだ槍を前にかざし、騎乗したナイトがランスで敵を狙うように突進をつづけた。

「蒔牙刀華取・舞輪乱舞！」

突進してくるタケシに白い小太刀を真っ直ぐに向けた弦徳が、技の名を叫ぶと、純白の刀身から数多くの刃が渦巻きながら現れて、小太刀の周りを回転していく。回る刃の数は十や二十を超えていた。

「発射！」

隙間をなくすように扇型に発射された白い牙の弾丸。その一斉射撃にタケシは怯まない。予想は出来ていた。

「なんの！　疾風防壁！」

タケシが、串刺しにしようと向けていたはずの槍を横に振るい、緑風の壁を妖術で作り出した。緑風の斬壁が、次々と飛んでくる白い弾丸を打ち落としていく。

弾幕の白き刃を防いだタケシは、そのまま自分が築いた防壁を裏から突き破り、更に全身を成功させる。もう、弦徳は眼前。槍の間合いへと進入した。タケシの距離だ。

しかし弦徳の態度は、冷静そのものだった。

「あまい、合同妖剛激！」

両手に握った二本の刀を、左右に大きく開いた弦徳。その刀には既に術が作られていた。黒い刀が茨の蔓と一緒に大きな黒い球体を築き。白い小太刀は、複数の刃を回転させながら純白の球体を作り上げていた。

タケシは、弦徳の術の完成に、自分が築いた緑風の壁によって視界を妨げられ、気づくのに遅れていた。

「危険じゃ、タケシさがれやっ！」

春婆怒の叫ぶが既に遅し。二つの破球が同時に放たれる。回避が出来ない。

「畜生！！」

その蛮声の直後に、タケシは光と闇の攻撃を、半身ずつ均等な配分で受け止める。防御らしい防御は達成できていなかった。不覚に直撃を許す。

純白の光が弾け鎧を刻み、漆黒の闇が吹き荒れその身を押しつぶす。タケシの肉体上で、ふたつの破滅が競い合うように生命を奪いとっていく。

「ぐぅぅぅぅっ！」

二種の滅びが鬩ぎ合うなかタケシが呻きを上げて堪えしのぐ。しかし、その悲鳴は、陰と陽が轟かせる崩壊の嵐に掻き消され、誰の

耳にも届かない。

そして、ふたつの力が爆発して異なる存在を忌み嫌うように反発しあいタケシを遥か彼方へと投げ飛ばす。

「決まった！」

白と黒の二刀を下ろすことなく弦徳が必殺攻撃の余韻に浸っていると、技を全身で浴びたタケシが地に、一回ニ回と跳ねて止まる。そして放置された消し炭のように転がり動かなくなった。

未だに弦徳が放った技の威力が、台風が上陸した後と思えるように、ドーム内に吹き荒れ残っていた。髪の毛がある妖怪たちの髪型を乱し揺らしている。

<　八尾弦徳・9　>

弦徳が起こした暴風が已むと、よろよろとリビングデットのようにタケシが立ち上がってくる。

弦徳はもちろんのこと、観客たちの視線すべてがタケシへと集まる。

まだ立てるのか、痛々しい、よく立った、死ねばよかったのに。様々な思いが視線に乗って注がれていた。

だが、身を起こしたタケシの様子が一変する。それらの視線に含まれた念を察したのか胸を張り凛々しく振舞う。まるでダメージがないと強情を主張していた。

総身を正中腺に沿ってきっちり半分。右半身の鎧はズタズタに切り裂かれ無数の斬痕が刻みこまれている。左半身は、真っ黒に染め潰したように黒く焼け焦げ不快な煙を揺らめかせている。

それは醜態というよりも、まるで新たなる変身を遂げた魔人の風貌に映った。左右のデザインが違う鎧を身に付けた、タケシの第二形態にも思える。

勇ましい仁王立ちのタケシに、弦徳が睨みを飛ばす。あの会心の一撃、いや、会心の同時ニ連激を浴びて立つタケシの強さに敬意を払っていた。それでこそ宿命のライバルと心に刻む。

そう、タケシは、ライバルとして位置づけるのには、素晴らしい程、丁度いい存在だった。乗り越えるには格別な高さがあった。

体格、闘志、技術、体力、信念、精神力。それらすべてのパラメーターが最高の数値に近かった。

そんな者と戦っている。仲間や長老たちの前で、四万五千の妖怪たちの前で戦っている。

いつも後処理班の戦いは、ひとりだった。お供の七人岬や勧誘班の者が付くことはあっても、やはり最後に頼れるのは自分だけだ。

それとまた、八尾八色の武具の秘密を守るのには丁度よかった。

人や妖怪のために戦う。それは大義名分。後処理班の勤め。次期に長を継ぐための理。それが当然の戦い。戦う理由付けには丁度いいと思っていた。実戦経験を積み重ねるのに丁度いいと思っていた。

しかし、この戦いは、この勝負は、この決闘は、何のためだろう。

勝てば長を継ぐ？

勝たなくても九尾になれば長は継げた。

では、母の敵？

確かに大事なことだ、そのために技を磨き続けた。

しかし、戦う前の猫田珠美の言葉に、仇の意味が薄らいでいった。戦いの中で、もっと薄らいでいく感覚を味わっていた。

春婆怒の言うとおり、そもそも言いがかり。春婆怒は、降りかか

る火の粉を払ったのみ。今では、そのとおりと納得まで感じてきている。

この戦いは、一体全体なんなのだ？

そして、目の前の人間、堂本タケシは、何故にそんな戦いに付き合う？

対戦相手の心情に疑問を抱く。しかし、タケシの仮面の下の表情は、笑っているように思えた。空気がそれを知らしている。

タケシの腕が動いた。

幾つもの傷が刻まれた腕を、ゆっくりと突き出すように前へと向ける。五本の指が、弦徳を指す。

伸ばした腕に、伸した五指。人差し指、中指を残して他の三本が手の中へと収まっていく。

指鉄砲の形。

「ん？」

弦徳が、五十音最後の文字を疑問系にして口に出す。

「バッーン」

タケシが、わるふざけをする子供の様に、象った右手の指鉄砲を弾いて発砲音を真似る。そのジェスチャーに弦徳が身構えた瞬間、あることに弦徳が気づいた。しかし、気づいたときには遅すぎた。

タケシの手に、どちらの手にも槍がない。弦徳に飛び掛り、ふたつの術を喰らうまでは手にしていた長槍が消えていた。

サクリ！

二本の刀を構えた背中に槍が刺さり胸を貫き地で止まる。

「なに！？」

槍に貫かれた弦徳には痛みがなかった。槍の刺さった角度からして、真上から降ってきたのだと推測できる。

「あの双術を……喰らいながらも……」槍を投げていたのかと、台詞を繋ごうとしたが、全身が痺れてゆうことが利かない。ろれつも可笑しい。

「影槍束縛じゃ」

「お返しだ、派手にいかせてもらうぜ！」

タケシがシンメトリーとは異なる姿を横に捌き、大きく股を開きながら腰を落とす。するとタケシの周りに緑風が旋廻を始める。

「我が力は、思念の塊！」

そしてタケシの周りを渦巻いていた緑風は竜巻と変わり、その渦頭はうねりながら天へと突き進む。

「我が技は、執念の権化！」

渦巻きながら竜の如く暴れる竜巻。まるで触れてはいけない逆鱗を触れられたように狂って腰を振り回す。

「力と技で、我が真実を突き止める！　跳うっ！」

言葉の中に、あまり意味がないことを弦徳は悟った。台詞を無視して聞き流す。

竜巻の中に居るタケシが上を目指してジャンプした。そして体が竜巻に吸い上げられていく。やがて龍の胃をくぐり、タケシが頭部に達すると、そこから龍騎士の如く竜巻を操るように向きを変えて蹴りの構えを作り、動きを封じた弦徳目掛けて侵攻していく。

「なんの！　これしきーー！！」

束縛を身に受ける弦徳が、奥歯を強く噛締め額に青筋を幾つも浮かべる。双眸に血管が走り赤く染まり形相を鬼とする。

パリーンっと、カラス細工が砕ける音が、背中と胸で鳴り響く。砕けた影の槍が、キラキラと綺麗な粉となり降り注ぐと、それと同時に全身へと自由が帰ってきた。

束縛から解放された弦徳。だがすでにタケシが緑の竜巻を纏い蹴り脚を先頭に迫っていた。

見上げる弦徳。まだ回避が可能だった。

「面白い！」

正面から受けて立つ積りか、弦徳が二刀を左右に振りかざす。白と黒の刀身に対極のエネルギーが集まっていくと、口元が僅かに釣りあがった。

弦徳が正面から力比べを望んでいた。昔ならば有り得ない。弦徳は、そもそもそういったタイプではなかった。国語の教師だ。文科系であり、体育会系ではない。それを知る者たちが表情を驚かせ、まさかと思う。

「うりりりりりりりぃぃぃぃぃぃぃぃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

竜巻が呻り、タケシが呻る。

「でえええええええぇぇぇぇぇぇぇぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

弦徳も負けず劣らずの気合を込めて咆哮をあげる。

上空から攻めるタケシの蹴りと、地上から迎え撃つ弦徳の双術が激突した。

春婆怒が作り出した竜巻の強風とは別のものが吹き荒れる。白と黒、そして緑の妖気が拮抗し合う。

「す、すげえ……。あの男、俺とやり合った時より強くなっている」

鬩ぎ合うふたりの激突を見ながらベンチで虎二が声を零す。その顔には暑さで流した汗とは別の汗が流れていた。

悟る。自分と違う、もっともっと上のステージにふたりは居ると。

撃つ者、受ける者が、もう一押しと力を押し込む。ぶつかり合う強大なパワーが悲鳴を上げて火花と雷光を飛ばしていた。

妖気に歪が徐々に増えていく。白い光球と黒い暗球の形が崩れ始めていた。タケシの技に押されている様子だ。

「ぬぬぬ、術が半端だったか！」

飛び迫るタケシを迎え撃つなら、この術しかないと考え放ったが、短期に唱えるには時が少なすぎた。技が未完成。それが原因で押されている。否、押し切られる。

「喰らえ、　堂本流超人空手奥義、風神飛翔脚！」

最後の一押しといわんばかりに技の名を叫び唱えるタケシの蹴り足の先端が、激しく螺旋を尖らせて、白黒の双術を弾き割る。

「若が、押し切られたぞ！」

鍋中が叫ぶ。

激突を繰り広げていたふたりの間から、瞳を溶かしそうな眩い閃光が放たれ、その直後に強い振動がドーム型の結界を叩いて揺らす。更に緑色の妖風の破片が刃物に変わり無差別攻撃を闇雲にばら撒き、結界の全面に当たって火花を散らす。

もしも、この結界が存在してなければ、今の攻防に、何匹もの妖怪たちが巻き込まれていただろう。死傷者は、百や二百では済まな

い筈だ。それは見ている者たちにも理解できた。

井戸仙人が作り上げたドームの結界内は、黒い煙が渦を巻き、魔界の黒雲が落ちてきたかのように荒れ果てていた。内の様子が分からない。黒雲に景色が濁っていた。

観戦していた者たちが、どうなったのかと黒い黒雲の中へと目を凝らす。

ビックバンが生じる寸前に、タケシの術が弦徳の双術を押し切ったように窺えた。だとするならば、これ程までの衝撃を多く受けたのは弦徳。この黒雲の中で絶命している可能性もある。

弦徳が負ける。

春婆怒たちが勝利する。

妖怪サイドからしては、あってはいけない結果。ベンチ内の者たちは、弦徳の勝利を信じていた。故に戦いは終わらないと信じている。しかし、緊張勘に汗を流す。

徐々に渦巻く黒雲が薄らぎ中の様子が窺え始めた。

立ち尽くす影と、ひざまずくような影。晴れた闇に浮かぶ二つのシルエット。立って居るのがタケシで、片膝を付けているのが弦徳だった。

だが直ぐに、付いた膝を上げる弦徳。タケシと目線を合わせて睨み合う。しかし弦徳の胸から深い亀裂が全身に走り、黒い鎧の五体へと伸びていた。

互いの身形が激戦を繰り広げていると分かりやすい程の容姿へと変わると、そろそろ後半戦に入ろうと行動を起こす。

弦徳が、ウェポン・モードで武装した黒刀を消し、左手に持っていた白い小太刀を尻尾が巻き持つ鞘へと戻した。

弦徳が、本日五本目の武器を選び出す。それは、灰色に妖気を放出する尻尾が持つ物。西洋の剣。バスタードソード。

「ほう、今度は刀じゃないのか」

バスタードソードを両手で持った弦徳を見てタケシが言った。

刀から剣へ。

罅割れを見せる甲冑に灰色のオーラを放つ両手持ちのソード。それはそれで弦徳の黒い姿に似合っていた。

タケシが武器を持たない手で構えを見せる。ゆるりと脱力の感じられる静かな構え。ゴツゴツとした拳は握られていない威嚇の少なき構えだった。

ふたりの間に穏やかな風が流れた。燃え上がる双方の闘志を僅かに冷ます。しかし、そんな風は要らない。ふたりは冷静だった。

弦徳が、両手に持っていた剣をクルリと回すと逆手に持ち替える。まるで大地を狙って突き刺す素振りで腕を上げた。どうやら『よう』ではなく、そうする積りらしい。

「パトラッシュソード　ネロ・灰色天使光臨！」

弦徳が、雄叫を揚げた後に剣を地面へと突き立てる。ズブリと音を鳴らして刀身が突き刺さった。

そして剣が刺さった場所から妖気が噴出する。

「なんだ？」

弦徳の行動を見てタケシが首を傾げた。

しかし、突き立てられた箇所から沸き出た灰色の妖気が、小さな波となって地を滑り広がっていく。

薄いドライアイスの煙の中に、煙草の煙が混ざったような物。それが足元を蹂躙して広がり続ける。

<　八尾弦徳・10　>

剣を突きたてた弦徳を中心に、広がった灰色の絨毯が、タケシの足元まで迫る。だが、タケシはうろたえない。足首まで灰色の妖雲に包まれる。そして煙の絨毯が、結界内すべての地面を包み込む。

明らかにそれは、何かの術の下準備。春婆怒はもちろんのこと、タケシもそれを察する。

「何が来ると思う？」

タケシの質問する声の中になにやら弾むものが感じられたが、春婆怒はあえて無視する。そして、灰色絨毯の中から感じる気配をタケシに告げた。

「どうやら、複数で攻めてくる積りじゃ」

「複数？」

春婆怒の答えと共に、地を這う雲の表面が、ゆらゆらと波打つ。中で何かが蠢いていた。そしてタケシの正面。何かが僅かに頭を出して、ジョーズの如く波うちながら迫ってくる。それにタケシが拳を作り構えを築く。

進行して来た波は、タケシの目前で水面から飛び出すように跳ねて襲い掛かってくる。

「おりゃ！」

タケシは、それが何かを確認するよりも、正拳を繰り出すのを優先させた。そして、地面の中から飛び掛ってきた何かに正拳突きが減り込んだ。

「誰だ、こいつ！」

タケシの拳は、それの顔面に減り込んでいた。それが吹っ飛んで薄い煙の絨毯上に倒れこむ。

それとは、痩せ細りガリガリとなった人の成をしていた。全身灰色、セメントに浸かったような色だ。

おまけに背中にはふたつの羽が生えていた。羽といってもボロボロ。とても羽ばたき空を舞うのは不可能な代物。まさに飾りていどだが、飾りにしても地味というよりみすぼらしい。

タケシに殴られたそれが立ち上がる。それに続いて、煙の中から次々とそれと同じ醜態をした者たちが沸きあがってくる。数が多い。ギロリと腐った眼が数多くタケシに向けられた。

「何だこいつら、天使の積りか？」

「だとするならば、堕天使じゃのぉ」

翼を生やした餓鬼たちに囲まれながらも、ふたりの会話には余裕が見えた。声が笑っていた。

下等な堕天使が、獣のように牙を剥き、両手の爪を立てながらジリジリと間合いを詰める。一斉に飛び掛る積りなのかタイミングを計っていた。だが、その様子を見回したタケシの瞳がキラリと光る。

その輝きが、獣以上の野獣に見えた。

そんなタケシの視線を見てしまった観客たちの多くが、自分が妖怪変化だということも忘れて背筋を伸ばし威圧される。

ベンチの中で、珠美だけが大きく目を見開き輝かせ、ワイルドアイズに頬を染め上げる。恋する乙女の眼差しだった。

この子の趣味は良く分からんと、朧がショートヘアーの黒髪をひとりでかいていた。

堕天使たちに取り囲まれたタケシが、両腕を左右に広げ胸を突き出し天に向かって咆哮を叫ぶ。威嚇の声が周囲に津波となって襲い掛かり心の奥まで恫喝した。

弦徳が広げた灰色の絨毯。その上に立つ者たちを、雄の気迫が恐怖の如く意識を攻めた。

一瞬、堕天使たちが、背と羽を丸めて怯えを見せる。そこにタケシが攻め込んだ。数で上回る敵に、迷いもなく単騎で飛び込む。

「うぅりゃ！　どりゃ！　そりゃ！　てえゃ！」

拳や蹴りが、次々と灰色の肌を叩き堕天使をなぎ倒す。一騎当千が、そこにあった。

タケシの前蹴りが堕天使の腹を蹴り吹き飛ばす。一人二人と続いてアッパーカットに舞い上がる。廻し蹴りを頭に喰らい回転しながら落ちていく。堕天使たちは、ただの雑兵だった。

「どけい！　雑魚ども！」

なぎ払い吹き飛ばし、道を築きながら弦徳を目指すタケシ。そのタケシを無視して弦徳は、自分の尻尾から新たな武器を選び出していた。

そして赤い刀が握る鞘から日本刀を引き抜く。

赤い柄巻きに、四角い赤茶色の鍔。刀身は、のこぎりのようにギザギサだった。あんな刃で切られたらった。傷口がえらいことになりそうだ。

タケシは、堕天使たちを殴り蹴散らし進むが歩みが遅い。弦徳までの距離も遥かに遠い。

「邪魔くさい連中だぜ！」

それが彼らの存在意義。後ろから一匹の堕天使が、タケシの腰に絡みつく。しかしタケシは無視して進みながら眼前を妨げる者をぶん殴る。

タケシに殴り倒された堕天使の顎が外れて倒れこんだ。その姿が灰色の煙の中に沈むとすぐに、代わりの堕天使が姿を現し加戦する。

「ええぃ、本当に邪魔！」

苛立ちを感じたタケシが技の種を替えた。

抜き手が喉を刺し、蹴りが睾丸を蹴り上げ、一本拳が人中を突く。堂本流の禁技の数々を喰らった者たちが、吹き飛ぶのではなく、も

んどりうち痛みに耐えかねて崩れ落ちていく。

「どうだ、こん畜生どもが！」

タケシの人差し指と中指が、仲良く同時に眼と眼を突き合う。その直後、腰にしがみ付いていた堕天使を踏み台に、別の堕天使が後ろからタケシの首にしがみ付く。

だがタケシは、その堕天使を背負い投げの如く前へと投げ捨てた。しかし、更に後ろからタケシの首に、別の堕天使が組み付いてくる。しつこい。今度は払えなかった。

それをきっかけに、タケシのあちらこちらに堕天使軍団が組み付いた。あっという間にタケシの動きが封じられる。堕天使たちが作った山の頂上に、タケシの頭だけが見えていた。もがいている。

「このパトラッシュ剣ネロの能力が最終的に目指す効果は、相手の足止め。相手の動きを束縛するキミらの術と一緒だよ」

弦徳は、影槍束縛のことをいっている様子だ。ぽんぽんと、大地に突き立てられた剣の柄を優しく叩く。方法こそ違うが、確かに結果は同じところにあった。多数の亡者が群がるか、槍一本がスマートに決めるかの差でしかない。

赤いギザギサした刀を手にした弦徳が、真っ直ぐ頭上へと舞い上がり高さを得る。そして刀をタケシに向けて翳した。刀身から赤い妖気が紅蓮の炎のように揺れていた。鮮やかだ。

「赤毛刀庵・業火車輪弾！」

突きたてた切っ先から炎が渦巻き大きなコマの形を象り呻る。コマの先は、切っ先と同じくタケシを向いていた。

見る見るうちにコマは大きくなり術を唱えた弦徳本人によりも巨大な姿へと膨れ上がっていった。もう既にコマと呼ぶには特大すぎた。それはギガの単位のドリル。

「この術には幾つかの欠点が存在していましてね」

炎の大ドリルを渦巻かせ、弦徳が赤く染まりながら話し出す。

動きを封じられたタケシには、見上げた場所に弦徳の姿を見ることが出来なかった。ただ、渦巻く火炎の光景しか見えていない。声だけが届く。それだけ術のサイズが大きかった。

「まずひとつは、術を唱えるのに時間が掛かるのですよ。これでも完成していない、もうちょっとまってください」

炎が渦巻きを続け少しずつ成長していた。今の弦徳の姿は、巨大なフレイムドリルの頭に片腕をつっこんでいる。周りの空気がドリルの熱に押されて風に変わり始めていた。

「あとひとつは、見て分かると思うが、私からも目標の居場所が見えないんですよ。最初にロックした標的から狙いすら替えられないし、動くこともままならない」

堕天使に群がられた常態で、タケシが納得していた。そして、それらふたつのペナルティーを受けながらも、この術を使う理由も理解できていた。

「まあ、故に破壊力が尋常ではないのですがね！」

渦巻くドリルの前方が、回転しながら空気を吸い込み灼熱と替えて後方に吐き出していた。術の完成は近い。破壊の予告音が響き始めていた。

「よし、完成だ！」

右腕に装着した巨大すぎる火炎の螺旋。それが更に激しく回転数を上げて勢いを溜めるように空気を吸い込む。そして一定量の酸素を吸い込み終えると、ドリル後方にあるジェットの噴射口に点火した。

「喰らえ、そしてチリとなれ、春婆怒！！」

弦徳が、右手から落ちていく。隕石か何かが燃えながら大気圏を突き破り落ちて来るようだった。

物凄い威圧感と圧力の塊。渦巻く地獄の業火。その先端が、堕天使たちに動きを封じられたタケシの眼前に迫る。狙いは寸分の狂いもなく、タケシの眉間を狙っていた。避けるは無理。直撃だ。

タケシが、春婆怒ごと業火に抉られ、貫かれ、押し潰されていく。

火炎はタケシが居た場所を尚も抉り、大地に突き刺さりながら回転を律動しつづける。ゴリゴリと削り取る音が響き、大地も空気も轟かせた。

潰れた大地から、堕天使の破片が燃えながら飛び散り消えていく。コンクリート片が飛び跳ね結界に当たり火花を散らす。ドリルが形

を崩して火炎の帯を振り回し、結界を舐め回しながら暴れていた。

結界内は、まさに紅蓮の地獄。灼熱の魔界。すべての存在が火を上げていた。コンクリートが溶けて蒸発を起こす。

その中でも存在を許されたのが弦徳ひとり。彼だけが、この世界の覇者の様に見えた。

もしも井戸仙人が築いた日本一の拒絶型結界がなければ、間違いなく観戦しているすべての魑魅魍魎たちが巻き込まれ消し炭へとなっていたことだろう。結界内が、隙間もなく赤々と染まっていった。

「おりゃゃゃゃゃぁぁぁあああ！！」

しかし尚も弦徳は、ドリルの火炎術を、タケシが居たポイントへと押し立てる。これでもかといわんばかりに、念には念をいれんばかりに押し込み、回転を衰えさせずに抉りつづけた。

見ている者たちには、その行動がしつこすぎると思えたが、弦徳は尚も術をつづけていた。

<　八尾弦徳・11　>

抉る律動を続けていた弦徳の猛撃が、徐々に収まり破壊力に衰えを見せる。やがて巨大な火炎のドリルは、速力を失い回転を停止させると燃え尽きたかのように炎態を消していく。

「殺ったのか……」

術が満了を終えた弦徳が、空から地に足を付ける。結界内は、未だに熱風が吹き荒れ生命が存在するには過酷なまでの環境のままだった。

空気が乾燥しており、床には燃える物も無いのに火の手が上がっている。弦徳は、仮面の下で緊張と披露に汗を流しながらも、目の前に掘られた大きなクレーターを見ていた。

直径三十メートルあるだろうか、すり鉢上に抉れた大穴。奥深い中心は、火山の噴火口の如く溶岩が煮えたぎっていた。もくもくと白煙を上げている。

「跡形もなくなったな……」

観客席から術の傷跡を覗き込むぬらりひょんが言った。皆が見る大穴の中にはタケシの姿は破片すら見当たらない。すべてが蒸発して消え去ったのか、ただ解けたコンクリートが泡立っていた。

息を切らせながら火口内を見下ろす弦徳。目を離さない。まだそこに敵が居るかのように。

その弦徳の様子を察した観客たちが、勝負が決していないのかと疑問を抱き沈黙を守る。

弦徳が赤いのこぎり刀を鞘に戻すと、変わりに緑色のオーラを放つ尻尾から、七本目の刃物を引き抜いた。細身のサーベル。ルネッサンス時代の宝刀か、手を包むような形の鍔は、純金の光輝を大粒のエメラルドで飾っていた。

「この化け物……」

煮える溶岩を凝視しながら弦徳が言うと間も無く、熔けて軟らかくなった赤い底が盛り上がる。何かが浮上して来た。

「妖怪が、人間捕まえて化け物とは、よくもほざいたもんだな、にゃろう！」

盛り上がった溶岩が滑り落ちていく。四万五千の化け物が、目を丸くして注目すした。その表情は、驚く者、唖然とする者、自分の目を疑う者、様々だった。

真っ赤な溶岩が滑り落ちて、下からタケシが姿を現した。ざわめきだけで東京ドームが揺れた。

未だ煮えたぎるクレーターの中央。ぶくぶくと泡の立つ赤い灼熱のヘドロ。その中に、腰まで浸かったタケシの容姿は、甲冑が真っ赤に熱しられ、内から燃える力強い赤へと変わっていた。春婆怒の鋼が焼けた色だ。眉間には、ドリルで抉られた傷がひび割れとなって広がっている。

「あ、あれじゃあ普通、中の人間は、死んじゃうよね……」

褐色の肌に赤いポニーテールを揺らす日照り神が、信じられないと驚愕していた。

弦徳が見せた大技は、灼熱系の態勢を備えた妖怪たちでも絶命を覚悟し注意を計らなくては危険な部類。それをタケシは、正面から直撃したのだ、何故に無事で居られる。

しかも、身に付けた鎧が、あれほど赤く熱しられているというのに、中の人間が生きて平気なわけがない。蒸し焼きやホイル焼きもとうに過ぎて、ホットプレートで挟み込み、溶鉱炉へ投げ込んだレベルだ。

溶岩を掻き分け灼熱の海から上陸を目指すタケシ。赤く色づいた鎧から、蜃気楼が揺らめいていた。周りの空気も哺乳類が呼吸を許されるほどには冷めていない。一呼吸で肺が燃え上がり、大怪獣を真似て口から火が吹けるだろう。

業火の世界でふたりが向かい合う。クレーターの斜面を間に、弦徳がタケシを見下ろし、タケシが弦徳を見上げる。

「堂本タケシ、生きたまま妖怪に生まれ変わったか！？」

「妖怪、俺が？」

弦徳の推理は、皆が思うことと同じだった。弦徳の大技を身に受けた現実を差し引いても、生命維持が不可能な結界内での生存が、そのように理解するしかないと思わせていた。

人から妖怪へ。前例は幾らでも現存する。十番長老のインビシブ

ルが、昔からそれを疑われている。

弦徳が、不興な態度の言葉を掻ける。

「でなければ人間が、コンクリートが蒸発するほどの熱を耐えれるはずがなかろう……」

弦徳の言葉を聴きながら、後ろを振り向き、今まで自分が沈んでいた場所をタケシが見る。確かにそこは溶岩風呂だった。今気づく。

「タケシは人間のままぞよ」

答えたのは春婆怒。弦徳が疑点を迷わず返した。

「バカな！」

「タケシはのぉ、人を越えたのではないのじゃ。人でありながら人の限界を超えたのじゃ」

意味が分からない。云う意味が伝わらない。タケシも自分に起きた進化を飲み込めていない様子だった。春婆怒が、更に噛み砕いて解説を続ける。

「タケシは、貴様に追い詰められ一段も二段も階段を登り、到達したのじゃ」

「何処に？」

「超人にじゃ」

「はっ？」

弦徳の口だけではなく、会場の多くの席から同じような間抜けな声が上がった。

「ちょ、超人て……」

安直な理由に弦徳の両肩が力無く下がる。緊張勘の糸も切れた。

人間から超人へ、ふざけるのも大概にしろと思う。この男の常識は可笑しい。人間の常識からも、我々妖怪の常識からも外れているだと弦徳は、不承不承に受け止める。

「なるほど、俺は超人になったのか！」

嬉しそうにタケシがひとり納得していた。腕を組み笑う。

「それで灼熱にも耐えられるのだな！」

「ないない……」

多くのものが、そういいながら顔の前で手を仰ぐ。事実を拒否する表情のまま。

「まあよ、なんだっていいじゃあねえか、そんな細かいことよ！」

「良くは無い！」

むちゃくちゃな理論だった。超人にステップアップしたからといって、弦徳の紅蓮の羅弾を耐えられた。有り得ない理屈だった。そ

もそも超人が、どのような位置付けなのかが受け入れられない。人間の上であり、妖怪に近い存在なのかが理解不能で意味不明だ。

「それより、こうして互いに無事なんだから、続きをおっぱじめようぜ！」

タケシの気配が狂獣へと瞬時に変わる。それに弦徳が構えを見せた。緊張感が舞い戻る。

タケシが斜面を蹴り、弦徳へと向かって駆け上る。赤く熱しられた鎧が、空間に陽炎の尾を引いていた。踏ん張る足者がまだ柔らかく、腐敗した泥土のように滑り接げる。歩み難い。

「あれであの男も、十六夜剣兵と同じ高みに到達したようだな……」

白いスーツの強面に刻まれし頬の刀傷。長い鼻と鋭い睨みをタケシに向けた二番長老大天狗が、動き出したタケシを見下ろしながら過去を思い出していた。それは、人でありながら自分の頬に傷を残し、当時三番長老だった九尾双葉を殺した人物。彼もまた超人だった。

「この男は、ふざけるにも程がある！」

歩むタケシを弦徳が罵倒する。タケシは、それを聴きながらも超人らしくというよりも、魔人らしく迫りいく。

理屈を無視したタケシの存在。弦徳は、呆れながらも受け入れた。牙を剥き、瞳を光らせると、八武器を装備する八尾を靡いて踊らす。

ならば限界まで付き合おうと、とことんやり合ってやろうと決意

する。

死ななくても殺してやる。常識が通用しないなら、非常識なまま倒してやると、考えを改め戦いに挑む。

「外からの攻撃が効かぬならば、内からならどうだ！」

登り来るタケシに向かって緑色の気を放つサーベルを振るう弦徳。真っ直ぐにスマートな刀身から、緑色の毒々しい緑雲が煽り出てタケシの全身を包み隠した。タケシは煙幕の如く煙を浴びて、視界を妨げられる。

「タケシや、これは瘴気じゃ！」

「なんだ、それ！？」

緑雲に包まれたタケシは、聞きなれない単語の意味を問うと、言われたとおり口を押さえる。しかし、その足は止まっていなかった。斜面を登る。

瘴気とは、山や川で起きる熱病の素。弦徳の放つ緑雲は、それを具現化した術だ。吸えば床に伏せる猛毒。

しかしタケシが、瘴気を浴びながらも跳躍を試みる。赤い鎧が空へと飛んだ。

「おりゃぁぁあああ！」

緑雲のてっぺんを突き破り瘴気の煙幕から弦徳の眼前に飛来したタケシ。そのまま弦徳の肩へと手刀を落とす。

「ぐは！」

弦徳の肩に、焼けた衝撃がずしりと掛かると、片膝が重みに曲がり、爪先が地に沈む。弦徳の後方で、手刀の斬圧に熱い空気が割れ伸びるのが観客には見えた。

弦徳が攻撃を貰いながらもタケシを視線だけで威嚇していた。眼前の男は、超人と呼ぶよりも、イーフリート、灼熱の魔人に見えた。そして今度は、弦徳が自分の番だと刀を振り被る。

タケシの肉体上を横断させようと走らせたグリーンサーベル。その刀身がもくもくと毒の煙を吐いて狙いを外す。太刀筋に緑の毒線だけが残った。

しゃがんで回避したタケシが、熱い正拳を弦徳の爪先に叩き落す。まるで瓦割り。ガツリと音を鳴らして足の指先が叩き潰され、周りに丸い拳圧のサークルを、大きく波立たせていた。

弦徳は苦痛に耐え顔を歪めるが悲鳴は上げない。代わりにサーベルの柄を上からタケシの頭に落とす。

脳天へと迫る柄のハンマーに、タケシは両膝を伸ばしながら背丈を戻し、廻し受けで弦徳の腕を外へと払い除ける。そして顎へと掌打を入れつっぱり押し上げる。

弦徳の視線が強制的に上を見せられ、ドームのライトをぶれながらも直視した。

赤いタケシの姿が弦徳の視界から消えた。弦徳の上半身が、がら

空きになる。ノーガード。そこをタケシが容赦なく攻め立てた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ！」

テンポ良きつるべ落としの四連中段正拳突き。肺が振動して呼吸が乱れ、背中から衝撃が突き貫けていくのが熱を持つ空気に映る。漆黒の胸に刻まれた亀裂の幅が更に広がると、弦徳が屈辱に堪えかねて呻き声を溢した。

「ぐぐぐぐ……」

無意識だろうか。弦徳の左手が気配もなしにタケシの肩を鷲掴みにした。仮面の奥で瞳が輝く。反撃。

「でぇぁあああ！！」

気合の篭もった怒号。感情が仮面の下から伝わってくる。だが、冷静に対処を見せるタケシ。

「はぐぅぅっ！」

突き上げる掌打が、タケシの肩を掴んだ弦徳の肘に打ち込まれる。衝撃に肘関節が伸びきり、ビシッと、骨が軋む音を鳴らす。爪を立てたまま弦徳の腕が、タケシの肩から外れたが、その手は未だに虚空を掴んでいた。

更にタケシの強打。弦徳の下顎が、上顎へと激突する。タケシのアッパーカットが炸裂し、周りの空気が噴火するように下から吸いこまれ上へと流れた。弦徳の体が僅かに浮くと、その身に無重力感を錯覚として与える。

顎先から亀裂が仮面の表面に走っていった。その亀裂はまるで、アッパーのダメージが、顎先から脳天へと抜けていくように見えた。

更に顔面を狙って、タケシの肘鉄が打ち込まれ脳を揺らす。ハンマーというより斧だった。

丁度、鼻の真上に叩き込まれた肘鉄が振り切られると、弦徳がふらつき一歩二歩と下がった。そこにタケシが飛び後ろ回し蹴りで追いかける。流れるコンビネーションの追い討ち。踵が直撃して弦徳の黒い体を脚力で跳ね飛ばす。

飛ぶ弦徳の周りの空気が、蹴りの威力に流れのトンルネを築く。弦徳はそのまま結界の壁へと激突して電撃のスパークを弾かせ、バチバチと音を立てて体を震わした。

やがて背が結界から離れ、力無く両手をダラリとさせながら前に一歩二歩と進ませる。電撃に焼けた体からは、バーベキューのいい匂いと白い煙が靡いていた。

すると被るヘルムがパカリと真っ二つに割れて接がれ落ち床に転がる。弦徳が、九十九神のヘルムを失い素顔を現す。その表情は、苦悶そのもの。白目をむいて、半開きの口からも煙が上がっていた。

タケシの攻撃を立て続けに喰らった弦徳が、ついにノックダウンを許してしまう。そのままバタリと前のめりに倒れ込んだ。地面にたまった熱が、それに煽られる。

「こ、これが超人……」

倒れた弦徳が、頬を地に付け囁いた。

「こうなったら……、こちらも限界を超えるか……」

囁きの中に覚悟が秘められていた。刀を支えに立ち上がる。タケシはそれを待っていた。

弦徳は、立ち上がると杖にしていた武具を見る。今握るサーベルは虚弱すぎだ。あまりにも脆弱だった。臀部に生えた八種八色の尾。グリーンサーベルから紫の日本刀へと持ち替える。

ファイナルウェポン武装。

今宵最後の八本目。

刀身の紫が、弦徳のすべての気を染め替えていく。柄を握る腕が紫色に変わり全身へと広がっていくと、漆黒が紫のカラーチェンジをどける。鎧だけではない。各種の刀や剣を握っていた八本の尻尾も紫色へと変色していった。

まさに八色から一色への統一。

しかし、弦徳の表情は優れない。顔色が青ざめ唇もプール上がりのように紫色へと変わっていた。流す汗も冷たい。その冷たさが空気にも広がり、一度加熱された結界内の空気を徐々に冷ましていく。

<　八尾弦徳・12　>

「何が始まった？」

「八色に分散して溜め込んでいた妖気を一色に纏めているようじゃのぉ。しかしあれでは、身がもたむぞ……」

春婆怒の言うとおり、気をひとつへと纏め上げようとする弦徳の表情は、危機迫るものがありありと見られた。こめかみや首筋に、紫色の血管が浮かび上がり、形相を更に狂気へと変えていく。

「そこまでなされますか、若様……」

ベンチ内の油儀が呟く。油儀は、弦徳が行なっている術の末路を理解している様子だった。観客席の十二長老たちも、ことの成り行きが予想できるのか、不敵にも笑みを見せている。

弦徳の凛々しく誠実な顔立ちが、牙を剥き出した獣のものに変貌し、手の爪を野生的に立て腕を開く。そして天に向かって咆哮を吠える。

「獣だな、まるで」

そう述べたタケシに、弦徳の視線が戻る。大きく股を開きながら腰を落とし、背を丸めて胸を開いていた。武道の構えでない。猛獣の姿勢そのもの。

「武を捨て、野獣とかしたか、弦徳さんよ！」

「ガルルルルルル！」

タケシの言葉に獣の唸り声を返して威嚇を見せる弦徳の容姿は、今までのそれとは別人だった。意識も人格も入れ替えたように見える。牙を剥いた口から、廃人の様に涎が垂れた。

まっとうな返事を返さない弦徳を見て、タケシが両手を高く伸ばし上げた。そこからゆっくり拳を握り閉めながら全身に力を篭める。

二つの拳が、顔の高さで戦闘体制を築くと、視線が狩人の如く弦徳を睨んだ。茶化した素振りが消えうせる。

「ウガァァァァァァァァ！！」

吠えながら飛び出す弦徳。足元の焦げ付いた土が後方へ爆発したように飛び散ると、紫色に変貌した弦徳の体が、八本の尻尾を靡かせ弾丸に変わる。

手にある刀の使い方を忘れたのか、肩からの体当たりだった。猛スピードで突っ込んできた弦徳の肉弾が、タケシのガードを突き破り、勢い良く跳ね飛ばす。タケシの体が、そのまま後方へと飛んで行く。

「うほ！」

飛ぶタケシが、その勢いに驚き歓喜の声を上げていた。今までのような技や術を駆使した弦徳の攻撃とは異なり、その一撃の体当たりには、雄としての威厳が強く感じられたからだ。

タケシが一度付いた足を踏ん張り、飛び行く態勢を耐えて止まっ

た。地に踏ん張りの跡が、レールの如く二本残っていた。

「なんだか、いい感じに変わったじゃねえか、エリートぼっちゃまよ！」

戯れの言葉を吐くタケシ。野獣と化した弦徳の追い討ちに備えて構えを整えるが、弦徳は追い討ちには移らなかった。何かに堪える辛い表情を見せている。

「ん？」

タケシが疑問に思い首を傾げる。

「堂本タケシ……」

辛そうな弦徳の表情は、必死に我を留めようとしていた。ダラダラと冷や汗を流し、スマートな顎先から溢して蒸発させる。

「これから私は、私を越えて、私でなくなる……。もしも、私との決着を望むならば……、そんな私を倒してくれ！」

遠まわしに語る弦徳。

意味深な台詞を述べると、刀を逆手に持ち替え振り上げる。そして次の瞬間、自分の腹へと突きたてた。

切腹。

「おい！」

紫色の刀が腹から背へと貫通して刀身を見せる。切腹した弦徳の両膝が崩れて地に着いた。そのまま両手も付いて、四つんばいになる弦徳。

「あいつ、何がしたい！？」

串刺しのまま四つんばいになった弦徳の八尾が大きく靡いた。躍動的に揺れる。

「ガルルルルル！」

俯く口から漏れ落ちる声は、今度こそ獣の唸りだった。体が膨らみ大きくなり始める。身に纏った鎧が剥がれ落ち、強制的に妖力共有を解除した。

「あやつ、素の成を現すつもりしゃ……」

巨大化を始めた弦徳の体が、鎧の下にあった道着や袴を破いて素肌を見せる。しかし、その姿には獣の剛毛が生え並び、表情もまた凶暴狂悪の魔獣と変貌をとげていた。

巨大な獣。八尾の狐。

おそらく妖怪としての真実の姿。だがその腹部には、未だ紫色の妖刀が、痛々しくも深く突き刺さったままだった。

「お主が人を超えて見せたように、あやつは人の部分を捨てたのじゃ」

半妖から純血の妖怪へ。

「本当に、そう思うか、春婆怒……？」

巨大化した狐の妖怪。体のサイズはインド象並み。いや、それ以上の巨体。八本の尻尾を含めた全長は、倍以上に見えた。

しかし、紫色の毛並みから揺れあがる紫の妖気は、獣の表情そのままの野生が、不満げな感情を凶暴に映しだしていた。

「ガルルルルル！！」

八尾が唸りながら牙を剥く。大きく口を開きながらタケシの飛びかかった。

蹴った地面を捲り上げながら迫る八尾の攻撃は、タケシを頭上から丸かじりにしようと噛み付ける。

しかしタケシは身を落とし、スルリと避ける。目の前で巨大な口が、牙と牙を鳴らして噛み閉じられた。

「真っ直ぐすぎるんだよ、野生って奴は！」

屈伸から放たれるタケシのストレート。やや斜め上へと撃ち込んだ拳が、八尾の鼻っ面を叩き付ける。

八尾の頭がタケシから逃げるように反らすると、タケシがしてやったりと笑う。しかし次の瞬間、体を捻った八尾の背後から、八本の束が纏めて飛んでくる。横ぶりのエイトテイルアタック。

「どわぁぁ！！」

直撃だ。モロに喰らう。

フサフサ感は最初だけだった。まるで八本の大木が同時に激突したような重さがタケシの全身に浴びせられ、振り切られる。

タケシの体が飛んだ。ホームランだ。そして舞う弾道そのままに、結界の壁へと激突して感電に火花を散らす。

「畜生、結構効くな……」

感電から開放され墜落したタケシが、肩膝を付けながら、先程の弦徳が味わった電流の痛みを理解する。

未だ赤く熱しられた鎧姿を起こすと、そこに八尾が頭から突っ込んでくる。頭蓋骨の硬さがタケシの体を押しつぶす。そのまま全体重を掛けて結界の壁へと押し付けた。

「あぢぢぢぢぢ！！」

八尾の頭に押し付けられるタケシの背中で、再び火花が咲き乱れる。痛みに反撃どころか逃げることも思いつかない。脳内でも何かがスパークしていた。

更に八尾が、結界の壁と頭の間にタケシを挟んだまま、四本の脚を激しく走らせる。そして前方の壁を登り始めた。

「うがが、おい、こら！」

巨頭と壁に挟まれ電撃に苦しむタケシが、八尾に弄ばれながら、

ドーム型の天井へと進んでいく。

天と地が、逆さまになった。

結界ドームほぼ中央。先に八尾が巨体故に降下を始めた。だが落下を始める前に、タケシの右腕を確りと咥えこむ。

そして、着地の瞬間、大きく頭を振ってタケシを地面に叩きつけた。

ドンッ！　と、大太鼓でも叩いたかのような籠もった音が響く刹那、叩きつけられたタケシの体が、地面に「大」の字をスタンプで作り跳ね上がる。

空に跳ね上がったタケシの口からは、あまりの衝撃に悲鳴も呻きも出なかった。代わりに全身二百六個の骨々が、軋みながら悲鳴を上げていた。

まだ跳ねているタケシに、ふかふかの紫玉が目に入る。それはタケシと同じ高さにあった。

丸まり緩い回転を見せる大玉の八尾。手足頭を腹に押し込み背を丸め、八本の尻尾で更に身を包む。綺麗な球体だった。

刹那、八尾が何をしているのかタケシには想像が付かなかった。もしも人の姿をしていれば、その後に何が起きるかタケシには、間違いなく推測でき、対処も叶っただろう。

丸まった八尾の形が崩れ、そこから二本の後ろ脚が発射された。

「ドロップキック！！」

丸まったのは、人間と同じ理由からだ。全身のバネを引き、勢いを溜めていたのだ。まさに、ねこドロップキックあらず、フックスドロップキック。

二脚の砲撃を顔と胸に喰らったタケシの体が真横に飛んで、結界に対して三度目の衝突を見せる。

火花が鮮やかに散る。観客も沸く。

「なめやがって……」

口を釣り上げ満足そうに笑う八尾と同じく、結界の電撃から開放されたタケシが、四つんばいのまま頭を上げた。四肢が、僅かに痙攣している。

「野生の力、舐められぬぞ、タケシや！」

「ちっ……」

舌打ちしながら立ち上がるタケシ。その視線は、攻撃に攻め立てられながらも確かに、八尾の動きを一つ一つ観察していた。明らかに八尾は、野生の中に戦術を心得ている。本能なのかと疑問を抱くほどに、狩猟本能とは侮れんと感じていた。

<　八尾弦徳・13　>

タケシと八尾が、じゃれ合いのように暴れ回る。

八尾の巨体に拳脚の数々が叩き込まれるが、ほぼダメージに相当していない。

そんなタケシの攻めを受けながら、窮鼠猫を噛むなどしゃらくさいと八尾はタケシに襲い掛かる。それをタケシが巧みに避けるていた。各々のサイズだけを比べれば、まさに猫と鼠だ。

攻防を繰り広げる中、八尾の巨体から揺れ出る紫色の妖気が、少しずつタケシの燃える赤き鎧に流れ込んでいく。

「コーーーーーーーーーーンッ！」

「本当に、キツネってよ、そう鳴くのかよ！？」

そう言いながらタケシの蹴りが跳ねた。

その頃、八尾の野生を肉体に残して、弦徳の心は、暗い闇の中をひとり歩んでいた。

暗い無の空間。弦徳の片手には、紫色の気を流す妖刀が握られている。八尾の腹に刺さる一本と同じ物だった。

白い道着や浅黒い袴から霧のような塵が、無風の流れに梳れると、

淡く散り飛んで行く。素足の行く末が、何処から照らされたかも不明な光に映り出ていた。

弦徳の凛々しいまでの誠実な面構えの先に輝く小さな星ひとつ。進むが目的は、そこが終着点と思えた。

しかし一番星の輝きは、小さく遠く、何万光年の道のりの如く遥か彼方。生きて辿り付けるかは検討も付かない。漆黒のトンネル内で、老いて命を費やし、人生の残りを掛ける旅路と思えた。

進む弦徳の歩みには、それでも諦めの色は僅かにも見て取れない。まるで周りに広がる矛盾の闇が、そんな疑いおも黒く染め隠すようだった。

星の如く真似光る先を目指して歩む弦徳。この暗闇のトンネルは、彼の心の中ではない。それは、弦徳と他者を繋ぐ時空のトンネル。魂のワープゾーン。

弦徳は、目的地に辿り付けると信じて歩みを続ける。己が仕掛けた術なのだ。この状況は、弦徳の企み。信じる力が、光へと届き道を誘う。その魂が、距離感を無視して目的へと近づいた。

星は球体。眩しい光を放ち弦徳の正面を照らし上げる。もう弦徳が手を伸ばせば届く距離だった。

光を放つ球体の中に、寛ぐ様の妖艶な美女が一人。それだけの大きさを球体は有していた。

「まさか、このような場所まで踏み込んで来るとはのぉ……」

淡い光のコロナが揺らめく中、鳥籠内で寛ぐ女性。

透けるような白い肌、細く可憐な容姿。右手を支えに、美的な両脚を横に揃え尻を付け、長い蜂蜜色の髪で全裸の裸体を僅かに隠していた。

切れ長の細い眼に、宝石のような緑の瞳。その緑はコロナと同じ輝き。美しいままに揃えあつらわれた目鼻に口の配置が、麗しき美術品の如く彼女に与えられていた。冷たさを感じるが、完璧なまでの天女と呼べた。

「お主、他者の心へ、土足で踏み込むとは……、恐れ入ったは……」

天女の眼差しに、はっきりとした怯えが見て取れた。それをプライドが健気立って偽ろうと強情を張る。

全裸が恥ずかしいわけではなかった。心を晒されていることが怖かった。それを実現させた術の妖刀が紫色に輝き、更に彼女の精神を恐怖へと取り囲む。

弦徳が、紫色の妖気を滾らす日本刀の切っ先を、球体の鳥籠に籠城を試みる天女に脅迫の様に向ける。刀だけではない。クールな眼差しも共にだ。

「土足ではありません。いちょう、裸足ですから」

わざとらしくニコリと弦徳が笑い、道化を演じる。その微笑も直ぐに戻った。やはり弦徳は、根が真面目すぎる。タケシを真似ても旨くは出来ない。今頃になって弦徳も、自覚を始めた。

「己、八尾弦徳！！」

天女の表情が、厳しく威嚇しながら窮地に汗を一滴流した。

「さあ、どうします、春婆怒！！」

弦徳の刃が球体を切りつける。僅かにも刀身は、春婆怒の殻を傷つけるだけだった。だが弦徳は、尚も諦めずに斬を振り続けた。鋼を弾く金属音が響き闇の中へと消えていく。

球体に守られた春婆怒が、虚空に細い指を翳し一枚のパネルモニターを開く。それには、外部で戦うタケシと八尾の獣が映し出されていた。春婆怒は、危機迫る表情でモニターに向かって叫んだ。

「タケシや！　腹の妖刀じゃ！　その刀を引き抜け！」

その間も響く弦徳の攻撃音。けたたましい響きが春婆怒を急かす。

今度は春婆怒が尚もモニターに叫びタケシを急かし上げるが、一向にタケシが八尾の腹から刀を引き抜こうとしない。素振りも見せない。

「無駄です。既に外部との接続を遮断させてもらいました！」

刀を振るう弦徳が、してやったりと笑みを見せる。しかし弦徳の作業も進行を見せていない。

「おのれ、おのれ、おのれ！！」

春婆怒の表情が忌まわしく憤怒を見せる。

しかし彼女は防御に徹するしか術はなかった。守るといっても、この球体の壁しか防壁は存在しない。そもそもこの世界に、敵が攻め込んで来るなどと、想定されていなかった。実例も存在しない。

春婆怒に期待できる窮地の脱出方法は、タケシが己から八尾の腹に刺さる妖刀を剥いてくれることだった。もしくは拳で八尾を始末する。しかも弦徳が、この球体防壁を破壊終了遂げるまでと、時間制限まで存在していた。明らかに不覚だった。

「春婆怒、貴方の願いは彼には届かない！」

弦徳の言葉に美しい顔が、不穏を察する。そのとおりだと理解する。

「あの男は、露骨なまでに弱点と見て取れる、腹に刺さりし妖刀を、引き抜くことは絶対にしない！」

奥歯を噛締める春婆怒にも、弦徳の言う理由が理解できていた。

あの空手馬鹿は、間違いなく、そのような野暮を判断しない。あの喧嘩馬鹿は、そんなことをせずに正面から戦い続ける。今までの付き合いから、春婆怒にもことは鑑みれた。

「貴様、そこまで考えての策かぇ！？」

「さよう！」

紫色の剣筋に残像を残しながらも乱舞を行なう弦徳が、春婆怒の台詞に答えた。あとは、八尾の肉体がタケシに熨される前に、この

熱い殻を破壊して、目標を引きずり出すのみ。

「不味い！」

突破に精を出す弦徳の妖刀が、終に殻へと罅が走る。それは、春婆怒の心にも罅を入れ、窮境に肝を冷やさせる。

「もう少し！」

更に状況は悪化を遂げる。弦徳の攻撃が、籠城の正門を攻略した。亀裂が球体前面に広がり進み、殻が破片と変わって崩落の音を立てながら零れ落ち始めた。落ちた殻の破片が闇床へと消えていく。

「ここまでかぇ……」

崩壊を始めた心の防壁を、内側から見上げる春婆怒が、らしくない言葉を溜息に混ぜて吐いた。弱気が見て取れる。

敗北。

その言葉が脳裏に過ぎた。

ここまで生きた千年近い永き時。様々な土地を渡り、様々な戦士と戦い続けた日々。

立つ地が替わり、呼び名が増えた。ハルバードから春婆怒。自分を信仰して名づけられた地を離れ、春子・ハルバードへ。その人生が、今終止符をどけようとしていた。それに抗えない。

名前なぞ飾りだと思っていた。ハルバードは種。春婆怒は当て字。

春子・ハルバードは偽名。

そうだ、そう考えればすべてが偽り。自分が一番呼ばれたかった呼び名を、このような状況で、今頃になって考え始める。

それは、呼び名ではない。

昔の景色が蘇る。

そんなに振るい記憶ではなかった。四百年、五百年、おそらくそのぐらい前だろうか。記憶に時間の流れが重なり始める。思い出される過去の使い手たち。タケシを筆頭に連なる記憶の果てに、あの男の容姿が浮き上がってくる。思い出され蘇ってくる。

砕かれた殻の穴から弦徳の腕が、内部の春婆怒を狙って伸びて来た。鷲掴みにしようと進入してくる。

それを見上げて記憶に映る男の名前を春婆怒が、愛おしくも口にした。

「十六夜……、剣兵……」

春婆怒が相棒と認めた使い手の中で、妖怪たちにも名が通った鬼神の侍。春婆怒村では、癒しの侍と言い伝えられ、春婆怒同様に信仰の対象とされている侍。

ハルバード、春婆怒、春子・ハルバード、他にも色々な名前を名乗った彼女の中で、唯一異なる名前で呼び合った相手。十六夜剣兵。その姿が幻となって瞳に映る。

時には、他者と同じように名を記号のままに呼び合ったこともある。しかし最後は他者とは別の記号で呼び合った。互いに同じ名で呼び合ったのだ。その呼び合った名を思い出す。今一度、呼び合いたいと思い出す。

殻の外から進入に成功した弦徳は、既に上半身を腰まで押し込み、片手で春婆怒の細い首を鷲掴む。それは、か弱い人間の女性となんら変わらなかった。九十九神や妖怪、それらと差別できぬ程に華奢だった。

「おまえさん……」

彼はそう呼び、彼女もそう呼んだ。自然のままに。

果て無き永遠の不老の中で、愛し、愛され、愛でり合った唯一の相手。唯一、人間の女性と同じように、その身を許した愛しき存在。夫婦の様に、互いに「おまえさん」と呼び合った相手。

彼女にとって、唯一無二の対象。

十六夜剣兵。

記憶の中の幻と知りながら、唯一の存在を見ながら春婆怒は、優しく表情を和ませる。

その喉へと食らい付いた弦徳の腕が、彼女を籠の外へと引きずり出そうと引き寄せた。春婆怒の体が、弦徳によって強引な動作のまま、引き上げられる。

<　八尾弦徳・13　>（後書き）

コックピット内公開中ｗ

<　八尾弦徳・14　>

籠城を続けた春婆怒を引きずり出すことに成功を遂げた弦徳が、その美しき裸体を片腕で釣り上げ厳しく睨む。

「観念したか、春婆怒」

凛々しい視線が、勝ち誇ったように揶揄する。

それとは別に春婆怒は、古城から裸体を晒したまま死した眼差しで闇を見ていた。まるで何もかも諦め、未来を捨てた骸の表情。弦徳の言葉にも、感情が壊れたのか反応を見せない。

弦徳は、その表情を見て、今度は不機嫌を表情に作った。

これが、長年に渡って母の敵だと思い憎み続けた魔性だと思うとあっけなく感じ、緊張勘が緩んでいく。だが任務は、終了していない。このような場所まで足を運んだ目的が達成されていなかった。

「春婆怒！」

少しばかり強目の声だった。宿敵の名を呼び、手にある紫色の妖刀を、春婆怒の引き締まった細い腹へと向ける。そして、なぞる仕草で切っ先が臍の周りを撫で回す。

「春婆怒、お前を殺せる日を、私がどれだけ望んでいたと思う。それしか考えずに過ごした日々も長い……」

弦徳の言葉を春婆怒は、首を掴まれ吊るされたまま聞いていた。

瞳は濁り虚空を覗いている。その表情から本当に聞いているかも疑わしいと思えたが、言葉を綴る。

「この刀で貴様の腹を串刺しにして、内蔵を引きずり出し、怒りのままに殺してやりたい。だが、私がここに出向いたのは、別の理由だ」

そう言いながら弦徳は、言葉と裏腹の行動を取る。ズブズブと妖刀を春婆怒の腹に突き刺し押し込んでいく。

「ぁうぅ……ぁう……」

痛み故か、春婆怒の口から切なく呻く声が漏れた。それを耳にしなから弦徳は、更に刀を押し進める。

「春婆怒、これはお願いだ。その刀をしばらく抜かないでもらいたい。痛みは察するが、耐えてもらいたい」

ここまで来るのに弦徳もまた、その身に同じく刀を突き立てやってきた。痛みも気持ちも良く分かる。

鍔が臍に触れた。そこまできて弦徳が、床に春婆怒の裸体を落とすように下ろした。長い髪と尻が地に付き、腹痛に顔を顰める春婆怒が、目の前の男を弱々しく見上げる。

「貴様、何を……」

腹に刺さった妖刀が、痛々しくも背へと貫けていた。痛みを感じるが、それが死に至るほどではなかった。急所を外しているわけでもない。それは何かの妖術の類。即ちこれ皆幻。

「これは、交渉ではない私からの願いだ」

力無く地に腰を下ろした春婆怒。その眼前に、袴を払い正座を組始める弦徳。ふたりの目線の高さが同じに揃う。

「その刀は、知ってのとおり次元と次元を繋ぎ合わせる能力を持ち合わせている。わたしがここまで来たのだ、術の効果は察しられよう」

「ああ……」

頷く春婆怒の表情に、滅びかけていた誇りと威信が、妖艶な美面と共に舞い戻る。春婆怒が、死への絶望から我を取り戻し始めていた。

「済まぬが、今一つ別のところへ足を運びたい」

「まさか、お主……」

破滅からの復活を春婆怒が悟る理由は、弦徳の言葉の中に秘められていた。自分の腹に刺さる妖刀と、弦徳の言動に、これから弦徳が何をしようかと検討が付く。それが己の命を保障していた。

「そう、春婆怒。お前の胃の中に入りたい」

礼儀正しくも正座で向かい合う弦徳が、そう言うと一度頭を下げた。春婆怒がやはりと思う。

「お主の企みとは……、最初からそれが目的かぇ……」

「いいや、思い付きだ」

頭を上げた弦徳の表情は、笑っていた。無邪気にさらりと語る。

「最初は暗殺気取りで踏み込んだ。しかし、こまで足を運ぶ際に考えてみたのだよ。もしかしたら、救出も可能ではないかと。この刀の能力ならば可能ではないのかと……」

「わらわも己の胃の内部なぞ分からぬぞぉ……」

ふたりの会話が徐々に交差し確定して行く。

「九十九神は、三種百食の本能の仕上げは、使い手の願いを叶えること。それで百計神に生まれ変わる。その願いを叶えるエネルギー源が、各種を喰らいし百数の魂と読んだ……」

「その読みのままに、わらわの胃に落ちる積りかぇ……」

春婆怒にとっては、願ったりも無い申し出。自分は窮地を脱せられるたけでなく、敵自らが胃に落ちるのだ、損の一つもない。

弦徳の狙いは、春婆怒の胃の中に幽閉されている可能性が高い、実の母の救出だった。

九十九神の食事方法は、殺した相手の魂も肉体も、身に付けている衣類なども纏めて喰らう。存在を喰らうのだ。

それらをエネルギーに百計神になるというのならば、消化はしていないと推測できる。消化とは栄養に変えること、栄養に変えれば

消費が行なわれる。転生や願い事のためにエネルギーが必要としているならば、リスやハムスターのように頬に溜め込み、隠し蓄えるのと同じではないかと予想していた。

喰われた者たちは、きっと胃の内部、否、貯蔵庫に消化されずに蓄えられているはずだ。百計神に変化するその時まで。

弦徳は、その中から母を救い出そうと目論んでいた。

苦痛に歪む春婆怒の表情が、いつものように気高くも微笑みを見せる。絶望から光を見出したようだ。

「交渉でなく、願いと申したな……」

「御意」

「ならば交渉へと撤回しようぞ……。好きなだけわらわの腹を探り回れ、そして愛しき九尾を勝手に連れ出せは良い……」

「かたじけない！」

「代わりに、用事が済んだらとっとと出ていきたもれ。早くしないと、タケシが八尾を熨すやもしれぬぞ……」

美しい切れ長の瞳を細めて笑いを見せる春婆怒。よろめきながら背後の球体の殻に寄りかかり、荒い息で立ち上がる。続いて弦徳も腰を上げた。

「承知。では参る！」

そう力強く声を吐き、弦徳の体が紫色の妖気と姿を変えて、春婆怒の腹部に刺さったままの妖刀へと流れ込んで行く。

弦徳の姿が、春婆怒の心から消して、胃の中へと落ちていく。

春婆怒は、その様子を玉の汗を浮かばせながら見送った。そして一言呟く。

「このマザコンめが……」

命拾いのせいか、言葉のままに弦徳をあざ笑っているのか、春婆怒は微笑みながら虚空を眺めて更に囁く。

「剣兵ゃ……。まだ、お主のところへ行けそうにないわ……。お主はわらわがきっと、この世へ連れ戻す……」

官能的息遣いで意味深な思いを口に出す春婆怒が、誰にも見られるはずのない闇の中で腰を再び落とした。侵入者が去り、安堵の溜息をひとつ溢した。

<　八尾弦徳・14　>（後書き）

インナースペースだな…

<　八尾弦徳・15　>

喉元を滑り落ち、飲み込まれながら進む紫色の煙靄。それは食道を意思のままに過ぎると胃の中へと流れ込む。紫雲は、胃の中に進入を果たすと、徐々にひとつの個体へと集結をはじめる。

やがて人の形を見せる弦徳。そこは暗い無限の空間世界。上も下もなく、全てに輝く無数の星々が、静かに眩しくもただただ広がっていた。

「ここが、春婆怒の胃の中か……」

辺りの様子を見渡しながら、そう囁く弦徳の手に、三本目とリレーを繋ぐ刀があった。しかし、怪しい輝きも薄れ落ち、繋ぎ合わせる時空の距離感が限界だと知らせていた。術も永くは持たないだろう。

暗黒の宇宙に広がる漆黒に浮かびし無数の光。それは数にして無限に見え、数えようという無駄な思考すら出てこない。

「この中に、母が居るはず……」

弦徳は、全面に光る星の中から母の気を探る。懐かしい記憶の中に残る感覚と、愛おしき思いを手がかりに、自分が向かうべき進路を探った。精神を研ぎ澄ましながら、千里眼の如く心で遠くを見渡す。

「こっちか……」

勘に近い能力で、気配を探知する。

闇に浮かぶ弦徳は、言葉と共に歩みを始めた。何もない黒い床を浮くように歩む弦徳は、僅かに匂う温もりを頼りに、ただ進む。

目指す道中、幾つもの球体とすれ違う。星の正体は、春婆怒が引き篭もっていた光の殻と同じ籠だった。淡い妖気がコロナとなって輝いている。中には、人間、妖怪、九十九神と様々な容姿をもった輩が幽閉されていた。まるで深夜の動物園だ。籠り中の者たちは、皆が皆、眠りにつき目蓋を閉じている。

「やはりか……」

それらを見て歩む弦徳は、自分の推測の的中に、幾分の安堵を感じていた。あわれな牢獄の景色に、母の生存を信じて先を急いだ。

再び時と現実の流れが矛盾を始める。時の流れがここでは理を無視しながら静止を徹するように維持されていた。

無菌真空、老いも腐敗も存在しない。故に眠り続ける百計神へのエネルギー源たち。弦徳は、進みながらも横目に同情の思いを向ける。

光る無数の監獄に閉じ込められし犠牲者たちは、様々の時代と、生きた故郷の違いを眠る姿に見せていた。

鎧武者が居れば、その隣にゴシック風の甲冑を纏った騎士が居る。女郎姿の女もいれば、塔の最上階に囚われたプリンセスの様な可憐な者も見られた。そして、長老候補の弦徳すら見たことがない他国の妖怪。化け物と呼ぶより悪魔の姿に良く似ていた。

全ての者たちに意識が無い様子だ。目蓋を閉じて眠るように大人しい。しかし、その姿は、新鮮さを保った貯蔵品。保管をされた時代のままに腐りの素振りも見せずに、時を止められたまま保存されていた。冷蔵庫なんぞ比べ物にならない性能に、これならと弦徳が母を捜し期待を高める。

血の繋がりと母への愛が、コンパス代わりに道を示す。そして見出すひとつの惑星。その星ひとつが、弦徳には神々しくも眩しく見えた。

「見つけた……、母上……」

金色に光を放つ牢屋の殻。中に見えるのは、長い黒髪と九尾を晒す全裸の女性。

「母上……」

間違いない。

永久の如く感じた月日に残る母の記憶。まだ幼かった頃、燃え落ちた城の天守閣で最後に見た母への思い。幾ら愛しても、何度思い出しても、徐々に消えていく記憶の惨さ。その忘れかけた思い出の破片が、現物を目の当たりにして蘇る。失くした思いが修復されて、より一層の愛へと生まれ変わる。

「母上、今出してあげますからね！」

弦徳が刀を使い、保存の壁を闇雲に叩き壊す。

殻の壁は案外にも脆かった。食品を包み冷凍するためだけのラップに強度は不要なのかもしれない。

殻を砕き中から全裸の母を救い出す。母に触れた感触。懐かしさが素肌から伝わってくる。脈もある。

弦徳は、殻から母を抱えるように救い出すと、妖刀の気を辿り出口を目指す。弦徳の進む歩みに、母、九尾双葉の黒い長髪や九尾が靡き揺れている。

美しい寝顔が静かに吐息を立てていた。その寝顔を醒まそうと弦徳は、外の世界を目指してことを急かし脚を早める。

早くみたい。目覚めた母の声が聞きたい。そう願いながら出口を目指す。それは、無垢な子供の表情そのままだった。

親子の再会が、息子の努力で近づいていた。

春婆怒の世界から帰還を目指す弦徳とは別に、外の現実で戦いを繰り広げるタケシと八尾の狐。タケシは口数のない春婆怒の異変にも気付かず、凶々と荒れ狂う八尾と殴り合っていた。

獣とは思えない戦術的な八尾の動きに、タケシの神速にまで達した体術が吹き荒れる。どちらも種の限界はとうに過ぎていた。

比べて体の小さなタケシが八尾を打ち飛ばし、比べて体の大きな八尾がタケシよりも速く巧みに動いてみせる。

観戦している者たちにも満足が行くほどにエキサイティングなバ

トルだった。どちらが最終的に勝るかも予想が付かず、終止符に期待が注がれる。

今のところ、どちらが勝つかは五分と五分に見えた。しかし突如、均衡が崩れ、成り行きが異変を見せる。

「ぐるるるるぅぅぅぅ……」

「どうした!?」

大きな隙を見せ苦しみだした八尾。その光景に誘いでないと気づいたタケシも攻め手を止める。野暮は無粋。明らかに八尾が毒に侵されるように姿勢を崩す。

「春婆怒に進入を試みた弦徳が、謀に失敗したのかのぉ?」

ことを見ていた井戸仙人が、長い白髭を摩りながら、疎らに残った歯の隙間から台詞を溢した。それらの語りようから弦徳が、春婆怒の暗殺に向かったところまでは悟っていたようすだ。春婆怒とタケシの妖力共有が解除されぬままに異変を見せる八尾に、策の失敗を誤解する。彼ら十二長老たちも、まさか弦徳が更に胃の中にまで進入して、九尾双葉の救出を敢行しているとは思いもよっていない様子だった。

苦しみ伏せる八尾。その姿が霧の様に形を崩すと、晴れ行く霧の中から道着に袴を履いた八尾が姿を現し凛々しく振舞う。その姿に皆が驚き声を上げる。十二長老たちですら、姿を見せた弦徳に度肝を抜かれた。

「馬鹿な……!」

ぬらりひょんですら声を上げて驚きを表現していた。

驚きの理由とは、八尾の獣から八尾弦徳に姿を戻した彼の手の中に、全裸に長い黒髪と、美しい毛並みの九尾を靡かせる麗しい女性を抱えていたからだ。

「八尾弦徳、とんでもないことをして見せたな！　双葉様を春婆怒の体内から救い出したのか！」

鬼道丸が、身を乗り出して眼を凝らす。弦徳を忌み嫌う彼ですら、さすがに呆気に取られていた。

驚きがざわめき続ける中、息子の腕に抱えられて眠り続けていた九尾が目を覚ます。切れ長の瞳が開き、眼に弦徳の顔が映りこむ。

「んん……」

まるで寝起きの乙女だった。眠気の残る瞳を華奢な指先で擦る。その寝起きの幼い表情は、息子である弦徳と差ほど変わらない年齢に見えた。それだけ弦徳と母の別れ過ごした時間に誤差があるのだと、弦徳は納得の表情を見せながら、喜びの涙を堪えて微笑む。

「母上、一人で立てるかい？」

弦徳は、腕の中の母に優しく言うと、母を地に下ろした。双葉は息子に寄り添いながら自立を試みる。そして成長を遂げた息子の顔を見上げて言った。

「お前は、誰だ？」

数百年ぶりに聞く母の声。質問の内容も無理がない。母、九尾双葉は幼子の弦徳しか知らないのだ。立派になった息子を見るのも初めてのはず。その母に弦徳が答えた。

「貴方の息子です。人の名は、森一郎義忠。妖の名は、弦徳。八尾弦徳であります」

「私の息子？」

背高い弦徳に寄り添う双葉は、可愛く首を傾げ、不思議そうに瞳を凝らした。

「あれが……だと？」

ぬらりひょんが言う。

「春婆怒の中から釣り上げた……？」

大天狗が言う。

「弦徳は、何をしでかした……」

雪女が言う。

「あの戯け、自分が何をしているのか理解しておるのか……」

見上入道が言う。

そう言う長老たちは、驚きの中に呆れを見せていた。同胞の帰還

に歓喜なぞ、僅かにもしていない。長老たちの反応が、やけに可笑しい。

「私は、お前など知らない。子など居ないわ」

「え……？」

寄り添う母の言葉に驚く弦徳。次の瞬間、弦徳の体のみが暴光と共に弾け飛ぶ。激音の勢いと共に結界の壁へと激突して火花を散らした。

「なに！」

驚きを見せたのはタケシだけではなかった。親子の感動的再会と思えていた者たち全てが驚きに目を丸くさせた。

「ええ、どう言うこと！？」

ベンチ内の珠美がキョロキョロしながら周りの者に問う。そんな中、かつて三本柱と呼ばれし老いた妖怪たちが、大きく口を開いて固まっていた。

「油儀殿、いったい何が起きているのです！」

改めて水越斎が問う。それに我を取り戻した油儀が、やっとの表情で言葉を発した。

「あれ、誰？」

その台詞は九尾を見ながら出た言葉。忠義を決めた主に向けるべ

き言葉ではなかった。

「あれは、九尾は九尾だが、奥方様……、我らが主、九尾双葉さまではないぞ……、誰じゃ、あの者は!?」

油儀の言葉は、様々な術や方法を使われ、ドーム内の全ての者に伝わった。そして、皆の反応が一致して声となる。

「えぇ～～！」

いつまでも続くと思われた驚きの声が止むと、結界に突き飛ばされて火を散らした弦徳が、母の元へと歩み寄る。否、母と思われた者へと歩み寄る。

「は、母上、何を!?」

「阿呆、弦徳！」

震える声で問う弦徳に、春婆怒が怒号を立てた。

「貴様、何をやっておる！　せっかくわらわの胃まで通したのに、よりにもよって人間違いとは！」

やはり何かの間違い、誤解の出来事。弦徳が春婆怒の胃から連れ

出した者は、九尾双葉と異なる別人、別妖怪、別の九尾。

「母じゃない……。じゃあ、その人は……？」

やっと自分のミスを悟りはじめる弦徳が、母に良く似た九尾を見詰めて顔を青ざめた。そして、その者が何者かを春婆怒が話しはじめる。

「奴はわらわが日本に流れ来る前に、大陸で戦い喰ろうた中国の仙妖、九尾の狐」

「なるほど、随分と姿を見せずに消息を絶っていたと思えば、春婆怒の腹の中に居たとはな……」

ぬらりひょんが緊張勘のある笑みを見せた。

そして続く春婆怒の語り。

「その妖怪の名は、封神演義に語り継がれし悪の権化……」

皆が、唾を呑み、喉を鳴らす。次に語られる名前も読めていた。あとは確定を待つのみ。その確定もまた、数秒後に春婆怒の言葉から語られよう。刹那が近づく。

「その名は……、妲己」

「えぇ～～～

〜〜〜！」

人違いにも程があると皆が声を揃えた。おやくそくだが、声を揃えずには要られなかった。

登場、九尾の妲己！

<　八尾弦徳・15　>（後書き）

こんな展開でも、良いでしょうか？w

2019

<　九尾の狐・一　>（前書き）

０９／８／３時点、１５０，０００アクセス突破！。これも全て、お読み頂いてる皆様のおかげです＾＾

<　九尾の狐・一　>

紀元前１１００年ごろの中国。

中国殷王朝末期の最後の帝辛が、残忍残酷の政治を行なった非難を激しく浴び、周朝の創始者、武王によって滅ぼされたと記録が残る。

妲己は、その帝辛が籠愛したとされる絶世の美を要していた妃で、狐の精霊を素に呪術禁術を扱った巫女であったとも噂される人物であった。現在では、九尾の狐から加護を受けていたとも語られている。

これら史上の眉唾な記録をモデルに、封神演義内の登場人物で、最悪の妖女・妲己が想像創作されたのではないかとされている。

春婆怒の胃中から九尾双葉と誤解されサルベージュされた全裸の九尾は、その妲己のモデルでなく。その妲己をモデルに生まれ出た妖怪変化であった。

口裂け女やトイレの花子さんなどと同じ、噂話しや物語から具現化した妖怪である。自分がまがい物、空想の産物だということは、この妲己も理解していた。己は、悪、そのものだと。

「なんともま～、春婆怒に喰われてどれほど時が経ったか分からないアルが、目覚めてみれば無数の妖怪変化に囲まれて、私も運のない定めアルね～……」

妲己は美しい切れ長の瞳を細め、ゆっくりと状況を把握しようと

辺りを眺めた。

ハイレベル結界、四万五千を越える妖怪、十二長老の面々、そして春婆怒。今一何が行なわれていたかが迷うところだが、明らかに自分が招かれざる邪魔な登場なのは、何となく自分のキャラと重ねれば理解できた。

状況を徐々に飲み込み、タケシや弦徳を無視して結界外に居るぬらりちょんへと視線を向ける妲己は、ゆっくりとそちらに足を運ばせる。歩き方には気品が麗しくも往々に感じられ、やたらと官能的だった。性欲に対して無防備に見え、その振る舞いがやたらとそそる。生まれ付いての卑猥さが、そこにあった。

「ぬらりひょん、これは何の冗談だ？　わざわざ死して九十九神に喰われた私を黄泉から引き戻すとは、意味が分からないアル？」

歩きながら話す全裸の妲己は美しく、まだまだ盛りのついた若い妖怪たちが、見を乗り出し目を凝らす。それもまた仕方ないほどに幻惑的で魅惑的な裸体だった。美に妲己も自信があるようだ。故に恥じらいもなく堂々と振舞い隠さない。

ベンチ内でも虎二が目を大きく開いて妲己の裸体を見ようとしていたが、虎二の眼前に、珠美と太陽のふたりが壁となって妨害をしていた。

それでも虎二が、壁の向こうを見たいと必死に体を振って隙間を窺う。しかし、ふたりの女性がバスケのディフェンサーの如く動きで守りを固め、妨害にしつこく専念していた。

最終的には、好奇心のままに振舞う虎二を、嫉妬に我慢が出来な

くなったふたりが拳を振るい、ベンチの隅で口喧嘩と抗争を替えた。その三人を、鍋中と一七五が五月蝿いと更に怒鳴りつけ、三人はしょんぼりと大人しく縮まって反省を見せる。

会場は、妲己の登場にざわめき混乱を露出していた。

観客席から腰を上げた一番長老が、ゆったりとした足取りで前へと出る。

１６０センチ程度の小柄な老体に、後頭部が異様に長い頭蓋骨。表情はカサカサした艶のない肌に深い皺が波のように幾つも刻まれている。そして鷹のような鋭い瞳。小柄でありながら巨人の如く押し寄せる気迫を秘めたぬらりひょんが、渋い声で談じ、傲慢を現す。

「いやいや、すまん妲己。これはただのミスだ。お前には酷な話であるのだが。今一度、春婆怒の胃の中に帰ってもらえぬか？」

はっきりと分かる揶揄。底意地の悪さが感じられた。

「貴様、この私に再び食われろと言うアルか？」

「いかにも」

「戯言アルね」

確かに妲己の言い分が正しいかもしれない。ぬらりひょんの話は一方的である。

だが、この妲己は、封神演義の中で語られている残酷残忍の九尾をモデルに具現化して生まれた魔の妖怪。邪道外道を素で行く輩。

野に放つには許されない存在である。

「に、してもこの状況。周りの雑魚も数が多すぎるアル。おそらく全てがぬらりひょんの手の者と見えるアルね」

それは包囲。逃げる僅かな隙間も実存しない絶体絶命の光景。

「いかにも」

口元を笑わせぬらりひょんが答えた。言った妲己の眉間に、厳しさを認識した皺がよる。これは、ただの苛めなのかと考えた。

「悪戯に蘇らせて、また喰われろとは……。ならば此方もやけくそアル！　少しでも多くの道連れを作ってやるアルよ！」

妲己の判断はやけくそを選んだ。露骨なまでの開き直り。それもまた致し方ない。

「なあ、春婆怒？」

「なんじゃ？」

少し離れたところで小休憩を取りながら、ことの流れを他人事のように眺めていたタケシが春婆怒に問う。

「あの全裸の痴女、結構強いだろ？」

「うむ、かなり強いぞょ。昔、奴と戦った際の使い手は、その時の手傷がもとで死したぐらいだからのぉ」

九尾の妲己が、会話中のタケシを睨む。刃物の殺気が鋭い眼光から向けられビームの如く放つ。

「仙人どもに追い立てられ、手負いの私を襲い喰らった槍の九十九神。せめて貴様だけでも道連れにしてやるアル！」

千年単位で古い記憶から恨みを掘り出し、妖艶の美面が狂気に変わる。悪女をとおりこし、狂女の風貌。白い肌の裸体や毛並みの綺麗な九本の尾から、ただならぬ気配を浮かばせる。

「はは、それは一向に構わん。春婆怒は、我らが守るべき管轄外」

ぬらりひょんの述べたとおり掟では、虎野町の許可無く春婆怒に手を出せないが、春婆怒を妖怪連合全体が守る義理はない。

そして妲己が、決闘の場を荒らすのを止める理由がなかった。むしろ妲己の乱入に、観客たちは、予想外だと楽しく沸いていた。やはりハプニングは盛り上がる。

「まあいいアル。一度は死んだ身。復讐のために二度目の命を費やすのもありアルね……」

妲己が身を丸めると力を溜める。そして全身を弾かせる仕草で体を勢い良く開く。

「やぁーーーー！」

妲己の掛け声もまたキュートだった。そして美声と同時に、九本の尻尾を長く突き伸ばすと結界に叩き付ける。

拒絶型結界の壁や天井に激突した九本の先から火花が散ると、今度は稲妻と変わり中央の妲己へと流れ込む。

九本の尻尾から集められた稲妻が、妲己の中に充電されていくと、バチバチと音を鳴らしながら黒い髪が金色へと変わっていく。

「タケシや、厄介だぞ。白面金毛九尾の狐に変化をはじめおったわい……」

「……」

春婆怒の言っている意味が良く分からないのでタケシは、黙って妲己の様子を眺めていた。

妖力を結界から吸収した妲己は、姿を獣人へと変えていく。金色に変わった髪が靡く頭部にネコミミの様に狐の耳が生え、時折金髪に稲光を走らせている。

恥じることなく美しい全裸を晒していた姿も、全身に金毛を獣のままに生やし、輪郭も狐の容姿に変わり人間としての美しさを失う。

その獣人への変貌に、一部の観客席やベンチ内の虎二などが、がっかりとした様子で興味を失い席に腰を下ろして大人しくなる。興奮していた雄の本能が、やっと宥められたといった感じだった。それでも珠美や太陽のふたりが怒った顔を崩さない。

だが、色気が薄らいだ妲己の風貌に、今度は、タケシの方が、先程以上の興奮を高めて戦士の笑いを見せる。そして、妲己の狙いは春婆怒。即ち妲己と戦う権利は自分にあると歓喜していた。

「なるほどアル。今は春婆怒と名乗っているのアルね。安直な当て字アル。もっと考えて選ぶアルよ」

白金に輝き稲妻を放電させる妲己が、タケシを目指し歩み始めた。獣人の九尾が怪しく靡いて踊る。まるで大蛇がうねる動きだった。

タケシはもちろん逃げも隠れもしない。むしろ喜びを仮面の下に隠していた。しかし、その笑みは、隠しても隠しても肩が揺れ、背中から透けて見えていた。観客たちが、意識もせずに熔け出る感情を読み取れるほどにだ。

「あの時とは、違うアルよ。手負いでもない、妖力も満ちているアル。万全アルよ」

「ほざいてないで、始めるぞ、ねーちゃんよ」

自信に満、挑発に威嚇の言葉を使うタケシが、妲己と同じように歩み始め、堂本流の構えなき構えを取る。動きに不思議な違和感が生まれたのに、妲己も直ぐに気づいたようだ。

「ほほう、貴様は私のようなか弱い姫を手にかけられるアルか、鬼畜アルね〜」

挑発に挑発で返す妲己。

「ああ、うちの家系は、戦場で男女差別とかしなくてな。いい主義だろ」

タケシも口では負けていない。

「そうアルね」

タケシと妲己の間合いが詰まる。距離にして五メートル。先に仕掛けたのは妲己だった。ふわりとした動きで右腕を前に出し、掌をタケシにそっと向ける。肉キュウが、ないのが見えた。次の瞬間、掌内から雷球が飛び出る。

「むあぁぁ！」

タケシが呻いた。

視界が白く眩むと激痛に発声が思わず大きく開いた口の奥から、我慢よりも先に出てしまう。タケシの体が、光の爆発を見せた雷球に吹き飛び転がった。

正直なところ、想像以上に速い攻撃だった。回避が間に合う間に合わないではなく、攻撃そのものに反応が出来なかった。しかもだ、かなり痛い。冗談にしてもキツイ。妲己の攻撃にタケシの表情から余裕が瞬時に消えた。

「タケシや、大丈夫か！？」

春婆怒も、想定していた以上の攻撃速度に驚きの声で、タケシのようすを心配そうな言葉で窺う。

「や、やべえかも……」

煙を上げながら両手を付き立ち上がろうとするタケシが、珍しき弱気な声で答えた。これは演技でないと、早まる心臓の脈から春婆怒も感じとっていた。

「どうしたアルか～。早く立つアルよ」

立ち上がろうとしているタケシに対して、そう言いながらも二発目の雷球を放つ妲己。タケシが再び撃たれて弾け飛ぶ。

結界があるため逃げるも出来ない妲己だが、他者が入って来ることも出来ないと悟ったのか、このままタケシを嬲り殺すつもりらしい。ねちっこい性悪な笑みで三発目の雷球を発射した。それにタケシの体が弄ばれるように弾け飛ぶ。

<　九尾の狐・二　>

雷光に弾かれるタケシを見て弦徳が動く。妲己よりも一本少ない尾から、一番使い慣れ親しんだ廃字刀苦羅々を選び取ると、凛とした眼差して腰に添えた。お馴染みの発射型居合い抜きの構えだ。

「妲己、喰らえ。廃字刀苦羅々・閃光斬激！」

逆袈裟切りの剣筋から放たれる閃光のビーム。離れた位置から繰り出される弦徳の光術が、妲己を狙って飛んで行く。

しかし、弦徳の術は、妲己を薙倒す寸前で光の散りとなって砕け消えた。氷が砕ける音が響く。何かの防御系の術を使われたようだ。消えた光の塵の向こうで妲己が掌を向けていた。

「貴様も私の敵アルね！」

自分に対して攻撃的な術を放った弦徳に、怪しい狐面だけを向けて妲己が睨んでいた。明らかに敵意が感じられる。

「あなたを連れ出したのは、わたしのミス。自分の仕出かしたことは、自分で始末を付けます」

弦徳の言葉の中に、大人としての当たり前の義務感が、当然の如く秘められていた。

「茨巫女！」

弦徳の言葉に足元の地中から黒い刀が、真っ直ぐに生え出てくる。

弦徳が、黒い柄巻きを確り握ると引き剥いた。右手に廃字刀苦羅々、左手に不思議ノ刀。新たなバリエーションを見せる二刀流。

「不思議ノ刀・不老根、両力共有・魔開！」

再び弦徳が黒い刀の九十九神と妖力共有を行なう。黒い光に包まれた体に、茨の蛇が這いずり回る鎧が装着された。

「なんとも珍しい。妖怪変化が九十九神を纏うアルか」

そう言いながらも妲己の態度は冷静そのものに見えた。弦徳に掌を向けると、何の迷いもなく雷球を発射した。

「ぐわぁ！」

回避無能の速度で飛ぶ雷球が、弦徳の黒い胸を捕らえると、加戦に入った弦徳を吹き飛ばす。黒い姿が吹き飛び、タケシと同じように転がった。

「やっぱりあの攻撃は、あいつでもかわせないのかよ……」

妲己の雷球を三発受けたタケシが、煙を上げる体を弱々しくも立ち上がらせる。焼けて赤くなっていた甲冑も既に冷め、本来の黒緑へと戻っていた。

甲冑の熱と一緒に熱い思いも冷静に温度を下げ、明らかに強敵と部類できる妲己を睥睨する。

「さてさて、厄介な技だな、あの飛び道具は……」

真っ直ぐで速い。なんの小細工もない術だが、回避も許されない単純なスピードが悩ましかった。そんな術を扱う妲己に向かって、再び歩き出すタケシ。

「くっくっくっ」

忌々しく嘲る妲己。腕をゆるりと上げて掌をタケシに翳した。またも雷光の術を使用する積もりなのだろう。術の性能から余裕が見て取れる。

ふと、タケシは、昔の話を思い出していた。まだ、年の頃が十歳ぐらいの話である。

両親と共に春婆怒村の実家で過ごしていたころの思い出。何故にそのような話になったかまでは思いだせないが、祖父と村の人たち数人が、堂本の家で酒盛りをしていた時の出来事だ。

突然、祖父の拳四郎が、「拳銃の弾なら避けれる」と、言い出した。

村の者も笑っていたし、真面目な母ですら笑っていた。幼かった自分にも、それは不可能だと思えて、他の人たちが笑い出す理由が、さすがに理解できた。

でも、祖父の拳四郎と、その弟子だった父だけは笑っていなかった。そして父が言い出した。

「ならば試してみよう」

父の言葉に対して村人たちは、更に笑い声を大きくさせた。しか

し祖父が立ち上がり「そうだな」と、一言述べたのである。祖父の発言の中に、子供ながら凍てつくほどの殺気を感じ取ったのを良く覚えていた。

ことは直ぐに実行された。村の猟友会の者三名が、狩猟用のライフルを取りに行かされたのだ。そして、その銃で拳四郎と対決をしろとなった。もちろん、三人の村人は冗談でないとことわる。

しかし、無茶苦茶を得意とする拳四郎のことだ、嫌だの言う台詞を力任せに押し切る。胴を狙わず脚を狙えば問題はないと理由を付けて、人間が銃弾を回避できるのかどうかの実験が始まった。

実験は、ライフルを持った三人が、横一列に並び、拳四郎が、十メートルほど先で構えるという形から始まることになった。

そして、弾丸を避けれたかどうかは、拳四郎が三人の並ぶラインを走り向けられたら勝ちとすることになった。ライフルマンたちは、その間までに何発撃とうが、同時に撃とうが自由。とにかく、自分たちの後方に拳四郎をやらずに足止めすればいいのだ。それが出来たら彼らの勝ちらしい。人間は、やはり拳銃の弾は避けれないと検証される。

ルールを決めているのをタケシは横で聴いていたが、そもそも実験と言っているに勝ち負けが存在するところが祖父らしいと幼心に思った。

そして、拳四郎と三人のライフルマンが配置に付く。

他の者は、流れ弾を避けるために物陰から覗くようにしていた。母が危ないからダメと言う言葉も聞かずに、タケシも岩の陰から頭

だけを覗かせて見ていた。こんな面白そうなイベントを、見るなと言うほうが無理というものだ。

開始の合図は拳四郎がライフルマンたちに譲った。誰かの初弾が発砲されたのを合図に、拳四郎が走り出す手順だ。

各自のスタンバイが終了する。

拳四郎は、子供が駆けっこでスタートラインに立つようなホームを窺わせてｅｑ。ライフルマン三人は、二メートル間隔で横に並びライフルを構えていた。銃口はやや斜め下、拳四郎の太い脚を狙っている。

とても真剣な空気が流れていた。最初は嫌がっていた三人の村人も、ひとたび猟銃を構えると表情が変わる。真剣なハンターの眼差しだった。脚とはいえ、本当に撃つ覚悟が伝わってくる。やはり春婆怒村の男たちは、そういったところの肝が据わっている。定めとはいえ、怖い村である。

緊張勘に見守られる中、静かな田舎の空に、銃声が響いた。初弾を発砲したのは真ん中の村人だった。その銃声と同時に拳四郎が横に飛んだ。弾丸をかわしたのである。数メートル後方の地面が弾丸に抉られ土埃を舞い上がらせた。

横に飛んだ拳四郎が前に走り出した。続いて発砲が連続で轟く。その度に拳四郎は横に飛び跳ね弾丸を回避して見せたのである。

見ている者たちが、まさかと表情を驚かせていた。確かに避けているのだ。

真ん中のライフルマンが、二発目の準備を終えて猟銃を構え直したころには、拳四郎が彼らの間を駆け抜けてゴールインを遂げる。

猟銃を持った三人だけではなく、最初に人が銃弾を避けるなんて不可能だと否定していた村人も驚きを隠していなかった。火薬の臭いが辺りに広がるなか、奇跡のような真実を、皆が受け入れる。

見事に三名の銃弾を回避した拳四郎曰く。人間が拳銃を発砲するさいに、格闘術と同じように予備動作があるらしい。

もちろん格闘技に比べて予備動作は小さく微量だが、指の動き、腕の筋肉の動き、衝撃に耐えようとする脚の硬直、それらの僅かな予備動作が存在するらしい。

だが、一対一ならば、それらの動きを凝視して見張るように構えられるが、三人など複数になればそれらもままならなくなる。そこで更なる拳銃の弱点を察し弾丸を避けるそうだ。

その拳銃の弱点というのが、また冗談に聞こえた。

どんな拳銃も、引き金を引いて激鉄が薬莢を叩いてから弾丸が飛び出される順序がある。その間に、火薬が炸裂して光を放つのだが、発射される弾丸が、火薬が放つ光よりも早く銃口から押し出されることはない、そうな。だから光が見えたらよければ良い。拳四郎は、そう言うのだ。

理屈では分かる。だが、人間の反射神経が、それを可能に出来るとはとても思えない。

しかし、目の前で、そんな奇跡のような反応を見せて実行をした

人間が言うのだ、否定も出来ない。当時のタケシも呆気にとられた。

そして、妲己が使う雷球の術も光の速度を持つ妖術。手元が輝いてから雷球が発射される。原理は拳銃に近い。ならば避けれないこともないだろうとタケシは考えた。

今まで拳銃の弾丸を避けたことはないが、拳銃を武装した輩と戦ったことは、何度かある。成功こそしていないが、弾丸をかわすチャレンジは試みたことがあったのだ。だが、今なら可能だと、成功できると感じていた。根拠は、いつもながら理屈で語れないところにある。それが堂本の血だ。

腕を向ける妲己にタケシが腰を屈めて構えを見せる。昔、拳四郎が見せたスタートのポーズと一緒だ。距離は、雷球を喰らいころがったせいで十メートルほどに開いてしまっていた。それもまた、昔の記憶と重なる。

「ほほう、懲りずに正面から来るアルか」

「ああ、小細工より、真っ直ぐな戦術のほうが得意でね！」

駆けっこの構えのままに、じりじりと前に出るタケシ。いつでも回避が出来るように心を静め集中を研ぎ澄ます。見るは輝きのみ。否、目で追っては間に合わない。感じるのだ。答えはきっとそこにある。

「喰えアル！」

妲己が吠え、掌内がキラリと輝く。

刹那、タケシが右斜め前方にダッシュした。雷光が、タケシの肩を掠めて飛んで行くと、後方の結界壁に激突して爆発した。肩に焼ける痛みが走るが、集中を続ける精神が、それを無視する。アドレナリンの力だ。

「かわしたアルか！？」

タケシは、ワンダッシュで五メートルの距離を縮めていた。すぐさま二発目の狙いを定める妲己。手のひらが光る。更に地を蹴るタケシが、クルリと身を回転させて雷球を避けた。今度は掠りもしなかった。見切りを極めた様だ。

「きぃぃぃ！？」

タケシの巨漢が妲己の目の前に迫る。三発目を放とうと腕を翳す妲己だが、タケシが妲己の細腕を裏拳で弾き飛ばす。

接近を許した妲己が細く美しい瞳を限界までに見開き、タケシの仮面を見上げる。タケシの拳が、仮面の横に見えた。

「やられたら、きっちりやり返す。それが俺流、それこそ堂本流！」

妲己の顔が引きつる。

「ちょっちょっちょっちょっちょっと待つアル！」

チョッピングライトが妲己の肩口に落ちる。重い。両膝が衝撃に沈む。

続いてアッパーカットが、妲己のシャープな顎を下から突き上げ

た。曲がった膝そのままに、妲己の細身が浮き上がった。

ふわりと無重力を味わう妲己。初めてだった。幾度と繰り広げた戦の中で、剣で切り付けられたり、槍で突かれたり、弓で射られることは、数知れずあった。だが、素手で、拳で強打される経験は、一度もなかった。武器を持たずに死闘を行なう相手など、今まで居なかった。それが正常な戦の姿。

「喰らったのは三発。もう一発、返してやるぜ！」

体を浮かせた妲己をタケシが狙う。体を捻り、呻り空気をかき混ぜて会心の一撃を繰り出す。

上段後ろ廻し蹴り。

「ギョォォォオオ！」

浮いた妲己の視界に飛び迫るタケシの脚足。思わず驚きの悲鳴を口走る。だが次の瞬間には、悲鳴ごと口が閉鎖された。タケシの踵が口の中に飛び込み蓋をする。

小柄な妲己の体が、蹴りを口内に喰らった勢いで空中を舞う。金色に眩い九尾が美しく靡いた。しかし、狐の顔は苦痛に歪み、顎が外れたように大きく開かれ、口の中から血と涎と牙が数本飛び散る。

「どうだ、女狐！」

蹴ったタケシが脚を戻すと、蹴られた妲己が一回転して地に落ちる。距離にして五メートルは飛んだだろうか。その様を眺めるタケシは、満足げに笑っていた。

<　九尾の狐・三　>

「己ぇ～、私の綺麗な牙が～……」

何本かの牙がへし折られた口を両手で隠し立ち上がる妲己。手の陰からダラダラと紅いものが流れ落ちる。

「さて、これでタメだ。振り出しからやり直そうぜ！」

「いいえ、この妲己を舐めるのには、まだまだ早いアルよ！」

妲己の右手が輝き雷球を発射する。しかし、術を見切ったタケシは、斜め前にダッシュしながら回避と接近を実行する。

だが、そこに妲己の左手が向けられて雷球が発射される。ワンテンポずらしての二発目は、そこにタケシが移動してくるのを計っていたかのように命中させた。

「ぐほぉ！」

雷球の直撃をタケシがまともに喰らうと苦痛の声を上げた。しかし、衝撃には耐えた。気合で踏ん張りダウンを免れる。

「阿呆アル。同じ策が二度も通じるアルか！」

妲己が失笑しながら雷球を両手で、狂ったように連射した。一撃を喰らいながらも踏み止まったタケシであったが、両手から繰り出される連射を回避できずに吹き飛ばされて行き、砂埃を上げながら雷球の爆風に包まれる。

「さすがの彼も、二連砲となると厳しいようですね」

弦徳の声だ。抑揚の少ない台詞に妲己が、両腕を翳したまま声の主へと向きを変える。

「いちいち五月蝿いアルよ、あなた。目障りだから吹き飛ばしてやるアル！」

弦徳に向けられた両腕の掌が、連続で煌く。しかし、今度の弦徳は、妲己が繰り出す雷球の連打を巧みに避けながら前に出る。タケシですら避けれなかった双砲の雷球攻撃は、弦徳に対して掠りもしない。

「なんでアル!?」

先程のタケシが急に強さを増して雷球をかわしだしたように、弦徳もまた強く変貌していることに驚きを見せる妲己。それでも抵抗の雷球を連射しつづける。

「なぜアル！　なぜアル！」

狼狽を見せる妲己の眼前に黒い甲冑の弦徳が立つ。形勢を逆転させた弦徳の右手には、青い気を揺らめかせる斬馬の大太刀が握られ肩に背負われていた。

弦徳は、斬馬刀聖羅の能力で未来を繰り返し妲己の前まで進んできたのだ。妲己もまたそれを見て体験しているはずだが、妖刀の術中に落ち記憶を改竄されている。ただ、気づいていないだけだ。残ったのは、目の前に接近を許しているという怯えだけだった。

弦徳の右手に握られた黒刀が妲己を狙う。不運を意味する漆黒のオーラが靡き脅迫めいていた。

「喰らえ。不思議ノ刀・不老根、暗黒疾風弾！」

妲己の眼前で放たれる弦徳の妖闇の術。妲己は慌てて防壁の術を両手で造るが間に合わない。黒く渦を巻く妖気の弾丸が、向けられた両腕の間を通り抜けて炸裂する。妲己の顔面が、漆黒のうねりに抉られた。

「フギィィイイイ！」

高速運転中に大クラッシュを起こしたバイクの運転手のように、派手に飛んで行く妲己の姿。高く上がり地面に落ちて跳ねたところに、さらなる黒い疾風の弾丸が追い討ちを掛ける。

「わたしは二発ほどいただきましたからね。堂本タケシに見習って、借りは丁度良く返すことにしました」

気持ち良さそうに二発目の術を妲己に直撃させた弦徳が、胸を張りながら語っていると、雷球の連打で飛ばされたタケシが、静まりかけた土埃の中から立ち上がってくる。

「ちっ、くだらねえところを真似すんなよ……」

嘯くタケシが、土埃の中から前に出る。ダメージなんぞ気合で消し去っている様子だった。

腹ばいのまま地面に伏せている妲己が、ゆっくりと身を起こす。

しかし四つんばいのままだ。安産型の尻を突き上げ、頭を下げている。グラビアのアイドルモデルが見せる女豹のポーズだ。九本の尻尾が黄金色に輝き扇形に広がりながら、威嚇のさまに揺れていた。より威圧的に大きく見える。

その光景を見ながら妲己に詰め寄るタケシと弦徳。九尾を煽り妲己がふたりを牽制していた。獣の様に哮る。

「グルルル、調子に乗りすぎアル。こうなれば……」

狐の双眸が赤く光る。すると九尾の表面に複数の瞳が開き現れた。奇怪な瞳は、まるで覗き穴から下界を恨めしそうに見る亡者の瞳だった。

「なんだ、変化したぞ」

扇方に広げられた九尾の表面に開いた複数の眼々。まさに扇に描かれた百目の妖怪だった。一眼一眼が独立した動きで辺りを見回す。ゆっくり舐めるように見回す瞳もあれば、素早く黒目を左右に走らす瞳もあった。瞳孔だけ動かしピントを怪しく合わせる瞳も幾つかある。個々が、様々な意思を持っている様子だ。実に奇怪で不気味な風貌である。

「これは避けれないアルよ！」

女豹のポーズのまま妲己が嫣然の笑みを見せた。妲己の笑みの理由は、タケシと弦徳にも連想が簡潔的に出来た。

「恐らく、数にして百です……」

「そう見てえだな……」

弦徳の言葉にタケシが頷く。次の瞬間、ふたりの想像と重なる形で妲己が乱射を開始した。九尾にある無数の瞳が大きく瞼を見開き、レーザー光線を発射してきたのだ。

「うわわわ！」

真っ赤なレーザーだった。百の瞳は、何かを狙って放っていない。盲目の様に虚空を眺め、無差別にただ放たれていた。

何も狙わずに放たれる複数のレーザー光線が、ふたりの体を焼きなぞる。攻撃を浴びたふたりの体が炎塵を散らし後退していく。

九尾の百目は、一つ一つ不規則な動きを見せながらレーザーを放ち続け、二人を炙りながら追いやる。ふたりも、後方に下がるにつれて扇方に放たれるレーザーの隙間が増え、炙られる数も減るため、ここだけは後退を余儀なく受け入れた。

「畜生！」

両腕で身を庇いながら愚痴を零すタケシ。一本一本のレーザーの威力はさほどでないが、何せ数が多すぎる。弦徳も斬馬刀を盾に身を縮めていた。

「どうしたアルか、小鼠ども！」

無差別レーザー攻撃を繰り広げる妲己が、僅かずつ前に出る。そのたびに、レーザーを浴びるふたりは、弱気の後退を見せた。

妲己のレーザーがふたりを焼き、結界の壁をなぞるなか、ぬらりひょんが炯眼を向けて独り言を語り始めた。

「ふっ、かつては大物妖怪と呼ばれようとも、所詮は、千年単位で眠っていた輩。進歩を遂げることなく置いてきぼりの存在か。あのふたり相手ならば永くは持たんな」

ぬらりひょんの言葉はタケシと弦徳の勝利を確信したものだった。脇でぬらりひょんの独り言を聞いた大天狗も同感だと心中で相槌を入れていた。

今のタケシは超人。九十九神を身に付けた強さは、過去に大天狗が最強の九十九神の使い手と認めた十六夜剣兵と肩を並べるところまで磨き上げられていると読んでいた。

大天狗が計る弦徳の強さもほぼ同列である。妖怪としての強さも十二長老に近いのだ、それが九十九神と妖力共有している。十分に侮れがたい。

もしも妲己が、春婆怒の胃の中で千年単位の眠りにつかず、この世で技や術を励んでいたら、現代に相応しい成長を続けていたことだろう。だが、現実は違う。

骨董品では、研究に研究を重ねられた最新兵器に勝つのは難しい。名刀でも、空軍の戦闘機は落とせない。

「おい、八尾弦徳！」

「なんだ！？」

少し離れた場所で丸まり合うふたりが声を掛け合った。

「俺が盾になって前にでる。お前は俺の陰に隠れてあいつを斬れ！」

珍しくタケシが他者とタッグを組もうと言い出した。その発案に、若干驚きを表情に出す弦徳。だが、直ぐに泰然した。

「分かった、手を組もう、堂本タケシ！」

「よし、そうと決まれば、さっさとあの邪魔者をぶっとばして、再開しようぜ！」

そう言いながら飛び出すタケシが、全身にレーザーを浴びながらも前に出る。レーザーが目標を焼く音が大きく轟いた。弦徳は、タケシの言葉の意味を考えながらタケシの陰に遠慮なく隠れた。

「この男……、ただ、わたしとの決闘の続きをしたいだけなのか……？」

レーザーを前面に浴びながら歩むタケシの背中を見ながら弦徳が呟いた。

「そうぞよ、こやつはそういう男じゃ」

囁いた弦徳に春婆怒が答えた。しかし、春婆怒と弦徳の言葉はタケシの耳には届いていない。レーザーに撃たれて弾ける加熱音が、それらの会話を遮っていた。弦徳が、大きな背中を見ながらクスリと笑った。

三戦の構えで少しずつ前に競り進むタケシ。体中に次々とレーザ

ー光線を受けて火の粉を散らすがびくともしない。だが、あまりの攻撃数に視界が殆ど失われていた。前が見えづらい。

弦徳が背後から叫ぶ。

「堂本タケシ。わたしが合図したら、何も考えずに横に走れ！」

「おうよ、分かった！」

弦徳が何を企んでいるかは理解していなかったが、攻撃を耐えながらもタケシは力強く答えた。妲己が乱入するまで戦っていた相手の言葉だが信用できた。否、先程まで戦っていたからこそ信用が、信頼が出来たのだ。

自分が盾になる。弦徳が矛になる。それで確実に退治は成功する。根拠もなくタケシには確信できた。ふたりの関係は、そこまで来ていた。

夥しいレーザーを身に受けているタケシの鎧が、熱を帯びて赤く染まり始めた。タケシの体が焼ける痛みに悲鳴を上げる。だが、その悲鳴が口から吐き出されることは、微少たりとも有り得なかった。狂いそうな痛みをタケシは、堅忍不抜で耐えて見せていた。

タケシの陰で斬馬刀を片付けた弦徳は、ギザギサ刀身の赤い刀を取り出した。そして切っ先をタケシの先に居ると思われる妲己に翳して狙いを定める。

「赤毛刀庵・業火車輪弾！」

突きたてた切っ先から炎が渦巻き大きなコマの形を象り、炎の渦

を巻き始める。コマの先は、切っ先と同じくタケシの背中に向いていた。

「おっ、そうきたか！」

レーザーに焼かれながらも弦徳の一手を聞いたタケシが、自分が体験した強烈な火炎の術を思い出していた。

「ああ、これで一気に押し切る。術の完成まで耐えてくれ、堂本タケシ！」

「おうよ！」

<　九尾の狐・四　>

妲己の無差別乱射のレーザーを前面で受けるタケシの陰から、弦徳が唱える火炎の術が膨らみ、熱風を散らして背後から溢れ出るように姿を現す。

「なにアルか！」

攻撃を繰り返す妲己も火炎の渦に気づくと、警戒に目を凝らし、野生的に牙を剥きながら威嚇を強める。そして、ならば百の瞳から放たれていた光線を、体を張り盾となっているタケシへと集中させた。無数の光線が、虫眼鏡のレンズで集められた太陽光の如くタケシの体に寄せられる。一気に貫く積りだ。

「ぐぅぁぁあああ！！」

すべての光線が収斂されるとタケシは、苦痛に奥歯を強く噛み加熱に耐えた。喉の奥から呻き声が溢れ、歯の隙間から歯軋りとともに流れ出る。鎧が焼け、赤みが鮮やかな紅へと変わり夕日の眩しさに似るなか、肉体も鎧も限界へと近づき溶解を始めるパーツも出始めた。

しかし、妲己の一点集中攻撃に耐えるタケシの背後では、脈々と成長を続ける破壊と破滅の紅蓮が轟々と唸り、今しばらくの辛抱を訴えていた。

「よし、堂本タケシ！　わたしが三つ数えたら横に走れ！」

「や、やっと完成したか！」

タケシの背後で律動の渦を巻く螺旋の火炎は、タケシが受けた時とは大きさが異なっていた。一回り規模が小さかった。

弦徳もタケシとの激戦で、幾つもの術を乱用してしまい、相当量の妖力を使い切っていた。今の弦徳では、本来の半分以下の威力でしか、この術を使用できなかった。だが、この規模でも弦徳が扱う術の中では最大の破壊力を持っている。

弦徳が、カウントダウンを開始した。

「一！」

火炎の轟音と、前面に放たれる百の光線に散る閃光の響きのなか、タケシがあと僅かの我慢と耳を澄ます。数えを待つ。

「二！」

間も無くだ。タケシが横へ飛ぼうと脚に力を入れる。

「三！　退け、堂本タケシ！」

「おう！」

弦徳の合図にタケシが飛んだ。その背後から轟き渦巻く業火を姿を現す。それを矛に弦徳が前へと走る。真っ直ぐに大地を削り焦がしながら烈火が突進した。

妲己の放つ百のレーザーが、避けたタケシから火炎の渦へと的を移した。しかし、レーザーの束は、業火の熱に歪められて生きた蛇

のようにうねりながら軌道を散らして朧気に消えていく。

「なぜアルか！　私の術が弾かれる！」

自慢の術が弾かれるのを見て妲己が吠える。女豹のポーズから身を起こし、九尾の百眼光線の他に、両手の双砲から雷球の加戦を増やして、これでもかと火力を上げて迎え撃つ。

「ならば、これでどうアル！」

百眼の機銃に二連の主砲が加わり、弦徳の紅蓮の炎とぶつかり合う。

だが、押し戻そうとする妲己の火力を、弾きながらも前進をつづける弦徳。強力な雷球二連が加わっても、その業火は衰えず律動の渦を轟かせ突き進む。

更に妲己は、大きく口を広げて、喉の奥からも烈風の鏃を機関銃のように吐き出し火力を追加する。もう焼け糞だ。

「うりゃーーーー！」

それでも弦徳は止まらない。なおも蹴り脚を強め走りを早め突き進む。

そもそも迂闊であった。火力と連射、飛び道具の術に自信のある妲己は、正面から打ち合うという策自体が愚かだった。避ければ良いものを避けなかったのだ。そこが失敗への末路。ただ妲己は、弦徳の術が、威力のみを優先させて誘導能力もないことを知らなかったのだ。致し方ないのかも知れない。

妲己の悲鳴が上がった。

「ふぎゃゃゃーーー！」

紅蓮の渦先が、妲己の火力を押し切り胸へと突き刺さる。しかし貫けない。抉る炎が妲己の体を押して結界の壁際まで追い詰める。そして、妲己の背中が結界の壁に触れて稲妻を放った。

だが、それでありながらも妲己の口元が笑みに釣りあがる。しめたとばかりに九尾が結界の壁からイカヅチの力を妖気に変換して充電を始めた。

「きゃきゃきゃ！」

炎のドリルに胸を抉られながらも妲己が笑い、不敵に声を立てた。

「この結界があるかぎり私の妖力は幾らでも回復する。この妖気を自己治癒に回せば、こんな術、何度でも耐えられるアルよ！」

妲己がほざく言葉は、螺旋の向こうから弦徳にも聞こえ届いていた。しかし、そのような戯言に対して無視を貫いた。

聞いても意味がない。例え妲己の言葉が真実であろうとも、今の自分は、この術で畜生を葬り去るために全力を果たすのみである。それが、術の完成までに、己の体を犠牲に盾と代わってくれたライバルへの自分なりの誠意。それがすべきこと。他にない信念。

「ほざけ！　下郎が！」

「下郎扱いアルか！」

二匹の狐妖怪が意地を見せ、気を突っ張る。

方や紅蓮の業火渦巻く術に、残りの全妖力を費やし、脚を踏ん張る。方や他者の結界から妖力を吸収しながらも防術と治癒術に気を集中させることを凌ごうとしていた。

妲己が、紅蓮の羅弾を耐え忍べは、弦徳の完敗といえよう。もう、次の策も妖力もない。これがまさに最後の一撃。故に魂が炎に宿っている。一手の重みが弦徳に決意を尖らせ、力を振り絞らせた。

「負けないアル。こんな餓鬼に遅れを取ってたまるアルか！」

「黙れ、妲己！」

互いへの罵倒が飛ぶなか、弦徳が力を振り絞る。だが、火炎の律動に揺らぎが訪れ限界が近いことを知らしめた。妖力不足に渦巻く形が崩れ始めたのだ。

「ちっ！」

舌打ちが零れた。しかし弦徳は諦めを見せない。押し切れると自分を信じて紅蓮の術で攻め続ける。だが妲己は、術の綻びに軽侮な薄笑いを見せた。

「八尾弦徳！」

叫ぶはタケシ。弦徳が声の方へ視線を向ける。

それは球場のほぼ中央、かつてプロレスのリングが設置され建っていた場所だった。今としてリングは、刻まれ、焼かれ、蒸発して跡形もない。その場所に、真っ赤に焼けた鎧を纏うタケシの姿が聳えていた。

ただ、堂々と凛々しく立つタケシ。赤い鎧が熱を孕み陽炎を揺らし、周辺の空気を踊らせていた。

「今度は、お前が意地を張れ！　そのまま狐女をそこに釘付けにしとけよ！」

叫んだタケシが、股を開き、腰を落とし始めた。その光景を見て弦徳が必殺の技を思い出し、汗を流す顔に喜悦の笑みを見せた。なんとも頼もしく映ったのだ。

「ああ、任せておけ！」

思わず弦徳の口から、親しい旧友か親友にでも答えるような返事が飛び出た。

「なななななな！」

ふたりの会話に焦りを狼狽させる妲己が、手足をバタつかせもがきに身を捩じらす。

今度こそ逃げようとしていた。だが、炎の巨矛に胸を刺されながら結界の壁に挟まれた彼女は、逃走の自由も禁じられていた。

さすがにこの状況で、更なる大技を喰らうのは厳しい様子だ。見ているだけで一心不乱な必死さが伝わってくる。

「我が力は、以下省略！」

タケシは、いつの間にか手にしていた長槍を、両手を使い頭上で回すと、全身を包む様に竜巻を起こす。

「我が技は、以下同文！」

タケシが生み出した竜巻は、見る見るうちにツイスターへと変わり結界の天井へと轟音とともに激突した。突風に煽られ結界が火花を紙吹雪の様に散り降らせる。

「我が心は、以下簡略！」

手で回す槍を竜巻の上へと飛ばすと、更にツイスターの大きさは勢いを増す。結界の中に台風が直撃したような嵐が巻き起こっていた。それに怯えるのは妲己のみ。

弦徳は、突風を今度ばかりは気持ちよく、涼しく、清々しく感じていた。実に爽快だ。

「心技体がひとつとまじわり、悪を滅する。跳うっ！」

力を溜めたタケシが地を蹴り、竜巻の中に飛び込む。タケシは、大きな竜巻の中をグルグル回り、上へ上へと登っていった。そして天井に激突してから目標を再度確認して狙いを決める。それは妲己。

「堂本流超人空手奥義第二弾、竜神昇竜脚改良バージョン！」

ドーム型の結界の天井部分をタケシが蹴った。そして竜巻を纏った飛び蹴りが、壁をなぞるように外周を回り、火の粉を散らしながら回転して降ってくる。

「あれは不味いアルよ！」

タケシの様子を火炎ドリルと壁に挟まれながら妲己が窺う。その眼は左右に泳ぎ、緊迫に揺れて、怯えを露出にしていた。避けなければ、逃げなくてはと心中で叫び吠えていた。これ以上の火力は、もう、幾ら妖力を変換したとしても、その身では持ち堪えられない。それが妲己には、明確に理解出来ていた。

「おりゃゃゃゃゃや！！」

結界の壁をなぞりながら迫るタケシの軌跡。火花の跡に亀裂が走り、頑丈強力の拒絶型結界が砕けて消えていく。否、砕けて竜巻の中へと吸い込まれていく。

「なんと、ワシの結界を喰らっているのか、春婆怒は！」

井戸仙人の言うとおり、春婆怒は結界を噛み砕き、技のエネルギーへと変えている。

「阿呆めが。妲己、結界の妖力を我がものに換えられるのは、主だけでないぞ！」

春婆怒は、井戸仙人同様結界術のスペシャリスト。そもそものこと、その気になれば、この結界程度、どうにでもなったのだ。

井戸仙人の結界が、リンゴの皮を剥くように、上の方から綺麗に

削り壊され吸い取られていく。そして回るタケシがエネルギーを蓄えながら妲己を排除しようと飛来するように襲い掛かる。

「くーーらーーえーーーーー！」

「いいいいいいいっ、いやアルよーーーー！」

体を挟まれ動けない妲己の左がわからタケシが、破壊的な竜巻の轟音響かせ無常に迫る。そして、断末魔の悲鳴を叫ぶ妲己を、容赦の欠片も微塵もなく轢き浚う。炎の先が砕け散り、瞬間で妲己の姿が消え去った。

妲己がタケシの必殺蹴りを喰らう刹那、弦徳の鍛え研ぎ澄まされた反射神経を宿した眼には、螺旋渦巻く炎の隙間から、はっきりと残酷な光景が窺えていた。

左から徐々に削り取られていく妲己の女体。

皮膚が切り刻まれ、骨を砕かれていく惨いまでの残忍さ。それは、生きたまま瞬時にミキサーにかけられた残虐な光景だった。肉片は赤い何かに変わり風の中に散っていった。

土煙を上げながら地を滑るタケシが止まると、妖術で巻き上がった嵐が止んでいく。

妲己の姿は欠片もなかった。いつもならば爆発してから妖力を秘めた爆炎を喰らうはずが、結界の妖力を術の威力に乗せた蹴りは、その爆炎が上がるよりも早く、妲己の存在すべてを喰らいつくしていた。

再び球場の中央へ立ったタケシの頭上から、長槍が降ってくる。タケシは、降る槍をタイミング良くキャッチした。

邪魔者が春婆怒の胃に帰り、残ったふたりが再び向かい合う。

赤く加熱されていたタケシの鎧は、自分が巻き起こした風に煽られ熱を冷ましていた。春婆怒も、結界から得た妖力を必殺技の補佐に使いきり、もう殆ど妖力が残っては居ない。正直なところ、妖力共有を保っているのでやっとだった。

弦徳もまたさすがに全妖力を使い切ったのか、綺麗な八色の気を放っていた尻尾も保てずにいた。

互いに満身創痍に見える。

結界が崩壊した会場で二人が睨み合う。そこに渋く鋭い声が飛ぶ。タケシや弦徳だけならず、すべての妖怪たちが声の方へと視線を向けた。

「そこまでだ、ふたりとも！」

割って入り、声を張り上げた主は、一番長老ぬらりひょんだった。席を立ち前へ進む。ゆっくりと歩む足取りには、大物としての威厳が殺気の如く宿っていた。歩くだけで違いが分かる。

「この勝負ここまでだ」

進むぬらりひょうは、そう述べながら見えない床を歩いて球場内を浮遊するように、ふたりの側へと歩み寄る。

「爺さん、なんの積もりだ!?」

タケシが威嚇にも似た強面の声を出す。

「まあ、そう猛るな、堂本タケシ」

ぬらりひょうは、冷静かつ冷酷な垂涎で受け答えた。その寒さに、珍しくタケシが押される。老いた気迫が祖父に似ていた。それだけで鬱になる。

<　九尾の狐・五　>

ふたりを上空から見下すといっても過言でない角度の視線。明らかに己よりも下の者に対しての態度だった。

己こそが百鬼夜行のナンバーワン。自分こそが一番長老。我こそがぬらりひょん。鋭い双眸に慢心以上の確固たる自信が窺えた。

乾燥した皺だらけの顔が犀利に微笑む。

「なあ、春婆怒よ。これは私からの提案なのだが……。いやいや、願いと言い直すべきか」

宙に浮かぶぬらりひょんが、語りながらも高度を下げ、タケシたちと目線の高さを合わせる。

「これは、妖怪連合一番長老からの申し出だ」

ぬらりひょんの言葉にタケシが動きを止めていた。警戒はない。春婆怒もぬらりひょんの申し出とやらに耳を傾ける。弦徳も仮面の下で何事かと言いたげな表情をしていた。

「今一度だ、弦徳の傷が癒えたら紫の妖刀を使い、もう一度、九尾双葉の救出を果たさせてもらいたい……」

そう述べぬらりひょんは、深々と産毛が僅かに生えた禿頭を下げた。会場の妖怪たちが、下がった頭を見て静まり返る。

ほとんどの妖怪たちが、一番長老が頭を下げる姿を目にするのが

初と言えた。それだけぬらりひょんの傲慢は知れ渡っている。まさかと口に出す者も少なくなかった。

「何を言い出すかと思えば……。諦めていた物が手に帰ると知って、いきなり下手にでたか。あざといのぉ」

春婆怒の言葉はもっともだった。だが、ぬらりひょんは静かに瞳を閉じたまま頭を下げ続けていた。恥も外聞もない。

九尾双葉が人間の夫に誑かされて、春婆怒に挑み、返り討ちにあって約五百年の月日。

その間、春婆怒に対して幾度となく送り込まれた妖怪連合の刺客の数々。

今になって何もなかったように、ことの原因を助け出させてくれとは、あまりにもむしがよすぎる。冗談にもほどがある。

春婆怒だけじゃなく、タケシにもそう思えたろうし、妖怪たちの多くが口に出さないが、同じように考えていた。

「ただとは言わない。それ相応の感謝を示す」

「当然だわな」

タケシが囁く。冷たく小さな言葉だったが意思は皆に明確に届いた。

「九尾双葉を救出させてくれれば、御主に本部から公認を与えよう。なれば、御主が日本全国どこを出歩こうが自由。それだけではなく、

私個人の権限で新手の九十九神が出現したら御主に極力回そうではないか。百計神を目指すならば、悪い条件でないと思うぞ」

最後の条件は、かつて九尾双葉が夫の九十九神に対して行なって外道策と同様。だが、今ぬらりひょんが出した提案は、状況により正道。否、無理やりにも正当化していた。

「確かにのぉ～。しかしだ、それで永き因縁を無効にしようとは、どうもむしがいいとは思わぬか。のう、ぬらりひょんよ」

軽視するようなアングルでぬらりひょんを見る春婆怒。言葉の一つ一つが厳しく刺さる。

「いかにも……」

ぐうの音も出ないとは、このことだ。しかし次に、傲慢なほどに誇り高きぬらりひょんが、両膝を地に付けた。正座だ。

「！？」

まさかと妖怪たちが目を剥き、身を乗り出す。

「このとおりだ……」

ぬらりひょんが再び頭を下げた。土下座だ。深々と腰を曲げて額を地面に擦り付ける。誇り高き大妖怪の行動に、一気にざわめき立つ会場。さすがに春婆怒も目を丸くさせた。

「同志、九尾双葉様のために、あのお方ですらそこまでするか……」

鋭い抜き身のトーンで呟く二番長老大天狗が席を立つと、白いスーツを曲げて頭を深く下げた。

その大天狗の一礼を真似て、見上入道、雪女と席を立ちあがると頭を下げる。他の長老たちも三人に続いて同じように、次々と頭を下げた。

十二長老全員が頭を深々と下げて、そのまま上げようとしない。許しをこうように頭を下げ続けていた。

そして、謝罪ともとれる行動は、更に観客として観覧に来ていた妖怪たちにも広がりはじめる。次々と席を立ち、頭を下げはじめた。妖怪たちの行動がウェーブとなり右へ左へと広がり、ドミノ倒しの様に頭がすべて春婆怒へと下げられていく。会場すべてが謝罪を見せる。

タケシがその光景をグルリと見回した。弦徳も頭を下げている。ベンチ内の虎野町支部の妖怪たちも、一七五一家の面々もだ。

「春婆怒、どうするんだ？」

「……」

訊くはタケシ。春婆怒は直ぐに返答を述べなかった。僅かの間に迷いが感じ取れる。だが、諦めたかのような温い溜息を発音に変えると、謝罪の礼を受け入れた。

「分かったわい。その条件で手打ちじゃ……」

「かたじけない……」

頭を下げ続けるぬらりひょんから小さな声が聞こえた。それでもまだ頭を上げない一番長老。反省の念を続ける。

タケシは思う。このぬらりひょん、大妖怪だの呼ばれていても、仲間への情がかなり深い。仲間のためにならば、地位も名誉も捨てて、配下の面前で頭を下げられる器を有している。そしてその行動を、これだけの数の輩に伝わり賛同を得られる。まさに大長老。

春婆怒が願いを受け入れた返事に、妖怪たちの頭が上がり、歓喜の思いを歓声に変えて沸きあがらせた。感動に空気が響くなか、十二長老たちは、未だに頭を下げ続けている。代表たるケジメが窺えた。

妖怪たちの歓声に空気が揺れるなか、タケシと春婆怒が妖力共有を解除した。傷だらけ、痣だらけ、血まみれの三拍子そろった戦後のタケシの横に、いつもの様に美しい春婆怒が寄り添うように姿を現す。

「もうよい、頭を上げい……」

春婆怒の呆れたかのような声に、十二長老たちがやっと頭を上げた。ぬらりひょんが頭を起こしたのは、それでも一番最後のことだった。一番最初に頭を下げ、一番最後まで下げ続けた態度。あっぱれと言えよう。

「すまないタケシや、感謝するぞょ……」

まだ緊張勘を崩さない眼差しを続けるタケシの横で、逃亡者とかわらなかった生活を送っていた春婆怒が、らしくない感謝の言葉を

安堵の笑みで優しく囁いた。

その笑みには、かつて見せた鬱蒼としたものが失せていた。明るく美しい女性の笑みだった。永遠だと思えた戦いが、ひとつ終わったのだ。

弦徳も妖力共有を解除して立ち上がる。そこにぬらりひょんが近寄ってくると、そっと肩に手を添えた。

「あとは体を癒し、妖気を取り戻せ。そして今一度、春婆怒の協力のもとで、彼女の胃の中から母を救い出すのじゃ。なあ、八尾弦徳……」

「はい、ぬらりひょん殿……」

タケシ同様傷だらけの弦徳が暖かい笑みで頷いた。これで、今までの怨みも忘れ、炎の夢に魘され目覚める朝も無くなるのだと感謝する。そして、永きに渡り引き裂かれた母との暮らしも戻ってくると理想に胸躍らせた。弦徳は、これで自分への試練が終止符を遂げるのだと喜んだ。

会場に明るい様々な声が、幾つも流れわたる。そして戦いの終わりだと悟った者たちが席を離れて出口へと移動を始めた。その足取りは、どれも軽かった。

そう、今宵のメインイベントは決着を遂げたのだ。

タケシが勝ったのか、弦徳が勝ったのか、どちらが勝者なのかは曖昧な結果だったが、最初から観戦を続けていた者たちには、どうでもよくなっていた。結果、ことは丸く収まった。こじれていたも

のが解決したのだ。清々しいまでに納得が行き、あとは爽やかな気持ちで家路に向かうのみ。

しかし。

「押忍！！」

一際大きな咆哮だった。獣と呼ぶより魔獣の雄叫び。席を立った妖怪たちが、その咆哮に背筋を伸ばし動きを固める。

背筋に熱く煮えたぎった氷水を流し込まれたかのような有り得ない感覚が、戦慄の如く神経の隅々まで走る。そしてゆっくり視線を、魔獣の如し咆哮を叫んだ主へと向けられた。まるで閻魔大王に睨まれたような異常な気配に皆が畏怖した。何が起きたのか、理解不能な者たちも少なくなかった。

視線を向ける全員のタイミングがぴたりと合う。身が振るえ、心が怯え、眼が揺れていた。

視線の先に収められた咆哮を響かせし戦慄の主は、堂本タケシ。人でありながら四万五千の妖怪たちに慄然を一声で思い知らしめて、その身を凍てつかせていた。

仁王立ちで聳える堂本タケシの全身から殺気が猛毒の如く滲んでいた。

妖怪たちの視線を、刹那の威嚇で独り占めするタケシの周りで空気が歪む。弦徳もぬらりひょんも、春婆怒すらも何事かと冷や汗を流しながらタケシを凝視した。

<　人間の決闘　>

タケシが怒鳴る。

「てめーら、何を丸く収まってやがるんだ、あぁ～んっ！」

声色にイラつきがあり、表情に怒りが見て取れた。言葉の語尾に威嚇が示されている。

ただ一人、明らかに憤怒を剥き出すタケシ。傷だらけの筋肉に血管が浮かび熱を増している。それらが、遠くからでも分かった。タケシの殺気が会場を支配している。

「タケシや、なにを……？」

そっと手を伸ばしながら春婆怒が、苛立ちを露にするタケシに問うた。しかしタケシから溢れ出た鬱憤が、春婆怒の細い指が近寄るのを妨げる。春婆怒がタケシの気迫に押され動きを止めた。

「おい、爺さん！」

タケシの一喝。呼び止めは、ぬらりひょんに向けられた。ぬらりひょんは、ことの状況を的確に把握しようとしている眼差しで、怒鳴るタケシを見るが、呆けの如く口が僅かに開いていた。

「な、なんだ……」

「てめーが、妖怪たちのトップだろ！？」

「ああ、いかにも……」

「じゃあ、なんだ、この終わりかたは！」

「……」

言葉を見失ったぬらりひょんの額から、一滴の汗が流れた。ことが読めない。

「八尾弦徳の母親がどうだの、春婆怒との因縁が片付いただの、それがどうした！」

皆が皆、タケシの言葉を呆然として聞いていた。何が言いたいのかが良く分からない。ただ、威圧的な気迫の声に押されていた。

「押忍！！」

再びタケシの咆哮。今度は大きく股を開き、両脚で大地を掴むように踏みつけると、地震の如く大地を震わせ殺気を吠える。

「ど、堂本タケシ……、何が言いたい……」

弦徳の問いに、やっとタケシが分かりやすく答えを言葉に出す。

「俺をこんなところまで引っ張りだしといて、話が済んだから帰れ、だと！？」

左掌に右拳が叩き込まれ肉が鳴る。

「ふざけるな、妖怪同士の話し合いに付き合ったんだ、俺とも最後

まで戦え！」

「ああ、なるほど……」

周りの者が、やっとのことでタケシの思いを理解した。この男は、この雄は、まだ戦う積りなのだと。

「春婆怒と八尾弦徳の因縁は、俺との決闘とは別の話だ。妖怪同士の話が終わっても、人間同士の決闘が済んでねえだろうがぁ！」

憤怒の表情が語る、納得の行かない末路。それがタケシの言い分のようだ。

「に、人間同士……？」

ぬらりひょんが首を傾げた。刹那、気づく。

「半妖……。弦徳との勝負、人間同士の血が示す勝負が半分残っているとな……？」

「おうよ、そうだ！」

ぬらりひょんの言葉に答えたタケシが、ぴしっと人差し指を立て、弦徳を指差す。

「過去の因縁、妖怪同士の話なんざぁ関係な～～んだよ。こっちは、武人としての決闘の決着が付けたいだけだ！」

「なるほど……」

我を取り戻した顔で、そう一言呟いた弦徳が、ゆらりと前に出る。いつの間にか左手には一本の日本刀が握られていた。

タケシが語る言葉の意味は、今頃になって弦徳にも良く理解出来た。

この男は、そもそもが、自分とは違ったのだ。今宵この場に、妖怪どうしの因縁の片を付けに着たのではない。決闘を申し込んだ自分との片を付けにきたのだ。

「すまない……。我々は、勘違いをしていた。武人である貴方を蔑ろにしていたようだ。先に謝罪しよう」

そう言いながら前進する弦徳の表情は、謝罪を述べる者の顔ではなかった。頭も下げていない。凛々しく締まり、気迫に満ちていた。眉間に攻撃的な力が入っている。

「弦徳……」

ゆっくりとした歩みで目の前を過ぎる弦徳にぬらりひょんが声を掛けた。しかし、届いているはずの声に弦徳が反応を見せることはない。視線すら向けずにぬらりひょんの横を静かな歩みで過ぎていく。

ガチャリと刀の唾が鳴る。重みのある鋼の音。弦徳が、左手に握った漆塗りの鞘を腰の高さに持ち上げた。

「堂本タケシ。私に流れる半分の眷族ごとは話が付いた。ここからは残る半分の血筋ごと。人としてのケジメ。貴方と、きっちり試し合いたい！」

台詞通りの弦徳の思い。それは八尾弦徳と呼ぶよりも、人としての語り名『森一郎』の言葉と感じられた。

そして弦徳の力強い台詞に、タケシの口元が悪党の如く釣りあがる。弦徳の方が、正義の味方のように誠実に見えた。

「なあ、八尾弦徳。ここからは人間同士の武人の勝負だ。分かるよな！」

「ああ、もちろんだ！」

妖術はなし。戦いし術は、すべてが武術。タケシが空手で、弦徳が抜刀術。それらが意味するものは、人と人の戦い。

タケシと弦徳の距離が迫るなか、ふたりの殺気に押し出されるかのように、春婆怒とぬらりひょんが後方へと退くように下がって行く。

控え室のモニターで、烏賊屋や城嶋も、ことの行く末を興味げに見守っていた。ふたりの側に立つ九十九神も同様だった。

「タケシや……」

心配に濁る春婆怒の素振りには、女性らしい仕草がありありと見てとれた。だが艶のある態度で、一言、己の使い手の名をこぼすと、後は見守るしかないと悟る。そして春婆怒は、ふたりの殺気が作り出した円から出て行った。

磨き極められし武術と武道の凌ぎ合い。しかし、方や素手の武術

で、一方は殺傷力に自信が高い武器を扱う武道だ。素人目にも達人たちの目にも、戦力差が大きく見えた。しかし、素手のタケシは承知での同意なのだ。それが春婆怒に憂慮を齎す。

先程まで無差別に放たれていたタケシの抜き身のような殺気は、既に弦徳ひとりに向けられていた。その殺気を弦徳も気迫で押し戻す。ぶつかり合う殺気と気迫が、音もなく空気を歪めて見せていた。熱い無音の豪を響かせる。

会場の妖怪たちも、熱い寒波の戦慄から解放され、間合いを詰め始めたふたりの人間へと興味深げに凝視しながら視線を向けていた。

そして、会場が静まりを取り戻す。微々たる音ひとつない緊張勘が蔓延していた。

これから始まる戦いは、人間同士のもの。

人間ｖｓ人間。

堂本タケシｖｓ森一郎。

空手ｖｓ剣道。

拳ｖｓ剣。

それらが構図。

間合いは、まだまだ互いのものではなかった。

タケシが今頃になって、体を解すように爪先でジャンプを繰り替

えし始めると、弾む全身の筋肉から殺る気が満ちて行く。それが色と変わって現れる。

そしてリズムを止めると構えを築くタケシ。剛の拳が目線の高さに並び、姿勢がいつでも飛び出せるように脱力に関節を曲げる。付いた両足が、黒焦げの大地を僅かに一度鳴らした。

「派手に行かせて貰うぜ！」

「望むところだ、堂本タケシ！」

怪しく光るタケシの狂情に、弦徳が誠実に答えた。

観戦者が、好奇心の中に緊張と緊迫を高めていくと、その思いが会場の温度を、どんどんと止まることなく上げて行く。暑さが心地よく湧き上がる。

今宵この会場で、同じことが何度繰り返されただろうか。

国分の引退試合から始まり、七名のレスラーと七名の他流武術格闘技家との戦い。烏賊屋と城嶋の九十九神対決。そして、九尾の狐、妲己の乱入。だが今は、二人だけの世界が広がる。邪魔は、もうない。

そう、これが……。

「「いざ、最終決戦！！」」

情熱的にタケシと弦徳が、同じ言葉を同時に吠えた。

<　ラストファイト・前　>（前書き）

これがラストアクションです。あとは完結に進んで行く予定です。

<　ラストファイト・前　>

炎揺らめく陽炎を纏いしふたつの拳。両拳を構えるタケシに、漆塗りの鞘を腰へと添える弦徳が、凛々と引き締まる雄の威圧を弓矢の如く差し向ける。

武道極めしふたりの姿勢は、闘争に備えやや低い態勢を作っていた。互いに顎を引き、相手を殺気だった双眸で睨みを利かせている。その尖った視線が、針の先程にも関わらず、寸分の狂いもなく的確に相手の眼力とぶつかり押し合い火花を散らしていた。それだけで激しい殺気が伝わってくる。

「――なんとも羨ましい」

「まったくです、親分」

一七五の独り言に、虫玄武が相槌を入れた。二匹の昆虫系妖怪の視界に映る刺激的なもののふたち。猛る緊張感が、震える闘争心が、輝く情熱が羨ましかった。

一七五や虫玄武だけではない。妖怪連合いちの武闘派と呼ばれる大天狗も同じような焦がれる眼差しでふたりを見ている。会場には、そんな表情を浮かばせている者が多かった。

まさに、今のタケシと弦徳は、血気盛んな戦士たちに取って憧れの的そのものだった。英雄、そんな言葉が良く似合う。

「さてさて、妖術抜きの勝負。若き拳帝は、瞬速の剣豪に、どう挑むのやら――」

「剣のリーチ差、そして殺傷性。それらハンディキャップをどうカバーするか、確かに興味深い。勝敗の行く末は、やはりその辺が大きく関係するでしょうな」

並みの妖怪よりも巨漢で偉大に見えるゴーグ大葉が言うと、隣で老いても強面な国分がプロレス中継の解説の如く状況を語る。

確かに国分が語るとおりだった。日本刀を使用する抜刀の達人に対して、タケシは丸腰の素手。空手で挑む積りらしい。幾ら空手が凶器同様の武術と呼ばれようとも、現実は生身だ。子供でも分かる戦力差をタケシが如何にクリアーするかが、この決闘の醍醐味と言えよう。

姿勢を落とし、摺り足でにじり進む弦徳が、腰に添えた刀に右手を伸ばす。緊張勘で静まる会場に、弦徳が柄巻きを握る音が僅かに聞こえた。それだけ観戦する者たちも集中している。僅かな音も、僅かな動きも、すべてがドラマ。彼らも一瞬たりとて見逃したくないのだ。

おそらくは、一瞬で勝負が付くだろう。誰もが、そう予想した。

人間同士の戦いなのだ、弦徳の刃の一太刀は、絶命を導くはず間違いない。タケシの剛拳もまた破壊力たっぷりの刺付き鉄球と変わらない。ヒットさえ許されれば、どちらも一撃必殺だ。

例え互いに初弾で決まらなくても、瞬時に繰り広げられる攻防は、刹那の刻、一秒二秒の中でのやり取り。下手をすれば瞬きしている間に決着が決しられ見逃してしまう。見ている者全員が、そのような勿体無いことは有り得ないと目を凝らす。

会場が静かに熱狂するなか、ふたりの距離が徐々に距離を縮めていく。弦徳の方が前へと出ていった。タケシは動きを止め待ち構え、前進を始めた弦徳を双眸の力だけで威嚇する。

空手に先手なしと言う言葉がある。

言葉の意味は、「待ちに徹する」ではない。「空手道からはケンカを売らない」と、言う意味だ。この決闘は、弦徳からの申し出。受けるはタケシ。故にタケシからは攻め立てない。空手道の掟を心得ていた。

だが、それ即ち、弦徳が刀を抜くまでタケシが仕掛けることがないと意味している。居合い抜きの達人と来ている弦徳に対して、抜いてから打つでは、あまりにも分が悪い。

「自分からは、動かないつもりですか……」

「読まれたか」

殺気溢れる鷹揚の形相で答えるタケシは、心を見透かされたことが嬉しそうだった。一瞬だが狂面を微笑に変える。

「後手を策するとは、あやつめ……」

タケシの無謀に春婆怒が眉間に皺を寄せる。そもそもこの勝負事態が無謀なのだ。春婆怒は、要らぬ心配に胸を苦しめられ美しい顔に影を浮かばせていた。危惧する心が大患のように止まらない。

しかしだ。タケシとて愚かではない。勝算なくして戦うほど想像

力に欠けていない。何らかの必勝策があってのファイトのはず。それが分かっていても春婆怒の不安が消えない。何故か嫌な予感が強く感じられる。

「タケシや……」

九十九神の勘、相棒としての勘、女の勘。何かが彼女の不安を煽り立てていた。憑き物が落ちない。

そんな春婆怒の思いを無視してふたりの距離が弦徳の前進で間合いを削っていく。徐々にふたりの殺気と気迫がぶつかり合う面を増やし、歪める景色の量を広げていく。ふたりの戦いに巻き込まれ、空間や次元すらもが怯え震え上がっていた。

先に間合いを捕らえるのは、間違いなく弦徳。タケシが自分の間合いを築くには、瞬時に飛び込むしかない。それでも圧倒的不利は変わらない。

弦徳が自分の間合いをまじかにしてカチャリと音を鳴らしながら、左の親指で刀の唾を押し上げる。姿を現す銀光の刃。ギラ付く刀身が狂気を知らす。

抜刀の姿勢が、僅かに刀の肌を見せることで威圧感を増す。まるで、狙いを定められた拳銃の激鉄が、親指で引かれたようだ。

「……」

攻撃態勢が万全になった弦徳が、あとは間合いを詰めるだけと神経を研ぎ澄ます。ジリジリと進む一歩一歩がタイムリミット。タケシを睨む双眸には、濁りも曇りも存在していなかった。例えタケシ

が何らかの策を弄していようとも関係ない。

心は決まっていた。

間合いを詰めたら抜く。抜いたら切る。切ったら殺す。それに迷いはない。

居合いの切っ先が狙うは腹部。ガードに建てられた二本の腕が、胸から上を隠していた。流石に抜刀の達人であれ、二本もの腕を切り落とし致命傷を狙うのは難しい。追加の二激目で決める積りならば、それも良かろう。しかし弦徳は、一撃でこの勝負を終わらせる積りであった。それがこだわり。

弦徳が一撃にこだわる理由は、実に単純だった。相手は丸腰の格闘技。此方は一刀両断を可能に出る日本刀を有する武道。この状況で、一太刀で決められなければ恥そのもの。

弦徳の眼差しが、一層鋭く引き締まる。柄巻きを握る手に力が篭もった。そして摺り足で進む中、間合いが己のものに近づく。あと半歩だ。

タケシが練る策の推測。俊足に自信が有るなら、弦徳が間合いに入り、刀を抜く瞬間に前へと跳ねるだろう。その逆は、居合いの一撃を後方に飛んで回避してから前に出なおす。

もう一度、弦徳が強くタケシの瞳を奥深くまで覗き込むと、いつもながら傲慢と自信に満ちた生命の炎が輝き燃えていた。己の能力に一転の疑いもない様子だった。

この男ならば、後者は有り得ない。一度後ろに下がってやり過ご

すなんぞ有り得ない。間違いなく正面から堂々と攻めてくる。そう生きる男だ。

「行くぞ……」

弦徳は、タケシを間合いに捕らえる直後に強い意思を言葉として放った。思わずの一言であった。刹那の流星。そして抜刀が居合いとなって光を繰り出す。

暗い鞘筒の中から刃が疾風を真似て、空気の隙間を光の速さで流れ飛んでいく。

弦徳が刹那に見せた居合いの技は、まるで大自然そのものに溶け込んでいた。殺気が消え、透明と化す。この一太刀は、仏の一手。

そして流れる切っ先は、タケシの腹部を狙って過ぎていく。タケシも反応出来ていない。微々たりと動きがなかった。

弦徳の一撃が、タケシの腹を横から一文字になぞり切る。刀身の先が十五センチばかりタケシの体内に侵入して横断していった。

「切られた！」

誰の目にもそう見えた。見立てからして内臓を多く切断されたはず。それは切腹並みの負傷。絶命の予告。

「勝った！」

振り切られる弦徳の剣技。そして口から飛び出る勝利宣言。

しかし、腹部を切られたタケシが、崩れ落ちることなく前へと飛んだ。

誰しもがまさかと念ずる。タケシの腹部には、確かに一文字の傷が影の如し一本の線となって残っていた。刀を握った弦徳の右手にも、確かに斬激の感触が残っている。間違えない感触。錯覚ではない。

前へと飛び出たタケシの震脚が、地を揺らし黒誇りを舞わせ響を立てる。タケシの間合い。信じがたいと弦徳が目を剥いていた。

「喰らえ、八尾弦徳ーーーーーー!!!」

吠えたタケシが攻撃に転ずる。上げられた拳が気合を帯びながら弦徳の顔面を狙い進んでいった。凶器が空気を押しつぶしながら狂った轟を鳴らす。腹に深さ十五センチもの傷を受けた人間が出来る行動ではない。

迫る拳を見ながら刀を返した弦徳が、どんなマジックを使って自分の抜刀を凌いだのかと疑問視する。そう思った者は少なくなかった。

だが、その答えが見つかるよりも早く、タケシが放つ会心の右拳が弦徳の左面に、豪快な激音を立てて減り込んでいく。まさに大砲の一撃。

「決まった!」

叫んで見せたのは春婆怒だった。相棒の無事と勝利への一撃に歓喜を表す。満面の笑みだった。

必殺の拳を左顔に受けた弦徳が、拳力に仰け反り飛んで行く。右手の中から日本刀が飛んで行き、両脚が地面から跳ね上がり全身を激しく回す。

拳を受けた際に聞こえた響きは、頬骨と上顎が砕ける音が正体だった。後方に飛ぶ弦徳の顔半分が無残にも陥没している。左目も飛び出していた。ベンチ内で見ていた珠美が「きゃっ！」と、悲鳴を上げながら視線を逸らし両手で顔を押さえる。

力任せに振り切った拳に勝利を実感するタケシ。その視線の先で弦徳が、頭から地面に落ちて派手に転がる。

「俺の勝ちだ！」

タケシが勝利を叫んだ。倒れた弦徳は、ピクリとも動かない。うつ伏せのまま潰れた顔を地に押し付け紅い血潮を広げていく。

観客たちの緊張感が解けて歓声に変わり会場を響かせた。勝利を称える妖怪たちの歓喜。それらが轟きながらひとりの人間に注がれる。

「俺の勝ちだーーーーー！！」

心底嬉しいのか、タケシが右手を天に向かって突き上げながら、二度目の勝利宣言を繰り返す。そんなタケシのもとに春婆怒が駆け寄ってくる。ベンチの中から虎野町支部の妖怪たちが飛び出し、倒れ、敗れた弦徳のもとへと走りこむ。

「タケシや、見事だったぞょ！」

駆け寄ってきた春婆怒が、勝者たるタケシに労いの言葉を掛けた。いつもクールな表情が、暖かく微笑んでいた。優しい笑みだった。冷や汗を流しながらもタケシは、春婆怒に答えるような笑みを見せる。

しかし、その瞬間――。

「あ……」

タケシの腹部に刻まれた横一文字のラインが、大きな魚のくちの如くパックリと開き、嘔吐でも吐き出す様に刻まれた臓物を垂れ流す。

「やばっ！」

自分の腹から飛び出た複数の内臓。タケシは膝を付いてそれらを必死に掻き集めると、顔を青ざめながら腹の中へと戻そうとする。しかし、臓物を幾ら掻き集めても、傷口から滝のように流れ落ちていく真っ黒な血液が、見る見るうちに付いた膝元を鮮血の水溜りへと染めていく。

「タケシや！！」

慌てふためく春婆怒を余所に、己の内臓を集めていたタケシの動きが鈍る。そして白目を剥きながら横に倒れた。出血多量だ。

タケシは、弦徳に切られながらも腹筋に力を入れて、ただ我慢をしただけだったのだ。

常識で考えて可能かどうかは、切られたことのないタケシにも分からなかったが、タケシにはその策しか思いつかなかった。肉を切らせて骨を断つ、それを素で実行したのだ。

<　ラストファイト・後　>

倒れたタケシが仰向けになると、天に運命を任せるかの如く力無い眼差しで虚空を眺めた。

顔が青くなり、目は虚ろで生命の危機がありありと分かる。その横に春婆怒がひざまづくと、両手で腹部の傷を塞ごうとし、手を紅く染めていた。

しかし春婆怒の小さな手では、それも叶わず、開いた傷からダラダラとドス黒い血がこぼれ落ちて行く。タケシの口からもだ。呼吸がつまり弱い咳を吐く。

「不味いぞょ！　これは不味いぞょ！」

春婆怒は腹の傷を押さえながらも治癒術を念ずるが、所詮は専門外の術。傷を癒すどころかバンソーコーの役目すら果たしてない。己の非力な術に奥歯を噛む。

既に気絶している弦徳の方でも同じような光景が繰り広げられていた。虎野町の妖怪たちに囲まれて、治癒術の心得がある珠美や太陽が術を施していた。それであっても弦徳の傷は深く広い。こちらも生命の危機と見て取れた。

「どちらも瀕死じゃな……」

離れた場所から様子を窺っていたぬらりひょんが呟く。そして背後の観客席に、なにやら片手で合図を送ると、四番長老の雪女をはじめとした数人の妖怪立ちが席を立ち、そのままふたりの元へと降

りていく。

「雪女、頼むぞ」

「お任せあれ。私だけならず、多くのヒーラーがここにはおる。死んだとしても生き返らせることすら可能だわ」

ぬらりひょんの横を、涼しい表情で過ぎる雪女。純白の着物の上に羽織ったミンクのコートが揺れていた。

その豪華な雪女に続いて、僧侶や巫女の姿をした妖怪たちがタケシや弦徳の元へと進んでいく。中にはピンクのナース服を着ている妖怪も居た。

「皆の衆、まずは傷を出来るだけ癒しておくれ。応急処置が済んだら私の息で凍らせて病院に運ぶわ。あとはプロの妖怪医師におまかせね」

雪女の支持で治癒術が始まる。だが致命傷は、流石に容易く癒えない。治癒術の達人たちが、ひとりに二十匹ずつ付いて術を施したが、傷口が薄皮で塞ぐ程度までしか癒えなかった。動かせば直ぐに傷が開きそうだ。

「まあ、ここではこれが限界かのぉ」

そう言うと雪女は、凍てつく息を優しくタケシに吹きかけた。涼しい水色の妖気が混じる術は、タケシを足元から上へと進みながら凍らせて行く。そして頭まで凍りついたタケシは、冷凍保存されたマグロのように硬くなって横たわる。その様を春婆怒が心配そうに見ていた。

「安心せい、春婆怒。雪女の氷は、凍り付いても魂は保たれる。魂ある限り、肉体が死んでも蘇る」

「そのとおりよ」

そう言うぬらりひょんと雪女。そして雪女は続いて弦徳を冷凍保存しに足を向けた。

そして雪女の作業が終わると、氷付けにされた二人がタンカーで運び出され、会場の外で待機していた救急車へと積み込まれる。走り出した救急車は、そのまま病院へと向かうために深夜の街へと消えていった。

こうして本日のすべてのイベントが終了となる。

<　二人のラストシーン　>

死ぬ程の負傷を追ったタケシと弦徳が目を覚ましたのは、互いに二日後だった。その日の早朝に弦徳が先に目を覚まし、続いてタケシが昼頃に目を覚ました。

弦徳が息苦しさに目を覚ますと、そこは病院のベットの上だった。まず最初に視界に入ってきたのは、ぼやけた天井の景色。瞳が霞んで良く見えない。

「弦徳様、おはようございます」

ベットの横から明るい声が聞こえてきた。優しさと温もりの感じられる女性の声。弦徳は、声の方向を向こうとしたが、首が動かない。ギブスが巻かれているからだ。それでも瞳だけを動かし視線を向ける。

「……た、珠美ちゃん」

明るい光がカーテンの隙間から木漏れ日のように差込み、彼女の瑞々しい黒髪を美しく照らしていた。それが後光にも感じられた。

珠美がニコリと笑う。その何気ない笑みに弦徳は、何故か心が癒された。やはりこの子は不思議な力を持っている。

「弦徳さま、ご気分はいかがですか？」

「あ、ああ……、ここは？」

呆けた表情の弦徳は、現在の状況が把握できていない様子だった。珠美の挨拶に静かな混乱を見せている。

「ここは虎野町総合病院です。弦徳さま、死にそうだったんですよ」

尚も明るい笑みで答える珠美。その話を聞いて弦徳は、やっと自分の体が包帯だらけのミイラ常態だと気づく。顔は右目と口以外が包帯に隠れていた。どおりで息苦しいわけだと納得する。

徐々に蘇る決闘の記憶。弦徳は、タケシの拳を顔面に喰らう瞬間まで思い出した。

「そうか、私はあの一撃で気を失ったのか……、負けたのかい僕は？」

まだ記憶が混乱して曖昧なため、結果を珠美に確認するむ弦徳。

「はい、見事に」

無邪気にも無垢な笑みで答える珠美。その笑みが逆に効いて、弦徳は敗北を素直に受け入れられた。負けたのに何故か清々しかった。

「弦徳さま、今は体を癒すことを考えましょう。そして体が治ったら、双葉さまの救出の任がまっています」

「ああ、そうだね」

弦徳は、包帯でグルグル巻きになって隠れている表情を、笑わせようと努力した。だが顔半分の筋肉が動かない。だが、心の中は、母への再開が待ちどおしく満面の微笑みを見せていた。心底それが

嬉しい。もう邪念のひとつもない。

そして昼頃にタケシが続いて目を覚ました。

タケシも目を開けると最初に見たのは天井だった。ベットに横たわり体が動かない。動かそうとすると、腹部に信じられない程の激痛が走った。その痛みに思わず声が漏れる。

「いてて……」

「タケちゃん大丈夫！」

タケシのこぼした声に気づき、ベットの横に座っていた陽子が身を乗り出して、動けないタケシの顔を覗き込む。天井を見るタケシの視界に陽子の心配そうな顔が割り込んできた。目が潤んでいる。流石のタケシもそれには直ぐ気づいた。

「おう、陽子じゃねえか……。なんだか久しぶりだな」

腹に力が入らないためか、虫のように小さな声だった。

「医師から死にはしないと聞いていたが、心配したぞょ」

陽子の泣きそうな顔の横に、春婆怒のクールな表情が並ぶ。長い蜂蜜色の髪が垂れないように耳に掛けられていた。

「よかったー、タケシさんも目が覚めたのですね」

明るい声とともに黒髪の綺麗な女性が、春婆怒の横に顔を並べる。三人の中で一番胸が大きい。猫田珠美だ。向こうはタケシを知って

いる様子だが、珠美とは初対面だ。

三人の女性がタケシの視界に頭を並べる。何故か珠美が加わったことで、春婆怒が冷たい視線を彼女に突き刺し、陽子が牙を剥いていた。まるで地獄の番犬ケルベロスだ。

タケシは動かない体に目を向ける。全身包帯だらけだ。ドームでの対決を思い出し、こんなになった理由も思い出す。陽子の泣きそうな表情や、春婆怒の台詞からして自分の受けた傷が、致死量を越えていたと悟る。何せ腹を切られ臓物が流れ出たのだ、当然だと感じた。

「よう、堂本くん、お目覚めかね」

老いた渋い声だった。自分のベットを囲むカーテンを開けて、知った顔の老兵が顔を出す。

「烏賊屋さん……」

カーテンを開けて姿を見せたのは、烏賊屋兆殻と妻の鈴だった。烏賊屋も全身傷だらけである。タケシ程ではないが、あちらこちらに包帯を巻き、複数のガーゼが張られていた。ひとりで立てないのか、華奢で小柄な奥さんの肩を借りてやっと立っている。

陽子がベットの横に備え付けられた電動コントローラーを操作して、タケシの寝そべるベットを起こす。機械音とともにタケシの上半身のみが、ゆっくりと起き上がり、動けないタケシに会話しやすい態勢を作ってくれた。

「烏賊屋さんもこの病院にお泊りですか?」

上半身を起こしたタケシが、包帯に包まれた顔を和ませながら烏賊屋に問う。声の色が楽しそうだった。

「ワシだけじゃないぞ。おう、お前もこっちにこい」

カーテンの外に顔を向けて手招きする烏賊屋。やがて手招きに誘われて顔を出したのは、烏賊屋と九十九神対決を繰り広げたプロレスラーの城嶋であった。

「あんた、たしか……」

「ちわっす、城嶋悟っス」

城嶋も烏賊屋同様の負傷を追っているが、ひとりで歩ける様子だった。包帯が巻かれた頭を大きな手で書きながら餓鬼の様に笑っている。あの時の緊張勘は既に消えうせていた。

「ここは大部屋だぜ、四人部屋よぅ」

豪快な口調で烏賊屋が言うと、城嶋が向かえのカーテンを無造作に開く。その向こうには、タケシと同じようにベットを起こし、寄りかかった姿でこちらを見る八尾弦徳の姿があった。

「やあ、堂本タケシ」

「あっ」

片手を上げ挨拶を掛ける弦徳。包帯の下で友好的な笑みを作っていた。

四人用の大部屋。この部屋に入院しているのは、あの日、敵として戦い、力と技、そして心をぶつけ合ったもの同士だった。

「なるほど、誰が企んだか知らないが、面白い気の配りようだな」

「なぁ、まったく面白い計らいだろぅ」

軽く微笑みながら述べるタケシに、他の男たちも笑みを見せる。女たちも、それに釣られ優しく笑っていた。病室の空気が確実に和み軟らかくなる。もう軋轢が感じられない。

こうして男たちは、各々の傷が癒えるまで相部屋の住人として暮らすこととなった。

あの日の戦いですべての蟠りが消え、既にいがみ合いに決着が付いた者たちには、ただの同じ武人でしかなかった。戦いが趣味と言える者たちで話も合い、不自由な体から来るストレスも大分和らいだ。

城嶋は、これから九十九神の公認として、何処かの支部で後処理班と代わらない任務に付くだろう。妖怪との戦いに関しては経験が無い。そのため三人の話は、参考以上のアドバイスとなっていた。後輩らしく日々の話を食い入るように聴いている。

烏賊屋は、ドームでの戦いを最後に、公認としての退治屋を引退することとなっていた。理由は烏賊屋の体調のためである。幼少時代から繰り返した妖力共有が原因らしい。もうチャクラがズタズタなのだ。退院後は、夫婦で田舎の実家に帰り、静かに暮らすと言っている。

弦徳の方は、傷が癒えたら紫色の妖刀を使い、再び春婆怒の胃から九尾双葉の救出を試みるとのことだ。母に会えるのが待ち遠しいのか、その話をちょくちょくしていた。皆が心の中で、弦徳はマザコンなんだと感じていたが、希望へと微笑む弦徳に、それは言えないと口を塞ぎ、黙って話しを聞いてあげていた。

そして月日が過ぎ、半妖で回復力の速い弦徳から退院して、続いて城嶋、烏賊屋といった順で退院して行った。最後に残ったのは、タケシひとりだった。

時刻は夕暮れ、ひとり残り静まり返った大部屋で、ベットに寝そべるタケシを、窓から見える夕日が赤く染めていた。

つい先程、お見舞いに来ていた陽子が帰り、入れ違いに春婆怒が訪れた。

「タケシや、あんばいはどうじゃ？」

「おう、春婆怒か……」

夕日を見ていたタケシが声に気付き言葉を返した。

「もうちょっとで俺も退院できるそうだ」

「ほほう、それはよかったのぉ」

そう言いながら春婆怒は、ベットの横におかれた丸椅子に腰を下

ろした。

「今日は、弦徳の母親を吐き出して来たんだろ？」

「うむ……」

「旨くいったのか？」

「まあのぉ……」

春婆怒は、あまり優れた表情をしていなかった。タケシもそれを察して深くは聞かない。何があったかは分からないが、こうして無事に帰ってきたのだ、無理に聞くほどのことでもなかろう。

「これでわらわも晴れて公認の九十九神ぞょ。もう、妖怪たちに寝首を狙われる心配もない。少しは緊張感が解けたというものよのぉ～……」

「そのわりには、晴れた顔をしてねえな」

タケシの目には、作られた余裕に映った。

「そうかえ……」

ベットに寝ているタケシが、春婆怒の顔を下から見上げる。春婆怒の心を覗いているのか、双眸が穏やかだった。

「やっぱあれか、あの男か？」

「おとこ……？」

「癒しの侍、十六夜剣兵？」

「っ！？」

春婆怒が女の子っぽく驚きの表情を見せた。まさかタケシの口から、その名が出るとは思っていなかった様子だった。ハートに触れられた乙女の如く、春婆怒が可愛く顔を紅く染め上げた。

「なななな、なにを言うか、タケシや！？」

慌てる春婆怒を見てタケシが嫌らしく莞爾した。そして顔を逸らした春婆怒に、表情を真面目なものに変えるタケシが語りだす。

真剣な眼光だった。

「妖力共有すると、過去の使い手たちからピックアップされた技術が記憶として使い手に流れ込む。空手しか使えない俺が、槍術の数々を使用できるのも、そのためなんだよな？」

「ああ、そうじゃ……？」

顔をタケシに戻した春婆怒が、今更なにを言うのかと云いたげな表情をしていた。

「最初の頃は、あまり気になるほどじゃあなかったんだ……。ぼんやりしていて何だかも分からなかった……」

ベットに寝そべるタケシが、今度は真っ直ぐ虚空を眺めるように天井へと視線を移す。そして、今まで感じた思いを淡々と語り続け

る。

「お前と妖力共有を繰り返すうちに、そのぼんやりとした何かが、徐々に何だか分かり始め、八尾弦徳と戦った際に、やっとそれが何だかはっきりと分かったよ」

「何が言いたいのじゃ……？」

「妖力共有とともに、お前の思いが……、十六夜剣兵への思いが流れこんで来てたんだよ」

いつも細めて余裕を演出している春婆怒の瞳が、恥らうことも忘れて大きく見開かれていた。呆気に取られた仕草でタケシの顔を見下ろしている。

「お前、十六夜剣兵が、今でも好きなんだな……」

春婆怒村出身のタケシは、村の言い伝えで春婆怒の過去を知っている。春婆怒が村に現れた際、一緒に居た若い侍。その侍との日々。そして侍が死んだ後の春婆怒も。それらの思いは、未だ村では語り継がれていた。

その言い伝えと、妖力共有時に流れ込んでくる僅かなものが徐々に重なって行ったのだ。妖力共有のたびに、パズルのピースがひとつずつはめ込まれていく様に。

呆けていた春婆怒がゆっくりと席を立つ。蜂蜜色の長い髪が表情を隠していた。そのまま春婆怒は、幽鬼の如く寂しい足取りで病室を出て行こうと歩み始める。

「なあ、春婆怒……」

呼び止めるタケシの声に振り返る事無く春婆怒が足を止める。返事もない。悲しさが小さな肩から滲んで見えた。

「俺がお前を百計神にしてやる。お前が百計神になるまで俺が戦い続けてやる！」

タケシの言葉には、強い意志が感じられた。自信や傲慢、それらとは違ったものが感じられた。しかし春婆怒は、タケシに背を向けたまま動かない。

「俺は他人に願いを叶えてもらうという行為自体が他力本願で気に食わなかった。だからお前から褒美を貰う積りは、未だにこれっぽっちもない」

春婆怒がゆっくりと振り向く。

春婆怒が泣いていた。クールな表情に流れ落ちる雫。春婆怒は、この後にタケシが何を言うのかが想像できた。

タケシは、難しいことを言わない。いつも単純なほどに真っ直ぐだ。だから容易く心が読める。それが枯れ果てたと思えた彼女の涙を誘う。

「俺が得たい褒美は、俺が願うものは……」

「あ、ありがたや……」

先に春婆怒の口から感謝が呟かれた。そして彼女の顔が歪み、唇

が震える。慈悲に歓喜を見せる肩が静かに振るえ、やがてこぼれ落ちる涙を隠すように両手が顔に添えられた。

「俺が願う褒美は……」

夕日に染まる病室が、希望を願う言葉を暖めた。それがふたりの新たなる目標と変わる。もう三種百食の本能が故の欲からの戦いではなくなった。

春婆怒が、再び涙を流す日は近い。

次に流れる雫は、幸福を象るだろう。

他人のために戦う。そもそもこの戦いは、そのために始めたもだ。

初心を思い出しながらタケシは、それを夕日に誓った。

<　スタート　>

ピンクの目覚まし時計が、けたたましく起きろと音を立てる。ピンクにウサギ柄のカーテンの向こう側から、目覚ましの音に合わせて雀が鳴いていた。

ピンクの色彩が多い乙女の部屋。ベットの上では、周りの景色とおそろいのピンクの布団で出来た丸い繭が築かれていた。その中から小さな少女の手が伸びて目覚ましを鷲掴み、連れ去るように繭の中へと引きずり込む。

「むにゅむにゅむにゅ……」

眠たそうな声を溢しながらピンクの布団を割って出てきたのは、またまたピンクの寝巻を着込んでいた少女であった。一目でこの部屋の主と分かる。

「目覚ましよ、おはよう……」

騒ぐのを宥め終わった目覚まし時計をベットに投げると、少女はぼさぼさになった長い黒髪を撫でながら、緩々としたカタツムリのような速度でベットから降りた。

そして少女はウサギのスリッパを履き、自分色に染め上げた自室をでると、古風な作りの木製階段を覚束無い足取りで下りていく。

一階はリビングとキッチンが繋がった大部屋。シャレタ言い方を正せば、キッチンと呼ぶより台所と言ったほうがしっくりくる。

そのキッチンで、軽快な音を響かせネギを刻む女性の背中。慣れたお手並みに後姿からも穏やかな空気が感じられる。

「おはよう、雪絵おばあちゃん……」

「おはよう、春子ちゃん。早く顔を洗ってらっしゃい、朝御飯が冷めちゃうわよ」

「はぁ～～い」

孫娘と祖母が交わす朝の挨拶。何気ない日々の軟らかさを感じる。少女は祖母に言われるがまま、洗面所へと目指し足を進ませた。

少女の名前は、堂本春子、１４歳。細く可憐な体型に、お尻の前まである長い黒髪。顔付きは、かなり気の強そうだが、美少女であることが否定できない。ただ今は、眠気眼に呆けた表情が力を緩め、間抜けの様で人には見せられない感じだった。自慢の黒髪もぼさぼさだ。

春子は、洗面場に着くと、顔を洗い、歯を磨く。やがて歯磨き粉から来るミントの爽やかさで、眠気も一緒に洗い落とされていく。

「よしっ！」

目が覚め、いつもの明るい表情と元気が凛々しく蘇る。一声気合を入れると春子は、長い髪を揺らしながら階段を駆け上がり、自室で髪をとかすと中学校の制服に着替えた。

学校へと行く準備を終えると、今度は鞄を片手に階段を駆け下りる。短いスカートが揺れて下着が見えそうだった。明らかに校則違

反の長さである。

「あれれ、おばあちゃん。お父さんとお爺ちゃんは？」

春子は自分のテーブル席に腰を下ろすと、いつもなら既に起きてきているはずの家族のことを祖母に訊く。雪絵は、孫娘の朝食をテーブルに並べながら質問に答えた。

「二人とも逃げたのよ」

５０歳を越えた雪絵は、歳相応に皺の増えた顔を困らせて見せた。彼女も６０の数が近い。

「逃げた？」

春子は、自分の味噌汁を祖母から受け取ると首を傾げて不思議そうな顔を作る。話が掴めない。

今日、母が居ないのは、会社の出張でタイに飛んでいるからだ。何でもタイで建設中のリゾートホテルが、大きなトラブルを起こしているらしく、油儀グループ・ホテル経営の最高責任者として直接対処に向かっているのだ。それでここ数日、母は家を留守にしている。

母が居ないのは事情が分かる。しかし父と祖父が、何故に朝早くから逃げ出し、姿を見せないのかが理解できなかった。春子は、キョトンとしたまま味噌汁を啜る。ちなみに祖母の味噌汁は、とても美味い。

「ねえ、春子ちゃん」

「ん、なに？」

春子は祖母の呼びかけに、朝食を取る手を休めて話を聞いた。

「朝早くからね、堂本先生から電話があったのよ」

「曾おじいちゃんから電話？　めずらしいね」

「そうなのよ」

春子はご飯を少しずつ口に運びながら察する。父と祖父のふたりが姿を消したのは、これが理由だと。

「なんでもね、とっても大事な用事があるから、急に今日こっちに来るって言うのよ、堂本先生」

「曾じいちゃんは、相変わらず突然だね」

春子は口の中のものをモゴモゴさせながら、行儀悪く答えた。しかし雪絵は気にせず、話しながら頬に手を当て、眉間に皺を増やす。

「それでね、春子ちゃん。おじいちゃんもタケシさんも逃げちゃったから、悪いんだけど学校の帰りに駅まで堂本先生を迎えに行ってもらえないかしら？」

「え～～～……」

「これ、バス代、お釣りはお小遣いでいいわよ」

雪絵はテーブルに、すっと千円札を一枚置いて差し出す。

「任せて！　雪絵おばあちゃん！」

春子は目に＼マークを輝かせながら任務を引き受けた。案外と現金である。

朝食を食べ終わった春子は、祖母に「いってきます」と元気良く告げると家の玄関を飛び出した。

「春子ちゃん、おはよー」

「おっはっよー！　静香～」

春子が玄関を駆け出ると、祖母が経営している喫茶店の前で、クラスメイトで幼馴染の轟静香が待っていた。春子ほどに長くないが綺麗な黒髪をポニーテールにまとめ、淑やかさの感じられる少女である。身長は静香のほうが高い。１４歳で１６０センチを軽く越えている。

「お待たせ、じゃあいこうか」

「うん、いこ～」

春子の明るい言葉に静香が頷くと、ずれた眼鏡をそっと治す。その動きの一つ一つが淑やかであった。

ふたりの背中を、喫茶店前の民家で飼われている柴犬が、いつものように見送る。ふたりの乙女は何気ない会話を交わしながら学校へと、時間の余裕を残して登校していった。

「ねえ、春子ちゃん」

仲の良いふたりが会話を続けていると、静香が何かに気付く。そしてじっと春子の頭を凝視しながら言う。

「なに、静香？」

「春子ちゃん、そろそろ地毛が見えてきたよ」

「ああん、そう～、気づかなかった～」

困った表情で頭を押さえる春子。その彼女の真ん中からきっちり分けられた黒髪の生え際に、金色の輝きが僅かに覗かせていた。

もともと春子の髪の色は、金髪である。両親ともに純血の日本人なのだが、春子は産まれたときから地毛がすべて金髪なのだ。家族は気にするなと言うのだが、学校では目立ちすぎる。春子は、恥ずかしがって黒く染めているのだ。

「ねえ、春子ちゃん。髪の毛、いつまで染めてるの？　高校に進学しても、やっぱり染めちゃうの？」

「うぅーーん、考えどころなのよね～……」

「私は春子ちゃんの金髪、好きよ。綺麗な蜂蜜色で羨ましいな」

春子も自分の髪の色を嫌っていなかった。静香の言うとおり蜂蜜色でとても綺麗だ。だが学校では偏見の眼差しを向けられる。地毛だと知らないものは冷たい目でみるし、知っていてもそれをネタに

弄られる。それで仕方なく染めたのだ。

しばらくしてふたりは学校へと到着した。明るい子供たちの声に混ざりふたりは、下駄箱で内履きに替えると教室を目指す。

「あら……、何か騒がしいね？」

静香の言うとおり教室の中が騒がしい。廊下に居るふたりにも騒がしさが聞こえてきていた。

「なんだろう」

春子が教室を覗き込むと、三人の男子が、ひとりの少年を囲んで騒いでいる。

「井川～～、なんだよこれ～～」

「や、やめてよ鳴海君、返えしてよ～～」

「返すかよ、うすのろ～」

このクラスで一番の悪餓鬼である鳴海少年が、子分ふたりを引き連れて、露骨なイジメを披露していた。イジメられているのは井川少年。このクラスで一番気の弱い少年だ。

「返して欲しかったら、奪い取ってみな～～、へへーん」

三人が奪い取ったのは、なにやら便箋のようなものだった。鳴海のほかに、図体の大きな男子と、小学生の癖にリーゼントヘアーの男子が騒いでいた。それら三人の間でパスされる便箋を井川少年が

泣きそうな瞳で追いかける。

「は、春子ちゃん……」

静香が春子を見ると、綺麗な顔立ちが釣りあがり双眸に熱い正義が燃え上がっていた。導火線に火が点火された様だ。

「は、春子ちゃん、暴力はダメだと思うよ……」

静香が言った刹那、春子が飛び出していた。

疾風の如き走り、椅子を踏み台に飛び、更に机を踏み蹴る。春子の体が高く飛び黒く染められた長い髪が天井にふわりと触れた。

「あんたたち、なにやってるのよーーー！！」

飛燕の如く飛んだ春子が、天井の高さから飛び蹴りで降る。狙いはたまたま便箋を手にしていたリーゼントの少年。

「ふごぉぉおおお！！」

春子の強烈可憐な飛び蹴りが、見事なまでに後頭部へと直撃した少年は、自慢のリーゼントから地面に蹴り飛ばされ、幾つかの机や椅子を巻き込みながら数メートル滑っていく。

「に、二階堂！！」

鳴海が冷や汗と一緒に子分の名を叫ぶ。

「ああ、またやっちゃった……」

教室の入り口では、静香が幼馴染の強行に苦笑いを浮かべていた。

「てーーめーーー、何しやがる！」

崩れた机や椅子の中から、二階堂少年が激怒しながら起き上がる。自慢のリーゼントがメチャクチャになっていたが、大きな怪我はない様子だった。

「おお、流石我が舎弟一号！　死ぬほど丈夫だな！」

「慣れです！」

実のところ、静香や井川を含めたこの六人、小学校一年からの腐れ縁だった。小さな頃から、ずっとこんなことを繰り返している。

「がきんちょ三人衆、今日はなんで井川君をいじめているの！」

「これだよ……」

春子の怒鳴りながらの質問に、二階堂が手にある便箋を春子に投げた。飛んできた便箋をキャッチすると春子は、おもむろに宛名に眼が行く。そこには何故か自分の名前が書いてあった。

「なにこれ？」

「あわわわわーーー！！」

キョトンとしている春子の手から井川が慌てて便箋を奪い取る。その仕草を見て静香が、ポンっと掌を叩いた。

「ああ、なるほど。井川君、春子ちゃんのこと好きなんだ」

「え？」

親友の言葉に春子が首を大きく傾げる。未だことの次第が理解できていない様子だ。そんな鈍い春子に鳴海が、嫌らしい表情で答えを語る。

「今の手紙、ラブレターだぜ！」

「へ？」

目を点にさせる春子。

「だーかーらー、井川がお前宛に書いたラブレターだって云ってるんだよ！」

鳴海の告発に、教室ならず廊下の野次馬までもが、どっと湧き黄色い声を立てた。見る見る春子と井川の顔が、真っ赤に染まっていく。

鳴海たちはもちろん、他の生徒たちからも冷やかしの声が飛ぶ。ふたりは完全に晒し者のか見世物だった。いつも元気で勇ましい春子が俯いて顔を上げない。頭からは湯気が湧いていた。

ふたりへの冷やかしが続く中、黒板の上にあるスピーカーから朝礼の鐘が響き渡る。しばらくして担任の教師があらわれ、子供たちは指定の居場所へと腰を下ろし大人しくなった。

「はーい、皆さんおはよー、早速だが今日は、新しい先生を紹介します」

担任教師のいきなりの話に、先程まで春子たちを冷やかしていた生徒たちも、そのような過去を忘れてしまう。新たなニュースに興味を抱く。

「今日の一時間目、国語の安田先生が授業の予定でした、が、一昨日の土曜日、交通事故に遭いましてね……、脚を骨折して入院しました」

そう担任教師が述べると同時に、多くの生徒が「グット！」と、親指を立て歓喜した。国語の安田先生は、何故か生徒に嫌われている。同僚にもだ――。

「それで急遽、臨時教師の先生に来てもらう事になりました。では、紹介します。国語の授業を担当なさる、臨時教師の森一郎先生です！」

担任の紹介に合わせて教室の入り口が勢い良く開いた。そして、ビシッとしたスーツの好青年が登場する。

「！？」

だが、皆が肝を冷やした。顔半分は好青年だが、もう半分が爆弾で吹き飛ばされたかのような面をしていた。トゥーフェイス。まさに顔半分が妖怪だった。

「臨時教師の森一郎です。安田先生が回復するまでよろしくねがいます！」

そう言い笑う臨時教師。しかし右半面のみ微笑み、傷ついた左半面は、ピクリとも動いていない。左顔の筋肉は、神経までズタズタで、表情が作れないのだ。

春子を含めたクラスメイトたちが、その顔をみて凍り付いていた。小学生が初見で拝むには刺激が強すぎた様子だった。

そして新しい教師を迎えた小学校の月曜日は、順調に進み、いつもどおり平穏のまま終了した。クラブ活動に励む子供たち以外が、我先にと帰宅の準備を始める。

「静香〜、私、今日さ〜」

「なあに、春子ちゃん?」

帰り支度を済ませたふたりが教室を出る。そこで春子は、祖母から曾じいちゃんを駅まで迎えに行く用事を思い出した。

「そういえば私さ、駅まで曾じいちゃんを迎えに行く用事があったのよ……」

「あら、そうなの」

「うん、ごめんね、今日は此処でさよならね」

「うん、わかった。春子ちゃん気を付けてね」

そう言ってニコリと微笑む静香。春子も釣られて微笑んだ。

ふたりの幼馴染は校門で別れ、春子ひとりで駅へと向かうバスに乗った。二十分ほどバスに揺られると、虎野町でも一番大きな駅へと到着する。そして春子は、改札口が見えるロビーで、ひとり待つ。

しばらくの間、大きなコンクリートの柱を背に春子が待っていると、渋い声に呼び止められた。渋さの中に自信が詰まった威圧感の存在する声。直ぐに待ち人の声だと悟れる。

「おう、春子ちゃん、待たせたな」

俯いて足元を見ていた春子は、掛けられた声に視線を上げる。そこには身長１９０センチもある屈強な老人が立っていた。

年輪の如く刻まれた顔の皺とは裏腹に、アメリカのパワーレスラーのようなマッチョなボディー。岩を連想させる空手家特有の拳。生きたまま伝説となった武神、堂本拳四郎だ。

笑っていても周りの空気がオーラに揺れる。これで９０歳を越えているのだ、霊長類の無限の可能性を、未熟な春子ですら感じて止まらない。

「曾じいちゃんーー」

気配もなく現れた巨漢の老人に笑顔で抱きつく春子。無邪気な曾孫に老人は顔の筋肉を緩めながら頭を撫でる。

「春子ちゃん、げんきだったかーー」

「うん、曾じいちゃんも元気そうでよかった！」

ハグをしていた曾孫を両手で掴むと、軽々と持ち上げる拳四郎。
春子の体重は約４５キロ、その重さを、実年齢９０歳を越える老人が、自分の頭よりも高く持ち上げていた。

周りの目を気にせずに戯れるふたり。再開に歓喜する心が落ち着くのに三分ほど掛かった。

「ところで曾じいちゃん、今日は急にどおしたの？」

「ああ、そうじゃった」

そう言いながら持ち上げていた曾孫の体を地に下ろす拳四郎。

「お父さんとお爺ちゃん、曾じいちゃんが来るって聞いて、朝早くから逃げちゃったよ……」

「ちっ、あいつらめ……！」

拳四郎の舌打ちと愚痴から殺気が見えた。

堂本拳四郎は、男女差別が激しい人物である。子供だろうと老人だろうと歳に関わらず女性に優しいが、その反動と思えるほどに男性には、冷酷で厳しい態度を往々に取る。春子は、自分が女の子に生まれて良かったと思ったことすらあった。

「まあ、別にいいわい！」

拳四郎の独り言のような台詞を聞いた春子は、何故か強がりに聞こえた。だからその分は、自分が優しく接してやろうと思う。やっぱり孫や弟子とフレンドリーに接したい気持ちがあるようだ。でも、

その思いが直ぐに消えて猛る血が疼くメカニズムが歯痒く切ない。

「今日は、あいつらになんか用は無い！」

声が大きい。駅の構内に響き渡る。

「そうなの？」

「そうじゃ、今日は春子、お前に用事があって来たのじゃ」

「私に？」

珍しい。誕生日などのように、個人的イベント以外で拳四郎がわざわざ春子ひとりのために出向くことは今までなかった。

「春子ちゃんや、お前に紹介したい奴がおるのじゃよ」

「えぇ？」

春子が怪訝な表情を作る中、拳四郎は辺りをキョロキョロと見回した。誰かを探している様子だ。

「もしかして……」

春子の勘に、嫌なものが電撃の如く素早く走った。その理由は、視界に入ってきた不憫な光景。

改札口の横に立つ、誰のものかも良くわからない芸術的オブジェ。女性の裸体を象った白い石膏の像。それを見上げる風変わりな人物がひとり。背は低い。後姿で子供と分かる。しかし白い道着に黒い

袴を履き、素足に草鞋を履いている。それ以上に不振なのは、背中に背負った日本刀。それらのパーツが不審者としての警告を鳴らしていた。

春子は、鳥肌を立てながら、その人物を凝視する。間違いなく厄介ごとの到来だ。拳四郎が、固まる春子に気づき、その視線の先に探し人を見つける。

「おお、いたいた！」

拳四郎は、豪快な声と共に、その人物に近づき大きな手を伸ばした。

「こら、こっちにこい」

「なあ、拳四郎殿……？」

呼びに行った拳四郎へと、少年が問う。

「この奥方殿は、何故にこのような破廉恥な姿で立っているでござる？」

「気にするな。とにかくこっちへ来い」

質問を無視して拳四郎は、少年の道着を掴み春子の元へと無理やり引きずる。

「なあ、春子ちゃん」

「は、はい……？」

引きずられ連れられた少年は、困った表情をしていた。しかし、そんなことを無視して話し続ける拳四郎。春子も状況に戸惑っていた。

「タケシや銀には、ちゃんと話は通っている。今日からこいつを春子ちゃんのところで預かってもらいたい」

「ええ！　なんで！？」

拳四郎の話に驚く春子。

「ホームステイってやつだ！」

「分けわかんない！？」

「さあ、お前も自己紹介を兼ねて挨拶せんか。当分の間、一緒に暮らすお嬢さんだぞ！」

ポニーテールの様に揺ったちょんまげ頭をグリグリ押してお辞儀を強制する拳四郎。その手を不機嫌そうに少年が払いのける。

「分かっているでござるよ！」

時代遅れの風貌に、語尾に付く『ござる』。そして背負った日本刀。そんな容姿に春子は、呆然と化していた。

「拙者は、春婆怒村の守り神、癒しの侍が使った刀が変化した九十九神。今日からこの町でお世話になる。よろしく頼むでござる」

少年は、そう言いながら満面の笑みを春子に見せた。無知なほどに無垢な笑みだった。

「これ、名前もちゃんと紹介せんか！」

「あ、忘れていたでござる。ふごっ！」

拳四郎の空手チョップが少年の脳天に落ちた。

「もう、拳四郎殿は暴力的で嫌いでござる！」

「いいから、ちゃんと最後まで自己紹介せんか。挨拶は武の基本だぞ！」

「分かったでござるよ……」

小言が細かい拳四郎に愚痴を投げたあと少年は、深呼吸で仕切りなおすと、再び笑顔で春子を見た。春子も少年の双眸を見詰める。

ふと、春子が何かを感じ取った。

なんだろう？　懐かしい何かを感じる。神秘な思い。

そして、少年の言葉を、鼓動を早めながら待った。まるで憧れの男性を前に、告白でも待つかのような感情。

何故に心がトキメクかが不思議だった。

「拙者の名前は……」

「名前は……？」

「十六夜剣兵だ！」

その名を聞いて、春子が大きく眼を見開いた。

懐かしい響き。記憶の奥から海馬が何かを引っ張り出そうとしていた。否、脳に刻まれた記憶ではない。きっと魂に刻まれた運命。

「わ、私……」

春子の口から、喉の奥から何かが込み上げてくる。まるで溶岩が噴火しそうな熱い思い。

「私の名前は……」

記憶の奥、体の底、魂の果て。それは何処からやってきたのか分からない。でも、それが形となって具現化していく。

心と感情が、魂と運命に呑まれていく。

出会いなのか、再開なのか分からない。なぜか涙が出そうだった。

でも、

悲しくない。だから――。

この涙は嬉しいから――。

だから流さない――。

私は笑う。笑顔を見せる。

昔、誰かと約束した気がする。遠すぎるほどの昔に――。

この出会いを、笑顔から――。

だから、この思いを、笑顔から――。

「私の名前は、堂本春子。よろしくね！」

九十九

完

<　スタート　>（後書き）

２００８／８／１８～２００９／８／２３完結

どうも読んでくれた皆様、ありがとうございました。

一年かけて書き続けた結果、なんとか完結ししました。
誤字の訂正をしてくれた方々、感謝感謝。勉強になりました。
読者やそんな皆様があったからこそ完結できました。そう思っております。

次回作の案も色々考えていますが、まとまったら書き始めたいと思います。
良かったらまたお付き合い願えれば幸いと思っています。

それでは、次回作「魂／骸」でお会い出来る事を、願っております
＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8803e/

九十九

2010年10月9日06時57分発行